# 2019

# 教　員　総　覧

京都先端科学大学

# 凡　　例

## 1 掲載対象

2019年4月在籍教育職員とした。

## 2 掲載事項（2019年5月1日現在で記入）

Ⅰ 教育活動

教育実践上の主な業績を次の4つに区分

①教育内容・方法の工夫

②作成した教科書・教材等

③教育方法・教育実践に関する発表、講演等

④その他

Ⅱ 研究活動

著書

学術論文

学会発表

翻訳

研究ノート 等

研究業績の種類

著書、学術論文、学会発表、翻訳、研究ノート等については各自の判断で分類した。

# 目　　次

Ⅰ　経済経営学部
◆経済学科 …… 4 ページ
◆経営学科 …… 57 ページ
Ⅱ　健康医療学部
◆看護科 …… 94 ページ
◆言語聴覚学科 …… 243 ページ
◆健康スポーツ学科 …… 271 ページ
Ⅲ　人文学部
◆歴史文化学科 …… 322 ページ
◆心理学科 …… 359 ページ
Ⅳ　バイオ環境学部
◆食農学科 …… 392 ページ
◆バイオ環境デザイン学科 …… 422 ページ
◆バイオサイエンス学科 …… 447 ページ
Ⅴ　教育開発センター …… 473 ページ
Ⅵ　ナガモリアクチュエーター研究所 …… 501 ページ
Ⅶ　学長及び総合研究所 …… 555 ページ

# 経済経営学部　経済学科教員組織


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教　　授 | 大　野　彰 | 5 |
| | 茅野　千江子 | 6 |
| | 川　田　耕 | 7 |
| | 木藤伸一朗 | 9 |
| | 久下沼仁笥 | 10 |
| | 西　片　聡哉 | 12 |
| | 西　村　周三 | 14 |
| | 平　田　謙輔 | 15 |
| | 古　木　圭子 | 17 |
| | 村　田　淑子 | 20 |
| 特任教授 | 跡　田　直澄 | 21 |
| | 駒　田　忠一 | 22 |
| | 諸　戸　樹一 | 23 |
| 特別教授 | 渡　辺　恵一 | 25 |
| 客員教授 | 中　条　潮 | 27 |
| | 村　井　淳一 | 29 |
| 准教授 | 阿部千寿子 | 31 |
| | 柏　﨑　洋美 | 32 |
| | 川﨑雄二郎 | 37 |
| | 木　口　武博 | 39 |
| | 澤　田　吉孝 | 41 |
| | 清　水　裕子 | 43 |
| | 土　屋　貴裕 | 44 |
| | 道和孝治郎 | 46 |
| | 三　保　紀裕 | 47 |
| | 李　立　栄 | 49 |
| 講師 | 池　田　晃彦 | 54 |
| | 小　川　顕正 | 56 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　大野　彰 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 講義課目における授業内発表の活用 | 2013年～ | 講義課目において学生が選択したテーマに関するレポートの提出を求め、これに基づいて授業内発表を行わせることでアクティブ・ラーニングの要素を採り入れると共に学生に発言の機会を与えるようにしている。発表を聞いた学生には興味のあったことや疑問に思ったことを書かせ、学生から出た疑問点については次回の授業で答えるようにしている。 |
| 演習科目(実践プロジェクト)における<br>事前学習と見学会の組み合わせの活用 | 2015年～ | 京友禅や西陣織の工程を理解するには映像を見た方が効果的なのでまずDVD等を活用して事前学習を行った後に実際に工房を見学するようにしている。その際、職人の方に対して聞き取り調査を行うなどして学生に様々な体験をさせ、学生の視野を広げるように工夫している。 |
| 4年生ゼミにおける就職活動支援 | 2018年～ | 新聞に掲載されている就職活動に関するコラムを教材として使用することによって学生が就職活動の実際や社会が求める人材について理解を深めるよう工夫している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ゼミと講義課目用に作成したプリント | 1988年～ | ゼミと講義科目の両方で書き込み式のプリントを配布し、授業効率の向上と学生の理解度の増進をはかっている。プリントの内容は、毎学期、更新している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 一般市民向け公開講座における講演 | 2016年2月19日 | 新柳居市民講座において「大学と地域社会」と銘打ったシリーズの講師を務め、本学の「実践プロジェクト」でおこなった西陣織に関する聞き取り調査の内容を紹介するとともにジャカード織機の歴史について解説した。 |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 欧米の生糸市場における日本産生糸と中国産生糸 | 単 | 2019年3月 | 『人間文化研究』[京都学園大学]第42号 | | 83～120頁 |
| 絹工業におけるアメリカ的生産方式 | 単 | 2018年3月 | 『人間文化研究』[京都学園大学]第40号 | | 53～93頁 |
| 共同揚返にはいかなる意義があったのか | 単 | 2017年12月 | 『人間文化研究』[京都学園大学]第39号 | | 109～138頁 |
| 幕末・明治初期に生じた生糸品質低下の原因とその解決策について | 単 | 2017年3月 | 『人間文化研究』[京都学園大学]第38号 | | 127～160頁 |
| 製糸結社の日欧比較 | 単 | 2016年12月 | 『人間文化研究』[京都学園大学]第37号 | | 55～89頁 |
| 欧米における日本産生糸の用途について | 単 | 2015年11月 | 『京都学園大学 経済経営学部論集』第1号 | | 1頁～16頁 |
| 1900年前後に欧米で日本産生糸は絹織物の経糸にならなかったのか | 単 | 2015年8月 | 社会経済史学会編『社会経済史学』第81巻第2号 | | 25頁～45頁 |
| 座繰製糸の意義 | 単 | 2015年3月 | 『京都学園大学 経済学部論集』第24巻第2号 | | 1頁～17頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 所属学会 | 社会経済史学会、経営史学会 |
| 学会報告 | 「アメリカで日本産生糸は絹織物の経糸にならなかったのか」(社会経済史学会第83回全国大会・2014年5月24日) |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

生糸と絹織物の歴史に関する共同研究ないし受託研究に対応することができる。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　茅野　千江子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 議員立法の実際ー議員立法はどのように行われてきたかー | 単 | 2017年 | 第一法規 | | |
| 女性学キーナンバー | 共 | 2000年 | 有斐閣 | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| 公法学会 | |
|---|---|
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |
| |
| |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　川田　耕 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ・講義「社会学」での工夫 | 2015年度～ | 学内のwebシステムを利用して、毎回の授業で小レポートを書かせ採点結果を通知することで、授業への能動的取り組みを促すとともに、授業内容の理解と定着を図る。 |
| ・「個別補習教室」の実施 | 2017年度～ | 基礎学力の不足を補うため希望者を募って個別の補習クラスを実施。 |
| ・1年次ゼミ・授業でのゲーム形式の演習の導入 | 2017年度～ | 日本語力向上のために、ゼミを3～4人からなる数チームにわけ、チームで課題に取り組み、得点を競わせる。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『生きることの社会学：人生をたどる12章』(世界思想社) | 2019/5/31 | 社会学の概説的な単著の教科書・一般書として執筆したもの |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『日本的社会与文化』(担当箇所：「通俗道徳的作用」) | 共 | 2015年3月1日 | 世界知識出版社(北京) | 井上俊・伊藤公雄編(張文穎訳) | 1-228頁(担当箇所：75-84頁) |
| 論文 | | | | | |
| 観音信仰にみる近世的感受性 ― その中国における物語の分析 ― | 単 | 2018年3月10日 | 京都学園大学人間文化学会編『人間文化研究』第40号 | | 352-386頁 |
| 目連救母の精神史 ― 中国文明における母殺しの彼岸 ― | 単 | 2017年3月10日 | 京都学園大学人間文化学会編『人間文化研究』第38号 | | 177-214頁 |
| 中国における七夕伝説の精神史 | 単 | 2016年12月15日 | 京都学園大学人間文化学会編『人間文化研究』第37号 | | 149-178頁 |
| その他(書評リプライ、概説) | | | | | |
| (書評)奥野卓司著『江戸〈メディア表象〉論 ― イメージとしての江戸を問う ― | 単 | 2017年2月28日 | 『ソシオロジ』第61巻第3号 | | 113-117頁 |
| その他(口頭発表) | | | | | |
| 梅岩の人生における闘い　～親孝行をめぐって～ | 単 | 2019年2月23日 | 平成31年度第2回梅岩フォーラム | | |
| Religious Mentalities Remaining in the Joruri Tales of Early Modern Japan | 単 | 2018年7月18日 | Workshop on Secularities in Japan, at Leipzig University | | |
| 観音信仰にみる近世的感受性 ― その中国における物語の分析 ― | 単 | 2017年11月4日 | 日本社会学会 | | |
| 母の中国文明論へ ―『目連救母』の分析を中心に ― | 単 | 2015年5月1日 | 関西社会学会 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| | 日本社会学会会員 |
| | 関西社会学会会員 |
| | 日本演劇学会会員 |
| | 経済社会学会会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 演劇・映画・芸術などの文化領域の分析方法 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　木藤　伸一朗 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 市川正人・倉田原志編『憲法入門』(法律文化社) | 2012年4月 | 大学における一般教養、教職課程用の憲法の教科書の1章、地方自治の部分を分担執筆した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 現在の改憲の動きの特徴は？ | 共著 | 2014年1月 | 憲法「改正」の論点 | 京都憲法会議監修<br>木藤伸一朗・倉田原志・奥野恒久編 | 13～20頁 |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 自治体関連団体による博覧会の開催 | 単 | 2017年11月 | 行政判例百選Ⅰ［第7版］ | 宇賀克也・交告尚史・山本隆司編 | 14～15頁 |
| 地方自治 | 単 | 2012年4月 | 憲法入門 | 市川正人・倉田原志編 | 186～197頁 |
| | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2008年9月～現在 | 亀岡市都市計画審議会委員 |
| 2008年10月～現在 | 亀岡市行政改革推進委員会委員・委員長 |
| 2011年 1月～現在 | 亀岡市情報公開・個人情報保護審議会委員・会長 |
| 2016年12月～現在 | 亀岡市公共施設マネジメント有識者会議座長 |
| | 民科法律部会会員 |
| | 全国憲法研究会会員 |
| | 日本公法学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　久下沼 仁笥 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| (1)　「ライフプランとファイナンス」 | 2016年9月～ | (1)担当科目「ライフプランとファイナンス」のためのワークシート集をExcelで作成し、履修登録者に大学のRドライブを経由して配布した。シートは、「就職活動」「結婚」「自宅購入」「出産と教育」「保険」「引退後の生活」「資産運用」の7つを用意し、それぞれに基本項目を明示すると同時に、シート作成に有用なwebサイトを案内した。Rドライブ上で作成済シートの提出を求めた。 |
| (2)　「キャリアサポート実践A・B」 | 2016年4月～ | (2)「キャリアサポート実践A・B」では、共通教材とは別に、「自己分析のやり方」や「面接の基本質問への対策」など独自の資料・教材を作成し、配布した。特に自己PR文の作成では、印象付けたい人材イメージに則した表現方法、面接で質問を誘導するための表現方法などをマニュアル化した。また、スーツの着こなし、髪型など就活で望まれる自己イメージを映像で示した。 |
| (3)　「実践プロジェクトA・B」 | 2015年4月～<br>2018年3月 | (3)2回生春の「実践プロジェクトA」では、内閣府の「生活の質に関する調査」(平成24年度)の個票データを入手し、そのデータ分析のためのExcelシート集を作成し、受講者に大学Rドライブを経由して配布した。また、記述統計および推測統計の基礎を説明する資料を用意した。秋学期の「実践プロジェクトB」では、受講生が京都の他大学へのアンケート調査を実施するための準備として、手続きマニュアル、調査マニュアル、さらには調査結果のプレゼン資料作成のためのマニュアル等を用意し配布した。 |
| (4)　「白書で学ぶ現代日本」 | 2015年9月～ | (4)2015年より経済学科の登録必要科目となった「白書で学ぶ現代日本」において、学内だけでなく広く一般聴講者への公開を行い、さらに『経済財政白書』(内閣府)については講師を招いて講演会形式で公開している。また、講義内での専門用語等の意味をその場で確認する形式で進行し、時事問題に対しての基礎知識の習得を目指している。さらに、現代日本の政策課題への理解から卒業論文のテーマ選択に結びつけることを目指している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| (1)　「白書で学ぶ現代日本」 講義資料 | 2018年10月 | (1)平成30年度発表の10種の白書の主要論点をまとめ、基礎用語の整理と合わせて、解説資料を作成し2回の講義で配布し、解説した。特に、「アベノミクス」「東日本大震災からの復興」「人口高齢化の社会・経済的影響」「グローバル化とTPP交渉」など重要なテーマについては多くの時間を割いて、時事問題の基礎への確実な理解を促した。 |
| (2)　「公共経済学」 講義資料 | 2016年4月 | (2)平成26年改定の「公共経済学」の講義資料を再改定し、データの変更や標準的な理論の削除と追加を行った。科目のキーワードとして「社会的幸福の増進」に加え「将来予測」を前面に出し、理論分析フレームの応用を意識した構成とした。また、現代日本の経済問題への理解を促す目的で、経済格差や財政危機などへの解説にも多くの時間を費やした。 |
| (3)　「公共経済学特殊講義」資料 | 2015年4月 | (3)大学院で担当する「公共経済学特殊講義」の受講者のために、「修士論文作成の手引き」として、論文の形式の説明だけでなく、論文作成の手順を中心にまとめて配布した。特に留学生に対しては、学術論文のための日本語表現に関する注意点をまとめたものを用意した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| (1)　FD報告「経済学部ゼミでの進路指導と属性別進路決定率」 | 2014年3月 | (1)学内FD報告会において、表記のタイトルでの報告を行った。報告内容としては、経済学部のキャリアゼミの概要およびその成果と課題、さらには2009年度生の進路決定率に関する属性分類に基づく傾向分析、の2つであった。特に後者の報告内容については、修学支援センターおよびキャリアサポートセンターから提供された個表データを活用させてもらい、一定の客観的な分析ができたと考える。 |
| (2)　FD報告「実践プロジェクトの取組みに向けて」 | 2015年6月 | (2)2015年度新設の「実践プロジェクト」の担当クラスでの取組状況を報告した。特に、受講生の統計処理スキルに関して想定以上の時間を費やす必要が生じたことから、当初計画を見直し・縮小することになり、インタビュー調査範囲を京都市の大学生のみとしたことなどを報告した。また、学外に出ていくだけでなく、その段取り(調査対象機関の担当者へのアポ取り、調査趣旨説明、協力依頼書作成など)に取り組ませることの価値を強調した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等　(続き) | | |
| (3)　FD報告「IRを活用した教育改善に向けて」 | 2015年12月 | (3)2015年度以降に実施予定の在学生を対象とした「学生満足度調査」の内容について報告した。他大学の満足度調査の実施状況を説明し、その活用事例を紹介した。次に、本学の実施される調査の概要、調査票の内容、および実施方法などを説明し、調査結果の分析と活用の方向性について報告した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| (1)　出張講義および模擬講義 | 2000年～現在 | (1)講義タイトル:「格差の経済分析入門」「民主主義の経済分析入門」「経済学と倫理」等。出張先:京都農芸高校、園部高校、須知高等学校、両洋高校、彦根西高校、伊吹高校、野洲高校、関西中央高校、南丹高校、福知山成美高校、その他 |
| (2)　社会人向け教養講座 | 2009年7月～現在 | (2)京都学園大学土曜教養講座サテライト教室(大学コンソーシアム京都)「J.M.Buchananと公共選択論－財政赤字問題を中心に－」(2009年7月)「震災と日本経済のリスク」(2011年11月)を担当。また、新柳井市民講座(京町屋キャンパス)で「日本の財政再建と消費税」(2012年10月)を担当。 |
| (3)　公開講演会 | 2010年10月～現在 | (3)公開講座「白書で学ぶ現代日本」の特別講演会を、「日本経済の現状と課題」をテーマにシンポジウム形式で実施。コーディネータとして講演会準備と、当日の基調講演の進行およびﾊﾟﾈﾙ・ﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝでの司会を担当。また、2011年は「震災から学ぶべきこと」、2012年は「いま、原発を問う－失われた30年－」をテーマとした特別公開講演会を開催し、企画と進行を担当した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| キャリアと労働の経済学 | 共 | 2011年3月1日 | 日本評論社 | 小崎敏男・牧野文夫・吉田良生 | pp. 229-248 |
| ミクロ経済学入門【新版】 | 共 | 2014年3月2日 | 成文堂 | 吉田良生・角本伸晃・青木芳将・水野英雄 | pp. 229-249 |
| 人口高齢化と労働政策 | 共 | 2014年11月1日 | 原書房 | 小崎敏男・永瀬伸子 | pp.25-45 |
| 議会の進化:立憲主義的民主統治の完成 | 共 | 2015年10月1日 | 勁草書房 | 横山彰・西川雅史 | pp.182-208<br>pp.377-393 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本経済学会会員 |
| | 日本経済政策学会会員 |
| | 公共選択学会会員 |
| | 進化経済学会会員 |
| | 日本計画行政学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

公共選択論

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　西片　聡哉 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 国際法、国際法Ⅲ、国際経済法、国際関係入門 | 平成22年9月～現在 | 毎回、講義の終わりに小テストを行い、受講生が国際法の基本知識を確実に修得できるように工夫している。問題には公務員試験の過去問題なども取り入れ、将来のキャリア形成との関連を明確にし、学習の動機付けの向上に努めている。また、任意提出のレポートを課し、受講生の学修意欲を成績評価に反映させる試みを行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 山形英郎(編)『国際法入門～逆から学ぶ～』(法律文化社) | 平成26年4月4日 | 「国家領域」の一部を執筆 |
| 徳川信治・西村智朗編著『テキストブック法と国際社会[第2版]』(法律文化社) | 平成30年4月10日 | 「国際社会で個人はどのように保護されるのか？－基本的人権の尊重」<br>を執筆 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『国際法入門～逆から学ぶ～』(「国家領域」の一部を担当) | 共 | 2014年4月4日 | 法律文化社 | 山形英郎(編) | 106～118頁 |
| 『テキストブック法と国際社会[第2版]』(「国際社会で個人はどのように保護されるのか？－基本的人権の尊重」を執筆) | 共 | 2018年4月10日 | 法律文化社 | 徳川信治・西村智朗(編著) | 113～128頁 |
| 論文 | | | | | |
| 「欧州人権条約の個人申立における『相当な不利益』基準の機能－人権裁判所の判例分析を中心に－」 | 単 | 2015年3月30日 | 『京都学園法学』2014年2・3号 | | 67～88頁 |
| その他(判例評釈) | | | | | |
| 「国家公務員の政治活動(最高裁判所2012(平成24)年12月7日判決〔2件〕」 | 単 | 2014年10月31日 | 『国際人権』24号 | | 134～136頁 |
| その他(資料) | | | | | |
| 「解説・日本の国際法判例(9)－2011(平成23)年－」(データベース編の一部を作成) | 共編 | 2015年1月20日 | 『国際法外交雑誌』113巻4号 | 「日本の国際法判例」研究会(第2期) | 196～203頁 |
| 「解説・日本の国際法判例(10)－2012(平成24)年－」(データベース編の一部を作成) | 共編 | 2016年1月20日 | 『国際法外交雑誌』114巻4号 | 「日本の国際法判例」研究会(第2期) | 131～143頁 |
| 「解説・日本の国際法判例(11)－2013平成25)年－」(データベース編の一部を作成) | 共編 | 2017年1月20日 | 『国際法外交雑誌』115巻4号 | 「日本の国際法判例」研究会(第2期) | 122～131頁 |
| 「解説・日本の国際法判例(12)－2014平成26)年－」(データベース編の一部を作成) | 共編 | 2018年1月20日 | 『国際法外交雑誌』116巻4号 | 「日本の国際法判例」研究会(第2期) | 139～145頁 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 1996年10月～現在 | 国際法学会会員 |
| 1996年11月～現在 | 国際人権法学会会員 |
| 1997年　5月～現在 | 世界法学会会員 |
| 2013年　4月～現在 | 国際人権法学会編集委員 |
| 2010年5月～現在 | European Society of International Law会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　西村　周三 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 医療の経済分析 | 単 | 1987年 | 東洋経済新報社 | | |
| 行動健康経済学 | 共 | 2007年 | 日本評論社 | 依田貴典、後藤励、西村周三 | |
| 地域包括ケアシステム | 共 | 2013年 | 慶応義塾大学出版会 | 西村周三：監修<br>勝又幸子、竹沢純子、金子隆一、佐々井司、藤原朋子、藤井麻由、伊藤善典、小塩隆士、佐藤 格 | |
| 社会保障費用統計の理論と分析 | 共 | 2014年 | 慶応義塾大学出版会 | 西村周三：監修、第2章 鈴木 透、金子 能宏、岩渕 豊、高橋 紘士、白川 泰之、島崎 謙治、備酒 伸彦、三浦 研、落合 明美、川越 雅弘、山本 克也、小山 剛、松本 直樹、西岡 隆 | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本経済学会 | |
| 日本財政学会 | |
| 医療経済学会 | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　平田　謙輔 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 電子メールを利用したゼミの授業の補足および活性化の試み | 2001年4月～ | ゼミ生に対してメールアドレスの開示を義務付け、授業等に関する諸連絡に利用する他、授業時間中にカバーしきれなかった内容について、ゼミ担当教員と学生が相互に情報を共有することに役立てている。例えば、授業内容に関連してゼミ生が関心を示した詳細な統計データや数値、授業中に出た質問や疑問などには、次回の授業を待たずに全員に情報を発信するなどしている。また、ゼミ生からの質問・相談等も随時受け付けている。 |
| 受講者に注意を喚起し重要箇所・単語等を把握しやくするための工夫 | 2010年4月～ | 講義が一方的なものにならないよう、重要箇所・単語について受講者に音読させることとした。これにより、受講者が講義中の重要箇所・単語を把握しやすくなるほか、受講者の講義への集中力を途切れさせないことや、専門用語などの独特な読み方に慣れ、理解の促進につながることなどが期待される。 |
| 授業内配布資料の配信 | 2010年4月～ | 授業中に配布した資料の一部をPDFファイル化し、学内ネットワーク「京学なび」上にアップロードすることで、欠席者や資料紛失者が自ら資料をダウンロードし、入手できるよう配慮している。(科目や内容により非公開の場合あり。) |
| ノート機能付きレジュメの配布 | 2012年9月～ | 担当する講義科目において、講義内容の重要事項をまとめたレジュメを配布している。このレジュメには、重要単語等を空欄としたり、ノート欄を設けたりすることにより、受講者が予習や授業内容の書き込みを行えるよう工夫を施してある。 |
| 授業内レポートの実施と成績評価への反映 | 2015年4月～ | 担当する講義科目において、毎回、その回の授業内容に関するテーマを与え、授業内レポートを学生に記入させるとともに、成績評価に反映させている。また、レポートの中から、優れたものや代表的な意見等をその後の授業の中で紹介している。このことにより、学生の授業への集中度を高めるとともに、課題発見力や論理的思考力の向上を図っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 授業内配布用資料(「公的年金制度の概要」等) | 2000年4月～ | 左記の内容に関するテーマ別の資料を作成し、担当する講義科目等の授業中にレジュメとともに配布している。制度の変更や状況の変化に対応するため、内容は随時更新している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 「キャリアサポート実践講座」について(京都学園大学経済経営学部2016年度FD研修会) | 2016年11月16日 | 本学経済学部で実施されてきた就職支援科目「キャリアゼミ」および「キャリアサポート実践講座」での経験を元に、次年度から全学的に実施される「キャリアサポート実践講座」での指導内容や指導上の課題について、報告と提案を行った。 |
| 日本語検定試験に対する取り組みについて:検定試験対策としての効果的な指導方法(京都学園大学経済経営学部2017年度FD研修会) | 2017年9月12日 | 2017年度より本学1回生が全員受験することとなった「日本語検定」について、正課科目「スタートアップゼミ」において指導が行われている。11月の検定試験に向けて、学生のレベルの現状や効果的な指導法について、学部教務主事の立場から情報提供や意見交換を行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 「高校生論文コンテスト」実行委員 | 2011年5月～ | 高大連携事業の一環として行われている「高校生論文コンテスト」の実行委員(庶務担当)として、テーマの設定、広報、審査、結果発表、応募者への講評返却等を担当している。本コンテストは、2011年度に第1回、2012年度に第2回、2013年度に第3回の「京都学園大学経済学部高校生論文コンテスト」として、また、2014年度は「京都学園大学高校生論文コンテスト(経済分野)」、2015年度以降は「京都学園大学高校生論文コンテスト(経済経営学部)」として開催された。なお、2019年度は「京都先端科学大学高校生論文コンテスト(経済経営学部)」として実施される。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| （記事）<br>「経済社会学」を教える | 単著 | 2016年7月 | 経済社会学会<br>ニューズレター60 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1994年～ | 経済社会学会会員・第51回全国大会プログラム委員会委員長(2014年9月～2015年9月) |
| 1994年～ | 日本経済政策学会会員 |
| 1997年～ | 社会政策学会会員 |
| 2014年2月～ | 亀岡市国民健康保険事業の運営に関する協議会委員 |
| 2018年10月～ | 向日市国民健康保険事業の運営に関する協議会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

少子高齢・人口減少社会における政策上の諸課題

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　古木　圭子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・無） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「総合英語」、「ビジネス英語」、「グローバル学生ホームルーム」他 | 2014年～現在 | 英語の授業において、スピーチの暗誦を取り入れ、単に英語を読み、書き、聴き、話すだけではなく、抑揚やジェスチャーなどを交え、話してや聞き手の気持ちを汲みながら、劇的要素を取り入れて英語で「演じる」訓練をしている。<br>また、ほぼ全授業でほぼ毎回、授業の始めに前回の授業の内容に関する小テストを行い、学生の理解を固める助けをすると共に、授業への集中力を高める工夫をしている。また、京学なびを通じて課題の提供、添削を行っている。添削と英語に関する様々なアドバイスをなび上で行うことで、受講生とのコミュニケーションがよりよくとれるようになり、課題の提出率もよくなっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 英語教科書　*The Nisei Reader* | 2006年3月1日 | *The Nisei Reader* というタイトルで、日系アメリカ人作家たちの短編小説、自伝を掲載し、註、解説を付して、大阪教育図書より、大学の英語購読授業用に出版をした。 |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 講演　「日系アメリカ人―その過去と現在」 | 2012年11月24日 | 「キャンパスプラザ京都」にて本学土曜教養講座の講師として、「日系アメリカ人―その過去と現在」というテーマのもと、1900年代初めの西海岸におけるアジア人排斥運動、1924年の排日移民法、そして日本の真珠湾攻撃による日系アメリカ人の強制収容所問題などについて考察した。 |
| 講演「多文化社会における対話と協働<br>―京都学園大学の試み」 | 2013年3月1日 | 本学の交流協定締結校である台湾の開南大学で開催された国際シンポジウム「多言語多文化社会を主導する人際の育成」に出席し、「多文化社会における対話と協働―京都学園大学の試み」というタイトルのもと、本学の国際交流プログラム、地域連携事業の取り組みなどについて講演を行い、その後の討論会にも出席した。 |
| 講演「アメリカ演劇に生きる日本の姿」 | 2013年9月5日 | 日本出身のアメリカ人劇作家のChiori Miyagawaの戯曲と、20世紀アメリカ演劇を代表する劇作家Tennessee Williamsの戯曲を比較分析し、両者にみられる日本文学、日本演劇をアメリカ演劇に取り入れた実験的要素について論じた。それにより、両者が日本演劇および文学とアメリカ演劇およびアメリカ文学を融合しようとした試みついて説明し、国境を越えた演劇の楽しさと演劇の文学的要素について論じた。 |
| 講演「偏見に晒されて―ピクチャブライドと日系アメリカ人コミュニティの形成」 | 2017年1月16日 | 本学国際交流センター主催の、日系アメリカ人の歴史、文化に関する講演シリーズの一部として講演を行った。日本からの移民を制限することとなった日米紳士協定以来、1908年から、いわゆる「ピクチャーブライド」と呼ばれる日系一世女性が渡航を始めた。彼女たちの移住は日系コミュニティの発展に大きく寄与したが、写真だけを見て結婚を決める「写真結婚」制度は、アメリカ合衆国において「不道徳」とみなされ批判を受けた。本講演では、そのような偏見に晒されながらも強く生き抜いた一世女性たちの軌跡をたどった。 |
| 講演「排斥から定着へ――日系アメリカ人の歴史と現在] | 2018年1月24日 | 本学国際交流センター主催の、日系アメリカ人の歴史、文化に関する講演シリーズの一部として、2017年に続き講演を行った。日系アメリカ人の定義、ハワイへの初期移民、日系アメリカ人への危機感と日米紳士協定の関係、「写真結婚」に対するアメリカ人の反応、日系人のハワイおよびアメリカ本土への 定着、いわゆる写真花嫁と呼ばれる日系一世女性たちと日系人コミュニティの形成の関連、日系人の強制収容、日系アメリカ人の現在についてなどのトピックにもどつき、日系アメリカ人の歴史をたどった。 |
| 講演「日系アメリカ人とは？ーーその背景と歴史] | 2019年1月23日 | 本学国際交流センター主催の、日系アメリカ人の歴史、文化に関する講演シリーズの一部として、2017, 2018年に続き講演を行った。日系アメリカ人の定義、ハワイへの初期移民、「写真結婚」に対するアメリカ人の偏見と、その偏見と闘いながらハワイおよびアメリカ本土で日系移民が定着していった過程。いわゆる写真花嫁と呼ばれる日系一世女性たちと日系人コミュニティの形成の関連、日系人の強制収容などのトピックにもどつき、日系アメリカ人の歴史をたどり、日系アメリカ人のハワイおよびアメリカ本土におけるコミュニティ、文化形成について考察した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2010年4月～現在 | 実用英語検定試験　公認面接委員 |
| | 2010年4月～現在 | 実用英語検定試験　公認実施委員 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 水と光―アメリカ文学の原点を探る | 共 | 2013年3月1日 | 開文社出版 | 入子文子監修・谷口義朗／中村善雄 編　本人担当部分 第14章「テネシー・ウィリアムズの『牛乳列車はもう止まらない』にみる光と影―実験「装置」としての日本演劇― | pp. 287-308. |
| アメリカ文学における幸福の追求とその行方 | 共 | 2018年2月28日 | 金星堂 | 貴志雅之 編　古木 圭子 担当部分 第6章「サム・シェパードの戯曲にみる女性の連帯と幸福への脱出」 | pp. 116-134. |
| 論文 | | | | | |
| メッセンジャーとしての同性愛者の役割―テネシー・ウィリアムズ作品における性、暴力、死 | 単 | 2013年3月1日 | 『アメリカ演劇』（日本アメリカ演劇学会）第24号 | | pp. 43-62. |
| テネシー・ウィリアムズ年表 | 単 | 2013年3月1日 | 『アメリカ演劇』（日本アメリカ演劇学会）第24号 | | pp. 118-132. |
| James A. Herneの*Hearts of Oak*にみるアメリカン・リアリズムの萌芽 | 単 | 2014年3月1日 | 『英米文化』（英米文化学会）第44号 | | pp. 1-19. |
| Chiori Miyagawa: *Thousand Years Waiting* | 単 | 2014年3月1日 | *AALA Journal*（アジア系アメリカ文学研究会）No. 19 | | pp. 77-80. |
| ブロンソン・ハワードの『シェナンドア』とジェームズ・A・ハーンの『グリフィス・ダベンポート』にみる南北戦争と劇的手法の関係 | 単 | 2015年3月1日 | 『関大英文学－坂本武教授退職記念号』第1巻 | | pp. 289-306. |
| チオリ・ミヤガワの『千年待ち』にみる劇的要素としての物語と記憶 | 単 | 2015年4月1日 | 『近現代演劇研究』（日本演劇学会 近現代演劇研究会）第5号 | | pp. 2-14. |
| 翻案からみるChiori Miyagawaの戯曲 | 単 | 2016年3月1日 | *AALA Journal*（アジア系アメリカ文学研究会）No. 21 | | pp. 59-73. |
| SamShepardの戯曲における赦しと救済―*Heartless*を中心に | 単 | 2017年3月1日 | 『経済経営学論集』（京都学園大学）第4巻 | | pp. 31-44. |
| ☒リナ・ハス・ヒューストンの戯曲にみるアメラジアン（混血）性と家族像――A Spot of Botherを中心に□ | 単 | 2017年12月31日 | *AALA Journal*（アジア系アメリカ文学研究会）No. 23 | | pp. 25-39 |
| 「チオリ・ミヤガワの戯曲にみる暴力、ジェンダー、家族解体―『女殺し』を中心に」□ | 単 | 2018年3月31日 | 『アメリカ演劇』（日本アメリカ演劇学会）第28.29合併号 | | pp. 108-125. |
| 研究発表 | | | | | |
| James A. Herneの初期戯曲にみるアメリカン・リアリズムの萌芽 | 単 | 2013年3月1日 | 英米文化学会第140回例会（於 日本大学） | | |
| Chiori Miyagawaの*Thousand Years Waiting*にみる劇的要素としての物語と記憶 | 単 | 2014年3月1日 | 英米文化学会第143回例会（於 法政大学） | | |
| Chiori Miyagawaの戯曲における時空間を越える試みについて | 単 | 2015年1月1日 | アジア系アメリカ文学研究会2015年1月例会（於 京都外国語大学） | | |
| 「埋められた子供」の救済――Sam Shepardの*Heartless*と*Buried Child* | 単 | 2015年9月13日 | 日本アメリカ演劇学会2015年度大会 | | |
| 亡霊劇としてのChiori Miyagawaの*Woman Killer* | 単 | 2016年1月23日 | 英米文化学会比較文化学会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 研究発表（続き） | | | | | |
| Narrative and Memory as Theatrical Devices in Chiori Miyagawa's *Thousand Years' Waiting* | 単 | 2016年6月14日 | International Federation of Theatre Research 2016 | | |
| Chiori Miyagawaの戯曲にみる暴力、ジェンダー、「家族」の解体―*Woman Killer*を中心に | 単 | 2016年9月11日 | 日本アメリカ演劇学会2016年度大会 | | |
| Velina Hasu Houstonの戯曲にみるアメラジアン性と家族像――A Spot of Botherを中心に―― | 単 | 2017年9月23日 | アジア系アメリカ文学研究会<br>第25回AALAフォーラム | | |
| ベリナ・ハス・ヒューストンの戯曲にみる多文化多人種の象徴としての「茶」の役割 | 単 | 2018年6月30日 | 2018年度<br>日本演劇学会全国大会 | | |
| チオリ・ミヤガワの『女殺し』にみる暴力、ジェンダー、家族解体 | 単 | 2018年9月9日 | 2018年度<br>英米文化学会第36回大会 | | |
| アジアパシフィックの劇場文化――アジア系アメリカ演劇の拠点としてのKumu Kahua Theatre | 単 | 2019年3月9日 | 第3回 英米文化学会<br>アジア・パシフィック劇場文化分科会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | アメリカ文学会関西支部評議委員 |
| | 日本英文学会会員 |
| | アメリカ学会会員 |
| | 英米文化学会会員および大会運営委員 |
| | 日本アメリカ演劇学会　評議委員および編集委員 |
| | アジア系アメリカ文学研究会 事務局長および22014年度、2017年度学会誌編集長 |
| | 日本演劇学会会員 |
| | IFTR (International Federation of Theatre Researcch 会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| アメリカ演劇史の研究 |
| アメリカ演劇における日本演劇の影響 |
| アジア系アメリカ演劇研究 |
| 19世紀アメリカにおけるリアリズム演劇の研究 |
| アメリカ演劇における混血性の研究 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　村田　淑子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ア)講義科目における授業内レポート又は小テストの活用<br>イ)演習科目(実践プロジェクト)における報告の工夫<br>ウ)日本語リテラシーでのペアワークの活用 | 2015～2019年度 | ア)講義科目では、学生の理解度と集中度を高めるために、講義の最初にその回の目標を提示し、各授業の最後の授業内レポート又は冒頭の小テストを活用している。(2015～2018年度)200字程度の授業内レポートを課し、理解度を確認して必要な復習的な解説を行っている。(2019年度)小テストにより、復習の動機づけを行うとともに、静かな授業環境を作り出す工夫をしている。<br>イ)演習科目(実践プロジェクト)における報告は、授業中に報告の準備の時間を確保することで、報告の準備を確実に行い、クオリティを高めるように指導している。テレビのクイズ番組を模した方式を採用し、楽しく活気のある環境で勉強できる工夫をしている。<br>ウ)日本語リテラシーでは、ペアワークを取り入れ、互いにインタビューをして上での他己紹介文の作成やピアレビューを行うことで、文章力を鍛えるだけでなく、学生同士が交流する機会を設けている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 英国金融サービス分野における競争法の重複権限－金融行為監督機構（FCA）による重複権限の行使に関する議論－ | 単 | 2016年11月 | 公正取引793号 | | pp82-89 |
| 欧州と日本における証券取引所グループの合併と競争法－ドイツ取引所とロンドン証券取引所の合併計画に関する欧州委員会決定を中心に－ | 単 | 2019年4月 | 同志社法学404号 | | pp373-405 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 経済法学会会員 |
| 2016年4月～ | 亀岡市入札監視委員会委員 |
| 2019年4月～ | 亀岡市行政不服審査会委員、京都中部広域消防組合行政不服審査会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　跡田 直澄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『ゼミナール現代財政入門』(日本経済新聞社) | 平成6年10月 | 財政の中でも、税別および社会保障制度の理論、歴史、実際の3つの側面を有機的に結び付け、現実に起きている諸問題のインプリケーションを解説した入門書 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 社会保障一体改革への途 | 共著 | 平成19年5月 | 清文社 | 前川 聡子 | |
| 財政投融資制度改革と公債市場 | 共著 | 平成15年12月 | 税務経理協会 | | 第6章「公的金融改革にむけて」 |
| 消費税課税の理論と課題 | 共著 | 平成15年12月 | 税務経理協会 | 宮島洋 | pp.131-156 |
| 企業税制改革―実証分析と政策提言― | 共著 | 平成12年6月 | 日本評論社 | | 第1章「企業税制と法人の税負担の国際比較」、2章「厚生年金改革と企業の公的負担」、4章「中小企業政策の有効性」 |
| 学術論文 | | | | | |
| バブル後25年の検証－社会保障－ | 単著 | 平成25年10月 | 慶應義塾大学<br>グローバルセキュリティ研究所<br>Discussion Paper No.7<br>竹中平蔵編著<br>『バブル後25年の検証』東京書籍、検証5所収(平成28年) | | |
| 地方自治体への寄付と政策 | 単著 | 平成20年2月 | 『三田商学研究』<br>第50巻第6号 | | pp.33-43 |
| 非営利セクターと寄付税制(査読付き) | 共著 | 平成14年10月 | 『フィナンシャルレビュー』<br>第65号 | 前川 聡子、末村 祐子 他 | pp.74-92 |
| その他 | | | | | |
| 新地方公会計制度とは、何か | 単著 | 平成20年2月 | 『地方財務』第644号 | | pp.14-20 |
| 構造改革・財政再建・経済成長 | 共著 | 平成18年5月 | 『経済セミナー』通号615号 | 前川 聡子 | pp.12-15 |
| 減価償却制度のあるべき姿 | 単著 | 平成17年12月 | 『税務弘報』第53巻第14号 | | pp.8-13 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 平成15年～20年 | 総務省(旧郵政省)郵政審議会委員 |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　駒田　忠一 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | 2007年9月～ | eラーニング教材の開発・作成と試行（情報と職業にて）継続中 |
| | 2010年4月～ | 講義のeラーニンング化（経済学の扉・ミクロ基礎） |
| | 2012年1月～ | 講義のeラーニンング化（マクロ基礎） |
| | 2017年7月～ | 複数LMSでの運用 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | 2015年4月22日 | eラーニング教材（タイ語体験） |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2015年5月～2015年11月 | 平成27年度の知財活用アイデアコンテスト指導 |
| | 2016年5月～2016年11月 | 平成28年度の知財活用アイデアコンテスト指導 |
| | 2018年5月～ | タイ初等中等教育の情報教育実施状況調査 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | CIECコンピュータ利用教育協議会会員 |
| | 情報コミュニケーション学会会員 |
| | 情報処理学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　諸戸 樹一 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1-1.<br>「基礎英語A／B」／「総合英語A／B」／「総合英語Ⅰ／Ⅱ」 | 1999年4月～現在 | 総合英語分野の教科書を使用しながらも、語彙・文法・重要表現の解説や理解度を試す演習問題等を記載した補助教材（ハンドアウト）を作成して配付し、そのハンドアウトを軸に演習を進めている。プレースメントテストにより習熟度別に分けられた学科のクラスでは、その下位または上位を担当。2018年度は、食農、健康スポーツ学科の必修各1クラス、経済、経営、歴史文化学科の合同2クラスを担当。2019年度は2年生以上の合同クラスを担当。 |
| 1-2.「英語資格試験パソコンワークⅠ」 | 2013年4月～2017年3月 | LANによって配信される『TDK TOEIC』および『ALC NetAcademy』を主たる教材とし、別途作成したハンドアウトで解説を加えながらCALL教室においてパソコン利用の英語演習を行った。英検二次面接のシミュレーションや対話演習なども計画的に加えた。旧カリキュラム科目に属し、2014-16年度は受講者なし。 |
| 1-3.「英語ライティングⅠ」／「英語ライティング」 | 2006年4月～2017年3月 | ライティングの基礎的なレヴェルの教科書を使用し、英語と日本語との構文上の違いに焦点を絞って解説しながら口語英語の表現演習を行った。旧カリキュラム科目に属し、2016年度は受講者なし。 |
| 1-4.　＜英語プロジェクト＞科目 | 2007年4月～2017年3月 | 他学部英語教員とともに文系4学部横断の＜英語プロジェクト＞コースを開設し、英語学習に関心の高い学生の登録を促して集中的な英語教育を行った。コースの中核となる「英語ゼミ」および「英語プロジェクト修了研究」のほか、これまでに「英語文化研究A」、「TOEIC研究」、「英語クリエイティヴライティング」、「英語インテンシヴリーディング」、「英語ラピッドリーディング」を担当。ゼミでは自主作成教材を使用してゼミ生の英語力強化に努めるとともに、英語による発表機会を多く提供してきた。 |
| 1-5.「英語文化事情A」 | 2008年9月～2018年3月 | 各種関連資料に加えて、イギリスでの現地調査に基づく担当者自身の見聞を加えたハンドアウト教材を作成して配付し、映像教材等も用いながらイギリスの社会文化事情を講義し、併せて日本事情との比較を行った。 |
| 1-6.「英語リスニング」 | 2015年4月～2017年3月 | TOEIC（Test of English for International Communication）の場面別に編纂されたリスニング問題（Parts 1-4）を教材とし、日常の英語聴き取りにも英語資格試験にも役立つ演習を行った。旧カリキュラム科目に属し、2016年度は受講者なし。 |
| 1-7.「ビジネス英語Ⅰ／Ⅱ」 | 2015年4月～2019年3月 | 「Ⅰ」では、来客や電話応対、ビジネス・レターやEメール作成、プレゼンテーションなど、どちらかと言えばビジネス場面の「入り口」で必要となる英語表現の習得演習を行っている。「Ⅱ」では、英語によるコミュニケーション能力を測るTOEIC（Test of English for International communication）の模擬問題を解く演習によって、高スコアの取得を目指しながら、「Ⅰ」で身につけた基本的な語彙力と聴解力、読解力のさらなる向上を目指す演習を行っている。 |
| 1-8.「スタートアップゼミビA／B」 | 2017年4月～2018年3月 | 「A」では、学生相談室や図書館ガイダンス等に合わせて大学生活への円滑な導入を試みた後、前半はノートテイキングに主眼を置いて、私的表現と公的表現との違いを意識させながら、要点をまとめる演習を行った。後半はレジュメの作成方法を実践的に指導した。「B」では、レポート作成を主たる課題としながらも、競技ディベートでの対戦を最終目的としてゼミを進め、班別での学習を実践させ、併せてプレゼンテーション力や質疑応答力の向上を図った。 |
| 1-9.「英会話Ⅰ」／「英語Ⅰ」 | 2019年4月～現在 | 委託機関から派遣された教員が担当する授業を毎回巡回視察し、その教育内容や方法ならびに指導上の問題点等についてのコメントをまとめ、しかるべき会議において、もしくは当該機関責任者に対して提言を行っているほか、出席・成績不良受講生についてはゼミ担当者への連絡も行っている。巡回視察担当クラス受講生に対しては最終成績評価も行う。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1979年5月～2014年3月 | D. H. ロレンス研究会会員（1984年4月～1991年3月、1999年10月～2003年3月　庶務会計） |
| 1979年5月～現在 | 日本ロレンス協会会員（1991年4月～1995年3月　事務局会計） |
| 1980年5月～現在 | 日本英文学会会員（2006年12月～現在　関西支部会員） |
| 1991年10月～現在 | 立命館大学英米文学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特別教授 | 氏名　渡辺　恵一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「確認テスト」を自宅研修用の宿題として配布している。 | 2012年4月～<br>2019年4月 | 「確認テスト」を宿題として毎回配布し、自宅学習にて受講生の理解の定着を図る工夫している。その成果を次回授業の冒頭で発表させるという、能動的な授業に取り組んでいる。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 教材作成 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 全学FDでの「実践プロジェクト」の実施報告 | 2015年6月17日 | 2015年度に開講された「実践プロジェクト」に関する現状報告を、全学FDで行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 全学共通科目「経済学入門」の担当責任者 | 2014年度～2019年度 | 2014年度から開講されている「経済学入門」の複数の担当者を代表してシラバス作成と教科書の選定をおこなっている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 文明社会史論としてのスミス経済学 | 単 | 2015年3月 | 長尾伸一・坂本達也編<br>『徳・商業・文明社会』<br>京都大学学術出版会 | | pp.195-222 |
| 論文 | | | | | |
| (研究ノート)<br>羽鳥卓也教授のアダム・スミス研究 | 単 | 2015年3月 | 京都学園大学経済学部論集<br>第24巻第2号 | | pp.65-71 |
| (研究展望)<br>スコットランド啓蒙研究の最近の動向 | 共著 | 2015年3月 | 経済学研究(愛知学院大学)<br>第2巻第2号 | 田中秀夫氏との共著(pp. 35-61) | pp.49-61 |
| アダム・スミス――近代文明と戦争 | 単 | 2016年9月 | 經濟論叢(京都大学)<br>第190巻第2号 | | pp.51-74 |
| その他(学会報告・書評) | | | | | |
| (学会報告)<br>セッションF(近代国家と戦争)<br>「アダム・スミス――近代文明と戦争」 | 単 | 2015年11月 | 社会思想史学会<br>第40回全国大会<br>(関西学院大学) | | |
| (書評)<br>ロンルド・L・ミーク(田中秀夫監訳/村井路子・野原慎司訳)『社会科学と高ならざる未開人』(昭和堂,2015年) | 単 | 2016年3月 | 図書新聞<br>3245号(5面) | | |
| (学会報告・討論者)<br>立川潔「『国富論』における投機と過剰取引」にたいする予定討論 | 単 | 2016年6月 | 経済学史学会<br>第80回全国大会<br>(東北大学) | | |
| (学会報告・討論者)<br>セッションF「啓蒙の遺産――戦争と平和を考える」第3報告者への予定討論 | 単 | 2016年10月 | 社会思想史学会<br>第41回全国大会<br>(中央大学) | | |
| (学会報告・討論者)<br>新村聡「スミス租税論の発展ー『法学講義』から『国富論』へ」にたいする予定討論 | 単 | 2017年6月 | 経済学史学会<br>第81回全国大会<br>(徳島文理大学) | | |
| (学会報告)<br>セッション「アダム・スミス研究史を回顧する」:第1報告「戦前から戦中・戦後、トリオ(内田・小林・水田)のスミス研究まで」 | 単 | 2018年6月 | 経済学史学会<br>第82回全国大会<br>(東京大学) | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会報告・討論者）（続き） | | | | | |
| （事典項目）<br>「『富と徳』論争」 | 単 | 2019年1月 | 社会思想史学会編<br>『社会思想史事典』<br>（丸善出版） | | 174–75頁 |
| （書評）<br>Shinji Nohara, *Commerce and Strangers in Adam Smith*, Springer, 2018. | 単 | 2019 年3月 | 『イギリス哲学研究』第42号 | | 102–05頁 |
| （学会報告・司会）<br>新村 聡「アダム・スミスの大きな政府論の形成過程――『法学講義』から『国富論』への発展」 | 単 | 2019年6月 | 経済学史学会<br>第83回全国大会（福岡大学） | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 経済学史学会会員（年報編集委員1999年11月～2001年10月；幹事2016年11月～2018年10月） |
| | 社会思想史学会会員 |
| | 日本イギリス哲学会会員 |
| | アダム・スミスの会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

アダム・スミスの経済倫理学、アダム・スミスの大学教育論

# 2019年度　客員教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　客員教授 | 氏名　中条 潮 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | (学生の意見を引き出す工夫,、MLやラインの使用、PPTの使用などあたりまえの工夫は省略) |
| 総合教育セミナー運営における4年生SAの活用 | ～2015年度 | 慶應義塾大学において、2年生の総合教育セミナー(少人数のプレゼン授業)運営に中条研究会(ゼミ)4年生をSAとして活用し、2年生には教員だけによらないきめ細かい指導を、4年生には指導経験による成長の機会を付与。 |
| 2年生の研究会(ゼミ)選考方法に長期選考方式を導入 | ～2013年度 | 慶應義塾大学において、2年生の間に3年からの当ゼミゼミ希望者に論文を書かせ、ゼミで発表させて事前教育を実施するとともに、半年間にわたってゼミ員が2年生を論文個別指導で観察し、一方2年生にもゼミを半年間観察させてミスマッチを防ぐ工夫を実施。 |
| 2年生のための入ゼミ支援予備校の実施 | 2014・2015年度 | 慶應義塾大学において、2年生に対しゼミ選びを間違えることのないよう、かつ、希望の研究会に入れるよう、ESの書き方講座、面接講座、各研究会の課題の分析支援を実施し、希望ゼミ入ゼミを支援。参加2年生について成功率100%を達成。 |
| 全員ゼミ代表制度の実施 | ～2015年度 | 慶應義塾大学において、「ゼミ代表」の職務を廃止し、全員を各係の代表としてモチベーションと責任意識の向上を実現した。 |
| 航空観光プログラムの開発と導入 | 2016年度～ | 京都学園大学において、適性者を選抜して職業訓練を企業と協力してインテンシブに実施し、就職に直結させるとともに、航空関係の業種に興味を有する一般学生向けにもセミナー等を実施するプログラムを立ち上げて実施し、2018年3月卒業生について第1希望就職率100%の成果を得た。 |
| 短期海外留学先の開発と研修プログラム作成 | 2016年度～ | 長野県立大学(2018年開校)において、マネジメントの初級専門性と英会話を組み合わせた短期留学向きの研修プログラムおよび受け入れ先を開発、確定、実施。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『市場の失敗用語集』 | ～2015年度 | 慶應義塾大学において、研究会の学生が執筆する2年生3年生のための市場の失敗に関する基礎知識用語集の監修(自費) |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 中条研究会学生による商学部研究会対抗フットサル大会の運営 | ～2015年度 | 慶應義塾大学において、商学部ゼミナール委員会主催のソフトボール大会だけではゼミ間交流が十分でないと判断し、当研究会単独で商学部ゼミ対抗フットサル大会を年に2回運営。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 航空幻想(第2版) | 単 | 2014年11月 | 中央経済社 | | 295頁 |
| 経済学で読み解く交通・公共政策 | 共 | 2018年3月 | 中央経済社 | 中条　潮、田邉勝巳、後藤孝夫編 | 92-130頁 |
| 論文 | | | | | |
| 交通における税の役割 | 単 | 2012年5月 | 『運輸と経済』2012年5月号 | | 4-11頁 |
| 空港経営における商業主義 | 単 | 2014年5月 | 『都市問題』105巻4号 | | 9-13頁 |
| 日本の空は変わったか？―規制のLegacy― | 単 | 2014年12月 | 『航政研シリーズ』No.581 | | 1-14頁 |
| 災害対策の基本姿勢 | 単 | 2016年9月 | "TRAFFIC & BUSINESS"No.112 | | 9-16頁 |
| ビジネスジェットは先進国の象徴(1) | 共 | 2017年8月 | 『ていくおふ』No.147 | 平島佳奈、稲岡研士 | 9-16頁 |
| ビジネスジェットは先進国の象徴(2) | 共 | 2018年8月 | 『ていくおふ』No.152 | 稲岡研士 | 4-15頁 |
| ビジネスジェットは先進国の象徴(3) | 共 | 2018年10月 | 『ていくおふ』No.153 | 稲岡研士 | 4-16頁 |
| その他 | | | | | |
| 航空自由化からかけ離れた日本航空への介入 | 単 | 2012年7月 | 『日経ビジネス』2012年7月16日号 | | 112頁 |
| なぜ発着枠配分が問題になるのか | 単 | 2012年9月 | 『エアライン』2012年9月号 | | 59頁 |
| 安全対策の基本は自己責任 | 単 | 2013年5月 | 『運輸と経済』2013年5月号 | | 2-3頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他(続き) | | | | | |
| 社会資本市場化のススメ | 単 | 2013年6月 | 『日交研シリーズ』D161 | | |
| アベノミクスに頼らず自力活性化を | 単 | 2013年6月 | 『輸送リーダー』194号 | | 5-6頁 |
| 発着枠配分に関する基本的考え方と日本航空救済の意義 | 単 | 2013年10月 | 『明日の翼』 No.2 | | 3-10頁 |
| 羽田発着枠配分のあるべき姿 | 単 | 2013年10月 | 『エアライン』2013年10月号 | | |
| 日本の空は変わったか | 単 | 2013年12月 | 『三田評論』2013年12月号 | | 59-63頁 |
| 交通学研究の明日 | 単 | 2015年3月 | 『交通学研究』58号 | | 3-9頁 |
| 交通経済学と交通論はどうちがう？ | 単 | 2016年4月 | 『運輸と経済』2016年4月号 | | 16-20頁 |
| 大琉球構想の糸口としての大那覇空港構想 | 単 | 2018年3月 | 『ていくおふ』No.150 | | 5-11頁 |
| （講演、学会コメント、書評、インタビュー等多数につき省略） | | | | | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 1990年-1998年 | 公正取引委員会「政府規制と競争政策」研究会座長 |
| 2006年-2012年 | 内閣府規制改革民間開放推進会議、規制改革会議、行政刷新会議規制改革分科会委員 |
| 1995年-2018年 | 情報通信総合研究所地域通信研究会、競争戦略研究会座長 |
| 2009年-2011年 | 国土交通省成長戦略会議委員 |
| 2003年-2018年 | 国土交通省社会資本整備審議会道路部会委員 |
| 1992年-2018年 | 日本交通学会理事(2013年10月～15年9月会長) |
| 2008年-2018年 | 航空政策研究会理事 |
| 2010年-2018年 | 公益事業学会理事 |
| 2006年-2016年 | アジア交通学会理事(2013年10月～2016年9月副会長) |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| スカイマーク航空設立時の経験 |
| |

# 2019年度　客員教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　客員教授 | 氏名　村井　淳一 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「税法」の指導法の工夫 | 2009年4月～ | テキスト(書籍)のほかに、テキストの要点、補完すべき事項、関連判決等をまとめた補助レジュメを、毎回配布(6枚/回程度)。<br>毎回、授業開始15分程度の時間で、最近数日の新聞記事等における「税」関連のニュース(時には、その他の財政・金融関係のトピック)を取り上げて解説することで、税が日常生活のあらゆる場面で関係していることを理解させるよう努めている。<br>授業は1回完結方式とし、各回の授業では、最初に『疑問点』(このテーマで何を学ぶか)を数点提示し、これをテーマに沿って解説することで『疑問点の解決』を図り、更に発展的な内容について『さらに疑問』を提示することで、より深い理解を得られるように努めている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | 2009年4月～ | 各授業ごとに(大学院・学部の担当科目すべて)、講義の要点、関連判決等をまとめた補助レジュメ(上記)を作成し、補助教材としている。<br>なお、当該補助レジュメの書籍(教科書)化を現在検討中。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 京都学園大学大学院合同FD研究会 | 2019年3月28日 | 「税法論文を作成する大学院生の指導方法やスケジュールについて―法学研究科と経済学研究科のすり合わせの検討―」について報告 |
| 京都学園大学大学院合同FD研究会 | 2017年3月23日 | 「社会人院生の修士論文に対する取組みと指導法について―　税理士養成コースの事例を中心に　―」について報告 |
| 京都学園大学大学院合同FD研究会 | 2016年3月3日 | 「税理士養成コースの運営について　―　法学研究科の視点から　―」について報告 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2009年4月～ | 税法は実務に直結する学問領域である。実務家(税理士)でもあることを活かし、実際の書式を用いた申告書作成演習や、現在進行中の税務調査事例や裁判事例等を取り上げて検討するなど、積極的に「実務」の視点を授業に取り入れている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 地方税取扱いの手引き<br>(平成30年10月改訂) | 共 | 2018年11月 | ㈱清文社 | 地方税制度研究会(編) | pp.256～404、<br>1101～1208 |
| 「弁護士と税理士の相互質疑応答集」 | 共 | 2017年1月 | ㈱清文社 | 近畿弁護士会連合会税務委員会(編著)<br>近畿税理士会調査研究部(編著) | pp.114～123 |
| 論文 | | | | | |
| 「地方税における応益原則の再検討」 | 単 | 2018年10月 | 日本税理士会連合会主催<br>公開研究討論会論文集<br>『地方税の現状と展望』 | 近畿税理士会(編) | pp.3～23 |
| その他 | | | | | |
| (実務解説小冊子)<br>2019年度版　土地建物の税金ガイド | 単 | 2019年5月 | ㈱清文社 | | |
| (講演)<br>所得税の雑損控除と災害損失関連税制の再確認 | 単 | 2018年12月 | 近畿税理士会 | | |
| (実務解説)<br>法人税・消費税・地方税　法人税務ハンドブック | 共 | 2018年12月 | 月刊税理<br>2018年12月臨時増刊号 | | pp250-259<br>pp332-339<br>pp428-430 |
| (講演)<br>法人税・地方税申告書の書き方 | 単 | 2018年11月 | ㈱税務研究会 | | |
| (講演)<br>法人税基礎講座 | 単 | 2018年7月 | 公益社団法人日本租税研究協会 | | |
| (講演)<br>弁護士が知っておくべき地方税の基礎 | 単 | 2018年3月 | 近畿弁護士会連合会 | | |

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| （講演）<br>ここが危ない、法人税特別措置の使い方 | 単 | 2017年4月ほか | 近畿税理士会 | | |
| （講演）<br>関係会社間取引の税務 | 単 | 2016年8月<br>2015年9月 | 日本税理士会連合会 | | |
| （講演）<br>法人税　損金算入規定の再検討 | 単 | 2015年12月ほか | 近畿税理士会 | | |
| （講演）京町家再生セミナー<br>京町家と相続税 | 単 | 2015年9月 | 京都市景観・まちづくりセンター | | |
| （講演）<br>住まいの税金 | 単 | 2015年8月 | 大阪市住まい情報センター | | |
| （研究報告）<br>所得控除への『ゼロ税率方式』の適用 | 共 | 2015年7月 | 税研2015.7号 | | |
| （シンポジウム）<br>給与所得控除の課題とこれからのあり方 | 共 | 2015年4月 | 近畿税理士会<br>公開研究討論会 | | |
| （研究報告）『給与所得控除の研究』<br>「源泉徴収と給与所得控除」 | 共 | 2015年4月 | 近畿税理士会 | | pp.49-65 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2014年5月 | 中小企業庁「経営革新等支援機関」認定 |
| 2004年2月～現在 | 全国事業再生税理士ネットワーク幹事（2008年5月～現在　副代表幹事） |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　阿部　千寿子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 専門演習における裁判所見学の取り入れ | 2012年4月～ | 専門演習では、班を作り、班ごとに予定を決めて裁判所見学に行くように指導している。実際に勉強している刑法や刑事訴訟法、刑事裁判などを自分の目で見てくることにより、理解が向上するとともに、それを、模擬裁判等に活かしてもらうことを目的としている。裁判所見学に行った後には、各班ごとに、傍聴した事件の内容、手続過程、感想等を発表させている。 |
| 「刑事訴訟法」「刑事訴訟法Ⅱ」での学生に事案を理解させるための工夫 | 2011年10月～ | 刑事訴訟法の判例を取り上げながら、刑事訴訟法の理解を深めることを目的として授業してる。判例を取り扱う上で事実概要を正確に理解することが重要になる。黒板に、判例の事実概要を図式で書いたり、実際に学生に前に出てもらい、被疑者役、警察官役などを決めて動いてもらうなどして、事案を理解させるようにしている。 |
| 学生による報告 | 2011年4月～ | ゼミ形式の授業では、授業の後半で、学生が、班ごとにそれぞれ自分たちが選んだテーマについて、レジュメを作成し、報告することにしてる。自分たちの報告を意識しながら、授業に参加することで理解を深めようとしてる。 |
| DVDの活用 | 2011年4月～ | 「専門演習」「スタートアップ」「少年法」「犯罪学」などの授業では、授業において、DVDでドキュメント等を見せ、その後解説する等して、勉強している法律が現実社会においても問題になり得ることを実感してもらえるようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| レジュメ | 2010年4月～ | ほとんどの授業でレジュメを作成してる。穴埋め式にして、学生の興味関心を引き、授業に手中できるようにしている。また、いくつかクエスチョン(Q:質問)形式にし、答えを聞き取りながら書かせるようにしている。 |
| 京都学園大学法学会編『法学の扉2013年ポケット版』 | 2012年4月 | 第4章の4-17「犯罪現場の写真撮影の適法性」の執筆を担当 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 「被害者参加制度の現状と課題」 | 単 | 2011年12月 | 大谷實先生喜寿記念論文集 | | 537頁～563頁 |
| 「修復的司法をめぐる討論CHRIS CUNNEEN & CAROLYN HOYLE, DEBATING RESTRATIVE JUSTICE, Hart Publishing, 2010, pp. 195」(著書紹介) | 単 | 2013年5月 | アメリカ法2012年2号 | | 324頁～329頁 |
| 「被害者参加人の権限の範囲」 | 単 | 2014年3月 | 被害者学研究24号 | | 9頁～18頁 |
| 「被害者参加制度の見直しと展望」 | 単 | 2017年3月 | 法学新報123巻9・10号 | | 207頁～231頁 |
| 「ドイツ刑事手続における被害者への付添い制度」 | 単 | 2018年3月 | 同志社法学69巻7号 | | 3333頁～3367頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2013年 | 日本被害者学会第24回学術大会　個別報告　「被害者参加人の権限の範囲について」 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　柏﨑　洋美 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有）無） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ①スタートアップゼミA<br>スタートアップゼミⅠ<br><br>（2015年度から：経済経営学部　経済学科） | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日<br>2018年4月1日～<br>2018年9月30日<br>2019年4月1日～<br>2019年9月30日 | 京都学園大学・京都先端科学大学経済経営学部経済学科において、1年生13名を対象に、半年間（春学期）指導する少人数のゼミであった。<br><br>このゼミは、大学で学ぶ際に必要とされる基礎的な能力と技術の習得を目指すものであった。<br><br>担当者会議に出席して情報交換をしながら、問題に関する新聞社説の要約および、「漢字テスト」などを実施し、読み書きを中心に基礎的な学力の向上を行なった。 |
| ②スタートアップゼミB<br>スタートアップゼミⅡ<br><br>（2015年度から：経済経営学部　経済学科） | 2015年10月11日～<br>2016年3月31日<br>2016年10月1日～<br>2017年3月31日<br>2018年10月1日～<br>2019年3月31日<br>2019年10月1日～<br>2020年3月31日 | 京都学園大学・京都先端科学大学経済経営学部経済学科において、1年生12名を対象に、半年間（秋学期）指導する少人数のゼミであった。<br><br>このゼミでは、スタートアップゼミA・Ⅰの成果を発展させつつ、さらに学ぶための基礎学力を錬成、学習に見合った基本的な技術の習得を目指した。<br><br>担当者会議に出席して情報交換、学部におけるゼミのレヴェルを統一化することも行なった。 |
| ③キャリアゼミ | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日 | 京都学園大学法学部において、3回生を対象に、半年間（春学期）指導する少人数のゼミであった。<br><br>このゼミは、学生の希望する進路を実現するために必要となる基本的な準備作業を行なうとともに、キャリア形成の第一歩を円滑に踏み出すための後押しをするものであった。<br><br>法学部の担当者会議に出席して情報交換をしながら、自己分析シートおよび自己PR文の作成を指導し添削を行なった。また、適宜面談等を行ない課題に積極的に取り組むよう指導した。<br><br>法学部の担当者会議に出席して情報交換をしながら、自己分析シートおよび自己PR文の作成を指導し添削を行なった。また、適宜面談等を行い課題に積極的に取り組むよう指導した。 |
| ④専門演習1 | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日 | 京都学園大学法学部において、3回生を対象に、半年間（春学期）指導するゼミであった。<br><br>このゼミでは、労働法上の基本的な問題を取り上げて、ゼミ員全員で調べて考え、議論しながら検討していくことを行なった。<br><br>労働法の理論的理解とともに、企業での実務経験を活かし、実務での状況も身につけられるように指導した。 |
| ⑤専門演習2 | 2015年10月1日～<br>2016年3月31日<br>2016年10月1日～<br>2017年3月31日 | 京都学園大学法学部において、3回生を対象に、半年間（秋学期）指導する少人数のゼミであった。<br><br>専門演習1で学んだ基礎知識を前提に、事実および判旨並びに当該判例の位置づけなど判例を正確に読み込んでいくことを行なった。取り上げた判例は、村中孝史ほか編「労働判例百選〔第8版〕（有斐閣、2009年）に掲載されたものである。<br><br>その判例報告から、そのテーマに関する書籍および雑誌論文並びに判例を収集し、検討して、ゼミ論を執筆させた。優秀なゼミ論は、「京都学園大学法学部学生論集」に掲載した。 |
| ⑥専門演習3 | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日<br>2017年4月1日～<br>2017年9月30日 | 京都学園大学法学部において、4回生を対象に、半年間（春学期）指導するゼミであった。<br><br>このゼミでは、ゼミ生に事案を報告してもらい、その事案に含まれている争点などに関してゼミ生全員で考え議論しながら検討していった。<br><br>3回生の時点で、基本的な知識は身についていたので、水町勇一郎ほか編『事例演習労働法 第2版 』（有斐閣）、2011年）も使用して各テーマに関する理解を深めた。 |
| ⑦専門演習4 | 2015年10月1日～<br>2016年3月31日<br>2016年10月1日～<br>2017年3月31日<br>2017年10月1日～<br>2018年3月31日 | 京都学園大学法学部において、4回生以上を対象に、半年間（秋学期）指導する少人数のゼミであった。<br><br>このゼミでは、大学4年間の総括として労働法全般の中からテーマを選択し、総合的な検討を行なった。各ゼミ生が、判例およびテーマを選択して報告を行ない、それをゼミ論にまとめた。ゼミ論執筆に際しては、テーマの設定・資料収集・目次の作成・中間報告・数回の校正について、ゼミ生による議論および教員からの指導という形式で行なった。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）（続き） | | |
| ⑧労働法Ⅰ/労働法<br><br>（2015年度から労働法を兼ねる） | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日<br>2017年4月1日～<br>2017年9月30日<br>2018年4月1日～<br>2018年9月30日<br>2019年4月1日～<br>2019年9月30日 | 京都学園大学法学部・京都先端科学大学経済経営学部において、2年生以上を対象に、労働法Ⅰを担当した。<br><br>この講義においては、個別的労働関係法を中心に講義をした。講義は、教科書・六法を使用する他オリジナルのレジュメを配付して進めた。<br><br>また授業内小テストも行ない学生の理解の度合いを確認した。<br><br>そして、特定のテーマを扱っていた労働法特別講義（2011年度秋学期開講）が、2012年度から一般的な講義の⑩労働法Ⅲに変更となった。このことに伴い、⑧労働法Ⅰでは、個別的労働関係法の中の基礎的な事項について講義した。具体的には、労働法の主体、労働契約と権利義務、就業規則、募集・採用内定、男女雇用平等、解雇・労働契約の終了、賃金・退職金などである。 |
| ⑨労働法Ⅱ | 2015年10月1日～<br>2016年3月31日<br>2016年10月1日～<br>2017年3月31日<br>2017年10月1日～<br>2018年3月31日 | 京都学園大学法学部において、2回生以上を対象に、労働法Ⅱを担当した。この講義では、個別的労働関係法のうちの応用的な事項および集団的労働関係法の基礎的な事項も一部対象とした。<br><br>そして、特定のテーマを扱っていた労働法特別講義（2011年度秋学期開講）が、2012年度から一般的な講義の⑩労働法Ⅲに変更となった。このことに伴い、⑨労働法Ⅱでは、個別的労働関係法のなかの応用的な事項について講義した。具体的には、配置転換・出向、時間外労働・休日労働、年次有給休暇、派遣労働などである。 |
| ⑩労働法Ⅲ | 2015年10月11日～<br>2016年3月31日 | 京都学園大学法学部において、2回生以上を対象に、労働法Ⅲを担当した。特定のテーマを扱っていた労働法特別講義（2011年度秋学期開講）が、2012年度から一般的な講義の⑩労働法Ⅲに変更となった。このことに伴い、労働法Ⅲでは、集団的労働関係法を講義した。<br><br>その内容は、労使関係における制度および法的枠組み、並びに、法的問題について考察した。具体的には、労働組合の結成から、その組織を維持・運営していくための様々な活動、団体交渉、争議行為、労働協約の締結にいたるまでの過程を考察の対象とした。 |
| ⑪社会保障法 | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日<br>2017年4月1日～<br>2017年9月30日<br>2018年4月1日～<br>2018年9月30日<br>2019年10月1日～<br>2020年3月31日 | 京都学園大学法学部・京都先端科学大学経済経営学部において、2年生以上を対象に、社会保障法を担当した。<br><br>憲法25条に規定される生存権が具体化されている国民健康保険法や厚生年金保険法といった各論を講義してから、社会保障法全体に共通する総論を講義した。<br><br>また、講義の途中で小テストを行ない学生の理解の度合いを確認したり、講義中に個別に質問をして対話的なやり取りも行なった。<br><br>担当した「スポーツと労働法」においては、プロスポーツ選手の労働者性・プロスポーツ選手労働組合の適格性・プロ野球選手会の争議行為などについて講義した。 |
| ⑫労働と社会 | 2015年4月1日～<br>2015年9月30日<br>2016年4月1日～<br>2016年9月30日<br>2017年4月1日～<br>2017年9月30日<br>2018年4月1日～<br>2018年9月30日<br>2019年4月1日～<br>2019年9月30日 | 京都学園大学・京都先端科学大学共通科目において、キャリア科目として2年生以上を対象に「労働と社会」を担当した。<br>社会における労働の仕組みを理解し、その中に法を位置づけて、法の機能を講義した。<br>具体的には、労働における当事者・規範・人事管理・企業の運営・職業キャリアの展開・引退の過程・労働組合運営・労使交渉などである。 |
| ⑬実践プロジェクトA | 2017年4月1日～<br>2017年9月30日<br>2019年4月1日～<br>2019年9月30日 | 京都学園大学・京都先端科学大学 経済経営学部において2年生を対象に、実践プロジェクトAを担当した。20名弱の問題解決型のゼミである。<br>日本社会での「生きにくさ」が問題となっている中で、「子どもの貧困」を中心に検討し、今後必要とされる雇用対策および社会保障政策の施策を探求した。<br>とりまとめた内容は、右京区役所へヒアリングを行い、レポートにまとめた。 |
| ⑭実践プロジェクトB | 2017年10月1日～<br>2018年3月31日<br>2019年10月1日～<br>2020年3月31日 | 京都学園大学・京都先端科学大学 経済経営学部においての2年生を対象に、実践プロジェクトBを担当した。20名弱の問題解決型のゼミである。<br>実践プロジェクトAでの成果をさらに発展させ、右京区役所でのヒアリングを経てプレゼンテーションを行った。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)(続き) | | |
| (授業評価) | | |
| ①京都学園大学による<br>「授業評価アンケート」<br>労働法Ⅰ／労働法 | 2015年6月<br>2016年6月<br>2017年6月<br>2018年6月 | 京都学園大学が実施した「授業評価アンケート」の対象となった。評価項目は多岐にわたるが、5点を最高点とする5段階評価である。<br>基本的な授業の進め方に対する、①授業時間や授業回数は、守られている、3.83ポイント〔亀岡・2015年度春学期〕、4.50ポイント〔太秦・2015年度春学期〕)、5.00ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、4.50ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、4.29ポイント〔太秦・2017年度春学期〕)、②教員は私語に対して適切に対応している、4.80ポイント〔亀岡・2015年度春学期〕、4.08ポイント〔太秦・2015年度春学期〕、4.33ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、4.50ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、4.51ポイント〔太秦・2017年度春学期〕)、③授業は、シラバスにそって進められている、4.50ポイント〔亀岡・2015年度春学期〕、〔太秦・2015年度春学期〕、5.00ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、4.50ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、3.83ポイント〔太秦・2017年度春学期〕)の部分はおおむね良好であると考えられる。さらに、わかりやすい授業を心掛けた。<br>自由記述欄では、「毎回小テストをするので理解が深まる」「内容は難しいですが、知ることができて良かったと思うことがたくさんあります」とコメントされた。<br>2018年度より、評価方法および評価の仕方が変更となり、5点ないし4点を最高点とする段階評価である。同年度は、法学部・経済経営学部経済学科の合同開講となったが、授業評価は別々に算出されている。到達目標の理解度(4点最高点)で、法学部 4.00ポイント、経済学科 3.00ポイント(2018年度)、理解度(4点最高点)で法学部 3.00ポイント、経済学科 3.00ポイント(2018年度春学期)など、高い評価を得た。 |
| ②社会保障法 | (実施なし)<br>(実施なし)<br>2017年6月<br>2018年6月 | 京都学園大学が実施した「授業評価アンケート」の対象となった。評価項目は多岐にわたるが、5点を最高点とする5段階評価である。<br>基本的な授業の進め方に対する、教員は、私語に対して適切に対応している、4.13ポイント〔太秦・2017年度春学期〕)、の部分はおおむね良好であると考えられる。<br>各論点について、対話的なやりとりを行なったので、教員は、あなたが積極的に授業に参加する機会を与えてくれているの評価が良好であると思われる。<br>2018年度より、評価方法および評価の仕方が変更となり、5点ないし4点を最高点とする段階評価である。同年度は、法学部・経済経営学部経済学科の合同開講となったが、授業評価は別々に算出されている。到達目標の理解度(4点最高点)で、法学部 4.00ポイント、経済学科 3.33ポイント(2018年度春学期)、理解度(4点最高点)で法学部 4.00ポイント、経済学科 2.67ポイント(2018年度春学期)など、高い評価を得た。 |
| ③労働法Ⅱ | 2015年11月<br>2016年11月 | 京都学園大学が実施した「授業評価アンケート」の対象となった。評価項目は多岐にわたるが、5点を最高点とする5段階評価である。<br>基本的な授業の進め方に対する、①授業時間や授業回数は、守られている 4.33ポイント〔亀岡・2015年度秋学期〕4.5ポイント〔太秦・2015年度秋学期〕、5.00ポイント〔亀岡・2016年度秋学期〕、4.00ポイント〔太秦・2016年度秋学期〕)、②教員は、私語に対して適切に対応している 5.00ポイント〔亀岡・2015年度秋学期〕、4.60ポイント〔太秦・2015年度秋学期〕、5.00ポイント〔亀岡・2016年度秋学期〕、4.00ポイント〔太秦・2016年度秋学期〕)、③授業はシラバスにそって進められている 5.00ポイント〔亀岡・2015年度秋学期〕、4.30ポイント〔太秦・2015年度秋学期〕、5.00ポイント〔亀岡・2016年度秋学期〕、5.00ポイント〔太秦・2016年度秋学期〕、④授業内容はよく準備され、整理されているの部分はおおむね良好であると考えられる。<br>また、2012年度秋学期の公開授業の対象となった。参加した学内の教員からは、授業の始めに、15分間の小テストを実施しており、学生は、毎回復習してくるくせをつけることができるので、期末テストに向けてもよい取り組みだと思う。優秀な答案を紹介するなど、とてもレベルの高い講義だと感心した。 レジュメに沿って進行されており、整理されている。判例を素材にした講義で、教材として「百選」を使用している。レベルの高い教材であるが、内容はていねいに説明されていたので消化不良になっていない。<br>適宜受講者との質疑応答を盛り込んでいる。学生の名前を呼んで質問をし、答えを促していくのは、学生自身も参加しているという意識が付く。まじめな学生が多くてうらやましいとコメントされた。 |
| ④労働法Ⅲ | (実施なし)<br>(実施なし)<br>(実施なし)<br>(実施なし) | 京都学園大学が実施した「授業評価アンケート」の対象となった。評価項目は多岐にわたるが、5点を最高点とする5段階評価である。 |

| | | |
|---|---|---|
| ⑤労働と社会<br>（2016年度から亀岡・太秦の両キャンパスで開講） | 2015年6月<br>2016年6月<br>2017年6月<br>2018年6月 | 京都学園大学が実施した「授業評価アンケート」の対象となった。評価項目は多岐にわたるが、5点を最高点とする5段階評価である。<br>基本的な授業の進め方に対する、①授業時間や授業回数は、守られている（3.66ポイント〔2015年度春学期〕、4.22ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、3.96ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、4.04ポイント〔亀岡・2017年度春学期〕、4.16ポイント〔太秦・2017年度春学期〕）、②授業は、シラバスにそって進められている（3.42ポイント〔2015年度春学期〕、3.76ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、3.66ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、3.96ポイント〔亀岡・2017年度春学期〕、3.71ポイント〔太秦・2017年度春学期〕、③私語のない授業になるよう、適切に対応している（4.08ポイント〔2015年度学期〕、4.02ポイント〔亀岡・2016年度春学期〕、4.15ポイント〔太秦・2016年度春学期〕、4.57ポイント〔亀岡・2017年度春学期〕、4.44ポイント〔太秦・2017年度春学期〕）の部分はおおむね良好であると考えられる。<br><br>2018年度より、評価方法および評価の仕方が変更となり、5点ないし4点を最高点とする段階評価である。同年度は、法学部・経済経営学部経済学科の合同開講となったが、授業評価は別々に算出されている。<br><br>到達目標の理解度（4点最高点）で 2.83ポイント(亀岡・2018年度春学期)、2.44ポイント（太秦・2018年度春学期)、理解度（4点最高点)で2.50ポイント(亀岡・2018年度春学期)、2.10ポイント（太秦・2018年度春学期)など、高い評価を得た。<br><br>自由記述欄では、「先生が割と頻繁に注意してくれるので、講義に集中できる」とコメントされた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 労働法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（京都学園・京都先端科学大学） | 2015年4月1日～<br>2017年3月31日 | 毎回の講義の度に「要点・キーワード・参照条文・判旨」などを記述したA4×2～3枚のレジュメを作成して配付した。講義内容によっては判例解説のコピーなども添付して作成し、学生の理解を深めるとともに、自分の身を守る武器にするよう指示した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 同一労働同一賃金の動向 働き方改革を契機に | 単 | 2018年11月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集第7号 | | pp.67-79 |
| 職場のハラスメントへの修復的職場実践の具体化へ向けて(1) ―修復的正義からのパラダイム― | 単 | 2017年11月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集（第5号） | | pp.103-111 |
| ハラスメントと紛争解決手続及び救済の方法。内容――修復的職場実践の検討 | 単 | 2016年10月 | 日本労働法学会誌128号 | | pp.109-117 |
| 言葉によるセクシュアル・ハラスメントと懲戒処分の有効性 | 単 | 2015年11月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集1号 | | pp.37-45 |
| 労働者の妊娠差別に関する諸問題 | 単 | 2015年3月 | 京都学園法学2012年2＝3号<br>（通巻75＝76号） | | pp.43-65 |
| その他（洋書書評・判例評釈） | | | | | |
| リジー・バームス著『職場におけるいじめと行動紛争』――個人的権利の双対性<br>Oxford University Press(2015) | 単 | 2017年2月 | 日本労働研究雑誌680号 | | pp.120-123 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1996年5月～現在 | 日本労働法学会会員 |
| 2016年1月～現在 | 日本カナダ学会会員 |
| 2016年5月 | 日本労働法学会第131回大会　ミニ・シンポジウム「職場のハラスメント問題への新たなアプローチ」のうち「ハラスメントと紛争解決手続及び救済の方法・内容」を担当 |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動(続き) | |
|---|---|
| 2017年2月 | 中央労働委員会(西日本地方事務所)主催 2016年度第2回労使関係セミナー・公益側パネリスト<br>第2部パネルディスカッション「判例で理解する職場のセクハラ・パワハラ」<br>於:滋賀県庁 協賛:滋賀県労働委員会 京都府労働委員会 大阪府労働委員会 兵庫県労働委員会 奈良県労働委員会 和歌山県労働委員会 後援:滋賀労働局 |
| 2018年2月 | 中央労働委員会(西日本地方事務所)主催 2017年度第2回労使関係セミナー<br>第1部 基調講演:講師 「職場のハラスメントへの修復的正義導入の検討 ー職場環境改善をめざしてー」<br>第2部パネルディスカッション:公益側パネリスト「事例検討」<br>於:堺商工会議所 協賛:大阪府労働委員会 京都府労働委員会 兵庫県労働委員会 滋賀県労働委員会 奈良県労働委員会 和歌山県労働委員会 後援:大阪労働局 |
| 2018年4月27日 | 朝日新聞朝刊33面(社会記事) 財務省事務次官のセクハラ問題についてのコメント |
| 2018年5月4日 | 朝日新聞・with news 財務省事務次官のセクハラ問題について<br>「セクハラの解決, 第三者機関が必要な理由『身内では限界がある』」のコメント |
| 2018年6月18日、19日 | 共同通信取材「自治体の首長のセクハラ問題」コメント配信<br>同月18日に京都新聞・中国新聞, 19日に秋田魁新聞・四国新聞・佐賀新聞に掲載 |
| 2018年9月18日 | 毎日新聞 記者の目欄朝刊10面「群馬・みなかみ町長セクハラ疑惑」についてのコメント |
| 2018年10月1日 | 厚生労働大臣より、中央労働委員会地方調整委員(公益代表委員)任命(現在に至る) |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| 1. 職場におけるハラスメント防止に関する事項 |
| 2. 労働紛争の解決手続に関する事項 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　川崎　雄二郎 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| プレゼンテーション用ワイヤレスマウスの活用 | 2014年4月～ | パワーポイントで作成したスライド資料を用いた講義で、立つ位置を自在に変えることができるように、プレゼンテーション用ワイヤレスUSBマウスを用いてコンピュータを操作する環境を構築した。 |
| 穴埋め式講義資料作成方法の工夫 | 2014年4月～ | スライド資料をただ見せるための講義法では、学生の集中力が著しく低下し理解が深まらない。そこで、スライド資料を穴埋め式にして、講義中に学生の手で講義内容を記録し資料を完成させる方法を考えた。しかし、あまりに穴を空けすぎると、講義の進行が滞る、あるいは、学生が講義内容の本筋を見失うという問題も露見したため、穴空きの程度を適切に調整するように努めている。 |
| 学生による授業評価の活用 | 2014年4月～ | 授業評価の結果を次学期に反映させるよう努めている。例えばアンケートで授業の展開が早いと感じる学生がいる結果となれば、次学期には説明をより丁寧にする、板書の時間をより長くとるなどの対策を講じる。 |
| 学生が自主的に講義内容をまとめる機会の設定 | 2018年4月～ | 講義では細かな事柄にまで説明が及ぶため、全体としての概要をつかめない学生が一定存在することに気付いた。そこで、講義中に適宜「ここまでのおさらい」というコーナーを設け、講義内容の要点をまとめる時間を学生に与えることにしている。 |
| 出席確認用紙の活用 | 2018年4月～ | 毎回、出席カードに①上述の「ここまでのおさらい」で自身がまとめた内容と②質問やコメントを記入してもらう。これらに対し添削やコメントを返すことによって、学生の理解度の把握や学生とのコミュニケーションにつなげることを目的としている。 |
| インターネット上のアンケートフォームを利用した双方向型授業の実現 | 2018年9月～ | 講義中において教員と学生との間あるいは学生同士での議論を円滑化するため、インターネット上で利用可能なアンケートフォームを活用する。講義資料にはフォームへのリンクをQRコードを掲載し、容易にアクセスできるようにした。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「経済学基礎」 | 2014年4月 | 関西学院大学商学部において同名の講義を担当する際に作成した。内容は、ミクロ経済学の基礎的内容（経済主体の意思決定に関する基本的な考え方、市場の需要・供給モデル、消費者・生産者の意志決定、市場の効率性・公平性に関する議論、政策当局による市場統制の分析、独占、寡占、外部性）とマクロ経済学の基礎的内容（国民経済計算、財市場、金融市場、IS-LM分析およびそれを用いた財政・金融政策の効果分析）で構成されている。 |
| 「ゲーム理論の最先端」 | 2015年4月 | 関西学院大学商学部において「ビジネス情報特論Ｂ－ゲーム理論の最先端」を担当する際に作成した。内容としては、戦略形ゲーム、展開形ゲーム、繰り返しゲーム、不完備情報ゲーム、提携形ゲームの均衡解概念とその求め方や応用、オークション理論、マッチング理論を取り扱っている。 |
| 「マクロ経済入門」 | 2015年9月 | 甲南大学マネジメント創造学部において「経済学入門Ⅱ」を担当する際に作成した。内容としては、前半に人口減少や少子高齢化の日本経済への影響、労働市場、日本の財政や金融、国際経済についての実際のデータを基に日本経済の現状を理解し、後半では財市場に関する理論モデル（消費関数、45度線分析など）を学んでいく。 |
| 「経済数学入門」 | 2017年4月 | 甲南大学マネジメント創造学部において「数学的論理思考」を担当する際に作成した。内容としては、比、連立方程式、一次関数、二次関数、二次方程式、不等式、指数、数列、微分などを復習し、それらが経済学においてどのように利用されているかを学んでいく。 |
| 「ミクロ経済入門」 | 2018年4月<br>（2018年9月に一部改訂） | 京都学園大学経済経営学部において同名の講義を担当する際に作成した。内容としては、経済主体の意思決定に関する基本的な考え方、市場の需要・供給モデル、消費者・生産者の意志決定、市場の効率性・公平性に関する議論、政策当局による市場統制の分析を取り扱っている。 |
| 「（中級）ミクロ経済学」 | 2018年4月<br>（2019年4月に一部改訂） | 京都学園大学経済経営学部において「ミクロ経済学」を担当する際に作成した。内容としては、「市場の失敗」を主たるテーマとし、それを学ぶための準備として消費者・生産者の意志決定、余剰分析の方法、ゲーム理論の基礎を学んだ後、市場の失敗が生じる事例（独占、寡占、外部性、情報の非対称性など）の分析を行う。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Optimal false-name-proof single-item redistribution mechanisms | 共著 | 2014年5月 | Proceedings of AAMAS 2014 | 鶴田俊佑、岡雅晃、東藤大樹、◎川崎雄二郎、櫻井祐子、Mingyu Guo、横尾真 | pp221-228 |
| Strategy-proof matching with regional minimum quotas | 共著 | 2014年5月 | Proceedings of AAMAS 2014 | 後藤誠大、橋本直幸、岩崎敦、◎川崎雄二郎、上田俊、安田洋祐、横尾真 | 1225-1232 |
| Strategy-proof matching with regional maximum and minimum quotas | 共著 | 2016年6月 | Artificial Intelligence Vol. 235 | 後藤誠大、岩崎敦、◎川崎雄二郎、倉田涼史、安田洋祐、横尾真 | 40-57 |
| マッチング形成問題における選好の申告に関する考察―リクエスト構造を付加したメカニズムの提案― | 単著 | 2017年3月 | 商学論究 64巻5号 | | 245-279 |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表） | | | | | |
| Matching search with noisy types | 単独 | 2015年1月 | Contract Theory Workshop | | |
| Matching search with noisy types | 単独 | 2015年9月 | 「公益学＋経済学」2大学合同ワークショップ | | |
| 安定マッチング問題における選好順序の決定・申告に関する考察 ～関西学院大学商学部研究演習Ⅰ配属の事例をもとに～ | 単独 | 2016年9月 | 「公益学＋経済学」2大学合同ワークショップ | | |
| （研究報告書） | | | | | |
| 地方公共団体における行財政健全化に向けた事務事業評価指標の検討 | 共著 | 2017年3月（中間）<br>2018年3月（最終） | 山形県酒田市<br>大学まちづくり地域政策形成事業 | 三木潤一、松尾慎太郎、小嶋健太、◎川崎雄二郎 | |
| 酒田市観光に関する調査研究 | 共著 | 2019年3月 | 山形県酒田市<br>大学まちづくり地域政策形成事業 | 三木潤一、小嶋健太、◎川崎雄二郎 | |
| （研究助成） | | | | | |
| 制約付きマッチング形成問題に関する数理的分析と提案 | 単独 | 2014年4月～2017年3月 | 日本学術振興会<br>若手研究B | | |
| 持続可能な発展のための資源配分メカニズム設計問題の構築 | 分担 | 2014年4月～2017年3月 | 日本学術振興会<br>基盤研究S | | |
| 情報の不確実性下におけるマッチング形成の分析：メカニズムの幅広い実用に向けて | 単独 | 2019年4月～2022年3月 | 日本学術振興会<br>若手研究B | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2018年2月 | 日本経済学会発行の学術雑誌「Japanese Economic Review」の査読 |
| 2018年7月 | 日本経済学会発行の学術雑誌「Japanese Economic Review」の査読 |
| 2018年12月 | |
| 2019年5月 | 学術雑誌「Economic Modelling」の査読 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　木口　武博 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無 |
|---|---|---|---|

## I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 最新の日本のデータの活用 | 2015年9月～ | 早稲田大学商学部設置科目「専門英語講読」において、英文教科書に掲載されているアメリカのデータについて説明するだけでなく、最新の日本のデータを参照しながら講義を進めた。 |
| 学術論文のSTATAによる再現 | 2015年9月～ | 早稲田大学大学院商学研究科設置科目「計量経済学」において、国際学術誌に刊行された論文の一部を、STATAを用いて再現する演習を行った。 |
| 数学の補足資料の作成 | 2016年4月～ | 早稲田大学大学院商学研究科設置科目「英書文献研究」において、英語による数学の補足資料を作成し、大学院レベルの経済理論に対して学生の理解が深まるよう努めた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『マクロ経済学』嶋村紘輝編著 | 2015年1月 | 第11章「失業とインフレーション／デフレーション」、第12章「経済成長」を担当。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 講義・ゼミ運営の工夫についての発表 | 2018年9月 | 京都学園大学経済経営学部FD研修会において、講義・ゼミをどのような工夫を行って運営をしたかについて発表を行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学生懸賞論文の審査 | 2015、2016、2017年度 | 早稲田商学学生懸賞論文の審査を担当(学部学生の部4本、大学院生の部1本)。 |
| 修士論文の副査 | 2017、2018年度 | 早稲田大学大学院商学研究科所属の3名の大学院生(うち2名は外国人学生)の修士論文の副査を務めた。 |
| 高校での模擬授業 | 2017年10月 | 静岡県立浜松北高校において、大学出張講座として「移民の経済学」についての講義を行った。 |
| オープンキャンパスでの体験ゼミ担当 | 2018年8月 | 京都学園大学のオープンキャンパスにおいて、「移民の経済学」についての模擬授業を行った。 |

## II　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 著書 | | | | | |
| 『マクロ経済学』(再掲) | 共著 | 2015年1月 | 成文堂 | 嶋村紘輝編著 | pp.203-248 |
| 論文 | | | | | |
| 動学的な総需要－総供給モデルとインフレ期待形成 | 共著 | 2015年3月 | 『早稲田商学』第441・442号 | 嶋村紘輝、仲井純 | pp.29-69 |
| Essays on Macroeconomics of Immigration | 単著 | 2015年9月 | ロンドン大学(博士論文) | | |
| ニューケインジアン・モデルの動学的均衡経路と金融政策 | 共著 | 2015年3月 | 『早稲田商学』第445号 | 嶋村紘輝、仲井純 | pp.1-43 |
| Immigration and Unemployment: A Macroeconomic Approach | 共著 | 2017年3月 | *Macroeconomis Dynamics* | Andrew Mountford | pp.1-27 |
| その他 | | | | | |
| (ポスター報告)Bargaining and Immigration in a Macro Model | 単著 | 2014年4月 | ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校Annual PhD Conference | | |
| (口頭報告)Bargaining and Immigration in a Macro Model | 単著 | 2015年10月 | 早稲田大学金曜セミナー | | |
| (口頭報告)Bargaining and Immigration in a Macro Model | 単著 | 2016年6月 | 日本経済学会2016年春季大会 | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| (競争的資金)<br>文部科学省科研費若手研究(B) | 単独 | 2017年-2019年 | 配分額: ￥1,950,000 | |
| (受賞) 産研アワード | 単独 | 2018年5月 | 早稲田大学産業経営研究所 | |
| (口頭報告) Bargaining and Immigration in a Macro Model | 単独 | 2018年5月 | 京都学園大学<br>経済経営学部経済学科平成30年度1回研究会 | |
| (討論) Bargaining and Immigration in a Macro Model | 単独 | 2018年10月 | The 21st Joint Seminar on Studies of Economics,<br>"Monetary Policy and Asset Bubbles in a Small Open Economy"<br>報告者:清水涼介(京都大学) | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2016 年6月～ | 日本経済学会会員 |
| 2017 年2月～ | American Economic Association 会員 |
| 2018年4月～ | 早稲田大学産業経営研究所招聘研究員 |
| 2019年1月～ | 日韓次世代学術フォーラム諮問教授 |
| 2019年6月～ | 日本経済政策学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　澤田 吉孝 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| マルチメディア教材活用 | 2008年4月～ | 「ファイナンスの数理」において、受講学生にPCを使わせ、具体例を実際に解かせながら、証券投資分析を実施した。また、受講生に課題として、実際の株価のデータをインターネットの株価サイト(Yahoo ファイナンス等)より取得させて、実際のデータを用いて証券投資分析を行わせた。そうすることで、より実践的な力を養うことを目指した。 |
| 講義レジュメの公開 | 2010年9月～ | 講義レジュメを学内サーバ「京学なび」に公開し、事前・事後の学習を促すようにしている。 |
| パワーポイントの活用 | 2010年9月～ | ほとんどの講義でパワーポイントを用いた授業を実施している。ただし、プレゼンテーションを見るだけの講義ではなく、各講義の終わりに「確認問題」を実施し、学生の理解程度をチェックしている。 |
| 学生を対象とした学術大会「日本学生経済ゼミナール大会」の活用 | 2015年4月～<br>2017年3月 | 「専門ゼミA」および「専門ゼミB」において、学生の学習活動の成果を発表する場として「日本学生経済ゼミナール大会(以下、インター大会)」を活用した。インター大会は、全国の経済学部・経営学部・商学部の学生を対象とした学術大会であり、「研究活動の促進」と「他大学の学生との交流」を理念に掲げ、学生に日頃の研究成果を発表する場として、日本学生経済ゼミナールという学術団体が運営している。ゼミ生がインター大会の討論部門に参加することで、経済社会問題についての関心を深め、自分たちの主張を証拠に基づいて論理的に組み立て、さらに、その主張を効果的に相手に伝えるための工夫をする、といった面で効果があると考えている。また、他大学の学生との交流を通して、社会に適用するために求められる「社会人基礎力」を身に着けることを目的としている。 |
| 学外の株式学習コンテストを積極活用 | 2017年4月～ | 「専門ゼミA」および「専門ゼミB」において、学生の学習活動の成果を発表する場として「日経STOCKリーグ」を活用した。「日経STOCKリーグ」は、日本経済新聞社主催、野村ホールディングス協賛の中学生、高校生、大学生を対象にしたコンテスト形式の株式学習プログラムである。学習テキストなどの教材を活用することで、経済・株式投資の基礎を学び、実生活で役立つ知識を身につける。また、学習で得た知識を活かして、チーム内で議論して投資テーマを決定し、そのテーマに基づきポートフォリオを構築する。そして、経済・株式投資について自分たちで学習したこと、各チームの投資テーマおよびその決定理由や構成ポートフォリオ、その他自分たちで疑問に思ったことを1万字程度のレポートでまとめる。この学習を通じて、金融のしくみについてや、社会にはさまざまな種類の産業があることを学ぶ。また、企業の業績を知るために、決算書類のしくみとその基本的な読み方を学ぶ。株価の動向を予測しようとする中で、景気の善し悪しや、政府が景気に対して果たす役割はとな何なのかなどを学ぶ。これらの学んだことを活かして、就活の時の企業分析をより緻密にし、また社会に適用する際に求められる「社会人基礎力」を高めることを目的にしている。 |
| プレゼンテーション用レーザーポインターの活用 | 2018年4月～ | パワーポイントなどのコンピュータを用いることの一つの弊害は、コンピュータにずっと教員が張り付いていなければならないことである。そこで、プレゼンテーション用ワイヤレスUSBレーザーポインターを用いることで、授業中に自由な場所からコンピュータを操作できるようにした。また、重要箇所をレーザーで示すことで、学生に対する授業への理解をより深めている。 |
| 実務経験者を外部講師として活用 | 2018年4月～ | 「金融入門」の各授業回において、実務経験者を外部講師としてお招きし、金融経済や証券市場について、寄与講義を実施していただいた。実務経験者の講義を通じて、これからの日本経済を担っていく学生に対して、より実践的な力へと発展させることを目指している。 |
| 「4年次生に聞く就活体験談」の実施 | 2018年9月～ | 本格的な就職活動がスタートする前に、3年次ゼミ生を対象として、4年次ゼミ生に就活体験談を話してもらうことで、就活をどのように乗り越えていくのか考えていく機会を設けている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義レジュメ以外特になし。 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| The Effectiveness of Unconventional Monetary Policy in USA | 単 | 2014年5月 | Proc. of the 45th ISCIE International Symposium on Stochastic Systems Theory and Its Applications | | CD-ROM |
| 米国における量的金融緩和政策の有効性：SVAR モデルによる検証 | 単 | 2018年3月 | 『京都学園大学経済経営学部論集』第6号 | | pp.1-45 |
| その他 | | | | | |
| (学会発表)<br>The Effectiveness of Unconventional Monetary Policy in USA | 単 | 2013年11月 | The 45th ISCIE International Symposium on Stochastic Systems Theory and Its Applications (at University of the Ryukyus) | | |
| (市民講座)<br>リーマンショック後の金融危機における米国の対応 | | 2014年11月 | 京都学園大学<br>京町家キャンパス | | |
| (学会発表)<br>米国における量的金融緩和政策の有効性：SVAR モデルによる検証 | 単 | 2018年10月 | 名古屋市立大学<br>滝子キャンパス | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本金融学会会員 |
| | 日本経済学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　清水　裕子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| インタラクティブ・ラーニングの導入 | 2019年4月～ | パワーポイントを利用する講義を基本とし、時事に適した新聞記事やビデを利用する。これらによりインプットの質を高め、様々なメディアを利用することで学生自身の学習の方法の幅が広がる。各回の講義の理解度を確認するため、トピックについてクイズや論述問題を課し、毎回学生に提出してもらっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| The Locavore's Dilemma. In Praise of the 10,000-Mile Diet, Public Affairs (New York) | 2015年4月～ | カナダ・トロント大学、地理学部Food and Globalizationコースのテキストとして利用。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 将来にわたり役立つ知識と技法の習得(ゼミナールも含む) | 2019年4月～ | 基礎的な学習能力を向上させるため、一連の研究の仕方を学習できる内容にしている。講義、グループワーク、課外学習、文章の読み方、研究の書き方・まとめ方、パワーポイントの利用、発表など様々な学習方法をミックスさせて、将来に役立つ知識と技法の習得を目標としている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Blowing Hot Air on the Wrong Target? A Critique of the Fossil Fuel Divestment Movement in Higher Education | 共 | 2016年5月 | Frontier Center for Public Policy (Canada) | | |
| Greed or Speed: Does Automated Traffic Enforcement Improve Safety or Revenue Generation | 共 | 2015年12月 | Frontier Center for Public Policy (Canada) | | |
| (エッセイ) | | | | | |
| La mondialisation n'est pas forcément indigeste | 単 | 2017年2月 | Les espaces ont besoin d'idées (France) | | |
| (新聞記事) | | | | | |
| Energies renouvelables : une révision qui resque de coûter cher | 単 | 2018年4月04日 | La Tribune　(France) | | |
| Durable pour qui ? L'huile de palme et le débat environnement-développement | 単 | 2017年4月17日 | La Tribune　(France) | | |
| (その他) | | | | | |
| フィリピンにおけるフィールド調査 | | 2015年 | 遺伝子組み換え作物に関する農業政策とその経済効果についてのフィールド調査。国際機関、大学研究者、非営利団体、フィリピン政府関係者などにインタビュー調査を行うとともに、栽培サイトの視察。 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

20年の北米滞在経験。大学研究所、欧米シンクタンク、民間企業、政策コンサルタントなどを経験。国際的なマクロの視点から、グローバライゼーションの時代における持続可能な経済発展、国際貿易、エネルギー問題、国際ビジネス経営を主に専門とする。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　土屋　貴裕 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 講義「政治学」、「政治学入門」、「国際関係演習」、「国際関係論Ⅰ・Ⅱ」、「国際関係史」、「国際関係学入門」、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」、「貿易・物流概論Ⅰ・Ⅱ」、「貿易実務検定対策Ⅰ・Ⅱ」（国際ビジネス学科・国際関係学科・英語本科大学編入コース、1・2年生対象）において実践的な教育を達成。 | 平成25年4月<br>～平成27年10月 | 日本外国語専門学校で開講した各科目において、スライド（パワーポイント）とレジュメを用いて講義を行うとともに、グループディスカッションや復習と演習問題を実施することで、学生の知識定着を図った。また、大学編入コース国際関係科目専攻の学生に対して、面接指導および小論文指導を行い、多くの学生を志望校合格へと導いた。 |
| 「基礎ゼミナール」（初年次教育、留学生クラス）、「ICTツールズb」（初年次教育、留学生クラス、データ分析入門）において実践的な教育を達成。 | 平成27年4月<br>～平成27年10月 | 嘉悦大学ビジネス創造学部で開講した各科目において、コミュニケーション実践、ビジネス調査、プレゼンテーション等、アクティブラーニングの手法を取り入れた双方向型の講義・演習を行った。また、留学生特有の事情に配慮した授業運営を行った。 |
| 「スタートアップゼミⅠ」（初年次教育）、「実践プロジェクトA」（2年次ゼミ）、「専門ゼミA」（3年次ゼミ）、「キャリアサポート実践講座A」、「数的処理Ⅰ」、および講義「財政入門」、「国際関係論」において実践的な教育を実施。 | 平成31年4月<br>～現在 | 京都先端科学大学経済経営学部で開講している各科目において、コミュニケーション実践、ビジネス調査、グループワーク、プレゼンテーション等、アクティブラーニングの手法を取り入れた双方向型の講義・演習を行った。また、講義科目においてスライド（パワーポイント）とレジュメを用いて講義を行うとともに、グループディスカッションや復習と演習問題を実施することで、学生の知識定着を図った。 |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義「政治学」、「政治学入門」、「国際関係演習」、「国際関係論Ⅰ・Ⅱ」、「国際関係史」、「国際関係学入門」、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」、「貿易・物流概論Ⅰ・Ⅱ」、「貿易実務検定対策Ⅰ・Ⅱ」の各科目において授業レジュメ教材の印刷配布。 | 平成25年4月<br>～平成27年10月 | 日本外国語専門学校で開講した各科目において、毎回の授業のスライドを作成、レジュメ教材を作成・配布。 |
| 「実践プロジェクトA」（2年次ゼミ）、「専門ゼミA」（3年次ゼミ）、講義「財政入門」、「国際関係論」において授業レジュメ教材の印刷配布。 | 平成31年4月<br>～現在 | 京都先端科学大学経済経営学部で開講している各科目において、毎回の授業のスライドを作成、レジュメ教材を作成・配布。 |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 現代中国の軍事制度：国防費・軍事費をめぐる党・政・軍関係 | 単著 | 平成27年1月 | 勁草書房 | | |
| 「新しい戦争」とは何か: 方法と戦略 | 共著 | 平成28年1月 | ミネルヴァ書房 | 川上高司編 | 172-189頁 |
| 中国の対外行動の源泉 | 共著 | 平成29年3月 | 慶應義塾大学出版会 | 加茂具樹編著 | 65-86頁 |
| 「技術」が変える戦争と平和 | 共著 | 平成30年9月 | 芙蓉書房出版 | 道下徳成編 | 41-51頁 |
| 論文 | | | | | |
| ニューロ・セキュリティー『制脳権』と『マインド・ウォーズ』ー | 単著 | 平成28年3月 | 『SFC JOURNAL』Vol.15 No.2、慶應義塾大学湘南藤沢学会 | | 340-359頁 |
| その他 | | | | | |
| （雑誌記事）<br>人民解放軍の財務、費用分担ー軍事財務をめぐる党軍関係ー | 単著 | 平成27年6月 | 『東亜』No.576、霞山会 | | 34-42頁 |
| （口頭発表）<br>China's Research and Development (R&D) and Science, Technology, and Industry for National Defense | 単独 | 平成27年6月 | Peking university China Center for Public Finance | | |
| （口頭発表）<br>中国の公表国防支出と経済成長：因果性と決定要因に関する分析 | 単独 | 平成27年8月 | 兵庫県立大学計算科学連携センター | | |
| （口頭発表）<br>The Institutionalization of Military Command in China: Party-Army Relations in the Era of Xi Jinping | 単独 | 平成27年10月 | International Studies Association | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (雑誌記事)<br>中国の新しい『人民戦争』－習近平政権下の国家安全戦略と軍民融合－ | 単著 | 平成27年10月 | 『インテリジェンスレポート』<br>2015年10月号、インテリジェンスクリエイト | | 69-82頁 |
| (調査報告書)<br>インド太平洋における法の支配の課題と海洋安全保障「カントリー・プロファイル」報告書 | 分担執筆 | 平成28年3月 | 日本国際問題研究所 | | 3-12頁 |
| (一般書)<br>年鑑海外事情2016 | 分担執筆 | 平成28年3月 | 創成社 | 拓殖大学<br>海外事情研究所編 | |
| (調査報告書)<br>平成27年度「災害・海外協力」に関する研究プロジェクト－モンゴル報告書－ | 分担執筆 | 平成28年3月 | 拓殖大学海外事情研究所 | | 12-27頁 |
| (口頭発表)<br>The Use of Military Force in China's Foreign Policy: Complexity and Contradiction between 'military diplomacy' and 'coercive diplomacy' | 単独 | 平成28年6月 | International Studies Association | | |
| (雑誌記事)<br>中国・習近平政権下の『軍事改革』－軍組織再編と反腐敗闘争、強化される党軍関係－ | 単著 | 平成28年7月 | 『インテリジェンスレポート』<br>2016年7月号、インテリジェンスクリエイト | | 17-31頁 |
| (口頭発表)<br>中国の軍備管理・不拡散政策と武器輸出 | 単独 | 平成28年10月 | 日本国際政治学会 | | |
| (雑誌記事)<br>中国・習近平政権下の党軍関係―政治面および財務面における軍事改革を中心に― | 単著 | 平成28年12月 | 『CISTECジャーナル』<br>No.166、2016年11月号、<br>安全保障貿易情報センター | | 68-76頁 |
| (講演)<br>「蜜月」から「対立」へ？<br>―軍事・安全保障面 からみた日米中関係― | 単独 | 平成29年1月 | 同志社大学アメリカ研究所 | | |
| (調査報告書)<br>インド太平洋における法の支配の課題と海洋安全保障『カントリー・プロファイル』研究報告 ［地域研究会(国別政策研究グループ)」 | 分担執筆 | 平成29年3月 | 日本国際問題研究所 | | 5-20頁 |
| (一般書)<br>年鑑海外事情2017 | 分担執筆 | 平成29年3月 | 創成社 | 拓殖大学<br>海外事情研究所編 | |
| (雑誌記事)<br>蔡英文台湾総統誕生後の中台関係の変化がもたらす中国人民解放軍の動向― 高まりつつある軍事進攻・武力統一の可能性― | 単著 | 平成29年5月 | 『インテリジェンスレポート』<br>2017年6月号<br>総合政策研究所 | | 66-79頁 |
| (口頭発表)<br>China as a Garrison State: Civil-Military Integration and National Defense Mobilization | 単独 | 平成29年6月 | International Studies Association | | |
| (口頭発表)<br>How is China's Policy toward North Korea Changing?: With a focus on Political and Security Situation in the Asia-Pacific | 単独 | 平成29年6月 | Association for Asian Studies | | |
| (雑誌記事)<br>中国が推進する『一帯一路』構想の軍事・外交上の戦略的意図―『人類運命共同体』の構築と軍事的プレゼンスの拡大― | 単著 | 平成29年7月 | 『インテリジェンスレポート』<br>2018年8月号<br>総合政策研究所 | | 46-58頁 |
| (インターネット記事)<br>中国の「戦争に至らない準軍事作戦」―POSOWを読み解く | 単著 | 平成30年3月 | SYNODOS | | |
| (一般書)<br>年鑑海外事情2018 | 分担執筆 | 平成30年3月 | 創成社 | 拓殖大学<br>海外事情研究所編 | |
| (口頭発表)<br>中国の「戦争に至らない準軍事作戦」への対応 | 単独 | 平成30年5月 | 防衛法学会 | | |
| (一般書)<br>アジアの安全保障2018-2019 激変する朝鮮半島情勢 厳しさ増す米中競合 | 分担執筆 | 平成30年7月 | 朝雲新聞社 | | 96-99頁 |
| (書評)<br>グレアムアリソン著(藤原朝子訳)「米中戦争前夜－新旧大国を衝突させる歴史の法則と回避のシナリオー」 | 単著 | 平成30年9月 | 国際安全保障学会 | | |
| (翻訳・監修)<br>米国議会への年次報告書 中華人民共和国に関わる軍事・安全保障上の展開2018 | 共同 | 平成30年12月 | 日本国際問題研究所 | 神谷万丈、村野将との共同翻訳・監修 | 全124頁 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

中国における先端科学技術や戦略的新興産業に関する政策、開発動向、および同スタートアップ企業の調査

中国および東アジアの安全保障、危機管理、カントリーリスクなど

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　道和　孝治郎 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | 講義は担当科目に適する複数のテキストを持ち寄って自分でレジュメを作成し、レジュメに沿う形で講義を行った。黒板に拠る板書だけで授業を行うのではなく、レジュメを作成することで事後学習ができるような状況を整えている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Optimal monetary policy in an economy with vertical production and trade: An analysis based on the perspective of local currency pricing | 単 | 2015年11月 | Japan and the World Economy, 36, Elsevier | | 11頁～20頁 |
| The role of local currency pricing in international transmission effects of monetary and productivity shocks in an economy with vertical production linkage and firm entry. | 単 | 2018年4月 | MPRA Paper 86351 | | 1頁～56頁 |
| The role of local currency pricing in international transmission effects of corporate tax reduction in an economy with vertical production linkage and foreign direct investment | 単 | 2018年4月 | MPRA Paper 86394 | | 1頁～48頁 |
| その他(学会コメント) | | | | | |
| 2015年9月19日 | | マクロ・金融ワークショップIN高知(高知大学)において、Optimal monetary policy in an economy with vertical production and trade: An analysis based on the perspective of local currency pricingを報告 | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2005年4月～現在 | 日本経済学会会員 |
| 2005年4月～現在 | 日本金融学会会員 |
| 2018年5月～現在 | 日本経済政策学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　三保　紀裕 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 講義科目における各種ワークの取り入れ | 2011年10月～ | キャリア関連科目において，グループワーク等，各種Workを取り入れることにより，学生自身に主体的に講義内容を考えさせる工夫を図った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 全学共通科目における共通シラバス及び教材作成 | 2012年12月～ | 全学共通科目であるキャリア・初年次教育関連科目の授業設計及び共通シラバス・教材作成を担当した。教育の質を担保すべく，担当する複数の教員と講義内容や授業の進め方について議論しながらシラバス作成および教材作成（PowerPoint資料・配布資料等）を行った。また，授業の進捗状況については適宜情報共有を行い，教育の質保証に努めている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| アクティブラーニングの効果をどう捉えるか？<br>平成27年度京都外国語大学　大学教育再生加速プログラム（AP）シンポジウム　話題提供 | 2016年3月 | アクティブラーニングの教育効果をどのようにして捉えるかという点について，実証データに基づく報告を行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 成績評価に係るルーブリックの開発 | 2012年12月～ | 授業における成績評価に際し，評価指標としてのルーブリックを作成した。本ルーブリックは複数の授業担当教員で共有し，共通した評価を実施している。 |
| 長期インターンシッププログラムにおける実施・運営に係る基本スキームの構築 | 2013年4月～ | 2013年度からスタートした長期インターンシッププログラムの実施・運営に係る基本スキーム（企業での業務に関する情報共有のあり方や評価の仕組み等）を1から作成し，担当者として実施運営に携わった。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 薬剤師のこれから―医療人養成の為の教育とは<br>（第2章「量的データから捉える薬剤師の職業イメージ」担当） | 共著 | 2016年3月 | 晃洋書房 | 伊原千晶（編著） | pp. 23-45. |
| アクティブラーニング型授業としての反転授業［理論編］<br>（アクティブラーニングとしての反転授業における教育効果（1）担当） | 共著 | 2017年5月 | ナカニシヤ出版 | 森　朋子・溝上慎一（編）<br>本田周二・三保紀裕 | pp. 37-53. |
| アクティブラーニング型授業としての反転授業［理論編］<br>（アクティブラーニングとしての反転授業における教育効果（2）担当） | 共著 | 2017年5月 | ナカニシヤ出版 | 森　朋子・溝上慎一（編）<br>三保紀裕・本田周二 | pp. 55-72. |
| 論文 | | | | | |
| キャリア科目の実践を通じた効果測定と課題 | 共著 | 2015年9月 | キャリアデザイン研究，第11巻 | 三保紀裕・神原　歩・<br>木原麻子・湯口恭子 | pp. 137-142. |
| アクティブラーニングとしての反転学習1（研究編） | 共著 | 2015年11月 | 大学教育学会誌<br>第37巻第2号 | 森　朋子・三保紀裕・岩﨑千晶 | pp. 45-48. |
| 新入生を対象とした上級英語クラスにおける反転学習の導入と効果の検討―長崎大学を事例として― | 共著 | 2015年12月 | 京都大学高等教育研究<br>第21巻 | 奥田阿子・三保紀裕・<br>森　朋子・溝上慎一 | pp. 41-52. |
| 大学生活の取り組みと「学生」の役割 | 単著 | 2016年3月 | 京都学園大学<br>『経済経営学部論集』<br>第2号 | | pp. 35-49. |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 〈2015年度課題研究集会　シンポジウム3「アクティブラーニングの効果検証」〉2015年度前期対象授業のプレ・ポストの分析結果 | 単著 | 2016年7月 | 大学教育学会誌<br>第38巻第1号 | | pp. 78-81. |
| Bifactorモデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発 | 共著 | 2016年12月 | 京都大学高等教育研究<br>第22巻 | 溝上慎一・森　朋子・紺田広明・河井亨・<br>三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 | pp. 151-162. |
| 反転授業における予習の仕方とアクティブラーニングの関連 | 共著 | 2017年1月 | 日本教育工学会論文誌<br>第40巻増刊号 | 三保紀裕・本田周二・<br>森　朋子・溝上慎一 | pp. 161-164. |
| 大学生の就労経験と職業観，職業基礎力の関連―日本，アメリカ，韓国，ドイツの国際比較― | 共著 | 2017年3月 | 京都学園大学<br>『経済経営学部論集』<br>第4号 | 山本理恵・三保紀裕・寺田盛紀 | pp. 45-65. |
| アクティブラーニング型授業における予習と外化の効果―マルチレベルSEMによる実証的検討― | 共著 | 2017年12月 | 大学教育学会誌<br>第39巻第2号 | 紺田広明・三保紀裕・本田周二・<br>山田嘉徳・森　朋子・溝上慎一 | pp. 39-47. |
| 〈2017年度課題研究集会　シンポジウム1「アクティブラーニングの効果検証」〉プレ・ポスト調査からみたアクティブラーニング―3年間の調査結果のまとめ― | 単著 | 2018年5月 | 大学教育学会誌<br>第40巻第1号 | | pp. 29-32. |
| 大学生におけるアルバイト観とキャリア選択での自己効力感，キャリア意識の関連 | 単著 | 2018年7月 | 応用心理学研究<br>第44巻第1号 | | pp. 51-63. |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2015/6～2016/12 | 日本キャリア教育学会　近畿，中国・四国地区部会　代表 |
| 2014/4-2015/10 | 日本パーソナリティ心理学会　学会活性化委員会　副委員長 |
| 2015/4～2015/9 | 日本テスト学会第13回大会実行委員会　委員 |
| 2011/11～現在 | 日本キャリア教育学会認定キャリア・カウンセラー(認定登録第187号) |
| | 日本キャリア教育学会会員，日本キャリアデザイン学会会員，大学教育学会会員，日本心理学会会員，日本パーソナリティ心理学会会員，日本応用心理学会会員，日本教育工学会会員，産業・組織心理学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

キャリア教育の効果検証
アクティブラーニングの効果検証
キャリア発達・就職に関する意識調査
インターンシップに関する調査研究

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　李　立栄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ・マルチメディア機器を活用した授業方法(授業用教材のICT活用、パワーポイントのレジュメ作成と配布) | 2008年度～現在に至る | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、神戸大学経済経営研究所、大阪市立大学大学院創造都市研究科における大学院生向けの講義では、PPTのレジュメ作成以外に、金融・フィンテック関連授業の動画とDVDの視聴も行った。<br>本学においては、PPTレジュメ作成と配布のほか、金融、国際経済入門、国際経済学、フィンテックの関連ビデオを視聴も実施した。 |
| ・講義レジュメのパワーポイント活用のほか、授業前の前回講義の復習(15分)、および授業終了前に全体まとめの時間を確保した(10分)。 | 2018年度～現在に至る | 当学担当全科目(金融入門、国際経済入門、国際経済学、国際経済学(院)、実践プロジェクトA・B、キャリアサポート実践講座A・B、専門ゼミA・B・C・D)において、パワーポイント(PPT)を用いて授業を実施した。ただし、一方的な説明を行うのではなく、授業冒頭で前回講義を復習したうえで、本日の課題を解説し、講義終了前の全体総括・質疑討論の時間を設ける。復習⇒新しい課題の取り組み⇒全体総括⇒質疑討論を通じて、学生の理解度を深めていくことを工夫した。 |
| ・毎回授業内で「課題テスト」を実施し、学生の理解度を確認した。さらに、学内の課題管理ソフトを利用し、各自のスマートフォンを活用して講義中視聴した国際貿易、金融関連のビデオの課題・感想文を毎回提出してもらった。 | 2018年度～現在に至る | 「国際経済入門」、「金融入門」の必修科目、「国際経済学」の専門科目において、毎回の授業の最後に20分ほどの時間を取り、当日の授業の内容をまとめたうえで、授業内で「課題テスト」を実施した。また、授業内の課題、ビデオ視聴の感想文と質疑・意見について、次回の授業で紹介・回答する。 |
| 副教材の活用(NHK、BSの経済史、金融史のDVD視聴、池上彰のやさしい金融経済教室のビデオの視聴) | 2018年度～現在に至る | 本学担当全科目(金融入門、国際経済入門、国際経済学、国際経済学(院)、実践プロジェクトA・B、キャリアサポート実践講座A・B、専門ゼミA・B・C・D)において、NHK、BSの経済史、金融史のDVD視聴、池上彰のやさしい金融経済教室のビデオの視聴、最新ニュース記事の話題などを通じて、最新の国際経済・金融の話題と講義内容をリンクさせることで、経済・金融の体系的な知識を学生が身近な話題、最近の社会問題と関連付けるよう努める。さらに、学生は論理的に考え、多面的な物の見方を身に付けるように授業内容を工夫する。 |
| 官公庁・金融機関・産業との連携で実践プロジェクト、専門ゼミの運営 | 2018年度～現在に至る | 実践プロジェクトA・Bのフィールドワークとして、取引所のセミナー参加・見学以外に、京都府庁や地域金融機関等を訪問し、地方政府と各社の地域産業振興への支援の取り組み状況と課題についてヒアリングを実施。<br>専門ゼミA・Bのフィールドワークとして、銀行、証券、取引所の見学を通じて、経済・金融のデジタル変革について学ぶ。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書<br>担当科目の講義レジュメ(PPT)と執筆した書籍・論文・講演資料の一部内容が教科書として使用 | 2008年度～現在に至る | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>特になし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・2018年度全学実践プロジェクト成果報告会・経済学科(李ゼミ・2年生)　優秀賞受賞 | 2018年度 | 京都学園大学・2018年度全学実践プロジェクト成果報告会 優秀賞「クラウドファンディングを活用した地域再生―京都銀行の事例―」 |
| ・AIP(Advanced Internship Program)に参加する学生の取り組み支援、学生面談の助言、企業訪問、委員会の参加支援 | 2018年度 | AIPは、学生(3年生)が在学中に本格的な就業体験を通じて企業実務を学び、自らの可能性を見出せるように、本学と地元・京都の企業が連携して取り組む企業留学プログラムである。当プログラムの委員として、インターン生の面談、インターン先の金融機関訪問などを通じて、学生さんの金融実務の内容を把握し、学生の支援を実施したほか、学生面談、企業訪問を記録し、AIP委員会の情報共用に尽力した。さらに、これまで金融機関系(銀行、証券)のシンクタンクで働いた約17年間のエコノミスト・アナリストの研究経験を活かし、AIP参加の学生に金融の体系的な知識と金融実務を指導し、適切な助言を行った。 |
| ・航空観光プログラム | 2018年度 | 航空観光プログラムは、将来、航空・観光業界をはじめサービス業で働くことを目指す学生(4年間)に対して特別な正課授業を提供すると共に、ANAグループやJALグループ等の企業と提携して、各種講演会・セミナー・イベント等を共同して行うプログラムである。当プログラムの委員として、参加学生に対して経済・金融の基本的なメカニズムと就職活動の基礎知識を教授し、社会で活躍できる人材の育成に貢献した。さらに、これまで金融機関系(銀行、証券)のシンクタンクで働いた約17年間のエコノミスト・アナリストの研究経験を活かし、当プログラムに参加した学生に経済・金融の体系的な知識と金融実務を指導し、適切な助言を行った。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1.『オバマのアメリカ』の第1章「サブプライムローン問題の顛末」 | 共著 | 2009年2月26日 | 東洋経済新報社 | 藤井英彦編著・李立栄・他7名 | 第1章pp.17-46を執筆 |
| 2.『グローバル金融危機後の金融システムの構図』の第1章「世界的危機後の金融システム再構築における課題」，第9章「今後の金融機関経営の課題―金融危機後の欧米金融機関を中心に―」 | 共著 | 2010年4月16日 | （一社）金融財政事情研究会 | （株）日本総合研究所 調査部 金融ビジネス調査グループ編著・李立栄・他8名 | 第1章pp.3-18，第9章pp.167-196を執筆 |
| 3.『金融システムの将来像』の第1章「新たな規制案とその問題点」，第10章「アジアにおける国際展開」，第11章「アジアにおける新しい金融の担い手」 | 共著 | 2010年10月28日 | （一社）金融財政事情研究会 | （株）日本総合研究所編著・李立栄・他13名 | 第1章pp.6-24，第10章 pp.274-316，第11章 pp.327-341を執筆 |
| 4.『金融ビジネスの病態と素因―インセンティブ構造再設計の視点―』の第4章「シャドーバンキングの実態と金融システムの不安定性」 | 共著 | 2013年12月9日 | （一社）金融財政事情研究会 | 大村敬一・高野真編著・李立栄・他8名 | 第4章pp.78-103を執筆 |
| 5.『資本市場の変貌と証券ビジネス』の第5章「中国のシャドーバンキング（影子銀行）の形成と金融システム改革の課題」 | 共著 | 2015年3月31日 | （公財）日本証券経済研究所 | 証券経営研究会編著・李立栄・他15名 | 第5章pp.185-191を執筆 |
| 6.『パーソナルファイナンス研究の新しい地平』の第2章「中国のパーソナルファイナンスにおけるビッグデータの活用」 | 共著 | 2017年11月11日 | （株）文眞堂 | 江夏健一・桑名義晴・坂野友昭・杉江雅彦 監修・パーソナルファイナンス学会著・李立栄・他22名 | 第2章pp.25-53を執筆 |
| 7.『変貌する金融と証券業』の第8章「中国型フィンテックの発展モデルについて」 | 共著 | 2018年4月27日 | （公財）日本証券経済研究所 | 証券経営研究会編著・李立栄・他12名 | 第8章pp.193-240を執筆 |
| 8.『中国の金融経済を学ぶ―加速するモバイル決済と国際化する人民元―』の第10章「中国の金融業の海外展開」 | 共著 | 2019年6月20日 | （株）ミネルヴァ書房 | 小原篤次、神宮健、伊藤博、門闖編著，李立栄・他5名 | 第10章 pp.181-202を執筆 |
| 論文Ⅰ（学術論文） | | | | | |
| 1.「アジア金融危機後における金融システムの再構築」 | 単著 | 2003年2月28日 | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 | | p.1-170 |
| 2.（査読付論文）「シャドーバンキングの金融仲介と規制強化の方向性」 | 単著 | 2013年9月1日 | 『証券経済研究』第83号，日本証券経済研究所 | | pp.55-77 |
| 3.（学会誌論文）「中国のシャドーバンキングの動向と金融システム改革の課題」 | 単著 | 2015年2月25日 | 『証券経済学会年報』第49号別冊（第81回春季全国大会・学会報告論文），証券経済学会 | | p.1-18 |
| 4.（学会誌論文）「中国のシャドーバンキングと金融システム改革の展望」 | 単著 | 2015年5月1日 | 『信用理論研究』，信用理論研究学会 | | pp.83-107 |
| 5. （査読付論文）「中国個人金融における異業種参入がもたらすイノベーションの進展―インターネットを活用した金融サービスの多様化―」（2016年度研究奨励賞受賞論文） | 単著 | 2015年12月25日 | Webジャーナル『パーソナルファイナンス研究』(No.2)，パーソナルファイナンス学会 | | pp.67-85 |
| 6.「人工知能を用いた与信業務の展開とその影響―中国の先進事例分析―」（平成30年度大銀協フォーラム特別賞受賞論文） | 単著 | 2019年2月15日 | （一社）大阪銀行協会大銀協フォーラム | | |
| 7.「中国のシャドーバンキングの金融システムにおける役割と今後の課題―形成過程と機能の比較を通じて―」 | 単著 | 2019年2月18日 | 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 | | p.1－261 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文Ⅱ（機関誌論文） | | | | | |
| 1.「中国における個人金融業務の現状と展望」 | 単著 | 2004年6月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2004年6月号 | | p.1-36 |
| 2.「アメリカ住宅“バブル”を検証する」 | 単著 | 2005年10月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2005年10月号 | | pp.51-62 |
| 3.「サブプライム問題発生のメカニズムとアメリカ経済・金融への影響」 | 単著 | 2008年2月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2008年2月号 | | pp.2-54 |
| 4.「新段階に入ったアメリカ発の金融危機と今後の課題」 | 単著 | 2008年10月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2008年10月号 | | pp.68-116 |
| 5.「世界的危機後の金融システム再構築における課題」 | 単著 | 2009年7月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2009年7月号 | | pp.2-21 |
| 6.「今後の金融機関経営の課題」 | 単著 | 2009年7月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2009年7月号 | | pp.108-127 |
| 7.「国際的な金融規制改革の行方」 | 単著 | 2010年2月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2010年2月号 | | pp.2-24 |
| 8.「ポストクライシスの金融規制改革議論の潮流」 | 単著 | 2010年9月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2010年9月号 | | pp.68-93 |
| 9.「中国の銀行の国際化に向けた動向―加速する海外進出と人民元の国際化への対応―」 | 単著 | 2011年4月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2011年4月号 | | pp.60-93 |
| 10.「ニューノーマル下の経営環境と金融ビジネスの変化」 | 単著 | 2011年10月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所,2011年10月号 | | pp.2-54 |
| 11.「中国のシャドーバンキング（影子銀行）の形成と今後の課題―資金仲介の多様化と規制監督のあり方―」 | 単著 | 2012年7月1日 | 『Business & Economic Review』, 日本総合研究所, 2012年7月号 | | pp.144-174 |
| 12.「中国人民元の国際化の動向と金融自由化の展望」 | 単著 | 2013年7月1日 | 『JRIレビュー』2013 Vol.6,No.7, 日本総合研究所,2013年7月号 | | pp.117-162 |
| 13.「シャドーバンキングの実態と規制強化の方向性」 | 単著 | 2013年7月1日 | 『JRIレビュー』2013 Vol.6,No.7, 日本総合研究所,2013年7月号 | | pp.163-187 |
| 14.「急成長する中国のコンシューマー向けインターネットファイナンス」 | 単著 | 2015年8月1日 | 『野村資本市場クォータリー』 2015 Vol.19-1 Summer, 野村資本市場研究所 | | pp.82-106 |
| 15.「製造業の競争力強化を図る「中国製造2025」の狙いと今後の課題－期待される金融面の支援－」 | 単著 | 2015年11月1日 | 『野村資本市場クォータリー』 2015 Vol.19-1 Autumn, 野村資本市場研究所 | | pp.67-82 |
| 16.「中国の新たな海外展開戦略と銀行・保険会社の動向―加速する海外M&A―」 | 単著 | 2016年5月1日 | 『野村資本市場クォータリー』 2016 Vol. 19-4 Spring, 野村資本市場研究所 | | pp.206-224 |
| 17.「独自の発展を遂げる中国のフィンテック」 | 単著 | 2017年1月1日 | 『国際金融』(1292号), 外国為替貿易研究会, 2017年1月1日新年特別号 | | pp.42-51 |
| 18.「急成長する中国のオンライン・オルタナティブ・ファイナンスと課題」 | 単著 | 2017年2月1日 | 『野村資本市場クォータリー』 2017 Vol. 20-3 Winter, 野村資本市場研究所 | | pp.170-190 |
| 19.「中国で進展するデータ駆動型金融―アリババグループの先進的な取り組み―」 | 単著 | 2018年9月1日 | 『国際金融』(1312号), 外国為替貿易研究会, 2018年9月1日号 | | pp.32-44 |
| 20.「中国の個人金融におけるビッグデータの活用」 | 単著 | 2019年5月25日 | 『季刊　個人金融』 2019年春（調査・研究）, ゆうちょ財団, 2019年5月号 | | pp.94-112 |
| 21.「金融サービスの姿はどのように変わっていくのか　―中国で進展するデータ駆動型金融からの示唆―」 | 単著 | 2019年6月25日 | 『証券レビュー』第59巻第6号, 日本証券経済研究所, 2019年6月号 | | pp.66-83 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表、外部寄稿・テレビ出演） | | | | | |
| 学会発表（招待講演を含む） | | | | | |
| 1. 招待講演「中国シャドーバンキングの動向と金融システム改革の課題」 | 単独 | 2014年6月14日 | 第81回証券経済学会全国大会<br>（2014年度春季大会）・<br>特別セッション（中国の資本市場） | | |
| 2.（査読付）「中国個人金融における異業種参入がもたらすイノベーションの進展―インターネットを活用したサービスの多様化―」 | 単独 | 2014年10月4日 | パーソナルファイナンス学会<br>第15回全国大会 | | |
| 3. 招待講演「中国シャドーバンキングの動向と金融システム改革の展望」 | 単独 | 2014年10月20日 | 信用理論研究学会<br>（2014年度秋大会） | | |
| 4. 招待講演（英語）“The Formation of Shadow Banking in China and Its Future Challenges” | 単独 | 2014年11月19日 | 13th International Conference of the Japan Economic Policy Association in Tokyo | | |
| 5.「中国のシャドーバンキング（影子銀行）の形成と今後の課題」 | 単独 | 2015年5月17日 | 日本金融学会<br>2015年度春季大会・中国の金融セッション | | |
| 6.「急成長する中国のインターネットファイナンスの動向と今後の課題」 | 単独 | 2015年6月6日 | 第83回証券経済学会全国大会<br>（2015年度春季大会） | | |
| 7.「急成長する中国のインターネットファイナンスの動向と今後の課題」 | 単独 | 2016年5月15日 | 日本金融学会<br>2016年度春季大会・中国金融セッション | | |
| 8.「中国の新たな海外展開戦略と銀行・保険会社の動向―加速する海外M&A―」 | 単独 | 2016年9月19日 | 第85回証券経済学会全国大会（2016年度）<br>証券経済学会創立50周年記念大会・<br>銀行の経営行動セッション | | |
| 9. 招待講演「中国のオルタナティブ・ファイナンスとそのリスク」 | 単独 | 2016年10月16日 | 日本金融学会2016年度秋季大会・<br>特別セッション（中国リスクと金融市場） | | |
| 10.「中国におけるフィンテックの発展と今後の課題」 | 単独 | 2017年5月28日 | 日本金融学会2017年度春季大会・<br>金融市場のセッション | | |
| 11.「中国型フィンテックの発展モデルについて」 | 単独 | 2018年7月18日 | 京都学園大学経済経営学部学会・<br>第4回研究会 | | |
| 12.「中国のパーソナルファイナンスにおけるビッグデータの活用」 | 単独 | 2018年10月21日 | 日本金融学会2018年度秋季大会・<br>決済セッション | | |
| 13.「中国型フィンテックの発展モデルについて」 | 単独 | 2018年12月1日 | 第89回証券経済学会全国大会<br>（2018年度秋季大会） | | |
| 外部寄稿 | | | | | |
| 1.「再び膨張する　行き場のない巨額余剰マネー」 | 単著 | 2011年11月14日号 | 週刊エコノミスト 臨時増刊<br>「金ドル 資本主義-どん詰まり先進国経済」 | | pp.31-32 |
| 2.「資本移動　金融規制強化でも止まらない世界のマネー」 | 単著 | 2012年1月3・10日迎春合併号 | 週刊エコノミスト「21世紀型恐慌　2012年」 | | pp.35-36 |
| 3.「シャドーバンキング　巨大金融危機の防止を狙い規制強化へ」 | 単著 | 2013年2月11日号 | 週刊エコノミスト 臨時増刊<br>「図説　日本経済2013」 | | pp.84-85 |
| 4.「国際金融制度改革　新たに浮上したリスクに対応しきれず」 | 単著 | 2014年2月10日号 | 週刊エコノミスト 臨時増刊<br>「図説 日本経済2014」 | | pp.76-77 |
| テレビ・ラジオ出演 | | | | | |
| 1. ブルームバーグ生出演「サブプライム問題と米国経済」 | 単独 | 2008年1月25日放送 | ブルームバーグテレビ | | |
| 2. ラジオNIKKEI アルプス エコノミスト・アイ「サブプライム問題における米国経済の行方、金融業界の動向」 | 単独 | 2008年2月6日放送 | ラジオNIKKEI アルプス エコノミスト・アイ | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| テレビ・ラジオ出演（続き） | | | | | |
| 3. ラジオNIKKEI「世界経済ダイヤル」（三井物産ほか提供）「サブプライムショックの波及メカニズム、モノライン保険会社のリスク、金融資本市場・世界経済への影響」 | 単独 | 2008年3月24日放送 | ラジオNIKKEI「世界経済ダイヤル」 | | |
| 4. ブルームバーグ生出演「モノライン問題について」 | 単独 | 2008年9月5日放送 | ブルームバーグテレビ | | |
| 5. ブルームバーグ生出演「米国投資銀行ビジネスモデルの問題とリスク、米国金融危機と金融安定化政策の行方」 | 単独 | 2008年9月26日放送 | ブルームバーグテレビ | | |
| 6. ブルームバーグ生出演「欧州で相次ぐ銀行の経営悪化と金融当局の支援、欧州金融市場の行方」 | 単独 | 2008年10月9日放送 | ブルームバーグテレビ | | |
| 7. ブルームバーグ生出演「米国金融危機の深層とFRBバランスシート悪化の問題」 | 単独 | 2008年12月4日放送 | ブルームバーグテレビ | | |
| 8. NHK・BS1ワールドニュース「キャッチ！世界のトップニュース」の特集「中国 ネット金融の光と影」に生出演し、「中国特有のネット金融の成長の在り方」について解説した。 | 単独 | 2017年1月23日放送 | NHK・BS1ワールドニュース「キャッチ！世界のトップニュース」の特集 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2009年10月～現在に至る | AEA（The American Economic Association）アメリカ経済学会会員、欧米金融制度の研究 |
| 2009年10月～現在に至る | （公財）日本証券経済研究所「証券経営研究会」メンバー、海外の金融制度・金融ビジネス、金融イノベーションの研究 |
| 2011年4月～現在に至る | 日本金融学会会員、海外金融制度、金融仲介、金融規制改革、金融イノベーションの研究 |
| 2011年4月～現在に至る | 証券経済学会会員、海外金融制度、金融仲介、金融規制改革、金融イノベーションの研究 |
| 2013年5月～現在に至る | 早稲田大学「クレジットマネジメント研究会」メンバー、中国の金融制度・金融仲介、中国の消費者金融、中国の金融イノベーションの研究 |
| 2014年4月～現在に至る | パーソナルファイナンス学会会員、中国の金融制度・金融仲介、中国の消費者金融、中国の金融イノベーションの研究 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

特になし。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　講師 | 氏名　池田　晃彦 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| （1） スタートアップゼミA | 2018年4月～7月 | グループワークを通じたコミュニケーション能力の向上を目的として、毎回の授業でグループ単位での発表を行わせた。また、発表者以外には文書作成能力向上のため、レポート課題を出題した。回収したレポートは添削して一部を匿名で全員に配布し、各自が他の受講生の書き方を参照できるようにした。 |
| （2） スタートアップゼミB | 2018年9月～2019年1月 | スタートアップゼミAにおいて課題であった文章を要約する力、資料を作成する力、およびプレゼンテーション能力を向上させることを目標とし、1冊の本を全員で輪読・発表する経験をさせた。課題図書としては受講生にとって身近なアルバイトを題材とした新書を選択し、各自の体験等を題材に議論を行わせた。 |
| （2） 実践プロジェクトA, B | 2018年4月～2019年1月 | 金融についての理解を深めるため、受講生全員で地方銀行の見学を行った。事前に金融に関する基本的な教科書の輪読・発表を行わせることにより問題意識を持たせ、見学後には説明を受けた内容に関して文献研究と発表を行わせた。 |
| (3) マクロ経済入門 | 2018年9月～2019年1月 | マクロ経済学の理論内容のみでなく、その現実との関わりを実感できるよう、関連する新聞記事等を多く紹介するとともに、実際のデータを分析する課題を出題した。併せて、PCスキル向上のため、エクセルの基本的な操作方法や分析手法についても授業内で解説した。 |
| （2） AIP入門 | 2019年3月 | インターンシップ参加にあたっての目的意識を持たせるため、就職活動の流れを説明してインターンシップの意味を説明するとともに、各自に自己分析とプレゼンテーションを行わせた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| （1）「スタートアップゼミA」講義資料 | 2018年4月 | 共通教材「アカデミックライティング」を補足する形で、レポート作成に関する講義資料を作成した。また、学生から試験対策に関する質問が多かったため、大学での勉強方法一般について解説するレジュメを配布した。 |
| （2）「マクロ経済入門」講義資料 | 2018年9月～2019年1月 | 理解度を確認しながら学習を進められるよう、授業の中盤に行う演習問題を含めたレジュメを作成した。また、新聞記事の縮刷やデータなども多く盛り込むようにした。 |
| (3)「AIP入門」講義資料 | 2019年3月 | 経営学のPDCAサイクルを参考に、インターンシップを通じて自己の問題を発見し、修正していくことの重要性を強調した。また、経済産業省の提唱する社会人基礎力を軸とした自己分析についても重点的に解説した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Trade Balance Volatility and Consumption Structures in Small Open Economies | 単 | 2017年7月 | *Economics Letters* 156, Elsevier | | 114-117 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>Industrial Structures, Collateral Constraints, and Financial Crises in Emerging Economies | 単 | 2015年4月 | 京都大学マクロ経済学研究会<br>（京都大学） | | |
| (ポスター発表)<br>小国開放経済における消費者の借入制約とそのマクロ経済学的影響 | 単 | 2015年5月 | 日本経済学会春季大会<br>（新潟大学） | | |
| （ポスター発表）<br>Industrial Structures, Economic Volatility, and Collateral Constraints in Small Open Economies | 単 | 2016年9月 | 日本経済学会秋季大会<br>（早稲田大学） | | |
| （口頭発表）<br>Trade Balance Volatility and Consumption Structures in Small Open Economies | 単 | 2017年5月 | Student Seminar<br>(The University of Texas at Austin) | | |
| （口頭発表）<br>Learning by Doing and Business Cycles in Small Open Economies | 単 | 2018年1月 | Early Career Researcher Workshop, Western Economic Association International<br>(The University of Newcastle) | | |
| （ポスター発表）<br>Learning by Doing and Business Cycles in Small Open Economies | 単 | 2018年6月 | 日本経済学会春季大会<br>（兵庫県立大学） | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2015年4月～ | 日本経済学会会員 |
| 2018年4月～ | American Economic Association 会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　講師 | 氏名　小川　顕正 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「地方財政論」におけるゲストスピーカーの活用 | 2019年4月～ | 地方財政において、地方議員が重要なステークホルダーであることは疑う余地がないが、議員の活動は一般的にあまり知られていない。生の意見を聞くことで議員の仕事や地方公共団体における政策決定のプロセスをより身近に感じてもらえるよう、京都市会議員、大田区議会議員をゲストスピーカーとして呼んだ。 |
| 「実践プロジェクト」や「専門ゼミ」での「哲学的対話」の導入 | 2019年4月～ | 都立大山高校などで導入されている「哲学的対話」をゼミに取り入れた。「なぜ働くのか」、「どうしてその仕事がしたいのか」など、自身のキャリアに関することをテーマとして取り上げ、就業に対する思いをより具体化することができた。 |
| 「キャリアサポート実践講座」で民間企業の賃金体系を提示 | 2019年4月～ | 民間企業で人事の仕事をしていた経験を活かし、民間企業における賃金体系および昨今の処遇制度見直しの動向について具体的な数字(昇級・昇格に要する年数や各職級ごとの平均的な賃金など)を提示することにより、仕事の具体的なイメージ(特に金銭的な面)を捉えることができるよう、工夫した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 川崎市議会議員として議員インターンシップ受け入れ | 2013年2月～2015年4月 | 川崎市議会議員として議員インターンシップを実施(年に2回、1回につき2か月)、計30名の大学生(1年生～4年生まで)を受け入れた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1. 自治体ガバナンスの定量的評価(学位論文) | 単著 | 2018年3月 | 大阪大学 | | |
| 論文 | | | | | |
| 1. 階層化意思決定法を用いた自治体の歳出配分評価(査読付) | 単著 | 2016年9月 | 日本財政学会編『財政研究』第12巻 | | 187～204頁 |
| 2. 社会資本整備総合交付金が地方自治体の社会資本整備行動に与える影響(査読付) | 共著 | 2018年12月 | 高速道路調査会編『高速道路と自動車』第61巻第12号 | 赤井伸郎 | 19～28頁 |
| 3. 地方公会計整備と財務書類作成基準の選択について～自治体間の横並び意識を考慮した要因分析～(査読付) | 単著 | 2019年5月 | 日本計画行政学会編『計画行政』第42巻第2号 | | 27～33頁 |
| 4. 行政評価の有効活用に向けて(査読付、研究ノート) | 単著 | 2019年9月 | (一財)行政管理研究センター編『季刊行政管理研究』第167号 | | |
| 5. 地方公会計の整備は自治体経営にどのような影響を与えるのか？(口頭発表) | 単著 | 2018年9月 | 日本計画行政学会第41回全国大会 | | |
| 6. 地方議会における行政評価の活用について(口頭発表) | 単著 | 2018年10月 | 日本財政学会第75回全国大会 | | |
| その他 | | | | | |
| 1. 大都市制度(総合区設置及び特別区設置)の経済効果に関する調査検討業務委託報告書 | 共著 | 2018年7月 | 大阪市 | 跡田直澄、真鍋雅史、川瀬晃弘、平賀一希 | 25～35、49～50頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 川崎市議会議員 | 2011年5月～2015年4月 |
| 川崎市農業委員会委員 | 2012年4月～2013年3月 |
| 川崎市都市計画審議会委員 | 2013年4月～2015年3月 |
| 神奈川県後期高齢者医療広域連合議会議員 | 2014年4月～2015年3月 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

古河電気工業株式会社人事部での勤務経験あり。グローバル人事戦略の立案、グローバル人事ビジョンの策定、処遇制度の見直し、自律的なキャリア形成のための社内教育システムの立案などを担当した。また、特例子会社(古河ニューリーフ株式会社)の管理部長として決算管理、法定雇用率拡大に伴う障碍者雇用の拡大などを担当した。

# 経済経営学部　経営学科教員組織


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教　　授 | 安　達　　房　子 | 58 |
| | 大　島　　博　行 | 59 |
| | 翁　長　　朝　英 | 60 |
| | 小　野　里　光　広 | 61 |
| | 倉　田　　致　知 | 63 |
| | 新　長　　章　典 | 64 |
| | 袖　川　　芳　之 | 65 |
| | 藤　川　　義　雄 | 68 |
| | 山　　下　　勤 | 69 |
| 特任教授 | 田　中　　宏　明 | 70 |
| 特別教授 | 上　川　　芳　実 | 73 |
| 客員教授 | 堀　村　不　器　雄 | 74 |
| 准教授 | 右　近　　潤　一 | 75 |
| | 桑　村　テ　レ　サ | 77 |
| | 江　　向　　華 | 78 |
| | 田　中　　秀　樹 | 80 |
| | 中　川　　雅　博 | 84 |
| | 付　　馨 | 86 |
| 講師 | 色　川　　豪　一 | 89 |
| | 呉　　綺 | 91 |
| 助教 | 池　井　　優　佳 | 93 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　安達　房子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 授業運営の工夫 | 2005年4月～ | 「インターネットビジネス論」では板書、プレゼンテーションソフト、ビデオを組み合わせてわかりやすい授業になるようにしている。また、毎回、授業内容に関わるクイズを出題するなど、学生が授業内容に興味をもてるように工夫している。クイズの答えを学生に答えてもらうことによって、受講生とのコミュニケーションをとることもできている。 |
| キャリア形成の支援 | 2010年9月～ | 「女性企業家講座」では、ビジネスの第一線で活躍する女性経営者や管理者を講師に迎え、どのようにして起業したのか、どのようにしてトップになったのか、女性管理職の仕事とは何かなどをご講演いただいている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 新聞記事や情報通信白書などを使って作成した教材 | 2005年4月～ | 「インターネットビジネス論」では、学習をわかりやすくするために新聞記事などを使って作成した教材を毎回配布している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項<br>女性企業家講座のコーディネーター | 2011年4月～ | 「女性企業家講座」で学外講師（経営者、管理者、専門職の方など）を招いた連続講演会（15回中9回）を開き、生きた情報で学生に刺激を与えた。 |
| AIP(Advanced Internship Program)の担当者 | 2014年4月～ | AIP（3か月間の企業実習）参加学生の面談および実習先企業への訪問などを行うことによって、学生がビジネス現場で培った経験を、大学での学びや卒業後の進路選択に生かせるようにサポートしている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ICTを活用した組織変革　―マネジメントの視点からのテレワークの分析― | 単著 | 2016年2月29日 | 晃洋書房 | | 1-190頁 |
| 論文 | | | | | |
| マネジメントの視点からのテレワークの分析 | 単著 | 2019年5月28日 | 『経営学論集第 89 集』自由論題 | | 1-7頁<br>http://www.jaba.jp/resources/c_media/themes/theme_0/pdf/JBM_RP89-E92-2018_F_10.pdf |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>マネジメントの視点からのテレワークの分析 | 単独 | 2018年5月26日 | 管理論研究会 | | |
| （口頭発表）<br>ICTを活用した組織変革　―マネジメントの視点からのテレワークの分析― | 単独 | 2017年5月27日 | 日本経営学会<br>関西部会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1997年10月～現在 | 経営情報学会会員・経営学史学会会員 |
| 1998年6月～現在 | 組織学会会員 |
| 1998年9月～現在 | 日本経営学会会員 |
| 2008年9月～2014年9月 | 亀岡市都市計画審議会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　大島　博行 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「経営戦略論」の授業における副教材の活用 | 2008年4月1日～現在 | 講義の副教材として「NHKスペシャル」「カンブリア宮殿」等のビデオや新聞記事、雑誌記事を活用し、最新の話題と講義内容をリンクさせることで、講義内容を学生が身近な話題と関連付けできるよう工夫している。 |
| パワーポイントにiPadを活用 | 2014年4月1日～現在 | 授業ではパワーポイントを使っているが、単にスライドショーを使うだけではなく、iPadを使って重要な箇所をマークしたり、図を書いたりすることで、より学生に分かりやすい授業となるよう務めている。 |
| 毎回授業内レポートの実施 | 2008年4月1日～現在 | 毎回の授業の最後に10分ほどの時間をとり、本日の授業の内容のまとめや意見、質問等を簡単なレポートとして提出させている。意見や質問については次回授業の最初に回答している。<br>このことで各学生の授業への参加意識を高めるとともに、多人数の授業でも双方向授業に近い効果を実現している。 |
| パソコンを使ったビジネスゲームの活用 | 2011年4月1日～現在 | ゼミで、パソコンを使ったビジネスゲームを取り入れ、グループで競争しながら経営の模擬体験をさせると同時に、経営戦略や会計等の知識が実際の経営にどう活かされるのかを実感させ、学習の動機付けを図っている。 |
| 学生チャレンジショップの運営 | 2010年3月1日～現在 | 学生が主体でビジネスプラン作成・商談・仕入・販売・会計等を行う学生チャレンジショップを開き、講義で学んだ知識が実体験として身につくようにしている。 |
| 企業との連携 | 2010年3月1日～現在 | 上記学生チャレンジショップで、ショッピングモールなどへの催事出店、企業との共同商品開発など、学生が企業と関われる場を積極的に作っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 経営情報学会会員 |
| | 日本情報経営学会会員 |
| | システム監査学会会員 |
| | 中小企業診断士(経済産業大臣登録、登録番号 300608) |
| | システム・アナリスト(経済産業省) |
| | 情報処理システム監査技術者(経済産業省) |
| | 特種情報処理技術者(経済産業省) |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

経営戦略策定、IT戦略策定、経営分析、BPR(業務改革)、IT活用支援、ITベンダー選定、ITプロジェクトマネジメント

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 経済経営 学部 | 職名 教授 | 氏名 翁長 朝英 | 大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無) |
|---|---|---|---|

## Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 質問書方式による理解度の把握 | 2004年4月～現在 | 文系学部の学生は、物理学のような理系科目が不得手のようである。そのため毎回その日の講義のまとめと質問を書かせ、学生の理解度の把握に努め、講義を進めている。 |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

## Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 物理計算ソフトFisicaLabの解法についての一考察 | 単 | 2013年10月 | 京都学園大学<br>経営学部論集<br>第23巻第1号 | | pp.111～128 |

## Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本物理学会会員 |
| | 情報処理学会会員 |

## Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　小野里　光広 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 科目「京都のビジネス」の中小企業診断士協会と連携した運営 | 2015年4月～<br>2019年3月 | 経済経営学部の登録必要科目(登録必要は経済学科のみで経営学科は任意)として設置されている科目「京都のビジネス」は、京都の経営者をゲストスピーカーとして招き、そのビジネスの特徴や魅力を検討する授業であるが、京都中小企業診断士協会と連携・協力し、授業内容を検討構築し、運営を実施した。 |
| 「商法」「会社法」の講義における実践感覚の涵養と学際的工夫・確認テストの実施 | 2015年4月～ | 金融機関における実務経験を活かし、実際の「事業報告」「貸借対照表・損益計算書」「監査報告」「公告」「議決権行使書」などを用いて講義を行い、理論的理解とともに実践感覚の涵養に努めている。また、法律科目ではあるが、経営学科学生の受講科目であることから、金融論や経営実務の基礎的内容を講義に取り込むとともに、関連する社会事件等を新聞で解説するなどし、学際的知見によって学生の理解が進むよう工夫に努めている。毎回の授業では、公認会計士試験「企業法」出題問題の改題などで確認テストを実施し、次回に解説を行うことで理解の定着を図っている。 |
| 「実践プロジェクト」における株式ゲームなどの活用 | 2017年4月～ | 「実践プロジェクト」の授業では、実際の株主総会資料を検討したりした上で、学生達がチームに分かれて日本証券業協会の株式ゲームに参加して模擬売買を行った。また、証券取引所や日本銀行の見学などを通じ、現実社会により近い環境を感得しつつ学修を行った。 |
| 英語によるゼミの実施等 | 2017年4月～ | 「現代社会と法」のゼミでは、貿易取引などを講義しながら、英文契約書の読み方や、ビジネスEメールの書き方を演習した。「会社法」の授業では、パワーポイントの資料は、日本語とともにできる限り英語でも記載し、適宜、英語に関する解説もしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 海外語学研修・海外企業視察の引率 | 2015年8月～ | 2015年8月には英国のシティー・オブ・バースカレッジでの英語研修を引率、2017年2月、2018年2月には、タイのランシット大学での英語研修・企業視察での英語研修を引率し、学生達の英語力向上と国際交流等を支援した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| イギリス会社法における取締役の行為の追認とその限界 | 単著 | 2018年8月 | 国際商事法務<br>Vol.46, No.8 | | pp.1106～1110 |
| オーストラリア会社法における「支払不能取引」回避義務(1) | 単著 | 2018年3月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集第6号 | | pp.59～71 |
| イギリス会社法における取締役の競業規制の展開(2・完) | 単著 | 2017年11月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集第5号 | | pp.87～102 |
| イギリス会社法における取締役の競業規制の展開(1) | 単著 | 2017年3月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集第4号 | | pp.1～14 |
| イギリス会社法における「適正目的ルール」 | 単著 | 2016年3月 | 京都学園大学<br>経済経営学部論集第2号 | | pp.21～34 |
| その他(口頭発表) | | | | | |
| オーストラリア会社法における「経営判断原則」 | 単独 | 2019年2月 | 立命館大学商法研究会<br>2018年度2月例会 | | |
| オーストラリア会社法における「支払不能取引」回避義務 | 単独 | 2018年2月 | 立命館大学商法研究会<br>2017年度2月例会 | | |
| イギリス会社法における取締役の競業規制の展開 | 単独 | 2017年2月 | 立命館大学商法研究会<br>2016年度2月例会 | | |
| イギリス会社法における「適正目的ルール」 | 単独 | 2016年1月 | 立命館大学商法研究会<br>2015年度1月例会 | | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2016年4月～現在 | 亀岡市 行政不服審査会委員（2019年度より会長） |
| 2016年4月～現在 | 京都中部広域消防組合 行政不服審査会委員（2019年度より会長） |
| 2014年4月～現在 | 亀岡市 情報公開・個人情報保護審査会委員（2019年より会長） |
| 2014年4月～現在 | 京都中部広域消防組合 情報公開・個人情報保護審査会委員（2019年より会長） |
| | 日本私法学会会員 |
| | 信託法学会会員 |
| | 比較法学会会員 |
| | 金融法学会会員 |
| | 日米法学会会員 |
| | 法と経済学会会員 |
| | 企業法学会会員 |
| | The Society of Legal Scholars (UK) 会員 |
| | 国際取引法学会会員 |
| | Asian Law and Society Association会員 |
| | The Australian Network for Japanese Law 会員 |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 株式会社の役員の義務と責任に係わる事項 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　倉田　致知 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | 2015年～2019年 | 経営学史、人的資源管理論、生産管理論の講義、ならびに担当のゼミにおいては、学期末に授業評価アンケートを行っている。授業評価アンケートの結果で低い点になった項目についてはコメントし、学生がいつでも見られるように学内情報システムにおいてそのコメント文を掲載している。 |
| | 2015年～2019年 | 学生自身による店舗経営に対して指導を行う正課科目の「チャレンジショップ」の関係教員は、原則として毎月1回開催される担当者会議において、この科目を履修登録している学生の代表者を交えて店舗経営上の問題点や課題の解決を協議している。その教員側の一人として参加し、店舗経営上の事項のみならず本科目のあり方までに及ぶ検討を行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | 2015年～2019年 | 3回生または4回生のゼミでは、若年労働市場の現状と課題について作成されたファイルを各人に送信し、そのファイルとノートパソコンを使用してゼミを行っている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | 2015年9月16日 | 「効果的な中間報告会に向けて」という テーマで大学院経営学研究科の教員対象にFDを行った。質疑応答の最後には、指導員のコメントや総括を必ずとし、また質問やアドバイスを口頭のみならず用紙にて院生報告者に伝えるよう改善した。 |
| | 2017年1月18日 | 「中間報告の開催形態について」という テーマで大学院経営学研究科の教員対象にFDを行った。他大学院における中間報告の時期や報告時間を比較しながら、中間報告の現在の形態を吟味した。報告時間・開催時期等は他の大学院とほぼ変わらず、その点に関する変更の必要性は無いが、税理士試験の時期との兼ね合いから今後も中間報告会の開催時期を引き続いて検討するとした。 |
| | 2017年10月18日 | 「経営学研究科のカリキュラムにおける現状と課題」というタイトルの元、①不開講科目への対応、②経済学研究科・旧法学研究科との関係の観点から報告を行なった。 |
| | 2017年12月20日 | 大学院経営学研究科、法学研究科、経済学研究科の合同FDにおいて、「経済学研究科および経営学研究科のカリキュラム改正の方向性について」の報告を行なった。 |
| | 2018年12月19日 | 大学院経営学研究科FDにおいて「2019年度経営学研究科のカリキュラムについて――DP・CPの観点から――」のテーマのもと報告を行った。DPやCPとの整合性を考慮しながら構成科目の変更を提案した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2015年～2018年の11月と12月 | 学生が自由な発想でビジネスを企画・発表し、その内容を競うビジネス・プランニング・コンテストにおいて、その企画・実行を務めた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| その他 | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本労務学会会員 |
| | 経営学史学会会員 |
| | 組織学会会員 |
| | 日本経営学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　新長　章典 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| Webを活用 | 1999年4月～ | 講義・ゼミナールに関するホームページを作成公開している。 |
| マルチメディア教材活用 | 1999年4月～ | ビデオ(DVD)、プレゼンテーションソフトウェア、WWWを活用し、授業の理解向上を図っている。 |
| CMSを利用した協業体験 | 2006年4月～<br>2019年3月 | CMS(コンテンツ管理システム)を利用して、グループウェア機能、社内ブログ、社内SNSを利用したビジネスの協業体験を実践している。 |
| 携帯情報端末でTwitterを利用した双方向コミュニケーション授業 | 2010年10月～ | 教員は携帯情報端末を用い、学生はケータイ、スマートフォン、携帯情報端末のいずれかを用いてTwitterによる問題提起、意見交換を行い、双方向授業へのTwitterの利用可能性を探索した授業実験を実施している。 |
| タブレット型情報端末による教材提示 | 2010年10月～ | タブレット型情報端末を利用した教材提示、およびプレゼンテーションを実施している。これによって、教材へのリアルタイムな書き込みなども可能となり、電子黒板の機能としても活用している。 |
| ノートPCとBluetoothヘッドセットを組み合わせた音声認識提示 | 2015年4月～<br>2019年3月 | ノートPCとBluetoothヘッドセットを組み合わせた音声認識システムを利用し、授業での話しを即時文字化して提示する。これによって聴覚障害者へのノートテイク支援、会話をノート化しづらい学生の支援ツールとして利用している。 |
| ネットワークストレージを活用したデータ共有・連携システムの活用 | 2015年9月～ | One Driveを利用し、ゼミ生とデータ共有し、ゼミ生は大学PC、家庭PC、スマホを連携させた活用を行えるシステムを運用している。<br>また、併せてOne Noteを活用した情報共有・連携の仕組みを作成し、運用している。 |
| iPod touchとBluetoothヘッドセットを組み合わせた音声認識提示 | 2016年4月～<br>2018年3月 | iPod touchとBluetoothヘッドセットを組み合わせた音声認識システムを利用し、授業での話しを即時文字化して提示する。これによって聴覚障害者へのノートテイク支援、会話をノート化しづらい学生の支援ツールとして利用している。 |
| iPod touchとBluetoothヘッドセットにスマートフォンを組み合わせた音声認識提示 | 2018年4月～ | iPod touchとBluetoothヘッドセットを組み合わせた音声認識システムを利用し、学生のスマートフォンにデータを提示する。これによって聴覚障害者へのノートテイク支援や授業音声をノート化しづらい学生の支援ツールとして利用している。 |
| チームウェアを利用した共同作業演習の実施 | 2018年9月～ | チームウェアを利用して、ゼミナールなどにおいて共同作業を伴う演習において協業作業が円柱できるしかけを利用して、授業外での作業も円滑に、かつ、迅速に確認、アドバイスができるようにして、演習の内容をより高度に進められるように取り組んでいる。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| マルチメディア型オンライン授業ノート | 1999年4月～ | 授業で利用したプレゼンテーションソフトのデータとそれに基づいて別途作成したノートデータ、そして授業の音声データ(MP3)をイントラネット上で2週間ずつ公開している。 |
| スマートフォンLMS教材 | 2011年度～ | 2010年度までのPCを利用したLMSの蓄積を元にスマートフォン及びフューチャーフォンに対応したLMSシステムと教材の作成を行う。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 大学での電子教科書利用の課題 | 単書 | 2013年3月 | 京都学園大学経営学部論集<br>第22巻第1・2号 | | pp135-149 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1989年5月～ | 情報処理学会会員 |
| 1991年8月～ | 教育システム情報学会会員 |
| 1992年1月～ | 日本教育工学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属 | 経済経営学部 | 職名 | 教授 | 氏名 | 袖川　芳之 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| メモを取り集中力を高める授業 | 2019年4月～ | 商学の授業において、ファーストリテイリングの柳井正会長の著作『経営者になるためのノート』を教科書として採用している。この本は、本の周囲の余白を大きく取り、学んだことをメモとして自分で書き込んでいく形式の本である。<br>授業において、レジュメは配布せず、映写したスライド、視聴した動画、教員の解説を手書きでメモをし、そのメモ内容を期末のレポートとしている。これにより、出席していても授業を聴いていない学生やいわゆる"ピー逃げ"の取り締まりにもなり、学生の集中度が高まっていることを感じる。 |
| 動いている現実を教育に取り入れる | 2015年4月～ | 日本経済新聞、日経ビジネスなどから、その週に出た記事の中から授業に関連したものを取りだして紹介する。主に、グラフがるもの、企業の業績に関するもの、企業の提携に関するもの、ブランドに関するものなどを取扱い、その背景も合わせて解説する。これを毎回の授業の冒頭に行い、授業への集中を促す。 |
| 出張オフィスアワー | 2016年5月～<br>2017年3月 | 毎週木曜日の4時限(15:00－16:00)に、光風館の事務室前のテーブルに座り、出入り自由の形で学生の相談や雑談に応じている。<br>徐々に常連の学生が増えつつあり、成果を確信しつつある段階である。 |
| 「マーケティング論」<br>小レポート提出とフィードバックによる学生の個別認識 | 2015年9月～1月 | 京都学園大学経済経営学部経営学科の専門科目「マーケティング論」(2年生　130人)の授業において、毎回授業中に5分程度で記入する小レポートを課した。それを次の授業までに読んで、優秀な回答者を当日の座席表に印をつけることで全員に公表した。これによって以下のようなメリットがあった。<br>・短い文章であっても、毎回書く練習をすることでコミュニケーション能力の向上がみられた。<br>・小レポートの課題が、授業に沿ったものの他、フェルミ推定や科学的な推論問題なども取り入れたので、毎回優秀者が変わり、それぞれの学生の特性に応じた能力があるということをクラス全体で共有した。<br>・学生の顔と名前、考え方の特性の個別把握を把握できることで、双方向の授業がやりやすくなった。 |
| 「キャリアサポートゼミ」<br>ビブリオバトル導入による自己表現とコミュニケーション能力の向上 | 2017年9月～<br>2018年1月 | 京都学園大学経済経営学部経営学科の「キャリアサポートゼミ」(3年生　12人)において、自己分析や自己PRの記述を指導していたが、自分のことを客観的に記述することは難易度が高いと感じ、後半から「ビブリオバトル」を授業に取り入れた。これによって、以下のメリットを感じた。<br>・自己分析を書きあぐねていた学生でも、自分が好きな分野の本については実に生き生きと発表ができていた。学生もやってみて面白いと感じたらしく、追加の対戦も実施した。<br>・自己分析ではまったく出てこなかった個人的な課題や努力が自然と語られ、それを学生にフィードバックすることで気づきを与えた。例えば、優秀な兄と比較されて育ってきて、今自分は何に頑張ろうとしているか、を語った学生もあった。 |
| 「専門ゼミB」<br>流通を知るためのショッピングセンター視察 | 2017年9月～<br>2019年3月 | 京都学園大学経済経営学科経営学部の「実践プロジェクトゼミ」(2年生18名)において、ショッピングセンターが単にモノを売るだけでなく、都市のダウンタウンとしての人々の交流拠点としての役割を持つことを速水建朗『都市と消費とディズニーの夢』を輪読して理解した上で、イオンモール京都桂川への視察を2度にわたって行った。<br>各自が興味のあるお店をショップガイドに○をつけてもらい、どの街区に集中しているか、お店の床の色、照明の色、照明器具のタイプ、入り口の開放感／圧迫感などをチェックし、店舗の空間デザインに対するアドバイスを発表してもらった。以下のようなメリットが得られた。<br>・消費に関心がなかった若い世代だが、人に商品を買っていただくための仕掛けとしくみを知ることで、流通に興味を持ってもらえた。<br>・ショッピングモールがなぜ街並みを模したつくりになっているのかを現実にみて理解しつつ、それが必ずしも成功していない現状も観察した。<br>・何気なく見ていた店舗の風景を意識的に見ることができたという感想を最後の授業で語り合うことができた。 |

| | | |
|---|---|---|
| 学生による授業評価の活用 | 2015年4月～現在 | ・授業評価アンケートの結果を重視し、授業の理解度、授業資料のわかりやすさなどを調整している。<br>・アンケート結果を見て、ある程度のスピードは必要であるものの、1枚のシートを丁寧に説明することが有効なことがわかった。アンケートの中では「この授業が役立っている」「この授業を取ってよかった」という項目を重視している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 特になし | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| オープンキャンパスにおける模擬授業 | 2019年6月16日 | ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ来場の高校生と御父母に対して、「コンビニのくじはなぜ700円以上なのか」を、コンビニを中心として戦後の流通の歴史をふまえて商学の授業として実施した |
| オープンキャンパスにおける模擬授業 | 2018年6月1日 | 高校生にマーケティングの楽しさと現実のビジネスにどのように役立っているのかを身近に説明するために「コンセプト」をテーマとして取り上げ、コンセプトによってどのようにビジネス展開が変わるかを説明する授業を行った。 |
| 経済教育に関する研究 | 2005年1月～<br>2007年3月 | 内閣府経済社会総合研究所（ESRI)にて経済教育普及のための研究を担当。米国、アジアの経済教育関係の省庁、団体へのヒアリング、日本において、金融庁、日銀他の組織・団体と委員会を開いて日本における経済教育の可能性を検討した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| バブル後25年の検証 | 共著 | 2016年4月 | 東京書籍 | 竹中平蔵編著 | p312-343 |
| 『東日本大震災の教訓』<br>消費行動　自粛と萎縮からニューノーマルへ | 共著 | 2011年12月 | 東洋経済新報社 | 竹中平蔵・船橋洋一編 | p301-343 |
| 幸福の方程式 | 共著 | 2009年9月 | ディスカヴァー・<br>トゥエンティ・ワン | 山田昌弘+電通チームハピネス | p66-218<br>（第2章～第6章） |
| 線と面の思考術 | 単著 | 2008年7月 | 大和書房 | | |
| クリエイティブ頭のからくり | 単著 | 2007年4月 | 朝日新聞社 | | |
| 平成拡大家族<br>ー団塊と団塊ジュニアの家族学 | 共著 | 2005年3月 | 電通 | 花島ゆかり・森住昌弘 | p12-99<br>p238-294 |
| 論文 | | | | | |
| 効率化から満足化へのマーケティングシフト | 単著 | 2018年5月 | 日本メディカルセンター<br>臨牀透析 2018 Vol.34 No.5 | | 巻頭論文<br>10頁分 |
| 低欲望社会における消費社会の変貌に関する研究～「欲望」の構造から読み解く消費の多様化～ | 単著 | 2016年9月 | 嘉悦大学<br>（博士論文） | | |
| 幸福と消費の未来 | 単著 | 2016年9月 | 経済社会学年報Vol. 38 | | p11-24 |
| 幸福マーケティングの最前線 | 単著 | 2012年3月 | 「季刊マーケティングジャーナル124」日本マーケティング協会 | | 巻頭論文<br>p4-15 |
| 新・家族主義の台頭と消費のゆくえ | 単著 | 2009年6月 | 「季刊マーケティングジャーナル113」日本マーケティング協会 | | p22－35 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| かじやますみこ『健康長寿は靴で決まる』(文春文庫)に対する書評 | 単著 | 2019年2月 | ホライズン2019年2月号<br>日本マーケティング協会 | | |
| ステファーノ・バルトリーニ著『幸せのマニフェスト――消費社会から関係の豊かな社会へ』に関する書評 | 単著 | 2018年11月 | 週刊書評　図書新聞 | | |
| (連載)<br>国民年金の広場 「消費生活のフロンティア」<br>連載(季刊)<br>連載26(2019年5月現在) | 単著 | 2013/4/1～現在 | 国民年金基金連合会 | | p22－24 |
| (講演)<br>幸福度に関するパネルディスカッション | | 2012年3月 | 内閣府　経済社会<br>総合研究所主催 | | |
| (講演)<br>1. Asia-Pacific Conference on Measuring Well-Being and Fostering the Progress of Societies | | 2011年12月 | OECD、内閣府、ADB主宰 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本広告学会　産業部会理事 | 産業部会理事(2007.10～2013.9)、学術・交流委員会委員(2016.10～現在) |
| 経済社会学会 | 2015.4～現在 |
| 多摩美術大学　非常勤講師 | 2003.4～2014.3「ビジュアル・コミュニケーション論」担当 |
| 甲南女子大学　非常勤講師 | 2017.4～2017.8 「広告論」担当 |
| 慶應義塾大学大学院　非常勤講師 | 2007.4～2017.8 「高齢社会デザイン論」担当 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

幸福度、社会の豊かさなどに関する指数開発

消費増税に関する企業、消費者の対応

社会のトレンド、ヒット商品

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　藤川　義雄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| パワーポイントを活用した講義 | 2007年～ | 講義はパワーポイントを活用したプレゼンテーションを中心に進め、教室内を移動し学生の意見を聞きながら展開できるように、ワイヤレスマウスを活用している。 |
| 講義レジュメの公開 | 2007年～ | 講義レジュメはPDFファイル化して学内サーバー上に公開し、学生の自主的な事前・事後の学習を促している。<br>簿記の講義資料については、サーバー上で受講者以外にも閲覧可能なところにパワーポイントファイルをそのまま公開し、自主的な学習に利用してもらっている。 |
| 学生参加型授業 | 2000年～ | 一方的に講義するのではなく、クイズを出して答えさせたり、学生に自分の意見や質問を発表させる機会を設けている。自主的な発言を促すため、発言者にはボーナスポイントを付与している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | 2019年3月3日 | 第24回FDフォーラム報告(立命館大学)「学生チャレンジショップ「京學堂」をハブとする学部間協働による地域連携」 |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 全学FD研修会報告『事例報告：良い授業を創るために－授業の中で工夫していること－』 | 2015年 | 2014年度経営学部ベスト・ティーチャー賞受賞者として、講義の進め方で工夫している点を報告した。 |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 学生チャレンジショップ「京學堂」を通した体験型学習の成果と課題 | 単 | 2015年3月 | 『京都学園大学総合研究所所報』第16号 | | pp.13-20 |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1994年～ | 日本経営分析学会会員 |
| 1995年～ | 日本会計研究学会会員 |
| 1998年～ | 国際会計研究学会会員 |
| 2002年～ | 日本会計史学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

財務諸表分析を中心とした経営分析

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　教授 | 氏名　山下　勤 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)<br>「科学の歴史」指導法の工夫 | 2015年4月～ | 主として科学史の基礎的知識を持たない文系・理系の学生を対象とする「科学の歴史」の授業として、基本事項から徐々に無理なく授業内容を理解できるよう工夫している。また、自然科学だけを扱うのではなく、人文科学、社会科学の歴史についても解説し、幅広い「科学の歴史」全般の知識が得られるよう配慮している。さらに、科学哲学、科学基礎論についても解説し、学生各自が「科学とは何か」、「科学的思考とは何か」について理解を深められるよう配慮している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Oxford Handbook of Science and Medicine in the Classical World. | 共 | 2018年 | Cary and New York: Oxford University Press | Paul Keyser and John Scarborough (eds.) | pp. 95-104 |
| 論文 | | | | | |
| Sanskrit Medical Scholasticism, Jajjata's Nirantarapadavyakhya and Other Commentaries on the Carakasamhita, Cikitsasthana 2.1 | 共 | 2019年 | Electronic Journal of Indian Medicine. Vol.10, No.1 | Kenneth G. Zysk and Tsutomu Yamashita | pp. 1-113 |
| Memoirs of Vaidyas. Special Edition. | 共 | 2017年 | Electronic Journal of Indian Medicine. Vol.9, No.3 | Tsutomu Yamashita, P. Ram Manohar | pp. 63-80 |
| Memoirs of Vaidyas The Lives and Practices of Traditional Medical Doctors in Kerala, India (8) | 共 | 2015年 | Electronic Journal of Indian Medicine. Vol.8, No.2 | Tsutomu Yamashita, P. Ram Manohar, Madhu K. Parameswaran | pp. 33-60 |
| Theory and Practice of Traditional Medicine in India (1) – A Case of Contact with Spider Venom – | 共 | 2015年 | Electronic Journal of Indian Medicine. Vol.8, No.3 | Tsutomu Yamashita, Madhu K. Parameswaran | pp. 61-79 |
| その他(口頭発表) | | | | | |
| Anatomical Knowledge in Sanskrit Medical Texts | 単 | 2018年 | Reconsidering the early history of Yoga and Samkhya (京都大学) | Tsutomu Yamashita | |
| Theory and Practice of Traditional Medicine in India | 単 | 2016年 | International Seminar on the Classical Texts of Ayurveda Ⅱ (コペンハーゲン大学) | Tsutomu Yamashita | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本医史学会会員・日本科学史学会会員 |
| | 日本印度學佛教學会会員・日本南アジア学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　田中　宏明 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）<br>新英語プログラムのルーブリック及び評価基準の作成 | 2019年4月～2019年7月 | 2019年度より始まった新英語プログラムのルーブリックを作成しカリキュラムをデザインした。その作業に伴い授業評価方法や授業運営方法もマニュアル化した。 |
| 「総合英語A」における事前事後学修での試み | 2018年4月～2018年7月 | 今年度より「総合英語」上級クラスを担当することになったので、毎授業後に翌週のChapterに関する課題を京学なびに提出させ、事前学修時間を増やすと同時に復習課題も与え事後学修の時間も増やしている。 |
| グローバルコース・ホームルームの運営 | 2017年4月～2018年3月 | 新たに設置されたグローバルコースの学生向けのホームルームにおいて、TOEFLと英検を中心に英語力の強化を行った。毎回インプットした知識をアウトプットさせることにより、知識の定着を図った。英検はかなりの学生が2級に合格することができた。 |
| 「スタートアップゼミB」におけるアクティブラーニングの試み | 2016年9月～2017年3月 | 経営学科生向けのゼミであるので、企業研究を行った。分かりやすいように、他社比較の手法によりたとえばコンビニ系列比較、ファミレスチェーン比較、家電量販店比較、カフェ比較などをグループで纏め、プレゼンテーションを行った。 |
| 「総合英語Ⅰ」「総合英語Ⅱ」における京学なびの活用 | 2016年4月～2016年7月<br>2016年9月～2017年3月 | 健康医療学部看護学科の「総合英語1」において、学生の個別指導を強化するため、京学なびによる「課題確認クイズ」の送受信を通じてコメントによる指導を行い、学期末には学力の底上げが見られるようになってきた。また、授業時間内では処理できない質問にも回答することができた。 |
| 「スタートアップゼミA」におけるアクティブラーニングの試み | 2016年4月～2016年7月 | 学生に海外の事象に関して関心をいただかせるために、一人1国を選んでプレゼンによる情報提供を行わせ、フロアと意見交換を行って知識を深めさせた。 |
| 「スタートアップゼミB」におけるアクティブラーニングの試み | 2015年9月～2016年3月 | 1回生秋学期科目であるので、大学における専門教育入門と位置づけ、ビジネスに関する事故調査と口頭発表を行わせたあと、グループ活動として同業他社比較の調査を行わせ、プレゼンテーションの形で発表させた。いずれも入念に調査を行い、その結果をグラフや図表などに仕上げ、発表に繋げることができた。 |
| 「英語プロジェクト修了研究」における修了作品制作と発表 | 2015年9月～2016年3月 | 「英語プロジェクト修了研究」受講者全員が、小説の翻訳、歌詞の翻訳、日韓の文化比較などを纏めて卒業研究作品を完成させ、他の英語プロジェクト生を招いて作品紹介を兼ねてプレゼンテーションを行った。その模様は本学のホームページでも紹介された。 |
| 「ビジネス英語」におけるプレゼンテーション能力の向上を図る試み | 2015年4月～2016年3月 | 「ビジネス英語」の授業ではビジネスで使用する英語表現を学修し、それを活用できる能力の育成を図った。最終的にビジネスモデルを作成してプレゼンテーションを行った。 |
| 「チャレンジショップ入門」における協働教育と実践 | 2015年4月～2016年3月 | 「チャレンジショップ入門」では、学内ショップである京學堂での販売等を通じてビジネス知識の修得と実践を行い、それを検証するために京都ファミリーおよびイオン京都西店で販売を行った。いずれも成功裏に終わった。イオン西店での販売では、全国のイオングループから表彰を受けた。 |
| 「総合英語1」における英語必修授業と京学なびの活用 | 2015年4月～2015年7月 | 今年度新設された健康医療学部看護学科の「総合英語1」の担当にあたり、必修科目であるため、優秀な学生の能力を伸ばすことと共に英語運用能力のさらなる向上が必要な学生のために、毎授業課題の提出を求め京学なびを活用して提出およびコメントを各人に送っている。これにより、次第に学力の底上げが見られるようになってきた。 |
| 「英語インテンシブリーディング」におけるアメリカ文化教育 | 2015年4月～2015年7月 | 英語プロジェクト科目である「英語インテンシブリーディング」の授業で、英語の精読を通じてアメリカ文化への理解を促している。毎回、練習問題だけでなくディスカッショントピックを選定して、アメリカ文化と日本文化の対比について考えさせ、それを英文レポートの形で提出させ、次回の授業でOHPを使って提示してみんなで意見交換を行っている。これにより、受講生のアメリカ文化への理解を促し、ディスカッションへとつなげている。 |
| 「ビジネス英語1」における会話能力とプレゼンテーション能力の向上を図る教育 | 2015年4月～2015年7月 | 今年度新設された大学共通科目で、ビジネス分野で活用される英語力を養成するため、毎回の授業に個人作業、ペアワークやグループワークを取り入れ、いろいろなビジネスシーンを想定したコミュニケーション能力、プレゼンテーションe-mail等のライティング能力の向上を図っている。この活動の結果、学生同士が知り合いになることで、より間違いを恐れずに外国語で発話できる雰囲気が生まれ、好評を得ている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 「英語ゼミVI」におけるレポート指導 | 2015年4月～2015年7月 | 「英語ゼミVI」では秋学期開講の「英語プロジェクト修了研究」を見据え、社会的事象に対する個人の知識と思考方法を育成するため、毎回の授業に沿ったレポートを提出させ、次の授業でOHPを用いて英語の添削と共に内容に関して全員で意見交換を行っている。それにより、より深い知識の獲得と全員での課題共有を可能にし、その後のプレゼンテーションへとつなげている。学生たちのライティング能力はもとより物事をロジカルに考え、発表する能力が向上してきた。 |
| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）続き | | |
| 「チャレンジショップ入門A」における協働教育 | 2015年4月～2015年7月 | 今年度新設された科目ではあり、学内に設けた学生ショップ京學堂におけるマーケティングや会計知識を実習を通じて修得する科目である。最近の知識偏重に対して、学生たちに協働作業を通じて経験知（暗黙知）を修得させるため、開店および閉店時のミーティングや商品、マーケティング、会計部門のリーダー会議にも参画して、知識を全体で共有できるように努めている。その結果、京學堂の売り上げも順調に伸び、学生たちの商品への知識や、販売姿勢もかなり向上した。また、学生たちだけのミーティングでも、意見交換が活発に行われるようになってきた。 |
| 「英語文化研究B」 | 2014年9月～2015年3月 | アジア諸国の現状と課題をDVDを見ながらディスカッションする授業を行った。英語リスニング力の向上と異文化理解を合わせ、英語運用能力を高めることを目的とした。最終授業では、それぞれの学生が自ら選んだ国ぐにの現状を課題に関するプレゼンテーションを行い、授業で学んだ視点から、分析を行った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>私立大学情報教育協会FD/ICT委員会委員長として ICT 利用による教育改善研究発表会においてファシリテータを務める。 | 2019年8月 | 私立大学情報教育協会主催の「教育の質的転換を目指すICT利用：ICT 利用による教育改善研究発表会」の発表論文審査および当日のファシリテータを務め、教育の質的向上について議論する。 |
| 私立大学情報教育協会FD/IT委員会委員長としてファシリテータを務める。（予定） | 2018年12月 | 本年度12月に開催される私立大学情報教育協会主催の英語学、法律学、政治学、国際関係学、コミュニケーション関係学アクティブ・ラーニング討論集会においてファシリテータを務める予定である。 |
| 私立大学情報教育協会主催の平成27年度ICT利用による教育改善研究発表会の司会および審査委員を務める予定である。 | 2018年8月 | 東京理科大で開催された「平成28年度ICT利用による教育改善研究発表会」において一次審査、当日の司会進行、その後の二次審査に審査委員として加わる予定である。 |
| 私立大学情報教育協会FD/IT委員会委員長としてファシリテータを務めた。 | 2017年12月 | 早稲田大学において開催した私立大学情報教育協会主催の英語学、コミュニケーション学アクティブ・ラーニング討論集会においてファシリテータを務めた。 |
| 私立大学情報教育協会主催の平成27年度ICT利用による教育改善研究発表会の司会および審査委員を務めた。 | 2017年8月 | 東京理科大で開催された「平成28年度ICT利用による教育改善研究発表会」において一次審査、当日の司会進行、その後の二次審査に審査委員として加わった。 |
| 私立大学情報教育協会主催の平成27年度ICT利用による教育改善研究発表会の司会および審査委員を務めた。 | 2016年8月 | 東京理科大で開催された「平成27年度ICT利用による教育改善研究発表会」において一次審査、当日の司会進行、その後の二次審査に審査委員として加わった。 |
| 私立大学情報教育協会FD/IT委員会委員長としてファシリテータを務めた。 | 2016年3月 | 東京アルカディア市ヶ谷において開催した私立大学情報教育協会主催の英語教育アクティブ・ラーニング討論集会においてファシリテータを務めた。 |
| 私立大学情報教育協会FD/IT委員会委員長として「アクティブ・ラーニング授業モデルの教育方法と評価方法」について纏め、討論集会を開催した。 | 2015年3月 | 東京早稲田大学で開催した私立大学情報教育協会主催の英語教育アクティブ・ラーニング討論集会に向けてポイント整理や事例研究を行い、当日は他2名のパネリストとともに発表と進行役を務めた。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 右京区まちづくり支援制度での採択 | 2016年6月 | 右京区まちづくり支援制度に京學堂プロジェクトとして水尾および宕陰地区産品の販売を通じた地区活性化を提案し採択された。 |
| 右京区まちづくり支援制度での採択 | 2015年6月 | 右京区まちづくり支援制度に京學堂プロジェクトとして水尾地区産品の商標登録を提案し、1位で採択された。 |
| 「実用英語技能検定試験」への関与 | 2008年～現在 | 本学を会場とした「実用英語技能検定試験（英検）」の実施責任者および面接試験実施委員として英語検定試験の受験者増加と英語運用能力の向上に貢献している。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他（学会報告） | | | | | |
| 私立大学情報教育協会主催の学系別対話集会においてコーディネーターを務めた。 | | 2018年12月23日 | 公益社団社団法人<br>私立大学情報教育協会 | | |
| 学系別FD/ICT活用研究委員会<br>対話集会コーディネータ | | 2017年12月23日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |
| ICT利用による教育改善会議<br>司会及び審査委員 | | 2017年8月9日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |
| 学系別FD/ICT活用研究委員会<br>対話集会コーディネータ | | 2016年12月25日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |
| ICT利用による教育改善会議<br>司会及び審査委員 | | 2016年8月9日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |
| 英語教育におけるアクティブ・ラーニング研究集会パネリスト | | 2016年3月21日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |
| 英語教育におけるアクティブ・ラーニング研究集会パネリスト | | 2015年3月6日 | 公益社団法人私立大学<br>情報教育協会 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2010年4月～現在 | 公益法人　私立大学情報教育協会ICT利用教育改善発表会運営委員（選考委員も兼ねる）（2013年4月～現在に至る） |
| | 公益法人　私立大学情報教育協会FD/IT委員会委員長（2012年4月～現在） |
| | LET（外国語教育メディア学会）会員 |
| | 公益法人　私立大学情報教育協会サイバーキャンパス・コンソーシアム運営委員 |
| | 龍谷大学英語英米文学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

公益社団法人私立大学情報協議会英語教育FD/IT活用研究委員会委員・CCC（サイバーキャンパス・コンソーシアム）会員として、電子著作物相互利用事業への参加を通じて、共同研究に参加し、また技術相談に協力している。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　特別教授 | 氏名　上川　芳実 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | 従来、プリント講義および授業内の小レポートで進めてきたが、すべての講義科目でパワーポイントを導入し、毎年改善してゆくことにした。本年は、プリントの文章を完結なものに整え、パワーポイントは可能な限り「問いかけ型」のものに組み直し、その日の講義の問題点や課題を冒頭に示すようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | 今の学生は教科書を指定しても書物はまず買わないので、講義科目はオリジナルのプリントを作成して配布している。プリントは従来のB4サイズをA4サイズに切替え、文章もやさしく、簡潔なものに整え直している。このほか、映像や写真、そして図表を収集し、パワーポイントに収録して披露している。本年より抗議は全て太秦校地となったが、教室のPC環境が区々で、パワーポイントによる教材提示も複数用意し、割り当てられた教室に即して使い分けることにしつつある。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | 平成15年度以来、硬式野球部長を勤め、野球部員の教育に力を入れ、彼らが卒業し、社会人として自立出来るよう、生活指導や就職指導に全力を注いでいる。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 京都府における企業勃興 | 単 | 2012年3月 | 『京都学園大学経営学部論集』第21巻第2号 | | pp.107-122 |
| 資料 | | | | | |
| 京都銀行(1894～1923)創立関係史料 | 単 | 2018年11月 | 『京都学園大学経済経営学部論集』第7号 | | pp.27-48 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　客員教授 | 氏名　堀村　不器雄 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | (有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 資本取引等をめぐる会計と税務(改訂新版) | 共著(監修) | 2011年1月1日 | 清文社 | 日本公認会計士協会京滋会編 | pp.1～676 |
| 会社税務事例300選(改訂版) | 共著 | 2013年4月1日 | 清文社 | 日本公認会計士協会京滋会編 | pp.2～12、pp.486～496 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2010年4月～ | 事業承継学会　理事 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

公認会計士、税理士として長年にわたる豊富な実務経験があり、会計・税務分野の経営相談を行う能力を有している。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属 | 職名 | 氏名 | 大学院における研究指導担当資格の有無 |
|---|---|---|---|
| 経済経営　学部 | 准教授 | 右近　潤一 | (有)・無) |

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 学生の出席を促し、集中して講義を聴き、講義をまとめて考え直すため工夫 | 2007年4月～ | 各時間の最後に、その日の要点につき極簡単な質問をし、答えを書かせる。このことにより、①講義参加者の理解度を測るとともに、各参加者の参加の講義への参加度を測る。講義に関する質問も記入させる。質問への回答、代表的な回答の誤りや修正点を明示し、次回講義にて資料を配布するなどして説明する。②質問事項をその日の講義内容のまとめとなるようにし、当日の内容を振り返りつつ、答えさせる。そのことにより当日の内容を接続して理解することができる。 |
| 講義において、学生自らも考えるための工夫 | 2015年4月～ | 200名程度の受講者がある講義でも、小さな質問を複数人に対して行い、学生自らも必然的に考えられるように工夫している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 渡邊博己・右近潤一<br>『法学ナビ16の物語から考える』(北大路書房) | 2018年5月1日発行 | 本学で開講している「法学」用の教科書として執筆。「六法とは何か」「法律が憲法に違反すると」「契約は守らなければならないか」「お父さんと呼べるのはなぜ」「相続のルールはなぜ必要か」「AIは法の夢を見るか」を執筆。<br>可能な限り新しい話題を取り入れ、一般教養科目である法学の受講生にも興味を持って呼んでもらえる内容にすることを心がけた。 |
| 田井義信監修渡邊博己編『ユーリカ民法2 物権・担保物権』(法律文化社、2018) | 2018年4月1日発行 | 第8章所有権および第9章用益物権部分担当(94頁から137頁)。<br>経済経営学部で担当する講義の教科書として執筆。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 学内のFD研修会における講義方法等の発表 | 2015年9月16日 | 15年度より全学開講科目を担当し、講義室として太秦キャンパスのみらいホールが割り当てられた。同ホールは利用しづらいとの声があるとのことで、利用者の一人として利用上の工夫及びポイント並びに問題点を報告した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| なし | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 書面不備に基づくクーリング・オフ権の行使を妨げる事由 | 単 | 2017年11月 | 経済経営学部論集 | | pp.69-85 |
| クーリング・オフの方式緩和に向けた一考察 | 単 | 2017年2月 | 同志社法学68巻7号 | | pp.2809-2829 |
| 返品制度のあり方：比較法的検討、平成20年改正の検証 (特集 通信販売) | 単 | 2016年3月 | 現代消費者法30号 | | pp.25-34 |
| その他(判例研究) | | | | | |
| 特定商取引法5条の「法定書面」における商品名の記載の程度<br>(京都地判平28・10・11) | 単 | 2018年6月 | 現代消費者法39号 | | pp.91-99 |
| その他(資料) | | | | | |
| ドイツ債務法現代化の経験――日本民法改正への示唆を得るために | 共 | 2016年2月 | 川角由和、中田邦博、潮見佳男編『ヨーロッパ私法の展望と日本民法典の現代化』(日本評論社、2016) | 中田邦博、寺川永監修<br>カライスコス アントニオス、寺川永、右近潤一 | pp.253-263 |
| ドイツ債務法現代化の経験(1)日本民法改正への示唆を得るために | 共 | 2015年 | 関西大学法学論集 64巻5号 | 中田邦博、寺川永監修<br>カライスコス アントニオス、寺川永、右近潤一 | pp.441-451 |
| ドイツ債務法現代化の経験(2・完)日本民法改正への示唆を得るために | 共 | 2015年 | 関西大学法学論集 64巻6号 | 中田邦博、寺川永監修<br>カライスコス アントニオス、寺川永、右近潤一 | pp.258-261 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2002年5月～ | ドイツ法律行為論研究会会員（現在にいたる） |
| 2002年5月～ | 日本私法学会会員（現在にいたる） |
| 2004年4月～ | 比較法学会会員（現在にいたる） |
| 2009年11月～ | 消費者法学会会員（現在にいたる） |
| 2014年4月～2016年3月 | 京都府南丹保健所感染症診査協議会委員（法律に関する学識経験者） |
| 2016年4月～ | 京都府中部感染症診査協議会委員（法律に関する学識経験者）（現在にいたる） |
| 2019年1月～ | 亀岡市情報公開・個人情報保護審査会委員（現在に至る） |
| 2019年1月～ | 京都中部広域消防組合情報公開・個人情報保護審査会委員（現在に至る） |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 消費者の保護に関する法律問題 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　桑村 テレサ | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

## Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1 学生による授業評価の活用 | 平成18年4月～現在に至る | 毎年2回、FDアンケートを実施し、授業内容、教師の熱意、授業の工夫、学生の興味等において、毎回90%以上の学生から高評価をもらっている。具体的な意見に即して、授業の改善を行っている。 |
| 2「学生中心教育」の展開 | 平成18年4月～現在に至る | 英語は個々の積極的な授業参加と授業内での英語運用によって向上が期待される。そのためにカール・ロジャーズの「学生中心教育」の理論を展開した授業を行っている。それは教師中心ではなく学生中心である授業である。人は、尊重され、あるがままを受け入れられていると感じれば、素直な自己を表現するため、学生一人一人を尊重し、受容し、常に褒め、間違いを恐れる必要のない教室空間を作り、学生に安心感を与え、自信を持たせ、学生の自由な発言を引き出すとともに、主体的な授業参加を促進するというヒューマニスティックCLTである。 |
| 3 英語による英語の授業 | 平成18年4月～現在に至る | 英語による英語の授業を行ってきた。学生が、私の述べる英語を模倣して自分の意見を言えるようにするため、話す内容やスピードに配慮している。また、そうすることによって、英語が次第に多く聞き取れるようにしている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

## Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 高い価格設定にも関わらず、なぜスターバックは中国で成功してるのか | 単著 | 2018年1月 | 京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター　ニュースレター | | pp. 7-9 |
| Academic Issues and Solution Proposal in a Plurilingual EFL Class in Japan | 共著 | 2017年4月 | IAFOR Dubai 2017 Educating for Change East Meets West: Innovation and Discovery | Teresa Kuwamura, Akiyoshi Suzuki | pp. 57-70 |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

## Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |
| | |

## Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　江　向華 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ・ アクティブ・ラーニングの積極的実施 | 2015年～ | 授業ではグループワークなどを実施し，アクティブラーニングの積極的な実施を心掛けてきた。 |
| ・ 学生の授業外における学習促進のための取り組み | 2015年～ | (1) 前任校では，1・2年生の教養ゼミの学生に対しては,企業の 現場を知ってもらうため,企業への工場見学及び企業訪問を実施してきた。<br>(2) 前任校では，3・4年生の専門ゼミの学生に対しては,毎年行われる経営学合同ゼミ合宿(日本国内12大学前後)にゼミ生と一緒に参加し,課題発表をしてもらい,他大学との交流を促した。<br>(3) 前任校では，企業の役員を毎年お招きし，特別講義をして頂いた。さらに，4年生を対象に，毎年就職懇談会を開催した。<br>(4) 前任校では，課題・卒業論文作成のため，ゼミ生を連れて岡山や近辺の企業を対象にインタビュー調査を実施してきた。 |
| ・ 学生の授業への反応を詳細に理解するための工夫 | 2015年～ | 全ての授業において，不定期に小テストを実施してきた。テストの出題以外に，授業に関する疑問や，不明点，感想，要望などを書いてもらい，学生の授業に対する反応を読み取り、授業への反省と改善に役立てている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ・講義で教科書として使用している著書 | 2016年～ | 自著の本(「中国大企業の競争力分析」中央経済社，2016年)を教科書・参考書用に,前任校の授業にて使用した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・ 留学生担当として留学生へ勉学上・生活上の指導・助 | 2015年～2018年 | 前任校では，留学生担当として，留学生の勉学上・生活上の指導に尽力した。特に，提携校から来た留学生が大学院受験に失敗した際に，親身になって指導・助言してきた。その結果，当該学生合計3名が無事に大学院に入学することができた。<br>また，日本で生活する上での注意点，研究上のアドバイス，就職活動に至るまで，厳しく指導するよう心掛けていた。 |
| ・ 産学連携や長期インターンシップ，留学プログラムを通じた連携の成果を教育に取り組む | 2015年～2018年 | 前任校では産学連携や長期インターンシップ，長期留学プログラムを通じた地域や地域企業,海外大学との連携に積極的に参加し,その成果を学部と大学院教育に積極的に取り組んできた。 |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『中国大企業の競争力分析』 | 単著 | 2016年6月 | 中央経済社 | | ※[村松潤一(2017)『アジア市場経済学会年報』第20号に書評あり] |
| 『サービス社会のマネジメント』 | 共著 | 2018年12月 | 同文館出版 | 村松潤一・山口隆久編 | 165－176頁(第13章) |
| 論文 | | | | | |
| 「中国巨大製造企業の成長過程に関する一考察」 | 単著 | 2016年6月 | 『アジア市場経済学会年報』(第19号) | | 61－71頁 |
| 「中国の家電産業における企業の成長メカニズム-経営資源ベースの視点からのアプローチ-」 | 単著 | 2017年3月 | 『広島大学Discussion Paper 2016-09』 | | 13頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| 「中国家電企業の成長過程に関する考察－経営資源ベースの視点からのアプローチ」 | 単著 | 2017年7月 | 『アジ市場経済学会<br>第21回全国研究大会報告要旨』 | | 21－24頁 |
| 「普遍的な製品に顧客ニーズを取り込むイノベーションプロセス」 | 共著 | 2018年3月 | 『就実大学経営研究』<br>(第3号) | 江向華・亀岡京子 | 39－47頁 |
| “The Dynamics of the Growth Process and Institution of Chinese Enterprises” | 単著 | 2018年7月 | Conference Proceedings of International Conference 2018 “Challenges of Sustainable Development and Social Impacts on Cooperatives and Social Enterprises” | | 102－113頁 |
| 「中国の家電産業における企業の成長メカニズム<br>-経営資源ベースの視点からのアプローチ-」 | 単著 | 2019年1月 | 『アジア市場経済学会年報』<br>(第20・21合併号) | | 69－78頁 |
| 「経営学研究とマーケティング研究における資源統合の違い」 | 単著 | 2019年3月 | 『就実大学経営研究』<br>(第4号) | | |
| 「企業の内外における資源統合：台湾企業を事例として」　(掲載予定・印刷中) | 単著 | 2019年8月 | 『アジア市場経済学会年報』<br>(第22号) | | |
| その他 | | | | | |
| (学会発表)<br>「中国大手製造業のダイナミクス」 | 単独 | 2015年6月 | アジア市場経済学会<br>第19回全国大会 | | |
| (学会発表)<br>「 中国巨大製造企業のダイナミクス-「温室育ち」の企業たち」 | 単独 | 2015年7月 | 2015年度<br>第2回しごと能力研究学会部会 | | |
| (学会発表)<br>「中国大手製造企業のダイナミクス」 | 単独 | 2015年10月 | 就実大学経営学会 | | |
| (学会発表)<br>〝The Dynamics of the Chinese Large Manufacturing Enterprises〞 | 単独 | 2016年4月 | The Eleventh Annual Conference of ASAHK,Kobe University, Japan. | | |
| (学会発表)<br>A Study on Potential Service Capability and Problem Solving Style of Service Personnel: Focusing on Ryokan〞 | 共同 | 2017年7月 | The 5th International Conference on Serviceology, University of Vienna, Austria | 姜聖淑,嶋田敏,<br>江向華,原良憲 | Proceedings<br>211-214頁 |
| (学会発表)<br>「普遍的な製品に顧客ニーズを取り込むイノベーションプロセスー学生服メーカーA社によるマス・カスタマイゼーションのジレンマの克服ー」 | 共同 | 2017年9月 | 日本経営学会第91回大会 | 亀岡京子・江向華 | |
| (学会発表)<br>The Dynamics of the Growth Process and Institution of Chinese Enterprises | 単独 | 2018年7月 | International conference 2018: Challenges of Sustainable Development and Social Impacts on Cooperatives and Social Enterprises, the Rama Garden Hotel, Bangkok, Thailand | | |
| (学会発表)<br>「 企業の内外における資源統合：台湾企業を事例として」 | 単独 | 2018年7月 | アジア市場経済学会<br>第22回全国大会<br>(岡山理科大学) | | |
| (学会発表)<br>“Customer<br>Value Creation Activity in Food-related Life” | 共同 | 2019年6月 | 2019 Naples Forum on Service, Ischia, Italy | Jing Zhang, Akira Ohyabu, Satoshi Seino, Xianghua Jiang, Junichi Muramatsu | |
| (学会発表)<br>A Study on Potential Service Capability and Problem Solving Style of Service Personnel: Focusing on Ryokan〞 | 共同 | 2019年6月 | 2019 Naples Forum on Service, Ischia, Italy | Satoshi Seino, Ryo Ohyabu, Jin Zhang, Xianghua Jiang, Junichi Muramatsu | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| しごと能力研究学会 | 第10回全国大会実行委員会委員（2017年11月） |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　田中　秀樹 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「経営組織論」「人的資源管理論」オリジナル授業資料 | 2018年4～現在 | 幾多ある経営組織論、人的資源管理論や組織行動論のテキストから、本学学生に教授するにあたって適切な項目をピックアップして、身近な例を取り入れたオリジナルの講義資料を作成した。これら資料は講義時に配布するのみではなく、「京学なび」でも公開しており、学生がいつでも復習等に利用できるようにしている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 英語による大学院講義実施 | 2018年4～7月、9月～2019年1月 | 大学院講義受講生に留学生が含まれていたため、「人的資源管理論研究A・B」(春学期及び秋学期)講義を英語で実施した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『働きやすい・働きがいのある職場づくり事例集』 | 共著 | 2014年3月 | 厚生労働省 職業安定局　雇用開発課 | 藤本真、田中秀樹、八幡茂美、西村純 | pp.16-19、pp.34-46、pp.81-87、pp.131-137、pp.177-193、pp.251-266 |
| 『中小企業の「採用と定着」調査に向けて』 | 共著 | 2015年5月 | 調査シリーズNo.141(独立行政法人 労働政策研究・研修機構) | 中村良二、藤本真、田中秀樹、西村純 | pp.21-35 |
| 『次世代幹部人材の発掘と育成に関する研究－事業をグローバルに展開する製造企業を中心に』 | 共著 | 2017年3月 | 労働政策研究報告書 No.194(独立行政法人 労働政策研究・研修機構) | 西村純、田中秀樹、青木宏之 | pp.37-68 |
| 『グローバル研究開発人材の育成とマネジメント―知識移転とイノベーションの分析』 | 共著 | 2019年2月 | 中央経済社 | 村上由紀子、鈴木章浩、田中秀樹 | pp.55-85 |
| 論文 | | | | | |
| 「人の異動がもたらす効果―技術者の能力開発とパフォーマンス」 | 共著 | 2014年12月 | 『ITEC Working Paper 14-05』(同志社大学　技術・企業・国際競争力研究センター) | 宮本大、田中秀樹 | pp.1-20 |
| 「R&D部門における事業戦略とHRMの関係およびその効果に関する分析:輸送用機械器具製造企業グループのケース」 | 共著 | 2015年3月 | 『ITEC Working Paper 14-08』(同志社大学　技術・企業・国際競争力研究センター) | 田中秀樹、宮本大 | pp.1-23 |
| "Impacts of Overtime Reduction on Psychological Well-Being for Japanese Research and Development Engineers: Positive and Negative Sides of Work Time Regulations" | 共著 | 2016年11月 | Journal of Japanese Management, Vol.1, No.1 | Tetsushi Fujimoto, Hideki S. Tanaka, Shiming Xia | pp.27-43 |
| 「技術者・研究者と彼・彼女らの働きがい 社会科学の観点から」 | 単著 | 2017年8月 | 『応用物理』第86巻(2017年8月増刊号) | 田中秀樹 | pp.xvii-xviii |
| 「研究開発者・技術者の職務満足度とワーク・エンゲージメントに関する考察　―属性に着目した初次的分析結果―」 | 単著 | 2017年11月 | 『経済経営学部論集』第5号(京都学園大学) | 田中秀樹 | pp.53-67 |
| 「残業の過少報告　人間心理」(ケース解読) | 単著 | 2018年5月 | 『LDノート』5月号 | 田中秀樹 | pp.30-31 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (学会報告) | | | | | |
| 「グループ企業内における出向がエンジニアの能力と昇進・昇格の早さに与える影響に関しての考察」 | 単独 | 2013年7月 | 第43回日本労務学会全国大会(大阪国際大学) | | |
| 「研究開発技術者の『私生活の充実』と『仕事の未達成』」 | 共同 | 2013年7月 | 第43回日本労務学会全国大会(大阪国際大学) | 藤本哲史、篠原さやか、田中秀樹 | |
| 「残業時間規制下における管理職の職務関与及び労働時間がワーク・ライフ・バランスに与える影響」 | 共同 | 2013年7月 | 第43回日本労務学会全国大会(大阪国際大学) | 田中秀樹、藤本哲史、篠原さやか | |
| 「研究開発部門における戦略と人的資源管理の関係およびその効果に関する考察」 | 共同 | 2013年7月 | 第43回日本労務学会全国大会(大阪国際大学) | 田中秀樹、宮本大 | |
| "R&D Activities in Overseas R&D Subsidiaries, Autonomy and the Linkage among Headquarter, Subsidiaries and Local Societies: A Case Study of R&D Activities of Japanese Multinationals in the EU" | 単独 | 2013年11月 | Euro-Asia Management Studies Association 2013 Annual Conference at Duisburg-Essen, Germany | Hideki S. Tanaka | |
| "Intrinsic Motivation and Creative Behavior: Moderating Role of Active Efforts" | 共同 | 2013年12月 | 2013 IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management at Bangkok, Thailand | Sayaka K. Shinohara, Tetsushi Fujimoto, Hideki S. Tanaka, Yoshifumi Nakata | |
| "Overtime Reduction, Work-Life Balance, and Psychological Well-Being for Research and Development Engineers in Japan" | 共同 | 2013年12月 | 2013 IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management at Bangkok, Thailand | Tetsushi Fujimoto, Sayaka K. Shinohara, Hideki S. Tanaka, Yoshifumi Nakata | |
| "The Young and the Restless: Unwavering Consumer Mindset versus Automotive Leadership" | 共同 | 2014年6月 | 22nd International Colloquium of GERPISA, at Kyoto University | Philippe Byosiere, Denise Luethge, Hideki S.Tanaka | |
| 「職場における正社員比率が非正規労働者の職場人間関係満足度に与える影響」 | 単独 | 2014年7月 | 第44回日本労務学会全国大会(北海学園大学) | 田中秀樹 | |
| "Domestic Leadership in Crisis: Gen Y and Automobiles in Japan" | 共同 | 2014年9月 | The International Federation of Scholarly Associations of Management (IFSAM) World Congress at Meiji University, Japan, | Philippe Byosiere, Hideki S. Tanaka, Denise Luethge | |
| "An Empirical Study on the Relation between Subsidiaries' Autonomy and R&D Outcomes in Global R&D Activities of Japanese Multinationals" | 単独 | 2014年11月 | Euro-Asia Management Studies Association 2014 Annual Conference at Bangkok, Thailand | | |
| "Differences in Motives for Car Use in Urban and Rural Regions in Japan" | 共同 | 2015年6月 | 23rd International Colloquium of GERPISA, at École Normale Superieure de Cachan, France | Hideki S. Tanaka, Philippe Byosiere | |
| "A Social – Constructionist Comparative Study of Instrumental, Symbolic and Affective Motives of Car Use in Young Urban Drivers in Sao Paulo and Kyoto" | 共同 | 2015年6月 | 23rd International Colloquium of GERPISA, at École Normale Superieure de Cachan, France | Marcos Amatucci, Hideki S.Tanaka. Philippe Byosiere | |
| "Determinants for Foregoing Drivers License in Japanese GEN Y individuals; Financial, Lifestyle and Transportation Alternatives" | 共同 | 2015年6月 | 23rd International Colloquium of GERPISA, at École Normale Superieure de Cachan, France | Philippe Byosiere, Hideki S. Tanaka, Han Yang, Jiao Wang | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| ″The Relationship among Job Demand, Job Satisfaction and Positive Job Attitude of Workers in Japanese SMEs″ | 単独 | 2015年8月 | WORK2015, at University of Turku, Finland | Hideki S. Tanaka | |
| ″Impact of Overtime Reduction on Work Engagement and Mental Health for Japanese Research and Development Engineers″ | 共同 | 2015年11月 | Euro-Asia Management Studies Association 2015 Annual Conference, at University College of London, UK | Tetsushi Fujimoto, Hideki S.Tanaka, Shiming Xia | |
| 「研究開発者・技術者のワーク・エンゲージメントと創造的職務行動に関する考察」 | 単独 | 2015年11月 | 経営行動科学学会<br>第18回年次大会<br>（愛知大学） | 田中秀樹 | |
| 「研究開発・技術者のワーク・エンゲージメントと積極的職務行動に関する研究」 | 単独 | 2015年12月 | 人材育成学会第13回年次大会<br>（中央大学） | 田中秀樹 | |
| 「研究開発者の知識共有行動を促進する要因に関する研究」 | 共同 | 2016年6月 | 第46回日本労務学会全国大会<br>（同志社大学） | 義村敦子、田中秀樹 | |
| 「知覚された人的資源管理施策・方針が技術者の定着意思に及ぼす影響に関する研究」 | 単独 | 2016年6月 | 第46回日本労務学会全国大会<br>（同志社大学） | 田中秀樹 | |
| 「職場コミュニケーション及び職場風土が技術者の職務態度・行動に与える影響についての研究」 | 単独 | 2016年11月 | 経営行動科学学会第<br>19回年次大会<br>（愛知大学） | 田中秀樹 | |
| ″The Effect of R&D Engineers' Work Engagement and Workplace Climate on Positive Attityude to Knowledge Sharing Within Japanese R&D Workplace″ | 単独 | 2016年12月 | 2016 IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management at Bali, Indonesia | Hideki S. Tanaka | |
| 「知覚された人的資源管理施策が労働者に与える影響に関する研究」 | 単独 | 2017年7月 | 日本労務学会中部部会<br>（名古屋市立大学） | 田中　秀樹 | |
| ″Does Work Engagement Facilitate Creative Behavior among Japanese R&D workers?: An Empirical Investigation for the Effects of Job/Individual Resources″ | 単独 | 2017年8月 | WORK2017, at University of Turku, Finland | Hideki S. Tanaka | |
| 「研究者・技術者の海外経験が創造的行動に与える影響」 | 単独 | 2017年11月 | 経営行動科学学会<br>第20回年次大会<br>（同志社大学） | 田中　秀樹 | |
| 「キャリアマネジメント充実と個人特性による働きがい・創造性への影響」 | 単独 | 2017年12月 | 人材育成学会<br>第15回年次大会<br>（法政大学） | 田中　秀樹 | |
| 「オーストラリアにおける人事労務管理とワーク・ライフ・バランスに関する一考察」 | 共同 | 2018年6月 | 2018年労働政策研究会議<br>（明治大学） | 渡部あさみ・田中秀樹 | |
| ″Pay Structure and Workers' Satisfaction in Japan: Revisit for the Effects of Seniority Pay System″ | 共同 | 2018年6月 | 18th International Labour and Employment Relations Association World Congress, Seoul | Hideki S. Tanaka, Itaru Nishimura | |
| 「中小企業における中途採用者の組織への適応を促す施策及び職場風土とその効果についての研究」 | 単独 | 2018年9月 | 日本経営学会第92回全国大会<br>（新潟国際情報大学） | 田中秀樹 | |
| ″Work-Family Interface and Creative Work Behavior for Japanese Research & Development Engineers″ | 共同 | 2018年11月 | Euro-Asia Management Studies Association 2018, Hankuk University of Foreign Studies, South Korea | Hideki S. Tanaka, Tetsushi Fujimoto | |
| 「働き方改革施策がエンゲージメント・ 革新的職務行動に与える影響についての研究」 | 単独 | 2018年12月 | 人材育成学会<br>第16回年次大会<br>（東海大学） | 田中秀樹 | |
| 「タレントマネジメント施策への認知が組織・仕事への態度に与える影響についての研究」 | 共同 | 2019年6月 | 第49回日本労務学会全国大会<br>（慶應義塾大学） | 田中秀樹・西村純 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (招待講演) | | | | | |
| 「研究開発者・技術者のマネジメント」 | 単独 | 2016年10月 | 応用物理学会<br>界面ナノ電子化学研究会<br>(長野県上諏訪) | 田中　秀樹 | |
| (団体等講座スピーカー/パネリスト ) | | | | | |
| ″Automotive Industry in Japan:  Current and Future Situations″ | パネリスト | 2014年6月 | ITEC Forum: Global Automotive Industry; Current State and Future Challenges(同志社大学) | Marcos Amatucci, Hideki S. Tanaka, Bruce Belzowski, Bernard Jullien | |
| 「職場のやる気を引き出す！モチベーション向上研修」 | 単独 | 2015年7月 | 青森県青森市問屋町<br>ビジネススクール | 田中　秀樹 | |
| 「学ぼう！リーダーシップ～モチベーションを高める組織の動かし方～」 | 単独 | 2016年12月 | 青森県黒石市<br>次世代リーダー育成講座 | 田中　秀樹 | |
| 日本労務学会特別講演会での司会兼討論者<br>(講演者:尾定 均 (株式会社 ナチ富山ベアリング代表取締役) | 単独 | 2017年12月 | 日本労務学会中部部会<br>(富山大学) | 田中　秀樹 | |
| 「働き方改革と働きがいのある職場づくり」 | 単独 | 2018年9月 | 大学コンソーシアム京都 SD事業<br>人事・研修担当者懇談会 | 田中　秀樹 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 所属学会 | 日本労務学会　会員(学会誌編集委員　2018年度～2020年度まで) |
| | 日本労使関係研究協議会　会員 |
| | 経営行動科学学会　会員、第20回(2017年度)年次大会実行委員 |
| | 人材育成学会　会員 |
| | 日本経営学会　会員 |
| | Euro-Asia Management Studies Association(EAMSA)　会員 |
| 学術的活動 | 『日本労務学会誌』『組織科学』『経営行動科学』をはじめ経営組織及び人事労務管理系の国内学術雑誌投稿論文査読(多数)IEEMなどの国際学会プロシーディングスの審査(レフェリー)なども担当 |
| | 『日本労務学会誌』機関紙編集委員 |
| | 2017年度日本労務学会「研究奨励賞」受賞 |
| | Journal of Japanese Management誌 Best Paper Awards受賞(2018年11月) |
| | 日本労務学会50周年企画チームメンバー(経営学の観点から「日本の人事・労務管理の50年」を振り返る) |
| | 日本労務学会第50回記念大会プログラム委員(～2020年7月) |
| | 人材育成学会2018年度「奨励研究賞」受賞 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

「働き方改革」「働きがいある職場」に関する経営相談・組織診断及び講演・相談

企業内研究者･開発従事者・技術者のマネジメントに関する調査及び相談(例:彼・彼女らの「働きがい」「モチベーション」「職場や人事管理への知覚」などに関する調査など)

自動車への志向性や自動車保有意識に関する調査

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　中川 雅博 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| Case Methodの導入 | 2004年5月～ | Harvard Business SchoolのPrf. David Officeと共に受講者のニーズに合わせたトピック、企業ケーススタディーの選択を行い、受講者に論理的思考を身につける施策を取り入れ、2013年京都学園での学部生対象講義でも実践している |
| 新しいCase Studyの作成 | 2004年5月～ | 上記Case Methodを元に受講生が興味を持つCaseをオーダーメイドで作成し、講義資料、運営の主軸教材として取り入れている |
| グループディスカッションの導入 | 2013年4月～ | 受講生に論理的思考を身につけて頂く為に、講義での発言だけでなく、グループを組み、グループで議論し提案をまとめる作業を講義に取り入れている。また発言する受講生にはボールを持たせ、主体性を持たせることを重視している。 |
| アイスブレイキングの場所の提供 | 2013年4月～ | 講義室の前にコーヒーコーナーを儲け、ブレストが必要な受講生が自由に利用し、又受講生同士がクロスセッションを持てる場所としてコーヒーコーナーを設定している |
| メールでの各自フィードバック | 2013年4月～ | 受講生が多くなると、各自との接点が減る為に、そのフォローとして、受講生各自の提出物、発言へのフィードバックは必ず一対一でメールでフィードバックしている |
| 講義のテーマ設定、BGM | 2013年4月～ | 前回のフィードバックからキーワードを絞り込み、そのキーワードにあったBGMを導入、休憩、グループディスカッションで設定。同時に時間配分の目安にも活用している |
| ネームプレートの作成 | 2013年4月～ | 受講生各自のネームプレートを作成。2回後には色を決めてカラーセラピーの手法を導入。受講生管理と共に受講生との会話の接点を増やすツールとしている |
| 席の指定、ファーストネームでの呼応 | 2013年4月～ | 常に席を指定、上記ネームプレートを置き、かつ受講生全員の名前、顔を覚える事で、各人の理解力にあった指導を行っている |
| 各講義での提出物、クイズの設定 | 2013年4月～ | 毎回ネームプレートと共に提出物のテンプレートを作成。講義で発言出来なかった受講生も提言できる機会を作っている |
| 毎回オーダーメイドのパワーポイント作成 | 2013年4月～ | シラバスにそって講義内容は準備するが、受講生の理解度、興味にそって内容を微調整し、受講生の知識、理解力レベルにあった内容に毎回変更している |
| ワイヤレスマイクの活用 | 2013年4月～ | 講師がピンマイクを利用するのはもちろん、発言者に必ずワイヤレスマイクを渡し、発言の重要性を体現していただくようにしている |
| 受講生からの講義の評価 | 2013年4月～ | こちらからのGradingだけでなく、中間に一回、最終に一回、間ならず受講生からの評価を提出していただく。いいことは書かないで欲しいとリクエスト：授業がいいので出席する。だから出席自身が高い評価のはず。よって改善点のみコメントして頂いている |
| 講義の事前、事後準備 | 2013年4月～ | 上記講義を行うと必ず講義前後1時間は前に後に受講生がクラスに滞在するもの。メール以外に、全て個別に質問ある受講生には帰るまで対応する |
| 全登録者へのフォロー | 2013年4月～ | 例え一回の出席でも必ずネームプレートは作成。メールを送りフォローすることで、一回でも講義の参加していただく施策を行っている |
| 受講生に必ず各セッションにプレゼンをさせる | 2014年4月～ | 最低1名、最大5名は教壇に立ち自らの意見を発言させる：毎回各人のテーマ音楽を準備：人前でプレゼンテーションをする経験を積ませる |
| 提出物のメール提出の義務化、プレゼン提出の義務化 | 2014年5月～ | 受講生のメールの書き方のエチケット、リテラシーの知識不足を痛感：必ずきちんとした文書でメールでの提出を義務付ける |
| 現役経営者、ビジネスマンへの直接の提案 | 2018年4月～ | ゼミにおける研究発表を実際のビジネスパーソンへの提言に当てる。Makuake, My Navi実施 |
| TA/SAの活用 | 2018年4月～ | 4回生を3、2、1回生のゼミの運営に関与していただき、ゼミ議論内容、プログラミングなどを共同作成 |
| フィールドスタディー：会社訪問 | 2019年4月～ | ゼミでの課題を作成し実際に経営に提言する機会として企業訪問を実施：Hyatt Regency Kyoto, Park Hyatt Kyoto, ONLY |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 添付講義ノート参照<br>Lecture Note Spring /Autumn 2014, 2015, 2016, 2017 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| Harvard Business School /Prf. David Yoffie Seminar (Hong Kong, Sun Hung Kai Properties Group Sponsoring) | 2004年5月～ | 香港に置ける企業グループ内講義のファシリテーション、プログラミング |
| Harvard Asia Center、Jon Miles, 田邊京都学園理事長提携会議 | 2013年6月 | Harvard Faculty Clubでの交渉：結果同年10月包括提携締結 |
| 香港中文大学経営学部　牧野科長との提携に向けての会議 | 2013年5,8月 | 会議展開 |
| 京都学園ナレッジマネージメントシンポジウム | 2013年10月 | 一橋大学ICS、一條教授、藤川准教授を招聘。大島、大石教授交えてのシンポジュウム開催 |
| 京都洛北ライオンズクラブ例会 | 2014年7月 | 講演会 |
| 日本ナレッジマネジメント学会 | 2014年4月～ | 部会参加 |
| 京都明徳高校特別講義 | 2015年10月～ | オープンキャンパス講義 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 意思決定プロセスの研究 | 単 | 2017年1月 | 日本ナレッジマネージメント学会 | 日本ナレッジマネージメント学会N0.15 | |
| Knowledge into Wisdom | 単 | 2013年8月 | SSRN | | |
| Where is General Manager | 単 | 2013年4月 | SSRN | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本ナレッジマネジメント学会 | 2014年2月より参加 |
| 日本エネルギー・資源学会 | 2014年2月より参加 |
| American Marketing Association | 2017年4月より参加 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　准教授 | 氏名　付　馨 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ・「会計学入門」等講義科目におけるパワーポイントの作成・使用 | 2009年4月～ | 講義科目について事前に作成したパワーポイント資料を印刷して配布すると同時に、授業中はプロジェクターで写して、必要なところに穴埋め等を設けることで学生の勉強効果を高めた。 |
| ・「簿記原理」において練習と質疑応答の時間を設ける試み | 2017年4月～ | 重要な内容について講義中例題を説明した後、練習問題をその場で解いてもらい、その際教室中を見回って、授業の理解度を把握すると同時に、質問しやすい環境を作ることで、学生の勉強意欲を高めた。 |
| ・「スタートアップA」等のゼミ科目におけるフィールドワークの実施 | 2017年～ | 学生を引率して地元の会社やビジネス現場を見学しに行き、学生の興味を引き出すことで、自主学習のインセンティブを高めた。 |
| ・「実践プロジェクト研究A」等の科目におけるディスカッション指導 | 2017年～ | テーマに基づき、事前予習、事後レポートに加え、授業中はグループディスカッションや、プレゼンテーションの指導を行い、学生のでき具体に応じてコメントをする。実際にディスカッションとプレゼンテーションを行うことで、学生の学習意欲とコミュニケーション能力を高めた。 |
| ・「専門ゼミA」と「実践プロジェクト研究A」におけるパソコン教室の活用 | 2018年4月～ | パソコン教室を活用し、授業中にword,excelの使用法や、文章作成の技術を復習しながら、レポートを作成するよう指導を行った。手を動かすことで、学生の集中力を高め、また、一人ひとりの進捗度に応じて指導し、学生の学習態度はより積極的になった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『平成20年版外務員必携』(日本証券業協会)における「財務諸表と企業分析」に関する教材の作成補助 | 2008年4月 | 教材を作成するための資料収集・整理作業を行い、補佐作業を行った。 |
| 『ベンチャー企業・ファイナンスに関する報告書』(独立行政法人中小企業基盤整備機構)の作成補助 | 2008年7月 | 報告書を作成するための資料収集・分析作業を行い、補佐作業を行った。 |
| 『外務員必携』(日本証券業協会)(平成28年版～平成30年版)における「財務諸表と企業分析」に関する教材の作成補助 | 2016年4月～ | 2016年度から毎年本教材を作成するための資料収集・整理作業を行い、補佐作業を担当している。 |
| ・「専門ゼミA」、「キャリアサポート実践講座A」における外部講師の招へい | 2017年4月～ | 学生に仕事のやりがいを実感してもらうために、実務家と他学部の教員を招へいし、仕事の内容や、それに関する考え、生き甲斐等について講演してもらい、学生のキャリア意識や、勉強意欲を高めている。 |
| ・「専門ゼミA」と「キャリアサポート実践講座」における外部講師の招へい | 2017年7月 | 学生に仕事のやりがいを実感してもらうために、実務家と他学部の教員を招へいし、仕事の内容や、それに関する考え、生き甲斐等について講演してもらい、学生のキャリア意識や、学習意欲を高めている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・鳥取地方裁判所　管財人会議　外部講師 | 2013年2月 | 地方裁判所の職員や、弁護士を対象に、粉飾決算等の会計不正を発見するための「財務諸表分析」を講義した。 |
| ・小中高教員免許更新講義 | 2014年8月 | 小中高の教員を対象に会計学の知識をわかりやすく講義した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『国際会計基準と日本の会計実務』 | 共著 | 2009年9月 | 同文舘出版 | 古賀智敏・鈴木一水・國部克彦・あずさ監査法人(編著)・梶原晃・安井一浩・與三野禎倫・田中勝・野田昭宏・高橋聡・島永和幸・伏見康子・松浦総一・付馨・戸田統久・姜相熙・姚俊・三浦洋(あずさ監査法人IFRSプロジェクト代表)・小幡琢哉(監修)・正司素小(監修)・雨河竜夫・小幡琢哉・加治孝幸・梶原晃・杏井康真・熊木実・桑本義孝・正司素子・新開朋春・諏訪祐子・立石政人・手島達哉・成本弘治・南原亨成・長谷川卓也・東浦隆晴・松本光弘・桃原一也・安井康二・渡邉和哉 | 第31章「超インフレ経済下における財務報告」706-712頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書(続き) | | | | | |
| 『財務会計のイノベーションー公正価値・無形資産・会計の国際化による知の創造ー』 | 共著 | 2009年4月 | 中央経済社 | 古賀智敏(編著)・河﨑照行・上野清貴・浦崎直浩・池田公司・田中勝・大城康子・植田玉青・與三野禎倫・高橋聡・島永和幸・付馨・戸田統久・久保田秀樹・岡本紀明・胡丹・姜相熙・姚俊 | 第11章「ネットワーク経済とブランド資産の会計」195-223頁 |
| 『統合報告革命』 | 共著 | 2015年5月 | 税務経理協会 | 古賀智敏(責任編集)・池田公司(編著)・沖野光二・島永和幸・戸田統久・付馨・島田佳憲 | 第14章「シー・エル・ピー(CLP Holdings Limited)」125-143頁;第16章「バァンシティ(Vancity)」159-177頁;第27章「ナショナル・オーストラリア・バンク(National Australia Bank)」324-339頁;<br>第28章「ストックランド(Stockland)」340-358 頁 |
| 『会計研究の系譜と発展』 | 共著 | 2019年3月 | 千倉書房 | 古賀智敏(編著)・瀧田輝己・菊谷正人・五十嵐則夫・椛田龍三・安井肇・山口峰男・上野清貴・本田良巳・池田公司・與三野禎倫・島田佳憲・仙場胡丹・島永和幸・伏見康子・岡本紀明・嶋津邦洋・姚俊・沖野光二・付馨・近藤汐美 | 第19章「統合報告研究のゆくえ」381-403頁 |
| 論文 | | | | | |
| 「日本における統合報告書の開示実態と開示企業の特性分析」 | 単著 | 2016年10月 | 日本知的資産経営学会誌<br>第2号 | | 123-139頁 |
| 「文化論の視点から見るリスク情報開示の日英差異」 | 単著 | 2016年1月 | 『産業経理』第75巻第4号 | | 122-136頁 |
| 「中小企業の業種による低炭素化への取組み状況調査研究」 | 共著 | 2012年3月 | 『鳥取環境大学紀要』<br>第9号・第10号合併号 | 木俣信行・衣川益弘・付馨 | 49-69頁 |
| 「地球温暖化問題への我が国の産業界の対応実態評価」 | 共著 | 2010年6月 | 『鳥取環境大学紀要』第8号 | 木俣信行・付馨 | 123-130頁 |
| 「ベンチャーキャピタルの投資行動と知的資産情報の役割」 | 単著 | 2009年3月 | 神戸大学経営学研究科<br>博士論文 | | |
| 「知的資産情報開示決定の動的メカニズムと知的資産情報の役割-知識創造型企業の視点から-」 | 単著 | 2007年9月 | 『會計』森山書店<br>第172巻第3号 | | 131ー142頁 |
| 「ベンチャーキャピタルの投資意思決定プロセスと知的資産情報の有用性」 | 単著 | 2007年6月 | 『六甲台論集-経営学編-』<br>神戸大学大学院経営研究会、<br>第54巻第1号 | | 45ー64頁 |
| 「ベンチャーキャピタルの投資意思決定プロセスと知的資産情報の役割」 | 単著 | 2007年1月 | 神戸大学経営学研究科<br>第2論文 | | |
| 「ベンチャーキャピタルと知的資産情報の利用可能性-情報利用者側の視点から-」 | 単著 | 2005年12月 | 神戸大学経営学研究科<br>『六甲台論集-経営学編』<br>神戸大学大学院経営研究会、<br>第52巻第3号 | | 19-40頁 |
| 「ベンチャーキャピタルの投資決定と知的資産情報の利用可能性」<br>(修士論文) | 単著 | 2005年1月 | 神戸大学経営学研究科<br>修士論文 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| 「日本における統合報告の開示実態と開示企業の特性分析」（学会発表） | 個人 | 2015年9月 | 日本知的資産経営学会<br>第4回年次大会 | | |
| 「リスク情報開示の国際比較」（学会発表） | 個人 | 2014年12月 | 日本会計研究学会<br>第64回関西部会 | | |
| 「財務情報・非財務情報の統合に関する企業経営者の対応の国際比較研究」最終報告 （学会発表） | 共同 | 2014年8月 | 日本知的資産経営学会<br>第3回年次大会 | 古賀智敏（顧問）・池田公司（委員長）・<br>戸田統久・沖野光二・付 馨 | |
| 「財務情報・非財務情報の統合に関する企業経営者の対応の国際比較研究」中間報告 （学会発表） | 共同 | 2013年8月 | 日本知的資産経営学会<br>第2回年次大会 | 古賀智敏（顧問）・池田公司（委員長）・<br>戸田統久・沖野光二・付 馨 | |
| 「中小企業の業種による低炭素化への取組み状況調査研究」（学会発表） | 共同 | 2011年12月 | 環境経営学会第5回<br>地区研究報告大会 | 付馨・木俣信行・衣川益弘 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | **学会** |
| 2009年9月～ | 日本会計研究学会 |
| 2009年11月～ | 環境経営学会 |
| 2011年9月～ | 日本国際会計研究学会 |
| 2013年8月～ | 日本知的資産経営学会 |
| 2016年9月～ | 日本簿記学会 |
| 2016年9月～ | 税務会計研究学会 |
| 2018年5月 | 日本知的資産経営学会第1回西日本部会準備委員長 |
| | **社会活動** |
| 2010年4月～2013年3月 | 環境経営学会「カーボン・マネジメント委員会」委員 |
| 2012年4月～2013年3月 | 鳥取県文化振興財団評議会評議員 |
| 2012年4月～2019年3月 | 鳥取県がんばる地域プラン審査会委員 |
| 2016年4月～2017年3月 | 「水産物流通・消費拡大チャレンジプラン審査会」審査員 |
| 2017年4月～2018年3月 | 鳥取県「平成29年度6次化・農商工連携プラン審査会」審査員 |
| 2018年5月～2019年3月 | 鳥取県「平成30年度がんばる地域プラン審査会」審査員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　講師 | 氏名　色川 豪一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 民法総則 | 2013年4月～ | 民法第1編「総則」をおおむね条文排列に沿って講義した。内容が高度に抽象的であるため、具体例を示すとともに、その時々の時事問題と民法総則の規定との関係を解説することで受講者の興味を喚起することに努めた。また、知識の定着を図るとともに今後の学習意欲を喚起するため、単元ごとに公務員試験や資格試験の問題を解かせた。 |
| 契約法・不法行為法 | 2013年9月～ | 民法のうち「契約法」および「不法行為法」と呼ばれる分野を講義した。講義時間の制約上、講義内容を取捨選択している。非専門科目として履修する受講生が多いことに配慮して、法律用語などを丁寧に説明することに努めた。また、知識の定着を図るとともに今後の学習意欲を喚起するため、単元ごとに公務員試験や資格試験の問題を解かせた。 |
| スタートアップゼミB | 2016年9月～ | 中学・高校の英語教育を通じて「英語嫌い」になってしまった学生が散見される中で、道具としての英語に親しみをもつことができるよう、多くの外国人観光客が訪れる京都という地域性を踏まえて、道案内のための英語学習を展開した。まず、道案内のための基本的な英単語ないし英語表現を「フラッシュ型教材」で習得させ、具体的な観光地を設定させて道案内の英文を作らせた。その上で、道案内のための英語のワークショップを行っているNPOの代表を招き、ワークショップを行った（ゼミ1回、90分）。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「民法総則」のレジュメおよび練習問題 | 2013年4月～ | 民法総則を対象とする半年で15回分のレジュメ。教科書と合わせて活用することでより正確な知識を得られるように配慮した。また、知識の定着・応用能力の向上を図るため、公務員試験や司法試験で実際に出題された問題を基に演習問題を作成した。 |
| 「契約法」のレジュメ | 2013年9月～ | 民法の契約法領域を対象とする半年で15回分のレジュメ。教科書と合わせて活用することでより正確な知識を得られるように配慮した。また、知識の定着・応用能力の向上を図るため、公務員試験や資格試験で実際に出題された問題を基に練習問題を作成した。 |
| 「家族法」のレジュメ | 2013年9月～ | 民法の家族法領域（親族・相続）を対象とする半年で15回分のレジュメと練習問題。教科書と合わせて活用することでより正確な知識を得られるように配慮した。また、知識の定着・応用能力の向上を図るため、公務員試験や資格試験で実際に出題された問題を基に練習問題を作成した。 |
| 「道案内のための英語」の「フラッシュ型教材」 | 2016年9月～ | パワーポイントのスライド機能を利用して、道案内に必要な英単語ないし英語表現とこれに対応する画像を交互に表示し、学習者がイメージで記憶できるようにした。例えば、交差点の写真のスライドの直後に「intersection」という英単語が表示される。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 自習室を利用した宅地建物取引主任者試験の受験指導 | 2013年5月<br>～2015年9月 | 5月から9月にかけて、法律系国家資格である宅地建物取引士（旧・宅地建物取引主任者）試験で出題される「権利関係（民法・借地借家法など）」を中心に、問題練習と解説を行った。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ロードマップ民法5――親族・相続 | 共著 | 2015年4月 | 一粒社 | 小川富之ほか編 | 121頁～142頁 |
| 面会交流と養育費の実務と展望 | 共著 | 2013年5月 | 日本加除出版 | 棚村政行編著 | 239頁～251頁 |
| 判例にみるフランス民法の軌跡 | 共著 | 2012年5月 | 法律文化社 | 松川正毅ほか編 | 43頁～58頁 |

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| フランスにおける成年子扶養 | 単著 | 2012年7月 | 日本家族〈社会と法〉28号 | | 124頁～135頁 |
| フランスにおける面会交流援助 | 共著 | 2011年4月 | 親子の面会交流を実現するための制度等に関する調査研究報告書 | 法務省（研究代表者：棚村政行） | 270頁～285頁 |
| その他 | | | | | |
| （判例紹介）<br>家事裁判例紹介 母を密葬した長男を排して二男を祭祀承継者とした事例[さいたま家裁平成26.6.30審判] | 単著 | 2015年9月 | 民商法雑誌152巻6号 | | 534～539頁 |
| （判例紹介）<br>祭祀承継者及び遺骨取得者につき原審判を変更した事例[名古屋高裁平成26.6.26決定] | 単著 | 2015年6月 | 民商法雑誌152巻3号 | | 330～335頁 |
| （口頭発表）<br>「フランスにおける成年子扶養」 | | 2011年11月 | 日本家族〈社会と法〉学会<br>第28回学術大会 | | 報告内容は『日本家族〈社会と法〉』28号124頁～135頁に掲載。 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本家族〈社会と法〉学会 |
| | 日仏法学会 |
| | 『フランス法律用語辞典〔第3版〕』（三省堂、2012年）の編著者であるTermes juridiques研究会への参加<br>参加者として民法関連の項目を多数訳出（ix頁に氏名掲記） |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |
| |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　講師 | 氏名　呉 綺 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 学生の授業への反応を詳細に理解するための工夫 | 2019年4月～ | 毎回、練習問題を配布し、全員に必ず解いてもらう。そうすることで出席が授業参加の形だけでなく、練習問題を解答することから学生の授業に対する理解を読み取り、授業進捗への改善に役立てている。 |
| 講義補助プリントの作成 | 2019年4月～ | 講義補助プリントに重要なキーワードがブランクにし、学生に記入してもらう形式をとっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | 特になし |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | 特になし |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | 特になし |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 特になし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| “Does corporate governance impact on sustainability performance? -Evidence from Japan-” | 単著 | 2018年9月 | 神戸大学大学院経営学研究科博士学位論文 | | |
| “Corporate Governance and Sustainability Management: Constructing Research Framework” | 単著 | 2016年9月 | 『六甲台論集―経営学編－』第63巻第2号 | | 1-16頁 |
| ″Comprehensive management control system and stakeholder influences: Evidence from Thailand″ | 共著 | 2019年8月 | *Sustainability Management and Business Strategy in Asia* | Kokubu, K., Wu, Q., Nishitani, K., Tongurai, J. and Ponchanart, P. | in press |
| 「中国におけるMFCAの展開」 | 共著 | 2018年2月 | 國部克彦・中嶌道靖編著『マテリアルフローコスト会計の理論と実践』所収，同文舘出版 | 岡照二・中嶌道靖・呉綺 | 253-269頁 |
| 「補論中国における低炭素型サプライチェーン経営の調査分析結果」 | 共著 | 2015年9月 | 國部克彦・伊坪徳宏・中嶌道靖・山田哲男編著『低炭素型サプライチェーン経営―MFCAとLCAの統合―』所収，中央経済社 | 王傑・徐愛・呉綺 | 46-55頁 |
| その他 | | | | | |
| （ディスカッション・ペーパー） | | | | | |
| “Does corporate environmental performance change through environmental policies between pre and post 2011? Evidence from firm-level data in Germany and Japan” | 共著 | 2015年11月 | 『神戸大学大学院経営学研究科ディスカッション・ペーパー』2015・24 | Makowski, L., Wu, Q., Yagi, M. and Kokubu, K. | |
| “How do firms’ climate-related management and strategy affect climate change risks and opportunities awareness?” | 共著 | 2015年11月 | 『神戸大学大学院経営学研究科ディスカッション・ペーパー』2015・26 | Shen, Y. C., Wu, Q., Tazul, M. I., Yagi, M. and Kokubu, K. | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (国内学会等における口頭発表) | | | | | |
| “A construct validation study on environmental management control system: An international perspective | 共同 | 2017年9月 | 日本会計研究学会第76回大会(広島大学) | Kokubu, K., Guenther, T., Nishitani, K., Guenther, E., Wu, Q., and Endrikat, J. | |
| 「サステナビリティ・マネジメントから見たコーポレートガバナンス―システマティックレビューの分析視角を用いて―」 | 単独 | 2015年10月 | 日本社会関連会計学会第28回全国大会(亜細亜大学) | | |
| “Does corporate environmental performance change through environmental policies between pre and post 2011? Evidence from firm-level data in Germany and Japan” | 共同 | 2015年9月 | 環境経済・政策学会2015年大会(京都大学) | Makowski, L., Wu, Q., Yagi, M. and Kokubu, K. | |
| “How do firms' climate-related management and strategy affect climate change risks and opportunities awareness?” | 共同 | 2015年9月 | 環境経済・政策学会2016年大会(京都大学) | Shen, Y. C., Wu, Q., Tazul, M. I., Yagi, M. and Kokubu, K. | |
| (国内学会等における口頭発表) | | | | | |
| “What are environmental management control systems? A construct validity study” | 共同 | 2017年9月 | European Institute for Advanced Studies in Management 9th conference (Nice, France) | Guenther, E., Jan, E., Wu, Q., Nishitani, K., Kokubu, K. and Guenther, T | |
| “Does corporate governance impact on environmental performance? Evidence from Japan | 共同 | 2017年8月 | 29th International Congress on Social and Environmental Accounting Research (St. Andrews, UK ) | Wu, Q. and Kokubu, K. | |
| “The effects of environmental management capabilities on adopting material flow cost accounting” | 共同 | 2017年8月 | American Accounting Association 2017 Annual Meeting (San Diego, US) | Kitada, H., Kokubu, K., Guenther, E., Walz, M. and Wu, Q. | |
| “Environmental management control systems: A construct validity study on dimensions and measures” | 共同 | 2016年9月 | 20th EMAN conference (Lueneburg, Germany) | Guenther, E., Jan, E., Wu, Q., Nishitani, K., Kokubu, K. and Guenther, T. | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

特になし

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　経済経営　学部 | 職名　助教 | 氏名　池井 優佳 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 簿記科目における毎回の小テストや宿題の実施 | 2019年4月～ | 簿記は、問題を反復して演習することで身に付けることができる。そこで、毎回、授業時間内に小テストを実施したり、宿題を課したりしている。そして、小テストの結果や宿題の成果は成績評価の一部としている。これにより、学生の問題演習の機会が確保され、さらに授業内容の復習を促すことができる。また、宿題とした内容については、学生が積極的に質問に来るという成果を得られている。 |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 監査品質の地方分権化 | 単著 | 2017年9月 | 『千里山商学』第70号 | | 1-23頁 |
| 監査市場における寡占と競合に関する研究 | 単著 | 2018年11月 | 『千里山商学』第71号 | | 1-32頁 |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| (シンポジウム)<br>日台共同法学シンポジウム(台日跨國法學交流學術研討會) | | 2019年2月 | 靜宜大学(台湾) | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

## 健康医療学部　看護学科教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 伊　豆　　一　郎 | 95 |
| | 古　　倉　　聡 | 97 |
| | 嶌　田　　理　佳 | 101 |
| | 杉　山　　智　春 | 106 |
| | 滝　沢　美　智　子 | 111 |
| | 中　野　　雅　子 | 113 |
| | 西　田　　直　子 | 126 |
| | 山　田　　豊　子 | 137 |
| | 山　本　多　香　子 | 139 |
| | 渡　部　　洋　子 | 144 |
| | 渡　邊　　能　行 | 146 |
| 准教授 | 今　西　　誠　子 | 150 |
| | 河　田　　志　帆 | 159 |
| | 鈴　木　ひ　と　み | 164 |
| | 滝　澤　　寛　子 | 174 |
| 講師 | 磯　野　　洋　一 | 177 |
| | 上　野　千　代　子 | 180 |
| | 杉　島　　優　子 | 182 |
| | 高　尾　　憲　司 | 188 |
| | 那　須　　潤　子 | 190 |
| | 夏　山　　洋　子 | 205 |
| | 松　井　　達　也 | 216 |
| | 光　井　　朱　美 | 220 |
| | 吉　田　乃　里　子 | 222 |
| 嘱託講師 | 江　頭　　典　江 | 223 |
| | 熊　谷　　知　実 | 224 |
| 助教 | 大　川　　滋　美 | 227 |
| | 谷　口　　光　代 | 229 |
| | 中　　林　　誠 | 232 |
| | 林　　朱　　美 | 236 |
| | 藤　本　　美　穂 | 239 |
| | 村　田　　優　子 | 241 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　伊豆　一郎 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 入院児に付き添う母親のスピリチュアルペインについての一考察 | 共著 | 2014年3月 | 中京学院大学看護学部紀要 第4巻　第1号 | 今西誠子　伊豆一郎 | p1－12 |
| 精神看護学領域における看護学総合実習の今後の方向性についての検討 | 共著 | 2015年3月 | 中京学院大学看護学部紀要 第5巻　第1号 | 伊豆一郎　柴裕子　増田雄太 | p61－77 |
| 精神障がい者グループホームに関する文献検討 | 共著 | 2015年3月 | 中京学院大学看護学部紀要 第5巻　第1号 | 増田雄太　伊豆一郎 | p91－101 |
| その他 | | | | | |
| (口頭発表)<br>短期間での在宅看取りを可能にした要因分析 | 共著 | 2011年10月 | 第52回全日本病院学会学術集会in沖縄 | 西田高弘　伊豆一郎 | |
| (口頭発表)<br>援助者の近親者の喪失がターミナルケアにもたらす影響についての考察 | 共著 | 2012年10月 | 第53回全日本病院学会学術集会in横浜 | 西田高弘　伊豆一郎 | |
| (口頭発表)<br>トラベルビー看護論におけるスピリチュアル・ケアへの可能性の一考察 | 単著 | 2014年7月 | 第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会　全国大会in神戸 | | |
| (会報記事)<br>はじめまして京都学園大学の伊豆一郎です(第1回:独断) | 単著 | 2016年5月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>はじめまして京都学園大学の伊豆一郎です(第2回:生殺し) | 単著 | 2016年7月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>はじめまして京都学園大学の伊豆一郎です(第3回:社会的孤立) | 単著 | 2016年11月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>はじめまして京都学園大学の伊豆一郎です(第4回:依存と支配) | 単著 | 2016年1月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第5回:コミュニティ) | 単著 | 2017年5月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第6回:主訴 ) | 単著 | 2017年5月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第7回発達障害:当事者) | 単著 | 2017年7月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第8回:発達障害:家族) | 単著 | 2017年11月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第9回:比較) | 単著 | 2018年5月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第10回:自分探し) | 単著 | 2018年7月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第11回:愛着　) | 単著 | 2019年1月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦悩の終焉(第12回:排他性) | 単著 | 2019年5月 | KSKT(きょうかれんNEWS) | | p4 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第1回:私の役割　) | 単著 | 2017年8月 | アウンジャ通信　120号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第2回:気のせい) | 単著 | 2018年3月 | アウンジャ通信　121号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第3回:支配) | 単著 | 2018年3月 | アウンジャ通信　122号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第4回:天涯孤独) | 単著 | 2018年6月 | アウンジャ通信　123号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第5回:生活苦) | 単著 | 2018年10月 | アウンジャ通信　124号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第6回:情けと報い) | 単著 | 2019年3月 | アウンジャ通信　125号 | | p3 |
| (会報記事)<br>苦しみの向こう側(第7回:起きれない自分) | 単著 | 2019年5月 | アウンジャ通信　126号 | | p3 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 中津川市いじめによる重大事態再調査委員<br>(平成24年10月－) | 「いじめ防止対策推進法」(平成25年9月)施行後、「中津川市におけるいじめの防止等のための基本的な方針」(平成26年6月)に基づき、中津川市立学校でいじめによる重大事態が発生した際、再調査ができる委員とされている。 |
| 京都精神保健推進家族会連合会相談委員<br>(平成25年11月－) | 毎週月曜日、心病む当事者・家族の相談業務に従事している。 また、相談員の指導も兼ね、困難な事例におい |
| 講演:こころの健康のつどい　心の不調かな？と感じたら精神疾患への早期の気づきのポイント<br>(平成26年2月14日:尼崎市) | 「こころの不調」のサインについて、身体症状、精神症状を紹介し、また、どこに誰に相談に行けばいいのか、精神科における診断の意義、病態の重さ、思春期のまでの発達上の問題のとらえ方を概説した。また、これまでの当事者・家族の関わりの経験から、引きこもり、抑うつ、無為・自閉に対して、家族による当事者への関わりについての実践的なアドバイスを紹介した。 |
| NPO 法人アウンジャ<br>相談員スーパーバイザー(平成29年4月－) | DVシェルターの避難されている女性のカウンセリングし、今後の生活再建について指導している。また、他のカウンセラーの育成をしている。困難な課題を抱えている事例検討会においては、スーパーバイザーとして助言をしている。法人の運営会議・定例会ではオブザーバーとして、NPOの運営についてアドバイスをしている。 |
| NPO 法人アウンジャ主催:<br>ピアカウセンリングワークショップ　講師<br>(平成29年12月16日:宇治市) | 場所:南宇治コミュニティセンター　日時:13:00－16:00ワークショップに先立ち、ピアカウセリングの下記の概要を説明した。1 ピアカウセリングの定義、歴史的背景、2 ピアカウンセリングがもたらすもの、3 「カウセリング」との違いの3つの内容について概説した。また、参加者に対して、本ワークショップに来られた動機、今、ピアに話すことができる悩みについてアンケート調査を行った。 |
| NPO 法人　アウンジャ　理事(平成31年4月1日) | アウンジャの理事として、運営・会報の編纂、相談員の教育に携わる。 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　古倉　聡 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 2015年度は、授業無し。 2016年度より授業開始 | 2016年4月～ | 内科学、健康医学(内科)、疾病病態と看護I |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | 2016年4月～ | 授業で用いる配布資料 |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 第22回FDフォーラム　第8分科会　コーディネーター | 2017年3月4-5日 | 健康医療系初の分科会を企画・主催 「学ぶ側の主体性・満足度・理解度を引き上げる」 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | 2016年4月～ | FD委員会活動に積極的に参加 |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ①Introduction<br>②Inhibition of Epithelial-to Mesenchymal Transition (EMT) by Hyperthermia<br>③Combination with Hyperthermia and Chemotherapy: Liver Cancer<br>④Combination of Hyperthermia and Immunotherapy: Hyperthermia and Naïve T-cell Therapy | 共著 | 2016年6月1日 | Springer | ″Hyperthermic Oncology from Bench to Bedside″ （Kokura Satoshi, Yoshikawa Toshikazu, Ohnishi Takeo） | ①Pages 3-5<br>②Pages 115-124<br>③Pages 261-274<br>④Pages 341-353 |
| ハイパーサーミア<br>～患者からがん温熱療法を希望されたら | 単著 | 2017年8月7日 | 診断と治療社 | 古倉　聡 | 2-99 |
| 論文 | | | | | |
| Phase I clinical trial of adoptive transfer of expanded natural killer cells in combination with IgG1 antibody in patients with gastric or colorectal cancer | 共著 | 2018年6月15日 | Int J Cancer. 142(12):2599-2609. doi: 10.1002/ijc.31285. | Ishikawa T, Okayama T, Sakamoto N, Ideno M, Oka K, Enoki T, Mineno J, Yoshida N, Katada K, Kamada K, Uchiyama K, Handa O, Takagi T,Konishi H, Kokura S, Uno K, Naito Y, Itoh Y. | 2599-2609 |
| Combination Gemcitabine and WT1 Peptide Vaccination Improves Progression-Free Survival in Advanced Pancreatic Ductal Adenocarcinoma<br>A Phase II Randomized Study | 共著 | 2018年1月22日 | Cancer Immunol Res. doi: 10.1158/2326-6066.CIR-17-0386 | Nishida S, Ishikawa T, Egawa S, Koido S, Yanagimoto H, Ishii J, Kanno Y, Kokura S, Yasuda H, Oba MS, Sato M, Morimoto S, Fujiki F,Eguchi H, Nagano H, Kumanogoh A, Unno M, Kon M, Shimada H, Ito K,Homma S, Oka Y, Morita S, Sugiyama H. | 2326-6066 |
| Global gene expression analysis in the liver of mice administered carcinogens and non-carcinogens For the development of a new rapid and reliable carcinogenicity test | 共著 | 2017年3月28日 | 京都学園大学<br>健康医療学部紀要 | Satoshi KOKURA<br>Tomohisa TAKAGI<br>Katsura MIZUSHIMA | 13 - 19 |
| The amino acid-rich elemental diet Elental® preserves lean body mass during chemo- or chemoradiotherapy for esophageal cancer. | 共著 | 2016年8月1日 | Oncol Rep. 2016 Aug;36(2):1093-100. doi: 10.3892/or.2016.4877. | Ishikawa T, Yasuda T, Doi T, Okayama T, Sakamoto N, Gen Y, Dohi O, Yoshida N, Kamada K, Uchiyama K, Handa O, Takagi T, Konishi H, Yagi N, Kokura S, Naito Y, Itoh Y. | 1093-100 |
| The Present State of the Hyperthermia in Japan, and by What Kind of Way Should We Progress from Now on? | 単著 | 2016年3月1日 | 京都学園大学<br>健康医療学部紀要 | Satoshi KOKURA | 13-20 |
| Phase I clinical trial of autologous NK cell therapy using novel expansion method in patients with advanced digestive cancer. | 共著 | 2015年8月25日 | J Transl Med. 2015 Aug 25;13(1):277. doi: 10.1186/s12967-015-0632-8 | Sakamoto N, Ishikawa T, Kokura S, Okayama T, Oka K, Ideno M, Sakai F, Kato A, Tanabe M13, Enoki T14, Mineno J15, Naito Y16, Itoh Y17, Yoshikawa T18. | 277 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(つづき) | | | | | |
| Tumor inoculation site affects the development of cancer cachexia and muscle wasting. | 共著 | 2015年12月1日 | Int J Cancer. 2015 May 27. doi: 10.1002/ijc.29620. | Matsuyama T, Ishikawa T, Okayama T, Oka K, Adachi S, Mizushima K, Kimura R, Okajima M, Sakai H, Sakamoto N, Katada K, Kamada K, Uchiyama K, Handa O, Takagi T, **Kokura S**, Naito Y, Itoh Y | 2558-65 |
| Hypersensitivity Reactions to Oxaliplatin: Identifying the Risk Factors and Judging the Efficacy of a Desensitization Protocol. | 共著 | 2015年6月1日 | Clin Ther. 2015 Jun 1;37(6):1259-69. doi: 10.1016/j.clinthera.2015.03.012. Epub 2015 Apr | Okayama T, Ishikawa T, Sugatani K, Yoshida N, **Kokura S**, Matsuda K, Tsukamoto S, Ihara N, Kuriu Y, Nakanishi M, Nakamura T, Kamada K, Katada K, Uchiyama K, Takagi T, Handa O, Konishi H, Yagi N, Naito Y, Otsuji E, Hosoi H, Miki T, Itoh Y. | 1259-69. |
| Adoptive Transfer of MAGE-A4 T-cell Receptor Gene-Transduced Lymphocytes in Patients with Recurrent Esophageal Cancer. | 共著 | 2015年5月15日 | Clin Cancer Res. 2015 May 15;21(10):2268-77. doi: 10.1158/1078-0432.CCR-14-1559. Epub 2015 Apr 8 | Kageyama S, Ikeda H, Miyahara Y, Imai N, Ishihara M, Saito K, Sugino S, Ueda S, Ishikawa T, **Kokura S**, Naota H, Ohishi K, Shiraishi T, Inoue N, Tanabe M, Kidokoro T, Yoshioka H, Tomura D, Nukaya I, Mineno J, Takesako K, Katayama N, Shiku H | 2268-77 |
| Cytotoxic T lymphocyte-associated antigen 4 inhibition increases the antitumor activity of adoptive T-cell therapy when carried out with naïve rather than differentiated T cells. | 共著 | 2015年5月1日 | Oncol Rep. 2015 May;33(5):2545-52. doi: 10.3892/or.2015.3815. Epub 2015 Feb 24 | Ishikawa T, Adachi S, Okayama T, **Kokura S**, Mizushima K, Doi T, Matsuyama T, Sakamoto N, Katada K, Kamada K, Uchiyama K, Handa O, Takagi T, Naito Y, Itoh Y, Yoshikawa T. | 2545-52 |
| The inhibitory effect of heat treatment against epithelial-mesenchymal transition (EMT) in human pancreatic adenocarcinoma cell lines. | 共著 | 2014年7月1日 | J Clin Biochem Nutr. 2014 Jul;55(1):56-61. doi: 10.3164/jcbn.14-8. Epub 2014 May 13 | Kimura-Tsuchiya R, Ishikawa T, **Kokura S**, Mizushima K, Adachi S, Okajima M, Matsuyama T, Okayama T, Sakamoto N, Katada K, Kamada K, Uchiyama K, Handa O, Takagi T, Yagi N, Naito Y, Itoh Y | 56-61 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| Annual Scientiffic Meeting Thai Society of Therapeutic Radiology and Oncology | 13-15th March 2015 The Empress Hotel, Chiang Mai, THAILAND, 招待講演 |
| The 12th Chinese Congress of Hyperthermic Oncology and<br>The 2nd Chinese Union Conference of Thermal medicine | Hangzhou 2014 11月7-9日 招待講演 |
| The Second Regional Summit Forum of the International Progress of Radiotherapy and Hyperthermia<br>Zhengzhou | 19th June 2015 招待講演□ |
| 第17回関西ハイパーサーミア研究会 | 2015年6月20日 神戸国際会館において |
| 第32回日本ハイパーサーミア学会学術大会 教育講演 | 2015年9月2・3・4日 KKRホテル大阪 |
| 6th ACHO and 31st JCTM(招待講演) | 2015年9月5日・6日 あおつさ福井 |
| 第12回よみうり京都健康講座 | 2015年5月31日 メルパルク京都4階 第5教室 |
| 第13回よみうり市民公開講座 | 2015年7月19日(日)よみうり神戸ホール |
| 第14回よみうり市民公開講座 | 2015年11月3日 メルパルク京都 |
| ハイパーサーミア説明会 講演 | 2015年11月13日 譜久山病院(兵庫) |
| 第28回バイオセラピー学会 講演 | 2015年12月3日・4日 川越東武ホテル |
| 第15回よみうり市民公開講座 講演 | 2016年1月17日 奈良県文化会館 |
| 第16回よみうり市民公開講座 講演 | 2016年2月14日 草津市立まちづくりセンター |
| 第12回国際ハイパーサーミア腫瘍学会 参加 | 2016年4月9日～16日 Inter Continental Hotel New Orleans, USA |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動(つづき) | |
|---|---|
| 第18回関西ハイパーサーミア研究会 大会長 | 2016年6月25日 メルパルク京都6階 |
| 第45回放射線による制癌シンポジウム 講演<br>第54回日本放射線腫瘍学会 | 2016年7月15日 I-siteなんば |
| 第17回よみうり市民公開講座 講演 | 2016年7月24日 TKPガーデンシティ名古屋新幹線口 |
| 第20回日本がん免疫学会総会 講演 | 2016年7月29日 大阪国際交流センター |
| 第33回日本ハイパーサーミア学会 シンポジウム | 2016年9月2日～3日 つくば国際会議場(茨城県つくば市) |
| 第75回日本癌学会学術総会 講演 | 2016年10月6日－8日;パシフィコ横浜 |
| 第54回日本 癌治療会ミニシンポジウム 講演 | 2016年10月20日-22日;パシフィコ横浜 |
| 市民公開講座. 講演 | 2016年10月29日;FORUM8クイーンズスクエア(東京) |
| よみうり市民公開講座. 講演 | |
| 第13回がんワクチン療法研究会学術集会 講演 | 2016年11月5日;因島医師会病院(広島) |
| 第8回癌の低侵襲・集学的治療研究会 参加 | 2016年11月12日;千里阪急ホテル(大阪) |
| Hyperthermia, the Adjunct Modality to Enhance Effects of Standard Treatment and New Trends of Treatment Modality.<br>天壇普華RF8温熱治療機器発表会. 招聘講演 | 2016年11月20日;天壇大学(中国) |
| 第30回日本消化器内視鏡学会近畿セミナー参加. | 2016年12月4日;大阪国際交流センター |
| 第19回癌治療増感研究シンポジウム 講演 | 2017年2月3日;奈良文化会館 |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2017年2月12日; メルパルク京都 |
| American Assocition for Cancer Research<br>Annual Meeting 2017 (アメリカ癌学会) 参加 | 2017年4月1日-5日 Washington Convention Center, Washington, DC, USA |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2017年4月23日;メルパルク京都 |
| 第19回関西ハイパーサーミア研究会 特別講演 | 2017年6月24日; KKRホテル大阪 |
| 第31回東海ハイパーサーミア研究会. 特別講演 | 2017年7月8日; 名古屋市立大学医学部同窓会館 |
| 第30回九州・中四国地区ハイパーサーミア研究会.<br>特別講演 | 2017年7月22日; 戸畑共立病院(北九州) |
| ハイパーサーミア学会第34回大会. 特別講演 | 2017年9月15日; 京都テルサ |
| ハイパーサーミア学会第34回大会. 大会長 | 2017年9月15-16日; 京都テルサ |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2017年12月3日;メルパルク京都 |
| 第20回菅原・大西記念 癌治療増感シンポジウムin奈良<br>プログラム委員および座長 | 2018年2月3-4日;奈良県立文化会館 |
| ハイパーサーミアについて理解を深める講演会. | 2018年2月7日;庄内クリエート工業社内(鶴岡市) |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2018年3月11日; メルパルク京都 |
| The 7th Asian Congress of Hyperthermic Oncology (ACHO). 大会座長 | 2018年5月23-25日;College of Medicine, The Catholic University of Korea, ソウル(韓国) |
| EAU International Conference 2018. 特別講演 | 2018年6月8日;Eastern Asia University (タイ) |
| ハイパーサーミア市民講座 in 鶴岡. 講演 | 2018年6月17日;マリカ市民ホール(山形) |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2018年7月29日; メルパルク京都 |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動(つづき) | |
|---|---|
| ハイパーサーミア市民公開講座 in山形. 講演 | 2018年11月25日; 山形国際交流プラザ (山形) |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2018年12月9日; メルパルク京都 |
| 第21回菅原・大西記念 癌治療増感シンポジウムin奈良.<br>プログラム委員および座長 | 2019年2月2-3日;奈良県立文化会館 |
| ハイパーサーミア市民公開講座 in 郡山. 講演 | 2019年2月17日; ビックパレットふくしま(福島) |
| サンデー毎日「情熱医療プロフェッショナルドクター」特集記事においてハイパーサーミア関連記事紹介 | 2019年5月5-12日GW合併号 |
| 第21回関西ハイパーサーミア研究会. 座長 | 2019年6月22日;同志社大学室町キャンパス |
| よみうり市民公開講座. 講演 | 2019年7月14日;AOSSA(福井) |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| タカラバイオとの共同研究 |
| 山本ビニターとの共同研究 |
| 2014年～2016年 日本ハイパーサーミア学会 副理事長 (2017年4月より理事長代行) |
| 2017年9月～ 日本ハイパーサーミア学会 理事長 |
| 2014年～2018年 アジアハイパーサーミア腫瘍学会 理事長 |
| 2018年 9月～ アジアハイパーサーミア腫瘍学会 名誉理事長 |

# 2019年度 専任教員の教育･研究業績

| 所属 健康医療 学部 | 職名 教授 | 氏名 嶌田 理佳 | 大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容･方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 大学院クリティカルケア看護学領域のゼミナールにおける指導 | 平成21年4月1日～<br>平成30年3月31日 | クリティカルケア看護学領域の大学院生への教育の一環として，担当教授とともに1か月に2回セミナーを開催し，研究や看護実践について指導. |
| クリティカルケア看護領域の倫理問題に関する勉強会への参加 | 平成21年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 臨床における倫理問題への調整能力を向上させるための教育の一環として，2か月に1回，主にクリティカルケア領域の看護師による倫理問題を検討する勉強会に参加. |
| クリティカルケア看護領域の専門看護師・専門看護師候補生の勉強会における指導 | 平成21年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 急性・重症看護専門看護師および大学院在学中の候補生が参加するCNSセミナー（勉強会）の運営に参加し，専門看護師コース修了者のフォローアップ（候補生の認定試験対策ならびにCNSによる看護研究の指導）を担当. |
| 3年次必修科目「看護演習」の開講 | 平成22年4月1日～<br>平成29年7月31日 | 看護過程の展開に関する能力を向上させる目的で，6領域の教員が関わり，同時期に集中的に領域別の看護過程を学ぶ「看護演習」を3年次前期に開講. |
| 4年次必修演習科目「看護技術リファレンス」の開講 | 平成23年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 学生の看護技術の到達度を向上させることを目的として，准教授，講師，助教，助手が領域を超えて，応用的な看護技術を教授する新規科目「看護技術リファレンス」を開講. |
| 国際教育の推進<br>①ハルリム大学（韓国） | 平成23年6月～<br>平成30年3月31日 | 学生の国際教育を推進するために，担当者の一人として韓国ハルリム大学看護学科を訪問し，協議の後，相互留学のプログラムを構築して学部間交流を開始. |
| 学部生短期研修 | 平成26年9月１～6日・<br>平成28年9月5～11日 | 韓国ハルリム大学看護学科へ本学部学生を1週間の日程で短期留学に派遣するための準備調整を担当．これまでに隔年で3回，合計12名の学生を派遣. |
| 学部生短期研修受け入れ | 平成27年6月22～28日・<br>平成29年6月19日～25日 | 韓国ハルリム大学看護学科から本学部へ1週間の日程で受け入れるプログラムを企画，実施．附属病院や学外施設の見学，演習等を実施するための準備調整を担当し，隔年で合計13名の学生を受け入れ. |
| 訪問 | 平成28年3月16日 | ハルリム大学を訪問し，研究科授業において"The possibility of connection and cooperation between hospitals and universities"をテーマに日本の臨床看護教育について解説. |
| ②オーストラリア<br>セントラル・クィーンズランド大学<br>(Central Queensland University) | | |
| 教員招聘 | 平成26年3月3～9日 | 教員2名を招聘して講演会やワークショップを開催し，学術交流を実施. |
| 教員招聘 | 平成27年2月19～24日 | CQUからMask-Ed・Pup-Ed開発者を招聘して，講演会やワークショップを開催し，学術交流を発展. |
| 短期研修受け入れ | 平成27年7月6～10日 | 学生6名と教員2名を1週間の日程で受け入れ，病院や学外施設の見学や演習等のプログラムを計画，実施. |
| ③東ティモール視察 | 平成28年8月20～26日 | 開発後発国における国際教育を推進するために，東ティモールを訪問し，WHO，病院，保健センターなどの保健医療機関や大学の担当者らと学生間交流の実現を協議. |
| ④国立モンゴル医科大学看護学科<br>教員招聘 | 平成28年10月24～30日 | 教員2名を招聘し，日本の看護，保健医療について視察機会を提供すると同時にセミナーを実施し，相互理解を図る学術交流を実施. |
| 現地視察 | 平成29年9月27～30日 | 次年度からの学生間交流プログラムを開発するために国立モンゴル医科大学を訪問して訪問して視察を行うとともに，担当者らと協議. |
| ⑤タイ国際保健政策計画財団研究者招聘 | 平成28年12月18～24日 | タイ国際保健政策計画財団・事務局長および若手研究者2名を招聘し，講演会，ワークショップ，セミナーを学内外にて開催．一部はアジア保健研修所（AHI），JICA中部との共催により実施. |
| ⑥外国人クライエントに対する看護実践の教育 | 平成29年4月～<br>平成30年3月31日 | 4年生「看護技術リファレンス」の一項目として，外国人患者に対する看護実践能力を養成するための国際看護をテーマとした講義・演習を実施. |
| FD公開授業の実施 | 平成28年9月1日～<br>平成29年2月28日<br>(8回) | 看護学部のFD公開授業として臨地実習（クリティカルケア系，3年生）の学内実習生におけるシミュレーション演習を公開. |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)つづき | | |
| シミュレーション教育の開発① | 平成26年9月1日～<br>平成29年2月28日 | 臨地実習（クリティカルケア系，3年生）の実習生に対して，シミュレーターを用いて術直後患者の全身状態の観察を学習するための演習を実施. |
| シミュレーション教育の開発② | 平成26年11月1日～<br>平成27年11月30日 | 2年生「クリティカルケア看護論」の術後観察の講義において，シミュレーターやモニターを用いて術直後患者の全身状態の観察方法を学ぶための講義を実施. |
| シミュレーション教育の開発③ | 平成28年10月26日 | 2年生「クリティカルケア看護論」の手術後看護の講義において，シミュレーション教育技法であるMask-Edを実演し，術後患者の回復過程を解説. |
| シミュレーション教育の開発④ | 平成29年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 大学院博士前期課程「フィジカルアセスメント」において，事例をもとに，必要となるフィジカルアセスメントの選定と実施，医療安全に関する演習を実施. |
| 看護理論の臨床・研究への適用に関する教育 | 平成29年4月1日～<br>平成29年5月31日 | 大学院博士前期課程「理論看護学」において，ロイ適応看護理論とオレム看護論の看護過程を展開するための事例を作成し演習を実施. |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 学部講義資料 | 平成21年4月1日～<br>令和1年5月1日 | 担当する講義および演習科目において使用する資料を作成. |
| 臨地実習実習要項（学部・大学院） | 平成21年4月1日～<br>平成30年5月1日 | 担当する実習科目の実習要項および実習記録用紙，学内演習の実施要項を作成. |
| 大学院講義資料 | 平成21年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 大学院博士前期課程において担当する科目の講義・演習資料を作成. |
| 看護過程演習の事例 | 平成21年4月1日～<br>平成29年7月31日 | 看護過程を教授する看護演習において使用する「手術を受ける胃がん患者の術前・術後の看護」の事例を作成. |
| ドレナージ模型セットと解説資料 | 平成21年4月1日～<br>平成29年7月31日 | クリティカルケア看護援助論の授業で回覧するため，開放式，閉鎖式それぞれのドレーンの挿入および固定・保護方法を示した模型を製作．さらに，ドレナージの種類，特徴，管理方法，看護について解説するための資料を作成. |
| バルーンカテーテル模型セット | 平成21年4月1日～<br>平成29年7月31日 | クリティカルケア看護援助論（3年生）の授業で回覧するため，泌尿器科で使用する数種類のバルーンカテーテルを用いて，各カテーテルの特徴を示す解説付きセットを作成. |
| 看護技術演習の演習要項 | 平成23年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 4年生「看護技術リファレンス」において担当する基礎看護技術（注射，浣腸，導尿，静脈採血）などの演習要項を作成し，実施. |
| シミュレーション演習資料① | 平成26年9月1日～<br>平成29年2月28日 | 臨地実習（クリティカルケア系，3年生）の実習生に対して，シミュレーターを用いて術直後患者の全身状態の観察を学習するための資料を作成. |
| シミュレーション演習資料② | 平成26年11月1日～<br>平成27年11月30日 | クリティカルケア看護論「術後観察」の講義において，シミュレーターやモニターを用いて術直後患者の全身状態の観察方法を学ぶための資料を作成. |
| シミュレーション演習資料③ | 平成27年4月1日～<br>平成30年3月31日 | オーストラリア　セントラル・クィーンズランド大学で開発された教育技法であるMask-Edの日本版を原案考案者とともに開発. |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| FD公開授業の実施 | 平成28年9月1日～<br>平成29年2月28日（8回） | 看護学部のFD公開授業として臨地実習（クリティカルケア系，3年生）の学内実習生におけるシミュレーション演習を公開. |
| 全学FDにおける担当授業の紹介 | 2015年9月17日 | 平成22年度に開講した「看護演習」が双方向の学習形態をとる科目として全学機構より評価され，発表年度の科目コーディネータより全学第2回教育改革フォーラム『双方向型授業の発展』において紹介. |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 大学院博士前期課程副指導教員 | 平成21年4月1日～<br>平成30年3月31日 | クリティカルケア看護学領域に在籍する学生の副指導教員として特別研究および課題研究の研究指導に従事. |
| 大学院博士前期課程論文審査副査 | 平成27年1月～<br>平成30年3月31日 | 看護学，性生殖・助産学領域において提出された修士論文および課題研究の論文審査に副査として関与. |

| 4　その他教育活動上特記すべき事項(つづき) | | |
|---|---|---|
| 愛知県看護研修センター・愛知県専任教員養成講習会講師 | 平成27年6月22日・29日<br>平成28年6月30日・7月1日<br>平成29年7月6日・7日 | 愛知県看護研修センター・愛知県専任教員養成講習会 において，「看護教育課程（成人看護学）」の講師として，成人看護学を教授するための基本的知識（概論）や授業設計（講義・演習・実習による構成）の考え方などについて講義. |
| 愛知県看護研修センター・愛知県臨地実習指導者講習会講師 | 平成27年6月18日・10月22日<br>平成28年6月23日・10月21日<br>平成29年6月15日・10月12日 | 臨地実習の指導者を対象とした講習会において，「実習指導の実際（成人看護学）」をテーマとして実習指導を行う際に必要となる成人看護学の構成や教授内容等，実習における特徴や注意点について講義. |
| 愛知県看護研修センター愛知県専任教員養成講習会「専門領域別看護論演習」講師 | 平成28年1-2月 (20時間)<br>平成29年1-2月 (20時間) | 「専門領域別看護論演習」のグループワークにおいて成人看護学を選択した受講生に対して，授業設計やシラバス作成について指導. |
| 名古屋市立大学看護実践教育モデル検討委員会委員 | 平成29年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 名古屋市立大学病院看護部と看護学部のユニフィケーションモデル事業として，臨床看護師の実践能力の向上を目標とした新人看護師教育や現任教育，地域貢献活動などを企画・実施. |
| 名古屋市立大学病院・人材育成研修Ⅰ講師 | 平成29年8月31日 | キャリアラダーⅠ認定済みの看護師を対象とした院内研修において，「成人の学習」をテーマとして，多様な学習段階にある対象者（後輩看護師，看護学生）を指導・育成するための成人教育や教育の基礎知識について講義. |
| 名古屋市立大学病院看護部・臨地実習指導者研修講師 | 平成29年11月6日 | 看護学実習を担当する看護師を対象とした院内研修において，看護学実習における指導者の役割および看護学実習の実習環境と関係する今日的話題について講義。 |
| 平成30年度名古屋市臨地実習指導者講習会講師 | 平成30年8月29日 | 臨地実習の指導者を対象とした講習会において，「実習指導の実際（成人看護学）」をテーマとして実習指導を行う際に必要となる成人看護学の構成や教授内容等，実習指導の特徴や注意点について講義. |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ナーシング・グラフィカ　健康の回復と看護②栄養代謝機能障害，第3版 | 共著 | 2014年1月（第1刷）～<br>2017年1月（第4刷） | メディカ出版 | 明石惠子 | 23-40 |
| ナーシング・グラフィカ　健康の回復と看護①呼吸機能障害／循環機能障害，第3版 | 共著 | 2014年1月（第1刷）～<br>2017年1月（第4刷） | メディカ出版 | 佐伯由香，田中美智子 | 200-206,<br>211-212,<br>230-236 |
| 新体系　看護学全書　急性期：クリティカルケア看護 | 共著 | 2017年11月 | メヂカルフレンド社 | 明石惠子，益田美津美 | 132-141 |
| 新体系　看護学全書　周術期看護 | 共著 | 2017年11月 | メヂカルフレンド社 | 明石惠子，嶌田理佳 | 1-5,7-19,<br>32-46,<br>195-201,<br>155-163,<br>171-175,<br>451-461 |
| 2020年東京オリンピック・パラリンピックにおける看護師の対応ガイドライン | 共著 | 2019年2月 | 2020年東京オリンピック・パラリンピックに係る救急・災害医療体制を検討する学術連合体（コンソーシアム） | 佐藤憲明，中村香代，<br>横田由佳，小池伸享，<br>黒崎祐也，山勢博彰，<br>嶌田理佳，挾間しのぶ，<br>山本加奈子，明石惠子，<br>浅香えみ子，溝端康光，<br>森住敏光，渕本雅明，<br>後藤順一，黒田泰弘，<br>櫻井淳，菅原えりさ，<br>加來浩器，喜熨斗智也，<br>奥寺敬 | 4-18 |
| 論文 | | | | | |
| Development of the Japanese medication adherence scale and verification of its reliability and validity in hypertensive patients. | 共著 | 2015年4月 | Pharmacology & Pharmacy，6 | Shimada R，Dohi Y，<br>Kimura K.<br>Fujii S | 118-124 |
| MASK-ED™の教育技法と学習効果 | 共著 | 2017年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要　16巻 | 嶌田理佳，金子典代，<br>山口知香枝 | 31-36 |
| 国際的なmass gatheringにおける多国籍医療専門職者との救護活動 | 単著 | 2018年3月 | 日本国際保健医療学会雑誌，<br>33 | | 17-26 |
| コンサルテーション事例から検討した急性・重症患者看護専門看護師の看護の質評価の構成要素 | 共著 | 2018年3月 | 日本クリティカルケア<br>看護学会誌，14 | 大野美香，丸谷幸子，<br>舘昌美，伊藤美和，<br>益田美津美，嶌田理佳，<br>明石惠子 | 99-102 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| 発達段階を進んでいく先天性心疾患患者さんへの支援 | 単著 | 2015年1月 | HEART nursing, 28(1) | | 79 |
| 急性心筋梗塞発症者に対する救急隊による搬送時の12誘導心電図実施の効果 | 単著 | 2015年2月 | HEART nursing, 28(2) | | 73 |
| 心不全患者さんの抑うつへの対応 | 単著 | 2015年3月 | HEART nursing, 28(3) | | 64 |
| ハルリム大学医学部看護学科訪問と実習施設見学 | 共著 | 2015年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要14巻 | 金子典代, 山口孝子,<br>伊藤裕子, 嶌田理佳,<br>香月富士日, 市川誠一 | 79-86 |
| オーストラリア　セントラル・クィーンズランド大学(CQU)看護学部教員の招聘 | 共著 | 2015年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要14巻 | 嶌田理佳, 金子典代,<br>香月富士日, 山口孝子,<br>市川誠一 | 87-89 |
| 訪問看護師が感じている心疾患を持つ在宅高齢者の服薬管理上の困難 | 共同 | 2015年3月 | 第79回日本循環器学会<br>学術集会 | 嶌田理佳, 藤井聡,<br>土肥靖明, 木村和哲,<br>水野正子 | |
| 胸骨正中切開を伴う心臓手術後の疼痛緩和 | 単著 | 2015年4月 | HEART nursing, 28(4) | | 78 |
| 心臓血管疾患リスク因子の季節変動 | 単著 | 2015年5月 | HEART nursing, 28(5) | | 82 |
| オーストラリア　セントラル・クィーンズランド大学(CQU)とのシミュレーション教育に関わる交流の推進 | 共著 | 2015年5月 | 平成26年度特別研究奨励費<br>研究成果報告書 | 嶌田理佳, 市川誠一,<br>金子典代, 香月富士日,<br>山口孝子 | |
| 看護学生はどのように心臓リハビリテーションを学んでいるのか | 単著 | 2015年6月 | HEART nursing, 28(6) | | 76 |
| 新しい通信技術を患者さんのサポートに活用する試み | 単著 | 2015年7月 | HEART nursing, 28(7) | | 76 |
| 下肢救済に大きく貢献できる看護 | 単著 | 2015年8月 | HEART nursing, 28(8) | | 74 |
| 心不全患者さんの食事摂取と心負荷 | 単著 | 2015年9月 | HEART nursing, 28(9) | | 65 |
| 薬の外観が変わることによる服薬行動への影響 | 単著 | 2015年10月 | HEART nursing, 28(10) | | 71 |
| 補助人工心臓を装着して心臓移植を待つ患児の看護 | 単著 | 2015年11月 | HEART nursing, 28(11) | | 69 |
| 心不全のセルフケアに影響する患者さんとケア提供者のかかわり | 単著 | 2015年12月 | HEART nursing, 28(12) | | 73 |
| 先天性心疾患を持つ患児の疾患理解 | 単著 | 2016年1月 | HEART nursing, 29(1) | | 76 |
| 更年期以降の女性における過体重と心血管疾患リスク | 単著 | 2016年2月 | HEART nursing, 29(2) | | 67 |
| 心不全患者さんの転倒リスク | 単著 | 2016年3月 | HEART nursing, 29(3) | | 76 |
| The possibility of connection and cooperation between hospitals and universities | 単独 | 2016年3月 | Hallym University Seminar | | |
| 平成27年度ハルリム大学医学部看護学科学生の訪問 | 共著 | 2016年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要15巻 | 金子典代, 嶌田理佳,<br>山口孝子, 香月富士香,<br>山口知香枝 | 57-60 |
| オーストラリアセントラルクィーンズランド大学(CQU)看護学生の研修受け入れ | 共著 | 2016年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要15巻 | 嶌田理佳, 金子典代,<br>山口知香枝, 山口孝子,<br>香月富士日 | 61-63 |
| 肺切除術を受ける循環器疾患患者さんにみる周手術期看護 | 単著 | 2016年4月 | HEART nursing, 29(4) | | 87 |
| 食物アレルギーを知ろう | 単独 | 2016年4月 | ボーイスカウト京都連盟<br>平安地区指導者全体研修会 | | |
| オーストラリア　セントラル・クィーンズランド大学(CQU)との教育・研究における交流の推進 | 共著 | 2016年4月 | 平成27年度特別研究奨励費<br>研究成果報告書 | 嶌田理佳, 金子典代,<br>山口知香枝, 山口孝子,<br>香月富士日 | |
| 全国的な実態調査にみる心臓リハビリテーションの安全性 | 単著 | 2016年5月 | HEART nursing, 29(5) | | 71 |
| 心不全終末期患者さんの在宅緩和ケア | 単著 | 2016年6月 | HEART nursing, 29(6) | | 97 |
| 心疾患と疑われやすいアレルギー症状 | 単著 | 2016年7月 | HEART nursing, 29(7) | | 72 |
| 第3回知っとこセミナー「熱中症の予防と応急手当」 | 単独 | 2016年7月・2017年7月 | 名古屋市立大学病院 | | |
| 食物アレルギーの子どもを持つ母親の血圧やストレス | 単著 | 2016年8月 | HEART nursing, 29(8) | | 73 |
| 女性のライフスパンと心血管疾患の予防 | 単著 | 2016年9月 | HEART nursing, 29(9) | | 88 |
| 高齢心疾患患者さんのフレイル評価 | 単著 | 2016年10月 | HEART nursing, 29(10) | | 80 |
| 開発途上国における心疾患予防の取り組み | 単著 | 2016年11月 | HEART nursing, 29(11) | | 63 |
| 仕事のストレスと心血管疾患 | 単著 | 2016年12月 | HEART nursing, 29(12) | | 81 |
| ハルリム大学医学部看護学科短期留学プログラムの実施 | 共著 | 2017年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要16巻 | 金子典代, 嶌田理佳,<br>山口知香枝, 樋口倫代 | 49-53 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| 外国人研究員招へい事業 | 共著 | 2017年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要16巻 | 樋口倫代，金子典代，<br>嶌田理佳，山口知香枝 | 55-57 |
| 東ティモール訪問 | 共著 | 2017年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要16巻 | 樋口倫代，嶌田理佳，<br>金子典代，山口知香枝 | 59-62 |
| ハルリム大学との学生間交流と共同研究の推進、国立モンゴル医科大学看護学科との交流の推進 | 共同 | 2017年5月 | 平成28年度特別研究奨励費<br>研究成果報告書 | 金子典代，樋口倫代，<br>嶌田理佳，山口知香枝，<br>Shin Jeong Kim，<br>Nyam Naranbaatar<br>EvlegSuren Serod | |
| 東ティモールにおけるプライマリヘルスケアへのアクセスに関する保健制度研究のための予備調査および現地機関との交流・協働に向けた準備 | 共同 | 2017年5月 | 平成28年度特別研究奨励費<br>研究成果報告書 | 樋口倫代，嶌田理佳，<br>金子典代，山口知香枝 | |
| 急性・重症患者看護専門看護師が行うコンサルテーションにおける看護の質評価指標 | 共同 | 2017年6月 | 第13回日本クリティカルケア<br>看護学会学術集会 | 大野美香，丸谷幸子，<br>舘昌美，川村知子，<br>伊藤美和，宮崎直美，<br>上野沙織，益田美津美，<br>嶌田理佳，明石惠子 | |
| MASK-ED-隠れた教員によるリアリティの高いシミュレーション演習- | 単独 | 2017年12月 | 第37回日本看護科学学会<br>学術集会（N-AGORA） | | |
| シミュレーション教育技法MASK-EDの特徴と学習効果 | 共同 | 2017年12月 | 第37回日本看護科学学会<br>学術集会 | 嶌田理佳，山口知香枝 | |
| ハルリム大学医学部看護学科との国際交流 | 共著 | 2018年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要17巻 | 脇本寛子，嶌田理佳，<br>山口知香枝，金子典代，<br>樋口倫代 | 41-46 |
| 国立モンゴル医科大学看護学部（Mongolian National University of Medical Sciences School of Nursing）との交流拡充のための視察 | 共著 | 2018年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要17巻 | 山口知香枝，嶌田理佳，<br>金子典代，脇本寛子，<br>樋口倫代 | 47-50 |
| 名古屋市立大学と東ティモール・パーツ大学との大学間交流協定締結準備 | 共著 | 2018年3月 | 名古屋市立大学<br>看護学部紀要17巻 | 樋口倫代，嶌田理佳，<br>脇本寛子，金子典代，<br>山口知香枝 | 51-53 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2009年4月～2017年3月 | 公益財団法人日本ボーイスカウト安全委員会委員 |
| 2012年4月-2017年3月 | 「看護研究サポートプロジェクト」サポート担当，名古屋市立大学看護学部地域貢献事業 |
| 2012年6月～2015年12月 | 23WSJ Medical Section，Safety部会員 |
| 2013年2月～2014年12月 | 第10回日本クリティカルケア看護学会学術集会企画委員・事務局長 |
| 2014年1月-2014年7月 | 日本ボーイスカウト京都連盟安全対策強化特別委員会委員 |
| 2014年6月～2017年7月 | 愛知県専任教員養成講習会 看護教育課程（成人看護学）講師 |
| 2015年4月～2016年3月 | 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟Safe from Harm 研究チーム委員 |
| 2015年6月～2017年10月 | 愛知県臨地実習指導者講習会講師 |
| 2016年3月 | 第80回日本循環器学会学術集会一般演題座長 |
| 2017年3月 | 第81回日本循環器学会学術集会一般演題座長 |
| 2018年3月 | 第82回日本循環器学会学術集会一般演題座長 |
| 2018年8月 | 京都府立医科大学医学部看護学科紀要外部査読委員 |
| 2019年3月 | 第83回日本循環器学会学術集会一般演題座長 |
| 2007年6月～現在 | 救急法講習会講師 |
| 2007年9月～現在 | 看護法・家庭看護法講習会主任講師 |
| 2009年3月～現在 | 公益財団法人日本ボーイスカウト医療チーム幹事 |
| 2012年4月～現在 | メディカ出版　ハートナーシング　査読委員 |
| 2013年4月～現在 | 日本クリティカルケア看護学会査読委員 |
| 2014年1月～現在 | メディカ出版　ハートナーシング　編集協力委員 |
| 2018年11月～現在 | 2020年東京オリンピック・パラリンピック看護ガイドライン作成ワーキンググループメンバー |
| 2019年4月～現在 | 関西広域連合委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

専門としている成人看護学およびクリティカルケア領域における実践と教育に長く携わり，服薬アドヒアランスや救急救護についても長らく携わってきたことから，

これらの分野の実践や共同研究が可能である．

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　杉山　智春 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ・母子手帳を活用して母性意識を高める授業の実践 | 平成10年4月～現在に至る | 近大姫路大学教育学部子ども未来学科3年生に、「母性看護論」（保育科目、3年次配当、半期、選択2単位）において、学生の母性意識を高めるために、授業時に実施した。自分の母子手帳をみて、自分の生まれた時のことを親に聞いて、自分の思いをレポートさせる課題をだしている。<br>学生は、自分が望まれて生まれてきたこと、自分を大切に思ってくれていることを聞いて、親への感謝の気持ちと母性意識が高まる効果が得られている。<br>（しかし、事情がある場合も念頭にいれて、この課題が難しい場合には、「母子手帳の効果的な活用方法」という課題を選択してもよいことにした）<br>近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）でも同様にしている。 |
| ・内診台に実際に上る体験の実施 | 平成10年4月～現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護実習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、学生の妊産婦の心理の理解、配慮を学ぶために、産婦人科の妊婦・患者の心理体験の方法として、内診台に上る体験（スラックスの白衣で実施・男子学生も行う）を実習生に実施している。学生からは、短い時間でもその苦痛が実感できることで、看護の視点が理解できる、心理面の理解について学びが多いと評価されている。 |
| ・「妊婦体験スーツ」を用いた妊婦疑似体験と「胎児模型」「胎児の発育」を統合した授業の実践 | 平成15年10月～現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）の授業において「妊婦の経過・胎児の発育を学ぶ」の単元で実践した。「妊婦体験用モデル着用」「胎児の発育」のビデオ視聴・「胎児の週数毎の模型に触れる」ことで、理解を深めることをねらいとした。その結果、学生は内容の理解とともに、妊婦の心理イメージが広がった。 |
| ・産褥期の経過(子宮の退行性変化)を経時的モデル作製で学ばせる授業の実践 | 平成16年11月～現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）の授業において、産褥期の子宮底と悪露の変化の理解を促すために、分娩当日から産褥6日目までのモデル模型を作製した。学生は、日々変化する子宮底と悪露の変化に興味をもち、ビデオ学習と併用したことで、理解できたとの評価であった。この事例を母性看護学の看護過程で用い、知識の統合をはかることもできた。その後は、経日的な変化として、悪露の変化を作成して工夫することで、視覚的にも理解を促してきた。 |
| ・早期新生児期の経過（観察と便の変化）の理解を促すための経時的モデル作製で学ばせる授業の実践 | 平成16年11月～現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）の授業において、早期新生児期の経過（観察と便の変化）の理解を促すためにおこなった。ベビー人形での、日々の観察の実践時に、出生当日から出生後6日目までの便を絵の具・とろみ剤・岩のりなどを材料に作製した。日々変化させていくことと、ビデオ学習と併用したことで、理解できたとの評価であった。また、この事例を母性看護学の看護過程に用いることで、知識の統合をはかることができた。 |
| ・母性看護技術修得（沐浴技術・観察技術）への工夫 | 平成18年4月～現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）の授業において行う。沐浴技術演習を効果的に実施するために、2グループにわけて、演習をおこなっている。①沐浴技術を習得する学生②バイタルサイン人形を使っての観察技術をする習得、ベビーモデルの頭位の測定・胸囲測定・身長測定。①②を組み合わせて、効果的な演習を行う。学生からは、同じ時間内に行うことで、知識の統合と時間の活用が図れると評価されている。 |

| 教育内容・方法の工夫(続き) | | |
|---|---|---|
| ・講義の資料の内容を検討し、講義から母性看護学実習まで活用できる実践 | 平成20年4月～現在に至る | 関西看護医療大学看護学部看護学科、近大姫路大学看護学部看護学科の担当する科目において、母性看護学の学びを積み上げるために、授業の資料は最新の情報を取り入れて準備してきた。また、講義の資料は母性看護学実習の時に活用することを前提に作成する。また、国家試験を常に意識して学生に示し学習意欲を高めるようにした。実習では、授業の資料が十分に活用できたという学生からの評価を受けている。 |
| ・学生の国家試験に対する授業での意識の向上の実践 | 平成10年4月～現在に至る | 関西看護医療大学看護学部看護学科、近大姫路大学看護学部看護学科の担当する科目において、国家試験問題を常に意識して学生に示し学習意欲を高めるようにした。国家試験では、授業の内容がどのような問題として提示されるかを具体的に示した。学生は、国家試験問題を知ることで、学ぶ意味を理解でき、意欲を高めることができたと評価を受けている。 |
| ・出席確認の把握と前回の学習の想起の為の実践 | 平成20年4月～現在に至る | 関西看護医療大学看護学部看護学科、近大姫路大学看護学部看護学科の担当する科目において、学生の出席を正確に把握するために講義開始後に簡単な問題の用紙を個人に確実に配付する。そして授業終了時に集めて出席を把握する。(遅刻の場合には出席した時間を記載して渡す。)その用紙は次回の授業開始時に返却して授業の冒頭にパワーポイントで解答を示し、前回の内容を想起させて本日の授業に入る。その方法は分かりやすいという学生からの評価を受けている。 |
| ・学生が看護の対象を理解するのための事例の提示 | 平成15年4月～現在に至る | 学生は看護の対象(不妊症の患者)の心理面での理解をすることや、諸外国での女性の社会問題での心理面の苦痛の理解は経験がないだけに難しいといえる。そのために、新聞記事や患者の著書からの記述から患者の気持ちを理解できるようにした。テキストではまとめられているが、記事の内容には、学生は共感することができ、対象理解が深まっている。 |
| ・子ども未来学科の学生に対する「母性看護論」の理解を促す実践 | 平成22年4月から平成26年まで | 近大姫路大学教育学部子ども未来学科の3年生の「母性看護論」の授業において、看護学科ではない学生の理解を促す工夫を行った。授業の中で、ビデオおよびシュミュレーションを用いた簡単な演習を取り入れて学生の興味及び学習意欲を促した。分娩のDVDの視聴、妊婦体験モデルの着用、新生児人形の取り扱い方、沐浴の実践を取り入れることで学生は分かりやすかったという評価を得られた。 |
| ・子ども未来学科の学生の「母性看護論」の出席確認と、学習への意欲を促す実践 | 平成22年4月～平成26年まで | 近大姫路大学教育学部子ども未来学科の3年生の「母性看護論」の授業において、学生への出席確認の把握の為と疑問の解消の為に出席カードに意見を記載してもらい、次の授業時に全体または個人へ説明を行った。個人の思いに答えることで、学部は違っても学習してよかったという反応を得られた。 |
| ・授業の内容の順序と講義と演習の連続性を守ることで、学生の理解を促す実践 | 平成25年4月～平成26年まで | 近大姫路大学看護学部看護学科の「母性看護援助論」の授業において学生が妊娠・分娩・産褥の女性及び新生児の理解の促進と実践力の向上を促した。具体的には講義の次に演習を行い知識の定着と技術の習得を図った。また、看護過程においては、その事例に近い演習内容を行うことで、理解を促した。学生からは分かりやすかったという評価が得られた。 |
| ・学生によるアンケート評価<br>「母性看護技術演習」:近大姫路大学 | 平成24年3月 | 86名の授業評価の結果は、全科目平均を上回っていた。授業の内容については「よく吟味されている」「知的好奇心を刺激する」「内容を理解できた」という内容は特に高かった。演習科目であり学生の関心が高まり高評価になったと考えられる。教員の態度でも「熱意がある」「学生の立場を配慮している」「丁寧な対応である」が高かった。自由記述でも「演習がためになった」という記載がみられた。 |
| ・学生によるアンケート評価<br>「母性看護概論」:近大姫路大学 | 平成24年3月 | 授業に対する評価は、全科目の平均よりも高い評価であった。質問1－10までの授業の進行や管理などについて、質問11-20までの授業の内容や教員の態度については、1名の学生が数項目で「どちらともいえない」という評価をしていた。それ以外は授業の内容に対する評価は、「そう思う」、「大変そう思う」という評価をしていた。アンケートを提出した学生たちは、授業に対して肯定的で満足していたが、提出しない学生は、極度の共感も反感もないということが予想されるが詳細は不明であるため、今後は多くの学生に提出してもらえるような評価方法の工夫が必要である。 |
| ・学生によるアンケート評価<br>「母性看護援助論」:近大姫路大学 | 平成26年3月 | 3年生の授業で、学生50名の授業評価であった。全科目平均は3-4までであったが、本科目は教員に対する評価項目すべてが4.3以上の評価であった。この新カリキュラムの母性看護援助論は、講義と演習を組み合わせて行うことで、学生の思考過程を整理できたことがよかったと考える。学生の自由記述でも「演習と講義が一貫していて分かりやすかったです。演習時に技術の図や説明のプリントもよかった」「事例を一つにして集中的に行って良かった」という記述があった。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・学生によるアンケート評価<br>「看護対象論Ⅰ」:近大姫路大学 | 平成26年3月 | 学生54名の授業評価であった。全科目平均と本科目平均の評価はほぼ同じ(約4)であった。その中で、授業が「よく吟味されていた」「内容を理解できた」「授業の速度や内容量は適切である」という項目が平均よりも高かった。2年生の科目であり、看護の対象を理解する重要な科目である。授業はオムニバス形式であり、4領域に対する評価であるので、今後は領域別の詳細な評価にすることで、今後の授業の改善もできると考える。 |
| ・大学設置・学校法人審議会教員組織審査 | 平成26年9月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科の「母性看護学」の教授として「成長発達Ⅳ(女性の生涯発達と看護)」、「母性看護学援助論」「母性看護援助論演習」、「母性看護学実習②」、「疾病病態学と看護Ⅳ」、「スタートアップゼミA」、「スタートアップゼミB」、「看護研究演習Ⅰ」、「看護研究演習Ⅱ」、「看護統合実習」の資格ありと判定された。 |
| ・2017年度京都学園大学健康医療学部 「Best Teacher 賞」 | 平成30年3月 | 京都学園大学健康医療学部の2018年度「Best Teacher 賞」を受賞した。2018年3月10日に学長より表彰された。 |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ・早期新生児期の便の変化の理解を促すための経日的モデルの作製 | 平成16年12月～<br>現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修2単位)の授業において、早期新生児期の便の変化の理解を促すために出生当日から出生後6日目までの便を絵の具・とろみ剤・岩のりなどを材料に作製した。日々変化させていくことと、ビデオ学習と併用したことで、理解できたとの評価であった。 |
| ・産褥子宮底の変化と悪露の理解を促すための経日的モデルの作製 | 平成16年12月～<br>現在に至る | 近大姫路大学看護学部看護学科の准教授及び教授として担当の「母性看護技術演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修2単位)の授業において、、産褥期の子宮底の変化と悪露の理解を促すために分娩当日から産褥6日目までのモデルの人形を作製した。学生は、日々変化する子宮底・悪露の色の変化に興味をもった。ビデオ学習の併用でよく理解できたとの評価であった。 |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ・FD研修会での授業成果の報告:近大姫路大学 | 平成24年3月 | 近大姫路大学のFD研修会で、授業成果の報告を行った。授業で、学生への効果的な方法について、「パワーポイント」と資料を活用して授業を分かりやすく展開する方法、前回の講義の内容を復習ご定着させるための方法、出席確認を確実に行う方法について報告した。 |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の<br>名 称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査−性交経験と、知識、子宮頸がん予防行動との関連− | 共著 | 平成25年3月 | 近大姫路大学<br>「看護学部紀要」<br>第5号 | 美甘祥子、杉山智春 | p.75～p.83 |
| 妊産婦死亡率および新生児死亡率の低下と産婆数の増加との関連 | 単著 | 平成25年10月 | インターナショナル Nursing Care Research Vol. 12 No. 3 | | p.63～p.72 |
| 医療施設で働く助産師への業務拡大に関する意識調査(第1報) | 共著 | 平成26年5月 | インターナショナル Nursing Care Research Vol. 13 No. 2 | 杉山智春、谷口光代、内田みさと、美甘祥子、丸山幸三 | p.9～p.18 |
| 助産師が妊婦健康診査で用いる超音波検査におけるケアの概念分析 | 共著 | 平成27年10月 | インターナショナルNursing Care Research 14(3) | 美甘 祥子 杉山 智春 谷口 光代 | 97頁～103頁 |
| 母体血清マーカー検査の結果が陰性であった褥婦の胎児への不安や検査への認識 | 共著 | 平成28年5月 | インターナショナルNursing Care Research Vol.15.No.2 | 美甘祥子、杉山智春、谷口光代 | 23頁～31頁 |
| 更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第20号 | 夏山洋子、杉山智春、谷口光代 | 91頁～100頁 |
| 乳幼児を育てる母親への野菜栽培による育児支援の効果ー「育Gの会クローバー」での育児支援活動の実践報告 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第20号 | 藤本美穂、今西誠子、夏山洋子、<br>杉山智春、大城閑 | 14頁～21頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表） | | | | | |
| 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査（第1報）−予防行動と知識および性的リスク対処意識との関連− | 共同 | 平成24年11月 | 第53回日本母性衛生学会学術集会（於：福岡県 アクロス福岡） | 美甘祥子、杉山智春 | |
| 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査（第2報）−性交経験と知識および子宮頸がん予防行動との関連− | 共同 | 平成24年11月 | 第53回日本母性衛生学会学術集会（於：福岡県 アクロス福岡） | 杉山智春、美甘祥子 | |
| 母親から児童へのタッチングが母子関係に及ぼす影響 | 共同 | 平成25年12月 | 第33回日本看護科学学会学術集会（於：大阪府 大阪国際会議場） | 杉山智春、坊垣友美、大西雅子 | |
| 助産師の業務拡大に対する医療施設で働く助産師への意識調査（第2 報） | 共同 | 平成26年11月 | 第34回日本看護科学学会学術集会（於：名古屋国際会議場） | 杉山智春、内田みさと、美甘祥子 | |
| Anxiety about the fetus and awareness of testing in puerperal women with negative results on the maternal serum screening | 共同 | 平成28年3月 | 19th EAFONS | Shoko MIKAMO, Chiharu SUGIYAMA, Mitsuyo TANIGUCHI | |
| Implementation and Effectiveness of Adolescent Education Peer support for University Students as Carried Out by Midwife Students | 共同 | 平成29年6月 | 第31回 ICM Treiennial Congress（於：CANADA Tronto・Metro Toronto Convention Centre） | Keiko Yano,Maya Okuda,Sanfa Shin,Xenia Fukuda,Yuki Mori,Kyoka Yuraku,Yoko Natsuyama, Rumi Okamoto,Yumi Kanbara,Mitsuyo Taniguchi,Chiharu Sugiyama | |
| 多世代をつなぐ育児支援活動の参加者の思い −テキストマイニングによる分析− | 共同 | 平成29年12月 | 第37回日本看護科学学会学術集会（於：仙台国際センター） | 藤本美穂、今西誠子、高尾憲司、谷口光代、夏山洋子、杉山智春 | |
| Effects of a Child Care Support Program Aimed at Intergenerational Interaction | 共同 | 平成30年7月 | WHO CC 2018（於：Cairns Australia） | Tomoko Imanishi, Miho Fhujimoto, Yoko Natsuyama, Chiharu Sugiyama | |
| Effects of music on intergenerational exchange between children, elderly, and college students | 共同 | 平成30年7月 | WHO CC 2018（於：Cairns Australia） | Miho Fhujimoto, Tomoko Imanishi, Yoko Natsuyama, Chiharu Sugiyama | |
| 更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共同 | 平成30年12月 | 第38回看護科学学会学術集会（於：ひめぎんホール） | 夏山洋子、杉山智春、谷口光代 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本母性衛生学会会員 | 平成13年 4月から（現在に至る） |
| 日本看護研究学会会員 | 平成15年12月から（平成24年3月まで） |
| 日本看護科学学会会員 | 平成16年11月から（現在に至る） |
| 日本看護学教育学会会員 | 平成16年12月から（平成24年3月まで） |
| 日本助産師会会員 | 平成17年 1月から（現在に至る） |
| 日本家族社会学会会員 | 平成19年 9月から（現在に至る） |
| 日本助産学会会員 | 平成20年12月から（現在に至る） |
| 日本生殖医療心理カウンセリング学会会員 | 平成25年 3月から（現在に至る） |

| | |
|---|---|
| 「社会活動」 | |
| 平成 7年 8月から | 妊婦等に関する保健指導（不定期）（現在に至る） |
| 平成12年 4月から | ひょうご母乳・育児の会　（現在に至る） |
| 平成15年10月から | 母性に関する研究会：（他の大学の教員との学習会）（現在に至る） |
| 平成18年4月から | 兵庫県助産師会主催の子育て支援事業「子育てわいわいト―ク」等の講師として活動している（現在に至る） |
| 平成22年4月から | 明石市子育て支援事業の「もうすぐパパ・ママ講座」等の講師として活動している（現在に至る） |
| 平成25年1月 | 平成24年度兵庫県まちの寺子屋師範塾の講師（平成24年のみ） |
| 平成27年4月から | 右京区まちづくり支援制度支援事業に申請。京都学園大学看護学科の教員と学生による「右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”」の活動で子育て支援事業を実践している。畑づくりや食育活動も展開している。<br>平成28年度の「たなべハピネス賞」もいただき、学生とともに活動を重ねている（現在に至る） |
| 平成29年4月から | 看護学科の教員と学生による「右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”」の活動で子育て支援事業を実践している。今年度より、野菜を育てることを中心に母親への支援を行っていくということと食育活動も展開している（現在に至る） |
| 平成30年4月から | 看護学科の教員と学生による「右京区地域防災対策支援プロジェクトー子育て世代に向けてー」の活動で子育て支援事業を実践している。今年度は、災害に備える対策の広報として、児童館や大学において、災害時への準備および母子への避難所での工夫などについて活動を実践する計画し、実践を行った。また、右京区の防災訓練にもプレゼンテーションを行った。実践の結果として、災害時の準備の広報ができ、参加者の意識の向上がみられた。 |
| 令和元年年4月から | 看護学科の教員と学生による「右京区地域防災対策支援プロジェクトー子育て世代に向けてー」での活動を開始している。昨年度の実践内容を発展させて、子育て支援事業を実践している。今年度は、災害に備える対策として、児童館との共同共催として、災害時の準備に加えて、避難方法、避難所をイメージした食事など、食育支援などについて活動を実践する計画・実践中である。（現在に至る） |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 助産師であり、妊娠・分娩・産褥期・新生児への看護について実践できる。周産期におけるマイナートラブルの解消法や悩みや不安についての相談等も対応できる。 | |
| 特に、母乳育児支援については、最も得意とする技術であり、対象者のニーズがあれば、必要なケアを行っていきたいと考えている。 | |
| 妊娠・出産・子育てに対する相談については専門職として対応が可能である。また、女性の生涯にわたる健康支援についても対応できる。 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　滝沢　美智子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・無） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 実際の患者・家族の反応を多く取り入れた授業内容 | 平成23年～ | 慢性期看護では、糖尿病のペーパーペイシェントを作成した。事例は慢性期の病態の特徴を踏まえ、患者のアドヒアランスを高めるための看護援助を中心に授業を展開した。患者の事例には、臨床看護師として勤務していた内科病棟時の事例をもとに、暴飲暴食による高血糖で糖尿病を発症した対象が、家族に支えられながら自身の社会的責任を自覚し、食事療法、運動療法を受け入れ、血糖コントルールに至った事例を用いた。 |
| 体験・演習の効果的な活用 | 平成23年～ | 疾病・障害をもつ成人期にある患者の看護を展開するために必要な看護技術、社会的資源の活用方法についての理解やBLSの知識・技術について学習することを目的として演習を展開した。成人患者の健康問題の改善に必要な教育方法や援助技術を学ぶための演習を実施した。自身が救急法（BLS）の資格を持っていることから、救命救急士とともに学生がBLSを修得するための演習を行なった。さらに疾病・障害を持つ成人期にある患者の看護を展開するために必要なフィジカルアセスメント技術・看護過程の方法を演習・事例を用いて授業を行なった。 |
| ディベート、ディスカッションの導入<br>事例の活用<br>グループワークの導入 | 平成23年～ | 看護管理に必要な基礎理論を講義で学習し、それをもとにディベートに必要な知識を自己学習として課した。各自が学習した内容をもとに、学生を2グループに分けディベートを実施した。たとえばリーダーシップのX理論・Y理論に関してなどである。どちらのリーダーシップに賛成か。学生は事前学習することで自分の意見をもつことができ、積極的な発言を促すことができた。また学生は授業で講義を聴くだけの時以上に、自己学習を通して様々なことを学習し、他のリーダーシップ理論等に関する学習を含めて自己学習を行っていた。<br>臨床の場で管理を行っていた体験をもとに、看護の質管理や人材育成に関しては、実際の事例をもとに授業を展開した。また看護師が関係している事故事例をもとに、看護管理者の視点で事故の原因をとらえ、あるべき管理スタイルについてグループワークを行いそれを発表する形式とした。グループワークでは看護管理の授業にとどまらず様々な学習内容をもとに、教員が目標としている以上の内容を含めた議論を行っているケースが多々あった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 授業資料の作成 | 平成23年～ | 授業では、教科書を使用せず研究論文等を用いて授業資料を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 学内におけるFD研修報告会 | 平成23年～ | 学内におけるDF研修の一環として教育討論会を開催、看護学科における臨地実習の現状と今後の課題について報告した。主な内容としては本学の実習指導の背景、看護系大学における実習指導上の課題、FD委員会が実施した教員および学生アンケートの結果、臨地実習指導における指導効果と求められる教員の資質と指導力等について報告した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 公開講座「効果的なインフルエンザと風邪の予防対策」京町屋キャンパス | 平成27年12月 | インフルエンザが流行するシーズンを前に、市民を対象とした公開講座を開催し、インフルエンザの基礎知識、インフルエンザの感染経路や予防策（環境対策、健康管理、ワクチン接種、手洗い等について講義を行った。 |
| 済生会京都病院看護研究指導 | 平成28年4月～ | 済生会病院の看護師を対象に、看護研究指導を実施している。看護研究を初めて行う看護師が殆どであるため、研究動機を探りながら研究したいテーマの絞り込みを行い、テーマを設定した。文献レビュー等の指導を行い現在継続中である。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 根拠と写真で学ぶ看護技術2　検査・治療を支える | 共著 | 平成23年9月 | 中央法規 | 編者：安藤郁子<br>共著者：安藤郁子、加藤千晶、藤村真紀子、滝沢美智子、他 | p.236-p.237 |
| 根拠と写真で学ぶ看護技術3　検査治療を支える援助 | 共著 | 平成23年9月 | 中央法規 | 編者：安藤郁子<br>共著者：安藤郁子、滝沢美智子、富岡晶子 | p.2-p.28、p.164-p.175p.224-p.240 |
| 根拠と急変対応からみたフィジカルアセスメント | 共著 | 平成25年3月 | 医学書院 | 編者：清紀子　工藤二郎<br>共著者：飯野英親、生島壮一郎、大田明英、滝沢美智子、上野恵子、藤村真紀他 | p.222－p.248<br>p.252－p.262 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2016年 | 日本看護科学学会会員 |
| | 日本看護学教育学会会員 |
| | 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　中野　雅子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ① ペーパーペイシェントによる看護計画立案指導 | 平成15年4月～現在に至る | 臨床実習前の演習において、脳梗塞、嚥下性肺炎、大腿骨頸部骨折等の生活障害が顕著な患者の典型的な症例でペーパー事例を作成し、各グループに1例ずつ提示する。学生は情報収集・分析・看護計画立案までの過程をグループワークで行う。特に片麻痺、嚥下障害、歩行障害など生活障害への自立支援の重要項目を理論的かつ集中的に討論することで学びが深まり、臨床実習の場で活用することができる。さらにクラス発表の機会をつくり、その場でアドバイスし、複数事例の知識をクラス全体で共有できるよう工夫している。 |
| ② 看護ケア患者体験学習の指導 | 平成15年4月～現在に至る | 高齢患者に対し頻繁に行われる看護ケア＜便秘の患者への腹部マッサージ・温罨法＞、＜感染予防のための口腔ケア、手洗い指導＞、＜転倒防止の視点での歩行器・車椅子によるトイレ使用＞、＜ストレッチャーや車椅子による移送＞、＜リラクゼーションを促す足浴＞＜スプーンによる食事介助＞等を演習として看護師役・患者役双方を体験学習させている。患者役学生は、看護師役学生にケア中に感じたことを率直に述べる。例えば『移乗ケアへの意外な恐怖心』など教科書や文献では得られない学びの場となっている。さらに、実施後排便促進効果、口腔の爽快感等報告され、看護ケアの有用性実感に役立っている。 |
| ③ モデルの活用による看護技術デモンストレーション指導 | 平成15年4月～現在に至る | 口腔内・気管内吸引法、酸素吸入、摘便、浣腸、採血、点滴静脈注射固定法、ドレッシング法、ドレーン管理、導尿等について各種モデルを活用し、実体験に近い環境でデモンストレーションによる技術指導を行っている。特に血管モデルを装着して行う採血技術指導では、動脈や神経を傷つけない安全な静脈血管の選び方を実際に指で触れさせて実感させて指導する。点滴静脈注射固定法、ドレッシング法では、感染防止、皮膚保護の両面から安全を主体とした指導を行う。摘便・浣腸では、直腸保護を主眼として行っている。 |
| ④ ディベート（ 論理的思考の学習 ） | 平成15年4月～現在に至る | 『死を前提とした病名告知』など立場が対立し、意見が二者択一となる看護上のテーマから論題を決め、肯定意見側と否定意見側5名ずつ、その他聴衆の3グループに分け、肯定側・否定側のそれぞれ立論・反論の役割に沿った一連のプロセスの中で討論をさせる。最後に聴衆に総合判定させる。立論側の論理的思考・表現の重要性や反論側の陳述（表現）方法・説得方法を学ばせ、客観的視点・姿勢を体験させる。 |
| ⑤看護実践自己評価と継続看護意識付けのための看護サマリー作成指導 | 平成15年4月～現在に至る | 臨地実習最終週に、患者基本データおよび看護計画立案後のプラン別実践・評価をSOAP形式の看護サマリーにまとめさせ、最終カンファレンスで発表させている。臨床指導者・看護師長・看護教員・グループメンバーによる概評や個別アドバイスを受けることで看護計画・看護実践を詳細に自己評価できる。さらに、サマライズ能力が高まり、今後の方向性に目を向け、継続看護の意識付けに役立つ。 |
| ⑥ホリスティックな看護問題抽出法の指導 | 平成15年4月～現在に至る | 臨地実習で、患者の情報取集、分析、看護問題抽出は、ゴードンの11の機能的健康パターンのツールを使用してアセスメントさせる。また人型の全体像に疾患名、障害部位と状態、年齢、性別、家族関係、社会的背景を入れ、11のパターンのまとめのフラグを周囲に配置し、全体像で看護問題を捉えさせる。さらに、パターン同士の関連性を線と言葉を使って説明的に図示し対象を人間としてホリスティックに捉えることに重点を置かせ、看護計画カンファレンスで発表させる。 |
| ⑦高齢者の‘不自由さ’体験学習指導 | 平成18年4月～現在に至る | 学生は高齢者体験グッズ（ゴーグルやブーツ、膝関節プロテクター）を装着し、学内や校庭を歩行することで、加齢による身体的機能低下を体験する。またこれらを装着した状態で、杖歩行、段差歩行、椅子に座る、新聞を読むなど日常生活を試みることで高齢者側から見る施設の便利さ・不便さを体験し、環境がどうあるべきかに目を向けるよう指導している。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（続き） | | |
| ⑧認知症高齢者のための看護媒体作成指導 | 平成18年4月～<br>現在に至る | 臨地実習中の学内日に認知症高齢者のへ生活指導、コミュニケーションの活性化、日常記憶の明確化等を目的としたパンフレット、カレンダー、投薬確認表、あいうえお表等の看護媒体を作成するよう指導している。学生は対象高齢者の日中の覚醒が促され、コミュニケーションの円滑化が図られるなど当初の予測以上の看護媒体の使用効果を体験する。 |
| ⑨マルチメディア機器を活用した授業 | 平成18年4月～<br>現在に至る | 講義内容の理解をより高める効果と学生の興味を引き出すため、授業はパワーポイントで重点項目を明示・強調し、さらに授業内容に関連したDVDやVHSを直後に供覧させ最大限に視聴覚による理解を図る。この方法は、高齢期の身体機能の加齢変化、転倒のアセスメント、褥瘡ケア、摂食・嚥下ケア、脱水・浮腫等の単元で専門基礎知識をより深めることに役立つ。 |
| ⑩国家試対策プリントとガイダンス | 平成18年4月～<br>現在に至る | 老年看護援助論授業において単元終了ごとに、国家試験対策を主旨とした虫食い問題による復習問題を課して提出させる。この方法により、学生は国家試験前に1年分の教科書の復習をスピーディに行うことができ、そのままスムーズに自己学習に取り掛かることができている。国試直前には、重要項目の振り返りをする。 |
| ⑪転倒転落シートの作成とアセスメント指導 | 平成18年4月～<br>現在に至る | 臨地実習で、学生が個々の受け持ち患者の転倒・転落リスクを図示し把握できるように、小さな人型を中心に、身体機能的因子、日常生活様式因子、心理的因子、社会的因子を分けて記入・図示できるプリント教材を作成し配布している。リスク情報は詳細に収集・整理され活用されている。 |
| ⑫　授業開始時の「図に書かせる」重視した確認課題 | 平成20年 4月～<br>現在に至る | 毎回授業開始時に、教科書・文献に載っている心音の聴取部位の図や、身体における水分出納バランス（供給と排出）の目安のグラフ、体循環と心不全の症状の図、嚥下の模式図等、図に描くことで正確な知識の定着が得られるものを10分程度で模写させ、提出させている。 |
| ⑬　腹部温罨法・腹部マッサージの排便促進効果の体験演習と実習時の指導 | 平成20年4月～<br>現在に至る | 高齢者に多くみられる便秘への解消効果を目的に、『下腹部への温罨法』と『「の」の字マッサージ』を演習項目に取り入れ、実際に実習時にも指導している。効果は顕著であり、高齢患者の方から謝意を述べられることが多々あり、学生の意識向上に役立っている。 |
| ⑭　リラクセーション演習と実習時の指導 | 平成20年 4月～<br>現在に至る | 『手浴』、『足浴』など清潔ケアとして行われる看護手技を、高齢者へのリラクセーション効果を目的に演習項目としている。『手浴』では、看護師役学生が患者役の学生の母指の内側をベースン内で軽く圧迫し、『足浴』では花びらを浮かせるなどアロマセラピーを模して行っている。高齢患者の方から謝意を述べられることが多々あり、学生の意識向上に役立っている。 |
| ⑮（高齢者の）良性肢位保持演習 | 平成26年 4月～<br>現在に至る | 高齢者の良性肢位を保つには、基本的なボディメカニクスの実践・体験的知識が必要なことから、実習前に①椅子の場合、②車椅子の場合に分けて「90度ルール」の体験演習を行う。足関節、膝関節、股関節を90度になるように座位を保持し、大腿部への体圧や各関節への負担感が少ないことを実体験する。 |
| ⑯　臨地実習における『おくすりカレンダー』『ピルケース』作成指導 | 平成26年 4月～<br>現在に至る | 高齢者のポリファーマシー等に対処するには、基本的に正しい内服薬管理が重要との視点で、実習中に受け持ちナースとの連携で可能な限り個別の『おくすりカレンダー』『ピルケース』を作成するように指導している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ①講義用パワーポイント配布資料（再掲） | 平成18年4月～<br>現在に至る | 老年看護学概論・援助論の授業ごとのまとめと重要箇所を強調し、関連文献からの情報を補足した配布資料を作成し、2回生に配布している。特に学生が受講中に自筆で記入できる空白部分を残すなど、工夫している。特に、高齢者の皮膚の乾燥の年内変動、疥癬のヒゼンダニのヒトの皮膚における生態、転倒・転落と骨折の関連、認知症等自らの研究内容と図を資料中に加筆し、より関心高める工夫をしている。 |
| ②実習ガイドライン | 平成18年4月～<br>現在に至る | 実習病棟の1日のスケジュールをもとにした、 3週間の実習スケジュールを病棟オリエンテーション時の資料として作成し配布している。学生は、医師、看護師、理学療法士、栄養士など他職種と関わり看護計画を立案・修正・実施するが、どの時期にどのようなアドバイスを受けるとよいか、1日の実習（看護）の流れのイメージトレーニングなど実習ガイドラインとして活用されている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 2　作成した教科書、教材、参考書（つづき） | | |
| ③アセスメント用患者全体像（再掲） | 平成18年4月～<br>現在に至る | 老年看護学実習において、学生が個々の患者のアセスメント結果を全体像で把握できるように人型プリント教材を作成し配布している。特に、マージョリー・ゴードンの11の機能的健康パターンによるアセスメント結果を記入することで、学生が看護計画を立案する上で患者を全体像で捉える効果がみられている。 |
| ④国家試対策問題集（再掲） | 平成18年4月～<br>現在に至る | 2回生1年分の老年看護援助論授業における単元ごとのまとめの問題プリントは、そのまま国家試験対策用復習教材として利用されている。主旨は、記憶の定着としているため虫食い形式の問題が殆どである。この方法により、学内での国家試験模擬試験の老年看護領域の平均点は他の領域より高い。 |
| ⑤　実習要項作成 | 平成18年 4月～<br>現在に至る | 専門領域老年看護学における実習要項①高齢者看護学実習、②高齢者体験（施設）実習、③統合実習の3種について年度ごとに修正・加筆しながら作成している |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ①滋賀医科大学医学生・看護学生実習指導 | 平成5年4月～<br>平成13年3月 | 皮膚科診療科において、医学科および看護学科実習生に対し、診察室設備、消毒法、外来で行われるバイオプシーやパッチテスト、真菌検査などの検査準備（必要物品）、諸検査実施上の注意事項、さらに光線治療、ドレッシング法などの基本的オリエンテーションを行った。また看護学生には外来実習臨床指導者として皮膚科実習指導を行った。 |
| ②京都府看護協会看護師確保定着推進事業研修　看護教育・シンポジスト（再掲） | 平成21年8月 | 京都府看護協会が行っている看護師確保定着推進事業研修において、「看護教育のあり方」についてのシンポジウム/シンポジストとして大学教育現場から所見を述べた。 |
| ③京都府看護学校連絡協議会研修会座長 | 平成21年10月 | 京都府下の大学・短大・看護学校の看護教員を対象とした平成21年度京都府看護学校連絡協議会研修会を「国際看護学」のテーマで企画・開催し、座長を務めた。 |
| ④京都府看護協会平成22年度京都府看護教員養成講習会老年看護学担当講師 | 平成22年4月～12月 | 都府看護協会・滋賀県看護協会が共同で行っている看護教員養成コースにおいて、平成22年度老年看護学の講義・演習を1年間担当し、単　位修得後の修了発表会において概評を述べた。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ①京都市市民公開講座『高齢者の皮膚のかさかさ・かゆみとQOL』講演 | 平成20年10月 | 平成20年度の京都市市民公開講座において、高齢者のQOLを高めるための日常生活の中での皮膚ケアについて講演した。そのあと会場の質疑応答に答え、皮膚の洗い方、保湿など具体的な方法をデモンストレーションした。 |
| ②京都市市民公開講座『高齢者の転倒防止の方法』講演 | 平成21年11月 | 平成21年度の京都市市民公開講座において、高齢者のQOLに著しい影響がある転倒・転落についてその実情と予防方法について講演した。特に生活の中での注意点について詳しく説明し、そのあと質疑応答を行った。 |
| ③滋賀医科大学研究者海外渡航助成金獲得 | 平成16年3月 | 英国Wales 州看護協会会長の招待により「皮膚看護の専門性における日英比較」の課題で、University of Wales, Cardiff 校医学部附属皮膚科病院およびSwansea校医学部附属病院皮膚科外来の皮膚専門看護師を訪問・インタビューした。また Wales 州看護協会を訪問見学し、協会会長をインタビューし報告した。<br>研究者:中野雅子　助成金額:300,000円 |
| ④京都府看護協会看護師確保定着推進事業研修　看護教育・シンポジスト（再掲） | 平成21年 8月 | 京都府看護協会が行っている看護師確保定着推進事業研修において、「看護教育のあり方」についてのシンポジウム/シンポジストとして大学教育現場から所見を述べた。 |
| ⑤京都府看護学校連絡協議会研修会座長 | 平成21年10月 | 京都府下の大学・短大・看護学校の看護教員を対象とした平成21年度京都府看護学校連絡協議会研修会を「国際看護学」のテーマで企画・開催し、座長を務めた。 |
| ⑥平成23年度科学研究費助成事業<br>（学術研究助成基金助成金）基盤C交付金獲得 | 平成23年～平成25年 | 研究課題名：Well-being Picture Scale 日本語版作成の試み（課題番号 23593494）交付決定額：5,330,000円<br>研究代表者：中野雅子　研究分担者：椎野顕彦、江頭典江 |
| ⑦大阪府　特別養護老人ホーム「みどりの里」職員研修会講師 | 平成24年9月 | 特別養護老人ホームみどりの里職員（介護士）の研修会において、「高齢者の身体的特徴」「 よくみられる疾病の概要」「健康状態の観察方法」「 医療介入の必要性」について講演し、質疑応答を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項（つづき） | | |
| ⑧阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット主催<br>公開講座フェスタ講師 | 平成24年11月 | 大阪、神戸、奈良の大学・研究機関共催による生涯学習のための平成24年度公開フェスタにおいて、『老年期の転倒とQOL』をテーマに講演を行った。 |
| ⑨京都学園大学健康医療学部主催市民公開講座開催協力 | 平成29年11月 | 地域住民への公開講座主題希望アンケート調査で最も多かったテーマは‘認知症’であった。講演は佐藤眞一氏（大阪大学大学院教授）に依頼され、11月12日に「認知症“不可解な行動”には理由（ワケ）がある」と題して開催された。本人・家族への理解、暖かさが感じられると好評であった。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1.皮膚の測定・評価法バイブル/第1部第13章第2節「高齢者における身体部位別の表皮水分量.油分量の測定」 | 共著 | 平成25年度10月発行 | 技術情報協会（全740ページ） | 高齢者の皮膚の臨床像は乾燥し、ひび割れ、落屑、掻破痕も見る。皮膚保湿機能には皮脂、セラミドの角質細胞間脂質と天然保湿因子の3因子、即ち脂質が関与する。そこで皮膚油分が最も失われる入浴ケアに着目し、高齢者の皮膚特性として上下肢、体幹、背部など身体部位により乾燥の度合いに差があることから、身体部位別に皮膚水分量、油分量、PHを入浴前後に時系列で測定し比較検討した。<br>（共著者：永岡庸平、松坂始子、加藤まどか、宮本卓事、勝又亨祥、間地大輔、田中敏幸、米山聡、中野雅子、古田祐子他121名） | P.413～416 |
| 2.高齢者のこころ・からだ辞典（第6章認知症　11スクリーニング（日常生活）～12スクリーニング（認知機能） | 共著 | 平成26年度9月発行 | 中央法規（全626ページ） | 日本老年行動学会監修による「高齢者のここ　ろ・からだ辞典」の第6章認知症の11日常生活機能、12認知機能のスクリーニングについて分筆を担当した。11では、認知症スクリーニングのADL評価法としてN式老年者用日常生活動作能力評価尺度、手段的日常生活動作（IADL）、Physical Self-Maintenance Scale(PSMS)、認知症のための障害評価票（Disability Assessment for Dementia:DAD）を、12では、わが国で一般化されよく認知症高齢者を対象に使用されている知的機能評価スケールを質問形式MMSE、HDS-Rと観察形式であるFAST、柄澤式「老人知能の臨床的判定基準」、CDRを紹介した。<br>（共著者：大川一郎、佐藤眞一、岡本多喜子、箕浦とき子、秋山美栄子、谷口幸一、峯尾武巳、大山博史、中野雅子、成本迅他146名） | P.172～175 |
| 論文 | | | | | |
| （学術論文） | | | | | |
| 1.痴呆性高齢者のコミュニケーション活動と日常生活動作（ADL）の関連 | 単著 | 平成15年3月 | 滋賀医科大学大学院医学系研究科修士論文（85頁） | 痴呆性高齢者の言語コミュニケーション活動の日常生活動作への有用性を検証する目的で、56名の言語コミュニケーション活動頻度とADL評価を測定し関連をみた。評価法間のCronbach’s α係数＝.88で、ADLの『移動』以外のすべての項目が1%水準で言語コミュニケーション活動頻度と正の相関関係にあることを検証した。またコミュニケーション活動は、生活に必要な場面で使用されていたことから、コミュニケーション活発化への援助は日常生活動作支援に有用であるとの示唆を得た。 | |
| 2.アトピー性皮膚炎患者へのスキンケア指導－5つの要素の比較分析－<br>（査読付） | 単著 | 平成15年9月 | 皮膚の科学<br>（4巻・5号、全108頁） | 7歳から42歳までの男女成人期アトピー性皮膚炎患者59名に対し看護師によるスキンケア指導を試み、5つの要素『洗浄回数』『適度な力』『石鹸使用』『綿タオル使用』『かける時間』と皮膚症状改善の関連をみた。5つの要素すべてが患者の生活に定着し（P＜.001）、患者の83%に皮膚症状改善をみた。そのうちの定着率が低かった要素『適度な力』と『かける時間』が、症状改善には有意に（P＜.05）関連していた。 | P.109-121 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3.アトピー性皮膚炎の治療マーカー：皮膚乾燥とフィラグリン<br>（査読付） | 共著 | 平成17年2月 | 皮膚の科学<br>（4巻・5号、全108頁） | 成人期アトピー性皮膚炎患者の皮膚乾燥をコントロールするには、脂質・水分両面の治療が重要である。皮脂腺の萎縮を合併している群には全身に脂質・水分を補充する。しかし、正常角層にフィラグリンの発現低下がある群には保水する。本研究では63例中23例（24%）であった。（P.13-14、Ⅰ・Ⅱ保湿ケアとステロイド治療に関する部分）　（共著者：杉浦久嗣、中野雅子） | P.13-14 |
| 4.成人期アトピー性皮膚炎患者におけるセルフケア意識の検討<br>（査読付） | 共著 | 平成17年3月 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル<br>（3巻・1号、全125頁） | 成人期アトピー性皮膚炎患者の皮膚セルフケア意識の傾向を明らかにするため、12歳～62歳の男性17名、女性22名合計45名に20項目の自記式質問紙調査をした。因子分析により、「確信を持てない不安」「共同体制への願望」「現行方法を肯定する心理」「自己管理への意思表示」「心理的負荷の自覚」の5因子を抽出し、患者のセルフケア意識は高く、現行法を肯定する一方で不安感と負担感が強く、協同ケアへの願望があることが明らかとなった。（共著者：中野雅子、宮松直美） | P.75-79 |
| 5.本態性高血圧患者におけるストレス認知過程の特徴<br>（査読付） | 共著 | 平成17年9月 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル<br>（3巻・1号、全125頁） | 高血圧者のストレス認知過程の特徴を明らかにすることを目的に、38名の高血圧患者（平均年齢60.2歳±9.4）と33名の正常者（平均年齢58.0歳±6.9）を対象に、ストレス事象への脅威性と統制可能性の評価、自覚的ストレス反応GHQ、体験したストレッサーについて比較調査した。GHQは高血圧者が有意に高く、体験的ストレッサーに差はなく、ストレス認知評価は高血圧者が脅威性をより高く評価していた。統制可能性評価に差はなかった。結果から高血圧者には、リラクセーションと個々人の評価を変容する認知療法の有用性も示唆された。（共著者：宮松直美、徳川早知子、中野雅子、齋藤稔正） | P70-74 |
| 6.認知症高齢者の‘その人らしさ’に関する一考察　ーコミュニケーション活動とADL評価からー<br>（査読付） | 単著 | 平成19年9月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（32号、全156頁） | 60～97歳の男性8名、女性46名計56名の認知症高齢者のコミュニケーション活動を参加観察法によりADLの場面ごとの頻度を評価し、コミュニケーション活動高頻度群と低頻度群/ゼロ群で生活自立度総合点に有意差があるかウィルコクスン符号付き順位検定した。その結果、コミュニケーション活動高頻度群のADL総得点は低頻度群より有意に高かった（P＜.05）。またADL項目のうち、「食事」「移動」は他の項目より高く保たれていた。測定値を主成分分析したところ、固有値1.0以上の第2主成分までが累積寄与率76.9%を確保した。第1主成分を「支援必要度」、第2主成分を「残された機能の方向」と命名した。またADLの「移動」は、どの項目とも正の相関はみられず、‘その人らしさ’を示す項目であるとの示唆を得た。 | P73-80 |
| 7.看護学生が老年看護実習で体験した「転倒・転落」に関連するクリティカルインシデントの分析<br>（査読付） | 共著 | 平成19年9月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（33号、全102頁） | 老人施設で生活する高齢者47名の皮膚の保湿に関する知見を得るため、後頸部、上腕内側、下腿外側3ヵ所においてドイツ製一体型測定器GmbHを使用して皮膚水分量・油分量・PHを測定した。これらを看護学生22名と比較検討したところ、後頸部、上腕外側、下腿外側すべてにおいて高齢者の皮膚水分量・油分量が1%水準で有意に低いとの結果を得た。また高齢者の後頸部水分量は上腕内側より有意（p＜.000）に高く、油分量も有意（p＜.001）に高く、PHには差がなかった。これらのことから高齢者の皮膚乾燥には油分補給が有用であるとの示唆を得た。 | P.57-60 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 8.養護施設で生活する高齢者の皮膚の保湿に関する基礎研究－身体部位別皮膚水分量・油分量の検討－<br>（査読付） | 単著 | 平成20年9月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（33号、全102頁） | 老人施設で生活する高齢者47名の皮膚の保湿に関する知見を得るため、後頸部、上腕内側、下腿外側3ヵ所においてドイツ製一体型測定器GmbHを使用して皮膚水分量・油分量・PHを測定した。これらを看護学生22名と比較検討したところ、後頸部、上腕外側、下腿外側すべてにおいて高齢者の皮膚水分量・油分量が1％水準で有意に低いとの結果を得た。また高齢者の後頸部水分量は上腕内側より有意（p＜.000）に高く、油分量も有意（p＜.001）に高く、PHには差がなかった。これらのことから高齢者の皮膚乾燥には油分補給が有用であるとの示唆を得た。（P.57-60） | |
| 9.軽度認知障害（MCI）の概念と診療周辺の動向<br>（査読付） | 単著 | 平成21年7月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（34号、全155頁） | 認知症高齢者が急激に増加する中で軽度認知障害Mild Cognitive Impairment（MCI）の概念化が進み、注目されている。混沌としていたMCI概念化の歴史中で、Petersonによる新しい概念「正常と認知症の中間に位置する」「本人または家族が認めるもの忘れがある」「日常生活能力は自立あるいは軽度障害を認める」に従って、MCIと加齢に関連する認知機能低下、MCI診断からみた認知症の予測、MCI診断のプロセス、早期診断の意義と告知の課題について文献をレビューし、今後の認知症診断の方向性を考察した。（P.39-43） | |
| 10.高齢者の入浴後の皮膚油分・水分の回復プロセスと皮膚乾燥傾向に関する研究<br>（査読付） | 単著 | 平成21年7月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（34号、全155頁） | 施設で生活する高齢者の皮膚の保湿に関する知見を得るため、ドイツ製一体型測定器GmbHを使用して74～98歳の男性7名、女性26名の入浴前、入浴後30分後、1時間後、2時間後、3時間後における後頸部、上腕内側、下腿外側の3ヵ所の皮膚水分量・油分量・PHを測定し検討した。高齢者の皮膚乾燥においては、入浴後の油分は3時間以上入浴前の値に戻らず、入浴後3時間の皮膚水分量は、入浴前の値より有意に低かった（p＜.001）。これらにより、入浴直後の油分補給が有用であるとの示唆を得た。 | P.75-81 |
| 11.認知症高齢者との交流場面における看護学生の心理的特徴<br>-プロセスレコードによる内容分析-<br>（査読付） | 共著 | 平成22年3月 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル<br>（8巻・1号、全75頁） | 看護学生の認知症高齢者との交流場面の心理的特徴を明らかにするため特別養護老人ホームで実習した37名の学生が記録した交流場面のプロセスレコード記録を、質的帰納的に分析した。最終的に【訴えを無視せずよく聞く】【納得してもらえることを大切にする】【必要なことを積極的に声かけする】【自尊心が保てるようにかかわる】【その人の趣味・疾患の特徴をよく知っておく】の5つのカテゴリーを抽出した。看護学生の心理には、認知症高齢者の意志や納得をよく確認すること、自尊心や特性を尊重し、困難感や不安感から、自己判断・対応形成へと変化するプロセスがみられた。（P34-37）（共著者：中野雅子、徳永基与子、西尾ゆかり） | P34-37 |
| 12.看護学生間の演習における看護師役・患者役体験の学びと課題<br>（査読付） | 共著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（35号、全　240頁） | 臨床看護実習直前の演習として、基礎看護学で学んだ「ベッドから車椅子への移乗」「体位変換」について再度履修項目としてあげ、学生が「看護師役」「患者役」を交互に体験した。履修後の学びについての記述レポートを質的帰納的に分析した。最終的に【既習との比較】【新方法への挑戦】【適用可能性】【危険性の予側】【重要事項の再確認】【改善への提言】【学びの痔核】の7つのカテゴリーが抽出できた。既習項目を繰り返したことで、より客観的に技術練習を振り返り、他者への説明も可能となり、実体験による改善点を明らかにすることができていた。（共著者：中野雅子、伊藤良子、徳永基与子 ） | P101-107 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 13.妊娠期実習における看護学生の体験と学び<br>(査読付) | 共著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>(35号、全240頁) | 妊娠期実習の看護学生の学びについて、自由記述式レポートを現象学的解釈で分析した. 学生の学びは、＜人に支えられ＞＜知情意を駆使して学ぶ＞中で, ＜不安と喜びの中にいる母親＞を理解し, ＜母親を支えるスタッフ＞のケアの重要性に気づく場として体験していた。(P110-113、第Ⅴ章考察担当)　　(共著者:伊藤良子、中野雅子) | |
| 14.血圧測定の技術修得に向けた指導の検討-実験実習の検討から-<br>(査読付) | 共著 | 平成22年5月 | 看護教育研究学会誌<br>(2号1巻、全65頁) | 看護基礎教育での血圧測定の実験実習の効果を検討した。指導のポイントは、<血液の方向と重力の方向を考える刺激(または事実)を送る><意識の有無による筋肉の動きの違いを考える刺激(または事実)を送る><酸素の需要と供給を考える刺激(または事実)を送る><静脈血の血流と筋肉のポンプ作用を考える刺激(または事実)を送る><マンシレットの緩みと加える圧力の変化を問う刺激(または事実)を送る>であった。(P54-55、第Ⅴ章考察担当)(共著者:徳永基与子、中野雅子) | P54-55 |
| 15.分娩期実習における看護学生の体験と学び<br>(査読付) | 共著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>(35号、全240頁) | 看護学生の分娩期実習の学びと体験を知る目的で18名の自由記述の課題内容を質的に分析した。その結果、『緊張の中で、母親の苦しみと産む意思が人々によって支えられる中で、出産の喜びに包まれる場が現出し、それらの場全体から生命誕生への畏敬の念に満たされる』が抽出された。(P126-128、第Ⅴ章考察担当)(共著者:伊藤良子、中野雅子) | P126-128 |
| 16.認知症高齢者の在宅療養における介護家族のジレンマへの看護学生の意識<br>(査読付) | 単著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>(35号、全240頁) | 看護学生が老年看護学援助論の中で、介護家族のジレンマについて学習し、介護家族のジレンマをどう捉えたかについて、自由記述式した。これらを質的帰納的に分析したところ【家族の形態の変化と介護】【社会通念と介護負担】【社会資源の活用可能性】【看護者の役割】【介護者自身の意識】の5カテゴリーに統合できた。また社会の高齢化と、進行し続ける核家族化が深刻な課題を生じていると理解し、看護者には信頼関係を結び、社会資源を提供する責任があると学び、看護実践の中で活かし検討していくことが課題としていた。 | P.115-122 |
| 17.看護学生の老年看護学実習レディネスとしての認知症高齢者イメージの構造<br>(査読付) | 単著 | 平成22年6月 | 看護教育研究学会誌<br>(2号･1巻、全65頁) | 臨地実習前の看護学生が持つ認知症高齢者イメージを、構造的に明らかにすることを目的に4SD法により認知症高齢者イメージを測定した。Cronbach's α係数=.805であった。SD13項目について因子分析し、4因子が抽出され≪人柄イメージ≫≪社会性イメージ≫≪生活感覚イメージ≫≪自己表現イメージ≫と命名した。看護学生は認知症高齢者を人柄や社会性イメージではより肯定的に捉え、受容的な意識を維持し、反面生活感覚や自己表現イメージについては低く評価し否定的であった。 | P.15-21 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 18.高齢者の皮膚のかさかさ・かゆみとQOL | 単著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>（35号、全240頁） | ＜高齢者のドライスキン（老人性乾皮症）＞、＜掻破による表皮バリア機能の崩壊＞、＜日常的なスキンケアの必要性と方法＞についてまとめた。皮膚ケアの基本的な方法としては、「日ごろより健康的な生活を心がける」、「継続的なスキンケア即ち皮膚に関心を持って毎日ケアをする」、「入浴後の保湿ケアは皮膚に潤いがある30分以内に行うのが理想」、「使用する石鹸類や保湿ケア用品は、自分の皮膚に合うものを選択する」とした。 | P.15-19 |
| 19.Emotional Experiences of the Community- dwelling Elderly With Mild Cognitive Impairment and Their Families（地域で生活する軽度認知機能障害を有する高齢者とその家族の心理的体験）<br>（査読付） | collaboration | 2012/11/1 | The Journal Neurospychological Trends<br>（12 Nov-12 156 Pages） | 地域で生活する軽度認知機能障害高齢者とその家族の心理的体験を明らかにすることを試みた。参加者は、高齢男性とその妻、高齢女性と義理の娘の二組。半構造化インタビューを用いてデータを収集し、質的帰納法を用いて分析した。合計212のコードが抽出され、37のサブカテゴリに分類された。最後に、記憶喪失に関する確認、隣人関係の回避、家族に対する信頼の変動、健康的な生活を維持したいという欲求の4つのカテゴリーを得た。<br>共著者：中野雅子、佐藤眞一、中原純 | P.117-124 |
| 20.独居高齢男性の心理的適応プロセスに関する質的研究―3事例の分析を通して―<br>（査読付） | 共著 | 平成25年3月 | 日本老年行動科学会誌 | 独居高齢男性の心理的適応プロセスを検討するために、インタビュー調査を実施した。対象者は、死別（事例A）および離別（事例B）をきっかけとして独居を始めた2名、結婚経験がなく若いころから独居である1名（事例C）の高齢男性3名であった。調査内容は、①独居という選択を行った心理・社会的背景、②独居となった後の困難と対処であり、半構造化面接によって尋ねた。TEMを応用した事例的分析の結果、死別や離別をきっかけとして独居を始めた高齢男性の場合、配偶者に代わるサポート授受の対象が心理的適応に重要な役割を果たしていることが示唆された。また、事例Cの分析を通して、他者との関わりを望まず、関わらないことで心理的適応に至っているケースがあることが示唆された。今後は、社会的な関わりに対する個人の選好も考慮し、分析を行う必要がある。（共著者：中原純、中野雅子、佐藤眞一） | |
| （商業誌論文） | | | | | |
| 1.地域での 自活を選んだ頸髄損傷の人たちと出会って<br>（執筆依頼-再掲） | 単著 | 平成9年2月 | 医学書院『看護教育』<br>（38巻12号、全110頁） | Canada British Columbia州は、頸髄損傷患者に対し、急性期治療と同時に受傷直後から将来的に地域で自活をすることを前提としたシステマティックなリハビリテーションを開始する。この社会的取り組みについて視察し報告した。またグループホームで生活する男性1名、女性2名を訪問インタビューし、住居・移動手段・道路・ケアワーカー等人的資源、音声入力パソコン等社会資源についても報告した。（P1036～1037） | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (商業誌論文)つづき | | | | | |
| 2.成人期アトピー性皮膚炎患者への生活指導－セルフケアの確立をめざして－<br>(執筆依頼-再掲) | 単著 | 平成13年6月 | へるす出版『臨床看護』<br>(27巻7号、全145頁) | 成人期アトピー性皮膚炎患者の皮膚症状コントロールには、患者による日常生活での皮膚のセルフケアの確立が求められる。疾患の特徴には「遺伝性」「アレルギー性」「慢性化」があるが、これらに基づいて、日常的なスキンケア法として、1)皮膚の洗浄方法、2)外用方法、3)生活上の注意点についてセルフケア確立を目標にして論述した。 | P1074～1078 |
| 3.高齢者の皮膚生理～特に表皮水分量、油分量の変化～<br>(執筆依頼) | 単著 | 平成27年2月 | 技術情報協会<br>『COSMETIC STAGE』<br>(Vol.9,No.3) | 介護施設で生活する71歳～98歳までの男性7名、女性41名(平均年齢84.4±5.2歳)の高齢者と看護系大学性30名(全員女性)の協力を得て、皮膚油分量・水分量を1)身体部位別に測定し、若年層との比較分析を試みた調査、2)入浴前より入浴後3時間までの経時的変化を測定・分析した調査を紹介し、高齢期にある人々の皮膚生理、特に皮膚水分量・油分量の変化の特徴について述べた。 | (P1～5) |
| その他 | | | | | |
| 1.アトピー性皮膚炎患者に対する効果的なスキンケア指導の一試案 | 単独 | 平成12年7月 | 第26回日本看護研究学会学術集会<br>(幕張メッセ国際会議場) | 7歳から42歳までの男女59名の成人期アトピー性皮膚炎患者に対し、外来処置室でナースによるスキンケア指導(皮膚洗浄方法、外用法)を試みた。スキンケア指導の効果を検証するため、2週間後質問紙調査を行い5つの指導要素『洗浄回数』『力の入れ具合』『石鹸使用』『綿タオル使用』『かける時間』と症状改善の関連をみた。『力の』と『時間』が、症状改善には有意に関連していた(P＜.05)。 | |
| 2.Practical instruction of skin care by nurse in the management of atopic dermatitis<br>(アトピー性皮膚炎の皮膚管理における看護師によるスキンケア実践指導) | 単独 | 平成13年6月 | 23rd Quadrennial ICN Congress<br>(ベラセンター／コペンハーゲン) | アトピー性皮膚炎患者に対する看護師によるスキンケア指導の有用性について研究結果を報告した。加えて看護師によるマンツーマンの指導には、誤った洗浄方法の改善やメンタル面へのサポートなどの効果もあり、スキンケア看護の専門性確立の必要が極めて高かった。 | |
| 3.アトピー性皮膚炎患者へのスキンケア指導-エビデンスを志向する試み第Ⅱ報－ | 単独 | 平成14年8月 | 第28回日本看護研究学会<br>学術集会<br>(パシフィコ横浜) | アトピー性皮膚炎患者の効果的スキンケアの知見を得るための研究第2報として、30名に看護師によるスキンケア指導を試み、質問紙で患者に指導内容が定着するかをみた。88%の患者が症状の軽減を自覚し、指導内容を正確に記憶し、生活の中で実施していた。 | |
| 4.The relationship between activities of the verbal communication and daily living for the old with dementia<br>(認知症高齢者の言語コミュニケーション活動と日常生活動作との関連 | 単独 | 平成16年8月 | JANS第5回国際看護学術集会<br>(ビッグパレット福島) | 認知症高齢者のコミュニケーション活動の頻度とADL能力の関連について参加観察法で測定調査し、ウィルコクスン符号付き順位検定したところ、コミュニケーション活動高頻度群のADLは有意に高かった(P＜.05)。さらに、ADL項目の「食事」は最も落ちにくい能力であり、「移動」は他の能力と相関していなかった。 | |
| 5.Study on behavior patterns of the elderly people with dementia<br>(認知症高齢者の行動パターンに関する一考察) | 単独 | 平成17年6月 | 24rd Quadrennial ICN Congress<br>(台北国際会議中心/台湾) | 認知症高齢者のコミュニケーション活動のADL場面別の頻度とADL能力について参加観察法で測定調査し、各測定値を主成分分析したところ、固有値1.0以上の第2主成分までが累積寄与率76.9%を確保した。第1主成分を「支援必要度」、第2主成分を「残された機能の方向」と命名した。またADLの「移動」は、どの項目とも正の相関はみられず、'その人らしさ'を示す項目であるとの示唆を得た。 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 6.成人期アトピー性皮膚炎患者における<br>疾病受容と皮膚の自己管理因子の解析 | 単独 | 平成17年7月 | 第31回日本看護研究学会<br>（札幌コンベンションセンター） | 成人期アトピー性皮膚炎患者の皮膚セルフケア意識の傾向を明らかにするため、12歳～62歳の男性17名、女性22名合計45名に20項目の自記式質問紙調査をした。その結果、因子分析により、「確信を持てない不安」「共同体制への願望」「現行方法を肯定する心理」「自己管理への意思表示」「心理的負荷の自覚」の5因子を抽出した。 | |
| 7.老年期に糖尿病と診断された<br>人の疾病認知の過程 | 共同 | 平成18年11月 | 日本老年看護学会第11回学術集会<br>（日本女子医大） | 老年期の糖尿病患者男女6名に対し疾病をどのように捉え生活しているかについて半構造化面接調査を実施した。その中で、老年期になってから糖尿病を発症した群では、＜状況を繰り返し反芻する＞＜生活変化への葛藤＞＜仕方ないとの諦め＞等、積極的な生活改善が困難な心理的葛藤がみられた。　（共同研究者：本郷美代子、中野雅子） | |
| 8.看護学生が体験した転倒・転落に関連するクリティカル・インシデントの分析 | 単独 | 平成18年12月 | 第27回日本看護科学学会<br>（神戸国際会議場） | 6名の看護学生が老年看護学実習中に「転倒・転落」に関連する事象に遭遇し、報告した。これらの記録物について、Flanaganのクリティカルインシデント分析で検討した。最終的に学生の＜自立心の尊重＞＜筋力低下の確認＞＜リハビリ意欲の支持＞＜注意不足の発見＞＜焦りへの警戒＞の学びの5カテゴリーを抽出した。 | |
| 9.アトピー性皮膚炎患者の角層水分含有量による皮膚保湿機能評価 | 単独 | 平成18年12月 | 第26回日本看護科学学会<br>（神戸国際会議場） | 男女の成人期アトピー性皮膚炎患者48名と、健常皮膚の7名の上腕内側角層水分含有量について測定し、比較・検討した。先天性の乾燥肌の成人期アトピー性皮膚炎患者は有意に乾燥していたが、先天性乾燥肌ではない成人期アトピー性皮膚炎患者は、健常者と角層水分含有量に有意な差はみられなかった。 | |
| 10.高齢者における身体部位別<br>皮膚保湿機能の検討 | 単独 | 平成19年12月 | 第27回日本看護科学学会<br>（東京国際フォーラム） | 介護施設で生活する高齢者47名の皮膚の保湿機能に関する知見を得るため、一体型測定器GmbHで後頸部、上腕内側、下腿外側の3ヵ所において皮膚水分量・油分量・PHを測定した。これらを看護学生22名と比較検討したところ、後頸部、上腕外側、下腿外側すべてにおいて高齢者の皮膚水分量・油分量が1％水準で有意に低いとの結果を得た。さらに部位別では、水分量、油分量とも後頸部が他の部位より有意に高かった。 | |
| 11.施設で生活する高齢者への入浴後のスキンケアに関する一考察－介護職者と看護職者の連携からー | 単独 | 平成20年10月 | 第39回日本看護学会　地域看護<br>（静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ） | 介護職者から看護師への相談の多い高齢者の皮膚の入浴前後の保湿ケアに関する知見を得るため、男性7名、女性26名（平均年齢81.25歳）に対し入浴前、入浴後30分後、1時間後、2時間後、3時間後に高齢者の後頸部、上腕内側、下腿外側の3ヵ所において皮膚水分量・油分量・PHを測定し検討した。入浴後の油分は3時間以上戻らず、入浴後3時間の皮膚水分量は入浴前より有意に低かった（$p<.001$）。入浴直後に油分を補給するケアの必要性が示唆された。 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 12.看護学生の養護施設における認知症高齢者との交流場面の特徴 | 単独 | 平成20年12月 | 第28回日本看護科学学会<br>（福岡国際会議場） | 看護学生37名が臨地実習前にどのように認知症高齢者をイメージし、初期の交流場面ではどのような特徴がみられるかについて、SD法によるイメージ測定と、プロセスレコードの内容分析をした。その結果、認知症高齢者を人柄や社会性イメージではより肯定的に捉え、反面生活感覚や自己表現イメージについては比較的低く評価した。交流場面のプロセスレコード記録の質的帰納的分析により、【訴えを無視せずよく聞く】【納得してもらえることを大切にする】【必要なことを積極的に声かけする】【自尊心が保てるようにかかわる】【その人の趣味・疾患の特徴をよく知っておく】の5つのカテゴリーを抽出した。 | |
| 13.施設で生活する高齢者の皮膚保湿機能の季節による変動の検討 | 単独 | 平成20年12月 | 第29回日本看護科学学会<br>（福岡国際会議場） | 介護施設で生活する高齢者の皮膚の乾燥状態の季節変化についての知見を得る目的で、男女49名の高齢者の後頸部、上腕内側、下腿外側の皮膚水分量、油分量、PHを1年間隔月測定し、その変化を検討した。その結果、秋から冬にかけて乾燥状態が高まり、春から夏にかけて軽減した。また季節の変動に少し遅れて皮膚の乾燥状態が変化することが明らかとなった。 | |
| 14.看護学生間の演習における看護師役・<br>患者役体験の学びと課題 | 単独 | 平成21年8月 | 第40回日本看護学会　看護教育<br>（岡山コンベンションセンター） | 老年看護学実習前の演習として、基礎看護学で学んだ項目「移乗」「体位変換」について再度項目としてあげ、看護師役・患者役体験を通じた学びと課題について検討した。男子2名と女子44名のレポートについて質的帰納的に分析したところ、【新方法への挑戦】【危険性の予側】【重要性の再確認】【改善点への提案】にカテゴライズできた。 | |
| 15.妊娠期実習における看護学生の体験 | 共同 | 平成21年8月 | 第40回日本看護学会　看護教育<br>（岡山コンベンションセンター） | 妊娠期実習の看護学生の学びについて、自由記述式レポートを現象学的解釈で分析し、報告した。学生は、＜人に支えられ＞学んでおり、＜知情意を駆使して学ぶ＞中で，＜不安と喜びの中にいる母親＞を理解し，＜母親を支えるスタッフ＞のケアの重要性に気づく場として体験を捉えていた。<br>（共同研究者：伊藤良子、中野雅子） | |
| 16.在宅療養における介護家族のジレンマへの看護学生の意識 | 単独 | 平成21年8月 | 第40回日本看護学会　老年看護<br>（ビッグパレット福島） | 看護学生が在宅療養介護家族のジレンマをどう捉えているか、どのような課題があるかについて、学習後自由記述レポートしたものを質的機能的に分析し、報告した。看護学生【家族の形態の変化と介護】【社会通念と介護負担】【社会資源の活用可能性】【看護者の役割】【介護者自身の意識】の5カテゴリーに統合できた。 | |
| 17.手術後回復への意欲を喪失した高齢患者に対する関わり- 看護学実習生の3週間の試み - | 単独 | 平成21年11月 | 第40回日本看護学会　地域看護<br>（長野県松本文化会館） | 一人の後期高齢者の女性が、肺葉切除術手術後順調な回復プロセス中、退院直前の食物嘔吐をきっかけに急激に闘病意欲を失い、臥床が続いた結果、寝たきり状態に陥った事例があった。看護学生が3週間の実習で担当し、意欲回復に働きかけ、散歩ができるまでに回復した。高齢者の今後多発することが予測される経過として事例報告した。 | |
| 18.高齢者のADL拡大に向けた鏡の活用<br>－入院患者の意欲を支える看護介入に効果的であった3事例から－ | 共同 | 平成22年9月 | 第16回日本老年行動科学会<br>（鹿児島県民交流センター） | 老年看護学実習で学生が受け持った入院患者の3事例でADLの自立に向けた学生による看護介入で鏡を活用した結果、鏡の活用は、介入方法の工夫により、高齢者の生活意欲を向上させた。また高齢者の反応は、「動機づけ」「自己効力感の向上」「自身の回復意欲の促進」が期待できた。看護用具に鏡を利用することは効果的である。<br>（共同研究者：江頭典江，中野雅子　） | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 19.Psychological experience related to the memorof an elderly woman with mild cognitive impairment<br>(軽度認知障害を有する高齢女性の記憶に関連する心理的経験 | 共同 | 平成23年6月 | The1st Global Congress for Qualitative Health Research<br>(Ewha Womans University/Seoul, Korea ) | 軽度認知機能障害の記憶と関連した心理的経験への知見を得るため、一人の女性高齢者に対し半構成的インタビューを行った。得られたデータは質的帰納的に分析した。その結果、101のコードが抽出され、またコードは12のサブカテゴリーへさらに最終的に4カテゴリー≪記憶への確信の変動≫≪日常生活(ADL)の活動低下を受理する準備≫≪毎日の生活の能力の再確認≫および≪記憶力悪化への防御手段開発≫へ統合された。<br>(共同研究者:Masako Nakano, Setsuko Ota, Aki Shimanouchi, Shinichi Sato) | |
| 20.The therapeutic nursing interview for the purpose of the early diagnosis of Alzheimer's disease in outpatient department<br>(外来におけるアルツハイマー病の早期診断のための看護治療的インタビュー:パートI) | 共同 | 平成23年7月 | Alzheimer's Association International Conference 2011<br>(Paris Expo Porte de Versailles) | 認知症早期診断部門である「もの忘れ外来」において、看護師による看護相談的予診を試みた結果を報告した。参加者は男性9名および女性14人の女性(平均年齢76.72 SD8.0)で、患者と家族から話された相談内容は、＜患者の日常生活＞および＜家族の中の問題の整理＞、＜認知症の早期検診と早期治療＞、また＜予防支援の必要性＞であった。 (共同研究者:Masako Nakano, Yoshitomo Shirakasi, Toshiyuki Watanabe, Akihiko Shiino, Aki Shimanouchi, Shinichi Sato) | |
| 21.米国版 The Well-being Picture Scale の我が国における使用可能性の検討～心理尺度としての信頼性・妥当性の検証 | 共同 | 平成23年11月 | 第6回日本応用老年学会<br>(神戸大学) | 米国で開発された Well-being Picture Scale (WPS)の日本における使用可能性を検討するため、男性22名、女性69名(平均年齢20.85歳)の大学生を対象に、GHQ28、多面的感情状態尺度を外部基準に関連妥当性を検証した。WPSのCronbach α係数は0.8、WPSとGHQおよび多面的感情状態尺度との項目間で高い相関性は検証できなかったが、WPSの合計得点と複数個の項目間で高い相関がみられ(P=.000)関連妥当性は確認できた。 (共同研究者:中野雅子 江頭典江, 中川威, 石岡良子, 権藤恭之, 佐藤眞一) | |
| 22. Emotional Experiences of the Elderly Persons with Mild Cognitive Impairment and their Family living in the Community.<br>(地域で生活する軽度認知機能障害を有する高齢者とその家族の心理的体験) | 共同 | 平成24年6月 | Second Global Congress for Qualitative Health Research<br>(Università Cattolica del Sacro Cuore<br>Milan, Italy) | 地域で生活する軽度認知障害とその家族の心理的な経験を明らかにするため、74歳の軽度認知障害の夫とその妻、80歳の軽度認知障害の姑とその嫁に半構造化面接インタビューを行った。得られたデータは質的帰納的に分析した。その結果、216のコードが抽出され、最終的に8つのカテゴリー"家族への負の感情" "社会参加の回避" "病気への感情" "行動願望""家族間の尊重"、"治療拒否の感情""生活防衛の気持ち""自己尊厳"に統合できた。(共同研究者:Masako Nakano, Aki Shimanouchi, Shinichi Sato, Jun Nakahara, Takeshi Nakagawa ) | |
| 23.The therapeutic nursing interview for the purpose of the early diagnosis of Alzheimer's disease in outpatient department:Part II<br>(外来におけるアルツハイマー病の早期診断をのための看護治療的インタビュー:パートII) | 共同 | 平成27年7月 | Alzheimer's Association International Conference 2016<br>(Tronto,Canada) | もの忘れ外来患者への治療的看護の必要性を明確にすることを試みた。参加者は男性8名女性17名(平均75.54±5.5歳)、MMSEの平均値は21.6、範囲は28-11で、MCI5例、AD10例、その他の認知症10例であった。問診によるすべてのデータを定性的に分析したところ、患者は自己の問題を監視し解決する行動を起こしていた。「記憶の喪失に対処」「家族との関係性の回復」「自己の尊厳を維持」「不安に対処」に分類でき、この能力は有効であると実証された。(共同研究者:Masako Nakano, Yoshitomo- Shirakasi, Toshiyuki Watanabe, Akihiko Shiino, Aki Shimanouchi, Shinichi Sato) | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| 22. Emotional Experiences of the Elderly Persons with Mild Cognitive Impairment and their Family living in the Community.<br>（地域で生活する軽度認知機能障害を有する高齢者とその家族の心理的体験） | 共同 | 平成24年6月 | Second Global Congress for Qualitative Health Research<br>（Università Cattolica del Sacro Cuore<br>Milan, Italy<br>） | 地域で生活する軽度認知障害とその家族の心理的な経験を明らかにするため、74歳の軽度認知障害の夫とその妻、80歳の軽度認知障害の姑とその嫁に半構造化面接インタビューを行った。得られたデータは質的帰納的に分析した。その結果、216のコードが抽出され、最終的に8つのカテゴリー"家族への負の感情" "社会参加の回避" "病気への感情" "行動願望""家族間の尊重"、"治療拒否の感情""生活防衛の気持ち""自己尊厳"に統合できた。（共同研究者：Masako Nakano， Aki Shimanouchi, Shinichi Sato, Jun Nakahara, Takeshi Nakagawa ） | |
| 23.The therapeutic nursing interview for the purpose of the early diagnosis of Alzheimer's disease in outpatient department:Part II<br>（外来におけるアルツハイマー病の早期診断をのための看護治療的インタビュー：パートII） | 共同 | 平成27年7月 | Alzheimer's Association International Conference 2016<br>（Tronto,Canada） | もの忘れ外来患者への治療的看護の必要性を明確にすることを試みた。参加者は男性8名女性17名（平均75.54±5.5歳）、MMSEの平均値は21.6、範囲は28-11で、MCI5例、AD10例、その他の認知症10例であった。問診によるすべてのデータを定性的に分析したところ、患者は自己の問題を監視し解決する行動を起こしていた。「記憶の喪失に対処」「家族との関係性の回復」「自己の尊厳を維持」「不安に対処」に分類でき、この能力は有効であると実証された。（共同研究者：Masako Nakano, Yoshitomo-Shirakasi, Toshiyuki Watanabe, Akihiko Shiino, Aki Shimanouchi, Shinichi Sato） | |
| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | | | | | |
| | | | | | |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | | | | | |
| | | | | | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　西田　直子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1）京都府立医科大学医学部看護学科の教授として担当 | | |
| 個人演習を組み入れた「看護基礎理論」<br>（専門科目，1年次配当，半期，必修1単位） | 2011年4月～2015年3月 | 看護理論の導入として，初期にナイチンゲール「看護覚え書」とヘンダーソン「看護の基本となるもの」の感想レポートの課題を与え，オーランド，ウィーデンバッグ，ペプロウ，トラベルビー，オレム，ロジャーズ，ロイなどの著書の要約発表を分担して自主的な学習を行い，最終には自己の看護観について文献を活用したレポート提出を課題し評価している． |
| ビデオ学習の活用，実技演習とレポートの活用<br>「生活援助論Ⅱ」<br>（専門科目，1年次配当，半期，必修2単位） | 2011年4月～2015年3月 | 基本的ニードにもとづく生活の援助技術として，寝衣とリネン交換，洗髪，清拭・足浴では，デモストレーション用のビデオを作製し学生にイメージを与え効果的な演習を行うとともに，自己学習を行う時にビデオ学習を行っている．また，同項目の場面をでデジカメで撮影し教育用のパソコンによるスライドショーにて復習できるようにしている．<br>基本的ニードにもとづく生活の援助技術として，寝衣とリネン交換，洗髪，清拭・足浴では，デモストレーション用のビデオを作製し学生にイメージを与え効果的な演習を行うとともに，自己学習を行う時にビデオ学習を行っている．また，同項目の場面をでデジカメで撮影し教育用のパソコンによるスライドショーにて復習できるようにしている． |
| 早期臨地実習体験<br>「基礎看護学実習Ⅰ」<br>（専門科目，1年次配当，半期，必修1単位） | 2011年4月～2015年3月 | 前期は看護活動の場を知る目的で1日を病院見学を行い，早期体験することで入院生活の環境の理解を深められるように指導した．また，後期は患者の生活状況の理解，コミュニケーションをはかる，バイタルサインの観察などを目的に4日間の病院実習を行い，患者のベッドサイドでの基礎的な看護技術を体験させるように指導した |
| ヘルスアセスメントの演習とレポートの活用<br>「ヘルスアセスメント」<br>（専門科目，2年次配当，半期，必修1単位） | 2011年4月～2015年3月 | 全身，意識，胸部（呼吸，循環），乳房，腹部，運動機能などのフィジカルアセスメントについて説明し，各症状の原因と誘因を学習した上で，入院時の病歴のとり方，ヘルスアセスメントについて説明し，情報収集や観察の方法を実技演習し，レポートを活用して評価を行なっている． |
| グループ学習の活用<br>「基礎看護学実習Ⅱ」<br>（専門科目，2年次配当，半期，必修2単位） | 2011年4月～2015年3月 | 看護学の基本で学んだ知識・技術・態度を統合し，健康障害のある人に適応した看護ができることを目的に12日間の病院実習を行い，1)健康障害とそれに伴う生活の変化を生理的・心理的・社会的に統合し理解できる，2）健康障害に伴う援助の必要性を判断し，日常生活援助を実施し評価できる，3）看護上の問題を明確にした上で，問題に対する解決策を計画することができる，ことを目標に指導した．また，看護問題の明確化に関しては，グループワークを重視し，学生の思考過程を深める演習を取り入れている． |
| 「卒業研究」<br>（専門科目，4年次配当，全期，必修3単位） | 2011年4月～2015年3月 | 看護学で学んだ知識・技術・態度を統合し，研究的視点に立ち，自己の問題点を明らかにして卒業研究を行い，論文を作成し，発表することができるように指導した． |
| 2）京都府立医科大学大学院保健看護研究科教授として担当 | | |
| 「ヘルスアセスメント特論」<br>（健康回復支援科目，1年次，半期，必修<br>1単位） | 2011年4月～2015年3月 | ヘルスアセスメントを行う上で必要な呼吸音聴取，心電図検査の方法と判断，筋電図の計測と判断，バイタルサインの測定方法と判断について実験的に演習している． |
| 「健康回復支援技術特論」<br>（専門科目，1年次，半期，必修1<br>単位） | 2011年4月～2015年3月 | 健康回復に関係する支援技術について人体機能，人間工学，看護科学の諸科学に基づいた技術論や方法論について先行研究を講義する．また，関心のある技術について科学的な実証研究方法を読解し，支援技術の開発と創造できる方法論を検討し，実際に検証し発表する． |
| 基礎看護学の「演習」<br>（専門科目，1年次，全期，必修<br>2単位） | 2011年4月～2015年3月 | 1年次は看護における疼痛緩和に関する文献の講読（英書を含む），職場適応に関する文献の講読（英書を含む）を行い，調査や論文を検討する．2年次は研究の理論的資料となる文献を講読しながら自己の思考を探求し，抽出されたデータの分析と諸理論との関係を検討した． |
| 研究方法論特論<br>（共通科目，1年次，半期，必修<br>1単位） | 2011年4月～2015年3月 | 研究方法論に対する概要と各研究デザインに関して講義を行い，自己の研究課題に関する論文を収集し，文献の整理方法を行い発表させ指導する．具体的には実験的研究方法について講義する． |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(続き) | | |
| 修士論文口頭試問③<br>「病院看護管理者のキャリア開発経験に関する研究」 | 2011年1月 | 本論文は，病院看護管理者のキャリア開発経験の特徴を明らかにすることにより，病院における看護師のキャリア開発を促進するための貴重な資料となる研究であった．研究方法は，質的研究で看護概念創出法を用い，病院の女性看護管理者(看護部長・副看護部長)17名を対象とした半構造化面接を行い実施された．その結果，膨大なデータから，678コード，209サブカテゴリ，74カテゴリ，10コアカテゴリが抽出され，病院看護管理者のキャリア開発の経験を説明する10概念が創出された．これにより，女性病院看護管理者が多様なライフイベントを経ながらキャリア開発を続けるためには，職業継続への強い意思と，職業に専念できる環境の獲得が必要であることが明らかになった．(修士学生名：西川秋子)<br>主査：西田直子<br>副査：中川雅子，岩脇陽子 |
| 修士論文口頭試問④<br>「遺伝相談室の遺伝カウンセリングにみる<br>看護職の関わりの検討」 | 2012年1月 | 研究目的は遺伝相談室の遺伝カウンセリングをとうして看護師の関わり，その必要計を明らかにする．対象者は7事例である．その結果，遺伝カウンセリングの満足度の確認，不安や葛藤の軽減と自己決定への支援，長期的フォローアップ，コーディネーターの役割であり，今後の課題として看護師の遺伝学の習得，療育や日常生活の援助の習得，フォローアップ体制の充実が示唆された．<br>(修士学生名：高井美有)<br>主査：園田悦代<br>副査：西田直子，堀井たづ子 |
| 修士論文口頭試問⑤<br>「経験豊かな看護師の非効果的急変対応に内在する重いと行動」 | 2012年1月 | 研究目的は看護師が外国人患者に実践しているコミュニケーション技術を明らかにすることである．対象者は外国人患者を看護した経験のある看護師19名で，半構成面接を行い，会話の内容を分析した．その結果，589の記録単位から127のサブカテゴリー，33のカテゴリー，5つのコアカテゴリが抽出された．看護師は「外国人の患者の文化の多様性」に対して「外国人の患者の文化を理解」した上で「物的人的資源の活用」『外国<br>人患者との言語・非言語の使い方』を用いて「外国人看護のケアにつなげるための工夫」を行っていた．(修士学生名：村瀬由貴)<br>主査：岩脇陽子<br>副査：北島謙吾，西田直子 |
| 修士論文口頭試問⑦<br>「慢性疼痛に対する看護介入と看護師の共感性との関連」 | 2013年1月 | 本研究の目的は，看護師の共感性と慢性疼痛に対する知識や看護介入の実際との関連を明らかにすることにより，患者の痛みへの看護介入を的確に行うための資料とし，患者の疼痛緩和につなげることである．方法は，京都都府内の病床数300床以上の病院の内科，整形外科などの病棟に勤務している看護師を対象に，質問紙調査を行った．調査項目は対象者の共感性，慢性疼痛への看護介入についての関係を調べた．調査用紙の配布数は487部，回収数214部(43.9%)，有効回答198部(92.5%)であった．共感性の中の「共有経験」が高い人ほど情報収集内容の数が多く，疼痛が増強する要因や疼痛の随伴症状，基礎疾患についての情報収集をしていた．看護介入としては「共有経験」が高い人ほど温罨法，足浴，マッサージ，気分転換を実施していた．<br>(修士学生名：田村真由美)<br>主査：西田直子<br>副査：岩脇陽子，浅野弘明 |
| 修士論文口頭試問⑧<br>「養護教諭に対する母親の支援ニーズに関する研究ー中学生の子供を養育する母親を対象としてー」 | 2013年1月 | 研究目的は中学生の子供を養育する母親を対象として養護教諭に対する母親の支援ニーズを明らかにする．対象者は509名である．その結果，母親の自己効力感及び家族機能と養護教諭に対する支援ニーズとの関係は顕著であり，養護教諭に支援を求めていた．<br>(修士学生名：平井美幸)<br>主査：園田悦代<br>副査：西田直子，浅野弘明 |
| 修士論文口頭試問⑨<br>「保健所のホームページを通じた情報活用の現状ー保健所業務での情報活用を目指してー」 | 2013年1月 | 研究目的は保健所業務での情報活用を目指して保健所のホームページを通じた情報活用の現状を明らかにする．方法は全国495カ所の保健所のホームページを対象に2012年2月と7月にHPの有無，設置サーバーの種類，リンクの形態などを調べた．その結果，HPを開設していない保健所が1割認めたれた．サイト内の研削機のは77%が有しており新着情報の有，業務紹介有が半数みられた．頻調査により保健所のHPの問題点が明らかになった．<br>(修士学生名：遠山尚希)<br>主査：浅野宏明<br>副査：山中龍也，西田直子 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(続き) | | |
| 修士論文口頭試問⑩<br>「再発卵巣がん患者が治療を継続する過程のレジリエンス」 | 2014年1月 | 研究目的は再発卵巣がん患者が治療を継続する過程におけるレジリエンスを明らかにすることである. 対象者は初回治療終了後に再発が認められた患者5名である.方法は面接調査で, 経過とその時々の気持ちについて話してもらい, 逐語録としてまとめ, 文脈を一文としてコード化し, サブカテゴリーとして整理した. その結果, 再発卵巣がん患者の肯定的な適応に向けるためには患者との信頼関係を構築し, 患者が自律できるように支援することである. 患者の持つレジリエンスを信じて患者と共に克服していくことが大切である.<br>(修士学生名:服部美景)<br>主査:光木幸子<br>副査:北島謙吾, 西田直子 |
| 修士論文口頭試問⑪<br>「病院に就職した新人看護職者の職場適応プロセスに関する研究」 | 2014年1月 | 研究目的は新人看護職者(以下, 新人と示す)が, 就職前の段階からリアリティショックが落ちつくといわれる就職後6ヶ月の間に, どのような不安や困難点を抱き, どのように乗り越えながら職場適応していくのかを明らかにすることである. 方法は, 看護系大学を卒業後, 近畿圏内の病院に就職した23名を対象とした半構成的面接により収集した. インタビュー内容は, 木下康仁氏による修正版グラウンデッドセオリーの手法に基づいて分析した. その結果, 新人看護者は, 就職前の【看護への期待】と就職後の【看護の捉え方】に裏打ちされた看護職者としての自覚から, 自己の確立や他者理解などの人間的な成長と, 看護観・職業観・人生観などを深い思考を発展させるといった看護職者としての成長を示す成長発達プロセスを辿っていた. .<br>(修士学生名:坂井利衣)主査:西田直子<br>副査:北島謙吾, 星野明子 |
| 修士論文口頭試問⑫<br>「胸部食道癌術後における複数の嚥下スクリーニング検査による摂食訓練開始判定の有用性に関する予備研究」 | 2016年1月 | 胸部食道癌術後の直接訓練開始時に, MWST, 30ml水飲みテスト, 咳テストを組み合わせた嚥下スクリーニングフローチャートを用いることによって, 嚥下スクリーニング検査における摂食訓練開始判定の有用性について予備的に検討を行った.<br>その結果, 嚥下スクリーニングフローチャートの判定結果と不顕性誤嚥有無との関連について, カットオフ値を顕性誤嚥群と不顕性誤嚥群との間に設定したときの感度と特異度が高かった. また, MWSTと咳テストの不顕性誤嚥有無の判定は感度が高かった. しかし, MWSTと咳テストの誤嚥有無の判定は感度・特異度が低かった. 嚥下スクリーニングフローチャートにて不顕性誤嚥群と判定された場合は, VFなどの精密検査を要し, 食事形態調整や嚥下法などの工夫が必要である.<br>本研究における胸部食道癌術後の対象者全員が, 嚥下評価時に直接訓練可能レベルであり, 退院時は全員経口摂取のみでの栄養補給が可能となった.<br>(修士学生名:安田友世)主査:江本厚子<br>副査:西田直子, 大川 |
| 看護学概論<br>(専門科目, 1年次配当, 半期, 必修2単位) | 2015年4月～2018年3月 | 看護とは何かを歴史的側面から概観し, 看護の語源, 起源, 定義および看護の概念・目的を学修する. そこから看護の専門性について説明した. また, 看護の対象者である人間の健康やそのライフサイクルを踏まえた健康問題, 人間のニードを理解するとともに, 看護の提供者の活動領域とその内容, 看護の倫理, 看護管理, 幅広く展開する看護活動についても理解させた. さらに, 看護の変遷を通して, 看護理論について学修し, 看護学の展望を概観を述べた. |
| 早期臨地実習体験<br>看護体験実習」<br>(専門科目, 1年次配当, 半期, 必修1単位) | 2015年4月～2018年3月 | 春学期の8月に集中で早期体験実習として「看護が行われる場に赴き, 看護職者の役割と機能について学ぶ. また, 看護職者として必要な基本的態度を身につけるとともに, 看護を学ぶ動機付けを図る. 」を目的で3日を病院実習を行い, 入院生活の環境の理解を深められるように指導した. また, 患者の生活環境の理解し, コミュニケーションをはかり,看護職の役割ときのが理解できるように指導した. |
| 看護学概論<br>(専門科目, 1年次配当, 半期, 必修2単位) | 2015年4月～2018年3月 | 看護活動の基本となる看護技術の中で日常生活援助技術を取り上げ, 対象となる人の基本的ニーズを充足するための看護援助の基本的な方法およびその原理を教授した. 看護実践に共通の基盤となる対象の安全性, 安楽性, 自立性, 倫理性を考慮しつつ, 既習の形態機能・生理学的知識に基づき, 科学的根拠を用いた考え方と看護技術教授し演習して身につけた. |
| スタートアップゼミA(演習)<br>(共通科目, 1年次配当, 半期, 必修2単位) | 2015年4月～2018年3月 | 大学における知識修得や研究遂行に必要な理解力, 探求力, 表現力のスキルを養うため, 資料収集, 討議, 発表, レポート作成の基本を一人一人に対応して教授する. 既存資料の倫理的な取扱い, インターネットマナーについても説明し, 医療を専門領域として学ぶ学生として必要な態度(挨拶, 接遇, 身だしなみ, 言葉遣い)をグループワークや模擬設定して教授した. |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(続き) | | |
| スタートアップゼミB<br>(大学共通科目，1年次配当，半期，選択2単位) | 2015年4月～2018年3月 | 大学における知識修得や研究遂行に必要な理解力，探求力，表現力のスキルを養うため，インターネットによる文献検索と整理の仕方を演習した．また，討議，レポート作成の応用編を教授する．発表力を高めるため，パワーポイントの活用方法を身につける． |
| 日常生活の基盤と看護(演習)<br>(専門科目，1年次配当，半期，必修2単位 | 2015年9月～2019年1月 | 春学期の8月に集中で早期体験実習として「看護が行われる場に赴き，看護職者の役割と機能について学ぶ．また，看護職者として必要な基本的態度を身につけるとともに，看護を学ぶ動機付けを図る．」を目的で3日を病院実習を行い，入院生活の環境の理解を深められるように指導した．また，患者の生活環境の理解し，コミュニケーションをはかり,看護職の役割ときのが理解できるように指導した． |
| 看護研究<br>(専門科目，3年次，半期，必修1単位) | 2017年4月～2019年3月 | 看護研究の意義、研究に必要性、文献検索、研究デザイン、研究プロセス、研究を行う上での倫理的問題と配慮、研究計画書の作成を学修する。文献検索では、文献を丁寧にクリティークすることで研究デザインや研究プロセスを学び、研究のテーマを絞り込む方法を学修する。また、各自が学修課題を探求し、研究テーマに沿って研究背景、研究目的、研究方法を吟味する。 |
| 実践基礎看護学実習<br>(専門科目，2年次，集中，必修2単位) | 2016年4月～2019年3月 | 大学における知識修得や研究遂行に必要な理解力，探求力，表現力のスキルを養うため，資料収集，討議，発表，レポート作成の基本を一人一人に対応して教授する．既存資料の倫理的な取扱い，インターネットマナーについても説明し，医療を専門領域として学ぶ学生として必要な態度(挨拶，接遇，身だしなみ，言葉遣い)をグループワークや模擬設定して教授した． |
| 看護統合実習<br>(専門科目，2年次，集中，必修2単位)<br>(共通科目，1年次配当，半期，必修2単位) | 2018年4月～2019年3月 | 看護専門領域の臨地実習での学びを活かし、将来看護専門職者として医療現場で必要とされる看護実践能力と自己教育力を育むための総合的学習の場とする。学生自身が自己の学修課題を明確にしたうえで実習領域を選択し、学習課題を解決できるよう主体的に学修する態度を養う。看護実践能力の向上と自身の看護観を深めるために、ケアチームに参加し複数の対象者へのケアに携わるとともに、組織の中でより良いケアが行われるためのシステムについて理解を深める。 |
| キャリアサポート実践講座A<br>(専門科目，4年次，半期，必修2単位) | 2018年4月～2019年3月 | 今までの学修成果として、既修の知識・技術を基に、教員のサポートを得ながら下級生の指導にあたる。具体的には基礎・成人・老年・小児・母性等の演習科目に参加する。グループに分かれて1つの演習事項に対して予習した後、演習計画を立案し後輩へ指導を行い、評価する。後輩への補佐的指導を通して既修の知識・技術の確認と課題発見を行う。また自らの教育的姿勢に関する振り返りを行い、卒業後の実践活動における同輩・先輩との関係形成のスキルを養う。 |
| 看護研究(演習)<br>(専門科目，3年次配当，半期，必修1単位) | 2017年4月～2018年3月 | 看護研究の意義、研究に必要性、文献検索、研究デザイン、研究プロセス、研究を行う上での倫理的問題と配慮、研究計画書の作成を学修する。文献検索では、文献を丁寧にクリティークすることで研究デザインや研究プロセスを学び、研究のテーマを絞り込む方法を学修する。また、各自が学修課題を探求し、研究テーマに沿って研究背景、研究目的、研究方法を考えさせ、文献検討を行う演習や研究計画を作成する演習を行う。 |
| 2　作成した教科書，教材，参考書 | | |
| 基礎看護学③　基礎看護技術Ⅱ<br>(新体系看護学全書12) | 2011年4月～2016年3月 | 生活援助論Ⅱのテキストとして，基礎看護技術の第1章共通技術，第2章環境調整技術など生活援助技術，第3章心理・社会的課題の援助について講義や演習で活用している． |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表，講演等 | | |
| 星ヶ丘厚生年金病院研修会(科長係長合同研修) | 2011年9月 | NANDA-I看護診断，NOC，NIC，それらを使用した看護過程の展開を理解できることを目的に講演(1. NANDA-I看護診断とは，2. 看護介入分類(NIC)とは，3. 看護成果分類(NOC))とNANDA-NIC-NOCの事例演習を行った． |
| 介入におけるアセスメント教育　看護介入を教授する時の教 | 2012年7月 | 日本看護診断学会第18回学術大会大会長として講演を行う． |
| 「癒し」のケアとヒーリングタッチ | 2015年 | 日本看護技術学会学術集会第13回学術集会において，キーセッションⅠにおいて講演を行う． |
| 平成24年度第1回FD講演<br>「科研費をとろう！」 | 2012年8月3日 | 科研費を獲得するためのモットーは，科研費の目的を考え，患者や住民のため，みんなの幸福のために自分の研究テーマを考える．<br>科研費には愛と夢がいっぱいあり，科研費は研究者を育てるものである．そしてその研究は，看護や教育に生かされて社会に貢献するものである． |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表，講演等（つづき） | | |
| 京都府立医科大学平成26年度看護学科FDセミナー<br>「健康障害者に役立つ研究と活動」 | 2015年3月6日 | 看護における研究は，時代の流れや社会背景が重要で，健康障害者が苦痛や困難を感じることの対する感性が重要で，そこから研究テーマを発想し，研究を実践し研究結果を発表する．発表だけでなく，健康障害者に役立つ活動を行い，活動を継続することで，制度が変革し，よりよい生活のためのサポートへと繋がる．健康障害者との出会いが看護をより向上へと導き，社会貢献に繋がることを報告した． |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 高大連携京都府立八幡高校「看護医療科目」 | 2011年4月～2013年3月 | バイタルサイン，ボディメカニクス，体位変換・移動動作に関する講義を行い，バイタルサイン測定，体位変換・移動動作の演習と記録を行った |
| 同志社女子大学生活科学部非常勤講師<br>担当「家庭看護学」（専門科目，選択，3年次配当，半期，2単位） | 2011年4月～2013年3月 | 少子高齢社会により，疾病構造の変化，医療の高度化等に伴い，保健・医療・福祉を取り巻く状況は大きく変化している．病院や施設での医療から在宅という流れの中で，家庭内での看護・介護の必要性が高まり，家庭内での看護介護の知識や技術が求められている．人々が家庭で安心して過ごしていくために，病気の予防，健康の保持・増進，異常の早期発見が重要であることを学習する． |
| 同志社女子大学生活科学部非常勤講師<br>担当「看護・介護学概論」（専門科目，必修，1年次配当，半期，2単位） | 2011年4月～2013年3月 | 患者への医療を効果的に実践するために薬剤師と看護師の協働と連携について円滑にする．<br>少子高齢社会により，疾病構造の変化，医療の高度化等に伴い，保健・医療・福祉を取り巻く状況は大きく変化している．医療において治療を効果的に行うため，薬剤師の役割は重要であると共に患者の生活環境や治療支援をしている看護師・介護師の役割も重要である．看護師の役割や看護の支援を理解し，患者中心の医療を展開するための協働や連携について学習する． |
| 朝日大学看護学科非常勤講師　担当「看護学概論」 | 2014年4月～2017年3月 | 少子高齢化社会における看護教育の変遷について、社会の変化、看護基礎教育における大学化、カリキュラムの変化、実習時間や内容の変化について説明する。 |
| 京都府立医科大学特任教授　担当「看護基礎理論」 | 2015年4月～2016年3月 | 看護理論の導入として，初期にナイチンゲール「看護覚え書」とヘンダーソン「看護の基本となるもの」の感想レポートの課題を与え，オーランド，ウィーデンバッグ，ペプロウ，トラベルビー，オレム，ロジャーズ，ロイなどの著書の要約発表を分担して自主的な学習を行い，最終には自己の看護観について文献を活用したレポート提出と発表を課題としている． |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 看護技術の探究ー日本看護技術学会10周年記念 | 共著 | 平成23年10月 | 看護の科学社 | 監修：日本看護技術学会<br>分担執筆：菱沼典子，川嶋みどり，川口孝泰，武田利明，田中祐二，吉田みつ子，本庄恵子，佐伯由香，藤井徹也，西田直子，他22名． | B5判，全199頁<br>本人担当部分：「移動動作の評価の探究」7頁（p.114～p.120）を共著 |
| 基礎看護学③<br>　基礎看護技術Ⅱ<br>（新体系看護学全書12 | 共著 | 平成24年2月 | メヂカルフレンド社出版社 | 編者：深井喜代子<br>分担執筆：深井喜代子，西田直子，岩脇陽子，新見明子，宮脇美保子，池田理恵，岡田淳子，大倉美穂，坂本みどり，徳永なみじ，赤松公子，肥後すみ子 | B5判，全388頁<br>本人担当部分：「第5編第2章食生活と栄養摂取」31頁（p.23～p.54）を単著，「第5編第4章検査に伴う看護技術」44頁（p.307～p.351）を単著 |
| 基礎看護学③<br>　基礎看護技術Ⅱ<br>（新体系看護学全書） | 共著 | 平成26年12月 | メヂカルフレンド社出版社 | 編者：深井喜代子<br>分担執筆：深井喜代子，西田直子，岩脇陽子，新見明子，宮脇美保子，池田理恵，岡田淳子，大倉美穂，坂本みどり，徳永なみじ，赤松公子，肥後すみ子 | B5判，全379頁<br>本人担当部分：「第5編第2章食生活と栄養摂取」31頁（p.23～p.54）を単著，「第5編第4章検査に伴う看護技術」44頁（p.311～p.355）を単著 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書(つづき) | | | | | |
| 看護の人間工学 | 共著 | 平成27年3月 | 医歯薬出版社 | 分担執筆:阿曽洋子, 西田直子, 石井賢俊, 大久保祐子, 小板橋喜久代, 樋之津淳子・佐々木司, 新藤悦子, | B5判, 全209頁<br>本人担当部分:「第2章2. 安楽な体位と体位変換固定装具の装着と病衣ー衣服内気候に着目した病衣の考案ー」(p.125～p.137)を単著<br>「コラム『しゃがみ立ち動作』を助ける自助具」(p.127)を単著<br>「第3章3. 移乗・移送ストレッチャー移送」(p.128～p.134)を単著 |
| 基礎看護学③<br>　基礎看護技術Ⅱ<br>(新体系看護学全書) | 共著 | 平成29年3月 | メヂカルフレンド社出版社 | 編者:深井喜代子<br>分担執筆:深井喜代子, 西田直子, 岩脇陽子, 新見明子, 宮脇美保子, 池田理恵, 岡田淳子, 大倉美穂, 坂本みどり, 徳永なみじ, 赤松公子, 肥後すみ子 | B5判, 全379頁<br>本人担当部分:「第5編第2章食生活と栄養摂取」31頁(p.23～p.54)を単著,「第5編第4章検査に伴う看護技術」44頁(p.311～p.355)を単著 |
| 論文 | | | | | |
| 看護基礎教育における簡易細菌検査を用いた手指衛生の教育方法の有用性<br>(査読付) | 共著 | 平成23年11月 | 日本看護学教育学会<br>21(2) | 山本容子, 岩脇陽子, 滝下幸栄, 西田直子 | p.1～p.11 |
| リラクセーション法としてのヘッドトリートメントの臨床への活用の検討<br>(査読付) | 共著 | 平成24年12月 | 京都府立医科大学<br>看護学科紀要<br>22 | 室田昌子, 西田直子, 北島謙吾, 岩脇陽子, 山本容子, 上馬場和夫, 松本賢哉, 宮崎陽子, 内谷浩一, 伊藤栄見子 | p.41～p.49 |
| 　リカレント学習講座の継続指導に関する評価<br>(査読付) | 共著 | 平成24年12月 | 京都府立医科大学<br>看護学科紀要<br>22 | 西田直子, 岩脇陽子, 松岡知子, 園田悦代, 滝下幸栄, 臼井香苗, 馬場口喜子, 浅野弘明, 北島謙吾, 笹川寿美, 光木幸子, 小松光代, 三橋美和, 眞鍋えみ子, 岡山寧子 | p.103～p.107 |
| 入院時オリエンテーションにおける患者-看護師間の会話分析<br>(査読付) | 共著 | 平成24年12月 | 京都府立医科大学<br>看護学科紀要<br>22 | 中井亜由美, 西田直子, 和佐ゆかり | p.19～p.30 |
| 看護師の抗がん剤曝露予防行動の実態調査　年齢, 経験年数, 看護基礎教育との関連 | 共著 | 平成24年12月 | 京都市立病院紀要32巻2号 | 野村 和江, 西田 直子 | p.205-p.210 |
| 介入におけるアセスメント教育ー看護介入を教授するときの教育方法ー | 単著 | 平成25年3月 | 看護診断<br>18(1) | 西田直子 | p.28～p.33 |
| 車いす利用者の避難施設のスロープ移動の筋負担<br>(査読付) | 共著 | 平成25年7月 | 第23回バイオメカニズムシンポジウム予稿集 | 西田直子, 辻村裕次, 山本容子, 室田昌子, 岩脇陽子, 鈴木ひとみ, 垰田和史 | p.453～p.462 |
| 【移動介助技術の指導方法-ボディメカニクスを実践に活かす】道具を活用した移乗介助のボディメカニクス　他職種との連携を視野に入れた教育 | 共著 | 平成25年12月 | 看護教育<br>54巻12号 | 西田 直子, 冨田川 智志 | p.1103～p.1107 |
| 内科、整形外科患者の慢性疼痛に対する看護介入と看護師の共感性との関連 | | 平成27年4月 | 日本看護技術学会誌(1349-5429)14巻1号 | 中島 真由美(聖泉大学), 西田 直子 | 78-85 |
| 看護師の腰痛の有無別にみた看護作業の実態調査 | | 平成27年8月 | 日本看護技術学会誌(1349-5429)14巻2号 | 原田 清美(京都府立医科大学 医学部看護学科), 西田 直子, 北原 照代 | 164-173 |
| 【「病と共に生きる」を支える】乳がん患者を支える看護職の役割 | 単著 | 平成27年5月 | 京都府立医科大学雑誌<br>(0023-6012)124巻6号 | | 387-394 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(つづき) | | | | | |
| Validity of the Short Nutritional Assessment Questionnaire for Japanese Patients with Cancer Undergoing Outpatient Chemotherapy | 共著 | 平成29年1月 | The Journal of Medical Investigatio | Kiyomi Harada, Kiyo Ochi, Tetsuya Taguchi, Terukazu Nakamura, Motohiro Kanazawa, Naohisa Yoshida, Hiroko Neriya, Masami Okagaki, Naoko Nishida, Yukie Takishita, Yoko Yamamoto, Sayori Wada, Masashi Kuwahata, Isao Yokota 10), Keiko Sekido1), Akane Higashi9) | |
| 慢性疼痛における看護師の疼痛緩和方法の実施状況と効果の認識の関連 | 共著 | 平成29年3月 | 聖泉看護学研究(2187-1981)6巻 | | p.1-p.8 |
| 看護職者による患者移動動作ガイドライン作成に向けた基礎研究:車いす移乗介助に関する実態調査 | 共著 | 平成30年3月 | 神奈川県立保健福祉大学誌 第15巻第1号 | 水戸優子, 西田直子, 若村智子, 國澤尚子, 平田美和, 小林由実, 冨田川智志 | p.63-p.70 |
| その他 | | | | | |
| (報告) | | | | | |
| 乳がん患者の思いと看護師に求められる援助 | 共著 | 平成23年4月 | 日本看護技術学会誌 10(1) | 小北愛,, 西田直子 | p.52～p.53 |
| 看護師の移動動作の<br>援助の現状と困難(第3報)交流セッションXI | 共著 | 平成23年4月 | 日本看護技術学会誌 10(1) | 西田直子, 國澤尚子, 水戸優子, 若村智子, 鈴木和代 | p.33～p.35 |
| 看護における移動動作の多角的な視点<br>(巻頭言) | 単著 | 平成24年1月 | バイオメカニズム学会誌 36(1) | 西田直子 | p.1 |
| 看護師の移動動作の援助の実際と工夫 | 共著 | 平成23年4月 | 日本看護技術学会誌 11(1) | 西田直子, 國澤尚子, 水戸優子, 若村智子, 鈴木和代 | p.24～p.25 |
| 看護の技の検討　技術成果検討委員会の取り組み　移動動作のエビデ<br>ンスの探求 | 単著 | 平成23年4月 | 日本看護技術学会誌 11(1) | 西田直子 | p.21～p.22 |
| 第23回バイオメカニズムシンポジウム報告 | 単著 | 平成25年9月 | バイオメカニズム学会誌 38(1) | 西田直子 | p.261～p.262 |
| ヒーリングタッチの成果と普及「癒し」のケアとヒーリングタッチ | 単著 | 平成27年4月 | 日本看護技術学会誌14巻1号 | 西田直子 | p.7～p.8 |
| 移動動作ガイドラインの必要性と展開例 改訂新・職場における腰痛予防対策指針「福祉・医療分野等における介護・看護作業」の概要 | 共著 | 平成27年4月 | 日本看護技術学会誌14巻1号 | 西田直子, 國澤尚子, 水戸優子, 若村智子, 鈴木和代 | p.30～p.31 |
| 移動動作ガイドラインの必要性と展開例 看護師が行う移動動作方法と腰痛の関係 | 共著 | 平成28年4月 | 日本看護技術学会誌14巻1号 | 西田直子, 國澤尚子, 水戸優子, 若村智子, 鈴木和代 | p.30～p.31 |
| 保健看護学研究科の博士課程の開設を願って | 単著 | 平成28年4月 | 三水会45周年記念誌 | 西田直子 | p.58 |
| (口頭発表) | | | | | |
| 看護師の移動動作の援助の現状と困難(第3報) | 共同 | 平成23年9月 | 日本看護技術学会学術集会講演抄録集9回 | 西田 直子, 国澤 尚子, 水戸 優子, 若村 智子, 鈴木 和代 | |
| 2年次の基礎看護学実習でのヘルスアセスメント技術体験と理解度に関する評価 | 単独 | 平成23年9月 | 日本看護技術学会学術集会講演抄録集10回 | 西田 直子 | |
| 妊婦の歩行動作の変化に関する縦断的研究　歩行速度による変化 | 共同 | 平成23年5月 | 京都母性衛生学会 | 松岡 知子, 岩脇 陽子, 滝下 幸栄, 山本 容子, 西田 直子, 花園 優子, 吉田 佳代, 青山 宏樹, 谷口 匡史 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (口頭発表)つづき | | | | | |
| 全身麻酔で手術を受ける者の仙骨部周辺の体圧と栄養状態との関連 | 共同 | 平成23年7月 | 日本看護研究学会<br>第37回学術大会 | 石井 さやか(済生会吹田病院), 土井 直恵, 矢野 ゆう子, 西田 直子 | |
| 入院時オリエンテーションにおける患者−看護師間の会話分析と評価 | 共同 | 平成23年7月 | 日本看護研究学会<br>第37回学術大会 | 中井 亜由美, 西田 直子, 和佐 ゆかり | |
| 生活援助技術演習に取り入れたプロジェクト学習の教育評価 | 共同 | 平成23年8月 | 日本看護学教育学会誌<br>(0916−7536)21巻学術集会講演集 | 生活援助技術演習に取り入れたプロジェクト学習の教育評価 | |
| 脊髄損傷者の看護師による移動動作の指導状況と求める援助 | 共同 | 平成23年12月 | 日本看護科学学会<br>学術集会講演集30回 | | |
| 京都府における多目的トイレの現状と課題 | 共同 | 平成23年9月 | 第19回看護人間工学部会総会・研究会発表会 | 西田 直子, 鈴木 ひとみ | 大阪 |
| 看護の技の検討　技術成果検討委員会の取り組み 移動動作のエビデンスの探求 | 単独 | 平成23年10月 | 日本看護技術学会<br>第10回学術集会講 | 西田 直子 | |
| 看護師の移動動作の援助の実際と工夫 | 共同 | 平成23年10月 | 日本看護技術学会<br>第10回学術集会講 | 西田 直子, 國澤 尚子, 鈴木 和代, 若村 智子, 水戸 優子, 鈴木 ひとみ | |
| 看護師の抗がん剤曝露予防行動の実態調査　年齢, 経験年数, 看護基礎教育との関連 | 共同 | 平成24年1月 | 日本がん看護学会<br>第26回学術集会 | 野村 和江, 西田 直子 | |
| リラクセーション法としてのヘッドトリートメントの臨床への活用の検討 | 共同 | 平成24年7月 | 医学教育学会<br>第43会学術集会 | 室田 昌子, 上馬場 和夫, 宮崎 陽子, 伊藤 栄見子, 内谷 浩一, 北島 謙吾, 西田 直子, 岩脇 陽子, 山本 容子, 松本 賢哉 | |
| 後方連携病院の看護師の腰痛の現 | 共同 | 平成24年11月 | 日本看護科学学会<br>第32回学術集会 | 宇多 雅, 西田 直子, 宇多 タエ子 | |
| 臥位でのヘッドトリートメントによるリラクセーション効果 | 共同 | 平成24年11月 | 日本看護科学学会<br>第32回学術集会 | 室田 昌子, 岩脇 陽子, 山本 容子, 伊藤 栄見子, 松本 賢哉, 北島 謙吾, 西田 直子 | |
| 看護師が用いている外国人患者とのコミュニケーション技術の特徴 | 共同 | 平成25年3月 | 日本看護科学学会<br>第32回学術集会 | 村瀬 由貴, 岩脇 陽子, 北島 謙吾, 西田 直子 | |
| 実践で活用できるエビデンスを求めて　実践・研究・教育の立場から 看護研究における臨床と教育の協働のシステムを求めて | 単独 | 平成25年3月 | 日本看護研究学会近畿・北陸地方会第26回学術集会シンポジウム | 西田 直子 | |
| 日本における人工股関節置換術患者の看護に関する文献的検討 | 共同 | 平成25年3月 | 日本看護研究学会近畿・北陸地方会第27回学術集会 | 佐伯 良子(京都府立医科大学 , 岩脇 陽子, 滝下 幸栄, 西田 直子, 山縣 恵美, 中川 雅子 | |
| 病棟看護師の筋骨格系症状訴え率と病棟別看護必要度との関連 | 共同 | 平成25年7月 | 産業衛生学会第90回総会 | 北原 照代, 垰田 和史, 辻村 裕次, 舟越 光彦, 西田 直子, 保田 淳子, 鈴木 ひとみ | |
| 病棟看護師の運動器障害に関する研究 | 共同 | 平成25年8月 | 第54回社会医学会総会 | 北原照代,垰田和史, 辻村裕次, 保田淳子, 舟越光彦, 西田直子, 鈴木ひとみ | |
| 研修前看護師の移乗介助に使用する補助具に関する認識状況 | 単独 | 平成25年9月 | 日本看護研究学会<br>第39回学術集会 | 西田 直子 | |
| 研修会による看護師の移動介助に使用する補助具に関する認識の変化 | 単独 | 平成25年9月 | 看護人間工学部会<br>第21回総会・研究発表会 | 西田 直子 | |
| 慢性疼痛に対する看護介入と看護師の共感性との関連 | 共同 | 平成25年9月 | 日本看護技術学会<br>第12回学術集会 | 田村 真由美, 西田 直子 | |
| 看護師にとっての安全安楽な移動動作の援助の改善 職場における腰痛予防対策指針の改訂と腰痛予防への対処 | 共同 | 平成25年9月 | 日本看護技術学会<br>第12回学術集会 | 西田 直子, 水戸 優子, 鈴木 和代, 若村 智子, 國澤 尚子, 鈴木 ひとみ, 平田 美和, 小林 由実 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (口頭発表)つづき | | | | | |
| 臥位でのヘッドトリートメントが心理面に及ぼす影響 | 共同 | 平成25年9月 | 日本看護科学学会<br>第33回学術集会講演集 | 室田 昌子, 岩脇 陽子, 山本 容子, 北島 謙吾, 西田 直子, 伊藤 栄見子, 松本 賢哉 | |
| 就職後6ヵ月の新人看護職者が職場適応していくためにとる対応プロセス | 共同 | 平成26年8月 | 日本看護学教育学<br>第24回学術集会 | 坂井 利衣, 西田 直子 | |
| 生活援助技術演習に取り入れたプロジェクト学習における学生自己評価の年度比較 | 共同 | 平成26年8月 | 日本看護学教育学<br>第24回学術集会 | 原田 清美, 西田 直子 | |
| 就労経験のある脊髄損傷者の褥瘡形成予防行動の実際 | 共同 | 平成26年7月 | 日本看護研究学会<br>第40回学術集会 | 井上 美優, 西田 直子 | |
| 病棟看護師の筋骨格系症状有訴率と所属病棟における看護必要度との関連 | 共同 | 平成26年10月 | 第55回産業衛生学学会 | 北原 照代, 垉田 和史, 辻村 裕次, 西田 直子, 鈴木 ひとみ | |
| 慢性疼痛に対する看護師の知識と看護介入の関係 | 共同 | 平成26年11月 | 日本看護技術学会<br>第13回学術集会 | 中島 真由美, 西田 直子 | |
| 看護師の移動・移乗援助技術の研修後の効果 | 共同 | 平成26年11月 | 日本看護技術学会<br>第13回学術集会 | 西田 直子, 原田 清美, 北原 照代 | |
| 看護師の腰痛の有無別にみた看護作業の実態調査 | 共同 | 平成26年11月 | 日本看護技術学会<br>第13回学術集会 | 原田 清美, 西田 直子, 北原 照代 | |
| 移動動作ガイドラインの必要性と展開例 | 共同 | 平成26年11月 | 日本看護技術学会<br>第13回学術集会 | 西田 直子, 水戸 優子, 鈴木 和代, 若村 智子, 國澤 尚子, 鈴木 ひとみ, 平田 美和, 小林 由実 | |
| 移動動作ガイドラインに基づく道具を使用した安全安楽な方法の検討 | 共同 | 平成27年10月 | 日本看護技術学会<br>第14回学術集会 | 西田 直子, 水戸 優子, 鈴木 和代, 若村 智子, 國澤 尚子, 鈴木 ひとみ, 平田 美和, 小林 由実 | |
| 「ぴったし角度くん」を用いたベッド挙上に要する作業時間と精度 | 共同 | 平成27年10月 | 人間工学学会<br>看護人間工学研究会 | 西田 直子, 原田 清美, 赤瀬 遥平 | 看護人間工学研究誌, 16巻 p.62 |
| 生活援助論に取り入れたプロジェクト学習における学生の自己評価の年度比較 | 共同 | 平成27年8月 | 日本看護学教育学会<br>第25回学術集会 | 原田 清美, 西田 直子 | 日本看護技術学会学術集会講演抄録集14回 p.46 |
| 病棟看護師の筋骨格系症状有訴率に関与する要因　所属病棟の看護必要度に着目して | 共同 | 平成27年5月 | 第88回日本産業衛生学 | 北原 照代, 垉田 和史, 辻村 裕次, 西田 直子, 鈴木 ひとみ | 産業衛生学雑誌, 57巻臨増 p.463 |
| A病院における看護作業の状況と腰痛との関係 | 共同 | 平成27年5月 | 第88回日本産業衛生学 | 西田 直子, 峠田 和史, 北原 照代, 辻村 裕次 | 産業衛生学雑誌, 57巻臨増 p.345 |
| 病院看護管理者が認識する腰痛問題と腰痛予防対策との関係 | 共同 | 平成28年8月 | 日本看護技術学会<br>15回学術集会 | 西田 直子, 北原 照代, 冨田川 智志 | 日本看護技術学会15回学術集会講演抄録集 p.139 |
| (続)移動動作ガイドラインに基づく補助具を使用した安全安楽な方法の検討 | 共同 | 平成28年8月 | 日本看護技術学会<br>15回学術集会 | 西田 直子, 水戸 優子, 國澤 尚子, 若村 智子 | 日本看護技術学会15回学術集会講演抄録集 p.58 |
| 外来化学療法中のがん患者の栄養状態に関する研究　簡易栄養評価法(SNAQ)を用いた栄養評価 | 共同 | 平成28年12月 | 日本看護科学学会学術集会講演集36回 | 原田 清美, 西田 直子, 滝下 幸栄, 山本 容子, 關戸 啓子 | 日本看護科学学会学術集会講演集36回　p.389 |
| 車いす利用者の避難施設周辺の路面の傾斜と筋負担の関係 | 共同 | 平成28年11月 | 第17回看護人間工学研究会 | 西田 直子, 辻村 裕次, 垉田 和史 | 看護人間工学研究誌(1880-5256)17巻 p.79 |
| 外来化学療法中のがん患者の栄養状態に関する研究　年齢区分別、栄養状態の比較検討 | 共同 | 平成29年2月 | 日本がん看護学会 | 原田 清美, 西田 直子, 滝下 幸栄, 山本 容子, 關戸 啓子 | 日本がん看護学会誌31巻　p.243 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (口頭発表)つづき | | | | | |
| 日勤8時間・夜勤16時間の二交代制勤務に従事する病棟看護師の労働と健康・安全　質問紙調査の結果から | 共同 | 平成29年2月 | 第89回日本産業衛生学 | 北原 照代, 埒田 和史, 辻村 裕次, 西田 直子, 鈴木 ひとみ, 冨田川 智志 | 産業衛生学雑誌 58巻臨増 p.369 |
| 新人看護師が看護基礎教育で学んだ清拭と臨床現場で実施する清拭の基本事項の意識度と実施度の検討 | 共同 | 平成29年3月 | 日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集30回 | 池上 真由美, 西田 直子, 關戸 啓子 | |
| 移動動作ガイドラインに基づく道具を使用した安全安楽な方法の検討 | 共同 | 平成29年3月 | 日本看護技術学会 | 西田 直子, 水戸 優子, 國澤 尚子, 若村 智子, 鈴木 ひとみ, 平田 美和, 小林 由実, 冨田川 智志 | 日本看護技術学会誌15巻1号 p.22-24 |
| 日勤における病棟看護師の活動量および歩数と疲労 | 共同 | 平成29年7月 | 第59回日本産業衛生学会総会 | 辻村 裕次, 北原 照代, 埒田 和史, 西田 直子, 冨田川 智志 | 産業衛生学雑誌(1341-0725)59巻4号 p.119 |
| 外来化学療法中の患者における栄養状態についての研究　食欲低下有無別、写真併用による食事記録調査 | 共同 | 平成29年8月 | 日本看護研究学会第40回学術集会 | 原田 清美, 關戸 啓子, 越智 幾世, 山本 容子, 西田 直子 | 日本看護研究学会雑誌(0285-9262)40巻3号 p.465 |
| 移乗動作Q&Aの作成に向けての検討 | 共同 | 平成29年9月 | 日本看護技術学会学術集会講演抄録集16回 | 西田 直子, 水戸 優子, 國澤 尚子, 若村 智子, 鈴木 ひとみ, 平田 美和, 小林 由実, 冨田川 智志, | 日本看護技術学会学術集会講演抄録集16回, p.121 |
| 外来化学療法中のがん患者の疾患別栄養管理に関する基礎的研究 写真撮影併用による2日間の食事調査より | 共同 | 平成29年12月 | 日本看護科学学会学術集会講演集37回 Page [PD-24-6 | 原田 清美, 越智 幾世, 滝下 幸栄, 山本 容子, 西田 直子, 關戸 啓子 | 日本看護科学学会学術集会講演集37回 [PD-24-6] |
| (研究助成) | | | | | |
| 障害者を支援するユビキタスシステムの開発と検証 | 共同 | 平成23年度 | 財産法人大川情報通信基金研究助成成果報告書 | 研究代表者:西田直子<br>共同研究者:岩脇陽子, 滝下幸栄, 山本容子, 桑原教彰, 松岡知子, 鈴木ひとみ | p.1～p.34 |
| 看護必要度と看護師の労働負担評価に基づいた運動器障害予防対策に関する研究 | 共同 | 平成24年度～平成27年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表:北原照代<br>共同研究者:埒田 和史, 辻村 裕次, 舟越 光彦, 西田直子 鈴木ひとみ | p.1～p.50 |
| 災害における車いす利用者における避難生活環境のユビキタスシステムの開発と評価 | 共同 | 平成24年度～平成27年度 | 科学研究費補助金(基盤研究B) | 研究代表:西田直子<br>共同研究者: 鈴木ひとみ, 岩明陽子, 山本容子, 室田昌子, 原田清美, 埒田和史, 辻村 裕次 | p.1～p.99 |
| 外来化学療法中の患者に対する栄養管理ガイドラインの開発と検証 | 共同 | 平成27年度～平成29年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表::原田 清美<br>共同研究者:西田 直子, 吉田直久, 東あかね | |
| 病棟看護師の腰痛予防プログラムの開発と検証～労働環境の改善をめざして | 共同 | 平成27年度～平成30年度 | 科学研究費補助金(基盤研究B) | 研究代表:北原照代<br>共同研究者:埒田 和史, 辻村 裕次, 舟越 光彦, 西田直子 鈴木ひとみ | |
| 河川水害時の高齢者・障がい者の避難生活環境整備と救援体制システムの開発 | 共同 | 平成29年度～平成31年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表:西田直子<br>共同研究者:埒田 和史, 辻村 裕次, 江頭典子, 山岡　愛 | |
| 新たな腰痛予防対策指針を踏まえた看護基礎教育における移動ぎじゅちプログラムの開発 | 共同 | 平成29年度～平成31年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表:: 水戸 優子,<br>共同研究者:西田 直子, 若村 智子,小林 由実 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (研究助成)つづき | | | | | |
| 関節リウマチの関節破壊におけるレントゲン画像評価サポートツールの開発 | 共同 | 平成30年度～平成32年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表:佐伯良子<br>共同研究者:小柴賢洋, 村上孝作 , 西田直子, 佐浦隆一 | |
| 介護保険湿雪における腰痛予防にための労働衛生教育・研修プログラムの開発 | 共同 | 平成30年度～平成32年度 | 科学研究費補助金(基盤研究C) | 研究代表:冨田川智志<br>共同研究者:垰田 和史, 辻村 裕次, 江頭典子, 山岡　愛 | |

| | |
|---|---|
| 2011年 4月～2016年3月まで | 日本看護教育学会評議員 |
| 2011年4月～平成28年3月まで | 日本看護技術学会誌査読委員 |
| 2010年12月～2012年12月まで | 第18回日本看護診断学会学術集会大会長(2012年7月京都国際会議場において1800名参加) |
| 2011年4月～2014年3月まで | バイオメカニズム学会理事 |
| 2012年1月～2014年1月まで | 第23回バイオメカニズム・シンポジウム実行委委員長(2013年7月京都堀川ルビノホテルにおいて100名参加) |
| 2013年 1月～2014年10月まで | 第40回日本看護研究学会学術集会の企画委員, 実行委員長(2014年8月奈良県立文化会館において1400名参加) |
| 2013年 2月～2014年9月まで | 第20回日本看護診断学会学術集会実行委員(2014年7月神戸国際会議場において1000名参加) |
| 2013年2月～2014年12月まで | 第13回日本看護技術学会学術集会会長(2014年11月京都テルサホールにおいて1000名参加) |
| 2011年4月～2016年3月まで | 日本看護研究学会評議員 |
| 2011年4月～2014年3月まで | 日本看護診断学会理事 |
| 2014年4月～2016年7月まで | 日本看護診断学会副理事長 |
| 2015年4月～2017年3月まで | 日本看護科学学会評議員 |
| 2014年4月～2018年3月まで | バイオメカニズム学会理事評議員 |
| 2016年1月～2017年12月まで | 第23回日本看護診断学会学術集会企画委員(2017年7月京都国際会議場) |
| ＜社会活動＞ | |
| 2011年 9月～2014年3月まで | あけぼの会京都支部「プチサロン」相談役 |
| 2012年 5月 | 京都府看護協会看護の日イベント協力員乳がん検診・自己検診法(現在に至る) |
| 2011年10月 | ピンクリボン京都実行委員会乳がん検診・自己検診法(現在に至る) |
| 2017年8月 | 第27回日本看護教育学学会学術集会シンポジウムⅠ座長 |
| 2018年3月 | 第29回日本看護教育学学会学実行委員長 |
| 2018年7月 | 第18回日本看護技術学学会学術集会企画委員 |

| |
|---|
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
| 乳がん患者の健康相談 |
| 乳がん検診・自己検診法 |
| 脊髄損傷者の社会生活指導 |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　山田　豊子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 視聴覚教材の活用体験学習の導入 | 2011年1月～3月 | 京都市立看護短期大学看護科の教授として担当の「災害・国際看護論」(専門教育科目，2回生配当必修1単位時間)の災害看護では災害看護の理解，災害急性期看護の理解をする目的で以下の講義演習を展開した．机上の学習では理解が限られるため講義45分ビデオ45分にした後，トリアージの演習を被災者役(色々なシチュエーションの事例を設定し，学生に役割を考えてもらった)と看護師役に分かれて模擬救助活動行った．ビデオを見ることにより演習のシュミレーションがうまく展開でき，また演習をしたことで，「実際でのトリアージの難しさや限界など」，患者サイドでは「待っている間の不安感や救助者役の声掛けで不安感がなく待つことができた」との感想から，学生はトリアージの必要性や非常時の看護深めることができた． |
| プレゼンテーション演習の導入 | 2011年12月～<br>2012年3月 | 「成人看護実習3」(専門教育科目，3回生配当必修1単位時間)では，将来臨床で培われた研究テーマを学会にて円滑に発表できるよう事例検討会を学会形式で行っている．3回生実習開始前に事例検討会の概略を説明し，プレゼンテーションのための資料とガイダンスを行い，抄録の作成方法，発表原稿，発表方法など解説をした後，事例検討会をおこなった．プレゼンテーションの方法はパワーポイント，教材拡大機，模造紙など各自の選択で発表させた．聴衆側の学生の質問や他の学生の発表を聞くことで学生は，制限時間内のわかりやすいプレゼンテーションの重要性を学べた． |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義用教材 | 2011年4月～<br>2012年3月 | 京都市立看護短期大学看護学科で担当の「成人看護概論」(1回生時「成人看護援助論1」(2回生時「がん看護援助論」「災害看護論」において使用している．学生の理解度を深める目的でテキストでは不足している資料の作成を行った．学生が思考を整理しやすいよう，教材はところどころ自分で授業の間に加筆するように作成したプリントや，マトリックス表などを渡した．教材を作成することで学生の理解度が深まり学習効果があがった．概念的に理解しにくい言葉に関して「アイデンテイティの確立」に関しては身近な歌詞(手紙～拝啓15の君へ)を使い説明をしたことで学生は理解できた． |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 看護教員養成講習会(京都府・滋賀)　講師 | 2011年9月1日 | 京都府・滋賀県主催の看護教員養成講座において，成人看護教育方法3時間を担当した．<br>成人看護教育方法では発達段階，ライフサイクルや，成人発達段階みられる特徴的なもの環境，身体的変化をとらまえながら健康問題の理解ができるように講義と演習を織り交ぜながら教授してゆく方法について，成人看護の概要の理解，成人看護学の構成と内容，成人看護学において，講義と演習，実習へつなげてゆくために必要なポイントを講義した． |
| 京都学園大学新柳居市民講座　講師 | 2015年11月1日 | 2015年11月20日に「知って納得！冬が来る前に感染対策を」の市民講座で講師として「免疫力アップして感染症に負けない体力づくり」というテーマで、免疫のしくみをわかりやすく講義をして、免疫力を上げ感染に負けないからだづくりについて理解を深めてもらった。 |
| その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 退院指導パンフレット作成による学び　学内演習後レポートと臨地実習終了後アンケートの検討 | 共著 | 2011年2月 | 日本看護学会論文集:<br>看護教育41号 〃 | 山本多香子，田村葉子，中島優子，黒木美智子，山田豊子〃 | pp.264-267 |
| 新たな洗髪用具開発のための実態調査(第1報) | 共著 | 2013年2月1日 | 京都市立看護短期大学紀要<br>37号 | 田村 葉子，今西 誠子，江頭 典江，黒木 美智子，奥津 文子，山田 豊子 | pp.59-65 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| 臥床患者の洗髪用具に関する調査研究 | | 2013年年10月 | 大阪信愛女学院短期大学紀要<br>第47集 | 江頭典江，今西誠子，田村葉子，黒木美智子，奥津文子，山田豊子 | pp.11-19 |
| 成人看護学急性期実習の現状と課題 | 共著 | 2014年3月1日 | 中京学院大学看護学部紀要<br>4巻1号 | 西谷 千恵，山田 豊子 | pp.39-50 |
| その他 | | | | | |
| ポスターセッション<br>Hair washing aids for bedridden patients in Japan | 共同 | 2011年，5月 | ICN International Conference<br>IN MALTA | 山田豊子江頭典江，今西誠子，田村葉子，黒木美智子，奥津文子 | |
| ポスターセッション<br>人工股関節再置換術を受けた人の生活状況調査 | 共同 | 2013年 | 日本看護研究学会雑誌<br>36巻3号 | 山本多香子，山田豊子 | |
| ポスターセッション<br>Issues concerning admission to operating theaters as seen from a review ofliteratur | 共同 | 2013年9月1日 | The 2nd ASIORNA CONFERENCE<br>THE Shilla Jeju ,Korea | 山田豊子，山本多香子 | |
| 口演<br>上肢遠位に遠心力がかかる運動をしても上肢浮腫に改善が見られた事例報告 | 共同 | 2017年3月17日 | 日本リンパ浮腫学会 | 植田仁美、山田豊子 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本手術看護学会学会京都地区役員 | 2007年より現在に至る |
| 日本手術看護学会学会査読委員 | 2007年より現在に至る |
| 関西広域連合准看護師試験委員 | 20015年4月～2019年3月 |
| 第2回近畿地区手術看護学会シンポジウム司会 | 2016年6月25日 |
| 済生会病院看護研究指導 | 2016年4月～2017年3月 |
| 亀岡市立病院看護研究指導 | 2016年4月～2017年3月 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　山本多香子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ①授業の実践:基礎看護技術、臨床看護概論、成人看護、老人看護 ②臨地実習の実践:基礎看護、成人看護、老人看護、精神看護 | 平成6年4月～平成8年4月<br>平成9年1月～平成10年3月 | ①授業実践の概要:「基礎看護技術」では看護を実践する基盤となる知識・技術・態度について、授業と学内演習を行なった。「臨床看護概論」では治療や処置に伴う看護の概要について授業を行なった。「成人看護」では健康障害をもつ対象に応じた看護が展開できるための知識、技術、態度について授業の一部を担当した。「老人看護」では老化現象や健康障害をもつ高齢者の特徴を理解し、対象に応じた看護ができるための知識、技術、態度について授業を行なった。<br>②臨地実習の概要:「基礎看護実習」「成人看護実習」「老人看護実習」「精神看護」を担当した。 |
| 2)①授業の実践:基礎看護技術、臨床看護概論、成人看護、老人看護 ②臨地実習の実践:基礎看護、成人看護、老人看護、精神看護 | 平成11年4月～平成12年3月 | ①授業実践の概要:「基礎看護技術」では看護を実践する基盤となる知識・技術・態度について、授業と学内演習を行なった。「臨床看護概論」では治療や処置に伴う看護の概要について授業を行なった。「成人看護」では健康障害をもつ対象に応じた看護が展開できるための知識、技術、態度について授業の一部を担当した。「老人看護」では老化現象や健康障害をもつ高齢者の特徴を理解し、対象に応じた看護ができるための知識、技術、態度について授業を行なった。<br>②臨地実習の概要:「基礎看護実習」「成人看護実習」「老人看護実習」「精神看護」を担当した。 |
| ①授業の実践:基礎看護技術 ②臨地実習の実践:基礎看護学実習 | 平成12年4月～<br>平成13年12月 | ①授業の概要:「基礎看護技術『基本技術』『日常生活援助技術』『診療時の補助技術』の授業および学内演習を担当した。<br>②臨地実習の概要:『基礎看護学実習』では、看護過程を展開がおよび看護実践能力が高めることができるような看護実習指導をした。 |
| ①授業の実践:成人看護学Ⅰ　成人看護学援助論(周手術期)、成人看護援助論(慢性期)、成人看護援助論(回復期)、基礎看護技術 ②臨地実習の実践:基礎看護学実習　成人看護学実習(急性期) | 平成16年4月～<br>平成18年3月 | ①授業の概要:「成人看護学Ⅰ」では、複雑多様化した現代社会において成人期にある人に対する看護について授業した。「成人看護学援助論」では周手術期にある患者の看護、慢性期にある患者の看護、回復期にある患者の看護について授業した。「基礎看護技術」では『栄養生活と食事』の授業およびその他看護技術演習指導をした。<br>②臨地実習の概要:「基礎看護学実習」では、見学実習～看護実習指導を担当した。「成人看護実習」は手術室見学実習・ICU見学自習・周手術期病棟実習を担当した。その他保育所実習・老人保健施設実習ではカンファレンスに参加した。 |
| ①授業の実践:成人看護援助論1－(2) ②臨地実習の実践:成人看護実習2(慢性期・終末期、基礎看護実習1、基礎看護実習1 | 平成18年4月～<br>平成18年3月 | ①授業の概要:「成人看護援助論1－(2)」では、がんの動向および治療の特殊性、がん患者の心理・社会的状態、「がんとともに生きる」過程を支える看護を授業内容とした。<br>②臨地実習の概要:「成人看護実習2(慢性期・終末期)」では慢性疾患をもって生きる患者の健康上の諸問題や、療養行動維持・QOL向上への看護の実際や、終末期にある患者および家族への理解と、生と死の統合に向けての看護の実際について実習指導した。「基礎看護実習1」ではⅰ)入院患者の環境とそこで働く医療スタッフの活動、ⅱ)病院の機能とそこでの保健医療サービス部門の種類・役割について見学実習指導をした。「基礎看護実習3」では、臨地での看護過程展開の実際を指導した。 |
| ①授業の実践:成人看護援助論1－(1) ②臨地実習の実践:成人看護実習1(周手術期・回復期)、基礎看護実習1、基礎看護実習 | 平成18年4月～<br>平成18年3月 | ①授業の概要:「成人看護援助論1－(2)」では、がんの動向および治療の特殊性、がん患者の心理・社会的状態、「がんとともに生きる」過程を支える看護を授業内容とした。<br>②臨地実習の概要:「成人看護実習2(慢性期・終末期)」では慢性疾患をもって生きる患者の健康上の諸問題や、療養行動維持・QOL向上への看護の実際や、終末期にある患者および家族への理解と、生と死の統合に向けての看護の実際について実習指導した。「基礎看護実習1」ではⅰ)入院患者の環境とそこで働く医療スタッフの活動、ⅱ)病院の機能とそこでの保健医療サービス部門の種類・役割について見学実習指導をした。「基礎看護実習3」では、臨地での看護過程展開の実際を指導した。 |

| | | |
|---|---|---|
| ①授業の実践:成人看護援助論1－(1) ②臨地実習の実践:成人看護実習1(周手術期・回復期)、基礎看護実習1、基礎看護実習3 | 平成19年4月～<br>平成22年3月 | ①授業の概要:「成人看護援助論1－(1)」では、成人期の何らかの原因で急激に身体的な変化が訪れ、破綻している状態にある急性期患者や周手術期患者への看護について授業をした。<br>②臨地実習の概要:「成人看護実習1(周手術期・回復期)」では、ⅰ)手術療法を受ける患者の術前・術中・術後の特徴を理解し患者及び家族のニーズを考慮に入れた看護過程展開の実際、ⅱ)手術療法を受ける患者の心理面を理解し、患者及び家族への共感的態度について指導した。「基礎看護実習1」「基礎看護実習3」は5)の②と同じである。 |
| ①授業の実践:急性期看護援助論、周手術期看護援助論、②臨地実習の実践:成人看護学実習Ⅰ(周手術期・回復期)、統合実習 | 平成22年4月～<br>平成24年3月 | ①授業の概要:「急性期看護援助論」では、健康状態の急激な変化のある患者に対して事例検討をしながら授業をすすめた。「周手術期看護援助論」では術前および術直後のモニタリング・術後合併症リスク予防のための看護介入、術後生活にむけての継続的な支援について学内演習を取り入れた授業を行った。カリキュラム上には含まれないが、3回生が臨地実習前の2日間集中した総合演習Ⅱ・総合演習Ⅲを企画および運営した。総合演習Ⅱでは安全なケア技術の展開と知識・技術の習得を目的として、ⅰ)車椅子移動・移乗の介助、ⅱ)酸素療法を受けている患者の観察・ケア、ⅲ)輸液ポンプ使用中の患者の観察・ケアとアラームの対応について演習した。総合演習Ⅲは教育的支援計画の立案とパンフレット作成を目的として、ⅰ)患者の日常生活を考慮にいれた教育的支援計画の立案を演習した。②臨地実習の概要:「成人看護学実習Ⅰ(周手術期・回復期)」では、運動器の手術を受ける患者を中心に、周手術期看護の実際について実習指導した。実習開始前は、運動器疾患患者を中心に看護ポイントの復習や患者体験演習を行った。実習期間中において、モデル人形を活用した術直後観察の学内演習を取り入れた。「統合実習」では、看護専門職に必要な知識・技術を統合させて活用し、看護の役割・機能と課題についての理解や看護実践能力を高められるよう実習指導した。 |
| ① 授業の実践:症状緩和技術論、症状緩和技術演習、疾病管理技術演習、治療援助技術演習、看護課題ゼミ、卒業研究 ② 臨地実習の実践:急性期看護実習、疾病管理看護実習、統合実習 | 平成24年4月～<br>平成26年3月 | ① 授業の実践:ⅰ)「症状緩和技術論」では、臨床でよくみられる代表的な症状について、その定義や発症のメカニズム、症状のアセスメント方法などを看護の視点から学習できる授業内容とした。授業は症状緩和の重要性と看護師の役割を説明し『痛みのある患者』『浮腫・脱水のある患者』『せん妄のある患者』の症状を緩和する看護援助についてである。ⅱ)「症状緩和技術演習」では、疾病の進行あるいは医療処置・環境の変化に伴う症状が緩和・軽減できるようになるために、症状を理論的に捉え、症状マネージメントに取り組むことができ、看護者が提供できる看護技術が実施できるような演習内容と、演習は、『嘔気／嘔吐のある患者』『便秘のある患者』に対する症状緩和アプローチを担当した。ⅲ)「疾病管理技術演習」では、成人期にある慢性の病気を抱えた患者の事例を通し、セルフマネジメント支援を行うための基本的な思考過程と技術を養うための演習である。グループワークの参加や発表を通し、助言・指導した。ⅳ)「治療援助技術演習」では、健康を促進するための看護を提供するために欠かすことのできない看護基本技術のなかで、とくに検査や治療に必要な看護援助技術について理解し、援助の方法を習得できる演習である。治療・検査に関連した援助技術の内で検査における援助技術(静脈血採血、心臓カテーテル、内視鏡、超音波、十二誘導)、侵襲的処置に関連した援助技術(胸腔穿刺、腹腔穿刺、腰椎穿刺、骨髄穿刺)の授業をし、静脈血採血に対する演習をシュミレーションモデル人形を使用し行った。<br><br>ⅴ)「看護課題ゼミ」では、1～4年次の看護の学びの総括として、履修した授業科目の理論と実習を統合させるために。学生の学習課題、研究テーマにそって少人数単位のゼミナール形式で文献学習を行った。ⅵ)「卒業研究」は、学生の研究テーマに対し研究計画を立案し研究を進めていけるよう、基礎的な看護研究の方法を理解し研究論文の書き方を学び、研究の過程を通して看護現象に関する問題・課題を科学的系統的に探究できるよう指導した。② 臨地実習の実践:ⅰ)「急性期看護実習」を担当した。手術を必要とする患者について、周手術期から社会復帰に至るプロセスに焦点を当て、患者や家族にとって手術を体験することの意味を見いだしながら、患者に起こりうる健康上の様々な課題を理解し、早期回復・社会復帰に向けた看護支援を行うことができるよう実習指導した。ⅱ)「疾病管理看護実習」を担当した。生涯にわたり疾病管理を必要とする患者が抱えている諸問題を理解し、具体的な支援方法について学びを深め、患者と看護者のパートナーシップに基づいた系統的アプローチによって、慢性の病いを抱えた患者が自己管理能力を高め、心身の不調と折り合いをつけながら療養を継続できるよう支援するための基礎的な看護実践能力を養えるよう実習指導した。ⅲ)「統合実習」を担当した。看護学実習の終体制としてこれまでの学びや体験の中から興味、関心、疑問を見出し学習課題を明確にし、対象者を幅広い視点から理解し、看護の理論と根拠に基づいた統合的な看護実践能力を養えるよう、実習指導した。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | ①授業の実践：基礎セミナーⅠ、基礎セミナーⅡ、卒業セミナーⅠ、卒業セミナーⅡ、人間と生命、チーム医療概論Ⅱ、看護倫理、基礎看護学総論Ⅰ、基礎看護学総論Ⅱ、基礎看護技術論Ⅰ、基礎看護技術論Ⅱ②臨地実習の実践：基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ（急性期・回復期）、成人看護学実習Ⅱ（慢性期・終末期）、統合実習 | 成26年4月～<br>平成31年3月 | ①授業の概要：「基礎セミナーⅠ」「基礎セミナーⅡ」「卒業セミナーⅠ」「卒業セミナーⅡ」では、保健医療という職業について多角的に考えることによりキャリア設計能力キャリア・職業観、キャリア・職業の選択、職業・専門能力などを明確にさせるような授業とした。「人間と生命」では近年医学の発達とともに、人間の生や死を操作する技術もまた急速な発展をとげている。このような状況にあって、さまざまな倫理学的問題が提起し、議論されている。そうした諸問題を生命倫理学、科学、哲学等によって整理、検討する授業内容とした。「チーム医療概論Ⅱ」では、チーム医療における連携・協働とは何かを目的として、またどのような行為や活動を含むのかについて検討し、paper patientを通じて具体的対処方法を学ぶ授業とし、『チーム医療を看護師の立場から考える』『具体的なケアについて看護師からの視点を挙げてチーム医療を考える』を授業した。「看護倫理学」では専門職者である看護職としてふさわしい倫理的指針をもちながら行動しなくてはならない。倫理の基本概念を学ぶ授業とし、『看護者の倫理要綱』に集約された臨床倫理を理解する。また、看護職が最も身近に係わる事例を提示しながら臨床における自らの立ち位置の確認を進めていけるような授業内容とした。「成人看護学総論」では、成人の定義、成人各期の特徴をとらえ、成人をとりまく健康課題を理解できる授業をした。さらに成人看護を展開するための概念・理論を活用することによって健康を維持し、発達を促進し、環境への適応を促す方策を学習できる授業とした。「成人臨床看護学Ⅰ」では、生命の危機状態にある人とその家族の身体的、心理的・社会的特徴を踏まえた看護実践をするための基礎知識を習得できる授業をした。「成人看護学演習」では成人期の紙上患者を基にした看護過程の展開を演習している。既習の看護技術を踏まえ、心電図、人工呼吸器、排痰法、輸液管理、点滴量の測定、血糖側的やインスリン注射についての看護技術習得ができる演習をしている。「基礎看護学総論Ⅰ」では、看護を概観し、全体を捉えることで、「看護とは何か」を問い、看護の本質や看護の独自性について学習する。看護の重要な構成概念や倫理、保健医療福祉システム等について講義し、看護専門職としての在り方を考え、これから学ぶ看護学の礎とするような授業内容とし、『基礎看護学」を学ぶにあたって』『看護の対象の理解』『看護の提供者』『看護における倫理』『看護の提供の仕組み』を授業した。「基礎看護学総論Ⅱ」では看護と社会との中で看護実践される看護活動を通して、看護職者に求められる倫理を理解する。また、科学的根拠に基づいた看護実践するために、看護における人間のとらえ方を看護理論と看護過程との関連について理解を深め、看護実践の方法としての看護過程の概要を学ぶような授業内容とし、『看護の理論と看護専門職としての看護活動』『看護の理論家と理論(ナイチンゲール、ヘンダーソン、オレム、トラベルビー)』を授業した。「基礎看護技術論Ⅰ」あらゆる健康レベルにある人々の生活過程を理解し、人々が安全で安楽な生活を行うための基礎的な援助技術を習得する。看護技術の習得は、人間への尊厳を土台として、手順や方法だけでなく専門的な知識を踏まえて、状況を判断する能力が必要であり、根拠に基づいた実践が行えるような授業内容とし、『看護技術とは』『清潔の援助（全身清拭・手浴・足浴・陰部洗浄・洗髪）』『シーツ交換』『寝衣類交換』を授業した。「基礎看護技術論Ⅱ」では、医療において患者が安全・安楽に診療を受けられ、最大の治療効果が得られるように、患者を援助するための基礎知識・技術を学ぶ。また、診療をうける患者の心理や苦痛を理解 |
| | ①授業の実践：スタートアップゼミ,1、慢性期療養支援演習、キャリアサポート演習A、看護研究演習② | 平成31年4月＝現在に至る | 「スタートアップゼミ」では、大学における知識習得や研究遂行に必要な理解力、単球力、表現力のスキルを養うための基礎的内容とする。「慢性期療養支援演習」慢性期看護の基礎となる概念を理解するとともに、慢性疾患に伴う健康問題により、自己管理や生活の再構築が必要な患者やその家族に対する援助について学修する。「看護研究演習Ⅱ」学生の研究課題について指導する。「キャリアサポート実践講座A]下級生の指導に当たることに対し演習計画指導に対するサポートを行う |
| 2 | 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3 | 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4 | その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 高齢者の日常生活に及ぼすモーニングケアの効果 | 単著 | 平成16年3月 | 大阪府立看護大学大学院修士論文 | | 全58頁 |
| 高齢者の日常生活に及ぼす集中的なモーニングケアの効 | 単著 | 平成18年4月 | 日本看護研究学会雑誌第29巻第1号 | | p107－117 |
| 倫理的な能力の向上に向けて(4)―「看護学実習記録に関する確認書」「看護学実習記録に関する誓約書」を用いて | 共著 | 平成19年9月 | 京都市立看護短期大学紀要第32号 | 今西誠子、山本多香子、山田豊子 | p123－130 |
| 「看護実習依頼書」「看護実習同意書」に対する患者の認識について | 共著 | 平成20年9月 | 京都市立看護短期大学紀要第33号 | 今西誠子、山本多香子 | p67－73 |
| 看護の場に焦点をあてたアロマセラピー研究の方向性―2003年から2005年までの文献レビュー― | 共著 | 平成20年9月 | 京都市立看護短期大学紀要第34号 | 山本多香子、徳永基与子 | p49－55 |
| 看護学生の個人情報保護に関する意識調査―「確認書」「誓約書」を用いて― | 共著 | 平成21年2月 | 日本看護学会論文集看護教育第39回 | 山本多香子、今西誠子 | p196－198 |
| 看護学実習記録の最終的取り扱いについて―看護学生の意識調査から― | 共著 | 平成21年3月 | 日本看護学会論文集看護教育第40回 | 今西誠子、山本多香子 | p193－195 |
| 患者訪問研究から観た援助意識の変化について―術前・術中・術後訪問から― | 共著 | 平成21年6月 | 日本手術看護学会誌第5巻第1号 | 山本多香子、山田豊子、吉田広美 | p84－87 |
| 成人看護援助論1－(1)の学内演習における学生の学びと課題 | 共著 | 平成21年7月 | 京都市立看護短期大学紀要第34号 | 山本多香子、山田豊子、三木葉子 | p109－117 |
| 周手術期実習前における事前学習の検討 | 共著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要第35号 | 山本多香子、田村葉子、山田豊子 | p83－88 |
| 輸液・輸液ポンプ管理への学び―学内演習後学生レポートと臨地実習終了後アンケートの検討― | 共著 | 平成22年5月 | 京都市立看護短期大学紀要第35号 | 山本多香子、田村葉子、中島優子、黒木美智子、山田豊子 | p89－94 |
| 成人看護実習における事例検討会の効果と課題 | 共著 | 平成22年6月 | 京都市立看護短期大学紀要第36号 | 中島 優子・山田 豊子・黒木美智子・山本多香子・田村 葉子 | p171－178 |
| 周手術期実習におけるアロマセラピーを取り入れる効果 | 単著 | 平成23年2月 | 日本看護学会論文集看護教育第41回 | | p83－86 |
| 退院指導パンフレット作成による学び | 共著 | 平成23年7月 | 日本看護学会論文集看護教育第41回 | 山本多香子、田村葉子、中島優子 | p264－267 |
| 学生の卒業前における看護技術実施状況および実施への自信に関する調査 | 共著 | 平成23年7月 | 日本看護学会論文集看護教育第42回 | 山本多香子、山田豊子、田村葉子、中島優子、江頭典江、黒木美智子 | p87―95 |
| 看護実習記録の返却と個人情報保護の両立に向けて―卒前卒後における実習記録の取り扱い状況から― | 共著 | 平成23年7月 | 京都市立看護短期大学紀要第37号 | 今西 誠子・黒木美智子・田村 葉子・山本多香子 | p29―36 |
| 人工股関節再置換術を受けた患者の痛みと生活助教の調査報告－初回人工股関節全置換術・両側人工股関節置換術を受けた患者との比較 | 共著 | 平成25年3月 | 大和大学紀要第1号 | 山本多香子、山田豊子、 | pp233―239 |
| The Context of Beginning Students in Fundamentals of Nursing Art Courses that Utilized Cooperative Learning Methods | 共著 | 平成29年3月 | 大和大学紀要第3巻3号 | UNO Mayumi YAMAMOTO Takako | pp101―110 |
| その他 | | | | | |
| 看護治療技術育成のためのリンパドレナージ手法訓練モデルの開発 | 共著 | 平成20年4月～平成21年3月 | 科学研究費補助金（萌芽研究） の研究分担 | 奥津文子、星野明子、山田豊子、山本多香子、黒木美智子、三木葉子 | 課題番号18659659 |
| テレビ電話を用いたリンパ浮腫セルフケア支援システムの構築 | 共著 | 平成20年4月～平成21年3月 | 科学研究費補助金（基盤研究 B）の 研究分担 | 奥津文子、星野明子、江川隆子、赤澤千春、山田豊子、山本多香子 | 課題番号20390552 |
| 人工股関節再置換術患者の実態調査 | 共著 | 平成23年4月～平成26年3月 | 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（挑戦的萌芽研究） | 山本多香子、山田豊子 | 課題番号23660053 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 平成15年4月 | 日本看護研究学会会員 |
| 平成16年4月 | 保健医療社会学会会員 |
| 平成17年3月 | 日本看護研究学会北陸地方会世話人活動 |
| 平成24年9月 | 日本運動器看護学会会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　渡部　洋子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）（1）学生の授業評価の活用 | 平成28年9月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部教授として，「在宅看護概論」（展開科目，2年次配当，必修2単位）において実施している。毎回出席確認のための出席表（個人用）に授業の感想・意見・質問等を簡単に記入し提出させる。この科目では介護保険やケアマネジメントを学ぶため，特に法制度関係の質問や疑問が多く記入され，授業だけでは理解できなかったことを確認するツールとして活用できた。質問や意見に対し，個別にコメントを返すことが多かったが，共有すべき内容は次回の授業で提示することができ，学生の理解を助けている。 |
| （2）課題・レポートの活用 | 平成29年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部教授として，「在宅看護援助論」（展開科目，3年次配当）必修2単位）において実施している。看護過程の展開について，講義の予習・復習ができるように事例展開を中心とした課題に取りくむことで学習効果をあげることができている。4年次の在宅看護論実習につなげられるよう看護過程の展開は実習記録様式を使用し，在宅看護でよく遭遇する複数の事例を演習しながら取り組むようにした。 |
| （3）グループディスカッションとロールプレイの活用 | 平成28年9月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部教授として，「在宅看護援助論演習」（展開科目，3年次配当，必修2単位）において実施している。訪問面接技術の演習として「初めての訪問面接」をグループでロールプレイを行っている，録画ビデオにより振り返りグループ討議を行うことで学びを共有することができている。また，在宅介護において事例をもとにどのような援助が必要かをグループ討議し，発表を行った。学生の創意工夫もみられ，在宅の特徴を活かした援助を考えることができている。演習により一連の看護過程の展開ができたことで学生の達成感がみられた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書　（1）補助教材プリント作成 | 平成28年9月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部教授として，「在宅看護概論」（展開科目，3年次配当，必修2単位）において実施している。毎単元毎に、学生が学習しやすいように，単元の目標，授業のポイントを明示した。また，毎回授業毎に資料を作成し，重要あるいは必要な箇所を空欄にし，学生が書き込めるように工夫し，意識的に学習できるようにした。特に介護保険制度などについては，テキストには不足している最新情報をプリント作成し配布したことで，自己学習に役立てられていたことが授業後アンケートで確認できた。 |
| （3）在宅看護学実習の手引き作成 | 平成29年3月 | 京都学園大学健康医療学部教授として，「在宅看護学実習」（展開科目，4年次配当，必修2単位）において使用した。在宅看護学実習では，常時教員が指導にあたれるものではない。現場のスタッフに指導の多くを委ね，学生も一人で学ぶことが多くなるため，指針となるガイドブックが必要と考え作成した。実習前から実習中の学習プロセスと，学習課題，主な在宅看護のポイントなどを冊子にまとめた。学生はこの手引きを活用しながら，在宅看護実習に取り組むが，指導者側にとっても学生の進行状況が確認できて参考になったとの評価である。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| フットケア外来を5年継続している高齢糖尿病患者のフットケア行動プロセス-受診継続年数に見る阻害要因- | 共著 | 2017年3月 | 第48回（平成29年度）日本看護学会論文集，慢性期看護p131～134 | 共著者：上野千代子 | 共同研究につき抽出不可能 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他　学会発表 | | | | | |
| フットケア外来を5年継続している高齢糖尿病患者のフットケア行動プロセス--足病変の重症化予防を目指して- | 共著 | 2017年8月 | 第48回（平成29年度）日本看護学会，慢性期看護-学術集会-（於：神戸ポートピアホテル） | 共著者：上野千代子 | 共同研究につき抽出不可能 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 公益財団法人<br>在宅医療助成勇美記念財団助成 | 市民の集い「やさしい在宅医療講座」看取りの経験を語るを主催，平成29年10月29日（日）13：00～16：00，京都学園大学みらいホール，特別講演とシンポジウムを実施，参加者123名 |
| 所属学会 | 日本看護科学学会，日本在宅看護学会，日本老年看護学会 |
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　渡邊　能行 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 講義方法(旧所属) | 1989年4月～ | 講義に際しては、できるだけ詳細なレジメを配布するようにしている。その中で講義開始時に当該講義中の要点となる内容・事例について説明し、講義の内容に関する注意を喚起するように努めている。講義内容は豊富な経験や様々な社会活動から得られた情報に基づく保健・医療の現場よりの最新の事例を紹介し、スライドやビデオ等のビジュアルな媒体も利用し、興味を持てる内容にしている。加えて、参考図書・文献も紹介し、興味を持った学生がさらに深く勉学できるように配慮している。 |
| 健康j医療学概論 | 2019年4月～ | 看護学科と言語聴覚学科1年生向けの初めての専門教育に関する科目であるので、今後4年間で修得しなければならない多くの専門用語を織り交ぜてどこかで聞いたことがあるように印象付けて講義している。教員と学生の共有サイト「京学ナビ」において、講義終了後にそのパワーポイントスライドをPDF化してアップすると同時に、各回の最重点を1枚のスライドで10行以内にまとめ、ここから小テストを作問するようにした。また、私語をやめられない一部の学生への注意勧告を行い、それでもやめられない学生には授業中にその現場を抑えて直接注意するようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ヘルスプロモーション論 | 2019年4月～ | 毎回の講義終了後に講義で使用したパワーポイントスライドをPDF化して教員と学生の共有サイト「京学ナビ」にアップしている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 特記すべきものなし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 大学看護学科等における非常勤講師 | 1986年4月～1996年3月 | 京都府立保健婦専門学校非常勤講師「健康管理論」 |
| | 1996年4月～2005年3月 | 京都府立医科大学医療技術短期大学部非常勤講師「公衆衛生学」 |
| | 1999年4月～2005年3月 | 京都第二赤十字看護専門学校非常勤講師「公衆衛生学」 |
| | 2008年4月～2011年3月 | 京都橘大学看護学部非常勤講師「疫学」 |
| | 2011年4月～2015年3月 | 滋賀県立大学人間看護学部非常勤講師「公衆衛生学」 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ABC検診・内視鏡検診・X線検診の疫学的有効性比較、　血清ABC検診で内視鏡でX線で胃炎をどうする？－検診から対策まで－ | 共著 | 2015年10月 | 日本医事新報社 | 三木一正編 | 162頁-167頁 |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 内視鏡検診の有効性が証明された中での新しい胃がん検診のあり方 | 単著 | 2015年 | 岡山県医師会報(1415号) | 渡邊能行 | 1073頁-1074頁 |
| Decreased Cortical Thickness, as Estimated by a Newly Developed Ultrasound Device, as a Risk for Vertebral Fracture in Type 2 Diabetes Mellitus Patients with eGFR of Less than 60 mL/min/1.73 m2. | 共著 | 2015年 | Osteoporosis International (26巻1号) | Mishima T, Motoyama K, Imanishi Y, Hamamoto K, Nagata Y, Yamada S, Kuriyama N, Watanabe Y, Emoto M, Inaba M | 229頁-236頁 |
| Detection of *Helicobacter pylori* DNA in inflamed dental pulp specimens from Japanese children and adolescents. | 共著 | 2015年 | Journal of Medical Microbiology (64巻) | Ogaya Y, Nomura R, Watanabe Y., Nakano K. | 117頁-123頁 |
| Serologically determined gastric mucosal condition is a predictive factor for osteoporosis in Japanese men | 共著 | 2015年 | Dig Dis Sci(60巻7号) | Mizuno S,Matsui D, Watanabe I,Ozaki E, Kuriyama N,Watanabe Y | 2063頁-2069頁 |
| Weekly variations of stroke occurrence: an observational cohort study based on the Kyoto Stroke Registry, Japan | 共著 | 2015年 | BMJ Open (5巻3号) | Shigematsu K, Watanabe Y, Nakano H, on behalf of the Kyoto Stroke Registry Committee | 1頁-6頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Influences of hyperlipidemia history on stroke outcome; a retrospective cohort study based on the Kyoto Stroke Registry | 共著 | 2015年 | BMC Neurology(15巻) | Shigematsu K, Watanabe Y, Nakano H, and on behalf of the Kyoto Stroke Registry Committee. | 1頁-6頁 |
| Relationship between Cnm-positive Streptococcus mutans and cerebral microbleeds in humans. | 共著 | 2015年 | Oral Diseases(21巻7号) | Miyatani F, Kuriyama N, Watanabe I, Nomura R, Nakano K, Matsui D, Ozaki E, Koyama T, Nishigaki M, Yamamoto T, Mizuno T, Tamura A, Akazawa K, Takada A, Takeda K, Yamada K, Nakagawa M, Ihara M, Kanamura N, Friedland RP, Watanabe Y | 886頁-893頁 |
| Ventricular Temperatures in Idiopathic Normal Pressure Hydrocephalus (iNPH) Measured with DWI-based MR Thermometry | 共著 | 2015年 | Magn Reson Med Sci(14巻) | Kuriyama N, Yamada K, Sakai K, Tokuda T, Akazawa K, Tomii Y, Tamura A, Kondo M, Watanabe I, Ozaki E, Matsui D, Nakagawa M, Mizuno T, Watanabe Y | 305頁-331頁 |
| Television viewing time and mortality from stroke and coronary artery disease among Japanese men and women, The Japan Collaborative Cohort Study. | 共著 | 2015年 | (Circ J 79巻11号) | Ikehara S,99H, Wada Y, Tanabe N, Watanabe Y, Kikuchi S, Tamakoshi A; JACC Study Group. | 2389頁-2395頁 |
| 脳血管からみた血管作動性生理ペプチドの新しい役割 | 共著 | 2016年 | 神経内科( 84 巻) | 小山晃英、渡邊能行、栗山長門 | 550頁-556頁 |
| ヘリコバクター・ピロリ感染者における慢性萎縮性胃炎の進展に及ぼす因子― 摂取栄養素分析による検討 ― | 共著 | 2016年 | 日本消化器がん検診学会雑誌(54巻1号) | 瀬古千佳子, 松井大輔, 松川泰子, 小山晃英, 渡邉功, 尾﨑悦子, 栗山長門, 水野成人, 渡邊 能行 | 30頁-41頁 |
| ペプシノゲン法によって判定した萎縮性胃炎の背景因子の検討 | 共著 | 2016年 | 日本消化器がん検診学会雑誌 (54巻2号) | 松川泰子, 瀬古千佳子, 松井大輔, 渡邉功, 小山晃英, 尾﨑悦子, 栗山長門, 水野成人, 渡邊能行 | 248頁-258頁 |
| Effects of self-reported calorie restriction on correlations between SIRT1 polymorphisms and body mass index and long-term weight change | 共著 | 2016年 | Gene(594巻) | Higashibata T,, Wakai K, Naito M, Morita E, Hishida A, Hamajima N,Hara M, Suzuki S, Hosono S, Takashima N, Ohnaka K, Takada A, Mikami H, Watanabe Y, Uemura H, Kubo M, Tanaka H | 16頁-22頁 |
| Oral Cnm-positive Streptococcus Mutans Expressing Collagen Binding Activity is a Risk Factor for Cerebral Microbleeds and Cognitive Impairment. | 共著 | 2016年 | Scientific report (6:38561) | Watanabe I, Kuriyama N, Miyatani F, Nomura R, Naka S, Nakano K, Ihara M, Iwai K, Matsui D, Ozaki E, Koyama T, Nishigaki M, Yamamoto T, Tamura A, Mizuno T, Akazawa K, Akihiro Takada, Kazuo Takeda, Kei Yamada, Masanori Nakagawa, Tokutaro Tanaka, Narisato Kanamura, Friedland R P, Watanabe Y. | 1頁-10頁 |
| Serum albumin to globulin ratio is related to cognitive decline via reflection of homeostasis: a nested case-control study | 共著 | 2016年 | BMC Neurol(16巻1号) | Koyama T, Kuriyama N, Ozaki E, Matsui D, Watanabe I, Miyatani F, Kondo M, Tamura A, Kasai T, Ohshima Y, Yoshida T, Tokuda T, Mizuta Imn, Mizuno S, Yamada K, Takeda K, Matsumoto S, Nakagawa M, Mizuno T, Watanabe Y | 1頁-10頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Japanese female Kendo practitioners are associated with high radial bone mineral density | 共著 | 2017年 | Journal of Sports Sciences (35巻18号) | Matsui D, Watanabe I, Koyama T, Ozaki E, Kuriyama N, Mizuno S, Watanabe Y | 1頁-6頁 |
| Validity of self-reported number of teeth and oral health variables | 共著 | 2017年 | BMC Oral Health (17巻1号) | Matsui D, Yamamoto T, Nishigaki M, Miyatani F, Watanabe I, Koyama T, Ozaki E, Kuriyama N, Kanamura N, Watanabe Y | 1頁-8頁 |
| Matrix metalloproteinase-9 gene polymorphisms are associated with multiple family history of gastric cancer | 共著 | 2017年 | Gastric Cancer (20巻) | Okada R, Naito1 M, Hattori Y, Seiki T, Wakai K, Nanri H, Watanabe M, Suzuki S, Sefanya Kairupan T, Takashima N, Mikami H, Ohnaka K, Watanabe Y, Katsuura-Kamano S, Kubo M, Hamajima N, Tanaka H, the Japan Multi-Institutional Collaborative Cohort (J-MICC) Study Group | 246頁-253頁 |
| Nationwide hospital-based survey of idiopathic normal pressure hydrocephalus in Japan: Epidemiological and clinical characteristics | 共著 | 2017年 | Brain and Behavior (7巻3号) | Kuriyama N, Miyajima M, Nakajima M, Kurosawa M, Fukushima W, Watanabe Y, Ozaki E, Hirota Y, Tamakoshi A, Mori E, Kato T, Tokuda T, Urae A, Arai H. | 1頁-10頁 |
| Association between loss of bone mass due to short sleep and leptin-sympathetic nervous system activity. | 共著 | 2017年 | Archives of Gerontology and Geriatrics (70巻) | Kuriyama N, Inaba M, Ozaki E, Yoneda Y, Matsui D, Hashiguchi K, Koyama T, Iwai K, Watanabe I, Tanaka R, Omichia C, Mizuno S, Kurokawa M, Horii M, Niwa F, Iwasa K, Yamada S, Watanabe Y | 201頁-208頁 |
| Genetic Variants of RAMP2 and CLR are Associated with Stroke. | 共著 | 2017年 | J Atheroscler Thromb (24巻12号) | Koyama T, Kuriyama N, Ozaki E, Matsui D, Watanabe I, Takeshita W, Iwai K, Watanabe Y, Nakatochi M, Shimanoe C, Tanaka K, Oze I, Ito H, Uemura H, Katsuura-Kamano S, Ibusuki R, Shimoshikiryo I, Takashima N, Kadota A, Kawai S, Sasakabe T, Okada R, Hishida A, Naito M, Kuriki K, Endoh K, Furusyo N, Ikezaki H, Suzuki S, Hosono A, Mikami H, Nakamura Y, Kubo M, Wakai K | 1267頁-1281頁 |
| Association between α-Klotho and deep white matter lesions in the brain: A pilot case control study using brain MRI. | 共著 | 2018年 | Journal of Alzheimer's (Disease 61巻1号) | Kuriyama N, Ozaki E, Mizuno T, Ihara M, Mizuno S, Koyama T, Matsui D, Watanabe I, Akazawa K, Takeda K, Ta1ada A, Inaba M, Yamada S, Motoyama K, Takeshita W, Iwai K, Hashiguchi K, Kobayashi D, Kondo M, Tamura A, Yamada K, Nakagawa M, Watanabe Y | 145頁-155頁 |
| 血管性認知症に関する疫学研究 -京都発の調査研究からの情報発信- | 共著 | 2018年 | 京府医大誌(127巻7号) | 栗山長門、渡邊能行 | 435頁-449頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| 内視鏡検診の有効性が証明された中での新しい胃がん検診のあり方 | 単著 | 2015年 | 岡山県医師会報（1415号） | 渡邊能行 | 1073頁-1074頁 |
| 行政とともに医師会が取り組むべき胃がん対策<br><br>3. 自治体の保健医療福祉施策の方向性<br>4. 胃がんの統計学的背景<br>6. 胃がん検診の現状と課題<br>12. 試行としての胃がんハイリスク者分類の提案<br>14. 胃内視鏡検診の提案<br>15. 京都府医師会が提言する胃がん対策のまとめの項担当 | 共著 | 2015年 | 京都府医師会消化器がん検診委員会 | 渡邊能行 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2015年 3月 | 第85回日本衛生学会総会において一般演題「人口統計・保健統計」の口演4演題の座長を務める。 |
| 2015年 4月 | 京都府立医科大学医学倫理審査委員会委員長（2016年6月まで） |
| 2015年 4月 | 京都府立医科大学特定認定再生医療等委員会委員長（2016年6月まで） |
| 2015年 4月 | 第29回日本医学会総会2015関西において柱6企画3「放射線被ばくの健康影響と福島の課題」の座長を務める。 |
| 2015年 6月 | 第54回日本消化器がん検診学会総会においてパネルディスカッション「胃がん検診　新たなモダリティーとその位置付け」の基調講演と座長を務める。 |
| 2015年 8月 | 第44回日本消化器がん検診学会近畿地方会においてシンポジウム「消化器がん検診の“いま”そして “これから”」の座長を務める。 |
| 2015年 8月 | 京都市高齢者施策推進協議会委員（2017年3月まで） |
| 2015年 8月 | 京都府医師会環境保全特別委員会委員・委員長（2017年3月まで） |
| 2015年 8月 | 京都府医療審議会専門委員（2017年3月まで） |
| 2015年 9月 | 京都山城総合医療センター経営改革プラン第3次策定委員会委員・座長（2016年3月まで） |
| 2015年 9月 | 京都府医師会臨床研修の在り方に関する検討委員会（2019年3月まで） |
| 2015年 12月 | きょうと健康長寿・未病改善推進会議委員・座長（平成29年3月まで） |
| 2016年 1月 | 第52回医学系倫理委員会連絡会議においてシンポジウムⅠ「倫理審査委員会の質保証をめぐって」の中で「京都府立医科大学倫理審査委員会の現況」の演者と座長を務める。 |
| 2016年 1月 | 第52回医学系倫理委員会連絡会議において特別講演Ⅱ「研究府政不正の構造分析」の座長を務める。 |
| 2016年 10月 | 第75回日本公衆衛生学会総会においてポスター発表第17分科会「公衆栄養 」の座長を務める。 |
| 2016年 11月 | 京都府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会委員（2018年11月 まで） |
| 2016年 12月 | ふくちやま医療・介護・福祉総合ビジョン検討委員会委員（2017年3月まで） |
| 2017年 7月 | 向日市主催の「血管いきいき講座」において講演「向日市民の健康度を考える」の演者を務める。 |
| 2017年 8月 | 第46回日本消化器がん検診学会近畿地方会においてシンポジウム「消化器がん検診の未来予想図を 語る」の中で「消化器がん検診の未来予想図」の演者と座長を務める。 |
| 2017年 8月 | 日本消化器がん検診学会顧問（倫理委員会、利益相反委員会担当）（現在に至る） |
| 2017年 8月 | 日本消化器がん検診学会近畿支部顧問（現在に至る） |
| 2017年 10月 | JDDW2017Fukuokaにおける「倫理セッション」の座長を務める。 |
| 2017年 10月 | 第76回日本公衆衛生学会総会において一般公演第23分科会「保健医療介護サービス研究 」の座長を務める。 |
| 2018年 1月 | 平成29年度社会医学系専門医会研修プログラム統括責任者連絡会議において「京都プログラムについて」の演者を務める。 |
| 2018年 6月 | 革新的自殺研究推進プログラム・自殺研究ガバニングボード委員（2019年3月まで） |
| 2018年 10月 | 京都山城総合医療センター経営改革プラン第3次策定委員会委員・座長（2019年3月まで） |
| 2019年3月 | 京都府看護師確保対策推進協議会委員、座長（現在に至る） |
| 2019年4月 | 革新的自殺研究推進プログラム・自殺研究ガバニングボード委員（2021年3月まで） |
| 2019年4月 | 京都府参与（地域保健医療担当）（現在に至る） |
| 2019年4月 | 京都府地域医療審議会委員、会長（現在に至る） |
| 2019年6月 | 第58回日本消化器がん検診学会総会倫理指針に関する講演会で座長を務める。 |
| 2019年6月 | 京都地域総括ケア推進機構理事長（現在に至る） |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

地域保健を担う京都府や京都府下の市町村等の地方自治体、京都府医師会・京都府歯科医師会・病院協会等の医療系団体やその他の介護系団体とも一定の関係性を保有しているので、地域保健に係る課題設定は随時可能である。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　今西 誠子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 課題レポートを活用した小児看護技術における専門知識の定着の工夫 | 2002年4月～<br>2018年6月 | 小児看護技術演習で実施した内容について各項目の重要事項及び実施留意点に関する課題シートの完成と学生個々の振り返りレポートの作成より、小児看護技術の特徴やポイントをつかむことができ、実習の場において学生が看護実践が可能になるよう努めている。 |
| 事前学修課題レポートを活用した小児看護技術における専門知識の定着の工夫 | 2007年4月～ | 事前学習課題として実施予定の演習項目について各項目の重要事項及び実施留意点に関する事前学習シートの作成を行い、小児看護技術の特徴やポイントをつかみ、実際の看護援助技術の演習時に活用し重要ポイントの確認と定着につなげるよう努めている。 |
| iPadを活用した小児看護技術における専門知識の自己学修の工夫 | 2017年4月～<br>2018年5月 | 小児看護技術演習で実施予定内容について各項目の重要事項及び実施留意点、実施方法に関する準備シートの作成とiPadによる学生の演習実施状況撮影と撮影動画場面による技術の振り返りをしている。学生個々の小児看護技術の到達度別課題を明確にすることで、実習までに学生の看護実践が可能になるよう効果的な学生の自己学習や練習ができるように努めた。 |
| iPadを活用した障がい児看護技術における専門知識の自己学修の工夫 | 2018年～ | 障がい児看護演習における実施予定の看護技術について電子書籍をダウンロードし、内容について各項目の重要事項及び実施留意点、実施方法に関する技術シートの作成とiPadによる学生の発表、演習実施状況の撮影を実施している。学生個々が到達目標に向けて、演習及び施設見学までに看護実践のイメージ化が可能になるよう努めている。 |
| ポスター作成による健康教育の指導能力向上の工夫 | 2019年～ | 小児看護援助論演習において、小児患者に対する服薬指導に向けたパンフレットや絵本などの作成を課題とした。それらのツールを作成し小児患者にどのように服薬を勧めることができるかを考える機会とした。それぞれ学生が創意工夫することで、発達段階に応じた指導について向上できるよう工夫している。 |
| 学生の生活体験の想起を活用した子ども理解の工夫 | 2013年10月～ | 学生自身の幼児期から思春期までの成長発達の軌跡や家族との関わりを想起（乳児期においては母子手帳を活用）し、自己の成長発達の軌跡をレポートの課題としている。レポート作成過程で、各ライフサイクルの発達課題と自己軌跡の対比，年代とライフサイクルの特徴との共通点や微妙なズレを確認することで、各ライフサイクルの特徴と成長発達における個人差について気付きと学びを深められる工夫をしている。乳児期について、離乳食の献立作成や試食体験を実施し、発達についての理解をレポートにまとめる作業から、学生にアレルギーや健康障害を持つ子どもへの食事指導など、子どもの健康維持や向上にむけた関わりについても視野を広げることができるよう努めている。 |
| ワークシート作成による予防接種計画立案指導の実施 | 2016年10月～ | 学生自身の予防接種経験を基に、母子手帳を活用し、自己の予防接種履歴の作成を実施している。さらに現行の予防接種法に基づく予防接種の実施計画を仮の子どもの母親とし、0歳から3歳までの予防接種計画を立案させている。作成過程での共通点やズレ、法改正に伴う変化を確認することで、医療の進歩や疾病構造の変化を見出せるよう、また子どもの健康維持や向上に向けた関わりについても視野を広げることができるよう努めている。 |
| 小児看護学実習（保育実習）における子ども理解と子どもとのコミュニケーションスキルの向上への工夫 | 2011年4月～<br>2017年 | 保育実習での関わりや観察力の振り返りができるように、THINK(Think;思考・Habit;習性・Idea;着想・Nature;本質・Knowledge;知識）をテーマに記録用紙を作成導入した。自己の子どもとの関わりと観察結果をテーマにそって振り返ることで、学生はコミュニケーションスキルや観察力を自己評価しやすく、さらに、注意すべき点が理解しやすくなり、意識的観察力やコミュニケーションスキルを向上させることができた。 |
| 小児発達支援実習における子ども理解と子どもとのコミュニケーションスキルの向上への工夫 | 2015年9月～ | 保育実習ので関わりや観察力の振り返りができるように、小児発達支援実習シナリオを作成し、記録用紙として導入した。自己の子どもとの関わりと観察結果を日々、自己評価しながら振り返ることで、学生はコミュニケーションスキルや観察力の課題を発見し、子どもの対応で注意すべき点など理解を深めることや、意識的観察力やコミュニケーションスキルの向上に役立っている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）つづき | | |
| 小児発達支援実習における子ども理解と学生のディスカッション能力の向上の工夫 | 2015年9月～<br>2017年9月 | 保育実習での関わりの実体験から観察し、学修したことについて、学生間での学びの共有を行うためのラベルケーションを実施した。ラベルの活用により、キーワードとなる文章から具体的説明を行い、意見交換できる能力の育成に努めた。 |
| 小児発達支援実習における子どもの発達段階の理解向上の工夫 | 2018年9月～ | 保育実習での関わりの実体験から観察した子どもの特性を踏まえ、4歳もしくは5歳児を対象に「体のつくりを伝えよう」と題して、体の各部分の一部を取り上げ、プレゼンテーションさせている。プレゼンテーションの実施により、子どもからの質問や投げかけ等の反応を受け子どもの認知発達についての理解を深めることに努めている。 |
| 小児看護学実習（病棟実習）における患児とその家族の理解への工夫 | 2013年11月～ | 小児看護学実習での看護展開や患児・家族との関わりの振り返りから患児や家族への有効な関わりについて考察できるように、「こどもと家族への望ましい関わり方」をテーマに最終レポートを課題とした。自己の患児や家族との関わりを看護実践を通して振り返ることで、学生はコミュニケーションスキルや観察のあり方について、意識的に実施することで観察力やコミュニケーションスキルの向上と、小児看護に必要な看護者の態度について考えられるよう努めている。 |
| シラバスを活用した授業展開の工夫 | 2011年4月～ | 「小児看護学」に関する講義科目では、講義シラバスに沿って各講義テーマを詳細化した学習ガイドラインとしてのシナリオを作成し、各講義後に学生に学びの内容と今後の課題を明記させ、単元終了ごとにテーマ別個別レポートを提出させることで、不足知識や理解不足に対する自己学習につなげている。 |
| シナリオを活用した授業展開の工夫 | 2018年4月～ | 「成長発達Ⅰ」「小児看護学援助論」では、講義シラバスに沿って各講義テーマを詳細化した学修ガイドラインとしてのシナリオを作成し、学生に各講義後に学びの内容と今後学修したい内容（テーマ）を明記させている。今後学修したい内容を学生個々の自己課題として自己学修につなげている。 |
| シミュレーション学習の導入 | 2011年4月～2015年 | 「小児看護援助論」では、小児看護学実習でのプライマリーケア実施、子どもの看護過程の展開に向け、グループワーク、学生個別と学修方法を段階別にし、ペーパーペイシェントの看護過程展開を課題とし、学生間でのディスカッションや発表を実施している。学修進度別の課題達成に向け、学生個々の看護アセスメント能力のレベルアップが図れ、臨床実習での看護展開のイメージがより鮮明につくことで実習に向けた学習のモチベーションアップにつなげることができている。 |
| 小児看護学演習におけるディスカッションの導入 | 2004年4月～2015年 | 「小児看護援助論」で、健康障害を持つ子どもの看護では、バイタルサインの測定や日常生活援助技術において講義終了後にモデル人形を活用し、実際の患児同様の条件設定によるシミュレーションを行い、そのシミュレーションから学生間で子どもの状態のアセスメントと看護技術を含む援助内容を、学生間でディスカッションさせ、どのように子どもに関わったら良いかをレポートの課題とした。これにより学生は子どもへの効果的な関わり方やアセスメント方法、ケア方法の構築に対する思考の広がりに効果があった。 |
| 小児看護学援助論演習における学生間評価とディスカッションの導入 | 2016年4月～<br>2017年7月 | 「小児看護援助論演習」で、子どもへの看護技術として、バイタルサインの測定や日常生活援助技術においてDVDや文献による学修後、モデル人形を実際の患児に見立て、学生間で子どもへの看護技術の提供演習をさせている。互いの看護技術について学生間での評価ディスカッションを行いケア方法に対する思考の広がりに努めている。 |
| 小児看護学援助論におけるグループワークの導入 | 2004年4月～<br>2015年7月 | 「小児看護援助論」で、看護過程展開の演習において、時間軸や病状変化の視点で患児を看る思考の育成に、ペーパーペイシェントにより看護問題を導き出す指導をしている。グルーワークによりペーパーペイシェントの看護過程展開を実施し、その成果の発表・討議を行っている。プレゼンテーション資料と発表形式（パワーポイントの使用）の説明を演習前に行い、グループ発表をさせている。各グループ間でディスカッションにより発表内容を焦点化させ、ペーパーペイシェントの特性が出るよう指導している。発表内容にバラエティさを出すことで、聴衆側の学生からの質問が出やすく、ペーパーペイシェントの全体像と特性を学生に理解しやすくしている。 |

| | | |
|---|---|---|
| シミュレーション学修の導入 | 2011年4月～<br>2015年 | 「小児看護援助論」では、小児看護学実習でのプライマリーケア実施、子どもの看護過程の展開に向け、グループワーク、学生個別と学修方法を段階別にペーパーペイシェントの看護過程展開を課題学習に取り入れている。学生間でのグループ内によるディスカッションを実施し、学修進度別の課題達成に向け、学生個々の看護アセスメント能力のレベルアップが図れ、臨床実習での看護展開のイメージがより鮮明につくことで実習に向けた学習のモチベーションアップにつなげることができている。 |
| 小児看護学援助論演習におけるグループワークとペーパーペイシェント活用による看護方法論の学修の導入 | 2017年4月～ | 「小児看護援助論演習」で、看護過程展開の学修において、時間軸や病状変化の視点で患児を看る思考の育成に、ペーパーペイシェントにより看護問題を導き出し、看護方法論の計画立案について指導をしている。グルーワークによりペーパーペイシェントの看護過程展開を実施し、グループ別指導を実施している。各グループ内でディスカッションさせ、ペーパーペイシェントの特性が出るよう看護計画の立案の指導をしている。ペーパーペイシェントの全体像と特性を学生に理解しやすくするために、グループワーク終了後は、個別課題として、臨床実習で体験しやすい事例を用いて学修指導を行っている。 |
| 障がい児看護演習におけるグループ内における技術項目の学生間による指導の実施の導入 | 2017年4月～ | 「障がい児看護演習」において、各学生間での演習項目の学修担当を決定し、学びの内容や援助のポイントについての学修を各学生個人で実施し、グループメンバーに教授し合う授業を実践している。学生間の教えあいにより、各学生個々の課題を各自が明らかにするとともに、他者への指導を通して、健康教育や患者指導に生かせる指導力の育成を図っている。 |
| グループワーク・デモンストレーション・ロールプレイ混合演習の導入 | 2004年4月～2015年7月 | 「小児看護援助論」で、小児看護技術の習得と子どもと家族への説明力の向上を目指し、グループワーク・デモンストレーション・ロールプレイを組み合わせ、グループ毎に異なる課題提示による技術演習を実施している。学生は演習実施グループ毎に解説、デモンストレーション後、各グループに入り、ロールプレイによる互いに技術指導と評価を実施している。自己評価表に記入と技術演習の学びとポイント理解のための確認項目をレポート課題としている。自己評価表は自己の説明力向上に関する学生の振り返り資料とし、レポートは小児看護技術に関する基礎的知識とスキルの獲得をはかる自己学習、スキルトレーニングに活用し、学修成果につなげている。 |
| 学生のプレゼンテーション能力の向上の工夫 | 2013年10月～2015年7月 | 小児看護分野における看護の統合の理解を目的に学生主体に少数ゼミナールにおいて、学生がより興味を持ち、深めたい内容について、学生が主体的に調査し、学習した内容についてパワーポイント等を活用して学会形式でプレゼンテーションを体験できるよう指導している。プレゼンテーションの実施により、学生は発表すべき内容とそのための効果的なプレゼンテーション方法の検討、発表ポイントをより明確にしている。 |
| 学生のプレゼンテーション能力と地域貢献の意識の向上の工夫 | 2015年4月～ | 小児看護分野の対象の理解を深めるとともに地域貢献に自らの力の発揮ができるように、「京都市右京区まちづくり支援制度」への参加事業について調査し、育児支援をテーマに学修している。「まちづくり支援制度」として実施できるように公の場である審査会のプレゼンテーション大会への参加を行っている。プレゼンテーション大会への参加に向けて、PRする内容や話し方など、互いに工夫した内容をゼミ内で発表、選抜し、本番に臨むこととしている。互いに切磋琢磨する中でプレゼンテーションスキルと、発表能力、心理的なプレッシャーに耐える力もつけられるよう支援している。また、地域貢献への意味や役割についての理解を深めるために1年間の育児支援活動を実施している。 |
| 実習指導小児看護技術チェックカードの作成による小児看護技術の向上への工夫 | 2004年5月～<br>2015年7月 | 「小児看護実習」において、学生が患児に不安なくケア実践ができることを目的に、小児看護技術とその使用スキルのポイントを明記した携帯用カードを作成し、使用している。小児看護技術演習の一貫として学生と作成したチェックカードの使用により、基礎技術の理論理解の重要性を学生は再認識でき、実習前の技術の予習、実習中での注意事項や手順の確認に使用し、積極的に看護技術の実践に取り組めるようしている。 |
| 学生による授業評価アンケート結果における評価の活用 | 2006年5月～ | 実施された学生による授業評価アンケートにおいて、高得点の項目とそうでない得点の項目の確認から、項目間における差がなくなるよう授業方法の工夫を試みている(学生の自己学習時間が少なければ課題内容を検討しより学習できるようしたり、難易度別の課題作成を行ったりして、学生が主体的学習ができるよう心がけている。) |

| | | |
|---|---|---|
| 実践体験的プレゼンテーションの導入 | 2018年4月～ | 「看護研究演習Ⅰ」において、各学生に看護研究の実践に向けた看護研究計画書の立案を実施している。その中で、各学生に興味あるテーマに沿って研究の実践ができるよう、フィールドワークを行い、研究の準備過程の実践的体験を行っている。学生が研究準備として必要なことを体験することで、見通しを立てた準備や時間的計画の意味の理解を深めることに成果を上げている。「看護研究演習Ⅱ」で看護研究の実践に向けての必要経費や必要物品の準備・獲得にあたり、学生が行政のまちづくり支援制度への事業申請を行うことで、研究の意義や必要性を伝える能力の育成を図っている。 |
| 看護研究実践に向けての実践的活動の導入 | 2018年4月～ | 「看護研究演習Ⅰ」の科目において、学生が看護研究を実際に実施できるための準備段階を指導している。看護研究計画書の立案に向けて、文献の確認からの計画だけではなく、実現可能性について検討できるよう、フィールド確保に向けて、関係箇所への交渉や実施に必要な物品と予算の算出などを行っている。また、予算の確保に向けての方法（まちづくり支援制度助成金の活用など）を提示し、予算確保の申請（申請書の記載）の実施を指導し、研究の実施につなげている。 |
| 看護研究実践能力の向上に向けての工夫 | 2018年10月～ | 「看護研究演習Ⅱ」の科目において、学生自身が活動し、その成果を図れるよう、「「看護研究演習Ⅰ」の科目において立案した看護研究計画書に基づき、プロジェクト実践を実施している。学生自身に、フィールド活用の依頼とプロジェクト準備、実施、アンケート調査を対象者に実施させている。実際のデータによるプロジェクト実践の評価を行い論文化させている。また、研究成果の発表について、右京区まちづくり支援制度の報告会で、ポスターセッション形式で発表させている。研究実践から論文化、評価・発表を体験させることで、実践的看護研究能力の向上につなげている。 |
| 視聴覚教材の導入 | 2018年4月～ | 「小児看護学援助論」において、各講義内容に沿った動画を準備し、授業時間内の閲覧を実施している。その動画に応じて、問題作成を行い、各学生に思考を促し、思考の結果をシナリオに簡潔に記載させている。動画内容の検討から、各単元のテーマについて考えることでより、学生が臨床看護をイメージしやすくしている。 |
| キャリアサポート実践Aにおけるグループワークと発表の導入 | 2018年4月～ | 学生の卒業前の技術教育として、卒業時に備えておくべき内容の小児看護技術について、各学生の項目別課題を設定し、3年次生へ指導できることを目標に知識の再確認と実践の練習を指導している。学生個々が、責任ある行動をとる必要があることから、正確な知識を持つ意味やエビデンスの重要性の再確認と定着に役立っている。 |
| 事例検討を導入した看護倫理的能力の向上への工夫 | 2018年10月～ | 学生の経験した事例を活用し、看護倫理について考える機会と、グループディスカッションによる様々な視点での臨床における現象の見方について学修できるようにしている。身近な臨床に看護倫理的な課題が潜んでいることを確認する機会となっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「小児看護学概論」講義資料作成 | 2003年～2015年 | 「成長発達過程」「子どもがおちいりやすい健康障害」について要点をまとめ、基礎理論の獲得にむけて、解説資料を作成・配布し、講義ごとに解説した。エリクソンとピアジェの成長発達理論については詳細に時間をかけて解説した。 |
| 「成長発達Ⅰ（小児の健康と看護）」講義資料作成 | 2016年～ | 「子どもの成長発達過程」「小児予防接種実施」「離乳食の作成」について要点をまとめ、基礎理論の獲得にむけて、解説資料を作成・配布している。また、資料には、ワークを組み込み講義ごとに学生が自己学習できるように工夫している。 |
| 「小児看護学援助論」講義資料作成 | 2011年～ | 「子どもの健康障害時の反応」「入院時における反応」について整理し、一般的な状況の理解の獲得に向けて、資料を作成配布し、健康障害を生じたときや入院時における子どもへの反応の対応について理解を促した。特に、ホスピタリズムや虐待児の反応、子どもの疾病の受け止め方の理解については時間をかけて説明した。 |
| 「小児看護学援助論演習」講義資料作成 | 2018年～ | 「小児における看護過程」について整理し、看護過程展開の基礎理論の理解に向けて、資料を作成配布し、丁寧に解説し理解を促した。健康障害を生じた子どもとその家族への看護援助について具体的に実践できるワークを作成した。 |
| 「小児看護学実習」における事前学習ワークの作成 | 2017年～ | 小児看護学実習の実践に向けて、学生が理解しておく必要がある、小児疾患や小児の解剖学生理学的特性、小児看護の基本を踏まえた事前学習ワークを作成した。実習開始直前に再確認を行い、国家試験対策への応用にも活用している。 |

| | | |
|---|---|---|
| スタートアップゼミA におけるレポート作成、ディスカッションスキル、プレゼンテーション方法に関する資料の作成 | 2015年～2018年 | スタートアップゼミAにおいて、「レポート作成の基本」として学生が卒業年次に作成する卒業研究論文を意識した論文記載方法の基本を、パワーポイント資料として作成している。重要な部分については学生が、テキストや参考書を参考に書き込むように穴あきのワークシート形式で作成している。「効果的なディスカッション」「上手なプレゼンテーション」についても同様に資料作成を行っている。 |
| スタートアップゼミⅠにおけるレポート作成、ディスカッションスキル、プレゼンテーション方法、ノートの作成に関する資料の作成 | 2019年～ | スタートアップゼミにおいて、「レポート作成の基本」「ディカッションの基本」として学生が卒業年次に作成する卒業研究論文を意識した論文記載方法の基本を、パワーポイント資料として作成している。また、大学生としての学修方法の説明や基本的なノートの取方の重要な部分について、テキストや参考書を活用し、書き込みができるノートの作成を工夫させるとともに穴あきのワークシート形式で作成している。「効果的なディスカッション」「上手なプレゼンテーション」についても同様に資料作成を行っている。 |
| 看護研究実施に向けての基本的実践方法資料の作成 | 2018年～ | 「看護研究演習Ⅰ・Ⅱ」において、「看護研究とは」を基本に整理し、看護研究方法論や実践の方法、準備の必要性を簡潔にまとめたシナリオを作成し、学生個々がシナリオを参考に自己の研究を計画立案が出来る用紙として再作成できるシートを作成し活用している。 |
| 倫理観の向上に向けて倫理検討できる教材としての事例資料の作成 | 2018年～ | 学生が臨床実習で体験した事例や臨床でよく生じる倫理的な葛藤場面を基に、事例を作成し、グループワーク出来るようにしている。また、その場面について話し合ったことを基にミニレポートと題して、簡単に意見や行動をまとめさせるようにしている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 模擬授業 | 2014年 | 講義タイトル:「看護の授業で学ぶこと」等。<br>講義先:名古屋市立山田高校等 |
| 出張講義 | 2014年 | 講義タイトル:「小児看護　子どもの意思を尊重しよう」<br>講義先:岐阜県私立中京高等学校2年生2クラス |
| 出張講義 | 2015年 | 講義タイトル:「看護ってなあに」 講義先:京都府立峯山高等学校 |
| 健康医療学部FD研修会講師<br>（京都学園大学太秦キャンパス） | 2016年 | 関西地区FD連絡協議会共済事業の伝達講習会「新任教員合同研究プログラム」より授業評価について伝達講習会をした。 |
| 出張講義 | 2017年9月 | 講義タイトル:「子どもの事故を防ごう」<br>講義先:京都府立乙訓高等学校 |
| 模擬授業 | 2018年8月 | 講義タイトル:「子どもの事故を防ごう」<br>京都学園大学太秦キャンパス |
| 模擬授業 | 2019年8月 | 講義タイトル:「子どもの事故を防ごう」<br>京都先端科学大学太秦キャンパス |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 業務用メモの使用と取扱いの現状<br>－卒業生を対象にしたアンケート調査から－ | 共著 | 2011年2月 | 日本看護学会論文集<br>看護教育　41号<br>（日本看護協会出版会） | ◎今西誠子、黒木美智子、田村葉子、<br>山本多香子 | p.83～p.86 |
| 看護実習記録の返却と個人情報保護の両立に向けて―卒前卒後における実習記録の取り扱い状況から― | 共著 | 2011年7月 | 京都市立看護短期大学紀要<br>第36号 | ◎今西誠子、黒木美智子、田村葉子、<br>山本多香子 | p.29～p.36 |
| 看護師・学生間関係へ実習指導連携表がおよぼす効果―学生側の視点からの分析― | 共著 | 2012年2月 | 日本看護学会論文集<br>小児看護　第42号 | ◎今西誠子、林さくら、中村直美 | p.190～p.193 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（つづき） | | | | | |
| 継続的臨地実習指導をめざした「実習指導連絡表」の効果について | 単著 | 2012年7月 | 京都市立看護短期大学紀要 第36号 | 今西誠子 | p.97～p.106 |
| 入院児に付き添う母親の苦しみ | 単著 | 2013年2月 | 京都市立看護短期大学紀要 第37号 | 今西誠子 | p.13～p.23 |
| 新たな洗髪用具開発のための実態調査（第1報） | 共著 | 2013年2月 | 京都市立看護短期大学紀要 第37号 | 田村葉子、今西誠子、江頭典江、黒木美智子、奥津文子、山田豊子 | p.59～p.66 |
| 子どもの侵襲的処置からの回復過程とその支援に関する研究―プレパレーション実施事例から― | 共著 | 2013年3月 | 日本小児看護学会誌 22巻 1号 | ◎今西誠子、阿南沙織 | p.122～p.128 |
| 移植看護における倫理的問題への取り組みに関する国内文献の動向 ― 1985 ～ 2011年　看護の視点から― | 共著 | 2013年5月 | 日本移植・再生医療看護学会誌　第8巻2号 | ◎今西誠子、谷水名美、習田明裕 | p.3～p.10 |
| 臥床患者の洗髪用具に関する調査研究 －3種類の洗髪用具に対する看護師のとらえ方に焦点を当てて- | 共著 | 2013年9月 | 大阪信愛女学院短期大学紀要第47集 | 江頭典江、今西誠子、田村葉子、黒木美智子、奥津文子、山田豊子 | p.11～p.20 |
| 入院児に付き添う母親のスピリチュアルペインについての一考察 | 共著 | 2014年3月 | 中京学院大学看護学部紀要 第4巻1号 | ◎今西誠子、伊豆一郎 | p.1～p.12 |
| 小児移植看護におけるプレパレーションに関する文献検討 | 共著 | 2014年3月 | 中京学院大学看護学部紀要 第4巻1号 | 宮良淳子、今西誠子、高田理衣 | p.63～p.73 |
| The Existence of Experience and Frequency and Severity of Related Concerns of Ethical Issues in Nursing Practice Encountered in Organ Transplantation | 共著 | 2014年5月 | 「Transplantation Proceedings」46 (2014) | 谷水名美、習田明裕、今西誠子、赤澤千春、林優子、萩原邦子 | p.1029～p.1031 |
| 育児支援に関する文献研究　―実施した事業の効果に焦点を当てて― | 共著 | 2016年3月 | 京都学園大学研究医療学部紀要第1巻　2015 | 藤本美穂　今西誠子 | p.73～p.81 |
| 臓器移植看護における看護師の倫理的実践の変化を目指したアクションリサーチの実施 | 共著 | 2017年10月 | 日本移植・再生医療看護学会誌（1881-5979)12巻2号 | 林 優子, 赤澤 千春, 萩原 邦子, 今西 誠子, 習田 明裕, 谷水 名美, 前田 景子, 磯見 真希, 田中 優希, 松宮 朱美, 喜 信幸, 大橋 尚弘, 渡邉 陽子 | p.28-30 |
| 臓器移植看護が直面する倫理的場面とその対応 | 共著 | 2018年7月 | 日本臨床腎移植学会誌6(1) | 萩原邦子、今西誠子、習田明裕、赤澤千春、谷水名美、林優子 | p.1-5 |
| 乳幼児を育てる母親への 野菜栽培による育児支援の効果 ―「育Gの会クローバー」での育児支援活動の実践報告 | 共著 | 2019年3月 | 京都学園大学総合研究所所報　第20号 | 藤本 美穂 , 今西 誠子, 夏山 洋子, 杉山 智春 , 大城 閑 | p.14～31 |
| 侵襲的処置体験からの子どもの心理的回復を促進するための看護援助 | 共著 | 2019年3月 | 日本小児看護学会誌 28 巻 | ◎今西 誠子, 市江 和子 | p. 132-138 |
| その他（依頼原稿） | | | | | |
| 自己教育力の育成を目指した小児看護の技術教育 | 単著 | 2010年6月 | 看護人材教育（日総研） | 今西誠子 | p.99－106 |
| 特集1患児を取り巻く環境を把握する　全体関連図の活用！14 ネフローゼ症候群〈学童期〉 | 単著 | 2017年4月 | 新生児・小児の治療と看護、暮らしと子育てを支える子どもと家族のケア（日総研） | 今西誠子 | p.14-18 |
| 学会発表 | | | | | |
| Supportive Intervention For Recovery In Children After Invasive Treatment | 共同 | 2011年5月1日 | ICN Conference and CRN 2011 Nurses driving access, quality and health | ◎今西誠子、三井沙織 | p.32 |
| Hair washing aids for bedridden patients in Japan | 共同 | 2011年5月1日 | ICN Conference and CRN 2011 Nurses driving access, quality and health | 山田豊子、江頭典江、今西誠子、田村葉子、奥津文子 | p.25 |

| 学会発表(続き) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| The pain of mothers whose children require prolonged hospitalization, and possible support for them | 共同 | 2011年6月1日 | 10th International Family Nursing Conference | ◎今西誠子、加藤理恵子、中村直美 | p.220 |
| 実習指導連携表による小児看護実習環境への効果<br>―看護師・学生関係の視点から― | 共同 | 2011年8月1日 | 第42回 日本看護学会－母性看護・小児看護－ | ◎今西誠子、大西さくら、中村直美 | p.234 |
| The existence of experience and frequency of ethical issues in nursing practice encountered in organ transplantation | 共同 | 2013年9月1日 | The 13 th cogress of the Asian Society of Transplantaion | 谷水名美、習田明裕、赤澤千春、林優子、今西誠子、萩原邦子 | p.167 |
| 臓器移植看護における倫理的問題に関する国内文献の動向 | 共同 | 2013年10月1日 | 第9回日本移植・再生医療看護学会学術集会 | ◎今西誠子、谷水名美、習田明裕 | p.34 |
| 臓器移植医療で看護者が遭遇する倫理的場面での悩みとその程度 | 共同 | 2013年12月1日 | 第33回日本看護科学学会学術集会 | ◎今西誠子、習田明裕、赤澤千春、谷水名美、林優子、萩原邦子 | p.593 |
| 臓器移植看護の倫理的場面における苦悩の構造とその影響因子 | 共同 | 2013年12月1日 | 第33回日本看護科学学会学術集会 | 習田明裕、赤澤千春、谷水名美、今西誠子、林優子、萩原邦子 | p.593 |
| SST実施過程における子どもの言動に対する看護師の捉え方 | 共同 | 2014年10月1日 | 第45回日本看護学会学術集会－精神看護－ | 岡井公子、今西誠子 | p.227-230 |
| 地域子育て支援拠点事業の基本事業からみた育児支援について | 共同 | 2016年3月5日 | 日本看護研究学会第29回近畿・北陸地方会学術集会 | 藤本美穂、今西誠子 | p.55 |
| Efforts of the child care support program in an urban community, ″parenting community clover KGU″ | 共同 | 2016年7月2日 | The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing | ◎今西誠子, 藤本美穂 | p.73 |
| (シンポジウム)<br>腎移植看護に携わる看護師の倫理的ジレンマ | 共同 | 2017年2月16日 | 第50回日本臨床腎移植学会 | ◎今西誠子、習田明裕、赤澤千春、谷水名美、林優子、萩原邦子 | p.122 |
| Children's responses following invasive procedures as viewed by nurses working in pediatric wards | 共同 | 2017年10月21日 | TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017<br>Culture, Co - creation, and Collaboration for Global Health<br>Bangkok, Thailand, October 20 - 22, 2017 | ◎今西誠子、市江和子 | |
| 臓器移植看護における看護師の倫理的実践の変化 アクションリサーチを用いて | 共同 | 2017年11月11日 | 日本移植・再生医療看護学会学術集会プログラム・抄録集 13回 | 谷水 名美, 林 優子, 赤澤 千春, 萩原 邦子, 今西 誠子, 習田 明裕, 前田 景子, 磯見 真希, 田中 優希, 松宮 朱美, 喜 信幸, 大橋 尚弘, 渡邉 陽子 | p.31 |
| 多世代をつなぐ育児支援活動の参加者の思い テキストマイニングによる分析 | 共同 | 2017年12月16日 | 日本看護科学学会学術集会講演集 37回 | 藤本 美穂 今西 誠子, 高尾 憲司, 谷口 光代, 夏山 洋子, 杉山 智春 | p. 56<br>[PA-02-Ⅰ] |
| Effects of a Child Care Support Program Aimed at Intergenerational Interaction | 共同 | 2018年7月19日 | WHOCC2018<br>2th Biennial Conference and Meetings of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery | ◎今西誠子・藤本美穂・杉山智春・夏山洋子 | p. 62<br>[P-88] |
| Effect of music on intergenerational exchange between children, elderly, and college students | 共同 | 2018年7月19日 | WHOCC2018<br>3th Biennial Conference and Meetings of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery | 藤本美穂, 今西誠子, 夏山洋子, 杉山智春 | p. 63<br>[P-90] |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| A survey on nursing aid for children and families that facilitates psychological recovery from invasive treatment experience | 共同 | 2019年1月18日 | 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2019 | ◎今西誠子, 市江和子 | p.34 [1D-12] |
| Health condition and health behaviors of child-rearing Japanese women: A literature review | 共同 | 2019年1月18日 | 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2019 | 河田志帆, 今西誠子 | p.36 [1E-14] |
| Child's reaction toward psychological recovery from the invasive treatment experience grasped by pediatric nurses | 共同 | 2019年2月22日 | Seirei International Research Conference 2019 | ◎今西誠子, 市江和子 | p.45 [P-13] |
| 報告書 | | | | | |
| ふれて遊んで<br>パパ・ママ体験 | 共著 | 2012年7月1日 | 京都市立看護短期大学紀要<br>第36号 | 三木真知、伊藤良子、今西誠子、<br>江頭典江、仲森和夫 | p.117～p.124 |
| 京都市立看護短期大学　第8回公開講座報告書 | 共著 | 2013年2月1日 | 京都市立看護短期大学紀要<br>第2部　あゆみ<br>第37号　第2部 | 三木真知、今西誠子、矢吹明子、<br>江頭典江、黒木美智子、八重樫哲人 | p.39～p.52 |
| 右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”活動　報告 | 共著 | 2016年3月16日 | 右京区まちづくり支援制度支援事業実績報告書 | ◎今西誠子、杉山智春、藤本美穂、高尾憲司、谷口光代 | 4ページ |
| 右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”活動　報告 | 共著 | 2018年3月16日 | 右京区まちづくり支援制度支援事業実績報告書 | ◎今西誠子、杉山智春、藤本美穂、夏山洋子 | 5ページ |
| 右京区地域防災対策支援プロジェクト<br>ー子育て世代に向けてー | 共著 | 2019年3月16日 | 右京区まちづくり支援制度支援事業実績報告書 | ◎今西誠子、杉山智春、夏山洋子 | 12ページ |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

学会活動

| | |
|---|---|
| 1985年～現在 | 日本看護協会会員 |
| 1999年～現在 | 日本家族看護学会会員 |
| 1999年～2000年 | 日本看護研究学会会員、日本看護研究学会近畿北陸・中国四国地方会世話人会世話人 |
| 1999年～現在 | 日本小児看護学会会員 |
| 2000年～現在 | 日本看護研究学会会員、日本看護研究学会近畿北陸地方会世話人会世話人 |
| 2004年～2018年 | 日本チャイルド・ライフ研究会会員 |
| 2008年～現在 | 日本看護学教育学会会員 |
| 2008年～現在 | 日本移植・再生医療看護学会会員、倫理委検討委員会委員 |
| 2008年～現在 | 日本看護診断学会会員 |
| 2010年～現在 | 日本看護科学学会会員 |
| 2011年10月1日 | 第7回日本移植・再生医療看護学会交流集会　アシスタント |
| 2012年10月13日 | 第8回日本移植・再生医療看護学会交流集会　ファシリテーター |
| 2013年10月26日 | 第9回日本移植・再生医療看護学会交流集会　ファシリテーター |
| 2017年11月11日 | 第13回日本移植・再生医療看護学会交流集会　ファシリテーター |
| 2015年11月～2018年10月 | 日本移植・再生医療看護学会　評議員 |
| 2017年3月28日～2018年10月 | 日本移植・再生医療看護学会　査読委員 |
| 2017年8月19日～20日 | 日本小児看護学会第27回学術集会　実行委員 |
| 2017年9月～2017年3月 | 日本看護研究学会近畿北陸地方会 世話人代表選挙管理委員 |
| 2019/3月～4月 | 日本看護研究学会第45回学術集会　査読委員 |
| 2019年8月4日 | 日本看護学教育学会第29回学術集会　実行委員 |
| 2019年8月20日 | 日本看護研究学会第45回学術集会　座長 |

| 社会貢献 | |
|---|---|
| 2011年4月～2014年12月 | 京都市桃陽病院;看護研究指導「SST実施過程における子どもの言動に対する看護師の捉え方」 |
| 2011年4月～2012年3月 | 京都市立看護短期大学第8回市民公開講座「看護の明日を見つめて」企画委員 |
| 2011年～現在 | 京都市保育園連盟　看護技術講習会「消毒薬と安全管理 救急箱の内容」講師（毎年1回7月） |
| 2012年6月・9月 | 京都市立看護短期大学看護師支援モデル事業　離職者復帰支援事業<br>「フィジカルアセスメント―意識障害のある患者編―」においてインストラクター |
| 2012年6月・10月 | 京都市立看護短期大学看護師支援モデル事業 離職者復帰支援事業<br>「疾病を持つ子どもと家族へのかかわり―外来から入院まで―」　講師 |
| 2012年7月・11月 | 京都市立看護短期大学看護師支援モデル事業　臨床看護研究支援事業《公開講座》<br>「質的研究方法の基礎知識」「効果的な研究発表―パワーポイントを使って―」講師 |
| 2012年6月・9月 | 京都市立看護短期大学看護師支援モデル事業 離職者復帰支援事業<br>「看護診断ってなんだ（NANDA－Ⅰ）」 インストラクター |
| 2013年11月～2014年3月 | 土岐市立縫合病院小児病棟での服薬指導パンフレット作成の改善指導 |
| 2014年9月1日 | 岐阜県多治見市・多治見ファミリーサポート・センター<br>「地域で支える」ファミリーサポート講習会における「子どものけがとその対処」 講師 |
| 2014年10月1日 | 岐阜県恵那市ファミリーサポート・センター　「子育て支援」講座 「ファミリーサポート援助会員」キャリアアップ講座、<br>子育てマイスター養成講座 講師　テーマ「小児看護の基礎知識」 |
| 2015年6月～2017年2月 | 京都市右京区まちづくり支援制度事業　右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU” の開催 |
| 2015年11月～現在に至る | 山ノ内地域子育て支援ネットワーク事業参加（各年3回） |
| 2016年5月21日 | 右京ブロック児童館まつり2016～あつまれみんな いっしょに あ・そ・ぼ！～<br>開催協力（乳幼児コーナーボランティア）大型絵本・かみしばいの読み聞かせ |
| 2017年5月20日 | 右京ブロック児童館まつり2017～あつまれみんな いっしょに あ・そ・ぼ！～<br>開催協力（乳幼児コーナーボランティア）大型絵本・かみしばいの読み聞かせ＆吹奏楽演奏会 |
| 2017年5月～2017年9月 | 育Gの会 「右京子育てこみゅにてぃー“クローバー京都学園大”」 の開催 |
| 2017年12月3日 | 京都市右京区まちづくり支援制度事業<br>「冬の大音楽会！！音楽で元気になろう!本物の楽器で演奏してみよう! 」の開催 |
| 2017年3月～現在 | 社会福祉法人桧葉福祉会 評議員選任解任委員 |
| 2018年5月19日 | 右京ブロック児童館まつり2018～あつまれみんな いっしょに あ・そ・ぼ！<br>開催協力（乳幼児コーナーボランティア）大型絵本・かみしばいの読み聞かせ＆吹奏楽演奏会 |
| 2018年10月1日・15日 | 「右京区地域防災対策支援プロジェクトー子育て世代に向けてー」開催（山ノ内児童館にて実施） |
| 2018年10月5日・12日 | 「右京区地域防災対策支援プロジェクトー子育て世代に向けてー」開催（山ノ内児童館にて実施）<br>京都学園大学 京都太秦キャンパス 1F ことカフェ |
| 2018年11月11日 | 平成30年山ノ内学区総合防災訓練にて、学生によるプレゼンテーション実施を指導・避難時における離乳食の試食体験の実施 |
| 2019年5月18日 | 右京ブロック児童館まつり2019～あつまれみんな いっしょに あ・そ・ぼ！～<br>開催協力（乳幼児コーナーボランティア）絵巻物風かみしばいの読み聞かせ＆吹奏楽演奏会 |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　河田　志帆 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 先輩保健師による実習サポート | 2011年4月～ | 前任校において、「地域看護学実習Ⅰ」で学生の実習意欲向上を目的として、実習先に所属する卒業生の先輩保健師に積極的にかかわってもらうように調整した。学生は、先輩保健師をロールモデルとして認識し、市町村実習指導者からは学生の実習態度について高評価を得た。また、先輩保健師からも自分を見直す機会となったとの評価をいただいた。学生の満足度は、概ね70%以上を維持していた。 |
| 実習地におけるプレゼンテーションの実践 | 2011年4月～ | 前任校において、「地域看護学実習Ⅰ」で、臨時実習先において2回のパワーポイントによるプレゼンテーションの機会を導入した。これは、学生が地域の特性を述べ、実習地をどのように理解しているかを明らかにし、助言をいただく機会である。実習地での発表は、事務職員の方にもご意見をいただけるよう調整および依頼をした。その結果、学生は講義や演習では味わうことのない緊張感を持ち、実習に臨んでいる。これらが、実習の達成感に繋がり、実習目標に対する達成感は、70%を超えた。 |
| 実習地の実際の様子(写真)を活用した授業方法 | 2012年4月～ | 前任校において、「地域看護活動展開論」で学習する地区診断と臨地実習に円滑に連動できるよう工夫した。具体的には、先輩学生が実習で作成した実習地の概要を許可を得て使用し、特に実習地の風景や生活の様子などの写真等を提示し臨場感を出した。その結果、実習地の事前学習や、実習後反省会において、実習と授業の内容が繋がりやすかったとの声があり、学生の理解度が上がった。 |
| 公衆衛生看護学概論(障害者保健および保健師駐在制) | 2015年9月～ | 本学の一年次必修科目である公衆衛生看護学概論の一部において、視聴覚教材を取り入れながら授業を進めた。授業の途中に知識の定着を目的として、国家試験の問題などを入れながら、学生の理解度を確認した。 |
| 効果的な演習形態の工夫 | 2012年4月～ | 前任校において、「地域看護対象論」で、看護の対象を多面的に理解するために、グループディスカッションを導入し、学生の積極的な発言を促進する環境を整えた。また、各グループで発表を行うことにより、学生の授業参加への意欲が高まった。事業終了後のアンケート調査では、人物像の理解のための要素として、社会環境や価値観にも目を向ける重要性に気づいたとの記述がみられた。グループディスカッションを導入することにより、グループ員としての責任感や様々な意見に触れる機会が増えたことから、欠席者の減少、学生の対象への理解度が予定より早く目標に到達した。 |
| 市町村と協同した健康教育の実践 | 2012年4月～ | 前任校において、「地域看護看護学実習Ⅱ」で地域の老人クラブを対象に健康教育を設定した。健康教育の内容は、住民の方にインタビューを行い決定した。また、準備から実施までの一連の流れを保健師やボランティアの方と協同することで生きた体験に繋がった。また、住民の方から直接ご意見をいただき、相手の立場に立って伝えることの大切さを実感していた。学生間の実習報告会では、報告内容より学生の達成感が高いことが明らかとなった。実習終了時に行う満足度調査では、例年よりも高い結果を得た。 |
| 学校と共同した健康教育の実践 | 2012年4月～ | 前任校において、保健師及び養護教員を目指す学生が高等学校で性教育を行った。自ら、高等学校で打ち合わせ行い、養護教諭および体育科教諭と共同で指導計画および資料等の作成を行い実施した。生徒から多数意見といただき、内容や資料作成を振り返ることができた。現在もこの活動は継続しており、年に数回の健康教育の実践の場として活用されている。また、学生が作成した資料も活用されており、達成感につながっている。 |
| 学生による授業評価の活用 | 2011年4月～ | 前任校において、担当授業時には、出席カードを兼ねた一言カードを配布していた。ここに書かれた意見や学生の反応について、授業の内容に反映させることだけでなく、学生の意見を授業中に紹介するなど学生の授業への関心を高める工夫を行った。 |
| ビデオ撮影を取り入れた家庭訪問演習 | 2016年10月～ | 本学の保健師課程の学生を対象した公衆衛生看護活動論において、より実践的な家庭訪問演習を実施するにあたりビデオ撮影を取り入れた。保健師役、対象者役の学生の言動を学生全員で確認することにより、保健指導に必要な知識と技術の向上を目指した。 |
| 地域看護診断の導入としての写真や動画の活用 | 2017年4月～ | 保健師学生を対象に、地域看護診断の導入部分として、分析対象地区の様々な写真や動画を撮影した。それらを学生に提示し、学生が生活環境からどのような人がどのような状況で生活しているかを考えさせた。この思考を基に人の生活を規定する要因について授業進めることで学生の理解が進みやすくなった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)つづき | | |
| iPadを使用した疑似地区踏査 | 2017年4月～ | 保健師課程の学生を中心に、地区踏査の疑似体験として分析対象地区の様子をGoogleを使用した。平面の地図では経験できないその時の状況を想像させるのに役立った。 |
| 分析対象地区に居住する教職員へのインタビュー | 2017年4月～ | 保健師課程の学生を中心に、実際に地域の住民にインタビューを行う前段階として、その地域の住民である教職員に生活についてのインタビューを実施している。またその地域の写真や動画等から得た情報を想起して、何をどのように聞けばよいかの訓練となった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学生の学習に関する実態調査結果(授業評価) | 2012年4月～ | 前任校が行う学生生活満足度の実態調査では、2年連続以下の評価を得ている。特に印象に残っている授業および実習科目と教員として、「たくさんの見守りと助言熱意を感じ、親切でためになる関わりが多かった」 |
| 授業評価(スタートアップゼミA) | 2015年7月 | ゼミ生全員が「役に立った」と評価しており、満足度が高かった。 |
| 授業評価(スタートアップゼミB) | 2015年12月 | ゼミ生全員が「役に立った」と評価しており、満足度が高かった。 |
| 授業評価(スタートアップゼミA) | 2016年7月 | ゼミ生全員が「役に立った」と評価しており、満足度が高かった。 |
| 授業評価(スタートアップゼミA) | 2017年7月 | ゼミ生全員が「役に立った」と評価しており、満足度が高かった。 |
| 保健師課程選抜に係る運営 | 2016年8月～ | 保健師課程選抜に係る説明会および選抜試験、履修指導説明会等の企画運営を行っている。2016年度の選抜説明会からは、1回生も参加可能とし、より保健師の業務や役割を理解を深めた上で、学生が出願できるように配慮している |
| 新入生アドバイザー | 2012年4月～2015年3月 | 前任校において、新入生がスムーズに大学生活に移行することができるように新入生生活アドバイザーとして、グループ面談および個人面談、メール相談などを行い学生を支援している。支援内容としては、生活面や精神面、学業面、キャリア支援である。また、提出物が遅れがちな学生や、欠席の多い学生などには、声をかけ学生カルテに入力し学生課と連携を図っている。学生の支援期間は、6か月であるが、それ以降も身近な相談窓口として、学生生活の支援を行っていた。 |
| 2015年度入学生　チューター | 2015年4月～ | 2015年度の1期生4名のチューターを担当し、学生の進路相談や就学相談を行った。定期的に声をかけ、履修指導や予防接種指導を行っている。 |
| 2016年度入学生Aクラス副担任およびチューター | 2016年4月～ | 2016年度の2期生Aクラスの副担任を担当し、学生の履修指導等をおこなった。特に、保健師課程の選抜や国家試験を視野に入れた学生の指導を行っている。 |
| 2016年度看護学科臨床実習委員会委員 | 2017年4月～ | 看護学科実習委員として、主に臨床指導者研修会の運営および実習要綱の編集取りまとめを行っている。加えて、実習に係る感染症対策についてのシステムづくりを保健室と共に作成している。 |
| 2017年度入学生チューターおよび看護学科学生委員会委員 | 2017年4月～ | 2017年度入学生4名のチューターを担当し、履修指導、予防接種指導、生活相談を行っている。また、学生委員として支援Bに該当する学生の履修支援を行っている。 |
| 2018年度入学生チューター | 2018年4月～ | 2018年度入学生3名のチューターを担当し、履修指導、予防接種指導、生活相談を行っている。 |
| 2019年度　看護学科臨地実習委員会副委員長 | 2019年4月～ | 実習委員会副委員長として、委員が担当する各業務のサポートし、実習が円滑に運営できるよう調整を行っている |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 看護実践におけるヘルスリテラシーの概念分析(査読付) | 共著 | 2011年3月 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル　第9巻第1号 | ◎河田志帆，藤井広美，畑下博世 | p.24～p.31 |
| 先駆的な保健師活動を考える-開業保健師の起業動機・起業準備・現在の活動-(査読付) | 共著 | 2012年8月 | 日本地域看護学会誌 第15巻第1号 | 押栗泰代、◎河田志帆、金城八津子、畑下博世 | p.16～p.24 |
| 労働目的で来日した在日ペルー人女性の生活と育児　　(査読付) | 共著 | 2012年12月 | 日本地域看護学会誌 第15巻第2号 | マルティネス真喜子、◎河田志帆、畑下博世、金城八津子、植村直子 | p.97～p.106 |
| 自殺未遂の経緯から見た自殺予防のための支援のあり方-アルコール依存症者に焦点を当てて-(査読付) | 共著 | 2012年12月 | 社会医学研究　第30巻1号 | 鈴木ひとみ、辻本哲士、金城八津子、植村直子、畑下博世、◎河田志帆、他3名 | p.45～p.58 |
| 性成熟期女性のヘルスリテラシー尺度の開発-20～30歳代女性労働者を対象とした信頼性・妥当性の検討- | 単著 | 2013年3月 | 学位論文（看護学修士） 滋賀医科大学 | ◎河田志帆 | |
| 自殺予防アンケート調査結果から検討する自殺予防のあり方 (査読付) | 共著 | 2013年4月 | 日本健康医学会雑誌 第22巻第1号 | 畑下博世、鈴木ひとみ、辻本哲士、金城八津子、植村直子、◎河田志帆、他2名 | p.43～p.51 |
| 離島に居住する生活機能低下をきたした独居高齢者の❝生活の術❞(査読付) | 共著 | 2013年11月 | 日本地域看護学会誌 第16巻第2号 | 金城八津子、畑下博世、◎河田志帆、他2名 | p.63～p.70 |
| 障害者自立支援法施行後の精神保健福祉活動における保健所の役割(査読付) | 共著 | 2014年1月 | 日本健康医学会雑誌 第22巻第4号 | 畑下博世、坪倉繁美、川井八重、◎河田志帆、他3名 | p.279～p.286 |
| 障害者の地域生活支援に向けた保健所の役割 (査読付) | 共著 | 2014年1月 | 日本健康医学会雑誌 第22巻第4号 | 畑下博世、川井八重、坪倉繁美、◎河田志帆、他4名 | p.287～p.293 |
| 性成熟期女性のヘルスリテラシー尺度の開発-20～30歳代女性労働者を対象とした信頼性・妥当性の検討-(査読付) | 共著 | 2014年4月 | 日本公衆衛生雑誌 第64巻第4号 | ◎河田志帆、畑下博世、金城八津子 | p.186～p.196 |
| 若年女性労働者に対する産業保健活動の検討-20歳代女性労働者のヘルスリテラシーとライフイベント及び子宮頸がん検診受診行動との関連-（査読付） | 共著 | 2015年5月 | 日本公衆衛生看護学会誌 第4巻第1号 | ◎河田志帆，畑下博世 | p.41～p.47 |
| 地域における精神障害者に対する訪問支援者の実態に関する調査(査読付) | 共著 | 2015年4月 | 三重看護学誌　17巻 | 井倉一政，宮越裕治，西出りつ子，◎河田志帆，畑下博世 | p13～p.22 |
| ストレス対処に関する日本人女性の文化的特性について(査読付) | 共著 | 2015年12月 | 日本地域看護学会誌 第18巻第2，3号 | 畑下博世，鈴木ひとみ，Denis Saint Arnault，川井八重，軸丸清子，◎河田志帆，井倉一政 | p.13～p.21 |
| 女子大学生の保健行動促進を目指したヘルスリテラシー向上性教育プログラムの開発と有効性の検討 | 単著 | 2016年3月 | 学位論文（看護学博士） 首都大学東京 | ◎河田志帆 | |
| 現代保健師が獲得すべき態度とスキル-沖縄県島嶼における駐在保健婦の実践からの検討-（査読付き） | 共著 | 2017年2月 | 社会医学研究　第34巻1号 | 畑下博世，金城八津子，鈴木ひとみ，◎河田志帆 | p. 31～p.40 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 日本の地域住民を対象とする「防災・減災」の概念分析(査読付き) | 共著 | 2018年1月 | 社会医学研究　第35巻1号 | マルティネス真喜子, ◎河田志帆, 西出りつ子 | p. 73～p.81 |
| An exploratory pilot study on health education program to improve health literacy among female in their 20s. (査読付き) | 共著 | 2018年12月 | BMC Reserch Note 2018;11:572. | ◎Shiho Kawata, Emiko Saito | |
| 地域包括ケアに関わる人々の連携推進要素(査読付き) | 共著 | 2019年1月 | 社会医学研究　第27巻4号 | 西出りつ子, ◎河田志帆, 水谷真由美, 西井崇之, 畑下博世 | p.339～346 |
| 1歳6か月児健康診査総合判定の要経過観察に関連する健診項目(査読付き) | 共著 | 2019年4月 | 社会医学研究　第28巻1号 | 中村真梨子, 西出りつ子, 谷村晋, ◎河田志帆, 水谷真由美, 畑下博世 | p.21～30 |
| その他 | | | | | |
| **(研究助成)**性成熟期女性労働者のヘルスリテラシーに関する研究 | 単独 | 2012年12月～2013年12月 | (財)ヘルス・サイエンスセンター | | |
| (ポスター発表)診療所医師と訪問看護師の緩和ケアの困難感とそれに及ぼす要因-在宅ホスピスケアの推進- | 共同 | 2012年11月 | 第71回日本公衆衛生学会(山口) | 山口亜紀子、金城八津子、◎河田志帆、　畑下博世、角野文彦 | |
| **(研究助成)** 性成熟期女性労働者のヘルスリテラシー尺度の開発 | 単独 | 2013年4月～2015年3月 | 科学研究費(若手B) | | |
| (ポスター発表)The Lack of Recognition Class and Gender Difference in Japan's Public Health Policy on Aging | 共同 | 2013年8月 | 21st IUHPE World Conference on Health Promotion | Makie Kawabata, ◎Shiho Kawata, Tomoko Iritani, & Haruko Yoshida | |
| (口頭発表)沖縄県A島における駐在制度下の保健婦活動 | 共同 | 2013年10月 | 第23回日本保健科学学会学術集会 | ◎河田志帆、金城八津子、畑下博世 | |
| (ポスター発表)性成熟期女性労働者のヘルスリテラシーの実状 | 共同 | 2013年10月 | 第72回日本公衆衛生学会(三重) | ◎河田志帆、畑下博世、西出りつ子 | |
| (ポスター発表)在日ブラジル人母子サポート指針-妊娠・出産・育児に焦点をあてて- | 共同 | 2013年10月 | 第72回日本公衆衛生学会(三重) | 畑下博世、マルティネス真喜子、◎河田志帆、植村直子、金城八津子、鈴木ひとみ | |
| (ポスター発表)在日ブラジル人妊婦のソーシャルネットワークについて | 共同 | 2014年11月 | 第73回日本公衆衛生学会(栃木) | 畑下博世、鈴木ひとみ、◎河田志帆、西出りつ子, 井倉一政、金城八津子 | |
| (ポスター発表) Investigating Intervention Methods in Sex Education Programs for Adults :A　Literature Review | 共同 | 2015年2月 | 18thEAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (Taipei) | ◎Shiho Kawata & Emiko Saito | |
| **(研究助成)** 性成熟期女性労働者の主体的な保健行動の促進を目指したヘルスリテラシー向上プログラム | 単独 | 2015年4月～2019年3月 | 科学研究費(若手B) | | |
| (ポスター発表)性成熟期女性の保健行動の促進を目指したヘルスリテラシー向上プログラムの評価 | 共同 | 2015年11月 | 第74回日本公衆衛生学会(長崎) | ◎河田志帆, 斉藤恵美子 | |
| To examine effectiveness of the sex education program to improve of health literacy. | 共同 | 2016年7月 | 3rd KOREA-JAPAN JPINT CONFERENCE(Busan) | ◎Shiho Kawata & Emiko Saito | |
| 1歳6か月児健康診査総合判定の要経過観察に関連する健診項目 | 共同 | 2017年10月 | 第75回日本公衆衛生学会(大阪) | 中村真梨子, 石本恭子, 谷村晋, 西出りつ子, 西嶌知子, 上田紀子, ◎河田志帆, 畑下博世 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| Process Apprared Efeectiveness for ChildAbuse Prevention by Public Health Nurses Through Home Visitations: A Qualitative Analysis using Modified-Grounded Theory Approach | 共同 | 2017年3月 | 20th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (HongKong) | H.Suzuki, ◎S.Kawata, S.Irie, M.Tomita, E. Saito | |
| DISASTER NURSING FOR MOTHERS AND INFANTS IN JAPAN : A LITERATURE REVIEW | 共同 | 2017年3月 | 20th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (HongKong) | ◎Shiho Kawata, Makiko Martinez, Hiroyo Hatashita | |
| Development of a sex education program to improve the health literacy of female Japanese office workers in their 20S and 30S | 単独 | 2017年10月 | International Nursing Reseach Conference 2017 (Bangkok) | ◎Shiho Kawata | |
| A trial to on-campus teaching methods of community diagnosis to reinforce an understanding of the people's lifestyles. | 共同 | 2018年1月 | 21th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (South Korea) | ◎Shiho Kawata, Hiroko Takizawa, Akemi Mitsui | |
| Concept analysis of disaster risk reduction "Bosai" | 共同 | 2018年1月 | 21th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (South Korea) | ◎Shiho Kawata, Makiko Martinez, Ritsuko Nishide | |
| The associations of health literacy and health behavior among Japanese female university students in their twenties. | 共同 | 2018年1月 | 21th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS(South Korea) | ◎Shiho Kawata, Emiko Saito | |
| **(研究助成)** 育児期の無職女性の主体的な保健行動の促進に向けた健康支援プログラムの開発 | 共同 | 2018年4月～ | 科学研究費（基盤C）（研究代表者） | | |
| **(研究助成)** 地域包括ケアシステム深化に向けた住民を含む関係者の連携推進要素評価の単一尺度開発 | 共同 | 2018年4月～ | 科学研究費（基盤C）（分担研究者） | | |
| Health condition and health behaviors of child-rearing Japanese women: a literature review | 共同 | 2019年1月 | 22th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (Shingapore) | ◎Shiho Kawata, Tomoko Imanishi | |
| Development of a sex education program to improve the health literacyfor Japanese female office workers. | 単独 | 2019年1月 | 22th EAST ASIAFORUM OF NURSING SCHOLARS (Shingapore) | ◎Shiho Kawata | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 滋賀県保険者協議会保健活動部会委員<br>(平成18年4月～平成23年3月) | 特定健診・保健指導の実施効果の向上に向け、専門職の委員として方法の検討を行った。 |
| 大津市職域連携推進委員会委員<br>(平成18年4月～平成23年3月) | 地域保健および産業保健の連携として、地域と労働者の健康課題の解決に向け積極的に検討している。 |
| 滋賀県国民健康保険広域化等協議会<br>保健事業部会委員<br>(平成23年8月～平成29年3月) | 医療費適正化に向け、医療費分析および特定保健指導の在り方について検討している。 |
| 日本公衆衛生看護学会誌査読委員 | 年2回発行される「日本公衆衛生看護学会誌」の査読を行っている。 |
| 全国保健師教育機関協議会<br>編集委員会編集委員 | 機関誌「保健師教育」の編集および査読をおこなっている。 |
| 京都府看護協会研修講師 | 年1～2回の看護職員向けの研修会講師を行っている。 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2018年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　鈴木 ひとみ | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1）事前・事後の課題、グループ単位での効果的な技術演習の工夫 | | |
| ・看護師教育課程（大学）における基礎看護技術教育の効果的な演習 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基本看護技術Ⅰ」（1年次配当、半期、必修1単位）において、看護行為の基本となる看護技術の構造と内容を明確にし、看護実践における技術の意義、およびあらゆる看護場面に共通する技術の基本を習得させ、また、環境の中で自ら回復していく能動的な主体である看護の対象に対し、生命力の消耗を最小限にするように、日常生活の基本的な援助技術の知識と方法を教授した。具体的項目はベッドメーキング、体位変換、移動・移送、バイタルサイン測定、観察と記録、寝衣交換、清潔の援助、排泄の援助、食事の援助、睡眠と休息である。事前レポートにて演習内容の方法と根拠を把握させ、それをもとに演習にて実践し、その上で計画表を修正し、学んだことをまとめさせ、理解が深まった。 |
| | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基本看護技術Ⅱ」（2年次配当、半期、必修1単位）において、診療を概観し、診療における看護の役割を理解し、看護の対象に行われる医学的検査・治療に伴う基本的な援助技術の知識と方法を教授した。具体的項目は診療補助、滅菌操作、手洗い、与薬、検査、穿刺、洗浄、輸血、浣腸、導尿、包帯法、酸素療法、吸引、経管栄養である。事前レポートにて演習内容の方法と根拠を把握させ、それをもとに演習にて実践し、その上で計画表を修正し、学んだことをまとめさせ、理解が深まった。 |
| | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基本看護技術Ⅲ」（2年次配当、半期、必修1単位）において、看護実践における情報収集と観察の意義について理解し、身体面の系統的な観察としてのフィジカルアセスメントの理論と方法を教授した。具体的項目は、問診・視診・聴診・打診・触診の特徴と実施方法、呼吸器系・循環器系・消化器系・神経系のフィジカルアセスメントである。また、修得した内容を模擬場面を通じて総合的に学ぶために、事例を設定して、その患者の日常生活上のニーズを把握し健康課題を見出すためのフィジカルアセスマントの活用、分析を総合演習として実施し、修得した技術の活用方法を具体的に理解することに寄与できた。 |
| | 平成26年9月～11月 | 朝日大学保健医療学部看護学科で非常勤講師として「看護技術論Ⅰ（生活援助）」（1年次配当、半期、必修1単位）において、移動・移送、睡眠と休息、清潔の援助の内容を教授した。移動・移送においては学生全員が自身および他者の身体を動かしながら四肢・体幹・関節の動きを感じ、日常の生活動作を意識的に分析できる工夫を行い、清潔の援助においては患者に行ってみたい援助の工夫などを具体的に盛り込みながら講義を行った。 |
| | 平成27年9月～<br>平成27年11月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「日常生活基盤と看護」（1年次配当、半期、必修2単位）において、ベッドメーキング、バイタルサイン測定の演習指導を行った。 |
| | 平成30年4月～<br>平成30年5月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「看護栄養管理技術論」（2年次配当、春学期、必修1単位）において、「食事と栄養摂取の意義」、「食欲と消化・吸収に関する生理的メカニズム」、「栄養状態のアセスメント」、「食事・栄養摂取に関する援助」、「経口栄養の援助」の講義・演習を行った。 |
| | 平成30年6月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「ヘルスアセスメント」（2年次配当、春学期、必修1単位）において、「看護に活かすフィジカルアセスメント：循環器」、「看護に活かすフィジカルアセスメント：消化器」の講義・演習を行った。 |
| | 平成30年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「キャリアサポート実践講座A」（4年次配当、春学期、必修1単位）において、担当学生4名に対し看護技術演習の指導計画立案と実施について、指導・評価を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・看護師教育課程（大学）における研究的態度および思考の活用 | 平成23年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「看護研究演習」（４年次配当、通年、必修3単位）において、看護学および看護実践を発展させるための研究的態度および自己研鑽能力を養うために、既習した知識・理論・技術を統合し、自己の研究課題を追求し関心看護学領域の理解を目指すための演習指導を行った。少人数の学生をゼミナール形式で指導し、自己の看護観を確立させることに寄与できた。 |
| ・神戸常盤大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成22年3月 | 平成21年度は1年次後期科目（必修）「基本看護技術Ⅰ」で「観察」、「記録」、「バイタルサイン測定」の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅱ」で「検査と看護」、「与薬」の単元を、2年次前期科目（必修）「基本看護技術Ⅲ」で「身体診察とは」、「診察技法」、「呼吸のみかた」の単元を担当した。これらの科目は複数の教員がオムニバス形式で講義を行っており、セメスターの終わりに行う学生評価では個人の教育内容の評価ができにくい。そこで、毎回講義・演習終了後に、その単元の学習目標の達成度評価とともに教授法の評価を４検法（4.0点満点）で学生にお願いしている。その結果、講義では「声の大きさ、話す速度」、「教材の用い方」、「授業の進行速度」、「内容の理解のしやすさ」、「学生への公平な態度」の平均が3.8、「抽象的な内容の具体的説明」、「教員自身の考えを反映し、心に響く内容」の平均が3.7であった。演習では「ﾃﾞﾓﾝｽﾄﾚｰｼｮﾝでの説明法」、「演習内容に無理がない」の平均が3.7であるのに対し、「演習の時間配分」の平均が3.6と若干低めであった。 |
| ・神戸常盤大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成23年3月 | 平成22年度は1年次後期科目（必修）「基本看護技術Ⅰ」で観察、記録、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、バイタルサイン測定の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅱ」で検査と看護、与薬、輸血、穿刺の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅲ」で身体診察と診察技法、呼吸のみかたの単元を担当した。基本看護技術はオムニバス形式の講義でありセメスター終了時の学生評価では個人の教育内容の評価ができにくい。そこで、毎回講義・演習終了後に、その単元の学習目標の達成度評価とともに教授法の評価を４検法（4.0点満点）で学生にお願いしている。その結果、講義では声の大きさ、話す速度、教材の用い方、授業の進行速度、内容の理解のしやすさ、学生への公平な態度の平均が3.8、抽象的な内容の具体的説明、教員自身の考えを反映し、心に響く内容の平均が3.7であった。演習ではﾃﾞﾓﾝｽﾄﾚｰｼｮﾝでの説明法、演習内容に無理がない、の平均が3.7、演習の時間配分の平均が3.6、事前学習の効果的な使用が3.7であった。学習目標を提示してそれを達成するような教育内容を精選して組み立て、学生からの評価をもって次年度の内容をまた変革するという取り組みを行っている。 |
| ・神戸常盤大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成24年3月 | 平成23年度は1年次後期科目（必修）「基本看護技術Ⅰ」で観察、記録、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、ﾊﾞｲﾀﾙｻｲﾝ測定の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅱ」で検査と看護、与薬、輸血、穿刺の単元を担当し、また2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅲ」では科目の主担当者を担当として15回の内容のうち14回を担当した。学生による授業評価は2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅲ」で受け、20項目の評価内容は学年総合で見て4.16～4.41の範囲であり、概ね良い評価を得ていた。カテゴリー別の平均は「Ⅰ．あなた自身」4.1655、「Ⅱ．授業内容」4.305、「Ⅲ．授業方法」4.327,「Ⅳ．設備」4.303「Ⅴ．全体評価」4.419で、とくに、授業を受けたことへの満足度が高くなっていた。明石南高等学校での高大連携科目「基礎看護」では9回の講義を行い、授業評価では「１．授業態度」4.97、「２．授業方法」4.85、「３．授業内容」4.92、「４．教員の人物像」4.97という結果を得た。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・神戸常盤大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成25年3月 | 平成24年度は1年次後期科目（必修）「基本看護技術Ⅰ」で観察、記録、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、バイタルサイン測定、清潔の援助の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅱ」で検査と看護、与薬、輸血、穿刺の単元を、また2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅲ」で身体診察と診察技法、呼吸のみかたの単元を担当した。基本看護技術はオムニバス形式の講義でありセメスター終了時の学生評価では個人の教育内容の評価ができにくい。そこで、毎回講義・演習終了後に、その単元の学習目標の達成度評価とともに教授法の評価を４検法（4.0点満点）で学生にお願いしている。その結果、講義では声の大きさ、学生への公平な態度の平均が3.8、話す速度の平均が3.7、教材の用い方、授業の進行速度、内容の理解のしやすさの平均が3.6、抽象的な内容の具体的説明、教員自身の考えを反映し、心に響く内容の平均が3.7であった。演習では演習内容に無理がない、演習の時間配分の平均が3.5、事前学習の効果的な使用が3.4であった。講義の評価はまずまずであったが、演習の計画、運営方法にやや課題が残った。 |
| ・神戸常盤大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成26年3月 | 平成25年度は1年次後期科目（必修）「基本看護技術Ⅰ」で観察、記録、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、バイタルサイン測定、清潔の援助の単元を、2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅱ」で検査と看護、与薬、輸血、穿刺の単元を、また2年次前期科目(必修)「基本看護技術Ⅲ」で身体診察と診察技法、呼吸のみかたの単元を担当した。科目責任者であった基本看護技術Ⅲの学生による授業評価では、「学生自身の学習」4.6、「授業内容」4.5、「授業方法」4.5、「学習成果」4.4、「総合評価」4.6であった。カリキュラム変更に伴い、今年度より時間数が30時間から15時間に縮小され、総合演習を組み入れないこととなった。その結果として、講義と演習の構成が昨年までのものよりも厳しくなった。学生にとっては、内容の専門性が高度になったことに加え、自主的に勉強しなければ講義の内容を消化できない状況が生まれたことになろう。演習後のアセスメントを考えるにも、これまでの技術演習のように体験で記述できる記録ではなく、思考しなければならなくなった分自己学習を余儀なくされ、「学生自身の学習」の評価点数が上がったものと思われる。 |
| ・京都学園大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 平成30年6月 | 平成30年度は2年次春学期科目（必修）「看護栄養管理技術論」で「食事と栄養摂取の意義」、「食欲と消化・吸収に関する生理的メカニズム」、「栄養状態のアセスメント」、「食事・栄養摂取に関する援助」、「経口栄養の援助」の単元を、2年次春学期科目(必修)「ヘルスアセスメント」で「看護に活かすフィジカルアセスメント：循環器」、「看護に活かすフィジカルアセスメント：消化器」の単元を担当した。これらの科目は複数の教員がオムニバス形式で講義を行っており、セメスターの終わりに行う学生評価では個人の教育内容の評価ができにくい。そこで、毎回講義・演習終了後に、その単元の学習目標の達成度評価とともに教授法の評価を４検法（4.0点満点）で学生にお願いしている。その結果、講義では「授業の進行速度」、「内容の理解のしやすさ」、「抽象的な内容の具体的説明」の平均が3.6、「声の大きさ、話す速度」、「教材の用い方」、「学生への公平な態度」の平均が3.7、「教員自身の考えを反映し、心に響く内容」の平均が3.5であった。演習では「演習内容に無理がない」、「演習の時間配分」の平均が3.7であった。 |
| 2)学生個々の理解を深めるための、思考過程を伸ばす自己学習と学生間の共有を活用した実践 | | |
| ・看護師教育課程(大学)における看護に必要な問題解決思考を伸ばす演習 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基本看護技術Ⅳ」（２年次配当、半期、必修1単位）において、看護の対象が自ら望ましい健康生活を送るために、看護における相談的・指導的役割の意義及び対象のセルフケアに働きかける教育的活動の基礎的方法を理解する内容と、看護学や看護実践の改善・発展のために既存の知識や理論を活用する方法、及び看護実践を帰納する方法などをとおして、看護過程に関する基礎的知識と技術を教授した。少人数のグループで看護の具体的展開を行い、個別指導を取り入れることで理解を深めることができた。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・看護師教育課程(大学)における看護に必要な問題解決思考を伸ばす演習 | 平成26年9月～11月 | 朝日大学保健医療学部看護学科で非常勤講師として「看護過程論」（1年次配当、半期、必修1単位）において、看護における問題解決思考や看護理論を患者援助に生かすプロセスを教授した。具体的には事例検討のための看護の視点の持ち方、思考訓練を課し、情報収集、アセスメント、問題抽出、援助計画、実施、評価の一連の看護の専門的活動を解説した。 |
| 3)学生の自己の課題を探求し解決を促すゼミナールの活用 | | |
| ・看護師教育課程(大学)における研究的態度および思考の活用 | 平成23年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「看護研究演習」（４年次配当、通年、必修3単位）において、看護学および看護実践を発展させるための研究的態度および自己研鑽能力を養うために、既習した知識・理論・技術を統合し、自己の研究課題を追求し関心看護学領域の理解を目指すための演習指導を行った。少人数の学生をゼミナール形式で指導し、自己の看護観を確立させることに寄与できた。 |
| ・看護師教育課程(大学)における初学者教育 | 平成27年4月～<br>平成27年11月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「スタートアップゼミA」（1年次配当、半期、必修2単位）「スタートアップゼミB」（1年次配当、半期、必修2単位）において、大学における知識修得や研究遂行に必要な理解力、探究力、表現力のスキルを養い、資料収集・討議・発表・レポート作成ほ基本を教授した。学生が日々の講義の受け方、学習方法、学習したことをまとめ、表現する方法を獲得することを目指した。 |
| 4)臨地実習における効果的な指導の工夫 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「看護活動基礎実習」（1年次配当、半期、必修1単位）において、看護専門職の活動の実際場面の見学を通して、看護の対象と機能・役割について学ぶ臨地実習指導を担当した。アーリーエクスポージャーとして看護の現場に学生を導き、場面を体感させ、看護職者およびその他の医療者が、患者の療養生活にどのように専門性を発揮しているか、患者がどのような環境にいるのかをありのままに感じさせ、その後の学内での学習で意味付けすることで看護の概念化に役立った。 |
| | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基礎看護学実習Ⅰ（平成24年より「生活健康論実習」に改名）」（1年次配当、半期、必修2単位）において、人々の生活習慣や生活様式などの“生活の仕方”に目を向け、その行動の中に潜む考え方を把握することを通して、「生活の中の健康」に関する考え方を発展させるよう指導した。少人数のグループで討議を繰り返しながら学生個々の健康に関する探究したいテーマを見出させ、フィールド調査を通してレポートを作成させた。看護援助を行う上で基盤となる生活観や健康観を深め、人々の健康な生活に向けて看護の果たす役割について考えさせることができた。 |
| | 平成20年4月～<br>平成24年7月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次配当、半期、必修2単位）において、入院生活を送る対象（患者）に適した基本的な援助技術の実践を通して、患者－看護師間の相互作用と看護行為の意義と重要性を学ぶ実習を指導した。対象の特性について情報を得、生活上のニーズの充足状況を検討させ、看護援助を安全・安楽に留意して実施および評価させた。看護の目的を達成するための援助を対象へ適用することについて理解を深める効果があった。 |
| | 平成25年9月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「基礎看護学実習（看護過程）」（2年次配当、半期、必修2単位）において、既習した看護過程の理論や方法を、患者の日常の生活過程を整える（基本的ニーズの充足）ために活用し、看護実践における科学的思想の意義と方法を学ぶ実習を指導した。対象の特性について情報を得、対象の回復を促進するための看護過程を展開させ、看護援助を安全・安楽に留意して実施および評価させた。看護の目的を達成するための援助を対象へ適用すること、そして看護の科学性について理解を深める効果があった。 |

| | | |
|---|---|---|
| | 平成23年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学保健科学部看護学科で助教、および講師として「課題別総合実習」（4年次配当、半期、必修3単位）において、既習した看護学の知識・技術を統合し、自己の課題を明らかにし、その課題解決を計画的に行い、臨地における総合的な実践能力を高め、かつ自己の将来の看護展開能力へとつなげる実習を指導した。学生が自らの看護実践の課題をテーマに実習計画を立案し、将来目指す看護師像に向けてインターンシップの意味合いも含んだ実習領域選択を行い、課題解決を目指すよう指導した。臨床側に卒業間近の学生をスタッフと同様に受け入れてもらうことで、より深く看護チームに参画することができ、その後の就職につながった。 |
| | 平成27年4月～<br>平成27年8月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「看護体験実習」（1年次配当、半期、必修1単位）において、早期体験実習として看護が行われる場に赴き、看護職者の役割と機能について学び、看護職者として必要な基本的態度を身につけ、看護を学ぶ動機づけを図る実習を指導した。また、この実習の企画・運営の主担当者の一員として各病院への説明会の実施、実習担当教員への説明、学生の実習準備、実習後の学内外での反省会の運営にもあたった。 |
| | 平成30年3月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で准教授として「実践基礎看護学実習」（2年次配当、半期、必修2単位）において、療養の場で生活する看護の対象者のニードを把握し、看護過程の思考プロセスを適用して、対象者に必要な看護援助を実践する過程を学ぶ実習を指導した。 |
| ・兵庫県立明石南高校生徒による授業評価アンケート結果における評価 | 平成22年3月 | 高大連携事業として、明石南高校で総合学科2年生15名に対し、「基礎看護Ⅰ」の中で「看護とは何か」「看護の機能と役割は何か」「思春期貧血のある患者の看護」というテーマで7回の講義を行った。その授業評価は、各項目の平均が授業態度4.3、授業方法4.2、授業内容4.2、教員の人物像4.2（5.0満点）という結果であった。内容を精選し、あまり多くの情報量を詰め込まず、テーマを出して考えさせながらそれに答えていくという双方向型の授業構成にした。看護という職業に興味を示すとともに、その難しさ、大変な職業であるということも実感したようである。 |
| ・兵庫県立明石南高校生徒による授業評価アンケート結果における評価 | 平成23年3月 | 高大連携事業として、明石南高校で総合学科2年生15名に対し、「基礎看護Ⅰ」の中で「看護とは何か」「看護の機能と役割は何か」「思春期貧血のある患者の看護」というテーマで7回の講義を行った。その授業評価は、各項目の平均が授業態度5.0、授業方法4.9、授業内容4.9、教員の人物像5.0（5.0満点）という非常に高い結果であった。パワーポイントで印象的に内容を伝え、カラーの配布物を作り、今年は名札を作成してもらって講義の際に利用し、生徒を名前で呼ぶよう努力し、東日本大震災での看護職の活躍を現在行われていることについてタイムリーに報告するようにした。担当の教諭ともよく連携できていたことと、生徒が全員医療職（ほとんどが看護師）志望であったことが影響していたとみえて、生徒の授業態度が非常によく、熱心に取り組んだという印象が強い。実際に対応している時間はわずかでも、例年以上に生徒と交流できた感触がある。 |
| ・兵庫県立明石南高校生徒による授業評価アンケート結果における評価 | 平成24年3月 | 高大連携事業として、明石南高校で総合学科2年生18名に対し、「基礎看護Ⅰ」の中で「看護とは何か」「看護の機能と役割は何か」「思春期貧血のある患者の看護」というテーマで7回の講義を行った。その授業評価は、各項目の平均が授業態度4.3、授業方法4.3、授業内容4.2、教員の人物像4.2（5.0満点）という結果であった。本年度は昨年度より8名多い18名の受講生で火曜日6限（50分）に講義を行った。従来5，6限の2コマ続きであった講義時間が本年度は半分となり、そこへ受講生が倍になったという状況である。受講生の増加は、グループでの討議が充実したのでよい効果があったが、講義では何名か元より興味の薄い生徒が含まれており、その生徒が私語をすることで全体の集中力が途切れる場面が何度かあった。男子生徒が4名入っていたのも、本年度の特性といえる。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法･教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 1)居宅介護従事者養成研修　重度訪問介護従事者養成研修基礎課程･追加課程(滋賀県)　講師 | 平成22年6月～<br>平成27年6月 | 滋賀県知事が指定する、居宅介護従事者養成研修・重度訪問介護従事者養成研修の基礎課程・追加課程において、「医療的ケアを必要とする重度訪問介護利用者の障害及びその支援に関する講義（その1）」（120分）と「緊急時の対応及び危険防止に関する講義」（60分）を担当した。この研修の目的は、障害の有無に関わらず、誰もが市民として自覚し生き生きと生活できる社会を目指し、当事者自らがセルフマネジメントできるように支援することと、自立生活の意味と重要性を認識しつつ個人のニーズに柔軟な対応ができる介護従事者を養成することである。<br>担当した内容は、医療的ケアとは何かという概念を説明し、医行為と医療的ケアの違いや在宅で暮らす重度身体障害者に必要とされる医療的ケアの種類と特徴、危険性、違法的阻却とはどういうことか、ヘルパー業務と医療的ケアとの関係を説明し、重度訪問介護の実際の活動について解説した。同時に、ヘルパー業務時に遭遇しうる緊急事態にたいし、救急車の呼び方、簡単な応急処置、AEDの知識、災害発生時の対応などを教授した。 |
| 2)平成23年度介護職員等によるたんの吸引等の実施のための研修(特定の者対象)(滋賀県)　実地研修指導看護師 | 平成23年12月～<br>平成24年3月 | 介護サービスの基盤強化のための介護保険法の一部を改正する法律（平成23年法律第72号）が平成23年6月22日に公布され、平成24年4月1日より、一定の研修を受けた介護職員等が一定の条件の下に、たんの吸引等を実施することができるようになったことを受け、滋賀県健康福祉部障害者自立支援課が実施主体となり、開催した事業である。基本研修で講義8.5時間を受けた介護職員への基礎演習1時間を指導し、筆記試験に合格した後の実地研修を10回指導、認定のための評価を行った。指導項目は口腔・鼻腔・気管カニューレ内部のたん吸引と、経鼻経管栄養である。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1）看護師養成課程（大学）におけるクラス担任としての学生生活支援 | 平成20年4月～<br>平成24年3月 | 神戸常盤大学において、大学1期生の担任を4年間務め、クラス運営および学生の学習支援、進学変更時の指導、履修計画立案支援を行った。短期大学から4年制大学に移行して初めての入学生であり、学年進行に伴い発生した課題に対する対応や、学生の進退に関わる個人面接、保護者とのやりとり等を行った。4年間で退学は5人のみであった。 |
| 2）看護師養成課程（大学）における学生生活支援のためのチューター制度発足と運用 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、担任制を補完する学生支援システムとして看護学科独自のチューター制度を開始するにあたり、学科長とともに規定を作成し、各教員と学生の配置を6年間行った。本制度のねらいは（1）自主的自立的な学修の支援（自己教育力を育てる）、（2）自ら学ぶ意欲を高める支援、（3）学生・教員の相互交流による成長や発展を志向する機会、(4)必要時、学生の成長のキーパソンとなる保護者や関係者との情報交換、調整の機会をもつ、というものである。チューター１人につき各学年５～６名を受け持ち、前期1回、後期1回の年2回を基準に、適宜面接を実施し、学生生活における様々な悩みや疑問の対応を行って必要時担任と情報共有しながら課題解決を行った。 |
| 3）看護師養成課程（大学）における看護師国家試験対策の実践 | 平成24年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、国家試験対策委員で4年生国家試験対策のリーダーを2年間務め、4年生の年間を通じての模擬試験、学習指導、ｾﾐﾅｰ開催などを行った。具体的には、学習方法についてのガイダンス実施、年間8回の看護師国家試験模擬試験と年間4回の保健師国家試験模擬試験の実施、年間12回の対策講座の開講、模擬試験の成績不良者に対する国家試験直前の個別面接および特別講座開講、自己採点の補助、合格者確認、免許登録に関するガイダンスを実施した。さらに既卒生で不合格であった学生についても個別に連絡し、模擬試験や対策講座の参加を促し、学習の進捗状況を確認の面接を実施するなど、合格までの支援を行った。その結果、第102回看護師国家試験合格率は97%、第103回看護師国家試験合格率は98%で、いずれも全国平均を上回った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4）看護師養成課程（大学）における就職委員としての学生の就職活動支援 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、就職委員として6年間就職に関する指導にあたった。具体的には、3年生に対する就職活動ガイダンス、OB・OG懇談会、合同就職セミナーの利用法ガイダンス、個別相談担当教員の公表、進路希望調査を実施した。また、4年生に対する就職活動ガイダンス（履歴書の書き方、面接の受け方、求人登録票の見方、インターンシップまたは病院見学会の参加の仕方等）、個別進路面接、個別の就職活動の支援、模擬面接実施、履歴書の添削指導、小論文の添削指導、就職活動報告のガイダンスを実施した。また、大学に広報活動に来られる全国の病院の看護管理者および人事担当者への対応を行った。この間の看護師の就職率は100%であった。看護師以外は、大学卒業生排出後3年間で保健師3名、養護教諭2名が就職できた。 |
| 5）看護師養成課程（大学）におけるエクステンションセンターでの実践 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、平成24年4月より大学エクステンションセンターの国際事業部に所属し、ネパール交換留学に関する事業を担当した。12月にネパールに派遣する学生の公募および選考に関する規定を見直し、公募を実施し、選考にて合格となった学生へのガイダンスの実施、現地でのプレゼンテーションの準備、帰国後の成果発表会の準備と実施に携わった。 |
| 6）看護師養成課程（大学）における教育研究開発センターでの実践 | 平成21年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、5年間KTU（Kobe Tokiwa University）教育研究開発センターに所属し、大学の教育・研究開発の推進および教育・研究業績づくりのためのサポートを研究協力課とともに行った。具体的には、外部資金獲得（GP、科研費、共同研究等）、産官学民連携、国際交流（海外教育・研究機関との交流、JICAプログラムの策定と推進、エクステンションセンター国際交流部との連携等）、コンソーシアム業務などを行った。また、平成24年からは研究フォーラムを開催し、学内の研究者の成果発表の場を設け、従来から行っていた学内研究助成事業の採択課題の成果発表だけでなく、教職員が日頃行っている研究についても情報共有するようにした。 |
| 7）看護師養成課程（大学）における臨地実習委員としての臨地実習運営支援活動 | 平成25年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、1年間臨地実習委員会に所属し、基礎看護学領域の臨地実習調整者として看護学科の臨地実習運営にかかる臨床との調整、研修会の企画および運営などを行った。具体的には、実習グループごとの学生配置、実習施設との実習前打ち合わせおよび指導者会議への出席、インシデント・アクシデントレポートや感染症発症または学生の臨地実習欠席や単位不認定の状況把握と分析・対処の検討、実習先へ運行するスクールバスの希望調査と運行計画立案および学生への周知活動、臨地実習指導者を学内に招いての指導者研修会の企画・運営を実施した。 |
| 8）看護師養成課程（大学）における入試広報活動 | 平成20年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において、高大連携事業を担当し、主に兵庫県立明石南高等学校総合科２年生および３年生の授業を担当する他、入試広報課に協力し高校内ガイダンスに参加して受験生確保のための説明会、模擬授業を実施した。模擬授業では看護の概念や看護職者が社会に求められている役割、看護の専門性、看護職者になるための進路と勉強方法、看護技術の解説（体温測定、脈拍測定、血圧測定、静脈血採血等）を行った。多くは業者主催のガイダンスであるが、その中の１校から再授業のリクエストをいただき、大学に希望者が来校して模擬授業を行ったことがあり、中の１人が受験して合格し、無事卒業して臨床で活躍したという実績がある。 |
| 9）看護師養成課程（大学）における大学認証評価受審への準備活動 | 平成24年4月～<br>平成26年3月 | 神戸常盤大学において2年間大学認証評価準備委員となり、平成26年に受審する大学第三者評価に向けて、大学運営や教育内容の見直し、根拠資料の作成にあたった。担当箇所は基準2-3「学修及び授業の支援」（教員と職員の協働並びにTA(Teaching Assistant)等の活用による学修支援及び授業支援の充実）で、図書館業務、キャリア支援、オフィスアワーの運用状況、TA(Teach-ing Assistant)やアドバイザーの活用状況、ワクチン接種のガイダンス、入学時学外オリエンテーション、健康フェアなどのイベント開催状況、· 退学、停学、留年等の実態及び原因分析、改善方策の検討状況、· 学生への学修及び授業支援に対する学生の意見等をくみあげる仕組み等をまとめた。また、基準2-5「キャリアガイダンス」（教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する指導のための体制の整備）で、キャリア教育とキャリア支援体制（就職、国家試験対策）、就職および資格取得状況についてまとめた。さらに、これら担当箇所に関するエビデンスおよび備え付け資料の作成、収集、整理を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 10) 京都学園大学教育開発センター（大学）における健康医療学部看護学科設置準備 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 京都学園大学において1年間健康医療学部看護学科の設置準備準備室に所属し、学部・学科の設置認可作業および教育施設・備品整備、学生募集に関する広報活動、教育内容の運営に関わる準備作業にあたった。 |
| 11)京都学園大学健康医療学部看護学科(大学)における入試広報活動 | 平成27年4月～<br>平成27年11月 | 京都学園大学において、健康医療学部看護学科の入試委員としてオープンキャンパスの企画・運営、各種入試説明会への出席と模擬授業の実施、入試関連活動を実施した。また、学科の教員にたいしても学科会議において入試関連情報を提供し、入試説明会への参加教員のとりまとめ、入試監督者の検討等も行った。 |
| 12)京都学園大学健康医療学部看護学科(大学)におけるFD活動 | 平成27年4月～<br>平成27年11月 | 京都学園大学において、健康医療学部のFSD推進委員として全学のFD活動の企画・運営にあたった。また、授業評価や公開授業などの教育活動の支援も行っている。また、健康医療学部FD委員会を開催し、学部FD研修会の企画・運営を実施した。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 越境する対話と学び 第Ⅱ部医療・看護に見る越境 第6章看護教育と臨床実践をつなぐ知識創造コミュニティ ー看護エデュケア研究会の取り組み | 共著 | 平成27年5月 | 株式会社 新曜社 | 編者:香川秀太、青山征彦、著者:香川秀太、澁谷幸、鈴木ひとみ | p.137～158 |
| 論文 | | | | | |
| １．自殺未遂の経緯からみた自殺予防のための支援のあり方 ―アルコール依存症者に焦点を当てて | 共著 | 平成24年12月 | 社会医学研究, 30(1) | 著者:鈴木 ひとみ、辻本哲士、金城八津子、植村直子、畑下博世、河田志帆、橋爪聖子、藤井広美、上野善子 | p.45～p.58 |
| ２．自殺予防アンケート調査結果から検討する自殺予防のあり方 | 共著 | 平成24年12月 | 日本健康医学会雑誌, 22(1) | 著者:畑下博世、鈴木 ひとみ、辻本哲士、金城八津子、植村直子、河田志帆、藤井広美、橋爪聖子 | p.43～p.51 |
| ３．障害者自立支援法施行後の精神保健福祉活動における保健所の役割 | 共著 | 平成26年1月 | 日本健康医学会雑誌, 22巻4号 | 著者:畑下博世、坪倉繁美、川井八重、河田志帆、笠松隆洋、鈴木ひとみ、西出りつ子 | p.279～p.286 |
| ４．精神障害者の地域生活支援に向けた保健所の役割 | 共著 | 平成26年1月 | 日本健康医学会雑誌, 22巻4号 | 著者:畑下博世、川井八重、坪倉繁美、河田志帆、笠松隆洋、鈴木ひとみ、西出りつ子 | p.287～p.293 |
| ５．ケア/ケアリング研究の動向と本学看護学科基礎看護学の取り組み | 共著 | 平成26年3月 | 神戸常盤大学紀要7号 | 著者:長尾厚子、鎌田美智子、尾﨑雅子、十九百君子、鈴木ひとみ、谷口由佳、南部由江 | p.119 |
| ６.臨床実践につながる看護技術教育の検討　状況論的アプローチに基づく評価視点を導入して | 共著 | 平成26年3月 | 神戸常盤大学紀要7号 | 著者:鈴木ひとみ、十九百君子、尾﨑雅子、谷口由佳、南部由江、鎌田美智子、長尾厚子 | p.111 |
| 7. ストレス対処に関する日本人女性の文化的特性について | 共著 | 平成27年12月 | 日本地域看護学会雑誌, 18(2) | 著者:畑下博世、鈴木ひとみ、Denise Saint Arnault、川井八重、軸丸清子、河田志帆、井倉一政 | p.13～p.22 |
| 8.現代保健師が獲得すべき態度とスキルー沖縄県島嶼における駐在保健婦の実践からの検討ー | 共著 | 平成29年2月 | 社会医学研究, 34(1) | 著者:畑下博世、金城八津子、鈴木ひとみ、河田志帆 | p.31～p.39 |
| 9. 在日ブラジル人妊産褥婦の健康に影響する社会文化的要因 | 共著 | 平成29年6月 | 国際保健医療, 32(2) | 著者:畑下博世、鈴木ひとみ、Denise Saint Arnault、河田志帆 | p.69～p.81 |
| その他 | | | | | |
| (報告書) | | | | | |
| 1. 看護必要度と看護師の労働負担評価に基づいた運動器障害予防対策に関する研究 研究成果報告書 | 共同 | 平成27年3月 | 平成24～26年度科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金 基盤(C) | 研究代表者:北原照代<br>分担研究者:垰田和史、西田直子、鈴木 ひとみ<br>連携研究者:辻村裕次、中村賢治、藤野みつ子、西村路子、高見知世子 | p.1～p.36 |
| 2. 災害時における車いす利用者における避難生活環境のユビキタスシステムの開発と評価 | 共同 | 平成28年3月 | 平成24～27年度科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金 基盤(B) | 研究代表者:西田直子<br>分担研究者:鈴木 ひとみ、岩脇陽子、山本容子、室田昌子、原田清美、滝下幸栄、垰田和史、辻村裕次 | p.1～p.76 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3. 就労障害者の二次障害予防　ー作業負担軽減事例の集積と予防マニュアルの作成ー | 共同 | 平成28年5月 | 平成25～27年度科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金　基盤(C) | 研究代表者:辻村裕次<br>分担研究者:垰田和史、北原照代、白星伸一<br>連携研究者:西田直子、鈴木 ひとみ | p.1～p.45 |
| (学会発表) | | | | | |
| 1. 日本の病棟看護師の運動器障害に関する質問紙調査 | 共同 | 平成24年5月 | 第85回日本産業衛生学会 | 共同研究者北原照代,垰田和史,辻村裕次,保田淳子,舟越光彦,西田直子,鈴木ひとみ,中村賢治 | |
| 2. 看護師の看護業務負担と腰痛の現状 | 共同 | 平成24年7月 | 第53回日本社会医学会総会 | 共同研究者:西田直子,安土亜由美,北原照代,垰田和史,辻村裕次,保田淳子,鈴木ひとみ | |
| 3. 微小体動測定による自律神経機能評価と膀胱内尿量増加との関連　健常者を被験者に | 共同 | 平成24年11月 | 第32回日本看護科学学会学術集会 | 共同研究者:鈴木ひとみ, 北原 照代 | |
| 4.病棟看護師の筋骨格系症状訴え率と病棟別看護必要度との関連 | 共同 | 平成25年5月 | 第86回日本産業衛生学会 | 共同研究者:北原照代、垰田和史、西田直子、舟越光彦、辻村裕次、保田淳子、鈴木ひとみ | |
| 5.車椅子利用者にとっての避難所のバリアフリー環境の現状調査 | 共同 | 平成25年7月 | 第54回日本社会医学会 | 共同研究者:西田直子、岩脇陽子、山本容子、室田昌子、垰田和史, 、辻村裕次、鈴木ひとみ | |
| 6.臨床実践につながる看護技術教育の検討　ー状況論的アプローチに基づく評価視点を導入してー | 共同 | 平成25年8月 | 日本看護学教育学会第23回学術集会 | 共同研究者:鈴木ひとみ、十九百君子、尾﨑雅子、谷口由佳、藤岡由江、鎌田美智子、長尾厚子 | |
| 7.安全安楽な移動動作の援助の実際と工夫 | 共同 | 平成25年9月 | 日本看護技術学会第12回学術集会 | 共同研究者:西田直子、水戸優子、鈴木和代、國澤尚子、若村智子、鈴木ひとみ、平田美和 | |
| 8.背部体表脈波検知による脊髄損傷者の膀胱内尿量と自律神経活動の評価 | 共同 | 平成25年12月 | 平成25年度日本人間工学会関西支部大会 | 共同研究者:鈴木ひとみ、垰田和史、辻村祐次 | |
| 9. 看護学生の模擬患者との対応場面での体験と社会的スキルとの関連 | 共同 | 平成26年8月 | 日本看護学教育学会大第24回学術集会 | 共同研究者:鈴木ひとみ、長尾厚子、鎌田美智子、十九百君子、尾﨑雅子、谷口由佳、藤岡由江 | |
| 10. 看護教育と臨床をつなぐ越境的学習コミュニティから生み出される看護技術教育の可能性 | 共同 | 平成26年8月 | 日本看護学教育学会大第24回学術集会 | 共同研究者:鈴木ひとみ、澁谷幸、山本直美、三谷理恵、中岡亜希子、石飛悦子、橋口智子、田中亮子、香川秀太 | |
| 11. 移動動作ガイドラインの必要性と展開例 | 共同 | 平成26年11月 | 日本看護技術学会第13回学術集会 | 共同研究者:西田直子、水戸優子、鈴木和代、國澤尚子、若村智子、鈴木ひとみ、平田美和、小林由実 | |
| 12.病棟看護師の筋骨格系症状有訴率に関与する要因～所属病棟の看護必要度に着目して～ | 共同 | 平成27年5月 | 第88回日本産業衛生学会 | 共同研究者:北原照代、垰田和史、辻村裕次、西田直子、鈴木ひとみ | |
| 13.車いす利用の頸髄損傷者における取り外し可能な背部支持具を用いたVDT作業座位の改善 | 共同 | 平成27年5月 | 第88回日本産業衛生学会 | 共同研究者:辻村裕次、白星伸一、垰田和史、北原照代、鈴木ひとみ | |
| 14.移動・移乗動作のガイドライン | 共同 | 平成27年11月 | 日本看護技術学会第14回学術集会 | 共同研究者:西田直子、水戸優子、鈴木和代、國澤尚子、若村智子、鈴木ひとみ、平田美和、小林由実 | |
| 15.病院における看護師の腰痛予防対策～質問紙調査の結果から～ | 共同 | 平成27年11月 | 第55回近畿産業衛生学会 | 共同研究者:北原照代、垰田和史、辻村裕次、西田直子、鈴木ひとみ、冨田川智志 | |
| 16.車いす利用者による京都市内の避難所のバリアフリー情報に関する評価 | 共同 | 平成28年8月 | 第57回 日本社会医学会総会 | 共同研究者:西田直子、鈴木ひとみ、原田清美、岩脇陽子、山本容子、室田昌子、垰田和史、辻村裕次、 | |
| 17.福祉用具貸与事業者における介護・医療職者の腰痛予防に関する知識・技術の現状 | 共同 | 平成28年8月 | 第57回 日本社会医学会総会 | 共同研究者:冨田川智志、垰田和史、北原照代、辻村裕次、西田直子、鈴木ひとみ | |
| (雑誌掲載) | | | | | |
| 1. 疾患と看護がわかる看護過程　ナーシングプロセス「脊髄損傷者の看護」 | 単著 | 平成25年11月 | メヂカルフレンド社<br>クリニカルスタディ　34(12) | | p.49～p.63 |
| 2. 特集:看護学生への介助技術の指導方法　2. 実践的活用につなげるためのボディメカニクスの理解 | 共著 | 平成25年12月 | 医学書院　看護教育<br>Vol.54,　No.12 | 著者:鈴木ひとみ、十九百君子 | p.1086～p.1091 |
| 3. 看護がみえる　疾患ファイル　vol.2<br>脊髄損傷 | 単著 | 平成26年9月 | メヂカルフレンド社<br>クリニカルスタディ　35(10) | | p.16～p.17 |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| １．第18回日本看護診断学会企画運営委員（広報担当）としての活動 | 平成22年8月～平成24年7月、京都で開催された左記学術集会（大会長：西田直子）において、広報委員として活動した。活動内容としては、企画運営委員会議での企画内容の検討、ポスター・チラシ・ホームページのデザイン検討、ポスター・チラシの配布場所の検討および各種学会での広報を行った。また、学会当日の会場係として、参加者の誘導を行った。 |
| ２．「看護エデュケア研究会」運営スタッフ（副代表） | 平成22年8月～平成29年3月まで、神戸、大阪、奈良の看護系大学および看護専門学校教員、病院の看護管理者で発足した左記研究会（代表：澁谷幸）で、副代表として事務局運営に携わった。年3回の定例会、年1回のセミナーを企画運営し、状況論的学習論の看護教育への援用を試みる会として活動した。 |
| ３．第33回日本看護科学学会学術集会一般演題査読委員 | 平成25年6月～平成25年10月、大阪で開催された左記学術集会（大会長：林優子）において、一般演題6題の査読を行った。条件付き採択として発表を視野に研究として必要な手続きの提示や研究デザインに伴い明記されるべき内容について筆者とやりとりし、無事発表された。 |
| ４．第13回日本看護技術学会企画運営委員 | 平成25年3月～平成26年11月、京都において開催される左記学術集会（大会長：西田直子）において、広報委員として活動している。企画運営委員会議での企画内容の検討、ポスター・チラシ・ホームページのデザイン検討、ポスター・チラシの配布場所の検討および各種学会での広報を行った。 |
| ５．特定非営利活動法人滋賀県脊髄損傷者協会および社団法人全国脊髄損傷者連合会　会員としての活動 | 平成17年 4月～現在まで、左記団体の会員として、主に京都・滋賀にて会の運営する事業、調査等に参加し、ボランティア活動を行っている。 |
| Ⅳ 経営相談･技術相談･共同研究･受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| ･社団法人全国脊髄損傷者連合会ピアマネージャー | |
| ･特定非営利活動法人快適な排尿をめざす全国ネットの会認定　第1回快適CIC指導士 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　滝澤　寛子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）<br><br>講義科目におけるレスポンスペーパーの活用 | 2013年6～7月<br>2014年6～7月<br>2015年6～7月<br>2016年9～10月<br>2017年9～10月 | 前任校において、講師として担当の「地域看護活動概論」（専門科目、2年次配当、必修1単位）および本校の「公衆衛生看護管理論」（専門科目、2年次配当、保健師選抜者必修1単位）において、双方向性の意見交換ツールとして「レスポンスペーパー」を作成し取り入れた。毎回の授業終了後に学生が授業の感想や質問などを記入し、これに対して教員がコメントを書いて返却することを繰り返すことができるようになっている。教員として学生の理解状況が把握でき、次回の授業内容に反映させることができるとともに、学生の学び方・理解の仕方として良い点、さらに違う側面からも考えてみる視点を提供するコメントを返すことで、学生が自己の学びを客観視する機会にすることもできる。 |
| 個別の事例から地区活動の展開を考える課題学習 | 2013年7月<br>2014年7月<br>2015年7月<br>2016年7月<br>2017年6月 | 前任校において、講師として担当の「地域看護活動概論」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において、個別の援助活動から地区活動への展開を考える思考を身につけることをねらい、事例と対象地域の設定から、個別援助活動とそこから地域全体への活動への発展を考えさせる課題を課した。個人ワークからグループワーク、クラスでの共有過程を通して、学生は具体事例を通して個の問題を地域の課題として捉えなおし働きかけを考える視点について学ぶことが確認できた。 |
| 地域看護活動の展開を考えるグループ学習を積み重ねる教育プログラムの展開 | 2014年<br>2015年<br>2016年 | 前任校において、保健師選抜課程の担当教員と協働し、学生が主体的に保健師の実践能力として必要な知識・スキル・態度を統合して学ぶことを目指す学習展開を考えて実践した。自身が担当する3年次前期配当の「地域看護活動論Ⅲ」では感染症、難病、障害者を対象にした事例を設定し、グループ単位で、事例の課題解決に向けた活動の展開を検討させ発表させた。クラスディスカッションを通して、対象となる個人・家族の理解を深め、さらに個人・家族を単位とした活動から、集団・地域を単位とした活動への発展について学びを深めた。3年次後期配当の「保健看護政策論」「地域保健看護展開論」では、対象地域を事例設定し、地域の健康課題と解決に向けた取り組みについて検討させ発表させた。情報として、複数の個別事例も設定し、類似性から健康課題の背景を探索させることも取り入れた。地域の健康課題解決に向けた取り組みの検討を通じて、住民との協働活動や、他職種との連携のあり方について考える機会を提供できた。 |
| 「相手の立場に立つ」や「生活のしづらさ」を探究する課題学習 | 2014年4～6月<br>2015年4～6月<br>2016年4～6月 | 前任校において、講師として担当の「地域看護活動論Ⅲ」（専門科目、3年次配当、保健師選抜者必修1単位）において、同じ出来事を三人三様に記した3人の日記や、ライフヒストリーを教材として「相手の立場に立つ」ことや「生活のしづらさ」について考える機会をもった。そのうえで、当事者・家族の生活の理解を深めるために自ら問題意識をもってレポートを作成させる課題を課した。課題設定にそってテーマを絞って取り組む学習プロセスや、課題学習によって看護の対象への理解を深める学習支援の機会となることが確認できた。 |
| 視聴覚教材を活用した反転授業の取り入れ | 2014年12月～2015年1月<br>2015年12月～2016年1月 | 前任校において、講師として担当する「保健行動学習論」（専門科目、3年次配当、保健師選抜者必修1単位）において、対象者の行動変容について考える反転授業を取り入れた。保健行動理論について教授する動画と、一方的に保健指導する保健指導場面の動画を作成し、各授業の前に視聴させ、授業の中では、「設定した事例に保健行動理論を適応してみると、どのように理解できるか」を考えたり、対象者の行動変容に結びつく保健指導を計画しロールプレイさせた。ロールプレイでは相手役・観察者からのコメントのほか、学生の指導場面を撮影した動画を活用して振り返り学習を行い、授業を反転させたことで、再チャレンジするまでを授業内で展開することができた。学生は体験を通して、援助者の姿勢や、相手の視点に立って理解することの必要性、相手がもつ問題解決能力を引き出すとはどういうことかを学ぶ機会になった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）つづき | | |
| 住民と協働する健康教育の一連のプロセスを学ぶ実習展開 | 2015年5～6月 | 前任校において、講師として担当の「地域看護学実習」（専門科目、4年次配当、保健師選抜者必修5単位）において、実習地域内の小集団を対象とした健康教育の企画・実施・評価のプロセスを体験する実習プログラムを取り入れた。企画段階から対象集団と話し合う機会を取り入れたことで、住民と協働する健康教育が実現できた。また実施後、健康教育参加者の中で了解の得られた方に家庭訪問を行い、健康教育の評価を行った。一連のプロセスを踏まえて、学生は集団を対象とした健康教育の展開だけでなく、公衆衛生看護活動への理解を深めることが確認できた。 |
| 住民の生活の姿の理解を促す地域看護診断の学内演習 | 2017年4～7月 | 本校の「公衆衛生看護活動展開論」（専門科目、3年次配当、保健師選抜者必修2単位）において、既存資料の分析のみならず、対象地域の生活の一場面を写し取った実際の写真や対象地域の住民へのインタビューを取り入れ、質的な情報の分析も加えてアセスメントに活用していく学内演習プログラムを試行した。学生は、住民の実際の生活を理解したり、地域看護計画を立案する上で、視覚的情報やインタビューによって得られる質的な情報が必要であることを理解することが確認できた。 |
| 教育実践上の主な業績 | | 概　　要 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書<br>行動変容に結びつく保健指導について考えるための視聴覚教材の作成 | 2014年8月 | 対象者の行動変容に結びつく保健指導のあり方を考えるため、糖尿病で定期的な保健指導が必要な対象者への保健指導場面を企画しDVDを作成した。前任校において講師として担当する「保健行動学習論」（専門科目、3年次配当、保健師選抜者必修1単位）や本校の保健師課程科目において、教材として活用した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項<br>日本看護協会認定看護管理者制度ファーストレベル教育講師 | 2012年9月 | 京都府看護協会が実施する日本看護協会認定看護管理者を養成するファーストレベル教育の講師を務めた。ヘルスケア提供システム論「組織の成り立ちと構造」（9時間）を担当し、保健・医療・福祉サービスの提供体制と、その変革に向けて看護管理者に求められることについて講義と学生評価を行った。 |
| 臨床看護師に対する教育・指導法に関する講師 | 2013年11月<br>2014年9月 | 京都大学医学部附属病院看護部が実施する領域別エキスパートナース養成研修の講師を務めた。コーチングを担当し、コーチングに関する理論的な講義だけでなく、実践に向けた演習も取り入れて行った。 |
| 博士学位論文調査専門委員 | 2014年3月<br>2015年1月 | 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の博士学位論文の専門委員を務め、学位授与申請者の諮問に加わった。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| かんたん看護研究 | 共著 | 2012年12月 | 株式会社　南江堂 | 編集：桂敏樹，星野明子　著者：桂敏樹，奥津文子，臼井香苗，滝澤寛子，星野明子，山崎浩司，横田素美，大橋純子，大竹眞裕美（執筆順） | 40～50頁 |
| 論文 | | | | | |
| 退職男性の地域活動グループの育成とグループ活動の変化からみた活動推進要因（査読有） | 共著 | 2013年8月 | 日本健康教育学会誌（第21巻第3号） | 滝澤寛子，若林佳子 | 236頁～244頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（つづき） | | | | | |
| 旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の地域への愛着を測定する尺度の開発（査読有） | 共著 | 2018年1月 | 社会医学研究<br>（第35巻第1号） | 滝澤寛子，櫻井尚子 | 55頁～62頁 |
| 『地域への愛着』を測定する尺度の開発－都市郊外のグループ活動に参加している高齢者における検討－（査読有） | 共著 | 2018年1月 | 社会医学研究<br>（第35巻第1号） | 櫻井尚子，滝澤寛子，渡部月子，星旦二 | 83頁～97頁 |
| Attitudes and values expected of public health nursing students at graduation: A delphi study （a peer-reviewed paper） | 共著 | 2018年3月 | Nurse Education Today<br>(Vol.65) | Mika Okura, Hiroko Takizawa | p.116-122 |
| 平成29年度教育課程委員会事業報告～母子保健活動における技術の体系（中間報告）～（査読無） | 共著 | 2018年5月 | 保健師教育<br>（第2巻第1号） | 大木幸子，桑原ゆみ，下山田鮎美，鈴木美和，滝澤寛子，平野美千代，藤井広美 | 29頁～42頁 |
| その他 | | | | | |
| （ポスター発表）<br>健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス―西日本農村地域の向老期から前期高齢者を対象に－ | 共同 | 2015年1月 | 第3回日本公衆衛生看護学会学術集会（神戸） | 滝澤寛子，櫻井尚子 | |
| （ポスター発表）<br>The process by which participants in health promotion activities form attachments to their communities in Japan | 共同 | 2015年8月 | The 6th international conference on community health nursing research | Hiroko Takizawa， Naoko Sakurai | |
| （ポスター発表）<br>The process by which participants in health promotion activities form attachments to their communities – mountain village – in Japan | 共同 | 2015年8月 | The 6th international conference on community health nursing research | Naoko Sakurai, Hiroko Takizawa | |
| （ポスター発表）<br>Trial of an on-campus teaching method of community diagnosis to reinforce an understanding of people's lifestyles | 共同 | 2018年1月 | The 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences | Shiho Kawata, Hiroko Takizawa, Akemi Mitsui | |
| （研究助成）<br>地域の健康づくり活動と地域への愛着の循環的螺旋構造の探究 | 代表者 | 2015～2018年 | 科学研究費助成事業<br>基盤研究（C） | 滝澤寛子，櫻井尚子 | |
| （研究助成）<br>保健師実践能力を育む体系的教育方略―アクティブ・ラーニングの導入と評価法の開発― | 分担者 | 2014～2016年 | 科学研究費助成事業<br>基盤研究（C） | 大倉美佳，滝澤寛子，松下佳代 | |
| （研究助成）<br>保健師の健康危機管理能力向上のためのICT活用教材と教育プログラムの開発・評価 | 分担者 | 2017～2020年 | 科学研究費助成事業<br>基盤研究（B） | 大倉美佳，滝澤寛子，光井朱美 | |
| （研究助成）<br>超高齢社会における地域づくりを目指す住民組織の持続可能な活動支援指針の開発 | 代表者 | 2019～2022年 | 科学研究費助成事業<br>基盤研究（C） | 滝澤寛子，櫻井尚子 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本糖尿病教育・看護学会専任査読委員 | |
| 全国保健師教育機関協議会 教育課程委員 | |
| 長浜市 男塾 男性の仲間づくり講座 講師 | |
| 長浜市社会福祉協議会<br>浅井福祉の会研修会 講師 | |
| 壱岐市 介護予防事業への助言指導 | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　磯野 洋一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 作業所での体験型学習 | 2011年4月 | 精神障害者の就労支援の場である作業所と連系し、看護学生が精神障害者と共に作業を体験する体験型学習を考案し実施した。結果、看護学生は精神障害者が就労に必要な支援や、リカバリーの視点に気が付くことが出来た。また、学生が精神障害者を助けるではなく、学生自身が助けられる体験を通して、精神障害者の強みを見出していた。 |
| 多角的視点からの面接方法の演習 | 2014年4月 | 患者役・看護師役・観察者役のそれぞれの立場を体験させ、治療者と治療を受ける側両者の思いや感じ方などを多角的に体験することで、看護師の思いだけでなく、患者視点での気づきを得て看護に活かすことが出来ていた。 |
| 当事者研究の発表会への参加 | 2014年4月 | 当事者研究で有名なべてるの家のメンバーが行っている当事者研究の発表会へ学生と共に参加することで、学生は精神症状があってもリカバリーが可能であることを具体的に理解することが出来ていた。また、精神障害者の強みを見出すことが出来ていた。 |
| WRAPを用いた体験型学習 | 2017年6月 | 精神障害者のリカバリー促進プログラムとしてのWRAP（元気回復行動プラン）を、看護学生と精神障害者が共に体験する場を設定することで、看護学生は精神障害者のリカバリーを身近に感じ、精神障害者への偏見の軽減やリカバリーに大切な事柄を具体的に発言することが出来ていた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| パワーポイント資料 | 2011年4月～ | 講義の中でパワーポイントを使用し、視覚的に興味を引き、教科書では不足している点や用語が難しい個所を補う目的で効果的に使用した。 |
| クリティークポイント資料 | 2011年4月～ | 研究に関する講義にて、文献をクリティカルに読み進めるため、学生に受身のみで授業に参加するのではなく、学生自らに先行文献をクリティークさせ、参加型の授業を展開する目的にて先行文献のクリティーク資料とクリティークポイントの資料を提示した。 |
| 事例資料 | 2011年4月～ | 講義と演習において、現象を理論・概念を用いて理解するため、事例資料を作成し、授業で出てくる理論や概念を、グループあるいは学生個々で事例展開することで、現象を論理的にかつクリティカルに捉えることができることを目的に効果的に使用した。 |
| DVD教材 | 2011年4月～ | 講義と演習において、地域での精神保健看護では、地域で実践されている最新のプログラム等を視聴覚教材として作成し、視聴覚的に学生に講義した。 |
| OSCEのシナリオ・評価基準の作成 | 2011年4月～ | OSCE課題・シナリオ・SP用マニュアル・評価表の作成、臨床との調整、運営、評価者、模擬患者役を行った。具体的には「精神科病棟での危険物チェック方法」「うつ病患者への対応」「身体拘束患者への看護」「操作的患者への看護」などの課題やシナリオを作成した。 |
| 精神科面接シナリオ教材 | 2014年4月～ | 精神科看護面接のロールプレイ用のシナリオと手順教材を作成した。詳細は、講義で用いる「精神科看護面接の場面や方法などの資料（テキスト）」、演習で使用する「患者役・看護師役・面接の観察者役の演習課題とシナリオなどの台本」を作成し、講義と演習（カウンセリング室使用）にて活用した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 研究会を継続開催。学生と新人がベテラン看護師の声を聞けるチャンスを作る | 単著 | 2015年8月 | 医学書院・精神看護（第18巻第5号） | | 460頁～463頁 |
| 論文 | | | | | |
| 精神科病院における患者の性的な問題に関する研究件数の推移-国内の文献による文献検討－ | 共著 | 216年3月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第7巻第2号） | 磯野洋一、篠原百合子、小野坂益成 | 191頁～197頁 |
| 看護教育におけるセクシュアリティへの配慮 | 共著 | 216年3月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第7巻第2号） | 篠原百合子、磯野洋一、小野坂益成、五十嵐愛子、丸山昭子、久保正子、藤川君江 | 146頁～150頁 |
| “ひきこもり”の質問相談サイト投稿についての一考察 | 共著 | 216年3月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第7巻第2号） | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一、田原直久、久保正子 | 216頁～221頁 |
| アルコール依存症者A氏が体験している精神内界－退院後に書いた詩歌の分析より－ | 共著 | 216年3月 | 松蔭大学看護学部紀要（創刊号） | 磯野洋一、小野坂益成 | 93頁～100頁 |
| “社会的ひきこもり”の日本国内の医療へ の関わりに関する文献検討－文献件数の推移からの一考察－ | 共著 | 216年7月 | 日本「祈りと救いとこころ」学会誌（第2巻1号） | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一、久保正子 | 117頁～125頁 |
| 精神科訪問看護利用者とその家族のストレングスに関する研究　―精神科訪問看護師の視座より― | 単著 | 2016年8月 | 学校法人日本赤十字学園教育・研究及び奨学金基金報告書 | | 40頁～53頁 |
| 性依存症へのWRAPの可能性の分析-日本国内の文献による検討- | 共著 | 2017年2月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第8巻2号） | 磯野洋一、篠原百合子、小野坂益成 | 160頁～167頁 |
| 性嗜好異常者再犯防止プログラムに関する文献研究 | 共著 | 2017年2月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第8巻2号） | 篠原百合子、蛭川万里菜、磯野洋一、久保正子、五十嵐愛子、小野坂益成、鶴淵礼子 | 148頁～153頁 |
| “社会的ひきこもり”の家族が行う質問・相談サイト投稿についての一考察 | 共著 | 2017年2月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第8巻2号） | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一、田原直久、鶴淵礼子 | 181頁～187頁 |
| 精神科に長期入院している患者が外泊をすすめられてから外泊に至るまでの家族の心情 | 共著 | 2017年3月 | 看護・保健科学研究誌（第17巻1号） | 松下城司、磯野洋一 | 56頁～64頁 |
| 家族内における感情労働の文献検討－国内文献からの一考察－ | 共著 | 2018年3月 | 日本「性とこころ」関連問題学会誌（第9巻1号） | 小野坂益成、橋本祐、丸山昭子、野村智美、篠原百合子、磯野洋一 | 199頁～203頁 |
| その他 | | | | | |
| （学会発表）精神科病棟における患者の性的な問題に関する国内の研究の動向 | 共同 | 2015年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会第7回学術研究大会 | 磯野洋一、篠原百合子、小野坂益成 | |
| セクシュアリテイと看護教育 | 共同 | 2015年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会第7回学術研究大会 | 篠原百合子、磯野洋一、小野坂益成、五十嵐愛子、丸山昭子、藤川君江、原政世 | |
| “ひきこもり”のWeb上質問・相談サイト投稿についての考察 | 共同 | 2015年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会第7回学術研究大会 | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一 | |
| 精神科病棟で行動制限が行われている任意入院患者への精神科看護師の対応 | 共同 | 2015年6月 | 第16回日本赤十字看護学会学術集会 | 磯野洋一、笹本美佐 | |
| 精神科慢性期病棟に入院中の患者が外泊を告知されてから外泊に至るまでの家族の心情 | 共同 | 2015年6月 | 第25回日本精神保健看護学会学術集会・総会 | 松下城司、吉田勝彦、磯野洋一 | |
| アルコール依存症の妻に関する研究の動向 | 単独 | 2015年9月 | 第14回日本アディクション看護学会学術集会・総会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 服薬心理・意識の文献検討 | 共同 | 2015年9月 | 第14回<br>日本アディクション看護学会<br>学術集会・総会 | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一 | |
| 性依存症へのWRAPの可能性の分析<br>-日本国内の文献による検討- | 共同 | 2016年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会<br>第8回学術研究大会 | 磯野洋一、篠原百合子、小野坂益成 | |
| 性嗜好異常者再犯防止プログラムに関する文献研究 | 共同 | 2016年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会<br>第8回学術研究大会 | 篠原百合子、磯野洋一、久保正子、五十嵐愛子、小野坂益成 | |
| “社会的ひきこもり”の家族が行う質問・相談サイト投稿についての一考察 | 共同 | 2016年6月 | 日本「性とこころ」関連問題学会<br>第8回学術研究大会 | 小野坂益成、篠原百合子、磯野洋一、湯舟邦子 | |
| 精神科病院において退院支援を多職種チームで行うことによる連携に及ぼす影響 | 共同 | 2016年7月 | 第26回日本精神保健看護学会<br>学術集会・総会 | 笹本美佐、磯野洋一 | |
| 任意入院で行動制限が行われている患者の家族への精神科看護師の役割 | 共同 | 2016年12月 | 第36回日本看護科学学会<br>学術集会 | 磯野洋一、笹本美佐 | |
| 精神科病棟における看護師の患者アドボカシーを実践する上での困難さ | 共同 | 2016年12月 | 第36回日本看護科学学会<br>学術集会 | 戸田由美子、磯野洋一、梶川拓馬 | |
| 注射針穿刺時の恐怖に対する眼球運動課題による軽減効果の可能性:パイロットスタディ | 共同 | 2017年10月 | 第5回看護理工学会学術集会 | 向畑毅、磯野洋一 | |
| アルコール依存症の夫の回復過程における妻のストレングスの機能と構造 | 単独 | 2018年12月 | 第22回日本精神保健・予防学会<br>学術集会 | | |
| (ワークショップ)<br>ワークショップ　表情看護(その3)表情と他の非言語的行動との関連と事例) | | 2016年7月 | 日本精神保健看護学会<br>第26回学術集会 | | |
| 交流集会　WRAP(元気回復行動プラン)体験クラス<br>WRAPの実際とアディクション看護への可能性 | | 2016年9月 | 日本アディクション看護学会<br>第15回学術集会・総会 | | |
| ワークショップ　表情看護(その4)表情と実践の統合企画・運営 | | 2017年6月 | 日本精神保健看護学会<br>第27回学術集会 | | |
| 交流集会　WRAP体験クラス「アディクションとWRAP」 | | 2017年9月 | 日本アディクション看護学会<br>第16回学術集会・総会 | | |
| (査読)<br>関西看護医療大学紀要査読員 | | 2018年9月 | 関西看護医療大学 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本アディクション看護学会 | 広報委員(2017年9月まで) |
| 日本アディクション看護学会 | 企画委員(2019年4月より) |
| 日本アディクション看護学会 | 日本アディクション看護学会第14回学術集会・総会実行委員(2015年9月まで) |
| 日本看護科学学会学 | 第35回日本看護科学学会学術集会編集委員・実行委員(2016年3月まで) |
| 日本アディクション看護学会 | 日本アディクション看護学会第15回学術集会・総会実行委員(2016年9月まで) |
| 日本家族看護学会 | 日本家族看護学会第25回学術集会実行委員(2018年9月まで) |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　上野　千代子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「看護体験実習」における指導の工夫 | 2015年8月～<br>現在に至る | 看護学の基礎専門科目となる「看護体験実習」において、看護職が様々な場面を通して人々の健康を支えている実際の看護活動を知り、看護学の魅力を発見して今後の学習の基礎とすることを目的に指導をした。<br>早期体験実習として、学生の興味関心や素朴な発見や疑問を言語化しながら、看護学生として、今の自分を見つめる自己覚知につながり、個々の学習目標につなげることができた。 |
| 「実践基礎看護学実習」における指導の工夫 | 2016年3月～<br>現在に至る | 看護学生として初めて療養の場で看護の対象者のニードを把握し、看護過程の思考プロセスを初めて実践する過程を学ぶことを目的に指導をした。<br>受持ち療養者の理解が深められるよう、基本となる疾患と症状、治療計画、ライフサイクル、社会的背景をし主軸に指導した。学内日では学生個々の学習課題を整理し、図書館等で一緒に参考資料や文献の探し方ながら看護援助の根拠を確認しながら指導し、具体的な看護援助計画につなげることができた。 |
| 在宅療養者の生活援助を考える課題の工夫 | 2017年4月～<br>現在に至る | 「在宅看護学援助論演習」において、在宅看護過程の展開を考える思考を身に着けることをねらいとし、脳血管障害の事例に基づき、在宅療養者本人の願いや健康上の課題の見極め、家族介護の現状等から、個別性を捉えて解決方法を考えさせる課題を課した。学生は病状を緩和するだけではなく、療養者の望む生活や地域生活を支える様々な看護の形があることを考えることができた。 |
| 看護研究の指導法の工夫 | 2018年4月～<br>現在に至る | 本演習では、学生の問題意識を研究テーマとして発展させ、看護専門職に必要とされる研究能力と科学的探究心を養う科目である。先ずは、グループディスカッション等で学生同士、お互いに刺激しながら問題意識を整理していった。さらに、基本的な文献検索方法を通して、丁寧にクリティークしながら研究テーマを絞りながら研究計画書、研究論文、成果発表ができるよう指導を進め、卒業にむけて学生個々の研究課題について深めることができた。 |
| 在宅看護学実習における地域包括ケアシステムの理解への工夫 | 2018年5月～<br>現在に至る | 「在宅看護学実習」において、訪問看護に同行する体験を通して、リアルな在宅療養者の生活や、その生活を支える家族の関係性や役割について理解を深められるよう指導した。また、独居世帯においては、訪問看護師が地域連携の鍵となる役割を担うケースや社会資源を活用しながら生活を支援していく一連の在宅看護過程のプロセスを臨床指導者と連携を図り、地域連携会議やケース会議などに参加させて頂きながら、地域包括ケアへの関心を高める工夫をおこなった。 |
| 病院から退院した在宅移行期の療養者とその家族の理解への工夫 | 2018年9月～<br>現在に至る | 「在宅看護学援助論演習」において、病院から自宅に戻る在宅看護における重要な時期である在宅移行期の医療機器管理支援について、DVD教材を併用した演習を展開した。前年度の在宅看護学実習で多くの学生が経験させて頂きた胃瘻を増設した療養者の事例を選択した。初回訪問、アセスメント、医療的ケア、家族支援など、一連の訪問看護場面を通して、身体的、心理的、社会的な課題について理解を深めることができた。演習後の振り返りシートでは、次年度の在宅看護実習に向けて学生個々の学習課題とモチベーションを高めることにつなげることができた。 |
| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義資料の作成 | 2017年9月～<br>現在に至る | 担当する講義、演習科目の講義資料、テキスト補足教材を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 高齢糖尿病患者の生活行動に影響を及ぼすフットケア行動プロセス（査読付） | 共著 | 2015年3月 | 京都学園大学　健康医療学部紀要 第1巻　2015年 | 上野千代子、渡部洋子 | p.57-64 |
| フットケア外来を5年継続している高齢糖尿病患者のフットケア行動プロセス ―受診継続年数に見る阻害要因― （査読付） | 共著 | 2018年3月 | 第48回（平成29年度）日本看護学会論文集　慢性期看護（2018） | 上野千代子、渡部洋子 | p.131－134 |
| 高齢者糖尿病におけるフットケアに関する実態調査の動向：国内文献検討（査読付） | 共著 | 2019年3月 | 第49回（平成30年度）日本看護学会論文集　慢性期看護（2019） | 上野千代子、渡部洋子、柴裕子 | p.211－214 |
| その他 | | | | | |
| （学会発表）在宅高齢糖尿病患者のフットケアニーズに関する研究 | 共同 | 2016年7月 | 第47回（平成28年度）日本看護学会在宅看護 | 上野千代子、渡部洋子 | p.189 |
| （学会発表）フットケア外来を5年継続している高齢糖尿病患者のフットケア行動プロセス | 共同 | 2017年8月 | 第48回（平成29年度）日本看護学会慢性期看護 | 上野千代子、渡部洋子 | p.349 |
| （学会発表）高齢者糖尿病患者におけるフットケアに関する実態調査の動向：国内文献検討 | 共同 | 2018年9月 | 第49回（平成30年度）日本看護学会慢性期看護 | 上野千代子、渡部洋子 | p158 |
| （学会発表）大腿骨・股関節手術患者の退院調整の動向 | 共同 | 2018年9月 | 第49回（平成30年度）日本看護学会慢性期看護 | 柴裕子、上野千代子 | p129 |
| （研究助成）在宅療養支援所における高齢糖尿病患者のフットケアシステム構築のための研究 | 代表者 | 2017年4月～ | 平成29年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金:基礎研究C） | 上野千代子、渡部洋子 | |
| （研究助成）緑茶消臭機能つき掌握安楽ビーズクッションの有効性の研究 | 分担者 | 2017年5月～ | 公益財団法人　在宅医療助成　勇美記念財団 | 渡部洋子、福岡裕美子、駒井裕子、滝沢美智子、上野千代子 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1994年4月～ | 日本看護協会会員（現在に至る） |
| 2000年4月～ | 日本社会福祉学会会員（現在に至る） |
| 2005年4月～ | 日本フットケア学会会員（現在に至る） |
| 2006年4月～ | 日本ケアマネジメント学会会員（現在に至る） |
| 2007年4月～ | 日本社会福祉教育学会会員（現在に至る） |
| 2011年4月～ | 日本看護研究学会会員（現在に至る） |
| 2011年4月～ | 日本看護科学学会会員（現在に至る） |
| 2011年4月～ | 日本看護学教育学会会員（現在に至る） |
| 2015年8月～ | 日本在宅看護学学会（現在に至る） |
| 社会貢献 | |
| 2006年 5月～ | 糖尿病専門クリニックにおけるフットケア外来開設から患者指導と職員へのフットケア技術指導（現在に至る） |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

2016年7月から京都市右京区町づくり支援事業「右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”」での活動で子育て支援事業

2017年度　公益法人　在宅医療助成　勇美記念財団「看取り」の経験を語る　～　やさしい在宅医療講座　看取りの経験を語る　～

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　杉島　優子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 教材の工夫（レジュメ作成および練習問題を作成し解答させるなどの工夫。） | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。<br>日常の授業において、効果的な授業を行うためにレジュメを毎回作成し、学生の理解を促した。例えば「ノートの取り方」と題して、ノートを取るときのポイント、具体的なノート取り方を示した。出来るだけわかりやすくするために、ノートの選び方やわかりやすいノートをとる為の工夫をレジュメに載せた。次に「文章の要約の仕方」を教えるにあたり、要約とはなにか、要約のプロセスを示した。特に練習問題をつくり、要約を実際に体験させたあとで、発表してもらいグループの中で共有した。その後、模範解答を示し各自が書いた解答と比較させた。講義をした後に、練習問題を実際にさせたことで、より理解は深まった。<br>レポートの書き方として、「序論」「本文」「結論」の構成を示し、具体的に何をどのように書くかを示した。「はじめに」から「おわりに」また、引用文献・参考文献の書き方まで、詳細に示した。常にそれに立ち戻ればレポートが書けるというようなレジュメを作成することで、要点が理解しやすくなったのではないかと考える。学期の終盤でレポートを書かせたが、全員書くことができた。 |
| 学生の考えを引き出し、集団で考えさせる工夫 | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。 例えば、「作文とレポートと違い」についての授業のところで、作文とレポートの違いについて、学生にまず考えさせ、学生から出てきた意見を板書し、それぞれの違いについて解説を加えて説明を行った。学生の意見を板書することで、自分たちが発言したことが、授業の中で教材として活かされることで、学生も感心を持って学び学生の理解が深まった。このようにできるだけ、一方的な授業にならないように、できるだけ学生に思考させ、授業に参加できるようなしくみを意識的に作った。そして、同じ学生の意見から学ぶことで、学習への動機づけに繋がるよう配慮した。 |
| デスカッションを促す工夫 | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。 集団で医療を行っていくことが求められる看護職には議論する力が必要である。そのために担当科目の「スタートアップゼミA」ゼミのなかで、デスカッションを体験させた。その際、教材として「横浜市立大　患者取り違え事故」の新聞記事を材題に示した。司会・書記・タイムキパーを決め、デスカッションを行ったが、学生の関心のあるテーマに合致したため、非常に活発に討議できた。この際、討議はさせっぱなしにするのではなく、お互いの役割がどうであったか、あるいは討議についてどう感じたが、討議のなかで学んだことを共有させた。高校生活の中でも、あまり機会がないようで、学生からも「人の意見を聞くことで自分の考えも深まった」など、好評で討議することの基礎を身につけさせることができた。 |
| ・視聴覚教材（ワード・エクセル等PC）を活用しての工夫 | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。 担当科目の「スタートアップゼミA」ゼミのなかで、レポート作成を教授する際に、初めて、ワード機能を使ってレポートを書く学生が見られた。ページ設定の基礎から、PCを使って教授した。また表やグラフをレポートに取り入れる方法を知らない学生が多かったので、エクセルで表やグラフ作成の仕方を教授し、それをワードに貼り付ける方法を教えた。そのことにより、全ての学生がレポート作成に取り入れることができた。 |
| 視聴覚教材（パワーポイント）を活用しての工夫 | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。看護師・保健師になる学生にとって、将来パワーポイントを用いてプレゼンテーションをする場面が求められる場合もある。そこで、学生時代に、担当科目の「スタートアップゼミA」ゼミのなかで、学生にパワーポイントを用いてプレゼンテーション能力を身につけることを意識した。教員がパワーポイントを用いて授業を行い、そのなかで、パワーポイントの作成の仕方を基本から教授した。少人数制の利点を活かし、一人一人について、出来るまで指導した。その結果、学生たちは授業の最終日にパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うことができた。 |
| 文献検索の具体的な指導を行い、どの学生にも情報収集ができる力をつけられるような工夫 | 2015年4月～現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」（1年次前期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。文献検索の方法について、講義を行った後に、実際に図書室に学生を集め、実際にCiNii、医中誌等の調べ方をPCを使いやって見せ、その場で学生一人一人にも実際に検索を行わせた。課題として、次回までに自分で論文などの文献をCiNiiなどから検索して手に入れたものを提出させた。実際にやることで、学生はその後のレポート作成の際に、自分の関心のある文献や情報を入手できるようになった。 |

| 1　教育内容・方法の工夫(続き) | | |
|---|---|---|
| 看護体験実習の指導の工夫 | 2014年8月～<br>2017年8月 | 京都学園大学の専任教員として担当の「看護体験実習」において以下のように行った。 看護体験実習の際に、複数の目標の中でも、特に、看護師の看護活動の実際を学生たちが、見学できるように配慮し、見学後に意味の確認を指導者とともに行った。また、患者の思いを学生たちが聞けるように指導者とともに患者設定を考えるなど、指導者の相談にも乗りながら、学生の実習が実り多いものになるよう心掛けた。態度面にも、厳しく注意しながら指導を行った。その結果、学生たちは全員が大変良い学びを得、今後の学内での学習面を深めたいという決意に繋がり、目標を達成することができた。 |
| 学生による授業評価の活用 | 2015年～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA」(1年次前期配当、半期、必修2単位)において以下のように行った。ゼミなので回答の人数は少ないが、学生の評価を次の授業に活かせるよう意識した。自由記述欄に「普段できないことができてとてもためになった」「高校の時に比べて積極的に授業にさんかできるようになった」「レポートの書き方や文献の探し方が学べて良かった」という意見もあった。しかし、「グループワークをする時間がもう少しほしい」という意見もあり、、教授する時間を多くとりすぎたともいえるので次学期に反映させようと考えている。 |
| 教材の工夫(レジュメ作成および練習問題を作成し解答させるなどの工夫。) | 2015年9月～<br>2016年3月 | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミB」(1年次後期配当、半期、必修2単位)において以下のように行った。<br>日常の授業において、効果的な授業を行うためにレジュメを毎回作成し、学生の理解を促した。学生の方から、希望があったので、「勉強の仕方及び時間管理を意識した計画の立て方」について、レジュメを作って講義を行った。例えば勉強の仕方についての中では、「ノートの取り方」と題して、ノートを取るときのポイント、具体的なノートの取り方を示した。出来るだけわかりやすくするために、ノートの選び方やわかりやすいノートをとる為の工夫をレジュメに載せた。それぞれの教科がどう結びついているのかが、わかりにくいようなので、レジュメの中に、クイズ形式で問題を出して学生に考えさせるように意識した。例えば、①呼吸の苦しい患者さんがおられます。さて、どんなんな姿勢を促すと、患者さんは楽になられるでしょうか等。学生に考えて答えてもらうことで、解剖と看護援助が結びつき、教科のつながりを理解してもらうことができた。また、一方的にこちらが、教授するのではなく、学生も一緒に参加することで、授業の中で活気がみられた。<br>次に「文章の要約の仕方」を教えるにあたり、要約とはなにか、要約のプロセスを示した。特に練習問題をつくり、要約を実際に体験させたあとで、発表してもらいグループの中で共有した。その後、模範解答を示し各自が書いた解答と比較させた。講義をした後に、練習問題を実際にさせたことで、より理解は深まった。<br>レポートの書き方として、「序論」「本文」「結論」の構成を示し、具体的に何をどのように書くかを示した。「はじめに」から「おわりに」また、引用文献・参考文献の書き方まで、詳細に示した。常にそれに立ち戻ればレポートが書けるというようなレジュメを作成することで、要点が理解しやすくなったのではないかと考える。学期の終盤でレポートを書かせたが、全員書くことができた。 |
| 学生に主体的に考えさせることを目的に、学生同士でディスカッションさせ、グループの中での一つの意見を導かせる工夫 | 2015年9月～<br>2016年3月 | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミB」(1年次後期配当、半期、必修2単位)において以下のように行った。<br>スタゼミBでは、グループで一つの方向性を決めてレポートを書き、発表することでお互いに学び合う。そのために、このグループでは共通の方向性に絞るために、テーマの方向性を話し合った。<br>司会、書記、タイムキーパーを決めて、司会の進行のもと、意見を募った。最初は戸惑っていた学生も、少し助言を入れることで、徐々に発言をしはじめた。また書記に黒板を使って、各自の発言を記載してもらうことにより、皆の発言が視覚的に捉えることができ、議論が深まってい行った。最初は方向性がバラバラであったが、このデスカッションを通じて、お互いの意見について各自の意見を活発に述べ、学生たちで最終的に「一年以内の医療問題」という共通の方向性を導き出した。この方向性に沿って、各自が関心のある医療問題について具体的なテーマをそれぞれが考え、レポートを書き、発表し合うということになった。教員がテーマの方向性や、テーマそのものを提示する方法もあるが、スタートアップBであり、Aを既に履修している学生という意味では、学生たちが主体的に議論をし決めたことなので、その後のやる気にも反映し効果的であったといえる。 |

| | | |
|---|---|---|
| 視聴覚教材（ワード・エクセル等PC）を活用しての工夫 | 2015年9月～<br>2016年3月 | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミB」（1年次後期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。<br>前期の「スタートアップゼミA」を既に全員が終了していたので、ワード機能は全員が使えた。しかし、エクセルの使用については前期のグループメンバーと全員違っているので、使用したことのある学生とそうでない学生と様々であった。そこで、PCを使って全員に教授した。また表やグラフをレポートに取り入れる方法を知らない学生が多かったので、エクセルで表やグラフ作成の仕方を教授し、それをワードに貼り付ける方法を教えた。そのことにより、全ての学生がレポート作成に取り入れることができた。 |
| 視聴覚教材（パワーポイント）を活用しての工夫 | 2015年9月～<br>2016年3月 | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミB」（1年次後期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。<br>看護師・保健師になる学生にとって、将来パワーポイントを用いてプレゼンテーションをする場面が求められる場合もある。そこで、学生時代に、担当科目の「スタートアップゼミB」ゼミのなかで、学生にパワーポイントを用いてプレゼンテーション能力を身につけることを意識した。教員がパワーポイントを用いて授業を行い、そのなかで、パワーポイントの作成の仕方を基本から教授した。<br>パワーポイントはスタゼミBで初めて作成する学生も結構いたので、パワーポイントの作成方法の基本から丁寧に説明し、苦手学生には、個別に指導を行った。少人数制の利点を活かし、一人一人について、出来るまで指導した。その結果、学生たちは全員授業の最終日にパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行うことができた。 |
| 基礎看護領域の演習「清潔援助の実際：全身清拭・足浴」での指導の工夫 | 2015年10月 | 京都学園大学の基礎看護領域の演習「清潔援助の実際：全身積式・足浴」を担当した。事前に学生が書いてきた演習計画を点検し、演習の場で個別に指導を行った。<br>工夫した点としては、清潔の援助には、患者の安全の確保が重要なので、お湯の温度の調整や清拭時の転落防止など安全に対する配慮ができたているかを細かくチェックした。また効果的な清拭を行うために必要物品がすべて揃っているか、物品の置く位置一つでも変わってくるので、作業導線を意識して配置するように指導を行った。また、清拭時には中枢から抹消へ、患者の関節を支える時には、必ず下から等、基本的なことが行えているかを確認した。<br>また、羞恥心を伴う援助なので、プライバシーの保護に努め、声掛けを行いながら行うなど、細かい気配りができるよう指導した。1年生ということもあり、早く行うのではなく、まず正確に基本を正しく修得できるよう意識して指導を行った。<br>演習終了後、個別に演習の振り返りを行ったレポートを提出するので、そこに演習中気になった点を書き加え、学生の記述で気になる個所は、全て添削して返却した。その結果、学生から「間違って覚えていたり、理解が違っていた点が良く分かった」との反応がみられた。 |
| 実践基礎看護学実習における指導の工夫 | 2016年2月～<br>2017年3月 | 京都学園大学の専任教員として「実践基礎看護学実習」において以下のように指導を行った。実践基礎看護学実習は、2回生が初めて看護過程展開を行う実習である。1回生の実習から時間があいていることもあり、患者さんとコミュニケーションをとることも困難な学生もおり、学生ができるだけ患者さんと良い関係が保立てるよう支援を行った。また看護過程展開の一つ一つが、実践できるよう、日々進み具合を確認し、学生がそのプロセスを悩みながらも、実践できる様サポートを行った。結果としてグループの全員が、一連の看護過程の展開を実践でき、多くの学びを得ることができた。また、学生たちは実習を通して、自己の課題を明確にすることもでき、とても有意義な実習になった。 |
| 学生の授業への反応を詳細に理解するための工夫 | 2016年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミA・」（1年次前期配当、半期、必修2単位）並びに、京都学園大学の専任教員として担当の「スタートアップゼミB」（1年次後期配当、半期、必修2単位）において以下のように行った。　授業終了時に適宜、コミュニケーションペーパーを配り、授業に対する意見、感想、質問等を記入してもらった。書かれた内容は次回の授業の始まりに、受講生全員に対し報告し、学びなどを共有するように努めた。同様に、一人一人の質問に対し、全体に答えることを意識的に行い、全員が理解できるよう努めた。学生の意見を聞くことで、一方的な展開にならず、次回の授業に活かすことができた。 |

| | | |
|---|---|---|
| 高齢者生活体験実習における指導の工夫 | 2017年9月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として「高齢者生活体験実習」において以下のように指導を行った。高齢者生活体験実習は、2回生が初めて施設で暮らす利用者と関わる実習である。1回生の実習では、少ししか患者さんと関われなかった学生も多く、コミュニケーションをとることも困難な学生が多い。そこで、学生ができるだけ利用者さんと積極的に関われ良い関係が保てるよう心掛けた。学生を見守りながら、困っている時にサポートするようにした。疾患中心ではなく、利用者の生活に着目させ、看護師・介護士がどのような日常生活援助を行っているのかを意識的に学べるように配慮した。またできるだけたくさんの利用者さんと関われるようにすることで、高齢者には長い人生の歴史があり、同じ高齢者であっても、多様性と個別性があることを学んでいた。一人一人にどんな支援をしたらよいのかを考える良い機会になり、とても有意義な実習になった。 |
| 学生の体験を通した学びの工夫 | 2017年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として、「高齢者援助論演習」を担当した。 3回生の学生が対象であり、3回生は秋から臨床実習が始まり「高齢者看護学実習」も控えている。そこで、若い学生たちに授業の中で高齢者模擬体験を実施した。具体的には、複数の重りのついたベストを装着してもらったり、、ゴーグルやイヤーカフを使用し、視力障害や難聴の状態を体験してもらった。またこの状態で、杖歩行や畳からの起き上がりなどをも体験してもらった。体験を通し、学生は、高齢者が若い学生に比べ、いかに歩きにくく、見えにくく聞こえにくい状態なのかということを実感することができた。生活の不自由さを感じるとともに、事故などのリスクが起こりやすいことも理解できた。また身体面だけでなく、身体面の不自由さが及ぼす精神面への影響にも気づくことができた。授業の中では、個人の学びを集団としして共有することを、意識的行った。グループでまとめをを行った後、クラスの中で発表し合ったが、一人だけでは気づかない視点に気付くなど、互いに学び合うことができた。 |
| 高齢者援助論演習「看護過程演習」での指導の工夫 | 2017年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として、「高齢者援助論演習」を担当した。 3回生の学生が対象であり、3回生は秋から老年看護学領域における臨床実習が始まり「高齢者看護学実習」も控えている。その前に学内の演習の中で、「看護過程」を理解できる様に以下の工夫を行った。高齢者に多い「大腿骨頸部骨折」の事例を作成し、学生に情報の収集・分類整理から計画立案までを指導し、実際に学生達が計画まで立案した。2回生まではヘンダーソンを使用していた学生に、ゴードンの分析の仕方を、できるだけ事例を活用しながら具体的に指導をするように心がけた。1年目は演習の初日に事例を配布したため、終わりの方の時間が不足してしまった。今年は授業の1週間前から事例に取り組ませ、できるだけ授業の中で疑問点を解決するように意識して指導を行った。学生が取り組んだペーパーペーシャントに対しては添削し、実習に繋がことを意識した指導を行った。 |
| 高齢者看護学実習における指導の工夫 | 2017年9月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として「高齢者看護学実習」において以下のように指導を行った。高齢者看護学実習は、3回生の領域実習である。学生は看護過程の「情報収集・分類整理」「情報の分析・解釈」など、一つ一つ戸惑い悩むこともあったが、事前学習を意識して行わせ、その上で、カルテから丁寧に情報集すること、また患者さんのところにできるだけ足を運びながら患者さんの全体像を掴むことの重要性を指導していった。記録は、できるだけ丁寧に見てコメントするよう心掛けた。3週間の関わりを通して学生は少しずつ自信を持った関わりができるようになった。学生にも個性があり、患者とのかかわりに対し、得意・不得意と違いはあったが学生の性格等を考慮しつつ指導するよう心掛けた。そして常に高齢者に対し尊敬の念を学生が持てるよう意識して指導を行った。 |
| 学生の体験を通した学びの工夫 | 2018年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として、「キャリアサポート実践講座A」を担当した。 4回生の学生が対象であり、今までの学修してきたことを活かし、教員の指導を得ながら下級生に指導を行う科目である。まず、学生には老年領域の演習の目的・目標を理解するよう指導した。また学生が主体的にグループで指導計画を立案できるように、グループとしての計画を考えて貰い、指導計画を提出してもらい助言を行った。グループとしてはとても協力的で細かい計画を立てて、演習当日も協力して後輩の指導に当たることができた。指導の評価の一つとしてアンケートの方法もあることを説明した。その後に4回生は、協力してアンケートを作成し、演習後に後輩にアンケートを取り、グループとして振り返りを行った。4回生は今回の体験を通して、指導のやりがいや難しさ等数多くのことを学んでいた。今回の演習の中ではまず4回生のメンバーが事前に十分話し合い、協力しながら進めるよう意識して指導してきたが、グループとしての対人関係スキルも学べていた。 |

| | | |
|---|---|---|
| 看護研究演習における指導の工夫 | 2018年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学の専任教員として、「看護研究演習」を担当した。 4回生の学生が対象であり、3回生で学んだ「看護研究」と基盤とし、既習の諸学を通して得た知識や臨地実習でも経験を用いて、自己の看護研究テーマを明確にさせた上で、研究能力と科学的探究心を養う科目である。具体的な指導の工夫としては、できるだけ学生に自分の研究課題を見い出せるよう考えさせ、その上で文献を丁寧にクリティークするように指導した。それを踏まえて学生が困っている点を指導した。前期は看護計画立案までが課題であるが、期限を守れるよう時間管理を意識して指導した。その結果全員期日までに提出できた。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| FD研修会 | 2015年7月21日 | 「キャンパス・ハラスメント対応上の課題～特に、パワハラ、アカハラを中心として～」研修会を受講 |
| 日本私立看護系大学協会　大学新任教員のための研修会2015 | 2015年8月2日 | ①大学の今日的課題と看護人材の養成<br>②私立大学とはなにか<br>③大学の教員になるということ<br>以上の講演を受講した。 |
| 2015年度新任教員FD合同研修≪プログラムA≫ | 2015年9月6日 | ①授業デザインのための基礎知識・ワークショップ<br>②学習支援・特別支援のための基礎知識・ワークショップを<br>受講した。 |
| レールダル　メディカルジャパン研修会 | 2015年9月24日 | シミュレーターを使った医療者・医療系の教育者向けの研修を受講した。 |
| 日本看護研究学会近畿・北陸地方会第21回<br>看護研究継続セミナー | 2015年10月24日 | 山本恭子先生の「量的研究からみた手洗いの除菌効果の検証」をはじめ、量的研究と質的研究の違いや、EBMに基づく研究の重要性について具体的な例を示された講義を受講した。 |
| 日本看護研究学会近畿・北陸地方会第22回<br>看護研究継続セミナー | 2015年12月19日 | 看護研究に使える統計知識や、看護研究の方法論についての講義を受講した。 |
| 2015年度新任教員FD合同研修≪プログラムB≫ | 2016年月12.13日 | ①大学コンソーシアムの京都の事業概要<br>②成績評価のワークショップ<br>③授業設計について<br>④授業案作成<br>⑤マイクロティーチングの実施<br>以上の講演を受講した。 |
| FD研修会 | 2016年7月20日 | 「大学におけるアクティブラーニングの実践について」を受講。 |
| FD研修会 | 2016年9月21日 | 「事例報告―良い授業を創るために授業の中で工夫していること」を受講。 |
| FD研修会 | 2017年1月25日 | 「教職員のためのメンタルヘルス」を受講。 |
| FD研修会 | 2017年2月8日 | 「現在の学生の能力を発揮させるコーチング」を受講。 |
| FD研修会 | 2017年4月26日 | 「公的研究費の運営・管理に関する取り組みについて」「科研費の使用方法について及び科研費使用における注意事項について」を受講。 |
| FD研修会 | 2017年7月21日 | 「大人数の講義型授業で学生を授業に巻き込むための工夫」を受講。 |
| FD研修会 | 2017年11月29日 | 「シラバス作成法」を受講。 |
| FD研修会 | 2018年7月16日 | 「教えることの基本となるもの」を受講。 |
| FD研修会 | 2018年8月23日 | 「電子書籍のﾀﾞｳﾝﾛｰﾄﾞの方法」を受講。 |
| FD研修会 | 2018年11月7日 | 「医学・疫学的立場からの統計学」を受講。 |
| FD研修会 | 2018年12月25日 | 「現在の学生の能力を発揮させるコーチング」を受講。 |
| 「学会活動」<br>昭和59年 4月 日本看護協会会員（現在に至る）<br>平成23年 4月 日本看護研究学会会員（現在に至る）<br>平成24年 7月 日本精神保健社会学会会員（現在に至る）<br>平成25年 3月 日本保健医療社会学会会員（現在に至る）<br>平成25年 5月 日本看護管理学会会員（現在に至る） | | |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| （著書） | | | | | |
| | | | | | |
| （論文） | | | | | |
| 利用者・家族から捉える介護保険制度の実際<br>（査読付） | 共著 | 2013年10月 | 『日本精神保健社会学会・メンタルヘルスの社会学』<br>Vol.19 | 杉島優子・沖野良枝 | p.50～p.56 |
| 日本における胃瘻の変容――高齢者への広がりと揺らぎに焦点をあてて<br>（修士論文）<br>（査読付） | 単著 | 2014年3月 | 立命館大学 | | p.1～p.65 |
| 胃瘻患者における在宅介護の成功要因の検討――二者の介護を行う男性介護者の語りから<br>（査読付） | 共著 | 2014年12月 | 『富山大学看護学会誌』<br>Vol.14,No.2, | 杉島優子・上野栄一 | p.159-171 |
| 高齢者の胃ろうをめぐる社会意識の変容――1994年～2012年の新聞記事の分析を通して<br>（査読付） | 単著 | 2015年8月 | 『立命館人間科学研究』<br>32(48) | | p.1～p.65 |
| （その他の著書） | | | | | |
| 胃ろうをめぐる2014年度診療報酬改定は高齢者に何をもたらしたのか<br>（査読付） | 単著 | 2015年3月 | 『生存学』Vol.8, 立命館大学生存学研究センター | | p.80～p.84 |
| （学会発表） | | | | | |
| 2009年介護報酬改定から見る介護保険の現状と課題――利用者・家族へのインタビューを通して | 単著 | 2011年8月 | 第42回日本看護学会地域看護,（香川） | | |
| 胃瘻患者における在宅介護の成功要因の検討―介護者の語りから | 単著 | 2012年3月 | 日本看護研究会第26回近畿・北陸地方学術集会,（和歌山） | | |
| 日本における胃瘻の変遷――研究論文のレビューを通して | 単著 | 2013年5月 | 第39回日本保健医療社会学会大会,（東京） | | |
| 男性介護者における胃瘻造設者の介護継続要因の検討 | 単著 | 2014年3月 | 日本看護研究会第27回近畿・北陸地方学術集会,（奈良） | | |
| 高齢者疑似体験演習における教育効果の検討 | 共著 | 2018年8月 | 第49回日本看護学会教育看護,（広島） | | |
| （研究助成） | | | | | |
| 2013年度～2014年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽）「身体論を用いた看護基礎技術習得のための自己学習と支援する教育ツールの開発」 | 共著 | 2013年度～2014年度 | 研究分担者　鮫島輝美、研究分担者　井川　啓、（研究協力者）杉島優子<br>鈴木和代、研究経費：<br>2013年度～2014年度<br>2900千円 | 研究代表者　鮫島輝美、研究分担者　井川啓、（研究協力者）杉島優子　鈴木和代、 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2015年6月13．14日 | 日本看護倫理学会　第8回年次大会参加 |
| 2016年3月5日 | 日本看護研究学会　近畿北陸地方会学会参加 |
| 2016年8月19．20日 | 日本看護管理学会　　第20回日本看護管理学会学術集会参加 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　高尾　憲司 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 輸液に関する計算問題になれる工夫 | 平成26年～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科演習科目「小児看護学援助論演習」（専門科目，3年次配当，必修1単位）学生にとって輸液に関する計算は、困難であることが多いため、計算問題に慣れる目的で計算問題用紙を作成した。これを講義や演習中に行ったことで、臨地実習の際、計算に関して混乱を招くことが少なくなると考えている．学生から難しいけど知っておくべき知識であるなどの意見が得られた． |
| ゼミにおけるプレゼンテーションの評価の工夫 | 平成27年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科演習科目「スタートアップゼミA」（基礎科目，1年次配当，必修1単位）において、教員から発表学生に対する一方的な評価だけでなく、ピアの立場である他のゼミ学生から評価を受けることができるよう、ピア評価表を作成した。またモチベーションを高められるようにポジティブフィードバックの心がけるよう指導し、実施している。 |
| DVDやYoutubeなどの動画の使用 | 平成28年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科講義科目「小児看護学援助論」（専門科目，2年次配当，必修2単位）では，小児の困難となるリアリティを少しでも高めるために、子どもが出演している動画を視聴するようにしている。そうすることで、子どもへの対応をより一層イメージすることが可能であると考えていいる．学生からイメージしやすいとの意見が得られた． |
| 小児看護技術演習における学生主体のグループワーク | 平成29年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科専門科目「小児看護学援助論演習」（専門科目，3年次配当，必修1単位）において、1グループ10名を4組つくり、各グループに教員1名をつけ、学生自身が失敗から学ぶことに焦点をあて、学生主体で必要物品の準備、実施、後片付けの一連の技術の流れを体験させた。わからないことは他人に聞いたり、自分が失敗しやすい技術が明確になりその時の対応策を教員から指導することができ臨地実習に向けて有意義な演習ができたと考える。 |
| 「どこでもシート」を用いた関連図作成 | 平成29年5月～ | 「小児看護学援助論演習」（専門科目，3年次配当，必修1単位）において、1グループ10名でペーパーペイシェントによる関連図を作成させた。どんな壁にでも貼付できる「どこでもシート」を用いることで、学生間で立位でのディスカッションが可能となり、居眠り防止にもなり、グループ内の各学生が積極的に意見を交わせていたと考える。 |
| 臨地実習経験を活かした下級生への指導 | 平成30年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科演習科目「キャリアサポート実践講座A」（専門科目，4年次配当，必修1単位）において、4回生学生10名を3回生の演習指導に組み込んだ。主に4回生には臨地実習での経験を振りかえらせ、現場に近い目線で指導計画を作成させ、下級生の指導にあたらせた。3回生にとっては、4回生からの臨地の経験を聞くことができ近き存在からの指導を受けることができ実習への心の準備ができたと考える。 |
| 小児看護にかかる文献を用いたクリティーク | 平成30年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科講義科目「看護研究演習Ⅰ」（専門科目，4年次配当，必修1単位）における指導をした。少人数制のため研究室において気楽にディスカッションができるようにお菓子やジュースを準備した．またクリティーク用のチェックリストを準備し，学生からも積極的な意見や質疑が出た。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 実習に役立つ「ナレッジノート」、「技術手順書」 | 平成29年4月～ | 小児看護学援助論演習（3年生春学期1単位2あるいは3コマ科目）で、これまでの机上の学習と来年度の実習に向けた橋渡しの科目と位置づけ、実習に役立つ基礎知識を集約した「ナレッジノート」、ﾅｰｼﾝｸﾞｽｷﾙといった看護技術を動画とE-ラーニングで確認・習得するオンラインツールを参考に技術手順とその根拠をまとめた「技術手順書」の作成を行った。小児看護学実習といった4日間の実習で行うため、小児看護に関する基礎知識を事前に確認しておくことが重要と考えている。 |
| 知識確認小テスト | 平成30年4月～ | 小児看護学援助論演習（3年生春学期1単位2あるいは3コマ科目）を通して、基礎的知識が習得できているか確認するために小テストを作成した。また直近の国家試験から演習内容にまつわる内容を出題し、いかに日頃学んでいることが国家試験につながるかを実感してもらえるよう考慮した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Maternal Uncertainty about Infants' Hospitalization for Acute Childhood Illness: A Qualitative Study | 共著 | 平成29年7月 | Open Journal of Nursing | Shingo Ueki, Kenji Takao, Kazuyo Komai, Chieko Fujiwara, Kazutomo Ohashi | 645-656 |
| その他 | | | | | |
| (示説発表) The Utilization Of Information And Communication Media By Hospitalized Children With Cancer －With A Focus On Hospital Websites－ | 単著 | 平成27年2月 | The 18th East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS) | | |
| (示説発表) 小児がんに関する網羅的情報データベースの構築：新聞記事データからの検討 | 単著 | 平成28年6月 | 第63回日本小児保健協会学術集会 | | |
| (示説発表) 小児がんの子どもと親のInformation Needsに関する文献レビュー | 単著 | 平成28年12月 | 第14回日本小児がん看護学会学術集会 | | |
| (受賞) (株)NTTデータ数理システム2015年度学生研究奨励賞 | 単独 | 平成27年11月 | (株)NTTデータ数理システム | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 育Gの会 | 右京区まちづくり支援制度支援事業に応募し、助成を受け平成27年度から活動している。活動目的は、子育てをする中で育児（子どもの育ち）と育自（育児する親自身の育ちと育児支援をする高齢者や学生の育ち）の支援である。27年度は、7回開催し、延べ約150名の参加者を動員することができた。 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　那須　潤子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1）実習の効果的な活用 | 2007年2月～2007年3月 | 京都橘大学看護学部の非常勤助手として「基礎看護学実習Ⅱ」(2年次配当、必修2単位)において、患者を受け持ち、看護過程を展開を展開する目的で、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で5名の学生を担当し、実習指導を行った。脳外科、消化器外科の患者が入院する実習病棟の特徴的な事例について、主に①日常生活面についてのアセスメント、看護診断、計画立案、記録、実施ができること、②基本的看護援助について理解を深め、基本的看護技術が習得できること、③バイタルサイン(呼吸、脈拍、血圧、体温)の観察の目的を述べることができ、実施とアセスメントができることを目標として、事前演習を行った。学生アンケートの結果から、学生は実習中の学習意欲を維持することができ、実習後の学生の満足度は高かった。 |
| 2）実習の効果的な活用 | 2008年9月～2008年11月 | 京都橘大学看護学部の助手として、「基礎看護学実習Ⅰ」(1年次配当、必修1単位)において、患者を受け持ち、コミュニケーションをとり、プロセスレコードを用いて分析を行うことを目的に、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で20名の学生を担当し、実習指導を行った。初めての病院実習であるため、事例に基づくロールプレイを用いた学内演習を行い、実習中は気づき始めたことを言語化させ、自分たちで運営、発表するという中間発表会を行った。実習前後の比較から、学生には行動変容がみられ、実習後アンケートからも学生の満足度は高かった。 |
| 3）演習の効果的な活用 | 2008年9月～2009年2月 | 京都橘大学看護学部の助手として、「日常生活援助技術演習」(1年次配当、半期、必修2単位)において演習指導を行った。生活の援助技術として、感染予防、手洗い、無菌操作、ボディメカニクス、体位変換調整、移乗と移送、足浴、清拭、食事、排泄、浣腸・陰部洗浄、吸入・吸引の援助項目についてデモンストレーションを行い、学生98名を対象に演習指導を行った。 |
| 4）実習の効果的な活用 | 2008年9月 | 京都橘大学看護学部の助手として、「基礎看護学実習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、患者を受け持ち、ロイ適応看護理論を用いて看護過程の展開を行うことを目的に、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で合計20名(前半10名、後半10名)の学生を担当し、実習指導を行った。 |
| 5）実習の効果的な活用 | 2009年2月 | 京都橘大学看護学部の助手として、「基礎看護学実習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、対象者の特性と看護の必要性への理解を深め、科学的根拠に基づいた援助を行う姿勢を養うことを目的に、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で合計20名(前半10名、後半10名)の学生を担当し、実習指導を行った。 |
| 6）演習の効果的な活用 | 2009年4月～2009年6月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「看護アセスメント演習」(2年次配当、半期、必修2単位)において演習指導を行った。看護アセスメント技術として、循環器系、呼吸器系、栄養、運動器系の項目についてデモンストレーションを行い、学生102名を対象に演習指導を行った。 |
| 7）演習の効果的な活用 | 2009年5月～2009年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において演習指導を行った。看護技術として、ベッドメイキング、感覚器アセスメント、神経系アセスメント、体温の観察とアセスメント、血圧測定、循環器のアセスメント、呼吸器のアセスメントの項目についてデモンストレーションを行い、学生104名を対象に演習指導を行った。 |
| 8）演習の効果的な活用 | 2009年6月～2009年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「治療に伴う看護技術演習」(2年次配当、半期、必修2単位)において演習指導を行った。看護技術として、薬物・輸液療法、注射器の取り扱い、注射法、採血法、与薬の方法の項目についてデモンストレーションを行い、学生98名を対象に演習指導を行った。 |
| 9）実習の効果的な活用 | 2009年9月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「基礎看護学実習Ⅱ−1」(2年次配当、半期、必修1単位)において、対象者の健康問題の解決にむけて，看護過程を活用し，人びとを実際に手助けできる看護実践能力の基礎を培うことを目的に、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で合計10名(前半5名、後半5名)の学生を担当し、実習指導を行った。 |

| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)つづき | | |
|---|---|---|
| 10 ) 演習の効果的な活用 | 2009年9月～2009年12月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「在宅看護技術論」(2年次配当、半期、必修2単位)において、在宅療養者とその家族の健康上の課題を理解し、支援できる援助方法を学ぶことを目的として、演習指導を行った。在宅看護技術として、在宅酸素療法、入浴・更衣、経腸栄養・胃瘻、ポータブルトイレ移乗の方法の項目についてデモンストレーションを行い、学生98名を対象に演習指導を行った。 |
| 11 ) 実習の効果的な活用 | 2010年2月～2010年3月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「基礎看護学実習Ⅱ−2」(2年次配当、半期、必修1単位)において、対象者の特性について理解を深め，看護の必要性に気づくことを目的に、国立病院機構宇多野病院急性期病棟で合計10名(前半5名、後半5名)の学生を担当し、実習指導を行った。 |
| 12 ) 実習の効果的な活用 | 2010年6月～2010年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「総合看護学実習」(4年次配当、前後期、必修2単位)において、保健医療福祉チームの一員として、様々な健康課題をもつ人々に対して、根拠に基づくヒューマンケアを実践し、看護専門職者としての専門的能力を向上させるために必要な基礎的な能力を養うことを目的に、国立病院機構宇多野病院の血液内科病棟で学生1名、脳外科病棟で学生1名、市立長浜病院で学生2名を担当し、実習指導を行った。 |
| 13 ) 実習の効果的な活用 | 2010年6月～2010年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「卒業演習」(4年次配当、前後期、必修2単位)において、保健医療福祉チームの一員として、様々な健康課題をもつ人々に対して、根拠に基づくヒューマンケアを実践し、看護専門職者としての専門的能力を向上させるために必要な基礎的な能力を養うことを目的に、私立長浜病院、宇治武田病院、宇治徳洲会病院、国立病院機構宇多野病院でそれぞれ学生1名を担当し、実習指導を行った。 |
| 14 ) 実習の効果的な活用 | 2010年6月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「プライマリケア実習」(2年次配当、半期、必修1単位)において、地区診断および健康教育に関する理解を深めることを目的に、京都市立大宅中学校で学生5名、株式会社京都科学で学生5名を担当し、実習指導を行った。 |
| 15 ) 演習の効果的な活用 | 2010年6月～2010年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「看護学原論」(1年次配当、半期、必修2単位)において、人々の生活と健康に関わる看護について、理論的著作の抄読により理解を深めることを目的として、看護理論に関するグループワーク指導を行った。看護理論家として、フロレンス・ナイチンゲール、ヴァージニア・ヘンダーソン、ドロセアE・オレム、ヒルテガードE・ペプロウ、ジョイス・トラベルビー、アーネスチン・ウィーデンバック、ジーン・ワトソン、マーガレットA・ニューマン、マドレンM・レイニンガー、シスター・カリスタ・ロイを取り上げ、ナイチンゲールとレイニンガーについて、学生20名を対象に演習指導を行った。 |
| 16 ) 演習の効果的な活用 | 2010年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において、手指についた細菌の検査についてデモンストレーションを行い、学生103名を対象に演習指導を行った。 |
| 17 ) 演習の効果的な活用 | 2010年4月～2010年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学演習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、演習指導を行った。移乗・移送、洗髪、足浴の項目について、学生103名を対象に講義、デモンストレーション、演習指導を行った。移乗・移送の技術については、救命救急コースの3回生37名に対しても講義を行い、演習指導を行った。 |
| 18 ) 実習の効果的な活用 | 2010年6月～2010年9月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学実習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、日常生活援助を実施し、発達段階や人間の基本的ニード、健康レベルに応じた看護技術を適用する方法の基礎を学ぶ、また実習での体験を通して、自らの看護観を養うことを目的に、介護保険施設ぬくもりの里で学生11名(前半5名、後半6名)を対象に実習指導を行った。 |
| 19 ) 演習の効果的な活用 | 2010年9月～2011年2月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学演習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、さまざまな看護の対象と家族，多様な看護の場における健康レベルに応じた看護過程を病態・治療の理解を含めて学ぶことを目的に、演習指導を行った。罨法、病歴聴取、無菌操作、ガウンテクニック、採血、注射、輸液の項目について、学生103名を対象にデモンストレーション、演習指導を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 20 ） 実習の効果的な活用 | 2011年1月～2011年2月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学実習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、日常生活援助を実施し、発達段階や人間の基本的ニード、健康レベルに応じた看護技術を適用する方法の基礎を学ぶ、実習での体験を通して自らの看護観を養うことを目的に、宇治徳洲会病院で学生5名を対象に実習指導を行った。 |
| 21 ） 演習の効果的な活用 | 2011年6月～2011年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「看護倫理Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において、看護倫理の重要概念であるケアリング、アドボカシー等について概念的実践的に理解できることを目的として、学生18名を対象にグループワークの演習指導を行った。 |
| 22 ） 演習の効果的な活用 | 2011年6月～2011年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「看護学原論Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において、人々の生活と健康に関わる看護について、理論的著作の抄読により理解を深めることを目的として、学生9名を対象に、ロイの看護理論に関するグループワークの演習指導を行った。 |
| 23 ） 実習の効果的な活用 | 2011年6月～2011年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「プライマリケア実習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において、看護の対象となる人が働く産業の場を通し，そのおかれている環境を理解したうえで，健康課題を査定し，根拠に基づいた看護援助を実践する基礎的な能力を養うことを目的に、株式会社京都科学で学生6名を対象に実習指導を行った。 |
| 24 ） 実習の効果的な活用 | 2011年6月～2011年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「プライマリファミリー実習(プライマリケア実習Ⅱ)」(2年次配当、半期、必修1単位)において、看護の対象となる人が働く産業の場を通し，そのおかれている環境を理解したうえで，健康課題を査定し，根拠に基づいた看護援助を実践する基礎的な能力を養うことを目的に、地域に暮らす高齢者宅訪問において学生12名を対象に実習指導を行った。 |
| 25 ） 演習の効果的な活用 | 2011年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修2単位)において、手指についた細菌の検査についてデモンストレーションを行い、学生100名を対象に演習指導を行った。 |
| 26 ） 演習の効果的な活用 | 2011年9月～2011年11月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において演習指導を行った。看護技術として、ベッドメイキング、栄養状態のアセスメント、循環器のアセスメント、感覚器のアセスメントの項目についてデモンストレーションを行い、学生100名を対象に演習指導を行った。栄養状態のアセスメントについては、講義、デモンストレーション、演習指導を行った。 |
| 27 ） 演習の効果的な活用 | 2011年12月～2012年1月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅱ」(1年次配当、半期、必修1単位)において演習指導を行った。看護技術として、消化器系、脳神経系のアセスメントの項目についてデモンストレーションを行い、学生100名を対象に演習指導を行った。 |
| 28 ） 演習の効果的な活用 | 2011年4月～2011年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学演習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、さまざまな看護の対象とその家族、多様な看護の場における発達段階や人間の基本的ニードに応じた必要な看護技術とその適応方法を学ぶことを目的に、演習指導を行った。ボディメカニクス、洗髪、足浴の項目について、学生102名を対象に講義、デモンストレーション、演習指導を行った。 |
| 29 ） 実習の効果的な活用 | 2011年6月～2011年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学実習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、発達段階や人間の基本的ニードと関連させながら、さまざまな看護の対象とその家族、多様な看護の場における健康レベルに応じた看護過程を病態・治療の理解を含めて学ぶことを目的に、介護保険施設ぬくもりの里で学生11名（前半5名、後半6名）を対象に実習指導を行った。 |
| 30 ） 演習の効果的な活用 | 2011年9月～2012年1月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学演習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、さまざまな看護の対象とその家族、多様な看護の場における健康レベルに応じた必要な看護技術とその適用方法についてライフサイクルを踏まえて学ぶことを目的に、演習指導を行った。罨法、病歴聴取・観察・モニタリング・コミュニケーション、採血、輸液、注射、酸素療法の管理の項目について、学生102名を対象にデモンストレーション、演習指導を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 31 ） 実習の効果的な活用 | 2012年1月～2012年2月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学実習Ⅱ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、日常生活援助を実施し、発達段階や人間の基本的ニード、健康レベルに応じた看護技術を適用する方法の基礎を学ぶ、実習での体験を通して自らの看護観を養うことを目的に、宇治徳洲会病院で学生6名を対象に実習指導を行った。 |
| 32 ） 演習の効果的な活用 | 2012年6月～2012年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「フィジカルアセスメント演習Ⅰ」(1年次配当、半期、必修1単位)において演習指導を行った。看護技術として、手洗い、ベッドメイキング、呼吸器のアセスメント、循環器のアセスメントの項目についてデモンストレーションを行い、学生110名を対象に演習指導を行った。栄養状態のアセスメントについては、デモンストレーション、演習指導を行った。 |
| 33 ） 演習の効果的な活用 | 2012年4月～2012年7月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学演習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、さまざまな看護の対象とその家族、多様な看護の場における発達段階や人間の基本的ニードに応じた必要な看護技術とその適応方法を学ぶことを目的に、演習指導を行った。移乗と移送、シーツ交換・寝衣交換、食事・口腔ケア、フットケアの項目について、学生99名を対象に講義、デモンストレーション、演習指導を行った。 |
| 34 ） 実習の効果的な活用 | 2011年7月～2011年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、「実践看護学実習Ⅰ」(2年次配当、半期、必修2単位)において、医療施設等をフィールドとして、看護過程を展開し、看護の理論と実践を統合する能力を養うことを目的に、介護保険施設おおやけの里で学生10名（前半5名、後半5名）を対象に実習指導を行った。 |
| 35 ） 効果的なシミュレーション教育に関する教育方法の検討と実践 | 2011年3月～2012年3月 | 京都橘大学看護学部の助教として、京都橘大学の看護学生の実習前後の看護技術の習得状況に関する調査研究を行い、看護実践能力の検討を行った。看護技術教育に関して、京都橘大学の提携校であるオーストラリアカトリック大学（ACU Brisbane）を視察し、オーストラリアで実践されているシュミレーション教育の実際を見学したほか、若手教員との意見交換を行い、その後の看護技術教育に役立てた。 |
| 36 ） 新聞、雑誌の効果的な活用 | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位)を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。授業の初めに世界の情勢について考え、視野を広げるきっかけを作るため、新聞、雑誌の記事を効果的に活用している |
| 37 ） グループディスカッションの導入による学生の学びの促進 | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。授業の初めに世界の情勢について考え、視野を広げるきっかけを作るため、新聞、雑誌の記事を効果的に活用し、その内容について、グループディスカッションを行い、プレゼンテーションを行う機会を設けている。 |
| 38 ） プレゼンテーションの導入による学生の学びの促進 | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位)を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。授業の初めに世界の情勢について考え、視野を広げるきっかけを作るため、新聞、雑誌の記事を効果的に活用している。さらにその内容について、グループディスカッションを行い、プレゼンテーションを行う機会を設けている。 |
| 39 ） 学生の授業評価の活用とそのフィードバック | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位)を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。講義ごとの学生の授業評価について、翌日の講義でフィードバックを行っているが、学生アンケートからも授業に参加している感覚が持てると好評である。 |

| | | |
|---|---|---|
| 40 ） 課題レポートの効果的な活用 | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位)を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。講義の評価対象となる課題レポートについて、集中講義の最初の日に課題内容を提示し、すべての講義を通じて自らが感じ、考えたことを自由に書くように指導している。これは、講義全体の目的、目標を示すものであり、ただ単にレポートを書くのではなく、自分で考えて表現するということの大切さを伝えるための意図的な取り組みであるが、学生からは大変好評であり、毎年多くの学生が意欲的にレポートに取り組んでいる。 |
| 41 ） 視聴覚教材(ノンフィクション映画、DVD)の効果的活用 | 2013年4月～現在に至る | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護論」(1～4年次配当、半期、選択1単位)を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。この講義では、世界で起こっている貧困や戦争などの現状、それらに起因する健康問題を伝えるため、ノンフィクション映画とDVD映像を数多く利用している。映像と音声を講義内で効果的に利用することにより、学生の興味関心だけでなく、集中力の継続にも効果があり、講義期間中、ほぼすべての学生から最も楽しかった授業であるという評価を得ている。 |
| 42 ） 新聞、雑誌の効果的な活用 | 2013年4月～2015年3月 | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際社会と国際貢献」(2年次、半期、選択2単位)を担当。看護に関する国際貢献にあたって、現代の国際事情や国際社会に生じている諸問題や国際協力の現状、異文化理解の意義と必要性を理解することを目的に、講義を行った。世界の人々の健康に関わる要因について新聞や雑誌の記事を効果的に用いて説明を行ったほか、世界保健機構など国連関連の出版物、各国政府の統計、主に日本とアメリカのNPO／NGO団体からの出版物などを用いて保健医療に関わる国際協力の仕組みと現状について説明した。 |
| 43 ） グループディスカッションの導入 | 2013年4月～2015年3月 | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際社会と国際貢献」(2年次、半期、選択2単位)を担当。看護に関する国際貢献にあたって、現代の国際事情や国際社会に生じている諸問題や国際協力の現状、異文化理解の意義と必要性を理解することを目的に、講義を行った。授業で扱うトピックについて、適宜グループディスカッションの手法を用い、学生の授業参加度を高める工夫を行っている。 |
| 44 ） プレゼンテーションの導入 | 2013年4月～2015年3月 | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際社会と国際貢献」(2年次、半期、選択2単位)を担当。看護に関する国際貢献にあたって、現代の国際事情や国際社会に生じている諸問題や国際協力の現状、異文化理解の意義と必要性を理解することを目的に、講義を行った。授業で扱うトピックについて、適宜グループディスカッションの手法を用い、そこからさらにプレゼンテーションを行うことにより、自分の考えを表明することの大切さを伝えており、異文化適応とコミュニケーションの理解につなげている。 |
| 45 ） 視聴覚教材(You Tube)の利用 | 2013年4月～2015年3月 | 中京学院大学看護学部の非常勤講師として、「国際社会と国際貢献」(2年次、半期、選択2単位)を担当。看護に関する国際貢献にあたって、現代の国際事情や国際社会に生じている諸問題や国際協力の現状、異文化理解の意義と必要性を理解することを目的に、講義を行った。この講義では、世界の状況を伝えるため、あるいは看護に関連する世界の諸問題を映像で伝える工夫を行っているが、特にYou Tubeを利用した講義は、講義が終了したのちも自分で検索して復習することができると、毎年学生に好評であった。 |
| 46 ） 系統的理解を促すための連続型講義の活用 | 2013年4月～現在に至る | 2013年度から中京学院大学で継続して担当している「国際看護」の講義は選択制であるが、毎年受講者が増え続けている。このため、受講するすべての学生が講義を受けやすいよう、マルチメディアの整った大講義室に移動するなど配慮してきた。当初は看護学部4回生を対象として講義を行っていたが、もっと早くに受講して国際的な視野を広げる機会が欲しいという学生の要望により、現在は3年次を対象として講義を行っている。また、国際看護の基礎知識を得るための講義として、2回生を対象とした「国際社会と国際貢献」の講義を担当し、「国際看護論」の系統的理解を促す講義展開を行っている。 |
| 47 ） ロールプレイ、シュミレーションを活用した講義 | 2013年9月～2013年12月 | 公益社団法人国際厚生事業団の講師として、「看護専門講義」を担当。2013年度日比経済連携協定(EPA)に基づくフィリピン人看護師に対する訪日後研修の講義を行った。日本とフィリピンという国、文化的背景の違いから、看護の考え方、技術の根拠などに大きな違いが生じることがある。これについて、日本の看護現場を想定したロールプレイ、シュミレーションを取り入れて理解を促した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 48 ） 日本の看護技術とその文化的背景を伝える講義内容の検討 | 2013年9月～2013年12月 | 公益社団法人国際厚生事業団の講師として、「看護専門講義」を担当。2013年度日比経済連携協定（EPA）に基づくフィリピン人看護師に対する訪日後研修の講義を行った。日本とフィリピンという国、文化的背景の違いから、看護の考え方、技術の根拠などに大きな違いが生じることがある。この講義では、日本の看護についてその根拠を歴史や文化的背景から紐解いて説明するようにした。日本語での講義が主であったが、英語での説明を細やかに入れることで受講者からは理解が深まったと好評であった。 |
| 49 ） ロールプレイ、シュミレーションを活用した講義 | 2014年4月～2014年7月 | 公益社団法人国際厚生事業団の講師として、「看護専門講義」を担当。2014年度日越経済連携協定（EPA）に基づくベトナム人看護師に対する訪日後研修の講義を行った。日本とベトナムという国、文化的背景の違いから、看護の考え方、技術の根拠などに大きな違いが生じることがある。これについて、日本の看護現場を想定したロールプレイ、シュミレーションを取り入れて理解を促した。 |
| 50 ） 日本の看護技術とその文化的背景を伝える講義内容の検討 | 2014年4月～2014年7月 | 公益社団法人国際厚生事業団の講師として、「看護専門講義」を担当。2014年度日越経済連携協定（EPA）に基づくベトナム人看護師に対する訪日後研修の講義を行った。日本とベトナムという国、文化的背景の違いから、看護の考え方、技術の根拠などに大きな違いが生じることがある。この講義では、日本の看護についてその根拠を歴史や文化的背景から紐解いて説明するようにした。 |
| 51 ） 視聴覚教材（You Tube、DVD）の利用 | 2014年4月～2014年7月 | 公益社団法人国際厚生事業団の講師として、「看護専門講義」を担当。2014年度日越経済連携協定（EPA）に基づくベトナム人看護師に対する訪日後研修の講義を行った。日本とベトナムという国、文化的背景の違いから、看護の考え方、技術の根拠などに大きな違いが生じることがある。これについて、You Tubeその他映像を取り入れて現場の理解を促すことで受講者からは理解が深まったと好評であった。 |
| 52 ） 課題レポートの効果的な活用 | 2014年4月～2015年3月 | 岐阜大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護事情」（4年次、半期、選択1単位）を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。課題レポートの提示および提出方法を工夫している。最終評価につながる課題レポートは学生の関心が高いものであるが、課題を集中講義の開始時に示し、すべての講義を通じて自らが感じ、考えたことを自由に書くように指導している。ただ漠然と与えられたテーマについて書くのではなく、自分で考え、行動するという、看護職の基本的姿勢を講義を通じて伝えるよう工夫している。 |
| 53 ） 視聴覚教材（You Tube、DVD）の利用 | 2014年4月～2015年3月 | 岐阜大学看護学部の非常勤講師として、「国際看護事情」（4年次、半期、選択1単位）を担当。国際的視点で看護の展開について考え、異なる文化、価値観を持つ人々への看護のアプローチについて理解することを目的に、講義を行っている。この講義では、世界で起こっている貧困や戦争などの現状、それらに起因する健康問題を伝えるため、ノンフィクション映画とDVD映像を数多く利用している。すべての学生から最も楽しかった授業であるという評価を得たが、カリキュラム改正により次年度からの講義は閉講となった。 |
| 54 ） グループディスカッションの活用 | 2017年4月～現在に至る | 大阪市立大学生活科学部食品栄養科学科の非常勤講師として、「社会保健学」を担当。管理栄養士として理解しておかなければならない、保健・医療・福祉・介護に関わる概念、社会保障の概念、社会保健に関わるさまざまな制度と関連法規について講義を行っている。受講者である学生の多くにとって利用した経験がなく理解しにくい制度が多いことから、グループディスカッションで言語化を促し、理解を深めるようにしている。 |
| 55 ） 課題レポートの効果的な活用 | 2017年4月～現在に至る | 大阪市立大学生活科学部食品栄養科学科の非常勤講師として、「社会保健学」を担当。管理栄養士として理解しておかなければならない、保健・医療・福祉・介護に関わる概念、社会保障の概念、社会保健に関わるさまざまな制度と関連法規について講義を行っている。受講者である学生の多くにとって利用した経験がなく理解しにくい制度が多いことから、講義前後の課題レポート記入で言語化を促し、理解を深めるようにしている。 |
| 56 ） 視聴覚教材（You Tube、DVD）の利用 | 2017年4月～現在に至る | 大阪市立大学生活科学部食品栄養科学科の非常勤講師として、「社会保健学」を担当。管理栄養士として理解しておかなければならない、保健・医療・福祉・介護に関わる概念、社会保障の概念、社会保健に関わるさまざまな制度と関連法規について講義を行っている。視聴覚教材を用いた講義、および講義後に書く感想に対するフィードバックは学生アンケートからも大変好評である。 |

| | | |
|---|---|---|
| 57 ） 学部を超えたボランティア活動の支援 | 2010年4月～2012年8月 | 京都橘大学看護学部の助教として、国際交流事業を担当した。自らが通訳、翻訳をつとめる経験が多いことから、看護学生が他学部の学生とともにボランティアを行いながら英語力を高めることのできる通訳ボランティアを発案した。学生の国際交流活動及び英語力を高める機会を作るため、文学部英語コミュニケーション学科の教員と共同で企画、運営を行った。 |
| 58 ） EPA看護師候補生に対する日本の看護に関する講義 | 2013年9月～2014年7月 | 公益社団法人国際厚生事業団主催のEPA看護師候補生に対する看護専門講義で講師を務めた。 |
| 59 ） 中国武漢大学の看護学生に対する日本の看護に関する講義 | 2014年11月 | 中国、武漢で開催されたthe 8th the Asia Pacific Emergency and Disaster Nursing Network (APEDNN) Meetingに東邦大学大学院博士後期課程生として参加、武漢大学で日本の看護に関する講義を行った。 |
| 60 ） 看護職に対する看護研究に関する講義 | 2016年4月～2018年3月 | 東京都保健医療公社荏原病院看護部主催の年間講義「看護研究」で講師を務めている。指導研究数は毎年13例程度。 |
| 61 ） 看護職に対する国際看護に関する講義 | 2016年4月～現在に至る | 東京都保健医療公社荏原病院看護部主催の講義「国際看護」で講師を務めている。グローバル化が進み、さらに東京オリンピックを控えた東京の医療機関において、看護師の果たすべき役割を中心に講義を行っている。 |
| 62 ） 演習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)および「日常生活基盤と看護」(1年次配当、半期、必修2単位)において、科目担当者として講義および演習指導を行った。「看護栄養管理技術論」では85名の学生を対象に、学生経口で栄養が摂れない患者に対する栄養摂取法、経管栄養法について講義を行い、経鼻胃チューブの安全安楽な挿入法と管理方法、栄養剤注入の具体的方法および管理方法について演習を実施した。グループ毎にブースをまわり、チューブ挿入、固定方法などの詳細を学習できる方法を用いたほか、最新の胃ろう用加圧バッグをメーカーより取り寄せて演習で用いるなど、実際の臨床現場で役立つ知識、技術を取り入れる工夫を行った。 |
| 63 ） 学生の授業評価の活用とそのフィードバック | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)および「日常生活基盤と看護」(1年次配当、半期、必修2単位)を担当。講義の最後に感想、質問表を記入してもらい、毎回の講義の最初にフィードバックを行っている。学生の学びを深めるためにわかりやすい題材を用いて事例とともに解説するようつとめているほか、学生が質問しやすく、かつ疑問を共有しながら、授業の参加度を高め、相互学習を促す工夫を行った。 |
| 64 ） 課題レポートの効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)および「日常生活基盤と看護」(1年次配当、半期、必修2単位)を担当。受講者である学生の多くにとっては、カタカナ表記、英語表記の単語が多く覚えにくいこと、栄養学に関連した膨大な量の記憶が必要であることから、講義後に演習を行う際、事前および事後の課題を提出させ理解を深めている。さらにレポートを少人数制で指導する体制を整え、演習につなげることで、きめ細やかな対応ができるようにしている。 |
| 65 ） 国際感覚を養い看護につなげる工夫 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)および「日常生活基盤と看護」(1年次配当、半期、必修2単位)を担当。講義の中で、項目やヘルスに関する国際的なデータや事例を提示し、学生の国際感覚を養い、それを看護実践につなげられるよう工夫している。学生の興味関心は強く、眠たくならずに聞くことができるので、もっと多くの情報を含めてほしいという要望が出るため、次の講義に関連した情報を提示するなど継続的に工夫を行っている。 |
| 66 ） 実習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護体験実習」(1年次配当、半期、必修1単位)を担当。早期体験実習として看護が行われる場に赴き、看護職者の役割と機能について学ぶこと、看護職者として必要な基本的態度を身につけるとともに、看護を学ぶ動機付けを図ることを目的に、学生10名を京都鞍馬口医療センターに引率した。実習先では臨床指導者と密に連携しつつ、自身のこれまでの臨床経験および知識をふまえ、患者を人として理解するための指導を行った。実習経験が、今後の学習意欲へとつながるよう、学生のニーズに合わせて学習を促したほか、共に考え学ぶ姿勢で実習指導を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 67 ） 実習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「実践基礎看護学実習」(2年次配当、半期、必修2単位)を担当。療養の場で生活する看護の対象者のニードを把握し、看護過程の思考プロセスを適用して、対象者に必要な看護援助を実践する過程を学ぶことを目的に、京都第一赤十字病院で実習指導を行った。教員3人のうちの実習指導代表者として、12人の学生を引率し、うち5人の学生を担当した。患者を1人受け持ち、看護過程を展開する初めての実習であるため、学生は強い緊張をもって実習に臨むが、効果的に実習を進めるため個人に合わせた細やかな指導を行った。 |
| 68 ） 演習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「ヘルスアセスメント」(2年次配当、半期、必修2単位)を担当。 看護を科学的に実践するために不可欠なヘルスアセスメントについて理解し、必要な技術を修得することを目的に、演習を中心として指導を行った。技術の指導をおこなううえで、事前に十分な知識の確認と復習を行い、学生が最新のエビデンスのもとに看護技術を習得できるようにした。 |
| 69 ） 演習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「看護過程」(2年次配当、半期、必修2単位)を担当。看護の目的を果たすために現象を的確に捉え、健康問題ならびに看護独自の問題を抽出し、その解決にあたる組織的な実践プロセスを修得することを目的に、10人の学生を担当、指導した。ヘンダーソンの理論を用いた看護過程の展開においては、問題解決思考、患者の基本的ニード、看護の視点に立った情報収集力と分析力が必要である。看護過程はかなりの時間数を費やさなければ理解を深めることはできない科目のひとつであり、看護の中核をなす重要な科目であることから、、事例に合わせてひとつずつ丁寧に説明を行い、個人の力量にあわせて可能な限りの時間数指導を行った。 |
| 70 ） 演習の効果的な活用 | 2018年4月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部の嘱託講師として、「キャリアサポート実践講座A」(4年次配当、半期、必修2単位)を担当。4年生が既習の知識を活用して2年生の演習を指導にあたるうえで、授業計画の作成、指導案の作成、具体的な指導方法等について、指導を行った。演習を行ううえでは、指導者側の十分な指導、確実な技術練習が不可欠であるため、演習前に担当した4年生4人に対して、技術の根拠、方法について講義と実演を行い、指導側の4年生のみならず、4年生に指導を受ける2年生にとっても学習の質が保障できるよう十分に配慮した。演習科目は少人数で指導を行うが、すべて指示してしまうと学習機会を奪ってしまうこと、学生を指導する上で個別性に配慮することなどの大切さについても指導した。 |
| 71 ） 演習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)において、科目担当者として講義および演習指導を行った。「看護栄養管理技術論」では80名の学生を対象に、学生経口で栄養が摂れない患者に対する栄養摂取法、経管栄養法について講義を行い、経鼻胃チューブの安全安楽な挿入法と管理方法、栄養剤注入の具体的方法および管理方法について演習を実施した。グループ毎にブースをまわり、チューブ挿入、固定方法などの詳細を学習できる方法を用いて学習効果を向上させる工夫を行った。また、注入ボトルに水を入れて滴下を実体験する、最新の胃ろう用加圧バッグを臨床から借用して演習で用いるなど、実際の臨床現場で役立つ知識、技術を取り入れる工夫を行った。 |
| 72 ） 学生の授業評価の活用とそのフィードバック | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)において、科目担当者として講義および演習指導を行った。講義の最後に感想、質問表を記入してもらい、毎回の講義の最初にフィードバックを行っている。学生の学びを深めるためにわかりやすい題材を用いて事例とともに解説するようつとめているほか、学生が質問しやすく、かつ疑問を共有しながら、授業の参加度を高め、相互学習を促す工夫を行った。 |
| 73 ） 課題レポートの効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)において、科目担当者として講義および演習指導を行った。受講者である学生の多くにとっては、カタカナ表記、英語表記の単語が多く覚えにくいこと、栄養学に関連した膨大な量の記憶が必要であることから、講義後に演習を行う際、事前および事後の課題を提出させ理解を深めている。さらにレポートを少人数制で指導する体制を整え、演習につなげることで、きめ細やかな対応ができるようにしている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 74 ） 国際感覚を養い看護につなげる工夫 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護栄養管理技術論」(2年次配当、半期、必修1単位)において、科目担当者として講義および演習指導を行った。講義の中で、項目やヘルスに関する国際的なデータや事例を提示し、学生の国際感覚を養い、それを看護実践につなげられるよう工夫している。学生の興味関心は強く、眠たくならずに聞くことができるので、もっと多くの情報を含めてほしいという要望が出るため、次の講義に関連した情報を提示するなど継続的に工夫を行っている。 |
| 75 ） 演習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「ヘルスアセスメント」(2年次配当、半期、必修2単位)において、演習指導を行っている。 |
| 76 ） 演習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護研究演習Ⅰ」(4年次配当、半期、必修1単位)において、講義および演習指導を行っている。 |
| 77 ） 演習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「キャリアサポート実践講座A」(4年次配当、半期、必修2単位)において、講義および演習指導を行っている。 |
| 78 ） 実習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護体験実習」(1年次配当、半期、必修1単位)において、実習指導を行っている。 |
| 79 ） 実習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護統合実習」(4年次配当、半期、必修2単位)において、実習指導を行っている。 |
| 80 ） 実習の効果的な活用 | 2019年4月～現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部の講師として「看護基本技術論」(4年次配当、半期、必修2単位)において、講義および演習指導を行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 1 ） 在日外国人の健康支援活動に向けた「国際まちの保健室」における外国人住民への対応マニュアル、連携する医療機関の一覧等の作成 | 2012年4月～2014年3月 | 「国際まちの保健室」では、日本で暮らす外国人が日本人と同じように、生活習慣や心の悩みなどについて、気軽に相談できる場所を提供し、外国人が病院に行っても納得のいく理解が得られないといった受診時の問題に対応する必要がある。全国的にも初めての取り組みであり、保健室で相談業務を行う看護職および医療関係者のために、対応マニュアル、医療機関リストなどを作成し活用した。 |
| 2 ） 「看護診断のアセスメント力をつけるー臨床判断力をみがく看護過程ー」第1版の作成 | 2013年5月 | 主に看護過程の展開を行う講義および演習においてテキストとして活用している。外国人患者の看護過程展開については、中京学院大学看護学部の非常勤講師として担当の「国際看護論」、東京都保健医療公社荏原病院で講師として担当の「国際看護」でも活用している。 |
| 3 ） 「看護診断のアセスメント力をつけるー臨床判断力をみがく看護過程ー」第1版の外国人看護に合わせたビデオの作成 | 2013年5月 | 新人看護師の臨床判断力を高め、看護ケアの質を向上させる目的で6か所の大学附属病院および一般病院のエキスパートナース14名へ事例作成を依頼した。エキスパートナースへ事例作成を依頼し、さらに研究者らで再検討を繰り返した27事例のうち、日本で前立腺全摘術を受けることを決心したが不安な状況にある外国人患者、前立腺全摘術後、孤立感のために苦痛が増強した外国人患者、前立腺全摘術後の合併症に悩む外国人患者の3例について、外国人男性の協力を得てビデオを作成し、リアルな患者の声、姿を映像で見せるための教材としている。国際看護の講義で毎年活用している。 |
| 4 ） 「経済連携協定(EPA)に基づく看護師の指導者ガイドブック」の作成 | 2014年4月 | 中京学院大学看護学ぶ非常勤講師として担当の「国際看護論」の教材として使用している。医療看護の現場でも、外国人と接する場面が増えてきたが、今後看護師として働く上では外国人看護師との協同は避けることができない。教材はオンラインで公開されていることから、興味を持った学生が自由に閲覧できることを伝えた上で、講義では一部の事例を提示している。 |
| 5 ） 国際看護を学ぶ上で参考になる映画の一覧表の作成 | 2014年6月 | 中京学院大学看護学ぶ非常勤講師として担当の「国際看護論」の教材として使用している。講義ではノンフィクション映画を活用するが、国際情勢に関心のある学生からの要望によって映画の説明を行うこともあり、好評である。 |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 1）看護教育における在日外国人ケアに関するカリキュラムの現状と課題 | 2006年4月～2007年12月 | 在日外国人の生活上の問題において、健康に関するものは重要度が高い。保健医療専門職の中でも、特に患者に接する場面の多い看護関連職について、在日外国人を理解するための教育実施状況の現状を把握し、現状に即したカリキュラムのあり方についての検証を行った。これについて助成金を受けた財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構において報告書の作成を行ったほか、調査をもとに授業で活用するためのテキストを作成した。 |
| 2）国際看護学の効果的な教育プログラムの開発 | 2007年4月～2009年3月 | 京都橘大学の学外研究員として、国際看護学の効果的な教育方法についての研究に参加した。京都橘大学看護学部では、2005年度の開学部初年度より国際看護学、異文化コミュニケーション論などの科目を設置した。既存の領域に比べると国際看護関連科目に関するテキストは非常に少なく、教授方法も確立していないことから、2006年より国際看護関連科目の教育・学習支援プログラムの開発を目指して研究を継続し、京都橘大学 学のみならず全国で国際看護関連科目を担当する教員のための具体的な講義内容について学会発表、意見交換を行った。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等（つづき） | | |
| 3）国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究 | 2009年4月～2010年3月 | 京都橘大学看護学部の助教として、国際看護学の効果的な教育方法についての研究に参加した。京都橘大学看護学部では、2005年度の開学部初年度より国際看護学、異文化コミュニケーション論などの科目を設置した。既存の領域に比べると国際看護関連科目に関するテキストは非常に少なく、教授方法も確立していないことから、2006年より国際看護関連科目の教育・学習支援プログラムの開発を目指して研究を継続しているプロジェクト研究である。本研究では、調査結果の分析、考察を担当し、日本看護科学学会で口頭による発表を担当した。 |
| 4）看護師の看護過程能力を促進する学習支援システムの開発 | 2009年4月～2010年6月 | 新人看護師の臨床判断能力を高め、看護ケアの質の向上を図るために、看護理論に基づいた看護過程の思考を促進する学習支援システムの開発を行った。「看護過程のレクチャー」「代表事例の展開」「エキスパートナースと共同作成した15事例の展開」「学習者の課題発見」「関連図の作成」「学習者のもつ個別事例の展開」を作成し、看護学生、新人看護師が実際に学習に用いることのできるシステムを開発した。ほかにも、看護学生の事例学習のための教科書を作成したほか、看護関連学会での発表を行った。 |
| 5）学士課程における看護技術の効果的な教育方法の開発 | 2012年4月 | 京都橘大学看護学部の学士課程の看護学生を対象として、看護学実習後の進度に伴う看護技術修得状況の実態を明らかにする調査を行い、現状にあった看護技術教育を行うための基礎資料を得た。具体的には2011年度から本学看護学部の4期生、5期生を対象として、看護学演習および実習後の進度に伴う看護技術修得状況に関する調査を行い、臨地実習であまり経験することができないものの就職後に必要とされる洗髪の看護技術など、学内で実施できる演習項目を中心に、学生のニーズや現状にあった演習計画立案を行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1）NPO法人京都自由大学設立および事務局運営 | 2005年4月～2006年3月 | 他大学の教員らと協働して、NPO法人京都自由大学の設立に携わり設立趣意書や規約などの作成を行うとともに、組織の立ち上げを行った。事務局長として、京都市内で地域住民に開かれた大学教育の実践の場を提供するとともに、大学教育のあり方について大学教員、地域住民とともに考えた。教育を実践する大学教員の社会貢献、および倫理的態度の重要性を強く認識し、これが今日まで大学教育に携わるものとしての心得および看護基礎教育の実践に生かされている。 |
| 2）看護を専門とする通訳者、翻訳者として活動 | 2009年4月～現在に至る | 京都橘大学主催の看護国際フォーラムにおける講演資料をはじめとして、看護を専門とした通訳、翻訳を通じて看護教育および看護研究の発展に貢献している。また、看護研究の正確な翻訳の重要性に注目し、具体的な提案を行っている。積極的に国際交流活動に関わり、看護職の国際交流および研究活動を支援している。さらに異文化看護実践の方法論の視点で、言語や文化が異なる人々との交流、互いの文化的背景の違いに関する理解等について、大学生、大学院生に具体的な指導を行っている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 3 ） 看護国際フォーラムにおける通訳ボランティアの育成活動 | 2009年4月～2012年9月 | 京都橘大学の看護学部助教として、看護学部、英語コミュニケーション学科の学生を対象とした通訳ボランティアの育成について提案した。通訳実務経験のある他学部教員と連携して、通訳ボランティア育成講座の準備、開催、運営を行った。通訳ボランティアは、積極的に国際交流を行いたいと考える学生の間で人気があり、ボランティアのサポートを受けた海外招聘講師らにも良い評価を得た。英語能力と異文化コミュニケーション能力が高まることでも定評があり、現在も継続して講座が開催されている。 |
| 4 ） 厚生労働省看護職員確保対策特別事業事務局（協力者） | 2013年11月～2014年3月 | 2013年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業において、事務局（協力者）を務めた。EPA看護師候補生およびその指導者へのインタビュー調査を行い、指導者のためのマニュアル作成を行った。 |
| 5 ） 東京都保健医療公社荏原病院看護研究指導 | 2015年10月～現在に至る | 東京都保健医療公社荏原病院の看護師を対象に、研究計画書の書き方の指導、その計画書の個別指導、倫理委員会への提出書類の書き方の指導を行った。計画書では、研究課題の発見の仕方からインタビュー項目の作成など質的研究について講義し、その後、院外の研究発表までを指導している。 |
| 6 ） ワークショップ「未来語りのダイアローグ」通訳、翻訳 | 2017年11月 | 明石市地域自立支援協議会、兵庫県立大学共催のワークショップにおいて、フィンランドから招聘されたトム・アーンキル博士の同時通訳を務めた。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1. 看護診断のアセスメント力をつける―臨床判断力をみがく看護過程―（第1版） | 共著 | 2013年5月 | メヂカルフレンド社 | 編者：岡崎美智子，道重文子<br>共著者：岡崎美智子、道重文子、那須潤子、伊藤朗子、恩幣宏美、中橋苗代、仲前美由紀、原明子、村山由起子、荒木孝治、瓜崎貴雄、梶谷佳子 | 33頁 |
| 論文 | | | | | |
| 1. 外国人支援者が捉えた看護師の対応－在日外国人の外来受診時における看護師の適切な対応方法の検討－（修士論文） | 単著 | 2008年3月 | 兵庫県立大学 | | |
| 2.『国際まちの保健室』の開設と運営による在日外国人の健康支援活動の報告<br>（査読付） | 共著 | 2013年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集第7号<br>p.27～p.29 | 共著者：呉小玉、那須潤子、李錦純、黒瀧安紀子、金川真理、井上清美、神原咲子、中田涼子、山本あい子 | 3頁 |
| 3. 在日外国人の健康支援活動に向けた「国際まちの保健室」の開設と運営に関する報告<br>（査読付） | 共著 | 2014年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集第8号<br>p.22～p.27 | 共著者：呉小玉、那須潤子、中田涼子、井上清美、黒野利佐子、李錦純、黒瀧安紀子、佐藤文子、神原咲子、山本あい子 | 6頁 |
| 4. 2014年度「国際まちの保健室」の在日外国人の健康支援活動に関する報告<br>（査読付） | 共著 | 2015年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集第9号<br>p.8～p.14 | 共著者：呉小玉、黒瀧安紀子、中田涼子、李錦純、佐藤文子、神原咲子、井上清美、黒野利佐子、那須潤子、鈴木真奈美、山本あい子 | 7頁 |
| 5. 在日外国人住民の健康を支援するための「国際まちの保健室」に関する実践報告<br>（査読付） | 共著 | 2016年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集第1号<br>p.19～p.27 | 共著者：呉小玉、黒瀧安紀子、中田涼子、佐藤文子、神原咲子、李錦純、井上清美、黒野利佐子、那須潤子、山本あい子 | 16頁 |
| 6. 在日外国人の介護保険サービス利用における介護支援専門員の対応状況に関する調査研究<br>Long-Term Care Insurance for Foreign Residents: from the perspective of Care Managers working in 'In-Home Care Centers' in Japan<br>（査読付） | 共著 | 2016年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所紀要第23号<br>p.79～p.87 | 共著者：Lee Kumsun, Nasu Junko, Takahashi Fusako, Tawara Shinobu | 9頁 |
| 7.「国際まちの保健室」に参加する在日外国人の健康意識、生活習慣と健康状態の関連性<br>（査読付） | 共著 | 2016年3月 | 兵庫県立大学地域ケア開発研究所紀要第23号<br>p.59～p.77 | 共著者：呉小玉、黒瀧安紀子、中田涼子、佐藤文子、神原咲子、李錦純、井上清美、黒野利佐子、那須潤子、山本あい子 | 19頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (調査報告書) | | | | | |
| 1. 看護教育における在日外国人ケアに関するカリキュラムの現状と課題 | 共著 | 2007年3月 | 平成18年度ヒューマンケア実践研究支援事業研究成果報告書,財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 | 共著者:北村広美, 那須潤子 | 126頁 |
| 2. 学士課程における看護技術の効果的な教育方法の開発 | 共著 | 2012年4月 | 看護実践異文化国際研究センター年報2011, 京都橘大学看護実践異文化国際研究センター | 共著者:那須潤子, 梶谷佳子, 片山由加里, 中橋苗代 | 2頁 |
| 3. 経済連携協定(EPA)に基づく看護師の指導者ガイドブック | 共著 | 2014年4月 | 公益社団法人国際厚生事業団 | 共著者:熊谷雅美、佐々木倫子、玉川淳、戸塚規子、中山洋子、成瀬和子、本田つき子、近藤麻理、後藤喜広、那須潤子、田代順子、長松庸子、水谷真由美 | 58頁 |
| (学会発表) | | | | | |
| 1. 京都橘大学の看護学部教員による国際看護学に関わる研究と実践 | 共同 | 2008年7月 | 第17回びわ湖国際医療フォーラム, 2008、ピアザ淡海, 滋賀. | 共著者:河原宣子, 横川裕美子, 江間祐恵, 中井隆陽, 那須潤子, 戸塚規子 | |
| 2. 国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究(2)－国際看護学の教育を行う意義に関する質問紙調査(第1報)－ | 共同 | 2008年9月 | 国際看護研究会第11回学術集会, 独立行政法人国際協力機構(JICA)地球ひろば, 東京. | 共著者:河原宣子, 横川裕美子, 江間祐恵, 中井隆陽, 那須潤子, 戸塚規子 | |
| 3. 在日外国人が医療機関を外来受診する際に感じる困難さと看護師の対応－外国人支援者が在日外国人の医療機関受診に同行した経験より－(The Response of Japanese Nurses to Non-Japanese Outpatients: the Experience of NPO Volunteers in Accompanying Foreign Residents to Hospitals) | 単独 | 2008年10月 | 第49回日本熱帯医学会・第23回日本国際保健医療学会合同大会, 国立国際医療センター, 東京. | 共同発表者:那須潤子、黒野利佐子 | |
| 4. 国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究(4)－京都橘大学における国際協力事業への参画による看護教育－ | 共同 | 2009年8月 | 第24回日本国際保健医療学会学術大会, 東北大学, 仙台 | 共著者:横川裕美子, 戸塚規子, 河原宣子, 江間祐恵, 那須潤子, 上山晃太朗, 前原澄子 | |
| 5. A Study on Development of an Effective International Nursing Education Program - Compulsory class in nursing care for foreign residents in Japan at basic nursing education institutions - | 共同 | 2009年8月 | 第1回日中韓看護学会大会(1st China- Japan-Korea Academic Exchange Conference), 北京会議センター, 中国. | 共著者:横川裕美子, 河原宣子, 江間祐恵, 中井隆陽, 那須潤子, 戸塚規子 | |
| 6. 国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究－国際看護学の教育を行う意義に関する質問紙調査(第2報)－ | 共同 | 2009年9月 | 国際看護研究会第12回学術集会, 独立行政法人国際協力機構(JICA)地球ひろば, 東京. | 共著者:横川裕美子, 江間祐恵, 中井隆陽, 那須潤子, 上山晃太朗, 浅野美智留, 戸塚規子, 前原澄子 | |
| 7. 国際看護学1の履習前後における受講生の興味・関心の変化 | 共同 | 2009年9月 | 日本看護学教育学会第19回学術集会, 日本赤十字北海道看護大学, 北海道. | 共著者:横川裕美子, 戸塚規子, 河原宣子, 江間祐恵, 那須潤子, 上山晃太朗, 前原澄子 | |
| 8. 国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究－国際看護学の教育を行う意義－ | 共同 | 2009年11月 | 第29回日本看護科学学会, 幕張メッセ, 千葉. | 共著者:那須潤子, 横川裕美子, 河原宣子, 江間祐恵, 中井隆陽, 上山晃太朗, 戸塚規子, 前原澄子 | |
| 9. 学士課程における総合看護学実習後の看護技術経験状況と到達度 | 共同 | 2010年3月 | 日本看護研究学会第23回近畿・北陸地方会学術集会, キャンパスプラザ京都, 京都. | 共著者:中橋苗代, 道重文子, 梶谷佳子, 那須潤子, 岡崎美智子 | |
| 10. 学士課程における看護技術経験の推移 | 共同 | 2010年7月 | 日本看護学教育学会第20回学術集会, 大阪国際会議場, 大阪. | 共著者:那須潤子, 道重文子, 中橋苗代, 梶谷佳子, 岡崎美智子 | |
| 11. 学士課程における総合看護学実習後の看護技術経験状況と到達度 | 共同 | 2011年8月 | 日本看護研究学会近畿・北陸地方会 23回学術集会, パシフィコ横浜・会議センター, 横浜. | 共著者:中橋苗代, 梶谷佳子, 那須潤子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 12. 学士課程における総合看護学実習後の看護技術到達状況 | 共同 | 2011年8月 | 第37回日本看護研究学会学術集会, パシフィコ横浜・会議センター, 横浜. | 共著者:梶谷佳子, 中橋苗代, 那須潤子 | |
| 13. 学生の直感を活かした看護援助の創造:オリジナル作成動画を用いた看護過程における観察技術教育 | 共同 | 2011年10月 | 日本看護技術学会第10回学術集会, 日本赤十字看護大学, 東京. | 共著者:片山由加里, 梶谷佳子, 中橋苗代, 那須潤子 | |
| 14. 病棟の看護師が外国人を看護する際に影響を及ぼす要因の考察 | 共同 | 2011年10月 | 日本看護技術学会第10回学術集会, 日本赤十字看護大学, 東京. | 共著者:片山由加里, 梶谷佳子, 中橋苗代, 那須潤子 | |
| 15. ジェネラリスト看護師の臨床判断力を促進する学習支援システムの開発 | 共同 | 2011年12月 | 第31回日本看護科学学会, 高知県立大学, 高知. | 共著者:岡崎美智子, 道重文子, 梶谷佳子, 中橋苗代, 那須潤子, 仲前美由紀, 井上久子 | |
| 16. Japanese Nurses' Efforts in Communicating with Foreign Patients. | 単独 | 2012年2月 | 15th East Asian Forum of Nursing Scholars, National University of Singapore, Singapore. | 共著者: Junko Nasu, Risako Kurono | |
| 17. Child Guidance Centers' Response Systems in Foreign Languages for Consultation from Foreigners Living in Japan: Analysis of Open-ended Questions by Text Mining. | 共同 | 2013年10月 | The 9th International Nursing Conference & the 3rd World Academy of Nursing Science, The-K Seoul Hotel, Korea. | 共著者: Kumsun Lee, Naomi Kitano, JunkoNasu | |
| 18. 在日外国人の健康支援活動:「国際まちの保健室」の取り組み ―International Town Health Care Room in Hyogo: health promotion for foreign residents― | 共同 | 2013年11月 | 第28回日本国際保健医療学会, 名桜大学, 沖縄. | 共著者:那須潤子, 李錦純, 黒瀧安紀子, 金川真理, 中田涼子, 井上清美, 神原咲子, 山本あい子, 呉小玉 | |
| 19. 在留外国人の健康支援活動:「国際まちの保健室」2年目の取り組み | 共同 | 2014年11月 | 第29回日本国際保健医療学会学術大会, 東京女子医科大学・独立行政法人国立国際医療研究センター, 東京. | 共著者:中田涼子, 那須潤子, 井上清美, 黒野利佐子, 李錦純、黒瀧安紀子、佐藤文子, 神原咲子, 山本あい子, 呉小玉 | |
| 20. Nursing Education Program on Perinatal Loss in Japan. | 共同 | 2015年7月 | The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Pacifico Yokohama, Japan. | 共著者: Yukiko Terada, Junko Nasu, Yoko Yamamoto, Mari Kondo | |
| 21. 在留外国人の健康支援活動:「国際まちの保健室」3年目の取り組み | 共同 | 2015年11月 | 第30回日本国際保健医療学会学術大会, 2015, 石川 | 共著者:黒瀧安紀子、呉小玉、中田涼子、李錦純、佐藤文子、神原咲子、井上清美、黒野利佐子、那須潤子、山本あい子 | |
| 22. 介護支援専門員がとらえる在日外国人の介護保険サービス利用における対応体制ーテキストマイニングによる自由記載回答の分析ー | 共同 | 2015年11月 | 第30回日本国際保健医療学会学術大会, 2015, 石川. | 共著者:李錦純、那須潤子、俵志江 | |
| 23. National Survey on In-Home Care Service Covered by Long-Term Care Insurance by Foreign Residents in Japan. | 共同 | 2016年3月 | The 19th East Asian Forum Of Nursing Scholars (EAFONS), Chiba, Japan. | 共著者: Kumsun Lee, Junko Nasu, Fusako Takahashi, Shino Fukuoka, Shinobu Tawara | |
| 24.「私たちには世界と未来を変える力がある:東京オリンピックに向けた看護の取り組み」 | 共同 | 2018年12月 | 第33回日本国際保健医療学会学術大会, 2018, 東京. | 共著者:那須潤子, 梅田麻希 | |
| (研究助成) | | | | | |
| 1.財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構　平成18年度ヒューマンケア実践研究支援事業研究助成 | 共同 | 2006年4月～2007年12月 | 財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 | | |
| 2.京都橘大学看護実践異文化国際研究センター第5プロジェクト「国際看護学の効果的な教育プログラムの開発に関する研究」 | 共同 | 2007年4月～2009年3月 | 京都橘大学看護実践異文化国際研究センター | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (研究助成)つづき | | | | | |
| 3.文部科学省科学研究費基盤研究(B)島津SDと看護診断トレーニングソフト開発のための事業「看護師の看護過程能力を促進する学習支援システムの開発」研究協力者(研究代表者:岡崎美智子) | 共同 | 2009年9月 | 文部科学省科学研究費基盤研究 | | |
| 4.文部科学省科学研究費基盤研究(B)島津SDと看護診断トレーニングソフト開発のための事業「看護師の看護過程能力を促進する学習支援システムの開発」共同研究者(研究代表者:岡崎美智子) | 共同 | 2009年4月～2010年3月 | 文部科学省科学研究費基盤研究 | | |
| 5.神戸常盤大学「病棟看護師が外国人患者をケアする上で感じたこと, およびその対応について～神戸市内総合病院の一般病棟を中心に～」共同研究者(研究代表者:黒野利佐子) | 共同 | 2010年6月 | 神戸常盤大学 | | |
| 6.京都橘大学看護実践異文化国際研究センタープロジェクト研究費「学士課程における看護技術の効果的な教育方法の開発」研究代表者 | 共同 | 2011年4月 | 京都橘大学 | | |
| 7.兵庫県立大学地域ケア開発研究所「国際まちの保健室」共同研究者(研究代表者:呉小玉) | 共同 | 2012年4月～2013年3月 | 兵庫県立大学 | | |
| 8.兵庫県立大学特別研究助成「病院の看護職がとらえる外国人への退院支援の実施状況に関する調査研究」共同研究者(研究代表者:李錦純) | 共同 | 2013年4月～2015年3月 | 兵庫県立大学 | | |
| 9.文部科学省科学研究費挑戦的萌芽研究「『国際まちの保健室』の開設と運営による在日外国人の『健康促進プログラム』の開発」研究協力者(研究代表者:呉小玉) | 共同 | 2013年4月～2016年3月 | 文部科学省科学研究費萌芽研究 | | |
| 10.公益財団法人国際看護交流協会／小倉一春記念国際看護奨学基金奨学生 | 単独 | 2013年4月～2015年3月 | 公益財団法人国際看護交流協 | | |
| 11.スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団(The Scandinavian-Japan Sasakawa Foundation)2015年度研究助成(研究代表者:那須潤子) | 単独 | 2015年4月～2016年3月 | スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団 | | |
| 12.公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金2015年度研究助成(研究代表者:那須潤子) | 単独 | 2015年5月～2018年9月 | 公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金 | | |
| 13.文部科学省科学研究費基盤研究(C)「多文化共生社会における外国人高齢者への包括的な在宅ケア支援モデルの開発」研究協力者(研究代表者:李錦純) | 共同 | 2016年4月～2019年3月 | 文部科学省科学研究費基盤研究 | | |
| 14.文部科学省科学研究費研究活動スタート支援「日本の看護の魅力再考ーオーストラリアに国際移動する看護師の決断要因」(研究代表者:那須潤子) | 共同 | 2018年9月～2020年3月 | 文部科学省科学研究費基盤研究 | | |
| 15.文部科学省科学研究費基盤研究(C)「多文化共生社会の高齢化に対応した在宅ケアグローバル人材養成教育プログラムの開発」共同研究者(研究代表者:李錦純) | 共同 | 2019年4月～2022年3月 | 文部科学省科学研究費基盤研究 | | |
| 16.公益財団法人JR西日本あんしん社会財団研究助成「大都市圏における訪日外国人の災害時ヘルス関連ニーズ:インクルーシブな保健医療の実現に向けた看護ケアの検討」共同研究者(研究代表者:李錦純) | 共同 | 2019年4月～2020年3月 | 公益財団法人JR西日本あんしん社会財団 | | |
| (海外調査) | | | | | |
| 文部科学省科学研究費基盤研究(B)島津SDと看護診断トレーニングソフト開発のための事業「看護師の看護過程能力を促進する学習支援システムの開発」研究協力者(研究代表者:岡崎美智子) | 単独 | 2009年9月 | | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2005年4月～2006年3月 | 特定非営利活動法人京都自由大学事務局の事務局長として、NPO法人の設立、京都自由大学の企画・運営に携わった。京都の国公立、私立大学の教員らとともに「市民による市民のための、開かれた自由な学びの場の創造」を目指すため、オープン・カフェ形式で、地域社会に開かれた教育・文化の場を提供した。 |
| 2006年9月～2007年12月 | （NPO法人多文化共生センターひょうごにおける在日外国人支援活動）外国人支援者（中国人、フィリピン人、ペルー人、ブラジル人）とともに、在日外国人支援活動を行った。具体的には健康状態や生活に関する電話相談、出張イベントでの健康相談などである。NPO団体設立の経験を生かし、医療看護の分野でどこまでの具体的支援が可能であるのかに着目しながら、支援する側とされる側の実際を学び、より良い看護実践につなげるための方法について考えた。 |
| 2012年4月～2016年3月 | （地域の外国人住民に対する相談業務）兵庫県立大学地域ケア開発研究所において、国際まちの保健室の事務局を務めた。相談に訪れる地域の外国人住民に対しては、英語専門の通訳者として支援したほか、看護師として健康相談員を務めた。 |
| 2012年7月 | 第18回日本看護診断学会学術大会運営事務局のメンバーとして学会運営を行った。 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

1992年に日本英語検定準一級を取得して以来、日常的に国際交流活動を行ってきた。同時に通訳、翻訳の経験を重ね、2009年4月にIELTS7.0点を取得（speakingスコア8.5）。
本格的に看護専門職としての専門的通訳、翻訳を開始した。海外経験、看護の専門性、英語語学力、対人関係構築、交渉能力を生かし、国内外問わずフィールドを開拓することが可能であることから、2009年9月にオーストラリアの看護系大学における看護過程能力を育成するカリキュラムについて単独調査を行った。その後も「国際まちの保健室」における通訳兼相談員（2012年～2014年）、公益社団法人国際厚生事業団におけるEPA看護師への看護専門講義などを行ってきた。これらの経験から、看護分野における技術相談、共同研究に対応する語学力、国際経験は十分である。
通訳兼相談員（2012年～2014年）、公益社団法人国際厚生事業団におけるEPA看護師への看護専門講義などを行ってきた。これらの経験から、看護分野における技術相談、共同研究、グローバル化・国際化を目指した新しい取り組みなどに対応する語学力、国際経験は十分であり、大学の国際化に貢献することが可能である。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　夏山　洋子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ・実習前の学生の授業外における学習促進のための取り組み<br>・実習前に事前試験（妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期）を設け実習開始が可能かの評価を実施。 | 平成23年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際大学看護学部看護学科で担当の「母性看護学実習」（専門科目、3-4年次配当、通年、必修2単位）において、学生に必要とされる母性看護学の領域の範囲について、事前に学習課題を与えてきたが、学生自身の演習の機会を増やす取り組みをおこない、実習前に試験を行うことで学生の学習成果をみる機会とした。空いていれば実習室を開放するとしたことで個々人が自己学習を行うことを促し、その際には、質問等可能なように教員が立ち会うことも可能とし教授にあたった。事前学習（沐浴学習・新生児観察等）での取り組み時の学生の意欲向上が認められ学生からは何度も演習できイメージが掴めたと好評であり、実習施設では、沐浴技術等の手技は安定しているとの評価を受けた。ただ、学生の新生児観察については丁寧だが時間がかると評価をうけており、早急に観察項目を関連して理解できる教授方法が課題である。 |
| ・講義での視聴覚教材の利用<br>・市販教材の活用<br>・体験型学習の導入 | 平成16年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際大学看護学部看護学科で担当の「母性看護学概論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）および「母性看護援助論Ⅰもしくは Ⅱ」に（専門科目2年次配当、半期、各必修2単位）おいて、学生に興味を持たせる授業組み立てを考え、視聴覚教材を利用しながらパワーポイントで講義を行うが、資料としてワードで作成した資料を配布、詳細の振り返りをする際はワードでの資料を見返すことでできるのでそれで復習しているという学生評価を得た。 |
| | 平成28年4月～<br>現在（平成30年7月） | 京都学園大学健康医療学部看護学科で2年次配当「母性看護学援助論」の産褥・新生児を担当。パワーポイントで講義とワードでの作成資料配布。教科書での振り返りが可能なように資料各所に教科書のページ数を記載している。資料作成のポイントとしては、母性看護学の重要事項を理解し最終的に国家試験に合格できるようにすることと共に、母性看護学の病院臨地実習でも利用できる内容にもなるように工夫した。 |
| ・学内実習および臨地実習での分娩台（内診台）処置の患者体験による羞恥心への配慮・共感的理解の促進。 | 平成16年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際大学看護学部看護学科の担当していた「母性看護学実習」「3-4年次配当」、「通年」、「必修2単位」において、学生には羞恥心への配慮について常に意識付けする必要性から左記のような分娩台および診察室体験を施行し、学生の経験レポートとする。 |
| ・大学教育　アドバイザー（担任制）チューター制導入 | 平成18年4月～<br>平成22年4月 | 明治国際大学看護学部、1年次から4年次までの学生アドバイザーを担当した。学年アドバイザーは教授が担当。他4名の学生アドバイザーが学習調整係と国家試験対策係と生活調整係、大学行事係で役割分担し学生にはきめ細やかな支援体制を実践している。 |
| | 平成28年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学ではチューター制度にて学生支援を行っている。現4年生4名、3年生4名、2年生2名、1年生3名を担当している。<br>各学期の開始時点では、面談を行い、学生の履修登録および成績等の相談を行う。実習等で必要になる小児感染症の対応等（抗体価把握）やB型肝炎ワクチン接種の奨励および接種状況の把握など、予防接種について保健室とともに情報提供等を行っている。その他、父母の会では懇親会の開催日に親御さんからの希望に応じて、学年担任教員と共に面談を実施した。4年生には就職状況の確認を行い、進路相談の他、就職試験のための志願書の記載やマナー講座のような面談対応について、模擬面接も行った。全学年において、個別チューターとして、体調管理についても連絡をいただき面談をおこなった。平成30年度は単位履修が困難であった3年生が退学を希望され、4月退学の運びとなった。退学した学生は奨学金返済も必要であることから当面アルバイトをしてその返済にかかりたいということであった。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | チューター制度で学生と教員が数名の小グループでの担当制で学習支援をおこなっている。この春に4名の卒業生が旅たち、現在は4年生2名、3年生4名、2年生2名、1年生3名の計11名を担当させていただいている。　京都先端科学大学では引き続きチューター制度は個別対応で細やかなところで対応できる機会があるが、学年をつなぐような活動ができていなかったので、この春のオリエンテーションでは、チューター同士の学生さんを引き合わせることを行った。先輩・後輩の関係性が取れる機会となった。今後も意識的に、このような機会を作って行けたらと考えている。 |
| ・大学教育　クラスアドバイザー（学年担任制）　副担任 | 平成30年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学において、平成30年度4月入学1年次の副担任を担当。今年度、着任をされた主担任教授と共に半分の学生を受け持つことになった。チューターより問題が持ち上がった際には父母の会での面談等をはじめとして、親御さん等に担任・副担任で対応していく。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都先端科学大学では引き続きクラス担任として2学年の副担任を担当している。チューターより問題が持ち上がった際には父母の会での面談等をはじめとして、親御さん等に担任・副担任で対応していく方向性に変更はない。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・大学教育　キャリア支援委員会<br>アーリィエクスポージャー導入：学生担当② | 平成22年4月～<br>平成25年3月 | 明治国際医療大学看護学部のキャリア支援委員として早期教育の機会を検討した。1年生の5月に病院見学を実施した。京都市内の救急を中心とした病院見学であり、その病院の経営理念や緊急時の搬送等のレベルを間近②見て大いに刺激を受けて帰ってきており、アーリィエクスポージャーは効果が高いと教員学生双方からの評価は高い。他施設での行事であり、TPOを考えて行動し、学生代表は御礼の挨拶を行い、社会性を身につける機会でもある。 |
| ・大学教育　キャリア支援委員会<br>マナー教室の実施：学生担当② | 平成22年4月～<br>平成25年3月 | 明治国際医療大学看護学部のキャリア支援委員として学生へのマナー教育の機会を検討した。3年生の就職の際に面談等の実施を教授初めキャリア担当教員、担任団で分担されたが、もっと早期にマナー講習会等が必要であると提言。京都市内でハローワークで接遇を講義されている寺田講師に講演を依頼。「基本的な挨拶マナーについて」2年生に実施後、学生の評価も高く、「必要なマナーが理解できた。」という声が聞かれ次年度には「面接時のマナーについて」3年次対象に実施された。引き続き好評であるので講演を継続中であるが、学部を超えて大学全体での取り組みとなり、その時期をいつに企画するのが教育的なのか検討中である。 |
| ・大学教育　健康医療学部看護学科<br>キャリアサポート委員会 | 平成28年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科　キャリサポート委員会の委員として、大学キャリアサポートセンターの担当職員（室長は佐野様→北本様、看護学科担当職員は安本様）とともに大学の就職支援を行ってきた。内容としては、病院の求人担当者の来課時の面接対応を行うことと、結果を共有ファイルに入力して、事務部門と共有理解し、学生指導につなげている。大阪に本社のあるマイナビ株式会社の担当者清水彩花様と情報交換を行い、学生への就職情報提供を行っている。 |
| ・看護学科　広報委員会 | 平成28年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科　広報委員会において<br>学科での広報活動の支援を行う。大学広報冊子・ニューズレター等に使用する学生写真及び記事について、学生の選定及び撮影等、大学広報とともに調整等の活動を行う。平成30年においては学園大学冊子に退職された教員写真が掲載されていることが発覚したため、更新版の作成が必要になり、急遽、保健師課程の学生・教員とともに写真撮影を行い、冊子修正を行った。 |
| ・大学教育　健康医療学部看護学科<br>キャリアサポート委員会 | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | キャリアサポート委員会の委員を担当しており、学生の就職関連で活動している。例年同様に内容としては、病院の求人担当者の来課時の面接対応を行うことと、結果を共有ファイルに入力して、事務部門と共有理解し、学生指導につなげている。大阪に本社のあるマイナビ株式会社の担当者様と情報交換を行い、学生への就職情報提供を行っている。1-2年生には7月実習前のマナー講座（平成30年は7月17日）、3年生には就職セミナー現在の看護系就職状況の報告と対策（平成30年6月14日）、履歴書の書き方など（平成31年1月17日）の学生への研修会を実施している。ほか、実習病院の求人担当者による病院説明会を年1回企画し。来校いただき行っている。対象は3年生中心となるが全学年が参加可能である。2018度は2019年1月11日の研修会終了後に実習病院説明会を開催し、実習病院の管理職の皆様に集合いただき、学生への情報提供を頂いた。看護学科の1期生は全員国科試験の合格を得て、就職先にも全員が確定し、志望の病院に就職ができた。京都先端科学大学では引き続き、2019年度は新委員長をお迎えし、同様に企画を行っていく計画である。6月26日火マイナビの今年度はじめての「就職セミナー」が開催された。未来ホールには75名ほ3年生が集合し盛会であった。看護大学の増設により、就職がなかなか難しくなってくる中で、今病院に求められる人材とは、そのために今取り組むべきこと、就職活動をいつから行うべきかなど、示唆にとんだ講義を頂き、学生も、今何をすべきなのか理解できた様子であった。次回は7月17日水曜日、2年生対象のマナー講座となる。担当者マイナビ株式会社（土井様）2019年度は、12月23日月曜日に就職セミナー履歴書の書き方や面接対応、午後には実習病院説明会を計画中。 |
| ・導入ゼミで学生自身がプレゼンテーション練習として講義試行。（予習の上、附属のDVDを利用可とする。） | 平成24年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部「1年生次配当」「基礎科目」「導入ゼミ」「半期」「必修2単位」において高校生と大学生の違いとして重要なことは、自ら学ぶ能動的な学びが大きいとされている。自ら疑問を持ち、もしくは理解してからわかることを講義することで自身の理解が深まることを体感することから学生自身が教科書を予習した上で、付属のDVDを利用してプレゼンテーションを行うことで、どのようにまとめて人に伝える事が出来るか。どのようにすると聞き手の学生の理解が促されるか等々思うことを話しあう。学生の中に発想の転換が産まれ楽しそうに行なう学生の姿がある。最後までプレゼン役を希望しない学生もいるが強制ではさせていない。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・スタートアップゼミ　1年生　担当授業　展開 | 平成28年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学の1年次対応として「スタートアップゼミ」を担当している。6名を15コマ分を担当した。前任校の導入ゼミでも担当していたが、高校生と大学生の違いを知り、重要なことは、自ら学ぶ能動的な学び方が理解できることが大きいとされている。自ら疑問を持ち、もしくは理解してからわかることを講義することで自身の理解が深まる。各自で自由に自身が興味をもったテーマについて調べレポートを書き、レジュメの資料を作成しグループの全員の前でプレゼンを行う。京都学園大学では、学長からの指導があり、「日本語検定」の受験（毎年11月）について、1年生には明言されており、合格のために教科書を使用してゼミの中で取り組んできた。私は開始15分を毎回、日本語の授業に充足させた。最終回にはプレゼンテーションが必要であり、時間がなかったため、模擬試験については印刷を行い、手渡しを行い、各自復習するように課題を出した。昨年度のテーマは「短期記憶と長期記憶」「うつ病の家族を支援するために必要なこと」「看護師国家試験について」「震災時の心のケア」「睡眠障害と集中力」、今年度は「アニマルセラピー（うさぎ飼育）の効果」「睡眠の質と集中力」「笑いの効果」「新人看護師の課題」「認知症における転倒のリスク　ー看護師のケアー」のようなテーマで進められた。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、1年次対応として「スタートアップゼミ」を担当している。6名を15コマ分を担当した。平成31年度は5名15コマを担当中。今年度は「記憶の定着」「幼児教育の効果」「睡眠の効果」「選球眼の鍛え方」「ASMR　を不眠に活用できるか」等のテーマで検討されている。現在レポート作成中。最終的にプレゼンテーションを行い、ピア評価も加えて皆で学習を楽しく共有したい。 |
| ・オフィスアワーの活用　研究セミナー担当（夏山ゼミ） | 平成18年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部3-4年生「研究方法論Ⅱ」「卒業論文ゼミ」「必修2単位」ではオフィスアワーを利用し学生が空いた時間で頻回にゼミナーが開かれるようにした。実習の合間に打ち合わせたい学生のニーズもあり、好評であった。 |
| | 平成28年4月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、オフィスアワーを提示する中で、学生が自由に研究室に訪ねてくることができるので、有意義な時間となっている。オープンな環境で学生さんたちとフランクに話ができる環境つくりを目指したいと思っている。 |
| ・母性看護学概論授業　アロマセラピー講座　含む　パワーポイントで作成 | 平成18年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科母性看護学担当の「母性看護学概論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において母性看護学概論　学生への資料作成ほか講義についてはPP作成。補完代替療法の中のアロマセラピーについては演習時間を設けて実演をする中で学生は楽しくもっと学びたいと好評である。 |
| ・母性看護援助論Ⅱ授業パワーポイントで作成　資料作成 | 平成22年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科母性看護学担当の「母性看護援助論Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）：産褥期新生児期にかかる授業演習資料作成含む。沐浴実習のデモストレーションを行い、新生児の観察ポイントをコーケン人形を使用して演習する。演習では実物大でリアルな人形を抱き・触診する中、学内で慣れることを目的としている。むやみに触ることで児の啼泣を誘発しないような配慮を持てることが必要としている。調乳指導でミルク作成も行っており、例年学生は生き生きと演習を実施している。 |
| | 平成28年4月～<br>平成29年5月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で2年次配当「母性看護学援助論」の産褥・新生児を担当。パワーポイントで講義とワードでの作成資料配布。教科書での振り返りが可能なように資料各所に教科書のページ数を記載し、学習内容の流れについて理解できるようにしている。 |
| | 平成29年6月～<br>令和元年5月現在 | 京都学園大学および京都先端科学大学でも2年次配当「母性看護学援助論」の産褥・新生児を担当。パワーポイントで講義とワードでの作成資料配布。教科書での振り返りが可能なように資料各所に教科書のページ数を記載し、学習内容の流れについて理解できるようにしている。 |
| ・母性看護学実習　事前学習　プリント作成 | 平成18年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科母性看護学担当の「母性看護学実習」専門科目、3－4年次配当、半期、必修2単位）：周産期の観察項目をすべて含んでいる。新生児の身体計測も演習にて実施している。 |
| | 平成29年5月～<br>平成30年6月 | 3年次後半の母性看護学実習に使用することができる実習ノートの作成を行うことで、母性看護学でのポイントを各自がまとめることができるようにポイントを記載した表を配布している。<br>実習ノートについても演習と共に評価対象とし、学生自身のモチベーションが保つことができることを狙いとしている。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、母性看護学でのポイントを各自がまとめることができるように穴抜きのカッコを授業で解答できるように進めている。。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・母性看護概論　オムニバス担当 | 平成20年4月～<br>平成28年3月まで | 母性看護学概論（性と生殖、出生前教育、子育て支援等） |
| ・母性看護援助論Ⅰ　半期授業　担当 | 平成27年4月～<br>平成28年3月 | 母性看護学各論　　妊娠・分娩期の看護<br>演習においては妊産婦モデルをおき、産痛緩和の方法についても学べるように工夫した。 |
| ・母性看護援助論Ⅱ　　半期授業　担当 | 平成22年4月～<br>平成28年3月 | 母性看護学各論　　産褥期・新生児期の看護 |
| ・母性看護援助論(Ⅱ)　半期授業　担当 | 平成28年4月～<br>現在（令和元年6月） | 母性看護学各論　　産褥期・新生児期の看護　授業について分担し教示方法について再考し行った。 |
| ・母性看護学援助論演習　授業担当 | 平成29年5月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科で3年次配当、母性看護学援助論演習では、母性看護で学ぶ妊娠期（レオポルド触診法・胎児心拍測定・モニタリングの装着方法・腹囲子宮底の測定・妊婦体験）分娩期（産痛緩和法）産褥期（退行性変化観察方法：子宮底触診・測定および進行性変化観察方法：乳房モデル触診・乳房別授乳方法・排気および調乳方法・産褥体操）新生児期（バイタルサイン測定・新生児観察および身体計測・抱き方：沐浴演習）などについて、事前課題等と共に演習で学べるように行っている。沐浴演習においては、最後に試験を実施、評価を行う。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、母性看護学援助論演習では看護過程を担当をしている。学生が学びやすくなるように、事例を展開する際に、教科書や参考書を提示してイメージがつきやすくなるように心がけている。 |
| 学生による授業評価の活用 | 平成24年4月～<br>平成30年7月 | 学生の授業評価としては平成28年29年は平均程度であった。毎回終了時に記載する感想欄に「ペースが速い」「DVD視聴でイメージができた」「沐浴演習については、体験をして改めて、実習病院で実施できるようにならないといけないと強く感じた」とする学生の声が聞かれた。「新生児の計測」や「産婦役の学生との産痛緩和法など、実習までに再度学習の機会をとれるように、実習室での練習の機会をとらえるように学生へ意欲が医継続するように促した。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、母性看護学の授業を行った後に授業評価をうけるが、授業はペースが速くなりがちであることは指摘を受けている。イメージをつけられるように写真を多く採用し、例として新生児の特徴などを捉えやすくなるように考えている。 |
| ・助産診断技術学　　産褥期新生児期担当 | 平成26年4月～<br>平成28年4月まで | 助産師国家試験取得コース　講義として座学にて講義を行った。レポート課題として産褥新生児期の課題を課した。 |
| ・助産診断技術学　　演習 | 平成26年4月～<br>平成28年4月まで | |
| ・明治国際医療大学看護学部看護学科<br>学生の授業評価 | 平成18年4月～<br>平成28年3月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科1年次の母性看護学概論を3回/年　担当。2年次の母性看護援助論Ⅱを担当。2年前の学生の授業評価では平均（中）上での評価を受けている。 |
| ・研究方法論Ⅱで3年生-4年生3名の研究指導（夏山ゼミ）<br>学生及び教員による評価 | 平成20年～<br>平成28年3月 | 研究をまとめて、学内で発表。A4、5枚にまとめ、大学卒業論文集に掲載。年1回卒業前に報告会を行う。「アロママッサージの効果　過去10年間の看護研究分析」「睡眠障害におけるアロマセラピーの効果」「不妊女性の終結決定時の心理とケア」など。<br>自主的に取り組めるように個人に合わせて指導柔軟に変化。グループでのディスカッションを入れて学生間でも各研究について新たな視点を取り入れることで、学生には楽しい指導と評価をうける。〃 |
| ・研究方法論Ⅰ | 平成30年4月～<br>平成30年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科における4年生への看護研究については、3年時に講義を受けて基本を学び、4年生で各自が卒論作成に向けてテーマを決定し、研究計画書を立案するが、その際に担当教授・准教授とともに学生指導にあたった。 |
| | 平成30年7月～<br>現在（令和元年6月） | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、研究指導を担当した。災害の中で弱者である母性小児の対象者である母子への支援を学生とともに活動した。児童館での発表等を経て、自信をつけていく良い経験となっていたと考える。他に1名の文献検討の学生の指導を担当した。「流死産を経験した母親に対する夫の支援に関する文献検討」をまとめた。今年度の4年生は「産後うつ病の母親と児への看護介入のあり方」「医療的ケアが必要な子どもと家族へのNICUにおける退院支援に関する文献検討」について研究計画書を提出すべく健闘中、7月閉めきり。研究Ⅰでは研究計画書の指導までを行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 教育内容・方法の工夫（続き） | | |
| 大学教育　8期生の担任業務 | 平成25年4月～<br>平成28年3月まで | 明示国際医療大学、学生の学習支援体制の充実、クラス運営。担任各自が上記4つの係を分担。学生の希望に合わせて係は決定され、各係には委員長と副委員長が選出され、一年の運営を任される。1年ごとにクラス運営は学生間で修正検討されている。学生の自主性を育成するためにクラス運営ほかは学生を中心に進められるように学生の主体性を育てる機会を見つけるように努力している。主体的な行動を支持する中で、学生自身が試験問題を考案してクラスに配布するなど学習の機運等が出てきており、「全員そろって進級」「全員国試合格」をスローガンで指導体制を作ってきた。 |
| ・研究方法論Ⅱ | 平成24年4月～<br>平成28年3月まで | 明治国際医療大学の3年生2名・4年生4名の研究指導（夏山ゼミ） |
| | 平成28年4月<br>～令和元年5月現在 | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、研究指導を担当した。災害の中で弱者である母性小児の対象者である母子への支援を学生とともに活動した。児童館での発表等を経て、自信をつけていく良い経験となっていたと考える。他に1名の文献検討の学生の指導を担当した。「流死産を経験した母親に対する夫の支援に関する文献検討」をまとめた。今年度の4年生は「産後うつ病の母親と児への看護介入のあり方」「医療的ケアが必要な子どもと家族へのNICUにおける退院支援に関する文献検討」について研究計画書を提出すべく健闘中、7月閉めきり。研究Ⅱでは研究論文を完成させた。 |
| ・キャリアサポート実践講座A | 平成28年4月<br>～令和元年5月現在 | 京都学園大学から京都先端科学大学と引き続き、4年生のキャリアサポート実践講座Aの授業で、3年生の沐浴演習の際に、先輩がデモストレーションを行い、実際に指導を行い、その後の沐浴実施をした3年生学生の実施を見て、指導案が的確であったか等を確認している。4年生は人に教えるということを通して、どのように工夫をする必要があるのかを学ぶ良い機会となっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| クリティカルスタディ国家試験対策QアンドA | 平成14年 | クリティカルスタディ　母性看護学―関連5問・解答 |
| 2009看護師国家試験最新予想必修問題集 | 平成20年10月 | ナーシングカレッジ医学芸術社　母性看護関連2問・解答　P102問題NO.14-P78解答・P108問題NO. 12-P84解答作成 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ・明治国際医療大学看護学部看護学科における市民対象の教育活動の実績　〃 | 平成24年10月28日 | 明治国際医療大学　公開講座・連携講座等の講師<br>（京カレッジ市民教養講座、キャンパスプラザ京都）サクセスフルエイジングにむけて－男女の更年期の健康と老年期の性・アロマ演習を含む－　母性看護学ユニットで実施〃 |
| ・明治国際医療大学看護学部看護学科における京都府下病院看護師対象の研究教育活動の実績 | 平成18年4月～<br>平成24年3月 | 明治国際医療大学　公開講座・連携講座等の講師<br>（明治国際医療大学：京都府下看護師対象リカレント講座開催）明治国際医療大学　リカレント講座で研究計画書に関するグループ指導に参加した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・夢ナビシリーズ　掲載　講義No.03353　高校生対象進路相談雑誌　㈱フロムページ　インターネット配信 | 平成23年6月～<br>平成27年3月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科高校生へのナビゲーターとして活動されている株式会社フロムページより掲載。メディカルアロマセラピーはどのように看護に活かされているのか？インタヴュー後インターネットで掲載された。希望講義シートを高校生が請求し会社から配布されるシステム。配布数は平成26年11月までで234件であった。 |
| ・「教育人会議」雑誌　2014春号　yumenavi all stars P42 高校生対象進路相談㈱フロムページ | 平成26年4月 | 明治国際医療大学看護学部看護学科<br>夢ナビオールスターズで掲載。 |
| ・明治国際医療大学看護学部における危機管理体制作りの実績 | 平成18年4月～<br>平成28年3月 | 大学看護学部での危機管理委員会で大学内での学生および教職員の危機管理体制を支援する組織であり、防災マニュアル作成および大学事務局とともに避難訓練の実施を企画運営した。（年1回　消防署の協力を得て消防訓練および警察署の警察官により防災についての講義。）感染対策としては学部生Ⅰ年次に実施するツベルクリン検査、1,2年次に実施するHB肝炎ウイルス検査について事務とともに引率等を行う。学生への感染予防の講義を各学年に1回実施し、学生の感染に関する理解を促したことで実習での注意喚起の意味で貢献した。 |

| 4　その他教育活動上特記すべき事項(つづき) | | |
|---|---|---|
| ・京都市子育て支援事業での地域母子保健:訪問活動の実績:虐待予防事業 | 平成18年4月～<br>平成26年3月 | 新たに京都市が虐待予防として訪問事例を拡大し京都市がシステム化した。新生児訪問はがきを提出されずのケースや乳児検診未受診者について、台帳よりピックアップ、電話連絡、状況確認を行い、必要に応じ訪問等を実施する。月1-2回半日業務。夏山は遠隔地を中心に訪問を実施、地域でハイリスクとなる可能性のある家庭に早期に対応することで地道な虐待予防事業の意義があると評価されている。 |
| ・明治国際医療大学看護学部における防災安全教育の実績　(新任教員への保険の加入確認・新任防災オリエンテーションの実施) | 平成25年4月～<br>平成28年3月 | 危機管理委員会の委員長として活動。委員会会議開催とともに新任教員への防災教育を支援。教員の加入する保険「will」の手続きの確認。新任教員への防災教育についても委員とともに実施。学生の感染予防対策について、関係病院の情報を得て対応している。 |
| ・明治国際医療大学看護学部における卒後教育に関する実績(同窓会の基盤作り) | 平成22年4月～<br>平成28年3月 | 看護学部同窓会組織「なごみ会」を支援する同窓会支援委員となる。卒業前より学生間で「なごみ会」活動についての理解を促し、卒後、自分達が同窓生として活動する意義を理解し誇りを持ち活動できるように支援している。 |
| ・京都府助産師会の運営に関する実績<br>第二副会長就任 | 平成23年5月～<br>平成25年5月 | 平成25年4月の京都府助産師会が公益法人となった。会の管理運営を役員として運営した。公益社団法人としての基礎知識を理事全員が学習し、弁護士を会の顧問に迎え、その体制作りにつとめた。日本助産師会とともに公益社団法人化を図れたことは、会員の社会での要請をうけたものと考えられ、会員の職能意識が高まり、現在の活動につながっている。 |
| ・学会活動に関する実績<br>第11回日本生殖看護学会学術集会開催(場所:ホテル京都エミナース)全国規模の学会　事務局を担当した。 | 平成24年～<br>平成25年9月 | ″第11回生殖看護学会学術集会事務局を本学看護学部　母子講座で開設、9月1日学術集会開催する。大会長;矢野惠子教授　夏山は事務局長を務める。多くの不妊に関する生殖補助医療が充実している昨今ではあるが不妊看護についてはまだまだ理解が浸透していない部分がある。今後も引き続き今分野における看護者の自己研鑽と啓蒙力が求められる。今学会では鍼灸治療に詳しい本学教員の講演もあり、多数の集客が得られたことは大きな成果であったと評価を受ける。 |
| ・京都府助産師会における教育活動の実績<br>京都府助産師会副実行委員長　就任 | 平成25年12月～<br>平成27年5月 | 平成27年5月21日に予定されている公益社団法人日本助産師会が主催する第71回日本助産師学会の開催地の公益社団法人京都府助産師会の副実行委員長に就任した。 企画運営。企画会議を開催。 平成27年5月の学術集会で当日の司会を務めた。 |
| ・京都府助産師会における教育活動の実績<br>平成31年10月近畿地区研修会<br>京都府助産師会実行委員　就任→　副実行委員長　就任 | 平成30年7月～現在<br>平成31年11月 | 京都府助産師会が次年度の近畿地区研修会の担当県になるため、教育委員長を中心に実行委員会が招集された。開催は平成31年10月19日・20日。会場について、京都学園大学が第一候補で提案されている。(第二候補は京都府立医科大学)　→　大学行事が重複することが考えられらため、最終的に　京都府立医科大学での開催が決定した。 |
| ・京都府助産師会における教育活動の実績 | 平成25年12月～<br>平成30年7月 | 京都府助産師会研究会が看護教育担当者を中心に組織され、<br>「京都府下における母乳育児支援の実際」について、長期的スパンで助産師会会員とも協働して、研究支援を行っている。<br>平成28年3月に日本助産学会学術集会にて第1報　示説発表。現在、第2報に向けて研究継続中。質的研究の学習会も継続中。 |
| | 平成30年5月25－26日<br>金沢県開催 | 日本助産師会　第74回総会において会長表彰を受賞。京都府助産師会での活動を評価いただいた。令和元年5月18日の京都府助産師会総会において会員の皆様に感謝を申しあげた。 |
| ・京都府助産師会における教育活動 | 平成29年5月～<br>平成30年7月 | 京都府助産師会5月通常総会にて承認後に理事(監事)就任　。1期2年間の任期。(平成31年5月) |
| | 平成30年7月～<br>現在(令和元年6月) | 京都府助産師会　令和元年5月通常総会にて理事(監事)再就任　。二期目の就任を依頼され、総会にて選挙を受け就任。監事の任務2年間の任期。(令和3年5月) |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1 クリニカルスタディ<br>特別付録国家試験対策<br>カード⑪ 母性看護学 | 共著 | 平成15年2月 | クリニカルスタディ<br>メヂカルフレンド社 | 共著者:岡島文恵、夏山洋子 | A4版 全8頁<br>31問 質問と解答<br>本人担当部分:カード全部分を監修:共著/単著 1枚目は7問、2枚目～4枚目は8問を掲載。4者択一問題とした。 |
| 2, 2009看護師国家試験最新予想必修問題集 | 共著 | 平成20年10月 | 臨時増刊号<br>ナーシングカレッジ<br>医学芸術社 | 共著者:明治国際医療大学 種池禮子、雨貝孝、松浦忠夫、中山登稔、小山田ゆみ子、峯尾徹、糸井恵、糸井啓純、小山敦代、森美春、田口豊恵、糸島陽子、菊池美代子、大平政子、山本美輪、永島すえみ、流郷千幸、桝本妙子、植村小夜子、夏山洋子、五十嵐稔子、山本明弘 | ″国家試験対策としてナーシングカレッジに予想必修問題集を掲載 A4版 必修問題チャレンジテスト 全P100～111 第1回30問 第2回106問<br>本人出題分:P102 問題NO.14 (15) 解答P78および P108 問題NO.12 (13) 解答P84 |
| 論文 | | | | | |
| 1 出産時期における夫婦の意識について(原著) | 共著 | 昭和60年8月 | ″京滋母性衛生学会<br>「京滋母性衛生学会雑誌」<br>第6巻第1号 | 共著者:村岡洋子、穐村郁代、久米和枝、福井 恵子、菅沼美奈子、西垣恵子、三井 政子 | p.6 ～ p.9 |
| 2 新生児黄疸と諸要因<br>-栄養法に焦点をあてて- | 共著 | 昭和63年9月 | 日本母性衛生学会<br>日本母性衛生学会誌<br>第29巻第1号 | 共著者:龍末規子、村岡(夏山)洋子、河合優美子、中嶋文子 | p.183～p.188 |
| 3 院内感染防止の視点から見た新生児ケアの検討 | 共著 | 昭和63年9月 | ″日本母性衛生学会<br>「日本母性衛生学会誌」<br>第29巻第1号 | 共著者:渡部信子、高杉陽子、村岡(夏山)洋子、由利はるみ、宮崎満寿子. | p.189～p.195 |
| 4 多胎妊婦への援助の検討(原著) | 共著 | 平成2年4月 | "京滋母性衛生学会<br>京滋母性衛生学会雑誌<br>第12巻 第1.2号 | 共著者:上之薗智子、犬丸陽子、日高美登里、河田佳子、水口一代、夏山洋子渡部信子、宮崎満寿子 | p.2～p.7 |
| 5 「間」からみた母子関係<br>(修士論文) | 単著 | 平成17年3月 | 立命館大学大学院<br>応用人間科学研究科 | 夏山洋子 | 全42頁 |
| 6 電気的乳頭-乳輪刺激で誘発された体性感覚誘発電位の解析 | 共著 | 平成17年3月 | 「明治鍼灸大学紀要」<br>大学プロジェクト研究 | 共著者:夏山洋子、藤田峯子、中山登稔 | P.194 |
| 7 母乳哺育を行っている母子の授乳行動に関する縦断調査 | 共著 | 平成21年7月 | ″第28回<br>日本看護科学学会学術集会<br>抄録P.488示説発表<br>母性衛生50 | 共著者:五十嵐稔子、竹下秀子、真鍋えみ子、夏山洋子、藤田峯子" | p.310～p.316 |
| 8.看護の視点から見た森林浴がもたらす効果(研究報告) | 共著 | 平成24年3月 | 明治国際医療大学誌,<br>7:21-33,2012.査読有 | 共著者:田口豊恵、矢野惠子、西山ゆかり、井村弥生、夏山洋子、中森美季、林朱美、松川泰子、北村雄二、荒木大治、山本明弘、寺谷愉理子、山田皓子 | p.21-p.33 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 9.挙児希望女性の一般産婦人科外来初診時期のニーズに関する検討. | 共著 | 平成27年 | 日本不妊カウンセリング学会誌 第14巻第2号 | 共著者:矢野惠子,大橋一友(大阪大学),高橋俊一(恵仁会田中病院),夏山洋子(京都学園大学),糠塚亜紀子(光華女子大学)、益本貴之,高田智子(恵仁会田中病院) | p. 191～p. 196 |
| 10.乳児の「泣き」に対する母親の対処行動に関する調査 | 共著 | 平成29年5月 | 明治国際医療大学誌, 2017.査読有 | 共著者:夏山洋子、(京都学園大学)、矢野惠子(金沢医科大学) | p. 1 ～9 |
| 11..乳幼児を育てる母親への野菜栽培による育児支援の効果 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学総合研究所所報 第20号 | 共著者:藤本美穂、今西誠子、夏山洋子、杉山智春、大城閑(京都学園大学) | p. 14 ～21 |
| 12.更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学総合研究所所報 第20号 | 共著者:夏山洋子、谷口光代、杉山智春(京都学園大学) | p. 91 ～100 |
| その他 | | | | | |
| (口頭発表)<br>1 助産師の新生児訪問における母親の満足度調査と今後の課題―4か月検診時の聞き取り調査から一 | 共同 | 平成18年3月 | 日本看護研究学会 第19回近畿北陸地方会学術集会・示説発表 | 夏山洋子、藤田峯子 | |
| 2.タッチケアによる自律神経と脳波および血流への影響 | 共同 | 平成20年12月 | 第28回日本看護科学学会 学術集会 抄録示説発表 | 共同発表者:夏山洋子、五十嵐稔子、藤田峯子 | P.508 |
| 3. 採血時のストレス指標としての唾液中アミラーゼ活性の妥当性 | 共同 | 平成20年12月 | 第28回日本看護科学学会 学術集会 抄録P.508示説発表 | 共同発表者:流郷千幸、山本美輪、荒川千登世、夏山洋子、柴田早苗 | P.508 |
| 4. 母乳哺育を行っている母子の授乳行動に関する縦断調査 | 共同 | 平成20年12月 | 第28回日本看護科学学会 学術集会 抄録P.488示説発表 | 共著者:五十嵐稔子、竹下秀子、真鍋えみ子、夏山洋子、藤田峯子 | P.488 |
| 5.乳児の「泣き」に対する母親の対処行動 | 共同 | 平成23年9月 | 第52回 日本母性衛生学会 示説発表 (於:京都 京都国際会議場) | 共同発表者:夏山洋子、糠塚亜紀子、矢野惠子 | |
| 6 産科医師不在施設での院内助産所開設過程における助産師の役割構築に関する研究 | 共同 | 平成23年9月 | 第52回日本母性衛生学会 示説発表 (於:京都 京都国際会議場) | 共同発表者:糠塚亜紀子、矢野惠子、夏山洋子 | |
| 7. 看護の視点から見た森林浴がもたらす効果 | 共同 | 平成24年3月 | 明治国際医療大学 学内助成研究発表 | 共著者:田口豊恵、矢野惠子、西山ゆかり、井村弥生、夏山洋子、中森美季、林朱美、松川泰子、北村雄二、荒木大治、山本明弘、寺谷愉理子、山田皓子 | |
| 8. A New Development in NursingCare-Daily applications of CAT: Healing Effect Developed by Nurses-<br>これからの看護, 日々の看護にいかす補完代替療法:看護者がもたらす癒しの効果 | 共同 | 平成24年3月 | 国際ケアリング学会 示説発表 (於:広島 日本赤十字広島看護大学) | 共同発表者:田口豊恵、夏山洋子、中森美季、永島すえみ、山田皓子 | |
| 9京都府中北部地域における産科閉鎖後の助産師外来および院内助産所開設の過程分析 | 共同 | 平成24年5月 | 第26回日本助産学会学術集会 示説発表 (於:札幌 札幌コンベンションセンター) | 共同発表者:糠塚亜紀子、夏山洋子、矢野惠子 | |
| 10.乳児の"泣き"に対する母親の思い | 共同 | 平成24年5月 | 第26回日本助産学会学術集会 示説発表 (於:札幌 札幌コンベンションセンター) | 共同発表者:夏山洋子、糠塚亜紀子、矢野惠子 | |
| 11 これからの看護 看護に生かす補完代替療法への挑戦 メディカルアロマセラピーの現状と課題–産婦人科領域の取り組みから- | 共同 | 平成24年7月 | 第38回日本看護研究学会 学術集会交流集会 Ⅲ日本看護研究学会 (於:沖縄 沖縄コンベンションセンター) | 共同発表者:田口豊恵、夏山洋子、中森美季、永島すえみ、山田皓子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 12 京都北部地域の助産師による産科診療休止から助産師外来開設までの過程－医師との関係性からの分析- | 共同 | 平成24年11月 | 第53回日本母性衛生学会<br>学術集会<br>（於:福岡 アクロス福岡） | 共同発表者:糠塚亜紀子、夏山洋子、矢野惠子 | |
| 13 乳児の泣きに対する母親の対処行動における抱き癖に関する検討<br>－ | 共同 | 平成24年11月 | 第53回日本母性衛生学会<br>学術集会<br>（於:福岡 アクロス福岡） | 共同発表者:夏山洋子、糠塚亜紀子、矢野惠子 | |
| 14 Status of and challenges facing aromatherapy<br>in the field of medicine<br>- From initiatives in gynecology and obstetrics-<br>(看護に生かす補完代替療法 産婦人科領域でのメディカルアロマセラピーの現状) | 共同 | 平成25年11月 | 第2回GUNTM 国際学会<br>（於:京都市 京都エミナース） | 共同発表者:夏山洋子、山田皓子 | |
| 15. 助産師である看護管理職の産科診療休止から助産師外来開設までの思いと行動 | 共同 | 平成25年10月 | 第54回 日本母性衛生学会<br>学術集会<br>（於:埼玉県 大宮ソニックシティ） | 共同発表者:糠塚亜紀子、夏山洋子、矢野惠子 | |
| 16. 疑似森林浴環境がもたらす心理学的及び生理学的効果－看護の視点から見た医療施設内での疑似森林浴効果の応用－ | 共同 | 平成25年3月 | 学内公募研究助成成果発表会<br>－平成24年度学内公募研究成果報告－<br>（於:京都府 明治国際医療大学） | 共同発表者:矢野惠子、夏山洋子、糠塚亜紀子、山本明弘、柴田早苗、北村雄児 | |
| 17.助産師である看護管理職の産科診療休止から助産師外来開設までの思いと行動」 | 共同 | 平成25年10月 | 第54回日本母性衛生学会<br>学術集会<br>（於:埼玉県 大宮ソニックシティ）<br>発表 | 研究代表者:糠塚亜紀子、矢野惠子、夏山洋子 | |
| 18. 疑似森林環境がもたらす心理学的および生理学的効果の検討<br>－医療施設内での看護実践への活用に向けて－ | 共同 | 平成25年12月 | 第33 回日本看護科学学会<br>学術集会<br>（於:大阪 国際会議場） | 共同発表者:矢野惠子、夏山洋子、糠塚亜紀子、山本明弘、北村雄二 | |
| 19. 更年期のストレス軽減へのアロマ芳香浴の効果<br>－日本古来の精油での試み－第1報 | 共同 | 平成26年3月 | 学内公募研究助成成果発表会－<br>平成25年度学内公募研究成果報告－<br>（於:京都府 明治国際医療大学） | 共同発表者:夏山洋子、矢野惠子、糠塚亜紀子 | |
| 20.不妊症患者に対する婦人科外来初診時の看護のあり方に関する検討」 | 共同 | 平成26年10月 | 日本カウンセリング学会 | 研究代表者:矢野惠子、夏山洋子、糠塚亜紀子ほか | |
| 21.助産師である看護管理職の産科診療休止から助産師外来開設までの思いと行動 | 共同 | 平成26年10月 | 第55回日本母性衛生学会<br>学術集会 発表 | 研究代表者:糠塚亜紀子、矢野惠子、夏山洋子 | |
| 22. 更年期のストレス軽減へのアロマ芳香浴の効果 －日本古来の精油での試み－第2報 | 共同 | 平成27年3月 | 学内公募研究助成成果発表会－<br>平成26年度 学内公募研究成果報告－<br>（於:京都府 明治国際医療大学） | 共同発表者:夏山洋子、矢野惠子、糠塚亜紀子 | |
| 23.更年期のストレス軽減へのアロマ芳香浴の効果<br>－日本古来の精油での試み－第2報 | 共同 | 平成27年3月 | 第29回 日本助産学会学術集会<br>示説発表<br>（ 於:東京 ） | 共同発表者:夏山洋子、矢野惠子 | |
| 24. 更年期のストレス軽減へのアロマ芳香浴の効果<br>－日本古来の精油での試み－第3報 | 共同 | 平成28年3月 | 第30回 日本助産学会学術集会<br>示説発表<br>（於:京都 京都大学時計台ホール） | 共同発表者:夏山洋子、岡本留美、神原祐美、矢野惠子 | |
| 25.京都府における母乳育児支援の現状と課題」 | 共同 | 平成28年3月 | 第30回 日本助産学会学術集会<br>示説発表<br>（於:京都 京都大学時計台ホール） | 研究代表者:齋藤祥乃、千葉陽子、夏山洋子、乾つぶら、岡崎久実子、岡本美由貴、味谷ゆかり | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 26.Implementation and effectiveness of Adolescent Education Peer support for University students as Carried Out by Midwife students<br>助産学生による大学生に対する思春期教育ピアサポートの効果に関する検討 | 共同 | 平成29年6月 | 第31回 ICM Congress<br>(於:CANADA Tronto ・ MetroToronto Convention Centre) 示説発表 | KeikoYano, Maya okuda, Santa Shin, Xenia Fukuda.<br>Yuki mori, kyoka Yuraku,<br>Yoko Natsuyama, Rumi Okamoto, Yumi Kanbara,<br>Ciharu Sugiyama, MitsuyoTaniguchi | |
| 27. 多世代をつなぐ育児支援活動の参加者の思い―テキストマイニングによる分析― | 共同 | 平成29年12月 | 第31回 日本看護科学学会<br>学術集会 示説発表<br>(於:仙台国際医療センター) | 共同発表者:藤本美穂、今西誠子、高尾憲司、谷口光代、夏山洋子、杉山智春 | |
| 28. Effect of music on intergenerational exchange between children, elderly and college students | 共同 | 平成30年7月 | 12th Biennial Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery, 17-20 July 2018, Cairns,<br>Australia WHOCC 2018 | Miho Fujimoto, Tomoko Imanishi, Yoko Natsuyama, Chiharu Sugiyama | |
| 29. Effects of a Child Care Support Program Aimed at Intergenerational Interaction | 共同 | 平成30年7月 | 12th Biennial Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery, 17-20 July 2018, Cairns,<br>Australia WHOCC 2018 | Tomoko Imanishi, Miho Fhujimoto, Yoko Natsuyama, Chiharu Sugiyama | |
| 30.更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共同 | 平成30年12月15-16日 | 第32回 日本看護科学学会<br>学術集会 示説発表<br>(於:香川県 ひめぎんホール) | 共著者:夏山洋子、谷口光代、杉山智春<br>(京都学園大学) | |
| 学外講演及び研究指導 | | | | | |
| 1 研究計画書の作成 | 共同 | 平成23年7月 | 京丹後市立弥栄病院看護部研修会(京丹後市立弥栄病院看護部:京丹後市立弥栄病院), 2011.7.2 | 矢野惠子、夏山洋子、糠塚亜紀子 | |
| 2 統計学の考え方と伝え方 | 共同 | 平成23年10月 | 京丹後市立弥栄病院看護部研修会(京丹後市立弥栄病院看護部:京丹後市立弥栄病院)<br>2011.10.22 | 夏山洋子、糠塚亜紀子、荒木大治 | |
| 3 午前「看護の独自性と補完代替療法」・午後「アロマセラピーの基礎―誰でも使えるアロマセラピーとマッサージの基本―」 | 共同 | 平成23年11月 | 障がい者看護研究会(びわこ学園医療福祉センター滋賀県野洲地域交流棟)2011.11.27 | 夏山洋子、山田皓子 | |
| 4 研究計画立案(福知山市立福知山市民病院看護部研修会) | 共同 | 平成24年6月 | 2012.6.29(福知山市立福知山市民病院看護部研修会 | 矢野惠子、糠塚亜紀子、夏山洋子 | |
| 5 一般演題 座長 平成24年京都母性衛生学会・学術講演会:一般演題 座長 | 単独 | 平成24年10月 | 京都大学医学部人間健康科学研究科 2012.10.20 | 夏山洋子 | |
| 6 サクセスフルエイジングにむけて―男女の更年期の健康と老年期の性～アロマ演習を含む～ | 共同 | 平成24年10月 | 京カレッジ市民教養講座:キャンパスプラザ京都2012.10.28 | 夏山洋子、糠塚亜紀子、矢野惠子" | |
| 7 研究計画書指導<br>福知山市立福知山市民病院看護部研修会" | 共同 | 平成25年9月 | "福知山市立福知山市民病院看護部研修会2013.9.6<br>福知山 | 夏山洋子、糠塚亜紀子、矢野惠子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 学外講演及び研究指導(つづき) | | | | | |
| 8 研究指導(福知山市立福知山市民病院看護部研修会) | 単独 | 平成25年10月～<br>平成26年3月 | 福知山市立福知山市民病院看護部研修会<br>2013.10月～2014.3月 | 夏山洋子 | |
| 9 アロマによる心身のリラックス効果～柔らかな香りとともに～ | 単独 | 平成25年7月 | 京都府中丹西保健所 ダウン症児の母の会でのアロマ研修会 講師<br>(於:福知山) 2013.7.10 | 夏山洋子 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 育Gの会 | 平成28年4月より、京都学園大学、育児支援活動に参加。同活動は、右京区のまちづくり支援制度支援制度より助成を受け平成27年度から活動。活動目的は、子育てをする中で育児(子どもの育ち)と育自(育児する親自身の育ちと育児支援する高齢者や学生の育ち)の支援であり、平成27年度は7回開催、述べ約150名の参加、平成28年度は畑事業5回に加え第6回 音楽会(マラカス作り)を含め盛況に終了した。親子参加は予約制とし、自身が植えた苗の成長収穫を確実に行うように配慮した。現在、活動継続中である。(学内研究助成)<br>本活動は、平成28年度、大学内の活動を表彰するはハピネス賞を受賞した。<br>平成30年度の右京区の助成金を申請予定。4年生の7名の学生の研究方法論Ⅰ・研究方法論Ⅱ において「学生による母子への災害支援活動 世代を超えた活動の企画 」への取り組みを考えている。9月11月までに右京区の児童館や本学、避難訓練会場等において支援活動を行い、アンケート調査にて評価を行い結果をまとめる。 |
| | 平成30年度の右京区の助成金を申請後、受託され実施した。4年生の7名の学生の研究方法論Ⅰ・研究方法論Ⅱ において「学生による母子への災害支援活動 世代を超えた活動の企画 」への取り組みを考えている。9月11月までに右京区の児童館や本学、避難訓練会場等において支援活動を行い、アンケート調査にて評価を行い結果をまとめた。4年生の活動を2－3年生が見学を行ったこともあり、今後に繋がる活動として期待される。地域での防災活動としても9月の地域避難訓練の日に、山之内小学校体育館で、学生達が防災で調べた「避難グツズ」「妊婦の為の切迫早産予防」「避難持ち出し物品」お金とかからない物品 のプレゼンテーションを行うことができ地域でも好評であった。 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　松井 達也 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ・看護体験（日本看護協会）の活用により、看護観を育成する | 2015年4月～2016年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」（大学共通科目、1年次配当、半期、必修単位2単位）において使用した。日本看護協会ホームページ上の「看護体験」の中から自分の感銘を受けた体験についてレポートさせた。その中で、自分の憧れる看護師像についてイメージさせた。 |
| ・コミュニケーションについてロールプレイングを用いて学んでもらう | 2015年4月～2015年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」（大学共通科目、1年次配当、半期、必修単位2単位）において使用した。自分の思いを伝える「アサーション」という手法について、教育番組のDVDを視聴する。その後、3～4人一組となり、実際にロールプレイングを行い、実際に体験してもらう。 |
| ・京学なびのアンケートを活用する | 2015年4月～2016年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」（大学共通科目、1年次配当、半期、必修単位2単位）において使用した。講義の内容、レポートの作成で困っていることなどを毎回、京学なびのアンケートで記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。 |
| ・京学なびのアンケートを活用する | 2015年9月～2016年1月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミB」（大学共通科目、1年次配当、半期、選択単位2単位）において使用していた。講義の内容、レポートの作成で困っていることなどを毎回、京学なびのアンケートで記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。 |
| ・闘病記を読んでレポートを書かせた | 2017年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」（大学共通科目、1年次配当、半期、選択単位2単位）において実施した。より身近な闘病記を読んでレポートを書かせることで当事者の気持ちを実感できるようにした。 |
| ・講義にDVDを活用し、課題と連動させた | 2016年4月～ | 京都先端科学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位）、「精神看護学援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位）において使用していた。精神疾患については、まずは関連する疾患について、DVDを視聴してもらった。DVDの内容も教育用DVDだけではなく、ニュースなどのテレビ番組などをなるべく活用することで、精神疾患のイメージを身近で、興味あるものととらえられるように工夫した。<br>また、単に視聴させるだけではなく、課題を提示し、出欠表とともに提出させることで、より主体的に視聴することにつながった。 |
| ・講義にDVDを活用し、感想文をOneDriveで提出させ共有できるようにした | 2019年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミⅠ」（大学共通科目、1年次配当、半期、選択単位2単位）において実施した。闘病に関連する、DVDを視聴してもらった。DVDの内容も教育用DVDだけではなく、ニュースやドラマなどのテレビ番組などをなるべく活用することで、イメージを身近で、興味あるものととらえられるように工夫した。<br>また、課題をOneDriveで提出させ共有できるようにすることで、より主体的に発表できることにつながった。 |
| ・講義に新聞記事を活用する | 2016年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位）において使用していた。精神疾患に関連する新聞記事を京学なびの授業資料に添付し、精神疾患のイメージを身近で、興味あるものととらえられるように工夫した。 |
| ・京学なびのアンケートを活用する | 2016年4月～2017年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位）において使用した。講義の内容などで困っていることなどを毎回、京学なびのアンケートで記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。 |
| ・京学なびのQ&Aを活用する | 2019年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」（大学共通科目、1年次配当、半期、選択単位2単位）において実施した。1週間のマイステップの報告や講義の内容などで困っていることなどを毎回、京学なびのQ&Aに記載してもらい、フィードバックをしながら講義の改善や個別指導に役立てた。 |

| 1　教育内容・方法の工夫(続き) | | |
|---|---|---|
| ・講義にDVDを活用し、課題と連動させた | 2016年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)、「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。精神疾患については、まずは関連する疾患について、DVDを視聴してもらった。DVDの内容も教育用DVDだけではなく、ニュースなどのテレビ番組などをなるべく活用することで、精神疾患のイメージを身近で、興味あるものととらえられるように工夫した。<br>また、単に視聴させるだけではなく、課題を提示し、出欠表とともに提出させることで、より主体的に視聴することにつながった。 |
| ・出欠表のアンケートを活用する | 2018年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用した。講義の感想、質問など、毎回、出欠表に記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。また、機械によらないより確実な出欠管理も可能になった。 |
| ・講義に国家試験を活用する | 2016年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。講義に関連する項目について、国家試験の過去問題を解いてもらうことで、国家試験におけるポイントに意識が向けられるように工夫した。 |
| プレゼンテーション用レーザーポインターの活用 | 2016年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。プレゼンテーション用レーザーポインターを用いることで、授業中に自由な場所からコンピュータを操作できるようにした。 |
| グループワークの活用 | 2016年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。事例と国家試験を組み合わせた課題について、ペアワークまたはグループワークを取り入れ、学生同士が互いの考えを出し合い協力でき、学びを深められるようにした。 |
| 課題レポートの提出 | 2016年4月～2018年7月 | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。統合失調症、薬物依存症など、講義に関連した書籍や新聞記事などを読んで、支援の在り方について、考えさせる課題レポートを提示した。定期試験だけでは測ることができない、学生の理解力、思考力を知ると同時に、日頃の学習に対する努力を評価するために実施した。 |
| 京学なびのアンケートを活用した課題レポートの提出 | 2018年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。統合失調症、薬物依存症など、講義に関連した書籍や新聞記事などを読んで、支援の在り方について、考えさせる課題レポートを提示した。さらに京学なびを活用することにより、学生がIT技術を用いて、課題に取り組めるようにした。<br>定期試験だけでは測ることができない、学生の理解力、思考力を知ると同時に、日頃の学習に対する努力を評価するために実施した。 |
| 京学なびのアンケートを活用した課題提出 | 2017年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)において使用した。DVD視聴にあたって、課題を提示し解答を京学なびのアンケートに記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。 |
| 京学なびのアンケートを活用した課題提出 | 2017年4月～ | 京都学園大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用した。DVD視聴にあたって課題を提示し、また過去の国家試験を提示し、解答を京学なびのアンケートに記載してもらい、講義の改善や個別指導に役立てた。 |
| ロールプレイングを用いて、患者への関わり方や患者の気持ちを体験してもらう | 2017年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用した。事例について5~6名の学生のグループで討議しながら、役割分担を行い、ロールプレイングを行い、撮影した。その中で、患者への関わり方や患者の気持ちを実際に体験してもらった。その後、クラス全体でそれを視聴し、学びの共有と振り返りを行った。 |
| ロールプレイングの事例を用いてグループ・ワークを通して、記録の記載を行う | 2017年10月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用した。ロールプレイングを通じて学びを深めた、急性期の患者の事例を用いてグループで記録の記載を行い、イメージしやすい状態で、さらに、学びを共有しながら、主体的に学ぶことができた。さらに、事前学習の慢性の事例を自己で記載するための演習としての効果もあった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（続き） | | |
| プロセスレコードやロールプレイングについて、自分たちの学びを後輩に伝えることで、教育活動について体験してもらう | 2018年4月～ | 京都学園大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「キャリア・サポート実践講座A」(専門科目、4年次配当、半期、必修単位2単位)において使用する。自らが昨年学んだ、精神演習のプロセスレコードやロールプレイングについて、自分たちの学びを後輩に伝えた。5~6名の学生のグループで討議しながら、役割分担を行い、指導計画を立て、実施する。その後、クラス全体でそれを振り返り、教育活動の学びについての共有を行う。 |
| 講義用教材(レジュメ) | 2018年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「看護研究演習Ⅰ」(専門科目、4年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。文献研究に焦点を当て、文献研究・検討を実施するための方法を実際の研究論文を参照しながら、確認できるように工夫を行った。 |
| ・実習用参考教材(レジュメ:カンファレンス実施要領) | 2017年10月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学実習」(専門教育科目、3年次配当、半期、必修2単位)において使用している。カンファレンスのテーマ例、カンファレンスの実施手順を提示することで、カンファレンスを実施報告会の場ではなく、テーマにそって学びを深め、また就職後も意識的にカンファレンスに参加できるように意識づけている。 |
| ・医学書院WEBの実習への活用 | 2018年10月～ | 京都先端科学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学実習」(専門教育科目、3年次配当、半期、必修2単位)において使用した。実習の初日と最終日に国試問題を医学書院WEBを活用して行わせた。実習前後の精神のケアの振り返りになると同時に国試対策にもつなげることができた。 |
| 実習用参考教材(事前学習:看護問題としての生きづらさの記載) | 2017年10月～ | 京都先端科学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学実習」(専門教育科目、3年次配当、半期、必修2単位)において使用している。「精神看護学援助論演習」においては急性期の患者の事例を用いて行った生きづらさの記載について、慢性の事例を提示し、記載させた。このことを通じて、実習記録の記載を自ら、体験しながら学ぶことができ、実習での記録記載に関するリアリティショックを和らげることができた。 |
| ・講義用教材（レジュメ） | 2015年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミA」(大学共通科目、1年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。レポートの作成やスライドの作成の仕方について、記載例を挿入しながら、初学者でも学びやすく、随時自己学習できるように工夫した。 |
| ・講義用教材（レジュメ） | 2015年9月～2016年1月 | 京都先端科学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「スタートアップゼミB」(大学共通科目、1年次配当、半期、選択単位2単位)において使用していた。論文の作成、スライドの作成、ポスターの作成について、記載例を挿入しながら、初学者でも学びやすく、随時自己学習できるように工夫した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ・講義用教材（ipad用資料） | 2016年4月～2017年7月 | 京都先端科学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)、「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。使用しているﾚｼﾞｭﾒを空欄とし、空欄に入れる正しい言葉をipad資料として、京学なびに添付し、スクリーンに投影すると同時にipadで確認できるように、学生が興味を持って、受講したり、随時自己学習できるように工夫した。 |
| ・講義用教材（ipad用資料と配布用ワード資料） | 2018年4月～ | 京都先端科学大学健康医療学部看護学科の専任講師として担当の「精神看護学援助論」(専門科目、2年次配当、半期、必修単位2単位)、「精神看護学援助論演習」(専門科目、3年次配当、半期、必修単位2単位)において使用していた。学生がより学びやすいように、学生への資料はワード文書で作成し、スクリーンへの投影についてはパワーポイントを使用した。学生には事前にipad資料として、京学なびにパワーポイントを添付し、スクリーンに投影すると同時にipadで確認できるように、学生が興味を持って、受講したり、随時自己学習できるように工夫した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・第31回アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会(ASW)京都大会の準備と分科会(看護学生対象)の企画 | 2016年10月29日、30日 | ASWが開催されるに伴って、スタッフとして、運営会議を含む準備ならびに当日(10月29日、30日)の運営を行った。看護の分科会のタイトルは「看護をするうえで知っておこう！意外に気づかない飲酒にまつわる健康障害」であり、本学の学生も参加して、アルコール依存症の理解、当事者の実際の体験を聴いてもらうことで、看護や研究活動に対する興味を高めることができた。<br>また、グループワークを通じて、感じたこと、考えたことを共有して、アルコール依存症からの回復に必要なこと、私たち1人1人ができることについて、考えを深めることができた。 |
| ・京都府看護学校連絡協議会、研修会の企画 | 2016年8月31日 | 京都府看護学校連絡協議会で、研修会の企画を立て、その運営に関わってた。8月31日(水)14時～16時に、治療における人間関係づくりを研究されている第一人者の田村祐樹先生をお迎えし、「ストレスケアとコミュニケーションスキル」というテーマで開催した。 |
| ・関西アルコール看護研究会での活動 | 2017年4月～ | 関西アルコール看護研究会で幹事の1人として運営に関わり、研修会の企画や自助グループの見学会を催したり、アルコール依存症の理解を広めるべく活動を行う。 |
| ・アディクション問題に関わる支援プログラム | 2018年5月～2019年2月 | アディクション問題に関わる支援プログラムに年間を通じて参加し、大学への教育活動や京都市内での援助職の支援に役立てた。 |
| ・京都集団精神療法研修会 | 2018年5月～2019年2月 | 集団精神療法に関する研修会に年間を通じて参加し、大学での教育活動や京都市内での自助グループのミーティングに役立てた。 |
| ・武庫川女子大学での依存症に関連する講義への参加 | 2018年4月～2018年8月 | 武庫川女子大学で開催された対人援助やアディクションに関する講義やゼミに半年間を通じて参加し、アルコール依存症の研究や大学での教育活動に役立てた。 |

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 1 アルコール依存症患者に対する看護師の具体的な関わり(2) | 単著 | 2018年3月 | 京都学園大学健康医療学部紀要　第3巻 | | pp71～77 |
| 2 アルコール依存症の看護における、チームアプローチの実際 | 単著 | 2018年3月 | 日本アルコール関連問題学会雑誌　第19巻2号 | | pp111～116 |
| その他 | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　光井　朱美 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）<br>レスポンスペーパーの活用 | 2018年9月～12月 | 担当課目「公衆衛生看護管理論」及び「公衆衛生看護活動論」において学生の意見を取り入れる工夫として「レスポンスペーパー」を作成し取り入れた。毎回の授業終了後に学生が授業の理解度の振り返りを行うだけではなく、感想や質問などを自由に記載し、教員はこれにコメントを書き返却することを繰り返し行う。学生の理解状況に応じた授業内容に反映させることができるだけではなく、コメントを返すことで学生の学習意欲を高めることにもつながる機会となっている。 |
| 地域活動の展開を考えるグループ学習を積み重ねる演習形態の工夫 | 2018年9月～12月<br>2018年4月～7月 | 担当課目「公衆衛生看護活動管理論」及び「公衆衛生看護活動論」「公衆衛生看護活動展開論」において保健師の実践能力として必要な知識と技術を獲得をするための学習方法として行った。管理論及び活動論では母子、難病、結核の事例を設定し、グループ単位で事例の問題解決に向けた活動、特に家庭訪問での展開を検討させ、ロールプレイの形態で発表させた。「展開論」では、地域及び住民の実態、課題の抽出、その課題解決に向けた計画とうについて、母子、老人、成人のグループに分けグループ単位での継続的な学習を進める。 |
| 視聴覚教材の活用 | 2018年9月～12月<br>2018年4月～7月 | 担当課目「公衆衛生看護活動管理論」及び「公衆衛生看護活動論」「公衆衛生看護活動展開論」において、母子や難病の事例の理解をより深める方法として視聴覚教材を取り入れた。 |
| 実習における地域活動の展開を考えるグループ学習を積み重ねる演習形態の工夫 | 2018年5月～6月<br>2018年9月～10月<br>2019年6月 | 担当課目「産業保健・学校保健実習」、「公衆衛生看護活動展開実習」の実習に向かう事前学習として、必要な知識と技術を獲得をするための学習方法として行った。実習に取り組む姿勢、守秘義務などの全体の項目並びに、実際の事例を設定し、グループ単位で事例の問題解決に向けた対応について議論、ロールプレイの形態で発表させた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| （学術論文） | | | | | |
| 母親と保健師の信頼関係の概念分析 | 共著 | 2019.1 | 京都府立医科大学<br>看護学科 紀要 vol.28 | 光井朱美<br>星野明子 | |
| その他 | | | | | |
| （学会発表等） | | | | | |
| 性被害児童の特徴及び児童支援のための連携に関する一考察～心理テストを用いて～ | 共同<br>（示説） | 平成27年10月 | 第73回日本公衆衛生学会<br>（長崎） | 共同発表者：上松幸一、光井朱美<br>口説者：光井朱美<br>本人担当：主たる研究者 | |
| Trial of an on-campus teaching method of community diagnosis to reinforce an understanding of people's lifestyles | 共同<br>（示説） | 平成30年10月 | EAFONS2018<br>（韓国） | Shiho Kawata, Hiroko Takizawa, Akemi MitsuiFaculty of Health and Medical Science, Department of nursing, Kyoto Gakuen University | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (学会シンポジウム) | | | | | |
| 心理職がソーシャルワーカーを経験することでみえてくるもの一児童虐待対応の現場でー | 共同<br>(示説) | 平成27年10月 | 日本子ども虐待防止学会 第22回学術集会<br>(大阪) | 共同発表者:吉村拓実、上松幸一、<br>衣川修平、南博貴、三木馨、宮井圭右、川﨑二三彦、光井朱美<br>本人担当:シンポジスト | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | | |
|---|---|---|
| 平成27年度 新人保健師研修会講師(全体研修)(京都府) | 平成28年2月 | テーマ「児童虐待を通して考える保健師の役割」 |
| 平成28年度第2回八幡市要対協スキルアップ講習会講師(京都府八幡市) | 平成29年1月 | テーマ「連携で児童虐待を予防しよう～ネグレクト家庭をみんなで見守る方法～」 |
| 平成28年度母子保健コーディネーター研修講師(大阪府) | 平成29年1月 | テーマ「乳児期前半期における乳児と家庭への支援」 |
| 平成28年度母子保健研修講師<br>(大阪府箕面市) | 平成29年3月 | テーマ「特定妊婦・要支援妊婦への支援について」 |
| 姫路市児童虐待防止研修会(兵庫県姫路市) | 平成29年10月 | テーマ「児童虐待の予防や支援 ～関係機関の役割や連携について～」 |
| 平成29年度 「児童虐待予防研修～保健師等スキルアップ研修～」講師(大阪府) | 平成30年1月 | テーマ「「ロールプレイ等を踏まえてアセスメント、組織判断について」ロールプレイ、講義 |
| 平成29年度 「児童虐待予防研修～保健師等スキルアップ研修～」講師(大阪府) | 平成31年1月 | テーマ「「ロールプレイ等を踏まえてアセスメント、組織判断について」ロールプレイ、講義 |
| 保護者支援プログラム(京都市児童相談所) | 平成29年9月～12月<br>平成30年9月～12月 | MY TREEペアレンツ・プログラム実施のスタッフ |
| 大阪市阿倍野区(大阪市要保護児童対策地域協議会機能強化事業)の研修の講師 | 平成31年1月 | テーマ「虐待事例と民生委員・児童委員の関わり」についての研修の講義 |
| 大阪市要保護児童対策地域協議会強化事業のSV<br>(大阪市阿倍野区) | 平成30年4月～ | テーマ「虐待事例と民生委員・児童委員の関わり」についての研修の講義 |
| 京都先端科学大学市民講座 | 平成31年2月 | テーマ「いつまでも、いきいき元気で過ごすために」 口から元気になろう |
| 東大阪市要保護児童対策地域協議会のSV | 2019年4月～ | テーマ「虐待事例と民生委員・児童委員の関わり」についての研修の講義 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　吉田　乃里子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

## Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1）仏教看護論Ⅰにおける状況認知アプローチに基づく協同学習による授業 | 2016年4月～2017年3月 | 京都光華女子大学健康科学部看護学科において「仏教看護論Ⅰ（倫理）」において、状況認知アプローチに基づく学生主体の協同学習、説明授業を実施した。目的、症例紹介し死生観・倫理観について各グループに分かれて意見交換をおこなった。評価項目として、能動的な参加による相互学習や共有化を加えた。 |
| 2）大学看護学科における「看護管理（医療安全）」授業担当 | 2016年4月～2017年3月 | 京都光華女子大学健康科学部看護学科において「看護管理概論Ⅰ（医療安全）」について担当した。安全の概念、看護安全学の歴史と発生予防対策の実際について理論・具体的な指針・マニュアル、対策・改善事例を用いた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1）大学院における「看護安全学」の授業担当 | 2018年4月～現在に至る | 京都光華女子大学大学院看護学研究科修士課程において「看護安全学」の授業を担当。①安全の概要と倫理的意味②ヒューマンエラー要因分析と安全との関係③コミュニケーションエラー④臨床現場における事故の回避、その対策について具体的な事例と理論とを連動させ主体的な学修の場とした。 |

## Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| （研究助成）<br>口腔細菌測定器を用いた慢性期口腔ケアの費用対効果分析 | 共同 | 2015年10月 | 第18回<br>医療経済研究機構研究 | 青木恵子、赤井研樹 | |
| その他(学会発表) | | | | | |
| 1. 看護師による細菌数測定装置「細菌カウンタ」を用いた中期的口腔ケアの検証-慢性期の低ADL高齢者の場合- | 共同 | 2017年4月 | 第14回日本口腔ケア学会 | 青木恵子、赤井研樹、永長周一郎 | |
| 2. 高齢者の誤嚥性肺炎再発予防を目的とした看護師の口腔ケア-退院指導におけるその重要性の認識と遂行度との関係- | 単独 | 2018年6月 | 第15回日本口腔ケア学会 | | 167頁 |
| その他(投稿) | | | | | |
| 地域包括ケアシステムにおける当院の役割 | 単著 | 2017年10月 | 日本看護協会出版会<br>「看護」(vol.69.No.13) | | 91頁 |

## Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| （学会活動） | |
| 2004年　2月～ | 認定看護管理者会会員　（　～2016年近畿地区ブロック役員） |
| 2013年　4月～ | 日本口腔ケア学会会員 |
| 2018年10月～ | 日本老年看護学会会員 |
| 2018年10月～ | 日本ヒューマン・ナーシング研究学会会員 |
| 2013年4月～2018年3月 | 京都府看護人材確保支援事業（つながりネット）検討委員会委員<br>医療・介護・福祉の現場を退職する看護職や休職中の看護職のためのサイト運営、復職支援・相談、研修企画を京都府や関係団体と共に推進した |
| 2013年4月～現在に至る | 京都府看護協会教育委員会委員（認定看護管理者教育ファーストレベル・セカンドレベル）<br>看護管理者の育成を目的とし、2012年、2018年のカリキュラム改正、研修の企画・運営に参画している<br>ファーストレベル研修：「労務管理」（労働法規、就業規則、健康管理、ライフワークバランス、ハラスメント対策）、演習支援者<br>セカンドレベル研修：「人材活用・人材育成」（人材資源の活用、キャリア開発・支援、人材育成計画）、演習支援者 |

## Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　嘱託講師 | 氏名　江頭　典江 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | 2015年6月 | 「フィジカルアセスメント」では、Skills Simulation Center(大阪市大のスキルアップ施設)で医師の協力を得た指導と模擬テストの授業を共同で運営した。 |
| | 2016年6月～ | 排泄援助技術、与薬援助技術の授業でジグソー学習法を取り入れ、協同による互恵的な学習を試みた。 |
| | 2017年6月～ | 日常生活をおくる身体機能面から考えるヘルスアセスメントを毎回テーマを設けて教授した。 |
| | 2017年10月～ | 看護過程を理解するため協同教育手法を取り入れたグループ作業を取り入れ、協同による互恵的な学習を試みた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>第15回協同学習を用いた看護教育研究会にて研究発表<br>「与薬の援助技術の導入にジグソー2を用いて」 | 2017年1月 | 看護技術の演習に先立つ知識確認の授業に協同教育の手法であるジグソー学習法を取り入れ、学び合える空間や資料を共有した。その経緯や課題を紹介した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| (ポスター発表) | | | | | |
| 看護過程を用いた実習の困難性の実態―看護専門学校の調査から― | 単独 | 2017年8月 | 日本看護研究学会第43回学術集会 | | |
| 看護過程モデルの導入をめぐる看護基礎教育の歴史的考察 | 単独 | 2018年8月 | 日本看護歴史学会第32回学術集会 | | |
| 看護過程から導かれる看護ケアの総合的文献レビュー | 単独 | 2018年9月 | 日本看護技術学会第17回学術集会 | | |
| Difficulties in nursing practices using the nursing process: A study of nursing students in Japan | 単独 | 2017年10月 | International Nursing | | |
| (ポスター発表) | | | Research Conference 2017 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本看護研究学会会員 | |
| 日本看護科学学会会員 | |
| 日本看護技術学会会員 | |
| 日本看護診断学会会員 | |
| 日本看護歴史学会会員 | |
| 日本看護学会会員 | |
| 日本協同教育学会会員 | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　嘱託講師 | 氏名　熊谷 知実 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「情報リテラシー」の授業におけるデータ交換法の確実な実践と自発的な課題提出の促進 | 2015年4月～ | 様々な電子データ交換方法を身につけさせるため、京学なび、電子メール等、毎週条件を変えて、学生たちにその日の課題を提出させるようにしている。当然のことながら、その日の課題を提出しない学生には基礎点を与えない。課題を正確に効率よく仕上げるため、学生は頻繁に質問の手を挙げながら、必死に課題製作に取り組んでいる。怠けている学生は見られない。 |
| 「ドイツ語会話」の授業前から、ドイツ語で話すムードをつくる | 2015年4月～ | 言語感覚を養うため、休み時間にできるかぎり学生にドイツ語で話しかけ、ドイツ語で応じさせるようなムードをつくりあげる。「すごい！」「残念！」「もう一度！」などといった、日常会話によくでてくる基本表現は何度も繰り返して、遊びの感覚で学生に身につけさせる。「ドイツ語による発話を躊躇しない」雰囲気をつくりあげるため、休み時間からクラスにそのムードを持ち込むことが何よりも重要である。 |
| 「ドイツ語会話」の授業導入時における映像資料の有効活用 | 2015年4月～ | 毎時間の授業の導入として、ドイツ事情を紹介するテレビ番組を5分ほど視聴させ、ドイツにおける習慣、ジェスチャー、日本との違いなどについて説明する。さらに簡単なクイズを盛り込んで、ドイツ現代社会への関心を促すよう心がける。学生に「ドイツに行きたい」と思わせること、学習モチベーションをあげさせることが目的である。 |
| 「ドイツ語会話」の授業における「前列着席の勧め」と毎時間のペアワークの実践 | 2015年4月～ | 教室の前列を開けないよう、学生全員を教室の前に詰めて着席させる。前に座った学生と教員は比較的簡単にコミュニケートできるし、学習のヒントが教員から直接与えられるから、授業参加の満足感がより多く得られる。授業の最後には、学生がペアでドイツ語会話を考案、それを教員の前で口頭発表して終わることになっているが、この作文や会話練習の際にも前列の方が質問しやすく、早く結果を出せるということで、前列の着席が人気である。結果として「自発的に参加する授業」が可能となっている。 |
| 「ドイツ語会話」の授業で、毎時間の復習テストを慣習化 | 2016年4月～ | 「授業で学んだ表現を確実に身につける」ため、毎時間授業の冒頭で復習テストを実施している。すると授業参加者には「毎時間テスト勉強する」習慣が身につき、前回の授業で何を学習したか、授業開始前の休み時間に学生同士で振り返る姿が見られるようになった。毎時間テストを実施してしなかった学年の評価データと比較したところ、学習したクラスは語彙表現力が格段にアップし、「実際にドイツへ行って、ドイツ語を話してみたい」と強い意志を示す学生が目立つようになった。 |
| 「ドイツ語検定対策授業」の実施 | 2016年4月～ | 本学には「中級ドイツ語」がない。しかしドイツに行って「もっとドイツ語を続けたい」と感じた学生は少なくない。そこで「ドイツ語検定」受験者を募って、毎週水曜放課後に2時間の対策授業を実施している。2016年7月には、この授業に参加していた4人全員が「ドイツ語検定4級」に合格した。なお2017年度には2名が成果を上げ、2018年度には7名が参加して勉強中である。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『ネコと学ぶドイツ語』 | 2015年2月 | 学習後の短期留学や旅行を目標とした実践的教科書。「現地で役立つ表現」を習得するため、最低限の文法規則を理解させたうえで、様々なシーンで使えるセンテンスを覚え、自己学習させる構成となっている。実際にドイツ研修に参加する本学学生を対象として作成した教科書である。研修に参加する学生は、補助教材としてこの本をドイツに持ち込むが、研修先の語学学校からは「十分に文法力が身についている」として毎年評価されている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| （口頭発表）<br>京都外国語大学ドイツ語学科研究会Wegで研究発表<br>『第二外国語のドイツ語学習者を対象としたドイツ研修<br>―主体的な行動のための準備とサポート―』 | 2017年1月 | 1年30時間しかドイツ語を学習していない学生を、いかにして「2週間のドイツ研修」に順応させるか。引率教員はどのような準備授業を行って、研修参加者にドイツへの理解を深めさせるか。どのようにして主体的な行動を促していくか。見学受け入れ先の高校、大学、病院、スポーツクラブとは、どのような準備を進めていくか。約半年間にわたる引率教員の「研修準備」内容を紹介し、実際の研修でどのような学習成果をあげたかについて報告した。 |

| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
|---|---|---|
| 「ドイツ短期海外研修」実施にむけての準備とPR活動 | 2015年4月～ | 3月の「ドイツ短期海外研修」を前に、本学唯一のドイツ語担当教員として、半年前から現地の語学学校長や見学予定施設（高校、大学、病院、看護学校）の責任者、アパートの所有者と連絡をとり、部屋の予約や日独交流企画といった事前準備を全て1人で行っている。春学期の授業中にはドイツ語受講者に向けてPR活動を行い、7月末の留学説明会では、研修参加希望者に研修内容を説明するためのプレゼンを行って、学生の参加を促している。 |
| 「ドイツ短期海外研修」実施前の特別講義 | 2015年12月～ | 3月の「ドイツ短期海外研修」を前に、研修参加予定者を対象にした特別講義を4回に渡って実施している。講義時間は1回につき2時間～6時間ほど。毎年現地の高校生に「浴衣の着付け」を行っているので、ドイツ語を用いた着付け練習も欠かせない。日本食のふるまいといった特別イベントがあれば、その予行練習も行う。この特別講義に参加することによって、学生の研修参加意欲がいっそう高まり、研修グループ全体に連帯感が生まれる。 |
| 「ドイツ短期海外研修」の引率 | 2016年3月～ | 2週間のレーゲンスブルク滞在中、学生とともにアパートに滞在して、学生の健康管理と通学補佐を行うほか、現地ドイツ人との交流イベントの手配と引率業務を行う。例として、病院見学や、看護学生、高校生、大学生、社会人との交流イベント、現地日本語クラスの授業見学、着付け体験、日本食体験、サッカー試合参加、柔道練習参加、近隣の町村や史跡の訪問など。 |
| 「ドイツ短期海外研修」実施後のHPレポート | 2016年11月～ | 3月の「ドイツ短期海外研修」で本学学生がどのような国際交流活動をしてきたのか、国際交流センターのHPに引率教員レポートを掲載。現地の高校や大学の授業見学、病院見学、各都市の訪問、柔道やサッカー体験等、学生自身の手で作りあげた研修プランをどれだけ実行することができたのか、参加学生たちの生き生きとした表情の写真を紹介して、実例を提示している。このホームページを見て、ドイツ研修に関心を抱いてくれる学生は多い。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『ネコと学ぶドイツ語』 | 共著 | 2015年2月 | 三修社 | 羽根田知子 | 1～66頁 |
| 論文 | | | | | |
| 『難民を受け入れるドイツ―レーゲンスブルク市の場合―』 | 単著 | 2016年12月 | 京都学園大学人間文化学会紀要「人間文化研究」37号 | | 119～143頁 |
| 『「非公式の聖人」から「教会博士」になるまで―ビンゲンのヒルデガルト崇拝の時代的変遷―』 | 単著 | 2015年3月 | 京都外国語大学「Brücke」17号 | | 35～50頁 |
| その他 | | | | | |
| （翻訳）『ユンカー・フォン・ランゲック著「瑞穂草、第二部、雑学の部」より　第2章　文房具　』 | 単著 | 2019年3月 | 京都学園大学人間文化学会紀要「人間文化研究」42号 | | 121～129頁 |
| （翻訳）『ユンカー・フォン・ランゲック著「瑞穂草、第二部、雑学の部」より　第1章　日本の文学　言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌（3）』 | 単著 | 2018年11月 | 京都学園大学人間文化学会紀要「人間文化研究」41号 | | 73～101頁 |
| （翻訳）『ユンカー・フォン・ランゲック著「瑞穂草、第二部、雑学の部」より　第1章　日本の文学　言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌（2）』 | 単著 | 2018年3月 | 京都学園大学人間文化学会紀要「人間文化研究」40号 | | 233～256頁 |
| （翻訳）『ユンカー・フォン・ランゲック著「瑞穂草、第二部、雑学の部」より　第1章　日本の文学　言語の構造ならびに日本人の文学と詩歌（1）』 | 単著 | 2017年12月 | 京都学園大学人間文化学会紀要「人間文化研究」39号 | | 177～297頁 |
| （口頭発表）『第二外国語のドイツ語学習者を対象としたドイツ研修―主体的な行動のための準備とサポート―』 | 単独 | 2017年1月 | 京都外国語大学ドイツ語学科第17回研究会 | | |
| （口頭発表）『ドイツのクリスマス―もっとも多忙でもっともワクワクする6週間―』 | 単独 | 2016年12月 | 亀岡国際交流委員会主催グローバルカフェ | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 日本西洋史学会 | 平成5年より、会員 |
| ドイツ現代史研究会 | 平成11年より、会員 |
| 国際言語文化学会 | 平成26年より、会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　大川　滋美 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 緩和・終末期系実習での倫理的問題に関する検討について | 2015年4月～2019年3月 | 「緩和ケアの場で生じる倫理的な問題を捉え、対象の擁護に向けた行動をとること」を実習目標の一つとして、救急外来および集中治療室で緩和・終末期系実習を行っている。ジョンセンの4分割法を用いて情報収集し、多角的な視点から倫理的な問題を捉えたうえで、具体的な対応方法を検討しており、その過程では、学生の気づきを尊重しながら、救急・集中治療領域における特有な困難さも伝え、学生との学び合いを大切にしている。 |
| 成人看護学(急性期)実習に向けたシミュレーション演習について | 2016年9月～現在に至る | 成人看護学(急性期)実習では、「周術期患者の成長・発達・適応を促進するための看護実践能力を養うこと」を実習目的としている。学生は、講義や演習で術後患者の観察について学んでいるが、実習までの期間が空いていることに加え、慣れない環境での緊張や戸惑いから、実施に至らず見学となる場合もある。このような状況から、実習初日に、周術期患者を意識した看護技術の実践を目的とするシミュレーション演習を実施し、学生が自らの課題に気づけるように努めている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 基礎疾患のある患者の周術期看護　呼吸器疾患，周術期看護(明石惠子・嶌田理佳編) | 2017年12月 | COPD・気管支喘息・突発性間質性肺炎のある患者に対して手術が与える影響、ならびに、術前の看護として呼吸機能評価・禁煙指導・呼吸訓練、術後の看護として抜管後の評価・早期離床・呼吸リハビリテーションに着目して執筆した。 |
| 術後観察におけるチェックシートについて | 2017年4月～現在に至る | 系統的に術後の観察項目をまとめたチェックシートを作成し、術後観察に関する講義や演習で使用している。何回も同じ教材に触れる機会を設けることによって、学生の記憶に残り、成人看護学(急性期)実習においても、使い慣れたチェックシートを活用することによって、さらに術式や患者の個別性を考慮した観察へと繋げられるように支援している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1.基礎疾患のある患者の周術期看護　呼吸器疾患，周術期看護(明石惠子・嶌田理佳編) | 単 | 2017年12月 | メヂカルフレンド社 | | p.461～465 |
| 論文 | | | | | |
| 1.救命救急センターに勤務する看護師におけるSense of Coherence(首尾一貫感覚)、職業上のストレッサーと精神健康度の関連 | 単 | 2015年3月 | 浜松医科大学大学院医学系研究科修士論文 | | |
| 2.NIHSS評価に対する意識調査と今後の課題 | 共 | 2011年12月 | 日本救急医学会関東地方会雑誌第32巻49号 | 大川滋美<br>早野大輔 | p.26－27 |
| 3.Crowned dens syndromeの1例 | 共 | 2011年12月 | 日本救急医学会関東地方会雑誌第32巻49号 | 早野大輔<br>大川滋美<br>他 | p.110－111 |
| その他(学会発表) | | | | | |
| 1.救命救急センターに勤務する看護師が抱える「役割に関するストレッサー」についての検討 | | 2018年10月 | 第20回日本救急看護学会学術集会 | | |
| 2.救急部門に配属された看護師の倫理的行動修得のプロセス－配属半年後の新卒看護師の倫理的問題への対応能力 | | 2017年10月 | 第19回日本救急看護学会学術集会 | | |
| 3.急性・重症患者看護専門看護師の倫理的行動修得のプロセス | | 2017年6月 | 第13回日本クリティカルケア看護学会学術集会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表）続き | | | | | |
| 4.救命救急センターに勤務する看護師におけるSense of Coherence（首尾一貫感覚）、職業上のストレッサーと精神健康度の関連 | | 2015年10月 | 第17回日本救急看護学会学術集会 | | |
| 5.ドクターヘリ受け入れ病院看護師の情報聴取における問題点と課題 | | 2011年10月 | 第13回日本救急看護学会学術集会 | | |
| 6.NIHSS評価に対する意識調査と今後の課題 | | 2011年2月 | 第61回日本救急医学会関東地方会 | | |
| 7.危機状態にある家族ケアに対する当院救急看護師の課 | | 2009年12月 | 第10回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本救急看護学会 |
| | 日本クリティカルケア看護学会 |
| | 日本看護研究学会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属 | 健康医療　学部 | 職名 | 助教 | 氏名 | 谷口　光代 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「国際看護学」の異文化理解のための、講義用教材 | 2013年4月～ | 非常勤講師として担当した「災害・国際看護」や「国際看護学」において、異文化理解を行うために、世界の識字率や人種、言語などがどれくらいの割合なのかを理解してもらうために、世界が50人（クラスの人数）の村だったらと例え、実践した。また、文字が読めないことによってどんな不便さがあるのかを体験してもらうワークショップを行った。学生アンケートの結果からも、学生の満足度が高く、今まで勉強できることが当たり前だと思っていたが、勉強できるありがたさを知った、世界に目をもっと向けていきたいなどの意見が聞かれた。 |
| 国際協力、国際理解、JICAボランティアについて、理解を深めるための工夫 | 2011年11月～<br>2016年3月 | 小学生や中学生を対象に、国際協力、国際理解、異文化理解、JICAのボランティアなどについて講演を行った。実際にJICAのボランティア事業（青年海外協力隊）として参加し、経験したことや実践したことを、現地で撮った写真やビデオなどを作成し教材として使用した。また、助産師として活動していたため、命の大切さ、尊さにもつなげられる、講義の工夫をした。 |
| 母性看護学演習での実践で活かせる知識と技術の習得への工夫 | 2017年5月～ | 母性看護学援助論演習において、妊娠・分娩・産褥期に関わる妊産褥婦への援助、および新生児期に関わる新生児の援助の知識・技術の習得に向けた工夫として、臨床現場をイメージさせながら、実際に学生が対象者と関われるように演習を行うように工夫した。また、一方的に説明をするのではなく、質問や疑問を学生に投げかけながら、常に学生が考えられるように進めた。 |
| 母性看護学実習 | 2017年9月～ | 2単位で1クール2週間の実習で、4～5名の学生を8クール担当した。おもに褥婦とその新生児の母子の2名を受け持つことになる。また、分娩から受け持たせていただいても5～8日間と受け持ち期間が短い中で看護展開をしていかなければならない。学生は、母子それぞれの経過を把握しながら、母子相互作用については、日数を追うごとに理解を深められていた。分娩見学を通して、命の尊さや生まれること、生きることについて再確認していた。実習病院が大学より遠方であるところは（京丹後市）、宿泊を伴いながらの実習を行っている。実習以外にも、共同生活の経験が少ない学生にとって2週間の実習を行うことは、ストレスも感じていた。担当教員として、宿泊を伴う実習には、学生同士の関係性や健康管理などにも注意しながら、学生個々にあったサポートの必要性を再確認できた。 |
| 2　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 地域で守る妊婦の安心のプロジェクトにて研究発表を行う。 テーマ「離島からの母体搬送体験の分析-当事者の聞き取り調査をもとに-」 | 2014年6月 | 徳之島の島外母体搬送に関する資料・文献を基に、徳之島における母体搬送方法等の搬送実績から、島外母体搬送の現状と課題を明らかにするための研究を行った。ヘリ要請～搬送先病院到着までの所要時間は、長時間要していた。夜間の母体搬送は自衛隊ヘリしか選択はないが、医療器材や設備がないため、搬送時の判断が難しくなる。搬送時の乗り換えも多く、ヘリコプターによる騒音や揺れなど搬送時の妊産婦の不安は大きいという結果を発表した。 |
| 徳之島徳洲会病院にて招待講演　テーマ「島外母体搬送体験の分析-当事者の聞き取り調査をもとに- | 2014年11月 | |
| 鹿児島県県　HTLV－1対策講習会<br>「HTLV－1母子感染予防対策等について」の講習会の中で、「HTLV－1母子感染を防ごう～HTLV－1陽性妊産婦がもつ児の栄養法に関わる不安と困難から～」の講演 | 2014年11月 | 鹿児島県医師会，鹿児島県助産師会，鹿児島県が主催する、平成26年度のHTLV－1対策講習会において、講演を行った。<br>HTLV－1感染者の多い鹿児島県においては，ATL対策は重要な課題である。現在，ATLに対する有効な治療法が確立されていない中で，特に，HTLV－1キャリアの妊産婦に対する母子感染予防対策等が必要であり、そのため、相談窓口となる関係機関や接する機会の多い医療従事者及び県・市町村の母子保健担当者等への普及啓発を図ることを目的に行っている講習会において、講演を行った。（分担発表） |
| 3　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 離島からの母体搬送体験の分析-当事者の聞き取り調査をもとに-（修士論文） | 単著 | 2014年 | | | |
| 医療施設で働く助産師への業務拡大に関する意識調査（第1報） | 共著 | 2014年5月 | インターナショナルNursing Care Research Vil.13.No2 | 杉山智春、谷口光代、内田みさと、美甘祥子、丸山幸三 | 9頁～18頁 |
| 助産師が妊婦健康診査で用いる超音波検査におけるケアの概念分析 | 共著 | 2015年10月 | インターナショナルNursing Care Research Vol.14.No.3 | 美甘祥子、杉山智春、谷口光代 | 97頁～103頁 |
| 母体血清マーカー検査の結果が陰性であった褥婦の胎児への不安や検査への認識 | 共著 | 2016年5月 | インターナショナルNursing Care Research Vol.15.No.2 | 美甘祥子、杉山智春、谷口光代 | 23頁～31頁 |
| HTLV-1キャリア妊産婦からの相談内容-鹿児島県の保健師および助産師への調査結果から- | 共著 | 2016年5月 | インターナショナルNursing Care Research Vol.15.No.2 | 谷口光代、根路銘安仁、北村愛、下敷領須美子 | 73頁～82頁 |
| 更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共著 | 2019年3月 | 京都学園大学総合研究所所報20号 | 夏山 洋子、杉山 智春、谷口 光代 | 91頁～100頁 |
| 著書 | | | | | |
| ミクロネシア学ことはじめ | 共著 | 2017年12月 | 南方新社 | 大塚靖、山本宗立、上野大輔、坂口健、川西基博、西條喜来、北村有迅、高宮広土、西村知、中谷純江、濵島実樹、島田温史、河合渓、宋多情、谷口光代 | 218頁～219頁 |
| その他 | | | | | |
| 国際協力を通して足元をみつめなおす | | 2013年10月 | 島嶼研だより No. 66（1） | 谷口光代 | 3頁 |
| 報告書 | | | | | |
| 男性の育児参画意識と社会環境の整備実態 | 共著 | 2013年 | 平成24年度鹿児島市男女共同参画センター調査研究支援事業報告書 | 下敷領須美子、谷口光代、川野朝子、平野彩花、松下友香、松永真理恵、町岡美奈子 | 1頁～113頁 |
| 口頭発表 | | | | | |
| 徳之島における助産師の就労形態と出産環境の変遷 | 共著 | 2012年11月 | 第53回日本母性衛生学会 | 福岡美和，谷口光代，野中涼子，下敷領須美子 | |
| 子宝の島・徳之島における新生児蘇生法講習会の実践報告 | 共著 | 2012年3月 | 第26回日本助産学会 | 奥原香織，谷口光代 | |
| HTLV－1陽性妊産婦が持つ児の栄養法に関わる不安と困難 | 共著 | 2013年8月 | 第26回鹿児島県母性衛生学会 | 俊彩、麦田すみ子、北村愛、谷口光代、森律子、船迫美穂、井上尚美 | |
| HTLV－1陽性妊産婦の子どもへの影響に関する不安の現状 | 共著 | 2013年8月 | 第27回鹿児島県小児保健学会 | 北村愛、麦田すみ子、谷口光代、俊 彩、森律子、船迫美穂、井上尚美 | |
| 鹿児島県のHTLV－1母子感染対策の現状と全国マニュアル導入時の問題点 | 共著 | 2013年10月 | 第54回日本母性衛生学会 | 根路銘安、北村愛、谷口光代、井上尚美、下敷領須美子 | |
| HTLV－1陽性妊産婦からの相談内容 | 共著 | 2013年10月 | 第54回日本母性衛生学会 | 谷口光代、北村愛、井上尚美、下敷領須美子、根路銘安仁 | |
| 産科医療施設におけるHTLV－1陽性妊産婦への支援状況 | 共著 | 2013年10月 | 第54回日本母性衛生学会 | 下敷領須美子、北村愛、谷口光代、井上尚美、根路銘安仁 | |
| 徳之島における母体搬送の現状と課題 | 共著 | 2013年10月 | 第54回日本母性衛生学会 | 谷口光代、下敷領須美子 | |
| 鹿児島県のHTLV-I陽性妊婦が決定した栄養法選択への支援状況 | 共著 | 2014年6月 | 第61回日本小児保健学会 | 根路銘安仁、古城圭馴美、二宮由美子、吉重道子、石川珠代、小木曽綾乃、谷口光代、北村愛、下敷領須美子、武井修治、河野嘉文 | |
| HTLV-I母子感染対策では出生後の支援体制の構築が必要である | 共著 | 2014年8月 | 第1回HTLV-I学会 | 根路銘安仁、谷口光代、北村愛、下敷領須美子、河野嘉文 | |
| A島の島外母体搬送の現状 | 共著 | 2014年9月 | 第55回日本母性衛生学会 | 谷口光代、下敷領須美子 | |
| ヘリコプターによる離島からの母体搬送体験分析-妊産婦の聞き取り調査をもとに- | 共著 | 2015年3月 | 第29回日本助産学会 | 谷口光代、下敷領須美子 | |
| The influence that the environment in the helicopter during maternal transport gives –Based on the hearing investigation of the person concerned– | 共著 | 2015年7月 | 第11回ICMアジア太平洋地域会議・助産学術集会 | 谷口光代、下敷領須美子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| The Current status of HTLV-1 mother-to-child transmission prevention in Kagoshima<br>—With a focus on short-term breastfeeding— | 共著 | 2015年7月 | 第11回<br>ICMアジア太平洋地域会議・<br>助産学術集会 | 下敷領須美子、谷口光代、<br>北村愛、根路銘安仁 | |
| BLSOを通して構築される地域周産期ネットワーク | 共著 | 2015年9月 | 第1回ALSO-Japan学術集会 | 野中涼子、谷口光代、新納直久 | |
| 地域で守る妊婦の安心プロジェクトからの考察 | 共著 | 2015年10月 | 第56回日本母性衛生学会 | 野中涼子、谷口光代、下敷領須美子 | |
| 離島で働く助産師が職場で感じる満足と不満足 ハーズバーグの二要因理論をもとに考える | 共著 | 2015年12月 | 第35回日本看護科学学会<br>学術集会 | 福岡美和, 谷口光代, 内田みさと | |
| Anxiety about the fetus and awareness of testing in puerperal women with negative results on the maternal serum screening | 共著 | 2016年3月 | 19th EAFONS | Shoko MIKAMO,<br>Chiharu SUGIYAMA,<br>Mitsuyo TANIGUCHI | |
| 助産師学生による大学生に対する思春期教育ピアサポートの効果 医療系学生と非医療系学生の比較 | 共著 | 2016年9月 | 第57回日本母性衛生学会 | 矢野恵子、奥田麻耶、邑樂 京佳,<br>森 有希, 福田 セーニャ, 申 尚華,<br>夏山 洋子, 岡本 留美, 神原 祐美,<br>杉山 智春, 谷口 光代 | |
| Implementation and Effectiveness of Adolescent Education Peer support for University Students as Carried Out by Midwife Students | 共著 | 2017年6月 | 31th ICM Treiennial Congress | Keiko Yano,Maya Okuda,<br>Sanfa Shin,Xenia Fukuda,<br>Yuki Mori,Kyoka Yuraku,<br>Yoko Natsuyama, Rumi Okamoto,<br>Yumi Kanbara,Chiharu Sugiyama,<br>Mitsuyo Taniguchi | |
| 多世代をつなぐ育児支援活動の参加者の思い テキストマイニングによる分析 | 共著 | 2017年12月 | 第37回日本看護科学学会<br>学術集会 | 藤本 美穂、今西 誠子、 高尾 憲司、<br>谷口 光代、夏山 洋子、杉山 智春 | |
| ミクロネシア連邦チューク州ピス・パネウ(Piis-Paneu)島の母子保健の現状 | 共著 | 2018年11月 | 第13回日本ルーラルナーシング<br>学会学術集会 | 谷口光代、杉山智春,夏山洋子、<br>美甘祥子、大塚靖、山本宗立 | |
| 更年期女性のストレス緩和へのヒノキ芳香浴の効果 | 共著 | 2018年12月 | 第39回日本看護科学学会<br>学術集会 | 夏山 洋子、杉山 智春、谷口 光代 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2003年8月～ | 日本母性衛生学会会員 |
| 2012年2月～ | 日本助産師会会員 |
| 2012年4月～ | 日本助産学会会員 |
| 2012年7月～ | ALSO-Japan会員 |
| 2015年4月～ | 京都府助産師会会員 |
| 2015年8月～ | 日本看護科学学会会員 |
| 2016年1月～ | 日本臨床救急医学会会員 |
| 2013年8月～ | ALSO-Japan ALSOプロバイダーコース キャンディデイト |
| 2013年4月～2015年3月 | トヨタ財団「地域で守る妊婦の安心プロジェクト」 副代表 |
| 2013年7月～2014年7月 | 鹿児島県青少年国際体験事業 健康管理 ベトナム(2013年) カンボジア(2014年) |
| 2015年1月～2015年2月 | 内閣府青年国際交流事業 グローバルユースリーダー育成事業<br>「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」管理部(健康管理) |
| 2015年5月～ | JICA国際緊急援助隊医療チーム登録 |
| 2015年7月～ | JICA国際緊急援助隊医療チーム 中級研修 |
| 2015年7月～2017年3月 | 右京区まちづくり支援制度支援事業 「右京区子育てこみゅにてぃー”クローバーKGU”」 |
| 2016年1月～ | ALSO-Japan ALSOプロバイダーコース インストラクター |
| 2016年2月 | JICA国際緊急援助隊医療チーム 中級研究(JICA市ヶ谷ビル) |
| 2016年2月 | JICA国際緊急援助隊医療チーム 機能拡充機材展開研修(JICA横浜) |
| 2016年4月～2017年3月 | トヨタ財団「地域で守る妊婦の安心プロジェクト【検証・提言助成】」プロジェクトメンバー |
| 2017年2月 | JICA国際緊急援助隊医療チーム 機能拡充機材展開研修(jica東京)) |
| 2018年7月 | JICA国際緊急援助隊医療チーム 中級研究(JICA市ヶ谷ビル) |
| 2019年9月 | JICA国際緊急援助隊 感染症対策チームメンバー |
| 2019年6月 | JICA国際緊急援助隊医療チーム 産科・新生児・小児保健WG班員<br>〈チームの活動内容に関わる重要事項に関し、機構の諮問に応じて助言と支援) |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　中林　誠 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| スタディスキル | 平成27年4月～<br>平成27年7月<br>平成28年4月～<br>平成28年7月 | 神奈川工科大学看護学科の授業(補助)<br>（前期1単位、1年生）<br>講義内容：ノートのとり方、文献検索の方法、事例に基づいたグループワーク（9コマ）<br>関わった内容と成果：教授、准教授の指導のもと9名の学生グループワーク（事例展開）のオブザーバーとして関った。<br>平成27年度：事例は大学入学後に体調を崩した18歳の女性であった。当初学生の関心は事例の女性が体調を崩したことは自業自得であるとアセスメントし看護介入の余地がないと話していた。私はどうにかこの窮地を脱出したいと考えているがそれがかなわずにいる事例の女性にケアリング（共感、傾聴、理解）に基づいた関わりが必要であることを助言した。学生はそのことを少しずつ理解しグループ発表でケアリングに基づいた看護の重要性を示すにいたった。<br>平成28年度：事例は昨年度と同様であった。学生の関心は女性を多角的に捉え図表化し発表したいことであったため、概念図、表象図の描き方を助言した。学生は助言を聞き自主的に専門書を読み、グループ発表で事例の女性が置かれている状況を表す図表を示すことにいたった。 |
| | | 神奈川工科大学看護学科の授業(補助)<br>（後期1単位、1年生）<br>講義内容：成人期の特徴、成人の健康、成人期の健康障害、健康状態に応じた看護<br>関わった内容と成果：科目責任者（教授）の指導のもと以下の事を行った。<br>講義資料の作成（平成27,28年度）：人間を多角的な側面で捉えることへの理解を深めるため、A3用紙の中心部に人間のイラスト示し、身体、心理、社会、霊的要因を学生自らが記入できるようにした図の作成を行った。<br>補習（平成27年度）：講義後に学生から補習講義の要望があった。科目責任者に報告し講義の空き時間を利用し計4回の補習講義を行った。毎回10名程度の学生が参加した。質問の内容は勉強の進め方が分からないが多数を占めた。また、多くの学生がこれまで成功体験が少なく自信を失い、学力の低い自分を責めているようにみえた。私は、傾聴すること、承認すること、共感することを意識し学生に関わった。<br>　その後、教員に質問・アドバイスを求めるように変化した学生も見受けられた |
| 成人看護活動論Ⅰ<br>（急性期） | 平成28年9月～<br>平成29年1月<br>平成29年9月～<br>平成30年12月 | 神奈川工科大学看護学科の授業（補助）<br>（後期2単位、1年生）<br>　科目責任者（教授、講師）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>関わった内容と成果：演習(術前訓練）で弾性ストッキングの装着を担当した（平成28,29年度）。演習の時点で形態機能学、疾病論、病態学の単位を修得していない学生のレディネスをふまえA3用紙4枚分のイラストを作成し主に以下の4点を指導した。<br>1.弾性ストッキングの着脱方法<br>2.ボーマンズ兆候<br>3.深部静脈血栓症、肺梗塞など病態生理<br>4.自身の臨床経験（深部静脈血栓症の死亡、重症例）<br><br>演習後のレポートでこれらを考察した内容を記載している学生が多数見られた。<br><br>演習（救急救命処置と救急時の援助）で心臓マッサージを担当した（平成28年度）。<br>主に以下の4点を指導した。<br>1.胸骨圧迫は一分間に120回程度必要であること<br>2.成人期以降では胸部を5cm押し込む事が必要であること<br>3.胸骨圧迫を十分に行うためには、援助者が行いやすい体勢をとるように事前に調整すること<br>4.援助者は3～5分で交代すること<br>　演習にはシュミレーターを使用した。担当した学生（40名）の大多数が蘇生率80％以上の結果になった。 |
| 成人看護活動論Ⅱ<br>（慢性期） | 平成28年4月～<br>平成30年7月 | 神奈川工科大学看護学科の授業（補助）<br>（前期2単位、2年生）<br>科目責任者（教授、講師）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>関わった内容と成果：演習（片麻痺患者の手洗い）を担当した（平成28,29年度）。<br>演習は以下の手順で行った。<br>1.学生の利き腕を三角巾で固定する<br>2.洗面所で手洗いを体験する。<br>3.どのような援助、指導が必要なのかをグループで検討する<br>4.検討結果をもとに手洗い体験をする。<br>　主にグループ検討の際積極的に話し合いが出来るようファシリテートをした。<br><br>　演習後のレポートで片麻痺患者の体験が有意義なものであったと記録している学生が多数見られた。 |

| | | |
|---|---|---|
| 実践総合演習（OSCE） | 平成29年7月<br>平成30年7月 | 神奈川工科大学看護学科の授業（補助）<br>（前期2単位、3年生）<br>科目責任者（教授）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>講義内容：看護過程の展開、模擬患者に対しての援助シュミレーション<br>関わった内容と成果：最終試験の際、試験課題が試験前の学生に流出しないよう控え室の管理、運営を行った。<br>　禁止されていた携帯電話の使用などの不正行為は見られなかった。 |
| 基礎看護学実習Ⅰ | 平成27年<br>7月20日～<br>7月24日<br><br>平成28年<br>7月18日～<br>7月22日<br><br>平成30年<br>7月16日～<br>7月20日 | 神奈川工科大学看護学科の実習<br>（前期1単位、1年生）科目責任者（教授・准教授）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>関わった内容と成果：実習要項に沿って、整形外科病棟（平成27,28,30年度）で1グループ6人の学生を担当した。<br>　実習の目的は患者の療養環境を知ること、患者とコミュニケーションをとることであった。多くの学生がうまく話すことができないのではないかという悩みを抱えていた現状をみて、学生が「上手に話さなければならない」ことに縛られているように感じた。<br>　患者には語りかけることだけではなく、良き聴き手として関わることも重要であると指導した。<br>　学生Aは「話さなければならない」という考えから、「良い聴き手になろう」と考えを改め50分に渡り患者の思いを聴く事が出来た。この成果をカンファレンスで発表したことで他の学生も「聴く」ことを意識したコミュニケーションに取り組むようになった |
| 基礎看護学実習Ⅱ | 平成28年<br>12月12日～<br>12月23日<br><br>平成29年<br>12月11日～<br>12月22日 | 神奈川工科大学看護学科の実習<br>（後期2単位、2年生））科目責任者（教授）の指導のもと、学生5～6人に対し以下の指導を行った。<br>関わった内容と成果：実習目的のひとつである「患者との援助的人間関係を築き、安全・安楽に基づく看護過程を展開するプロセスについて学ぶ」を取り上げて指導にあたった。<br>　特に援助的人間関係の指導ではマーガレット・ニューマンの理論にもとづき、患者にとって良い人的環境になるように指導を行った。具体的には寝たきり状態であまり会話のできない患者を受け持った学生に、関係構築の第一段階として患者の手を握りながら会話の関わりを持つように指導した。学生は最初戸惑いながら患者の手を握っていたがいつしか、二人の間で手を握りながら時間を過ごすことが当たり前のことになっていった。この関わりによって学生は患者との援助的人間関係がすすんだ。また、学生が心をこめて寄り添う（ケアリング）ことで患者の健康状態がよくなることを学び、学生自身が達成感を得ることができていた。 |
| 成人看護活動論Ⅰ（急性期）資料作成 | 平成28年9月～<br>平成29年1月<br>平成29年9月～<br>平成30年1月 | 神奈川工科大学看護学科<br>科目責任者（教授）の指導のもと、以下の事を行った。<br>・学内演習（全3回）のグループ編成表の作成<br>・術前訓練「弾性ストッキングの着脱」演習に使用する資料の作成 |
| 成人看護学実習Ⅱ（慢性期） | 平成30年9月～<br>平成30年10月 | 神奈川工科大学看護学科の実習<br>（通年6単位、3,4年生）科目責任者（教授）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>関わった内容と成果：事前学習を課していたが臨地でセルフマネジメント、セルフケアについての知識に乏しい学生がみられていたため、教材の提示、口頭での指導を行った。3週間の実習期間で担当したすべての学生がこれらに基づいた看護展開を行うことに至った。<br>　認知機能に低下がみられる患者に近づくことを恐れている学生に対して、患者の身体ケアを通した援助を促した。その結果、学生は患者と共に過ごす時間が増え、信頼関係が構築されたように見えると臨地実習指導者から評価を得るに至った。 |
| 成人看護活動論Ⅲ(看護過程) | 平成28年10月～<br>平成29年1月<br>平成29年10月～<br>平成30年12月 | 神奈川工科大学看護学科の授業（補助）<br>（後期2単位、2年生）<br>科目責任者（教授）の指導のもと、以下の指導を行った。<br>講義内容：胃がん周手術期にある患者の事例を用いて「ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断」に基づいた看護過程の展開を補助した。<br>関わった内容と成果：看護過程の展開はグループワーク中心で行われた。2グループ12人を担当した。<br>　以下の点の理解がすすむよう指導した。<br>1.情報解釈<br>ムーアの4相（手術侵襲と生体反応）、術後合併症（人工呼吸器関連性肺炎、腸閉塞、深部静脈血栓症、縫合不全、創部感染）の病態を十分に理解したうえで情報解釈を行うこと。<br>2.関連図の作成<br>関連図の作成が苦手な学生に対して、身体的な側面と心理、社会的側面を分けて書くことで関連図がみやすく作成が容易となる。<br>3.看護目標<br>看護目標の表現方法が抽象的な学生が多くみられたため「ルンバの法則（現実的、理解可能、測定可能、行動的表現、到達可能）」の原則にもとづいて記述すること。<br>4.看護計画<br>計画に具体性が欠けている学生に対して、5W1Hを意識して立案する。<br>これらに加え、演習中は積極的にグループ内で情報を共有すること、ディスカッションをするよう指導した。<br>　担当した学生全員が当初不得手としていたムーアの4相、術後合併症の特徴をふまえた情報解釈、関連図、看護目標、看護計画の作成が可能となった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 成人看護活動論Ⅰ(急性期)資料作成 | 平成28年9月～<br>平成29年1月<br>平成29年9月～<br>平成30年1月 | 神奈川工科大学看護学科<br>科目責任者(教授)の指導のもと、以下の事を行った。<br>・学内演習(全3回)のグループ編成表の作成<br>・術前訓練「弾性ストッキングの着脱」演習に使用する資料の作成 |
| 成人看護活動論Ⅱ(慢性期)資料作成 | 平成28年4月～<br>平成29年3月 | 神奈川工科大学看護学科<br>科目責任者(教授)の指導のもと、学内演習(全3回)のグループ編成表の作成を行った。 |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | なし |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学科教務係・教務委員として学生を支援 | 平成27年4月～<br>平成30年3月 | 神奈川工科大学看護学科教務係として下記の非常勤講師対応を行った。<br>・AV機器の取り扱いマニュアルの作成<br>・講義で使用するパソコン、チョークなどの準備<br>・講義資料の印刷、学生への配布<br>・レポートの回収、返却<br>・休講・補講、定期試験等の連絡、調整<br>・委員会議事録の作成 |
| 学科備品・消耗品管理委員として学生を支援 | 平成28年4月～<br>平成29年3月 | 神奈川工科大学看護学科備品・消耗品管理委員として下記の事を行った。<br>・看護学科備品・消耗品リストの作成、運用、更新<br>・消耗品の補充<br>・精密医療機器、シュミレーター人形の整備(月に一　度、動作、破損などを確認<br>・領域間の備品貸借マニュアルの作成、運用<br>・骨格模型の整備(ラベリング、組み立てなど)<br>・委員会議事録の作成 |
| 学科学生部委員として学生を支援 | 平成28年4月～<br>平成29年3月 | 神奈川工科大学看護学科学科学生部委員として下記の事を行った。<br>・予防接種の日程調整、当日の業者、学生対応。未接種学生への連絡、相談<br>・新入生ガイダンスの計画立案、日程調整、消耗品、昼食などの手配、当日の学生対応<br>・ロッカー室の清掃用具の準備、清掃<br>・委員会議事録の作成 |
| 国家試験対策委員として学生を支援 | 平成28年4月～<br>平成30年3月 | 神奈川工科大学看護学科国家試験対策委員として下記の事を行った。<br>・国家試験対策室の図書の選書(主に形態機能学、病態学の参考書・問題集)、購入、図書台帳の作成、整備<br>・国家試験模擬試験(再試験含む)の試験会場の確保、監督、採点、結果一覧表の作成、学科教員への配布<br>・年間計画の立案<br>・委員会議事録の作成<br>・委員長の指示に基づいて成績低迷学生への指導 |
| 横浜市瀬谷区健康サポートフェアでの住民への健康相談、看護学生への見学、指導 | 平成28年3月6日<br>平成29年3月5日 | 神奈川工科大学看護学科助手としてロボットメカトロニクス科教授からの要請で看護学生(2年生)と共に地域住民への健康相談を行った。<br>成果:会場内で行われていた、骨密度・血管年齢測定後の数値の読み方、日常生活改善に向けた取り組みの相談が主だったが、がんの治療中であり主治医との関係性、家族との関係性に悩む相談者に対しては約1時間程度のかかわりを行った。これらの関わりを看護学生に見学させ、随時学生からの質問に答えた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| がんで妻を亡くした後、長年喪失体験を他者と分かち合えなかった男性と看護師とのケアリング・パートナーシップの過程<br>(査読付) | 単著 | 平成29年3月 | 看護実践学会誌第29巻<br>第2号 | | 40-49 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| 全国学会での発表<br>1.(示説発表)<br>がん患者との関係に困難感を抱える医師と看護師との対話の過程-Newman理論に基づいた一事例- | | 平成28年8月 | 第42回 日本看護研究学会<br>学術集会 茨城県 | | |
| 2.(口頭発表)<br>がんで妻を亡くした後、長年悲嘆体験を他者と分かち合えなかった男性との-Newman理論に基づく対話の過程- | | 平成28年3月 | 第30回 日本がん看護学会<br>学術集会 千葉県 | | |
| 3.(示説発表)<br>ニューマン理論に導かれたがん看護実践の過程にあらわれた修士課程学生の成長(第二報)-看護現象の見方と関わりの変化に焦点をあてて-<br>(示説発表) | | 平成27年3月 | 第29回 日本がん看護学会<br>学術集会 神奈川県 | | |
| 4.(示説発表)<br>ニューマン理論に導かれたがん看護実践の過程における修士課程学生の成長-自己パターン認識から生まれたケアの変容過程- | | 平成26年3月 | 第28回 日本がん看護学会学術集会 新潟県 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本がん看護学会 |
| | 日本看護研究学会 |
| | 看護実践学会 |
| | ニューマン研究会 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　林　朱美 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）<br>・演習・実習における事前学習レポートの効果的な活用 | 2009年4月 ～ 2013年3月 | 明治国際医療大学看護学部　助手として、成人急性期看護学ユニット所属にて、担当の「成人急性期看護援助論Ⅰ」演習「成人急性期看護援助論Ⅱ」演習、「成人急性期看護学実習」では、実習において必要な疾患や急性期の技術項目などについての事前学習レポートを作成し、実習に生かせることができるように促した。実習中においては、随時、目的、方法、手順などを確認することができ、学習効果を高められるような示唆が得られた。<br>「クリティカルケア論」では、講義（心臓血管外科手術をした患者の看護 1コマ）では、心筋梗塞の疾患についての事前学習を行い、心臓の解剖モデルを用いながら、手術の例を示し、視覚的な理解に努めたことで、疾患イメージを得て、看護について考える機会が得られた。<br>「看護安全学」では、演習（災害時の避難者生活体験演習、トリアージ演習 2コマ）では、事前学習レポートを作成したのちに、災害避難者生活場面を演習室などに設定し、ビデオで学習したのちに、食・住の体験を行った。疑似体験することで、避難者の心理について関心をもてる機会を得た。トリアージ演習では、まず、トリアージについて事前学習レポートを作成し理解し、患者例を用いながら、ゲーム感覚でトリアージの理解をしやすくしたことで、学生は興味をもちトリアージする必要性を理解した。 |
| ・予習レポートを課したことによる動機付けと授業設計 | 2013年4月 ～ 2014年2月 | 明治国際医療大学看護学部で、助教として地域保健看護学講座にて、実践を行った。<br>「リハビリテーション看護学概論」で、演習（廃用症候群予防看護について 1コマ）ではグループ分けをして、予習レポートを行って、それぞれの場面設定で、補助具をかえ、対象に必要な予防看護について、発表し共通理解を行った。それぞれのグループから質問がでて、知識を深める機会になった。<br>「リハビリテーション看護援助論」で、講義（パーキンソン患者の看護・脊髄損傷患者の看護 2コマ）では、事前に疾患の理解について学習プリントを作成して講義時間に解答を学生に促した。まず疾患を理解し、看護につなげることの重要性をしったことで、集中して講義をうける姿勢が得られ、学習効果の向上を得られる可能性がみられた。<br>「研究方法論Ⅱ（卒業研究）」指導（4年2名・3年2名）、「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」担当、「国家試験対策夏季冬季講義」（整形外科疾患、リハビリテーション概論、整形外科疾患患者の看護 2コマ）担当 |
| ・演習・実習における事前学習の効果的な活用 | 2013年4月 ～ 2014年2月 | 明治国際医療大学看護学部の助教として、地域保健看護学講座にて、実践を行った。<br>「リハビリテーション看護援助論」では、演習（脳梗塞患者の看護過程 10コマ）では、事前の疾患の理解学習をしたうえで、グループ分けをして、個人の看護過程をグループで統合したことで、それぞれの視点について話し合ったり、グループ発表では活発な意見交換が図れて、学習効果が得られた。<br>「リハビリテーション看護学実習」では、実習に必要な疾患や技術項目についての事前学習を促した。事前に学習したことで、実習時には学生が慌てることなく、実践ができた。資料があることで、さらなる学習をつみあげるなどの教育効果の示唆が得られた。 |
| ・予習レポートを課したことによる動機付けと授業設計及び演習 | 2017年5月 ～ 2017年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。<br>「慢性期療養支援演習」では、演習（心筋梗塞患者の看護過程　6コマ）では、、グループ分けをして、個人の看護過程をグループで統合させた。各グループに振り分けた担当のグループの記録の看護過程の指導を行った。看護過程の理解を深める学習効果が得られた。前川講師の指導のもと、慢性の脳・神経系の障害をもつ患者の看護についての講義を行った。事前学習の提示などを行い、講義中は学生は集中して講義を受ける姿勢が得られた。演習（慢性期に必要な看護技術　血糖測定）では、事前準備やデモストレーションや学生への技術指導を行いながら、学生の理解につながるような指導を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・予習レポートを課したことによる動機付けと授業設計及び演習 | 2018年9月～ 2019年1月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。「急性期療養支援演習」では、演習（胃がん術後患者の看護過程）では、、グループ分けをして、個人の看護過程をグループで統合させた。各グループに振り分けた担当のグループの記録の看護過程の指導を行った。看護過程の理解を深める学習効果が得られた。急性期の呼吸器疾患の手術・整形外科疾患の手術を受けた患者の看護についての講義を行った。講義中は一部弾性ストッキング装着演習を実施したりした。演習（急性期に必要な看護技術 BLS 心電図 急変時対応説明 酸素吸入 吸引 早期離床 呼吸訓練）では、事前準備やデモストレーションや学生への技術指導を行いながら、学生の理解につながるような指導を行った。 |
| ・演習・実習における事前学習の効果的な活用 | 2017年8月～ 2018年3月<br>2018年8月～2019年3月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。<br>「セルフケア支援実習」では、実習に必要な疾患や技術項目についての事前学習を促した。事前に学習したことで、実習時には学生が慌てることなく、実践ができた。資料があることで、さらなる学習をつみあげるなどの教育効果の示唆が得られた。 |
| ・演習・実習における事前学習の効果的な活用 | 2018年3月～2018年7月<br>2019年3月～ | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。<br>「急性期療養支援実習」では、実習に必要な疾患や技術項目についての事前学習を促した。事前に学習したことで、実習時には学生が慌てることなく、実践ができた。資料があることで、さらなる学習をつみあげるなどの教育効果の示唆が得られた。 |
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）つづき<br>・演習・実習における事前学習の効果的な活用 | 2018年5月～2018年7月<br>2019年4月～ | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。<br>「急性期療養支援実習」では、実習に必要な疾患や技術項目（術後ﾍﾞｯﾄﾞ作成・術後観察）についての事前学習や演習を促した。事前に学習したことで、実習時には学生が慌てることなく、実践ができた。資料があることで、事前に演習で経験したことでさらなる学習をつみあげるなどの教育効果の示唆が得られた。 |
| ・予習レポートにおける動機づけと授業設計及び演習 | 2019年4月～ | 京都学園大学健康医療学部看護学科の助教として、実践を行った。<br>「看護研究演習Ⅰ」では、ゼミ形式で、文献検討などの研究方法についての講義の運営を実施した。個人での研究計画書指導も実施している。秋学期の研究実施につながる計画書の作成指導を行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書<br>・講義用補助教材 | 2013年4月～2014年2月 | 明治国際医療大学看護学部 助教として担当の「リハビリテーション看護学概論」において使用している。講義の要点を理解できるように配慮し、図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。グループワーク時には学生が作成し部分的に抜粋した資料も作成して、共通理解できるように配慮していた。 |
| ・講義用補助教材 | 2013年4月～2014年2月 | 明治国際医療大学看護学部 助教として担当の「リハビリテーション看護学援助論」において使用している。講義の要点を理解できるように配慮し、図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。グループワーク時にも必ず、例を示した解答用紙を配布して、共通理解できるように配慮していた。 |
| ・講義用補助教材 | 2017年6月～2017年7月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科 助教として担当の「急性期療養支援演習」において使用している。講義の要点を理解できるように配慮し、図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、そのプリントを授業で配布している。講義前週に事前自己学習用紙を配布し、例を示した解答用紙を配布して、共通理解できるように配慮していた。 |
| ・実習用補助教材 | 2017年7月～2017年9月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科 助教として担当の「セルフケア支援実習」において使用している。実習に必要な技術や知識を盛り込んだ手引きの作成を行った。図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、例を示し、共通理解できるように配慮していた。 |
| ・実習用補助教材 | 2018年2月～2018年4月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科 助教として担当の「急性期療養支援実習」において使用している。実習に必要な技術や知識を盛り込んだ手引きの作成を行った。図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、例を示し、共通理解できるように配慮した。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・実習用補助教材 | 2019年2月～2019年4月 | 京都学園大学健康医療学部看護学科 助教として担当の「急性期療養支援実習」において使用している。実習に必要な情報を盛り込んだ手引きの作成を行った。図表などわかりやすい資料を盛り込んだものを作成し、記録記載例を示し、共通理解できるように配慮した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>なし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項<br>なし | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| なし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 1. 虚血性心疾患患者の退院直後から社会復帰における睡眠パターンと日常生活の適応の関係(修士論文) | 単著 | 2013年3月 | 滋賀医科大学大学院 | | |
| 2. 看護学生の一次救命処置演習の実施による認識の変化　配置投影とテキストマイングよる演習前後の比較 | 共著 | 2013年3月 | 関西医療大学紀要7 | 井村弥生、平澤久一、林朱美、中森美季、田口豊恵、中谷茂子 | |
| 3. ICU入室中の患者のサーカディアンリズム調整に対する看護師の認識とせん妄予防を目的としたケアの実態およびICUの物的環境に対する調査報告 | 共著 | 2015年10月 | 日本クリティカルケア看護学会誌 Vol.12, No.1 | 田口豊恵、中森美季、林朱美、井村弥生 | 73頁～79頁 |
| 論文（つづき） | | | | | |
| 4. 胃癌開腹手術における高齢者の睡眠評価:アクチグラフィと起床時睡眠主観評価からの分析 | 共著 | 2017年2月 | 日本集中治療医学会誌24(1) | 田口豊恵、林朱美、中森美季、神山順、糸井啓純 | |
| 5. 看護大学生における実習期間外と実習期間中の睡眠の実態 | 共著 | 2019年3月 | 総合研究所所報20 | 林朱美、山下敬、古倉聡 | |
| その他 「学会発表」 | | | | | |
| 1.胃癌のために開腹術を受けた高齢者の睡眠評価<br>アクチウォッチと起床時睡眠感調査票からの分析 | 共著 | 2013年8月 | 第39回日本看護研究学会学術集会（於:秋田市　秋田県民会館） | 田口豊恵、中森美季、林朱美、井村弥生 | |
| 2.看護系大学生に対するヒーリングタッチ効果の検証～自律神経系の変化と主観的評価～ | 共著 | 2013年12月 | 日本看護科学学会第33回学術集会（於:大阪市 大阪国際会議場） | 田口豊恵、林朱美、中森美季、藤田智恵子、清野たか枝 | 抄録集 p.573 |
| 3.看護系大学生に対するヒーリングタッチ効果の検証:自律神経系の変化と生活背景の考察 | 共著 | 2013年12月 | 日本看護科学学会第33回学術集会（於:大阪市 大阪国際会議場） | 藤田智恵子、田口豊恵、中森美季、林朱美 | 抄録集 p.573 |
| 3.看護大学生の睡眠とQOLの関連 | 共著 | 2017年8月 | 第16回日本ウーマンズヘルス学会学術集会（於:東京 リーガロイヤルホテル東京） | 林朱美、尾山木綿子 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

なし

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

なし

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　藤本 美穂 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 小児看護学の演習を通して次世代育児教育も受けられるようにする工夫 | 2014年6月1日 | 離乳食や内服介助の技術演習の際、実際に学生が子どもに食べさせるレトルトの離乳食を試食したり、内服薬を嫌がる子どもにどのように薬を飲ませるか考えさせた上で薬をさ湯で溶いたりゼリーに混ぜたりして実際に飲ませた。その際、看護技術の説明だけでなく育児についても話を向け、子どもとの日常生活における工夫としても小児看護技術が将来応用できると説明した。これにより、学生が教科書からは分かりにくい小児の特性や近い将来の育児について実感できる機会となった。 |
| 新生児・低出生体重児をイメージしやすくなる工夫 | 2015年1月12日 | 新生児看護についての授業の導入の際、なじみの少ない新生児や低出生体重児をイメージしやすいように、平均的な身長と体重などを精密に再現したモデル人形を学生に触れたり抱っこさせたりさせることで低出生体重児の繊細さがインパクトとして記憶に残るようになり、対象理解が進む結果となった。 |
| 実践基礎看護学実習にて学生主体でカンファレンスできるようになる工夫 | 2017年3月6日 | 実習で学生が自主的にカンファレンスを進めていくことに不安を感じていたため、そもそもカンファレンスの目的や看護師になった時にどのように役にたつのかを説明した。また、学生がこれからの実習でも学びを深められるように、プリントにカンファレンスの運営方法と発表する内容、注意点を記した。これにより、実際のカンファレンス中に学生が注意点を確認できるようになり、実習前より進め方の技術が向上した。 |
| 小児看護学演習におむつ交換の注意点が分かりやすくなる工夫 | 2017年4月17日 | おむつ交換の技術演習にて学生が効果的に技術を向上させるために、まずデモンストレーションを教員が行い、具体的な手順や注意点について説明した。この際、学生を指名して根拠を口頭で答えるようにしたり、デモンストレーション後の演習では一人ひとりの技術を見て回り、個別に指導した。全員終了後、再度集まり、おむつかぶれになった新生児の臀部の写真を見せ、おむつかぶれの原因は何か、どうすれば予防できるかを学生に考えさせた。おむつかぶれの実際を初めて見た学生はほとんど全員であったため、写真を見て驚いていた。おむつかぶれにさせないためには、技術だけでなく先を見越した配慮と観察力の重要性について学ぶことができた。 |
| 小児発達支援実習にて生活習慣、マナー、ルール等を分かりやすく園児に伝えるためのポスター作り | 2018年7月～9月 | 今年度より小児発達支援実習の学内における学びの統合を、学生が楽しく取り組めるように実習で担当したクラスに掲示するポスターを作成するという設定で、学生一人一人が健康教育計画表を用いて保育士と教員の指導を受けながら進めることにした。園児の発達段階や個別性、担当クラスで流行っているキャラクター等をよく観察し、健康教育計画表にある「ポスター作成の目的」、「目標」、「工夫した点」と実際に作成しようと思うデザインや図を記入する。実習中に指導を受け、実習最終日に作成し、学内プレゼンテーションをする。後日、実習施設に教員が学生の作品を持参する予定である。また、来年度より、看護学科学生による園児への健康教育の足掛かりとなれるよう、保育施設側と検討していく計画である。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 地域で生活している母親の育児ストレスとレジリエンス（修士論文） | 単著 | 2013年3月1日 | | | |
| 本学看護学科における解剖見学実習による学生の学び―KH Coderによる実習後課題レポートの内容分析より― | 共著 | 2016年2月15日 | 森ノ宮医療大学紀要vol.9 | 重年清香、吉川彰二、清水容子、佐藤寿哲、吉川有葵 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 育児支援に関する文献研究―実施した事業の効果に焦点を当てて― | 共著 | 2016年3月31日 | 京都学園大学<br>健康医療学部紀要第1巻 | 今西誠子 | 73-81 |
| (口頭発表)<br>地域で生活している母親の育児ストレス | 共著 | 2013年7月1日 | 日本小児看護学学会学術集会 | 高島遊子・藤原千恵子 | |
| (口頭発表)地域で生活している母親のレジリエンスの差異と育児ストレスの関係 | 共著 | 2013年8月1日 | 日本看護研究学会学術集会 | 高島遊子・藤原千恵子 | |
| (ポスター発表)地域子育て支援拠点事業の基本事業からみた育児支援について―文献検討を通して― | 共著 | 2016年3月5日 | 日本看護研究科学会　近畿・北陸地方会学術集会 | 今西誠子 | |
| (ポスター発表)小児看護学実習における重症心身障害児施設での学生の学び―コミュニケーションと小児看護学特有の学びに着目して― | 共著 | 2016年12月10日 | 第36回日本看護科学学会学術集会 | 佐藤寿哲・西順子・黄波戸航・吉川彰二 | |
| (ポスター発表)Effect of music on intergenerational exchange between children,elderly and collage students | 共著 | 2018年7月18・19・20日 | 2018 WHOCC 世界保健機構協力センター連携会議 ケアンズ大会 | 今西誠子・夏山洋子・杉山智春 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 森ノ宮医療大学主催　地域育児支援「もりもりひろば」(2013・2014年) | 平成25・26年度の支援に参加。月1回土曜に、大学で乳児を育てる保護者対象の育児支援を行った。ベビーヨガやマッサージ等、イベントを企画・実施し、学生と共に保護者との交流を通じて、育児の楽しさや喜びを分かち合える関係づくりを図った。看護学科の特性を活かしたプログラムづくりを工夫し、冬には発熱時の看病や内服介助の方法をパワーポイントを使っての講義を担当した。 |
| 京都学園大学主催　地域育児支援「右京区子育てこみゅにてぃー　”クローバーKGU”」(2015年～) | 平成27年度に右京区まちづくり支援制度の支援を受け、平成29年度現在も活動継続中である(右京区の支援制度助成金交付は27・28年度で終了)。事業の趣旨を主に「子育て支援」と「子育て世代と高齢者をつなげる」こととして、27年度に本学雨庭でのジャガイモ植えと収穫、手のひらスタンプ、冬の感染対策で手洗い講座等を看護学科母性・小児教員とシニアボランティア、学生ボランティアと共に7月から2月にかけて計7回、月1回程度のペースでイベントを開催した。年間総計約200名の近隣住民が参加し、アンケート集計結果では非常に好評となった。またこの活動により右京区の育児・教育関連部門や大学周辺の児童館との連携を強めるきっかけとなった。学生にとっては地域への興味とボランティア意識を高め、次世代育児教育としての意味を成す重要な活動と捉えている。また、2016年12月には本学のハピネス賞を受賞し、学生たちの自信を高めることができた。 |
| 右京ブロック　児童館まつり(2016・2017年5月) | 京都市児童館学童連盟主催で年に1回、児童館の役割を広く地域に知らせる等の目的で実施されるイベントがある。育Gの会は大学近隣の児童館に活動のチラシを配布したり、地域会議に出席したりしており、そのご縁で児童館まつりへの参加要請を受けた。2017年度は主に、音楽サークルの学生12名による演奏とシニアボランティア3名による大型絵本の読み聞かせを行い、育Gの会の広報活動も行った。 |
| 音楽ボランティアサークルの指導(2016年～) | 2016年10月に看護学科の学生9名が、自主的に吹奏楽のサークルを立ち上げた。学生ではないが、顧問兼メンバーとして入部し、学生の指導を行った。2016年2月には育児支援活動「育Gの会」に参加し、演奏と手作り楽器作成の手伝いを行い、地域住民と交流した。その企画・実施を学生と共に行ったが、学生が主体的に考えて実行できるよう自立を促すことに指導の焦点を当てた。2月の会は参加者に好評であったため、学生は自分たちで会を運営したり、地域住民と交流の機会をもつことに自信をつけた様子であった。その後、4月の新入生歓迎会でも演奏とゲームを企画・実施し、好評を得ることができた。 |
| トリプルPファシリテーターとしての育児支援活動(2017年6・7月) | トリプルP(ポジティブ・ペアレンティング・プログラム)のファシリテーターとして、阪大歯学部付属病院の小児口腔外科に口唇口蓋裂症で通院している子どもを育児する母親7名を対象とした育児指導を行った。口唇口蓋裂症で治療を受ける子どもの母親は自責の念を特に抱きやすく、通院だけでなく手術を複数回受ける必要があるため、学習面やボディイメージの障がいに不安を感じることも多い。トリプルPの本プログラムは基本的には健常児の母親を対象にしているが、結果的には同じ疾患をもった子どもを育児する母親としてのピアサポートを含めた指導となり、母親たちからは参加してよかったという感想を聞かれ、指導を終了することができた。 |
| 日本小児看護学会第27回学術集会　実行委員(2017年8月19・20日) | 国立京都国際会館で開催された学術集会において、実行委員として選出され、参加した。 |
| 日本小児看護学会第28回学術集会　実行委員(2018年7月22日) | 名古屋国際会議場で開催された学術集会において、実行委員として選出され、参加した。 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　村田 優子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有 ・ 無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 基礎看護学演習Ⅰにおける効果的な演習の工夫 | 2016年～現在 | 「日常生活の基盤と看護」における、清潔技術およびバイタルサイン測定などの演習で、少人数グループを担当し、科学的根拠や患者中心の援助方法を理解できるよう指導し、事前事後学習の評価を行っている。 |
| 基礎看護学演習Ⅱ「看護治療支援技術論」における効果的な演習の工夫 | 2016年～現在 | 「看護治療支援技術論」の筋肉注射、点滴、採血などの演習にて、小人数グループでの演習指導を行っている。 |
| 基礎看護学演習Ⅱ「看護感染技術論」における効果的な演習の工夫 | 2016年～現在 | 「看護感染管理技術論」の無菌操作、感染防護テクニック、導尿などの演習で少人数グループの指導を担当し、概念や科学的根拠および患者中心の具体的行動を理解できるよう指導し、事前事後学習の評価を行っている。 |
| 「ヘルスアセスメント」における効果的な演習の工夫 | 2016年～現在 | 「ヘルスアセスメント」の循環、呼吸、脳神経などの演習において、少人数グループの指導を担当し、患者の健康問題についての情報収集、推論、分析を通して、的確な実践へと導く過程が理解できるよう指導し、事前事後学習の評価を行っている。 |
| 「看護栄養管理技術論」における効果的な演習の工夫 | 2016年～現在 | 「看護栄養管理技術論」の演習において、経口、経管栄養摂取法を安全安楽に実施する方法などについて小人数グループでの演習指導を行っている。 |
| 「看護体験実習」における看護を学ぶ動機づけへの工夫 | 2016年～現在 | 1年次「看護体験実習」1単位の臨地実習において看護の役割と機能、患者とのコミュニケーションにおける指導および、日々のカンファレンスでの指導を行い、看護者として必要な基本的態度についての考えを深め、看護を学ぶ動機づけができるよう指導している。 |
| 「実践基礎看護学実習」において対象者の援助に必要な視点や<br>方法についての考えを深める工夫 | 2016年～現在 | 2年次「実践基礎看護学実習」2単位の臨地実習において実習前技術演習、看護過程の展開、理論を活用した看護計画の立案、看護の実践、看護計画の修正における指導および、日々のカンファレンスでの指導を行い、対象者の特徴を抽出し、援助に必要な視点や方法についての考えを深めることができるよう指導している。 |
| 「看護統合実習」における看護実践能力の総合的な学修および、看護観を深める工夫 | 2016年～現在 | 4年次「看護統合実習」2単位の臨地実習において、多重課題における看護計画の立案、チームの中での看護の展開、看護マネジメントなどについて指導を行い、チーム医療における看護実践能力を総合的に学修し、看護観を深めることができるよう指導している。 |
| 「高齢者生活体験実習」における高齢者支援に必要な視点や方法についての考えを深める工夫 | 2017年 | 「高齢者生活体験実習」1単位の臨地実習において、患者とのコミュニケーションにおける指導および、日々のカンファレンスでの指導を行い、高齢者生活援助の特徴を抽出し、高齢者支援に必要な視点や方法についての考えを深めることができるよう指導した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 流量膨張式蘇生バッグ換気時における気道内圧計の有用性 | 共著 | 2014年10月 | 人工呼吸29巻2号 | 辻尾有利子、志馬伸朗、村田優子、徳平夏子、田端雄一 | 264-267 |
| 看護師の一次救命処置に対する不安要因に関する基礎的研究 | 共著 | 2016年12月 | 京都府立医科大学医学部看護学科紀要第26巻 | 村田優子、園田悦代 | 129－133 |
| 一次救命処置に対する看護師の不安要因に関する文献検討 | 単著 | 2018年5月 | エマージェンシーケア31巻6号 | | 68-74 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| PICUにおける緊急開胸シミュレーションの教育効果とその課題 | 共同 | 2010年3月 | 第37回日本集中治療医学会学術集会 | 多賀野友子、辻尾有利子、村田優子、大澤智美、志馬伸朗 | |
| 小児における栄養評価の検討 | 共同 | 2010年7月 | 第46回日本小児循環器学会学術集会 | 松本紀子、村田優子、大澤智美,小山光,練谷弘子, 坂田由里子 | |
| あなたは流量膨張式蘇生バッグを使いこなせますか | 共同 | 2011年6月 | 第33回日本呼吸療法医学会学術総会 | 辻尾有利子、志馬伸朗、村田優子、徳平夏子、田端雄一 | |
| どうしている？シミュレーション教育<br>自施設での取組み「ジャクソンリースによる用手換気」 | 共同 | 2013年11月 | 第21回日本小児集中治療ワークショップ | 辻尾有利子、村田優子、藤原愛 | |
| 看護師の一次救命処置に対する不安要因に関する基礎的研究 | 共同 | 2016年8月 | 第42回日本看護研究学会学術集会 | 村田優子、園田悦代 | |
| 京都市右京区内の避難所のバリアフリー環境に関する管理者の意識調査 | 共同 | 2018年7月 | 第59回日本社会医学会総会 | 西田尚子、江頭典代、山下敬、辻村裕次、垰田和史 | |
| 日本学術振興会科学研究費助成事業　基盤研究(C) | 共同 | 2018年～現在 | 「河川水害時の高齢者・障がい者の避難生活環境整備と救援体制システムの開発」<br>課題番号:17K12192<br>研究分担者 | 西田尚子、江頭典代、山下敬、辻村裕次、垰田和史 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2016年～現在 | 日本看護研究学会会員 |
| 2017年7月 | 第23回日本看護診断学会学術大会実行委員 |
| 2017年～現在 | 日本小児看護学会会員 |
| 2017年8月 | 第27回日本小児看護学会学術集会実行委員 |
| 2018年～現在 | クリティカルケア看護学会 |
| 2018年～現在 | 日本看護教育学学会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

## 健康医療学部　言語聴覚科教員組織


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 苅　安　誠 | 244 |
| | 髙ノ原　恭子 | 246 |
| | 能登谷　晶子 | 249 |
| | 吉　村　貴子 | 252 |
| 副学長 | 久　育　男 | 257 |
| 准教授 | 大　平　芳則 | 262 |
| | 楯　谷　智子 | 263 |
| | 外　山　稔 | 264 |
| 講師 | 橋本　かほる | 267 |
| 助教 | 弓　削　明子 | 269 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　苅安　誠 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1. 音声学 | 平成27年4月～ | 学生たちが日常行っている話し言葉を科学的視点で解説を試みている。音声の生成や知覚に関する代表的な実験で使われた音声や音響解析を示し、研究の背景や意義を討議している。 |
| 2.音声学演習 | 平成27年4月～ | 言語聴覚を専門とする学生にとって、音声学で学ぶ母音と子音の特徴と国際音声字母を用いた音声の表記は身につけておかなければならない。授業内で練習問題と結果のフィードバックは、学生の学習に有効であった。 |
| 3. 言語聴覚障害学概論 | 平成27年9月～ | 初学者に言語聴覚障害の全体像と各論のダイジェストを示している。言語の生涯発達のモデル(聴覚・視覚入力、認知を含めた大脳情報処理、構音出力)をもとに、言語の遅れや失語、難聴、発声・構音障害、吃音、頭部外傷や認知症に伴うコミュニケーション障害を紐解く。疫学と原因、能力低下、社会活動参加の制限という視点から、セラピストの役割を説明している。 |
| 4.音声障害学 | 平成28年4月～ | 声の問題とその起源、発声の仕組み、声の評価とリハビリテーションについて、「なぜ」を大切に、すすめている。基本的事項をまとめ、それにより発声障害の病態を理解し、治療に結び付ける取組みをしている。 |
| 5. 構音障害学I | 平成28年9月～ | 構音は、言葉を作る過程である。表出された音の異常から、内在する言語の問題を窺い知ることができる。構音の仕組み、構音器官の解剖生理と母音と子音の生成については、課題を学生に与えて理解を図っている。構音障害の全体像と評価の方法を解説して、神経筋の異常による構音の問題について、その特徴、評価と訓練指導(リハビリテーション)を説明している。 |
| 6. 嚥下障害学 | 平成29年4月～ | 嚥下訓練を行うと法律に明記されたスピーチセラピストが、どう嚥下困難のある患者に対するべきか、学生に伝えている。特に、解剖生理と身体観察から、病態を理解する過程と嚥下訓練などの理論的背景を重視している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| Best Teacher賞　(京都学園大学) | 平成28年度 | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 摂食嚥下障害学 | 共著 | 平成26年 | 医学書院 | 倉智雅子(編) | 44-51頁　84-88頁 |
| 発声発語障害学(第2版) | 共著 | 平成26年 | 医学書院 | 熊倉・今井(編) | 53～70頁 |
| 図解 言語聴覚療法技術ガイド | 共著 | 平成26年 | 文光堂 | 深浦・長谷川(編) | 360～365頁 |
| 言語聴覚療法一臨床マニュアル | 共著 | 平成26年 | 協同医書 | 平野ほか(編) | 368−371 374-379<br>382-383 422-425<br>442-447 458-459頁 |
| 発話障害へのアプローチ | 共著 | 平成27年9月 | インテルナ出版 | 廣瀬　肇(監修) | 71～97頁 |
| 神経原性発声発語障害 dysarthria | 単著 | 平成29年4月 | 医歯薬出版 | | 1～361頁 |
| 目で見る耳鼻咽喉科疾患 | 共著 | 平成29年5月 | 文光堂 | 池田勝久(編) | 212-213頁　214-215頁 |
| 今日の診断指針(第8版)<br>分担:構音・言語障害 | 共著 | 平成31年 | 医学書院 | | in print |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 嚥下時の頸部筋活動と姿勢変化 | 共 | 平成26年 | 米子医学会誌 | 平松哲也、苅安誠ほか | |
| Velophayngeal closure function strategy in articulation | 共 | 平成28年 | BIBE | Nozaki, Satoh, Kariiyasu et al | 1-6頁 |
| パーキンソン病患者の発話課題での単調子(monopitch)に対する体系的訓練LSVT®LOUDの効果 | 共 | 平成30年 | 音声言語医学 | 飯高玄、苅安誠ほか | 327-333頁 |
| 人工内耳装用成人の子音明瞭度と異聴傾向 －語音聴取評価検査(CI2004)での知見－ | 共 | 平成30年 | 聴覚医学 | 大平芳則、苅安誠ほか | 65-72頁 |
| 神経原性の発話(発声発語)障害(Dysarthria)の定義と用語 | 共 | 平成31年 | 音声言語医学 | 苅安誠、椎名英貴 | in print |
| Dysarthriaの評価 | 共 | 平成31年 | 音声言語医学 | 椎名英貴、苅安誠 | in print |
| その他 | | | | | |
| 小児の構音障害リハビリテーション | 共 | 平成31年 | JHONS | 苅安誠、舘幸枝 | in print |
| 学会発表 | | 平成26年～30年 | 年間3回以上 | 日本音声言語医学会、日本リハビリテーション医学会、神経治療学会 | |
| ワークショップ<br>Spectrogramの臨床応用 | | 平成27年6月 | 日本言語聴覚学会 | | |
| セミナー<br>dysarthria症例における音響分析の活用 | | 平成29年10月 | 日本音声言語医学会 | | |
| 講演<br>第2回全国研修会 | | 平成30年7月 | 日本言語聴覚士協会 | | |
| 特別講演会 | | 平成30年7月 | みえ摂食嚥下<br>リハビリテーション協会 | | |
| 専門講習会<br>dysarthriaの臨床 | | 平成30年10月 | 日本言語聴覚士協会 | 大阪府 | |
| 公開講演会<br>嚥下困難へのアプローチ | | 平成31年3月 | 宮崎県摂食嚥下障害<br>臨床研究会 | | |
| 特別講演会<br>dysarthriaの患者をいかに診るか | | 平成31年4月 | 福井県言語聴覚学術集会 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本言語聴覚士協会 | 理事、国際部担当(平成27年10月～)。 |
| 日本音声言語医学会 | 理事、言語・発達委員会委員長(平成28年10月～)。査読者。 |
| 日本嚥下医学会 | 評議員を務める。 |
| 日本摂食嚥下リハビリテーション学会 | 評議員、査読者を務める。 |
| 日本嚥下障害臨床研究会 | 世話人を務め、Newsletter発行を行う。 |
| 日本耳鼻咽喉科学会<br>英文雑誌 Auris Nasus Larynx | 査読委員(平成29年7月～)。 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

発話・構音や嚥下の異常の背景と音響解析の方法(Panasonicエコリソリューション社、技術相談)。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　高ノ原　恭子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | 2015年4月～ | 臨床実習指導においては、実習前指導に重点を置き、学生のスキルの向上を図っている。また、実習にむけて知識・技術だけでなく、挨拶・身だしなみ・言葉遣い・振る舞いなど医療人としての社会性の育成を心掛けている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | 2015年4月～ | 授業はパワーポイント中心にしているが、できるだけ音声や写真など、画像を取り入れたリアルなものを心掛けている。また、学んだ事柄が臨床にどのように生かされるか、と国家試験ではどのように展開されるかの2つのポイントを狙って授業を実施している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 第16回日本言語聴覚学会にて研究発表。<br>テーマ「客観的臨床能力試験（OSCE）における教員評価と学生評価との比較」 | 2015年6月 | 実習前の学生に対し、客観的臨床能力試験（OSCE）を実施した。教員評価とともに、学生自身にも自分の臨床態度を評価させる試みを実施し、教員の評価との相違について比較検討した。<br>学生個々の結果は学生へのフィードバックや実習指導に活用している。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2016年～ | 目下、臨床実習施設のさらなる確保に力を入れている。 |
| | 2017年～ | 学部完成年度に向けての新カリキュラム作成のため、日本言語聴覚士協会のモデル・コア・カリキュラム研修会に参加し、最新の養成教育カリキュラムの動向に注目している。<br>就職活動を開始させる準備として、キャリア教育を開始し、学生の指導にあたっている。また並行してキャリアセンターとの連携を図り、就職情報の整理・活用にむけて作業を開始している。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 進行性非流暢性失語について | 単著 | 2013年10月1日 | 大阪河崎リハビリテーション大学紀要 | | 3頁～8頁 |
| 摂食嚥下チームアプローチが有効であった頭頸部多重多発癌の一例 | 単著 | 2014年10月31日 | 大阪河崎リハビリテーション大学紀要 | | 15頁～23頁 |
| 表皮水疱症における摂食・嚥下障害 | 単著 | 2015年3月31日 | 大阪河崎リハビリテーション大学紀要 | | 65頁～70頁 |
| 急性期脳卒中患者における「急性期失語症評価シート」の試用 | 共著 | 2016年9月20日 | 神経内科（85・6、2016） | 大道卓摩・近藤正樹・富井康宏・水野敏樹 | 666頁～668頁 |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>嚥下障害をきたした舌咽・迷走神経麻痺症例における喉頭感覚低下 | 共同 | 2012年2月 | 第35回日本嚥下医学会総会・学術講演会 | | |
| （口頭発表）<br>脳梁梗塞後に多彩な言語症状を呈した一例 | 共同 | 2012年11月 | 第36回日本高次脳機能障害学会 | | |
| （口頭発表）<br>京都府高次脳機能障害支援プラン作成と5年間の取り組み | 共同 | 2012年11月 | 第36回日本高次脳機能障害学会 | | |
| （口頭発表）<br>症候性吃音を呈するMachado-Joseph病の一例 | 共同 | 2013年11月 | 第37回日本高次脳機能障害学会 | | |
| （口頭発表）<br>拮抗失行を呈した脳梁梗塞例に対するリハビリテーションアプローチ | 共同 | 2013年11月 | 第37回日本高次脳機能障害学会 | | |
| （口頭発表）<br>脳出血後に意識障害を認め、頸部干渉波刺激装置を使用し、一部経口摂取可能となった一例 | 共同 | 2017年9月 | 第32回日本摂食嚥下リハビリテーション学会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（つづき） | | | | | |
| （ポスター発表）<br>顕著な反復言語を呈した進行性核上性麻痺例の前頭葉内側面の血流低下の検討 | 共同 | 2012年9月 | 第36回日本神経心理学会総会 | | |
| （ポスター発表）<br>表皮水疱症の摂食嚥下障害−3症例を通して− | 共同 | 2017年9月 | 第32回日本摂食嚥下リハビリテーション学会 | | |
| （研究助成）<br>姿勢変化と座圧に関する研究（嚥下に注目して） | 共同 | 2014年 | 大阪河崎リハビリテーション大学共同研究費 | | |
| （メディア）<br>和歌山放送・ラジオ健康相談「いつまでもおいしく食べる」 | 単独 | 2013年7月 | 和歌山放送 | | |
| （メディア）<br>和歌山放送・ラジオ健康相談「声のしくみと障害」｝ | 単独 | 2014年11月 | 和歌山放送 | | |
| （講演）<br>貝塚市市民講座「飲み込みの障害とその予防」 | 単独 | 2013年10月 | 貝塚市民出前講座 | | |
| （講演）<br>貝塚市立中学公開講座「話す・食べる・息をする」 | 単独 | 2013年10月 | 貝塚市立貝塚中学校 | | |
| （講演）<br>表皮水疱症友の会DebRA Japan教育講演「食道狭窄、それでも美味しく食べる工夫」 | 単独 | 2013年 | 大阪大学医学部付属病院 | | |
| （講演）<br>大阪河崎リハビリテーション大学公開講座「脳血管障害の言語聴覚療法―急性期・回復期・維持期の取り組み」 | 単独 | 2014年11月 | 和歌山市民会館 | | |
| （講演）<br>大阪河崎リハビリテーション大学河泉会スキルアップ講座教育講演「摂食嚥下障害のリハビリテーション」 | 単独 | 2015年3月 | 大阪河崎リハビリテーション大学 | | |
| （講演）<br>表皮水疱症友の会DebRA Japan教育講演「表皮水疱症の摂食嚥下障害」 | 単独 | 2015年7月 | 大阪大学医学部付属病院 | | |
| （講演）<br>京都府言語聴覚士会北部研修「Dysarthriaの評価・訓練について」 | 単独 | 2015年11月 | 舞鶴赤十字病院 | | |
| （講演）<br>スキルアップセミナー「Dysarthriaの訓練について」 | 単独 | 2016年10月 | 京都学園大学 | | |
| （講演）<br>スキルアップセミナー「Dysarthriaの訓練について」 | 単独 | 2017年7月 | 京都学園大学 | | |
| （座長）<br>大阪府言語聴覚士会第1回学術大会・摂食嚥下セッション | 単独 | 2015年3月 | 大阪河崎リハビリテーション大学 | | |
| （座長）<br>第17回日本言語聴覚学会スキルアップセミナー「Dysarthriaミクロの目とマクロの目」 | 単独 | 2016年6月 | ロームシアター京都 | | |
| （座長）<br>第17回日本言語聴覚学会セッション「成人構音障害2」 | 単独 | 2016年6月 | ロームシアター京都 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 京都府言語聴覚士会副会長<br>（平成25年3月まで） | |
| 京都府地域リハビリテーション連携推進会議委員（平成25年3月まで） | |
| 京都府総合リハビリテーション推進プラン検討会委員（25年3月まで） | |
| 第17回日本言語聴覚学会運営委員 | |
| 京都言語聴覚士会監事 | 2017年4月より任期2年予定 |
| 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士取得 | 2017年3月、試験及び認定基準に合格し、取得 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 現在、難病に指定されている表皮水疱症の口腔・嚥下に関する全国調査の準備段階であり、難病関係の栄養・嚥下などに関するネットワークを持っている。 | |
| またパーキンソン病の小声対策に関するアプリ開発などが稼働中であり、発展させていきたい。 | |
| パーキンソン病の音声障害についての論文「Quality of Life and Other Patient-reported Outcomes in Parkinson’s Disease」（共著）を投稿・査読中である。 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　能登谷　晶子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ことばの障害と相談室 | 2012年8月 | |
| 聴こえの障害と金沢方式 | 2012年11月 | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 金沢大学COC事業で作業療法学専攻 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 高齢者の言語聴覚障害　第2章聴覚障害の概説・評価と支援のポイント | 共著 | 2015年 | 建帛社 | 飯干紀代子　吉畑博代　編 | 8-15 |
| 音の強さ・長短・高さ・数当て検査(種村純　編:やさしい高次脳機能障害用語事典) | 共著 | 2018年 | パーソン書房 | 種村純　編 | 437 |
| 言語的コミュニケーションの分析と統合:解剖学・生理学・運動学に基づく動作分析 | 共著 | 2018年 | 医歯薬出版 | 奈良　勲　編、**能登谷晶子** | 262-275 |
| 論文 | | | | | |
| 新生児聴覚スクリーニング後の療育体制に対する一考察 | 共著 | 2015年 | Audiology Japan,58 | 橋本かほる　**能登谷晶子**　原田浩美　伊藤真人　吉崎智一 | 143-150 |
| 距離判断障害を呈した症例に対するリハビリテーションの経過 | 共著 | 2015年 | 高次脳機能研究　35 | 武田千絵　**能登谷晶子**　塩田繁人 | 225-232 |
| 半側空間無視患者における音の時間差と強度差との関係 | 共著 | 2015年 | つるま保健学会誌　39 | 砂原伸行　**能登谷晶子**　中谷謙 | 65-72 |
| 半側空間無視患者における音の方向感検査所見と脳損傷部位との関係 | 共著 | 2015年 | つるま保健学会誌　39 | 砂原伸行　**能登谷晶子**　中谷謙 | 51-58 |
| 両耳間時間差音像移動弁別閾値からみた、半側空間無視患者の1音像定位能力と脳損傷部位との関係 | 共著 | 2015年 | つるま保健学会誌　39 | 砂原伸行　中谷謙　**能登谷晶子** | 163-170 |
| A Survey of the Development of Syntactic Comprehension in Neurotypical Infants | 共著 | 2015年 | J.Tsuruma Health Sci. Soc., Kanazawa Univ. | Adacahai S., Ikeda Y., Satake T., Usami S., Sunahara N., **Notoya M.** | 51-61 |
| 半側空間無視患者のリハビリテーションにおける白色雑音による聴覚刺激の効果 | 共著 | 2015年 | つるま保健学会誌　39 | 岡本一宏　中谷謙　砂原伸行　**能登谷晶子**　井上克己　影近謙治 | 87-92 |
| cognitive dysfunction affecting instrumental activities of daily living in patients with Alzheimer's disease: a comparative study using the At-the-Desk test | 共著 | 2016年 | J. of the Tsuruma Health Science Society Kanazawa Univ. | Fujita T.,**Notoya,M.**,Sunahara N., Nakatani,K., Kato,K., Nagai,T., Inoue,K | 45-55 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Auditory and speech-language data in a case of facioscapulohumeral muscular dystrophy in a Japanese child | 共著 | 2016年 | Int. J. of Ped Otolaryngology. | **Notoya M**.., Toyama. M., Hashimoto, K.,Harada,H., Yoshizaki,T.: | https://doi.org/10.1016/j.pedex.2016.11.004 |
| Health promotion support for mothers of children with hearing loss in 2016 | 共著 | 2017年 | J Phys.Ther.Sci | Masami Yokogawa, **Masako Notoya***, Ellen M Rintell**: | 576-580 |
| Utility of Tracing as a Memory Storage Method* | 共著 | 2017年 | World Journal of Neuroscinece | Makana Tsutsui,[1] **Masako Notoya**,[2] Daisuke Kimura,[3] Ken Nakatani,[3] Takashi Fujita,[4] Nobuyuki Sunahara[5] and Katsumi Inoue[5] | open access |
| Risk factors for impaired instrumental activities of daily living in Alzheimer's disease. | 共著 | 2018年 | Asian J Occup Thr | T.Fujitqa, **M.Notoya**, N. Sunahara,K.Nakatani, D. Kimura | 9頁～16頁 |
| Head position of patients with right hemisphere damage during a visual search task in a large field | 共著 | 2018年 | World Journal of Neuroscinece | Ken Nakatani, Shusuke Takahashi, Daisuke Kimura, **Masako Notoya**, Nobuyuki Sunahara, Takashi Fujita, Minoru Toyama, Shinya Fukunaga, Naoe Mori, | open access |
| 加齢性難聴と聴覚認知障害 | 共著 | 2018年 | 高次脳機能研究 38(2) | **能登谷晶子** | 216-221 |
| The influence of behavioral and psychological symptoms of dementia(BPSD) on the autonmic nervousu system | 共著 | 2017年 | World Journal of Neuroscinece | Kimura D., Nakatani K., **Notoya M.**, Imai A., Ohtoshi T. | open access |
| Transformative learning experience for physical therapy students through a community health promotion project for mothers of hearing-challenged children. | 共著 | 2017年 | J Phys Ther Sci. 29 | Yokogawa M, **Notoya M**, Madokoro S. | 576-580 |
| 0歳代の早期に難聴が発見されることによる親の抱える問題 | 共著 | 2018年 | 音声言語医学 59 | 木村聖子 **能登谷晶子** 諏訪美幸 山田和弘 | 245-250 |
| Differences of Neglect in Peripersonal Space and Extrapersonal Space in a Patient with Unlateral Spatial Neglect | 共著 | 2018年 | Case Reports in Clinical Medicine7 | Daisuke Kimura,Ken Nakatani, **Masako Notoya**, Aiko Imai, Hiroki Bizen, Minoryu Toyama, Kazumasa Yamada | 513-525 |
| The effectiveness of diverse technology-based instruction in assisting people with Alzheimer's disease with medication management. | 共著 | 2019年 | Disabil Rehabil Assist Techno23 | Takashi Fujita **Masako Notoya** & Kiyohito Kato | 1-9 |
| 多様で複雑な聴覚障害の問題を通して知識と社会を結びつけられる人材育成を目指して一平成26年度金沢大学COC事業 地域志向研究費推薦型の報告 | 共著 | 2015年 | つるま保健学会誌39 | **能登谷晶子** 原田浩美 橋本かほる 砂原伸行 横川正美 | 133-135 |
| 聴力障害児を持つ親への支援プログラムの開発 | 共著 | 2017年 | 基盤研究(C)JP25381328科学研究費報告書 | 原田浩美 **能登谷晶子** | |
| 認知症スクリーニングのための運動記憶テストの開発 | 共著 | 2018年 5月 | 平成29年度共同研究第2種成果報告書 | **能登谷晶子** 横川正美 外山稔 | |
| ヒトメタニューモウイルスによる脳炎を発症した小児患者の1例 | 共同演者 | 2015年 | 第16回日本言語聴覚学会 | 有澤栄朗 **能登谷晶子** 岡部真子 山本久美子 浅井慈子 須垣麻耶 | |
| 幼児期に言語訓練が十分進まなかった人工内耳装用児への就学後の指導と支援体制について | 共同演者 | 2015年 | 第16回日本言語聴覚学会 | 橋本かほる **能登谷晶**子 原田浩美 折戸真須美 木村聖子 諏訪美幸 石丸正 伊藤真人 杉本寿史 吉崎智一 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 左被殻出血後に全般的精神機能の低下、デイサールスリアを呈した一例 | 共同演者 | 2015年 | 第16回日本言語聴覚学会 | 松田崇　大森友明　**能登谷晶**子 | |
| 交通外傷により記憶障害と前頭葉機能障害を呈した一症例 | 共同演者 | 2015年 | 第16回日本言語聴覚学会 | 本川聡美　**能登谷晶**子　谷内節子<br>諏訪美幸　木村聖子　川北慎一郎 | |
| 自己効力感からみた聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発（乳幼児期） | 共同演者 | 2015年 | 第60回日本音声言語医学会 | 原田浩美　**能登谷晶子**　橋本かほる<br>伊藤真人　吉崎智一 | |
| 聴覚障害児の幼児期後期における言語指導の試みー創作課題の導入ー | 共同演者 | 2015年 | 第60回日本音声言語医学会 | 木村聖子　諏訪美幸　橋本かほる<br>原田浩美　**能登谷晶子** | |
| 聴覚障害児の読書力経年変化ー下位項目の検討ー | 共同演者 | 2015年 | 第60回日本音声言語医学会 | 橋本かほる　**能登谷晶**子　原田浩美<br>木村聖子　諏訪美幸　伊藤真人　吉崎智一 | |
| LEOPARD症候群による重度聴覚障害児の1例の言語指導経過 | 共同演者 | 2015年 | 第60回日本音声言語医学会 | 山崎憲子　経田香織　**能登谷晶子**<br>三輪高喜 | |
| 軽度認知症者とアルツハイマー病者に対する指示様式を変えた場合の行動表出向上効果ー第2報ー | 共同演者 | 2015年 | 第39回日本高次脳機能障害学会 | 藤田高史　加藤清人　砂原伸行　**能登谷晶子** | |
| 高齢者のADLに与える要因について共分散分析を用いた包括的分析 | 共同演者 | 2015年 | 第39回日本高次脳機能障害学会 | 木村大介　藤田高史　中谷謙　砂原伸行　**能登谷晶子** | |
| 0歳代の早期に難聴が発見されることによる親の抱える問題 | 共同演者 | 2016年 | 第61回日本音声言語医学会 | 木村聖子　諏訪美幸　**能登谷晶子** | |
| 左視床梗塞により意味カテゴリー特異性が認められた1例 | 共同演者 | 2016年 | 第17回日本言語聴覚学会 | 高橋宣弘　河村民平<br>**能登谷晶子**　富田浩生　冨澤俊介<br>佐藤万美子 | |
| 左視床梗塞後に交叉性失語を呈した1例 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 高橋宣弘　河村民平　**能登谷晶子**<br>外山稔　佐藤万美子 | |
| 前部弁蓋部症候群症候群により開口・経口摂取困難状態から自力摂取まで到達した1例 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 川原明日香　草山聡美<br>諏訪美幸　木村聖子　**能登谷晶子**<br>川北慎一郎 | |
| ヘルペス脳炎後に色名・身体部位名の呼称が比較的保存された失語症例の臨床経過 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 林 駿　松田 崇<br>**能登谷 晶子**　福島 泰男　　林 智宏 | |
| 左頭頂葉皮質下出血によって 書字障害を呈した一例 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 杉本篤史　坂井佳代　**能登谷晶子** | |
| 左被殻出血による 感覚性失語を呈した1症例の 発話特徴の経過 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 梅木祐子　諏訪美幸　木村聖子<br>**能登谷晶子**<br>薮越文佳　山本楓　川北慎一朗 | |
| 左皮質下出血により 発語失行を呈した一症例 | 共同演者 | 2018年 | 第19回日本言語聴覚学会 | 山本楓　薮越文佳　鹿山麻里亜<br>脇本凪沙　**能登谷晶子**　廣田雄一 | |
| 左視床出血により前頭葉機能障害を呈した1例 | 共同演者 | 2019年 | 第20回日本言語聴覚学会 | 荒尾祐希　諏訪美幸　**能登谷晶子**<br>梅木裕子　薮越文香　川北慎一郎 | |
| その他（講演・シンポジウム） | | | | | |
| 小児領域における言語聴覚士の役割 | 共同演者 | 2016年 | 第61回日本音声言語医学会総会 | 足立さつき　**能登谷晶子** | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 医療研修推進財団 | 言語聴覚士試験委員 |
| 石川県失語症友の会 | 顧問 |
| NPO難聴と共に歩む親子の会金沢方式研究会 | 顧問 |
| 日本高次脳機能障害学会 | 審議員 |
| 日本音声言語医学会 | 参与 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

1）新生児聴覚スクリーニングで聴覚障害と診断された後の患者さんとご家族の指導とケアに関する研究

2）人工内耳装用後の指導に関する共同研究

3）脳卒中後の患者さんの対応について

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　吉村　貴子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 各養成学校における実践的な教育実績 | 平成14年4月～<br>現在に至る | 大阪河崎リハビリテーション大学言語聴覚学専攻の専任教員（平成19年4月から21年3月まで）、大阪滋慶学園大阪医療福祉専門学校言語聴覚士学科の専任教員（平成14年10月から平成19年3月）、大阪滋慶学園大阪医療技術学園専門専門学校の専任教員および非常勤講師（平成21年4月から平成27年3月，平成27年4月から現在）、京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科専任教員（平成27年4月から現在，（京都先端科学大学に改称））まで、以下のような科目を担当した。<br>・「失語症学」「高次脳機能障害学」「実習前指導演習」（平成14年10月～平成30年3月）「運動障害性構音障害」（平成14年10月～19年3月）「失語・高次脳機能障害学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「総合演習（国家試験対策講座）」ならびに「実習事前および事後指導」（平成28年9月から現在）<br>各学校において、上記の内容の授業を行い、学生に各障害を理解させる教育効果があった。また演習では、基礎理論を応用実技につなげ、臨床実習を円滑に遂行する効果を認めた。<br>・「small group learning」「problem-based learning」「卒業研究」（平成19年4月～21年月）、「スタートアップゼミA、B」「チーム医療論」「失語・高次脳機能障害Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（平成27年4月から平成31年）、「実用日本語」「失語・高次脳機能障害学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「総合演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「文献講読Ⅰ、Ⅱ」（平成31年から現在に至る）<br>大学において上記内容の授業を行い、チームで取り組むことや問題解決する方略等を獲得する教育効果があった。 |
| 大学，専門学校の学生による授業評価アンケートによる評価結果 | 平成19年7月～<br>現在に至る | 大阪河崎リハビリテーション大学（平成21年度まで）、大阪医療技術学園専門学校において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると、本人が担当の失語症学、高次脳機能障害学は理解度や熱意の高さを含めた総合評価で高い評価を得ており、学生の満足度が高い結果となっている。 |
| 授業外における学習を促進する取り組み | 平成27年，平成28年 | 京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科の学生とともに，失語症友の会に参加し，失語症の方々やご家族への理解を促すとともに，専門科目への理解や興味を促す工夫をした。 |
| ジグソー学習による協同学習の実践 | 平成28年 | 京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科の初年度科目「スタートアップゼミ」において，ジグソー学習による協同学習により，他者の意見への傾聴や多種の意見を統合する能力を培うこととあわせて，人間関係の構築力やコミュニケーション能力を高める工夫をした。 |
| 社会的促進理論に基づいた国家試験対策学習の実践 | 平成29年，平成30年，<br>平成31年（令和元年） | 京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科の「総合演習（国家試験対策講座）」の一環で行う国家試験学習において，小集団による共行動効果を目指した協同学習により，これまで修得した内容の統合を目指す工夫をした。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 補助教材作成 | 平成14年10月<br>～現在に至る | 各学校で担当する科目において使用するために、学生の適性に応じた補助教材を作成し配布している。学生の基礎学力にはばらつきがあることもあり、講義の要点を理解できるよう配慮し、各講義での授業目標を明示し、重要語句に注目するようなレイアウトに工夫したハンドアウトを毎回の授業で配布している。 |
| 「高齢者の言語聴覚障害-症例から学ぶ評価と支援のポイント-」の第6章の執筆 | 平成27年2月 | 認知症性疾患のひとつであるアルツハイマー病の症例を提示し，評価と分析の結果に基づいた，実践的な介入方法の一例を示した。<br>本人担当部分「6．さまざまな高次脳機能障害　5）遂行<br>アルツハイマー病患者に対する集団認知リハビリテーションにおける遂行機能への介入」 |
| 「言語聴覚療法習得のための必須基礎知識」の<br>第11章の執筆 | 平成27年7月 | コミュニケーションや言語に関する重要基礎事項として，コミュニケーション，言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション，拡大・代替コミュニケーションについて概説し，その要点について示した。<br>本人担当部分「11章　コミュニケーション，言語に関すること」 |
| 「超入門！ナース・PT・OT・STのための高次脳機能障害ビジュアル事典」特集2の「失認（視覚物体失認，聴覚失認，触覚失認，ゲルストマン症候群，失認の治療）」の執筆，リハビリナース10(4)特集 | 平成29年6月 | 高次脳機能障害を対応する看護職のために，失認（視覚物体失認，聴覚失認，触覚失認，ゲルストマン症候群，失認の治療）について，わかりやすく解説した。<br>p.330～p.334、メディカ出版 |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 日本高次脳機能障害学会評議員（代議員） | （平成19年～）<br>現在に至る | 日本高次脳機能障害学会の評議員として、日本高次脳機能障害学会の運営等の発展に関与している。 |
| 日本言語聴覚士協会生涯学習部員，教育部員 | （平成21年～）<br>現在に至る | 日本言語聴覚士協会の生涯学習部の部員として、また平成25年度からは教育部部員として，言語聴覚士の生涯学習プログラムの運営、会員が申請する書類の確認などを行っている。 |
| 日本神経心理学会評議員 | （平成22年4月～）<br>現在に至る | 日本神経心理学会の評議員として、日本神経心理学会の運営等の発展に関与している。 |
| 日本音声言語医学会評議員，査読委員 | 平成25年4月～<br>現在に至る | 日本音声言語医学会の評議員として、また平成27年度からは査読委員として，日本音声言語医学会の運営等の発展に関与している。 |
| 日本リハビリテーション教育評価機構　評価員 | 平成24年4月～<br>現在に至る | 日本リハビリテーション教育評価機構は、全国リハビリテーション学校協会、日本理学療法士協会、日本作業療法士協会、日本言語聴覚士協会とともに運営されている。リハビリテーション教育の質の向上のための第三者評価委員として日本のリハビリテーション医療水準の確実な向上のために活動している。 |
| 日本神経心理学会広報委員 | 平成29年9月～<br>現在に至る | 日本神経心理学会の広報委員として、日本神経心理学会の運営等の発展に関与している。 |
| 学校教員セミナーでの講演「ワーキングメモリの基礎知識-発達に困難をもつ子どもへの支援について-」の実施 | 平成25年8月 | 大阪医療技術学園専門学校の社会貢献事業の一環として毎年実施する小・中・高校教員に対するセミナーでワーキングメモリ（WM）と発達障害におけるその支援について講演した。WMの概説と、発達との関連を概観し、発達に困難をもつ児童に対する教室での具体的支援方法について解説した。 |
| 特別支援教育士の資格更新 | 平成31年 | 日本LD（学習障害）協会が認定するLD・ADHD（注意欠陥・多動性障害）等のアセスメントと指導の専門資格で、概論、アセスメント、指導、特別支援教育士の役割、実習の5つの領域から合計36ポイントを修得し、認定試験に合格し、特別支援教育士（S.E.N.S）の資格を取得したが，その資格の更新に必要な学会への参加，発表，論文発表等の要件を満たし，更新した。 |
| 認定言語聴覚士の資格更新 | 平成30年3月 | 日本言語聴覚士協会による失語・高次脳機能障害領域の認定言語聴覚士の資格を更新した。 |
| 国立長寿医療研究センターの外来研究員 | 平成27年10月～<br>現在に至る | 認知症高齢者に関する研究を行っている。 |
| コミュニケーションロボット開発に対する技術指導 | 平成29年～平成30年 | 国立長寿医療研究センター健康長寿支援ロボットセンター認知行動科学研究室の依頼により，ロボット開発に対する技術指導を行っている。 |
| 公認心理師の資格取得 | 平成30年11月 | 公認心理師の国家試験に受験し，資格を得た。 |
| 京都学園大学体力測定会における認知機能検査の準備ならびに実施 | 平成28年，平成29年 | 健康医療学部で実施する体力測定会に認知機能検査班として参加し，高齢者の認知機能を測定することで地域住民の健康維持活動に貢献するとともに，学生が検査者として参加する機会を提供し，学生に刺激を与えた。 |
| 京都先端大学体力測定会における認知機能検査の準備ならびに実施 | 令和元年 | 健康医療学部で実施する体力測定会に認知機能検査班として参加し，高齢者の認知機能を測定することで地域住民の健康維持活動に貢献するとともに，学生が検査者として参加する機会を提供し，共同研究者との研究実践ならびに社会貢献活動をとおして，学生に刺激を与えつづけている。 |
| スキルアップセミナーでの講演実施 | 平成28年<br>平成29年<br>平成30年 | 京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科の社会貢献事業として，言語聴覚士ならびに医師を対象に，臨床技術の向上のためのセミナー（認知機能障害に関するテーマ）を担当した。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 高齢者の言語聴覚障害ー症例から学ぶ評価と支援のポイントー<br>6. さまざまな高次脳機能障害 5）遂行 | 共著 | 平成27年2月 | 健帛社 | 編者：飯干紀代子，吉畑博代 | |
| やさしい高次脳機能障害用語事典 | 共著 | 平成30年12月 | ぱーそん書房 | 編者：種村 純 | |
| 標準言語聴覚障害学 言語聴覚障害学概論 | 共著 | 平成31年3月 | 医学書院 | 編者：藤田郁代・北義子・阿部晶子 | |
| 叢書18 高齢者の発話と認知容量の関係 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学総合研究所 | 吉村 貴子・苅安誠・齊藤章江 | |
| 論文 | | | | | |
| 言語聴覚療法習得のための必須基礎知識<br>11章 コミュニケーション，言語に関すること | 共著 | 平成27年7月 | エスコアール | 編者：山田 弘幸 | |
| 高齢者によくみられる疾患・障害とそれに対するリハビリテーション<br>1．認知症 2）集団訓練 | 共著 | 平成28年6月 | Geriat. Med. 54(6) | 吉村 貴子，岩田 まな | 625～629 |
| 言語流暢性課題に現れた認知症のワーキングメモリの．特徴―言語流暢性課題には ワーキングメモリの中央．実行系が関連する可能性がある― | 共著 | 平成28年12月 | 高次脳機能研究 36(4) | 吉村貴子，苧阪満里子，大沢愛子，前島伸一郎 | 484～491 |
| 認知症高齢者に対する有効なコミュニケーション方法とその介入についてー言語障害学の観点からのアプローチ― | 共著 | 平成29年3月 | 京都学園大学<br>健康医療学部紀要 2 | 吉村貴子，岩田まな，斉藤章江，植田郁恵，大沢愛子 | 1～11 |
| 認知症高齢者と介護家族間のコミュニケーションを支える言語聴覚療法研究への提言 | 共著 | 平成29年3月 | 言語聴覚研究 14(1) | 岩田まな，吉村貴子，丸山めぐみ | 65～69 |
| 超入門! ナース・PT・OT・STのための高次脳機能障害ビジュアル事典「失認」 | 単著 | 平成29年6月 | 「リハビリナース」<br>第10巻第4号 | 吉村 貴子 | 339～334 |
| 高齢者の発話の正確性と認知容量との関係<br>―ワーキングメモリ容量による検討― | 共著 | 平成29年12月 | 臨床神経心理 第28号 | 吉村貴子，斉藤章江，苅安誠，外山稔，苧阪満里子 | 25-30 |
| 失語症タイプと言語治療 | 単著 | 平成30年9月 | 「Medical Rehabilitation」<br>第227号 | 吉村 貴子 | 22-26 |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>認知症の言語流暢性課題と視空間認知機能の特徴 | 共同 | 平成27年9月 | 第39回日本神経心理学会<br>学会（於北海道） | 吉村貴子、前島伸一郎、大沢愛子、苧阪満里子 | |
| （口頭発表）<br>認知症におけるエピソード記憶と意味記憶の関係 | 共同 | 平成27年12月 | 第39回<br>日本高次脳機能障害学会<br>（於東京） | 吉村 貴子，前島伸一郎，大沢愛子，尾崎文教，岩田まな | |
| （口頭発表）<br>認知症におけるワーキングメモリの特徴-数唱とリーディングスパンによる相違- | 共同 | 平成27年12月 | 第39回<br>日本ワーキングメモリ学会<br>（於京都） | 吉村貴子、苧阪満里子、前島伸一郎、大沢愛子、 | |
| （口頭発表）<br>高齢者における立方体描画の特徴 | 共同 | 平成28年11月 | 第40回<br>高次脳機能障害学会<br>（於長野） | 吉村貴子、大沢愛子、前島伸一郎、斉藤章江 | |
| （ポスター発表）<br>The perceptual and acoustic characteristics of Japanese elderly speech - the relationship between cognition and speech motor performance- | 共同 | 平成28年12月 | 172nd Meeting (The 5th Joint meeting) of the Acoustical Society of America and the Acoustical Society of Japan, (at Honolulu, USA) | Takako Yoshimura, Makoto Kariyasu, Akie Saito, Minoru Toyama, Mariko Osaka | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| （ポスター発表）<br>word production in discourse and cognitive functions in elderly −the implication for the demented population− | 共同 | 平成28年12月 | International Psychogeriatric Associasion − Asia Regeional Meeting 2016 Meeting (at Taipei, TAIWAN) | Takako Yoshimura, Manna Iwata, Akie Saito, Aiko Osawa, Shinichiro Maeshima | |
| （口頭発表）<br>高齢者の発話の正確性と認知容量との関係 −言い誤りと発話運動低下の分析− | 共同 | 平成29年2月 | 第28回東北神経心理懇話会（於宮城県　東北大学） | 吉村　貴子，苅安誠，外山稔，斉藤章江，苧阪満里子 | |
| （ポスター発表）<br>The relationship between cognitive functions and hearing tested by the whispered voice in elderl | 共同 | 平成29年4月 | 32nd International Conference of Alzheimer's Disease International (at Kyoto International Conference Centre) | Takako Yoshimura, Manna Iwata1, Aiko Osawa, Shinichiro Maeshima, Toshimasa Matsuhira | |
| （ポスター発表）<br>The relationship between lexical retrieval in discourse and cognitive functions in dementia −In comparison with the elderly population− | 共同 | 平成29年9月 | 7th International conference on Geriatrics and Gerontology & Palliative Nursing (at Holiday Inn Edinburgh, Scotland) | Takako Yoshimura,Manna Iwata,Akie Saito,Aiko Osawa,Ikue Ueda, Shinichiro Maeshima | |
| （ポスター発表）<br>Relationship between discourse ability and hearing in dementia (nominated for best poster award) | 共同 | 平成29年9月 | 5th Singapore Rehabilitation Conference (at Academia, SGH Campus, Singapore) | Takako Yoshimura,Manna Iwata,Akie Saito,Ikue Ueda, Aiko Osawa | |
| （proceeding）<br>The relationship between lexical retrieval in discourse and cognitive functions in dementia -in comparison with the elderly population | 共同 | 平成29年7月 | Journal of Palliative Care and Medicine, 7(5 Suppl), 64 | Takako Yoshimura, Akie Saito, Manna Iwata,, Aiko Osawa, Ikue Ueda, Shinichiro Maeshima. | |
| （講演）<br>第5回　京都府失語症者・家族交流会<br>「失語症の基礎とコミュニケーション手段について」 | 単独 | 平成30年11月 | 平成30年度　高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業<br>（於　京都平安ホテル） | 吉村　貴子 | |
| （セミナー）<br>情景知覚と高次の情報処理過程 | 単独 | 平成30年12月 | 第42回日本高次脳機能障害学会<br>（於　兵庫県　神戸国際会議場） | 吉村　貴子 | |
| （ポスター発表）<br>How would Cognitive Functions of dementia affect Well−being of their Family Caregiver? | 共同 | 平成31年3月 | 34th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity - SUCCESSABILITY （at Hawaii International Convention Center, Honolulu, HI) | Takako Yoshimura, Manna Iwata, Akie Saito, Ikue Ueda, Aiko Osawa | |
| （ポスター発表）<br>家族質問紙からみた認知症のコミュニケーションと認知機能障害との関係について | 共同 | 平成31年3月 | 第20回日本リハビリテーション連携学会（於　愛知県　藤田医科大学） | 吉村貴子，大沢愛子，齊藤章江，岩田まな，苧阪満里子 | |
| （研究助成）<br>高齢者の日常生活および社会復帰に及ぼす影響の総合的評価とその対応に関する研究 | 分担 | 平成26−27年 | 長寿医療研究開発費 | 代表者：大沢愛子 | |
| （講演）<br>言語聴覚療法とワーキングメモリ | 単独 | 平成27年5月 | 新潟県言語聴覚士会 専門講座<br>（於：新潟県） | | |
| （研究助成）<br>認知症高齢者の認知特性と周囲の状態に応じた拡大・代替コミュニケーション（AAC） | 共同 | 平成27−30年 | 文部科学省科学研究費 | 代表者：吉村　貴子 | |
| （研究助成）<br>健常高齢者の発話と認知容量の関係 | 共同 | 平成28−30年 | 京都学園大学　共同研究費 | 代表者：吉村　貴子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他(続き) | | | | | |
| (研究助成)<br>認知症患者に対する包括的リハビリテーションモデルの構築 | 分担 | 平成28-30年 | 長寿医療研究開発費 | 代表者:大沢愛子 | |
| (研究助成)<br>認知症の予防、早期発見、評価、リハビリテーションの各領域に関する臨床的介入と効果の検討 | 分担 | 平成30-令和2年 | 長寿医療研究開発費 | 代表者:大沢愛子 | |
| (研究助成)<br>認知症の人に対する生活機能及び活動維持・向上に資する効果的なリハビリテーションプログラムの策定に関する研究 | 分担 | 令和元年-2年 | 厚労省科学研究費 | 代表者:大沢愛子 | |
| (セミナー)<br>認知を診る | 単独 | 平成28年11月 | 京都学園大学<br>健康医療学部言語聴覚学科<br>スキルアップセミナー | | |
| (セミナー)<br>認知を診る＆変える | 単独 | 平成29年2月 | 京都学園大学<br>健康医療学部言語聴覚学科<br>スキルアップセミナー | | |
| (セミナー)<br>言語機能回復を図る実践的方法 | 単独 | 平成30年3月 | 京都学園大学<br>健康医療学部言語聴覚学科<br>スキルアップセミナー | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本神経心理学会 | 会員, 評議員,広報委員 |
| 日本心理学会 | 会員 |
| 和歌山言語聴覚士会 | 会員, 元学術局長 |
| 日本言語聴覚士協会 | 会員, 生涯学習部員, 教育部員, 平成29年度認定言語聴覚士講習会実行委員 |
| 日本LD学会 | 会員 |
| 日本音声言語医学会 | 会員, 評議員 |
| 日本コミュニケーション障害学会 | 会員 |
| 認知神経心理研究会 | 会員 |
| 国立長寿医療研究センター | 外来研究員 |
| 京都府失語症向け意思疎通支援者養成研修会 | 実行委員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| 認知症の認知機能障害の特徴, 認知症高齢者と周囲の介護者における有効なコミュニケーション方法, 認知症高齢者の家族指導 |
| 失語症における有効なコミュニケーション方法 |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 職名　副学長 | 氏名　久　育男 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）　無　） |
|---|---|---|

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 耳鼻咽喉科学:耳鼻咽喉科学の基礎と臨床を、資料を用いて講義した。 音声障害学:音声障害学の基礎と臨床を耳鼻咽喉科医としての立場を生かし、学生のレベルに合わせて作成した資料をもとに講義するとともに実習を行った。 | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| イラスト手術手技のコツ<br>耳鼻咽喉科・頭頸部外科　咽喉頭頸部編　改訂第2版<br>監修　久　育男他1名　（東京医学社） | 2017年11月 | |
| イラスト手術手技のコツ<br>耳鼻咽喉科・頭頸部外科　咽喉頭頸部編　改訂第2版<br>監修　久　育男他1名　（東京医学社） | 2017年4月 | |
| 耳鼻咽喉科・頭頚部外科研修ノート改訂第2版<br>編集　久　育男他5名　（診断と治療社） | 2016年12月 | |
| 耳鼻咽喉科診療　私のミニマム・エッセンシャル | 2011年4月25日 | 「Ⅴ. のど(嚥下障害・誤嚥)　Q62 嚥下障害はどう鑑別するか？および Q63 誤嚥の予防はどう指導するか？」 を担当 |
| ENT [耳鼻咽喉科] 臨床フロンティア　がんを見逃さない<br>－頭頸部癌診療の最前線 | 2013年1月25日 | 「第2章 頭頸部のさまざまな症状 －どのようなときに癌をうたがうべきか, どのように検査を進めるか. 咽喉頭症状」 を担当 |
| 今日の診療のために　ガイドライン外来診療2014 | 2014年4月1日 | 「Ⅲ.癌診療の現状. 喉頭癌」 を担当 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Part Ⅰ Receptors and nerve endings: 1 Sensory receptors and nerve endings | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Nishio T, Koike S, Okano H, Hisa Y. | pp.3-10 |
| Part Ⅰ Receptors and nerve endings: 2 Muscle spindles and intramuscular ganglia | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Koike S, Mukudai S, Hisa Y. | pp.11～20 |
| Part Ⅰ Receptors and nerve endings: 3 Motor nerve endings | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Hirota R, Koike S, Hisa Y. | pp.21～27 |
| Part Ⅰ Receptors and nerve endings: 4. Autonomic nervous system | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Bando H, Toyoda K-i, Hisa Y. | pp.29～44 |
| Part Ⅱ Anatomy of nerves: 5. Recurrent laryngeal nerve | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Uno T, Hisa Y. | pp.47～51 |
| Part Ⅱ Anatomy of nerves: 6. Superior cervical ganglion | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Uno T, Hisa Y. | pp.53～58 |
| Part Ⅱ Anatomy of nerves: 6. Superior cervical ganglion | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Uno T, Hisa Y. | pp.53～58 |
| Part Ⅲ Ganglion: 7. Intralaryngeal ganglion | 共著 | 2016年11月 | Springer<br>Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor.<br>Koike, S, Hisa Y. | pp.61～65 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書（続き） | | | | | |
| PartⅢGanglion: 8. Superior cervical ganglion | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Bando H, Fuse S, Saito A, Hisa Y. | pp.67～72 |
| PartⅢ Ganglion: 9. Nodose ganglion | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Hirota R, Okano H, Hisa Y | pp.73～82 |
| Part Ⅳ Projections to the brain stem: 10. Nucleus ambiguus | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Mukudai S, Sugiyama Y, Hisa Y. | pp.85～90 |
| Part Ⅳ Projections to the brain stem: 11. Nucleus tractus solitarius | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Mukudai S, Sugiyama Y, Hisa Y. | pp.91～95 |
| Part Ⅳ Projections to the brain stem: 12. Dorsal motor nucleus of the vagus | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Mukudai S, Sugiyama Y, Hisa Y. | pp.97～102 |
| Part Ⅳ Projections to the brain stem: 13. Central projections to the nucleus ambiguus | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Mukudai S, Sugiyama Y, Hisa Y. | pp.103～106 |
| Part Ⅴ Neurophysiological study of the brain stem: 14. Central pattern generators | 共著 | 2016年11月 | Springer Neuroanatomy and neurophysiology of the larynx | Hisa Y, editor. Sugiyama Y, Fuse S, Hisa Y. | pp.109～123 |
| 今日の診断指針　第7版・19　耳鼻咽喉科疾患. 声帯麻痺 | 共著 | 2015年3月 | 医学書院 今日の診断指針　第7版 | 金澤一郎、永井良三 総編 ・久　育男 他 852名 | 1716頁～1717頁 |
| 今日の診療のために　ガイドライン外来診療2014・Ⅲ.癌診療の現状. 喉頭癌 | 共著 | 2014年4月 | 日経メディカル開発 今日の診療のために ガイドライン外来診療2014 | 泉　孝英 編集主幹・ 久　育男 、他 93名 | 591頁～592頁 |
| 改訂第8版　内科学書　Vol.1　内科学総論・臨床症状　頭頸部・感覚器　嗄声 | 共著 | 2013年10月 | 中山書店 改訂第8版　内科学書　Vol.1 内科学総論　臨床症状 | 小川　聡 総編. 伴　信太郎, 山本和利 部門編・ 久　育男 他 129名 | 354頁 |
| 論文 | | | | | |
| Differential isoform expression of SERCA and myosin heavy chain in hypopharyngeal muscles. | 共著 | 2019年3月 | Acta Otorhinolaryngol Italia. | Ahmed ME, Bando H, Fuse S, Abdelfattah HM, Ahmed ME, Ahmed MA, Tsujikawa T, Hisa Y. | |
| Development of an Oropharyngeal Scope with an Integrated Tongue Depressor: NTOP2013 Study. | 共著 | 2018年12月 | Acta Med Okayama | Tsunoda K, Kobayashi R, Kada A, Saito AM, Misawa H, Horibe K, Goto F, Tsunoda A, Sasaki T, Takanosawa M, Nishino H, Kondoh K, Sugiyama Y, Hisa Y. | |
| An oral pharyngeal scope for objective oropharyngeal examination: a new device for oropharyngeal study. | 共著 | 2018年5月 | Acta Oto-Laryngologica 138(5) | Tsunoda K, Kobayashi R, Kada A, Saito AM, Goto F, Sugiyama Y, Hisa Y, Kondo K, Tsunoda A, Horibe K, Misawa H, Sasaki T, Minako T, Nishino H. | pp.487-491 |
| Hearing vulnerability after noise exposure in a mouse model of reactive oxygen species overproduction. | 共著 | 2018年4月20日 | Journal of Neurochemistry | Morioka S, Sakaguchi H, Yamaguchi T, Ninoyu Y, Mohri H, Nakamura T, Hisa Y,Ogita K, Saito N, Ueyama T. | doi: 10.1111/jnc.14451. [Epub ahead of print] |
| 魚骨異物の迷入により発見されたZenker憩室の1例(原著論文/症例報告) | 共著 | 2017年6月 | 日本気管食道科学会会報 (0029-0645)68巻3号 | 佐分利 純代(京都府立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室), 杉山 庸一郎, 板東 秀樹, 廣田 隆一, 久 育男, 平野 滋 | 240～244頁 |
| 当科におけるvideo head impulse testの検討(原著論文) | 共著 | 2017年5月 | 耳鼻咽喉科 ニューロサイエンス 31巻 | 瀧 正勝(京都府立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室), 長谷川 達央, 中村 高志, 坂口 博史, 平野 滋, 久 育男 | 16～18頁 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| Novel role of Rac-Mid1 signaling in medial cerebellar development. | 共著 | 2017年5月 | Development Vol.144 No.10 | Nakamura T, Ueyama T, Ninoyu Y, Sakaguchi H, Choijookhuu N, Hishikawa Y, Kiyonari H, Kohta M, Sakahara M, de Curtis I, Kohmura E, Hisa Y, Aiba A, Saito N. | pp.1863～1875 |
| A case of recurrent malignant triton tumor successfully treated with radiotherapy | 共著 | 2016年12月 | Auris Nasus Larynx. Vol.43 No.6 | Yasuda M, Muto Y, Kuremoto T, Murakami K, Onisihi T, Koida A, Inui T, Hisa Y. | pp.710～714 |
| 頭頸部放線菌症の2症例（原著論文/症例報告） | 共著 | 2016年6月 | 口腔・咽頭科 29巻2号 | 高橋 佳奈子(京都府立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室), 新井啓仁, 森　大地, 松井雅裕, 中野　宏, 久　育男 | 245頁～250頁 |
| 蝸牛におけるtricellulinの機能（解説） | 共著 | 2016年5月 | 耳鼻咽喉科 ニューロサイエンス30巻 | 坂口 博史(京都府立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室), 神谷　透, 宮下武憲, 稲本隆平, 徳増玲太郎, 森　望, 月田早智子, 久　育男 | 8頁～10頁 |
| Expression of sex steroid hormone receptors in vagal motor neurons innervating the trachea and esophagus in mouse. | 共著 | 2016年2月 | Acta Histochem Cytochem Vol.49　No.1 | Mukudai S, Ichi Matsuda K, Bando H, Takanami K, Nishio T, Sugiyama Y, Hisa Y, Kawata M. | pp.37～46 |
| 痙攣性発声障害に関する全国疫学調査 | 共著 | 2016年1月 | 音声言語医学 57巻1号 | 兵頭政光, 弘瀬かほり, 長尾明日香, 吉田真夏, 大森孝一, 城本　修, 西澤典子, 久　育男, 湯本英二 | 1頁～6頁 |
| Deletion of tricellulin causes progressive hearing loss associated with degeneration of cochlear hair cells. | 共著 | 2015年12月 | Sci Rep Vol.5 | Kamitani T, Sakaguchi H, Tamura A, Miyashita T, Yamazaki Y, Tokumasu R, Inamoto R, Matsubara A, Mori N, Hisa Y, Tsukita S. | p.18402 |
| Role of the retrotrapezoid nucleus/parafacial respiratory group in coughing and swallowing in guinea pigs | 共著 | 2015年9月 | J Neurophysiol Vol.114 No.3 | Sugiyama Y, Shiba K, Mukudai S, Umezaki T, Sakaguchi H, Hisa Y. | pp.1792～1805 |
| Role of the retrotrapezoid nucleus/parafacial respiratory group in coughing and swallowing in guinea pigs | 共著 | 2015年9月 | J Neurophysiol Vol.114 No.3 | Sugiyama Y, Shiba K, Mukudai S, Umezaki T, Sakaguchi H, Hisa Y. | pp.1792～1805 |
| 三次元実体モデルによる手術シミュレーションと術中ナビゲーションシステムの両方を使用した上顎再建の1例 | 共著 | 2015年9月 | 形成外科 第58巻 第9号 | 中村寛子, 沼尻敏明, 素輪善弘, 西野健一, 新井啓仁, 松井雅裕, 安田　誠, 久　育男 | 1049頁～1057頁 |
| 当科におけるセツキシマブ併用放射線療法 | 共著 | 2015年6月 | 口腔・咽頭科 第28巻 第2号 | 松井雅裕, 辻川敬裕, 新井啓仁, 中野　宏, 久　育男. | 149頁～153頁 |
| Cdc42による蝸牛有毛細胞不動毛の形態維持 | 共著 | 2015年6月 | 耳鼻咽喉科 ニューロサイエンス　29巻 | 中村高志, 坂口博史, 森岡繁文, 久　育男, 上山健彦, 齋藤尚亮 | 24頁～26頁 |
| Aberrant Myosin 1b Expression Promotes Cell Migration and Lymph Node Metastasis of HNSCC | 共著 | 2015年4月 | Mol Cancer Res Vol.13 No.4 | Ohmura G, Tsujikawa T, Yaguchi T, Kawamura N, Mikami S, Sugiyama J, Nakamura K, Kobayashi A, Iwata T, Nakano H, Shimada T, Hisa Y, Kawakami Y. | pp.721～731 |
| Differential responses to steroid hormones in fibroblasts from the vocal fold, trachea and esophagus | 共著 | 2015年3月 | Endocrinology Vol.156 No.3 | Mukudai S, Matsuda K, Nishio T, Sugiyama Y, Bando H, Hirota R, Sakaguchi H, Hisa Y, Kawata M. | pp.1000～1009 |
| 特集 よくわかる鼻副鼻腔手術. 手術に当たって　あると便利な器具 | 共著 | 2015年2月 | JOHNS 第31巻 第2号 | 安田　誠, 久　育男 | 161頁～163頁 |
| 上顎洞扁平上皮癌症例の検討 | 共著 | 2015年2月 | 頭頸部外科 第24巻 第3号 | 新井啓仁, 呉本年弘, 辻川敬裕, 武藤陽子, 安田　誠, 松井雅裕, 中野　宏, 久　育男 | 261頁～266頁 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| Ocular surface reconstruction with a tissue-engineered nasal mucosal epithelial cell sheet for the treatment of severe ocular surface diseases | 共著 | 2015年1月 | Stem Cells Transl Med Vol.4 No.1 | Kobayashi M, Nakamura T, Yasuda M, Hata Y, Okura S, Iwamoto M, Nagata M, Fullwood NJ, Koizumi N, Hisa Y, Kinoshita S. | pp.99～109 |
| 特集 総合診療医のための結核診療 Update「結核診療のピットフォール」喉頭・気管結核 | 単著 | 2014年12月 | JIM: Journal of Integrated Medicine Vol.24 No.12 | 久　育男 | 1116頁～1117頁 |
| 他部位頭頸部扁平上皮癌の治療後経過観察中に発症した鼻中隔癌の2例 | 共著 | 2014年12月 | 日鼻誌 第53巻 第4号 | 乾　隆昭, 安田　誠, 武藤陽子, 呉本年弘, 久　育男 | 528頁～534頁 |
| 頸長筋に達した上咽頭腔外異物の1症例 | 共著 | 2014年10号 | 耳喉頭頸 第86巻 第11号 | 布施慎也, 新井啓仁, 岡本康太郎, 辻川敬裕, 松井雅裕, 安田　誠, 豊田健一郎, 中野　宏, 久　育男 | 949頁～952頁 |
| スギ花粉症初期療法におけるモメタゾンフランカルボン酸エステルの有効性 | 共著 | 2014年9月 | 耳鼻咽喉科免疫アレルギー 第32巻 第3号 | 安田　誠, 呉本年弘, 武藤陽子, 浜　雄光, 櫻井弘徳, 福島一登, 浅野純志, 久 育男 | 203頁～210頁 |
| Japanese Board Certification System for head and neck surgeons | 共著 | 2014年8月 | Auris Nasus Larynx Vol.41 No.4 | Yoshimoto S, Nakashima T, Fujii T, Matsuura K, Otsuki N, Asakage T, Fujimoto Y, Hanai N, Homma A, Monden N, Okami K, Sugasawa M, Hasegawa Y,NibuK, Kamata SE, Kishimoto S, Kohno N, Fukuda S, Hisa Y. | pp.327～330 |
| Middle ear malformations in identical twins | 共著 | 2014年6月 | Auris Nasus Larynx 第41巻 第3号 | Kidowaki N, Kamitani T, Nakamura T, Taki M, Sakaguchi H, Suzuki T, Hisa Y. | pp.317～320 |
| Stage Ⅰ・Ⅱ舌扁平上皮癌症例の臨床的検討 －予防的頸部郭清術の適応を中心に－ | 共著 | 2014年6月 | 頭頸部外科 第24巻 第1号 | 中野　宏, 辻川敬裕, 新井啓仁, 島田剛敏, 久 育男 | 57頁～61頁 |
| Maintenance of stereocilia and apical junctional complexes by Cdc42 in cochlear hair cells | 共著 | 2014年5月 | J Cell Sci Vol.127(Pt 9) | Ueyama T, Sakaguchi H, Nakamura T, Goto A, Morioka S, Shimizu A, Nakao K, Hishikawa Y, Ninoyu Y, Kassai H, Suetsugu S, Koji T, Fritzsch B, Yonemura S, Hisa Y, Matsuda M, Aiba A, Saito N. | pp.2040～2052 |
| Periodic alternating nystagmus during caloric stimulation | 共著 | 2014年4月 | Auris Nasus Larynx Vol.41 No.2 | Taki M, Hasegawa T, Adachi N, Fujita T, Sakaguchi H, Hisa Y. | pp.211～214 |
| Midfacial degloving法を用いて切除した鼻腔化膿性肉芽腫例 | 共著 | 2014年4月 | 耳鼻臨床 第107巻 第4号 | 釆野舞侑, 安田 誠, 武藤 陽子, 楠本 真弓, 恋水 諄源, 西野 健一, 久 育男 | 309頁～316頁 |
| Activity of respiratory neurons in the rostral medulla during vocalization, swallowing, and coughing in guinea pigs | 共著 | 2014年3月 | Neurosci Res Vol.80 | Sugiyama Y, Shiba K, Mukudai S, Umezaki T, Hisa Y. | pp.17～31 |
| The mechanism underlying maintenance of the endocochlear potential by the K+ transport system in fibrocytes of the inner ear. | 共著 | 2013年9月 | J Physiol Vol.591 (Pt 18) | Adachi N, Yoshida T, Nin F, Ogata G, Yamaguchi S, Suzuki T, Komune S, Hisa Y, Hibino H, Kurachi Y. | pp.4459～4472 |
| 重症組織球性壊死性リンパ節炎の1例 | 共著 | 2013年8月 | 耳喉頭頸 第85巻 第9号 | 瀧　正勝, 二之湯　弦, 山道　怜, 中野　宏, 水谷浩美, 益田浩司, 古林　勉, 黒田純也, 久　育男 | 725頁～728頁 |
| 症例をどうみるか　降下性壊死性縦隔炎術後に発症した嚥下障害の1例 | 共著 | 2013年7月 | JOHNS 第29巻 第7号 | 鯉田篤英, 杉山庸一郎, 西尾健志, 板東秀樹, 廣田隆一, 中野　宏, 久　育男 | 1217頁～1220頁 |
| Autocrine and paracrine loops between cancer cells and macrophages promote lymph node metastasis via CCR4/CCL22 in head and neck squamous cell carcinoma | 共著 | 2013年6月 | Int J Cancer Vol.132 No.12 | Tsujikawa T, Yaguchi T, Ohmura G, Ohta S, Kobayashi A, Kawamura N, Fujita T, Nakano H, Shimada T, Takahashi T, Nakao R, Yanagisawa A, Hisa Y, Kawakami Y. | pp.2755～2766 |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 精神疾患を伴ったメニエール病に対する塩酸パロキセチンによる治療経験 | 共著 | 2013年6月 | Equilibrium Res 第72巻 第3号 | 瀧 正勝, 長谷川達央, 坂口博史, 山本 聡, 鈴木敏弘, 久 育男 | 171頁～175頁 |
| 下眼瞼向き眼振を認めたメニエール病の2例 | 共著 | 2013年6月 | Equilibrium Res 第72巻 第3号 | 瀧 正勝, 長谷川達央, 岡本志央, 中村高志, 足立直子, 藤田朋己, 坂口博史, 久 育男 | 176頁～181頁 |
| 特集 unified airway からみた鼻副鼻腔病変. 気道疾患に対する治療戦略. 抗IgE抗体療法 | 共著 | 2013年5月 | JOHNS 第29巻 第5号 | 安田 誠, 萠抜陽子, 久 育男 | 915頁～917頁 |
| NMII forms a contractile transcellular sarcomeric network to regulate apical cell junctions and tissue geometry | 共著 | 2013年4月 | Curr Biol Vol.23 No.8 | Ebrahim S, Fujita T, Millis BA, Kozin E, Ma X, Kawamoto S, Baird MA, Davidson M, Yonemura S, Hisa Y, Conti MA, Adelstein RS, Sakaguchi H, Kachar B. | pp.731～736 |
| 発生期蝸牛有毛細胞の形態変化とmyosin IIの関与 | 共著 | 2013年4月 | 耳鼻咽喉科ニューロサイエンス 第27巻 | 藤田朋己, 坂口博史, 米村重信, 久 育男 | 19頁～21頁 |
| その他 | | | | | |
| 教育講演 2 嚥下障害診療における耳鼻咽喉科医の役割―他職種の理解を求めて― | 単独 | 2013年3月2日 | 第36回日本嚥下医学会 京都 | 久 育男 | |
| 特別講演 音声障害の診断と治療 | 単独 | 2013年4月14日 | 第39回 日本耳鼻咽喉科学会 滋賀県地方部会 大津 | 久 育男 | |
| 企画・司会 パネルディスカッション 嚥下障害に対する耳鼻咽喉科医の役割 | 単独 | 2013年5月18日 | 第114回 日本耳鼻咽喉科学会 札幌 | 久 育男 | |
| Panel Discussion Differential diagnosis and treatment of noisy breathing | 単独 | 2013 Jun 1 | The 20th World Congress of the International Federation of Oto-Rhino- Laryngological Societies World Congress Seoul, Korea | Hisa Y. | |
| Symposium Movement and neurologic disorders of the larynx | Chair | 2013 Jun 2 | The 20th World Congress of the International Federation of Oto-Rhino-Laryngological Societies World Congress Seoul, Korea | Hisa Y. | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本耳鼻咽喉科学会 | 理事(2004年～2008年, 2010年～2016年), 理事長(2014年～2016年) |
| 日本気管食道科学会 | 理事(2000年～現在), 理事長(2010年～2014年) |
| 日本頭頸部外科学会 | 理事(2002年～2008年, 2011年～現在), 理事長(2005年～2008年) |
| 日本嚥下医学会 | 理事(2005年～現在), 理事長(2008年～2010年) |
| 日本口腔・咽頭科学会 | 理事(2006年～現在), 監事(2015年～現在) |
| 日本喉頭科学会 | 理事(2001年～2015年) |
| 耳鼻咽喉科コレギウム | アジアオセアニア代表理事(2013年～現在) |
| 東アジア音声外科会議 | 理事(2001年～現在) |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　大平　芳則 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 授業振り返りシートの利用 | 2015年4月～ | 毎回授業の終了後に、その日に学んだことと疑問等を書いてもらい、授業内容を確認するとともに、気軽に質問できる環境を用意している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| カードゲームを通して学ぶ専門用語～既報のカードゲームを改良して～ | 共 | 2018年12月 | 新潟リハビリテーション大学紀要　7(1) | 大平芳則、阿志賀大和 | 33-38 |
| 人工内耳装用成人の子音明瞭度と異聴傾向－語音聴取評価検査（CI2004）での知見－ | 共 | 2018年2月 | Audiology Japan　61(1) | 大平芳則、苅安誠、泉修司、窪田和、堀井新 | 65-72 |
| カードゲームで学ぶ専門用語 | 共 | 2017年12月 | 新潟リハビリテーション大学紀要　6(1) | 大平芳則、阿志賀大和 | 85-89 |
| 口蓋扁桃摘出後の嚥下痛によりQOL低下を来した症例 | 共 | 2017年12月 | 新潟リハビリテーション大学紀要　6(1) | 阿志賀大和、大平芳則 | 73-76 |
| 語彙力と学業成績との関連 | 共 | 2016年12月 | 新潟リハビリテーション大学紀要　5(1) | 大平芳則、阿志賀大和、粟生田博子、篠崎雅江、田中善信 | 21-26 |
| 国家試験成績と基礎学力、学業成績、学習成績との関連 | 共 | 2016年3月 | 明倫短期大学紀要18(1) | 阿志賀大和、大平芳則 | 1-6 |
| その他 | | | | | |
| （講演）<br>平成30年度　障がい者IT活用サポーター養成講座 | 共 | 2018年10月、11月 | 新潟県言語聴覚士会<br>新潟県作業療法士会 | 林豊彦、山口俊光、大平芳則、鍛冶山洋、渋谷亮仁 | |
| （講演）<br>臨床で活かせる聴覚障害の知識 | 単 | 2018年9月 | 新潟県言語聴覚士会 | | |
| （口頭発表）<br>新潟県言語聴覚士会活動報告－過去6回の県言語聴覚士会学術大会の分析－ | 共 | 2018年6月 | 第19回日本言語聴覚学会 | 阿志賀大和、佐藤卓也、本間桜、大平芳則、<br>井口光開、高橋圭三、佐藤厚 | |
| （口頭発表）<br>カードゲームを通して学ぶ専門用語 | 共 | 2018年6月 | 第19回日本言語聴覚学会 | 大平芳則、阿志賀大和 | |
| （口頭発表）<br>大学生のメンタルヘルスとGritとの関連について | 共 | 2017年11月 | 第6回日本ポジティブサイコロジー医学会学術集会 | 大矢薫、澁井実、大平芳則、北村拓也、長谷川千種、近貴司、大野達八、押木利英子 | |
| （口頭発表）<br>新潟県におけるIT活用サポーター養成講座の実施と今後の展望 | 共 | 2017年11月 | 第35回日本神経治療学会 | 渋谷亮仁、松本潔、鍛冶山洋、大平芳則、山口俊光、林豊彦、小池亮子 | |
| （口頭発表）<br>カードゲームで学ぶ専門用語 | 共 | 2017年6月 | 第18回日本言語聴覚学会 | 大平芳則、阿志賀大和 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本言語聴覚士協会 | 生涯学習部 |
| 新潟県言語聴覚士会 | 監事 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　楯谷　智子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| (前任地で)大学院博士課程学生の研究指導 | 2014年度～2018年度 | 大学院博士課程学生の研究計画立案・実験・データ解析・論文作成等の指導 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Cochlear development (Chapter 11). In Regenerative Medicine for the Inner Ear | | 2014 | Springer | Tateya T. (Ito J. Ed) | 101-113 |
| Vocal fold development (Chapter 11). In Regenerative Medicine in Otolaryngology | | 2015 | Springer | Tateya T, Tateya I. (Ito J. Ed) | 161-169 |
| 論文 | | | | | |
| Homeostasis of Hyaluronic Acid in Normal and Scarred Vocal Folds. | | 2015 Mar | J Voice. 29(2) | Tateya I, Tateya T, Watanuki M, Bless DM. | 133-139 |
| Histological effect of basic fibroblast growth factor on chronic vocal fold scarring in a rat model. | | 2016 Mar | Clin Exp Otorhinolaryngol 9(1) | Tateya I, Tateya T, Sohn JH, Bless DM. | 56-61 |
| In vivo overactivation of the Notch signaling pathway in the developing cochlear epithelium. | | 2015 Sep | Hear Res 327 | Tateya T, Sakamoto S, Imayoshi I, Kageyama R. | 209-217 |
| Characterization of Hair Cell-Like Cells Converted From Supporting Cells After Notch Inhibition in Cultures of the Organ of Corti From Neonatal Gerbils. | | 2018 Mar | Front Cell Neurosci. 20(12) | Li Y, Jia S, Liu H, Tateya T, Guo W, Yang S, Beisel KW, He DZZ. | Article 73 |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 国際学会発表(ポスター) | Susumu Sakamoto, Tomoko Tateya, Yukiko Harima, Juichi Ito, Ryoichiro Kageyama. Expression of Id Genes in Developing Cochlear Epithelium. The Association for Research in Otolaryngology 38rd MidWinter Meeting, Baltimore, Maryland, February 21-25, 2015. |
| 国際学会発表(ポスター) | Susumu Sakamoto, Tomoko Tateya, Koichi Omori, Ryoichiro Kageyama. Roles of inhibitor of differentiation and DNA-binding proteins in Developing Cochlear Epithelium. The Association for Research in Otolaryngology 39rd MidWinter Meeting, Baltimore, San Diego, February 23, 2016. |
| 国際学会発表(ポスター) | Tomoko Tateya, Susumu Sakamoto,Fumiyoshi Ishidate, Itaru Imayoshi, Ryoichiro Kageyama. Dynamic Atoh1 expression in prosensory domain visualized by 2-color fluorescence 3D real-time imaging. The Association for Research in Otolaryngology 40rd MidWinter Meeting, Baltimore, Maryland, February 11(11-15), 2017. |
| 国際学会発表(ポスター) | Tomoko Tateya, Susumu Sakamoto,Ichiro Tateya, Koichi Omori, Ryoichiro Kageyama. Lgr5positive cells in tracheal mucosa. 4th South Pacific ORL Forum, Honolulu, Hawaii, July 10, 2017 |
| 国際学会発表(口演) | Tomoko Tateya; Susumu Sakamoto; Fumiyoshi Ishidate; Itaru Imayoshi; Ryoichiro Kageyama. Three-dimensional real-time imaging reveals the dynamics of hair cell specification and organization in developing cochlea. The Association for Research in Otolaryngology 41rd MidWinter Meeting, Baltimore, San Diego, February 10, 2018. |
| 国際学会発表(口演) | Susumu Sakamoto; Tomoko Tateya; Koichi Omori; Ryoichiro Kageyama. The role of Id genes in mammalian developing cochlea. The Association for Research in Otolaryngology 41rd MidWinter Meeting, Baltimore, San Diego, February 10, 2018. |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

内耳有毛細胞の発生・再生研究につき知識・技術

喉頭の発生学・組織学につき研究経験あり

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　外山　稔 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「スタートアップゼミB」の工夫 | 2015年9月～現在 | スタートアップゼミAで学んだ「情報を集め記述する能力」を基礎として、論理的な議論を展開するための技術が身につくように取り組んだ。演習（プレゼンテーションや質疑応答、ディベートなど）を通した学びは、今後の専門科目を履修していくための基礎力・コミュニーション能力の習得に有効であった。 |
| 「失語・高次脳機能障害学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の工夫 | 2016年9月～現在 | 2講時連続講義（講義演習科目）の特性を活かし、講義で学んだ内容を次講時の演習で実践することによって、知識と技術を一体的に学べるように取り組んだ。各種高次脳機能検査の講義演習、健常高齢協力者による検査演習を通した学びは、検査概要の理解と整理、実施スキルの習得に有効であった。 |
| 「エイジングと運動」「慢性期療養支援演習」の工夫 | 2016年9月～現在 | 高齢者の視覚・聴覚・認知機能の加齢変化について、学生参加型学習に取り組んだ。聴覚の加齢変化に関する学びでは、学生の発話や流行歌の高周波数音域を除去し、それを聞かせることで老人性（加齢性）難聴を疑似体験した。高齢者の聞こえの問題やコミュニケーション方法の理解に有効であった。 |
| 「嚥下障害学」の工夫 | 2017年4月～現在 | 情報収集と行動観察、スクリーニング～精査（嚥下造影、嚥下内視鏡）結果の解釈、訓練プログラムの立案～演習など、実際の臨床の流れに沿って知識と技術が学べるように取り組んだ。健常者や嚥下困難者の評価結果を読み取り、問題点を抽出していく演習は、摂食機能療法の実施スキルの習得に有効であった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 大分県認知症予防プログラム（運動・レク編）運用手順 | 2015年1月 | 大分県下の全市町村の認知症地域体制強化事業（認知症予防教室）にて使用した。本運用手順は、県広報誌への掲載、市町村窓口への冊子体配布の他、大分県ホームページからもダウンロード可能である。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | （2015年以降） | | | |
| コミュニケーション障害の疫学：音声言語・聴覚障害の有病率と障害児者数の推定 | 共 | 2016年3月 | 京都学園大学健康医療学部研究会「京都学園大学健康医療学部紀要」第1巻 | 苅安誠、外山稔、松平登志正 | 1～12頁 |
| 運動障害性構音障害の舌の筋線維の計測に関する予備的研究 | 単 | 2017年2月 | 京都学園大学研究連携支援センター「京都学園大学総合研究所所報」第18号 | | 14～19頁 |
| コミュニケーション障害と推定障害者数 | 共 | 2017年2月 | 京都学園大学研究連携支援センター「京都学園大学総合研究所所報」第18号 | 苅安誠、松平登志正、外山稔 | 55～60頁 |
| 大学生におけるRey聴覚的言語学習検査の測定値と記憶方略 | 共 | 2017年3月 | 石川県作業療法学会「石川県作業療法学術雑誌」第25巻1号 | 板倉沙織、能登谷晶子、砂原伸行、筒井真愛、外山稔、井上克己 | 14～19頁 |
| A Comparison of Rey-Osterrieth Complex Figure Test Scores: With/Without Mouthpiece and with/without Noise | 共 | 2017年7月 | Scientific Research Publishing Inc.「World Journal of Neuroscience」第7巻3号 | Masako Notoya, Katsumi Inoue, Ai Hirabayashi, Kana Sakamoto, Chihiro Sasaguchi, Minoru Toyama | 282～292頁 |
| 高齢者の発話の正確性と認知容量との関係：ワーキングメモリ容量による検討 | 共 | 2017年12月 | 東北神経心理懇話会「臨床神経心理」第28巻 | 吉村貴子、斉藤章江、苅安誠、外山稔、苧阪満里子 | 25～30頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | （2015年以降） | | | |
| Auditory and speech-language data in a case of facioscapulohumeral muscular dystrophy in a Japanese child | 共 | 2018年1月 | Elsevier「International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology Extra」第19号 | Masako Notoya, Minoru Toyama, Kahoru Hashimoto, Hiromi Harada, Tomokazu Yoshizaki | 6～9頁 |
| 高齢者の認知容量が発話の正確性に与える影響 | 共 | 2018年2月 | 京都学園大学研究連携支援センター「京都学園大学総合研究所所報」第19号 | 吉村貴子、苅安誠、斉藤章江、外山稔 | 61～66頁 |
| Head position of patients with right hemisphere damage during a visual search task in a large field | 共 | 2018年5月 | Scientific Research Publishing Inc.「World Journal of Neuroscience」第8巻2号 | Ken Nakatani, Shusuke Takahashi, Daisuke Kimura, Masako Notoya, Nobuyuki Sunahara, Takashi Fujita, Toyama Minoru, Shinya Fukunaga, Naoe Mori, Kiyoe Sakai, Shinya Fuwa | 190～202頁 |
| Differences of Neglect in Peripersonal Space and Extrapersonal Space in a Patient with Unilateral Spatial Neglect | 共 | 2018年10月 | Scientific Research Publishing Inc.「Case Reports in Clinical Medicine」第7号 | Daisuke Kimura, Ken Nakatani, Masako Notoya, Aiko Imai, Hiroki Bizen, Minoru Toyama, Kazumasa Yamada | 513～525頁 |
| 認知症スクリーニングの為の動作記憶テスト試案の作成 | 共 | 2019年3月 | 京都学園大学研究連携支援センター「京都学園大学総合研究所所報」第20号 | 能登谷晶子、横川正美、外山稔 | 22～28頁 |
| 2～3歳代に人工内耳を装用した聴覚障害児の言語聴覚療法：金沢方式によるハビリテーションプログラム | 共 | 2019年4月 | 日本聴覚医学会「Audiology Japan」第62巻2号 | 能登谷晶子、原田浩美、外山稔、山崎憲子、木村聖子、諏訪美幸、金塚智恵子、石丸正、三輪高喜、吉崎智一 | 163～170頁 |
| An investigation into the syllable-extraction skills of children with hearing impairments by the Kanazawa Method “in press” | 共 | 2019年8月 | Wellness and Health Care Society「Journal of wellness and health care」第43巻1号 | Minoru Toyama, Masako Notoya, Hiromi Harada, Ken Nakatani, Hisashi Sugimoto, Tadashi Ishimaru, Tomokazu Yoshizaki | In press |
| その他（特集・依頼原稿・寄稿） | | （2015年以降） | | | |
| 大分県認知症予防プログラム（運動・レク編）運用手順 | 共 | 2015年1月 | 大分県福祉保健部高齢者福祉課 | 編者：大分県<br>著者：木村成志、藤野孝雄、柳井孝則、飯田育子、芳山小百合、岡藤和枝、篠原美穂、黒瀬一郎、外山稔、吉良志穂、他7名 | A4判　全36頁 |
| 高齢摂食嚥下障害患者診療におけるリスク・マネジメント | 共 | 2016年8月 | 全日本病院出版会「ENTONI」No.196 | 苅安誠、外山稔 | 103～112頁 |
| 原著者：Andre Simons, Shaheen Hamdy「脳刺激による嚥下障害のマネージメント」 | 単 | 2017年8月 | 日本摂食嚥下リハビリテーション学会「日本摂食嚥下リハビリテーション学会雑誌」第21巻2号 | | 112頁 |
| その他（学会発表） | | （2015年以降） | | | |
| 先行する母音を予期しての発語運動：レーザー光線での観察 | 共 | 2015年5月 | 第52回日本リハビリテーション医学会学術集会 | | |
| 高頻度の反復性経頭蓋磁気刺激時の機能的磁気共鳴画像の計測 | 単 | 2015年5月 | 第52回日本リハビリテーション医学会学術集会 | | |
| 会話ノートの使用による失語症者の表出内容の変化：「コミュニケーションの意図の種類」の分析 | 共 | 2015年6月 | 第16回日本言語聴覚学会 | | |
| 臨床教育と実習のあり方 | 共 | 2016年6月 | 第17回日本言語聴覚学会 | | |
| Lateral misarticulation observed with 4D-CT | 共 | 2016年8月 | 30th World Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics | | |
| Dysarthria患者の音声の音響分析：課題と分析のプロトコル | 共 | 2016年11月 | 第61回日本音声言語医学会総会・学術講演会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表 続き） | | （2015年以降） | | | |
| The perceptual and acoustic characteristics of Japanese elderly speech：the relationship between cognition and speech motor performance | 共 | 2016年11月 | 5th Joint Meeting Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan | | |
| 高齢者の発話の正確性と認知容量との関係：言い誤りと発話運動低下の分析 | 共 | 2017年2月 | 第28回東北神経心理懇話会 | | |
| A Comparison of Rey-Osterrieth Complex Figure Test Scores：With/Without Mouthpiece and With/Without Noise | 共 | 2017年9月 | 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing | | |
| Dysarthria患者の伝達能力：発話明瞭度や構音能力との関係 | 共 | 2017年10月 | 第62回日本音声言語医学会総会・学術講演会 | | |
| 0～1歳代から訓練を開始し、2～3歳代に人工内耳を装用した高度聴覚障害児8例の術後1年の文の発達 | 共 | 2017年10月 | 第62回日本聴覚医学会総会・学術講演会 | | |
| 右視床梗塞後に交叉性失語症状を呈した1例 | 共 | 2018年6月 | 第19回日本言語聴覚学会 | | |
| 認知機能スクリーニングにおける動作記憶テスト試案の作成 | 共 | 2018年9月 | 第8回日本認知症予防学会学術集会 | | |
| 聴覚障害幼児の言語指導法：行動発達に合わせたスモールステップ法 | 共 | 2018年10月 | 第63回日本音声言語医学会総会・学術講演会 | | |
| 2～3歳代に人工内耳を装用した聴覚障害児の言語聴覚療法：金沢方式によるハビリテーションプログラム | 共 | 2018年10月 | 第63回日本聴覚医学会総会・学術講演会 | | |
| Upper limb movement used for memory recall testing to screen for cognitive function: A feasibility study | 共 | 2019年5月 | World Confederation for Physical Therapy Congress 2019 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 公益社団法人 大分県言語聴覚士協会 | 理事（2011年～2015年）、監事（2015年～現在） |
| 一般社団法人 京都府言語聴覚士会 | 理事（2015年～2017年） |
| 第17回日本言語聴覚学会 | 準備・運営委員（2015年～2016年） |
| 平成28年度日本言語聴覚士協会全国研修会 | 実行委員（2015年～2016年） |
| 一般社団法人 日本言語聴覚士協会 | 生涯学習部員（2016年～現在） |
| 平成29年度認定言語聴覚士（摂食嚥下障害領域）講習会 | 実行委員（2016年～2017年） |
| 平成29年度日本言語聴覚士協会全国研修会 | 実行委員（2017年） |
| 第20回日本言語聴覚学会 | 相談役（2017年～現在） |
| 平成31年度日本言語聴覚士協会全国研修会 | 実行委員（2017年～現在） |
| 日本摂食嚥下リハビリテーション学会 | 評議員（2018年～現在） |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　橋本 かほる | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 言語発達学 | 平成28年4月～ | 子どもの定型的な言語発達について、普段の生活の中での子どもの行動観察記録や子どもを題材にしたアニメ映像から発話特徴を抽出することで教科書の記載項目の具体的な理解を図っている。授業の予習、復習は調べ学習ノートで用語の予習をさせ、授業当日はその解説、翌週に復習ドリルをして知識の定着化を図っている。また、フィールドワークで京都がくえん幼稚園に協力を得て園児の行動観察の実習を実施している。 |
| 言語発達障害学Ⅰ | 平成28年9月～ | 言語発達障害の原因について胎児期から発達期別にとらえ原因による障害像の違いを解説している。授業の予習、復習は調べ学習ノートで用語の予習をさせ、授業当日はその解説、翌週に復習ドリルをして知識の定着化を図っている。 |
| 言語発達障害学Ⅱ | 平成29年4月～ | 言語発達障害をもつ子どもの評価について、行動観察や保護者からの情報収集のポイント、さらに評価に用いる検査の習得を演習形式で進めている。定型発達児への評価実習も取り入れている。フィールドワークでは京都がくえん幼稚園の協力を得て幼児への検査演習を実施している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 福井市福祉保健部福井市保育カウンセラー事業 | 2010年4月～ | 保育カウンセラーとして福井市内の公私立保育園、幼稚園を巡回し、保育士、教諭の相談と療育指導を担当。 |
| 金沢大学医薬保健学域保健学系非常勤講師 | 2014年10月～<br>2018年3月 | 金沢大学医薬保健学域保健学系作業療法学科3年生の小児の発達の講義を担当している。発達検査や知能検査を用いたアセスメントについて、講義を担当している。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 新生児聴覚スクリーニング後の療育支援体制に対する一考察 | 共著 | 2015年5月 | 日本聴覚医学会誌「Audiology Japan」第58巻第2号 | 橋本かほる、能登谷晶子、原田浩美、伊藤真人、吉崎智一 | 143頁～150頁 |
| 多様で複雑な聴覚障害の問題を通して知識と社会を結び付けられる人材育成を目指して<br>―平成26年度金沢大学COC事業　地域志向教育研究費「推薦型」の報告― | 共著 | 2015年7月 | 金沢大学つるま保健学会誌第39巻第1号 | 能登谷晶子、原田浩美、橋本かほる、砂原伸行、横川正美 | 133頁～135頁 |
| 在籍保育園における親子療育教室の有用性―育児支援の視点から― | 共著 | 2016年3月 | 福井大学初等教育研究第1号 | 竹内惠子、森尾恵里、滝波洋子、長谷川清美、橋本かほる、津田明美 | 11頁～18頁 |
| 親子療育教室実施保育園としての園内研修―教員の共通理解と保育士の資質向上をめざして― | 共著 | 2017年3月 | 福井大学初等教育研究第2号 | 竹内惠子、武田眞由美、長谷川清美、森尾恵里、橋本かほる、津田明美 | 1頁～8頁 |
| （口頭発表） | | | | | |
| 聴覚障害児の読書力成績<br>―就学前後の比較― | 共同 | 2015年5月 | 第10回日本小児耳鼻咽喉科学会 | | |
| 幼児期に言語訓練が十分進まなかった人工内耳装用児への就学後の指導と支援体制について | 共同 | 2015年6月 | 第15回日本言語聴覚学会 | | |
| 軽度認知症のための簡便な神経心理学検査（玉井ら、2010）とHDS-RおよびFABとの関連 | 共同 | 2015年9月 | 第39回日本神経心理学会 | | |
| 聴覚障害児の読書力成績の経年変化<br>―下位項目の検討― | 共同 | 2015年10月 | 第59回日本音声言語医学会 | | |
| 聴覚障害と自閉スペクトラム症を重複した1例に対する人工内耳装用支援と聴性行動の経過について | 共同 | 2015年10月 | 第59回日本聴覚医学会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自己効力感からみた聴覚障害児を持つ親への支援プログラムの開発(乳幼児期) | 共同 | 2015年10月 | 第60回日本音声言語医学会 | | |
| 聴覚障害児の幼児期後期における言語指導の試み一創作課題の導入一 | 共同 | 2015年10月 | 第60回日本音声言語医学会 | | |
| 聴覚障害と自閉スペクトラム症を重複した1例に対する人工内耳装用支援と聴性行動の経過について | 共同 | 2015年11月 | 第60回日本聴覚医学会 | | |
| 保育園における親子の療育教室　第3報<br>ーOB会の発足と保護者支援ー | 共同 | 2016年2月 | 第56回福井県小児保健協会学術集会 | | |
| 幼児期に言語訓練が十分進まなかった人工内耳装用児への就学後の指導と支援体制について | 共同 | 2016年6月 | 第16回日本言語聴覚学会 | | |
| 在籍保育園における親子療育教室の実践－2 | 共同 | 2016年5月 | 第69回日本保育学会 | | |
| 在籍保育園における親子療育教室の実践－3 | 共同 | 2016年5月 | 第69回日本保育学会 | | |
| 聴覚障害児・者に対する構音指導の長期支援の必要性について | 共同 | 2016年6月 | 第17回日本言語聴覚学会 | | |
| 聴覚障害幼児の言語指導における両親指導の取り組みについて | 共同 | 2016年7月 | 第5回日本小児多職種研究会 | | |
| 在籍保育園における親子療育教室の実践－4 | 共同 | 2017年5月 | 第70回日本保育学会 | | |
| 保育園における親子療育教室第4報<br>ー養成コース研修の実施と課題ー | 共同 | 2019年2月 | 第62回福井県小児保健協会学術集会 | | |
| (ポスター発表) | | | | | |
| Development of programs to support the parents of children with hearing impairment | 共同 | 2016年8月 | International Association of Logopedics and Phoniatrics (Dubrin) | | |
| Promotion to the students regarding ″hearing Disorders″ | 共同 | 2016年8月 | International Association of Logopedics and Phoniatrics (Dubrin) | | |
| A survey of the development of syntactic comprehension in neurotypical infants-part2- | 共同 | 2016年8月 | International Association of Logopedics and Phoniatrics (Dubrin) | | |
| (シンポジウム) | | | | | |
| 医療モデルから生活モデルへ<br>在籍園で保育士が中心となって行う親子療育教室 | 共同 | 2015年7月 | 第50回日本発達障害学会<br>(東京学芸大学) | | |
| 子どもが在籍する保育園での親子療育教室の実践<br>ー公立保育園で行うことの意義と課題ー | 共同 | 2018年5月 | 第71回日本保育学会<br>(宮城女子短期大学) | 指定討論者 | |
| (講演) | | | | | |
| 幼児期のことばと家庭でのかかわりについて | | 2015年8月 | 福井市啓蒙保育園 | | |
| ことばの発達と支援 | | 2015年9月 | 福井県保育士会 | | |
| 幼児期のことばの発達について | | 2015年10月 | 京都がくえん幼稚園 | | |
| ことばの発達と個別支援計画 | | 2015年12月 | 福井県鯖江市保育士会 | | |
| ことばの発達とその支援を考える | | 2015年8月 | 福井県保育士会 | | |
| ことばの発達について | | 2016年8月 | 福井県高浜町保育士会 | | |
| 平成28年度　福井市保育研究発表会 | | 2017年1月 | 福井市福祉保健部子育て相談室 | | |
| 平成29年度　福井市保育研究発表会 | | 2018年3月 | 福井市福祉保健部子育て相談室 | | |
| 平成30年度　福井市専門研修会 | | 2018年5月，7月，11月，2019年2月 | 福井市福祉保健部子育て支援室 | | |
| 気がかりな子どもへの理解 | | 2018年8月<br>2019年2月 | 福井市文殊こども園 | | |
| ことばの発達と理解 | | 2018年12月 | 福井県鯖江市子育て支援課 | | |
| 平成30年度　福井市保育研究発表会 | | 2018年12月 | 福井市福祉保健部子育て相談室 | | |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | | | | | |
| | | | | | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　助教 | 氏名　弓削　明子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「言語発達障害学」 | 2016年9月～現在 | 発達・言語検査についてグループで演習を行い、検査実施の注意点など細かく指導するようにした。検査の目的や対象年齢が整理できる表を作り、それを課題として検査法の理解が進むように準備した。検査の実技試験、幼稚園での演習を行い、机上の学びだけではなく実践力がつくようにした。検査結果のまとめ、訓練の立案では症例を通して理解しやすいように段階的に解説をするように心がけた。検査法の演習では、ジグソー学習を取り入れ理解を深められるようにした。全体を通して、なぜ検査をするのか、まとめを導く根拠は何か、など論理的に考えられるように演習を展開している。 |
| 「構音障害学」 | 2016年10月～現在 | 誤り音の聴き取って記述するだけではなく、学生自身に音の出しわけを求めたり、他の様々な検査DVDを用い構音器官の動きがイメージできるように努めた。訓練の方法では、モデルを示したり、学生同士の演習の中で臨床的なスキルを具体的に示すようにした。症例を通して訓練の流れをイメージできるように、具体例を示すようにした。 |
| 「スタートアップゼミ」 | 2016年11月～現在 | 2018年度までの「スタートアップゼミB」では、病院見学のプレゼンテーション作成では、学生の発表したい内容を傾聴するとともに専門的な観点でまとめるよう助言を心掛けた。ディベートではテーマに沿って文献収集が出来るように文検索の方法を示したり、論点を整理できるように文献を示し説明した。<br>2019年度からの「スタートアップゼミ」では、グループワークが活発になるよう運営や助言を行ったり、学生が主体的に考え行動できるように、フィールドワークなどの調整を行っている。 |
| 「情報リテラシー」 | 2019年4月～現在 | Word、Excel、PowerPointのスキルを習得できるよう、テキストに沿った解説と演習を繰り返し行っている。また毎週、復習課題を設定しスキルの定着が図れるようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「言語聴覚士のための臨床実習テキスト（小児編）」の「機能性構音障害」について執筆 | 平成29年5月 | 臨床実習に出る学生を対象に作られた。実習で作成する症例報告書の作成について、評価や観察のポイント、報告書の書き方を見本症例を用いて解説した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 言語聴覚士のための臨床実習テキスト（小児編） | 共著 | 平成29年5月 | 建帛社 | 深浦順一、内山千鶴子編者<br>木場由紀子、齋藤吉人、田中裕美子、玉井ふみ、原由紀、春原則子、◎弓削明子ら | 169～174頁 |
| 別冊　日本臨牀<br>精神医学症候群（第2版）<br>ー発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害ー Ⅰ | 共著 | 平成29年3月 | 日本臨牀社 | 作田亮一、小沢浩、内山千鶴子、◎弓削明子、森浩一、小坂美鶴、広瀬宏之、古荘純一、石飛信、高田哲、宮島祐、石﨑朝世ら | 33～36頁 |
| 論文 | | | | | |
| 経口摂取が困難な一症例に対する摂食・言語指導の経過 | 共著 | 平成27年度 | 京都学園大学健康医療学部紀要第1巻 | ◎弓削明子、塚原三津子、中村惠子 | 65～71 |
| その他 | | | | | |
| 口頭発表 | | | | | |
| 乳幼児の刺激音数の聴覚的弁別（実験設定と初期データ） | 単独 | 平成29年11月 | 第118回日本小児精神神経学会 | ◎弓削明子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 講演・相談 | | | | | |
| 母親教室「発音っていつになったら<br>上手になるのかな。」 | | 平成29年12月 | 京都がくえん幼稚園 | 弓削明子 | |
| ことばの発達相談 | | 平成30年12月 | 京都がくえん幼稚園 | 弓削明子 | |
| 右京区保育士会　グループ研究会<br>「発音はいつになったらうまくなるのか」 | | 平成30年11月 | 右京区保育士会 | 弓削明子 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 京都府言語聴覚士会 | 理事(2017年4月～現在) |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

## 健康医療学部　健康スポーツ学科教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 青　木　　好　子 | 272 |
| | 池　川　　哲　史 | 281 |
| | 坂　﨑　　富　夫 | 283 |
| | 谷　口　　有　子 | 284 |
| | 新　里　　直　美 | 290 |
| | 平　川　　和　文 | 296 |
| | 三　宅　　基　子 | 299 |
| 准教授 | 井　口　　順　太 | 302 |
| | 石　井　　泰　光 | 306 |
| | 細　野　　裕　希 | 309 |
| | 満　　石　　寿 | 310 |
| 講師 | 足立　名津美 | 316 |
| | 瀧　本　　真　己 | 318 |
| 嘱託講師 | 眞里谷　隆司 | 321 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　青木　好子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 平安女学院大学における「スポーツA」<br>バスケットボール・バレーボール・バドミントン等 | 平成21年4月～<br>平成23年3月 | 平安女学院大学短期大学部保育科、准教授として担当した「スポーツA」（全学共通科目1年次配当、必修科目、半期、必修1単位）において、バスケットボールを中心として、自分の身体を意識できる授業つくりをした。バスケットボールの授業では、パスやドリブル、シュートなどの基礎的な機能の習得から、3対3や5対5の攻防の基本的フォーメーションを指導し、リーグ戦を展開させ、毎時間、既習事項とゲームに関する教材資料に記入することで、各自とチームとしての目標と反省を意識させて、バスケットボールの技能の向上とゲームとしての楽しさを実感させるなど、学生の評価は満足度が高い評価を得た。 |
| 平安女学院大学における「体育」<br>バスケットボール・マット運動・跳び箱・徒手の遊び等 | 平成21年4月～<br>平成23年3月 | 平安女学院大学短期大学部保育科、准教授として担当した「体育」（科目2年次配当、必修科目、半期、必修1単位）において、バスケットボールを指導し、全員が3点シュートが入るよう指導し、さらにより高いレベルでゲームを楽しめるよう、配付教材を活用して指導した。学生がそれまでできなかったバスケットボールの3点シュート、マット運動後転や跳び箱開脚跳び4段等では、実際に全員ができるよう、配付資料や教材を作成し、指導を工夫し、補助の仕方、できるようになるまでの指導方法を理解させるとともに、精神的なサポートについても理解させた。学生のアンケートでは満足度が高い評価を得た。 |
| 平安女学院大学における「保育内容研究（健康）」 | 平成21年4月～<br>平成23年3月 | 幼児期の健康について、園における学校保健の学校保健管理と保健指導にあてはまる内容について、丁寧に指導をした上で、意識した保育を実践できるよう配慮した。実際に3、4、5歳児の幼児の体力測定を実施し心身の発達の実態や課題を意識して、理論を学べるように演習を多く取り入れて授業を展開した。学生からは実践や演習によって内容の理解が進み、保育職を早くしてみたくなった等満足度は高かった。 |
| 平安女学院大学における「体育理論」 | 平成21年3月～<br>平成23年3月 | 体育理論について、理論と現状を具体的に学べるよう教材を作成し、DVDなどの視覚教材を多く用いて講義した。障害者スポーツについては、パラリンピック車いすバスケットの元監督をゲストティーチャーとして招いて、より詳しく、グローバルに、専門的に学生の学びを深めることができた。学生には、障害者スポーツのイメージが変わり考え直した等と満足度が高い評価を得た。 |
| 平安女学院高等学校における高大連携授業（発育発達と遊び、障害者スポーツ） | 平成22年4月～<br>平成23年3月 | 保育コース選択者の高校2年生を対象に発育発達と幼児体育について週2時間、実技をまじえながら、人の心身の発育発達についての授業をした。<br>保育コース選択者の高校3年生を対象に障害児保育に関して週2時間、車いす駅伝や車いすバスケット、パラリンピックのDVDや作成した教材を用いて、障害児や障害者、障害者スポーツについての授業をした。高校生には、事例やDVDなどで、イメージが変わり深く学習できたと評価を得た。 |
| 学生が理解しやすい授業環境つくり：学生が携帯電話を使用して、授業内での設問への回答や意見交換の実施<br>「発達段階と健康」 | 平成27年4月～ | 「発達段階と健康」において、115名の大教室の授業でパワーポイントを使用しているが、多人数でも積極的に授業に参加する姿勢を取らせることを目的に、スクリーンに示される設問に各自が携帯電話を使用して回答をすることができるシステムを使用している。質問はスクリーンに映され、他の学生も友達の回答を共有できたり、選択した選択肢の数がグラフ化され確認できたりする。また、パワーポイントでも、映像、動画を使って、できるだけ視覚教材を用いることで、学生に興味関心がもてるように工夫している。机間巡視を行い、学生の学びの進度や理解の程度を把握しながら授業を展開している。 |
| 学生が質問しやすい授業環境つくり<br>「スタートアップゼミA・B」 | 平成27年4月～ | 学生が疑問に思うことを質問しやすいように、質問の時間をとり、また個人的にも質問しやすいようにミニレポートで、理解できたことや分からないことを書けるように配慮している。 |

| | | |
|---|---|---|
| 教育内容・方法の工夫（続き） | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義用補助教材<br><br>「保育内容研究（健康）」<br>「障害児保育、障害児教育」<br>「体育理論」<br>「保育実習指導」<br>「体育」<br>「スポーツA」<br>「総合演習Ⅰ・Ⅱ」<br>「保育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」 | 平成21年4月～<br>平成23年3月 | 平安女学院大学短期大学部保育科、准教授として担当の「保育内容研究（健康）」（専門科目2年次配当、必修科目、半期、必修2単位）、「障害児保育、教育」（専門科目1年配当、必修科目、半期、必修1単位）、「体育理論」（専門科目1年配当、必修科目、半期、必修2単位）、「保育実習指導」（専門科目2年配当、必修科目、半期、保育士養成課程2単位）、「体育」（専門科目2年配当、必修科目、半期、必修1単位）「スポーツA」（全学共通科目1年配当、必修科目、半期、必修1単位）、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」（専門科目2年配当、必修科目、半期、必修1単位）、「保育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」（専門科目1年配当、必修科目、半期、必修1単位）において、教科書以外に必要な事項を板書だけでなく配付資料にまとめて毎時間配布し、視覚支援の必要な学生には、パワーポイントの提示だけでなく、そばに行って指導するなど、必要な配慮をして全員の学びをサポートした。 |
| 「発達段階と健康」 | 平成27年4月～ | 担当する科目について、教科書以外に必要な事項をパワーポイントや映像で示すとともに、授業内容に合わせた資料を作成し、毎時間配付している。イメージしにくいところは映像を用いて学生の理解を促している。また、授業中に何度か学生へクイズ形式で復習問題を出し、携帯電話を用いてその回答をや自分の考え、質問を投稿することで、お互いに交流できるようにしている。 |
| 「スタートアップゼミA」 | 平成27年4月～ | 毎回、理解をサポートするために教材や使用を作成しパワーポイントを受かって視覚的に理解を促し、個別にもサポートした。 |
| 「スタートアップゼミB」 | 平成27年9月～ | 毎回、理解をサポートするために資料を作成し、配付した。また質問をメールでも受け付け、授業以外の時間にもレポートや提出課題の添削や指導をメール上で行い、個別の指導にも時間を使って一人ひとりのニーズに応じるように工夫した。 |
| 「実践プロジェクトA」 | 平成28年4月～ | 教職を目指す学生に対して、自分の資質を向上させることを大きなねらいとして、小学校及び高等学校の現場の授業参観を計画、相手校と調整している。学生が、より学びを深めるために、グループディスカッションや、ブレインストーミング等の方法で、友達と意見交流をし、さらに自己認識を進めらるよう個々の課題と向き合うように工夫して授業を計画・展開した。<br>また、平成30年度からは、高倉小学校と連携して学生に体力向上のためのあそびを提案させ実際に指導を行わせるなど、実践を通した気づきと学びを深める授業づくりをしている。京都市教委体健室も関心を持ち、塩見指導主事を「はじめ見学にきている。 |
| 「運動発育発達論」 | 平成29年4月～ | 担当する科目について、教科書以外に必要な事項をパワーポイントや映像で示すとともに、授業内容に合わせた資料を作成し、毎時間配付している。イメージしにくいところは映像を用いて学生の理解を促している。また、授業中に何度か学生へクイズ形式で復習問題を出し、携帯電話を用いてその回答をや自分の考え、質問を投稿することで、お互いに交流できるようにしている。実際に学生の運動指導対象を映像で流し、この課題をもつこの地域の子どもたちへの運動指導を考えるというテーマを設定して、より具体的に考えさせるようにしている。実際に対象校の先生のコメントも紹介し、より主体的に責任をもって考えるように工夫している。 |
| 「障がい者スポーツ論」 | 平成28年9月～ | 担当する科目について、教科書以外に必要な事項をパワーポイントや映像で示すとともに、授業内容に合わせた資料を作成し、毎時間配付している。イメージしにくいところは映像を用いて学生の理解を促している。また、授業中に何度か学生へクイズ形式で復習問題を出し、携帯電話を用いてその回答をや自分の考え、質問を投稿することで、お互いに交流できるようにしている。実際に視覚障害、聴覚障害などの障がい者体験や実例を紹介して、障害者の感じ方や課題を実感させながら、学べるよう工夫している。 |
| 「障がい者スポーツレクリエーション実習」 | 平成28年4月～ | 視覚障害、聴覚障害などの模擬体験をさせながら、各種の障がい者スポーツを体験させている。楽しかっただけで終わらないよう、障害者スポーツの意義や理念についてレポートなどで理解度を確かめながら授業を進めている。また、丹波支援学校に行って、中学部や高等部の生徒とアダプテッドスポーツを行い、開発された先生の思いや課題を考察するなどさせている。肢体不自由では、車椅子バスケットの選手や監督をゲストティチャーとして招き、より高いレベルでの理解を促すようにしている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 「専門ゼミAB」 | 平成28年4月～ | 一人一人の進路も意識した指導を心がけている。授業のはじめに1分間スピーチを行うことで、学生の近況や将来展望を把握するとともに、学生が考えを短時間でまとめ、指定された時間いっぱいで話せるよう、練習をさせている。<br>単なる文献研究に留まらないよう、子どもや障がい者研究にふれさせるため、実際の教育現場や活動現場にいって指導を経験させるなど生きた学びをさせ、実情を認識させるとともに、自分の資質の向上、卒論にむけて積極的に考えることができるよう、工夫をかさねている。 |
| 「専門ゼミCD」 | 平成29年4月～ | 一人一人の進路も意識した指導を心がけている。<br>実際の教育現場や活動現場での経験をもとに、自分の問題意識に応じた研究を進めることができるよう、個別にサポートをしている。授業以外にも、メールでもやり取りを重ね、一人一人のレベルに応じた指導を行い、全員が卒業論文を書き上げ、発表できるように指導している。 |
| 「ゴール型球技（バスケットボール）」 | 平成29年4月～ | 経験が技術面の差に影響するため、経験のない学生に理解できるよう、スモールステップで指導している。毎回の授業の内容と重要なポイントやキーワード、ルール、練習方法がわかるよう、学習のまとめをテキストとして配信している。学習カードには毎回記入させ、フィードバックをしている。学習カードには、「ファインプレー賞」と「ナイススピリッツ賞」を記入させ、技術面だけでなく、準備片付けも含めた貢献度や態度、スポーツマンシップを認める授業指針を示し、すべての学生のモチベーションを高めるようにしている。後半には、学生に3人グループで、指導略案を作成させ添削したものをもとに、指導者として指導する場面を30分設定し、経験と気づきを深めるようにしている。1時間の後半には、その日の学習内容を活用することを目的に短時間でのゲームを行い、実戦で生かせる技術と指導法を身につけることができるようにしている。 |
| 「発達と加齢」 | 平成30年4月～ | 学生が発達についてそれぞれの年齢の実態や課題を、画像やデータ、映像を示すとともに、授業内容に合わせた資料を作成、毎時間配付している。イメージしにくいところは映像を用いて学生の理解を促している。また、授業中に何度か学生へクイズ形式で復習問題を出し、携帯電話を用いてその回答をや自分の考え、質問を投稿することで、お互いに交流できるようにしている。<br>健康課題について、より具体的に考えさせるように、自分で課題を発表させるなど、受け身ではなくより主体的に、また責任をもって考えるように工夫している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 第25回近畿地区私立幼稚園教員研修大阪大会　指導助言者「一人一人が育つ保育」 | 平成22年8月 | 対象：幼稚園教員約100名<br>主催：近畿地区私立幼稚園連盟<br>場所：大阪国際会議場<br>幼稚園教諭100名を対象に、指導助言者として、滋賀県清和幼稚園の肢体不自由児をとりまく保育、対象児への支援について、指導助言を行った。発表の前に、肢体不自由児の支援の方法への助言を行うとともに、発表をまとめるための助言を行った。発表当日は、清和幼稚園での取り組み内容について、まわりの子ども達との交流のなかで、まわりの子ども達ともお互いに理解をし合いながら、進められたことを示すなどして、指導助言を行った。 |
| 滋賀私幼加盟園2010年度第1回研修会　講師<br>講演「あれ？」から始める園内支援 | 平成23年1月 | 対象：幼稚園教員約80名<br>主催：滋賀私立幼稚園連盟<br>場所：愛光幼稚園<br>特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方について、具体的な支援例を教具とともに視覚的に説明し、ワークショップを含めた講義を行った。「あれ？」と思った時が支援の必要性の気づきの時であり、支援は担任任せではなく、園全体で支援を始める。園内の教職員の役割を明確にするとともに、医療・福祉など他の機関とも連携をして進めることが重要である。ワークショップでは4人組で、事例についての個別の保育・教育支援計画を具体的に考え合い発表しあった。講演後のアンケートでは指導計画の考え方の理解ができたと好評であった。 |
| めぐみ幼稚園研修会　講師<br>「特別支援の必要な子の支援記録について」 | 平成23年4月 | 対象：幼稚園教員約15名<br>主催：めぐみ幼稚園<br>場所：めぐみ幼稚園<br>めぐみ幼稚園に在籍する特別な支援を必要とする幼児の実態を、日々の取り組みを時系列で記録を取り、園内委員会で取り上げ対応を考える、つまり、園としての支援体制を明確にすることの必要性を講義した。主担任と副担任の連携はもちろん、担任間、また園全体として役割をもって、子どもや保護者に一貫した方針をもって対応すること、またまわりの子どもも成長させるという視点で、日々の保育を見直すことの大切さを解説した。後半は、グループワークでめぐみ幼稚園に在籍する子どもの支援について、それぞれ考えてもらい、特別支援コーディネーターの役割と園内委員会の重要性について理解を促した。 |

| 教育方法・教育実践に関する発表、講演等（続き） | | |
|---|---|---|
| 滋賀私幼加盟園2011年度夏期一日研修会　講師<br>講演「あれ？」から始める園内支援（2） | 平成23年8月 | 対象：幼稚園教員約100名<br>主催：滋賀私立幼稚園連盟<br>場所：草津市立町づくりセンター<br>特別な支援を必要とする幼児だけでなく、まわりの子どもの成長や保護者間の関係の構築も視野に入れた、園としての支援体制を構築することの大切さを講演した。その後、実際に5歳児ADHA傾向のある子どもの事例を挙げて、6～7人グループで、その支援方法について、具体的に考えて、模造紙にまとめ、良いと思うグループに付箋に理由を書いて張り付けて交流した。最後に、クラス全体を好循環にできるための教材や教具を実演して紹介し、その効果についてお話した。講演後のアンケートでは多くのことを学び、実践できる指導法を教えてもらえたと好評であった。 |
| 平安女学院大学附属幼稚園研修会　講師<br>「幼児の体力と活動量について」 | 平成24年3月 | 対象：幼稚園教員7名<br>主催：平安女学院大学附属幼稚園<br>場所：平安女学院大学附属幼稚園<br>幼児期の身体を動かす遊びの重要性についてお話するとともに、活動量と体力の調査結果から各学年の特徴を説明した。各学年の担任の先生方から、クラスの子どもの遊びや運動についての様子をお聞きし、それぞれの課題を明らかにできた。また幼児期運動指針が発表されたことから、指針の内容について説明し、平安女学院大学附属幼稚園として、より身体を動かす機会をどうすれば作っていけるかを考えた。まだ十分には活用できていない幼稚園の裏山を使った保育に関して意見交流し、来年度から裏山を整備することを確認した。 |
| 高槻市私立幼稚園協議会　研修会講師<br>講演：「豊かな活動で、子どもたちの今と未来を輝かせよう」 | 平成24年11月 | 対象：幼稚園教員約50名<br>主催：高槻市私立幼稚園連盟<br>場所：高槻市子ども未来部子育て総合支援センター<br>小中学生の体力の低下傾向や負傷発生率の現状を知っていただいた上で、子ども達の健康で豊かな将来のために何が必要かを講演した。子どもをとりまく環境について昔と今の違いをグループワークで考え、子どもたちの活動量不足の問題を導きだし、焦点を当てて、子ども達の活動量は幼稚園での遊びや活動での運動量が、そのまま反映することを解説した。合わせて幼児期運動指針の運動の意義などを用いて、子ども達が自ら動きたいと思える楽しい運動経験や環境が大切であることを講義した。 |
| 平安女学院大学短期大学部保育科2年の「教職実践演習」にて、講義<br>テーマ：講義：幼少連携、および小学校での受け入れ、発達障害の子どもへの支援の実情 | 平成24年12月 | 対象：平安女学院大学短期大学部保育科90名<br>主催：平安女学院大学短期大学部保育科<br>特別な支援を必要とする子どもの受け入れに関して、春季休業中に小学校がしている準備（クラス編成、教育環境整備、入学式での役割分担など）から具体的に説明するとともに、小学校での特別支援教育について講義した。ある児童を例にあげ、本人および母親、とりまく児童や保護者の成長の姿を話した。具体的には、入学式、3年生での運動会、6年生での学芸会、卒業式での子ども達の成長と保護者の変容のエピソードでDVD視聴を交えて示し、小学校における教育の考え方を話した。さらに中学校へと引き継ぎ、子どもの包括的な支援の中のスタート期を幼児期が担っていることを示し、教職に就くことの責任とやりがいについてお話した。 |
| 八葉会　2012年度研修会　講師<br>講演：「子どもたちが一生、元気いっぱい輝くために！」―心も身体も活動的に― | 平成25年3月 | 対象：幼稚園教員約60名<br>主催：八葉会<br>場所：平安女学院大学附属幼稚園<br>小中学生の体力の低下傾向や負傷発生率の現状を知っていただいた上で、子ども達の健康で豊かな将来のために何が必要かを講演した。子どもをとりまく環境について昔と今の違いをグループワークで考え、子どもたちの活動量不足の問題を導きだし、焦点を当てて、子ども達の活動量は幼稚園での遊びや活動での運動量が、そのまま反映することを解説した。合わせて幼児期運動指針の運動の意義などを用いて、子ども達が自ら動きたいと思える楽しい運動経験や環境が大切であることを講義した。 |
| 平成24年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「教職実践演習」にて講義 | 平成24年12月 | 平成24年度教職実践演習において、小学校教諭経験者としてのゲストスピーカーの立場で、保幼少連携、および小学校での受け入れ、発達障害の子どもへの支援の実情を、事例をあげDVDを用いて、具体的に講義した。<br>対象：平安女学院大学短期大学部保育科90名<br>特別な支援を必要とする子どもの受け入れに関して、春季休業中に小学校がしている準備（クラス編成、教育環境整備、入学式での役割分担など）から具体的に説明するとともに、小学校での特別支援教育について講義した。ある児童を例にあげ、本人および母親、とりまく児童や保護者の成長の姿を話した。具体的には、入学式、3年生での運動会、6年生での学芸会、卒業式での子ども達の成長と保護者の変容のエピソードでDVD視聴を交えて示し、小学校における教育の考え方を話した。さらに中学校へと引き継ぎ、子どもの包括的な支援の中のスタート期を幼児期が担っていることを示し、教職に就くことの責任とやりがいについて講義した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 平成25年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「教職実践演習」にて講義 | 平成25年12月 | 平成25年度教職実践演習において、小学校教諭経験者としてのゲストスピーカーの立場で、小学校における特別支援教育、保幼小連携、および小学校での受け入れの実情を、事例をあげDVDを用いて、具体的に講義した。<br>対象：平安女学院大学短期大学部保育科90名<br>特別な支援を必要とする子どもの受け入れに関して、春季休業中に小学校がしている準備（クラス編成、教育環境整備、入学式での役割分担など）から具体的に説明するとともに、小学校での特別支援教育について講義した。ある児童を例にあげ、本人および母親、とりまく児童や保護者の成長の姿を話した。具体的には、入学式、3年生での運動会、5年生での学芸会、卒業式での自閉症児の涙などのエピソードを通して、教職・保育職に就くことのすばらしさを講義した。 |
| 平成26年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「教職実践演習」にて講義 | 平成26年12月 | 平成26年度教職実践演習において、小学校教諭経験者としてのゲストスピーカーの立場で、小学校における特別支援教育、保幼小連携、および小学校での受け入れの実情を、事例をあげDVDを用いて、具体的に講義した。<br>対象：平安女学院大学短期大学部保育科90名<br>特別な支援を必要とする子どもの受け入れに関して、春季休業中に小学校がしている準備（クラス編成、教育環境整備、入学式での役割分担など）から具体的に説明するとともに、小学校での特別支援教育について講義した。ある児童を例にあげ、本人および母親、とりまく児童や保護者の成長の姿を話した。具体的には、入学式、3年生での運動会、5年生での学芸会、卒業式での自閉症児の涙などのエピソードを通して、教職・保育職に就くことのすばらしさを講義した。 |
| 平成27年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「保育内容総論」にて講義 | 平成27年12月 | 平成26年度教職実践演習において、小学校教諭経験者としてのゲストスピーカーの立場で、小学校における特別支援教育、保幼小連携、および小学校での受け入れの実情を、事例をあげDVDを用いて、具体的に講義した。<br>対象：平安女学院大学短期大学部保育科90名<br>特別な支援を必要とする子どもの受け入れに関して、春季休業中に小学校がしている準備（クラス編成、教育環境整備、入学式での役割分担など）から具体的に説明するとともに、小学校での特別支援教育について講義した。ある児童を例にあげ、本人および母親、とりまく児童や保護者の成長の姿を話した。具体的には、入学式、3年生での運動会、5年生での学芸会、卒業式での自閉症児の涙などのエピソードを通して、教職・保育職に就くことのすばらしさを講義した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達障害心理学研究室主催の「キミヤーズ塾」における教育実績 | 平成21年8月～現在に至る | 特別支援教育の現場の先生方と知的好奇心を引き出す授業づくりについて研究し、「キミヤーズの教材教具」を出版。また平成21年から年2回のキミヤーズ塾を開催、保護者から保育園、幼稚園、児童養護施設、小・中・高等学校、特別支援学校教諭、大学教員などの参加者を対象に研修会を開催している。共催：京都市発育発達研究会、後援：京都市教育委員会 |
| ①夏のキミヤーズ塾 | 平成23年8月 | テーマは「知的好奇心を引き出す授業づくり」として、特別支援学級や特別支援学校、普通学級においても生かせる指導観を解説。すべての子どもの知的好奇心を引き出す具体的な教材教具とその教育的な意味を実際の授業ビデオや実演を交えて講義。講義をうけて、教具のひとつである「ローテーションカード」の作成と使い方を実習を通して学ぶようにした。（於大谷大学）参加者80名 |
| ②冬のキミヤーズ塾 | 平成24年1月 | テーマは「子どもの『考える』を拾い上げる」「ことばと文字」として、よくある「なぞり書き指導」以外にどのように文字を教えるのか、こどばと文字の指導を土台に、子どもの想像力をいかに豊かにしていくのか、について講義と具体的な教材とその教育的な意味を実際の授業ビデオや実演を交えて講義。その後、「創作熟語」を参加者に作成してもらうとともに、子どもの想像力の引き出し方について、学べるようにした。（於京都教育大学）参加者95名 |
| ③夏の終わりののキミヤーズ塾 | 平成24年9月 | テーマは「教材妄想とアイデア教具」「支援しないという支援でつながる授業づくり」とした。どのような支援が必要かよりも、子どもの意思が動き出す仕掛けを作り、子ども同士がつながり合い学び合うような、授業について、実際の教具を用いて講義、解説。つながる授業づくりを実習で学べるようにした。（於京都教育大学）参加者93名 |
| ④早春のキミヤーズ塾 | 平成25年3月 | テーマを、「劇的！！授業大改造」として、個別の対応や個々の教具を考えることも大事ではあるが、集団としての子ども達同士のつながりを生み、子どもが生き生きと学ぶための「良い授業」をすることが、教師としての願いである。そのため教師の授業への関わり方によって、子どもが変わり、生き生きとしお互いを思いやれる学級経営ができる。教師として陥りがちな失敗例をDVDで視聴し、それを元にグループワークによって、授業を改善する方法を考え、発表するようにした。（於京都府立医科大学）参加者89名 |

| | | |
|---|---|---|
| ⑤寝覚月のキミヤーズ塾 | 平成25年9月 | テーマを、「遊び心で教材深化」として、教材を、子どものモティベーションを高めるためのものから、学びそのものへのおもしろさに迫る教材を考えるように深化させるようにした。教師として陥りがちな失敗例をDVDで視聴し、それを元にグループワークによって、授業を改善する方法を考え、発表するようにした。遊び心を大事にしながら、教材を深めていくその醍醐味とプロセスを、講義と実習を通して学べるようにした。（於京都府立医科大学）参加者184名、2日開催。 |
| ⑥夢見月のキミヤーズ塾 | 平成26年3月 | テーマを、「数概念形成」とした。よくやる数唱や単なる数値の組み合わせに終始するのではなく、本当に子どもが数概念を身に付けるためにはどのような指導が考えられるのか。特別支援教育でよくありがちな指導のDVD視聴の後、グループワークで改善すべき点を挙げ、さらに、教材と指導の仕方を考え発表する形をとった。数概念そのものに迫る教材づくりと授業づくりを、講義と実習で学べるようにした。（於京都府立医科大学）参加者156名、2日開催。 |
| ⑦竹酔月のキミヤーズ | 平成26年9月 | テーマは，原点回帰の「授業読み取り術」として、えがお・かんがえる・つながる授業の真髄を丁寧に読み解く。「覚えるより考える，教え込むより引き出す」そんな実践をするために「えがお・かんがえる・つながる」を中心として，授業読み取りのポイントを考えあう機会をもてた。（花園大学90名） |
| ⑧雪消月のキミヤーズ | 平成27年3月 | テーマは，「表現の創発」の巻です。真面目で熱心な先生ほど「正しさ」という呪縛に捕らわれやすい。正しい規則、正しい教材、正しい計画に追いまくられる。だから、ついつい「正しい」答えに導こうとする。そして、正しい答えが出たら、それで安心する。そんなものは本物のエビデンスではない。コミュニケーションの本質と表現創発という視点から、えがお・かんがえる・つながる授業を再構成する機会を現場の先生方と考える機会をもてた。（花園大学90名） |
| ⑨色どり月のキミヤーズ | 平成27年9月 | 丁寧な個別指導がきめ細やかな教育に偏らない授業展開について考える。個別課題と一斉指導を融合してこそ、はじめて子どもたちのニーズに合った授業をつくることができる。数概念の形成から、その次の段階について、えがお・かんがえる・つながる授業づくりのノウハウをわかりやすくひも解き、その極意を伝授します。（花園大学90名） |
| ⑩染色月のキミヤーズ | 平成28年3月 | テーマは，即，授業に使える，年間通じて同じスタイルの授業を続ける，理解を促す仕掛けについて、講義するとともに、実際の学校現場で使用している教材教具を特別支援学級教員が紹介する。（花園大学90名） |
| 児童ディケアサービスきらら職員研修会講師 | 平成28年6月 | テーマは，「障がいのある子と運動を楽しむための環境つくり」である。発達の視点や感覚統合の視点、また当事者の感じ方という視点から、不器用な子どもが何に困っているのか、どう環境を創ればよいのかについて講演をした。その後、発達をおさえて運動を楽しむ例として、縄跳びやボール投げを取り上げて実技とともに講義した。最後に、体幹を鍛える運動について参加者の皆さんにも動いていただいて、実際の進め方や楽しみ方を実感してもらいながら、障がいをした。（児童ディケアサービスピノッキオ20名） |
| スポーツ推進委員府研究大会講師 | 平成28年6月 | テーマは，「障がい児者と運動を楽しむための環境づくり」である。「障害者差別解消法」により、一人ひとりの困りごとに合わせた「合理的配慮」が大切になってくること、またその際に、スポーツ関係の範囲にも適応されるため、施設の利用やプログラム作りにおいて大切なことをはじめとして、障がい者がスポーツに触れるきっかけ、またそれを継続するために必要な支援について説明した。（京都府スポーツ推進委員約300名） |
| 京都府主催初級障がい者スポーツ指導員養成講座講師 | 平成29年2月 | 「障がい者スポーツの意義と理念」について、府からの要請を受けて講義を行った。障がい者スポーツの歴史や、障がい者差別解消法、パラリンピックや、生涯の健康問題など、様々な角度から障がい者スポーツの意義と理念について説明した。（受講生約20名） |
| 京都府主催中級障がい者初級スポーツ指導員養成講座講師 | 平成29年12月 | 「知的障害」について、府からの要請を受けて講義を行った。知的障害のある人の感じ方、不器用な動きの原因、障がい者スポーツ指導員の役割などについて、実例を用い、二人組で支援方法を考える時間を設けるなどして、知的障害者にとってのスポーツについて講義した。（受講生約20名） |
| 京都府主催初級障がい者初級スポーツ指導員養成講座講師 | 平成30年2月 | 「障がい者スポーツの意義と理念」について、府からの要請を受けて講義を行っている。障がい者スポーツの歴史や、障がい者差別解消法、パラリンピックや、生涯の健康問題など、様々な角度から障がい者スポーツの意義と理念について説明した。（受講生約20名） |

| | | |
|---|---|---|
| 京都府主催初級障がい者初級スポーツ指導員養成講座講師 | 平成31年2月 | 「障がい者スポーツの意義と理念」「各種障害：知的障害の理解」について、府からの要請を受けて講義を行っている。障がい者スポーツの歴史や、障がい者差別解消法、パラリンピックや、生涯の健康問題など、様々な角度から障がい者スポーツの意義と理念について説明した。また、知的障害については、当事者の感じ方をイラストとエピソード、実体験を交えて理論的な説明をして、参加者により身近に感じられるよう工夫して講演を行なった（受講生約20名）。 |
| 佛教大学　通信教育スクーリング「教育学講読」における指導要領の変遷と現場での教育実践　講師 | 令和元年6月 | 指導要領改訂の歴史とそれぞれの特徴について、現場でどのような教育実践を行なってきたか、実際の小学校現場での授業やその内容、子どもへの支援方法について講義をした（受講生約60名）。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦で | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 体育あそびアラカルト | 共著 | 平成30年3月 | 昭和堂 | 西村誠、山口孝治、桝岡義明 | p.100～p.115を担当 |
| 絆づくりの遊びの百科 | 共著 | 平成24年4月 | 昭和堂 | 西村誠、山口孝治、桝岡義明 | 第2部「遊びの実際」（p.23～p.232）を共著 |
| キミヤーズの教材・教具　知的好奇心を引き出す | 共著 | 平成23年1月 | クリエイツかもがわ | 赤木和重・村上公也 | p.118～p.119、p.172～p.173 |
| 伝承遊びアラカルト―幼児教育・地域活動・福祉に活かす | 共著 | 平成21年4月 | 昭和堂 | 西村誠、山口孝治、桝岡義明 | 第2章「実践例集」（p.22～p.130）を共著 |
| 論文 | | | | | |
| 幼児期における身体活動の意義と推奨値に関する研究 －体力および生活習慣との検討 － | 単著 | 平成31年3月 | 佛教大学大学院教育学研究科　生涯教育専攻博士学位請求論文 | 青木好子 | p.1～p.18 |
| 幼児における身体活動量と体力の関係（一日に必要な歩数、身体活動指数、運動強度別時間の検討） | 共著 | 平成29年3月 | ウォーキング研究，20 | 青木好子、金子眞理、磯野眞紀子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | p.79～p.87 |
| 幼児教育における身体活動の意義と課題 | 単著 | 平成28年3月 | 「佛教大学大学院紀要」教育学研究科篇第44号 | 青木好子 | p.1～p.18 |
| 「幼児における身体活動量の季節変動（夏期と冬期の比較）」 | 共著 | 平成26年3月 | 「佛教大学教育学部学会紀要」13号 | 青木好子、山口孝治 | p.79～p.87 |
| 「幼稚園児における身体活動量及び体格・体力（2012年度調査）」 | 共著 | 平成26年3月 | 「平安女学院大学保育研究」第42号 | 青木好子、弘中陽子、磯野眞紀子、木村みさか | p.1～p.12 |
| 都市部幼児園児の身体活動量 および体格・体力 （その実態、身体活動量の季節差および保育園児との比較）（修士論文） | 単著 | 平成26年3月 | 京都府立医科大学 | 青木好子 | p.1～p.24 |
| 知的障害児者における身体活動量、食生活及び骨格筋量の調査 | 共著 | 平成25年4月 | 「平安女学院大学保育研究」第41号 | 青木好子、徳弘優花、山田陽介、金子眞理、木村みさか | p.1～p.9 |
| 幼児における身体活動量と体格・体力（2011年度調査結果）（査読付） | 共著 | 平成24年12月 | 「ウォーキング研究」 | 青木好子、木村みさか | p.119～p.126 |
| 小中学生における3軸加速度計内蔵活動量計の妥当性の検討ならびに身体活動量が自律神経機能に与える効果 | 共著 | 平成24年1月 | 「京都体育学研究」28 | 山田陽介、藤林真美、中江悟司、海老根直之、青木好子、伊藤陽一、諏佐準一、池田利勝、田中宏暁、小田伸午、森谷敏夫、木村みさか | p.1～p.9 |
| 聴覚障害児の幼稚園における園内支援のあり方に関する実践研究 | 共著 | 平成23年3月 | 「平安女学院大学保育研究」第39号 | 二宮明日香、青木好子 | p.10～p.17 |
| その他 | | | | | |
| （ポスター発表）幼児の体力向上と身体活動量・生活習慣との関係の検討□ | 共著 | 平成31年3月 | 第16回日本発育発達学会（於：大妻女子大学） | 青木好子、渡邊裕也、糸井亜弥、山田陽介、木村みさか | |
| （ポスター発表）都市部幼稚園5歳児における認知機能と体力との関係2□ | 共著 | 平成31年3月 | 第16回日本発育発達学会（於：大妻女子大学） | 満石寿、青木好子 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ポスター発表)<br>都市部小学校3年生における活動量および体力と生活活動時間の関連□ | 共著 | 平成31年3月 | 第16回日本発育発達学会<br>(於:大妻女子大学) | 糸井 亜弥、青木 好子、山田 陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>郊外の認定こども園5歳児における体力・身体活動量および生活習慣の関係 | 共著 | 平成30年3月 | 第16回日本発育発達学会<br>(於:明治大学) | 青木好子、勝山翔太、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>都市部幼稚園5歳児における認知機能と体力との関係 | 共著 | 平成30年3月 | 第16回日本発育発達学会<br>(於:明治大学) | 満石寿、青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>都市部小学校3年生の活動量と体力との関係 | 共著 | 平成30年3月 | 第16回日本発育発達学会<br>(於:明治大学) | 糸井亜弥、青木好子、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>幼児の運動強度別活動時間と生活習慣との関係 | 共著 | 平成29年9月 | 第72回体力医学会<br>(於:松山大学) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>幼児に必要な身体活動量(保育園児における平均的体力との関連から) | 共著 | 平成28年9月 | 第71回体力医学会<br>(於:いわて県民情報交流センター「アイーナ」) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (口頭発表)<br>亀岡市太田保育園児における幼児の体力と身体活動量 | 共著 | 平成27年9月 | 第15回日本体操学会<br>(於:京都学園大学) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>保育園児の身体活動量および体力(幼稚園児との比較) | 共著 | 平成27年9月 | 第70回体力医学会<br>(於:和歌山アバローム紀の国) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>保育園児における身体活動量(強度別活動時間)と体力との関連 | 共著 | 平成27年8月 | 第66回日本体育学会<br>(於:国士館大学) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか□ | |
| (ポスター発表)<br>都市部幼稚園児における身体活動量(強度別活動時間)と体力との関連 | 共著 | 平成27年3月 | 第13回発育発達学会<br>(於:日本大学) | 青木好子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか□ | 第69回体力医学会<br>(於:大阪成蹊大学) |
| (ポスター発表)<br>幼稚園に通う5歳児の体力・身体活動量(3歳時点測定値との比較) | 共著 | 平成26年9月 | 第69回体力医学会<br>(於:長崎大学)長崎大学) | 青木好子、弘中陽子、渡邊裕也、木村みさか | 2014 |
| (ポスター発表)<br>高校1年生女子100m走タイムの授業時期における変化とその要因<br>高校1年生女子100mは春と秋とどちらが速いか？ | 共著 | 平成26年8月 | 第65回体育学会<br>(於:岩手大学) | 青木好子、伊藤博子、木村みさか | |
| (ポスター発表)<br>都市部幼稚園児の身体活動量および体格・体力(保育園児との比較) | 共著 | 平成26年3月 | 第12回発育発達学会<br>(於:大阪成蹊大学) | 青木好子、弘中陽子、木村みさか | 2014 |
| (口頭発表)<br>幼児における身体活動量季節変動(夏期と冬期の比較) | 共著 | 平成25年9月 | 第68回日本体力医学会<br>(於:日本教育会館) | 青木好子、弘中陽子、木村みさか | 2013 |
| (ポスター発表)<br>幼児の歩数と体格・体力(2012年度調査結果) | 共著 | 平成25年3月 | 第11回発育発達学会<br>(於:静岡産業大学) | 青木好子、弘中陽子、木村みさか | 2013 |
| (講演)<br>子どもと運動を 楽しむための環境づくり | | 平成28年6月 | 児童ディケアサービスきらら<br>職員研修会講師 | | |
| (講演)<br>障がい児者と運動を楽しむための環境づくり | | 平成28年6月 | 第49回京都府スポーツ推進委員研究大会講演講師 | | |
| (研修会講師)<br>障がい者スポーツの意義と歴史 | | 平成28年6月 | 初級障がい者スポーツ指導員<br>研修会講師 | | |
| (講演)<br>身体を動かして、子どもも親も健康アップ | | 平成27年6月 | 平安女学院大学附属幼稚園<br>土曜参観講演会講師 | | |
| (講演)<br>特別支援教育の幼小連携 | | 平成26年12月 | 平成25年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「教職実践演習」にて講義 | | |
| (新聞記事)<br>幼児期に体動かす習慣を | | 平成26年4月7日 | 京都新聞　記事 | | |
| (講演)<br>特別支援教育の幼小連携 | | 平成25年12月 | 平成25年度平安女学院大学短期大学部保育科2年対象に、「教職実践演習」にて講義 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (講演)<br>「子どもたちが一生、元気いっぱい輝くために！」―心も身体も活動的に― | | 平成25年3月 | 八葉会　2012年度研修会講師 | | |
| (講演)<br>「豊かな活動で、子どもたちの今と未来を輝かせよう」 | | 平成24年11月 | 高槻市私立幼稚園協議会<br>研修会講師 | | |
| (講演)<br>「幼児の体力と活動量について」 | | 平成24年3月 | 平安女学院大学附属幼稚園<br>研修会　講師 | | |
| (講演)<br>「特別支援の必要な子の支援記録について」 | | 平成23年4月 | めぐみ幼稚園 | | |
| (講演)<br>「あれ？」から始める園内支援 | | 平成23年1月 | 滋賀私幼加盟園<br>2010年度第1回研修会　講師 | | |
| (講演)<br>「一人一人が育つ保育」 | | 平成22年8月 | 第25回近畿地区私立幼稚園<br>教員研修大阪大会　助言者 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 一般社団法人臨床発達心理士会運営機構日本臨床発達心理士会　京都滋賀奈良支部事務局 | 平成24年4月から27年3月まで |
| 一般社団法人臨床発達心理士会運営機構日本臨床発達心理士会　全国研修委員会委員 | 平成26年から現在 |
| 臨床発達心理士会京都滋賀奈良支部<br>特別支援教育部門研修委員 | 平成27年、平成28年度 |
| 亀岡市地域福祉計画策定委員会委員 | 平成27年度 |
| 亀岡市社会福祉協議会福祉計画策定委員会委員 | 平成28年度 |
| 京都府スポーツ推進審議会委員 | 平成29年4月から　平成31年3月まで |
| 亀岡市地域福祉活動計画策定委員（中間見直し） | 平成30年度 |
| 京都市立高倉小学校学校運営協議会コミュニティスクールスマイル21体力向上部会専門委員 | 平成29年度、平成30年度 |
| 京都府立丹波支援学校学校評議委員 | 平成29年度、平成30年度、令和元年度 |
| 京都府立丹波支援学校学校関係者評価委員 | 平成29年度、平成30年度、令和元年度 |
| 日本トレーニング科学会監事 | 令和元年度 |
| ワイワイクラブバンド公演 | 平成17年から現在 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

子どもにおける身体活動量測定方法、幼児における体力測定方法

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　池川 哲史 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（健康スポーツマネジメントでの工夫） | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科（平成31年4月Ｉ日～京都先端科学大学へ校名変更）専門講義「健康スポーツマネジメント」において実践的施策・展開事象説明に加えて、映像によるスポーツマネジメントの関する事実展開の事業やプロデュースを見せ、具体的なスポーツの運営展開を理解させる事に努めている。 |
| 教育内容・方法の工夫（スポーツ社会学での工夫） | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科（平成31年4月Ｉ日～京都先端科学大学へ校名変更）専門講義「スポーツ社会学」において社会学的施策・事象説明に加えて、映像によるスポーツ社会学的事象に関する具体的なスポーツ社会システムを理解させる事に努めている。 |
| 教育内容・方法の工夫（実践プロジェクトABでの工夫） | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科マネジメントコース（平成31年4月Ｉ日～京都先端科学大学へ校名変更）実践プロジェクトAB授業において、スポーツ企業、保健体育教職等の外部専門的人材を招き、スポーツに関わる専門職としての企画力、実践力、考動力のロールモデルの実践学習を行っている。「健康スポーツ専門職」の現状からの独創的企画のプレゼンテーション能力を養う個人発表も行わせ、健康スポーツ専門職の意識喚起授業の工夫に努めている。 |
| 教育内容・方法の工夫（専門ゼミA～Dでの工夫） | 平成29年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科（平成31年4月1日～京都先端科学大学へ校名変更）専門ゼミA～Dでの工夫として学内他部署との連携によるイベント、学外プロジェクト参画、上級生及び下級生間のゼミ交流で先輩ゼミ生からの後輩ゼミ生への助言と提言をさせながらの教育促進を行い、卒論政策、就活キャリア実現に向けて工夫を実施している。 |
| 学生の授業時間外の学習を促進する取組実践1 | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科教授(平成31年4月1日～京都先端科学大学校に名変更)として授業時間外での学習促進取り組みとしてプロスポーツイベント大会に出向き、その大会の実践的マネジメント及び広報マーケティング、運営の仕掛けと仕組みの解説を行い、実践学習機会を設け、学内理論講義学習の実践理解の促進に努め、学習促進の結果を得た。この影響によりスポーツビジネス・スポーツ産業職の実践的理解がより一層深まった。 |
| 学生の授業時間外の学習を促進する取組実践2（スポーツメーカー企業） | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科教授(平成31年4月1～京都先端科学大学に校名変更)として主要スポーツメーカーの研究開発部門及び研究所と連携し、健康スポーツ及び競技スポーツの商品開発とそのマーケティングの仕組み・仕掛けづくりについての実践的ビジネスマネジメントを学ばせ、学外学習連携機会を設けて学内講義学習の理解の促進に努めた。この影響によりスポーツビジネス・スポーツ産業職の商品開発・企画職の実践理解が深まった。 |
| 学生の授業時間外の学習を促進する取組実践3（スポーツフィットネス企業） | 平成28年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科教授（平成31年4月1～京都先端科学大学へ校名変更）として主要スポーツフィットネス企業と連携し、健康運動指導実践のノウハウ、店舗運営マネジメントの実務に関して学外学習機会を設け、学内講義と連携させる事を仕掛けて実践的学習促進に努めた。結果、フィットネス企業での健康スポーツマネジメント教育の実践力理解がみられ健康フィットネス企業職への理解が深まった。 |
| 学生の授業時間外の学習を促進する取組実践3（自治体共創プロデュースプロジェクト） | 平成30年4月～現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科教授（平成31年4月1日～京都先端科学大学へ校名変更）として亀岡キャンパスの自治体・亀岡市が募る、「仮称・亀岡スタジアム」の活性化プロジェクトに参画させ、亀岡市行政・地元住民・本学健康スポーツ学科スポーツマネジメント専攻画学生らとの三位一体の開発活性プロディースの企画・立案・実践のプロジェクトに取り組ませた。指導するスポーツマネジメント専攻生には「スポーツを活かした地域活性」・「スポーツを通じての豊かな地域創生」を助言し、学生発想の視点から提案させる仕掛けづくりの実践学習に取り組ませている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 4 | その他教育活動上特記すべき事項<br>（教育修学支援センター長として）<br>（平成31年4月1日～学生事務部学生センター長として） | 平成28年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学執行部職・教育修学支援センター長（平成31年4月1日～京都先端科学大学学生事務部学生センター長）として学生の生活支援・トラブル対応・各種疾患学生支援の学内連携・学生イベント支援・運動部学生活躍支援・全学学生イベント・学友会活動支援・保護者会連携活動・同窓会連携活動として全学生の教育活動に関わる事案対応に努めている。 |
| | 京都学園大学採用決定にあたっての学長の評価 | 平成26年3月 | 池川哲史氏は前任校在職中に、地域住民の健康への意識喚起を促すための「地域高齢者住民への健康スポーツイベント」の企画立案のみならず運営を体験学習として導入するとともに、「健康運動実践指導者資格」取得のための教育課程を構築してきた。池川哲史氏のこうした健康スポーツ分野での教育実績が示すように、同氏は本学健康医療学部健康スポーツ学科の中核的な役割を担うとともに、「修得した知識を実際に使いこなす学び」と定義される本学の目指す「実学重視の教育課程」の継承発展にも寄与するものと判断した。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| スポーツコーチングにおけるインテグリティに関する社会学的考察 | 単著 | 平成31年3月 | 「京都学園大学総合研究所報」<br>第20号 | | p.36～p.47 |
| グローバルスポーツキャリア育成のシステムマネジメントに関する実践的研究 | 単著 | 平成30年2月 | 「京都学園大学総合研究所報」<br>第19号 | | p.11～p.21 |
| スポーツ力による公共性と地域活性化に関する論考 | 単著 | 平成29年2月 | 「京都学園大学総合研究所報」<br>第18号 | | p.3～p13 |
| 運動学的分析による7種競技者と指導者と指導者の内省の一致について | 共著 | 平成28年3月 | 「大阪産業大学人間環境学部論集」<br>第15巻 | 村上雅俊、宇土昌志、池川哲史 | p.45～p.55 |
| スポーツ指導者の教育的マネジメントに関する一考察 | 単著 | 平成28年3月 | 「京都学園大学総合研究所報」<br>第17号 | | p.11～p.18 |
| 日本型組織経営モデルにおける課題論考 | 単著 | 平成26年3月 | 「神戸親和女子大学論叢」<br>第47号 | | p.11～p.19 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 平成10年12月～現在 | 日本スポーツ運動学会会員 |
| 平成16年 4月～現在 | 日本体育・スポーツ経営学会会員 |
| 平成20年 4月～現在 | 日本スポーツマネジメント学会会員 |
| 平成21年 4月～現在 | 日本スポーツ運動学会理事 |
| 平成26年 4月～現在 | 日本スポーツ社会学会会員 |
| 平成26年 4月～現在 | 日本体育・スポーツ政策学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　坂崎　富夫 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

## Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| TEDの講義への利用 | 2014年4月～ | 講義内容に関連したTechnology Entertainment Design Conferenceのビデオを用いて、一流の技術を見せるようにしています。興味をもって、自分でConferenceを見るようにしている学生もおり、学習の啓発になっいる。 |
| 禁煙についての講義、喫煙の害の講義を何度も繰り返す | 2014年4月～ | 数回に一回の講義において喫煙習慣を作らない事、喫煙の発癌などの害について繰り返し説明している。学生レポートに喫煙の害についてと取り上げる学生が出てきている。 |
| 学生に喫煙習慣を作らせない、学生の健康を守るために学内禁煙を大学管理部門に繰り返し申し入れを行う | 2014年9月～ | 統計上、大学1～2年生において喫煙習慣が開始される。講義を通じて少しは防げたように思う。大学管理部門の協力を期待している。 |
| 講義終了時のショートテスト | 2018年4月～ | 毎回の講義終了時にショートテストを実施し、講義のポイントを強調する。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ゲノム情報を活用した予防医療の検討 | 2016年5月～ | 個人の遺伝子情報より予測される疾患を把握し、罹患を予防するための生活習慣・オーダーメード運動プログラムの作成を検討中。 |

## Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

## Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本医師会認定産業医 | 産業医活動を通じて職員の健康増進を図る。 |
| 日本医学放射線学会 | 年2回の総会、医療安全・医療倫理・医療の質についての研修会に参加し、放射線医学について研鑽。 |
| 日本超音波学会 | 年1回の総会、年数回の地方会に参加し、超音波医学を研鑽。 |
| 超音波検査 | 月1回の研修会を主催し、技術者の研鑽に協力。 |
| 京都府立医科大学放射線医学教室同門会長 | 京都府立医科大学放射線医学教室医師、OBの同門会の運営に協力する。 |
| 京都府立医科大学放射線科レクチャー | 京都府立医科大学放射線科研修医・修練医にレクチャーを行う。 |

## Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

健康診断の手法・健康管理の手法

トレーニングジムの設置・運営

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　谷口　有子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 授業概要・日程表の作成・配布 | 1994年4月～2014年7月<br>2016年4月～ | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤講師・常勤助教授・スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「トレーニング論」(学部共通専門科目、1年次配当、半期、選択2単位)および京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「運動生理学(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)、「健康フィットネス論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」、「健康フィットネス実習(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択1単位)」、「体力測定評価論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」、「体力測定評価実習(学科専門科目展開科目、3年次配当、半期、選択1単位)」、「実践プロジェクトA・B(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択各2単位)」、「キャリアサポート実践講座A・B(学科専門科目展開科目、3年次配当、半期、選択各2単位)」、「体つくり運動(学科専門科目演習科目、1年次配当、半期、選択1単位)」、「身体運動科学実習(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択1単位)」において、受講学生が半年間にわたる授業の全体構成を把握しやすいように、授業内容を記した日程表を作成・配布し、授業内容、日程、授業方法、参考書、受講上の注意事項、成績評価の方法等の解説を実践したところ、学生が各回の授業の位置づけを把握しやすくなり、主体的・計画的に授業に取り組むようになった。 |
| 小テストの実施 | 1994年10月～2014年7月<br>2016年4月～ | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤講師・常勤助教授・スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「トレーニング論」(学部共通専門科目、1年次配当、半期、選択2単位)および京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「運動生理学(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」、「健康スポーツ指導方法論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、必修2単位)」、「健康フィットネス論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」において、毎回の講義の最後に、その日に学習した内容に関する小テストを実施した。受講学生が自らの理解度を確認し、復習に役立てることができるよう、小テストは翌週までに採点し、学生に返却した。なお、この小テストの点数は成績評価にも活用した。受講学生は、返却された小テストで自分の出欠状況も把握でき、期末試験での努力目標を設定することができる。教員側は、毎回小テストを実施することで、受講生の出欠状況や理解度を把握することができ、授業改善に役立てることができる。 |
| 講義のまとめレポート作成の指導 | 1995年4月～2014年7月<br>2016年4月～ | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤講師・常勤助教授・スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「トレーニング論」(学部共通専門科目、1年次配当、半期、選択2単位)および京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「運動生理学(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」、「健康スポーツ指導方法論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、必修2単位)」において、半期の中間及び/または期末試験前の最終講義の時間に、指定のレポ ート用紙(B4/A31枚)を配布し、これまでに行なった授業の要点をまとめたレポートを作成させた。このレポートのみ、期末試験時に持ち込み可とし、試験終了時に答案とともに提出させた。限られた紙面に講義全体の要点をまとめなければならないので、受講学生は、レポート作成を通じて、おのずと重要ポイントを絞り込まざるをえない。毎回の講義時の小テストで重要ポイントを確認し、最後にレポートにまとめることで自然に重要事項が頭に入ると、学生からは好評であった。 |
| 専門(フィットネス)領域の第一線で活躍しているインストラクター・トレーナー等専門家の特別講師としての招聘 | 2016年4月～ | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科常勤教授として担当の「実践プロジェクトAB」(学科専門科目、2年次配当、半期、選択2単位)、「キャリアサポート実践講座AB」(学科専門科目、2年次配当、半期、選択2単位)において、健康運動指導士党の指導者資格の養成に携わっている方、病院併設のフィットネス施設で健康運動指導士としての職務に当たられている方等を特別講師として招聘し、フィットネスの指導現場の過去から現在、健康運動指導者の役割、現場で要求される能力・知識、この職業のやりがいと厳しさ等について講演していただいた。学生にとっては、自身の将来の方向性を考える良い機会となり、大学在学中にどのような知識・技能を身に付けるべきかを知ることにより、学習意欲の向上が見られた。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 教育内容・方法の工夫（続き） | | |
| 健康体力づくり運動の実践的指導実習 | 2003年4月～2015年1月 | 国際武道大学体育学部スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「演習Ⅰ～Ⅳ（フィットネス・トレーニング）」「演習Ⅰ～Ⅳ（トレーニング科学）」（学部専門科目、3・4年次配当、各半期、必修2単位）において、ゼミ学生が健康体力づくり運動の実践的指導力を修得できるようにするために、近隣自治体と国際武道大学が提携して実施している半年間の運動教室を修了し、自主サークルに入会して運動を継続している中高齢者を対象にした各種運動プログラム（集団指導・個別指導）の指導案を作成させ、それに基づいて年間を通して指導実習を行なった。交代で指導にあたり、指導後は反省会を行い、改善点について話し合う。指導担当者は、始業前の時間帯に指導練習を行い、ゼミの時間にゼミ生の前で事前にリハーサルを行わせた。その運動プログラムや指導法の長所と改善点を発表し、相互の意見交換、改善方法の提案を行なわせた。これらの実践を通して、ゼミ学生は、集団指導・個別指導の運動プログラムや指導法を客観的に評価する能力が向上し、実践的指導力を身に付けることができた。 |
| 健康体力づくり運動の実践的指導実習 | 2004年9月～2014年7月 | 国際武道大学体育学部スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「フィットネストレーニングⅡ」（学科専門科目、4年次配当、半期、選択2単位）において、受講学生が健康体力づくり運動の実践的指導力を修得できるようにするために、フィットネストレーニングⅠで修得した基礎的知識を基に、様々な対象者を想定した各種運動プログラムの指導案を作成させ、それに基づいて指導実習を行なった。交代で指導者・被指導者・観察者に分かれて実習し、それぞれの立場から、その運動プログラムや指導法の長所と改善点を記録用紙にまとめて発表し、相互の意見交換、改善方法の提案を行なわせた。これらの実践を通して、受講学生は、運動プログラムや指導法を客観的に評価する能力が向上し、実践的指導力を身に付けることができた。 |
| 健康体力づくり運動のための測定・評価の実践的実習 | 2009年4月～2014年9月 | 国際武道大学体育学部スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「健康・体力科学実習Ⅱ」（学科専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）において、3名の担当教員との協力の下、運動負荷試験、介護予防に関する測定・評価、新体力テスト、個別コンサルテーションなどの内容を学習させた後、地元自治体の体力・運動能力調査の場にて、各学生に受付から健康状態のチェック、準備運動の指導、形態・体力測定、整理運動の指導、測定結果の個別指導までを実際に市民の方を対象に行わせ、実践的対応力を養った。 |
| 健康体力づくり運動のための測定・評価の実践的実習 | 2016年4月～ | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「実践プロジェクトA（科学コース）（学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択1単位）」において、他の4名の担当教員との協力の下、高齢者に関する体力測定、各項目の測定方法、体力測定会の準備、設営・撤収方法などの内容を学習させた後、地域住民の体力測定会の場にて、各学生に測定会の用具の準備、会場設営、形態・体力測定、用具の収納、撤収作業を実際の地域住民対象の高齢者体力測定会の場において行わせ、実践的対応力を養った。 |
| 健康体力づくり運動のための測定・評価の実践的実習 | 2017年4月～ | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「体力測定評価実習（学科専門科目展開科目、3年次配当、半期、選択1単位）」において、他の3名の担当教員との協力の下、介護予防に関する測定・評価、新体力テスト、個別コンサルテーションなどの内容を学習させた後、地域住民の体力測定会の場にて、各学生に形態・体力測定、測定結果の個別指導を実際に地域住民の方を対象に行わせ、実践的対応力を養った。 |
| 講義内容のレジメの作成・配布 | 1995年4月～2014年7月 | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤講師・常勤助教授・スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「トレーニング論」（学部共通専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）、「スポーツトレーナー概論」（学科専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）（平成13年4月～）および京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「運動生理学（学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位）」、「健康スポーツ指導方法論（学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、必修2単位）」、「健康フィットネス論（学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位）」において、毎回の講義内容をまとめたレジメを作成し、受講学生に配布した。この資料は、受講生の授業の理解促進、授業の復習やレポート作成時に役立てられた。受講生には、聴覚障害を持つ学生や、日本語を母国語としない学生も含まれるため、希望する学生には予習用として配布することもあった。 |

| | | |
|---|---|---|
| 指導案・実技指導評価シート教材の作成 | 2008年4月～2014年7月 | 国際武道大学体育学部スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「フィットネストレーニングⅡ」(学科専門科目、4年次配当、半期、選択2単位)において、学生が作成した体力づくりの運動指導案に基づいて実施した実技指導の「評価記入シート」を作成した。毎回の授業で、担当学生は作成してきた指導案に基づく実技指導を実施し、参加者役、観察者役の学生は、それぞれの立場から、指導案と実技指導について評価した内容をシートに記入し、それを基に議論を実施できるようにした。また、指導案と実技指導評価シートは授業後に提出させ、年度ごとにまとめて、次年度以降の学生が参照できるようにした。このシートの作成により、学生は、客観的な視点で指導案や実技指導を評価できるようになり、自分の考えをまとめて議論をすることができるようになった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| パワーポイント教材の作成 | 2008年4月～2014年7月<br>2016年4月～ | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤講師・常勤助教授・スポーツトレーナー学科常勤教授として担当の「トレーニング論」(学部共通専門科目、1年次配当、半期、選択2単位)、「スポーツトレーナー概論」(学科専門科目、1年次配当、半期、必修2単位)および京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の教授として担当の「運動生理学(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」、「健康スポーツ指導方法論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、必修2単位)」、「健康フィットネス論(学科専門科目展開科目、2年次配当、半期、選択2単位)」において、講義内容の理解を助けるためのパワーポイント教材を作成した。写真・図表・イラストなどを多用したことにより、学生からは「分かりやすかった」と好評であった。 |
| 健康・スポーツ科学テキスト トレーニング科学「再掲」 | 2013年4月～2014年7月 | 国際武道大学体育学部体育学科の常勤教授として担当の「体力トレーニング論」(学科専門科目、1年次配当、半期、必修2単位)において使用した。本書は、トレーニングについて、Ⅰ. 総論、Ⅱ. 体力とトレーニング、Ⅲ. トレーニングでの注意点、の3章からなっており、そのうちのⅡ章3項の神経機能のA. 巧緻性について執筆した。各項目毎に要点が整理されており、図表も豊富で、参考図書が紹介されているので、学生にとって理解しやすく学習しやすいテキストになっている。 |
| 健康運動指導士eラーニング教材<br>「健康づくり運動の理論 女性の体力・運動能力の特徴と運動」 | 2017年3月31日 | 健康運動指導士養成講習会の一部eラーニング化に伴い、担当の「健康づくり運動の理論 女性の体力・運動能力の特徴と運動」の内容を動画撮影し、eラーニング教材を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 健康運動指導士養成大学全国連絡協議会総会にて「国際武道大学における地域住民への健康支援の取り組み」というテーマで講演 | 2015年2月1日 | 国際武道大学における地域住民への健康支援の取り組みについて、教育・研究・社会貢献という3つの視点から講演した。大学近隣の自治体とともに実施している地域住民の健康体力づくり事業、それらの事業と連携した大学の授業内容及び研究活動を紹介した。さまざまな工夫をすることで、人々の健康づくりに寄与できる優秀な指導者を育成する教育・健康づくりに資する研究・住民の健康づくりという地域社会への貢献を同時に実現できるという実例を示した。 |
| 2016年度　第22回　FDフォーラム 「大学の教育力を発信する」において、第8分科会 「健康医療系専門教育: 学ぶ側の主体性、満足度、理解度を引き上げる」の演者として「健康・スポーツ系学科における 健康運動指導者育成の実践的取り組み」というテーマで講演 | 2017年3月5日 | 国際武道大学および京都学園大学における地域住民への健康支援の取り組みについて、主として教育という視点から講演した。大学近隣の自治体とともに実施している地域住民の健康体力づくり事業、それらの事業と連携した大学の授業内容を紹介した。さまざまな工夫をすることで、人々の健康づくりに寄与できる優秀な指導者を育成する教育・健康づくりに資する研究・住民の健康づくりという地域社会への貢献を同時に実現できるという実例を示した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 御宿町健康体力チェック | 2005年9月～10月、<br>2006～2014年10月、 | 御宿町B&G海洋センター、保健センター、国際武道大学共催の、御宿町健康づくり事業「健康体力チェック」を実施し、体脂肪、骨密度、スタミナ、筋力、反応時間、バランス感覚などを測定し、健康に日常生活を行っていくための注意点などを参加者一人一人にアドバイスした。本人担当部分:共同講演者と協力し、全体を担当。共同講演者:谷口有子、小西由里子、井上哲郎、見波静、北湯口純 |
| 健康・体力づくり事業☒すみ市体力測定・運動教室 | 2002年10月～2015年3月 | 国際武道大学といすみ市の共催である「いすみ市(旧岬町)健康体力づくり事業」において、いすみ市在住の一般成人を対象とした体力測定を行い、個人に応じた運動のアドバイスを行い、1回60分週2回の運動教室で健康体力づくりの運動の行い方を指導した。そのうちの週1回、ウォーミングアップ・エアロビックダンス・ステップエクサイズ・レジスタンストレーニング・バランスエクササイズ・コーディネーションエクササイズ・クーリングダウン・ストレッチングなどの実技指導にあたった。本人担当部分:共同講演者と協力し、事業全体を担当。 共同講演者:谷口有子、小西由里子、井上哲朗、見波静、北湯口純、松村さくら |

| | | |
|---|---|---|
| 健康・体力づくり事業<br>勝浦市「健康ハツラツ教室」(体力測定・運動教室指導) | 2002年11月～2015年3月 | 国際武道大学と勝浦市との共催である「健康ハツラツ教室」において、勝浦市在住の一般成人を対象とした体力測定を行い、個人に応じた運動のアドバイスを行い、1回60分間、週1回の運動教室で健康体力づくりの運動の行い方を指導した。ウォーミングアップ・エアロビックダンス・ステップエクササイズ・レジスタンストレーニング・バランスエクササイズ・コーディネーションエクササイズ・クーリングダウン・ストレッチングなどの実技指導に当たった。本人担当部分:共同講演者と協力し、事業全体を担当。共同講演者:谷口有子、小西由里子、井上哲朗、若山英央、北湯口純、見波静、松村さくら |
| パワーリフティング指導 | 2001年7月～2015年3月 | 国際武道大学学友会パワーリフティング部監督・(2010年～)部長として、部長・(2010年～)師範の石塚正一教授の下、岡本富俊コーチ・(2010年～)監督および西川洋祐コーチと連携を取りながら、所属学生の指導に当たった。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| その他教育活動上特記すべき事項(続き) | | |
| 健康運動指導士養成講習会　講師 | 2011年5月、2012年5月、<br>2013年5月、11月、<br>2014年5月、8月<br>2015年1月、12月<br>2016年5月、12月 | 健康運動指導士養成講習会において「健康づくり運動の理論　女性の体力・運動能力の特徴とトレーニング」の講義を行った。 |
| 修士学位論文審査実績 | 2014年1月 | 大学サッカー選手の減速・停止能力に影響を及ぼす体力的要因、(副査) |
| 修士学位論文審査実績 | 2014年1月 | 特定課題研究　フェンシング日本代表選手におけるロンドンオリンピックに向けたコンディショニング、(副査) |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 筋力発揮の脳・神経科学<br>～その基礎から臨床まで～<br>ヒトの動きの神経科学シリーズⅢ | 共著 | 2017年3月25日 | 市村書店 | 編者:大築立志、鈴木三央、柳原　大<br>共著者:伊藤克浩、河辺章子、北原エリ子、木下　博、郭　伸、高橋恭平、谷口有子、野垣　宏、正門由久、矢部京之助、山口　潤、吉武康栄 | 「第4章 複数筋の同時収縮による発揮筋力の低下」(p.47～p.62)を単著。 |
| 健康運動指導士養成講習会テキスト(上) | 共著 | 2014年3月1日 | 財団法人健康体力づくり事業財団 | 編者:岡田真平、川久保清、小室史恵、定本朋子、竹中晃二、田中喜代次、鳥居　俊、深代千之、三木英之、宮地元彦、山田和彦<br>共著者:下光輝一、大谷由美子、高宮朋子、辻一郎、宮地元彦、井上茂、勝川史憲、有田幹雄、及川眞一、長峯朋子、稲垣恭子、門脇孝、高本偉碩、橋本通、大江隆史、岡敬之、本間栄、石田文昭、黒川峰夫、中村文彦、鈴木隆雄、石田浩二、定本朋子、中澤公孝、石井直方、井澤鉄也、鈴木克彦、近藤徳彦、井上芳光、長野明紀、吉岡伸輔、小田俊明、平野裕一、池上康男、田畑泉、金久博昭、佐々木玲子、谷口有子、竹島伸生、坂本静男、月村泰規、入江一憲 | 「第6章 健康づくり運動の理論 7女性の体力・運動能力の特徴と運動」(p.329～p.334)を単著。 |
| 論文 | | | | | |
| 長期間運動を継続している高齢者における縦断的体力推移 | 共著 | 2018年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」<br>第33巻 | 井上哲朗、谷口有子、小西由里子、見波静 | p.63～p.66 |
| 大学教育研究プロジェクト研究成果報告書、地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 | 共著 | 2018年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」<br>第33巻 | 小西由里子、井上哲朗、森実由樹、大川昌宏、<br>立木幸敏、刈谷文彦、松村さくら、谷口有子、見波静、長濱秀紀 | p.121～p.123 |
| 半年間の定期的な集団運動教室受講生の行動変容について | 共著 | 2017年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」<br>第32巻 | 松村さくら、小西由里子、谷口有子、大川昌宏、<br>井上哲朗、見波静、森美由樹 | p.75～p.78 |
| 大学教育研究プロジェクト研究成果報告書、地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 | 共著 | 2017年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」<br>第32巻 | 小西由里子、井上哲朗、森実由樹、大川昌宏、<br>立木幸敏、刈谷文彦、松村さくら、谷口有子、見波静、長濱秀紀 | p.121～p.123 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 半年間の運動教室参加後に自主サークルにて7年間以上定期的に運動を継続した中高齢者の形態・体力の変化 | 共著 | 2016年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」第31巻 | 谷口有子、小西由里子、井上哲朗、見波静 | p.137～p.140 |
| 定期的・継続的な集団運動型身体活動が中高年のロコモティブシンドロームの維持改善に及ぼす影響 | 共著 | 2016年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」第31巻 | 小西由里子、谷口有子、井上哲朗、松村さくら、見波静 | p.85～p.92 |
| 近隣自治体と大学とが連携した健康・体力づくり事業の成果 －立ち上げから約10年間にわたる成果報告書－ | 共著 | 2015年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」第30巻 | 谷口有子、小西由里子、井上哲朗、見波静、増尾善久 | p.61～p.69 |
| 二種類の測定機器による身体組成推定値の比較 | 共著 | 2015年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」第30巻 | 井上哲朗、谷口有子、小西由里子、見波静、増尾善久 | p.101～p.104 |
| 地域在住中高齢者に対する個別運動指導導入の試み －学生に対する実践的教育の場の創造－ | 共著 | 2015年3月31日 | 「国際武道大学研究紀要」第30巻 | 谷口有子、井上哲朗、小西由里子、榊原裕希 | p.101～p.105 |
| 平成18年度から平成23年度にわたる御宿町「健康・体力チェック」の集計結果報告 | 共著 | 2014年3月1日 | 「国際武道大学研究紀要」第29巻 | 共著者:井上哲朗、小西由里子、谷口有子、見波静、増尾善久、高田誠 | p.83～p.87 |
| その他 | | | | | |
| (研究報告書)<br>平成30年度国際武道大学 武道・スポーツ科学研究所 プロジェクト研究 地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 | 共同 | 2019年3月31日 | 国際武道大学<br>武道・スポーツ科学研究所年報24号 | 小西由里子、井上哲朗、森実由樹、立木幸敏、<br>刈谷文彦、谷口有子、見波静、宮本瑠美、水島涼子 | p.49～p.54 |
| (研究報告書)<br>平成29年度国際武道大学 武道・スポーツ科学研究所 プロジェクト研究 地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 | 共同 | 2018年3月31日 | 国際武道大学<br>武道・スポーツ科学研究所年報23号 | 小西由里子、井上哲朗、森実由樹、立木幸敏、<br>刈谷文彦、谷口有子、見波静、長濱秀紀 | p.31～p.35 |
| (研究報告書)<br>平成28年度国際武道大学 武道・スポーツ科学研究所 プロジェクト研究 地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 | 共同 | 2017年3月31日 | 国際武道大学<br>武道・スポーツ科学研究所年報22号 | 小西由里子、井上哲朗、立木幸敏、大川昌宏、<br>刈谷文彦、森実由樹、松村さくら、谷口有子、見波静、長濱秀紀、山本一美、渡邊浩子、鶴岡孝一 | p.39～p.44 |
| (講演)<br>京都府公園公社 伏見港公園 シニア健康講座<br>～運動とロコモティブシンドロームについて～ | 単独 | 2015年11月16日 | 京都府公園公社<br>伏見港公園 体育館 | | |
| (ポスター発表)<br>半年間の運動教室参加後に自主サークルにて7年間以上定期的に運動を継続した中高齢者の体力の変化 | 共同 | 2015年9月18日 | 第70回日本体力医学会大会、和歌山 | 谷口有子、小西由里子、井上哲朗、見波静 | |
| (シンポジウム)<br>日本体力医学会近畿地方会・健康運動指導士会近畿ブロック合同シンポジウム「健康運動指導士の育成～現場と育成大学の連携課題」<br>健康運動指導士の育成 ～健康運動指導士養成大学の事例紹介～ | 単独 | 2019年2月23日 | 立命館大学<br>びわこ・くさつキャンパス | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| 「学会活動」 | |
|---|---|
| 1982年5月～ | 日本体育学会会員(現在に至る) |
| 1983年4月～ | 日本体力医学会会員(現在に至る) 日本体力医学会評議員(1994年9月～現在に至る) |
| 1992年12月～ | 日本運動生理学会会員(現在に至る) 日本運動生理学会評議員(1993年5月～現在に至る) |
| 1994年2月～ | トレーニング科学研究会(現:日本トレーニング科学会)会員(現在に至る) |
| 2008年1月～ | ヨーロッパスポーツ科学会(European College of Sport Science)会員(現在に至る) |
| 2008年10月～ | 日本臨床神経生理学会会員(現在に至る) |
| 2009年4月～ | 日本バイオメカニクス学会会員(現在に至る) 日本バイオメカニクス学会編集委員会委員(2009年4月～2011年3月) |
| 2015年4月～ | 日本スポーツパフォーマンス学会会員(現在に至る) |

| | |
|---|---|
| 「社会活動」 | |
| 2001年4月～ | 社団法人日本エアロビックフィットネス協会（現：公益社団法人 日本フィットネス協会）会員（現在に至る） |
| 2004年7月～ | 特定非営利活動法人NSCAジャパン英文会員（2012年7月31日まで） |
| 2009年8月～ | 全日本学生パワーリフティング連盟副会長（2011年8月7日まで） |
| 2009年8月～ | 関東学生パワーリフティング連盟副会長（2011年8月7日まで） |
| 2018年4月～ | 公益社団法人 日本フィットネス協会評議員（現在に至る） |
| 「研究活動」 | |
| 2011年4月～ | 両側性及び一側性トレーニングの効果における特異性を生み出す生理学的機構、平成23～25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））平成23年度910千円、平成24年度910千円、平成25年度780千円、研究代表者 |
| 2014年 | トレーニング科学投稿論文査読 |
| 2014年11月～2015年10月 | 平成27年度　科学研究費事業審査委員 |
| 2015年11月～2016年10月 | 平成28年度　科学研究費事業審査委員 |
| 2016年 | 京都学園大学健康医療学部研究紀要投稿論文査読査読 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 一般中高齢者を対象とした健康体力づくり講習会（講義・実技） | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　新里　直美 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 医学科生理学講義における臨床医学との関連事項の教材化 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学において生理学講義を行う際、生理学系統講義の中で、「生命機能が如何に維持されるか」という生理学の本質を科学的な原理としての知識や統合された概念として理解を深める講義を基盤とした上で、将来の臨床医学との関連を明確に述べることにより、単なる生理学の知識の羅列でなく、何故生理学が将来の臨床医学を学ぶ上で重要であるかを指摘し、学生の勉学意欲を確固たるものにするよう工夫している. さらに、病態生理学的見地からも講義を行うことにより、臨床症状の病態論も考える力を養成するように務めている. |
| 医学科生理学講義における教材の視覚化 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学において生理学講義を行う際、学生には教材をプリントにし、全員に配付している. また、講義はpower pointを用いて、講義の内容を視覚化することにより、理解しにくい概念的な問題点も図式化することで理解しやすいように工夫している. 一方で、数式等を用いて科学的な原理を説明する際には、黒板に板書しながらゆっくりと段階を追って説明するなど、講義内容に応じてメリハリをつけるよう意識している. また、授業終了後も、随時質問を受け付け、学生の疑問をできる限りその場で解決するようにしている. |
| 学生の学習に対する主体性増進 | 平成9年5月から<br>平成27年3月まで | トロント大学医学部では3ヶ月間、および京都府立医科大学では1ヶ月間半、夏期に学部学生が自ら研究室を選んで基礎研究を学ぶ期間が設けられている. この研究配属期間には、個々の学生とのディスカッションを行い、その結果に基づき研究テーマを決定し、学生とともに実験を行うことにより、学生の学習に対する自主性の増進を目指す教育を実践している. 特に、学生自身に主体性を持たすために、実験のプロトコールに関するアイデアおよびその決定に関しては、学生主導型で行っている. 例え、教員側から観て、その決定が不合理なものでも、実験結果を得てから、学生とともにディスカッションして、どの点が不合理であったかを明らかにし、次の実験計画立案にその経験を生かすように工夫している. |
| 学部学生用生理学演習を行うことによる問題点探索能力の開発 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学において、学部学生が、教員指導型ではなく、自らの力で問題点を発見し、その問題点を解決する能力を身につけるよう生理学演習を行っている. そのために、演習での課題も学生とディスカッションして決定し、自ら提起した課題についての研究内容をプレゼンテーションするようにした. また、課題の研究方法に加えて、自分の考えを分かりやすく伝えるための基本的なプレゼンテーションの方法についても指導し、研究の総合的な能力を身につけられるように工夫した. さらに、各研究課題について全員でディスカッションし、お互いの研究について意見交換して、自分の意見を積極的に発言したり、教員の研究を含めた他の研究の評価ができる環境作りを心がけている. このことにより、学生が教員から評価される立場だけではなく、学生が教員の研究に関しても評価・批評できる雰囲気を作り、授業や演習の場が、教員から学生に対しての一方的な教授ではないことを認識させ、教員および学生の双方ともが、授業や演習の主体であることを認識させるよう工夫している. |
| 大学院学生および博士研究員に対する指導 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学大学院(博士課程)の学生に対して、毎週セミナーおよび研究指導を行い、学生の研究に対する方向付けを行っている. 特に、大学院生に対しては研究の方向付けのみならず、具体的な実験方法やその技術の指導も行っている。さらに、研究結果に対するディスカッションも随時行うことで、研究を総合的にサポートしながら、自らが考える能力を養えるように指導方法にも工夫をこらしている. また、平成19年度より設置された、医学研究科修士課程の大学院生には講義を通して医学研究の重要性を伝えるとともに、基礎医学研究を担う研究者の育成を目指した教育を工夫している. |
| 看護学科・言語聴覚学科の解剖生理学講義における講義の視覚化と教材の工夫 | 平成27年4月から<br>現在まで | 京都学園大学健康医療学部看護学科・言語聴覚学科における解剖生理学の講義においては、学生の学力に応じて、十分な理解を促すために、講義内容を簡潔に要約した教材(プリント)を作成して配布するとともに、power pointを用いて、講義の内容を視覚化することにより、理解しにくい概念的な問題点も図式化することで理解しやすいように工夫している. また、単元ごとに、小テストを実施して、学習到達度の目安にしたり、日々の学習の原動力となるように努めている. |
| インターネットによる学生との質疑応答 | 平成27年4月から<br>現在まで | 学生からの質問は講義中に随時受け付けているが、本務が亀岡であり、講義日のみ太秦に出向いているために、学生からの質問などを受け付ける機会が非常に少なく、メールによる質問を随時受け付けて、できる限り学生とのコミュニケーションと取るように努めている. |

| | | |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)続き | | |
| 学生による授業評価の活用 | 平成13年4月から<br>現在まで | 前任校の京都府立医科大学大学院および医学部医学科および本学での授業評価を次期の授業に反映させるように努めている. 講義の難易度は国家試験があるために変更することはできないが、できる限り理解しやすいように工夫をしている。 |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 医学科生理学実習における実習書作成 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学において、生理学実習を行う際、オリジナル教材を自らが作成し、印刷物(実習書)として学生に配付している. 生理学実習は、既知の生理学的知見を実際に実習として行うことで十分な理解が得られることに配慮した実習内容と科学的な思考力の育成を踏まえ、実験結果からのみ結論が考察できる実習内容の2本立てとしている. 実習書の中では、実習における目的、問題点など学生が実習中に学ぶべき点を細かく、また一方で実習の生理学の中における位置付けを大局的に記述している. さらに、生理学系統講義の中で学んだ知識が実際にどのように生体の中でダイナミックに働いているかを、自ら体験させることにより、実験生物学としての医学の面白みも学生達に教授するよう工夫している. また、将来の臨床医学との関連を明確に述べることにより、学問としての生理学に加え、実地の医学としての重要性を学生達が学べるよう工夫している. さらに、病態生理学的見地からのディスカッションも行うことにより、学生達にとって、臨床医学と生理学との関連をより身近なものとするよう工夫している. |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 所属大学における自己点検・評価での評価結果 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 学生指導、特に大学院生や研究配属学生の研究指導には高い評価を得た. これまでに指導した学部学生の研究成果は、学生自身が日本生理学会、日本腎臓学会、米国実験生物学会(アメリカ生理学会)、スイスで開催された国際シンポジウムなどに発表するとともに、学生の第一著者として国際的な学術雑誌に数編掲載されている. さらに京都府立医科大学同窓会が主催する若手研究者を奨励するための青蓮賞(40歳以下の研究者で、毎年30名程度の応募中で5名受賞;これまでは35-40歳の助教・大学院生などが受賞)を指導学生2名(学部在籍中)が受賞するなどの実績を上げていることが総合的に評価された. 現在、指導している学部学生は、生命現象(上皮細胞のイオン輸送)の時間による変化を数理モデルとして提唱・解析しており、研究会や日本生理学会若手研究会などで優秀賞など複数の賞を受賞している. |
| 所属大学等の学生による授業評価、教員による相互評価等の結果 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 研究配属学生からの教員評価を行うために、学生からアンケートを取り、その結果、指導性に高い評価を受けた. |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| カリキュラム主任としてCBT (Computer Based Testing) 問題の作成 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | カリキュラム主任として、シラバスの作成を行い、学生に講義・実習・演習についての情報提供を行っている. また、平成17年度より導入された臨床実習への全国統一の進級試験(computer based test: CBT)の試験問題は各大学からプールされ、受験生にランダムに配信する試験システムであり、これらの問題作成・ブラッシュアップに関わり、医学教育に努めている. |
| 医学教育ワークショップへの参加 | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学主催の医学教育ワークショップへ参加し、本学の現状認識と将来的な医学教育への展望について討議を行っている. 本学では、大学院重点化や独立法人化という変革を乗り越え、医学教育ではコアカリキュラム制度導入、臨床実習への新たな進級試験(CBT)制度・OSCE(客観的臨床能力試験)の導入などの変革に対応するため、本学の学部学生・大学院生の教育方針や教育方法などを討議ししている. また、理想的な大学の将来像を実現するため、このような医学教育ワークショップへの積極的な参加を通して、本学医学教育に努めている. |
| 京都府立医科大学大学院中央研究室主任として大学院研究をサポート | 平成15年4月から<br>平成27年3月まで | 京都府立医科大学大学院には、中央研究室(7部門18研究室から構成)という共有の研究施設が備えられている. この中央研究室の維持管理は、医学部教員がボランティアで行っており、2つの中央研究室の主任を兼務し、大学院および本学基礎研究の研究環境維持に貢献している. |
| 京都府立医科大学付属図書館運営協議委員会の委員として教育・研究環境維持をサポート | 平成13年4月から<br>平成27年3月まで | 学生教育に不可欠な図書館運営を通して、学生に有益で必要な書籍を購入し豊かな教育環境を整えることに貢献するとともに、大学院教育にも重要な研究情報を提供するデータベースや学術雑誌購入の効率的な選択にも貢献している. |
| 入試問題作成主務者として、本学入試に貢献 | 平成27年4月から<br>平成28年3月まで | 京都学園大学一般入試の問題作成主務者として、よりよい学生を選抜するための入試問題を作成し、優れた学生の獲得に努めている. |
| 学術情報センター運営委員として、本学の図書館運営・情報環境整備に貢献 | 平成27年4月から<br>現在まで | 京都学園大学学術情報センター運営委員としてとして、学生のよりよい教育環境整備のため、図書館運営・情報環境運営に貢献している. |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| CALHM3 Is Essential for Rapid Ion Channel-Mediated Purinergic Neurotransmission of GPCR-Mediated Tastes. | 共著 | 2018 | Neuron Vol 98 | Ma Z, Taruno A, Ohmoto M, Jyotaki M, Lim JC, Miyazaki H, Niisato N, Marunaka Y, Lee RJ, Hoff H, Payne R, Demuro A, Parker I, Mitchell CH, Henao-Mejia J, Tanis JE, Matsumoto I, Tordoff MG, Foskett JK. | 547-561 |
| Analysis of Aprotinin, a Protease Inhibitor, Action on the Trafficking of Epithelial Na+ Channels (ENaC) in Renal Epithelial Cells Using a Mathematical Model. | 共著 | 2017 | Cell Physiol Biochem. Vol 41 | Sasamoto K, Marunaka R, Niisato N, Sun H, Taruno A, Pezzotti G, Yamamoto T, Kanamura N, Zhu W, Nishio K, Inui T, Eaton DC, Marunaka Y. | 1865-1880 |
| Quercetin is a useful medicinal compound showing various actions including control of blood pressure, neurite elongation and epithelial ion transport. | 共著 | 2016 | Curr Med Chem. Vol 23 | Marunaka Y, Niisato N, Miyazaki H, Nakajima KI, Taruno A, Sun H, Marunaka R, Okui M, Yamamoto T, Kanamura N, Kogiso H, Ikeuchi Y, Kashio M, Hosogi S, Nakahari T. | 1-12 |
| Simulation of Cl- secretion in epithelial tissues: New methodology estimating activity of electro-neutral Cl- transporter | 共著 | 2015 | Frontiers in Physiology vol 6 | Sasamoto K, Niisato N, Taruno A, Marunaka Y | 370- |
| Lowered extracellular pH is involved in the pathogenesis of skeletal muscle insulin resistance | 共著 | 2014 | Biochem Biophys Res Commun Vol 445 | Hayata H, Miyazaki H, Niisato N, Yokoyama N, MARUNAKA Y | 170-174 |
| Distinct action of flavonoids, myricetin and quercetin, on epithelial Cl- secretion: useful tools as regulators of Cl- secretion | 共著 | 2014 | BioMed Res Int Vol 2014 | Sun H, Niisato N, Nishio K, Hamilton KL, Marunaka Y | 902735 |
| Insulin is involved in transcriptional regulation of NKCC and CFTR Cl- channel through PI3K activation and ERK inactivation in renal epithelial cells | 共著 | 2014 | J Physiol Sci Vol 64 | Sun H, Niisato N, Inui T, MARUNAKA Y | 433-443 |
| 総説 | | | | | |
| MAPKによるENaCを介するNa+再吸収制御機構 | 共著 | 2016年3月 | 「腎と透析」80 (3) | 新里直美・丸中良典 | p423 - p425 |
| 上皮組織クロライドイオン分泌に寄与する電気的中性クロライドイオン輸送活性の電気生理学的測定の新展開 ～数学的シミュレーション活用による新測定法の確立～ | 共著 | 2015年 | 「分子呼吸器病」 19 | 笹本浩平, 新里直美, 丸中良典. | p130-p134 |
| 短絡電流測定法 | 共著 | 2015年 | 「呼吸」34 | 丸中良典, 中張隆司, 新里直美, 宮崎裕明, 樽野陽幸 | p683-p688 |
| その他 | | | | | |
| (国際会議・国際シンポジウム) | | | | | |
| Insulin and the CFTR Chloride Channel. | 共著 | 2016, Oct. 27-29 | The 30th Annual North American Cystic Fibrosis Conference. (Orlando, Florida, USA) | Marunaka Y, Niisato N, Hongxin Sun, Inui T. | |
| Homologous CALHM subunits assemble to form a novel voltage-gated ATP channel | 共著 | 2016, July 20-22 | The 39th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society (Yokohama, Japan) | Taruno A, Miyazaki H, Niisato N, Hongxin K, Kashio M, Marunaka Y. | |
| Homologous CALHM subunits assemble to form a novel voltage-gated ATP channel | 共著 | 2016, May 21 | International Symposium on Ion Channels, Transporters and Signal Transduction (Kyoto, Japan). | Taruno A, Miyazaki H, Niisato N, Marunaka Y. | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (国際会議・国際シンポジウム)続き | | | | | |
| Insulin is involved in transcriptional regulation of NKCC and the CFTR Cl- channel through PI3K activation and ERK inactivation in renal epithelial cells | 共著 | 2016, May 21 | International Symposium on Ion Channels, Transporters and Signal Transduction (Kyoto, Japan). | Sun H, Niisato N, Marunaka Y. | |
| Simulation of Cl- secretion in epithelial tissues: New methodology estimating activity of electroneutral Cl- transporter. | 共著 | 2016, May 21 | International Symposium on Ion Channels, Transporters and Signal Transduction (Kyoto, Japan). | Sasamoto K, Niisato N, Marunaka Y. | |
| Roles of lipid raft in epithelial Na+ channel (ENaC) function. | 共著 | 2015, Nov. 22-25 | Symposium on "New insights into integral regulators of the epithelial ion transport in health and disease." 8th FAOPS Congress. (Bangkok, Thailand) | Marunaka Y, Niisato N. | |
| Involvement of insulin in transcriptional regulation of NKCC and CFTR Cl- channel through PI3K activation and ERK inactivation in renal epithelial A6 cells. | 共著 | 2014, Nov.1-2 | The 2nd International Symposium on Epithelial Barrier and Transport. (Shiga, Japan) | Sun Hongxin, Niisato N, Marunaka Y. | |
| Lowered extracellular pH induces the pathogenesis of insulin resistance in skeletal muscle. | 共著 | 2014, Nov.1-2 | The 2nd International Symposium on Epithelial Barrier and Transport. (Shiga, Japan) | Hayata H, Miyazaki H, Niisato N, Yokoyama N, Marunaka Y. | |
| Regulation of epithelial Na+ channel (ENaC) trafficking by aldosterone. | 共著 | 2014, Oct. 25-27 | International Symposium on Renal Physiology Chinese Society of Physiology. (Shanghai, China) | Niisato N, Marunaka Y. | |
| A role of p38 on proteasome-dependent degradation of ENaC in aldosterone-stimulated renal epithelial A6 cells. | 共著 | 2014, 1-2 | The 2nd International Symposium on Epithelial Barrier and Transport. (Shiga, Japan) | Niisato N, Marunaka Y. | |
| (国内シンポジウム・招聘講演) | | | | | |
| 上皮型Na+チャネル(ENaC)の膜発現制御の分子メカニズム | 共著 | 2018年5月 | 第30回日本膜学会 年会シンポジウム (於: 東京 早稲田大学) | 新里直美、丸中良典 | |
| CALHMイオンチャネルの構造・機能の解析. | 共著 | 2014年11月 | 膜シンポジウム 2014. | 樽野 陽幸, Zhong ming Ma, 新里 直美, 宮崎 裕明, 加塩 麻紀子, 孫 紅昕, Foskett J Kevin, 丸中 良典. | |
| Molecular mechamims of Epithelial Na+channel (ENaC) regulation. | 共著 | 2014, March 27-30 | Symposium on "Epithelial Ion Transport" The 134th Annual Meeting of The Pharmaceutical Society of Japan. | Niisato N, Marunaka Y. | |
| Molecular mechanisms of regulation of ENaC expression and intracellular trafficking in renal epithelium | 共著 | 2014, March 16-18 | Symposium on "Metabolic regulation of renal physiology and pathophysiology" FAOPS Joint Symposium-Japan/China The 91st Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Kagoshima) | Marunaka Y, Niisato N, Yokoyama N, Sasamoto K | |
| An essential role of p38 on ENaC trafficking in aldosterone-stimulated Na+ reabsorption in renal epithelial A6 cells. | 共著 | 2014, March 16-18 | Symposium on "New aspects of molecular mechanisms of ENaC-mediated Na+ homeostasis and body fluid regulation" The 91st Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Kagoshima) | Niisato N, Marunaka Y | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (国内学会一般講演) | | | | | |
| Aprotinin reduces the recycling rate of epithelial Na+ channels (ENaC) to the apical membrane of an epithelial cell: a four-state model of intracellular ENaC trafficking | 共著 | 2017年3月 | The 94th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. | Sasamoto K, Niisato N, Marunaka Y | |
| A targeting mechanism of ENaC in the apical membrane to proteasome in renal epithelial A6 cells | 共著 | 2016年3月22-24日 | The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Sapporo) | Niisato N and Marunaka Y. | |
| Simulation of Cl- secretion in epithelial tissues: New methodology estimating activity of electroneutral Cl- transporter. | 共著 | 2016年3月22-24日 | The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Sapporo) | Sasamoto K, Niisato N, Marunaka Y | |
| (国内学会一般講演)続き | | | | | |
| A regulatory mechanism for apical surface expression of ENaC through the ubiquitin-proteasome pathway in renal epithelial A6 cells. | 共著 | 2016年3月22-24日 | The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Sapporo) | Niisato N, Marunaka Y | |
| 2型糖尿病モデルラットの病態の発症・進展過程における間質液pHの低下. | 共著 | 2015年10月 | 第108回近畿生理談話会 (大阪) | 青井渉、細木誠之、中張隆司、早田洋樹、新里直美、吉本寛司、池谷博、高田和幸、松枝小夜、芦原英司、丸中良典. | |
| CAL1APの同定とCALHM1/CAL1APチャネルの機能解析 . | 共著 | 2015年10月 | 第108回近畿生理談話会 (大阪) | 樽野陽幸、宮崎裕明、新里直美、孫紅昕、加塩麻紀子、丸中良典 | |
| 形質膜上ENaC のプロテアソームへのターゲティングメカニズムの解明. | 共著 | 2015年6月 | 第58回日本腎臓学会学術総会 (名古屋) | 新里 直美、西尾 恭介、丸中 良典 | |
| Insulin transcriptionally regulated NKCC and CFTR Cl- channel expression through PI3K activation and ERK inactivation in renal epithelial A6 cells | 共著 | 2015年3月 | The 92nd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan. (Kobe) | Sun Hongxin, Niisato N, Marunaka Y. | |
| Transcriptional regulation of NKCC and CFTR Cl- channel through PI3K activation and ERK inactivation by insulin in renal epithelial A6 cells. | 共著 | 2014年10月 | 第107回近畿生理談話会 (神戸) | Sun Hongxin, Niisato N, Marunaka Y. | |
| 上皮組織クロライドイオン分泌に寄与する電気的中性クロライドイオン輸送体活性の電気生理学的測定の新展開. | 共著 | 2014年10月 | 第107回近畿生理談話会 (神戸) | 笹本 浩平、新里 直美、丸中 良典. | |
| 腎上皮細胞クロライドイオン輸送にかかわる電気的中性イオン輸送体活性の電気生理学的手法による検証. | 共著 | 2014年7月 | 第57回日本腎臓学会 学術総会 (横浜) | 丸中 良典、笹本 浩平、新里 直美、西尾 恭介. | |
| アルドステロンによるp38を介するNa+再吸収亢進における細胞内クロライドイオンの役割解明. | 共著 | 2014年7月 | 第57回日本腎臓学会 学術総会 (横浜) | 新里 直美、西尾 恭介、丸中 良典. | |
| 上皮組織における電気的中性クロライドイオン輸送体活性の電気生理学的機能測定の可能性:数理モデル活用による測定法の新展開 | 共著 | 2014年4月 | 第9回京滋呼吸器リサーチフォーラム (於:京都 京都大学芝蘭会館) | 笹本浩平、新里直美、丸中良典 | |
| クロライドイオンがリソソームpHを制御し、オートファジーを制御する. | 共著 | 2014年3月 | 第91回に本生理学会 (於:鹿児島 鹿児島大学) | 細木誠之、丸中良典、新里直美、楠崎克之、宮崎裕明 | |
| 上皮膜コンダクタンス計測をとしたCl-分泌数理モデル構築による電気的中性イオン輸送活性の電気生理学的測定の試み | 共著 | 2014年3月 | 第91回に本生理学会 (於:鹿児島 鹿児島大学) | 笹本浩平、新里直美、丸中良典 | |
| 骨格筋におけるインスリン抵抗性の病態に細胞外液pHの低下が関与する | 共著 | 2014年3月 | 第91回に本生理学会 (於:鹿児島 鹿児島大学) | 早田洋樹、宮崎裕明、新里直美、横山紀子、丸中良典 | |
| Quercetin diminishes the cAMP-stimulated Cl- secretion by blocking Na+, K+ATPase in epithelial cells | 共著 | 2014年3月 | 第91回に本生理学会 (於:鹿児島 鹿児島大学) | Sun Hongxin,NIISATO N, Marunaka Y. | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 平成 8年 4月 | 日本分子生物学会会員（現在に至る） |
| 平成13年 4月 | 日本生理学会会員（現在に至る） |
| 平成13年 4月 | 日本生化学会会員（現在に至る） |
| 平成14年 5月 | 日本腎臓学会会員（現在に至る） |
| 平成18年 4月 | 日本生理学会評議員（現在に至る） |
| 平成21年 4月 | 日本膜学会（現在に至る） |
| 平成22年 4月 | 日本癌学会（現在に至る） |
| 平成26年 8月 | 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員および国際事業委員会書面審査員（現在に至る） |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　平川　和文 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ウエルネスの価値　－身体活動の有効性－（講演） | 平成23年4月 | 2011年度大阪YMCAウエルネス事業研修会　於：大阪南YMCA |
| 選手のコンディショニングづくりについて（シンポジウム　座長） | 平成24年6月 | 兵庫県体育協会平成24年度第1回「プロジェクト・1」会議並びにアンチ・ドーピング研修会　於：兵庫県県民会館 |
| 体験活動の意義と学習指導要領における位置づけについて（講演） | 平成25・26年8月 | 平成25年度教員免許状更新講習会　於：国立淡路青年の家 |
| 平成27年度兵庫体育スポーツ科学学会シンポジウム<br>テーマ：「ジュニアアスリートの育成を考える～タレント発掘育成事業からの情報発信～」<br>基調講演：「ひょうごジュニアスポーツアカデミーについて～発足から7年間を振り返る～」演者：平川和文 | 平成27年12月 | 7年間ひょうごのジュニアスポーツタレント発掘・育成プログラムを実施してきた内容・成果・課題について報告した。 |
| 子どもの身体活動能力の現状と運動プログラムの考え方　（講演） | 2016年12月4日 | 2016年度　日本キャンプ協会BUC対策事業　野外活動指導者のためのリスクマネジメントセミナー in 関西<br>時代と共に多様化する子どものリスクに備える　第2弾子：どもの身体活動能力の現状と対応 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 平成23～30年度ひょうごジュニアスポーツアカデミー報告書（執筆・監修） | 平成23～30年3月 | 平成21年度より実施されたジュニアアスリートのタレント発掘・育成事業の活動内容と体力・運動能力測定結果報告、および運動プログラムをCDを作成し、毎年報告書としてまとめた。 |
| 平成27年度あかしっ子体力向上指導者研修会<br>「これからの体力・運動能力向上の指導のあり方」（講演） | 2016年1月26日 | 全国および兵庫の子どもの体力の現状と課題およびひょうごジュニアスポーツアカデミー生の体力結果から、子どもの運動に対する見方・考え方を講演した。 |
| 第30回に日本体力医学会近畿地方会シンポジウム<br>テーマ：「体内時計からみた体力医学」 座長：平川和文 | 平成28年2月 | 今注目を浴びている体内時計が運動環境に及ぼす影響について、座長として、過去のレビューをするとともに、シンポジウムを進行した。 |
| シニアのアクティブライフスタイルの実現（講演） | 平成25・26・27・28・29・30年5・9月 | 兵庫県生きがい創造協会阪神シニアカレッジ　於：阪神シニアカレッジ西宮学習室 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| スポーツタレント発掘・育成におけるジュニア選手の疾走能力、敏捷性能力、跳躍能力の縦断的研究 | 共著 | アクセプト | 体育学研究 | 矢野琢也、鵜木秀夫、賀屋光晴、長野崇、村田和隆、平川和文 | 全般担当 |
| 児童・生徒期におけるスポーツ活動が高校3年生時の体格・体力に及ぼす影響 | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学紀要，4巻，1-7 | 平川　和文、高野　圭 | 全般担当 |
| 1分間の高強度運動反復時のエネルギー代謝の検討 | 共著 | 平成30年3月 | 京都学園大学紀要，3巻，1-6 | 高島　直之、平川　和文 | 全般担当 |
| 児童の疾走能力と敏捷性能力に関する縦断的研究：スポーツタレント発掘事業におけるジュニア選手を対象として | 共著 | 平成29年12月 | 体育学研究　第62巻第2号，455-464 | 谷所　慶、鵜木秀夫、矢野琢也、賀屋光晴、長野　崇、平川和文 | 全般担当 |
| Total energy expenditure of 10- to 12-year-old Japanese children measured using doubly labeled water metopd | 共著 | 平成29年 | Nutrition and Metabolism, 14, 70-, 2017 | Keisuke Komure, Satoshi Nakae, Kazufumi Hirakawa, Naoyuki Ebine, Kazuhiro Suzuki, Haruo Ozawa, Yosuke Yamada, Misaka Kimura, and Koji Ishii | 全般担当 |
| Lower trunk muscle activity-induced alignment and cop position during single-leg standing | 共著 | 平成29年 | J.Physi. Ther. Sci., 29, 1057-1061, 2017 | Tetuya Nakao, Kenichi Masuda, Shigeyuki Kanai, Junzo Tsujita, Kazufumi Hirakawa, and shuichi Okada | 全般担当 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 入浴・保温による身体加温が運動パフォーマンスに及ぼす影響　－（第一報）持久パフォーマンスおよび翌日の疲労に及ぼす影響－ | 共著 | 平成29年 | トレーニング科学, VOL. 29 (No.1), 9-15 | 関口　泰樹, 小野　太寛, 平川　和文 | 全般担当 |
| 入浴・保温による身体加温が運動パフォーマンスに及ぼす影響　－（第二報）間欠運動パフォーマンスに及ぼす影響－ | 共著 | 平成29年 | トレーニング科学, VOL. 29 (No.1), 17-22 | 関口　泰樹, 小野　太寛, 平川　和文 | 全般担当 |
| 兵庫県スポーツタレント発掘・育成事業の選抜方法について　－相対的年齢効果の視点から－ | 共著 | 平成29年 | 陸上競技研究紀要, 第13巻, 37-42 | 鵜木秀夫, 平川和文, 谷所　慶, 矢野琢也, 賀屋光晴, 長野　崇, 村田和隆, 高田義弘 | 全般担当 |
| テイクバックでの下部体幹筋群収縮様式がバッティング時のヘッドスピードに及ぼす影響 | 共著 | 平成28年9月 | トレーニング科学、 Voi. 4, 141-149 | 中尾哲也、増田研一、金井成行、辻田順三、山下陽一郎、平川和文、岡田修一 | 全般担当 |
| 3軸加速度分析からみたバスケットボールにおける連続サイドステップの特徴 | 共著 | 平成28年6月 | 体育・スポーツ科学　第22号 pp.11-19・ | 小野太寛、前田正登、平川和文 | 全般担当 |
| 音楽を用いたグル―@鵜・エクササイズがシニア世代のコミュニケーション・ネットワークに及ぼす影響 | 共著 | 平成28年6月 | 大阪ガスグループ福祉財団研究報告書　第29号　pp.33-38 | 岡田修一、増本康平、原田和弘、近藤徳彦、長ヶ原誠、片桐恵子、平川和文 | 全般担当 |
| 1分間の高強度激運動による疲労からの運動パフォーマンスおよび生理学的パラメーターの回復 | 共著 | 平成28年4月 | 京都学園大学健康医療学部紀要、第1号、39-45 | 高島　直之、平川　和文 | 全般担当 |
| 体力・運動能力向上の促進　－体育・スポーツ活動の楽しさを味わわせる取組－ | 単著 | 平成27年10月 | 兵庫教育、No.776, pp.4-7, | | |
| 下肢体幹筋群収縮様式が運動機能に及ぼす影響 | 共著 | 平成27年8月 | 日本生理人類学会誌、Vo.20, No.3, pp. 127-133 | 中尾哲也、辻田順三、山下陽一郎、増田研一、金井成行、平川和文 | 全般担当 |
| ハイパワー持続能力向上のためのフィールド用間欠運動トレーニングの試み　－ラグビーの競技特性から－ | 単著 | 平成27年3月 | 身体行動研究第4号　pp.19～25 | | |
| 10秒および20秒間欠運動の運動生理学的特徴とトレーニング効果 | 単著 | 平成26年3月 | 身体行動研究第3号　pp.23～30 | | |
| 小児の日常生活中におけるエネルギー消費量と体格・体力との連関-二重標識水法および加速度計法を用いた検討 | 共著 | 平成25年10月 | 体力科学　第62巻　第5号 pp.391-397 | 中江　悟司、山田　陽介、木村　みさか、鈴木　和弘、小澤　治夫、平川　和文、石井　好二郎 | 全般担当 |
| 子どもの各種身体活動従事時間と身体活動レベルとの関係 | 共著 | 平成25年10月 | 体力科学　第62巻　第5号 pp.353-360 | 大島　秀武、中江　悟司、山田　陽介、木村　みさか、小澤　治夫、鈴木　和弘、平川　和文、石井　好二郎 | 全般担当 |
| 体力特性と間欠的運動時パフォーマンスおよびエネルギー動態の関係 | 単著 | 平成24年3月 | 身体行動研究第1号　pp.17～22 | | 全般担当 |
| 球技選手を対象としたフィールド用間欠的運動テストの有用性 | 共著 | 平成23年6月 | 体育・スポーツ科学　第20号 pp.9-14 | 谷所　慶、伊藤　和一、平川　和文 | 全般担当 |
| その他（学会発表） | | | | | |
| Correlation between physical fitness and age for junior athletes (2) | | 平成30年9月 | 第73回日本体力医学会大会 | 賀屋　光晴、平川和文、他　4名 | 全般担当 |
| 月齢から見たTIDプログラムに参加している10-12歳のジュニアアスリートの体力・運動能力の発達 | | 平成29年9月 | 第72回日本体力医学会大会 | 矢野　琢也、平川和文、他　4名 | 全般担当 |
| ジュニアアスリートの体力と成長（月齢）との関係 | | 平成29年9月 | 第72回日本体力医学会大会 | 賀屋　光晴、平川和文、他　4名 | 全般担当 |
| スポーツタレント発掘・育成事業の選考方法に関する研究 | | 平成28年9月 | 第71回日本体力医学会大会 | 鵜木秀夫、平川和文、他　6名 | 全般担当 |
| 小児の身体活動レベルと身体活動パターンの県連 | | 平成28年9月 | 第71回日本体力医学会大会 | 香村恵介、平川和文、他　7名 | 全般担当 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表）続き | | | | | |
| ジュニアのタレント発掘・育成プログラムと反応時間に関する研究（3） | | 平成28年9月 | 第71回日本体力医学会大会 | 賀屋　光晴、平川和文、他　3名 | 全般担当 |
| チェアエクササイズによる姿勢改善・運動機能向上をねらった運動プログラムの検討 | | 平成27年9月 | 第70回日本体力医学会大会 | 竹尾　吉枝、平川　和文、他 | 全般担当 |
| 下部体幹筋群収縮様式が体幹筋力および大臀筋活動に及ぼす影響 | | 平成27年9月 | 第70回日本体力医学会大会 | 中尾　哲也、平川　和文、他 | 全般担当 |
| ジュニアのタレント発掘・育成プログラムと反応時間に関する研究 | | 平成27年9月 | 第70回日本体力医学会大会 | 賀屋　光晴、平川　和文、他 | 全般担当 |
| 週1回5週連続のSAQを主とした運動プログラムがジュニアアスリートに与える影響について | | 平成27年6月 | 第26回兵庫体育・スポーツ科学学会 | 矢野琢也、賀屋光晴、長野崇、鵜木秀夫、平川和文 | 全般担当 |
| ひょうごジュニアスポーツアカデミーの選考方法に関する研究　－相対的年齢効果の視点から－ | | 平成27年6月 | 第26回兵庫体育・スポーツ科学学会 | 鵜木秀夫、谷所慶、高田義弘、岡田修一、桂　豊、平川和文 | 全般担当 |
| HJSAアカデミー生選考会体力測定項目の妥当性に関する検討 | | 平成27年6月 | 第26回兵庫体育・スポーツ科学学会 | 平川和文、矢野琢也、賀屋光晴、長野崇、鵜木秀夫、谷所慶 | 全般担当 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本体力医学会　（評議員） | |
| 日本体育学会　（正会員） | 2019年9月の総会にて名誉会員に推挙される。 |
| 日本発育発達学会　（正会員） | |
| 日本トレーニング科学会　（正会員） | |
| 日本臨床スポーツ医学会　（正会員） | |
| 兵庫県スポーツ推進審議会　委員 | |
| 兵庫県教育委員会　体力アップ推進専門家会議　委員長 | |
| 神戸市スポーツ教育協会　理事 | 神戸市スポーツ協会に名称変更 |
| ひょごジュニアスポーツアカデミー実行委員会　委員長 | 2019年4月より委員長から顧問になる |
| 学校法人大阪YMCA 理事 | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

体力トレーニング、 測定・評価、 運動処方　に関して

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　教授 | 氏名　三宅　基子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ・PBL型授業による教育実践 | 2017年4月～ | 「健康運動レクリエーション論」の授業において，地域課題の解決に繋がる公益性のあるレクリエーション事業企画を行うPBL型授業を行っている。1グループ4名程度でレクリエーション事業企画案を検討し，プレゼン発表の内容，方法についてもグループで検討する。市町村行政や企業担当者へのプレゼンテーションを想定してプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの内容や発表方法をクラス全体による相互評価として行い，プレゼンを聞く視点も身につけていく。 |
| ・実技指導演習による体験型教育実践 | 2017年4月～ | 「健康運動レクリエーション実習」では，複数種目のレクリエーションスポーツを体験後，レクリエーションスポーツの指導法およびレクリエーションプログラムの企画を各グループで行う。指導の後はクラスメンバーが相互にコメントし合いふりかえりを行う。また「ゴール型～バスケットボール」においても，バスケットボールを指導する対象，教室を自ら設定し，60分の指導を行う。ふりかえりでは，プログラムの運営や人前に立って指導することの難しさを実感するとともに，コミュニケーション能力の向上に有用である。 |
| ・実技授業の準備・体操指導による指導体験 | 2015年4月～ | 健康スポーツ学科1年次開講の「体つくり運動」では，1グループ4～5名の班にわけ，各班が授業で使用する用具の準備，挨拶・出欠，ラジオ体操を担当する。授業日前日までに各班には授業用具の連絡を行うことで，メールの確認，役割の責任を持つよう指導している。さらに授業内では各班の役割遂行をクラス内でフィードバックを行う。将来，指導者を目指す学生自身が前に立って指導する立場になることを自覚し，指導者としての態度，話し方，授業準備で何をすべきを体験的に学んでいく。 |
| 2　作成した教科書，教材，参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表，講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 近畿ブロックレクリエーション指導者養成課程認定校研修会の開催 | 2016年11月 | 本学太秦キャンパスにおいて，近畿圏のレクリエーション指導者養成認定校を対象とした研修会を実施した。本学学生がスタッフとして受付，運営スタッフとして活動する機会とした。 |
| レクリエーション指導者養成課程認定校全国研究集会の開催 | 2017年6月 | 本学太秦キャンパスにおいて，全国レクリエーション指導者養成認定校を対象とした研修会を実施した。参加者は109名であった。本学三宅ゼミ学生がスタッフとして受付，運営スタッフとして活動する機会とした。さらに健康運動レクリエーション論の授業の一環としてシンポジウムに参加し，レクリエーション支援者として求められるホスピタリティについて学んだ。 |
| 関西地区FD連絡協議会主催研修会参加 | 2017年4月 | 大阪大学において実施された研修会では，専門基礎教育科目や専門教育科目に，アクティブラーニングの方法を取り入れる方法に関する「アクティブラーニング型授業をデザインする」および初年次学生へのライティング指導に関する「初年次学生にアカデミックライティングを指導する」をテーマに参加者でディスカッションし，今年度の授業展開に大いに役立った。 |
| 日本フィットネス協会公認GFI(グループエクササイズフィットネスインストラクター）資格認定試験および特別講座開催 | 2018年2月 | 主として健康フィットネス実習受講修了者を中心に，日本フィットネス協会GFI資格取得のための実技試験および受験対策講座を実施した。実技試験合格に向けて，学生への試験対策特別補講を行った。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| シニア健康プロジェクトⅡ<br>フレイル予防で支える元気な人生 | 共著 | 2019年4月 | YMCA総合研究所 | 山崎一男，三宅基子，山口宰,泉野裕美，繁延千春，重信直人 | 本人担当部分：「第2章」(p.19～p.30)。 |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 大学生における人間関係形成プログラムとしてのフォトロゲイニングの有効性:社会人基礎力に着目して | 共著 | 2019年3月 | 日本レクリエーション協会 自由時間研究　第44号 | 三宅基子, 中井聖, 田中真紀, 吉中康子 | 73-79 |
| 地域高齢者における社会的活動と友人との交流頻度に関する研究 | 共著 | 2019年3月 | 京都学園大学総合研究所所報 | 三宅基子, 木村みさか | 48-59 |
| 写真撮影を用いたナビゲーションスポーツのスポーツ・レクリエーションのアクティビティとしての実施可能性の検証 | 共著 | 2018年3月 | 日本レクリエーション協会 自由時間研究　第43号 | 中井聖, 三宅基子, 田中真紀, 吉中康子 | 38-43 |
| 運動・スポーツによる健康づくり支援のあり方～ヘルスプロモーションの視点から～ | 単著 | 2018年3月 | マッセ大阪研究紀要 第21号 | 三宅基子 | 45-59 |
| Frequency of Fruit and Vegetable Consumption and the Oral Health-Related Quality of Life among Japanese Elderly: A Cross-Sectional Study from the Kyoto-Kameoka Study | 共著 | 2017年12月 | Nutrients 9 (2017) | Miwa Yamaguchi, Tsukasa Yoshida, Yosuke Yamada, Yuya Watanabe, Hinako Nanri, Keiichi Yokoyama, Heiwa Date, Motoko Miyake, Aya Itoi, Emi Yamagata, Taeko Masumoto, Yasuko Okayama,Yasuko Yoshinaka, Misaka Kimura and Kyoto-Kameoka study group | 1362-1375 |
| Prevalence of Frailty Assessed by Fried and Kihon Checklist Indexes in a Prospective Cohort Study: Design and Demographics of the Kyoto-Kameoka Longitudinal Study | 共著 | 2017年5月 | Journal of the American Medical Directors Association S1525-8610(17) | Hinako Nanri, Yosuke Yamada, Aya Itoi, Emi Yamagata, Yuya Watanabe,Tsukasa Yoshida, Motoko Miyake, Heiwa Date, Kazuko Ishikawa-Takata, Mitsuyoshi Yoshida, Takeshi Kikutani and Misaka Kimura | 30131-7 |
| Sociodemographic and physical predictors of non-participation in community based physical checkup among older neighbors: a case-control study from the Kyoto-Kameoka longitudinal study, Japan | 共著 | 2017年3月 | BMC Public Health 18 (2018) | Miwa Yamaguchi, Tsukasa Yoshida, Yosuke Yamada, Yuya Watanabe, Hinako Nanri, Keiichi Yokoyama, Heiwa Date, Motoko Miyake, Aya Itoi, Emi Yamagata, Taeko Masumoto, Yasuko Okayama,Yasuko oshinaka, Misaka Kimura and Kyoto-Kameoka study group | 568-582 |
| 地域自立高齢者1,379人におけるフレイル判定の方法による該当率の差異 ―亀岡スタディ― | 共著 | 2017年2月 | 健康支援 日本健康支援学会 第19巻第1号 | 吉田 司, 木村 みさか, 渡邊 裕也, 三宅 基子, 横山 慶一, 吉中 康子, 海老根 直之, 菊谷 武, 吉田 光由, 高田 和子, 山田 実, 山田 陽介, 来田 宣幸, 野村 照夫 | p.9～18 |
| The Extracellular to Intracellular Water Ratio in Upper Legs is Negatively Associated With Skeletal Muscle Strength and Gait Speed in Older People | 共著 | 2016年7月 | Journals of Gerontology: Biological Sciences.　2017, Vol 72, No3 | Yosuke Yamada, Tsukasa Yoshida, Keiichi Yokoyama, Yuya Watanabe, Motoko Miyake, Emi Yamagata, Minoru Yamada, Misaka Kimura, and Kyoto-kameoka Study | 293-298 |
| レジャー・レクリエーション分野におけるソーシャル・キャピタル研究の動向 | 単著 | 2016年3月 | Leisure&Recreation　第41号 | 三宅基子 | p.29～34 |
| 高齢者における散歩行動に影響を及ぼすソーシャル・キャピタル要因に関する研究（査読付） | 共著 | 2015年9月 | 日本レジャーレクリエーション学会　レジャー・レクリエーション研究　第76号 | 三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか | p.5～13 |
| 地域在住自立高齢者における転倒リスクの関連要因とその性差－亀岡スタディー（査読付） | 共著 | 2015年8月 | 日本公衆衛生学会 日本公衆衛生雑誌 第62巻第8号 | 桝本妙子, 山田陽介, 木村みさか, 渡邊裕也, 三宅基子, 伊達平和, 横山慶一, 吉中康子, 山田実, 中谷友樹, 岡山寧子 小松光代, 山縣恵美, 藤原佳典 | p.390～401 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (口頭発表) | | | | | |
| 写真撮影を用いたナビゲーションスポーツに関する質的評価ーテキストマイニング手法を用いた自由記述の検討ー | | 2018年8月 | 第69回日本体育学会 | 三宅基子, 中井聖, 田中真紀, 吉中康子 | |
| 写真撮影を用いたナビゲーションスポーツの大学生における人間関係形成プログラムとしての可能性と今後の展開 | | 2018年6月 | 日本レクリエーション協会課程認定校全国研究集会 | 三宅基子, 中井聖, 田中真紀, 吉中康子 | |
| フォトロゲイニングのスポーツ・レクリエーションのアクティビティとしての実施可能性 | | 2017年12月 | 日本レジャー・レクリエーション学会第47回学会大会 | 中井聖, 三宅基子, 田中真紀 | |
| (ポスター発表) | | | | | |
| フォトロゲイニング®の特性に関する質的研究 ～大学生の自由記述感想の計量テキスト分析から～ | | 2018年12月 | 日本レジャー・レクリエーション学会第47回学会大会 | 中井聖, 三宅基子, 田中真紀 | |
| The Relationship between Frequency of Social Interaction and Emotional Well-being Among Older Adults | | 2017年7月 | The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics :the International Association of Gerontology and Geriatrics | Motoko Miyake, Yuya Watanabe, Misaka Kimura and Kameoka Study Group | |
| 地域高齢者における社会的交流頻度と精神的健康との関連について | | 2016年12月 | 日本レジャー・レクリエーション学会第46回大会 | 三宅基子,木村みさか, 亀岡スタディグループ | |
| 地域高齢者における他者との交流頻度と社会的活動参加との関連ー亀岡スタディからー | | 2016年10月 | 日本公衆衛生学会 | 三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか, 亀岡スタディグループ | |
| 高齢者における交流頻度とその関連要因. | | 2015年12月 | 日本レジャー・レクリエーション学会第45回大会 | 三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか | |
| 地域在住自立高齢者の転倒リスクと体力との関連 | | 2015年11月 | 日本公衆衛生学会 | 桝本妙子, 山田陽介, 三宅基子, 小松光代, 山縣恵美, 岡山寧子, 藤原佳典, 木村みさか | |
| 地域高齢者の散歩行動に影響を及ぼすソーシャル・キャピタル要因に関する研究. | | 2015年11月 | 日本公衆衛生学会 | 三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか | |
| (講演) | | | | | |
| フレイルに関するシンポジウム | | 2018年9月 | 朝日厚生文化事業団 | | |
| 50周年記念講演会 | | 2018年9月 | 京都学園大学 | | |
| 新柳居公開講座 | | 2018年1月 | 京都学園大学京町家キャンパス | | |
| 介護予防指導者養成講座講演・指導 | | 2017年3月<br>2016年2月 | 大阪YMCA | | |
| 第12回亀岡市民講演会<br>公益財団法人生涯学習かめおか財団主催 | | 2016年2月 | ガレリアかめおか | | |
| 介護予防教室指導 | | 2015年4月～9月 | 八尾市地域包括センター | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 昭和60年 4月 | 日本体育学会会員(現在に至る) |
| 平成10年 7月 | 国際レジャー・レクリエーション学会会員(生涯会員) |
| 平成21年 7月 | 日本公衆衛生学会会員(現在に至る) |
| 平成22年 4月 | 日本健康体力栄養学会会員(現在に至る) |
| 平成24年 5月 | 日本運動疫学会会員(現在に至る) |
| 平成24年 4月 | 日本体力医学会会員(現在に至る) |
| 平成25年 5月 | アメリカ老年学会会員(現在に至る) |
| 平成25年12月 | 日本老年医学会会員(現在に至る) |
| 平成26年4月～ | 亀岡市民生委員推薦委員 |
| 平成27年12月 | 日本老年社会科学会会員(現在に至る) |
| 平成28年6月～ | 亀岡市地域福祉活動計画策定委員 |
| 平成29年4月～ | 京都府レクリエーション協会理事 |
| 平成31年4月～ | 文部科学省教員更新研修講師 |
| 平成31年4月～ | 亀岡市総合計画審議会委員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　井口　順太 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 『健康スポーツトレーニング論』『健康フィットネス論』『体力測定評価論』にて講義前に毎回小テストを実施 | 2015年4月-2019年3月 | 左記の講義にてより講義内容の理解を深めるため、前回までの範囲を講義の開始時に小テストを行い、知識の確認を行った. |
| 『実践プロジェクトAB』にて将来の進路をより明確化するため学外し施設を複数箇所訪問 | 2016年4月-現在 | 将来の学生の就職や必要な資格をより具体的にさせるため、現場訪問を実施した。訪問先は、フィットネスクラブである『京都テルサ』や医療フィットネスクラブである『丸太町リハビリテーションクリニック』、ピラティスの施設である『ピラティススタイル』へ訪問した。これらの訪問を行うことで、学生たちの将来像をより明確にするためのきっかけ作りを行った。 |
| 『ストレングス&コンディショニング実習A』にて理論と実践の差を埋めるため現場実習を実施 | 2017年4月-現在 | コンディショニングトレーナーを目指す学生対象向けの実践的科目である左記の実習科目にて、理論知と現場知の融合のため、本学ストレングス＆コンディショニングコーチの協力を得て、実習を実施した。またその際は、教科書に記載されている事項と実際の現場で行われているものの差を感じてもらうため、チェックシートを毎回提出してもらった。 |
| 『専門ゼミC』におけるスポーツ現場訪問 | 2017年4月-現在 | 主にスポーツ現場の就職を希望する学生を対象に千葉流山市にあるNSCA Human Performance Center, ならびに東京都北区にあるJISS(国立科学トレーニングセンター)を訪問。現地では、専属トレーナーによるトレーニング指導を受けたり、実際のアスリートに混じって食事をとるなど現場ならではの貴重な体験をした。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『健康スポーツトレーニング実習』の授業用資料 | 2015年9月 -2017年1月 | 『健康スポーツトレーニング実習』にて身体組成や有酸素・無酸素能力の測定方法をより理解するために資料を作成した。学生達は授業中実際機材を使用し、主に自分達の測定で得た値を資料に基づく推定式に代入し、記録を算出した。 |
| スイメックスによるアクアセラピープロトコル(唯学書房) | 2015年3月 | スイメックスによる水治療をまとめた本であり、本書の主に『下肢;プロトコル』の翻訳を担当した. |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| FD研修会(6/21)にてベストティーチャー賞に関する発表 | 2017年6月 | 普段心がけている授業の進行方法などを他の教員に説明した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 京都学園大学『ベストティーチャー賞』受賞 | 2017年3月 | 学生の授業評価をもとに選考される賞であり、今回は健康医療学部を代表して左記の賞を受賞した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 女子バスケットボールにおける障害発生状況とそのリスク要因に関する研究 ~女子アスリートの特徴に着目して~ | 共著 | 平成31年3月 | 京都学園大学総合研究所叢書19 | 井口順太・佐藤亜紀子 | 5-13p |
| スイメックスによるアクアセラピープロトコル | 共著 | 平成27年3月 | (唯学書房) | ◎葛原憲治、井口順太、吉部紳助、石原慎二 | 59-121p |
| 論文 | | | | | |
| 中学生バスケットボール選手における部活動とスポーツ傷害の実態 ～１年間の前向き研究～(査読付) | 共著 | 令和元年6月 | 『Strength& Conditioning Journal Japan」』 Vol.26, No.6 | ◎葛原憲治、柴田真志、井口順太 | 12-18p |
| Seasonal changes in anthropometric, physiological, nutritional, and performance factors in collegiate rowers.(査読付) | 共著 | 平成30年3月 | 「Journal of Strength & Conditioning Research」 doi: 10.1519/JSC.0000000000002521. [Epub ahead of print] | ◎ Junta Iguchi, Kenji Kuzuhara, Kanako Katai, Tatsuya Hojo, Yoshihiko Fujisawa, Misaka Kimura, Yasuyoshi Yanagida, Yosuke Yamada | In press |
| 女子バスケットボールにおけるパフォーマンステスト外傷調査について | 共著 | 平成30年2月 | 京都学園大学総合研究所所報 第19号 | ◎井口順太、佐藤亜紀子 | p.67～p.72 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| Functional Movements in Japanese Mini-Basketball Players（査読付） | 共著 | 平成29年6月 | 「Journal of Human Kinetics」 Mar 23;61 | Kenji Kuzuhara, Masashi Shibata, ◎Junta Iguchi, Ryo Uchida | p.53-p.62 |
| Risk Factors for Injury among Japanese Collegiate Players of American Football Based on Performance Test Results（査読付） | 共著 | 平成28年3月 | 「Journal of Strength & Conditioning Research」 Vol.30, No.12, | ◎Iguchi, Junta; Watanabe, Yuya; Kimura, Misaka; Fujisawa, Yoshihiko; Hojo, Tatsuya; Yuasa, Yasuhiro; Higashi, Shinsuke; Kuzuhara, Kenji | p.3405-p.3411 |
| 大学アメリカンフットボール選手における筋力・パワーと外傷の関連性についての考察 | 共著 | 平成26年3月 | 「京都学園大学経営学部論集」 第23巻 第2号 | ◎井口順太、藤澤義彦、吉中康子、木村みさか | p.49～p.57 |
| Injuries in a Japanese division 1 collegiate American football team : A three-season prospective study（査読付） | 共著 | 平成25年12月 | 「Journal of Athletic Traninig」 Vol.48, No.6 | ◎Junta Iguchi, Yosuke Yamada, Misaka Kimura,Yoshihiko Fujisawa,Tatsuya Hojo, Kenji Kuzuhara, Noriaki Ichihashi. | p.818 ～p.825 |
| The effect of sex and fatigue on lower limb kinematics, kinetics and muscle activity during unanticipated side-step cutting （査読付） | 共著 | 平成25年12月 | 「Knee Surgery, Sports Traumatology, Arthroscopy」 Vol.22, No.1 | ◎Junta Iguchi, Hiroshige Tateuchi, Masashi Taniguchi, Noriaki Ichihashi | p.41～p.48 |
| bjリーグにおけるプロバスケットボールチームの傷害分析 ～3年間の前向き研究～ （査読付） | 共著 | 平成25年1月 | 「日本臨床スポーツ医学会誌」 第21巻第1号 | ◎葛原憲治、井口順太、井上鎮子、間瀬泰克 | p.187～p.193 |
| Hop Test as A Predictor for Lower Limb Injuries (Hopテストによる下肢の外傷を予見する試みについて)（査読付） | 共著 | 平成24年3月 | 同志社大学 「同志社スポーツ健康科学」 第4巻 | ◎Junta Iguchi,Tatsuya Hojo, Yoshihiko | p.5～p.9 |
| チアリーダーに生じた第一肋骨疲労骨折の1例 （査読付） | 共著 | 平成24年3月 | 同志社大学 「同志社スポーツ健康科学」 第4巻 | ◎北條達也、井口順太、高橋仁美、小川博之 | p.51～p.55 |
| 大学アメリカンフットボールチームの下肢傷害分析 ～2年間の前向き研究～ （査読付） | 共著 | 平成24年2月 | 「体力科学」第61巻1号 （資料論文） | ◎葛原 憲治、井口順太、柴田 真志 | p.139～p.145 |
| Physical and performance characteristics of Japanese division 1 collegiate football players（査読付） | 共著 | 平成23年12月 | 「Journal of Strength and Conditioning Research」 Vol.25, No.12 | ◎Junta Iguchi, Yosuke Yamada, Soichi Ando, Yoshihiko Fujisawa, Tatsuya Hojo, Koji Nishimura, Kenji Kuzuhara, Yasuhiro Yuasa, Noriaki Ichihashi | p.3368～p.3377 |
| エリートアイスホッケー選手における身体組成の年間変化について（査読付） | 共著 | 平成23年6月 | Strength& Conditioning Journal Japan」 Vol.18, No.5（資料論文） | ◎葛原憲治、井口順太、島本英樹 | p.2～p.7 |
| A Study of the Ability of Single Leg Balance Test in Repeated Manner to Predict Ankle or Knee Injury (閉眼片脚立ちテストで足関節及び膝関節周囲の外傷が予見できるか？)（査読付） | 共著 | 平成23年3月 | 同志社大学 「同志社スポーツ健康科学」 第3号 | ◎Junta Iguchi, Yoshihiko Fujisawa, Tatsuya Hojo. | p.22～p.27 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (ポスター発表)<br>NSCAジャパンS&Cカンファレンス2018『中学バスケットボール選手における練習時の活動強度」 | 共同 | 平成 31年1月 | NSCAジャパンS&Cカンファレンス2018(於:日本科学未来館 ) | | |
| (講演)<br>「なぜ筋力トレーニングが必要なのか？」<br>府民のスポーツに関する悩みを解消するスポーツ医事相談<筋力トレーニングに関する最新の知見> | 単独 | 平成 31年1月 | 京都府　一般社団法人京都府医師会　公益財団法人京都府体育協会(於:京都府京都市京都テルサ京都府民交流プラザ) | | |
| (口頭発表)<br>『中学生バスケットボール選手は女子の方が男子より傷害発生率が高い～1年間の前向き研究～』 | 共同 | 平成30年10月 | 東海体育学会第66回大会<br>(於:愛知東邦大学キャンパス) | | |
| (講演)<br>『スポーツと遺伝子について』京都学園大学創立50周年記念講演会(運動と栄養から健康寿命を考える,第2部座談会) | 単独 | 平成30年9月 | 京都学園大学(現　京都先端科学大学)太秦キャンパス | | |
| (ポスター発表)<br>European College of Sports Science (ECSS) Dablin 2018『Prevalence and Characteristics of Osteochondritis Dissecans of the Humeral Capitellum among Young Baseball Players」 | 共同 | 平成30年7月 | European College of Sports Science (ECSS)<br>(於: Dablin, Ireland) | | |
| (ポスター発表)<br>European College of Sports Science (ECSS) Dablin 2018『Physical and performance characteristics of Japanese division Ⅱ female collegiate basketball players」 | 共同 | 平成30年7月 | European College of Sports Science (ECSS)<br>(於: Dablin, Ireland) | | |
| (口頭発表)<br>中学生バスケットボール 選手における傷害発生率 | 共同 | 平成 29年12月 | NSCAジャパンS&Cカンファレンス2017 (於:神戸ファッションマート ) | | |
| (口頭発表)<br>Functional Movements in Japanese Mini-Basketball Players | 共同 | 平成 29年1月 | 第5回NSCA国際カンファレンス(於:幕張メッセ国際会議場 ) | | |
| (講演)<br>「スポーツ活動中の外傷」 | 単独 | 平成 28年12月 | 日本セーティープロモーション学会<br>(於:京都学園大学太秦キャンパス ) | | |
| (ポスター発表)<br>European College of Sports Science (ECSS) Viena 2016「The comparison of bony structures between Japanese and French population according to the physical activity level.」 | 共同 | 平成 28年7月 | European College of Sports Science (ECSS)<br>(於: Viena, Austria) | | |
| (口頭発表)<br>「スポーツ選手の骨強度」 | 共同 | 平成 28年5月 | 日本超音波医学会第89回学術集会<br>(於: 国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都 ) | | |
| (講演)<br>「運動とは薬である- 健康になるための運動とは？-」 | 単独 | 平成28年2月 | 京都学園大学・公益法人生涯学習かめおか財団　協働事業<br>(於:亀岡市ガレリアかめおか) | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| (ポスター発表)<br>European College of Sports Science (ECSS) Malmo 2015「The analysis for the relationship between bone formation and physical and performance characteristics of Japanese collegiate American football players.」 | 共同 | 平成27年6月 | European College of Sports Science (ECSS)<br>（於: Malmo, Sweden） | | |
| (ポスター発表)<br>European College of Sports Science (ECSS) Malmo 2015「Prevalence and characteristics of osteochondritis dissecans of the elbow among adolescent baseball players.」 | 共同 | 平成27年6月 | European College of Sports Science (ECSS)<br>（於: Malmo, Sweden） | | |
| (シンポジウム)<br>第16回ジャパン・アスレティックトレーナー機構(JATO)アスレティックトレーニングシンポジウム「日本の大学アメリカンフットボール選手のパフォーマンス能力と外傷発生状況についての研究」 | 単独 | 平成27年2月28日 | ジャパン・アスレティックトレーナー機構(JATO)<br>（於：龍谷大学深草キャンパス） | | |
| (ポスター発表)<br>NSCAジャパンS&Cカンファレンス2014「膝関節屈曲のレジスタンストレーニングがハムストリングスの柔軟性に与える影響」<br>（ポスター発表優秀賞受賞） | 共同 | 平成26年12月 | NSCAジャパン<br>（於: 国士舘大学） | | |
| (講演)<br>「スポーツ現場における傷害対応」（実習部分を担当） | 共同 | 平成26年9月 | 紀南医師会<br>（於：三重県立紀南高等学校　体育館） | | |
| (講演)<br>府民のスポーツに関する悩みを解消するスポーツ医事相談（講義編）＜傷害からのスムーズな現場復帰のために＞「傷害からのスムーズな現場復帰のために　～アスレチックトレーナーからの提言～」 | 単独 | 平成25年12月 | 京都府　一般社団法人京都府医師会　公益財団法人京都府体育協会<br>（於：京都府京都市京都テルサ京都府民交流プラザ） | | |
| (講演)<br>京都市立高等学校保健研究会「高校生におけるスポーツ外傷の予防と効果的なトレーニングの方法」 | 単独 | 平成24年10月 | 京都市立高等学校保健研究会主催<br>（於：京都府京都市京都市立西京高校） | | |
| (講演)<br>京都市教育委員会講習会「部活動中に発生するスポーツ外傷の予防と対応」 | 単独 | 平成24年8月 | 京都市教育委員会主催<br>（於：京都府京都市総合教育センター） | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2006年4月 － 現在 | ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構<br>(Japan Athletic Trainers’ Organization)会員（現在に至る） |
| 2006年4月 － 現在 | 全米アスレティックトレーナー協会(National Athletic Trainers’ Association)<br>会員、会員番号995311（現在に至る） |
| 2007年4月　－ 現在 | 日本体力医学会会員　会員番号1013491544（現在に至る） |
| 2007年4月　－ 現在 | 臨床スポーツ医学会　会員番号 5347（現在に至る） |
| 2009年10月 － 現在 | 特定非営利活動法人NSCAジャパン（日本ストレングス&コンディショニング協会）会員、会員番号809051301（現在に至 |
| 2009年4月－ 2011年3月まで | ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構（Japan Athletic Trainers’ Organization）理事 |
| 2017年10月　－ 現在 | 特定非営利活動法人NSCAジャパン（日本ストレングス&コンディショニング協会）教育・研究委員 |
| 2017年11月　－ 現在 | ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構（Japan Athletic Trainers’ Organization）教育研究委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

パフォーマンス向上やスポーツ傷害予防のためのトレーニング方法の開発・研究。またトレーニング用のサポーターやシャツ、パンツなどの開発。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　石井　泰光 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 帝京平成大学の非常勤講師として，バイオメカニクスの授業を行った． | 2016、2017、2018年度 | 帝京平成大学の現代ライフ学部（2015～2018年度）とヒューマンケア学部（2015～2017年度）において，バイオメカニクスの授業を担当した．複数の教科書および論文を参考にして，授業資料を作成した．授業中には，講義だけではなく，単元内容の計算問題を行わせることによって，学生の理解度を深めるように配慮しながら行った．資格試験の準備として適切なレベルで授業を行った． |
| 立教大学の兼任講師としてMatlabプログラミング・統計学の授業を行った． | 2018年度 | 立教大学大学院のコミュニティ福祉学部にて，スポーツ科学のデータ分析に有用なMatlabプログラミングと統計学の授業およびを行った．プログラムの理論面や考え方に関して講義を行い，実際の研究データを使いながら実習を行い，実践的能力を身につくように授業を展開した．プログラムの基礎を身につけることができた． |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 国立スポーツ科学センター　測定マニュアル（最大酸素摂取量）を作成 | 2017、2018年度 | 呼吸代謝装置が新機種に移行したタイミングで，測定方法と機器の取扱をまとめた測定マニュアルを作成した．これにより社内の測定方法を統一することができた． |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| スポーツ科学のためのMatlabプログラミング　講習会　講師 | 2018年度 | 鹿屋体育大学の大学院生および国立スポーツ科学センターの研究員を対象に，スポーツ科学のためのMatlabプログラミングに関する講習会を行った．プログラミングを習得することにより，バイオメカニクスや多変量のデータに関する分析・解析をスムーズに行うことができたと評価されている． |
| 日本体育協会公認コーチ養成講習会<br>専門科目講習会（自転車競技）体力トレーニング　講師 | 2015年度 | 日本体育協会公認コーチ養成講習会において，自転車競技におけるレジスタンストレーニングの有効性について講義を行った．この講義では最新の科学的知見と実践例を説明した．また，実習方式で，基本的なエクササイズの実技指導を行った． |
| 国立スポーツ科学センター　測定研修講師<br>（自転車エルゴメーターを用いたパワー測定） | 2016、2017、2018年度 | 新規に雇用されたスタッフと，在籍2年目以上のスタッフに対して，自転車エルゴメーターを用いたパワー測定（最大無酸素パワーテスト，ウインゲートテスト）の講師を行った．測定の原理から現場での注意点まで講習を行った． |
| 国立スポーツ科学センター　測定研修講師<br>（最大酸素摂取量） | 2018年度 | 新規に雇用されたスタッフと，在籍2年目以上のスタッフに対して，呼吸代謝測定装置を用いた最大酸素摂取量の講師を行った．測定の原理から実践方法まで講習を行った． |
| 国立スポーツ科学センター<br>地域連携事業第1回合同研修会講師<br>（自転車エルゴメーターを用いたパワー測定） | 2017、2018年度 | 地域のスポーツ医・科学センターのスタッフに対して，自転車エルゴメーターを用いたパワー測定の講師を行った．測定の原理と実践方法まで講習を行った．また，地域の現場で生じる問題点に関してもアドバイスをした． |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 鹿屋体育大学　自転車競技部<br>レジスタンストレーニングコーチ | 2015～現在 | 鹿屋体育大学自転車競技部の男子・女子選手に対して，8年間レジスタンストレーニングの指導を行っている．全日本大学対抗選手権では，男女総合優勝が2回，男子優勝が4回，女子優勝が5回に貢献することができた．また，トレーニング指導していた選手が2016年リオデジャネイロオリンピックに出場した． |
| プロサイクルロードチーム　宇都宮ブリッツェン<br>体力測定スタッフ | 2015、2016、2017、<br>2018、2019年度 | プロサイクルロードチーム宇都宮ブリッツェンの選手に対して，年4回乳酸カーブテストを実施している．測定結果に基づきトレーニング効果の評価およびトレーニング計画についてアドバイスを行っている． |
| 国立スポーツ科学センター<br>自転車競技　種目担当者 | 2016，2017，2018年度 | 自転車競技のロード競技やトラック競技を中心に，種目担当者として，医科学サポートに関する窓口を行っている．医科学サポートの年間計画の作成や，体力測定の実施およびフィードバックを行ってきた．2015年世界選手権（パリ），2016年世界選手権（ロンドン）では，試合会場における科学サポートも実施した． |

| | | |
|---|---|---|
| 国立スポーツ科学センター<br>スポーツクライミング　種目担当者 | 2017、2018年度 | 2020年東京オリンピックに開催されたスポーツクライミングの種目担当者として，医科学サポートに関する窓口を行っている．医科学サポートの年間計画の作成や，体力測定の実施およびフィードバックを行ってきた．メダル獲得の鍵となるスピードクライミングの強化に向けて，体力測定項目の再編成を行った． |
| 鹿児島県立南大隅高等学校自転車競技部<br>トレーニング指導 | 2016、2017年度 | 高校生の自転車選手に対して，ウエイトトレーニングの指導を行った． |
| トライアスロンチーム　チームケンズ　トレーニング指導 | 2017、2018年度 | リオデジャネイロオリンピック出場選手も含むトライアスロンチームに対して，ウエイトトレーニングの導入および指導を行った． |
| トレッドミル安全装置の開発<br>（有限会社エスアンドエムイーと共同） | 2017年度 | トレッドミル走行時において，選手が転倒した場合，自動的に牽引する安全装置の仕様作成を行った．牽引に必要な引き上げ距離，速度の設定，インターフェイスの設計に関わった． |
| 日本スポーツパフォーマンス学会　査読者 | 2015、2016、2017、2018、2019年度 | 日本スポーツパフォーマンス学会が発行しているスポーツパフォーマンス研究の査読を行った |
| 日本体育学会　体育学研究　査読者 | 2015、2019年度 | 日本体育学会が発行している体育学研究の投稿論文に対して査読を行った． |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Why does the Quiet Eye improve aiming accuracy? Testing a motor preparation hypothesis with brain potential | 共著 | 2018年11月 | Cognitive processing 20(1):55-64 | Mizusaki Y, Ikudome S, Ishii Y, Unenaka S, Funo T, Takeuchi T, Ogasa K, Mori S, Nakamoto H. | |
| The inhibition of motor contagion induced by action observation | 共著 | 2018年10月 | PloS one 13(10) e0205725 | Takeuchi T, Ikudome S, Unenaka S, Ishii Y, Mori S, Mann DL, Nakamoto H. | |
| ウィンドサーフィン（RS:X 級）選手における軽風域の風上への帆走能力の比較 ～国内トップレベルの男子3 名を対象に～（査読付） | 共著 | 2017年2月 | スポーツパフォーマンス研究 9巻 53-63 | 萩原正大，石井泰光 | |
| ジュニア日本記録を保持する自転車競技女子中長距離選手が日本記録に近い 競技力を獲得するまでのトレーニングの取り組み（査読付） | 共著 | 2017年1月 | スポーツパフォーマンス研究 9巻 27-52 | 上野みなみ，石井泰光，塚越さくら，黒川剛，山本正嘉 | |
| 大学から自転車競技を始めた女子中距離選手が4年間で全日本選手権オムニアムに 優勝するまでの取り組み ～短距離種目の重点強化による成功事例～（査読付） | 共著 | 2016年12月 | スポーツパフォーマンス研究 8巻 472-490 | 塚越さくら,石井泰光,上野みなみ,黒川剛,<br>山本正嘉 | |
| セーリング競技 470 級の NT 選考レースにおける中・強風域の帆走指標の特徴（査読付） | 共著 | 2016年10月 | スポーツパフォーマンス研究 8巻 411-428 | 萩原正大，石井泰光 | |
| セーリング競技におけるハイクアウトテストと体力要因との関係（査読付） | 共著 | 2016年5月 | スポーツパフォーマンス研究8巻199-215 | 石井泰光，榮樂洋光，布野泰志，萩原正大，<br>中村夏実 | |
| 高校生と大学生の自転車競技選手における下肢と体幹の筋厚が実走および固定自転車でのスプリント能力に及ぼす影響（査読付） | 共著 | 2016年5月 | 体力科学 65巻3号 327-335 | 石井泰光，黒川剛，荒木就平，山本正嘉 | |
| ウィンドサーフィン競技における模擬レース中の移動様相の特徴（査読付） | 共著 | 2015年11月 | スポーツパフォーマンス研究 7巻 320-333 | 萩原正大，石井泰光 | |
| Effect of a Single Jump Practice on Vertical Jump Performance | 共著 | 2015年6月 | Journal of Athletic Enhancement 4(3) | Yoshimoto T, Takai Y, Ishii Y, Kanehisa H, Yamamoto M | |
| Muscle activation characteristics of the front leg during baseball swings with timing correction for sudden velocity decrease（査読付） | 共著 | 2015年4月 | PLOS ONE Vol.28, no.4, e0124113 | Ohta Y, Nakamoto H, Ishii Y, Ikudome S, Takahashi K, Shima N | |
| セーリング競技レーザーラジアル級における2㎏の重り付加が風上帆走の艇速に及ぼす影響（査読付） | 共著 | 2015年3月 | 鹿屋体育大学学術研究紀要 50巻 1-8 | 榮樂洋光，石井泰光，布野泰志，中村夏実，<br>松下雅雄 | |
| 日常生活での階段昇降活動量の増加が若年成人女性の下肢の筋厚，および筋力に及ぼす影響（査読付） | 共著 | 2015年3月 | 体育測定評価研究 14巻 11-20 | 山本直史，浅井英典，石井泰光，萩裕美子 | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2004年4月～ | 日本体育学会　会員 |
| 2005年7月～ | 日本ストレングス&コンディショニング協会 |
| 2015年6月～ | 日本スポーツパフォーマンス学会 |
| 2015年7月～ | 日本体力医学会 |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| レジスタンストレーニングの導入 |
| スポーツチームのパフォーマンス改善に向けたコンサルテーション |
| 自転車のペダリング動作の解析 |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康理療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　細野　裕希 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

## Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 部活動へのコオーディネーショントレーニングの導入 | 2015年4月～2016年3月<br>2017年4月～2019年3月 | 体育会サッカー部でコオーディネーショントレーニングの導入を行った。新たな動作学習の前に、現在獲得している動作を“崩す”トレーニングを行った。コオーディネーショントレーニングでは新たな動作を作るのと同程度、既存の動作を崩すことが重要であるとされている。そのため、タイミングを見計らい、このトレーニングを練習に組み入れた。 |
| アスリートを対象としたコーチングの実践 | 2015年4月～2016年3月<br>2017年4月～2019年3月 | 立命館大学体育会各部(女子バスケットボール、女子柔道部、男子バレー部、男女フィールドホッケー部)のコオーディネーショントレーニングの指導を行った。 |
| 体育実技指導歴 | 2015年4月～2016年3月<br>2017年4月～2019年3月 | 立命館大学でスポーツ方法実習を担当。<br>担当科目:サッカー、フットサル、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球、エクササイズ、ウォーキング、アダプテッドスポーツ(ブラインドサッカー、ゴールボール、車いすバスケットボール)<br>以下に授業での実践例を記載<br>①それぞれの授業にコオーディネーショントレーニングを導入し、運動学習の効率を向上させた。<br>②授業内のリーグ戦の結果を学内のweb上に写真付きで速報。<br>③チームで練習を行う場合には、web上に練習計画、練習報告書を提出させた。また、授業内の学生が互いにその報告書を閲覧出来るようにした。<br>④学生のプレーをハイスピードカメラにより撮影し、運動の特徴を分りやすく解説した。<br>⑤各競技に関連したスキルテストを行い、学習効果を学生にフィードバックした。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

## Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| サッカーにおけるドリブルスキルの獲得に関するコオーディネーション能力について | 単著 | 2017年3月 | コーチング学研究 | | 205項～212項 |
| 学会発表 | | | | | |
| サッカーにおけるドリブル能力の変化に関係する能力の検討 | 共同 | 2015年8月 | 日本体育学会<br>第66回大会 | 細野裕希、漆原良 | |
| サッカーのドリブルに関係するコオーディネーション能力の検討 | 共同 | 2015年8月 | 日本フットボール学会<br>(JSSF)<br>12th Congress, | 細野裕希、漆原良 | |
| サッカーにおけるキックの正確性に関係するコオーディネーション能力について | 共同 | 2017年9月 | 日本体育学会<br>第68回大会 | 細野裕希、漆原良 | |
| コオーディネーショントレーニングによるドリブルスキルの改善について | 共同 | 2018年8月 | 日本体育学会<br>第69回大会 | 細野裕希、漆原良 | |

## Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |

## Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育･研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　准教授 | 氏名　満石 寿 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容･方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1. 参加型講義の実践 | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「生涯スポーツ論」（一般科目、1年次配当、半期、必修2単位）において講義を行い、身体の特性、運動の特性、人間形成などを、スポーツを通して学習し、生涯にわたってスポーツ活動を実践するための基礎的な能力と態度の育成を目指した。同時に身体を動かすことによる心理学的効果を学び、各種スポーツ活動や身体活動、簡単な体つくり運動における実践やグループディスカッションを交えながら健康スポーツ心理学について理解を深めたことによって、運動習慣がなかった生徒が全講義終了時には、運動習慣を持つよう心がけようと行動変容が生じる者もあらわれた。 |
| 2. 実技の授業における工夫 | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「生涯スポーツ演習Ⅰ・Ⅱ」（一般科目、1年次配当、半期、必修1単位）において演習を行い、自身の身体能力レベルを把握した上で、生涯にわたる身体運動や体つくり運動・スポーツの必要性を学び、スポーツ科学の原理・原則に基づく運動の方法を理解することを目的とした。また様々な運動種目を通じて、生涯スポーツに必要な運動技能を獲得すると共に、仲間との触れ合いによる精神的な充足感や運動がもたらす心理的効果を経験することで、友達ができた生徒や健康の維持・増進のためのスポーツの習慣化を身につけた者もいた。 |
| 3. 心身に障害のあるものに対する実技の授業における工夫 | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「生涯スポーツ演習（保健コース）」（一般科目、1年次配当、半期、必修1単位）におけるコースの一つである保健コースにおいて、不安障害など心理的に疾患を抱えた学生や骨折や先天的に身体機能に障害のある学生に合わせた実技の授業を行っている。個人の体調や心理状態に合わせてリラクゼーションや気分の改善に繋がる運動、体つくり運動、体力の維持・増進を目的とした運動を行うことで、本人の心身の状態管理を把握することができるとともに、少人数による授業の中でコミュニケーション能力の向上にも繋がった。 |
| 4. 調査や分析の実践 | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「社会調査実習」（専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）において実習を行い、スポーツに関わる問題に取り組むための極めて重要な研究方法である社会調査法の基本的な論理と方法を学び、そこで得られた知見を用いて、企画・設計からデータの収集・整理・分析・総合、そして結果の公表に至る一連の社会調査の過程を学ぶことを目的とした。小集団に分かれたグループ毎に社会調査を実践し、実践結果をプレゼンテーションすることによって、個人が持っている興味を引き出すことに加えて、コミュニケーション能力の向上に役立った。 |
| 5. 教職事前実習における工夫 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「教職事前実習」（専門科目、3年次配当、通年、選択1単位）において実習を行い、教育実習を少しでも効果的に進めて行くための事前トレーニングを行うことを目的とした。具体的には、体育実技（競技スポーツ、体つくり運動など）指導案の書き方や観察、参加、実習という形で、徐々に指導実習に慣れていけるように指導を行った。毎回、指導内容についてどのようない考えたかを話し合うことや指導案を数回に渡って書き、実際に指導し、それを評価・フィードバックするとによって、学生自身が何が不足しているかを理解しやすい環境を整えることができた。 |
| 6. スポーツ心理学の実験の工夫 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学スポーツ科学部の助教として担当の「スポーツ心理学実験」（専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）において演習を行い、運動・スポーツ活動の場における様々な興味深い心理的問題について、実験を通して学ぶことを目的とした。具体的には、実際に行った実験の経験が、個人の競技やトレーニング、指導に結びつくよう、身近な心理的事象を取りあげ、対処方法を体験するとともに、自ら問題点を整理して関連情報を集め提示するという経験を積むことを目指した。これらの経験は、自分自身の興味・関心がなんであるかを発見するためにも大変役立つものであった。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 教育内容・方法の工夫(続き) | | |
| 7. 健康スポーツ心理学の講義における工夫 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科の助教として担当の「健康スポーツ心理学特論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において講義・補助を行い、重要文献の抄読を通して、1）スポーツや運動を実施することから得られる心理学的および生理学的効果、2）学習領域に関連する専門用語の理解、3）行動変容に関連する理論の理解、4）身体活動促進を中心とした効果的な支援方法の理解を進めた。そして、大学院生は、獲得した基礎的な心理学・行動科学的視点を基に、健康運動の維持・促進にはどのような介入が必要かについて議論することや、ストレス緩和効果を最大限に発揮する継続的な運動は何かということを考えを深める場となった。 |
| 8. 健康スポーツ心理学の講義における工夫 | 平成28年4月～<br>平成31年3月 | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の講師として担当の「健康スポーツ心理学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において講義を行い、1）スポーツや運動を実施することから得られる心理学的および生理学的効果、2）学習領域に関連する専門用語の理解、3）行動変容に関連する理論の理解、4）身体活動促進を中心とした効果的な支援方法の理解を進めた。講義は、ICTを活用し、参加型の授業を行うとともに、簡単な実験を取り入れることで、講義の内容を実際にどのように活かすことができるかを体験を通して学ぶ場となった。 |
| 9. 健康スポーツ心理学の講義における工夫 | 平成31年4月～<br>現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部健康スポーツ学科の准教授として担当の「健康スポーツ心理学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において講義を行い、1）スポーツや運動を実施することから得られる心理学的および生理学的効果、2）学習領域に関連する専門用語の理解、3）行動変容に関連する理論の理解、4）身体活動促進を中心とした効果的な支援方法の理解を進めた。講義は、ICTを活用し、参加型の授業を行うとともに、簡単な実験を取り入れることで、講義の内容を実際にどのように活かすことができるかを体験を通して学ぶ場となった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 1. 統計処理方法の手順ファイルを作成 | 平成25年11月 | 福岡大学大学院スポーツ科学部の助教として担当の「社会調査実習」（専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）において、記述統計、t検定、分散分析など基本的な分析方法やデータセットの作成方法についての理解を深めるため、授業内でパソコンの共有サーバーを介して、サンプルファイルを作成・共有することで分析方法の知識を深めた。その結果、学生の理解を促進させることができた。また、コンピューターの苦手な学生は、口頭で説明するよりも共有のディスプレイを見ながら作業を進める方法は、学生の作業をスムーズにさせることができた。 |
| 2. 電子機器を教育指導に活用 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学大学院スポーツ科学部の助教として担当の「生涯スポーツ演習Ⅱ」（基礎科目、3年次配当、通年、必修1単位）において、教職課程の一環として、教育事前実習を行い、その中で学生が指導・教育している姿をiPadを用いて撮影し、学生にフィードバックすることによって、どのような部分が不足しているかを確認することができている。ポータブルの電子機器を用いることによって、教育事前実習を行った直後にその場で確認することができ、動画であることから具体的な改善点見つけやすいことに加えて、記録および記憶することがスムーズに行える。 |
| 3. 電子機器を実技能力の向上に活用 | 平成26年4月～<br>平成27年3月 | 福岡大学大学院スポーツ科学部の助教として担当の「生涯スポーツ演習Ⅱ」（基礎科目、1年次配当、半期、必修1単位）において、個人の動きや集団の動きを本人または他の学生が把握し、自身の実技能力向上を目指すために、Apple TVやiPadなどの電子機器を用いた。学生にも簡単に利用できリアルタイムで状況を把握できることから、フォームの修正などに大変役立てることができた。また、動画などの再生が可能であることから、ルールやトレーニング方法の説明などにも大変役立った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4. Microsoft Office使用方法マニュアルの作成 | 平成27年4月～<br>現在に至る | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の講師として担当の「スタートアップゼミB」（教養科目、1年次配当、半期、選択2単位）において、Microsoft Office使用方法マニュアルの作成を行った。入学前課題における、日常の体温や起床時心拍数、トレーング結果などをエクセルで図表化し、ワードに貼り付け、レポートを作成する。また、パワーポイントを作成し、プレゼンテーションを行う。これら一連の流れに沿って、各自が資料を作成できるよう、マニュアルを作成した。作業内容を図解で説明していることから、各々に個別で説明していくよりも作業効率が高くなった。 |
| 5. ICTを用いた授業 | 平成28年4月～<br>平成31年3月 | 京都学園大学健康医療学部健康スポーツ学科の講師として担当の「健康スポーツ心理学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、ICTを用いた授業を行い、学生の考えや意見をリアルタイムで視覚的に捉えることができるよう工夫した。これは、復習テストとして学生がどの程度内容を把握できているかを測るツールとしても有効的であった。さらに、リアルタイムに学生全体の意見を共有できることからコミュニケーションを行いながら授業を行うことができ、学生の満足度の向上に役立った。 |
| 6. ICTを用いた授業 | 平成31年4月～<br>現在に至る | 京都先端科学大学健康医療学部健康スポーツ学科の准教授として担当の「健康スポーツ心理学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、ICTを用いた授業を行い、学生の考えや意見をリアルタイムで視覚的に捉えることができるよう工夫した。これは、復習テストとして学生がどの程度内容を把握できているかを測るツールとしても有効的であった。さらに、リアルタイムに学生全体の意見を共有できることからコミュニケーションを行いながら授業を行うことができ、学生の満足度の向上に役立った。 |
| 3　教育方法･教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 1. うつ病者の社会復帰支援に関する実証的研究　－気分および唾液成分に着目した運動のストレス軽減効果－ | 平成23年4月～<br>平成27年3月 | 研究員・研究協力員としてプロジェクトの一端を担った。健常者を対象としたデータの収集については人数的にも質的（再現性）にも目標を上回るデータが得られたが、うつ病患者に対するアプローチが課題となっていた。そこで、クリニックの協力を得て、うつ病患者の社会復帰支援に寄与する運動プログラムの有効性を心理的および生理的反応を基に検証した。具体的には、日常生活の気分、活動記録、唾液成分から心身のストレスを総合的に評価し、運動実施によるストレス軽減効果を検証した。 |
| 2. 安全な自転車利用の促進と心身の健康を目的とし身体活動量の増加を目指した実践活動 | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 福岡市役所との共同プロジェクトであり、プロジェクトの一員として携わった。福岡市民の自転車および公共交通の利用実態を把握し、心理学的見地から交通行動に対する態度・利用に関する心理的バリアと交通環境との相互関係の検証を目的とし実践研究を行った。また、研究とは別に、自転車利用やマナーに興味のある福岡市民を招き、安全な自転車利用にはどのような対策が必要かなどを話し合うフォーラムを行った。さらに、健康行動の維持・増進や身体活動量の増加を目指し、健康スポーツ心理学の観点から、福岡市民に働きかけを行った。 |
| 3. トレーニング評価サイトの作成 | 平成26年2月～<br>現在に至る | 個人のトレーニングによる心理的または身体的効果を把握するための評価サイトを作成した。自分自身が日々どのようなトレーニングを行い、どのようなコンディションでいるかを把握し、メンタルヘルスの維持に繋げて行くことや、運動パフォーマンスの向上を目指している。これらのサイトを利用することによって、トレーニングを実施する者も指導する者も状態に合わせたトレーニングや体調および身体の管理について考えることができている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1. 日本学校メンタルヘルス学会会員・編集委員 | 平成23年12月～<br>現在に至る | 日本学校メンタルヘルス学会の編集委員の一人として、学術雑誌の編集に携わっている。具体的には、自身が論文審査を行うだけでなく、編集委員会の会議や雑誌の編集活動にも積極的に協力し、学術雑誌の出版に貢献している。 |
| 2. 日本健康心理学会　禁煙研究部会代表 | 平成23年12月 ～<br>平成26年12月 | 日本心理学会の研究部会の一つである、禁煙研究部会の代表を務めている。同研究部会では、日本健康心理学会から助成金を得て、禁煙継続に貢献すべく、医療従事者や健康心理を専門とした研究者を中心に、医療現場や教育現場、企業などをフィールドとして研究を行っている。研究成果は、日本健康心理学会、日本禁煙科学会等で発表している。 |
| 3. 日本健康心理学会会員・広報委員会委員 | 平成24年5月～<br>現在に至る | 日本健康心理学会の広報委員会の一人として、学会の広報活動に貢献している。特に、新しい学会ホームページの作成を行うと同時に、メールマガジンのシステム開発に携わり、新しい日本健康心理学会の広報活動を積極的に行っている。 |
| 4. 福岡大学　スポーツ科学研究編集委員 | 平成25年4月～<br>平成26年3月 | 福岡大学の紀要である「スポーツ科学研究」の編集委員を務めている。学内の紀要であはあるが、査読審査が必要であるため、論文審査を行っている。加えて、雑誌の編集活動にも携わっている。 |
| 5. 福岡大学　アスリートサポート（スポーツ心理およびメンタルサポート担当） | 平成25年4月～<br>平成27年3月 | 全国大会上位入賞者の増加および健康運動指導士、アスレチックトレーナー、トレーニング指導者、野外教育・レクリエーショナル指導者などのエキスパート育成を目指したプロジェクトの委員を務めている。特に、心理学の観点から、アスリートのトレーニングのサポートや競技場面におけるメンタルサポートやカウンセリングの重要性について情報提供を行っている。 |
| 6.スポーツ・レクリエーション指導者養成講習会（スポーツ・レクリエーション心理学担当） | 平成26年11月～<br>現在に至る | スポーツ・レクリエーション指導者養成講習会の講師として、スポーツ・レクリエーション心理学の講義を行っている。日々、体を動かすことに伴う心身の健康にレクリエショナル・スポーツがいかに重要かについて講義を行い、実際に簡単な運動を取り入れその効果を体験することで、現場で役立ててもらうことが目的である。 |
| 7. スポーツ選手のコンディショニング・トレーニングによるメンタルヘルス改善に向けた取り組み | 平成26年1月～<br>平成27年3月 | スポーツ選手の試合前やトレーニング時のストレス緩和およびリラクゼーションの獲得を目指し、コンディショニング・トレーニングにメンタルヘルス改善を目的としたプログラムを組み込み、心理的サポートを行っている。 |
| 8.「日本生理人類学会誌」の査読審査 | 平成27年4月 | 日本生理人類学会が出版する「日本生理人類学会誌」の査読審査に携わった。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 1. 行動変容を促すヘルス・コミュニケーション: 根拠に基づく健康情報の伝え方「第5章」 | 共著 | 平成29年1月 | 朝倉書店 | 編者:C.エイブラハム, 編者:M.クールズ, 編者&監修:竹中 晃二, 編者&監修:上地 広昭 共著者:満石寿・葦原摩耶子、荒井弘和、上地広昭、他 | |
| 2. 健康心理学: シリーズ心理学と仕事12「現場の声11: 禁煙時の運動」 | 共著 | 平成29年1月 | 朝倉書店 | 監修:太田信夫　編者:竹中晃二 共著者:満石寿・葦原摩耶子、荒井弘和、上地広昭、他 | p.94～p.95 |
| 3. 運動と健康の心理学「Topic 12: 禁煙継続のための運動実践:再発予防の観点から」 | 共著 | 平成24年1月 | 朝倉書店 | 監修:海保博之　編者:竹中晃二<br>共著者:**満石寿**、葦原摩耶子、荒井弘和、上地広昭、大島秀武、大場ゆかり、大矢幸弘、上村真美、木内敦詩、小室史恵　他13名 | p.144～p.149 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 一過性お手玉運動プログラムにおける心理的効果の検討 −大学生を対象にして− | 共著 | 平成30年 | 「学校メンタルヘルス」21巻1号 | **満石寿**・泉原嘉郎 | p.1〜p.7 |
| 禁煙支援におけるストレス対処 - 身体運動を用いて - | 共著 | 平成30年 | 「ストレス科学」 32巻2号 | **満石寿** | p.142−p.142 |
| 論文（続き） | | | | | |
| The effects of resilience on subjective stress response and salivary secretory immunoglobulin A in university students. | 共著 | 平成29年 | The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine vol.5 | **Mitsuishi, H**., Endo, S., Ishiwata, T. Oishi, K. | p.319〜p.327 |
| 同一のにおい刺激に対する情報付与内容が運動後の心理的および心臓血管反応に及ぼす影響. | 共著 | 平成29年 | 「京都学園大学健康医療学部紀要」 1巻 | **満石寿**・小林剛史 | p.83〜p.90 |
| 認知・情報系お手玉プログラムが大学生サッカー選手の心理的反応に及ぼす影響−IMセンサリー・メゾットの実施による即時効果の検証− | 共著 | 平成29年 | 「福岡大学教職課程教育センター紀要」創刊号 | 泉原嘉郎・**満石寿**・石塚利光 | p.91〜p.92 |
| 認知・情報系コーディネーショントレーニングが大学生サッカー選手のバランスパフォーマンスに及ぼす影響−バランストレーニングの効果検証を中心として− | 共著 | 平成29年 | 「福岡大学教職課程教育センター紀要」創刊号 | 泉原嘉郎・乾真寛・**満石寿**・石塚利光 | p.93〜p.104 |
| 日本語版インナーストレングス尺度（ISS−J）の開発−大学生を対象としたデータから− | 共著 | 平成28年 | 日本健康心理学会誌<br>「健康心理学研究」 29巻 | 遠藤伸太郎、北見由奈、**満石寿**、大石和男 | p.39〜44 |
| 生活習慣病予防と禁煙 | 単独 | 平成28年4月 | 日本健康心理学会誌<br>「健康心理学研究」 28巻 | **満石寿** | p.135〜p.141 |
| 身体運動およびニコチンパッチの併用が禁煙導入時の喫煙願望に及ぼす影響ー若年禁煙者を対象にー | 共著 | 平成28年4月 | 日本健康心理学会誌<br>「健康心理学研究」 28巻 | **満石寿**、竹中晃二 | p.151〜p.156 |
| 同一のにおい刺激に対する情報付与内容が運動後の心理的および心臓血管反応に及ぼす影響 | 共著 | 平成28年3月 | 京都学園大学<br>「京都学園大学健康医療学部紀要」 1巻 | **満石寿**、小林剛史 | p.83〜p.90 |
| 日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度の開発 | 共著 | 平成27年3月 | 日本トランスパーソナル学会誌<br>「トランスパーソナル研究」 19巻2号 | 濁川孝志 ・**満石寿**・遠藤伸太郎・廣野正子・和秀俊 | p.83〜p.90 |
| 日本人の持つスピリチュアリティ概念構造の探索的な分析 ー心の問題から生じる社会問題の解決に向けてー | 共著 | 平成26年3月 | 立教大学<br>「コミュニティ福祉学部紀要」<br>16巻 | 和秀俊、廣野正子、遠藤伸太郎、**満石寿**、濁川孝志 | p.39〜p.50 |
| 禁煙導入時における身体運動およびニコチンパッチの有用性 ー月経前後の離脱症状と喫煙衝動の観点からー | 共著 | 平成26年3月 | 日本生理人類学会誌<br>「日本生理人類学会誌」 19巻2号 | **満石寿**、藤澤雄太、前場康介、竹中晃二 | p.83〜p.90 |
| Computer−tailored interventions for promoting physical activity and healthy eating: A systematic review of the literature. | 共著 | 平成26年3月 | The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, 3 | **Yamaguchi, Y., Mitsuishi, M.** | p.493〜p.500 |
| Effect of Krill−derived phospholipid n−3 fatty acids on Ca2+ regulation system in cerebral arteries from ovariectomized rats. | 共著 | 平成26年1月 | 「Life Science」<br>100巻1号 | Sakai, Y., Hashimoto, M., Enkhjargal, B., **Mitsuishi, H.**, Nobe, H., Horie, I., Iwamoto, T., Yanagimoto, K. | p.18〜p.24 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 女子大学生の運動セルフ・エフィカシーと運動変容ステージおよび健康リスクに対する認知的評価の関連について | 共著 | 平成26年1月 | 国立看護大学校<br>「国立看護大学校研究紀要」<br>13巻1号 | 藤澤雄太、**満石寿**、前場康介、竹中晃二 | p.10～p.16 |
| 人工観葉植物と精油の対提示が心理・心臓血管反応に及ぼす影響 | 共著 | 平成25年9月 | 日本生理心理学会誌<br>「生理心理学と精神生理学」<br>第30巻3号 | **満石寿**、長野祐一郎、小林剛史 | p.227～p.242 |
| 生活活動量の増強を目的とした通信型介入に有効な行動変容技法の検討 | 共著 | 平成25年8月 | 日本行動科学学会誌<br>「行動科学」<br>52巻1号 | 斎藤めぐみ、島崎崇史、**満石寿**、竹中晃二 | p.1～p.13 |
| 13項目7件法版Sense of Coherence scale（SOC-13）の信頼性と1因子モデルの妥当性についての検討：大学生を対象としたデータから（査読なし） | 共著 | 平成25年3月 | 立教大学<br>「コミュニティ福祉学部紀要」<br>第15巻 | 遠藤伸太郎、**満石寿**、和秀俊、大石和男 | p.25～p.38 |
| その他 | | | | | |
| 一過性お手玉運動プログラムにおける心理的効果の検討－大学生を対象にして－ | 単独 | 平成30年6月 | 日本健康心理学会第31会大会発表プログラム集 | **満石寿** | |
| 認知症予防と運動 | 単独 | 平成30年1月 | 京町家新柳居市民講演<br>（於：京都学園大学京町キャンパス） | **満石寿** | |
| スポーツと心理 | 単独 | 平成28年9月 | 地域スポーツ指導者研修会<br>（於：長浜バイオ大学ドーム） | **満石寿** | |
| 体を動かすことと心の健康―軽い運動でも健康になれる | 単独 | 平成28年9月 | 京都学園大学心理フォーラム<br>「健康と心理学」<br>（於：京都学園大学） | **満石寿** | |
| なぜ、身体を動かすことが心と身体の健康につながるのか? | 単独 | 平成28年2月 | 亀岡市市民講演<br>（於：ガレリアかめおか） | **満石寿** | |
| 気分や認知機能改善のためにキツい運動は必要ない！ | 単独 | 平成26年9月 | 第8回認知・行動・計量セミナー<br>（於：箱根） | **満石寿** | |
| 禁煙における健康心理士の役割 －医学と健康心理学の観点から－ | 単独 | 平成25年9月 | 日本健康心理学会第26会大会<br>会員企画シンポジウム<br>（於：北星学園大学） | **満石寿** | |
| 新生健康心理学の研究かくあるべし！<br>－研究部会集結－ | 単独 | 平成25年9月 | 日本健康心理学会<br>第26会大会研究推進委員会シンポジウム<br>（於：北星学園大学） | **満石寿** | |
| うつ病者の客観的指標・運動プログラムの開発 －唾液中免疫グロブリンを用いたストレス評価－ | 共同 | 平成25年1月 | 戦略的研究基盤形成支援事業<br>成果報告会<br>（於：立教大学） | **満石寿**、石渡貴之、安松幹展、加藤晴康、濁川孝志、松尾哲矢、大石和男、遠藤伸太郎 | |
| 学会発表 | | | | | |
| 都市部幼稚園5歳児における認知機能と体力との関係 | 単独 | 平成30年3月 | 日本発育発達学会第会第16会大会発表プログラム集 | **満石寿** | |
| 禁煙導入時における身体運動およびニコチンパッチの有用性<br>－月経前後の離脱症状と喫煙衝動の観点から－ | 単独 | 平成26年11月 | 日本健康心理学会第27会大会発表プログラム集 | **満石寿** | |
| The effect of resilience on subjective stress response and salivary secretory immunoglobulin A | 共同 | 平成26年9月 | The European Health Psychology Society 16 supplement | **Mitsuishi, H.**, Endo, S., Ishiwata, T., Oishi, K. | |
| Development of the Japanese version of Inner Strength Scale (ISS-J). | 共同 | 平成25年6月 | The 5th Asian Congress of Health Psychology Program & Abstract Book | Endo, S., Kitami, Y., **Mitsuishi, H.**, Oishi, K. | |
| 運動前に行う教示内容が多面的感情および心臓血管系反応に及ぼす影響 | 共同 | 平成26年5月 | 日本生理心理学会<br>第32回大会発表プログラム集 | **満石寿**、小林剛史 | |
| 運動後のにおい刺激への情報付与が運動回復過程に及ぼす影響 －心理的および心臓血管反応に基づく検討－ | 単独 | 平成25年11月 | 日本スポーツ心理学会<br>第40回大会発表プログラム集集 | **満石寿** | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　足立 名津美 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「スポーツ社会学」での指導法の工夫 | 2013月9月～ | 双方向的なアクティブラーニングの手法を取り入れた授業を導入し、授業への参加度によって成績を評価するよう工夫を行なっている。本手法を取り入れた授業は、学生からの評価も高くなっている。 |
| 学生の自主的な卒業論文執筆を促す工夫 | 2015年4月～ | 前任校で、ゼミナールにおける個人の課題（卒業論文・レポート）について、自主的な執筆活動やそのスケジューリングを考えるモチベーションが低いことに気づいた。そこで、ゼミの演習の時間の最初に前週より何が進んだのかを、ゼミの最後には来週までにどのように進めるかを発表する取り組みを行った。その結果、周囲との進捗の差を気にかけるようになったり、当初は1週間だけのスケジューリングではあったが、提出までのスケジュールを自主的に考えるようになった。 |
| 「簡易版ディベート」の考案と実施 | 2018年9月～ | 「論理的思考」の考え方と、受講生同士のつながりを作ることを目的に、1コマの授業内で完結し（事前の準備のいらない）、かつ複数グループが同時に同教室で実施できるディベートのルールを考え、実施している。これにより、より効率的に短時間で上記目的を達成できている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「図とイラストで学ぶ　新しいスポーツマネジメント」 | 2016年11月 | スポーツマネジメントを学ぶ学生への教材とする書籍として「図とイラストで学ぶ 新しいスポーツマネジメント」の執筆を分担で担当（第5章）した。当該書籍は、多くの教育機関で教科書として使用されている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2013年11月8日 | 社会人への教育機会への参画：日本体育協会（現日本スポーツ協会）クラブマネジャー養成講習会（マーケティング）講師助手 |
| | 2019年9月7日 | 社会人への教育機会への参画：日本スポーツ協会クラブマネジャー養成講習会（マネジメント）講師担当 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 「図とイラストで学ぶ 新しいスポーツマネジメント」 | 共著 | 2016年11月 | 大修館書店 | (編著)山下秋二，中西純司，松岡宏高（分担執筆）吉田政幸，池田実加，山本悦史，足立名津美，新井彬子，上田滋夢，長積仁，藤谷かおる，土肥紗綾，高岡昌弘，金山千広，行實鉄平，松永敬子 | 第5章 |
| 論文 | | | | | |
| プロスポーツクラブのプロダクト特性の検討：製品間競争に着目して（査読あり） | 共著 | 2018年 | スポーツマネジメント研究10巻1号 | 松岡宏高 | P59-80 |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>プロスポーツクラブにおける組織間構造の固有性に関する理論的考察：スポーツマネジメント領域への組織間関係論の適用可能性の検討 | 単著 | | 日本体育・スポーツ経営学会第36回大会号 | | |
| （口頭発表）<br>スポンサー企業が女子プロゴルフトーナメントを開催する目的の検討：スポンサー動機の検討 | 共著<br>第２著者 | 2013年3月 | 日本体育・スポーツ経営学会第38回大会号 | 澤田沙都子、松岡宏高 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (調査報告書)<br>中央競技団体の運営に関する調査研究 2011年度報告書:中央競技団体の運営の日米比較 | 共同 | 2013年9月 | 公益財団法人　笹川スポーツ財団 | | |
| (調査報告書)<br>フィットネスクラブの価値が正しく生活者に伝わるようにするための調査研究 | 共同 | 2013年、2016年、2018年 | 一般社団法人　日本フィットネス産業協会 | | |
| (調査報告書)<br>2013/14 Vプレミアリーグ観戦者調査 報告書(男女リーグ) | 共同 | 2014年9月 | 一般社団法人日本バレーボールリーグ機構 | | |
| (口頭発表)<br>Spectators' characteristics and motives in the Japanese top volleyball league | 共著<br>筆頭著者 | 2015年8月 | The 11th Asian Association of Sports Management Conference AASM | Matsuoka Hirotaka | |
| (口頭発表)<br>スポーツマネジメント研究への戦略マネジメント理論の援用課題:プロスポーツクラブを対象とした「競争」概念の適用可能性の検討 | 共著<br>筆頭著者 | 2016年3月 | 日本体育・スポーツ経営学会第39回大会号 | 松岡宏高 | |
| (口頭発表)<br>Do the Structural Constraints in Sport Spectatorship belong to Several Phases?:<br>Testing the Levels by Attendance Frequency | 共著<br>第２著者 | 2016年9月 | SMAANZ Conference 2016 | 山下玲 | |
| (口頭発表)<br>Jリーグにおけるプロダクト特性:競合するプロダクトとの比較を通したJリーグのプロダクト特性の検討 | 共著<br>筆頭著者 | 2017年3月 | 日本体育・スポーツ経営学会第40回大会号 | 松岡宏高 | |
| (シンポジウム)<br>日本体育・スポーツ経営学会 第39回学会大会ラン知タイムセッション「若手で考えるスポーツ経営学」:コーディネーター | | 2016年3月 | | | |
| (口頭発表)<br>フィットネスクラブで獲得されるベネフィット:　利用経験を考慮した年齢区分による比較 | 共著<br>筆頭著者 | 2018年3月 | 日本スポーツマネジメント学会第10回大会号 | 松岡宏高 | |
| (口頭発表)<br>ラグビーファンのセグメンテーション:　ファンになった時期によるセグメント化を用いた分析 | 共著<br>第４著者 | 2018年3月 | 日本スポーツマネジメント学会第10回大会号 | 松岡 宏高、和田 由佳子、姜 泰安、本間崇教、藤本 淳也 | |
| (講演)<br>日本フィットネス産業協会主催セミナー | | 2018年7月 | SPORTEC2018 | | |
| (講演)<br>日本フィットネス産業協会主催セミナー | | 2019年7月 | SPORTEC2019 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2014年年4月～ | 【学会事務局】日本スポーツマネジメント学会事務局（現在に至る） |
| 2019年4～ | 【学会大会実行委員】15th Asian Association for Sport Management Conference (AASM)メンバー |
| (学会) | |
| 2011年4月～ | 日本スポーツ産業学会 |
| 2013年3月～ | 日本体育・スポーツ経営学会 |
| 2014年4月～ | 日本スポーツマネジメント学会 |
| 2014年4月～ | Asian Association for Sport Management |
| 2019年5月～ | 日本経営哲学学会 |
| 2019年6月～ | 日本生涯スポーツ経営学会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

スポーツ科学、特にマネジメント・マーケティング分野における、社会調査について、量的・質的な調査の企画設計から調査、報告会・報告書など一連の企画・実施を担当するノウハウを保有している

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　講師 | 氏名　瀧本 真己 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 考えることを習慣化させるための授業展開 | 2019年4月～ | 講義の授業では、教員が一方的に話すと、学生が考えることをしないことが多い。そこで、これから話したい内容について、まず学生が考えてから説明する流れで授業を展開している。例えば、高齢者の体力について説明するときは、スポーツ局が公開している年齢別の体力測定の結果のグラフを学生に見せ、このグラフを見て何がわかるか書き出させるようにしている。こうすることで高齢者の体力の特徴を自ら考え気づくように促している。 |
| 学生の意見を取り入れた授業づくり | 2019年4月～ | 毎回の授業で、学生に質問、感想、要望を書いて提出するように指示している。全てをチェクして、次回の授業の最初に質問や要望への回答や感想への意見を提示している。この取り組みを行うことで、学生がわからないまま次の内容に入ることを防ぎ、学生が難しく感じる授業内容の改善や興味を引きつける授業内容の作成を行うことができる。 |
| 管理栄養士科、栄養士科における「基礎生物化学」の授業 | 2015年4月～<br>2016年3月 | 非常勤講師をしていた京都栄養医療専門学校にて実施した授業である。管理栄養士、栄養士に必要となる生物と化学の基礎的な知識の獲得を狙いとして講義を実施した。栄養学は理系の科目であるが、学生は高校の時に文系の者が多いため、生物や化学の初歩的な内容を詳しく解説した。特に苦手な学生が多いモル計算の授業では、授業内小テストを実施してわからない部分を徹底的に説明した。学生からの評価は高く、100点満点評価の学生アンケートで平均92.9点であった。 |
| 管理栄養士科、栄養士科における「人体の機能I・II」、「生化学」の授業 | 2015年4月～<br>2017年9月 | 非常勤講師をしていた京都栄養医療専門学校にて実施した授業である。管理栄養士科では人体の機能、栄養士科では生化学の授業名で実施したが、授業内容は生化学である。生化学の授業は学生が最も苦手とする科目であった。そのため、学生がわからない単語を使わない、単語を覚えさせるのではなく、イメージで覚えさせることを意識した授業づくりを意識した。学生からの評価は高く、100点満点評価の学生アンケートで、生化学では平均95.1点、人体の機能では平均92.4点であった。 |
| 栄養士科における「健康運動演習I」の授業 | 2017年4月～9月 | 非常勤講師をしていた京都栄養医療専門学校にて実施した授業である。スポーツ、筋トレ、有酸素運動、柔軟運動などの運動を実施し、運動指導法や運動処方に関する知識とスキルの獲得を狙いとした内容であった。体育、スポーツ系の学生でなく運動に対する関心が低かったため、運動の大切さと楽しさの両面を伝えられるように指導した。100点満点評価の学生アンケートで平均93.1点であった。 |
| 工学部、知的財産学部における「健康体育I・II」の授業 | 2015年4月～2018年3月 | 非常勤講師をしていた大阪工業大学の1年生を対象とした授業である。スポーツ活動を行う実技と、生活習慣と健康に関する知識を学ぶ講義をミックスした内容であった。これまでに担当した実技種目はバドミントン、バスケットボール、卓球、サッカー、アダプテッドスポーツである。運動、スポーツ活動を介して、ライフスキルの向上や正しい生活習慣の獲得を目的として実施した。授業評価は、5段階評価の学生アンケートで平均4.23であった。 |
| 医学部、看護学部における「スポーツ健康科学」、「体育I・II」の授業 | 2016年4月～2018年3月 | 非常勤講師をしていた大阪医科大学の1年生を対象とした授業である。医学部ではスポーツ健康科学、看護学部では体育I・IIの授業名で実施した。どちらも実技と講義を含む授業であった。実技では、学生自身が運動・スポーツを企画して行なう形で実施し、運動方法の獲得だけでなく、学生間のコミュニケーションスキル向上を促す内容であった。授業評価は、4点満点評価の学生アンケートで、医学部では平均3.453点、看護学部で平均3.329点であった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| コミュニケーションカード | 2015年4月～2019年3月 | 体育実技の授業で、学生のコミュニケーションスキルの獲得や友達づくりを促進させるための教材である。コミュニケーションカードには、質問事項が列挙されている。使い方は、運動課題（ラリーを連続20回など）をクリアしたら、一緒に課題に取り組んだ者同士でカードの質問をし、コミュニケーションを図るものである。 |
| 教科書、参考書の補助教材 | 2015年4月～現在 | 講義の授業では、教科書や参考書をもとに穴埋めプリントを作成している。学生の要望を取り入れ、文字数を少なくかつイラストを多く使っている。分かりやすくかつ学習へのモチベーションを高められるように作成している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 第4回大学体育研究フォーラムにて、研究発表した。テーマは「大学体育授業における学生の感想文量を増大させる方法の検討」 | 2016年2月29日 | 大学体育授業で取り組んだ内容をポスター発表した。大学体育授業において、文章を多く記述させる簡易的な方法を検討した結果を報告した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 新入生歓迎スポーツ大会の企画・運営 | 2017年4月、2018年4月 | 当時、非常勤講師をしていた大阪歯科大学医療保健学部にて、スポーツ活動を介して新入生同士の交流を図るイベントを実施した。当学部は2017年4月に開設され、新入生が大学に馴染めるようなイベントの企画・運営を依頼された。スポーツ大会では教員チームも参加し、スポーツ活動を介して新入生同士や教員とのコミュニケーションを深めることができた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される：大学体育授業を対象とした縦断研究. | 共著 | 2018年3月 | 大学体育学第15号 | 瀧本真己, 木内敦詞, 石道峰典, 中村友浩, 西脇雅人 | pp: 3-11 |
| 大学体育の授業外課題における「4つ以上」の簡易な指示は継続的に学生の文章量を増大させる | 共著 | 2017年3月 | 大学体育学第14号 | 瀧本真己, 木内敦詞, 石道峰典, 中村友浩, 西脇雅人 | pp: 48-55 |
| 大学体育授業における学生の感想文量を増大させる方法の検討 | 共著 | 2016年3月 | 大学体育学第13号 | 瀧本真己, 西脇雅人 | pp: 9-15 |
| Acute exercise increases brain region-specific expression of MCT1, MCT2, MCT4, GLUT1, and COX IV proteins. | 共著 | 2014年5月 | Journal of Applied Physiology, 116巻9号 | Masaki Takimoto, Taku Hamada | pp. 1238-1250 |
| Possible involvement of AMPK in acute exercise-induced expression of monocarboxylate transporters MCT1 and MCT4 mRNA in fast-twitch skeletal muscle. | 共著 | 2013年11月 | Metabolism, 62巻11号 | Masaki Takimoto, Mirei Takeyama, Taku Hamada | pp. 1633-1640 |
| Regulation of the exercise -induced expression of the monocarboxylate ransporters MCT1 and MCT4 in skeletal muscle. | 共著 | 2013年3月 | The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine 2巻1号 | Taku Hamada, Masaki Takimoto | pp. 85-92 |
| その他 | | | | | |
| ＜研究助成＞<br>低グリコーゲン状態での運動トレーニングは認知機能の向上を高めるか | 単独 | 2019年度 | 公益財団法人<br>明治安田厚生事業団 | 瀧本真己 | |
| ＜優秀論文賞受賞＞<br>大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される：大学体育授業を対象とした縦断研究. | 共著 | 2018年 | 全国大学体育連合 | 瀧本真己, 木内敦詞, 石道峰典, 中村友浩, 西脇雅人 | |
| ＜口頭発表＞<br>上り坂歩行が海馬の脳由来神経栄養因子BDNF発現に及ぼす運動の時間依存効果 | 共同 | 2018.9.8 | 第73回日本体力医学会大会 | 瀧本真己、浜田拓 | |
| ＜口頭発表＞<br>一過性の短時間・高強度運動が注意機能と全身反応時間に与える効果 | 共同 | 2018.2.17 | 第32回日本体力医学会近畿地方会 | 瀧本真己、浜田拓 | |
| ＜口頭発表＞<br>上り坂歩行運動は脳の乳酸の取り込みを増加させる | 共同 | 2017.9.16 | 第72回日本体力医学会大会 | 瀧本真己、浜田拓 | |
| ＜ポスター発表＞<br>乳酸投与による血中と脳内における乳酸動態の関係 | 共同 | 2016.9.25 | 第71回日本体力医学会大会 | 瀧本真己、藤谷美菜、浜田拓 | |
| ＜ポスター発表＞<br>Prolonged exercise upregulates expression of MCT1, MCT2, and MCT4 mRNA in the cerebral cortex of rat brain | 共同 | 2013.4.24 | Experimental Biology 2013 | M.Takimoto, M.Takeyama, T.Hamada | |
| ＜口頭発表＞<br>骨格筋のモノカルボン酸トランスポーター（MCT）1とMCT4 mRNAとタンパク質発現量に対するAMPK活性化効果 | 共同 | 2012.9.14 | 第67回日本体力医学会大会 | 瀧本真己、竹山巴麗、浜田拓 | |
| ＜口頭発表＞<br>一過性の低強度・長時間運動は骨格筋のMCT1と共同してCD147膜糖タンパク質発現量を増加させる | 共同 | 2012.7.29 | 第20回日本運動生理学会大会 | 瀧本真己、竹山巴麗、浜田拓 | |
| ＜ポスター発表＞<br>Effect of AMPK activation on acute exercise-induced monocarboxylate transporter (MCT) 1 and MCT4 mRNA expression in skeletal muscle | 共同 | 2012.4.25 | Experimental Biology 2012 | M.Takimoto, M.Takeyama, T.Enoki, T.Hamada | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ＜口頭発表＞<br>低強度長時間運動による滑車上筋のモノカルボン酸トランスポーター（MCT）1とMCT4の発現効果 | 共同 | 2011.9.18 | 第66回日本体力医学会大会 | 瀧本真己、竹山巴麗、榎木泰介、浜田拓 | |
| ＜口頭発表＞<br>高強度短時間運動による滑車上筋のMCT1とMCT4発現の急性効果 | 共同 | 2011.8.25 | 第19回日本運動生理学会大会 | 瀧本真己、竹山巴麗、榎木泰介、浜田拓 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本体力医学会 | 2011年より会員 |
| 日本運動生理学会 | 2011年より会員 |
| 日本体育学会 | 2015年より会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　健康医療　学部 | 職名　嘱託講師 | 氏名　眞里谷 隆司 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 健康スポーツ学科、教育コース、教職希望者における指導 | 2016年4月～ | 健康スポーツ学科教育コース2年生教員志望者に対し、正課授業科目実践プロジェクトA・Bにおける教育現場観察実習を実施。教育現場を観察実習することで児童・生徒の実態や指導上特に留意すべきこと、また教員としての資質、教員としての素養などを学修。<br>1年生においては、目標達成のため生活様式の確立及び教員採用選考試験合格に向けた目的意識の高揚を図った。学科担当教員と連携を図り、教員を目指す学生を対象に資質向上を重点課題とした取り組みを授業やガイダンスを活用して実施。<br>2年生においては、教育現場の実情を紹介し、学校現場で求められる教師像について認識を深め、教員としての資質能力の向上に向けた実践的に取り組みを実行することを強調した。 |
| 科目「教職演習」<br>教職課程受講生（健康スポーツ学科）の教科指導力養成指導 | 2017年4月～ | 教職課程科目、教育実習事前指導Ⅰ・Ⅱにおいて、教育実習を成果の上がる実りあるものにするため個別指導を行い、受講生の前で模擬授業を展開し、授業評価を受けその成果と課題を明確にし、数回模擬授業を積み重ねることにより実践的な教科指導力の養成を行った。指定された日の模擬授業前に何度か模擬模擬授業を受講生同士で積極的に実施できる環境づくりを行った。 |
| 科目「教育実習」<br>教職課程受講生（健康スポーツ学科）の教員指導力養成指導 | 2018年4月～ | 教職課程科目A・B、教育実習において学校現場における実践的な学習体験を通して、3週間もしくは4週間の実習のなかで子どもたちに対し、教育的愛情、教科指導における高い専門性、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした教育実践力が求められることを実感できるよう指導を行った。また、教員採用選考試験に向け、一般教養、専門教養筆記試験対策及び教育実践力テス・面接試験を実施し現役合格を目指し指導を行った。現役合格できなかった学生に対し、常勤講師、非常勤講師の任用等、教育現場で経験を積み実践力を身に付け、再度教員採用試験の合格に繋げるため、教育機関に働きかけ卒業後の進路保障を行った。今後、受講生が教員を目指すため、常に専門性を磨き、謙虚にひたむきに努力し、資質能力の向上に努め、一日も早く目的を達成し教壇に立つことを期待し指導を行う。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 教育ボランティア活動の推奨 | 2016年4月～ | 地域・各関係機関との連携により、学生ボランティアの積極的な参加要請に努めた。諸機関との密接な連携を図ることが必要と考え、地元公立小学校・中学校の所管教育局である京都府南丹教育局南丹学びサポート事業における学習支援ボランティア（部活動・野外活動支援）に積極的に応募するよう働きかけた。亀岡サイフェンスフェスタ等、ボランティア活動を通し、様々な子どもたちや地域社会とかかわることにより「自分らしい生き方」を修得することを学生に求めていきたい。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 人文学部　歴史文化学科教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 乳　　原　　孝 | 323 |
| | 佐　々　木　高　弘 | 324 |
| | 手　塚　　恵　子 | 331 |
| | 丸　田　　博　之 | 333 |
| | 山　本　　淳　子 | 334 |
| 特任教授 | 平　　雅　　行 | 339 |
| | 堀　　田　　穣 | 343 |
| | 山　﨑　芙　紗　子 | 346 |
| 准教授 | 池　田　　恭　浩 | 348 |
| | 鍛　治　　宏　介 | 352 |
| | ｽﾃｨｰﾌﾞﾝ・ﾘｯﾁﾓﾝﾄﾞ | 355 |
| | 関　口　　久　雄 | 357 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　乳原 孝 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | 1998年4月～ | 西洋史についての授業内容を理解しやすくするために、図版を含むプリントの作成はもちろんのこと、映画「薔薇の名前」を使用して、ヨーロッパ中世における異端と魔女、教会と富、キリスト教と笑い、等々の問題を講義している。さらに、古代ギリシア・ローマ史、黒死病、新大陸の古代文明と征服の歴史、奴隷貿易、エリザベス1世のファッション、等々に関するビデオやDVDを教材として使用することで、西洋史に関する興味と理解を深める工夫をしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| （随筆）　怠惰と矯正 | 単 | 2018年12月1日 | 『船団』第119号 | | pp.62-63 |

Ⅲ　学会および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本西洋史学会会員 |
| | 文化史学会会員 |
| | 史学研究会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　佐々木　高弘 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| フィールドワーク論・実習 | 2004年7月～<br>2015年9月 | テーマを設定し、学生にパワーポイントを作成させ、大学を訪問する高校生向けのTV番組を作製。 |
| スタートアップゼミ・実践プロジェクト | 2008年4月～<br>2019年5月 | 4月の亀岡城下町フィールドワークをはじめ、毎月1回フィールドワークを行い、レポートおよび、パワーポイントでの発表を行わせた。 |
| 亀岡祭りフィールドワーク | 2009年11月～<br>2018年11月 | 毎年11月に行われる亀岡祭りに歴史民俗学専攻・歴史文化学科の学生を参加させ、聞き取り調査を行い、その成果をレポート、パワーポイントで発表させた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究 | 2015年3月1日 | 学生を同行させ、報告書も作成させた科研の調査報告書。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 大学における妖怪文化教育(講演) | 2017年11月4日 | 全国の大学でも珍しい「妖怪文化」を取り上げた講義・演習でどのような教育を行い、効果を上げているかを紹介。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 京都市平安京創生館企画展「闇からのぞいた平安京」 | 2014年9月～<br>2015年5月 | 本企画展のなかに学生が展示を担当するコーナーを設置し、データベース作業、地図作成、フィールドワークを行い、企画から展示までを体験させた。 |
| 平成27年度　丹波亀山城宝さがしゲーム(企画) | 2015年7月～12月 | 一般社団法人亀岡市観光協の依頼。学生に亀岡城下町の案内人として一般観光客に城下町の説明を行わせた。 |
| 愛宕山周辺の歴史と伝承―信仰を支える森林探訪 | 2015年9月1日 | 第40回全国育樹祭開催記念事業、第3回林業大学校公開講座「森の京都学」―京都の森の文化を再発見・発信、京都府農林水産部、保津町公民館において、一般受講者のフィールドワークの手伝いおよび現地説明を学生たちにも行わせた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 妖怪学の基礎知識 | 共 | 2011年4月1日 | 角川学芸出版 | 小松和彦・佐々木高弘他 | pp.141～167 |
| 京都妖界案内 | 単 | 2012年6月1日 | 大和書房 | | 文庫版　237頁 |
| かが風土記 | 共 | 2013年3月1日 | 加賀市 | 佐々木高弘・橘弘文・堀田穣 | pp.27～90<br>pp.133～164 |
| 民話の地理学<br>(シリーズ妖怪文化の民俗地理1) | 単 | 2014年8月1日 | 古今書院 | | 四六版252頁 |
| 怪異の風景学<br>(シリーズ妖怪文化の民俗地理2) | 単 | 2014年10月1日 | 古今書院 | | 四六版220頁 |
| 神話の風景<br>(シリーズ妖怪文化の民俗地理3) | 単 | 2014年10月1日 | 古今書院 | | 四六版228頁 |
| 都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究 | 共 | 2015年3月1日 | 京都学園大学 | 科研協力者 | A4版389頁 |
| 進化する妖怪文化研究 | 共 | 2017年10月16日 | せりか書房 | 小松和彦編・佐々木高弘他 | pp.51～68 |
| 論文 | | | | | |
| 神話に描かれた虫たち | 単 | 2011年7月1日 | 怪33号(角川書店) | | pp.38～41 |
| ぼ、ぼ、ぼくらは妖怪探検隊―探検の準備編 | 単 | 2011年8月1日 | 子どもの文化2011―7＋8<br>(子どもの文化研究所) | | pp.104～113 |
| 土蜘蛛はいずこ？ | 単 | 2011年8月1日 | 子どもの文化2011―7＋8<br>(子どもの文化研究所) | | pp.132～141 |
| 民話の歴史地理学 | 単 | 2011年11月1日 | 月刊地球33巻11号<br>(総特集「野外の学としての地理学の軌跡と展望―四半世紀を振り返って―)、海洋出版 | | pp.691～695 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| 風土と妖怪―徳島県吉野川流域の風土と首切れ馬 | 単 | 2012年1月1日 | 歴博170号<br>（特集「怪異・妖怪文化」）、国立歴史民俗博物館編集・発行 | | pp.10～14 |
| 星座の伝承と古代都市 | 単 | 2012年7月1日 | 怪36号（角川書店） | | pp.274～277 |
| 多田源氏と丹波国の妖怪伝承―サムライの精神的レトリックの誕生― | 単 | 2013年3月1日 | 人間文化研究　第30号<br>（京都学園大学人間文化学会） | | pp.5～31 |
| 二人の旅人―神話・昔話・落語の旅と怪異 | 単 | 2013年7月1日 | 怪39号（角川書店） | | pp.218～221 |
| 怪異・妖怪の出没地を歩く―神話的世界観と古地図・絵巻から見えてくる、京の魔界 | 単 | 2013年8月1日 | 月刊京都8月号（通巻745号）<br>（白川書院） | | pp.14～18 |
| 上方の歴史地理と怪異―綱がつなぐ京と大阪 | 単 | 2014年4月1日 | 怪41号（角川書店） | | pp.244～247 |
| 神話・物語の力 | 単 | 2014年10月1日 | 子どもの文化2014―10<br>（子どもの文化研究所） | | pp.2～8 |
| 『備後国風土記』逸文の蘇民将来と茅の輪 | 単 | 2014年12月1日 | 怪43号（角川書店） | | pp.222～226 |
| 自然と文化のミトノマグハヒ―「蛇聟入・苧環型」の中心と周縁 | 単 | 2015年2月1日 | 大学共同利用機関法人<br>人間文化研究機構<br>連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」<br>最終年度成果報告書 | | pp.221～227 |
| 道路鬼と道饗祭 | 単 | 2015年4月1日 | 怪44号（角川書店） | | pp.52～56 |
| 平安京のミステリアスな身体感覚―ミステリアス京都5 | 単 | 2015年7月1日 | 創造する市民―京都通の文化誌　第105号（京都市生涯学習財団） | | pp.11～18 |
| 『妖怪ウォッチ』の見た世界 | 単 | 2015年9月1日 | 子どもの文化第47巻8号<br>（子どもの文化研究所） | | pp.4～10 |
| 正月の餅が血に染まった村―餅なし正月の伝承 | 単 | 2015年12月1日 | 怪46号（角川書店） | | pp.44～47 |
| 喜んで鬼となった男<br>出口王仁三郎そして亀岡 | 単 | 2016年3月1日 | 怪47号（角川書店） | | pp.232～235 |
| 重層的で円環的な神話空間 | 単 | 2016年3月1日 | 宗教民俗研究24・25合併号<br>（日本宗教民俗学会） | | pp.1～14 |
| 荒ぶる神・ゴジラと道饗祭 | 単 | 2018年2月1日 | 子どもの文化第50巻2号<br>（子どもの文化研究所） | | pp.8～13 |
| 妖怪文化はすべてに通ず―大学で妖怪を学ぶ | 単 | 2018年3月30日 | 怪52号（角川書店） | | pp.70～73 |
| 生命としての景観 | 単 | 2018年11月20日 | 人間文化研究第41号<br>（京都学園大学人間文化学会） | | pp.1～33 |
| 平安京的言説―名古屋城邑的怪異空間 | 単 | 2019年3月23日 | 中日妖怪学研究考題検討会　会議手册（中国民俗学会、清華大学歴史系、北京民俗研究院、国際日本文化研究センター） | | pp.11～25 |
| その他 | | | | | |
| 2010年度加賀市総合民俗調査報告書1（大聖寺城下町） | 単 | 2011年3月1日 | 加賀市 | | A4版124頁 |
| 2010年度加賀市総合民俗調査報告書2（加賀市全域） | 単 | 2011年3月1日 | 加賀市 | | A4版112頁 |
| 妖怪がいっぱいの丹波亀岡 | 単 | 2011年8月1日 | 亀岡市民新聞第1299号 | | |
| 亀岡生まれの妖怪に迫る<br>（インタビュー） | 単 | 2012年3月1日 | 週刊京都民報第2526号 | | |
| 蛇とのまぐはひ | 単 | 2012年3月1日 | 怪35号（角川書店） | | pp.278～279 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| 特集妖怪と文化（講演録） | 単 | 2012年3月1日 | Manabian No.31、<br>財団法人生涯学習かめおか財団情報誌 | | pp.6～7 |
| 「名作を旅してみれば　第二回『羅生門』」<br>（テレビ出演：平安京の怪異の解説と案内） | 共 | 2012年12月1日 | BSフジ | 出演：佐野史郎・近藤サト | 60分 |
| 「有名な妖怪　丹波多い」（紹介記事） | 共 | 2013年2月1日 | 京都新聞平成25年2月18日 | 小松和彦 | 23面丹波版 |
| 『日本怪異妖怪大事典』 | 共 | 2013年7月1日 | 東京堂出版 | 小松和彦・佐々木高弘他 | pp.64～65,114～115,190～191,200～201,211～212,602～604 |
| ビーバップ！ハイヒール＃395「歴史と伝説のロマン溢れる！関西山岳ミステリーランキング」 | 共 | 2013年8月1日 | 朝日放送 | 出演：ハイヒール、筒井康隆他 | 60分 |
| にぎわいラジオ「かめおか未来びと」 | 共 | 2013年8月1日 | FM79.7　三条ラジオカフェ<br>（NPO京都コミュニティ放送） | 出演 | 15分 |
| 「なぜ河童伝承　語り継がれてきたか　河童伝承、南部に集中　京都学園大学　佐々木教授は語る」 | 共 | 2013年8月1日 | 奈良日日新聞第19153号<br>（株）奈良日日新聞社 | 取材 | |
| 『入門百科＋日本ふしぎ大発見ミステリー体験』 | 共 | 2013年12月1日 | 小学館 | 山口直樹 | p.108 |
| 「怖いけど人気！？リアルなカッパ出現する池…」 | 共 | 2014年4月1日 | 朝日放送ニュース・キャスト | | 16:58～19:00 |
| 「木曜スペシャル　探訪！京都巡礼団：結界に守られし都の秘密」 | 共 | 2014年7月1日 | BS日テレ | 出演：佐野史郎・荒俣宏・小松和彦・近藤サト | 19:00～20:54 |
| 「首切れ馬」の走る場所―徳島県板野町の伝承から | 単 | 2014年7月1日 | 怪42（角川書店） | | pp.270～271 |
| 「木曜スペシャル　探訪！京都巡礼団2：朝廷VS武家　権力者が信じた秘密の力」 | 共 | 2014年12月1日 | BS日テレ | 出演：佐野史郎・荒俣宏・近藤サ | 19:00～20:54 |
| 「怪異伝承が見せる風景と現実の場所を追って」連載スポットライトは焼酎火第二十二回『妖怪文化の民俗地理』 | 単 | 2015年1月1日 | 幽22号（角川書店） | | pp.414～417 |
| 「COOL JAPAN～発掘！かっこいいニッポン～「妖怪」」 | 共 | 2015年5月1日 | BS・NHK | 出演：荒俣宏、鴻上尚史 | 18:00～18:46 |
| 企画展「闇からのぞいた平安京―辻々を妖怪たちが闊歩する―」（展示画像10点の解説、ちらしの解説文） | 単 | 2015年6月～11月 | 京都市平安京創生館 | | |
| 異界の風景 | 単 | 2015年6月1日 | 2015年度入学試験問題集 | | 中部大学（中部大学ホームページ） |
| 日本人のDNAに組み込まれたあやしいもの（インタビュー記事） | 単 | 2015年7月1日 | Partner2015.7,どりむ社 | | pp.2～3 |
| 平安京の闇、ベスト10は？　京都で怪異・妖怪の企画展（インタビュー記事） | 単 | 2015年7月1日 | 京都新聞 | | |
| 光秀の消えた城下で妖怪宝探し　亀岡で京都学園大生企画（インタビュー記事） | 単 | 2015年7月1日 | 京都新聞 | | |
| 平成27年度　丹波亀山城宝さがしゲーム（企画） | 単 | 2015年7月～12月 | 一般社団法人亀岡市観光協会 | | |
| 水の怪・蛇聟入 | 単 | 2015年7月1日 | 怪45（角川書店） | | pp.78～79 |
| ビーバップ！ハイヒール＃497「神様になった動物たち～狐・猿・鹿に百足…なぜ崇められる！？」 | 共 | 2015年9月1日 | 朝日放送 | ハイヒール、ブラックマヨネーズ、たむらけんじ、三戸なつめ、筒井康隆、江川達也 | 23:17～0:17 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| 異形に感じる霊力―動物を祀る日本人（インタビュー） | 単 | 2015年12月1日 | 朝日新聞（夕刊） | | |
| 「高島礼子　日本の古都～その絶景に秘められた物語」 | 共 | 2016年1月1日 | BS-TBS | 高島礼子・ジェフ・バークランド | 19:00～20:54 |
| 「おちゃのこ　Sai Sai #761」『関西満載　いらっSai』 | 共 | 2016年2月1日 | J:COMTV | | 17:00～17:53 |
| 怖い存在から娯楽対象に―江戸時代の妖怪観（インタビュー） | 単 | 2016年6月1日 | 朝日新聞（夕刊） | | |
| 「所さんの日本の出番：京都の魔界スポットで最強の御利益SP」（テレビ出演） | 共 | 2016年7月19日 | MBSテレビ | 所ジョージ、ビビる大木、中丸雄一他 | 19:00～20:57 |
| 地理学から捉える伝承―記憶する場所・景観 | 単 | 2017年3月31日 | 人文地理69巻1号 | | 149頁 |
| 書評：本多健一：京都の神社と祭り―千年都市における歴史と空間、中公新書、2015年、256p | 単 | 2017年7月1日 | 地理学評論Vol.90, No.4 | | pp.410～412 |
| 関西テレビ・報道ランナー「関西に”天の川”が4つ存在！？知られざる七夕伝説をギモン調査」（テレビ出演：七夕伝説の解説） | 単 | 2017年7月7日 | 関西テレビ | | 16:47～19:00 |
| その他（口頭発表） | | | | | |
| BS-NHKプレミアム「京都異界中継―あなたの知らないもう一つの京都がある！」（テレビ出演：平安京の妖怪出没地の解説 | 共 | 2017年8月9日 | NHK | 夢枕獏・小松和彦他 | 19:00～23:00 |
| 『47都道府県別・妖怪伝承百科』の「26　京都府」 | 単 | 2017年9月25日 | 丸善出版 | | pp.181～186 |
| 風景の怪―アニメの風景と妖怪 | 単 | 2017年10月12日 | 怪51（角川書店） | | pp.42～44 |
| MBSテレビ・マツコ知らない世界「ウルトラマン＆ゴジラ！怪獣から学ぶ」（オープンキャンパスの模擬授業「ゴジラと妖怪」の紹介） | 共 | 2017年10月24日 | MBSテレビ | | 20:57～21:57 |
| 平等院に封じられた日本三代妖怪―都の要衝、怪異と関係 | 単 | 2018年8月28日 | 京都新聞デジタル版 | | |
| 言説と古代地理空間 | 単 | 2018年11月15日 | 2018年人文地理学会大会<br>研究発表要旨 | | pp.110～111 |
| 書評：『文化を映す鏡を磨く―異人・妖怪・フィールドワーク』 | 単 | 2019年3月31日 | 口承文芸研究第42号 | | pp.223～226 |
| その他（口頭発表） | | | | | |
| 亀岡の妖怪－地理的政治的位置から見た（講演） | 単 | 2012年10月1日 | 「第3回亀岡・練り物行列」<br>京・くろかる隊の演目について<br>ガレリアかめおか | | |
| 大学における妖怪文化教育（講演） | 単 | 2012年11月1日 | 2012年度京都学園大学人間文化学部・小松和彦特別招聘客員教授シンポジウム、<br>目白ファッション＆アートカレッジ | | |
| 妖怪文化の民俗歴史地理学―丹波国の妖怪伝承を事例に（講演） | 単 | 2012年11月1日 | 「綾部学」（京都学園大学講義体験・京都府立綾部高等学校）、<br>京都学園大学 | | |
| 丹波亀岡と妖怪文化（講演とシンポジウム「なぜ妖怪か？―地域・文化を理解するために」のコーディネーター） | 共 | 2013年2月1日 | 第76回丹波学トーク「京都丹波妖怪文化論―世界に誇る日本文化」、<br>ガレリア亀岡（財団法人生涯学習かめおか財団） | | |
| 重層的で円環的な神話空間 | 単 | 2013年6月1日 | 第23回日本宗教民俗学会<br>シンポジウム | | |
| 亀岡の妖怪文化―亀岡の歴史と地理から見た妖怪のお話 | 単 | 2013年8月1日 | 2013年度（社）亀岡青年会議所<br>8月交流例会 | | |
| 怪異・妖界の場所論 | 単 | 2013年9月1日 | 東アジア恠異学会<br>第87回定例研究会 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表　続き） | | | | | |
| 渡辺綱と妖怪退治 | 単 | 2013年11月1日 | 2013年度京都学園大学人間文化学部・小松和彦特別招聘客員教授シンポジウム | | |
| 「怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から―」総合討論の司会とコメント | 共 | 2013年11月1日 | 第45回国際日本文化研究センター国際研究集会 | | |
| 『聖城怪談録』と妖怪 | 単 | 2014年7月1日 | 大聖寺怪談会2<br>（主催：大聖寺文化協会、後援：大聖寺地区まちづくり推進協議会） | | |
| 妖怪文化入門―怪異と妖怪の京都を歩く | 単 | 2014年8月1日 | アスニーセミナー、京都アスニー（京都市生涯学習総合センター） | | |
| 妖怪文化の伝統と創造 | 単 | 2014年9月1日 | 京都学園大学父母の会後援会<br>第9回講演会 | | |
| 神話の風景と妖怪 | 単 | 2014年11月1日 | 第6回　東京妖怪シンポジウム（2014年度京都学園大学人間文化学部・小松和彦特別招聘客員教授シンポジウム） | | |
| 『尾張霊異記』の怪異・妖怪と名古屋城下町 | 単 | 2015年1月1日 | 国際日本文化研究センター・シンポジウム「怪異・妖怪文化研究の現在」 | | |
| 闇からのぞいた平安京―辻々を妖怪たちが闊歩する― | 単 | 2015年6月1日 | 京都市平安京創生館 | | |
| 亀岡の由緒正しき妖怪たち―妖怪ウオッチング！ | 単 | 2015年8月1日 | 第9回亀スゴっ！亀岡の魅力を話そう！（主催：亀岡みらいパース、後援：亀岡市、京都新聞、朝日新聞京都総局、毎日新聞京都支局）、法華寺 | | |
| 愛宕山周辺の歴史と伝承―信仰を支える森林探訪 | 単 | 2015年9月1日 | 第40回全国育樹祭開催記念事業、第3回林業大学校公開講座「森の京都学」―京都の森の文化を再発見・発信、京都府農林水産部、保津町公民館 | | |
| 民俗社会への回帰？ | 単 | 2015年11月1日 | 第7回　東京妖怪シンポジウム（2015年度京都学園大学人間文化学部・小松和彦特別招聘客員教授シンポジウム）、目白ファッション＆アートカレッジ | | |
| 動物を祀る日本人―異形に感じる霊力 | 単 | 2016年2月1日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 七夕伝承と渡来人―枚方・交野の民俗学 | 単 | 2016年6月1日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 江戸時代の妖怪観―歴史地理学入門 | 単 | 2016年7月14日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 江戸時代の妖怪観2―歴史地理学入門 | 単 | 2016年8月25日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 地理学から捉える伝承―記憶する場所・景観 | 単 | 2016年10月22日 | 人文地理学会・第145回歴史地理研究部会、関西大学千里山キャンパス | | |
| 福島の昔話と妖怪の解説、シンポジウムのパネラー | 単 | 2016年11月6日 | 第8回妖怪シンポジウムinふくしま「災害と妖怪」（2016年度京都学園大学特別招聘客員教授公開講演会・共催：NPO語りと方言の会）、ミューカルがくと館（郡山市音楽・文化交流館） | | |
| 「仮装行列―大坂1856年の俄祭り」（福原敏男・武蔵大学）、「中国における妖怪研究の動向―近代化を経て現代へ」（王鑫・北京大学）のコメンテイター | 単 | 2017年1月7日 | 大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出・近世班　第1回研究会、国際日本文化研究センタ | | |
| 『古事記』の三輪山神話と古代王権―歴史地理学入門 | 単 | 2017年1月12日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 御霊会としての祇園祭 | 単 | 2017年1月13日 | 京町家新柳居市民講座、<br>京都学園大学京町家「新柳居」 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 開拓神話としての亀岡祭―神話・祭そして妖怪 | 単 | 2017年1月20日 | 京町家新柳居市民講座、<br>京都学園大学京町家「新柳居」 | | |
| 『日本書紀』の大化改新の詔と畿内制―歴史地理学入門 | 単 | 2017年2月9日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 御霊信仰と平安京（講演）＋高校2年生の模擬ゼミ | 単 | 2017年2月23日 | 高大連携「妖怪を通して見る日本の歴史と文化」、京都府立須知高校 | | |
| 『風土記』の説話と大和の王権―歴史地理学入門 | 単 | 2017年3月9日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 「朝顔の予言・再考―消費を考える」（貞包英之・山形大学）、「三遊亭円朝の怪談噺における近世と近代」（横山泰子・法政大学）のコメンテイター | 単 | 2017年3月18日 | 大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出・近世班　第2回研究会、国際日本文化研究センター | | |
| 妖怪文化研究とは―本当に妖怪はいない？ | 単 | 2017年4月13日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 怪異妖怪を目撃した人たち―本当に妖怪はいない | 単 | 2017年5月11日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 妖怪の存在意義―本当に妖怪はいない？ | 単 | 2017年6月8日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 古地図に見る妖怪の出没場所―妖怪はどこに現れたのか？ | 単 | 2017年7月1日 | NHK文化センター京都教室 | | |
| 妖怪研究の歴史と現状―本当に妖怪はいない？ | 単 | 2017年7月13日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 妖怪の出没場所からみた権力の形 | 単 | 2017年8月5日 | NHK文化センター京都教室 | | |
| 山ノ下寺院群地区の怪談（講演と現地説明） | 単 | 2017年8月6日 | 第3回　聖城怪談録講座<br>『聖城怪談録』と『三州奇談』<br>（主催：大聖寺商工振興会、事務局：大聖寺怪談会実行委員会）、石川県加賀市実性院 | | |
| 平安京と妖怪―本当に妖怪はいない？ | 単 | 2017年8月10日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 大阪と妖怪―本当に妖怪はいない？ | 単 | 2017年9月28日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 一条戻り橋を訪ねる―京都の怪異空間を歩く（現地講座） | 単 | 2017年10月12日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 妖怪の聞き取り調査（講演）＋シンポジウムのパネラー | 単 | 2017年11月4日 | 第9回妖怪シンポジウムinふくしま「語りと妖怪研究」（2017年度京都学園大学特別招聘客員教授公開講演会・共催：NPO語りと方言の会）、市民交流プラザ大会議室（ビッグアイ6階） | | |
| 内裏周辺の怪異を探る―京都の怪異空間を歩く（現地講座） | 単 | 2017年11月9日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 「鬼魅の名は―「妖怪バブルの時代」としての近代」（香川雅信・兵庫県立歴史博物館）、「開かれた化物絵」（木場貴俊・日文研）のコメンテイター | 単 | 2017年11月18日 | 国際日本文化研究センター<br>機関拠点型基幹研究プログラム<br>「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」近世班<br>2017年度第2回研究会、国際日本文化研究センター | | |
| 東山の怪異を訪ねる―京都の怪異空間を歩く（現地講座） | 単 | 2017年12月14日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 昔話のなかの妖怪―民話のなかの妖怪 | 単 | 2018年1月11日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 伝説のなかの妖怪―民話のなかの妖怪 | 単 | 2018年2月8日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 「「妖怪文化」を超えて―21世紀妖怪研究の成果と展望」（廣田龍平・筑波大学人文社会学研究科　歴史・人類学専攻　一貫性博士課程）のコメンテイター | 単 | 2018年3月3日 | 国際日本文化研究センター　機関拠点型基幹研究プログラム「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」近世班　2017年度第3回研究会、国際日本文化研究センター | | |
| 神話のなかの妖怪―民話のなかの妖怪 | 単 | 2018年3月8日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表　続き） | | | | | |
| 妖怪のデータ整理と分析理論を学ぶ―大学で教える妖怪研究 | 単 | 2018年4月12日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 妖怪が語られる地域社会を分析する―大学で教える妖怪研究 | 単 | 2018年5月10日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 妖怪が語られる時代の特性を分析する―大学で教える妖怪研究 | 単 | 2018年6月14日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 怪異・妖怪文化から見た古代国家の領土観―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2018年7月19日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| 宇治にまつわる怪異・妖怪の文化 | 単 | 2018年8月26日 | 宇治市生涯学習センター | | |
| 古代の都城と怪異・妖怪文化―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2018年8月30日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| 交野ヶ原の天体伝承 | 単 | 2018年9月9日 | 枚方市民会館本館（ひらかたNPOフェスタ2018・七夕歴史講演会）、<br>天の川七夕星まつりの会、天の川・交野ヶ原日本遺産プロジェクト主催 | | |
| 現代の怪異・妖怪文化に見る古代律令国家の痕跡―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2018年9月20日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| Jホラーに見る妖怪文化―映画の中の妖怪文化 | 単 | 2018年10月11日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 日本アニメに見る妖怪文化―映画の中の妖怪文化 | 単 | 2018年11月8日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 鬼の棲み家の歴史地理 | 単 | 2018年11月17日 | 第10回妖怪シンポジウムin岡山<br>「岡山と妖怪」（2018年度京都学園大学特別招聘客員教授公開講演会）、<br>岡山県立美術館講義室 | | |
| 言説と古代地理空間 | 単 | 018年11月24日・25日 | 2018年人文地理学会大会、奈良大学 | | |
| 怪獣映画に見る妖怪文化―映画の中の妖怪文化 | 単 | 2018年12月13日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 神話を歴史地理学で研究する―神話世界の風景を探求する | 単 | 2019年1月10日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 怪異・妖怪文化の歴史―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2019年1月17日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| 世界の神話で描かれた昆虫と風景―神話世界の風景を探求する | 単 | 2019年2月14日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 怪異・妖怪文化の研究史―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2019年2月21日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| 日本神話の土蜘蛛と蛇の風景―神話世界の風景を探求する | 単 | 2019年3月14日 | 朝日カルチャーセンター<br>くずは教室 | | |
| 怪異・妖怪文化と古代律令―怪異・妖怪文化を通して見る古代律令国家の姿 | 単 | 2019年3月21日 | 近鉄文化サロン阿倍野 | | |
| 日本における怪異・妖怪の循環ネットワーク | 単 | 2019年3月23日 | 中日妖怪シンポジウム、北京東嶽廟<br>（中国民俗学会事務局） | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 人文地理学会会員 |
| | 日本地理学会会員 |
| | 歴史地理学会会員 |
| | 日本民俗学会会員 |
| | 日本文化人類学会会員 |
| | 日本口承文芸学会会員 |
| 2007年6月～2011年3月 | 加賀市総合民俗調査委員会委員 |
| 2005年4月～2013年3月 | 国際日本文化研究センター共同研究員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2018年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　手塚　恵子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 民俗学のフィールドワークを通じて学生が地域協働を学ぶ | 2012年より現在 | 春学期に大学の地元のNPO団体および保津川遊船組合と協同して、保津川フィールドワークを学生と共に実施し、かつて稼働していた船の川上りルートの一部復元に取り組んでいる。秋学期には学生とともに地元の祭祀組織と協働して、亀岡祭の運営および民俗調査に取り組んでいる。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 地域社会における民俗学の実践 | 2012年9月<br>2013年9月<br>2014年2月、12月<br>2016年9月<br>2017年2月、12月<br>2019年2月 | 2014年2月および12月に、京筏組の構成メンバーとして、40年ぶりとなる12連筏の復活運行を実践した。学生と共に、材木の切り出し、鍛冶屋におけるカン(筏材を連結部材)の制作、筏運航の技術について、聞き書きをおこなうと共に、プロジェクトの当日は、筏の組み立て、解体、運航の映像記録などを担当した。2017年2月にも12連筏の復活運航に取り組み、その映像をドローン等で撮影した。2012年、2013年、2014年、2016年の9月には、亀岡市保津川での京筏組の筏復活事業「筏に乗ってみよう」において、学生と共に筏の運航や展示ブースの運営などを担当した。これらの一連の活動が評価され、第40回全国育樹祭において表彰された。2017年12月2019年2月に京都市の助成金を受けて、嵐山で、12連筏の復活プロジェクトを主催し、筏の組み立ておよびプロジェクトの記録を行った。復活プロジェクトは京都新聞、毎日新聞に大きく取り上げられ、また、京都府が申請した「日本遺産」の構成要素となった。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 京の筏　コモンズとしての保津川 | 共 | 2016年3月 | ナカニシヤ出版 | 手塚恵子、大西信弘、原田禎男 | pp.i-v,pp.3-15,pp.35-60,pp.77-97,pp137-152,pp.199-211,pp219-253 |
| 歌を掛け合う人々　東アジアの歌文化 | 共 | 2017年 | 三弥井書店 | 真下厚、手塚恵子、岡部隆志、張正軍 | pp.67-124 |
| 文化を映す鏡を磨く | 共 | 2018年 | せりか書房 | 橘弘文、手塚恵子 | pp.227-243,pp294-297 |
| 論文 | | | | | |
| 保津川の筏を復活する | 単 | 2015年 | 京都学園大学<br>『総合研究所所報』16号 | | pp.41-46 |
| 桂川の水運に関する慣行について－筏と船の操船と川作を中心として－ | 単 | 2015年 | 水資源・環境学会<br>『水資源・環境研究』<br>vol.28.NO.1 | | pp.52-60 |
| 思想の場としての相互唱－中国壮族の人々のうたの実践より | 単 | 2017年 | アジア民族文化学会<br>『アジア民族文化研究』16号 | | pp83.-90 |
| 比喩とは何か―壮族の人々の批評から考える― | 単 | 2018年 | アジア民族文化学会<br>『アジア民族文化研究』17号 | | pp.111-122 |
| 山と書くな―壮族の古壮字と日本の訓仮名をめぐって― | 単 | 2019年 | 成城大学<br>社会イノベーション学会<br>『社会イノベーション研究』<br>14号 | | pp.－107－117 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表） | | | | | |
| 山と街を繋ぐ川ー京筏組の実践ー | 単 | 2014年10月 | 日本民俗学会第66回年会 | | |
| ダム後の流域再生における研究者の役割ー保津川におけるNPOの活動からー | 単 | 2016年5月 | 日本文化人類学会第50回研究大会 | | |
| シンポジウム「うたの意味はどこにあるか」 思想の場としての相互唱ー中国壮族の人々のうたの実践より | 単 | 2016年11月 | アジア民族文化学会2016年度秋季大会 | | |
| うたいもの研究の位置づけ | 単 | 2017年5月 | 日本歌謡学会春季大会 | | |
| 地域アート―京都の事例から考える― | 単 | 2017年10月 | 日本民俗学会第69回年会 | | |
| シンポジウム「歌の修辞―アジア・日本」 比喩とは何か―壮族の人々の批評から考える― | 単 | 2017年10月 | アジア民族文化学会2017年度秋季大会 | | |
| 研究助成 | | | | | |
| 「保津川の筏下り技術の記録と再現ー亀岡と京都をつなぐ自然・文化・経済の回廊の再興ー | 共同 | 2013年4月～2015年3月 | 京都学園大学共同研究（1種） | | |
| 中国壮族における文字文化の継承についての人類学的研究 | 単 | 2014年4月～2017年3月 | 文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C） | | |
| 嵐山における12連筏の復活プロジェクト | 共同 | 2017年8月～2018年3月<br>2018年8月～2019年3月 | 右京区まちづくり支援制度助成金事業 | | |
| 中国壮族の掛け合い歌におけるオラリティとリテラシー | 単 | 2018年4月～2022年3月 | 文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C） | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2015年5月～2018年5月 | アジア民族文化学会代表 |
| 2018年5月～現在 | 社団法人アジア民族文化学会　理事 |
| 2017年12月～現在 | 比較日本文化研究会運営委員 代表 |
| 1989年4月～現在 | 説話伝承学会会員 |
| 2000年4月～現在 | 日本民俗学会会員 |
| 1989年4月～現在 | 日本文化人類学会会員 |
| 2015年4月～現在 | 日本歌謡学会　評議員 |
| 2008年4月～現在 | 京筏組（保津川筏復活プロジェクト連絡協議会）メンバー |
| 2013年4月～現在 | 亀岡市総合計画審議会委員 |
| 2014年4月～現在 | 亀岡市　川と海のつながり共創プロジェクト委員 |
| 2017年4月～現在 | 京都府内水面漁場管理委員会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

質的調査法による文化資源の調査、それにもとづく地域振興策の提案

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　丸田 博之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 科目　異文化交渉史 | 2017年4月～ | 授業の始めに、しっかりとした授業計画を学生に提示し、それに従って計画性のある講義を行っている。学生による授業評価は良好である。又、毎回の授業で関連事項の資料プリント、特に当代の影印資料を配布し、学生の興味を喚起するように工夫している。 |
| 科目　日本語Ⅰ(留学生) | 2011年4月～ | 留学生の数が増えるにしたがって、能力的に多少バラつきのある学生を指導対象にしなければならなくなる。そこで、標準的な教科書を軸にしながら、やや難しい教材とやや易しい教材とを別に用意し、それらを併用することによって、すべての受講生の要求に応じる体制をとっている。 |
| 科目　京都学購読 | 2016年4月～ | 京都についての古今東西の書物を原典で通読し、その時代の文化、歴史的背景を読み解く練習を行う。この購読は、次年度の専門演習につながるものであり、最終的には卒業論文としてその調査力・課題発見力・リテラシー能力の結実をみる端緒となるべき授業である。毎回学生に担当箇所を通読させて基礎的な知識の注入にも配慮している。 |
| 科目　京都文化学概論 | 2016年4月～ | 主として、中世・近世の時代の変わり目を中心に据え、京都と鎌倉、京都と江戸との関係を朝廷と武士の関係を視座に据えて、多角的な検討を行う。これまで学生は、教科書、テレビドラマなどの媒体を通して日本史の知識を得ているが、そのことへの反省を促し、歴史を見る場合の基礎的態度を示すことによって、新たな歴史学文化学の学習能力を養成する。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 京都府中学校・高等学校国語科実践講座<br>「国語学(日本語学)と国語科教育のはざまで」 | 2011年8月2日 | 京都府総合教育センター主催。<br>国語科担当教諭(中・高・特支)の「中学校・高等学校の国語科における目標を実現するための専門的内容を学び、事業実践力の向上を図る」ことを目的に開催されたもの。 |
| 京都府中学校・高等学校国語科実践講座<br>「文語文法と口語文法の意味するもの」 | 2012年8月8日 | 京都府総合教育センター主催。<br>国語科担当教諭(中・高・特支)の「中学校・高等学校の国語科における目標を実現するための専門的内容を学び、事業実践力の向上を図る」ことを目的に開催されたもの。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 『人文学のすゝめ』 | 2014年5月1日 | 京都学園大学京都太秦キャンパス開設記念 |
| YMCA　ワイズメンズクラブ総会において「武士の言葉は京言葉」講演 | 2014年10月9日 | 全日空ホテル |
| YMCA　ワイズメンズクラブ例会において「京都と武士」講演 | 2015年5月13日 | ウェスティン都ホテル |
| 京都アスニーセミナー講演　「『京言葉』の真相を探る」 | 2018年5月25日 | 京都市生涯学習総合センター |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 「巴里の華が京に咲く」 | 単 | 2014年3月 | 『人間文化研究　32号』<br>京都学園大学人間文化学会 | | |
| 「新聞記者の矜持」 | 単 | 2018年3月 | 『人間文化研究　40号』<br>京都学園大学人間文化学会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2006年4月～現在 | 日本語学会会員 |
| 2006年4月～現在 | 訓点語学会会員 |
| 2006年4月～現在 | 近代語学会会員 |
| 2011年5月14日 | 亀岡市民新聞(コラム掲載)〔丹波の方言と「美しい」という語の関係性について述べたコラム。〕 |
| 2013年2月15日 | 京都学園大学京町家キャンパス　新柳居市民講座『思いがけない日本語の話』第2回　「日本語と武士」について講演。 |
| 2013年11月30日 | 京都学園大学父母の会主催講演会「京都語と武士」について講演。 |
| 2015年7月22日 | フジテレビ　めざましテレビ　最強方言自慢　監修 |
| 2016年 | 日本テレビ　究極○×クイズ　日本語学関係　監修 |
| 2017年4月28日 | よみうりテレビ　情報番組ten.　出演 |
| 2018年2月6日 | TBSテレビ　「この差ってなんですか　2時間スペシャル」出演 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　山本 淳子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 積極的授業参加(発言)の得点化 | 2007年春学期以降 | 授業内での作品の朗読・意見の発言について、点数を加算することとし、学生にもそれを明示した。発言の機会には挙手を求め、すべての学生に発言のチャンスがあるようにしている。積極的に挙手する学生が増加し、授業への意欲がみられるようになった。 |
| 文学の授業にほぼ毎時間ビジュアル資料を導入 | 2008年以降 | 文学の補助教材として、ほぼ毎時間DVD・PP・現物投影機によりビジュアル資料を活用している。平安京・貴族の寝殿造邸宅・その中の暮らし・絵巻物等理解に役立ち、好評を得ている。特に2015年は、新学部新学科の初年度対象の専門科目「日本文化論」で毎回必ずPPを視聴させた。学生からは平安時代が身近に感じられると好評を得た。 |
| 出席カードによるフィードバック | 2010年以降 | 出欠確認にはカードタッチシステムを使わず、A6版の出席確認用紙を渡している。その用紙には、授業の最後数分で質問を板書し、その回答を書いて提出させている。手渡し時と問題提示時に教室内にいた者だけが回答できる仕組みである。授業内容の理解度の確認に役立つほか、学生からの要望・質問も常時受け付けられ、「タッチ逃げ」の不正もない。学生に授業評価アンケートでこのことの是非を問うたところ、不正がないこと・教員と意見を交せることが好評であった。なお、書かれた回答については次時の導入で取り上げ、復習に役立てている。 |
| ゼミにおけるディープラーニングの試み | 2019年度 | 「専門ゼミA」の授業では、本学の卒業論文の事例として『学生論文集』所載の論文を学生に読ませているが、発表担当の学生に比べフロアの学生は予習をせず場当たり的な対応であることが気になっていた。そこで19年度は、発表担当を個人ではなくチームにさせるとともに、チームが教員役としてフロアの学生に論文を教えるディープラーニングの方法を取り入れた。朗読、難解な言葉の説明、発問による質疑と理解の促しなど、骨格を提示したうえで実行中である。学生が全員で同じ教材を共有するという、第一段階の目的は果たせつつある。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 滋賀県立彦根東高校<br>入学試験(国語)の問題本文に著書の一部が使用された | 2018年入試 | 著書『枕草子のたくらみ　春はあけぼのに秘められた思い」より |
| 東京都立西高校<br>入学試験(国語)の問題本文に著書の一部が使用された | 2018年入試 | 著書『枕草子のたくらみ　春はあけぼのに秘められた思い」より |
| 私立東大寺学園<br>入学試験(国語)の問題本文に著書の一部が使用された | 2018年入試 | 著書『枕草子のたくらみ　春はあけぼのに秘められた思い」より |
| 岡山県立高校(特)<br>入学試験(国語)の問題本文に著書の一部が使用された | 2018年入試 | 著書『枕草子のたくらみ　春はあけぼのに秘められた思い」より |
| 長崎県公立高校<br>入学試験(追試験)の問題本文に著書の一部が使用された | 2018年入試 | 著書『枕草子のたくらみ　春はあけぼのに秘められた思い」より |
| 著書を本文として一部使用した入学試験問題が参考書・問題集に掲載された | 2018年 | 旺文社・Z会・日本図書教材協会・学究社・ベネッセ・東京書籍等 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 京都府立須知高校高大連携事業・出張講義 | 2015年2月10日 | 枕草子の秘密～春はなぜあけぼのなのか～ |
| 京都府立南丹高校　京都文化学　授業 | 2015年2月12日 | 枕草子について |
| 京都府立嵯峨野高校<br>特別講義とフィールドワークフィールドワーク | 2015年6月12日・<br>11月13日 | 源氏物語に託されたもの・大覚寺フィールドワーク |
| 京都府立園部高校中高一貫コース「研究者に聴く」協力 | 2015年8月10日 | 生徒上林未菜さんの質問「古典文学の魅力」等に回答 |
| 京都府立清明高校 | 2015年11月2日 | 古典文学の楽しさ――陰陽師・安倍晴明の活躍と素顔 |
| 大阪府国語研究会 | 2015年12月4日 | 紫式部の思い――人生と作品 |
| 京都市立紫野高校人文セミナー | 2016年2月2日 | 本当にあった源氏物語――作者の問いかけるもの―― |
| 京都府立南丹高校　高大連携授業 | 2016年2月10日 | 陰陽師・安倍晴明　その実像と文学 |
| 京都府立須知高校 | 2016年2月18日 | 王朝の恋の手紙たち |
| 京都府立嵯峨野高校SGHラボ授業 | 2016年6月24日 | 源氏物語0時間目 |
| 埼玉県私立開智未来中学高校　探求授業 | 2016年6月15日 | 中学2年生中根千尋さんの質問<br>「源氏物語に見られる日本の思想」等に回答 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 京都府立嵯峨野高校<br>SGHラボ特別授業とフィールドワーク | 2016年7月8日・10月28日 | 『源氏物語』について・大覚寺フィールドワーク「平安貴族の生活について」 |
| | 梅花女子大学文化表現学部　日本文化創造学会講演会 | 2016年11月21日 | 源氏物語の成立事情準拠の方法――定子・楊貴妃・桐壺更衣―― |
| | 京都府立高等学校国語科研究会　丹後部会 | 2017年1月27日 | 清少納言と百人一首 |
| | 京都府立嵯峨野高校<br>SGHアカデミックラボ課題研究発表会 | 2017年2月11日 | 源氏物語ラボの生徒発表<br>「源氏物語恋みくじ」「源氏物語漬物セット」にコメント |
| | 京都府立高等学校国語科研究会　中丹部会 | 2017年2月21日 | 清少納言と百人一首 |
| | 京都市立紫野高校　人文セミナーⅡ　源氏物語研究 | 2017年2月23日 | 紫式部はなぜ学問の才能を隠したか<br>――『枕草子』「香炉峰の雪」と紫式部 |
| | 京都府立南丹高校　京都文化学入門 | 2017年3月2日 | 邪と怪異の平安京 |
| | 京都府立嵯峨野高校<br>特別講義とフィールドワークフィールドワーク | 2017年6月9日・10月13日 | 『源氏物語』について・大覚寺フィールドワーク「平安貴族の生活について」 |
| | 京都府立嵯峨野高校　探究学習の指導 | 2017年12月15日 | 「京・平安文化論」の「源氏物語スタンプラリー」について |
| | 京都府立高校国語研究会　南山城支部研修会 | 2018年1月26日 | 清少納言と百人一首 |
| | 京都市立紫野高校　人文セミナーⅡ　源氏物語研究 | 2018年2月8日 | 源氏物語第二部・光源氏の人生振り返り～汝の父に似ることなかれ～ |
| | 京都府立嵯峨野高校　探究学習の指導 | 2018年2月9日 | アカデミックラボ課題研究発表会 |
| | 京都府立須知高校　高大連携事業 | 2018年2月13日 | 平安貴族の一生・一日 |
| | 京都府立南丹高校 「京都文化学入門」 | 2018年2月22日 | 平安時代の文学や暮らしについて |
| | 亀岡市小学校教育研究会 | 2018年5月9日 | 『枕草子』の成立背景の講演と相手のために書く作文の実習 |
| | 京都府立嵯峨野高校<br>特別講義とフィールドワークフィールドワーク | 2018年6月29日<br>2019年1月25日 | 『源氏物語』について・大覚寺フィールドワーク「平安貴族の生活について」 |
| | 京都府立田辺高校　総合的な学習の時間「探求古典」 | 2018年9月14日 | 平安貴族の結婚と恋愛　文付け枝作り実習付き |
| | 金沢大学附属中学校創立七十周年記念式典講演 | 2018年10月5日 | 春はあけぼの　枕草子の秘密 |
| | 長野県国語教育研究会第一回全県研究会 | 2018年10月21日 | 教室から王朝の時空に　清少納言と紫式部 |
| | 京都府立嵯峨野高校　探究学習の指導 | 2018年10月28日～11月4日 | ちゅう源氏と巡る京都スタンプラリー |
| | 茗溪学園中学校京都研修 | 2018年12月4日 | 源氏物語から学ぶ平安貴族の文化について |
| | 京都府立南丹高校「京都文化学入門」 | 2019年2月4日 | 藤原道長、望月の和歌ーその夜の月は、欠けていたー |
| | 京都市立紫野高校　人文セミナーⅡ　源氏物語研究 | 2019年2月7日 | 大学ではこう学ぶ―仮名文字資料の解読と実作― |
| | 京都府立須知高校 | 2019年2月18日 | 和歌って何？―平安和歌の役割とルール |
| 4 | その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 講演 | 紫式部顕彰会連続講座 | 2012年4月20日～2016年3月<br>毎月 | 源氏物語の時代 |
| | 京都学園大学人文学部開設記念講演会 | 2015年6月28日 | 『源氏物語』の真実 |
| | 京都学園大学人文学部開設記念講演会 | 2015年7月5日 | 川合康氏講演「平家権力の実像と『平家物語』」後のトークセッション |
| | 宇治市中央公民館　鳳凰大学 | 2015年6月19日・7月10日 | 宇治と源氏物語Ⅰ・Ⅱ |
| | 金沢古典文学愛好会集中講座 | 2015年8月18～20日 | 竹取物語を読む |
| | 宇治市源氏物語ミュージアム連続講座 | 2015年9月15日 | 紫式部と『源氏物語』 |
| | 斎宮歴史博物館歴史講座 | 2016年1月9日 | 源氏物語と斎宮 |
| | 学びのフォーラム山科 | 2016年3月2日 | 枕草子の謎～作品はなぜ守られたか～ |
| | 大阪府立中央図書館　府民講座 | 2016年3月26日 | 『源氏物語』と『枕草子』 |
| | 紫式部顕彰会連続講座 | 2016年4月15日～毎月 | 源氏物語を読む・知る・味わう |
| | ちとせ会例会 | 2016年5月27日 | 紫式部――抱き続けた思い |
| | 宇治市中央公民館　鳳凰大学 | 2016年6月24日・7月8日 | 宇治と源氏物語Ⅰ・Ⅱ |
| | 島根県教育庁　第3回古代歴史文化賞記念講演会 | 2016年7月2日 | 源氏物語』の真実 |
| | 小倉百人一首殿堂時雨殿　企画展関連講演会 | 2016年7月30日 | 渡邉あゆみアナウンサーが読む『枕草子』～研ぎ澄まされた感性に触れる～朗読・トークセッション |
| | 金沢古典文学愛好会集中講座 | 2016年8月23～25日 | 『枕草子』を読む |
| | 京都府立芸術文化会館<br>藤原道長～望月の歌から一千年～ | 2016年9月17日 | 王朝の女流作家たち |
| | 京都学園大学人文学部講演会 | 2016年9月25日 | 『源氏物語』をめぐる生と死 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 源氏物語アカデミー講演 | 2016年10月22日 | 紫式部と越の白山 |
| | 京都銀行金融大学校 | 2016年10月24日 | 『源氏物語』と紫式部の思い |
| | 京都市生涯学習振興財団<br>「ゴールデン・エイジ・アカデミー」 | 2016年11月11日 | 枕草子のひみつ |
| | 京都市生涯学習振興財団　学びのフォーラム山科 | 2017年1月25日 | 紫式部はなぜ能力を隠したか<br>～『枕草子』「香炉峰の雪」と紫式部～ |
| | 大阪府立中央図書館　府民講座 | 2017年3月25日 | 『枕草子』「香炉峰の雪」と紫式部<br>――「才女は災い」といわれる世で |
| | 宇治市中央公民館　鳳凰大学 | 2017年6月9日・7月14日 | 宇治と源氏物語①② |
| | 金沢古典文学愛好会集中講座 | 2017年8月22日・23日 | 『源氏物語』の女君　紫の上の生き方 |
| | 京町家再生研究会 | 2017年8月26日 | 在原行平をめぐる文学と伝説 |
| | 金沢大学付属高校創立70周年　知のプロフェッショナル | 2017年10月14日 | 古典文学研究のたくらみ |
| | 京都アスニーゴールデンエイジアカデミー<br>双京高僧連続講座 | 2017年10月20日 | 京都御所に見る平安文学 |
| | 京都府立芸術文化会館<br>藤原道長～望月の歌から一千年～ | 2017年11月3日 | 枕草子のたくらみ |
| | 亀岡生涯学習市民大学 | 2017年11月4日 | 枕草子のたくらみ |
| | 古典の日 5周年記念連続講座 | 2017年11月18日 | 平安文学の魅力　源氏物語～なぜ書かれ、なぜ読まれ続けるのか～ |
| | 学びのフォーラム山科 | 2018年2月14日 | 素顔の藤原道長　女たちに支えられて |
| | 泉北教養講座 | 2018年3月2日 | 定子・楊貴妃・桐壺更衣――源氏物語の準拠の方法 |
| | 宇治市源氏物語ミュージアム連続講座 | 2018年3月15日 | 清少納言と紫式部　それぞれの思い |
| | 京都アスニーゴールデンエイジアカデミー<br>双京構想連続講座 | 2018年4月13日 | 道長と紫式部――書き換えた日記の謎―― |
| | 大阪府立中央図書館　府民講座 | 2018年5月12日 | 藤原道長と『枕草子』―清少納言のたくらみ |
| | 武庫川女子大学公開講座 | 2018年7月21日 | 紫式部・『源氏物語』の「世」と「身」と「心」 |
| | 金沢古典文学愛好会集中講座 | 2018年8月21日・22日 | 源氏物語の女君―六条御息所の役割 |
| | 源氏物語夕顔之巻<br>平安朝日本語復元による試み朗読と講話 | 2018年10月8日 | 「なにがしの院」のモデル・「河原の院」と、光源氏のモデル・源融 |
| | 京都府立芸術文化会館<br>藤原道長～望月の歌から一千年～ | 2018年10月24日 | 望月の歌　新釈～十六夜の〈欠けない月〉 |
| | ほぼ日の学校番外編　たられば さん、SNSと枕草子を語る | 2018年10月29日 | 第二部　山本淳子先生と語る、枕草子の世界 |
| | 国文学研究資料館　古典の日講演会 | 2018年11月3日 | 藤原道長「望月の歌」詠歌から千年　和歌に詠まれた真の意味 |
| | 京都先端科学大学人文学部校名変更記念連続講演会<br>「みえない力の文化史」 | 2018年11月4日 | 源氏物語と怨霊―心の闇にひそむ「鬼」― |
| | 宇治市源氏物語ミュージアム連続講座　光源氏に迫る | 2018年11月9日 | 光源氏の〈光〉 |
| | 宇治市中央公民館　鳳凰大学 | 2018年6月8日・11月25日 | 宇治と源氏物語 |
| | 学びのフォーラム山科 | 2019年2月13日 | その物怪は誰だったのか<br>～『紫式部日記』が書いた物怪、『栄花物語』が書かなかった物怪～ |
| | 京都アスニーゴールデン・エイジ・アカデミー<br>平安京の魅力に迫る | 2019年4月12日 | 重層する源氏物語―紫式部旧宅跡地・廬山寺 |
| | DNP文化プログラム事業「<br>京あそび」源氏物語関屋澪標図屏風高精度複製公開 | 2019年4月13日 | 『源氏物語』「澪標」の巻と「関屋」の巻 |
| 寄稿 | 毎日新聞「今週の本棚」頁 | 2016年1月25日 | この3冊『紫式部』『紫式部伝』『紫式部日記　現代語訳付き』 |
| | 冲方丁『はなとゆめ』文庫版 | 2016年7月1日 | 解説 |
| | 雑誌『ハルメク』エッセイ | 2016年5月号～12月号 | 紫式部のないしょ話 |
| | 『本の雑誌』別冊『古典名作本の雑誌』 | 2017年8月1日 | 源氏物語現代語訳読み比べ |
| | 学会誌『中古文学』第100号 | 2017年12月1日 | 『中古文学』の過去・現在・未来「実学　古典研究のために」 |
| | 京都新聞ソフィア | 2018年1月5日 | 京都御所と火災 |
| | 光村図書『国語教育相談室』中学校　86 | 2018年4月21日 | 特集『枕草子』再研究　清少納言のたくらみ |
| | 『本の旅人』 | 2018年9月27日 | 吉海直人『古典歳時記』書評　古典で語る京都の一年（ひととせ） |
| | 公明新聞 | 2018年10月24日 | 藤原「望月の歌」詠歌から1000年 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 書道雑誌『墨』 源氏物語特集号 | 2018年10月27日 | 紫式部とその時代 |
| | 宇治市源氏物語ミュージアム 図録 | 2019年4月1日 | アニメ「ネコが光源氏に恋をした」に登場する『源氏物語』の作者・紫式部と『源氏物語』 |
| | WEB中公新書「私の好きな中公新書3冊」 | 2019年4月11日 | 教養の海へ |
| | 北國新聞 文化欄 | 2019年5月1日 | 「令和」の世、始まる 古典と共にある心強さ |
| 監修 | 小倉百人一首殿堂 時雨殿 企画展 | 2016年6月21日～8月21日 | 「百人一首と清少納言『枕草子』」の監修 |
| | 京都府立 陶板名画の庭 ライトアップ | 2016年11月26日～12月11日 | 光の庭 SCENE of GENJI |
| | ながたみどり『ちゅう源氏の源氏物語絵巻』 | 2017年11月1日 | 全体内容監修 |
| | 宇治市源氏物語ミュージアムオリジナルアニメーション「ネコが光源氏に恋をした」 | 2019年4月公開 | 全体内容監修（朧谷寿氏と共同） |
| | 月刊サクラサクライフ 源氏物語特集 | 2018年10月28日発行 | 全体的内容監修 |
| 出演 | BS-TBS「高島礼子日本の古都」 | 2015年7月8日 | 瀬戸内寂聴スペシャル 源氏物語特集 |
| | NHKワールド「Core Kyoto」 | 2015年9月3日 | 「宇治～都人あさき夢みし 別業の地～」 |
| | BS-TBS「高島礼子日本の古都」 | 2016年3月9日 | 清少納言と悲運のキサキ・中宮定子 |
| | 毎日放送「ちちんぷいぷい」 | 2016年8月9日収録 | 百人一首「相模」と大極殿跡解説 |
| | NHK[視点・論点」 | 2016年8月26日等 | 紫式部の人生と『源氏物語』 |
| | 毎日放送「ちちんぷいぷい」 | 2016年9月20日収録 | 小倉百人一首藤原顕輔と住吉神社解説 |
| | BS朝日「あらすじ名作劇場」 | 2017年1月11日 | 枕草子 |
| | NHK[視点・論点」 | 2017年2月27日 | 枕草子 清少納言が込めた想い |
| | NHK Eテレ「グレーテルのかまど」 | 2017年8月21日放送 | 清少納言のかきごおり |
| | 日本テレビ「世界一受けたい授業」 | 2017年9月2日放送 | 名作『枕草子』に隠された「たくらみ」 |
| | BSイレブン「尾上松也の謎解き歴史ミステリー」 | 2017年9月6日放送 | 『源氏物語』と『枕草子』～平安女子たちの本音～ |
| | BS-TBS「にっぽん！歴史鑑定」 | 2018年1月29日放送 | 清少納言と紫式部 |
| | ABCラジオ「とびだせ！夕刊探検隊」 | 2018年3月5日放送 | 枕草子のたくらみ |
| 取材 | 産経新聞 文化欄 | 2018年6月5日 | 国史へのまなざし 枕草子のたくらみ |
| | 朝日新聞 文化欄 | 2018年9月20日 | 藤原道長の和歌に新解釈「貴族たちとの協調詠んだ」 |
| | 京都新聞 文化欄 | 2018年11月14日 | 望月の歌から1000年 貴族文化、再評価を 記念式典で新解釈 |
| | 産経新聞 文化欄 | 2018年11月18日 | 望月の欠けたることもなし 藤原道長 新解釈に見る意外なパパ心 |
| | 毎日新聞 京都版 元日特集 | 2019年1月1日 | 新時代を拓く 京の視点 平安文学を誇りに |
| | 北國新聞 | 2019年4月3日 | 新元号「令和」について |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『源氏物語』の準拠の方法――定子・楊貴妃・桐壺更衣―― | 共 | 2015年10月15日 | 武蔵野書院『王朝文学と東ユーラシア文化』 | 小山利彦・河添房江・陣野英則 | 227頁～252頁 |
| 紫式部日記と王朝貴族社会 | 単 | 2016年8月10日 | 和泉書院 | | 全 |
| 紫式部集の〈物語〉――詞書における過去の助動詞の示すもの―― | 共 | 2017年4月5日 | 竹林舎 新時代への源氏学4『制作空間の〈紫式部〉』 | 助川幸逸郎 立石和弘 土方洋一 松岡智之 | 107頁～130頁 |
| 枕草子のたくらみ 「春はあけぼの」に秘められた思い | 単 | 2017年4月10日 | 朝日新聞出版 | | 全 |
| 皇后定子と桐壺更衣――辞世に見る準拠 | 共 | 2018年4月24日 | 翰林書房『源氏物語 煌めくことばの世界Ⅱ』 | 原岡文子 河添房江 | 518頁～536頁 |
| 敦成親王誕生時の「御物怪」記事―『紫式部日記』と『栄花物語』、各々の意図― | 単 | 2018年10月15日 | 武蔵野書院『藤原彰子の文化圏と文学世界』 | 桜井宏徳 中西智子 福家俊幸 | 85～106頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 光源氏の「自嘲」――『源氏物語』柏木巻の白詩引用―― | 単 | 2013年11月15日 | 中古文学(第92号) | | 22頁～35頁 |
| 書評『清水好子論文集』第一巻～第三巻 | 単 | 2015年3月1日 | 国文学(関西大学)99号 | | 251頁～257頁 |
| 書評・呉羽長『源氏物語の創作過程の研究』 | 単 | 2015年11月30日 | 北陸古典研究30号 | | 114頁～122頁 |
| 宴に集う人々――『紫式部日記』敦成親王五十日儀場面の政治性―― | 単 | 205年12月 | 京都学園大学<br>人間文化研究35号 | | |
| 一条朝における漢詩文素養に関する社会規範と紫式部 | 単 | 2016年3月1日 | 京都学園大学<br>人間文化研究36号 | | |
| 清少納言と橘則光――訣別の理由―― | 単 | 2017年3月10日 | 京都学園大学<br>人間文化研究38号 | | 242頁～216頁 |
| 書評・池田節子『紫式部日記を読み解く 源氏物語の作者が見た宮廷社会』 | 単 | 2017年7月1日 | 日本文学(日本文学協会) | | 78～79頁 |
| 書評・笹川勲『源氏物語の漢詩文表現研究』 | 単 | 2018年8月1日 | 和漢比較文学61号 | | 106～113頁 |
| 藤原道長の和歌「この世をば」新釈の試み | 単 | 2018年8月25日 | 国語国文87巻8号(1008号) | | 17～33頁 |
| 書評・河添房江『源氏物語越境論 唐物表象と物語享受の諸相』 | 単 | 2019年3月19日 | 図書新聞3390号 | | 5頁 |
| その他(学会発表) | | | | | |
| 『源氏物語』の準拠の方法――定子・楊貴妃・桐壺更衣―― | 単 | 2015年5月31日 | 中古文学会<br>平成27年春季大会 | | |
| Globalism in the Tale of Genji | 単 | 2017年11月27日 | Harvrad UniversityAsia Cernter & Reischauer Institute of Japanese Studies Workshop | | |
| 紫式部、心の軌跡―『源氏物語』創作を支えた問題意識― | 単 | 2018年9月8日 | 英米文化学会<br>第36回大会基調講演 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2012年4月～2016年3月 | 京都文化芸術都市創生審議会委員 |
| (学会活動)2007年～ | 中古文学会関西部会運営委員 |
| 2009年～ | 中古文学会委員 |
| 2010年12月～ | 日本文学協会委員 |
| | 和歌文学会・和漢比較文学会・日本文学協会 会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

平安文学・平安時代の日本文化(源氏物語・枕草子・紫式部・清少納言・後宮制度・貴族の暮らし・生活の中の習俗・物の怪 等)

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　平　雅行 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無 |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「日本史学基礎A」での授業の工夫 | | 平成11年度より26年度まで担当した大阪大学文系1年生向けの授業では、質問能力を評価の対象とし、授業への質問を何度も書かせて双方向型の授業にするよう努めた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 『日本史B』(実教出版) | 2014年1月 | 高校日本史の教科書を刊行。共著。「国風文化」(pp.68～72)、「院政期の文化」(pp.81～83)、「鎌倉文化」(pp.100～107)、「室町文化」(pp.124～131)を執筆。 |
| 『日本史B　教授用指導書』 | 2014年4月 | 『日本史B』の指導資料。共著。「鎌倉文化」を執筆(pp.74～79)， |
| 『日本史B』(実教出版) | 2018年1月 | 高校日本史の教科書を執筆・改訂。共著。「国風文化」p68-72、「院政期の文化」p81-83、「鎌倉文化」p100-107、「室町文化」p124-131 |
| 『日本史B　新訂版　教授用指導書』(実教出版株式会社) | 2018年3月 | 『日本史B』の指導資料を執筆・改訂。共著。「鎌倉文化」p74-79 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 大阪大学文学部「優れた教員」 | 2014年5月16日 | 2012年に引き続き文学部より「優れた教員」として表彰 |
| 『朝日新聞』にコメント掲載 | 2017年3月17日 | 法然・親鸞の教科書記述の在り方について提言 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『大系真宗史料　文書記録編1　親鸞と吉水教団』 | 単 | 2015年3月30日 | 法藏館 | | 1-386頁 |
| 『公武権力の変容と仏教界』 | 共 | 2014年7月16日 | 清文堂 | 編者は平雅行、共著者は細川涼一、野口実など | 3-11頁、309-323頁 |
| 『訳注日本史料　寺院法』 | 共 | 2015年5月 | 編者は黒田俊雄、1993年に死没後は平が実質的編者(集英社) | | 該当頁:54～171頁、450～591頁、332～353頁、869～923頁、995～1009頁、1048～1122頁など |
| 『鎌倉仏教と専修念仏』 | 単 | 2017年6月 | 法藏館 | | 1-519頁 |
| 論文 | | | | | |
| 「鎌倉の顕密仏教と幕府」 | 単 | 2013年3月1日 | 『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』26号 | | 81-105頁 |
| 「寛喜の大飢饉と親鸞」 | 単 | 2013年3月1日 | 『伝道』79号 | | 56-60頁 |
| 「出家入道と中世社会」 | 単 | 2013年3月1日 | 『大阪大学大学院文学研究科紀要』53巻 | | 1－46頁 |
| 「親鸞」の誕生」 | 単 | 2013年9月1日 | 『伝道』80号 | | 53-57頁 |
| 「専修念仏の弾圧をめぐって」 | 単 | 2013年11月25日 | 『仏教史学研究』56巻1号 | | 38－64頁 |
| 「善光寺と女人罪業観」 | 単 | 2014年3月 | 『歴史における周縁と共生』思文閣出版 | 鈴木則子編 | 13-36頁 |
| 「親鸞の二人の伯父」 | 単 | 2014年3月1日 | 『伝道』81号 | | 43-47頁 |
| 「末法思想と澆季観」 | 単 | 2014年6月 | 『仏教的伝統と人間の生』法藏館 | 安冨信哉博士古稀記念論集 | 141-159頁 |
| 「法然・親鸞と明恵」 | 単 | 2014年6月10日 | 『治承～文治の内乱と鎌倉幕府の成立』(清文堂) | | 355－379頁 |
| 「親鸞の出家と慈円」 | 単 | 2014年9月1日 | 『伝道』82号 | | 40-44頁 |
| 「善鸞義絶状について」 | 単 | 2015年3月 | 『伝道』83号 | | 22-26頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 「日本中世における在俗出家について」 | 単 | 2015年3月 | 『大阪大学大学院<br>文学研究科紀要』55巻 | | 1-71頁 |
| 「玉日伝説は事実なのか？」 | 単 | 2015年9月 | 『伝道』84号 | | 20－24頁 |
| 「鎌倉真言派と松殿法印一良基と静尊」 | 単 | 2015年12月 | 『人間文化研究』35号 | | 1-29頁 |
| 「法然は『選択集』をなぜ非公開としたのか？」 | 単 | 2016年3月 | 『伝道』85号 | | 42一46頁 |
| 「建永(承元)の法難について」 | 単 | 2016年9月1日 | 『伝道』86号 | | 31-37頁 |
| 「井上光貞－焼け跡闇市世代の歴史学一 | 単 | 2016年11月10日 | 『戦後歴史学と日本仏教』<br>(法藏館) | 編:オリオン・クラウタウ | 77-99頁 |
| 「親鸞はなぜ流罪になったのか」 | 単 | 2017年.3月1日 | 『伝道』87号 | | 52-57頁 |
| 「熱田大宮司家の寛伝僧都と源頼朝」 | 単 | 2017年.3月10日 | 『京都学園大学<br>人間文化研究』38号 | | 1-46頁 |
| 「法然・親鸞らを処分した建永二年の太政官符」 | 単 | 2017年.9月1日 | 『伝道』88号 | | 21～26頁 |
| 「大伝法院座主職と高野紛争」 | 単 | 2017年10月6日 | 『歴史のなかの根来寺』<br>(勉誠出版) | 編：山岸常人 | 73-119頁 |
| 「親鸞の流罪と抗議の奏状」 | 単 | 2018年3月1日 | 『伝道』89号 | | 56一61頁 |
| 「鎌倉真言派の成立」 | 単 | 2018年3月10日 | 『京都学園大学<br>人間文化研究』40号 | | 37一91頁 |
| (概論) | | | | | |
| 「親鸞一時代を生きる」 | 単 | 2014年4月～ | 真宗大谷派<br>「京都教区だより」 毎月連載 | | |
| 「時代を生きる一親鸞聖人のこころ、人々の願い」上 | 単 | 2014年10月1日 | 『築地本願寺新報』804号 | | 4-6頁 |
| 「日本中世は呪術からの解放の時代か？」 | 単 | 2015年12月1日 | 『適塾』48号 | | 96一104頁 |
| 「思想を生きた人々」 | 単 | 2016年1月31日 | 『懐徳』84号 | | 2-4頁 |
| 「中世仏教とその信仰」 | 単 | 2016年3月31日 | 『岡山の自然と文化』35号 | | 144－173頁 |
| 「顕密体制論と私」 | 単 | 2016年4月30日 | 『史敏』14号 | | 2一30頁 |
| 「小さな政府の時代(上)」 | 単 | 2016年10月1日 | 『南御堂』652号 | | 第1面 |
| 「小さな政府の時代(下)」 | 単 | 2016年11月1日 | 『南御堂』653号 | | 第1面 |
| 「親鸞は何に悩んでいたのか？」 | 単 | 2017年1月 | 『おやまこぼう』391号 | | 第1面 |
| 「親鸞はいつ「親鸞」になったか？」 | 単 | 2017年2月 | 『おやまこぼう』392号 | | 第1面 |
| 論文(講演録) | | | | | |
| 「親鸞のあゆみと民衆」 | 単 | 2013年10月1日 | 真宗大谷派教学研究所編<br>『ともしび』732号 | | 1-9頁 |
| 「顕密体制と専修念仏」 | 単 | 2014年12月1日 | 『現代と親鸞』29号 | | 116－169頁 |
| 「親鸞のあゆみと流罪」 | 単 | 2015年4月1日 | 『講演集　心』34集<br>(武蔵野大学) | | 34－51頁 |
| (インタビュー記事) | | | | | |
| 「絶望の中で出会った親鸞」 | | 2014年2月10日 | 『ひとりふたり』130号 | | 18-19頁 |
| 論文(報告) | | | | | |
| 「人間　平雅行氏に迫る！」 | 単 | 2016年4月1日 | 『京都教区だより』330号 | | 第2面～第3面 |
| 「大伝法院座主職と高野紛争」 | | 2015年3月8日 | シンポジウム<br>「根来寺史をめぐる新たな視角」 | | 芝蘭会館別館<br>(京都市) |
| 「改めて問う、顕密体制論とは何であるのか？」 | 単 | 2016年5月21日 | 仏教史学会5月例会 | | 大谷大学博綜館 |
| 「中世人はどれぐらい神仏を信じていたか？」 | 単 | 2016年9月7日 | 人間文化学会第一回研究会 | | 京都学園大学<br>亀岡キャンパス |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (シンポジウム) | | | | | |
| 「近代日本仏教と親鸞」 コメンテーター | | 2014年5月17日 | 龍谷大学アジア仏教文化研究センター | | |
| 「浄土教における顕密仏教と専修念仏」 基調講演 | 単 | 2017年10月9日 | 龍谷大学アジア仏教文化研究センター | | |
| 論文(講演) | | | | | |
| 「親鸞のあゆみと流罪」 | 単 | 2013年8月4日 | 真宗大谷派飛騨学場 | | 高山別院照蓮寺 |
| 「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したのか」 | 単 | 2013年11月2日 | 金沢大学日本史研究室 | | |
| 「女性差別と救済」 | 単 | 2013年11月8日 | 世界人権問題研究センター | | ハートピア京都 |
| 「鎌倉時代の南都仏教」 | 単 | 2013年11月23日 | | | 奈良県立図書情報館 |
| 「日本中世は呪術からの解放の時代か？」 | 単 | 2014年11月26日 | 大阪大学適塾記念講演会 | | |
| 「鎌倉新仏教観の崩壊」 | 単 | 2015年2月16日 | 姫路市歴史講座 | | 姫路市市民会館 |
| 「親鸞のあゆみ」 | 単 | 2015年8月4日 | 単独真宗大谷派飛騨学場の副講 | | 高山別院照蓮寺 |
| 「親鸞のこころ 民衆の願い」 | 単 | 2015年8月31日 | 真宗大谷派金沢東別院門徒研修会 | | 金沢東別院真宗会館 |
| 「建永の法難と法然」 | 単 | 2015年10月6日 | 公益財団法人滋賀県人権センター | | 草津市立市民交流プラザ |
| 「宗教と差別」 | 単 | 2015年10月20日 | 西山浄土宗布教師会 | | 新都ホテル(京都市) |
| 「親鸞の歩みとこころ」 | 単 | 2015年12月14日 | 兵庫教区青年僧侶の会連続研修会 | | 浄土真宗本願寺派神戸別院 |
| 「親鸞―時代を生きるー」 | 単 | 2016年3月7日 | 真宗大谷派京都教務所公開研修会 | | 京都教区会館 |
| 「在俗出家と中世社会」 単独 | 単 | 2016年4月16日 | 懐徳堂記念会懐徳忌 | | 誓願寺(大阪市) |
| 「親鸞のあゆみと中世民衆」 | 単 | 2016年7月22日 | 真宗大谷派東三河夏季講習会 | | 豊橋別院(静岡県豊橋市) |
| 「親鸞のあゆみと心」 | 単 | 2016年8月21日 | 東本願寺日曜講演 | | 真宗教化センターしんらん交流館(京都市) |
| 「若き日の親鸞について」 | 単 | 2016年9月2日 | 真宗大谷派金沢東別院門徒研修会公開講座 | | 東別院真宗会館ホール(金沢市) |
| 「親鸞のこころ 民衆のねがい」 | 単 | 2016年9月3日 | 真宗大谷派三条教区公開講演会 | | 新潟市民プラザ |
| 「中世の人々の生と死」 | 単 | 2016年9月25日 | 京都学園大学人文学部講演会 | | 京都学園大学太秦キャンパス |
| 「親鸞聖人の流罪とあゆみ」 | 単 | 2016年10月9日 | 龍谷ミュージアム秋季特別展記念講演会 | | 龍谷大学大宮学舎(京都市) |
| 「親鸞聖人のあゆみとこころ」 | 単 | 2017年6月30日 | 浄土真宗本願寺派高岡教区教学研究室公開講演会 | | 高岡会館 |
| 「専修念仏の弾圧と親鸞」 | 単 | 2017年9月19日 | 真宗大谷派金沢東別院門徒研修会・公開講座 | | 東別院真宗会館ホール(金沢) |
| 「鎌倉仏教と法然・親鸞」 | 単 | 2017年9月30日 | 京都学園大学人文学部講演会 | | 京都学園大学太秦キャンパス |
| 「日本仏教と差別ー差別を肯定する思想と否定する思想ー」 | 単 | 2017年10月27日 | 石見銀山人権同和講演会 | | 石見銀山世界遺産センター |
| 「人間、親鸞に遇う」 | 単 | 2017年12月22日 | 東本願寺「同朋の会」報恩講 | | 東本願寺 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 史学研究会評議員 | 1990年5月～2015年5月 |
| 財団法人懐徳堂記念会運営委員会幹事 | 1996年4月～2014年3月 |
| 仏教史学会評議員 | 1999年10月～(至現在) |
| 史学会評議員 | 1999年11月～2012年3月 |
| 仏教史学会会長 | 2013年11月～2017年11月 |
| 一般財団法人懐徳堂記念会理事 | 2014年4月～2015年3月 |
| 一般財団法人懐徳堂記念会評議員 | 2015年6月～(至現在) |
| 独立行政法人日本学術振興会の科学研究費委員会専門委員 | 2016年1月～2017年12月 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　特任教授 | 氏名 | 堀田　穣 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 千本ゑんま堂大念仏狂言フィールドワーク | 2019/5/3 | 千本ゑんま堂狂言を鑑賞し、蓮台野、船岡山周辺をフィールドワークする |
| 円山応挙を歩くフィールドワーク | 2017/7/23 | 亀岡、金剛寺から太秦、悟真寺、円満寺大津絵美術館の鑑賞。 |
| 円山応挙を歩くフィールドワーク | 2016/7/16 | 亀岡、金剛寺から太秦、悟真寺、情天閣美術館伊藤若冲展の鑑賞。 |
| 千本ゑんま堂大念仏狂言フィールドワーク | 2016/5/3 | 千本ゑんま堂狂言を鑑賞し、蓮台野、船岡山周辺をフィールドワークする |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 司書課程年報2015 | 2016/3/31 | 京都学園大学司書課程の年間研究成果を編集刊行、「新興人形劇から紙芝居へ　メタデータとしての引用の織物」を執筆 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| シンポジウム　岡山と妖怪 | 2018/11/17 | 特別招聘客員教授小松和彦先生を迎えてのシンポジウムを、初めて岡山県岡山市で開催した。小松先生の基調講演「鬼が来た道―シルクロードと日本文化」の後、学生と教員が研究発表をした。 |
| 講演　今和次郎『日本の民家』に始まる民家研究 | 2018/6/18 | 京都府亀岡市、柳町会議所を会場に行われた、(公財)生涯学習かめおか財団主催の「暮らしのデザイン　町家編　建築と民俗学が解く、ブームの正体」での講演。 |
| シンポジウム　語りと妖怪研究 | 2017/11/5 | 特別招聘客員教授小松和彦先生を迎えての福島郡山でのシンポジウム第2回目。地元NPO語りと方言の会の語り部4名。妖怪研究にも語りが欠かせない事を確認。 |
| 講演　紙芝居の演出法～連続と転換 | 2017/10/16 | まつやま手づくり紙芝居コンクールの審査員を務めた翌日、紙芝居関係者を対象に紙芝居の表現構造と演出法について語る。 |
| 講演　妖怪ばなし「江戸のエクソシスト(悪霊祓い師)」 | 2017/5/28 | 理事を務めるNPO「語り手たちの会」2017年度定期総会における講演。会場は東京、目白、子どもの文化研究所ホール。「江戸時代300年最大の悪霊累(かさね)を江戸東京のフィールドワークを交えてお話しします。」というキャッチコピーの下に行われた。 |
| シンポジウム　災害と妖怪 | 2016/11/6 | 特別招聘客員教授小松和彦先生を迎えてのシンポジウムを、初めて福島県郡山市で開催した。地元のNPO語りと方言の会の協力を得て、昔話、伝説の語り部4名、東日本大震災による不思議なハナシを研究している地元研究者2名に出演してもらい、100名を越す参加者があった。 |
| 講演　宮沢賢治と堀尾青史そして鈴木紀子 | 2016/10/22 | 相模女子大学での講演。「さがみはら紙芝居展」が相模女子大学茜館で開催され、堀尾青史、鈴木紀子のパネル展示に付随したもの。特に鈴木紀子は相模女子大学の前身、帝国女専の出身なので、母校ということになり、そこで業績が紹介されたのは、意義深い。 |
| 講演　紙芝居の歴史と上笙一郎コレクションの意義 | 2016/5/29 | 箕面市立西南図書館での講演。箕面市立図書館蔵の街頭紙芝居に関する上笙一郎コレクションの意義と、上笙一郎氏の業績について語った。 |
| 講演　都市の怪異の歴史と民俗～崇徳院をめぐって～ | 2015/9/11 | 京都市平安京創生館企画展関連講座として、保元の乱と崇徳院をめぐる歴史と民俗についての講演 |
| 講演　宮沢賢治と堀尾青史 | 2015/8/24 | 阪南市立図書館、阪南市立文化センター共催「堀尾青史紙芝居パネル展」に伴って行われた講演会。 |
| 講演　心をつなぐ紙芝居 | 2015/8/6 | キリスト教視聴覚教育講習会での講演。キリスト教紙芝居は今井よね以来の伝統があるので感慨深い。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 京都教育大学集中講義「<br>子ども文化論」の企画運営協力 | 2018年8月20日～23日 | 「子ども文化論」での授業を受け持つとともに紙芝居、人形劇団の選定、推薦等の企画運営に協力した。 |
| 京都教育大学集中講義<br>「子ども文化論」の企画運営協力 | 2017年8月21～24日 | 「子ども文化論」での授業を受け持つとともに紙芝居、人形劇団の選定、推薦等の企画運営に協力した。 |
| 展示協力<br>闇からのぞいた平安京～辻々を妖怪たちが闊歩する～ | 2015年6月6日～11月30日 | 京都市生涯学習センター(京都アスニー)にある平安京創生館での企画展示に民俗学コースとして、佐々木高弘教授と学生たちとともに企画展示に協力した。 |
| 京都教育大学集中講義<br>「子ども文化論」の企画運営協力 | 2016年2月15日～18日 | 「子ども文化論」での授業を受け持つとともに紙芝居、人形劇団の選定、推薦等の企画運営に協力した。 |
| 京都教育大学集中講義<br>「子ども文化論」の企画運営協力 | 2015年2月12日～17日 | 「子ども文化論」での授業を受け持つとともに紙芝居、人形劇団の選定、推薦等の企画運営に協力した。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 子どものロジック　大人のロジック | 共 | 2018年8月 | 子どもの文化研究所 | ◎片岡輝、堀田穣、島本一男、久保健太、佐々木由美子 | pp94-101 |
| 図書館人物事典 | 共 | 2017年9月 | 日外アソシエーツ | 日本図書館文化史研究会編 | pp142 |
| ITと子どもの未来 | 共 | 2017年8月 | 子どもの文化研究所 | ◎片岡輝、堀田穣、島本一男、久保健太、佐々木由美子 | pp121-125 |
| 京の筏　コモンズとしての保津川 | 共 | 2016年3月 | ナカニシヤ出版 | ◎手塚恵子、大西信弘、原田禎夫 | pp61,134,184,212 |
| 戦争を拒む | 共 | 2015年8月 | 子どもの文化研究所 | ◎片岡輝、堀田穣、島本一男、久保健太、佐々木由美子 | pp85～92,193～194 |
| 紙芝居　演じ方のコツと基礎理論のテキスト | 共 | 2015年3月 | 一声社 | 子どもの文化研究所 | pp174-192 |
| 論文 | | | | | |
| 堀尾青史から何を受け継ぎ学ぶか―堀尾青史生誕100年記念を終えて― | 単 | 2015年2月 | 子どもの文化第47巻2号（子どもの文化研究所） | | |
| 各地を巡った堀尾青史生誕100年記念パネル展示 | 単 | 2016年3月 | 子どもの文化第48巻3号（子どもの文化研究所） | | |
| 新興人形劇から紙芝居へ　メタデータとしての引用の織物 | 単 | 2016年3月 | 京都学園大学司書課程年報2015（京都学園大学司書課程） | | |
| 見えないものを見る | 単 | 2016年9月 | 子どもの文化第48巻8号（子どもの文化研究所） | | |
| 大逆事件とお伽芝居―沖野岩三郎『宿命』にみる高尾楓蔭の活動 | 単 | 2016年12月 | 人間文化研究第37号（京都学園大学人間文化学会） | | |
| 想像力と妖怪の働かせ方 | 単 | 2018年2月 | 子どもの文化第50巻第2号（子どもの文化研究所） | | |
| 去る者は追わず、猿を追いかけて？！ | 単 | 2018年1月 | 創造する市民第110号（京都市生涯学習振興財団） | | |
| 都市伝説の都市はどこにあるか？ | 単 | 2018年11月 | 子どもの文化第50巻第10号（子どもの文化研究所） | | |
| 教育紙芝居研究の基礎整備 | 単 | 2019年1月 | 子どもの文化第51巻第1号（子どもの文化研究所） | | |
| 学校の怪談は今語られているのか？ | 単 | 2019年6月 | 子どもの文化第51巻第6号（子どもの文化研究所） | | |
| その他（研究ノート） | | | | | |
| 口演童話研究ノート（25） | 単 | 2015年11月 | 『語りの世界』第59号（語り手たちの会） | | |
| 口演童話研究ノート（26） | 単 | 2016年3月 | 『語りの世界』第60号（語り手たちの会） | | |
| 口演童話研究ノート（27） | 単 | 2016年9月 | 『語りの世界』第61号語り手たちの会） | | |
| 口演童話研究ノート（28） | 単 | 2017年2月 | 『語りの世界』第62号（語り手たちの会） | | |
| 口演童話研究ノート（29） | 単 | 2017年9月 | 『語りの世界』第63号語り手たちの会） | | |
| モノノケ・フィールドノート（1） | 単 | 2018年2月 | 『語りの世界』第64号（語り手たちの会） | | |
| モノノケ・フィールドノート（2） | 単 | 2018年9月 | 『語りの世界』第65号（語り手たちの会） | | |
| モノノケ・フィールドノート（3） | 単 | 2019年3月 | 『語りの世界』第66号（語り手たちの会） | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2015/6/28 | 日本子ども社会学会第22回大会ラウンドテーブル　高齢者介護と紙芝居　愛知教育大学で6月28日に行われたラウンドテーブルの討論者として参加 |
| 2015/5/10 | 日本保育学会第68回大会自主シンポジウム　保育における紙芝居活用の可能性を探る　名古屋の椙山女学園大学で5月10日に行われた日本保育学会第68回大会の自主シンポジウム15の指定討論者として参加 |
| 1990年7月～ | 箕面手づくり紙芝居コンクール審査委員 |
| 2011年11月～2017年11月 | まつやま手づくり紙芝居コンクール審査員 |
| 2000年4月～ | 子どもの文化研究所所員、月刊『子どもの文化』編集委員 |
| 2003年4月～ | 比較日本文化研究会運営委員 |
| 2009年4月～2019年3月 | (大阪府)阪南市立図書館協議会会長 |
| 2011年5月～ | NPO法人語り手たちの会理事 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 子ども文化、都市文化等の近代史を中心にしたまちづくりの過程、考察、事例提供 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　山崎　芙紗子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 京都学園大学において、引き続き「専門ゼミA～D」「江戸文化論」「伝統文化論B（能楽）」「伝統文化論B（能楽）実習」「日本古典文学特論(院)」「スタートアップA・B」「日本文化論Ⅱ」「実践プロジェクトA・B」「京都フィールドワーク」「京都文化学概論B」を開講している。 | 2008年度～現在 | 左記のうち、「江戸文化論」では島原の角屋もてなしの美術館、「京都フィールドワーク」では、日吉大社・三井寺や金戒光明寺・真如堂・銀閣寺などに行き、フィールドワークを交えた授業を実践している。黒谷では墓地調査を行っている。「実践プロジェクト」では、とくに祇園祭の準備を、授業の中でとりあげ、地域の人の指導で学生が協力したり、実体験することを試みている。また、「伝統文化論B(能楽)」では、山崎は現役の観世流能楽師でもあり、実演を交えて授業し、能装束の着付けや、能面の扱い方などを見せる半期に一度の能のワークショップを行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | 「日本文化論」の授業では中世の京都を源流とする茶道・華道・香道・能楽・狂言・庭園などの文化を題材とした教材を新たに作成して用いている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 「新柳居市民講座」 | 2008年度～2016年度 | 京都市中京区にある京都学園大学京町家とし、運営委員長として、年間10～15回市民講座を企画、講師のアシスタントや司会を担当した。2015～16年度も再び運営委員として市民講座の企画に関わった。 |
| 京都学園大学能楽部の指導 | 1992年～現在 | 京都学園大学に能楽部を設立し顧問を務め、シテ方観世流準職分として、30年近く実技の指導に当たっている。2013年度から大阪の山本能楽堂で行われる学生仕舞コンテスト、名古屋能楽堂の全国学生仕舞コンクールにも出場させた。 |
| 小学校における伝統文化の体験授業 | 2018年12月1日 | 京都府の日吉町の殿田小学校において、3日間、午前中1～3年生に能楽の体験授業を行った。次年度も継続する予定である。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 『東見記』解題 | 単 | 2018年12月 | 臨川書店 | 京都大学蔵　穎原文庫選集　第9巻 | 374～378頁 |
| 『陶犬新書』解題と翻刻 | 単 | 2019年3月 | 臨川書店 | 京都大学蔵 穎原文庫選集　全10巻 | 1～88、291～295頁 |
| その他(シンポジウム) | | | | | |
| 恋のしぐさのいろいろ<br>能楽と崑曲～日中伝統演劇の比較研究～ | 共 | 2017年2月 | 国際京都学シンポジウム | 京都府立大学文学部主催<br>小松謙・山崎福之・赤松紀彦・<br>山崎芙紗子・前田尚香 | |
| その他(座談会) | | | | | |
| 先學を語る――日野龍夫博士―― | 共 | 2015年1月 | 東方學会<br>『東方學』第129号 | 大谷雅夫、木田章義、田中康二、<br>長島弘明、藤原英城、<br>山崎芙紗子、山本秀樹 | P143～P174 |
| その他(書評) | | | | | |
| 田中康二著『本居宣長の国文学』 | 単 | 2016年12月 | 『鈴屋学会報』33号 | | |
| 藤井高雅と吉備津神社 | 単 | 2018年12月 | 『きびつ』第48号 | | |

| その他(講演) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 江戸の文化と生活 | 単 | 2015年1月 | 佛教大学四条センター | おもしろ京都学入門 | |
| 吉備津神社と雨月物語<br>～ 伝説の釜占い～ | 単 | 2016年2月 | アスニー山科 | 学びのフォーラム山科(生涯学習講座) | |
| 日本文化の華 「松風」の恋 | 単 | 2017年1月 | 京都ホテルオークラ | 伏見医師会主催講演会 | |
| 江戸時代の文学<br>西鶴『世間胸算用』より その二 | 単 | 2017年2月 | アスニー山科 | 学びのフォーラム山科<br>(生涯学習講座) | |
| 祇園祭と謡曲<br>～在原行平をめぐる話～ | 単 | 2017年4月 | 京都学園大学京町家 | 町家再生研究会例会 | |
| 宣長と高尚 | 単 | 2017年11月 | 鈴屋学会・本居宣長記念館 | 平成26年度宣長十講「毀誉相半」 | |
| 平家物語と能 | 単 | 2018年1月 | アスニー山科 | 学びのフォーラム山科(生涯学習講座) | |
| 藤井高雅と吉備津神社 | 単 | 2018年9月 | 吉備津神社 | 吉備津神社 夏期の講演会 | |
| 『雨月物語』の「夢応の鯉魚」をめぐって | 単 | 2019年1月 | アスニー山科 | 学びのフォーラム山科(生涯学習講座) | |

| Ⅲ 学会および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 1977年入会～現在 | 近世文学会会員(『近世文芸』編集委員(2008～2009年度) |
| 1975年入会～現在 | 京都大学国語国文学会会員 |
| 2002年入会～現在 | 能楽学会会員 |
| 1983年入会～現在 | 鈴屋学会会員 常任委員(2009年度～現在) 学会誌『鈴屋学会報』編集委員長(2016年度～2017年度) |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| 日本の伝統文化 能楽 江戸時代の文学 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　池田　恭浩 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| プレゼンテーションソフトとワイヤレスコントローラーの活用 | 2017年4月～ | プレゼンテーションソフトとワイヤレスコントローラーを使用することで、常に近くで学生の様子を観察しながら講義をすることができる。さらに，個別に学生に語り掛けたり，学生のつぶやきから話を広げたりすることもできる。 |
| 講義の振り返りの活用 | 2017年4月～ | 講義の最後に，必ず学生が講義の振り返り（講義のまとめと気づきや質問）を書く時間を設けている。この時間を設ける主な理由は三つある。まずは，最後に講義の内容をまとめることにより，講義中は考えたり話を聞いたりすることに集中することができるからである。次に，文章表現力の向上のためである。そして，振り返りを読むことで学生の講義での習熟度が把握でき，補う必要がある項目やさらに発展させる必要がある項目については，次の講義の始めに取り上げることができるからである。 |
| 対話を採り入れた講義 | 2017年4月～ | 講義の中で，対話をする場面を多く取り入れている。主なねらいは，学生の思考を促すためである。手法は様々であり，教員が学生に問い掛けたり，学生同士がグループを組んで自分の考えを交流したりしている。グループを組む人数は3～4人が中心であるが，さらにグループの人数を増やすこともある。 |
| 「教育実習事前指導」における指導の工夫 | 2017年4月～ | 教育実習事前指導では，学生が主体的に講義に取り組めるように，交代で模擬授業をおこなったり，模擬授業の改善点などを指摘し合ったりしている。その時に，小学校での指導経験を生かして「主体的・対話的で深い学び」ができる授業づくりについての指導をおこなっている。担当は社会科であるが，理科や保健の教育実習事前指導にもできる限り参加をして，指導をおこなっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 消費者教育のヒント　消費者教育実践事例集（編集：滋賀県総合政策部県民活動生活課） | 2015年3月 | 滋賀県の、教員を対象とした研修や情報提供など、消費者教育の理解を深めるための支援の一環として作成された事例集。その中の、実践事例②「お土産スピーチをしよう！買い物をする時の様々な判断基準を知る」の執筆を担当した。 |
| 「親子で学ぼう消費者教育　上手なお金の使い方学習指導案集」（公益社団法人　全国消費生活相談員協会） | 2015年11月 | 「親子で学ぼう消費者教育　上手なお金の使い方実践ワーク集」の中から7つのテーマを選び，家庭科や社会科、学級活動や総合的な学習の授業でも実践できるようにするための学習指導案集の監修をした。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 「教育実習生」への指導 | 2008年4月～<br>2017年3月 | 附属学校教員として京都教育大学の学生・院生，および他大学の学生を含め，教育実習の教科指導および学級指導の担当として，毎年10名程度を指導した。また，京都教育大学の教育実習事前指導として，授業公開や学校行事への参加受け入れなどを行っていた。社会科では，大学の社会科教育研究室に協力して，モデル授業を公開し，学生・院生の実践的研究の場を提供するなどの支援もおこなった。 |
| 京都教育大学社会系教育研究会 | 2008年4月～ | 京都教育大学社会科学科社会科教育研究室が中心になり、京都府・京都市を中心に、小学校から高等学校までの社会科に関わる教員のための研究会。 平成24年からは、企画庶務として研究会の開催に協力している。 |
| 価値判断力・意思決定力を育成する社会科授業研究会 | 2010年4月～ | よりよい価値判断をする子ども、よりよい意思決定をする子どもを育てる小学校社会科の授業を創る研究会。（代表　筑波大学附属小学校　梅澤真一　お茶の水女子大学附属小学校　岡田泰孝）<br>2015年度の第20回大会と2016年度の第22回大会は、大会実行委員長となり、京都大会を開催した。 |
| 平成29年度　ベストティーチャー賞受賞 | 2018年3月 | 学生による授業評価に基づき，総合的に学生評価の高い授業を担当した教員に与えられるベストティーチャー賞を受賞した。（各学部より1名選出） |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 「初等社会科教育」 | 共著 | 2018年3月 | ミネルヴァ書房 | 中西仁他8名 | 45頁～52頁 |
| 論文 | | | | | |
| 研究主題について<br>「幼小中で育む『確かな学力』と『豊かな社会力』―12年間の学びをつなぐ連携プログラムの実践と開発（第1次）―」 | 単著 | 2015年2月 | 平成26年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | | 1頁～7頁 |
| 社会科<br>「社会参画の力を育てる連携プログラムの実践と開発」―「揺れる価値」を通して「考え続ける」子どもを育てる― | 共著 | 2015年2月 | 平成26年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 溝部卓司・津村正樹・坂田良久 | 21頁～22頁<br>26頁～30頁 |
| 道徳<br>「規範意識を育てる連携プログラムの開発」 | 単著 | 2015年2月 | 平成26年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | | 123頁～130頁 |
| 「社会科WG　連携プログラム　実践集」 | 共著 | 2015年2月 | 京都教育大学附属桃山地区学校園連携教育研究<br>幼小中連携プログラム実践集 | 溝部卓司・津村正樹・坂田良久 | 4頁～5頁 |
| 「年齢別連携一覧」 | 単著 | 2015年2月 | 京都教育大学附属桃山地区学校園連携教育研究<br>幼小中連携プログラム実践集 | | 45頁～56頁 |
| 第5学年・社会科「さらに考えよう！日本の食料生産」 | 単著 | 2015年3月 | 平成26年　京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト研究報告書 | | 39頁～41頁<br>118頁～121頁 |
| 「社会科授業の分析～小学校4年生『ごみ問題』を解決するための話し合い～」 | 単著 | 2015年3月 | 京教社会　第19号<br>京都教育大学社会系教育研究会 | | 5頁～19頁 |
| 研究主題について<br>「幼小中で育む『確かな学力』と『豊かな社会力』―12年間の学びをつなぐ連携プログラムの実践と開発（第2次）―」 | 単著 | 2015年3月 | 平成27年　京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト研究報告書 | | 1頁～9頁 |
| コミュニケーション<br>「互恵的なコミュニケーションを育てる連携プログラムの充実」 | 共著 | 2015年3月 | 平成27年　京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト研究報告書 | 布川萌子他8名 | 105頁～107頁 |
| 道徳<br>「考え、議論する道徳科への転換」に向けた連携プログラムの開発 | 共著 | 2015年3月 | 平成27年　京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト研究報告書 | 坂田良久　平岡信之　井上美鈴　福永愛美 | 123頁～124頁 |
| 検討対象教育実習生の事後指導記録 | 共著 | 2016年3月 | 平成27年度京都教育大学教育研究改革・改善経費研究成果報告書「京都教育大学(KUE)－Oxford Brookers大学（OBU）21世紀の教員養成のための共同研究」 | 水山光春他5名 | 45頁～52頁 |
| 小学五年生「災害と防災～考えよう！自然災害からくらしを守るには～陸前高田市の12.5mの防潮堤の必要性を考える」 | 単著 | 2016年3月 | 京教社会　第20号<br>京都教育大学社会系教育研究会 | | 5頁～41頁 |
| メディア・コミュニケーション科　指導計画<br>「2年　単元名　どうやってしらべるの？」 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要 | | 34頁～37頁 |
| メディア・コミュニケーション科　指導計画<br>「2年　単元名　ものがたりをつたえよう」 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要 | | 38頁～41頁 |
| メディア・コミュニケーション科　指導計画<br>「2年　単元名　こうか音をつくろう」 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要 | | 42頁～45頁 |
| メディア・コミュニケーション科　指導計画<br>「2年　単元名　ものがたりをつたえよう(ろくが)」 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要 | | 46頁～49頁 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| メディア・コミュニケーション科　実践記録第3学年『BGMでつたえよう』 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要 | | 90頁～91頁 |
| メディア・コミュニケーション科　教科書3年1学期「BGMでつたえよう」 | 単著 | 2016年11月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山小学校　研究紀要Media　Communication | | 28頁～35頁 |
| 価値判断・意思決定を採り入れた授業実践小学三年生「昔のくらし」 | 単著 | 2017年2月 | 京教社会　第21号京都教育大学社会系教育研究会 | | 3頁～14頁 |
| 教職に就くために（その1） | 共著 | 2017年2月 | 京教社会　第21号京都教育大学社会系教育研究会 | 田中曜次 | 67頁～71頁 |
| 研究主題について「幼小中で育む『確かな学力』と『豊かな社会力』―12年間の学びをつなぐ連携プログラムの実践と開発（第2次）―」 | 単著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | | 1頁～13頁 |
| 社会科「社会参画の力を育てる連携プログラムの充実」 | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 溝部卓司・津村正樹・坂田良之・秋山雅文・平岡信之 | 30頁～41頁 |
| コミュニケーション「互恵的なコミュニケーションを育てる連携プログラムの充実」 | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 村田眞里子他10名 | 109頁～124頁 |
| 道徳「考え、議論する道徳科への転換に向けた連携プログラムの開発」 | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 坂田良之・平岡信之・井上美鈴・福永愛美 | 125頁～137頁 |
| 社会科WG連携プログラム | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 溝部卓司・津村正樹・坂田良之・秋山雅文・平岡信之 | 142頁～147頁 |
| 道徳WG連携プログラム | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 坂田良之・平岡信之・井上美鈴・福永愛美 | 189頁～192頁 |
| 幼小中年齢別連携一覧 | 共著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | 井上美鈴 | 193頁～204頁 |
| 成果と課題「幼小中で育む『確かな学力』と『豊かな社会力』―12年間の学びをつなぐ連携プログラムの実践と開発（第2次）―」 | 単著 | 2017年2月 | 平成28年度　京都教育大学附属桃山地区学校園　研究紀要 | | 205頁～206頁 |
| 社会科，地理歴史科，公民科における反復（スパイラル）による教育課程～小学校，中学校，大学でのお金の授業を通して～」 | 単著 | 2018年2月 | 京教社会　第22号京都教育大学社会系教育研究会 | | 31頁～43頁 |
| 「『お金』のもたらす学習効果Ⅱ―お金に対する多様な見方や考え方ができる社会科授業の開発と実践―」 | 単著 | 2018年3月 | 人間文化研究　第40号 | | 9頁～33頁 |
| 中学校社会科公民的分野における「効率」と「公正」概念の教材化に向けた展開 | 共著 | 2018年3月 | 京都教育大学教育実践研究紀要第18号 | 石川誠 | 143頁～152頁 |
| 中学校社会科公民的分野における「効率」と「公正」概念の教材化に向けた展開（その2）―行動経済学の視点からの考察― | 共著 | 2019年3月 | 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要　第1号 | 石川誠 | 129頁～138頁 |
| 社会科における思考力，判断力，表現力等を育成するための学習指導～総合的な学習の時間，特別活動とのつながりを意識して～ | 単著 | 2019年3月 | 京教社会　第23号京都教育大学社会系教育研究会 | | 41頁～50頁 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 平成29年度　亀岡市社会教育委員 | |
| 第29回　社会系教科教育学会研究発表大会 | 実行委員として活動をする。 |
| 平成30年度　亀岡市社会教育委員 | |
| 平成31年度　亀岡市社会教育委員 | |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　鍛治　宏介 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「日本史概説B」における講義の工夫 | 2015年4月～ | 毎回の講義に受講生全員に感想を書いてもらい、翌週の冒頭はその感想への応答から始めることで、内容の定着をはかった。またその感想への応答の拡大版として、授業内容そのものを修正して、当初の予定を変更することもある。また最新の研究成果を紹介するために、授業内容も変化させることもあり、当初のシラバスの内容には、拘らずに柔軟な運用をすることで、受講生の興味関心に応じながら最新の研究成果も踏まえた授業をすることを心掛けている。 |
| 「歴史学特殊講義（近世）」における講義の工夫 | 2017年4月～ | 江戸時代の書物文化を扱う本講義において、実際の江戸時代の和装本や一枚刷などの本物の資料を授業中に回覧したり、浮世絵のカラーコピーを配布したりして、パワーポイントなどで画像をみせるだけでは伝わらない本物の技術のすばらしさを手元でじっくりみることで伝え、そこから講義への興味関心を深め、浮世絵を史料として読み解くという講義の趣旨を理解させる手段とした。また京都で現役で活動している浮世絵摺師職人の職場に見学に行き、実際に浮世絵を摺る体験を学生にしてもらい、理解を深めた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | 授業外でも古文書を学びたいという学生のために、「くずし字を読む会」という自主ゼミを結成して、毎週1回、1回生から4回生まで10数名が参加する形で、古文書の読み合わせを行っている。自主ゼミメンバーで博物館の展示をみにいったり、京都大学文学部主催の古文書合宿に参加したりするなど、古文書に接する機会も多く設けている。また研究会で読み進めた史料の翻刻成果を本学の紀要において学生と連名で発表した。更に人文学部教授会において「自主ゼミ」を認定する制度を導入するように働きかけて、「自主ゼミ」での課外活動に対する保険の適用や、大学父母の会からの金銭的支援が貰えるようなシステムを構築した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『本の文化史』第1巻「読者と読書」 | 共著 | 2015年5月 | 平凡社 | 共著者：横田冬彦、佐竹朋子、高橋章則、工藤航平、山中浩之、引野亨輔、青木美智男、宮内貴久 | 277～305頁「地域イメージの定着と日用教養書」担当 |
| 『古代史研究の最前線 天皇陵』 | 共著 | 2016年1月 | 洋泉社 | 共著者：仁藤敦史、宮瀧交二、福尾正彦、天野末喜、西田孝司、宮崎康雄、岸本直文、石坂泰士、西光慎治、田中聡、黒羽亮太、山田邦和、鍛治宏介、福島幸宏、上田長生、高木博志、新納泉、宮代栄一 | 168～177頁「大きく姿を変えた江戸時代の天皇陵」担当 |
| 『伊賀市史 第2巻 通史編（近世）』 | 共著 | 2016年9月 | 伊賀市 | 共著者：東谷智・上井俊記・淺井良亮・上田長生・太田光俊・鎌谷かおる・久世奈欧・郡山志保・小林秀樹・佐竹朋子・澤井廣次・鈴木善幸・寺嶋一根・福井健二・福持昌之・藤田達生・藤谷彰・藤本仁文・益田雄・松金直美・三宅正浩・宮本知恵子・山形隆司・山崎善弘・横山輝樹 | 297～322頁「村の暮らしと年中行事」、755～761頁「伊賀の文人と著作物」、768～775頁「伊賀の地誌」、808～821頁「文化の諸相」担当 |
| 『仏教史研究ハンドブック』 | 共著 | 2017年2月 | 法藏館 | 共著者：天野信他105名 | 270～271頁「朝廷・公家社会と仏教」担当 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書(続き) | | | | | |
| 『近江八幡の歴史 第七巻 通史Ⅱ 八幡山城から幕末まで』 | 共著 | 2017年3月 | 近江八幡市 | 共著者:太田浩司・賀川隆行・鎌谷かおる・木村至宏・笹部昌利・杉江進・古川与志継・中森洋・牧知宏・水本邦彦・八杉淳・山本晃子・鳥野茂治・森本英令奈 | 228～252頁「書物の時代と文化の広がり」担当 |
| 『文化史のなかの光格天皇 ―朝儀復興を支えた文芸ネットワーク―』 | 共著 | 2018年6月 | 勉誠出版 | 飯倉洋一・盛田帝子編 | 227～249頁「江戸時代手習所における七夕祭の広がりと書物文化」担当 |
| 論文 | | | | | |
| 「京都の通り名歌と江戸時代の書物文化」 | 単著 | 2016年3月 | 『京都学園大学総合研究所所報』第17号<br>(京都学園大学研究・連携支援センター) | | 21～33頁 |
| 「隠岐の長者村上助九郎と長者番付」 | 単著 | 2017年3月 | 『隠岐の文化財』第34号<br>(隠岐島後教育委員会・海士町教育委員会・西ノ島町教育委員会・知夫村教育委員会) | | 1～22頁 |
| 「日用教養書と文運東漸」 | 単著 | 2017年6月 | 『近世文学史研究』第2巻<br>(飯倉洋一 監修、ぺりかん社) | | 18～32頁 |
| その他 | | | | | |
| (講演)<br>「江戸時代における京都イメージの展開 ―「そうだ、京都いくでござる」―」 | 単独 | 2015年9月 | 新柳居市民講座、於 京都学園大学京町家キャンパス | | |
| (講演)<br>「江戸時代の文化 ―出版文化の広がりと常識の形成―」 | 単独 | 2015年11月 | ラボール学園 2015年秋期講座<br>日本史を読みなおす＜近世・近代編＞、於 ラボール学園 | | |
| (講演)<br>「近江八景の誕生とその広がり」 | 単独 | 2016年10月 | 栗東歴史民俗博物館企画展<br>「琵琶湖誕生―日本・世界が見聞した琵琶湖―」関連講演会、於 栗東歴史民俗博物館 | | |
| (講演)<br>「近江八景 ―江戸時代、書物文化からみる名所の誕生―」 | 単独 | 2016年11月 | ラボール学園 2016年度秋期講座<br>「名所・旧跡で考える日本史」、於 ラボール学園 | | |
| (口頭報告)<br>「隠岐の長者村上助九郎と朝廷」 | 単独 | 2016年12月 | 日本史研究会近世史部会部会報告、於 機関誌会館 | | |
| (講演)<br>「七夕夜話～浮世絵に描かれた節供～江戸時代の錦絵にみる七夕」 | 単独 | 2017年7月 | 公益財団法人生涯学習かめおか財団 丹波学トーク第89回、於 ガレリアかめおか(京都府亀岡市) | | |
| (口頭報告)<br>「疱瘡神詫び証文と若狭小浜組屋家の疱瘡守り札」 | 単独 | 2017年9月 | 「書物・出版と社会変容」研究会、於 京都大学総合博物館 | | |
| (講演)<br>「江戸時代近江八幡の文化と教育」 | 単独 | 2017年11月 | 八幡学区まちづくり協議会「地域課題学習講座・歴史回廊に学ぶ」、於 八幡コミュニティセンター | | |
| (講演)<br>「徳川光圀の史書編纂と京都」 | 単独 | 2018年11月 | ラボール学園・京都労働学校・2018年度秋期「人物から見る京の歴史＜近世・近代編＞、於 ラボール学園 | | |
| (講演)<br>「神の詫び状 ―江戸時代の病いへの対応―」 | 単独 | 2018年12月 | 京都学園大学人間文化学会 校名変更記念 連続講演会 みえない力の文化史 ―歴史文化篇―、於 京都学園大学 | | |
| (講演)<br>「江戸時代の書物文化と七夕祭」 | 単独 | 2019年6月 | 私立大学図書館協会西地区部会 京都地区協議会 第1回研究会、於 京都先端科学大学 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2013年8月～2017年3月 | 伊賀上野市史　執筆委員 |
| 2014年4月～2017年3月 | 近江八幡市史　執筆委員 |
| 2016年10月～(現在にいたる) | 日本史研究会　編集委員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 日本史(江戸時代)、京都の歴史、江戸時代の出版文化、古文書教室・古文書整理、古典籍整理 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　ｽﾃｨｰﾌﾞﾝ・ﾘｯﾁﾓﾝﾄﾞ | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

## Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| シラバス作成 | 2009年4月～ | 新学科の設立において、「西洋ゲームとスポーツ」「漫画イングリッシュ」などの今までなかった講座のシラバスおよび特化した教材を開発、実施、評価した。 |
| イミディアット・メソッド会話教授法：開発、実施、結果報告 | 2006年～現在に至る | 日本の外国語教育の現場で開発された会話教授法の開発に携わっている。教材つくりをはじめ、教授法を授業で実施、改善などに努める。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| (共)1日まるごと英語で表現できる! やさしい英語フレーズ2020 | 2019年 | 日常会話や海外旅行での会話、接客やビジネスで使える会話フレーズを対話形式でトレーニングすることができる、英会話レッスンさながらの実践力が身につく総合的フレーズブックを監修し、映像コンテンツも作製した。 |
| 今日からはじめて今日から使える 世界をもてなすシンプル英会話 | 2018年 | 2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピックに向けて、訪日外国人旅行者の数はますます増加傾向にあります。「おもてなしことば」の研究に基づいて、とっさん英語で話しかけられても焦らず、うまく受け答えができるように、本書では必要最低限のかんたんな英文を厳選し、会話例をたくさん添えました。 |
| (共)まぜ単 | 2018年 | 「合格のためならどんなsacrificeも払う」のように日本語の中に英単語まぜて覚える、変わり種の単語帳が登場! 英単語の意味を想起しやすい例文で、楽しく学習が続けられます。2冊目の単語帳として手元に置いて、ぜひ記憶に残りづらい単語本を監修した。 |
| (共)竹岡の英文法・語法ULTIMATE究極の600題<br>(学研プラス) | 2018年 | 最新の大学入試問題を分析した上で、入試にほんとうによく出る問題だけをセレクトし、使用頻度やニュアンスを説明する文法参考書です。問題選定にあたり、高3生、受験生にすべての問題をモニター受験者として解いてもらい、間違いの多かった「差がつく問題」を多く収録しています。 |
| (共)Conversations in Class<br>(First Edition, New Edition, ThirdEdition) | 2006年、2009年、2015年 | 2006年に執筆した会話教科書の2回改善版を制作した。外国人・日本人大学生の会話を記録して、会話コーパスを制作した。異文化によって異なる応用会話スキル(プラグマティックスキル)を上達させる特別講座ないようなどを開発した。 |
| Teaching the Golden Rules of English Conversation. In: *Pragtivities: Bringing Pragmatics into the Classroom.*<br>全国語学教育学会 JALT PRAGSig出版 | 2012年 | 語用論からみる英会話の三つの'鉄則'の教授法を説明したリソース・ブックの一章。会話分析を用いた日本語会話と英会話の対照に基づく研究結果を会話教室に使う実用本の一章。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 今日からはじめる！　英語「4技能」対策 | 2019年3月 | これから英語4技能対策をはじめる人、すでに対策をはじめている人、英語4技能に関心のあるすべての新高1・高2年生を対象に、竹岡広信先生と「より良い学習の仕方」をレクチャーした。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| Politeness of Japanese-Australian English Cross-cultural Service Interactions: A discursive cross-cultural and intercultural approach | 2015年12月 | 博士課程第一回発表で、オーストラリアと日本の接客場面のポライトネスという研究課題の背景、概念、目的、過程等を述べた。 |

## Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 英語とマンガで表現する―マンガ専門英語の取り組み | 共 | 2014年3月 | 京都精華大学<br>『京都精華大学紀要』第44号 | 乾由紀子、渡辺紀子 | 155-180 |
| *Slang, Simile and Humour-Contemporary Australian English in the films* Noise *and* Animal Kingdom. | 単 | 2011年12月 | 京都学園大学人間文化学会紀要<br>人間文化研究　第28号 | | 205-225 |
| The Immediate Method- Task-based Learning in Japanese University Conversation Classrooms | 単 | 2011年7月 | Proceedings of 2011 KATE International Conference, Yonsei University, Seoul | | 234-237 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表） | | | | | |
| Creating Accessible Materials for Pragmatic competence in English Conversation Classes | 単 | 2014年6月 | 2014年度 大学英語教育学会（JACET）関西支部秋季大会 大阪薬科大学 | | |
| Conversations in Class: Creating a pragmatically−based conversation textbook | 単 | 2013年10月 | JALT松山支部 | | |
| Visualizing English through Manga | 共 | 2013年7月 | JACET関西支部ESP研究会2013年第2回の研究会 | 乾由紀子、渡辺紀子 | |
| Using Manga to Develop Pragmatic Skills in University English Conversation Classes | 単 | 2012年11月 | 2012年度 大学英語教育学会（JACET）関西支部秋季大会 京都産業大学 | | |
| Second Language Conversation Classes in Japan－Approaches and Solutions | 単 | 2011年10月 | Colleges of the Fenway Teaching & Learning Conference ボストン、アメリカ合衆国 | | |
| Explicit teaching of conversational pragmatic skills to Japanese students | 共 | 2010年7月 | 18th International Conference on Pragmatics and Language Learning (PLL18) 神戸大学 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本会話教育研究会会員 |
| | JALT会員 |
| | 語用論学会 |
| | JACET会員 |
| | 社会言語化学会　会員 |
| | ETJ会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　関口　久雄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1. マルチメディア論 | 2004年4月～2017年3月 | 「文字」「映像」「電話」そして「コンピュータ」といった基本的なメディアの特徴をその歴史に焦点をあて概観し、新たなメディアの登場によって人間および社会のコミュニケーションがどのように変容していったかを具体的な事例をもとに検討し、「メディアでなにができるのか（＝メディア・リテラシー）」を考える講義。映像メディアを積極的に活用するとともに、実際にさまざまなメディアを教室に持ち込み体感してもらうことに重点を置く。 |
| 2. 情報ネットワーク論 | 2004年9月～2017年3月 | インターネット（＝メディアとしてのコンピュータ）によるコミュニケーションの特徴等を整理し、ネットワーク上での“新しい流れ”、そして、それらに伴う現実社会での“変革”の動きを、その可能性／問題点等を含めながら考えていく講義。授業内でインターネットを積極的に活用するとともに、授業参加メンバーによる「ML（メーリングリスト）」を作成し、授業連絡及びネットワークコミュニケーションの実践を試みる。 |
| 3. プロジェクトワーク論 | 2007年9月～2018年3月 | なんらかの目標を達成するための「計画」を意味する「プロジェクト（project）」の語源は「pro＋ject＝前方（未来）に向かって投げかける」。本講義では、コミュニケーションの手段としてのメディアについてのこれまでのプロジェクトの実践例を検証するとともに、「プロジェクト」および「ワーク（work）」を実践的に考察し、「未来を構築する」をテーマに、グループワークで実際にプロジェクトの立案／運営を試みる。 |
| 4. メディア表現実習 | 2005年4月～2017年3月 | アナログからデジタルまで、コミュニケーションの手段・道具としてのメディアを、だれもが自由に、さまざまなかたちで活用するための基礎演習＠メディア《つくる》工房。具体的には、文字／画像を“平面”に並べる、印刷する、製本をする→名刺をつくる／Tシャツをつくる／写真集をつくる。静止画／動画を“時間軸”で並べる、音楽を加える、CD/DVDに保存する→動くフォトアルバムをつくる／ムービーをつくる 。PC／ケータイでネットを活用する→ライブ中継をする。 |
| 5. メディア専門演習 | 2005年4月～ | 自分たちのまわりにあるさまざまなメディアについて体験するためのワークショップ形式の演習。さまざまなメディア体験した後に考える。「なぜ楽しかったのだろうか／なぜつまらなかったのだろうか」。同ジャンル／他ジャンルのものとの比較もしてみる。また「あのやり方は問題だ」「こうすればもっとよくなるはず」等々“自分ならばどうするか”をさまざまな視点から熟慮してみる。そして、自らなにかしらのメディアをつくる／考える、を試みる。 |
| 6. メディア・リテラシー | 2014年4月～ | 「コミュニケーションするための手段」であるメディアは、声や身振り、絵や文字からはじまり、いわゆる技術を介することによって、電信、電話、録音、印刷、放送等を経て、今日のデジタルな時代に至る。新たなメディアの登場によって人間および社会のコミュニケーションは変化を続けている。本講義は、そのような「メディアと社会」の変遷を大学で学ぶための入門的講義として、音や映像等さまざまなメディアを用いたコミュニケーションの、これまで／これからを具体的な事例を映像／音声メディアを基に実践的に考えていく。 |
| 2　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 3　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1. メディア《つくる》工房 | 2005年4月～ | コミュニケーションの手段・道具としての「メディア」をさまざまなスタイルで活用できる、自らの手を使った“ものづくり”の学びの場／コミュニケーションの場としての「メディア《つくる》工房」の企画運営を担当 |
| 2. メディア・リテラシー教育の実践 | 2004年4月～ | 「メディアって、なに？」「メディアの遊び場」他のメディアリテラシー教育の各種ワークショップ等の企画運営。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| メディアのリテラシーを教えることは可能なのか？ | 単 | 2015 | 『人間文化研究』第36号 | | pp.23-40 |
| 映像による表象行為における編集と呼称される作業／思考の工程について　序 | 単 | 2016 | 『人間文化研究』第37号 | | pp.180-196 |
| 新しい、メディア、テレビ：1958年『マンモスタワー』再見 | 単 | 2017 | 『人間文化研究』第40号 | | pp.93-125 |
| 事実を再構成する表現者たちと自らを演じる人たちの相対：1995年『NONFIX ドキュメンタリーの定義 vol.4 事実とドキュメンタリーの間』再現 | 単 | 2018 | 『人間文化研究』 第42号 | | pp.3-82 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| メディア遊び研究／実践（2007年～） | 国内外でのライブイベント等の映像記録撮影・中継・編集他、メディア遊び研究／実践として活動。<br>・Spiral Groove 10th LIVE @群馬県桐生市 有鄰館 煉瓦蔵（2018年1月13日）<br>学生スタッフらと共に、コンテンポラリーダンスのパフォーマンスの記録映像の撮影・編集、インターネット生中継及びDVD制作を担当 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 人文学部　心理学科教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 有　馬　　淑　子 | 360 |
| | 岡　本　　裕　介 | 361 |
| | 川　　畑　　隆 | 362 |
| | 君　塚　　洋　一 | 364 |
| | 内　藤　登　世　一 | 366 |
| | 山　　愛　　美 | 368 |
| | 行　廣　　隆　次 | 374 |
| 特任教授 | 小　川　　賢　治 | 376 |
| 特別教授 | 久　保　　克　彦 | 377 |
| 准教授 | 飯　野　　秀　子 | 378 |
| | 伊　原　　千　晶 | 382 |
| | 橋　本　　尚　子 | 384 |
| 講師 | 神　　原　　歩 | 386 |
| | 服　部　　陽　介 | 389 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　有馬　淑子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | 2001年～ | 講義内容・レポートなどのweb公開・パワーポイントの配布など |
| | 2005年～ | ブログ・web調査の授業利用など |
| | 2015年～ | Edmodoによるインターラクティブな講義 |
| | 2016年～ | 簡易脳波計を用いた心理学実習 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | 2001年～ | 社会心理教材・シミュレーション＆ゲーミング教材・実験プログラムなど |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 集合知予備実験結果報告 | 単著 | 2016年3月1日 | 京都学園大学<br>人間文化学会紀要<br>vol.36 | | pp.1-17 |
| 簡易脳波計を用いた心理学実験教育の試み－情動喚起刺激が安静時脳波に及ぼす影響 | 単著 | 2017年3月1日 | 京都学園大学<br>人間文化学会紀要<br>vol.38 | | pp.2-15 |
| Measuring shared knowledge with gourp false memory. | 共著 | 2018年7月4日 | Scientific Reports, Vol.8 | Yoshiko Arima, Ryoji Yukihiro, Hattori Yosuke | 10117(E-journal) |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>Measuring Shared Knowledge with Group False Memory | 共著 | 2015年6月1日 | Collective Intelligence 2015 at University of Michigan | Yoshiko Arima, Hattori Yosuke | http://sites.lsa.umich.edu/collectiveintelligence/wp-content/uploads/sites/176/2015/02/Arima-CI-2015-Abstract.pdf |
| （ポスター発表）<br>Measuring Shared Knowledge with Group False Memory (2) | 単著 | 2016年7月1日 | The 31st International Congress of Psychology | Yoshiko Arima, | http://www.mysch edule.jp/icp2016/search/detail_program/id:713 |
| （指定討論者）<br>集団の不合理な判断と意思決定 | | 2017年10月1日 | 日本グループダイナミックス学会第64回大会 | 有馬　淑子 | ワークショップ演題番号WS-3 |
| （講演会）<br>Implicit Attitude in our Culture | 単著 | 2017年9月18日 | 中国　浙江大学<br>心理科学研究中心　講演会 | Yoshiko Arima, | |
| （ポスター発表）<br>心蜂宝一紳基子自律神径功能坪介的心理圧力鍍解宗合解決方案（心拍数計測を用いたストレス解消法） | 共著 | 2018年10月27日 | 中国紹興市高度次人材科技項目信息表 p.65 | Sheng Hongq, Yoshiko Arima, | 2018 Summit Meeting of Talents by Shaoxing China |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　岡本　裕介 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | 2003年4月～ | ほぼすべての授業で、ウェブを介し教材・レポート等をやりとりしている。 |
| | 2007年4月～ | 講義科目で、独自教材(紙媒体)を配布。 |
| | 2016年9月～2018年3月 | 社会調査実習の入門クラスで、イベントを開催し、参加者への調査票調査、インタビュー調査を通して、社会との接続を考えながら調査を行なう実習を試みた。 |
| | 2018年9月～ | 社会調査実習の入門クラスで、社会人から課題を出してもらい、調査を介してそれを解決することを試みている。2018年度は、限界集落の住民から移住者を増やす方法を問われ、移住経験者からインタビューをして何が条件になりうるかを探った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2005年4月～ | 社会調査協会(社会調査士資格認定機構)連絡責任者 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 日本的社会与文化 | 共著 | 2015年4月 | 世界知识出版社 | 井上俊, 伊藤公雄(編著) | pp.148-156 |
| 論文 | | | | | |
| 世論調査における主体の構築 | 単著 | 2018年3月 | 京都学園大学<br>人間文化学会紀要<br>第40号 | | pp.95-103 |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2008年12月～ | 社会調査協会連絡責任者 |
| | 日本社会学会会員 |
| | 関西社会学会会員 |
| | 社会調査協会会員 |
| | 日本環境社会学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

調査票調査、聞き取り調査、ドキュメント分析等、社会調査全般

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　川畑　隆 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | 2007年～現在 | ・配布した小用紙に感想、質問、意見を書いて提出するよう促し、次回の授業でその1つひとつに丁寧に答える取り組みを行なっている。　・授業等で、今後の学習の見通しが得られるような話題や、進路選択に関する情報等を意識的に伝えている。<br>・心理学科の学生には対人援助現場への就職を望む者もおり、またその分野への啓発のためにも、社会福祉施設や相談機関等への見学実習を企画し出かけ、ボランティアやアルバイトの紹介等も積極的に行なっている。2017年度からは外部機関への見学実習は中断しているが、授業やその他での社会福祉施設への就職情報などの提供に心がけている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | 2015年 | 「アセスメントの技とコツ」（明石書店・編） |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | 2015年 | ベストティーチャー賞受賞にともない、学内FD研修会で「自分の授業について」と題して話題提供 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | 2006年～現在 | ・担当ゼミの学生だけではなく、授業を介して出会った学生の学業、生活、精神面や進路に関する相談等にも、研究室その他でのっている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 子ども・家族支援に役立つアセスメントの技とコツ～よりよい臨床のための4つの視点、8つの流儀 | 共 | 2015年 | 明石書店 | 編著者：川畑　隆 | まえがき　pp43-45<br>pp158-189　あとがき |
| 心理検査を支援に繋ぐフィードバック～事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方 第2集 | 共 | 2016年 | 金剛出版 | 編者：竹内健児 | pp90-97 |
| 公認心理師技法ガイド～臨床の場で役立つ実践のすべて | 共 | 2019年 | 文光堂 | 編集主幹：下山晴彦 | pp815-818 |
| 論文 | | | | | |
| 児童虐待防止の専門技能 | 単 | 2015年 | 『臨床心理学』第15巻第5号<br>金剛出版 | | pp.602-606 |
| 新版K式発達検査2001を用いた発達相談<br>～援助につなげる思考の枠組の一例 | 単 | 2015年 | 京都学園大学附属<br>心理教育相談室紀要<br>『心理臨床研究』第13号 | | pp.15-20 |
| 保護者や家族についてアセスメントする自分をアセスメントする | 単 | 2016年 | 『発達』147号　ミネルヴァ書房 | | pp.52-57 |
| 発達検査でわかることと検査者を鼓舞するもの | 単 | 2018年 | 『臨床心理学』第18巻第2号<br>金剛出版 | | pp.174-177 |
| その他 | | | | | |
| 臨床心理学的地域援助の身近な題材 | 単 | 2017年 | 京都学園大学人間文化学会紀要『人間文化研究』第38号 | | pp.161-171 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2006年4月～現在 | 若手心理判定員のための臨床的心理検査法研修会「ワークショップ・イン・神戸」主宰グループメンバー |
| 2006年4月～現在 | 「対応のバリエーション勉強会」主宰グループメンバー |
| 2006年4月～2017年3月 | 日本心理臨床学会で、毎年、自主シンポジウムを個人あるいは協同で企画、開催 |
| 2006年4月～現在 | 「治療教育セミナー」（京都国際社会福祉センター主催） 講師グループメンバー |
| 2006年4月～現在 | 教員、対人援助職、一般等を対象とした講演、ワークショップ等の講師 |
| 2006年5月～現在 | 京都府児童相談所児童虐待防止アドバイザー |
| 2007年4月～2016年3月 | 京都府教育委員会トータルアドバイザー設置事業に係る適応指導相談員 |
| 2008年4月～現在 | 情緒障害児短期治療施設「桜学館」（岐阜県関市）スーパーバイザー |
| 2009年4月～現在 | 亀岡市人権教育啓発指導員 |
| 2010年4月～現在 | 児童養護施設「鹿深の家」（滋賀県甲賀市）スーパーバイザー |
| 2011年4月～現在 | 奈良県スーパーアドバイスチームアドバイザー |
| 2011年4月～2017年5月 | 日本臨床心理士会福祉領域委員会子ども家庭支援部会委員 |
| 2011年4月～2017年3月 | 京都府教育委員会認定フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」主催「ラウンドテーブル」スクール外スタッフ |
| 2011年4月～現在 | 臨床心理士等の社会人（現在1名）や、臨床心理学専攻大学院生（現在0名）のスーパーバイザー |
| 2012年4月～現在 | 特別支援教育サポート拠点事業における京都府専門家チーム委員 |
| 2013年5月～現在 | 亀岡市自立支援運営協議会委員 |
| 2014年4月～現在 | 障害幼児通園施設「乙訓ポニーの学校」（京都府長岡京市）スーパーバイザー |
| 2014年11月～現在 | 亀岡市いじめ防止対策推進委員会委員 |
| 2015年4月～現在 | 高知県幡多児童相談所機能強化アドバイザー |
| 2018年4月～現在 | 奈良県桜井市家庭児童相談室アドバイザー |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 子どもや家族の福祉・教育相談に含まれる対人援助の視点や技術 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　君塚 洋一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「表現文化論」「情報環境論」などにおけるワークショップの手法を採り入れた授業及び実習の運営 | 2015年度～2018年度 | メディア・コミュニケーションの基礎教育などにおいて、レクチャーと学生参画を並存させつつ、学生の基礎学習や表現スキルの習得に主体的に取り組ませるプログラムおよび学生の相互触発の工夫を導入している。 |
| 「メディア専門演習」メンバーによる地域連携プロジェクト(観光広報誌『亀岡を歩く』作成)への参画 | 2015年6～2016年3月 | 地域連携プロジェクトとして、「メディア専門演習Ⅰ」において、亀岡地区の観光資源の掘り起こしと同地区の観光パンフレットの制作を行った。亀山城下町、亀山城址、柿渋染め店、地場産食材のパン店など5件程度を取り上げた。パンフレットは700部印刷、掲載施設のほか、亀岡駅観光案内所、湯の花温泉旅館組合、保津川遊船企業組合、嵯峨野観光鉄道など数カ所に無料で設置した。 |
| 「社会コミュニケーション基礎演習」(実践プロジェクトC)メンバーによる地域連携プロジェクト(インタビューを通じた地域の仕事の調査・体験学習)への参画 | 2016年度～2018年度 | 身近な地域で人のために働く人たちが仕事を通してどのように「まち」を支え、その成就のためどのような発想や発信を行っているかをテーマに、受講生全員が亀岡や京都の仕事のプロの方々を訪れ、亀岡まちづくりコーディネーター、亀岡城下町老舗店主、京料理店主、関西のシンガー・ソングライター、保津川下り会社社長らのインタビュー調査とまち歩きを通じて探り、受講生のレポートを集成して報告書を作成した。 |
| 「専門ゼミ」メンバーによる地域連携プロジェクト(観光広報誌『京のよりみち--亀岡・保津の彩り』作成)への参画 | 2017年度～2018年度 | 地域連携プロジェクトとして、「専門ゼミ」において、亀岡地区の観光資源の掘り起こしと同地区の観光パンフレットの制作を続けている。亀山城下町商店街、亀岡祭の行事食(鯖寿司とぜんざい)、保津町の藍染工房、同じくガラス工房などを取り上げてきている。パンフレットは500部程度印刷、掲載施設のほか、亀岡駅観光案内所などで配布している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 演習案内パンフレット「社会・産業系ゼミのつくりかた」の作成 | 2019年3月 | 2016～2018年度「社会コミュニケーション基礎演習」「専門ゼミ」で行った京都・亀岡の観光広報誌作成やさまざまなフィールドワークの実績、卒業研究などゼミ生の活動を一覧できる演習案内パンフレットを作成した。心理学科2回生の社会コミュニケーション基礎演習の履修説明会などで低回生に配布、ゼミでの活動の具体的イメージを持てるようにした。 |
| 「社会コミュニケーション基礎演習」(実践プロジェクトC)報告書の作成 | 2017年3月 | 「社会コミュニケーション基礎演習」(実践プロジェクトC)の3クラス(岡本裕介教授、小川賢治教授、君塚)が行ったフィールドワークの成果を報告書としてまとめ、デザイン・印刷した。内容は「イベント企画を通した社会調査入門」(岡本教授)、「京都について社会学的に調査する」(小川教授)、「まちをつくる仕事とこころを探ろう」(君塚)の3つに分かれ、学内外の関係者のほか、下回生にも配布し、フィールドワーク授業を具体的にイメージしてもらう参考資料としている。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『選曲の社会史―「洋楽かぶれ」の系譜』 | 単 | 2018年3月 | 日本評論社 | | |
| 論文 | | | | | |
| 「現代広告と『市場情報システム』―変容する情報提供主体への視座(第2回)　制度と文化、2つのアプローチを超えて」 | 単 | 2015年12月 | 京都学園大学人間文化学会<br>『人間文化研究』第35号 | | pp.1-21 |
| 「放送音楽の社会史02」 | 単 | 2018年1月 | 京都学園大学<br>君塚洋一研究室<br>『URBAN NATURE』Volume02 | | pp.16-45 |
| 「選曲の社会史 ―『機会音楽』の日常化とその『媒介』過程」 | 単 | 2019年3月 | 京都学園大学<br>研究・連携支援センター<br>『京都学園大学総合研究所所報』<br>No.20 | | pp.70-83 |

| | |
|---|---|
| その他 | |
| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
| 1983年4月～ | 日本広告学会学会会員 |
| 1985年4月～ | 日本マス・コミュニケーション学会会員 |
| 2015年6月～2016年3月 | 「千葉市文化施設の再構築に関する基礎調査業務」でのアドバイザー<br>((株)文化科学研究所が受託、同研究所よりアドバイザー委託) |
| 2015年7月 | 京都府立園部高等学校進路学習「研究者に聴く」のヒアリング対応 |
| 2015年10月 | 「第32回京都府高等学校総合文化祭ビデオメッセージ部門及びオーディオピクチャー部門」審査員 |
| 2016年8月 | 京都府高等学校文化連盟放送部会加盟10校を招いた「映像研修会」を朋文館マルチスタジオほかで開催 |
| 2016年10月 | 「第33回京都府高等学校総合文化祭ビデオメッセージ部門及びオーディオピクチャー部門」審査員 |
| 2016年10月～2019年9月 | 日本広告学会・学会賞委員会委員 |
| 2017年2月 | 「第10回春の高校放送フェスティバル in Kyoto　ビデオ・メッセージ部門」審査員 |
| 2017年5月 | 人文学部心理学科社会コミュニケーションコース学術講演会・高松平蔵氏<br>「ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか」広報リーフレット作成 |
| 2017年8月 | 滋賀県高等学校文化連盟放送部会加盟10校を招いた「映像研修会」を朋文館マルチスタジオほかで開催 |
| 2017年10月 | 「第34回京都府高等学校総合文化祭ビデオメッセージ部門及びオーディオピクチャー部門」審査員 |
| 2018年1月 | 表現文化研究誌『URBAN NATURE』Volume02（京都学園大学君塚洋一研究室）刊行 |
| 2018年10月 | 「第35回京都府高等学校総合文化祭ビデオメッセージ部門及びオーディオピクチャー部門」審査員 |
| 2019年6月 | 「第66回NHK杯全国高校放送コンテスト京都府大会テレビドキュメント部門、<br>ラジオドキュメント部門、創作テレビドラマ部門」審査員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 地域や組織の広報支援 | |
| 商品やサービスのブランドづくり・広報施策への支援 | |
| 音楽など地域の芸術文化活動振興への助言・支援 | |
| グラフィックおよびウェブサイトの編集・デザイン制作 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　内藤　登世一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 多項目による成績評価や授業の工夫 | 2015年4月～ | 期末試験だけで成績評価をするのではなく、出席、宿題、中間試験、レポート、期末試験と多項目にわたって評価し、最終成績を決定している. また、ビデオ等を用いてビジュアル的に理解を深めるよう工夫している. |
| 体験学習を授業内に取り入れて理解を深める | 2017年4月～ | 環境経済学の授業において、排出量取引制度のしくみやその長所を深く理解させるために、体験学習を行っている. 具体的には、授業内で学生が実際に企業家となって、排出許可証の売買を行っている. |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 授業ノート・問題集の作成<br><br>英語教材の日本語への翻訳 | 2015年4月～ | 教科書 ― N. グレゴリー・マンキュー著(足立英之他訳)『入門経済学』東洋経済新報社(2008年)― に基づいて、書き込み式の授業ノートを作成している. また、教科書付属の授業補助用教材のパワーポイント・ファイルを英語から日本語に翻訳して使用している. |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 中高校生に教えることで大学の授業をわかりやすく改善する | 2015年10月～ | 特定非営利活動法人 経済知力フォーラムのメンバーとして、中学校や高等学校で経済学を教える活動を行っている. 環境問題をテーマに、環境経済学について、専門用語を用いないでやさしい言葉でわかりやすく説明することによって、大学での教育能力のアップに繋げている. |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 絶滅危惧種「アユモドキ」の経済的価値の分析　― 京都府亀岡市の事例 ― | 共著 | 2015年12月1日 | 『人間文化研究』<br>京都学園大学<br>人間文化学会紀要<br>第35号 | 内藤 登世一・上須道徳(大阪大学) | pp. 41～60 |
| An analysis of the economic value of the endangered species Ayumodoki ―A case study of Kameoka City, Kyoto Prefecture ― | 共著 | 2016年11月29日 | International Institute of Fisheries Economics and Trade (IIFET)<br>国際漁業経済学会 | Naito, Toyokazu and Michinori Uwasu | http://hdl.handle.net/1957/59975 |
| その他 | | | | | |
| (国際学会 招聘講演)<br>An analysis of the economic value of the endangered species Ayumodoki ―A case study of Kameoka City, Kyoto Prefecture in Japan ― | 共著 | 2016年6月17日 | International Conference on "Green ASIA and Inclusive Sustainable Development" Eastern Asia University<br>(タイ・バンコク) | Naito, Toyokazu and Michinori Uwasu | |
| (国際学会 口頭発表)<br>An analysis of the economic value of the endangered species Ayumodoki ―A case study of Kameoka City, Kyoto Prefecture ― | 共著 | 2016年7月15日 | 第18回International Institute of Fisheries Economics and Trade (IIFET) Conference<br>国際漁業経済学会<br>(スコットランド・アバディーン) | Naito, Toyokazu and Michinori Uwasu | |
| (共同研究助成・報告・報告書)<br><br>亀岡市に生息する絶滅危惧種「アユモドキ」の経済的価値評価 | 単著 | 2015年3月24日 | 亀岡市<br>(報告会: 亀岡市役所市民ホール) | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2015年4月～2019年3月 | 亀岡市環境審議会　会長 |
| 2015年11月9日 | 特定非営利活動法人 経済知力フォーラム　授業講師<br>「経済と環境問題 ― 環境を守る経済政策 」 京都市立西京高校附属西京中学 |
| 2016年4月～現在 | 亀岡市総合計画審議会　委員 |
| 2016年11月7日 | 特定非営利活動法人 経済知力フォーラム　授業講師<br>「経済と環境問題 ― 環境を守る経済政策 」 京都市立西京高校附属西京中学 |
| 2017年11月6日 | 特定非営利活動法人 経済知力フォーラム　授業講師<br>「経済と環境問題 ― 環境を守る経済政策 」 京都市立西京高校附属西京中学 |
| 2018年11月5日 | 特定非営利活動法人 経済知力フォーラム　授業講師<br>「経済と環境問題 ― 環境を守る経済政策 」 京都市立西京高校附属西京中学 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　山　愛美 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | 講義で配布資料を多く用意し、学生の関心の度合いや基礎学力の幅に対応できるよう工夫している。基礎的な知識の習得を目的としている学生には、それが可能になるように、また発展的に勉強、研究を広げられるよう、勉強の方法も含めて指導に努めている。ただ知識として教えるだけではなく、日常の中での体験と結びつけながら講義をすることにより、学生たちにとってより実感を伴った知識とすることを心がけている。DVD,Pptを組み合わせて用い、実験の時間なども取り入れ、できるだけ能動的に学生が参加できるような講義を実施している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | 『行動と深層の心理学』(学術図書出版社、山祐嗣と共著、平成5年4月)を基にその年度に合う内容に改定して教材を作成している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | 深層心理学研究会の講師の依頼を受け、臨床心理学における深層心理学的視点について講演を行っている。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | 海外での依頼を受けての講演、ワークショップ、セミナ、国際学会での発表などから得られた成果を積極的に授業の中に盛り込み、海外での動向を視野に入れた講義内容を提供している。また、私のこれまでの海外での体験話を通して学生たちが国際的な視点を持つよう働きかけている。大学院の教育においては、学生の心理臨床の実習先の臨床心理士や教員への指導のため講座の講師やスーパーヴィジョンを引き受け、できるだけ現場とのコミュニケーションが取れるようにしている。学生にとって、外部機関での臨床実践体験と学内での教育及び研究指導とが有機的につながりを持って機能するように個別の教育指導を手厚く行っている。多人数対象の授業であっても、提出物などを通してできるだけ個別に対応することを務めている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『心理療法家が語る物語　香月泰男　黒野創造ーシベリアを描き続けた画家　制作活動と作品の深層』 | 単 | 2016年4月15日 | 遠見書房 | 山　愛美 | pp.1-238全頁 |
| Spirited Away and its depction of Japanese Traditional Culture in *The Routledge International Hand book of Jungian Film Studies* Hockley,L (ed) | 単 | 2018年 | Routledge | Megumi Yama | pp.264-276 |
| Non-fixed multiple perspectives in the Japanese Psyche: Traditional Japanese art, dream and myth. In *Contemporary Influences of C. G. Jung's Thought. Contemporary Psychoanalytic Studies 24.* Blocian,I. & Kuzmicki, A (eds.). | 単 | 2018年 | Brill | Megumi Yama | pp.141-157 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書(続き) | | | | | |
| Chap.3 Listening to a dream-narrative: A language for narrating boundaries In Narratives of Individuation (eds.) Jones, R.A., Gardner, L | 単 | 2019年 | Routledge | Megumi Yama | pp.52-70 |
| The Red Book: A Journey from West to East via the Realm of the Dead In *Jung's Red Book for Our Time: Searching for Soul under Postmodern Conditions.* (eds.) Stein, M &Arzt, T. | 単 | 2019年 | Chiron Publications | Megumi Yama | pp.273-290 |
| 論文 | | | | | |
| 香月泰男の『シベリヤ・シリーズ』にみる表現の始まり | 単 | 2015年12月 | 京都学園大学<br>『人間文化研究』第35号 | 山 愛美 | pp.147-165 |
| Haruki Murakami: Modern-Myth Maker beyond Culture. | 単 | 2016年2月 | *Jung Journal Culture & Psyche* 10 (1) | Megumi Yama | pp.87-95 |
| 村上春樹の創作過程についての覚書(4) -言葉・身体性・文体- | 単 | 2016年3月 | 京都学園大学<br>『人間文化研究』第36号 | 山 愛美 | pp.149-168 |
| 村上春樹の創作過程についての覚書(5) -記憶について- | 単 | 2017年3月 | 京都学園大学<br>『人間文化研究』第38号 | 山 愛美 | pp.103-125 |
| くも膜下出血後遺症の男性に対する箱庭療法-ニューロサイコアナリシスの観点から | 共 | 2017年 | 箱庭療法学研究第30巻第1号 | 秋本倫子・平尾和之・山 愛美 | pp.56-66 |
| Affective Neuroscience Personality Scale日本語版の信頼性および妥当性の検討ー感情神経科学に基づいたパーソナリティへのアプローチ | 共 | 2017年 | 臨床心理学第17巻第5号 | 成田慶一・八田太一・平尾和之・三田村仰・山 愛美・横出正之 | pp.691-702 |
| Cross-cultural affective neuroscience personality comparisons of Japan, Turkey and Germany. | 共 | 2018年 | *Culture&Brain* | F. G. Özkarar-Gradwohl, K. Narita, C. Montag, J. Panksepp, K. L. Davis, M. Yama & H. R. Scherler | pp.1-26 |
| 1The Meaning of Mystical Experiences on the Boundary between Life and Death: Observations from Survivors of the Great East Japan Earthquake. | 単 | 2019年6月 | *Jung Journal Culture & Psyche* 13 (2) | Megumi Yama | pp.21-34 |
| 論文(随筆) | | | | | |
| 村上春樹の随筆「使いみちのない風景」にみる二種類の風景 | 単 | 2017年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第18号 | 山 愛美 | pp.20-25 |
| 巻頭言「奥行きのある幅の広い人間理解に向けて」 | 単 | 2018年 | 京都学園大学心理臨床研究第14号 | 山 愛美 | pp.1 |
| 論文(コメント論文) | | | | | |
| 森本論文へのコメント | 単 | 2017年3月 | 東洋英和女学院大学<br>心理相談室紀要第20号 | 山 愛美 | pp.321-323 |
| 中島先生の「事例の物語」へのコメント | 単 | 2017年3月 | 常葉大学<br>臨床心理事例研究紀要<br>第8巻第1号 | 山 愛美 | pp.60-62 |
| 齊藤論文へのコメント | 単 | 2018年3月 | 常葉大学<br>臨床心理事例研究紀要<br>第9巻第1号 | 山 愛美 | pp.125-128 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（招待講演など） | | | | | |
| 心理臨床に活かす描画と表現 | 単 | 2015年8月 | 第5回表現性心理療法学会 workshop 中国 蘇州 | 山愛美 | |
| 「イメージから形へ、形からイメージへ：表現に見る国際比較」 | 単 | 2015年6月 | 台湾 嘉南薬理大学・禾心カウンセリングセンター共催 | 山愛美 | |
| 「内的世界における「異界」とのかかわりについて」 | 単 | 2015年6月 | 台湾 嘉南薬理大学・禾心カウンセリングセンター共催 | 山愛美 | |
| 「ある女性のイニシエーション過程」 | 単 | 2015年6月 | 台湾 嘉南薬理大学・禾心カウンセリングセンター共催 | 山愛美 | |
| Seminar Japanese psyche: myth, traditional Japanese art, language, dream & psychotherapy (seminar for candidates：10hours ) 講師 | 単 | 2016年10月22・23日 | ボストン・ユング研究所 | Megumi Yama | |
| Case colloquium 講師 | 単 | 2016年10月24日 | ボストン・ユング研究所 | Megumi Yama | |
| Public lecture『Japanese psyche: non-fixed multiple perspectives in traditional Japanese art and myth』 | 単 | 2016年10月28日 | ボストン・ユング研究所 | Megumi Yama | |
| 「【黑色的創造】徘徊在「死的世界」思考「活著」的意義 」 | 単 | 2017年7月28日 | 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催台湾 | 山 愛美 | |
| 【夢的療癒力】青春期女性的自我追尋—夢境與繪畫的意象展現 | 単 | 2017年7月29日 | 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催台湾 | 山 愛美 | |
| 【成為表達場域的沙遊】沙遊中的自我呈現與療癒力 | 単 | 2017年7月30日 | 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催台湾 | 山 愛美 | |
| 講演 Japanese Psyche: Japanese myth Kojiki and traditional art. | 単 | 2018年7月17日 | OCU International Psychology Seminar 2018 Welcoming Dr. Veronique Salvano-Pardieu. Moral, Reasoning and Culture. | Megumi Yama | |
| 講演 児童文学 | 単 | 2019年9月27日（予定） | 台南嘉南藥理大學 國際會議廳 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催 | 山 愛美 | |
| 講演 解夢的方法論 | 単 | 2019年9月28日（予定） | 台南嘉南藥理大學 國際會議廳 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催 | 山 愛美 | |
| 講師 事例検討 | 単 | 2019年9月29日（予定） | 台南嘉南藥理大學 國際會議廳 禾心心理諮商所、沙遊世界表達與療癒發展中心主催 | 山 愛美 | |
| その他 国際学会・全体講演 | | | | | |
| 全体講演 Plenary speaker ″The concept of *kami* in Shintō and Holism: Psychotherapy and Japanese literature″ | 単 | 2017年9月 | Holism: Possibilities and Problems. An international interdisciplinary conference. Essex大学 英国 | Megumi Yama | |
| 全体講演 Featured Speaker ″How can we survive in this globalized age?″ | 単 | 2019年911月（予定） | The 2019 IAJS Regional Conference Osaka | Megumi Yama | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（国内学会） | | | | | |
| シンポジウムパネリスト『イメージの力』 | 単 | 2017/12/1 | 日本臨床心理身体運動学会<br>第20回大会<br>筑波大学 | 山　愛美 | |
| 講師：ワークショップ「夢のイメージは時空を超えて」 | 単 | 2019年12月（予定） | 日本臨床心理身体運動学会<br>第22回大会<br>新潟 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2014年10月5日 | 日本箱庭療法学会<br>第28回大会<br>東洋英和女学院大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2015年10月11日 | 日本箱庭療法学会<br>第29回大会<br>東北福祉大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2015年12月12日 | 日本臨床心理身体運動学会<br>第18回大会<br>大阪府立大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2016年10月26日 | 日本箱庭療法学会<br>第30回大会<br>帝塚山学院大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2016年10月26日 | 日本箱庭療法学会<br>第30回大会<br>帝塚山学院大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2016年12月11日 | 日本臨床心理身体運動学会<br>第19回大会<br>筑波大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の指定討論者 | 単 | 2017年12月 | 日本臨床心理身体運動学会<br>第20回大会<br>筑波大学 | 山　愛美 | |
| 事例研究の司会 | 単 | 2017/11/20 | 日本心理臨床学会第36回大会<br>パシフィコ横浜 | 山　愛美 | |
| その他（口頭発表） | | | | | |
| Listening to the narrative in the depth: Ego consciousness in Japanese Psyche | 単 | 2014年6月1日 | ″The Theory of C. G. Jung Interdisciplinary Research″ Wroclaw University Poland　ポーランド | Megumi Yama | |
| Disaster as a Religious Experience: Establishing a New Subject in the Japanese Psyche. | 単 | 2015年7月10日 | The 4th joint conference of the international association of analytical psychology the international association for Jungian Studies Yale University アメリカ | Megumi Yama | |
| Descending into the Indeterminate State between the Determinate: Recovering a Connection with the World of Death | 単 | 2018年8月5日 | The 5th joint conference of the international association of analytical psychology the international association for Jungian Studies　Goethe University Frankfurt ドイツ | Megumi Yama | |
| Exploring the Artist's Creative Process from Intercultural and Jungian Psychological Perspectives: The Japanese Painter Yasue Kodama and Her Work | 単 | 2019月4日4日 | Art & Psyche Ⅳ　Conference UCSB アメリカ | Megumi Yama | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（ポスター発表） | | | | | |
| It's nature itself plasticity and repitition in a post-stroke patient | 共 | 2015年7月1日 | The 15th International Neuropsychoanalysis Congress in. Amsterdam, オランダ | Michiko Akimoto, Norifumi Kishimoto, Kazuhiro Hirao, Keiichi Narita, Yasutaka Kubota, Akiko Kanemaru | |
| その他（研究会レクチャなど） | | | | | |
| レクチャ『村上春樹シリーズ　セラピストとして事例を物語る』 | 単 | 2014年7月1日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『心理療法と時間　2』 | 単 | 2014年9月1日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『児童文学に見るこころ』 | 単 | 2015年1月25日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『描画に見る感情』 | 単 | 2015年7月26日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『思春期：一瞬であり永遠の時間』 | 単 | 2016年1月24日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『千と千尋の神隠しの今日的意味を考える：子どもから大人へ、「向こうの世界」と「こちらの世界」そして神隠し』 | 単 | 2016年5月15日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| レクチャ『記憶の古層から・記憶の古層へ』 | 単 | 2017年1月22日 | 心身臨床学研究会 | 山愛美 | |
| その他（依頼講師） | | | | | |
| 常葉大学大学院たちばな事例研究会講師 | 単 | 2017年3月3日・4日 | 常葉大学 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会プレ第1回事例検討講師 | 単 | 2018年1月14日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会プレ第2回事例検討講師 | 単 | 2018年3月11日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会2018年度第1回事例検討講師 | 単 | 2018年6月10日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| 杏の会事例検討会講師 | 単 | 2018年8月26日 | 上智大学 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会2018年度第2回事例検討講師 | 単 | 2018年11月25日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会2018年度第3回事例検討講師及び対談 | 単 | 2019年2月3日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美・児玉靖枝（画家） | |
| 京都光華女子大学一泊臨床事例研究会講師 | 単 | 2019年2月17日・18日 | 京都白河院 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会2019年度第1回事例検討講師 | 単 | 2019年5月19日 | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| 杏の会事例検討会講師 | 単 | 2019年8月4.日（予定） | 上智大学 | 山　愛美 | |
| 深層心理学研究会2019年度第2回事例検討講師 | 単 | 2019年8月11日（予定） | キャンパスプラザ京都 | 山　愛美 | |
| その他（京都府総合教育センター） | | | | | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2015年1月 | 第7回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2015年7月 | 第2回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2016年1月 | 第7回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2016年12月 | 第7回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2017年7月 | 第3回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2018年1月 | 第9回事例研究会 | 山　愛美 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2018年9月 | 第3回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2019年1月 | 第8回事例研究会 | 山　愛美 | |
| 教育相談部<br>事例検討スーパーヴァイザー | 単 | 2019年7月（予定） | 第＊回事例研究会 | 山　愛美 | |
| その他（京都市教育委員会） | | | | | |
| 分科会講師「臨床心理学の観点から見た不登校」児童文学を通して | 単 | 2015年11月 | 第16回不登校フォーラム<br>第2分科会 | 山　愛美 | |
| 分科会講師「臨床心理学の観点から見た不登校」アニメを通して | 単 | 29016年11月 | 第17回不登校フォーラム<br>第3分科会 | 山　愛美 | |
| 分科会講師「臨床心理学の観点から見た不登校」子どもの心にそって不登校を考える | 単 | 2017年11月 | 第18回不登校フォーラム<br>第2分科会 | 山　愛美 | |
| 分科会講師「臨床心理学の観点から見た不登校」思春期の心を振り返りながら | 単 | 2018年10月 | 第19回不登校フォーラム<br>第3分科会 | 山　愛美 | |
| その他（シンポジウム） | | | | | |
| 京都学園大学人文学部開設記念講演会『語りの力』講演講師 | 単 | 2015年8月30日 | 京都学園大学<br>京都太秦キャンパス | 森岡正芳と山　愛美 | |
| 京都学園大学創立50周年記念シンポジウム『心の痛みとケア』ハーバード大学教授アーサー・クラインマン氏と対談 | 単 | 2016年5月28日 | 京都学園大学<br>京都太秦キャンパス | アーサー・クラインマンと山　愛美 | |
| 京都学園大学創立50周年記念シンポジウム『村上春樹を英訳する』<br>ハーバード大学教授ジェイ・ルービン氏と対談 | 単 | 2016年11月19日 | 京都学園大学<br>京都太秦キャンパス | ジェイ・ルービンと山　愛美 | |
| 京都先端科学大学　校名変更記念連続講演会『見えない力の文化史』<br>講演講師 | 単 | 2018年11月4日 | 京都学園大学<br>京都太秦キャンパス | 小松和彦・山本淳子・山愛美 | |
| その他（ラジオ） | | | | | |
| トンガリStudio | 共 | 2019年<br>5月7・14・21・28日 | KBS京都ラジオ | 久育男・山愛美 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1989年～現在 | 日本心理臨床学会 |
| 2008年3月～現在 | 日本箱庭療法学会会員 |
| ～現在 | IASD（International Association for the Study of Dreams）会員 |
| ～現在 | IAJS（International Association for Jungian Studies）会員 |
| ～現在 | 日本臨床身体運動学会会員 |
| ～現在 | 日本臨床心理士会会員 |
| ～現在 | 日本ユング心理学会会員 |
| 2015.4～2019.3 | 京都市教育委員会　児童生徒登校支援連携会議委員 |
| 2013年5月～現在 | 京都府教育総合センター 教育相談所内研究会スーパーバイザー |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　教授 | 氏名　行廣　隆次 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)　無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 心理学基礎実験における、実験実施、データ分析、レポート作成の総合的指導 | 2000年度～ | 心理学実験の実施、データの解析、実験内容と実験結果の理解と、報告書の作成の間のつながりを深く理解させることに勤め、心理学の理解と、統計的技法の修得、文章作成能力等の総合的な向上をめざした。 |
| 統計学系科目(心理統計学Ⅰ、心理統計学Ⅱ、心理測定法)での、毎授業での復習課題の出題 | 2006年度～ | 積み重ねが重要な科目であるため、毎回授業の内容の復習と定着を図るための課題を出題した。提出された課題によって学生の理解度を把握するとともに、次の授業で課題の解説と毎回の復習を行った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「心理統計学Ⅰ」および「心理統計学Ⅱ」の授業資料 | 2005年度～ | 教科書と平行して授業時間中に使用する授業資料として、その会の授業内容のみを簡略にまとめ、さらに書き込み欄や作業欄も設けた配布資料を毎回4～8ページ程度で作成した。 |
| 「心理測定法」の授業資料 | 2004年度～ | 回帰分析、測定の信頼性と妥当性、因子分析、等についての解説資料を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 心理学・社会科学研究のための構造方程式モデリング: Mplusによる実践 基礎編 | 共 | 2018年9月 | ナカニシヤ出版 | 村上隆・行廣隆次 (監修), 伊藤大幸 (編著), 谷伊織, 平島太郎 | |
| 論文 | | | | | |
| 日本版短縮感覚プロフィールの標準化:標準値および信頼性・妥当性の検討 | 共 | 2015年6月 | 精神医学, 57(6) | 谷伊織・伊藤大幸・平島太郎・岩永竜一郎・萩原拓・行廣隆次・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中 村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次 | 419-429 |
| Psychometric properties of the Repetitive Behavior Scale-Revised for individuals with autism spectrum disorder in Japan. | 共 | 2015年7月 | Research in Autism Spectrum Disorder, 15-16 | Inada N, Ito H, Yasunaga K, Kuroda M, Iwanaga R, Hagiwara T, Tani I, Yukihiro R, Uchiyama T, Ogasahara K, Hara K, Inoue M, Murakami T, Someki F, Nakamura K, Sugiyama T, Uchida H, Ichikawa H, Kawakubo Y, Kano Y, Tsujii M. | 60-68 |
| Measuring shared knowledge with group false memory. | 共 | 2018年7月 | Scientific Reports 8:10117 DOI:10.1038/s41598-018-28347-4 | Arima, Y., Yukihiro, R., & Hattori, Y. | 12 pages |

| その他 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (調査報告書)<br>発達障害モジュール開発に関する研究 | 共 | 2017年5月 | 厚生労働行政推進調査<br>事業費補助金<br>障害者政策総合研究事業<br>(精神障害分野)<br>こころの健康づくりを推進する地域連携のリモデリングとその効果に関する政策研究<br>平成28年度<br>総括・分担研究報告書 | 金吉晴(研究代表者)<br>神尾陽子・齊藤彩・行廣隆次(著) | 77-83 |
| (学会発表・公募シンポジウム)<br>心理学研究における構造方程式モデリング(SEM)の役割とピットフォール:SEMとの「正しい付き合い方」とは | 共 | 2015年9月 | 日本心理学会　第79回大会 | 伊藤大幸・平島太郎・行廣隆次・<br>大津起夫・谷伊織 | |
| (学会発表)<br>Selection of observed variables in Structural Equation Modeling. | 単 | 2016年7月 | 31st International Congress of Psychology | | |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(7)<br>測定の信頼性と妥当性(1) | 共 | 2015年9月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 40 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>安永和央・谷伊織・平島太郎 | 102-113 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(8)<br>測定の信頼性と妥当性(2) | 共 | 2016年3月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 42 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>安永和央・谷伊織・平島太郎 | 92-105 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(9)<br>測定の信頼性と妥当性(3) | 共 | 2016年12月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 44 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>安永和央・谷伊織・平島太郎 | 82-95 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(10)<br>測定の信頼性と妥当性(4) | 共 | 2017年9月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 46 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>安永和央・谷伊織・平島太郎 | 86-101 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(11)<br>測定の信頼性と妥当性(5) | 共 | 2018年3月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 47 | 伊藤大幸・村上隆・行廣隆次・<br>安永和央・谷伊織・平島太郎 | 82-95 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(12)<br>潜在変数を用いた新しい分析モデル(1) | 共 | 2018年9月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 48 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>谷伊織・安永和央・平島太郎・<br>坪田祐基・寺尾尚大 | 78-89 |
| (解説)<br>発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(13)<br>潜在変数を用いた新しい分析モデル(2) | 共 | 2019年3月 | 特定非営利活動法人<br>アスペ・エルデの会,<br>アスペハート, 49 | 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・<br>谷伊織・安永和央・平島太郎・<br>坪田祐基・寺尾尚大 | 102-123 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| | 日本心理学会会員・日本教育心理学会会員・日本認知科学会会員・日本行動計量学会会員 |
| | 日本認知心理学会会員・日本小児精神神経学会会員・日本テスト学会会員 |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　小川　賢治 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 授業後カード | 1999年～ | 毎時間、授業の終わりに紙を配り、その時間の講義内容に関する疑問点・質問・意見・感想を書いてもらい、次回にそれらに答えることによって、教員と受講学生のコミュニケーションを図るようにしている。 |
| 「政治社会学」の授業における新聞記事の利用 | 2007年～ | 授業のテーマである監視社会に関するニュースを中心に、新聞記事を利用して時事問題の解説を行うことにより、テーマの理解を深めつつ、一般常識の知識を増すことも狙いとしている。 |
| 「社会問題論」の授業における新聞記事の利用 | 2008年～ | 授業で取り上げる社会問題に関するニュースを中心に、新聞記事を利用して時事問題の解説を行うことにより、テーマの理解を深めつつ、一般常識の知識を増すことも狙いとしている。 |
| ［社会問題論」の授業における視聴覚資料の活用 | 2009年～ | 受講者の関心を高めるため、テレビのドキュメンタリー番組の録画を見せている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 無利子社会の構想 | 単 | 2015年3月 | 『人間文化研究』第34号(京都学園大学人間文化学会) | | pp.89-108 |
| 日本の政策決定における米国の影響 | 単 | 2016年3月 | 『人間文化研究』第36号(京都学園大学人間文化学会) | | pp.19-78 |
| 民間企業における人事考課制度の近年の動向 | 単 | 2017年12月 | 『人間文化研究』第39号(京都学園大学人間文化学会) | | pp.1-25 |
| 「ドン・ジョヴァンニ」と権力関係 | 単 | 2018年3月 | 『人間文化研究』第40号(京都学園大学人間文化学会) | | pp.105-138 |
| 貨幣の政治社会学的研究・序説 | 単 | 2018年11月 | 『人間文化研究』第41号(京都学園大学人間文化学会) | | pp.1-27 |

| | |
|---|---|
| | 日本社会学会会員 |
| | 日本政治学会会員 |
| | 関西社会学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　特別教授 | 氏名　久保　克彦 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1)パワーポイントや視聴覚教材(ビデオ、DVD)の使用とプリント配布 | 2015年4月～ | ほとんどの授業でパワーポイントを使用し、同時に授業内容をプリントにして配布している。また視聴覚教材(ビデオ、DVD)も折にふれて使用している。 |
| 2)質問表の使用 | 2015年4月～ | すべての授業の終了時に質問表に記入させ、次回の授業開始時に回答している。 |
| 3)学生による授業評価の活用 | 2015年4月～ | 学生による授業評価の結果を、次学期に反映させるように努めている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 1)実践　栄養カウンセリング | 2014年4月 | 管理栄養士が行う栄養教育に求められるカウンセリング技術の理論や実践について解説する教科書を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1)FD研修におけるコミュニケーション技術の指導 | 2011・2012年 | 学内のFD研修において、学生対応のためのコミュニケーション技術の指導を行った。 |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 心理検査を支援に繋ぐフィードバック | 共 | 2016年9月 | 金剛出版 | 竹内健児編 | pp.205-235 |
| 論文 | | | | | |
| 代表的な栄養指導テクニック | 単 | 2015年2月 | 糖尿病ケア<br>第 12巻　第2号 | | pp.26-33 |
| インスリン自己注射を拒否する患者さんへの心理的アプローチ | 単 | 2015年4月 | 糖尿病ケア<br>第12巻第4号 | | pp.76-81 |
| その他 | | | | | |
| 講演:<br>栄養士が身につけておきたいコミュニケーション技術 | | 2015年1月 | 京都府栄養士会南部地区研修会 | | |
| 講演:<br>糖尿病患者に対する心理的アプローチ | | 2015年6月 | 滋賀県栄養士会研修会 | | |
| 講演:<br>糖尿病患者に対するエンパワーメント・アプローチ | | 2018年4月 | Seminar for Empowerment Team in Kobe | | |
| 講演:<br>糖尿病患者に対する心理学的アプローチ | | 2019年3月 | 京都糖尿病教育研究会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1994年1月～現在 | 奈良県臨床心理士会理事 |
| | 日本心理臨床学会会員 |
| 2005年4月～2014年3月 | 日本心理学会会員・議員 |
| | 日本糖尿病学会会員 |
| | 日本感情心理学会会員 |
| | 日本健康心理学会会員 |
| | 日本ヒューマンケア心理学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　飯野　秀子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「臨床心理実習」指導法の工夫 | 2006年～現在 | 京都先端科学大学人間文化研究科臨床心理学コースにおいて、他教員と共に担当。日本臨床心理士資格認定協会による指定大学院、また公認心理師養成大学院における重要な教育課題である、心理臨床の実践活動における事例検討を通じ、心理療法や心理アセスメントの実践力を身につけることを目的として授業を行っている。心理臨床実践初心者である大学院生が、さまざまな事例に触れながら理論と実践のつながりを理解して行けるように焦点付けた指導を行っている。また、大学付属相談室専従教員として、学生が臨床実践を行う相談室スタッフとして必要な知識・態度を身につけることにも留意した指導をしている。さらに、学外実習に関して、実習先機関との連携を取りつつそれぞれの実情に応じた指導を行っている。 |
| 「臨床心理基礎実習」指導法の工夫 | 2007年～現在 | 京都先端科学大学人間文化研究科臨床心理学コースにおいて、他教員と共に担当。この授業では、初めて臨床実践の世界にふれることになる大学院一回生を対象とし、付属相談室での事例の受理から相談継続・終了に至る具体的な手続きについてなど、実際に付属相談室あるいは学外実習先での臨床実践に入っていく前に理解しておくべき、実践的な知識の習得に重点を置いた指導を行ってきた。また、学部生には実際に触れることが許されなかった臨床実践の場と、それまで得た知識や想像の世界をつなげていくため、授業の場自体を臨床実践のトレーニングと捉え、体験的側面を重視する実習を行っている。さらに、昨今では社会的常識や日常生活の整え方といった側面でも、指導の必要性が高まっており、個別の学生の状況や個性を細やかに把握しつつ指導している。 |
| 心理臨床における体験的学習を促進する工夫 | 2009年～現在 | 京都学園大学人間文化研究科臨床心理コースの「臨床心理基礎実習」において，体験的側面を重視する実習の効果を促進することを目的として，自身が担当する授業の中で，身体的感覚に着目させるようなボディワークを導入した。ヨガなどの技法を参考に呼吸やストレッチを行い，その際，自分の身体感覚の変化に注目するよう促した。その結果，ワーク後のディスカッションにおいて，心理臨床における捉えにくく言葉にしにくい感覚への疎通性を増し，心理臨床家に必要な，自らの体験への気づきが起こるという効果が見られた。 |
| 心理検査の学習において理論と事例性を相補的に活かす工夫 | 2015年～現在 | 大学院生にとって心理検査の学習では，数多くの手続きを間違いなく実施することに精一杯になり，生きた人間像を描き出すという検査の基本的な目的を見失いがちになる。一方，心理臨床の現場では近年心理検査の需要が増えている現状があり、本学相談室でもその比率が高まっている。そこで，理論・手続きと事例性を結び付けて相補的に理解することをより一層促進するため，「臨床心理学実習」におけるインテークカンファレンス（相談室での受け入れ事例についての検討）において，心理検査事例については検査そのものの内容と検査実施前後の対応までも含めた事例性の両方を丁寧に扱うこととし、様々な講義・実習での学びが個別事例の理解に活かされるようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 付属相談室における大学院生の心理臨床実践に関する教育訓練についての実績報告とその評価 | 2006年～現在 | 毎年発行される『心理臨床研究―京都学園大学付属心理教育相談室紀要』（2019年度より校名変更に伴い誌名変更予定）に報告する「京都学園大学付属心理教育相談室活動報告」において，大学院生の担当数と面接種別を示している。実際の相談活動という重要な教育訓練での実績について評価を行い，その内容を検討したうえで，今後どのような教育訓練が必要かを考察している。また，学生の教育訓練の場としての相談室のあり方について，有資格者相談員や事務員の役割なども考慮しつつ，検討を加えている。 |

| 4　その他教育活動上特記すべき事項（続き） | | |
|---|---|---|
| 大学院修了後も大学に所属し研修を積む学生への指導 | 2006年～現在 | 本学大学院臨床心理学コース修了生に対しては，修了後も本学に所属し付属相談室で心理臨床実践の研鑽を積むことができる「研修員」制度が設けられている。研修員は有職者も多く通常の大学院授業における指導を受ける機会が限られるため，相談室専従教員として，研修員の心理臨床実践・研究活動・職業人としての在り方などについてそれぞれの実情に応じた指導を行っている。修了後の研修は，臨床心理士資格取得を目指すためにも，また責任ある専門家として働いていくためにも必須であり，本学相談室での教員による指導はキャリアをスタートさせたばかりの研修員にとって貴重な機会となっている。 |
| 日本ロールシャッハ学会における教育研修委員としての活動 | 2018年～現在 | 日本ロールシャッハ学会における教育研修委員として2018年度より活動しており、初学者からベテランまでが学ぶ場を設けるため活動している。 |
| 京都大学大学院教育学研究科におけるロールシャッハ研究会活動 | 2009年～現在 | 設立時からのメンバーとして現在まで継続的に研究会に参加している。2019年9月に開催される京都大学における日本ロールシャッハ学会第23回大会では本研究会が準備委員会を組織し、多くの人に貴重な研修の機会を提供するべく活動している。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 「“ふつう”のリアルと心理臨床家のフィクション―ロールシャッハ法の体験から」 | 単 | 印刷中 | FJK藤原研究会報告書『創造の臨床事例研究』第12号 | 藤原勝紀編 | 未定 |
| 「委ねる局面をめぐって」 | 単 | 2015年2月 | FJK藤原研究会報告書『創造の臨床事例研究』第11号 | 藤原勝紀編 | pp.109-117 |
| 「心理療法における“あたま”」 | 単 | 2015年2月 | FJK藤原研究会報告書『創造の臨床事例研究』第11号 | 藤原勝紀編 | pp.41-45 |
| 「重力の許で立つこと―“自分”への身体を介した接近」 | 単 | 2013年2月 | FJK藤原研究会報告書『創造の臨床事例研究』第9号 | 藤原勝紀編 | pp.103-119 |
| 「“緩める”ことへの抵抗とそれにつき合う過程―入浴という境界領域での葛藤―」 | 単 | 2012年2月 | FJK藤原研究会報告書『創造の臨床事例研究』第8号 | 藤原勝紀編 | pp.51-58 |
| その他 | | | | | |
| （研修会ファシリテーター）糖尿病医療学 in 岐阜2019 | | 2019年 3月 21日 | 糖尿病医療学 in 岐阜2019 | | |
| （研究発表座長）日本糖尿病医療学学会第2回関東地方会IV-1,IV-2,IV-3,IV-4 | | 2019年2月10日 | 日本糖尿病医療学学会第2回関東地方会 | | |
| （研修会ファシリテーター）糖尿病医療学 in 岐阜2018 | | 2018年 3月 21日 | 糖尿病医療学 in 岐阜2018 | | |
| （研究発表座長）日本糖尿病医療学学会第1回関東地方会8-1,8-2,8-3,8-4 | | 2018年2月11日 | 日本糖尿病医療学学会第1回関東地方会 | | |
| （学会教育講座講師報告）第5回日本糖尿病医療学学会「糖尿病臨床心理講座7糖尿病者のこころに応える　医療者のこころの在り方」 | | 2019年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌 Vol.5No.1 Feb.2019第5回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.32-39 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他(続き) | | | | | |
| (研究発表座長コメント)第5回日本糖尿病医療学学会研究発表I-A-3、I-A-4, I-A-5, I-A-6, I-A-7 | 単 | 2019年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌 Vol.5No.1 Feb.2019第5回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.21,123,25,28,30-31 |
| (学会教育講座講師)第5回日本糖尿病医療学学会「糖尿病臨床心理講座7糖尿病者のこころに応える 医療者のこころの在り方」 | | 2018年10月6日 | 第5回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (研究発表座長)第5回日本糖尿病医療学学会研究発表I-A-3、I-A-4, I-A-5, I-A-6, I-A-7 | | 2018年10月6日 | 第5回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (研究発表座長コメント)第4回日本糖尿病医療学学会研究発表II-B-3・4、II-B-5、II-B-6、II-D-1、II-D-2 | 単 | 2018年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌 Vol.4No.1 Feb.2018第4回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.153-154,157,160,185-186,188-189 |
| (研究発表座長コメント)第4回日本糖尿病医療学学会研究発表I-A-4、I-A-5 | 単 | 2018年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌 Vol.4No.1 Feb.2018第4回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.24-25,27-28 |
| (研究発表座長)第4回日本糖尿病医療学学会研究発表II-B-4、II-B-5、II-B-6、II-D-1、II-D-2 | | 2017年10月8日 | 第4回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (学会教育講座講師)第4回日本糖尿病医療学学会「糖尿病臨床心理講座5 見立てを深める」 | | 2017年10月7日 | 第5回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (研究発表座長)第4回日本糖尿病医療学学会研究発表I-A-4、I-A-5 | | 2017年10月7日 | 第4回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (研究発表座長コメント)第3回糖尿病医療学学会研究発表II-B-5、II-B-6 | 単 | 2017年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌Vol.3 No.1 Feb.2017第3回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.135,137 |
| (研究発表座長コメント)第3回糖尿病医療学学会研究発表I-B-4、I-B-5、I-B-6 | 単 | 2017年2月 | 日本糖尿病医療学学会誌Vol.3 No.1 Feb.2017第3回日本糖尿病医療学学会報告集 | | p.45,47,49 |
| (研究発表座長)第3回糖尿病医療学学会研究発表II-B-5、II-B-6 | | 2016年10月9日 | 第3回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (研究発表座長)第3回糖尿病医療学学会研究発表I-B-4、I-B-5、I-B-6 | | 2016年10月8日 | 第3回日本糖尿病医療学学会 | | |
| (座長コメント)第2回糖尿病医療学研究会研究発表II-B-9 | 単 | 2016年2月 | 第2回糖尿病医療学研究会会誌Vol.1 No.1 Feb.2016第2回糖尿病医療学研究会報告集 | | pp.148-149 |
| (座長コメント)第2回糖尿病医療学研究会研究発表II-A-9 | 単 | 2016年2月 | 第2回糖尿病医療学研究会会誌Vol.1 No.1 Feb.2016第2回糖尿病医療学研究会報告集 | | p.112 |
| (研究発表座長)第2回糖尿病医療学研究会研究発表II-A-9 | | 2015年10月11日 | 第2回糖尿病医療学研究会 | | |
| (研究発表座長)第2回糖尿病医療学研究会研究発表II-B-9 | | 2015年10月11日 | 第2回糖尿病医療学研究会 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2000年6月～ | 日本心理臨床学会会員 |
| 2002年1月～ | 日本箱庭療法学会会員 |
| 2002年4月～ | 日本ロールシャッハ学会会員 |
| 2003年4月～ | 日本芸術療法学会会員 |
| 2003年4月～ | 日本臨床心理士会会員 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動（続き） | |
|---|---|
| 2003年4月～ | 京都府臨床心理士会会員 |
| 2003年4月～ | 財団法人日本臨床心理士資格認定協会認定臨床心理士（第10966号） |
| 2004年10月～2005年4月 | 京都府臨床心理士会『学校における緊急支援』編集委員 |
| 2012年5月～2016年5月 | 京都府臨床心理士会渉外・広報担当 理事 |
| 2014年3月～2017年3月 | 京都府京丹後市いじめ問題調査委員会 委員 |
| 2014年10月～ | 糖尿病医療学研究会（2016年より日本糖尿病医療学学会）会員 |
| 2016年5月～ | 京都府臨床心理士会渉外・広報委員会 委員 |
| 2018年4月～ | 日本糖尿病医療学学会 評議員 |
| 2018年4月～ | 日本ロールシャッハ学会教育・研修委員会 委員 |
| 2018年4月～ | 日本ロールシャッハ学会第23回大会準備委員会 事務局長 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　伊原　千晶 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | 全ての授業において、VTRを活用したり、授業内の資料(プリント)配布を実施している。また、授業内レポートも適宜実施している。 |
| 「心理学基礎実験B」 | | 3～5人の少人数のグループで実習・討議などを行い、主体的に学習できるようにしている。 |
| 「カウンセリング論」 | | 授業中にはプリントを配布し、自分の解答を記入後に学生間で話し合いをすることで、グループでの気づきを学習に生かしている。また何回かの授業を一日にまとめて振り替え、ロールプレイなどの実地体験を行えるようにしている。 |
| 「学校臨床心理学」 | | 毎年、授業内学外講師として地元のフリースクールの主催者を招き、不登校の実態やその援助のあり方について話していただき、現実の問題として学生が考えられるようにしている。また時事的な資料を利用し、現在の課題として考えさせている。 |
| 「臨床心理専門演習」 | | 精神科の病院・児童相談所などに見学に連れて行き、実験を経験させるようにしている。また学生からの希望がある年には、夏休みに合宿を実施し、まとまった量の文献を読んだり、カウンセリング技法の実習を行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 東京化学同人<br>「スタンダード薬学シリーズⅡ　薬学総論Ⅱ　薬学と社会」<br>日本薬学会編<br>p2～8 | 2016年3月1日 | 薬学教育モデルコアカリキュラムのSBO1「人の行動がどのような要因によって決定されるのかについて説明できる」およびSBO2「人・社会が医薬品に対して抱く考え方や思いの多様性について討議する」について解説した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学外FD活動 | 2015年11月5日 | FD・SD研修会にて報告　「気になる学生が来たら」(京都大学薬学部) |
| | 2016年10月6日 | 「ほめると子供がダメになる？？−自己愛・自己肯定感・レリジエンス−」(京都大学薬学部) |
| IPOS第17回大会参加 | 2015年7月29日～31日 | アメリカ・ワシントンDC |
| IPOS第18回大会参加 | 2016年10月17日～20日 | アイルランド・ダブリン |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 薬剤師のこれから | 共 | 2016年3月 | 晃洋書房 | 伊原千晶　編著 | |
| 論文 | | | | | |
| 成人教育の観点から見た対人援助職教育<br>−医師、薬剤師、そして公認心理師− | 単 | 2017年3月 | 人間文化研究第38号 | 伊原千晶 | p.17－36 |
| 疾病観の変遷とコミュニケーション教育の展開<br>− 不確実性の時代の対人援助職教育− | 単 | 2018年3月 | 人間文化研究第40号 | 伊原千晶 | p.35−52 |
| その他(学会発表) | | | | | |
| 医療領域における対人援助職の職業イメージ比較<br>ー石・看護師と比較したカウンセラーイメージー | 共 | 2015年9月22日<br>(名古屋) | 日本心理学会第79回大会 | 伊原千晶・三保紀裕 | |
| 薬剤師にかかわるディスコミュニケーション　ー現状の分析ー | 共 | 2015年11月 | 第25回日本医療薬学会年会<br>(横浜) | 伊原千晶・亀井美和子・<br>松島哲久・松村人志 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表）続き | | | | | |
| 薬剤師が経験するディスコミュニケーション事象の分析 | 共 | 2016年3月 | 日本薬学会第136回年会<br>（横浜） | 亀井美和子・伊原千晶・大平悠介・<br>田野瑛一朗・松島哲久・松村人志 | |
| 薬剤師が経験するディスコミュニケーション事象の分析<br>ー個別事象ー | 共 | 2016年3月 | 日本薬学会第136回年会<br>（横浜） | 伊原千晶・亀井美和子・<br>松島哲久・松村人志 | |
| ハイデルベルグ大学医学部における医療人養成教育（Medi-KIT）の検討<br>ー薬学教育への応用を目指してー | 単 | 2016年8月 | 日本薬学教育学会第1回大会<br>（京都） | 伊原千晶 | |
| 患者・生活者のために薬剤師が果たす役割を自覚するための授業計画について<br>ー共感的態度涵養と薬剤師像の深化を目指してー | 共 | 2017年9月 | 日本薬学教育学会第2回大会<br>（名古屋） | 伊原千晶・長谷川洋一 | |
| その他（海外調査） | | | | | |
| 医学教育・医師卒後教育について訪問調査 | | 2015年7月～8月 | アメリカ<br>Yale大学医学部（New Haven）<br>Long Beach Memorial Medical Center(LA) | | |
| 医学教育について訪問調査 | | 2015年12月 | ドイツ<br>ハイデルベルグ大学医学部 | | |
| 医学部における、学年進行に応じた対人援助力養成教育についての聞き取り調査 | | 2016年10月 | ドイツ<br>ハイデルベルグ大学 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本心理臨床学会会員 |
| | 日本箱庭療法学会会員 |
| | 日本心身医学会会員 |
| | 日本健康心理学会会員 |
| | 日本心理学会会員 |
| | 日本精神腫瘍学会会員 |
| | International Psycho-Oncology Society(IPOS) |
| | 日本薬学会会員 |
| | 日本医療薬学会会員 |
| | 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員 |
| | 日本薬学教育学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　准教授 | 氏名　橋本　尚子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| (1)教育相談(教職課程)学生の主体的参加のための工夫 | 2017年 | 学生の自主的な態度を養うため、授業では、ロールプレイを取り入れた。発達障害や、その他の生徒の問題について各自症例などを調べ、自分で先生、生徒及び親などの関係者を演じてみることで、理解を深めることを試みた。 |
| (2)教育相談(教職課程)障害の理解を深める工夫 | 2009年から2017年 | 障害のある生徒理解のために、山田洋二監督の「学校」の映画を鑑賞した。障害の理解と、教員同士の相互サポートの重要さなどについてレポートを元に討論を行った。 |
| (3)心理療法　事例に学ぶ工夫 | 2018年 | 心理療法の授業では人間関係、病者をいかに支えるかが大切であるが、理論上だけではなく、現実に近いものを参照しつつ、心理的に深みのある理解が可能になるように映画「ビューティフルマインド」を見て、レポートを課し、理解を深めた。 |
| (4)心理学　命の誕生の様々な問題について学ぶ工夫 | 2018年 | 誕生、および命を考える授業で、赤ちゃんポストへの取り組みにおける日本とドイツの異同をビデオで学び、レポートを課して、理解が深まるよう工夫した。 |
| (5)心理学 | 2018年 | 記憶の機能やその喪失という病の理解のために映画{明日の記憶」を見て感想を書かせた。実際にどのような苦悩があるのかへの洞察を深めた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| (1)教育相談 | 2018年 | 他大学保健室の教員と学生への対応について面談。 |
| | 2018年 | 他大学にてゼミ担当教員や職員と学生対応について面談。 |
| (2)心理療法の実践研究 | 2018年7月25日 | 京都大学こころの未来研究所におけるセミナーで講師として事例を4つ提示し、事例検討を行った。 |
| (3)心理療法の実践研究 | 2013年から2017年 | 日本ユング心理学会主催の河合俊雄先生のグループスーパービジョンで、年1から2回事例を提供し、事例について、多彩な表面上の症状の背景に目を向けることで、必要な治療的関わり、関わりの有効性などについて検討することを続けている。 |
| (4)心理療法の実践研究 | 2010年より現在 | 近隣の大学院にて心理臨床を学ぶ院生に対しスーパーヴィジョンを行う。現在は院生4名、社会人4名についてスーパーヴァイズを行っている。 |
| (5)心理療法の実践研究 | 2019年6月2日 | 日本ユング心理学会第8回大会において、大会企画シンポジウムのシンポジストとして「摂食障害の青年期女性との面接経過」のタイトルで事例提供を行った。コメンテーターとしては京都大学の河合俊雄教授・桑原知子教授であった。 |
| 高大連携研究 | 2017年2月20日 | 下関南高校でのグローバル教育の一環として、スイスチューリッヒへの留学体験をもとに生徒に授業を行った。留学が、学生時代だけに可能なものではなく、キャリアを積むためにも意味があること等も伝えた。また、心理学を勉強したい学生に、心理学の内容等伝えた(計4コマ) |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ユング派心理療法「摂食障害の10代女性との心理面接ー背後にある現代の意識」 | 共 | 2013年3月 | ミネルヴァ書房 | 河合俊雄 | pp166-183 |
| 大人の発達障害の見立てと心理療法「アスペルガー障害と診断された10代男子との面接過程ー分離の契機という観点から」 | 共 | 2013年3月 | 創元社 | 河合俊雄 | pp87-104 |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 現代の意識における内面化への契機「身体への凝縮」と「空虚の創造」（査読付） | 単 | 2014年3月 | 箱庭療法学研究26巻3号 | | pp15-26 |
| 分離による個の創造ー母子分離できない5歳女児とのプレイセラピー（査読付） | 単 | 2014年8月 | 心理臨床学研究第32巻3号 | | pp305-315 |
| 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要「長谷川論文へのコメント」 | 単 | 2015年 | 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要2015 | | |
| 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要「千葉理末論文へのコメント」 | 単 | 2016年 | 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要2016 | | |
| 教育相談の課題と現代の意識 | 単 | 2017年3月 | 京都学園大学人間文化研究38号 | | pp37-48 |
| 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要「千葉恵理香論文へのコメント」 | 単 | 2017年 | 京都大学教育学研究科臨床心理教室事例紀要2017 | | |
| Mバリントにおける創造領域と非二についてー三者関係・二者関係との対比からー | 単 | 2017年9月 | 京都学園大学人間文化研究39号 | | pp27-49 |
| 非二の発達論・治療論ー現代の発達障害的心性を捉える試みー | 単 | 2018年1月 | 京都学園大学人間文化研究40号 | | pp139-178 |
| 現代の意識における葛藤のなさの諸側面について | 単 | 2018年11月 | 京都学園大学人間文化研究40号 | | pp47-72 |
| 心の古層と現代の意識研究会 | 単 | 2014年 | （於）京都大学こころの未来研究センター | 二の世界と非二の世界 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2011年4月～ | 京都大学こころの未来研究センター　連携研究員 |
| 2014年 | 日本箱庭療法学会27回大会　研究発表司会担当 |
| 2015年 | 日本箱庭療法学会　河合隼雄賞受賞 |
| 2015年 | 日本箱庭療法学会27回大会　研究発表司会担当 |
| 2016年 | 日本箱庭療法学会30回大会　　研究発表指定討論者 |
| 2017年 | 日本箱庭療法学会31回大会　研究発表司会 |
| 2018年 | 日本ユング心理学会　研究発表司会 |
| 2018年 | 日本箱庭療法学会32回大会　研究発表司会 |
| 2019年 | 日本ユング心理学会　大会企画シンポジウム　シンポジストとして事例提供 |
| 2019年 | 日本ユング心理学会　研究発表司会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

公認心理師(国家資格)

臨床心理士

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文学部 | 職名　講師 | 氏名　神原　歩 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ・学習内容の実践を促す仕組みづくり | 2013年4月～ | ・「キャリア・デザインA,B」:授業で学んだスキルを一週間日常生活で実践することを宿題とし、次の授業でその結果や感想について報告を求めるなど、学習内容の実践を促す工夫を行った。 |
| ・体感型授業の実施 | 2013年4月～ | ・「認知心理学」:間違い探しや暗唱ゲームなどを作成・実施し、人の認知の仕組みについて理論を学ぶだけでなく体感できるようにした。 |
| ・実社会との接点づくり | 2013年10月～ | ・「産業心理学」:産業界で心理学がどのように活かされているかについて受講生の理解を促すことを目的とし、広告代理店、人材コンサルティング会社、企業の人事担当者による特別講義を3回組み込んだ。特別講義においては、学生からの質問が絶えず、興味関心をひいた様子が伺えた。 |
| ・「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」評価基準の作成 | 2016年～ | ・「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」の成績評価に際し,評価指標としての具体的言動の記述によるルーブリックを作成した。<br>本ルーブリックを複数の授業担当教員で共有し、統一した評価が行われるよう工夫している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」テキスト | 2017年～ | ・4年間の実施によって得られた知見を基に、テキストを作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| FD研修会での発表　((2018年9月, 於京都学園大学) | 2018年 | キャリアデザインAの教育効果について、調査結果を分析、発表を行った |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 抑うつ傾向と合意性推測の関係における自尊心の調節効果<br>－合意性推測の自己肯定感維持機能に焦点をあてて－ | 単著 | 2012年9月 | 心理学叢誌8号,<br>関西大学大学院<br>心理学研究科 | 神原歩 | p. 35-41 |
| 高合意性情報が強制承諾実験における態度変化に与える効果:自己肯定感の維持という観点からの検討<br>【査読有り】 | 共著 | 2013年2月 | 実験社会心理学研究, 52(2),<br>日本グループ・ダイナミックス学会 | 神原歩・遠藤由美 | p.116-124 |
| 合意性推測の高さが脅威に晒された自己肯定感を修復する効果<br>【査読有り】 | 共著 | 2013年2月 | 実験社会心理学研究, 52(2),<br>日本グループ・ダイナミックス学会 | 神原歩・遠藤由美 | p.91-103 |
| Transmitting pro-environmental behaviors to the next generation:<br>A comparison between Germany and Japan<br>【査読有り】 | 共著 | 2014年6月 | Asian Journal of Social Psychology, 18(2),<br>Asian Association of Social Psychology, | Kaori Ando, Kayo Yorifuji, Susumu Ohnuma, Ellen Matthies,and Ayumi Kanbara | p134-144 |
| キャリア科目の実践を通じた効果測定と課題 【査読有り】 | 共著 | 2015年9月 | キャリア・デザイン研究 11号,<br>日本キャリア・デザイン学会 | 三保紀裕・神原歩・木原麻子・湯口恭子 | p.137-142 |
| Effects of Experiencing Visual Illusions and Susceptibility to Biases in One's Social Judgments 【査読有り】 | 単著 | 2017年12月 | Perceptual and Motor Skills<br>SAGE Open | Ayumi Kambara | p.1-6 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 空間的視点取得と心的視点取得との関連について-誰かの目に映る光景を想像することと、誰かの気持ちを理解すること- | 単著 | 2019年4月 | 総合研究所 所報 | 神原 歩 | p.84-90 |
| 初年次キャリア科目の受講が<br>新入生の大学生活への適応感に及ぼす影響【査読有り】 | 共著 | 2019年4月 | キャリア教育研究<br>日本キャリア教育学会 | 神原歩・山本理恵・湯口恭子・三保紀裕 | p.45-54 |
| その他 | | | | | |
| (ポスター発表)<br>“Common” sense keeps people from accepting new opinion?! : Effects of estimated consensus and awareness of bias on negative perception toward opponents. | 共同 | 2011年7月 | The 9th biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, Kunming, China | 神原歩・遠藤由美 | |
| (ポスター発表)<br>物理的知覚の相対性への気付きが自己判断のバイアス認知に与える効果－錯視は客観性幻想を抑制するか | 共同 | 2011年9月 | 日本心理学会第75回大会<br>(於日本大学) | 神原歩・遠藤由美 | 大会発表論文集, 611. |
| (シンポジウム)<br>「合意性から捉える“ふつう”」ワークショップ「“ふつう”を巡る心理学」 | 共同 | 2011年9月 | 日本心理学会第75回大会<br>(於日本大学) | 神原歩・遠藤由美 | |
| (ポスター発表)<br>Doubt your eyesight before criticizing your opponents | 共同 | 2012年2月 | The 13th annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA, U.S. | 神原歩・遠藤由美 | |
| (ポスター発表)<br>錯視経験が意見の対立によって生じる偏見的認知を緩和する効果―自らの社会的判断を過信するのは、物理的知覚の客観性を過信することによるものか― | 共同 | 2012年5月 | 日本認知心理学会<br>第10回大会<br>(於岡山大学) | 神原歩・遠藤由美 | 大会発表論文集, 130. |
| (ポスター発表)<br>抑うつ傾向と合意性推測の関係における自尊心の調節効果－合意性推測の自己肯定感維持機能に焦点をあてて－ | 共同 | 2012年7月 | 日本心理学会第76回大会<br>(於専修大学) | 神原歩・遠藤由美 | 大会発表論文集, 695. |
| (ポスター発表)<br>行動に基づく自己の強み理解が選考通過率と内定獲得数に与える効果－特性理解における自己と他者が参照する情報の相違に焦点をあてて－ | 共同 | 2012年10月 | 日本キャリア教育学会<br>第34回大会<br>(於滋賀大学) | 神原歩・辻川典文 | 大会発表論文集, 46-47. |
| (ポスター発表)<br>進路選択過程の自己効力感に対する学生時代の過ごし方とソーシャルサポートの影響 | 共同 | 2012年10月 | 日本キャリア教育学会<br>第34回大会<br>(於滋賀大学) | 辻川典文・神原歩 | 大会発表論文集, 42-23. |
| (受賞)<br>優秀発表賞(総合性評価部門)受賞 | 共同 | 2012年11月 | 日本認知心理学会<br>第10回大会 | 神原歩・遠藤由美 | |
| (ポスター発表)<br>空間的視点取得力と他者の心的経験推測の正確さとの関連についての検討 | 共同 | 2013年11月 | 日本社会心理学会第54回大会(於沖縄国際大学) | 神原歩 | 大会発表論文集, 465. |
| (口頭発表)<br>東日本大震災後の大学生の節電行動:地域別検討 | 共同 | 2013年11月 | 日本社会心理学会<br>第54回大会<br>(於沖縄国際大学) | 安藤香織・大沼進・柿本敏克・杉浦淳吉・野波寛・神原歩 | 大会発表論文集, 149. |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ポスター発表)<br>空間的視点取得力と他者の心的経験推測の正確さとの関連についての検討(2) | 共同 | 2014年9月 | 日本心理学会第78回大会<br>(於同志社大学) | 神原歩 | 大会発表論文集, 465. |
| (口頭発表)<br>初年次キャリア科目の構築と効果測定<br>―中小規模私立大学における実践事例の報告― | 共同 | 2014年10月 | 日本キャリア教育学会第36回大会(於琉球大学) | 三保紀裕・神原歩・木原麻子・湯口恭子 | 大会発表論文集, 88-89. |
| (ポスター発表)<br>知覚の不確かさへの気付きが自己の客観性認知に与える影響の検討 | 単独 | 2015年11月 | 日本社会心理学会<br>第56回大会<br>(於東京女子大学) | 神原歩 | |
| (口頭発表)<br>初年次キャリア教育科目の受講が新入生の大学生活への適応感に及ぼす効果ー教育目標の達成度と主観的適応感の関連からー | 共同 | 2017年10月 | 日本キャリア教育学会第38回大会(於上越教育大学) | 神原歩・山本理恵・湯口恭子・三保紀裕 | 大会発表論文集, 156-157. |
| (口頭発表)<br>空間的視点取得と他者の心的経験の推測との関連についての検討 | 共同 | 2018年9月 | 日本認知心理学会<br>第10回大会<br>(於立命館大学) | 神原歩・辻川典文 | |
| (ポスター発表)<br>The Effect of Experiencing Visual Illusion Induces Uncertainty of Own Social Perception | 単独 | 2019年2月 | International Convention of Psychological Science (ICPS)<br>,Paris, France | Ayumi Kambara | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

組織調査、満足度調査、など人の心理に関わる各種調査。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　人文　学部 | 職名　講師 | 氏名　服部 陽介 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| パワーポイントを活用した授業の実施 | 2007年10月～ | 授業時に使用するスライド内の文字数を最小限とし，口頭説明とアニメーションを併用することで，積極的な聴講と内容の理解を促した。その結果，アンケート用紙によるフィードバックから，わかりやすい授業だったという評価を得た。 |
| 配布資料の工夫 | 2007年10月～ | 最小限の情報のみを配布資料に記載し，学生一人一人に自ら授業ノートを作成することを促した。その結果，学生が必要に応じて質問をするなど，授業への意欲的な参加の機会が増えた。 |
| 小テストの導入とフィードバック | 2010年4月～ | 授業ごとに，授業内容に関する小テストを実施し，知識の確認と，より深い理解を促した。さらに，特に優秀だった回答を学生に紹介することで，学生のモチベーションを高めるとともに，多くの学生が間違った問題については，解説の時間を設け，正しい理解を促した。 |
| 体験形式の授業の実施 | 2010年4月～ | 現役の研究者によって現在実施されている心理学実験や調査に参加する機会を設けることで，研究テーマや研究法に関する興味や理解を促した。 |
| 授業アンケートの実施とフィードバック | 2010年4月～ | 授業内容に関するアンケートを実施し，感想や質問を受け付けるとともに，授業開始時に学生へのフィードバックを行った。その結果，理解が深まった，解説が分かりやすくなったなど，学生たちから高い評価を得た。 |
| 授業管理システムを用いた情報交換 | 2010年4月～ | 大学で導入している授業管理システムを利用し，受講者同士の情報交換の場を設けることで，授業に先立って受講者同士で疑問点の共有や情報交換を行った。その結果，受講者より，授業中のディスカッションが盛んになり内容についての理解が深まったとの評価を得た。 |
| ワイヤレスマイクおよびポインタの活用 | 2010年4月～ | ワイヤレスマイクとポインタを活用することで，異動しながら演習を行うことが可能になった。また，体験形式の授業を実施する際にも，実験実施者として，スムーズに実験を実施することが可能になった。 |
| 学会ホームページにおける研究情報の公開 | 2013年1月～ | 日本パーソナリティ心理学会に所属する若手研究者として，研究を始めたきっかけや，現在の研究領域に関する情報の公開を行った。自身の経験や最新の研究知見に関する情報を提供することで，これから研究者を志す人々に対して，ひとつの研究モデルを提供した。 |
| 「パパパコメント」を活用した授業の実施 | 2016年4月～ | スマートフォンを用いてPC画面上のコメントを表示することのできる「パパパコメント」というアプリケーションを用いて，講義内での学生の発言を促し，リアルタイムでの相互作用を実現する工夫を行った。 |
| 「Googleフォーム」を活用した授業の実施 | 2018年4月～ | Googleフォームを用いて授業中に実施した課題の集計を行うとともに，その結果を即座にフィードバックする試みを行った。上記の「パパパコメント」と併用することで，質問や疑問を即座に受けつけることが可能になり，学生の課題に対する興味とコミットメントを高めることができた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「心理学入門I・心理学基礎I」に関する教材 | 2014年4月～ | 心理学を初めて学ぶ学生にわかりやすく，かつ新しい知見を提供できるよう，心理学の入門書と最新の研究知見をパワーポイントを用いてまとめ，授業用の資料とした。 |
| 「心理学基礎実験A・実践プロジェクトA/B」に関する教材 | 2014年4月～ | 「集合知」，「虚記憶」，「錯誤帰属」などの実験手続きと，各テーマの内容を簡単に説明するための参考資料を作成した。また，実験データを分析・報告するための参考資料についても，同時に作成した。 |
| 「心理学研究法」に関する教材 | 2015年4月～2016年3月 | 実験法ならびに調査法に関する説明を補足するための参考資料をパワーポイントを用いて作成した。また，学習内容の理解を促進するために内容に関連する課題を作成した。 |
| 「感情・人格心理学」に関する教材 | 2017年9月～ | 人格心理学・感情心理学の講義資料をパワーポイントを用いて作成した。また，学習内容の理解を促進するために内容に関連する課題を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーション | 共 | 2015年11月 | 北大路書房 | 編著者：杉山 崇・丹藤 克也・越智 啓太 | 135頁～148頁 |
| 論文 | | | | | |
| 学業場面における自己制御を阻害する要因に関する検討 | 単 | 2015年3月 | 『総合研究所所報』16巻 | | 28頁-33頁 |
| 思考抑制時に生じる侵入思考の判断基準に関する検討 | 単 | 2015年3月 | 『人間文化研究』34巻 | | 1頁-18頁 |
| 抑制意図が抑うつ者の気晴らしへの動機づけに与える影響―交通事故の目撃経験を想定した場合に関する検討― | 共 | 2015年3月 | 『モチベーション研究』第4号 | 著者：服部陽介・川口潤・丹野義彦 | 27頁-34頁 |
| Depressive rumination and social problem solving in Japanese university students. | 共 | 2015年3月 | 『Journal of Cognitive Psychotherapy』29巻第2号 | 著者：Hasegawa, A., Yoshida, T., Hattori, Y., Nishimura, H., Morimoto, H., & Tanno, Y. | 134頁-152頁 |
| 思考抑制に関するメタ認知的信念が侵入思考に与える影響 | 共 | 2015年4月 | 『心理学研究』86巻第1号 | 著者：服部陽介・丹野義彦 | 62頁-68頁 |
| Prospective associations of depressive rumination and social problem solving with depression: A 6 month longitudinal study. | 共 | 2015年5月 | 『Psychological Reports』116巻第3号 | 著者：Hasegawa, A., Hattori, Y., Nishimura, & Tanno, Y. | 870頁-888頁 |
| エピソード記憶の想起による未来の時間的概念活性化 | 共 | 2015年10月 | 『心理学研究』86巻第4号 | 著者：伊藤友一・服部陽介・川口 潤 | 340頁-346頁 |
| ハーディネスを媒介して自己内省が抑うつに与える影響 | 共 | 2015年10月 | 『心理学研究』85巻第4号 | 著者：中島美穂・服部陽介・丹野義彦 | 347頁-353頁 |
| 自己と他者に関する思考・感情の意図的抑制と実行機能 | 単 | 2015年12月 | 『心理学評論』58巻第1号 | | 115頁-134頁 |
| 講義中のマインドワンダリングに対する意図的抑制とネガティブな気分の関係 | 共 | 2016年6月 | 『パーソナリティ研究』25巻第1号 | 著者：服部陽介・池田賢司 | 62頁-73頁 |
| Thinking about “why” eliminates retrieval-induced forgetting: Levels of construct affect retrieval dynamics. | 共 | 2016年2月 | 『European Journal of Social Psychology』46巻第4号 | 著者：Ikeda, L., Hattori, Y., & Kobayashi, M. | 514頁-520頁 |
| 日本語版TCAQの作成及び信頼性・妥当性の検討 | 共 | 2016年7月 | 『心理学研究』87巻第4号 | 著者：小林正法・服部陽介・上野泰治・川口潤 | 405頁-414頁 |
| 抑うつエピソードの経験者と未経験者における社会的問題解決と反すうの差異―日本人大学生を対象として― | 共 | 2016年9月 | 『パーソナリティ研究』25巻第2号 | 著者：長谷川 晃・服部陽介・西村春輝・丹野義彦 | 162頁-165頁 |
| Individuals with dysphoria keep thinking “try not to think” during distraction: The effect of meta-awareness of suppression on the relationship between depressive symptoms and intrusive thoughts. | 共 | 2016年10月 | 『Journal of Social and Clinical Psychology』35巻第8号 | 著者：服部陽介・川口 潤 | 664頁-692頁 |
| 思考抑制傾向とストレス経験が考え込みと反省的熟考に与える影響 | 単 | 2018年3月 | 『パーソナリティ研究』26巻第3号 | | 244頁-252頁 |
| Measuring shared knowledge with group false memory | 共 | 2018年7月 | 『Scientific Reports』8巻 | 著者：有馬淑子・行廣隆次・服部陽介 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (招待講演)適切な感情制御の実現に向けて―感情制御のプロセスとその効果・弊害― | 単 | 2018年2月 | 日本心理学会第77回大会 | | |
| (ワークショップでの話題提供)「考えない」ことに関する ネガティブな信念がもたらす影響 | 単 | 2017年9月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第26回大会 | | |
| (ワークショップの企画・司会)忘れられる? 考えないようにできる? -臨床心理学・社会心理学・認知心理学の観点から紐解く意図的抑制- | 共 | 2016年9月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第25回大会 | 服部陽介・石井国雄 | |
| (ポスター発表)Suppression intention foils distraction: Mediation effect of suppression intention on the relationship between depression and intrusive thoughts. | 共 | 2015年2月 | the 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology | Hattori, Y., & Kawaguchi, J. | |
| (ポスター発表)思考抑制とネガティブ気分がマインドワンダリングに及ぼす影響 | 単 | 2015年8月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第24回大会 | | |
| (ポスター発表)理想のひとから目移りするとき―目標の理想度と抑うつ気分が代替目標の想起に与える影響― | 共 | 2015年9月 | 日本心理学会<br>第79回大会 | 服部陽介・池田賢司・小林正法・伊藤友一 | |
| (ポスター発表)思考抑制とストレス経験は反すうを促すか | 単 | 2015年11月 | 日本社会心理学会<br>第56回大会 | | |
| (ポスター発表)赤は女性をより魅力的にするか―日本人大学生を対象とする概念的追試―か | 単 | 2016年6月 | 日本感情心理学会<br>第24回大会 | | |
| (ポスター発表)思考抑制時の侵入思考頻度と侵入思考の内的基準の関係 | 単 | 2016年9月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第25回大会 | | |
| (ポスター発表) 赤色は名前をも魅力的にするか? | 単 | 2017年6月 | 日本感情心理学会<br>第25回大会 | | |
| (ポスター発表) 思考抑制と反すうの相互増強的サイクルについての検討 | 単 | 2017年9月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第26回大会 | | |
| (ポスター発表)「後悔する」という信念と反すうの2側面の関係 | 単 | 2017年9月 | 日本心理学会第81大会 | | |
| (ポスター発表) 思考抑制の逆説的効果と反すう傾向の関連 | 単 | 2017年10月 | 日本社会心理学会58回大会 | | |
| (ポスター発表) 反すうが抑制困難な経験後のリバウンド効果を予測する | 単 | 2018年8月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第27回大会 | | |
| (ポスター発表) 逆説的効果信念による思考抑制と反すうの関連への調整効果 | 単 | 2018年8月 | 日本社会心理学会59回大会 | | |
| (受賞)日本パーソナリティ心理学会第24回大会優秀大会発表賞 | 単 | 2016年4月 | 日本パーソナリティ心理学会<br>第24回大会 | | |
| (受賞)日本感情心理学会第25回大会独創研究賞 | 単 | 2017年8月 | 日本感情心理学会<br>第25回大会 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本パーソナリティ心理学会 | 機関紙編集委員会 委員(2014年10月-2016年9月) 経常的研究交流委員会 委員(2014年10月-2016年9月) 経常的研究交流委員会 副委員長(2016年10月-2017年9月) |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

なし

# バイオ環境学部　食農学科教員組織


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 河　田　　尚　之 | 393 |
| | 佐　藤　　隆　徳 | 394 |
| | 藤　井　　孝　夫 | 397 |
| | 藤　井　　康　代 | 400 |
| 特任教授 | 安　達　　修　二 | 402 |
| | 北　　島　　宣 | 413 |
| 講師 | 井　口　　博　之 | 417 |
| | 四　日　　洋　和 | 419 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　河田　尚之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| インターネットを利用した1次資料の収集マニュアル | 2015年5月1日 | Google scholar, CiNii, J-Stage, AgriKnowledge Quick Search などの文献検索マニュアルを作成し，利用法を解説した. |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

II　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Field evaluation of resistance to kernel infection and mycotoxin accumulation caused by Fusarium head blight in western Japanese wheat (Triticum aestivum L.) cultivars. | 共著 | 2014年11月 | Euphytica 200(1) | 久保堅司,河田尚之,中島隆,平八重一之,藤田雅也 | 81～93頁 |
| 高機能性オオムギ品種育成のためのβ-グルカン高含有育種素材の選定と特性評価. | 共著 | 2018年12月 | 育種学研究　20(2) | 塔野岡卓司・河田尚之・荒木均 | 144～150頁 |
| その他 | | | | | |
| 焼酎醸造特性が優れ大粒で多収の二条大麦新品種「煌二条」. | 共著 | 2015年3月 | 九州沖縄農研報告，64 | 河田尚之・小田俊介・藤田雅也・八田浩一・久保堅司・土井芳憲・田谷省三・佐々木昭博・塔野岡卓司・堤忠宏・谷口義則・関昌子・波多野哲也・平将人 | 21-40頁 |
| 極多収で穂発芽と主要な縞萎縮病ウイルス系統に抵抗性の二条大麦新品種「はるか二条」. | 共著 | 2015年3月 | 九州沖縄農研報告，64 | 河田尚之・藤田雅也・八田浩一・松中仁・久保堅司・荒木均・田谷省三・小田俊介・塔野岡卓司・堤忠宏・関昌子・平将人・波多野哲也 | 41-66頁 |
| 製粉性が優れ，障害抵抗性を有する通常アミロース軟質小麦新品種「ちくごまる」の育成. | 共著 | 2016年3月 | 九州沖縄農研報告，65 | 藤田雅也・中村和弘・八田浩一・河田尚之・松中仁・久保堅司・小田俊介・関昌子・波多野哲也・田谷省三・平将人・堤忠宏・塔野岡卓司・谷口義則・佐々木昭博 | 75-91頁 |
| β-アミラーゼ活性が極めて高い二条大麦HQ10の育成と高品質安定栽培法. | 共著 | 2017年3月 | 栃木農試研報、75 | 大関美香・五月女敏範・関和孝博・加藤常夫・石川直幸・谷口義則・小田俊介・長嶺敬・河田尚之・高山敏之他 | 1-12頁 |
| (講演会発表)<br>高機能性オオムギ品種育成のためのβ-グルカン高含有育種素材の特性評価 | 日本育種学会128回（2015年9月） | | | | |

IV　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

ビールおよび焼酎醸造用二条大麦品種の高品質多収生産に向けた栽培指導

β-グルカン含量が高く機能性に優れた大麦品種の選定および栽培指導

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　佐藤　隆徳 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「作物栽培実習」での活動について | 2016年4月～ | 「作物栽培実習」の食農(F)およびバイオサイエンス(S)において、各種野菜の生育状況、特に整枝、剪定および誘引法、主要な病虫害等の問題について、講義前日等にデジタルカメラで特徴的な生育状況を撮影し、パワーポイントを用いて資料作成を行った。圃場での作業実習の前に、これらパワーポイント等の資料を用い、問題点や対処法等について分かりやすく説明を行い、各作業の意味と必要性を理解し実施できるよ努めた。<br>2017年度の食農学科(F)の「作物栽培実習」において、14回目の講義時に収穫野菜コンテストを企画・実施した。学生達が自分たちで栽培した野菜を収穫し、班単位で優秀な個体を選別・陳列し、学生達の審査・投票により、班単位で1位と2位を決定し、表彰を行った。自分たちで栽培・管理・収穫を行った野菜の出来映えを競うことで、栽培の難しさや収穫の意義などを学ぶと供に、野菜栽培と収穫の楽しさを体感させるように努めた。<br>2017年度のバイオサイエンス学科(S)の「作物栽培実習」において、野菜の収穫の始まった10回目の講義より、自分たちで栽培・収穫した野菜を使った料理(自宅等で実施)の写真紹介等を実施させた。野菜の栽培・収穫という栽培実習に留まらず、収穫した野菜を自らが調理し、その料理の写真と供に調理方法や食べた感想、今後の改善点などを自ら紹介することにより、農業にそれほど関心を持たないバイオサイエンス学科の学生に、食と農の楽しさを体験させるように努めた。 |
| 「京野菜栽培加工実習」での活動について | 2016年4月～ | 2017年度の「京野菜栽培加工実習」において、2017年12月に東日本大震災復興支援千枚漬お届けプロジェクトで震災地へ持参する千枚漬けを作成するために、例年より2週間半早く、秋学期の授業が開始する前に聖護院カブの栽培を開始した。2017年の秋冬期は、台風、長雨、早期の低温等により、全国的に野菜の生育が不良で、学生達が実習で栽培した聖護院カブは大きく育たず、これらを用いた千枚漬けを作成することができなかった。しかし、実習開始の17日前に栽培を開始した聖護院カブは、台風の影響も少なく、12月初旬には千枚漬けの作成可能な大きさに肥大し、無事に被災地に持参することができた。 |
| 「地域食農論」での活動について | 2017年4月～ | 「地域食農論」の講義において、地域農業の活性化に有効な農林水産省や地域の行政機関で実施している制度や取り組み事例を紹介することにより、単なるもの作りに留まらず、企画・調整から販売までトータルで学べるように努めた。 |
| 「実践プロジェクトB」での活動について | 2018年4月～ | 「実践プロジェクトB」では、亀岡市や京都府を対象に農業による地域おこしに関わる食材の開発等を目的に、学生自身のアイデアをもとに、食材の企画・開発、材料の購入、調理、広報等を実施している。限られた予算内で効率的に実施するために、使用頻度の高い食材等については、各班で個別に購入・管理させずに、一括購入・管理を行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 平成29年度高等学校プロフェッショナル(農業)特別講座 | 2017年8月7日 | 京都府の農業科担当教諭(高・特支)、技術科担当教諭(中・特支)、農業科担当実習教諭・実習助手(高・特支)を対象に、基礎的・基本的な知識と技術を生徒に習得させ、学習指導要領の目標を達成できる授業実践を行うことができるようにするために、野菜育種概論および野菜育種各論の講義、さらに野菜の交配等の実習を行った。 |
| 模擬授業 | 2017年7月11日<br>2017年10月20日 | 滋賀県立八日市高等学校(7月11日)及び福知山成美高等学校(10月20日)において、高校生に農学分野への興味を高めるために、農学に関する模擬授業「栽培植物の起源について」を実施した。 |
| 模擬授業 | 2018年3月19日 | 京都学園大学亀岡キャンパスを訪問した、大阪府立能勢高等学校の生徒および理科等の教職員に対し、農学分野への興味を高めるために、農学に関する模擬授業「栽培植物の起源について」を実施した。 |
| 模擬授業 | 2019年2月5日 | 兵庫県立尼崎北高等学校において、生徒発表型ガイダンスを実施した。事前に作物の起源に関するテーマを与えて事前学習をさせ、当日には各自調したものを発表してもらい、それぞれにコメントを行った。引き続き、関連した模擬授業「栽培植物の起源について」を行った。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 「京野菜栽培加工実習」での活動について | 2016年10月～12月 | 「京野菜栽培加工実習」において、京都学園大学が育成した‘京丹波菜’を実習圃場で栽培・収穫し、食品開発センターで出荷調製を行い、同年12月23日～25日に京都市の岡崎公園において開催された、京野菜フェスティバルの京都学園大学ブースにおいて出品した。 |
| 卒業研究での活動において | 2017年7月11日<br>2017年10月20日 | 京都学園大学が育成したさやまめ（ササゲ）品種‘なつさや’を農業生産学研究室で栽培・収穫・調製し、同年10月9日に亀岡市農業公園において開催された、アグリフェスタ2017の京都学園大学ブースにおいて出品し、担当学生と供に京都学園大学発の野菜の普及に努めた。 |
| 卒業研究での活動において | 2017年11月 | 京都学園大学が育成した‘京丹波菜’を農業生産学研究室で栽培・収穫・調製し、同年11月4日に亀岡市の南郷公園において開催された、肉フェスタ2017の京都学園大学ブースにおいて出品し、担当学生と供に京都学園大学発の野菜の普及に努めた。 |
| 卒業研究での活動において | 2018年 | 京都学園大学が育成した野菜を、農業生産学研究室で栽培・収穫・調製し、同年7月15日に開催されたJA京都大感謝祭、11月10日に開催された亀岡肉フェスタ、および11月24～25日に開催された京都府農林水産フェスティバルの京都学園大学ブースにおいて出品し、担当学生と供に京都学園大学発の野菜の普及に努めた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 疫病、青枯病およびモザイク病（PMMoV）抵抗性のピーマン・トウガラシ類台木用品種‘台パワー’の育成とその特性 | 共著 | 2011年2月 | 野菜茶業研報、10 | 斎藤 新、松永 啓、齊藤猛雄、吉田建実、<br>山田朋宏、佐藤隆徳 | 39頁～50頁 |
| 青枯病および疫病抵抗性を有する台木用トウガラシ品種‘L4台パワー’および‘台ちから’の育成経過とその特性 | 共著 | 2015年3月 | 野菜茶業研報、14 | 松永 啓、齊藤猛雄、斎藤 新、吉田建実、<br>佐藤隆徳、坂田好輝、門馬信二 | 39頁～56頁 |
| その他（講演） | | | | | |
| （講演）<br>農研機構近畿中国四国農業研究センターと綾部研究拠点 | 単独 | 2015年7月 | 綾部ロータリークラブ例会 | | |
| （講演）<br>露地・簡易施設における環境保全型野菜栽培 | 単独 | 2016年2月 | 京都学園大学<br>および特産物を考える会 | | |
| （口頭発表）<br>*In vitro* Propagation of Virus-free Yam, *Dioscorea alata* L. | 共著 | 2018年8月 | International Association for Plant Biotechnology Congress | S. Ohki and T. Sato | |
| （研究紹介講演）<br>Utilisation de la culture de tissus *in vitro* chez plantes supérieures – Dans le cas de l'igname (*Dioscorea alata* L.) | 共著 | 2018年6月 | 3es Rencontres des Chercheurs Francophones du Kansai | S. Ohki, T. Sato et S. Yazawa | |
| （講演）<br>農業と環境 ～「物質循環・環境保全・品種改良」の三つの切り口で考える ～<br>環境に配慮した野菜の栽培 | 単独 | 2018年11月 | 京町家新柳居市民講座<br>京都学園大学 | | |
| （講演）<br>農業生産学研究室で研究中の野菜さやまめ・京丹波菜・香河里芋の利用について | 単独 | 2019年3月 | 京都学園大学<br>および特産物を考える会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 園芸学会会員 |
| | 日本育種学会会員 |
| 2006年～2012年 | 日本育種学会編集委員（英文誌および和文誌） |
| 2005年～2006年 | 三重県科学技術振興センター農業部研究評価委員 |
| 2009年～2011年 | 公立大学法人大阪府立大学生命環境科学部非常勤講師 |
| 2011年～2015年 | 滋賀県農林水産関係試験研究外部評価委員 |
| 2011年～2015年 | 近畿地域環境保全型農業推進連絡会委員及び近畿地域環境保全型農業優良事例審査委員会委員（農林水産省近畿農政局） |
| 2011年～2015年 | 近畿ブロック農業用使用済みプラスチック適正処理推進協議会委員（農林水産省近畿農政局） |

| | |
|---|---|
| 2014年～2015年 | 「攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業<br>（うち産学の英知を結集した革新的な技術体系の確立）」専門PO（プログラム・オフィサー） |
| 2019年～ | NPO法人近畿アグリハイテク　理事 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| ナス科、アブラナ科野菜等の栽培技術と育種ならびに環境保全型野菜栽培 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　藤井　孝夫 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無 |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1 講義中に復習をさせる仕組み | 2018年4月～ | 各回の講義前に手渡す講義資料の中に、当日講義の内容を対象とした穴埋め問題、語句説明問題、科学的事象の仕組みなどについての説明問題などを添付している。講義の途中で、適宜聴講学生に回答をさせて、その回答状況に応じて、問題の解答について説明を行い、理解を進めるよう取り組んでいる。場合によっては、講義予定の内容について重要と考えられるものについては、講義前に上記の問題の解答をさせて、その後講義を行なった後、あらためて問題の解答させ、十分な理解を促進するよう対応している。 |
| 2 小テストの実施と答え合わせによる復習・理解促進 | 2017年4月～ | 15回の講義のうち、3回目、6回目、9回目、12回目に、当日講義を含めて直近3回の講義内容を対象として、3～5問の記述式小テストを実施している。そして、その翌週の講義の冒頭30分を使って、学生の解答例を30例程度をプロジェクターで掲示している。掲示するのは、正解だけでなく、問題を誤認した解答、知識不足の解答、文章的に不適切な解答を示し、正解ではない理由と、正解に近づくための解答方法について詳しく説明を行っている。 |
| 3「覚えたい英文100選」の作成と運用 | 2018年9月～ | 能力別クラス編成で、英語力が相対的に弱いクラスについて、英文読解や文法説明に加えて、英文法参考書から引用した英文100フレーズを暗記させている。英文読解のための英文法の知識が少ない学生もおり、英文法を講義するとともに、当該文法範囲に関連する英文を暗記させている。具体的には、100フレーズを5フレーズずつに分けて覚えてこさせ、毎回の講義の最初10分程度で全員に5フレーズのうち任意の1フレーズを答えさせる。30回の講義で、100フレーズの暗唱を2回～3回繰り返している。 |
| 4 講義室の着席制限とPCを遠隔操作できる装置の活用 | 2017年4月～ | 履修生が100名以上の大教室では、必ずしも全ての学生が、講義に集中しているとは限らない。そのため、教室後方(例えば4列)への着席をさせず、前方に学生を着席させる、さらに、PC操作(プロジェクター画面の転換)ができる装置を持参し、教室内を歩きながら学生に質問をしながら講義を進めている。 |
| 5 講義前に動機付けを行うための取り組み | 2017年4月～ | 講義内容は、実用的技術につながる情報や最新の学術情報であり、講義の最初の5分程度を使って、当該講義内容と農業などの産業との関係や日常社会・生活との関係について言及し、学ぶことの意義を説明している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 1 食資源特論の土壌肥料分野について、教材作成 | 2016年4月～ | 作物の生産性を維持するための土壌管理方法について理解を深めるために、問題点(日本の耕地土壌の実態)、課題(土壌管理の目標)、対応(土壌管理方法)、資材(土壌改良資材)からなる教材(約80ページ)を作成した。 |
| 2 実践プロジェクトの講義資料の作成<br>(チャ栽培、製造、飲用法、歴史、技術史) | 2016年4月～ | 学部講義では特養作物(チャ)を教えないので、実践プロジェクトでお茶の製造や飲料開発をテーマにして活動する場合に、履修学生が事前に知識を得るために、チャ栽培や茶製造、利用に関する資料を作成した。栽培、製造、技術の歴史、俺れ方理論など80ページを作成した。 |
| 3「覚えたい英文100選」の作成と運用 | 2018年9月～ | 英文法に関する知識が必ずしも多くない学生、あるいは英文法に拒絶反応を示す学生が多く、英文を暗唱させ、口頭発表することにより、英文に対する嫌悪感を払拭し、英文法を十分に理解していなくても、英文の読解力向上につながることを期待して、資料を作成し、講義で使用した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1 実践プロジェクトC、D,Eで、緑茶飲料の商品開発のための探求力を養成した。 | 2016年10月～ | 履修学生を対象として、実践力、折衝力をつけさせるために、課題に応じて、ビジネス展開している事業者に取材をさせた。緑茶飲料開発のために、開発事業者、流通事業者、緑茶供給事業者などに出向き、商品開発の考え方や価格設定、ブレンド方法を学ばせ、、開発の要件や課題について考えさせた。 |
| 2 実践プロジェクトC、Dで、農作物（ダイズ：京白丹波）の産地拡大の研修を通じて、課題解決のための探求力を養成した。 | 2017年10月～ | 履修学生を対象として、実践力、折衝力をつけさせるために、課題に応じて、ビジネス展開している事業者に取材をさせた。京都府オリジナル品種の産地拡大のための課題をさぐるため、雑穀業者や実需者（製菓、豆腐）を取材させ、産地を拡大するための、素材の魅力の発信や、流通上の課題を考えさせた。 |
| 3 実践プロジェクトC、Dで、農作物（ダイズ：京白丹波）の産地拡大の研修を通じて、課題解決のための探求力を養成した。<br>特に、生産者と実需者（製菓業者）を集めて、商取引成立の可能性を探るワークショップを企画・開催させた。 | 2018年10月～ | 履修学生を対象として、実践力、折衝力をつけさせるために、課題に応じて、ビジネス展開している事業者に取材をさせた。京都府オリジナル品種の産地拡大のための課題をさぐるため、雑穀業者や実需者（製菓、豆腐）を取材させ流とともに、生産者と実需者を集めたワークショップを企画・開催をさせ、相互の課題共有、取引の可能性について検討をさせた。 |
| 4 インターンシップの開拓 | 2018年4月～ | 茶業界への就職を促すため、京都府で最も事業規模の大きい商社にお願いして、インターンシップの受け入れをしていただいた。 |
| 5 自主ゼミ「お茶研究会」の顧問として指導 | 2016年10月～ | 自主ゼミ「お茶研究会」では、チャの栽培（学内茶園）と呈茶（亀岡市イベント等への参加）の活動を主としている。基本的には自主的、主体的な活動を行っているが、専門的な栽培技術の説明、呈茶のための原料茶葉の調達、ブレンドの指導を行なっている。<br>　また、京都府が行なっているお茶検定試験に参加させるために、チャ栽培や製造、歴史などについて、毎年講義を行なっている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 日本茶の魅力を求めて | 共著 | 2005年9月 | 大河書房 | 小西茂毅 | P70～81<br>P138～145 |
| 京料理の文化史 | 共著 | 2017年3月 | 思文閣出版 | 上田純一 | 275頁～292頁 |
| 論文 | | | | | |
| 長期連用水田圃場における土壌の形態別窒素量に及ぼす施肥管理の影響 | 共著 | 2011年 | 日本土壌肥料学会誌(82,4) | 矢内純太 | p283～289 |
| 京料理の文化史 | 共著 | 2017年3月 | 思文閣出版 | 上田純一 | 275頁～292頁 |
| その他 | | | | | |
| (調査報告書)<br>『和束地域の歴史と文化遺産』<br>和束茶業史　～人々の奮闘とそれを支えた地域の力～ | 共著 | 2015年3月 | 「京都府立大学文化遺産叢書」<br>第9集 | 京都府立大学文学部歴史学科<br>上田純一・向井佑介 | |
| (受賞)<br>茶業功労者表彰 | | 2016年10月 | 日本茶業学会 | | |
| (新聞記事)<br>小さな茶園、大きな夢 | | 2018年5月22日 | 朝日新聞<br>(大学紹介の特集記事) | | |
| (新聞記事)<br>お茶の文化育てて体感 | | 2018年1月26日 | 日経新聞大阪支社版夕刊 | | |
| (シンポジウム)<br>京都府茶業研究所リニューアルオープン記念公開シンポジウムのパネラー | | 2017年1月 | 京都府主催 | | |
| (シンポジウム)<br>お茶サミット2018 in WAZUKA<br>でのコーディネーター | | 2018年8月 | 和束町主催 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 日本土壌肥料学会京都大会エクスカーションの企画・運営 | 2015年9月に、学会終了翌日に、京都府内の京野菜栽培土壌及び茶園土壌の視察を企画し、運営も行った。 |
| 宇治茶世界遺産検討委員会 調査研究会員 | イコモスへの提案書「宇治茶の文化的景観」の作成に関わり、国内茶産地の調査研究を行った。(2012年～) |
| きょうと農商工連携応援ファンド<br>審査委員会副委員長 | 京都産業21(京都府外郭団体)が実施する農商工者支援事業への、申請内容の審査を行っている。(2017年～) |
| エコトピア亀岡風評被害防止対策委員会委員 | 同委員会において同事業所の行う環境影響評価の方法や計測データについて意見を提出している。(2017年～) |
| 宇治茶連続セミナーの企画・運営 | 京町家「新柳居」を会場として、「宇治茶を科学する」視点で、専門家の招聘による講演会(年6回)を企画・運営している。(2017年～) |
| 京丹波町起業・新事業創出支援補助金<br>審査会座長 | 京丹波町が実施する地元農業者や商工業者に対する支援補助金に関して、応募者申請内容の審査を行っている。(2018年～) |
| 和束町景観保全条例策定委員会座長 | 4回開催された同委員会の委員長として委員会運営を行った(2018年7月～11月)。同条例は2019年7月に施行された。 |
| 亀岡市総合農政計画審議会委員 | 同審議会において亀岡市の農業振興計画書への意見を出している。(2018年～) |
| 京都府農業改良普及事業審査会座長 | 京都府農林水産部農産課が所管する協同農業普及事業の進捗について、現地視察、活動成果の評価を実施(2018年～) |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 農耕地土壌の適切な管理を行うための技術情報の提供や、土壌の科学的な評価(土壌診断等)に関する研究の実施 | |
| 各種の茶の栽培や製造及び二次加工や関する調査研究、茶の嗜好性と化学成分との関係を明らかにする研究 | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　藤井 康代 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 実験での学習を促す仕組みづくり | 2019年～ | 環境化学実験の担当者変更に伴い、方針を一部変更し、実験前の事前テストを導入することで予習意欲を高める工夫をした。 |
| 学生の考える力の育成(ディスカッション) | 2019年～ | 事前に必要事項を予習させておき、学年横断型のグループでディスカッションを行い、理由付けの習慣の醸成などを試みた。 |
| 実験ノートのチェック | 2016年～ | 実験終了後に実験ノートのチェックを行うことで、実験ノートの取り方やデータのまとめ方などの実践的な教育を行った。 |
| 半期を通したレポート作成技術の習得に向けたプログラム | 2018年～ | テーマ設定、文献検索の方法から、中間報告発表会、最終レポート作成まで、講義を通して卒論に必要な技術を身に付ける実践的な教育を行った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 食農概論の教材作成 | 2019年4月 | 新規担当講義の開講に伴い、学生自身に提供する教材を作成した。 |
| 環境化学実験書の改訂 | 2019年4月 | カリキュラム再編に伴い実験の内容を変更したことから、それに沿った実験書の作成した。 |
| 化学実験書の作成 | 2019年4月 | カリキュラムの再編に伴い、内容を変更して目的・方法・原理・データーの処理などを示した実験書を作成した。 |
| バイオマス科学の副教材作成 | 2019年4月 | これまでの学生の意見から、特に混乱しやすい部分について詳細な教材を作成した。 |
| バイオマス利用学の教材作成 | 2016年3月 | 新規講義の開講に伴い、教材を作成した。 |
| 食農基礎実験実験書の作成 | 2016年8月 | 3回生以降にもテキストとして利用できることを考え、基本的な事柄をまとめた実験書を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| その他(学会発表) | | | | | |
| マダケ炭化物の炭素量を 中心とした基本的性質 | 共 | 2016年6月9日 | 木質炭化学会 | | |
| カキ養殖イカダ廃材の性質-廃棄物系バイオマスの利用を目指して- | 共 | 2018年3月15日 | 日本木材学会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2011年1月～2019年2月 | 高槻市農林業活性化審議会委員 |
| 2011年6月～2017年5月 | 亀岡警察署協議会委員 |
| 2011年11月～ | 高槻市地球温暖化対策実行計画協議会委員 |
| 2012年3月～ | 京都府森林バイオマス活用推進計画検討委員会委員 |
| 2018年4月～ | 「ひょうごエコタウン推進会議」研究会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

木質バイオマスの分析、利用(特に化学成分)

堆肥化

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2011年1月～2019年2月 | 高槻市農林業活性化審議会委員 |
| 2011年6月～2017年5月 | 亀岡警察署協議会委員 |
| 2011年11月～2019年11月 | 高槻市地球温暖化対策実行計画協議会委員 |
| 2012年3月～ | 京都府森林バイオマス活用推進計画検討委員会委員 |
| 2013年3月～2014年3月 | 南丹市環境審議会委員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 木質バイオマスの分析、利用（特に化学成分） | |
| 堆肥化 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　安達 修二 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 食品工学入門－食品を造る基礎科学－ | 2014年 | 食品工学に関する学部レベル向きの教科書(共著) |
| Introduction to Food Manufacturing Engineering | 2016年 | 食品工学の入門書(教科書)(共著) |
| 学ぼう！食品の科学と技術－食品をつくる基礎知識－ | 2017年 | 大学1，2年生向けの食品製造に関する入門書(教科書)(共著) |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 農芸化学系学生の電気に関する基礎知識－乾電池の電圧を知る学生は？－ | 2017年2月 | 化学実験などを安全に行う上で必要な電気に関する基礎的な知識をどの程度知っているかを多数の大学，高専で500名以上の学生(院生を含む)を対象として調査した結果をまとめ，日本農芸化学会の機関誌「化学と生物」に公表した(共著) |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 食品素材のナノ加工を支える技術 | 共著 | 2013年 | シーエムシー出版 | 安達修二，中嶋光敏，杉山 茂 監修 | 62頁～72頁 |
| 食品工学入門－食品を造る基礎科学－ | 共著 | 2014年 | カルチュレード | 安達修二，古田 武 | 共著者と全文 |
| エマルションの特性評価と新製品開発，品質管理への活用 | 共著 | 2014年 | 技術情報協会 | | 383頁～392頁 |
| Emulsifiers: Properties, Functions and Applications | 共著 | 2015年 | Nova Science Publishers, Inc. | A. Fitzgerald編，Y. Watanabe andS. Adachi | 第１章(1頁～25頁) |
| Introduction to Food Manufacturing Engineering | 共著 | 2016年 | Springer | T.-L. Neoh, S. Adachi and T. Furuta | 共著者と全文 |
| Ascorbic Acid: Properties, Synthesis and Applications | 共著 | 2017年 | Nova Science Publishers, Inc. | E. Parsons編, Y. Watanabe, T. Ishigaki, S. Fujii, and S. Adachi | 第4章,91頁～104頁 |
| Handbook of Food Bioengineering (Volumes I-XX) | 共著 | 2017年 | Elsevier | Y. Watanabe and S. Adachi | 第7章 |
| Rheology of Biological Soft Matter: Fundamentals and Applications | 共著 | 2017年 | Springer | T. Ogawa and S. Adachi | 第5章(119頁～148頁) |
| 学ぼう！食品の科学と技術－食品をつくる基礎知識－ | 共著 | 2017年 | mars | 四日洋和，安達修二，古田　武 | 共著者と全文) |
| 論文 | | | | | |
| Characteristics and antioxidative ability of defatted rice bran extracts obtained using several extractants under subcritical conditions | 共著 | 2013年 | J. Oleo Sci., 62(1), 1–8 | T.-Y. Chiou, A. Ogino, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分特定不可 |
| Characteristics of amorphous matrices composed of different types of sugars in encapsulating emulsion oil droplets during freeze-drying | 共著 | 2013年 | Food Res. Intl., 51, 201–207 | K. Imamura, Y. Kimura, S. Nakayama, M. Sayuri, S. Ogawa, T. Hoshino, J. Oshitani, T. Kobayashi, S. Adachi, T. Matsuura, H. Imanaka, N. Ishida, and K. Nakanishi | 担当部分特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き)<br>Water sorption kinetics of spaghetti prepared under different drying conditions | 共著 | 2013年 | Food Sci. Technol. Res., 19(1), 17–22 | U. Aimoto, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Properties of extract from okara by its subcritical water treatment | 共著 | 2013年 | Intl. J. Food Prop., 16, 974–982 | J. Wiboonsirikul, M. Mori, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of salts on the water sorption kinetics of dried pasta | 共著 | 2013年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77(2), 249–252 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Characteristics and antioxidative activity of the acetone-soluble and insoluble fractions of the defatted rice bran extract obtained using aqueous organic solvent under subcritical conditions | 共著 | 2013年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77(3), 624–630 | T.-Y. Chiou, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Properties and water sorption characteristics of spaghetti prepared using various dies | 共著 | 2013年 | J. Food Sci., 78(4), E520–E525 | M. Yoshino, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Antimicrobial activity of monoacyl hexose coexistent with lysozyme against Gram-positive *Bacilli* | 共著 | 2013年 | Intl. J. Food Prop., 16, 1222–1230 | Y. Watanabe, Y. Shirai, M. Miyake, J. Kitano, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Shrinkage and tensile stress of sheet-like and cylindrical pastas with various moisture contents | 共著 | 2013年 | Food Biosci., 2, 10–14 | N. Mizuno, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Properties of rice stem extracts obtained by subcritical water/ethanol treatment | 共著 | 2013年 | Food Sci. Technol. Res., 19(4), 547–552 | B. Tangkhavanich, Y. Oishi, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Dilatometric measurement of the partial molar volume of water sorbed to durum wheat flour | 共著 | 2013年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77(7), 1565–1568 | A. Hasegawa, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of treatment time during subcritical water treatment and its re-treatment on the properties of rice stem extract | 共著 | 2013年 | Jpn. J. Food Eng., 14(2), 107–112 | B. Tangkhavanich, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Properties of rice stem extracts obtained using subcritical fluids | 共著 | 2013年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77(10), 2112–2116 | B. Tangkhavanich, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Surface oil content of microcapsules containing various oil fractions and oil-droplet sizes | 共著 | 2013年 | Jpn. J. Food Eng., 14(4), 169–174 | K. Kikuchi, S. Yamamoto, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of droplet size on autoxidation rates of methyl linoleate and α-linolenate in an oil-in-water emulsion | 共著 | 2013年 | J. Oleo Sci., 62(12), 1003–1008 | T. Ma, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Thermal analysis of drying process of durum wheat dough under the programmed temperature-rising conditions | 共著 | 2014年 | Food Biopro. Process., 92, 9–13 | T. Ogawa, S. Koizumi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Kinetics of sucrose hydrolysis in a subcritical water-ethanol mixture | 共著 | 2014年 | J. Appl. Glycosci., 61, 9–13 | D. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetics of oxidation of different depths of methyl linoleate in bulk phase | 共著 | 2014年 | Food Sci. Technol. Res., 20(2), 183–187 | T. Ma, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Water sorption kinetics of udon with different diameters | 共著 | 2014年 | Food Sci. Technol. Res., 20(2), 241–246 | T. Roppongi, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Degradation kinetics of some phenolic compounds in subcritical water and radical scavenging activity of their degradation products | 共著 | 2014年 | Can. J. Chem. Eng., 92(5), 810–815 | P. Khuwijitjaru, J. Plernjit, S. Samuhaseneetoo, R. Pongsawatmanit, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Degradation of caffeic acid in subcritical water and on-line HPLC-DPPH assay of degradation products | 共著 | 2014年 | J. Agric. Food Chem., 62(8), 1945–1949 | P. Khuwijitjaru, B. Suaylam, R. Pongsawatmanit, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Production of oligosaccharides from coconut meal by subcritical water treatment | 共著 | 2014年 | Intl. J. Food Sci. Technol., 49(8), 1946–1952 | P. Khuwijitjaru, A. Pokpong, K. Klinchongkon, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Measurement of moisture profiles in pasta during rehydration based on image processing | 共著 | 2014年 | Food Bioproc. Technol., 7, 1465–1471 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of various emulsification methods on oxidation of methyl linoleate | 共著 | 2014年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 78, 147–150 | T. Ma, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of repeated treatment on the properties of rice stem extract using subcritical water, ethanol, and their mixture | 共著 | 2014年 | J. Ind. Eng. Chem., 20, 2610–2614 | B. Tangkhavanich, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of reducing oil droplet size on lipid oxidation in an oil-in-water emulsion | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(2), 43-47 | K. Kikuchi, S. Yamamoto, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Microencapsulation of □-carotene by self-aggregated caseinates | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(2) 51–57 | K. Nakagawa, T. Jarunglumlert, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of surface roughness on rehydration kinetics of spaghetti | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(2), 101–104 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of drying conditions on moisture distribution in rehydrated spaghetti | 共著 | 2014年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 78(8), 1412-1414 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Subcritical water treatment for producing seasoning from semi-dried Isada krill | 共著 | 2014年 | J. Food Proc. Eng., 37(6), 567–574 | I. Koomyart, H. Nagamizu, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| 論文（続き） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Effects of relaxation of gluten network on rehydration kinetics of pasta | 共著 | 2014年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 78(11), 1930–1934 | T. Ogawa, A. Hasegawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| A simple method for determining the flaxseed or fish oil content in microcapsules prepared by spray drying | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(3), 131–139 | H. Shiga, S. Adachi, S. Adachi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| Optimal conditions for lipase-catalyzed condensation of erythorbic acid with fatty acids in organic solvents | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(3), 143–148 | Y. Watanabe, T. Fukuda, N. Takahashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Surface-oil content of microcapsules with different oil droplet-to-microcapsule size ratio | 共著 | 2014年 | Jpn. J. Food Eng., 15(3), 191–193 | K. Kikuchi, S. Yamamoto, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Lipase-catalyzed esterification of triterpen alcohols and phytosterols with oleic acid | 共著 | 2014年 | J. Am. Oil Chem. Soc., 91, 1885–1890 | T. Kobayashi, A. Ogino, Y. Miyake, H. Mori, A. Hosoda, M. Fujita, T. Tsuno, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetic analysis for the conversion of fructose to 5-hydroxymethylfurfural in [BMIM]Cl with low water contents | 共著 | 2014年 | J. Appl. Glycosci., 62(4), 143–147 | Y. Miyagawa, M. Yoshino, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Promotion or suppression of glucose isomerization in subcritical aqueous straight- and branched-chain alcohols | 共著 | 2015年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 79(3), 470–474 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Production of rare sugars from common sugars in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2015年 | Food Chem., 175, 465–470 | D. M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetic analysis for the isomerization of glucose, fructose, and mannose in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2015年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 79(6), 1005–1010 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Production of 5-hydroxy-methylfurfural in a eutectic mixture of citric acid and choline chloride and its extractive recovery | 共著 | 2015年 | Sep. Purif. Technol., 155, 26–31 | T. Kobayashi, M. Yoshino, Y. Miyagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Energy efficiency of different emulsification methods: A comparative evaluation | 共著 | 2015年 | Jpn. J. Food Eng., 16(1), 71–74 | Y. Miyagawa, M. Shima, R. Matsuno, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Influence of sugar surfactant structure on the encapsulation of oil droplets in an amorphous sugar matrix during freeze-drying | 共著 | 2015年 | Food Res. Intel., 70, 143–149 | S. Nakayama, Y. Kimura, M. Sayuri, J. Oshitani, T. Kobayashi, S. Adachi, T. Matsuura, H. Imanaka, N. Ishida, H. Tada, K. Nakanishi, and K. Imamura | 担当部分<br>特定不可 |
| Compositions, flavor and antiradical properties of products from subcritical water treatment of raw Isada krill | 共著 | 2015年 | Intl. J. Food Sci. Technol., 50, 1632–1639 | I. Koomyart, H. Nagamizu, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Swelling pressure of tapioca starch gel estimated from distribution coefficients of non-electrolytes | 共著 | 2015年 | Food Sci. Technol. Res., 21(4), 509–515 | Y. Sha and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of oil-droplet size on activation energy for coalescence of oil droplets in an O/W emulsion | 共著 | 2015年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 79(10), 1695–1697 | Y. Miyagawa, K. Katsuki, R. Matsuno, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Degradation of disaccharides containing two glucose units in subcritical water | 共著 | 2015年 | Asia-Pacific J. Chem. Eng., 10, 681-686 | J. Wiboonsirikul, Y. Nakata, T. Kobayashi, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Adsorption isotherms of hydrophobic substances onto a chromatographic organic monolith | 共著 | 2015年 | Jpn. J. Food Eng., 16(2), 167–170 | Y. Sha, U. Aimoto, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Influence of aggregate structure of casein on the encapsulation efficiency of □-carotene entrapped via hydrophobic interaction | 共著 | 2015年 | Food Struct., 5, 42–50 | T. Jarunglumlert, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Digestibility and structural parameters of spray-dried casein clusters under simulated gastric conditions | 共著 | 2015年 | Food Res. Intl., 75, 166–173 | T. Jarunglumlert, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Characterization of pasta prepared under different drying conditions | 共著 | 2015年 | J. Food Sci., 80(9), E1959–E1964 | T. Ogawa, A. Chuma, U. Aimoto, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Evolution of the size distribution of oil-droplets over time in oil-in-water emulsions | 共著 | 2015年 | Jpn. J. Food Eng., 16(3), 231–234 | K. Katsuki, Y. Miyagawa, R. Matsuno, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of vegetable oil type and lipophilic emulsifiers on the induction period of fat crystallization | 共著 | 2015年 | J. Oleo Sci., 64(11), 1169–1174 | Y. Miyagawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of the oil-droplet size and entire oil fraction in microcapsules on the interior oil fraction | 共著 | 2015年 | Jpn. J. Food Eng., 16(4), 303–305 | K. Kikuchi, S. Yamamoto, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Solubility of D-galactose, D-talose, and D-tagatose in aqueous ethanol at low temperature | 共著 | 2015年 | Food Sci. Technol. Res., 21(6), 801–803 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetic effect of alcohols on hexose isomerization under subcritical aqueous conditions | 共著 | 2015年 | Chem. Eng. Res. Des., 104, 723–729 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Hydrolysis of konjac flour under subcritical water conditions | 共著 | 2015年 | Chiang Mai J. Sci., 40 (10), 1-7 | P. Khuwijitjaru, I. Koomyart, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Moisture distribution and texture of spaghetti rehydrated under different conditions | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(4), 769–773 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| 論文(続き) | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Destabilization of mayonnaise induced by lipid crystallization upon freezing | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(4), 786–790 | Y. Miyagawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Production of keto-disaccharides from aldo-disaccharides in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(5), 998–1005 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Structural changes in casein aggregates under frozen conditions affect the entrapment of hydrophobic materials and the digestibility of aggregates | 共著 | 2016年 | Chem. Eng. Sci., 143, 287–296 | K. Nakagawa, T. Jarunglumlert, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Preparation of liquid and solid seasonings with shrimp-like flavor from Isada krill under subcritical water conditions by steam injection | 共著 | 2016年 | Food Sci. Technol. Res., 22(3), 317–323 | S. Tamiya, I. Koomyart, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Moisture profiles of wheat noodles containing hydroxypropylated tapioca starch | 共著 | 2016年 | Intl. J. Food Sci. Technol., 51, 1516–1522 | S. Fukuzawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Antioxidative property of stearoyl ascorbate in a food matrix system | 共著 | 2016年 | J. Oleo Sci., 65(6), 487–492 | J. Wiboonsirikul, Y. Watanabe, A. Omori, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Swelling pressure of wet rice grains estimated from distribution coefficients of saccharides | 共著 | 2016年 | J. Appl. Glycosci., 63, 47–50 | Y. Sha and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetics on the turbidity change of wheat starch during its retrogradation | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(8), 1609– 1614 | S. Fukuzawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Direct treatment of Isada krill under subcritical water conditions to produce seasoning with shrimp-like flavor | 共著 | 2016年 | Food Technol. Biotechnol., 54(3), 335–341 | I. Koomyart, H. Nagamizu, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Water sorption kinetics of gluten-added wheat noodle | 共著 | 2016年 | Food Sci. Technol. Res., 22(4), 491–495 | S. Fukuzawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of counter-ion form of a cation-exchange resin and ethanol content of eluent on the distribution coefficients of galactose, tagatose, and talose onto the resin | 共著 | 2016年 | Food Sci. Technol. Res., 22(2), 205–208 | A. Tamura, Y. Sha, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Antioxidative property of acyl ascorbate in cookies containing iron | 共著 | 2016年 | Jpn. J. Food Eng., 17(2), 77–81 | Y. Watanabe, P. Khuwijitjaru, Y. Hamai, J. Wiboonsirikul, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Using severity factor as a parameter to optimize krill treatment under subcritical water conditions | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(11), 2192–2197 | I. Koomyart, H. Nagamizu, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Degradation kinetics of trisaccharides consisting of glucose residues in subcritical water | 共著 | 2016年 | J. Carbohydr. Chem., 35, 286–299 | P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Changes in color and texture of wheat noodles during chilled storage | 共著 | 2016年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 80(12), 2418–2424 | S. Fukuzawa, T. Ogawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Interconversion between D-glucuronic acid and D-glucuronolactone in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2016年 | Food Sci. Technol. Res., 22(6), 739–742 | C. Kambara, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetics of the disappearance of N-acetyl-D- glucosamine in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2016年 | Jpn. J. Food Eng., 17(4), 99–104 | C. Kambara, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of oil-droplet diameter on the stability of squalene oil in spray-dried powder | 共著 | 2016年 | Drying Technol., 34(14), 1726–1734 | A. Abd Ghani, K. Matsumura, A. Yamauchi, H. Shiga, S. Adachi, H. Izumi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| Antioxidant properties of convective-air-dried Spirulina maxima: Evaluation of phycocyanin retention by a simple mathematical model of air-drying | 共著 | 2016年 | Food Bioprod. Technol., 100, 292–302 | K. Nakagawa, W. Richaroen, P. Sri-Uam, P. Pavasant, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Decomposition kinetics of glucose and fructose in subcritical water containg sodium chloride | 共著 | 2016年 | J. Appl. Glycosci., 63, 99–104 | T. Kobayashi, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of polydispersity in oil-droplet size on lipid oxidation in oil-in-water emulsions | 共著 | 2016年 | Jpn. J. Food Eng., 17(3), 91-94 | Y. Miyagawa, K. Kikuchi, H. Shiga, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Promoted isomerization of aldoses to ketoses in subcritical aqueous acetonitrile | 共著 | 2017年 | Can. J. Chem. Eng., 95, 359-363 | D.-M. Gao, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Thermal and structural changes of rapeseed oil during isothermal storage at low temperature | 共著 | 2017年 | Food Struct., 11, 8–15 | Y. Miyagawa, K. Shintani, K. Katsuki, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Kinetic analysis of lactulose production from lactose in subcritical aqueous ethanol | 共著 | 2017年 | Food Sci. Technol. Res., 23(1), 45–49 | N. Soisangwan, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of different dextrose equivalents of maltodextrin on oxidation stability in encapsulated fish oil by spray drying | 共著 | 2017年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4),705-711 | A. A. Ghani, Sa. Adachi, H. Shiga, T. L. Neoh, Sh. Adachi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| Effect of oil-droplet size on the oxidative stability of spray-dried flaxseed oil powders | 共著 | 2017年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4), 698-704 | H. Shiga, T. L. Neoh, A. Ninomiya, Sa. Adachi, I. Pasten, Sh. Adachi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| Degradation kinetics of passion fruit pectin in subcritical water | 共著 | 2017年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4), 712-717 | K. Klinchongkon, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| 論文（続き） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Detection of cracks in dried spaghetti using transmission images | 共著 | 2017年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4), 750-754 | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Distribution of saccharides and salts on amphoteric ion-exchange resin | 共著 | 2017年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4), 817-822 | Y. Sha, A. Hasegawa, U. Aimoto, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Behavior of flavor release from emulsified d-limonene in spray-dried powders with various wall materials | 共著 | 2017年 | Jpn. J. Food Eng., 18(1), 53-58 | S. Takashige, D.W. Hermawan, H. Shiga, S. Adachi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| A simple method to measure the surface roughness of spaghetti using a digital camera | 共著 | 2017年 | Food Sci. Technol. Res., 23(2), 237-240 (2017) | T. Ogawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of drying temperature and relative humidity on spaghetti characteristics | 共著 | 2017年 | Drying Technol., 35(10), 1214-1224 | T. Ogawa, A. Chuma, U. Aimoto, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Hydrolysis of konjac flour under subcritical water conditions | 共著 | 2017年 | Chiang Mai J. Sci., 44 (3), 988-992 | P. Khuwijitjaru, I. Koomyart, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Extraction of oligosaccharides from passion fruit peel by subcritical water treatment | 共著 | 2017年 | J. Food Proc. Eng., doi:10.1111/jfpe.12269 | K. Klinchongkon, P. Khuwijitjaru, J. Wiboonsirikul, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Dispersion stability of O/W emulsions with different oil contents under various freezing and thawing conditions | 共著 | 2017年 | J. Food Sci., 82(7), 1569–1573 | K. Katsuki, Y. Miyagawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Denaturation of spray-dried egg yolk during processing and storage | 共著 | 2017年 | Jpn. J. Food Eng., 18(2), 93–99 | K. Nakagawa, S. Adachi, and A. Handa | 担当部分<br>特定不可 |
| Surface-oil measurement for spray-dried fish oil microcapsules using Nile red and confocal laser scanning microscopy | 共著 | 2017年 | Food Sci. Technol. Res., 23(4), 503–509 | A. Abd Ghani, R. Francoise, H. Shiga, T.-L. Neoh, S. Adachi, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| Astaxanthin stability and color change of krill during subcritical water treatment | 共著 | 2017年 | J. Food Sci. Technol., 54(10), 3065-3072 | I. Koomyart, H. Nagamizu, P. Khuwijitjaru, T. Kobayashi, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Liquid-solid phase equilibria and the frozen ratio of ternary aqueous solution of acetic acid and sodium chloride | 共著 | 2017年 | Intl. J. Food Prop. 20(S2), S1848–S1855 | K. Katsuki, Y. Miyagawa, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| A statistical model for estimating the effects of oil droplet size and oil fraction in microcapsules on oxidation of oil | 共著 | 2017年 | Eur. J. Lipid Sci. Technol., 119(12),doi.org/10.1002/ejlt.201700225 | Y. Miyagawa, K. Kikuchi, S. Yamamoto, H. Shiga, H. Yoshii, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Properties of subcritical water-hydrolyzed passion fruit (*Passiflora edulis*) pectin | 共著 | 2018年 | Food Hydrocolloids, 74, 72–77 | K. Klinchongkon, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Effects of severity factor on the subcritical water treatment of polyphenols obtained from Japanese persimmon | 共著 | 2018年 | Food Sci. Technol. Res., 24(2), 209-214 | A. Horie, T. Kobayashi, T. Kometani, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Kinetic analysis of rapeseed oil crystallization during isothermal storage. | 共著 | 2018年 | Crystal Growth & Design, 18(2), 642−650 | Y. Miyagawa, M. Yoshida, K. Nakagawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Seasoning production from the residual waste solution of isada krill processing by its treatment under subcritical water conditions | 共著 | 2018年 | Japan J. Food Eng., 19(2), 113-119 | A. Horie, T. Kobayashi, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Optimization of food dye (betanin) retention during hot air drying: Design space calculation with consideration of reaction and substrate transfer kinetics. | 共著 | 2018年 | Dry. Technol., 36(15), 1920-1929 | K. Nakagawa, A. Tamura, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Water sorption kinetics of wheat flour noodles with added chemically-modified starch. | 共著 | 2018年 | Starch, 70(5-6). doi.org/10.1002/star.201700280 | K. Katsuki, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Release of flavor compounds from micelles and O/W emulsions. | 共著 | 2018年 | Jpn. J. Food Eng., 19(3), 153-162 | M. Shima and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| An accelerated method for estimating the dispersion stability of mayonnaise by oil-water separation under reduced pressure. | 共著 | 2018年 | J. Am. Oil Chem. Soc., 95, 1367-1372 | Y. Miyagawa, T. Ogawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Measuring method of glass transition temperature using aroma sensor. | 共著 | 2018年 | Food Appl. Biosci. J., 6, 253-261 | R. Chantanuson, J. L. Zhu, H. Shiga, S. Adachi, A. Soottitantawat, and H. Yoshii | 担当部分<br>特定不可 |
| A method for estimating glass transition temperature of powders by discoloration of betanin under temperature-programmed heating conditions. | 共著 | 2018年 | Jpn. J. Food Eng., 19(4), 191-196 | R. Chantanuson, J. L. Zhu, Y. Miyagawa, H. Yoshii, H. Shiga, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Induction periods for lipid crystallization of various vegetable oils. | 共著 | 2019年 | J. Oleo Sci.., 68(1), 45-52 | Y. Miyagawa, M. Yoshida, Y. Chizawa, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| Emulsifying properties of conjugates formed between whey protein isolate and subcritical-water hydrolyzed pectin. | 共著 | 2019年 | Food Hydrolloids, 91, 174-181 | K. Klinchongkon, P. Khuwijitjaru, S. Adachi, B. Bindereif, H. P. Karbstein, and U. S. van der Schaaf | 担当部分<br>特定不可 |
| Crystallization kinetics of safflower and olive oils during low-temperature storage. | 共著 | 2019年 | Grasas Aceites 70 (4), e331. https://doi.org/10.3989/gya.0825182 | M. Yoshida, Y. Miyagawa, H. Fujita, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| その他 | | | | | |
| 油滴の微細化による脂質酸化の遅延－確率論的モデル－ | 単著 | 2014年4月 | Foods & Food Ingredients Journal of Japan, 219(4), 324-331 | | |
| 魚介類の蒸煮液の適食化方法及び魚介類の適食化方法及び魚介類を原料とした食材の製造方法 | 共著 | 2014年6月 | 特願2014-119040 | 安達修二, 小林 敬, インティラ・クームヤート, 永水宏昇, 脇屋和紀, 荒井貴之, 木村隆之, 松友倫人 | 担当部分<br>特定不可 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 食品の製造・加工技術の進展への二つの道 | 単著 | 2014年6月 | 食品と開発, 49(6), 13-17 | | |
| Microsoft Office® 2013によるグラフの作成 | 共著 | 2014年6月 | 日本食品工学会誌, 15(2), 69-86 | 小川剛伸, 安達修二 | 担当部分<br>特定不可 |
| タガトースの製造方法 | 共著 | 2014年7月 | 特願2014-143943 | 安達修二, 小林 敬 | 担当部分<br>特定不可 |
| How to draw figures using Microsoft Office® 2013 | 共著 | 2014年 | Silpakorn U. Science Tech. J., 8(2), 9-27 | T. Ogawa, P. Khuwijitjaru, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| パスタ内での水の移動機構 | 共著 | 2014年 | 化学と生物, 52, 602-609 | 小川剛伸, 安達修二 | 担当部分<br>特定不可 |
| Retardation of lipid oxidation by reducing droplet size: Stochastic models | 単著 | 2015年3月 | Jpn. J. Food Eng., 16(1), 17-26 | | |
| Engineering aspects of rate-related processes in food manufacturing | 単著 | 2015年4月 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 79(4), 517-531 | | |
| 食品加工の特徴と食品工学 | 単著 | 2015年 | フルードパワーシステム, 46, 153-158 | | |
| デジカメで探るパスタのおいしさ | 単著 | 2016年8月 | おいしさの科学ニュース, Vol. 40 | | |
| 農芸化学系学生の電気に関する基礎知識－乾電池の電圧を知る学生は？－ | 共著 | 2017年2月 | 化学と生物, 55(2), 141-146 | 安達悠子, 安達修二 | 担当部分<br>特定不可 |
| Dispersion and oxidative stability of O/W emulsions and oxidation of microencapsulated oil | 共著 | 2017年4月 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 81(4), 625-633 | Y. Miyagawa and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |
| 亜臨界流体処理による未利用生物資源の活用 | 単著 | 2017年 | 冷凍, 92, 288-293 | | |
| 食品を造る基礎科学 食品工学① パスタの中で水はどのように動くのか？ | 単著 | 2017年4月 | 社報やまざき, 2017年4月号, | | pp. 42–43 |
| 食品を造る基礎科学 食品工学② 200℃の水で食品素材をつくる！ | 単著 | 2017年5月 | 社報やまざき, 2017年5月号 | | pp. 34–35 |
| 食品を造る基礎科学 食品工学③マヨネーズを冷凍すると？ | 単著 | 2017年6月 | 社報やまざき, 2017年6月号, | | pp. 26–27 |
| デジカメで探るパスタの加工条件とおいしさ | 共著 | 2017年 | 食品加工技術, 37(3), 106–112 | 小川剛伸, 安達修二 | 担当部分<br>特定不可 |
| 拡散と反応が関与する現象の食品工学に基づく理解の深化 | 単著 | 2018年 | 明日の食品産業, 平成30年4月号(通巻485号), 20–27 | | |
| フレーバー, 機能性物質を閉じ込める－機能性食品粉末の製造と特性. | 共著 | 2018年 | 化学工学, 82(7), 362-365 | 吉井英文, 高重至成, 四日洋和, 安達修二 | 担当部分<br>特定不可 |
| Production of D-tagatose: A review with emphasis on subcritical fluid treatment. | 共著 | 2018年 | Science, Engineering and Health Studies, 12(3), 159-167 | P. Khuwijitjaru, N. Milasing, and S. Adachi | 担当部分<br>特定不可 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 平成23年8月～平成29年5月 | 日本農芸化学会理事 |
| 平成24年4月～平成28年4月 | 日本食品科学工学会理事 |
| 平成25年8月～平成27年8月 | 日本食品工学会会長 |
| 平成26年4月～平成28年4月 | 日本食品科学工学会英文誌編集委員長 |
| 平成27年3月～平成29年2月 | 日本農芸化学会関西支部長 |
| 平成27年8月～現在 | 日本食品工学会監事 |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
| --- |
| 乳化, 乾燥, 反応等に関する食品工学 |
| 液体クロマトグラフ分離工学 |
| 亜臨界流体工学 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　北島　宣 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 農学系学生実験のレポート作成における個々の学生との対話型指導方式の取入れ | 2019年4月～ | 実験終了後のレポート作成において、個々の学生と面談方式で作成したレポートをチェックし、対話型で教育を行うことでレポート作成能力を高めるためのキメの細かい指導をしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「果樹園芸学」 米森敬三編.　朝倉出版. | 2015年4月 | 本書は果樹園芸学に関する大学生向けの教科書であり、開園と植栽の項目を北島と本杉が分担して執筆した(pp76-91)。この項目では、果樹園の開園に適した環境条件やその環境に適した果樹の選定および植栽の方法について解説した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 全国大学農場協議会教育シンポジウムで発表。<br>テーマ「教育関係共同利用拠点活動による地域との連携」 | 2017年5月 | 文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定された農場において、近隣他大学の農学部以外の学生を対象に農場実習教育を行った方法や教育効果について紹介した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 果樹園芸学 | 共著 | 2015年4月 | 朝倉書店 | 米森敬三　編 | 76-91頁 |
| 植物学の百科事典 | 共著 | 2016年6月 | 丸善出版 | 日本植物学会　編 | 564-565頁 |
| ミカンにかけた情熱-常世文庫と田中長三郎の足跡- | 共著 | 2019年2月 | 大阪公立大学共同出版会 | | 6～9頁 |
| 論文 | | | | | |
| Inheritance of non-pungency in 'No.3341' (Capsicum chinense). | 共著 | 2015年 | The Horticulture Journal 84. | Sota Koeda, Kosuke Sato, Rihito Takisawa, Akira Kitajima. | 323-326頁 |
| Production of tomato yellow leaf curl virus-free parthenocarpic tomato plants by leaf primordia-free shoot apical meristem culture combined with in vitro grafting. | 共著 | 2015年 | The Horticulture Journal 84. | Sota Koeda, Rihito Takisawa, Tomoyuki Nabeshima, Yuri Tanaka, Akira Kitajima. | 327-333頁 |
| A Comt1 loss of function mutation is insufficient for loss of pungency in Capsicum. | 共著 | 2015年 | American Journal of Plant Sciences. 6. | Sota Koeda, Kosuke Sato, Yuri Tanaka, Rihito Takisawa, Akira Kitajima. | 1243-1255頁 |
| Cell wall related gene expression during secondary physiological fruit drop in ponkan ( Citrus reticulata Blanco) and hyuganatsu ( C. tamurana hort. ex Tanaka). | 共著 | 2016年 | Acta horticulturae 1135. | X. Li, A. Kitajima, K. Katsura, H. Saito, S. Koeda, R. Takisawa, T. Kawai, T. Nakazaki and T. Shimizu. | 47-52頁 |
| Hybrid origins of citrus varieties inferred from DNA marker analysis of nuclear and organelle genomes. | 共著 | 2016年 | PLOS ONE DOI:10.1371 /jounal.pone. 0166969. 2016 | Shimizu, T., A. Kitajima, K. Nonaka, T. Yoshioka, S. Ohta, S. Goto, A. Toyoda, A. Fujiyama, T. Mochizuki, H. Nagasaki, E. Kaminuma and Y. Nakamura. | |
| Induction and characterization of fruit abscission during early physiological fruit drop in citrus. | 共著 | 2017年 | The Horticulture Journal 86. | Xi Li, Akira Kitajima, Tsuyoshi Habu, Keiko Kataoka, Rihito Takisawa and Tetsuya Nakazaki. | 11-18頁 |
| Anatomical observations of the citrus fruit abscission zone and morphological changes of the cells during secondary physiological fruit drop. | 共著 | 2017年 | The Horticulture Journal 86. | Xi Li, Akira Kitajima, Keiko Kataoka, Rihito Takisawa and Tetsuya Nakazaki. | 447-455頁 |
| Parthenocarpy in the tomato (Solanum lycopersicum L.) cultivar 'MPK-1' is controlled by a novel parthenocarpic gene. | 共著 | 2017年 | The Horticulture Journal 86. | Rihito Takisawa, Takayuki Maruyama, Tetsuya Nakazaki, Keiko Kataoka, Akira Kitajima. | 487-492頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Genetic identification of 'Limau Kacang' (Citrus sp.), a local mandarin cultivated in West Sumatra by sequence-related amplified polymorphism (SRAP). | 共著 | 2017年 | Fruits 72 (2). | N. Nasir, A. Takakura, A. Kitajima and M. Yamamoto. | 104-108頁 |
| Identification of QTLs controlling chilling and heat requirements for dormancy release and bud break in Japanese apricot (Prunus mume) | 共著 | 2018年 | March 2018 Tree Genetics & Genomes 14(2):33 DOI10.1007/s11295-018-1243-3 | Yuto Kitamura, Tsuyoshi Habu, Hisayo Yamane, Soichiro Nishiyama, Kei Kajita, Takuya Sobue, Takashi Kawai, Koji Numaguchi, Tetsuya Nakazaki, Akira Kitajima, Ryutaro Tao. | |
| The parthenocarpic gene Pat-k is generated by a natural mutation of SlAGL6 affecting fruit development in tomato (Solanum lycopersicum L.) . | 共著 | 2018年 | BMC Plant Biology 201818:72 DOI10.1186/s 12870-018-1285-6 | Rihito Takisawa, Tetsuya Nakazaki, Tsukasa Nunome, Hiroyuki Fukuoka, Akira Kitajima. | |
| The early flowering trait of an emmer wheat accession (Triticum turgidum L. ssp. dicoccum) is associated with the cis-element of the Vrn-A3 locus. | 共著 | 2018年 | Theoretical and Applied Genetics 131. | Kazusa Nishimura, Ryuji Moriyama, Keisuke Katsura, Hiroki Saito, Rihito Takisawa, Akira Kitajima, Tetsuya Nakazaki. | 2037-2053頁 |
| カンキツ種子に残存する胚乳の倍数性に基づく胚および配偶子の倍数性推定 | 共著 | 2018年 | 園学研. 17 (3) . | 柳本裕子・金好純子・山崎安津・北島 宣 | 293-302頁 |
| その他 | | | | | |
| (口頭発表) | | | | | |
| 単為結果性トマト'ルネッサンス'の種子形成阻害とPat-2遺伝子型との関係 | 共同 | 2015年9月 | 園芸学会秋季大会 | 滝澤理仁・林井 章・布目 司・福岡浩之・小枝壮太・中崎鉄也・北島 宣 | |
| 感染性クローンを用いたPepYLCIVのナス科植物への接種 | 共同 | 2015年9月 | 園芸学会秋季大会 | 小枝壮太・田中友理・Elly Kesumawati・中崎鉄也・北島宣・神崎真哉 | |
| 低温要求性遺伝子座同定に向けたウメ連鎖地図の構築 | 共同 | 2016年3月 | 園芸学会春季大会 | 山根久代・羽生剛・祖父江拓哉・河井崇・中崎鉄也・北島宣・田尾龍太郎 | |
| 高精度DNAマーカー分析による在来カンキツ品種の類縁関係の推定 | 共同 | 2016年3月 | 園芸学会春季大会 | 清水徳朗・北島宣・野中圭介・吉岡照高・太田智・後藤新悟・神沼英里・中村保一 | |
| 中国雲南省におけるカンキツ遺伝資源の調査 | 共同 | 2016年9月 | 園芸学会秋季大会 | 山本雅史・楊学虎・北島宣・永野幸生 | |
| 光透過型有機薄膜太陽電池の温室への設置が抑制栽培のトマト生産に及ぼす影響 | 共同 | 2017年9月 | 園芸学会秋季大会 | 間合絵里・滝澤理仁・中崎鉄也・土井元章・北島宣 | |
| 四倍体ヒュウガナツ×二倍体ブンタンによる三倍体の作出とその果実形質の変動 | 共同 | 2017年9月 | 園芸学会秋季大会 | 金好純子・柳本裕子・古田貴音・北島宣 | |
| 在来カンキツ品種の来歴と系譜から推定した日本における多様性拡大と栽培化のモデル | 共同 | 2018年9月 | 園芸学会秋季大会 | 清水徳朗・北島宣・野中圭介・吉岡照高・太田智・後藤新悟・神沼英理・中村保一 | |
| 単為結果性トマト'MPK-1'の単為結果性遺伝子の同定 | 共同 | 2018年9月 | 園芸学会秋季大会 | 滝澤理仁・中崎鉄也・布目司・福岡浩之・片岡圭子・斎藤大樹・羽生剛・北島宣 | |
| カンキツ新品種'瑞季' | 共同 | 2019年3月 | 園芸学会春季大会 | 金好純子・柳本裕子・ 北島宣・古田貴音・山崎 安津・川崎陽一郎・中野 道治・塩田勝紀・森田剛成・松下修司・中崎鉄也 | |
| カンキツ新品種'瑞季'における開花後の高温条件が無核性発現に及ぼす影響 | 共同 | 2019年3月 | 園芸学会春季大会 | 山崎安津 ・北島宣 ・金好純子 ・柳本裕子 ・中崎鉄也 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (海外調査) | | | | | |
| 中国雲南省における在来カンキツ遺伝資源の調査 | | 2015年9月 | 中国雲南省 | | |
| 台湾における在来カンキツ遺伝資源の調査 | | 2015年12月 | 台湾 | | |
| 中国内モンゴルにおける農耕地植生の調査 | | 2016年8月 | 中国内モンゴル自治区 | | |
| 台湾大学に保存されている田中長三郎カンキツ標本調査 | | 2016年12月 | 国立台湾大学 | | |
| 韓国南部における在来ユズおよびその近縁種の調査 | | 2017年5月 | 朝鮮半島南部、済州島 | | |
| インドアッサム地域における在来カンキツ遺伝資源の調査 | | 2017年12月 | インドアッサム地域 | | |
| 中国黄土高原における農耕地植生の調査 | | 2018年8月 | 中国陝西省 | | |
| ミャンマー東北部における在来カンキツ遺伝資源の調査 | | 2018年11月 | ミャンマー東北部 | | |
| カンキツの起源と分類に関する研究打ち合わせ | | 2019年1月 | フロリダ大学 | | |
| パプアニューギニア高地における在来カンキツ遺伝資源の調査 | | 2019年2月 | パプアニューギニア高地 | | |
| (研究助成) | | | | | |
| 海のカンキツロードの解明 | 代表 | 2012～2015年度 | 科学研究費　基盤(B) | | |
| 栽培ガキの起源種解明のための東アジアに分布するカキ属植物の探索とその多様性解析 | 分担 | 2012～2016年度 | 科学研究費　基盤(B) | | |
| 黄砂発生地域における表層土壌回復のための社会的経済的アプローチ | 分担 | 2014～2019年度 | 科学研究費　基盤(B) | | |
| ブンタンにおける無核紀州型無核性発現を抑制する遺伝子のマッピングとマーカー開発 | 代表 | 2015～2017年度 | 科学研究費　挑戦的萌芽 | | |
| 光透過型有機薄膜太陽電池を用いた施設園芸におけるCO2排出削減技術の開発 | 分担 | 2015～2017年度 | 環境省CO2排出削減対策強化誘導型技術開発・実証事業 | | |
| 安定生産を実現するかいよう病抵抗性を付与した無核性レモン及びブンタン新品種の開発 | 分担 | 2015～2019年度 | 農水省イノベーション創出強化研究推進事業 | | |
| カンキツの分類と種の起源・伝播の解明−田中標本の解析と人文・社会学的調査ー | 代表 | 2016～2018年度 | 科学研究費　基盤(B) | | |
| (シンポジウム) | | | | | |
| New Experimental Farm of Kyoto University Is A Museum of Tomorrow Agriculture | 招待講演 | 2015年11月 | 台湾大学 | 大学博物館交流国際シンポジウム | |
| 田中長三郎のカンキツ分類と東アジアの在来カンキツ | 招待講演 | 2016年10月 | 京都大学 | シンポジウム<br>世界的柑橘分類学者<br>田中長三郎の足跡と系譜Ⅰ | |
| 日本におけるカンキツの歴史と地域の在来カンキツ | 招待講演 | 2016年10月 | 和歌山県立自然博物館 | シンポジウム<br>世界的柑橘分類学者<br>田中長三郎の足跡と系譜Ⅱ | |
| 京大農場の概要とグリーンエネルギーファーム | 招待講演 | 2016年11月 | 京都大学 | けいはんな情報通信<br>オープンラボシンポジウム | |
| 教育関係共同利用拠点活動による地域との連携 | 招待講演 | 2017年5月 | 日本学術会議 | 全国大学農場協議会<br>教育シンポジウム | |
| 京都大学新農場における“グリーンエネルギーファーム”モデル | 招待講演 | 2017年6月 | 九州大学 | 日本学術会議シンポジウム<br>農的エネルギーの新展開 | |
| (講演) | | | | | |
| 豊かな未来を創る次世代型農業技術の開発と実証 | | 2016年6月 | けいはんなオープンイノベーションセンター | 京都スマートシティーエキスポ2016 | |
| 京大農場における研究の展開 -グリーンエネルギーファーム- | | 2017年1月 | 木津川市民図書館 | 木津川市生きがい大学<br>「教養講座」 | |
| 京大農場の概要とグリーンエネルギーファーム | | 2017年3月 | 龍谷大学 | 新無機膜研究会 | |
| 京大トマトの秘密 | | 2017年11月 | 京都大学 | 市民向けセミナー<br>京大トマトの世界 | |
| 日本の柑橘の歴史とユズの伝播の謎 | | 2019年3月 | 大阪大学 | 世界に発信、<br>箕面産実生ゆずの魅力 | |
| (テレビ)<br>EARTH Lab 次の100年を考える | | 2017年1月 | TBS | | |
| (ラジオ)<br>京からグリーンコミュニケーション | | 2017年2月 | ラジオカフェ京都 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2008年4月～2018年3月 | 国際柑橘学会日本支部会評議員 |
| 2015年1月～2018年3月 | 一般社団法人　園芸学会監事 |
| 2015年5月～2016年3月 | 木津川市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会　委員 |
| 2017年4月～2018年3月 | 木津川市農で頑張る協議会　副委員長 |
| 2017年8月～2018年3月 | 木津川市総合計画審議会　委員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 無核性カンキツ品種開発における専門的知識・技術 | |
| 単為結果性トマト品種開発における専門的知識 | |
| カンキツの起源・分類に関する専門的知識 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　講師 | 氏名　井口　博之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 穴埋め教材の作製 | 2015年4月～ | 微生物学の授業内容をまとめた教材を作製した。教材において、理解を求める重要な箇所は空欄にしてあり、授業中に学生が穴埋めの作業をすることで集中力を保つことを狙っている。また教材は教科書風の体裁で十分な説明を載せてあるので、スライド・黒板の写しに余計な時間をとられない利点があり、後の復習さらには、学生実験・卒業研究における知識の再充填にも活用可能である。 |
| チャレンジ課題 | 2016年4月～ | 教科書に沿った内容とは別に、英文和訳課題を毎回の授業で解かせるようにした。科学英語は上から下まで幅広い学力の学生が受講している。そのため、少し難易度の高い課題を解かせ、また後に解説を加えることで、上位層の学力や意欲の向上を狙い、また授業の進展に伴う受講生全般の学力向上度合いを測った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | 2019年4月 | 教科書「食品学実験・実習　第2版(青山社)」を作成し、食品衛生学実験の授業に利用した。 |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| C1微生物と植物の共生 | 共著 | 2015年8月 | シーエムシー出版・難培養微生物研究の最新技術III | 井口 博之、由里本 博也、阪井 康能 | 135-144頁 |
| 論文 | | | | | |
| Community composition and methane oxidation activity of methanotrophs associated with duckweeds in a fresh water lake. | 共著 | 2019年5月 | J Biosci Bioeng | Iguchi H, Umeda R, Taga H, Oyama T, Yurimoto H, Sakai Y. | In press |
| Pantothenate auxotrophy of Methylobacterium spp. isolated from living plants. | 共著 | 2019年3月 | Biosci Biotechnol Biochem (83巻) | Yoshida Y, Iguchi H, Sakai Y, Yurimoto H. | 569-577頁 |
| KaiC family proteins integratively control temperature-dependent UV resistance in Methylobacterium extorquens AM1 | 共著 | 2018年10月 | Environ Microbiol Rep (10巻) | Iguchi H, Yoshida Y, Fujisawa K, Taga H, Yurimoto H, Oyama T, Sakai Y. | 634-643頁 |
| Characterization of AvaR1, a butenolide-autoregulator receptor for biosynthesis of a Streptomyces hormone in Streptomyces avermitilis | 共著 | 2016年11月 | Appl Microbiol Biotechnol (100巻) | Sultan SP, Kitani S, Miyamoto KT, Iguchi H, Atago T, Ikeda H, Nihira T. | 9581-9591頁 |
| Methylovulum | 共著 | 2016年7月 | Bergey's Manual of Systematics of Archaea and Bacteria. | Iguchi H, Yurimoto H, Sakai Y. | 1-4頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Draft genomes of gammaproteobacterial methanotrophs isolated from terrestrial ecosystems | 共著 | 2015年5月 | Genome Announcements（3巻） | Richard Hamilton, K. Dimitri Kits, Victoria A. Ramonovskaya, Olga N. Rozova, Hiroya Yurimoto, Hiroyuki Iguchi, Valentina N. Khmelenina, Yasuyoshi Sakai, Peter F. Dunfield, Martin G. Klotz, Claudia Knief, Huub J. M. Op den Camp, Mike S. M. Jetten, Françoise Bringel, Stéphane Vuilleumier, Mette M. Svenning, Nicole Shapiro, Tanja Woyke, Yuri A. Trotsenko, Lisa Y. Stein, Marina G. Kalyuzhnaya | e00515-15 |
| Interactions of methylotrophs with plants and other heterotrophic bacteria | 共著 | 2015年4月 | Microorganisms（3巻） | Hiroyuki Iguchi, Hiroya Yurimoto, Yasuyoshi Sakai | 137-151頁 |
| その他 | | | | | |
| ＜学会発表＞<br>光照射により誘導される葉面細菌の色素生産 | 共著 | 2018年9月1日 | 生物工学会年次大会 | 井口 博之, 金ヶ崎 三千翔, 石井 沙弥, 田口 和真 | |
| 光に応答する葉面細菌の探索 | 共著 | 2017年8月 | 環境微生物系学会合同大会2017 | 井口 博之、金ヶ崎 三千翔、杉本 英史、田口 和真 | |
| 光受容体を介したMethylobacterium属細菌の光応答の解析 | 単独 | 2016年10月 | 微生物生態学会第31回大会 | 井口 博之 | |
| 葉上細菌Methylobacterium属の光応答性の挙動解析 | 単独 | 2016年3月 | 日本農芸化学会2016年度大会 | 井口 博之 | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2003年12月～ | 日本農芸化学会 会員 |
| 2007年6月～ | 日本生物工学会 会員 |
| 2013年6月～ | 日本微生物生態学会 会員 |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| 有用微生物のスクリーニング、微生物の培養・分離・同定、遺伝子の機能解析 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　講師 | 氏名　四日 洋和 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 講義の予習・復習をさせる工夫 | 2015年4月～ | 講義の予習や復習の習慣を持たない学生が若干いることに気づいた。毎回の講義の最後に予習と復習のプリントを配布し、次回の講義で学生に解答させ、自宅学習の習慣が身につくよう指導した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 学ぼう！食品の科学と技術<br>食品をつくる基礎知識 | 共著 | 2017年12月1日 | Mars | 四日洋和, 安達修二, 古田武 | |
| 論文 | | | | | |
| Effect of reducing oil droplet size on lipid oxidation in an oil-in-water emulsion | 共著 | 2014年7月1日 | *Japan Journal of Food Engineering*（第15巻2号） | Kikuchi K, Yamamoto S, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 43頁～47頁 |
| A simple method for determining the flaxseed or fish oil content in microcapsules prepared by spray drying | 共著 | 2014年9月1日 | *Japan Journal of Food Engineering*（第15巻3号） | Shiga H, Adachi S, Adachi S, Yoshii H | 131頁～139頁 |
| Surface-oil content of microcapsules with different oil droplet-to-microcapsules size ratio | 共著 | 2014年9月1日 | *Japan Journal of Food Engineering*（第15巻3号） | Kikuchi K, Yamamoto S, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 191頁～193頁 |
| Subcritical water treatment for producing seasoning from semi-dried Isada krill | 共著 | 2014年12月1日 | *Journal of Food Process Engineering*（第37巻） | Koomyart I, Nagamizu N, Khuwijitjaru P, Kobayashi T, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 567頁～574頁 |
| Effects of the oil-droplet size and entire oil fraction in microcapsules on the interior oil fraction | 共著 | 2015年12月1日 | *Japan Journal of Food Engineering*（第16巻4号） | Kikuchi K, Yamamoto S, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 303頁～305頁 |
| Preparation of liquid and solid seasonings with shrimp-like flavor from Isada krill under subcritical water conditions by steam injection | 共著 | 2016年2月15日 | *Food Science and Technoloty Research*（第22巻3号） | Tamiya S, Koomyart I, Kobayashi T, Shiga H, Yoshii H, Khuwijitjaru P, Adachi S | 317頁～323頁 |
| Direct treatment of Isada Krill under subcritical water conditions to produce seasoning with shrimp-like flavour | 共著 | 2016年3月16日 | *Food Technology and Biotechnology*（第54巻3号） | Koomyart I, Nagamizu H, Khuwijitjaru P, Kobayashi T, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 335頁～341頁 |
| Using severity factor as a parameter to optimize krill treatment under subcritical water conditions | 共著 | 2016年4月16日 | *Food & Nutrition Science*（第54巻3号） | Koomyart I, Nagamizu H, Khuwijitjaru P, Kobayashi T, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | 2192頁～2197頁 |
| Effects of oil-droplet diameter on the stability of squalene oil in spray-dried powder | 共著 | 2016年5月26日 | *Drying Technology: International Journal*（第34巻14項） | Asmaliza A G, Matsumura K, Yamauchi A, Shiga H, Adachi S, Izumi H, Yoshii H | 1726頁～1734頁 |
| Effect fo polydispersity in oil-droplet size on lipid oxidation in oil-in-water emulsions | 共著 | 2016年6月26日 | *Japan Journal of Food Engineering*（第17巻3号） | Miyagawa Y, Kikuchi K, Shiga H, Adachi S | 91頁～94頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Effect of different dextrose equivalents of maltodextrin on oxidation stability in encapsulated fish oil by spray drying | 共著 | 2017年1月24日 | *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry* (第81巻4号) | Asmaliza A G, Adachi S, Shiga H, Neoh T L, Adachi S, Yoshii H | 705頁～711頁 |
| Effect of oil droplet size on the oxidative stability of spray-dried flaxseed oil powders | 共著 | 2017年1月24日 | *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry* (第81巻4号) | Shiga H, Neoh T L, Ninomiya A, Adachi S, Pasten I L, Adachi S, Yoshii H | 698頁～704頁 |
| その他(総説) | | | | | |
| 噴霧乾燥食品粉末の特質 | 共著 | 2014年4月1日 | 公益社団法人 化学工学会, 化学工学 (第78巻3号) | 吉井 英文, 四日 洋和 | 193頁～195頁 |
| フレーバー(アロマ)粉末の作製とその徐放特性 | 共著 | 2015年3月1日 | 日本香料協会, 季刊 香料 (第265号) | 吉井 英文, 四日 洋和 | 21頁～29頁 |
| その他(研究助成) | | | | | |
| マイクロチャネル乳化法により作製したエマルションの酸化安定性に及ぼす油滴径の影響 | 単独 | 2015年4月1日 | 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | | |
| 澱粉等粉末被覆及び蛋白乳化剤の酵素処理によるナノ構造化機能性脂質粉末の作製と特質 | 共同 | 2015年4月1日 | 国立研究開発法人 科学技術振興機構 | 代表研究者: 吉井 英文 | |
| 抗酸化性に優れた粉末油脂の製造法の確立 | 共同 | 2015年7月1日 | 公益財団法人 三島海雲記念財団 | 代表研究者: 安達 修二 | |
| その他(学会発表) | | | | | |
| 魚油粉末の特性評価 | 共同 | 2014年8月1日 | 日本食品工学会 2014年度大会 | 四日 洋和, 足立 早映, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 油滴径／粉末径比に分布がある粉末油脂の表面油率 | 共同 | 2014年8月1日 | 日本食品工学会 2014年度大会 | 菊池 耕士, 山本 修一, 四日 洋和, 吉井 英文, 安達 修二 | |
| 乳化魚油噴霧乾燥粉末の表面油率に及ぼす賦形剤の影響 | 共同 | 2014年8月1日 | 日本食品工学会 2014年度大会 | 足立 早映, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| Encapsulation of emulsified fish oil by spray drying | 共同 | 2014年8月1日 | The 19th International Drying Symposium | Adachi S, Shiga H, Iwamoto S, Neoh T L, Adachi S, Yoshii H | |
| Effect of oil droplet size on the stability of emulsified flaxseed oil by spray drying | 共同 | 2014年8月1日 | The 19th International Drying Symposium | Shiga H, Ninomiya A, Adachi S, Neoh T L, Adachi S, Yoshii H | |
| Stability of astaxanthin during subcritical water treatment of Isada krill | 共同 | 2014年8月1日 | 日本食品科学工学会 第61 回大会 | インティラ クームヤート, 永水 宏昇, 小林 敬, 四日 洋和, 吉井 英文, 安達 修二 | |
| 乳化魚油噴霧乾燥粉末の表面油率と包括率について | 共同 | 2014年9月1日 | 化学工学会 第46回秋季大会 | 四日 洋和, 足立 早映, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| アミエビの亜臨界処理による新たな調味粉末の製造 | 共同 | 2014年11月1日 | 化学工学会 新潟大会 | インティラ クームヤート, 永水 宏昇, 小林 敬, 四日 洋和, 吉井 英文, 安達 修二 | |
| Whole utilization of Isada krill as new seasoning powders using subcritrical fluid and drying technologies | 共同 | 2014年11月1日 | 10th International Conference on Separation Science and Technology | Koomyart I, Nagamizu H, Khuwijitjaru P, Kobayashi T, Shiga H, Yoshii H, Adachi S | |
| 乳化d-リモネン噴霧乾燥粉末からのd-リモネン徐放挙動 | 共同 | 2015年3月1日 | 日本農芸化学会 2015年度大会 | 高重 至成, 四日 洋和, 吉井 英文 | |
| デキストロース当量が乳化魚油噴霧乾燥粉末の包括特性に及ぼす影響 | 共同 | 2015年3月1日 | 日本農芸化学会 2015年度大会 | 足立 早映, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 澱粉被覆噴霧乾燥粉末からのフレーバー徐法 | 共同 | 2015年8月11日 | 日本食品工学会 2015年度大会 | 高重 至成, 四日 洋和, 吉井 英文 | |
| 乳化剤カゼインのトランスグルタミナーゼ処理による乳化スクアレン粉末の物理化学的特性に及ぼす影響 | 共同 | 2015年8月11日 | 日本食品工学会 2015年度大会 | 山内 惇生, Asmalisa A G, 四日 洋和, 吉井 英文 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 亜臨界処理イサダ蒸煮液の噴霧乾燥法によるエビ風味粉末の作製 | 共同 | 2015年8月11日 | 日本食品工学会<br>2015年度大会 | 四日 洋和, インティラ クームヤート, プラモート クーウィジットジャール, 永水 宏昇 | |
| デキストロース当量が乳化魚油噴霧乾燥粉末の包括特性及び酸化安定性に及ぼす影響 | 共同 | 2015年8月11日 | 日本食品工学会<br>2015年度大会 | 足立 早映, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 澱粉で被覆した噴霧乾燥粉末からのフレーバーの徐放挙動の湿度ランプ法による測定 | 共同 | 2015年8月29日 | 日本食品科学工学会<br>第62回大会 | 高重 至成, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井英文 | |
| Effect of oil-droplet size on the stability of squalene oil in spray-dried powder | 共同 | 2015年8月10日 | Asa Pacific Drying Conference 2015 | Asmaliza A G, Matsumura K, Yamauchi A, Shiga H, Adachi S, Yoshii H | |
| 乳化*d*-リモネン噴霧乾燥粉末からの*d*-リモネン徐放挙動に及ぼす賦形剤の影響 | 共同 | 2016年3月29日 | 日本農芸化学会<br>2016年度大会 | 高重 至成, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 乳化魚油粉末の安定性(過酸化物価)に及ぼす賦形剤マルトデキストリンの影響 | 共同 | 2016年8月4日 | 日本食品工学会<br>2016年度大会 | 足立 早映, 高重 至成, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 恒温高湿条件下における澱粉被覆噴霧乾燥粉末からのフレーバー徐放挙動 | 共同 | 2016年8月4日 | 日本食品工学会<br>2016年度大会 | 高重 至成, 四日 洋和, 安達 修二, 吉井 英文 | |
| 20th International Drying Symposium IDS2016 | 共同 | 2016年8月10日 | 20th International Drying Symposium IDS2016 | Asmaliza A G, Matsumura K, Yamauch A, Shiga H, Adach S, Yoshii H | |
| 乳化*d*-リモネン噴霧乾燥粉末からの*d*-リモネン徐放速度に及ぼす賦形剤の影響 | 共同 | 2017年3月29日 | 日本農芸化学会<br>2017年度大会 | 吉井 英文, 高重 至成, 四日 洋和, 安達 修二 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 一般社団法人 日本食品工学会 | 正会員 (2013年～) |
| 公益社団法人 日本農芸化学会 | 正会員 (2013年～) |
| 一般社団法人 日本臨床栄養協会 | 正会員 (2007年～) |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

食品用の粉末香料・粉末油脂の作製に関して、技術相談・共同研究・受託研究の対応が可能です。

## バイオ環境学部　バイオ環境デザイン学科教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 大　西　　信　弘 | 423 |
| | 鈴　木　　玲　治 | 425 |
| | 田　中　　和　博 | 427 |
| 特任教授 | 金　川　　貴　博 | 428 |
| | 原　　雄　一 | 429 |
| 契約教授 | 友　松　　勝　之 | 432 |
| 准教授 | 伊　東　　和　彦 | 435 |
| | 高　澤　　伸　江 | 436 |
| | 丹　羽　　英　之 | 439 |
| 嘱託講師 | 阿　野　　晃　秀 | 443 |
| | 大　秦　　正　揚 | 446 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　大西　信弘 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ニュートン別冊、ビジュアル生物学、ニュートンプレス社、176ページ | 2016年9月5日 | イラストを中心にした紙面構成で、教養としての現代生物学を一般向けにわかりやすく解説した書。従来あるような細胞という構造から生物を理解するのでなく、遺伝子・遺伝子プール・進化の関連を図示し、生物学の基本法則から生物学を学ぶ構成になっている点が新しい。本誌では「おがわいもり」名で、生命現象のトピックにちなんだ写真提供を行うとともに、写真提供に伴い、記事内容についてもアドバイスを行った。田沼靖一監修、写真提供:おがわいもり |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| Kyoto Gakuen University, Japan. INTERNATIONAL EDUCATIONAL COLLABORATIVE NETWORKS “CHALLENGES AND OPPORTUNITIES”, British Accreditation Council, Annual Conference 2016, 14-15 Octover 2016, Ikh Zasag University, Ulaanbaatar, Mongolia | 2016年10月14日 | モンゴルの Ikh Zasag University で開催された国際的な教育における共同ネットワーク"挑戦と機会"において、京都学園大学での教育への取り組みへの事例紹介と、日本の高等教育の現状について報告した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Animals and Humans Living Together | 単 | 2014年 | Aging, Disease and Health in the Himalayas and Tibet., Rubi Enterprise, Dhaka, Bangladesh, Kiyohito Okumiya ed. | | pp. 99-101 |
| 京の筏　コモンズとしての保津川 | 共 | 2016年3月 | ナカニシヤ出版 | 手塚恵子・大西信弘・原田禎夫共編 | pp. 274 |
| ヤバい生きもの(集英社みらい文庫) | 共 | 2016年2月 | 集英社 | 小野寺 佑紀 (著), 大西 信弘 (監修), いのうえ さきこ (イラスト) | pp. 176 |
| 論文 | | | | | |
| インド、アルナチャール・プラデーシュ州、ウエスト・カメン県およびタワン県の鳥類相 | 単 | 2016年3月 | ヒマラヤ学誌. 17. 113-119 | | pp. 113-119 |
| その他(国際学会発表) | | | | | |
| Biodiversity in the paddy field of rice growing Asia | 単 | 2016年12月12日 | Myanmar Biodiversity and Wildlife Conservation Workshop, University of Yangon, Yangon, Myanmar | | |
| People's trial against decreasing the number of children and aging of society in Hozu Town, Kameoka City, Kyoto Prefecture, Japan | 単 | 2017年1月7日 | Myanmar Way of Agricultural and Rural Development (MWARD): Considering the approach of GNH, January 6th: The Hotel Amara and January 7th :YAU, Conference Room, Myanmar | | |
| Diversity of fishes in the paddy ecosystem and villager's perspective on conservation of paddy fishes in Myanmar | 共 | 2017年12月17日 | The 12th Workshop on Environment and Human Activities in South Asia Challenges to Global issues in Asia through collaboration with locally existing | Omar Myint, San San Myint & Nobuhiro Ohnishi | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| | 日本熱帯農業学会会員 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| 動物生態調査（脊椎動物） | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　鈴木　玲治 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「里山学」における指導法の工夫 | 2015年4月～ | 望ましい森林環境、望ましい農業環境やそのつながりを再生する方法について、各々の学生が国内外の学術的・実践的事例に学び、日本の将来の森林像・農業像を主体的に考察させるため、これらの内容に関連するテーマを学生一人一人に設定させ、その成果をレポートにとりまとめるとともに、口頭発表をさせている。 |
| 講義における小テストの実施 | 2013年4月～ | 講義内容の復習のため、毎回の講義開始時に、前回の講義内容を問う小テストを実施している。講義では、パワーポイントの打ち出し資料を配布しているが、学生のこまめなノート整理を促すため、直筆のノートのみ持ち込み可の小テストとしている。この結果、毎週しっかりと復習をしながらノートをまとめてくる学生数が増加し、期末試験での成績も向上した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「環境生物学実習」における植物標本の作製 | 2011年4月～ | 植物同定の基礎教育のため、京都学園大学バイオ環境園に生育する代表的な植物種の標本を作製し、検索図鑑を用いた同定実習に活用している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| .ミャンマー・バゴー山地の焼畑休閑地の植生回復を規定する要因　ーカレン村落における過去14年間のモニタリングに基づく解析ー | 共著 | 2016年3月 | 熱帯農業研究9(別1) | 鈴木玲治,竹田晋也,ニエンチャン | 36-37 |
| Assessment of biomass recovery and soil carbon storage of fallow forests after swidden cultivation in the Bago Mountains, Myanmar | 共著 | 2016年4月 | New Forests 47(4) | Nyein Chan, Shinya Takeda, Reiji Suzuki, and Sota Yamamoto | 565−585 |
| ミャンマー・カレン村落における過去 15 年間の焼畑動態と休閑地の植生回復 | 共著 | 2017年3月 | 熱帯農業研究10(別1) | 鈴木玲治,竹田晋也,ニエンチャン | 53-54 |
| その他 | | | | | |
| （国際学会発表） | | | | | |
| Fallow vegetation recovery process in relation to swidden cultivation dynamics during past 14 years in a Karen village of Myanmar | 共同 | 2016年10月 | IUFRO（国際林業研究機関連合）Regional Congress for Asia and Oceania 2016（中国北京市ナショナルコンベンションセンター） | Reiji Suzuki, Shinya Takeda, and Nyein Chan | |
| （調査報告書） | | | | | |
| （研究助成） | | | | | |
| 焼畑の技術と知恵を活かした日本の森づくりに資する実践的地域研究 | 共同 | 2011年4月<br>～2016年3月 | 文部科学省科学研究費（基盤B） | 鈴木玲治（研究代表者），黒田末壽，野間直彦，島上宗子（研究分担者），今北哲也，増田和也（連携研究者） | |
| 焼畑の在来知を活かした日本の食・森・地域の再生：地域特性に応じた生業モデルの構築 | 共同 | 2016年4月<br>～2021年3月 | 文部科学省科学研究費（基盤B） | 鈴木玲治（研究代表者），黒田末壽，野間直彦，増田和也，大石高典，島上宗子（研究分担者） | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ニューズレター) | | | | | |
| 滋賀県高島市のホトラ山 | 共著 | 2017年 | 生態人類学会ニュースレター No.23 | 黒田末寿・今北哲也・野間直彦・島上崇子・増田和也・中西康介・鈴木玲治・大石高典 | 36-38 |
| (海外調査) | | | | | |
| ミャンマー・焼畑調査 | 共同 | 2015年11月、2017年11月 | ミャンマー林業大学・森林研究所 | | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 所属学会 | 日本森林学会 |
| | 日本熱帯生態学会 |
| | 日本土壌肥料学会 |
| | 日本熱帯農業学会 |
| | 日本ペドロジー学会 |

| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| 土壌の化学分析・土壌調査 |
| 森林調査 |
| 地理情報システム・リモートセンシング |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　田中　和博 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 播種工と自然配植技術による植栽工が20年間で形成する群落構造の違い. | 共著 | 2015年 5月 | 日本緑化工学会誌(第40巻第4号) | 嶌田知帆、長島啓子、榊原菜々、高田研一、田中和博 | 547頁～554頁 |
| 自然配植技術による植栽後約20年が経過した法面の林分構造 －周辺自然林との類似性－ | 共著 | 2015年 8月 | 日本緑化工学会誌(第41巻第1号) | 榊原菜々、長島啓子、嶌田知帆、高田研一、田中和博 | 109頁～114頁 |
| Classifying Managed and Unmanaged Bamboo Forests using Airborne LiDAR Data. | 共著 | 2016年 4月 | Journal of Forest Planning Vol. 21 | Keiko Nagashima, Yukihiko Kinami and Kazuhiro TANAKA | 13頁～20頁 |
| The Differences of the Light Environment Established in 20 Years between the Monolayered Sowing Slope and the Multilayered Mixed-species Plantation Slope. | 共著 | 2017年 4月 | Journal of Forest Planning Vol. 22 No1 | Chiho Shimada, Keiko Nagashima, Kennichi Takada, Kazuhiro Tanaka | 15頁～21頁 |
| 地上型レーザースキャナーを用いた森林計測の精度検証. | 共著 | 2018年 4月 | 森林計画学会誌(第51巻第2号) | 川北憲利、長島啓子、田中和博 | 47頁～56頁 |
| LiDAR Introduces Revolutionary Changes in Its Approach to Forest Management. | 単著 | 2018年 4月 | Journal of Forest Planning Vol. 22 No2 | | 39頁～46頁 |
| 低規格高密度路網による小規模搬出間伐システムのコスト, 生産性および採算性. | 共著 | 2019年 4月 | 森林計画学会誌(第52巻第2号) | 長島啓子、吉永 生、田中和博 | 67頁～74頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 森林計画学会 | 会長(2014年度～16年度) |
| 日本学術会議 | 連携会員、林学分科会　幹事 |
| 文化庁　文化審議会 | 文化財分科会　第三専門調査会　文化的景観委員会　委員 |
| 京都府　森林審議会 | 委員 |
| 京都府　環境影響評価専門委員会 | 委員 |
| 京都モデルフォレスト協会 | 理事(2018年度まで) |
| 京都伝統文化の森推進協議会 | 理事 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

GIS(地理情報システム)を用いた森林ゾーニングの考え方

市町村森林整備計画の作成に関する考え方

地域森林調査に関する調査方法、解析方法、評価方法に関する考え方

Strolyマップを活用したスマホで現在地と観光情報が閲覧可能なウォーキングマップの作り方

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　金川　貴博 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 小テストの活用による学生の理解度のチェック | 2014年4月～ | 5回ほどの授業の後に20分程度の小テストを行い、学生に復習を促すとともに、講義が理解できているかをチェックしている。学生の理解が不足していると判明した部分については、補足説明を行って、理解度を上げるようにしている。 |
| 「学生実験」での実験レポートの書き方の指導 | 2008年4月～ | 学生実験については、毎回、実験レポートをその日のうちに書かせて提出させ、次回の実験時に返却して、書き方の良かった点と悪かった点を指摘して、文書を書く技術の向上に努めている。すべて、きちんとした文書で書くように指示し、社会で通用する文章力を身につけることと、論理的な文章の組み立てができることを目標にしている。 |
| 「学生実験」での共同作業によるコミュニケーション力の向上と、内容の理解度の向上 | 2008年4月～ | 実験では、4～6人ごとに班分けを行い、各班で協力して実験を行うだけでなく、計算問題を出して、協力しながら問題を解くように指導している。これによって、学生のコミュニケーション力の向上はかり、また、理解不足の部分について、教員からの指導だけでは理解に結びついていない部分を、学生同士の話し合いを通じて理解に結びつけるようにしている。また、上級生をTAとして配置し、上級生に相談して問題を解くことで、内容の理解に結びつけるようにしている。 |
| 私語への対応 | 2008年4月～ | 授業内容に即した教材を準備しておき、私語をしている学生がいると、マイクを渡してその教材を読ませるようにしている。これを行うことで、私語が非常に少なくなった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 「ありがとう、微生物たち」（リーダーズノート社） | 2015年9月 | 自然環境中での微生物の役割、微生物を利用した廃水処理や悪臭ガス処理、環境微生物の概要、微生物集団の分析方法などを解説した本で、教科書として授業に使用している(2013年に東洋書店から出版したが、東洋書店の倒産により、リーダーズノート社から2015年に再販売)。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| ありがとう、微生物たち | 単 | 2015年9月 | リーダーズノート社 | | pp.236 |
| 共生微生物 | 共 | 2016年10月 | 化学同人 | 20章「環境微生物総論」を単独執筆した。<br>編集：大野博司<br>著者：金川貴博 | pp.226-236 |
| 論文 | | | | | |
| 複雑な微生物系に挑む | 共 | 2019年7月 | 生物工学　第97巻 第7号 | | |
| その他 | | | | | |
| （雑誌記事）<br>拡散する遺伝子組み換え作物　迫る遺伝子汚染の恐怖 | 単 | 2016年1月 | 「食べもの通信」<br>2016年1月号 | | pp. 38-39 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2009年8月～現在（2019年9月まで） | 亀岡市循環社会推進審議会会長 |
| 2011年5月～現在（2020年5月まで） | 丹波畜産に係る環境保全委員会副委員長 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

廃水処理技術、悪臭処理技術、微生物集団の解析技術、特定DNAの検出・解析技術

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　原　雄一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | 2006年4月～ | 1つの授業の中に、(講義)、見る(環境ビデオ)、話す(文献を読む)、書く(小レポート)を取り入れる。 |
| | 2007年4月～ | NHKや民放で放映された環境関連の映像をデータベース化し、授業中もしくは放課後に教育の一環として使用している。 |
| | 2008年5月～ | 京都市内や亀岡市内において、講義との関連性がある施設やコースを取り入れたフィールドワークを春と秋の学期ごとに実施している |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | 2014年3月 | かめおか里道トレイルマップ(ミウラ折) |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2013年4月11日 | 京の水辺と歴史探索フィールドワーク |
| | 2013年12月7日 | 京の水辺と歴史探索フィールドワーク |
| | 2013年12月21日 | 草津川天井川フィールドワーク |
| | 2014年3月5日 | 亀岡から高槻、ポンポン山経由フィールドワーク |
| | 2014年4月12日 | 京の水辺と歴史探索フィールドワーク |
| | 2014年6月7日 | 保津峡から愛宕山フィールドワーク |
| | 2014年7月6日 | 野麦峠フィールドワーク(1泊2日) |
| | 2014年11月1日 | 大分フットパス・オルレ・トングトレイルフィールドワーク(2泊3日) |
| | 2014年11月15日 | 生駒縦走路(高安山から阪奈道路)フィールドワーク |
| | 2014年11月30日 | 京都清水五条フィールドワーク |
| | 2015年1月18日 | 生駒縦走路(阪奈道路から津田)フィールドワーク |
| | 2015年2月15日 | 京都一周トレイル(伏見稲荷から銀閣寺)フィールドワーク |
| | 2015年3月15日 | 京都一周トレイル(銀閣寺から大原)フィールドワーク |
| | 2015年4月5日 | かめおか里道トレイル開通記念ウォーク |
| | 2015年4月19日 | 京都一周トレイル(大原から京見峠)フィールドワーク |
| | 2015年4月18日 | 京都水辺歴史と文化フィールドワーク |
| | 2015年4月19日 | 京都一周トレイル(大原から京見峠)フィールドワーク |
| | 2015年5月9日 | 日本ハンザキ研究所フィールドワーク |
| | 2015年5月10日 | かめおか里道トレイルフィールドワーク |
| | 2015年5月24日 | 京都御土居フィールドワーク |
| | 2015年9月27日 | 奈良大仏鉄道フィールドワーク |
| | 2015年10月31日 | 芦生の森フィールドワーク |
| | 2015年11月7日 | 生駒全縦走フィールドワーク |
| | 2015年12月19日 | 京都一周トレイルフィールドワーク |
| | 2016年1月16日 | 本能寺の変唐櫃越えフィールドワーク |
| | 2016年1月30日 | 京都綾部レッドデータフィールドワーク |
| | 2016年3月26日 | 本能寺の変　明智越えフィールドワーク |
| | 2016年4月9日 | かめおか里道トレイルフィールドワーク |
| | 2016年4月16日 | 京都水辺歴史と文化フィールドワーク |
| | 2016年4月23日 | 鯖街道フィールドワーク |
| | 2016年5月21日 | 六甲山フィールドワーク |
| | 2016年8月10日 | 赤目四十八滝オオサンショウウオセンターの見学フィールドワーク |

| | | |
|---|---|---|
| その他教育活動上特記すべき事項（続き） | 2016年8月31日 | おおい町学生まちづくり政策コンテストフィールドワーク |
| | 2016年11月5日 | 京都綾部市の限界集落への挑戦、トチノ実に託した集落の女性の戦いの現場を訪問する旅 |
| | 2016年11月6日 | 知財活用アイデアコンテスト発表会 |
| | 2016年11月19日 | 福知山線武田尾、武庫川上流の紅葉に包まれるトンネル、橋梁、線路敷を歩く廃線跡の旅 |
| | 2016年12月3日 | 洞峠開削（かつての街道を蘇らす）フィールドワーク |
| | 2016年12月7日 | 京の水辺散策（京町家から南禅寺まで）フィールドワーク |
| | 2016年12月11日 | 南丹市美山町茅葺きの里フィールドワーク |
| | 2016年12月17日 | 西の鯖街道の堀越峠フィールドワーク |
| | 2017年1月21日 | おおい町学生政策コンテスト最終発表会 |
| | 2017年4月15日 | 桜満開横断幕プロジェクトとかめおか里道新入生歓迎フィールドワーク |
| | 2017年5月17日 | 日本縦断歴史街道走り旅横断幕プロジェクト |
| | 2017年5月13日 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017/7/1-7/2 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017年7月15日 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017年7月29日 | おおい町名田庄八ヶ峰フィールドワーク |
| | 2017/9/4-6 | 4大学連携フィールドワーク |
| | 2017年9月9日 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017年9月16日 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017年11月5日 | 近江八幡レンガ工場フィールドワーク |
| | 2017年11月11日 | 綾部市古屋フィールドワーク |
| | 2017年11月18日 | 保津川下りフィールドワーク |
| | 2017年11月23日 | 保津小橋横断幕プロジェクト |
| | 2017年12月23日 | 北陸本線廃線跡フィールドワーク |
| | 2018年3月7日 | おおい町政策発表会 |
| | 2018年4月14日 | 京の水辺と歴史探索フィールドワーク |
| | 2018年5月12日 | 亀岡市長・職員と歩くかめおか里道トレイル |
| | 2018年5月13日 | 奈良公園糞虫調査フィールドワーク |
| | 2018年5月20日 | 廃村八丁フィールドワーク |
| | 2018年6月2日 | 西の鯖街道シンポジウム |
| | 2018年6月9日 | トロ峠フィールドワーク |
| | 2019年5月11日 | かめおか里道トレイルフィールドワーク |
| | 2019年5月1日 | 奈良公園糞虫調査フィールドワーク |
| | 2019年6月22日 | 福知山毛原の棚田1000年集落フィールドワーク |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| かめおかグリーンマップの作成<br>－里道ネットワークが結ぶ自然・水辺・暮らし－ | 共 | 2011年10月 | 地理情報システム学会<br>第20回研究発表大会 | 原　雄一、片山　篤 | CDROM版 |
| かめおか里道トレイル＆グリーンマップ | 共 | 2013年4月 | 日本国際地図学会 | 原　雄一 | |
| 日本列島の流域区分と中央分水嶺の抽出<br>－中央分水嶺ロングトレイル構想に向けて－ | 共 | 2013年10月 | 地理情報システム学会<br>第22回研究発表大会 | 原　雄一、片山　篤 | WEB発表 |
| 琵琶湖淀川流域を対象とした流域診断手法の開発とクラウドGISによる情報共有－日本版Surf Your Watershedを目指して－ | 共 | 2014年11月 | 地理情報システム学会<br>第23回研究発表大会 | 原　雄一、佐藤裕一、片山　篤 | CDROM版 |
| クラウド道コモンズが誘う歩くツーリズム | 単 | 2015年5月 | ESRIジャパン<br>第11回GISコミュニティーフォーラム | 原　雄一 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| クラウドGISによる全国の河川・流域情報の携帯端末での表示<br>－中央分水嶺ロングトレイル構想に向けて－ | 単 | 2015年10月 | 地理情報システム学会<br>第24回研究発表大会 | 原　雄一 | WEB発表 |
| 日本列島縦断歴史街道の ルート設定とクラウド化 | 単 | 2017年3月 | 日本地理学会春季大会 | 原　雄一 | |
| クラウド川コモンズによる河川・流域名の可視化システムの構築 | 単 | 2017年10月 | 地理情報システム学会<br>第26回研究発表大会 | 原　雄一 | |
| クラウドGISによるロストラインツーリズム | 単 | 2017年9月 | 日本地理学会秋季大会 | 原　雄一 | |
| 長距離自然歩道のクラウドGISによるナショナルトレイル構想 | 単 | 2018年3月 | 日本地理学会春季大会 | 原　雄一 | |
| 京都を学ぶ（丹波編）<br>文化資源を発掘する | 分担執筆 | 2018年3月 | ナカニシヤ出版 | 金田章裕・藤原英城　編集 | 18頁～21頁<br>102頁～103頁<br>186頁～187頁 |
| 電子地図を活用した道迷いによる山岳遭難の防止 | 単 | 2018年8月 | 日本地図学会 | 原　雄一 | |
| 地図アプリで歩く歴史・文化・自然の道「オルレ」 | 単 | 2018年9月 | 日本地理学会 | 原　雄一 | |
| 地図アプリで歩く鉄道廃線跡100選 | 単 | 2018年10月 | 地理情報システム学会 | 原　雄一 | |
| 地図アプリで歩く地域再発見の道「フットパス」 | 単 | 2019年3月 | 日本地理学会 | 原　雄一 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2000年4月～2017年3月 | 水文・水資源学会会員 |
| 2003年4月～ | 地域自然情報ネットワーク理事 |
| 2003年4月～ | GIS（地理情報システム）学会会員 |
| 2007年4月～ | 環境アセスメント学会会員 |
| 2007年4月～ | 水資源・環境学会会員 |
| 2009年4月～2011年3月<br>2012年2月～2013年3月 | 琵琶湖流域管理シナリオ研究会座長 |
| 2011年6月～2012年6月 | 京丹波町鳥インフルエンザ農地跡地構想会議座長 |
| 2014年6月 | 亀岡市小水力発電ポテンシャル検討委員会 |
| 2018年1月～ | 日本地図学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| 地域再生・まちづくり |
| クラウド技術を用いた地図アプリの開発 |
| 鉄道廃線跡の利活用 |
| 街の活性化マップ作成、ロングトレイルなどハイキングマップ作成 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　契約教授 | 氏名　友松　勝之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「理科教育法Ⅰ」「理科教育法Ⅱ」「理科教育法Ⅲ」「理科教育法Ⅳ」の指導方法の工夫 | 2015年4月～ | ①個別・ペアワーク・グループワーク・一斉等多様な学習形態の効果的な用い方を体感させ、それを活用したマイクロティーチング、②簡易な方法やマイクロスケールによる実験、及びその教具づくりを取り入れ、学生自らが操作や結果の処理、考察・推論、表現を体験し、効果的な指導方法を考える授業、③学習効果を高めるためにはどのようにICTを活用するか学生自らが体験し改善を図る授業など、実践的な理科指導力の育成に努めている。 |
| 「教育実習事前指導Ⅰ」「教育実習事前指導Ⅱ」の指導方法の工夫 | 2015年4月～ | 教育実習の前年に、全ての履修学生に50分の模擬授業を年3回以上（うち1回は観察・実験または実習）行なわせ、教材研究、教具の作成、補助資料の選定、予備実験、安全の確認、学習指導案作成、実際の理科の指導、授業内での評価とその対応などを通して、中高生の多様な状況に対応できる学習指導の実践的能力の形成を図っている。また、模擬授業後の自己評価、相互評価を十分に行うことにより、学生自らが主体的に工夫・改善できるように授業の展開を工夫している。またビデオを活用し、自らの授業を客観的にかつ多面的に考察させる指導を行っている。 |
| 「教育実習A」「教育実習B」の指導方法の工夫 | 2017年4月～ | 日々の教育活動や服務・職務について、基本的な事柄を身に付けさせるため、教科指導の基本的な考え方、授業づくりの基本、授業・学習指導の基本技術、学習指導案の作成等学習指導に関わること、学級経営や生徒指導、健康安全に関する指導、人権教育等領域の指導、家庭・地域連携まで学校教育の内容を、具体例・実践例をもとに討論やディベート、ブレインストーミング・KJ法など多様な方法を用いて、学生自らに期待される教職員像を考えさせ、教員としての資質・能力を培うように努めるとともに、それぞれの課題に効果的な話し合いの方法を身に付けさせるようにしている。 |
| 「教育制度論」の指導方法の工夫 | 2018年4月～ | 多様なグループワークを取り入れて、学生が主体的に調べ、発表及び聴取し、取捨選択して整理し、内容を深め、共有する学習方法を取り入れ、問題解決能力や、聞く能力、分析・判断力（論理的思考力）、表現力、協働力などが向上するように指導方法を工夫している。 |
| 学習意欲を高め、主体的に学びを深める工夫 | 2015年4月～ | 授業の初めに、1週間の教育時事、自然科学、研究開発などに関わる記事を紹介し、それを中学校・高等学校の授業でどのように扱うか生徒自身に考えさせている。また、教具の製作からその操作まで体験させ、工夫点、改善点まで考えさせることにより、理科指導への関心を高め、学生自らが主体的に学べるように授業展開を工夫している。 |
| 教科等の実践的な指導力を向上させる工夫 | 2015年4月～ | 理科教育法Ⅰ～Ⅳにおけるマイクロティーチングやレポート発表、教育実習事前指導Ⅰ・Ⅱにおける模擬授業を実践させ、自己評価、他の学生からの相互評価、教員による評価の後、自分の学習指導や発表のビデオを視聴し、再度改善が図れるように工夫している。また、模擬授業においては実験室での観察・実験及び学生が工夫したマイクロスケール実験を必ず指導させ、理科の実践的指導力の向上に努めている。 |
| 学習内容の定着を図る工夫 | 2015年4月～ | 授業の理解度・定着度を測るため、毎時間、授業の終わりに「授業のふりかえり」を記入させている。その状況を分析し、次時の授業内容、指導方法の工夫改善している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 理科指導における課題 | 2016年3月 | 全国学力学習状況調査（理科）の分析による理科の指導方法の工夫 |
| 連携型小中一貫教育理科カリキュラム | 2016年5月 | 効率よく効果的に学習指導できるように小学校3年生から中学校3年生までの指導内容の重なりやスパイラル構成などを明示 |
| 簡易な方法による実験やマイクロスケールによる実験 | 2017年3月 | 容易にイメージ化するための教材・教具や簡単に製作できる教具の開発と、生徒一人一人が実験に参加できるようにマイクロスケール化した実験方法のの工夫 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 亀岡市教育研究所講座<br>「教師のためのかめおか学」 講師 | 2015年5月 | 初任者、転入者を対象に、ふるさと学習の目指す目標、基本的な考え方及び実践例を紹介 |
| 亀岡市教育研究所講座<br>「中学校の学力向上」 講師 | 2015年11月 | 中学校教務主任を対象に全国学力学習状況調査や京都府学力診断テストの分析や心理学や脳科学などの科学的根拠を基にした学力向上を図るための考え方や手法、教務主任の役割について講演 |

| | | |
|---|---|---|
| 亀岡市教育研究所講座<br>「かめおか学Ⅲ」 講師 | 2015年11月 | ふるさと学習「かめおか学」の担当者を対象に、亀岡市の自然、文化、歴史や市内のものづくりの企業等を紹介し、キャリア教育と関連付けた学習展開と児童生徒の学習意欲向上の関係について講演 |
| 亀岡市教育研究所講座<br>「小学校授業づくりⅣ」 講師 | 2015年12月 | 小学校の児童の学力を向上させるための基本的な学習指導の考え方と指導方法、中学校との連携による効率亭効果的な指導計画や指導方法について講演 |
| 亀岡市教育研究所講座<br>「小・中学校学年主任研修Ⅱ」 講師 | 2016年1月 | 小学校・中学校の学年主任を対象に学年経営・学校経営の基本的な考え方と、教育課題克服のための方策について具体例を挙げて説明 |
| 亀岡市教育研究所講座<br>「小・中学校理科授業づくり」 講師 | 2016年5月、9月、10月、<br>12月、2月 | 疑問や悩みの解決と学力向上を図ることをテーマにして、理科教員の負担を削減するための簡易に製作できる教材・教具、児童生徒が主体的意欲的に学習するためのマイクロスケール実験の教材・教具など指導に生かす内容を講演 |
| 亀岡市教育研究所主催<br>「サイエンス・フレンズ」 講師 | 2017年12月<br>2018年 9月<br>2019年 3月 | 小学生3年生から中学生40名に家庭にあるものを用いた実験及びものづくりを指導(電気と磁界、光、還元、塩化、ゲル化、クロロフィル等) |
| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 教育実習生への指導 | 1984年4月～2015年3月 | 公立中学校・高等学校教員として大学生・院生に教科指導、学級指導、各領域・分掌にかかわる内容について毎年指導 |
| 京都府総合教育センター研修・支援部長 | 2007年4月～2010年3月 | 京都府の教職員研修および学力向上に関する調査研究、京都府小・中学校学力診断テストを企画・運営・分析、その成果を他の小・中学校へ波及。また、京都府小・中学校学力診断テストおよび全国学力学習状況調査の分析ソフトを開発、各校、各市町教育委員会での分析を支援 |
| 京都府中学校教育研究会への参加 | 2012年4月～2015年3月 | 会長として組織を運営をし、各教科・領域の研究大会に参加 |
| 京都府教育委員会研究指定校への関与 | 2015年～2018年 | 「子どもの貧困」問題解消のための研究指定校の児童生徒の実態把握、効果の検証のための調査に協力 |
| 亀岡市教育委員会指導主事 | 2015年4月～2016年3月 | 亀岡市の教職員研修および学力向上に関する調査研究を企画・運営、その成果を他の小・中学校へ波及 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 亀岡市教育研究所調査研究活動研究のまとめ | 単著 | 2016年3月 | 亀岡市教育研究所 | | 全73頁 |
| 連携型小中一貫教育理科カリキュラム | 単著 | 2016年5月 | 亀岡市教育研究所 | | 全37頁 |
| 論文 | | | | | |
| 理科指導における課題 | 単著 | 2016年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第17号 | | 44～50頁 |
| 校種間連携による効果的な理科指導の研究－「イメージ化」とマイクロスケール実験を例として－ | 単著 | 2017年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第18号 | | 49～54頁 |
| 理科教育における「主体的・共同的な深い学び」の実践－マイクロスケール実験化を例にして－ | 単著 | 2018年3月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報第19号 | | 47～52頁 |
| その他 | | | | | |
| 京都府教育委員会事務局優良職員表彰(全国学力学習状況調査分析ソフトの開発・製作・配布) | | 2009年6月 | 京都府教育委員会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 京都府中学校教育研究会会長 | 2012年4月～2015年3月 |
| 京都府公立高校入試プロジェクト会議委員 | 2012年4月～2014年3月 |
| 京都府教科用図書選定審議会委員 | 2013年4月～2013年8月 |

| | |
|---|---|
| 京都府産業教育審議会農業教育に関する専門部会委員 | 2013年4月～2014年1月 |
| 亀岡市中学校長会会長 | 2013年4月～2015年3月 |
| 亀岡市学力向上対策委員会委員 | 2013年4月～2015年3月 |
| 亀岡市小中一貫教育研究会委員 | 2013年4月～2015年3月 |
| 亀岡市人権啓発雇用促進協議会幹事 | 2013年4月～2015年3月 |
| 亀岡市地域連携型小中一貫教育推進委員会委員長 | 2014年4月～2015年3月 |
| 亀岡市学校規模適正化検討会議委員 | 2014年8月～2015年3月 |
| 亀岡市図書館協議会委員 | 2015年1月～2015年3月 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

・小・中・高等学校理科教育（指導方法、教材・教具の開発・作成など）
・学力向上の取組（学力分析、対策方法、小・中・高連携による取組など）
・キャリア教育（内容、地域や企業・大学等との連携など）
・ふるさと学習（他の教科・領域との関わり、指導内容など）
・学級経営（児童生徒の分析の方法、取組など）
・学校経営・運営や研究・研修に関わること（カリキュラムマネージメント、人材育成など）

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　伊東　和彦 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 太陽炉を利用したマグネシウムによる二酸化ケイ素の還元とその教材化 | 共 | 2016年 | 科学教育研究, 第40巻 | 植田　和利, 伊東　和彦, 上原　誠一郎, 宮崎　一博, 佐藤　博樹 | 39頁-45頁 |
| ミニ太陽炉の政策と金属化合物の還元への利用 | 共 | 2016年 | 科学教育研究, 第40巻 | 植田　和利, 伊東　和彦, 上原　誠一郎, 佐藤　博樹 | 334頁-340頁 |
| 太陽炉を利用したマグネシウムによる二酸化ケイ素の還元と その教材化(2) ―ケイ素の同定実験と授業実践― | 共 | 2019年 | 科学教育研究, 第43巻2号 | 植田　和利, 伊東　和彦, 上原　誠一郎 | 1頁-8頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1986年9月～現在 | 日本地震学会会員 |
| 1989年10月～現在 | 日本高圧力学会会員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

結晶工学(合成、解析、分析)

高温高圧下での固体物性測定

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　高澤 伸江 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| プレゼンテーション用ワイヤレスマイク・ワイヤレスプレゼンターの活用 | 2016年4月～ | パワーポイントなどのコンピュータを用いることの一つの弊害は、コンピュータにずっと教員が張り付いていなければならないことである。そこで、プレゼンテーション用ワイヤレスマイク・ワイヤレスプレゼンターを用いることで、授業中に自由な場所からコンピュータを操作できるようにした。授業中に教室を巡回し、学生の学習進捗状況を観察している。 |
| ノートの取り方が上手になるための工夫 | 2016年4月～ | 手書きでノートを取らない学生が多くみられる。普段からメモをとる習慣がない学生も多い。この原因の一つにノートの取り方がわからない学生がいると思われる。そこで、パワーポイントスライドにノートの画像を貼り付け、そこにアニメーションでノートに書いてほしいことを映して、学生にノートの作り方のヒントを示している。 |
| 理解を深めるための工夫 | 2016年4月～ | 講義の始めに前回の授業内容を簡単に復習するとともに、その後の講義においても、以前取り上げた内容に絡ませながら新しい内容へ展開するようにしている。このことにより、重要な項目については何度も思い返す機会があるように努めている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 水環境化学 | 2018年7月 | 水環境化学について理解を深めることを目的に、教材「水環境化学」を作成した。これまで水環境化学について特に海洋分野と淡水分野をまとめたような教科書は存在しなかったが、当該教材はそれらのエッセンスをまとめたものであり、「水環境化学」の授業時に使用されている。 |
| 化学演習 | 2019年2月 | 基礎的な理論化学を学修してもらうため、演習問題を中心に、学生が個人で学修を進められる教材を作成した。本学の大多数の学生のレベルにあっていると考える。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 観測技術・安全・研究指導 | 2012年5月～<br>(他3回)<br><br>2013年12月～<br>(他3回) | 東京海洋大学「海鷹丸」および「神鷹丸」に乗船し東日本大震災後の福島県沖放射能汚染の調査航海に参加.「沿岸観測実習」の指導補助として，観測機器類の操作指導や安全管理，化学分析指導を行った.<br><br>福島県漁船(弘明丸)に乗船し放射能汚染に関する研究の指導にあたるとともに，陸上におけるデータ解析指導，研究指導にあたった. |
| 他大学実習の紹介 | 2016年4月～ | 本学の設備では不可能な実習に関して、他大学で実施される公開実習・共同利用実習を積極的に学生に紹介し、学生が様々なことにチャレンジする機会を示している。 |
| 観測技術・安全・研究指導 | 2019年4月 | 東海大学「望星丸」に乗船し、観測機器類の操作指導や安全管理，化学分析指導を行った. |

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| Growth and distribution patterns of Roseobacter/Rhodobacter, SAR11, and Bacteroidetes lineages in the Southern Ocean | 共著 | 2013年1月 | Polar Biology, 36 | Tada, Y., R. Makabe, N. Kasamatsu-Takazawa, A. Taniguchi, and K. Hamasaki | p691-p704 |
| Ecological study of bacterial populations related to biogenic gas transformation in marine environments | 共著 | 2014年3月 | Western Pacific Air-Sea Interaction Study. Eds. M. Uematsu, Y. Yokouchi, Y.W. Watanabe, S. Takeda, and Y. Yamanaka, TERRAPUB, Tokyo | Hamasaki, K., R. Kaneko, A. Mouri, Y. Tada, N. Kasamatsu-Takasawa, and I. Nagao | p203-p209 |
| Radioactive cesium concentrations in coastal suspended matter after the Fukushima nuclear accident | 共著 | 2018年 | Mar Pollut Bull. 131(Pt A) | Kubo, A., K. Tanabe, G. Suzuki, Y. Ito, T. Ishimaru, N. Kasamatsu-Takasawa, D. Tsumune, T. Mizuno, Y. W. Watanabe, H. Arakawa, and J. Kanda | p341-p346 |
| Mechanisms of radiocesium depuration in Sebastes cheni derived by simulation analysis of measured 137Cs concentrations off southernFukushima 2014-2016 | 共著 | 2019年 | J. Environ. Radioact., 203 | Ishimaru, T., Y. Tateda, D. Tsumune, M. Aoyama, Y. Hamajima, N. Kasamatsu, M. Yamada, T. Yoshimura, T. Mizuno, and J. Kanda | p200-p209 |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| (研究助成)<br>藻類の耐氷性に関する研究 | 個人 | 2016年4月～<br>2018年3月 | 情報・システム研究機構<br>国立極地研究所 | | |
| (研究助成)<br>植物プランクトンの冷温適応に関する研究 | 個人 | 2018年4月～<br>2021年3月 | 情報・システム研究機構<br>国立極地研究所 | | |
| (研究分担)<br>日本南極地域観測　基本観測(海洋物理・化学) | 分担 | 2013年6月～<br>2016年3月 | 文部科学省 | | |
| (共同研究)<br>南大洋インド洋区における海洋生態系研究 | 協働 | 2016年4月～<br>2023年3月 | 情報・システム研究機構<br>国立極地研究所 | | |
| (報告)<br>Report of seabird observations in the Indian sector of the Southern Ocean during the austral summers of 2005-2008 | 共著 | 2013年12月 | Czech Polar Reports, 3 | Iwata, T., T. Hayashi, and N. Takasawa-Kasamatsu | p82-p86 |
| (報告)<br>Oceanographic data of the 52nd Japanese Antarctic Research Expedition (JARE) acquired on board the training and research vessel, Umitaka Maru in the Indian sector of the Southern Ocean during 2010/2011 austral summer | 共著 | 2014年3月 | JARE Data Reports, 327 (Oceanography 47) | Moteki, M., K. Shimada, T. Iida, N. Takasawa, Y. Kitade, F. Hashihama, K. Amakasu, Y. Kasajima, A. Ono, T. Hosaka, K. Uchiyama, A. Kitazawa, H. Yonemoto, T. Miyazaki, C. Sekiya, M. Sakaguchi, Y. Kurihara, Y. Kitano, H. Fujiwara, K. Katsumi, and T. Ishimaru | p1-p15 |
| (報告)<br>Plankton sampling by the training vessel Umitaka-maru in the Indian sector of the Southern Ocean in the austral summer of 2011/2012 | 共著 | 2016年2月 | JARE Data Report, 346 (Marine Biology 54) | Sakurai, H., K. Amakasu, K. Uchiyama, N. Kasamatsu-Takasawa, H. Watanabe, A. Ono, R. Toda, M. Moteki, T. Ishimaru, K. T. Takahashi, T. Iida, R. Makabe, T. Odate, and A. Tanimimura | p1-p15 |
| (報告)<br>Plankton sampling by the training vessel Umitaka-maru in the Indian sector of the Southern Ocean in the austral summer of 2012/2013 | 共著 | 2016年 | JARE Data Report, 348 (Marine Biology 56) | Sakurai, H., K. Uchiyama, K.Shimada, T. Iwata, N. Kasamatsu-Takasawa, H. Watanabe, A. Ono, A. Tachibana, N. Miyazaki, M. Ojima, Y. Kitade, M. Moteki, T. Ishimaru, K. T. Takahashi, T. Iida, R. Makabe, T. Odate, and A. Tanimimura | p1-p15 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (以下、学会発表) | | | | | |
| Distribution of seabirds associated with oceanoghaphic features off Wilkes Land | 共著 | 2013年7月 | Southern Ocean. XI SCAR Biology Symposium, COSMOCAIXA, Barcelona, Spain | Iwata, T., K. Shimada, A. Tachibana, N. Kasamatsu-Takasawa, K. Sato, T. Miyazaki, J. Kanda, and M. Moteki | |
| Environmental determinants of seabird distribution in Wilkes Land, Southern Ocean | 共著 | 2013年11月 | The Fourth Symposium on Polar Science, NIPR, Tachikawa, Japan | Iwata, T., K. Shimada, A. Tachibana, N. Kasamatsu-Takasawa, K. Sato, K. Amakasu, T. Miyazaki, J. Kanda, and M. Moteki | |
| 2013年の福島沿岸域における海水および堆積物中に含まれる放射性セシウム濃度分布とその挙動 | 共著 | 2014年3月 | 第15回環境放射能研究会, 高エネルギー加速器研究機構, つくば, 茨城 | 福田美保, 青野辰雄, 吉田聡, 長沼翔, 久保篤史, 嶋田啓資, 高澤伸江, 保坂拓志, 佐藤憲一郎, 山口征矢, 伊藤友加里, 石丸隆, 神田穣太 | |
| 福島沿岸域における海底堆積物中の放射性セシウム濃度分布とその要因 | 共著 | 2014年3月 | 日本海洋学会2014年度春季大会, 東京海洋大学品川キャンパス, 港区, 東京 | 福田美保, 青野辰雄, 吉田聡, 長沼翔, 久保篤史, 嶋田啓資, 高澤伸江, 保坂拓志, 佐藤憲一郎, 山口征矢, 伊藤友加里, 石丸隆, 神田穣太 | |
| 2014 年5 月の福島沿岸域の堆積物中の放射性セシウム濃度の粒径別分布 | 共著 | 2015年3月 | 第16回環境放射能研究会, 高エネルギー加速器研究機構, つくば, 茨城 | 福田美保, 山崎慎之介, 青野辰雄, 吉田聡, 長沼翔, 久保篤史, 嶋田啓資, 高澤伸江, 保坂拓志, 佐藤憲一郎, 山口征矢, 伊藤友加里, 石丸隆, 神田穣太 | |
| 福島沿岸域における堆積物中の放射性セシウム蓄積量の経時変化とその要因 | 共著 | 2015年3月 | 日本海洋学会2015年春季大会, 東京海洋大学品川キャンパス, 港区, 東京 | 福田美保, 青野辰雄, 吉田聡, 長沼翔, 久保篤史, 嶋田啓資, 高澤伸江, 保坂拓志, 佐藤憲一郎, 山口征矢, 伊藤友加里, 石丸隆, 神田穣太, | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 平成31年1月～ | 亀岡市環境審議会委員 |
| 平成29年6月～ | 京都府亀岡警察署協議会委員 |
| 平成29年3月 | 京都府立海洋高等学校における講演 |
| 平成29年6月 | 京都府立海洋高等学校大学訪問における講演 |
| 平成29年11月 | 滋賀県立虎姫高等学校探求活動サイエンスフィールドワーク受け入れ |
| 平成30年2月 | 京都学園大学新柳居市民講座における講演 |
| 平成30年2月 | 京都府立亀岡高等学校数理科学科研究発表会講師 |
| 平成31年2月 | 京都府立亀岡高等学校数理科学科研究発表会講師 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

海洋環境調査・海水分析

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　丹羽 英之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 実習授業におけるフィールド調査の取り入れ | 2015年4月～ | 樹木学実習などフィールドで学ぶことが重要な授業では、フィールドで様々な調査を経験させることで、実際の自然を体験するとともに実践的な能力を身につけさせている。 |
| 履修者名簿による指名 | 2016年4月～ | 履修者名簿によって全員を指名し発言させることで、授業に対する緊張感や集中力を持続させ、授業内容を主体的に理解させるようにしている。 |
| 映像の活用 | 2016年4月～ | 自然の季節変化に合わせた写真や動画を用意することで、授業内容とその時点で実際に観察できる自然現象を対応させることで、授業内容に対する関心を高めるようにしている。 |
| アンケートや小テストのリアルタイム集計 | 2017年4月～ | グーグルフォームを利用することで、アンケートや小テストの集計結果をリアルタイムで示すことができるので、すべての学生の回答や意向をその場で授業内容に反映し、授業内容に対する関心を高めるようにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 地域固有性の発現による農業・農村の創造 | 共著 | 2018年3月 | 版元ドットコム | 中塚雅也編著 | pp.33-41 |
| 農業・農村の資源とマネジメント　地域づくりの基礎知識3 | 共著 | 2019年1月 | 神戸大学出版会 | 中塚雅也編著 | pp.57-72 |
| 論文 | | | | | |
| UAVによる多時期撮影画像の比較 | 単著 | 2016年5月 | 応用生態工学19(1) | | pp.47-53 |
| UAVを用いた河川の水辺構造調査 | 共著 | 2016年6月 | 景観生態学21(1) | 丹羽英之,林直弥,森本幸裕 | pp.75-80 |
| UAVを用いた深泥池湿原におけるニホンジカ生息痕の時系列変化の分析 | 単著 | 2017年6月 | 保全生態学研究22(1) | | pp.213-218 |
| ナンキンハゼ(Triadica sebifera (L.) Small)の時空間的な分布変化と防除シナリオごとの分布確率の推定 | 共著 | 2017年9月 | 日本緑化工学会誌43(1) | 丹羽英之,阿部惣 | pp.27-32 |
| 小型UAVを用いた海岸マツ林の林床光環境の推定 | 共著 | 2017年9月 | 日本緑化工学会誌43(1) | 佐々木剛,丹羽英之,朝波史香,鎌田磨人 | pp.51-55 |
| 河川植生の在不在データを用いた流域スケールの流程区分 | 共著 | 2017年11月 | 保全生態学研究22(2) | 丹羽英之,三橋弘宗 | pp.257-264 |
| ノウルシの分布把握と分布に影響を与えると予測される環境要因の調査におけるUAVの有効性 | 共著 | 2018年3月 | 応用生態工学20(2) | 丹羽英之,谷口直哉 | pp.195-203 |
| 篠山市における灰小屋の現状と減少要因 | 共著 | 2018年5月 | ランドスケープ研究 81 (5) | 木村昭義, **丹羽英之**, **中川重年** | pp.691-694 |
| 河川における流程500m**間隔での環境DNA分析と現地採集調査による魚類検出結果の比較** | 共著 | 2018年11月 | 保全生態学研究23(2) | 丹羽英之, **坂田雅之**, **源利文**, **清野未恵子** | pp.257-264 |
| 林床のオルソモザイク画像とDSM**の簡便な取得方法:マングローブ林を例にした検討** | 共著 | 2019年1月 | 応用生態工学21(2) | 丹羽英之,**竹村紫苑**,**今井洋太**,**鎌田磨人** | pp.191-202 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (ポスター発表)<br>都市近郊里山林における簡易シカ食害調査手法の検討 | 共同 | 2015年6月 | 日本景観生態学会全国大会 | 丹羽英之・森本幸裕・曽我部竜也・飯塚貴之・百生太亮 | |
| (ポスター発表)<br>亀岡市におけるスクミリンゴガイの分布 | 共同 | 2016年7月 | 日本景観生態学会全国大会 | 丹羽英之,小山潮,森本幸裕 | |
| (企画集会)<br>大地をスキャンする！ 河川, 湿地, 森林の調査事例 | 単独 | 2016年9月 | 応用生態工学会第20回大会 | | |
| (ポスター発表)<br>UAVで森林植生のオルソ画像をつくる際の撮影高度の影響 | 共同 | 2016年10月 | 第47回日本緑化工学会大会 | 丹羽英之,森本幸裕,小島玉雄 | |
| (ポスター発表)<br>兵庫県篠山市の河川における希少魚種の環境DNA検出 | 共同 | 2017年3月 | 第64回日本生態学会大会 | 河野健, 清野未恵子, 丹羽英之, 篠谷和彦, 田井彰人, 坂田雅之, 源利文 | |
| (ポスター発表)<br>UAV を用いた河川におけるノウルシの分布把握と生育環境特性の分析 | 単独 | 2017年3月 | 第64回日本生態学会大会 | | |
| (ポスター発表)<br>ナンキンハゼ(Triadica sebifera (L.) Small)の時空間的な分布変化と防除シナリオごとの分布確率の推定 | 共同 | 2017年9月 | ELR2017 | 丹羽英之,阿部惣 | |
| (ポスター発表)<br>小型UAVを用いた海岸マツ林の林床光環境の推定 | 共同 | 2017年9月 | ELR2017 | 佐々木剛,丹羽英之,朝波史香,鎌田磨人 | |
| (ポスター発表)<br>キクタニギクの保全再生活動について | 共同 | 2017年9月 | ELR2017 | 百生太亮,白須友貴,丹羽英之,森本幸裕,佐藤正吾 | |
| (ポスター発表)<br>マングローブ林管理における林床のオルソモザイク画像の有効性 | 共同 | 2018年3月 | 第65回日本生態学会大会 | 丹羽英之, 竹村紫苑, 鎌田磨人, 今井洋太 | |
| (ポスター発表)<br>湛水特性からみた雨庭の雨水流出抑制効果の評価 | 共同 | 2018年3月 | 第65回日本生態学会大会 | 平野尭将, 米村惣太郎, 渡部陽介, 張林瀛, 横田樹広, 柴田昌三, 丹羽英之, 森本幸裕 | |
| (口頭発表)<br>篠山市における灰小屋の現状と減少要因 | 共同 | 2018年5月 | 平成30年度日本造園学会全国大会 | 木村昭義,丹羽英之,中川重年 | |
| (口頭発表)<br>人工的に造成された森林の健康診断～万博記念公園を例に～ | 単独 | 2018年5月 | 平成30年度日本造園学会全国大会 | | |
| (口頭発表)<br>相国寺裏方丈庭園枯流の雨水管理機能評価 | 共同 | 2018年9月 | 第28回日本景観生態学会宮崎大会 | 阿野晃秀,山下三平,丹羽英之,佐藤正吾,深町加津枝,森本幸裕 | |
| (ポスター発表)<br>スクミリンゴガイのNiche modelsの外挿による侵入適地の予測 | 共同 | 2018年9月 | 第28回日本景観生態学会宮崎大会 | 丹羽英之,川田優季 | |
| (ポスター発表)<br>大規模造成森林における埋設式人工巣箱を利用した森林性ネズミ類の餌利用実態の解明～万博公園『自立した森』を事例に～ | 共同 | 2018年9月 | 第28回日本景観生態学会宮崎大会 | 北方麻友,丹羽英之 | |
| (ポスター発表)<br>UAVを使った森林ギャップ指標の算出と森林モニタリングにおける有用性の検証 | 共同 | 2018年9月 | 応用生態工学会第22回全国大会 | 丹羽英之,佐藤龍太 | |
| (Oral session)<br>Re-evaluation of Japanese traditional garden design from the perspective of sustainable drainage systems | 共同 | 2018年11月 | ICLEE | Linying ZHANG, Yosuke WATANABE, Hirano TAKAMASA, Sotaro YONEMURA, Shigehiro YOKOTA, MORIMOTO YUKIHIRO, HIDEYUKI NIWA, Yui Oyake, Shozo Shibata | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (Oral session)<br>Flood Mitigation Function of Japanese Rain Gardens for Management of Urban Storm Runoff | 共同 | 2018年11月 | ICLEE | AKIHIDE ANO, SAMPEI YAMASHITA, MORIMOTO YUKIHIRO, HIDEYUKI NIWA, SHOGO SATO, KATSUE HUKAMACHI YOKOTA, MORIMOTO YUKIHIRO, HIDEYUKI NIWA, Yui Oyake, Shozo Shibata | |
| (口頭発表)<br>相国寺裏方丈庭園枯流の雨水管理機能評価 | 共同 | 2018年12月 | 土木学会第14回景観・デザイン研究発表会 | 山下三平,森本幸裕,阿野晃秀,丹羽英之,佐藤正吾,深町加津枝 | |
| (Oral session)<br>Is a dry garden of a historical Zen-Buddhist monastery effective for its storm-water | 共同 | 2019年3月 | THE 2ND INTERNATIONAL CONFERENCE OF IASUR | Sampei YAMASHITA, Yukihiro MORIMOTO, Akihide ANO, Hideyuki NIWA,Shogo SATO, Katsue FUKAMACHI | |
| (セミナー)<br>宝ヶ池連続講習会 | 講師 | 2015年12月 | 京都市都市緑化協会 | | |
| (セミナー)<br>農村計画学会　平成27年度　西日本ブロック地区セミナー（第1回） | 報告 | 2016年2月 | 農村計画学会 | | |
| (セミナー)<br>木と森の健全度市民調査へのいざない | 報告 | 2016年4月 | 京都市都市緑化協会、京都府立大学 | | |
| (フォーラム)<br>丹波篠山いきもの48フォーラム | 報告 | 2017年2月 | 篠山市 | | |
| (セミナー)<br>UAVを用いた河川環境モニタリングの最前線 | 報告 | 2017年4月 | グローカル環境・防災学研究会 | | |
| (セミナー)<br>UAVを活用した環境調査事例 | 報告 | 2017年4月 | ドローンのフィールド科学活用研究会 | | |
| (セミナー)<br>空から見る自然 | 講師 | 2017年4月 | 上賀茂の森と緑の保存会 | | |
| (セミナー)<br>京都府立学校生物教育研究会教員支援研修会 | 講師 | 2017年8月 | 京都府立学校生物教育研究会 | | |
| (セミナー)<br>生態系管理講習会「億首川マングローブ林の保全と活用」 | 報告 | 2017年11月 | 日本生態学会 | | |
| (セミナー)<br>丹波篠山いきもの48フォーラム | パネラー | 2018年3月 | 篠山市 | | |
| (セミナー)<br>「亀岡まるごとガーデン・ミュージアム」構想市民公開フォーラム | 報告 | 2018年5月 | 亀岡市 | | |
| (セミナー)<br>丹波篠山いきもの48フォーラム | コーディネーター | 2018年12月 | 篠山市 | | |
| (セミナー)<br>京都・亀岡保津川公園整備計画に係るワークショップ | オブザーバー | 2019年2月 | 亀岡市 | | |
| (セミナー)<br>Rural Learning Network 第27回セミナー | 講師 | 2019年3月 | 神戸大学 | | |
| (研究助成)<br>沖縄本島億首川におけるマングローブ林の再生・管理に向けた砂州掘削による修復策の構築 | 共同 | 2016年4月 | 河川基金 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (研究助成)<br>沖縄本島億首川マングローブ林の簡便な健康診断手法の構築 | 共同 | 2017年4月 | 河川基金 | | |
| (研究助成)<br>複数河川の比較による沖縄本島億首川マングローブ林の管理計画の構築 | 共同 | 2018年4月 | 河川基金 | | |
| (研究助成)<br>伝統的な枯山水庭園の雨水管理機能の評価に基づく都市型雨庭のデザイン | 共同 | 2018年7月 | 科研費 | | |
| (調査委託)<br>「亀岡まるごとガーデン・ミュージアム」構想策定に関する調査研究委託 | 共同 | 2016年4月 | 亀岡市 | | |
| (調査委託)<br>「亀岡まるごとガーデン・ミュージアム」構想策定に関する調査研究委託 | 共同 | 2017年4月 | 亀岡市 | | |
| (調査委託)<br>日本万国博覧会記念公園　自然文化園自立した森づくり調査委託 | 共同 | 2015年4月 | 大阪府 | | |
| (調査委託)<br>日本万国博覧会記念公園　自然文化園自立した森づくり調査委託 | 共同 | 2016年4月 | 大阪府 | | |
| (調査委託)<br>丹波地域における生物多様性調査委託 | 共同 | 2018年7月 | 公益財団法人兵庫丹波の森協会 | | |
| (共同研究)<br>万博の森づくりモニタリング調査共同調査 | 共同 | 2017年4月 | 大阪府 | | |
| (共同研究)<br>万博の森づくりモニタリング調査共同調査 | 共同 | 2018年4月 | 大阪府 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本景観生態学会 | 生態系インフラ活用検討委員会委員 |
| 日本景観生態学会 | 企画交流委員会委員 |
| 日本景観生態学会 | 庶務幹事 |
| 日本景観生態学会 | 運営委員会委員 |
| 日本景観生態学会 | 第29回日本景観生態学会京都大会実行委員長 |
| 日本緑化工学会 | 大会号編集委員 |
| 日本生態学会 | 会員 |
| 日本植生学会 | 会員 |
| 応用生態工学会 | 会員 |
| 農村計画学会 | 会員 |
| 篠山市 | 篠山市森の学校推進委員会 委員長 |
| 篠山市 | 篠山市農都創造条例・農都創造計画検討委員会 |
| 篠山市 | 篠山市環境審議会委員 |
| 南丹市 | 南丹市環境審議会 委員長 |
| 近江八幡市 | 風景づくり委員会委員および風景づくりアドバイザー |
| 京都府南丹保健所 | 京都丹波スマート環境教育推進研究会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| GIS・UAVに関する技術相談・共同研究 |
| 河川生態系に関する共同研究・受託研究等 |
| 生態系保全にに関する共同研究・受託研究等 |
| 植生調査に関する技術相談・共同研究・受託研究等 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　嘱託講師 | 氏名　阿野　晃秀 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 1 デザインサーベイ・フィールドワークプログラムの開発 | 2017年10月 | 景観の資源・構造・寸法・体験などについて、ランドスケープデザインの観点からの洞察力を学生自身で養っていく力が身につくことを目指し、限られた時間内に多様なスキルや着眼点が身につく実習計画を提案・実践した。 |
| 2 クイックスケッチスキルの実演指導 | 2017年10月 | デザインを行う上でスケッチは必須のスキルであるが、初学者には精神的ハードルが高く、また「センスの問題」との誤解がある場合も多い。そこで、ランドスケープデザインで必要な平面図・断面図・パース図における描画理論や法則を初学者向けに簡潔にまとめて「型」として紹介し、またリアルタイムで実演して見せることで短期間でのスキルアップを実践した。 |
| 3 実習を通して「デザイン思考」を指導 | 2017年10月 | 具体的な色や形を造形する「狭義のデザイン」スキルだけではなく、潜在的なニーズを発掘しその解決策を導き出す思考法である「広義のデザイン」スキルが身につくように、提案するデザインを生み出す思考プロセスを意識させる指導を行った。広義のデザインスキルは産業界では「デザイン思考」と呼ばれ、デザイナー以外のビジネスマンの創造力向上にも有効とされ、扱える人材の育成が期待されている。 |
| 4 英語学習意欲の向上に資する英文資料の積極的活用 | 2018年4月 | 講義内で、英文資料（論文・記事・webニュース・動画）などを積極的に取り入れることで、英語に慣れしたんでもらうとともに、先端の情報に触れるために実際に英語が役に立つことを実感してもらい、学生の英語に対する学習意欲の向上を図った。 |
| 5 Q＆Aコーナーによる100人超の大人数授業のための学生とのコミュニケーションと授業の補足 | 2018年4月 | 130人以上が履修する授業において、学生の理解度や興味について双方向にコミュニケーションを図るため、授業後半のミニレポートに質問の項を設け、次週の授業終盤10分ほどを割いてそれらの質問に答えた。同様の疑問・興味を持つ学生は多くおり、Q&Aコーナーを通して効果的な補足が可能となった。 |
| 6 ミニレポートの実施 | 2018年4月 | 授業終盤に、その日の講義を振り返るための課題に取り組んでもらうことで、学生の理解度向上を狙った。アンケートによると、理解に非常に役に立っているとの答えが返ってきた。 |
| 7 アクティブラーニングの導入 | 2018年4月 | 15～20分おきに、簡単な質問や課題を投げかけることで、学生に参加の機会を与え、受身だけではないメリハリの効いた講義にすることで、集中力の持続と理解度の向上を図った。 |
| 8 ビジュアルをメインにしたスライドの作成 | 2018年4月 | 単調な箇条書きや文章のみによる資料では、学生が興味を失いやすくなると言われているため、可能な限り、画像や図を豊富に使用した授業資料を作成した。 |
| 9 動画の積極的活用 | 2018年4月 | 難解な事項やイメージが難しい話題に関しては、写真や図だけではなく、積極的に動画を活用することで理解度の向上を図った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| JST-RISTEX 研究プロジェクト 「あまみずコーディネーター養成講座」テキスト | 2017年10月 | 英国シェフィールド大学在籍時には、雨庭に関するデザイン理論を学んだ。その経験と国内外の最新の研究成果を集め、雨庭のデザイン理論について受講者がすぐに使用できる実践的な知識を網羅したテキストを執筆した。 |
| 雨庭のすすめ　改定第二版 | 2018年5月 | パンフレット作成において、資料収集および編集作業を担当した。作成当時はグリーンインフラ（G.I.）やレインガーデン（雨庭）についてまとまった情報を紹介する資料はなく、日本国内におけるG.I.及び雨庭の普及・啓発に大きく貢献した。また、京都市の生物多様性プラン共同フォーラムでも配布され、他都市に先んじて京都の職員や市民の雨庭への理解を広めた。同パンフレットは京都学園大学の学生がG.Iと雨庭について学ぶ上でも大いに貢献している。 |
| JST-RISTEX 研究プロジェクト 「あまみずコーディネーター養成講座」テキスト | 2018年10月 | 雨庭の設計について、最新の知見を盛り込んだテキストを執筆した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| Integrated Urban Flood Risk Management (IUFRM)の Technical Deep Dive (TDD) | 2019年4月 | 世界銀行主催のIUFRMのTDDにてデザイン演習のデザインコーディネーターを務めた。 |
| 放送大学 面接授業TA | 2019年5月 | 放送大学の面接授業にて、造園学のデザイン実習のTAを行なった。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学生アンケートによる授業評価賞受賞 | 2019年3月 | 学生評価による授業評価アンケート賞を受賞した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 森林環境2014 | 共著 | 2014年3月 | 公共財団法人 森林文化協会 | 森本幸裕 | |
| 論文 | | | | | |
| CSR報告書に見る世界の主要企業の生物多様性保全活動の傾向と課題 | 共著 | 2013年9月 | 景観生態学会18 (2) | 今西純一 | 183 - 188 |
| その他 | | | | | |
| Effect of Rain Garden on Ecological Network Improvement and Inland Flood Reduction | 単著 | 2013年3月 | 京都大学大学院 地球環境学舎 | | |
| Water Sensitive City Gate – Renaissance of Lewisham City Centre– | 単著 | 2016年6月 | Department of Landscape, The University of Sheffield | | |
| 2 A case study of an ecological network design in the prefecture of Osaka, focusing on the concept of rain garden. | 共著 | 2012年10月 | URBIO(URban BIOdiversity and Design) 2012 | 森本幸裕 | |
| アユモドキとの共生が切り開く亀岡の未来　ー二つのシナリオに関する考察 ー | 共著 | 2014年1月 | 京都学園大学 亀岡大規模スタジアム研究会 | 森本幸裕 | |
| アユモドキとふたつの開発シナリオ | 共著 | 2015年1月 | BIO CITY, Vol. 61: 46-53 | 森本幸裕 | |
| ヨーロッパ雨庭事情 | 単著 | 2016年11月 | 京都学園大学　バイオ環境学部 ランドスケープデザイン研究室公開セミナー | | |
| 雨庭デザイン最前線 | 単著 | 2017年3月 | JST-RISTEX 研究プロジェクト 「分散型水管理を通した、風かおり、緑かがやく、あまみず社会の構築」 (代表者:島谷幸宏九州大学教授)セミナー | | |
| 亀岡まるごとガーデンミュージアム構想 都市部編　平成28年度報告書 | 共著 | 2017年3月 | 亀岡市 | 森本幸裕 | |
| 京都学園大学 太秦新キャンパス ランドスケープデザイン提案 | 共著 | 2017年6月 | 京都学園大学 | 森本幸裕 | |
| 日本庭園に隠された雨庭の知恵 | 単著 | 2017年6月 | 国連大学 石川・金沢オペレーティングユニット主催セミナー 「心蓮社庭園 緑・水・音 ～都市の自然創出～」 | | |
| 亀岡市森のステーション　ランドスケープデザイン「薬草原」 提案 | 共著 | 2017年8月 | 亀岡市 | 森本幸裕 | |
| 亀岡駅駅北広場デザイン提案 (亀岡まるごとガーデンミュージアム構想 都市部編) | 共著 | 2017年9月 | 亀岡市 | 森本幸裕 | |
| 亀岡市ふれあいプラザ　ランドスケープデザイン提案(亀岡まるごとガーデンミュージアム構想 都市部編) | 共著 | 2017年9月 | 亀岡市 | 森本幸裕 | |
| 欧州における雨庭デザインの動向報告 | 単著 | 2017年9月 | ELR(日本緑化工学会、日本景観生態学会、応用生態工学会　合同大会) | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| 雨庭の普及・啓発に資する「雨樋アート」の概況把握 | 共著 | 2017年10月 | (公財)日本造園学会 関西支部大会 | 森本幸裕 | |
| あまみずコーディネータ養成講座講師及びテキストの作成 | 単著 | 2017年12月 | ST-RISTEX 研究プロジェクト<br>「分散型水管理を通した、風かおり、緑かがやく、あまみず社会の構築」<br>(代表者:島谷幸宏九州大学教授)セミナー | | |
| A case study on developing Green Infrastructure design and management methods suitable to East Asia region | 共著 | 2018年4月 | The 8th EAFES<br>(East Asian Federation of Ecological Societies)<br>International Congress | 森本幸裕 | |
| いのちの森 生物多様性保全の森づくりに向けた今後20年の中長期構想まとめ | 共著 | 2018年4月 | 京都市都市緑化協会 | 森本幸裕 | |
| いのちの森 市民に向けた環境教育・啓発用の看板のデザイン | 共著 | 2018年4月 | 京都市都市緑化協会 | 森本幸裕 | |
| 造園学会特別企画展示:いのちの森 生物多様性保全の森づくりに向けた今後20年の中長期構想 | 共著 | 2018年5月 | 日本造園学会 | 森本幸裕 | |
| 相国寺裏方丈庭園の雨水管理機能評価 | 共著 | 2018年9月 | 日本景観生態学会 | 山下三平・丹羽英之・佐藤正悟・深町加津枝・森本幸裕 | |
| Re-evaluation of Japanese traditional garden design from the perspective of sustainable drainage systems | 共著 | 2018年11月 | ICLEE(International Consortium of Landscape and Ecological Engineering) | 山下三平・丹羽英之・佐藤正悟・深町加津枝・森本幸裕 | |
| 京都駅北「地域雨庭」イメージプラン | 共著 | 2018年2月 | 京都市 | 森本幸裕 | |
| 京都駅ビル雨水利活用に関する改善検討業務報告書 | 共著 | 2019年3月 | 京都駅ビル | 特定非営利法人<br>雨水まちづくりサポート | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 バイオ環境 学部 | 職名 嘱託講師 | 氏名 大秦 正揚 | 大学院における研究指導担当資格の有無 （有・(無)） |
|---|---|---|---|

## Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 穴埋め式資料の活用 | 2016年4月～現在 | 以下の講義において、穴埋め式資料を作成・配布し講義への能動的な参加を促した．生物学、物質の科学、環境ﾘｽｸﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ、生態学、生命有機化学. |
| 英語学習と問題解決力習得との両立 | 2017年4月～現在 | 以下の演習において、「The art and craft of problem solving by Paul Zeitz」を参考に、科学的発想に基づいた解法を必要とする問題を英文で課し、英文読解能力と問題解決力の両方を身に着けることを試みた．専門演習A、B. |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 実験用手順書の作成 | 2018年4月～現在 | 以下の実験で行う手順書を作成・配布し、実験の予習を促すことにより、学生実験の安全で円滑な運営を試みた．生物学実験. |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 特記事項なし | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学生実験指導補助 | 2011年6月～2011年8月 | 食品栄養科学実験での指導補助. |
| 学生実験準備・指導補助 | 2011年9月～2016年3月 | 以下の実習・実験科目での準備・指導補助.作物栽培学実習、応用微生物学実験、遺伝子化学実験、植物バイオテクノロジー実験、有機化学実験、分子生物学実験、食品栄養科学実験、環境水質実験、物理学実験、環境物理学実験、バイオマス実験A(活性汚泥、メタン発酵)、バイオマス実験B(木質バイオマス)、環境マテリアル実験、化学実験、環境化学実験、生物学実験、環境生物学実験、地球科学実験、環境地球科学実験、以上. |

## Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| キンリョウヘンの誘引成分に基づくニホンミツバチ分蜂群誘引剤. | 共著 | 2014年 | 環動昆 第25巻 第1号. | ○桂悠、大秦正揚、中西遼、坂本文夫 | 45-47 |
| その他 | | | | | |
| (シンポジウム)<br>最後のピース:植食性昆虫の食草選択に対する繁殖干渉の影響 | 共著 | 2013年 | 第29回個体群生態学会.<br>大阪府立大学. | ○大秦正揚・大崎直太 | |
| (口頭発表)<br>キンリョウヘンの誘引成分に基づくニホンミツバチの分蜂群誘引剤の開発 | 共著 | 2013年 | 第25回環境動物昆虫学会.<br>神戸大学. | ○桂悠、大秦正揚、中西遼、坂本文夫 | |
| (ポスター発表)<br>The artificial swarm attractant for *Apis cerana japonica* | 共著 | 2015年 | Apimondia 2015<br>Daejeon, Korea. | ○Fumio Sakamoto・Shota Hamajo・Yutaka Katsura・Masaaki Ohata | |
| (査読なし論文)<br>植物の防衛形質の違いで形態が変化するヤマトスジグロシロチョウ幼虫 | 単著 | 2016年 | 昆虫と自然 Vol.51 No.12 | | 11-14 |
| (講演)<br>チョウの幼虫の脱皮殻と成虫の遺骸～生物の痕跡から生態と行動を読み解く | 単著 | 2017年 | 第10回あぶやま・<br>まんてん地球(terra)子屋 | | |
| (講演)<br>種間の体の大きさの違いが<br>繁殖干渉の方向を決めている。 | 単著 | 2018年 | 琉球大学 名無し進化セミナー | | |
| (ポスター発表)<br>種間の体の大きさの違いが繁殖干渉の方向を決めている。 | 単著 | 2018年 | 日本動物行動学会 第37回大会 | | |

## Ⅲ 学会等および社会における主な活動

## Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

## バイオ環境学部　バイオサイエンス学科教員組織


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | 高　瀬　尚　文 | 448 |
| | 萩　下　大　郎 | 451 |
| | 藤　田　裕　之 | 453 |
| | 松　原　守 | 455 |
| | 矢　野　善　久 | 458 |
| 特任教授 | 若　村　定　男 | 460 |
| 准教授 | 清　水　伸　泰 | 462 |
| | ﾌﾟﾘｴﾄ ﾗﾌｧｴﾙ | 466 |
| | 寶　関　淳 | 468 |
| 講師 | 櫻　間　晴　子 | 470 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　高瀬　尚文 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| パワーポイントを利用した講義 | 2014年度～ | 植物バイオ分野は進歩が速く、時代の即した適切なテキストが無い。そこで、パワーポイントを主体とした講義を実施した。また、情報量が多くても、講義の聴講に集中できる受講環境を提供した。「植物生化学」「植物細胞工学」等の専門科目では、「パワーポイントの見やすさ」「授業内容の準備と整理」「説明が分かりやすい」といった項目で一定の評価を受けている。 |
| DVDを利用したイメージ化の促進 | 2014年度～ | 「植物細胞工学」では、遺伝子の働きを分子レベルで理解することを促す目的で、DVD教材を導入した。言葉や図では理解し難い生体分子のダイナミクスを理解する上で効果をあげている。 |
| 新聞記事を利用した学びの動機付けと自学自習の促進 | 2006年度～ | 新聞記事を活用することで、食糧・資源・環境問題の実体化とイメージ化を促した。新聞記事とバイオ研究やバイオ研究とを連関させるコンテキストをつくることで、学びの動機付けを促している。バイオ研究・バイオ技術への社会的期待感、専門科目受講への意欲を抱くことに一定の効果をあげていると思われる。 |
| 統計資料を利用した学びの動機付け | 2014年度～ | 食糧・資源・環境問題の実体化と社会的背景と現状の理解を促すため、講義資料に統計資料を示している。 |
| 学生の授業理解を評価するための工夫と授業理解の定着 | 2014年度～ | 講義内容の定着・復習と学生の理解度を把握することを目的に、毎講義、課題に取り組む時間を数回に分散し、授業ポイントの把握を促すと同時に理解の自己確認を徹底させている。提出レポートを元に、理解度が不足している項目を次回講義で補足説明し、理解の深化に務めている。 |
| 実験講義における工夫 | 2014年度～ | 「基礎バイオサイエンス実験」「植物バイオ専門実験」では、マルチメディア機器を導入した実験講義を実施した。特に、実験操作はオーバーヘッドカメラを活用した説明を実施し、操作理解の深化を促した。また、実験テキスト及びレポートのコンテキストを誘導型に工夫することで、実験目的と考察のポイントを明確にしやすくし、レポート作成力の向上を図っている。 |
| 授業評価の活用 | 2014年度～ | 授業の難易度に関する評価から、学生の理解度に大きな幅があったことから、深い学びの項目には”アドバンス”と表記・コメントすることで、各講義項目に対する理解の要求度の違い（基本・標準と高度の区分）を明確に発信している。また、担当科目の内容理解の基礎となる項目については、他教科科目での履修を前提とせずに、授業の導入部分で再度取り上げることで、担当科目の理解・受講をスムーズにするように務めている。また、生活や社会との連関、他の履修・開講科目との連関を示し、修学意欲の向上に務めている。講義資料については、内容を精査し、削除と追加、差し替えを行っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 基礎バイオサイエンス実験（生体成分の定量法） | 2014年度～ | 生体成分の抽出・分離法、吸光度計による生体成分の測定といった実験方法、平均値と標準偏差の算出等のデータ処理からなる実験書。実験材料を水耕栽培された市販農産物を材料とすることで、「植物生理学」「植物生化学」で学ぶ光合成の理解とその深化も図ることができる。 |
| 植物バイオ実験（光合成測定） | 2014年度～ | 植物の葉緑体チライコイドの分離、光合成明反応における電子伝達活性の測定、除草剤の作用機作の確認と阻害活性の定量的測定法を通じ、植物生理・生化学実験の基礎を学習する実験書。、 |
| DNA教育用教材（植物DNAの抽出） | 2014年度～ | 遺伝子教育を目的に、野菜（タマネギ）からのDNA抽出実験をしながら、遺伝子組換えや遺伝子工学、ゲノム応用学の可能性を学ぶ。参加型授業や体験ゼミナールに活用。 |
| DNA教育用教材（DNA鑑定） | 2016年度～ | 遺伝子教育を目的に、DNA鑑定を題材にした、体質と遺伝子（DNA）の関連を学ぶ非実験系の教材。参加型授業や体験ゼミナールに活用。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 全学FD研修会にて講師を務めた。 | 2015年度 | 20015年度の第2回全学FD研修会にて、「授業の中で工夫していること、意識している」と題して、主な担当科目の講義の狙い、講義における工夫、講義における課題について報告した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 上級バイオ技術者認定試験・中級バイオ技術者認定試験（NPO法人日本バイオ技術教育学会）への関与 | 2010年度～ | 京都学園大学を会場とした上級バイオ技術者認定試験・中級バイオ技術者認定試験の実施運営者。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Do soybeans select specific species of *Bradyrhizobium* during growth? | 共 | 2015年 | *Communicative & Integrative Biology* | Akifumi Sugiyama, Yoshikatsu Ueda, Hisabumi Takase & Kazufumi Yazaki | 8(1)：e992734 |
| The *axhs1/dwf4* auxin-hypersensitive mutant of *Arabidopsis thaliana* defines a link for integration of auxin and brassinosteroid mediated root elongation. | 共 | 2015年 | *Plant Biotechnology* | Taisuke Nagase, Hisabumi Takase, Jiro Sekiya, Rafael Prieto | 32(2):.125-137 |
| ダイズ生産を支える微生物の群集構造に関する研究。 | 単 | 2016年 | 京都学園大学総合研究所所報 | 高瀬尚文 | 17：34-43 |
| Characterization of the synthesis and the rhizosphere contents of isoflavones in field grown soybean. | 共 | 2017年 | *Plant Cell Physiology* | Akifumi Sugiyama, Yumi Yamazak, Shoichiro Hamamoto, Hisabumi Takase, Kazufumi Yazaki | 58:1594-1600 |
| Characterization of polished rice washing water fermented with milk and its inhibition activity toward tomato bacterial canker causative agent Clavibacter michiganensis subsp. Michiganensis | 共 | 2018年 | *Journal of Biological Macromolecules* | Tatsuya Nakata, Kohei Kawakami, Rafael Prieto, Hisabumi Takase, and Jiro Sekiya | 18(1):3-10 |
| その他（口頭発表・講演） | | | | | |
| 圃場環境下でのダイズ根圏微生物叢及び微生物活性の変動 | 共 | 2015年3月1日 | 日本農芸化学会2015年度年会（岡山） | 杉山暁史，上田 義勝，高瀬尚文，矢崎一史 | |
| 圃場環境で生育したダイズにおけるフラボノイド含量の生育過程を通じた解析 | 共 | 2015年3月1日 | 日本農芸化学会2015年度年会（岡山） | 山崎由実、杉山暁史、高瀬尚文、矢崎一史 | |
| 圃場環境下のダイズにおけるフラボノイド生合成と分泌 | 共 | 2015年9月1日 | 日本土壌肥料学会2015年度年会（京都） | 杉山暁史，山崎由実，高瀬尚文，矢崎一史 | |
| 圃場栽培ダイズにおける生育過程を通じたフラボノイドの分泌及び動態の解析 | 共 | 2015年9月1日 | 第25回植物微生物研究交流会（つくば） | 山崎由実、杉山暁史、高瀬尚文、矢崎一史 | |
| ダイズ根からのイソフラボン分泌と根圏での動態 | 共 | 2016年9月7日 | 第26回植物微生物研究交流会（仙台） | 杉山暁史，山崎由実，濱本昌一郎，高瀬尚文，矢崎一史 | |
| Secretion of isoflavones from soybean roots and their degradation dynamics in the rhizosphere. | 共 | 2017年8月26日 | The joint meeting of the 33rd annual meeting of the ISCE and the 9th meeting of the APACE (Kyoto) | Akifumi Sugiyama, Shoichiro Hamamoto, Yumi Yamazak, Hisabumi Takase, Kazufumi Yazaki | |
| ダイズ根圏におけるダイゼインの動態と機能の解析 | 共 | 2018年9月20日 | 植物微生物研究会第28回研究交流会（鳥取） | 奥谷芙季，濱本昌一郎，二瓶直登，西村拓，青木裕一，高瀬尚文，矢崎一史，杉山暁史 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| （学会等） | |
| | （公社）日本農芸化学会会員、（特非）近畿アグリハイテク会員、マツタケの人工栽培を成功させる会会員 |
| （社会における主な活動） | |
| 2014年度～ | 京都産学公連携機構・機構登録コーディネータ |
| 2019年度～ | （公社）生涯学習かめおか財団・理事 |
| 2019年度～ | 亀岡商工会議所・マイタウンかめおか・街づくり市民の会運営委員 |
| 2019年度～ | 亀岡商工会議所・亀岡産業観光振興協議会運営委員 |
| 2019年度7月～ | （公社）日本農芸化学会関西支部・支部参与 |

| | |
|---|---|
| （主な地域連携活動） | |
| 2017年1月 | 中大連携事業・南丹市立八木中学に対する体験実験<br>『生命の設計図であるDNAを学ぶ』『植物の色の7不思議を解き明かす』 |
| 2017年3月 | 京都市立洛陽工業高校にに対するバイオ・環境分野の理解ガイダンス |
| 2017年7月 | 京都府農林水産技術センター施設公開における市民実験体験教室『生命の設計図であるDNAを取り出してみよう』 |
| 2017年7月 | 高大連携事業・京都府立南丹高校に対する模擬講義『バイオワールドにようこそ−生命の設計図であるDNAから分かることー』 |
| 2017年7月 | 高大連携事業・京都府立南丹高校に対する体験実験『生命の設計図であるDNAを細胞から取り出す』 |
| 2017年8月 | 京都府生物教会連携事業：理科教員支援研修会『自然環境調査におけるUAV（ドローン）の活用』世話人 |
| 2017年8月 | 大井工業団地企業座談会（亀岡市主催）『地域における産学官連携の現状と課題』講演（亀岡） |
| 2017年9月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校に対する模擬講義『生命科学入門』 |
| 2017年9月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校に対する体験実験<br>『生命の設計図であるDNAを取り出す』『植物の色の7不思議を解き明かす』 |
| 2017年9月 | 大阪府立枚方なぎさ高等学校にてバイオ技術者・研究者の理解ガイダンス |
| 2017年9月 | 大阪高等学校に対する農学・バイオ分野の模擬講義『DNAワールドにようこそ』 |
| 2017年10月 | 中大連携事業・南丹市立美山中学に対する模擬講義『バイオワールドの広がりを知っていますか』 |
| 2017年10月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校の研究成果発表会における・講評 |
| 2017年12月 | 和歌山県立星林高等学校に対する理学分野の模擬講義『生命科学入門』 |
| 2018年1月 | 京都府立乙訓高校に対する農学分野の理解ガイダンス |
| 2018年2月 | 高大連携事業・兵庫県立但馬農業高等学校に対する体験実験『生命の設計図であるDNAを学ぶ』 |
| 2018年6月 | 高大連携事業・京都府立南丹高校に対する模擬講義<br>『バイオワールドにようこそ−生命の設計図であるDNAから分かることー』 |
| 2018年7月 | 京都府農林水産技術センター施設公開における市民向け実験体験教室『折り染めを通じて科学に親しむ』 |
| 2018年7月 | 高大連携事業・京都府立南丹高校に対する体験実験『生命の設計図であるDNAを細胞から取り出す』 |
| 2018年8月 | 高大連携事業・京都府立綾部高等学校に対する体験実験<br>『生命の設計図であるDNAを細胞から取り出す』『植物の色の7不思議を解き明かす』 |
| 2018年8月 | 京都府生物教会連携事業：理科教員支援研修会『微生物の機能評価』世話人 |
| 2018年9月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校に対する模擬講義<br>『生命科学入門』『遺伝情報を解明する時代から生物を合成する時代へ』 |
| 2018年9月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校に対する体験実験『生命の設計図であるDNAを細胞から取り出す』『植物の色の7不思議を解き明かす』 |
| 2018年10月 | 奈良県立磯城野高等学校に対する環境・バイオ工学の理解ガイダンス |
| 2018年10月 | 中大連携事業・京都府立園部高等学校附属中学校の研究成果発表会における講評 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| DNA解析、遺伝子解析、タンパク質解析 | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　萩下　大郎 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 適応力の取得と行動力の向上(科学英語A) | 2011年4月～ | 学生一人ひとりが自ら考えることを意識している。英文訳においても、まず英文を黙読させ、次に英文を聞かせ、さらに英文をノートに書かすことで授業に参加させた。英文翻訳のパワーポイントを作成し、学生の理解度を探りながら、一文一文を解説して授業を進めている。授業の最後には10分程度、毎回、小テストを行った。また、基礎レベルを強化するために、英文法の基本問題集を毎回宿題に出し、必要に応じてテストを行っている。 |
| コミュニケーション力と協働力の獲得(スタートアップゼミ) | 2011年4月～ | 大学に入学して不安を感じている学生がスムーズに参加できるゼミを心がけている。学生目線で会話をしながら、学生の本音を聞きだし、授業に取り入れるように努力している。学習の基本となる「読む・聞く」「調べる」「話す」については国語力を強化するために毎回ドリルやアクティビティーを行い、学生参加型の授業として、回答は前に出てきて、黒板に自ら選択したものを答えさせるように工夫している。毎回宿題として日本語検定の公式問題集を行わせている。 |
| 課題発見力を磨くこと(微生物の世界) | 2011年9月～ | 身のまわりの身近なところで目に見えない微生物が生きていることを認識してもらうことから始め、微生物の持つ能力のすごさを知ってもらうことに重点を置いた。なにげない日常では目に留まらない生物を感じてもらえることを目標としている。授業に参加してもらうために、ノートの提出を義務付けた。ノートを取ることで、より深く授業を聴くようになった。 |
| 授業評価アンケート | 2011年9月～ | 科学英語A、微生物の世界が評価対象科目となっている。全体的には概ね良好な評価であったが、授業内容はよく準備され、整理されているや教員のパワーポイントはわかりやすいと共に聞き取りやすいや質問に快く答えているが一定の評価を得ていた。また私語に対しての対応については課題とされた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 応用微生物学実験テキスト | 平成22年9月～ | 京都学園大学の応用微生物学実験のテキスト。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Breeding of a Cyclic Imide-Assimilating Bacterium, Pseudomonas putida s52, for High Efficiency Production of Pyruvate. | 共 | 2013年8月1日 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77 (8) | Hibi, M., N. Horinouchi, W. Tu, C.L. Soong, M. Ito, T. Segawa, X. Mu, T. Hagishita, K. Yokozeki, S. Shimizu, J. Ogawa. | pp.1650-1654 |
| その他(口頭発表) | | | | | |
| クルクミン分解菌の単離 | 共 | 2015年3月1日 | 2015年度日本農芸化学会大会(岡山) | 邵帥、萩下大郎、篠田吉史、清水昌 | |
| 「The mechanism of curucumin-degradation by microorganisms」 | 共 | 2017年3月20日 | 2017年度日本農芸化学会大会(京都) | Shuai Shao, Tairo Hagishita, Yoshifumi shinoda, Sakayu shimizu | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（特許） | | | | | |
| 脂肪酸含有物中の脂肪酸除去に使用される微生物製剤、及びその利用 | 共 | 2013年5月20日 | 特願2013－106230 | 井戸　宏樹、森　茂治、萩下大郎、清水昌 | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 1992年6月～現在 | 日本農芸化学会会員 |
| 1994年10月～現在 | 日本生物工学会会員 |
| 2006年4月～現在 | 酵素工学研究会会員 |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| 有用微生物のスクリーニング |
| 新規酵素の探索と開発 |
| 精密化学品製造技術の開発 |

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 バイオ環境 学部 | 職名 教授 | 氏名 藤田 裕之 | 大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「実践プロジェクトA」 | 2016年4月～ | 学園祭に模擬店を出店することを課題の取り組みに対し、ファシリテーションの技法を取り入れ、課題解決に取り組んだ。 |
| 「キャリアーサポート実践講座B」 | 2016年9月～ | 卒業後の進路を踏まえた実践プロジェクトにおいて、グループ討論に加え、企業からの提案を受け入れたり、工場見学、実験等、実際に即した座学ではない取り組み・展開を進めた。 |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 成人病予防食品の開発 | 共著 | 平成8年5月 | (株)シーエムシー出版 | ○藤田裕之、吉川正明 | |
| 新食品機能素材の開発 | 単著 | 平成8年5月 | (株)シーエムシー出版 | | |
| 食品機能素材III | 単著 | 平成17年11月 | (株)シーエムシー出版 | | |
| アンチエイジング・ヘルスフード | 単著 | 平成20年1月 | (株)シーエムシー出版 | | |
| Marine nutraceuticals and functional foods | 共著 | 平成20年1月 | CRC press | ○藤田裕之、吉川正明 | |
| 論文 | | | | | |
| Isolation and characterization of ovokinin, a bradykinin B1 agonist peptide derived from ovalbumin. | 共著 | 平成7年 | Peptides, 16 | ○藤田裕之、臼井八郎、倉橋和義、吉川正明 | p785 |
| Potentiation of anti-hypertensive activity of orally administered ovokinin, a vaso-relaxing peptide derived from ovalbumin, by emulsified in egg phosphatidylcholine. | 共著 | 平成7年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 59 | ○藤田裕之、佐々木隆造、吉川正明 | p2344 |
| Vasorelaxation by casomokinin L, a derivative of β-casomorphin and casoxin D, is mediated by NK1-receptor. | 共著 | 平成8年 | Peptides, 17 | ○藤田裕之、菅沼大行、臼井八郎、倉橋和義、佐々木隆造、吉川正明 | p635 |
| かつお節オリゴペプチドによるヒトボランティアに対する血圧降下作用(I). | 共著 | 平成9年 | 薬理と治療、25 | ○藤田裕之、安本良一、長谷川昌康、大嶋一徳 | p147 |
| Effects of an ACE-inhibitory peptide, Katsuobushi-oligopeptide, in the spontaneously hypertensive rat and in borderline and mildly hypertensive | 共著 | 平成13年 | Nutr. Res., 21 | ○藤田裕之、山上知秀、大嶋一徳 | p1149 |
| Fermented soybean-derived touchi extract inhibits α-glucosidase and in antiglycemic rats and humans after single oral treatments. | 共著 | 平成13年 | J. Nutri., 131 | ○藤田裕之、山上知秀、大嶋一徳 | p1211 |
| Fermented soybean-derived touchi-extract with anti-diabetic effect via α-glucosidase inhibitory action in a along-term administration study with KKAy mices. | 共著 | 平成13年 | Life Sci., 70 | ○藤田裕之、山上知秀 | p219 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| Effect of Touchi-extract on blood lipids in hypertriglyceridemic subjects and Sprague-dawley rats. | 共著 | 平成17年 | Nutr. Res., 25 | ○藤田裕之、山上知秀、大嶋一徳 | p681 |
| Absence of mutagenicity, genotoxicity, and subchronic oral toxicity of Touchi extract. | 共著 | 平成19年 | Int. J. Toxycol., 26 | ○藤田裕之、山上知秀 | p465 |
| Extract black tea (Pu-Erh) inhibits postprandial rise in serum cholesterol in mice, and with long term use reduces serum cholesterol and low density lipoprotein levels and renal fat weight in rats. | 共著 | 平成20年 | Phaytother. Res., 22 | ○藤田裕之、山上知秀 | p1275 |
| Improvements of mean body mass index and body weight in preobese and over weight japanese adults with black chinese tea (Pu-Erh) water extract. | 共著 | 平成23年 | Nutr. Res., 31 | 久保田和充、角俊一郎、東條秀明、井上裕紀子、大井康之、侯衣静、○藤田裕之、浦田秀則 | p421 |
| Antiobesity effects of Chinese black tea (Pu-erh tea) extract and gallic acid. | 共著 | 平成24年 | Phaytother. Res., 26 | 大井康之、侯衣静、○藤田裕之、矢澤一良 | p475 |
| A hair growth promoting effect chinese black tea extract in mice. | 共著 | 平成25年 | Biosci. Biotechnol. Biochem., 77 | 侯衣静、大井康之、○藤田裕之、矢野善久、深見治一、吉川正明 | p1606 |
| その他 | | | | | |
| Nutritional Function Claims on Japanese Food Labels: “Foods for Specified Health Uses”, “Foods with Nutrient Function Claims” and the Newly Instituted “Foods with Function Claims” | 単著 | 平成30年 | JAS4QoL - Volume 4(3) | ○藤田裕之 | |
| 低分子でも高分子でもない医薬品の開発 | 単著 | 平成28年 | 生物工学<br>第96巻7号 | | |
| 植物性食品素材由来のα-グルコシダーゼ阻害物質の探索 | 共著 | 平成28年 | 日本農芸化学会<br>2018年度大会 | 濱田麻衣佳、深見治一、矢野善久、○藤田裕之 | |
| 豆鼓(トウチ)エキスによる糖尿病予防、高脂血症改善作用 | 単著 | 平成18年 | 日本糖尿病学会<br>第48回学術集会 | | |
| かつお節由来血圧降下ペプチドの開発 | 単著 | 平成20年 | 日本高血圧学会<br>第31回大会 | | |
| 黒茶エキスによる脂質異常症改善作用 | 単著 | 平成21年 | 日本肥満学会<br>2009年度大会 | | |
| 食品タンパク由来のペプチドと健康 | 単著 | 平成22年 | 日本ペプチド学会市民フォーラム2010 | | |
| For management of blood glucose and triglyceride levels “Touchi Extract” | 単著 | 平成22年 | Supply Side West (Las vegas) | | |
| Touchi extract for management the blood glucose and triglyceride levels | 単著 | 平成23年 | The International Society for Nutraceuticals and Functional Foods (ISNFF)2011 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

日本農芸化学会関西支部参与

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

食品の機能性、特に血圧、血糖、中性脂肪、コレステロール、肥満に関連した研究。

機能性を示す成分の単離、構造解析、構造活性相関に関する研究。

食品からの機能性成分の抽出や、最終製品までの製品化に関する研究。

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属 | バイオ環境　学部 | 職名　　教授 | 氏名　　松原　守 | 大学院における研究指導担当資格の有無　　（有）・無） |
|---|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 講義資料の工夫 | 2006年4月～ | 細胞生物学、生物学、健康食品学などの授業において分かりやすい教材を作成するとともに、動画などを用いることで視覚化して理解度を深めるように努力した。毎回演習問題を作成し、学生にその場で解答してもらうことにより復習効果を高めている。 |
| 講義レポートを活用した学習効果の向上 | 2006年4月～ | バイオサイエンス概論、細胞生物学、生物学などにおいて毎回の授業の最後に授業内容に関する要点や質問事項を書かせ、個々の学生の取り組み方、理解度をチェックし成績評価にも反映させた。理解不足の学生に対しては次回授業やオフィスアワーを用いて理解させるようにフォローしている。 |
| 基礎学力の習得を目指した授業の実施 | 2006年4月～ | フレッシュマンセミナー（現在はスタートアップゼミ）において国語力の向上のために毎回作文の課題を与えた。また、科学情報の検索方法、プレゼンテーション能力、科学倫理、情報リテラシー教育を行っている。 |
| Webフォルダーを用いた教材資料の配布 | 2006年4月～ | バイオサイエンス概論、細胞生物学、生物学、健康食品学において授業に用いたスライドを学内共通フォルダーで公開することで、学生が授業資料にアクセスしやすいようにしている。 |
| 学生による授業評価の実施 | 2007年10月～ | 大学が実施している授業評価アンケートにおいて、細胞生物学、科学英語、専門外書講読など担当科目で、毎年いずれも5点満点で平均4点以上であった。直近である2017年度の細胞生物学では総合評価が5点満点中4.45点で大学平均3.77点より大きく上回っていた。 |
| 実習科目での学生の能力を高める工夫 | 2008年4月～ | 生化学実験、遺伝子化学実験、分子生物学実験において実験テーマに関してグループ発表会を行い、学生の理解度とグループのメンバーと協力して課題を探求する機会を与えている。実習最終日には実験理解度の確認試験を行い、実習で得られた技術や知識を再確認させている。 |
| 自主ラボによる学生の自主的学習、 | 2008年4月～ | 学生の自主性を育むために、研究に興味ある学生に1年次から研究室に呼び実験の指導を行っている。 |
| 大学院進学学生への学習支援 | 2009年4月～ | 主に国公立大学の大学院をめざす学生に対して定期的に英語および専門科目の補習を行っている。 |
| 看護師養成学科、専門学校での国家試験対策 | 2011年4月～ | 南丹看護専門学校では生命科学、京都学園大学健康医療学部看護学科では薬理学の授業を担当し、毎回の授業で国家試験対策用の問題を解答させ、そのフォローアップをしている。 |
| 健康食品管理士の資格取得のためのサポート | 2013年4月～ | 一般社団法人日本食品安全協会が認定する健康食品管理士の資格取得のための科目群を立ち上げ、健康食品管理士養成のためのサポートを行っている。特に健康食品学の授業の中と課外授業で試験対策をしている。 |
| ベストティーチャー賞受賞 | 2014年3月<br>2015年3月 | 2014年度、2015年度においてベストティーチャー賞を受賞した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 京都学園大学バイオ環境学部基礎バイオサイエンス実験実習書 | 2007年9月～ | 2回生の基礎バイオサイエンス実験の実習書を作成した。 |
| 京都学園大学バイオ環境学部分子生物学実験実習書 | 2012年5月～ | 3回生の分子生物学専門実験の実習書を作成した。 |
| 京都学園大学バイオ環境学部生物学実験実習書 | 2015年10月～ | 1回生の生物学専門実験の実習書を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 高校での出張講義および教養講座での講義 | 2006年4月～ | 毎年、各高校や市民講座において以下のテーマについて出張講義を行っている。<br>「バイオと医療」、「生命の設計図　遺伝子」、「バイオで何ができるか？」<br>「生命の万能マシン「タンパク質研究」の最前線ーゲノムからプロテオームへー」「身近にあるバイオの発見と夢のバイオの創造と期待」 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Effectiveness of exersize-induced cytokines in allevisting arthritis sympotoms in arthritis mice. | 共著 | 2016年12月 | Okajimas Folia Anat. Jpn. | Kito, T., Teranishi, T., Nishii, K., Sasaki, K., Matsubara, M. and Yamada, K. | P81-P88 |
| 脂質修飾を狙う病原菌の細胞乗っ取り戦略 | 単著 | 2017年3月 | 生物工学会誌 | | p143 |
| Effect of shaking and vibration stimulation on lumbar vertebrate in ovariectomized mice. | 共著 | 2019年3月 | Fujita Medical Journal | Kito, T., Nishii, K., Yao, R., Teranishi, T., Sugiyama, T., Sakai, K., Matsubara, M. and Yamada, K. | https://doi.org/10.20407/fmj.2018-006 |
| その他（学会発表） | | | | | |
| 細胞内シグナル伝達分子を標的とした機能性食品の開発 | 単 | 2015年3月 | 京都府農林水産技術センター研究交流会(亀岡) | | |
| 卵白ペプチドの筋肥大へ与える影響 | 共 | 2015年3月 | 日本農芸化学会2015年度大会（岡山） | 坂下真耶, 松原守, 山下裕輔, 丸勇史, 吉國義明, 金武祚 | |
| 関節炎モデルマウスがマイオカインにより症状が緩和されるかについての有効性の検討 | 共 | 2015年12月 | Biochemistry and Molecular Biology (BMB) 2015 | 山田晃司, 鬼頭巧、西井一宏, 酒井一由, 寺西利生, 松原　守 | |
| 卵白ペプチドにより誘起されるカルシウムシグナルが筋肥大を促進する | 共 | 2015年12月 | Biochemistry and Molecular Biology (BMB) 2015 | 松原守, 鈴木智之, 坂下麻耶, 原田清佑 | |
| 卵白ペプチドによるカルシウムシグナルの活性化が筋肥大を促進する | 共 | 2016年9月 | 日本生化学会第89年会（仙台） | 松原守, 鈴木智之, 坂下麻耶, 伊納義和, 古野忠秀, 堀江健二 | |
| 薬と健康食品のウソ？ホント？～これらと上手に付き合うために～ | 単 | 2016年10月 | 京町家新柳居市民講座 | | |
| ミリストイル化タンパク質BASP1とHDAC1の核内での相互作用 | 共 | 2016年12月 | 日本分子生物学会第39年会（横浜） | 松原　守, 菊池佑一, 鈴木智之, 兼子麻子, 中村正彦 | |
| 卵白ペプチドによる運動模倣効果が筋肥大を促進する | 共 | 2017年3月 | 日本農芸化学会2017年度大会（京都） | 松原守, 鈴木智之, 坂下麻耶, 伊納義和, 古野忠秀, 堀江健二, 金武祚 | |
| 老齢モデルマウスにおける振動振盪刺激による腰椎への影響 | 共 | 2017年12月 | 2017年度生命科学系学会合同年次大会(ConBio2017)（神戸） | 鬼頭 巧, 西井 一宏, 姚 潤宏, 寺西 利生, 杉山 智久, 酒井 一由, 松原 守, 山田 晃司 | |
| 骨密度低下モデルマウスを用いて骨粗鬆症を予防する新規刺激法の検討 | 共 | 2017年12月 | 2017年度生命科学系学会合同年次大会(ConBio2017)（神戸） | 姚 潤宏, 西井 一宏, 鬼頭 巧, 寺西 利生, 杉山 智久, 酒井 一由, 松原 守, 山田 晃司 | |
| 野菜抽出物によるパーキンソン病原因タンパク質α-synucleinの凝集阻害効果 | 共 | 2017年12月 | 2017年度生命科学系学会合同年次大会(ConBio2017)（神戸） | 松原 守, 井上 宮銘, 深見 治一 | |
| 変革する製薬業界と新たな産業形成 ～バイオテクノロジーの世界 Vol.1 | 単 | 2017年12月 | 沢井製薬オウンドメディア「SCIENCE SHIFT」連載第1回 | | |
| 外資系製薬会社へ就職するということ　働きかた、厳しさとメリットとは Vol.2 | 単 | 2018年1月 | 沢井製薬オウンドメディア「SCIENCE SHIFT」連載第2回 | | |
| バイオベンチャーに挑む。仲間とともに形にしていくプロセスを Vol.3 | 単 | 2018年2月 | 沢井製薬オウンドメディア「SCIENCE SHIFT」連載第3回 | | |
| 医療・ヘルスケアにおける新潮流―オープン・イノベーション、中分子医薬品、予防医学　Vol.4 | 単 | 2018年3月 | 沢井製薬オウンドメディア「SCIENCE SHIFT」連載第4回 | | |
| 医薬品業界への就職の道　求められるスキル、意識と覚悟　Vol.5 | 単 | 2018年5月 | 沢井製薬オウンドメディア「SCIENCE SHIFT」連載第5回 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 1990年4月～現在 | 日本生化学会会員 |
| 1990年4月～現在 | 日本薬学会会会員 |
| 1996年4月～現在 | 日本分子生物学会会会員 |
| 2008年4月～2015年3月 | 日本質量分析学会会員 |
| 2012年4月～現在 | 日本食品安全協会会員 |
| 2012年4月～現在 | 健康食品管理士会会員 |
| 2013年10月～現在 | 日本農芸化学会会員 |
| 2014年11月～現在 | 日本生化学会評議員 |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| タンパク質及び遺伝子の機能解析。質量分析を用いたプロテオーム解析。タンパク質のX線結晶構造解析。 |
| リン酸化プロテオーム解析による細胞内シグナル伝達系の機能評価。 |
| バイオベンチャー、医薬品関連企業に関する技術経営相談。 |
| 細胞内シグナル伝達分子を標的とした医薬品および機能性食品の開発 |
| 正しい薬の飲み方の知識を提供する薬剤師としての指導業務。 |
| 食の安全、安心、健康問題に対して正しい知識を提供する上級健康食品管理士としてのアドバイザリースタッフの役割。 |
| スポーツファーマシストとしてアンチドーピング活動 |
| 環境ゲノミクス・環境プロテオミクス解析。プロテオーム解析による機能性食品の評価。 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　教授 | 氏名　矢野　善久 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| (1)ゼミ | 2006年4月～ | 1回生を対象とするスタートアップゼミにおいて，日本語，英語，化学，レポート作成法等の今後の大学での学習に必要な基礎学力の育成に取り組んでいる。少人数制の特長を生かして学生一人一人の学習履歴や理解度に応じた木目の細かい指導に心がけており，演習，ディベートなどを取り入れた双方向型の授業も行っている。 |
| (2)講義 | 2007年4月～ | 1回生を対象とした生物学，2回生を対象とした食品安全学，生理学および3回生を対象とした生体栄養科学，健康食品学では，独自のスライドを作成し，興味をそそる授業の提供に心がけている。また，学内のネットワーク環境を利用し，講義資料や独自に作成した演習問題の提供や演習問題レポートの回収を行い，授業時間以外の学習を支援している。演習問題としては解答を義務化した基礎問題と自由選択の発展問題を用意し，学習意欲や理解度の多様性に対応している。 |
| (3)実験 | 2007年10月～ | 2回生を対象とした基礎バイオサイエンス実験では生体成分の定量および酵素反応速度論を，また3回生を対象とした食品・栄養科学実験では食品成分の分離・精製，実験動物の取り扱い，微生物管理をテーマに実習を実施している。 これらの実習を通して，理論だけでなく実践的な生体成分の定性・定量分析法を習熟できるように内容を吟味し提供している。 |
| (4)京都学園大学授業評価アンケート | 2007年11月～ | アンケート対象になっている食品安全学，生理学および生体栄養科学において平均点以上の高い総合評価を得た。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| (1)講義用スライドおよびプリント | 2006年4月～ | 担当したすべての講義における資料として自作プリントを配布し，授業を行った。また，授業に用い自作スライドは学内のネットワーク環境を利用し受講者全員に配信し，自宅学習を支援した。 |
| (2)基礎バイオサイエンス実験用の実験書 | 2007年9月～ | 基礎バイオサイエンス実験におけるビタミンC定量法およびインベルターゼの酵素反応速度に関するの実験マニアルを作成し，実習に用いた。 |
| (3)演習問題集 | 2007年9月～ | 食品安全学，生理学，生体栄養科学，栄養学，健康食品学および生物学学では自宅学習の支援を目的に演習問題集を作成し，ネットワーク環境を利用して，受講者全員に配信した。 |
| (4)食品・栄養科学実験用の実験書 | 2007年4月～ | 食品・栄養科学実験における酵素化学実験，衛生管理実験および動物実験のマニアルを作成し，実習に用いた。 |
| (5)生物学実験用の実験書 | 2015年9月～ | 生物学実験における微生物学実験，分析化学実験，酵素化学実験および動物実験のマニアルを作成し，実習に用いた。 |
| (6)健康食品管理士受験用の模擬試験 | 2015年9月～ | 健康食品管理士の資格取得をサポートするために5回分の模擬試験を作成し，希望者に配布し，採点・評価した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| （講演）<br>食品機能研究の現状と未来<br>（健康機能性成分の話） | 単独 | 2015年6月 | 京都学園大学バイオ環境学部・高校教員支援研修会（第1回） | | |
| （講演）<br>豆の機能性について | 単独 | 2016年3月 | 京丹波町の道の駅「和」・近畿農政局主催 「京丹波町小豆・黒大豆生産者大会」 | | |
| （講演）<br>元気の出る栄養の話 | 単独 | 2016年3月 | 千歳町自治会館<br>千歳町自治会主催 「いきいき健康講座」 | | |
| （講演）<br>食と健康<br>～食品成分の健康効果を考える～ | 単独 | 2016年9月 | 京都学園大学京町家「新柳居」<br>京町家新柳居市民講座 | | |
| （口頭発表）<br>植物性食品素材由来のα-グルコシダーゼ阻害物質の探索 | 共 | 2018年3月 | 2018年度日本農芸化学会大会 | 濱田麻衣佳，矢野善久，深見治一，藤田裕之 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | 日本生化学会 |
| | 日本分子生物学会 |
| | 日本ビタミン学会 |
| | Antioxidant Unit研究会 |
| | 亀岡市教育研究所企画運営委員会委員 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

食品成分、生体成分等の分析および生理機能解析

・核酸関連：PCR、組み換えDNA技術、シーケンス等

・タンパク関連：2次元電気泳動、プロテオーム解析、カラムクロマト、ペプチドシーケンス、ウエスタンブロット等

・その他：動物実験、細胞培養技術、HPLC、GC等

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　特任教授 | 氏名　若村　定男 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | 2013.09-2013.01 | 「昆虫の科学」および「化学生態学」の授業で使う資料を1週間前に配布してあらかじめ目を通してから授業に臨むように促した |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Attraction of males of the cupreous polished chafer Protaetia pryeri pryeri (Janson) (Coleoptera: Scarbaeidae) for pollination by an epiphytic orchid | 共 | 2016年5月 | Applied Entomology and Zoology Vol 51 | Arakaki, N., K. Yasuda, S. Kanayama, S. Jitsuno, M. Oike and S. Wakamura | 241-246. |
| Male white grub beetles prefer the pheromone composition of young females in the field. | 共 | 2016年11月 | Bulletin of Entomological Research Vol 106 | Fujiwara-Tsujii N; Yasui H; Wakamura S; Nagayama A; Arakaki N | 679-684 |
| Ground-surface application of pheromones through a mini-dispenser for mating disruption of the white grub beetle Dasylepida ishigakiensis (Coleoptera: Scarabaeidae). | 共 | 2017年2月 | Applied Entomology and Zoology Vol 52 | rakaki, N., A. Nagayama, K. Kijima, H. Yasui, N. Tsujii N, S. Tanaka, M. Ueda, S. Kanayama, K. Kawaguchi, S. Jitsuno, M. Oike, K. Watanabe, S. Wakamura, F. Mochizuki, R. Saguchi, T. Fujji, T. Naito | 159–164 |
| Do the amount of sex pheromone and frequency of calling behavior in females affect the mate-searching behavior of males in Dasylepida ishigakiensis (Coleoptera: Scarabaeidae)? | 共 | 2017年5月 | Applied Entomology and Zoology Vol 52 | Yasui H; Fujiwara-Tsujii N; Tanaka S; Wakamura S; Arakaki N | 337–343 |
| Mate-searching behavior of the black chafer Holotrichia kiotonensis (Coleoptera: Scarabaeidae): identification of a sex pheromone and male oritentation behavior controlled by olfactry and visual cues. | 共 | 2017年8月 | Applied Entomology and Zoology Vol 52 | Oike M; Kanayama S; Wakamura S | 519-526 |
| Contact sex pheromone activity of synthetic Gomadalactones in male white-spotted longhorn beetle, Anoplophora malasiaca (Coleoptera: Cerambycidae). | 共 | 2019年5月 | Journal of Chemical Ecology Vol 45 | Oike M; Kanayama S; Wakamura S | 440–446. |

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| その他 | | | | | |
| (口頭発表)<br>ボウランによるリュウキュウツヤハナムグリオスの送粉のための誘引 | 共 | 2015年3月 | 第58回日本応用動物昆虫学会大会(山形市)講演 | 新垣則雄・安田慶次・金山祥子・實野早紀子・若村定男 | 要旨 p. 15. |
| (口頭発表)<br>リュウキュウツヤハナムグリのオスを誘引するボウランの匂い物質の探索 | 共 | 2015年3月 | 第58回日本応用動物昆虫学会大会(山形市)講演 | 金山祥子・新垣則雄・若村定男 | 要旨 p. 15. |
| (招待講演)<br>ケブカアカチャコガネの性フェロモン成分の解明 | 共 | 2015年3月 | 第58回日本応用動物昆虫学会大会(山形市)講演 | 若村定男 (若村の母死去につき、農業生物資源研究所安居拓恵代理発表) | 要旨 p. 215. |
| (事業受託)<br>「イネヨトウの交信かく乱法による防除技術普及事業」に関わる委託業務 | 共 | 2014年5月～<br>2015年3月 | 沖縄県<br>(興南施設管理株式会社) | 若村 定男 | |
| (口頭発表)<br>クロコガネの性フェロモンとオスの定位行動. | 共 | 2016年3月 | 日本昆虫学会第76回大会・第60回日本応用動物昆虫学会大会 合同大会(堺市)講演 | 大池昌裕・金山祥子・若村定男・松山 茂 | 要旨 p. 5. |
| (事業受託)<br>「イネヨトウの交信かく乱法による防除技術普及事業」に関わる委託業務 | 共 | 2015年5月～<br>2016年2月 | 沖縄県<br>(興南施設管理株式会社) | 若村 定男 | |
| (口頭発表)<br>ケブカアカチャコガネの10倍放出製剤による交信攪乱効果. | 共 | 2017年3月 | 第61回日本応用動物昆虫学会大会(小金井市)講演 | 嘉数若子・新垣則雄・貴島圭介・守屋伸生・永山敦士・内藤尚之・安居拓恵・辻井直・若村定男 | 要旨 p. 110. |
| (口頭発表)<br>農業試験場から専門場所, そして大学で生き続けるもの. | 単 | 2017年3月 | 第61回日本応用動物昆虫学会大会(小金井市)小集会:温故知新・昆虫生態学の先輩から学ぶ(4) 石井象二郎先輩と愉快な仲間 | 若村 定男 | 要旨 p. 202. |
| (口頭発表)<br>リュウキュウツヤハナムグリのオスを誘引するボウランの花香成分の同定:リュウキュウツヤハナムグリに化学擬態するボウラン | 共 | 2018年3月 | 第62回日本応用動物昆虫学会大会(鹿児島市)講演 | 森山太介・新垣則雄・金山祥子・大池昌裕・小野裕嗣・安居拓恵・若村定男 | 要旨 p. 120. |
| 合成性フェロモン交信攪乱剤の開発 ～シロイチモジヨトウとケブカアカチャコガネ～ | 単 | 2018年9月 | 第25回日本環境動物昆虫学会セミナー | 若村定男 | 要旨集 p. 1-2. |
| フェロモントラップによるハスモンヨトウのモニタリング ～見えたものと見えないもの～ | 単 | 2019年3月 | 第26回日本環境動物昆虫学会セミナー | 若村定男 | 要旨集 p. 4-5. |
| リュウキュウツヤハナムグリのオスを誘引するボウランの花香成分: 2,3-DHPiVによるハナムグリの誘引 | 共 | 2019年3月 | 第63回日本応用動物昆虫学会大会(つくば市)講演 | 若村定男・森山太介・木村杏那・和島沙季・新垣則雄 | 要旨 p. 99. |
| イシガキシロテンハナムグリ宮古亜種のオスを誘引するボウランの花香成分: ボウランはハナムグリに化学擬態している? | 共 | 2019年3月 | 第63回日本応用動物昆虫学会大会(つくば市)講演 | 森山太介・木村杏那・和島沙季・新垣則雄・金山祥子・大池昌裕・小野裕嗣・安居拓恵・若村定男 | 要旨 p. 99. |
| ゴマダラカミキリの接触性フェロモン成分ゴマダラクトン類の活性評価 | 共 | 2019年3月 | 第63回日本応用動物昆虫学会大会(つくば市)講演 | 辻井 直・安居拓恵・安田哲也・若村定男・秋野順治・深谷緑・鈴木敏夫・萩原久大・星 隆・小野裕嗣 | 要旨 p. 100. |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

合成性フェロモン剤の使用方法

昆虫(害虫)の性フェロモンなどの行動制御物質解明

花香成分など揮発性物質の捕集と微量分析法

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　清水　伸泰 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有）・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 学生による授業評価の活用 | 2015年4月～ | 学生による授業評価アンケート結果をできるだけ反映させるよう努めている。授業の一方通行を防ぐため、学生の理解度と習熟度を細かくチェックしている。例えば、多少進度は遅くなっても前回授業の復習、小テスト、練習問題を解答する時間を授業毎に設けている。このことで、学習者間のレベルの不均衡を最小限にでき、かつ授業レベルを調整している。 |
| 予習、復習を義務化し、毎授業小テストを実施する外書購読 | 2015年4月～ | スクリーンに映し出した英文をゆっくりと読んでいく授業のスタイル。各授業において、適量の文章を受講生のほぼ半数の学生に割り当てて和訳させ、予習していることを確認する。次週の授業で、先週の授業内容および単語の理解度テストを行う。理解度テストを採点後、返却し、授業内容の復習とポイントの解説を行う。 |
| 専門知識の習得を目指した演習 | 2015年4月～ | 卒業研究に必要な機器分析データ解析の方法と英文読解（科学論文）の授業を、一年を通して行っている。前者は演習問題を解答するスタイルであるが、4回生までの有機化学の受講状況で各学生の理解度に大きな差が出るため、できるだけポイントを絞って、短時間で重要な事項が理解できるよう工夫して解説している。英文読解は、科学英文をただ直和訳するのではなく、卒業研究への理解が深まるように、実際の実験手法を考察している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 基礎バイオサイエンス実験テキスト | 2007年9月～ | 週2回（全6回）（現在は週1回、全3回）の2回生配当の基礎バイオサイエンス実験のテキストを作成している。有機合成に関する実験テーマについて目的、方法、考察すべき事項を分かりやすくまとめている。 |
| 有機化学実験テキスト | 2008年4月～ | 週4回（全20回）の3回生配当の有機化学実験のテキストを作成している（2012年度以降は全15回）。5つの実験テーマ（2012年度以降は4つ）についてそれぞれ目的、方法、考察すべき事項をまとめている。また、実験で使用する器具、装置等について図および写真入りで解説している。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 高校での出張講義（合計6回） | 2015年4月～ | 各高校において次のテーマについて出張講義を行った。<br>「身の回りの化学」「生理活性物質の有機化学」「身の回りの生理活性物質」「生物現象を化学の視点で見る」「分子のレベルでみるバイオサイエンス」「生物や生活に関連する有機化合物とその機能」他 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 高大連携事業の大学体験プログラムの講師 | 2015年11月 | 「昆虫や植物が作り出す有機分子を分子模型で作ってみよう」のタイトルで高校一年生を対象として、講義を行った。高校の化学の教科書に頻出する有機分子を例に挙げ、分子模型を使って実際に分子を作る実習を行った。 |
| | 2016年 6月 | 「昆虫や植物が作り出す有機分子を分子模型で作ってみよう」のタイトルで高校一、二年生を対象として、講義を行った。昆虫と植物に関連する有機分子を例に挙げ、分子模型を使って実習を行った。また、分子模型で作った特定分子の融点測定を行った。 |
| | 2016年 11月 | 「人の暮らしに役立つ有機分子」のタイトルで高校一年生を対象として、講義を行った。生活の身近なものから動物や植物が作り出す生理活性物質まで様々な有機分子を例に挙げ、分子模型を使って実習を行った。 |
| | 2017年 11月 | 「天然物は安全で合成物は危険？～人の暮らしに役立つ有機分子を中心に～」のタイトルで高校一年生を対象として、講義を行った。身近な天然物と合成品を例に挙げ、利用法や安全性などを分子模型を使いながら解説した。 |
| | 2018年 6月 | 「生き物が作り出す薬と毒～魅力あふれる有機分子～」のタイトルで高校一～三年生を対象として、講義を行った。昆虫や植物が作り出す有用な有機化合物を取り上げ、その機能や分子構造を分子模型を使いながら概説した。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| その他教育活動上特記すべき事項(続き) | | |
| 中高生のための科学研究実践推進プログラム<br>(旧SPP)の講師 | 2014年 9月<br>2015年 9月<br>2016年 9月<br>2017年 7月<br>2018年 7月<br>2019年 6月 | 園部高校1年生を対象に、「生物の行動を操る有機分子～有機化学の基礎から研究まで～」をテーマとして、講演を行った。昨年度の講演内容に最新の研究トピックスをいくつか盛り込んだ。 |
| | 2013年 2月<br>2016年 1月<br>2017年 1月<br>2017年 12月<br>2018年 12月 | 園部高校1年生を対象とした、課題研究の発表会に参加した。班毎の課題研究発表を聞き、それらに対して講評した。 |
| グローバルサイエンスの講師 | 2015年 2月<br>2015年 11月<br>2016年 2月 | 亀岡高校で行われた数学・生物・化学・物理・地学分野の課題研究を参観した(11月)。化学と物理、数学分野を中心にコメントおよびアドバイスをした。発表会(2月)に参加し、班毎の課題発表を聞き、講評した。 |
| バイオ環境賞(高校生論文コンテスト)の審査責任者 | 2015年 11～12月<br>2016年 11～12月<br>2017年 11～12月<br>2018年 11～12月 | 高等学校からの応募作品(研究・調査論文)を評価する審査委員長を務めた。関連分野の当学部の教員に審査を依頼し、評価していただいた。それらを取りまとめ、最優秀・優秀賞、佳作を決定し、審査コメントと共に審査結果を各高等学校にお渡しした。 |
| シラバス作成 | 2015年 4月～ | バイオ環境概論(バイオサイエンス概論)、有機反応機構論、有機機器分析学、専門外書講読のシラバスを作成し、毎年、小改訂を続けている。 |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Alarm pheromone activity of nymph-specific geraniol in chrysanthemum lace bug *Corythucha marmorata* (Uhler) against adults and nymphs | 共 | 2015年9月 | Natural Product Communications, 10 | Watanabe, K., Shimizu, N. | 1495-1498 |
| Identification of esters as novel aggregation pheromone components produced by the male powder-post beetle, *Lyctus africanus* Lesne (Coleoptera: Lyctinae) | 共 | 2015年11月 | PLoS One, 10 | Kartika, T., Shimizu, N., Yoshimura, T. | e0141799 |
| Identification and synthesis of (*Z,Z*)-8,11-heptadecadienyl formate and (*Z*)-8-heptadecenyl formate: Unsaturated aliphatic formates found in the unidentified astigmatid mite, *Sancassania* sp. Sasagawa (Acari: Acaridae) | 共 | 2016年5月 | Molecules, 21 | Shimizu, N., Sakata, D., Miyazaki, H., Shimura, Y., Kuwahara, Y. | 619-627 |
| Biosynthetic pathway of aliphatic formates *via* a Baeyer-Villiger oxidation in mechanism present in astigmatid mites | 共 | 2017年3月 | PNAS, 114 | Shimizu, N., Sakata, D., Schmelz, E.A., Mori, N., Kuwahara, Y. | 2616-2621 |
| Identification of a sex pheromone of the chrysanthemum lace bug Corythucha marmorata (Hemiptera: Tingidae) | 共 | 2017年6月 | Scientific Reports, 7 | Shimizu, N., Sakata, D., Schmelz, E.A., Mori, N., Kuwahara, Y.Watanabe, K., Shimizu, N. | 7302 |
| 外来グンバイムシの最新ケミカル・エコロジー | 単 | 2018年2月 | 京都学園大学<br>総合研究所所報、第19号 | 清水 伸泰 | 31-40 |
| ダニと昆虫の多機能フェロモンとその活用術 | 単 | 2018年12月 | 昆虫と自然<br>特集「昆虫のフェロモン」、53号 | 清水 伸泰 | 4-7 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他(学会発表) | | | | | |
| 小さな生き物が出す匂いの役割 | 単 | 2015年1月 | シニア自然大学校<br>地球環境「自然学」講座 | 清水 伸泰 | |
| アワダチソウグンバイの性フェロモンの由来とセイタカアワダチソウ揮発成分の若虫に対する誘引活性 | 共 | 2015年3月 | 日本農芸化学会<br>2015年度大会 | 渡邊 綺咲, 清水 伸泰 | |
| フェロモン活性を有するトゲナシシロトビムシ由来ピリドピラジンの生合成前駆体 | 共 | 2015年3月 | 日本農芸化学会<br>2015年度大会 | 清水 伸泰, 糸井 瑞希, 荻野 佳稀 | |
| コナダニ*Sancassania*属が放出する揮発成分～溶媒抽出法とSPME法の比較～ | 共 | 2015年5月 | 第38回<br>日本土壌動物学会 | 清水 伸泰, 寺本 研太 | |
| アワダチソウグンバイ *Corythucha marmorata* の警報及び性フェロモンの生成機構 | 共 | 2015年11月 | 第27回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 渡邊 綺咲, 清水 伸泰 | |
| サトウダニが生産する不飽和炭化水素(*Z,Z*)-6,9-heptadecadiene の生合成酵素の同定 | 共 | 2015年11月 | 第27回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 森山 太介, 清水 伸泰 | |
| コナダニ類が生産する不飽和炭化水素の生合成 | 共 | 2016年3月 | 日本農芸化学会<br>2016年度大会 | 森山 太介, 森 直樹,<br>桑原 保正, 清水 伸泰 | |
| *Caloglyphus rodriguezi* における炭化水素の生合成経路の探索 | 共 | 2016年3月 | 日本農芸化学会<br>2016年度大会 | 小木曽 浩也, 中田 隆, 吉永 直子,<br>小野 肇, 桑原 保正,<br>清水 伸泰, 森 直樹 | |
| 八重山諸島に生息する日本最大級のヤスデ *Spirobolus* sp. の防御物質 | 単 | 2016年6月 | 第39回<br>日本土壌動物学会 | 清水 伸泰 | |
| Unique chemistry in mites | 共 | 2016年9月 | 2016 XXV<br>International Congress of Entomology | Naoki Mori, Nobuhiro Shimizu,<br>Yasumasa Kuwahara | |
| コナダニ由来の炭化水素生合成酵素の酵素学的諸性質 | 共 | 2016年11月 | 第28回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 森山 太介, 清水 伸泰 | |
| トゲナシシロトビムシ由来のフェロモン機能を有するピリドピラジンの生合成機構 | 共 | 2016年12月 | 日本農芸化学会 関西支部例会<br>(第497回講演会) | 荻野 佳稀, 糸井 瑞希, 清水 伸泰 | |
| サトウダニ *Carpoglyphus lactis* における脂肪族アルデヒドを基質とする炭化水素生合成酵素の探索 | 共 | 2017年3月 | 日本農芸化学会<br>2017年度大会 | 森山 太介, 森 直樹,<br>桑原 保正, 清水 伸泰 | |
| コナダニの多様な分泌物の生合成に関する新知見 | 単 | 2017年5月 | 第40回<br>日本土壌動物学会 | 清水 伸泰 | |
| Exploration of Fungi for Their Potential Compound as Bio-attractant In Managing Wood-attacking Organisms | 共 | 2017年7月 | The 2nd Asia Research Node Symposium on Humanosphere Science | Anis S. Lestari, Deni Zulfiana,<br>Ni Putu Ratna Ayu Krishanti,<br>Apriwi Zulfitri, Titik Kartika,<br>S. Khoirul Himmi, Sulaeman Yusuf,<br>Tsuyoshi Yoshimura,<br>Nobuhiro Shimizu, Aya Yanagawa | |
| Unusual mechanism of aliphatic formate formation closely related to hydrocarbon formation in the astigmatid mite, Sancassania sp. Sasagawa | 共 | 2017年8月 | The joint meeting of the 33rd Annual Meeting of the ISCE and the 9th meeting of the APACE | Nobuhiro Shimizu, Daisuke Sakata,<br>Naoki Mori, and Yasumasa Kuwahara | |
| 外来種アワダチソウグンバイにおける性フェロモンの機能およびフェロモン量の経時的変化 | 共 | 2017年11月 | 第29回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 清水 伸泰, 渡邊 綺咲 | |
| シキミグンバイ若虫分泌物に含まれる抗菌活性物質の探索 | 共 | 2018年3月 | 日本農芸化学会<br>2018年度大会 | 高原 千尋, 清水 伸泰 | |
| 脂肪族ギ酸エステルの生合成に関わるコナダニ由来Baeyer-Villiger酸化酵素の探索 | 共 | 2018年3月 | 日本農芸化学会<br>2018年度大会 | 荒谷 剛史, 森山 太介, 森 直樹, 桑原<br>保正, 清水 伸泰 | |
| 日本産タマヤスデの防御分泌物に含まれるアルカロイドとタンパク質 | 共 | 2018年5月 | 第41回<br>日本土壌動物学会 | 清水 伸泰, 井上 萌佳, 小野 淳也 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（学会発表 続き） | | | | | |
| 微小な衛生・不快害虫のフェロモン研究からわかってきたこと | 単 | 2018年9月 | 第25回<br>日本環境動物昆虫学会セミナー<br>「これからの駆除処理・殺虫剤の動向 VII」 | 清水 伸泰 | |
| 節足動物の防御物質を用いた殺虫および殺ダニ効果の検証 | 共 | 2018年11月 | 第30回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 清水 伸泰, 小野 淳也, 平坂 高一,<br>市川 直美, 川瀬 穂高 | |
| シキミグンバイ若虫分泌物に含まれる抗菌活性物質の構造活性相関研究 | 共 | 2018年11月 | 第30回<br>日本環境動物昆虫学会<br>年次大会 | 高原 千尋, 清水 伸泰 | |
| ワラジムシ由来の防御物質キナルジン酸誘導体の同定と生物活性評価 | 共 | 2019年3月 | 日本農芸化学会<br>2019年度大会 | 永井禎己、石丸善明、<br>唐澤重考、清水伸泰 | |
| シキミグンバイ若虫分泌物とその類縁体の抗菌活性評価 | 共 | 2019年3月 | 日本農芸化学会<br>2019年度大会 | 高原 千尋, 清水 伸泰 | |
| コナダニ類の警報フェロモンneryl formate分子を形成するギ酸の生合成 | 共 | 2019年3月 | 日本農芸化学会<br>2019年度大会 | 森山太介、吉田直樹、清水伸泰 | |
| コナダニ類における多機能フェロモン | 単 | 2019年5月 | 第42回<br>日本土壌動物学会 | 清水 伸泰 | |
| 良いチーズを熟成するチーズコナダニ *Tyrolichus casei* Oudemans, 1910 (Acariformes: Sarcoptiformes: Acaridae)の分子系統解析 | 共 | 2019年6月 | 日本動物分類学会<br>第55回大会 | 島野智之、蛭田眞平、清水伸泰 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2016月1月～2017月7月 | The International Society of Chemical Ecology (ISCE) 2017 33rd Annual Meeting 大会実行委員 |
| 2016月1月～2017月3月 | 日本農芸化学会2017年度大会 大会実行委員（シンポジウム委員）、プログラム編集作業 |
| 2015月1月～2020月12月 | 日本環境動物昆虫学会 理事・評議員 |
| 2015月1月～2018月12月 | 日本環境動物昆虫学会 企画委員 幹事 |
| 2019月1月～2020月12月 | 日本環境動物昆虫学会 企画委員長 |
| | 国際化学生態学会会員 |
| | 日本農芸化学会会員 |
| | 日本環境動物昆虫学会会員 |
| | 日本土壌動物学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

低分子化合物の化学合成

化学物質の構造決定（NMR、GC/MS、LC/MS他）

土壌動物や昆虫における生理活性物質（フェロモン・防御物質等）の同定

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　プリエト ラファエル | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 総合英語・科学英語基礎I-II(科学英語I-II) | 2006年度～ | パワーポイント、黒板、CD教材を用いた総合学習を実施した。科学英語Iでは、プレースメントテストを実施し、英語の習熟度に応じたクラス分けをした。科学英語IIでは、科学英語Iの成績をもとにクラスの再編成をした。講義では、高校までの英語を復習すると同時に、自然科学論文を中心によく使われる英語表現、専門用語及び関連する文法について学習することにより、科学に関する英文の読解力・表現力を養うこと、また、実践英文の読解、聴解を通して、科学英語の文章を理解することを目標とした。期末試験、小テスト、実力問題、出席・受講態度などの結果を総合的に評価する。英語力を試す検定試験などに積極的に挑戦するように勧めた。 授業評価アンケートでは、 平均以上の高い総合評価を得た。 |
| スタートアップセミナー | 2006年度～ | 導入期の学習としては、レポートの読み方・書き方、情報検索、セミナーにおける発表や討論などについて授業を行った。検定試験に備えるために、日本語と英語の学習問題の答え合わせをした。授業の後半では、学生は、一人一人興味のあるテーマについて書かれている学術論文やレポートを探して、パワーポイントでプレゼンテーションした。 |
| 分子生物学 | 2007年度～ | 分子生物学の全体像を理解することを目標とする。そのために、適当な出版物の内容とそれに不足する部分や実力問題をもとにテキストを作成して、講義毎に、そのプリントを配布した。パワーポイント、プリント、DVD教材を活用した講義を実施した。理解を深めるために、実力問題の答え合わせをし、課題を与え、そして前回の講義の内容の重点を復習して、学生からの質問・疑問・感想などに答えた。最後の講義では、「改善すべき点、要望などについて」学生に聞いて、それを反映させるように努めている。 授業評価アンケートでは、平均を |
| 植物生理学 | 2016年度～ | 植物の生理機能について 個体、細胞、分子のレベルで理解することを目標とする。適当な出版物の内容とそれに不足する部分や実力問題をもとにテキストを作成して、講義毎に、そのプリントを配布した。パワーポイント、プリント、DVD教材を活用した講義を実施した。理解を深めるために、実力問題の答え合わせをし、課題を与え、そして前回の講義の内容の重点を復習して、学生からの質問・疑問・感想などに答えた。最後の講義では、「改善すべき点、要望などについて」学生に聞いて、それを反映させるように努めている。 授業評価アンケートでは、平均を上回る総合評価を得た。 |
| バイオサイエンス概論 | 2006年度～ | オムニバス形式の1つとして、これまで研究したテーマの一つである「植物を形づくる細胞成長過程」について序論、方法、結果、考察を、それをもとに結論にいたる法を分かりやすくまとめて、パワーポイントで(その内容をプリントとして配布し)解説した。そうすることにより、学生のバイオサイエンス研究への興味を喚起することを目標とした。 |
| 実践プロジェクトB | 2016年度～ | バイオに関する課題を発見し、問題点を絞り込み、主体的に調査、必要に応じて実験を行い、調査研究結果を取りまとめ、発表することを目標とする。 |
| バイオサイエンス実験 | 2007年度～ | 基礎バイオサイエンス実験、植物バイオ実験では、序論、目的、方法、考察すべき事項をまとめたテキストを作成し、授業資料として学生に配布した。パワーポイントを用いた講義を行った。学生は、実験のデータをもとにレポートを作成した。一方、植物バイオ実験では、4人からなる組毎に課題を与え、理解や相互評価を高めるために研究会を行った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 科学英語への道(Road to Scientific English) | 2005年～ | 総合英語・科学英語基礎I-II(科学英語I-II)で使用する教科書。プリエト ラファエル、関谷次郎(共著)。(全159ページ) |
| 植物色素の抽出とクロマトグラフィーによる解析 | 2006年～ | 生化学を目的にした植物色素アントシアニンの抽出とクロマトグラフィーなどによるの解析。植物バイオテクノロジーに興味をもつ学部生、高大連携事業、オープンキャンパスに活用。 |
| 遺伝子組換え作物 | 2007年～ | 遺伝子組換え植物の現状と展望の説明を目的した教材。植物バイオテクノロジーに興味をもつ学部生、高大連携事業、オープンキャンパス、高等学校への出張講義に活用。 |
| 分子生物学 | 2007年～ | 分子生物に関するテキスト(全138ページ)。分子生物学に活用。 |
| 植物生理学 | 2016年～ | 植物生理学に関するテキスト(全145ページ)。分子生物学に活用。 |
| タンパク質の定量 | 2007年～ | 植物のタンパク質の抽出とその定量についてテキストを作成した。基礎バイオサイエンス実験に活用。 |

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 植物栄養代謝 | 2008年～ | 植物栄養代謝を中心に、窒素源の取り込み、同化とその調節機構、また、レーポータ遺伝子による遺伝子発現解析などについてテキストを作成した。植物バイオ実験に活用。 |
| 植物の環境ストレスへの適応と環境浄化 | 2011年～ | 植物のストレスへの適応のしくみとストレス耐性植物の開発、また、植物による汚染土壌の浄化の説明を目的した教材。植物バイオテクノロジーに興味をもつ学部生、オープンキャンパスなどに活用。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | 2006年～ | 高大連携活動としては、高校生や中学生に対する講義やバイオ実験。オープンキャンパス活動としては、高校生や一般市民に対する講義やバイオ実験。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| The *axhs1/dwf4* auxin-hypersensitive mutant of *Arabidopsis thaliana* defines a link for integration of auxin and brassinosteroid mediated root elongation. | 共 | 2015年3月 | Plant Biotechnology 32(2) | Nagase T, Takase H、Sekiya J, ◎Prieto R. | pp.125-137 |
| Characterization of polished rice washing water fermented with milk and its inhibition activity toward tomato bacterial canker causative agent *Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis*. | 共 | 2018年3月 | Journal of Biological Macromolecules 18(1) | Nakata T, Kawakami K, ◎Prieto R, Takase H, Sekiya J | pp.3-10 |
| その他（学会発表） | | | | | |
| 葉緑体遺伝子組換え技術を利用したバイオ原料植物の創出 | 共 | 2013年10月 | 日本生物高分子学会 2013年度年大会（大阪） | 乗松叔弘、藤井篤志、◎プリエト・ラファエル、富澤健一、森川康、岡田宏文、關谷次郎、高瀬尚文 | |
| 米のとぎ汁発酵液中のトマトかいよう病菌増殖抑制化合物について | 共 | 2014年3月 | 日本農芸化学会 2014年度大会（東京） | 中田達矢、◎プリエト・ラファエル、高瀬尚文、川口章、關谷次郎 | |
| *Axhs1*遺伝子は、シロイヌナズナにおけるオーキシンとブラシノステロイドの総合作用に関与する | 共 | 2015年3月 | 第56日本植物生理学会年会（東京） | 長瀬泰亮、高瀬尚文、關谷次郎、◎プリエト・ラファエル | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1998年～現在 | 日本植物生理学会会員 |
| 2013年～現在 | 日本植物細胞分子生物学会会員 |
| 2005年～現在 | 日本油化学会　英文校閲者 (English Editor)。「Journal of Oleoscience」の学術論文の校閲 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| 遺伝子の単離と機能解析 |
| 突然変異株の分離と解析、遺伝子組換え植物の作成と解析 |
| 組換えタンパク質の発現、精製、解析 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　准教授 | 氏名　寳関 淳 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 授業資料及び授業内容定着の工夫 | 2017年4月～ | 2回生を対象とした「生化学II」、3回生を対象とした「遺伝子工学」の講義において、講義スライドを縮小した配布プリントに空欄を予め設けておき、これを書き写させることで能動的に受講できるように配慮している。また、授業後半に確認テストを行うことで授業内容の定着を図っている。 |
| 小テスト実施による講義内容定着の工夫 | 2017年10月～ | 1回生を対象とした「生化学I」、3回生を対象とした「生体高分子学」の講義において、複数回小テストを行うことで授業内容の定着を図っている。各問の回答を学生に行われることで理解程度の把握に努めている。 |
| 講義内容の理解を深めるためのプレゼンテーション実施 | 2017年12月～ | 3回生を対象とした「生体高分子学」の講義において、講義内容の理解を深めるため、学生1人ずつでの講義内容に関連したプレゼンテーションを課してる。 |
| 小テストのweb再受験による講義内容の定着 | 2019年4月～ | 2回生を対象とした「生化学II」、3回生を対象とした「遺伝子工学」の講義において実施した小テストをweb上に上げ、再受験させることでさらなる授業内容の定着を図っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 細胞内レドックス状態の可視化によるレドックスモジュレーターの探索 | 共 | 2015年5月 | バイオサイエンスとインダストリー Vol. 73, No.3 | 寳関　淳、阪井康能 | 192-193 |
| プロテアソーム阻害が引き起こすレドックス異常と抗酸化食品成分による抑制 | 共 | 2015年5月 | バイオサイエンスとインダストリー Vol. 73, No.3 | 寳関　淳、阪井康能 | 198-201 |
| プロテアソーム阻害によるミトコンドリア障害の機構 | 単 | 2015年5月 | 生化学 Vol. 88, No.2 | | 211-214 |
| タンパク質合成における緩急 | 単 | 2017年10月 | 生物工学会誌 Vol. 95, No.10 | | 614-614 |
| 論文 | | | | | |
| Screening of dietary antioxidants against mitochondria-mediated oxidative stress by visualization of intracellular redox state. | 共 | 2016年3月 | *Biosci. Biotech. Biochem.* Vol. 80, No.4 | Sunita Maharjan, Yasuyoshi Sakai, Jun Hoseki | 726-734 |
| Development of a stable ERroGFP variant suitable for monitoring redox dynamics in the ER. | 共 | 2016年4月 | Biosci. Rep. Vol. 36, No.2 | Jun Hoseki*, Asami Oishi, Takaaki Fujimura, Yasuyoshi Sakai *: corresponding author | e00316 |
| Synthesized Ab42 Caused Intracellular Oxidative Damage, Leading to Cell Death, via Lysosome Rupture. | 共 | 2017年5月 | *Cell Struc. Funct.* Vol.23, No.42 | Yuki Oku, Kazuma Murakami, Kazuhiro Irie, Jun Hoseki, Yasuyoshi Sakai | 71-79 |
| その他 | | | | | |
| (学会発表) | | | | | |
| "Visualization of Local Redox State in Cells: Its Application to Biology and Drug Screening" | 共 | 2015年6月 | 15th International Conference on Oxidative Stress Reduction, Redox Homeostasis and Antioxidants 2015 (Paris (France)) | Yasuyoshi Sakai, Masahide Oku, Jun Hoseki | 口頭発表 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (学会発表)続き | | | | | |
| Intercellular Accumulation of Amyloid Beta Peptide Leads Lysosomal Membrane Permeabilization-Mediated Cell Death | 共 | 2015年6月 | 15th International Conference on Oxidative Stress Reduction, Redox Homeostasis and Antioxidants 2015 (Paris (France)) | Yuki Oku, Kazuma Murakami, Kazuhiro Irie, Jun Hoseki, Yasuyoshi Sakai | ポスター発表 |
| The mechanism underlying mitochondria dysfunction under proteasome inhibition | 共 | 2015年11月 | Cold Spring Harbor Asia Conferences-Mitochondria (Suzhou (China)) | Sunita Maharjan, Jun Hoseki, Yasuyoshi Sakai | 口頭発表 |
| プロテアソーム阻害に伴う小胞体レドックス異常の機序 | 共 | 2015年12月 | BMB2015(第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会合同大会)(神戸) | 藤村 多嘉朗、大石 麻水、Sunita Maharjan、寶関 淳、阪井 康能 | ポスター発表 |
| 神経細胞内に蓄積したAβ42が細胞死を引き起こす機構 | 共 | 2015年12月 | BMB2015(第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会合同大会)(神戸) | 奥 勇紀、村上 一馬、入江 一浩、寶関 淳、阪井 康能 | ポスター発表 |
| The mechanisms underlying mitochondrial dysfunction under proteasome inhibition | 共 | 2015年12月 | BMB2015(第38回日本分子生物学会年会、第88回日本生化学会大会合同大会) | Sunita Mahajan、黒板 智博、寶関 淳、阪井 康能 | ポスター発表 |
| レドックスが担うタンパク質恒常性の維持と異常 | 単 | 2016年3月 | 第11回レドックス・ライフイノベーションシンポジウム(東京) | | 口頭発表(招待講演) |
| 酵母Pichia pastorisのメタノール培養時に誘導される新規トランスポーターの解析 | 共 | 2016年3月 | 日本農芸化学会2016年大会(札幌) | 芝田桃子、大澤 晋、由里本博也、寶関 淳、阪井康能 | ポスター発表 |
| 小胞体における異常タンパク質発現に伴うレドックス変化とこれを回復させる薬剤探索系 | 共 | 2016年6月 | 第68回日本細胞生物学会大会(京都) | 寶関 淳、奥 勇紀、藤村 多嘉朗、大石 麻水、奥野 友紀子、萩原 正敏、阪井 康能 | ポスター発表 |
| プロテアソーム阻害による異常タンパク質がミトコンドリア障害 | 共 | 2016年6月 | 第68回日本細胞生物学会大会(京都) | 寶関 淳、Sunita Maharjan、阪井 康能 | ポスター発表 |
| 酵母Pichia pastorisのメタノール培養時に誘導される新規トランスポーターの解析 | 共 | 2016年7月 | 第11回トランスポーター学会(京都) | 芝田桃子、大澤 晋、由里本博也、寶関 淳、阪井康能 | ポスター発表 |
| プロテアソーム阻害に伴う鉄代謝異常・酸化ストレスとミトコンドリアストレス障害 | 共 | 2016年12月 | 第39回日本分子生物学会年会(横浜) | 黒板 智博、Sunita Maharjan、寶関 淳、阪井 康能 | ポスター発表 |
| 小胞体でのミスフォールドタンパク質蓄積に伴うレドックス異常回復剤の同定とその機序について | 共 | 2017年3月 | 日本農芸化学会2017年大会(京都) | 奥 勇紀、奥野 友紀子、萩原 正敏、寶関 淳、阪井 康能 | 口頭発表 |
| メタノール培養時に誘導される酵母Pichia pastoris SSS ファミリートランスポーターの機能解析 | 共 | 2017年3月 | 日本農芸化学会2017年大会(京都) | 芝田桃子、大澤 晋、由里本博也、寶関 淳、阪井康能 | 口頭発表 |
| プロテアソーム阻害に伴う小胞体レドックス状態の還元化機構 | 共 | 2017年12月 | 2017年度生命化学系合同年次大会(ConBio 2017)(神戸) | 青木 健悟、藤村 多嘉朗、奥 勇紀、阪井 康能、寶関 淳 | ポスター発表 |
| ERAD に必要なチオレドキシン由来の還元力伝達を担う小胞体膜タンパク質の解析 | 共 | 2018年3月 | 日本農芸化学会2018年大会(名古屋) | 田中 絵里子、寶関 淳、阪井 康能 | 口頭発表 |
| 2種のガス状アルカン酸化酵素生合成過程追跡のための実験計画確立 | 共 | 2018年3月 | 日本農芸化学会2018年大会(名古屋) | 林 大祐、寶関 淳、由里本博也、阪井康能 | 口頭発表 |
| メタノールセンサー宿主細胞を用いたメタン酸化生体触媒の開発 | 共 | 2019年3月 | 日本農芸化学会2019年大会(東京) | 矢野 龍一、竹谷 友之、由里本 博也、寶関 淳、緒方 英明、嶋 盛悟、阪井 康能 | 口頭発表 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1999年5月～ | 日本生化学会会員 |
| 2001年8月～ | 日本分子生物学会会員 |
| 2008年6月 | 第8回蛋白質科学会年会ワークショップ「細胞品質管理に関わるジスルフィド結合ネットワーク」オーガナイザー |
| 2014年3月～ | 日本農芸化学会会員 |
| 2016年4月～ | 日本細胞生物学会会員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

組換えタンパク質の折りたたみや発現の改善や有用タンパク質の開発

細胞内タンパク質代謝機構及びその老化やストレスによる異常機構の解析

細胞内(特にオルガネラレベルでの)レドックス状態の可視化計測技術

細胞内タンパク質品質管理異常及び細胞内レドックスを改善する化合物の同定及びこれに関連した医薬品や機能性食品の開発

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　バイオ環境　学部 | 職名　講師 | 氏名　櫻間　晴子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 「科学英語」で単語テストの実施 | 2016年4月～<br>2018年3月 | 授業の理解度を深めるために、毎回、授業で出てくる英単語を中心にテストを実施し、成績評価の一部としている。 |
| 「応用微生物学B」でプリントの作成 | 2016年9月～ | 授業の理解度を深めるために、授業で重要点は穴埋めになっているプリントを作成し、回収して理解できているかチェックしている |
| 「応用微生物学B」で感想文の提出 | 2016年9月～ | 毎回、授業の感想を提出させることによって、学生が理解できていないところや興味を持っているところを理解するようにしている |
| 「物理学」でプリントの作成 | 2018年4月～ | 授業の理解度を深めるために、授業で重要点は穴埋めになっているプリントを作成している |
| 「物理学」で小テストの実施 | 2018年4月～ | 授業の理解度を深めるために、毎回、授業で出てくる内容で問題を解かせている |
| 「物理学実験」のテキスト作成 | 2019年4月～ | 理解度を高めるために、実験書を作成している |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 該当なし | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 該当なし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 生化学実験(3回生対象) | 2012年10月～<br>2014年10月 | 京都大学・農学部の3回生を対象に、生化学実験の内容やレポートの書き方について講義を行い、実験ならびにレポートの書き方について指導した。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 該当なし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Bifidobacterium longum subsp. infantis uses two different β-galactosidases for selectively degrading type-1 and type-2 human milk oligosaccharides. | 共著 | 2012年3月 | Glycobiology. Vol. 22 | 吉田永史奈、櫻間晴子、清原正志、中島将博、北岡本光、芦田久、広瀬潤子、片山高嶺、山本憲二、熊谷英彦 | 361頁～368頁 |
| 1,3-1,4-α-L-Fucosynthase that specifically introduces Lewis a/x antigens into type-1/2 chains | 共著 | 2012年5月 | J Biol Chem. Vol. 287 | 櫻間晴子、伏信進矢、日高将文、吉田永史奈、本多裕司、芦田久、北岡本光、熊谷英彦、山本憲二、片山高嶺 | 16709頁～16719頁 |
| Differences in the substrate specificities and active-site structures of two α-L-fucosidases (glycoside hydrolase family 29) from Bacteroides thetaiotaomicron. | 共著 | 2012年5月 | Biosci Biotechnol Biochem. Vol. 76 | 櫻間晴子、堤恵理華、芦田久、片山高嶺、山本憲二、熊谷英彦 | 1022頁～1024頁 |
| Eukaryotic-type aromatic amino acid decarboxylase from the root colonizer Pseudomonas putida is highly specific for 3,4-dihydroxyphenyl-L-alanine, an allelochemical in the rhizosphere. | 共著 | 2012年12月 | Microbiology. Vol. 158 | 小柳喬、中川明、櫻間晴子、山本恵子、桜井直文、高木幸信、南博道、片山高嶺、熊谷英彦 | 2965頁～2974頁 |
| ビフィズス菌由来GH20ラクト-N-ビオシダーゼの立体構造と反応機構 | 共著 | 2013年2月 | 応用糖質科学 Vol. 4 | 伊藤佑、片山高嶺、Mitchell Hattie、櫻間晴子、和田潤、鈴木龍一郎、芦田久、若木高善、山本憲二、Keith A. Stubbs、伏信進矢 | 140頁～146頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（続き） | | | | | |
| Crystal structures of a glycoside hydrolase family 20 lacto-N-biosidase from Bifidobacterium bifidum. | 共著 | 2013年4月 | J Biol Chem. Vol. 288 | 伊藤佑、片山高嶺、Mitchell Hattie、櫻間晴子、和田潤、鈴木龍一郎、芦田久、若木高善、山本憲二、Keith A. Stubbs、伏信 進矢 | 11795頁～11806頁 |
| Lacto-N-biosidase encoded by a novel gene of Bifidobacterium longum subsp. longum shows unique substrate specificity and requires a designated chaperon for its active expression | 共著 | 2013年8月 | J Biol Chem. Vol. 288 | 櫻間晴子、清原正志、和田潤、本多裕司、山口真範、吹谷智、横田篤、芦田久、熊谷英彦、北岡本光、山本憲二、片山高嶺 | 25194頁～25206頁 |
| β-Glucuronidase from Lactobacillus brevis useful for baicalin hydrolysis belongs to glycoside hydrolase family 30 | 共著 | 2014年5月 | Appl Microbiol Biotechnol. Vol. 98 | 櫻間晴子、岸野重信、内堀良重、米島靖記、芦田久、喜多恵子、高橋里美、小川順 | 4021頁～4032頁 |
| Biohydrogenation of C20 polyunsaturated fatty acids by anaerobic bacteria. | 共著 | 2014年9月 | J Lipid Res. Vol.55 | 櫻間晴子、岸野重信、三原皓典、安藤晃規、喜多恵子、高橋里美、清水昌、小川順 | 18頁～24頁 |
| 遺伝子組換え微生物によるポリ塩化ビフェニル無害化に向けて | 単著 | 2015年4月 | 生物工学会誌 Vol. 93 | | 217頁 |
| Novel substrate specificities of two lacto-N-biosidases towards β-linked galacto-N-biose-containing oligosaccharides of globo H, Gb5, and GA1. | 共著 | 2015年5月 | Carbohydr Res. Vol. 408 | 後藤愛那、加藤紀彦、杉山友太、栗原新、本多裕司、櫻間晴子、神戸大朋、芦田久、北岡本光、山本憲二、片山高嶺 | 18頁～24頁 |
| ラクト-N-ビオシダーゼ（LnbX）の機能から考える母乳オリゴ糖を介したビフィズス菌と母乳栄養児の共生・共進化 | 共著 | 2017年10月 | 酵素工学ニュース | 後藤愛那、片山高嶺、山田千早、伏信進矢、櫻間晴子 | 23頁～28頁 |
| その他 | | | | | |
| （口頭発表）<br>1,3-1,4-α-L-フコシダーゼの結晶構造解析に基づく基質特異性の構造学的基盤 | 共同 | 2012年3月 | 日本農芸化学会<br>2012年度大会<br>（京都） | 櫻間晴子、伏信進矢、北岡本光、日高将文、芦田久、片山高嶺、山本憲二、熊谷英彦 | |
| （口頭発表（国際学会））<br>A fucosynthase specifically introducing histo-blood group antigens Lewis a/x into type-1/2 chains | 共同 | 2012年5月 | The 12th Japan-China-Korea Joint Symposium on Enzyme Engineering<br>（金沢） | 櫻間晴子、伏信進矢、吉田永史奈、本多裕司、日高将文、芦田久、北岡本光、熊谷英彦、山本憲二、片山高嶺 | |
| （口頭発表（国際学会））<br>Characterization of 3,4-dihydroxyphenyl-L-alanine (L-DOPA) decarboxylase from Pseudomonas putida KT2440 | 共同 | 2012年5月 | The 12th Japan-China-Korea Joint Symposium on Enzyme Engineering<br>（金沢） | 小柳喬、中川明、櫻間晴子、山本恵子、<br>桜井直文、高木幸信、南博道、片山高嶺、熊谷英彦 | |
| （口頭発表/ポスター）<br>Bifidobacterium longum subsp. infantis由来1,3-1,4-α-L-フコシダーゼが有するユニークな基質特異性の構造学的基盤 | 共同 | 2012年6月 | 第16回腸内細菌学会（神戸） | 櫻間 晴子、伏信 進矢、北岡 本光、日高 將文、芦田 久、山本 憲二、熊谷 英彦、片山 高嶺 | |
| （口頭発表）<br>ビフィズス菌由来GH20 ラクト-N-ビオシダーゼの立体構造と反応機構 | 共同 | 2013年9月 | 日本応用糖質科学会<br>平成25年度大会（第62回）<br>（鹿児島） | 伊藤 佑、片山 高嶺、Mitchell Hattie、櫻間 晴子、和田 潤、鈴木 龍一郎、若木 高善、芦田 久、山本 憲二、Keith A. Stubbs、伏信 進矢 | |
| （講演）<br>ビフィズス菌由来の新規ラクト-N -ビオシダーゼの同定と機能解析 | 共同 | 2014年5月 | 第15回関西グライコサイエンスフォーラム（大阪） | 櫻間晴子、清原正志、芦田久、北岡本光、高橋里美、山本憲二、片山高嶺 | |
| （口頭発表）<br>漢方薬配糖体成分の脱グリコシル化反応を担う乳酸菌由来新規β-グルクロニダーゼの機能解析 | 共同 | 2016年3月 | 日本農芸化学会<br>2016年度大会（札幌） | 岸野重信、内堀良重、櫻間晴子、渡邊寛子、米島 靖記、小川 順 | |
| （研究助成）<br>実用的なポリ塩化ビフェニルを分解する芳香環水酸化ジオキシゲナーゼの創製 | 共同 | 2016年4月～<br>2018年3月 | 科学研究費<br>基盤研究（C）（一般） | 櫻間晴子（代表者）、乾秀之（分担者） | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (口頭発表)<br>ビフィズス菌Bifidobacterium bifidumにおけるN-アセチルグルコサミンおよびN-アセチルガラクトサミン資化経路の生化学的解析 | 共同 | 2016年3月 | 日本農芸化学会<br>2016年度大会(札幌) | 谷内寛之、櫻間晴子、西本完、<br>後藤愛那、杉山友太、和田潤、<br>栗原新、北岡本光、片山高嶺 | |
| (国際学会)<br>Aerobic toluene / biphenyl degradation genes in the denitrifying bacterium Thauera sp. strain DNT-1 | 共同 | 2016年10月 | 第9回国際PCBワークショップ<br>(神戸) | 川口甲介、櫻間晴子、片山美津留、<br>赤木隼也、篠田吉史、由里本博也、<br>阪井康能、加藤暢夫 | |
| (研究助成)<br>ポリ塩化ビフェニル汚染土壌の診断方法の開発 | 共同 | 2018年4月 | 神戸大学バイオシグナル<br>総合研究センター | 櫻間晴子(代表者) | |
| (口頭発表)<br>ポリ塩化ビフェニル類汚染化による土壌微生物生態系への影響評価<br>( The effects of polychlorinated biphenyls on the soil bacterial community structure) | 共同 | 2019年3月 | 日本農芸化学会<br>2019年大会(東京) | ○櫻間 晴子(発表者)<br>比良岡 祐希、山下 舞、澤 誠人、<br>羽賀 雄紀、松村千里、乾 秀之、<br>中野 武、萩下大郎 | |
| (ポスター発表)<br>河川底質におけるペルフルオロアルキル酸分解菌の探索 | 共同 | 2019年6月 | 第28 回環境化学討論会<br>(埼玉) | 小林豊 (発表者)、吉識亮介、<br>櫻間晴子、松村千里、<br>中野武、乾秀之 | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本農芸学会に参加 | 口頭発表を行った。 |
| Japan-China-Korea Joint Symposium on Enzyme Engineeringに参加 | 口頭発表を行った。 |
| 関西グライコサイエンスフォーラムに参加 | 講演を行った。 |
| 腸内細菌学会に参加 | 口頭発表を行った。 |
| 第9回国際PCBワークショップに参加 | ポスター発表を行った。 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

該当なし

# 教育開発センター


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 特任教授 | 吉　中　　康　子 | 474 |
| 特別教授 | 山　　下　　哲 | 484 |
| 契約教授 | 西　村　　俊　範 | 486 |
| | 吉　川　　節　子 | 487 |
| 准教授 | プレヴォ・ニコラ | 488 |
| 講師 | 西　　政　　治 | 489 |
| | 三　浦　　重　則 | 492 |
| 嘱託講師 | 岩　橋　　一　樹 | 494 |
| | 金　子　　賢　治 | 496 |
| | 甲　田　　太　郎 | 498 |
| | 佐藤　亜紀子 | 499 |
| | 高　頭　　悠　樹 | 500 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　特任教授 | 氏名　吉中　康子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「健康スポーツ理論」のパワーポイント教材、及びプリント教材の作成による学生の理解力向上と、ミニレポートによる理解力のチェック | 1999年4月～2019年 | 健康の維持増進についての理解と実践力向上のため、自分の体についての理解を深め、現在の健康課題を知り、健康問題を自分で解決することができるだけでなく、健康で、安心安全な地域づくりをも視野に入れて学べル用、教材を工夫している。少子高齢社会の現状、健康づくりの世界的動向など、国内外の学会の最新知識を収集して、深く学べるよう、日々努力している。尚、授業は毎回ミニレポートを書かせることで、学生の理解度を把握しながら進めている。 |
| レクリエーションインストラクター養成課程の設置と運営 | 2000年4月～2019年 | 本学にレクリエーションインストラクター養成課程を置き、学生のコミュニケーション能力やホスピタリティの向上に寄与している。亀岡市の協会を設立、学生と共に組織運営し、社会教育団体との連携を構築し、地域づくりの一環として学生が学べる仕組みをつくっている。大学の地域貢献に学生と共に精力的にかかわっている。また、学生が地域の子ども会や小学校、高齢者施設で積極的にレクリエーションを企画し、指導できるよう実践的能力の形成に努めている。2011年から月1回のレク楽園を実施。障がい者の理解に向けたかめおか共生プロジェクトの立ち上げをしている。2012年から全学対象にレク学習会を放課後に月1回実施している。学生同士のコミュニケーション力の向上及び指導力を上げている。 |
| 生涯スポーツプログラムにおける体力測定評価システムの考案と運営 | 2004年4月～ | 健康増進法の施行の背景から、大学生に対してフィットネステスト（体力測定）を実施し、その後のフォローとして、その評価法を検討し、本学独自のシステムとして、体力測定値を入力することで、その年齢集団の平均値とSDから体力プロフィールが描かれ、アドバイスができるようにプログラムした。学生には自分の体力を把握させて、自分自身の体力・健康増進が自発的に行えるよう、実践的能力の形成に努めている。 |
| 健康運動実践指導者養成課程の設置と運営 | 2010年4月～ | 健康増進法の施行の背景から、経営学部に健康運動実践指導者養成課程を置くため、計画し、教員を集め、カリキュラムの作成から、連絡・調整・学生指導までを一手に引き受けて認証を得た。また、養成過程の運営と実際の健康づくりの実践活動を担える学生の教育に努めている。<br>また、地域住民に対して健康体操教室とウォーキング教室を毎週1回早朝に実施し、いつでも学生が参加できるようにしている。 |
| 体操による国際交流と平和教育 | 1998年12月～2019年 | 1998年12月から亀岡体操祭を企画し、これまでにデンマーク、フィンランド、スイス、イタリア、ドイツ、スエーデンなどからゲストグループを招聘し、健康づくりだけでなく、学生が国際交流し、コミュニケーション能力が向上するような仕掛けづくりを実施してきた。<br>また、このような取り組みを通して平和教育に繋げている。2011年2月はデンマークナショナルパフォーマンスチームを招聘し、小学生から一般の市民まで1000人の講習会と講演会を実施した。2012年はオーストラリアから体操チームを迎え、学生が交流会を企画・運営し、スーパーバイザーとして関わった。2014年もデンマークナショナルパフォーマンスチームを招聘し、1000人を集めて京都体操祭兼かめおか体操祭を企画・運営した。2016年は第10回京都体操祭、2017年は第20回かめおか体操祭を京都学園大学体育館で開催し、オーストラリアからゲストを招聘した。2019年もフィンランドから16名、スエーデンから16人の海外体操チームを招聘するよう交渉が成立している。 |
| レクリエーション活動による地域貢献とリーダー養成 | 2003年3月～2019年 | 2003年3月から、かめおかWAKUWAKUフェスティバルを開催。レクリエーションインストラクターを目指す学生のための学びの場として、亀岡市のレクリエーション協会である「かめおか遊友ネットワーク」を設立、事業参加の場として「かめおかWAKUWAKUフェスティバル」を継続開催している。地域貢献のイベント企画や会議の持ち方イベントの運営の仕方などを実践する目的で市民や学校、行政とコラボレーションし、地域の昔遊びの達人、障害者グループの和太鼓、吹奏楽団の生演奏、コーラスグループなど地域資源の人や組織を財産に活用し、多様な人材から学ぶ場を創出している。また、同時にソーシャルキャピタルの再構築の必要性を実践からを学べるよう、学生を運営委員に3回の会議にも参加させている。毎年、事業終了後に学生が振返り（After Action Review）を行っている。2016年は第13回目で京都学園大学にて、南丹教育局の子育てフォーラムとコラボレーションし、子育てフォーラムに270名、WAKUWAKUには570名が参加した。2018年は15周年記念として開催し、卒業生が親子で参加する姿も見られた。ボランティアを務める学生は86名となり健康医療学部健康スポーツ学科の参加も得て、学生のボランティアが企画・準備・当日運営を中心になって担っている。 |

| | | |
|---|---|---|
| キャリアゼミ | 2003年3月～2016年 | キャリアの発達は成長に応じた役割と生活空間、年齢が影響する時間というライフスパンなどが影響していく。働くことは自分の役割や生活空間はもちろん、年齢（発達段階）によって全く違うし、その過渡期にはさらに変化する。そんな不確定な未来に向けて、まだ働いた経験がない大学生が働くことをプランする方法はただ1つ、やってみるしかない。そこで、学生には①好奇心：新しい学習機会の模索　②持続性：めげない努力　③楽観性：新しい機会を「実現可能」ととらえる　④柔軟性：信念、概念、態度、行動を変える　⑤リスク・テイキング：結果が不確実でも行動に移す　ということを念頭に置くようにコンセプトメーキングし、『かめおかWAKUWAKUフェスティバル』などのイベントに参加、異世代交流できるようにした。ここで、さまざまな職の方と出逢い、イベントを企画・運営できる場を創出し、学生の希望によってサポーターができるようにした。 |
| スポーツ実技（エアロビックスポーツ） | 2011年～2014年 | 有酸素運動の効果研究を実際に実施し、特にエアロビックダンスプログラムは30年間の実践研究の上に、楽しさを加えオリジナルプログラムを開発した。体力レベルの低い学生も、トップを目指すアスリートにとっても、動く喜びが得られるすぐれたプログラムである。 |
| スポーツ国際交流論 | 2012年～2014年 | 今日の社会はグローバルな課題を解決する能力も求められるようになった。<br>スポーツでの国際交流は近代オリンピックの開始年にさかのぼり、歴史は古い。本学においてもスポーツの国際交流は長年取り組んでおり、学生も巻き込んでいる。また、近年では大学によるODAの活用を拡大し，オールジャパンで国際協力を推進することを目的とした意見交換会を開催したり，外務省・JICAが昨今取り組んでいる大学のODA事業への参画は，大学の国際化にも役立ち，中小企業や地方自治体への支援と連携してODA事業に取り組むことで，産学官の連携の強化にもメリットがある。このような企画ができることを狙って、授業にはインターネットで資料収集し、まとめるなど各自の興味を中心に進めている。また、実際の国際交流機会を構築し、活用している。 |
| 健康スポーツ理論<br>ヘルスプロモーション | 2015年～2018年 | 体育・スポーツやレクリエーションは子どもの心身の発達を健全に促す手立てとして，またヘルスプロモーションや仲間づくり、自己実現の手段、セーフティプロモーションにおける外傷予防や自殺の防止対策として、新たに注目を浴びる存在となっている．しかし、現在は子供から大人まで、国民の3分の2が運動習慣を身につけていないし，死亡原因でも生活習慣病が約6割（がん30.5%，虚血性心疾患15.7%，脳血管疾患13.0%，糖尿病1.3%，高血圧性疾患0.6%）を占め，医療費に占める生活習慣病の割合も10 兆円を超えている。自殺率はロシアに次いで2位である。そこで、パワーポイントうありがとうございます。資料、動画を用いて理解を深める教材を作成している。 |
| スタートアップゼミA・B | 2015年 | 学生には①好奇心：新しい学習機会の模索　②持続性：めげない努力　③楽観性：新しい機会を「実現可能」ととらえる　④柔軟性：信念、概念、態度、行動を変える　⑤リスク・テイキング：結果が不確実でも行動に移す　ということを念頭に置くようにコンセプトメーキングし、特に働くことの意味や仕事についての理解が深まるような教材作りを行い、学内で発表した。 |
| スポーツ実技（生涯スポーツ） | 2015年～2019年 | 健康増進法の施行の背景から、大学生に対してフィットネステスト（体力測定）を実施し、その後のフォローとして、体力プロフィールを配布し、レポートを書かせアドバイスしている。学生には自分の体力を把握させて、自分自身の体力・健康増進が自発的に行えるよう、実践的能力の形成に努めている。<br>2016年は73名の受講生であったが、グループワークを行いリーダーを養成し、試合の運営も経験させた。 |
| ダンス | 2016年～2019年 | 平成24年度より全面実施となった学習指導要領において、ダンスが必修化された。多くの学校で実践されている「現代的なリズムのダンス」、特にヒップホップダンスなども体験できるように、オリジナルなプログラムを考案している。表現力やコミュニケーションの能力を高めるために、「踊る」「創る」「観る」という活動を行うダンスの教育的役割は大きいので課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。 |
| SLS（スポーツライフスキル） | 2019年～ | 京都先端科学大学としての新たな取り組みであるSLSは2019年度入学の全学部1年次2年時の春学期と秋学期の合計4単位が必修化された。関係者でプロジェクトチームを結成し、入念な準備をし、クリケットを担当。雨天時は有酸素運動の音楽体操やレクリエーションゲームでチームビルディングを目的に指導している。<br>指導内容は30年間の研修参加や国際セミナーの参加で磨いたスキルが役立っている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |

| | | |
|---|---|---|
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 大阪府医師会主催シルバー健康大学 | 1998年10月～<br>2019年9月<br>毎年1回開催 | 介護予防と健康増進のための運動療法について科学的なエビデンスに基づくプログラムを毎回紹介している。2019年も9月開催分まで依頼されている。 |
| 南丹管内幼稚園園長研修会<br>「子どもの発達の今日的課題<br>－地域づくりが育む子どもの心と親の心－」 | 2011年7月 | 近年子どもの運動量が低下、生活も便利になり生活行動が縮小され、子どもの発達の危機の時代を迎えている。<br>このような時代こそ地域で子どもを育み、体験知を豊かに創造力を高める子育てと地域力が必要であることを講演した。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| かめおか体操祭及び京都体操祭の企画・運営 | 1998年～現在 | 体操部・ダンス部の発表の場として、健康づくりネットワーク構築、地域づくりの一環として体操祭を企画。放送局に記録ビデオを撮影してもらい、教材として利用するため、絵コンテを作成し、編集構成にかかわる。過去18回、18年間継続している。今年は2回を迎える。 |
| かめおかWAKUWAKUフェスティバルの企画・運営 | 2003年～現在 | 現在の子ども達は伝承遊びを知らない。そこで市民に呼びかけ、昔遊びの達人を募集し年一回のフェスティバルを開催。大学クラブにも呼びかけて大学と地域の異世代交流の場とする。また、レクリエーション・インストラクターの事業参加の場となっている。また、レクリエーション研究会のクラブ活動の場であり、ここで学生はコミュニケーション力や企画・運営力を向上させている。13年間継続開催しているため、部員も30名を超え、このイベントに参加する学生はダンス部・放送局・よさこい連を含めて53名がサポートしており、大学OBも家族で参加するようになっている。<br>放送局に記録ビデオを撮影してもらい、教材として編集するために、絵コンテを作成し、編集構成にかかわる。 |
| かめおか元気にし隊 | 2006年～現在 | 亀岡市民と本学学生の健康増進のため、週1回健康体操教室を開催している。平成18年から「亀岡スタディ」でオリジナル音楽体操を提供し、筋力トレーニングと共に介護予防効果のエビデンスも検証されたため、現在50名以上の市民の参加がある。 |
| デンマーク体操ナショナルチームの招聘 | 2011年2月 | デンマークのナショナルチーム招聘に関わり、亀岡市でスペシャルライブを企画。小学生から高齢者まで1000人の参加を得て、日本の文化も紹介した。 |
| レク楽園の企画・運営 | 2011年4月～現在 | 毎月1回、レクリエーションの学びの場を大学で提供。延べ300人にレクリエーションの理論と実践の学習機会を創出し、学生と市民の交流の場を提供している。 |
| オーストラリアケアリージムクラブ招聘 | 2012年10月 | 亀岡体操祭が15年を迎えたので、その周年事業として国際交流を企画。学生に企画・運営を担当させた。 |
| レク楽（学）習会の企画・運営 | 2012年4月～現在 | 毎月1回、全学部学生を対象にレクリエーション研究会が中心となり、亀岡市レクリエーション研究会から講師を招き、レクリエーションの理論と実践の学習機会を創出し、学生の社会的スキルアップの場を企画・運営している。 |
| 関西クリケット協会（元日本クリケット協会関西支部） | 2015年<br>（2009年～2014）<br>～現在 | 日本クリケット協会関西支部を立ち上げ、当初は顧問としてのアドバイスを行う。2016年から理事長として、同志社大学、四天王寺大学、龍谷大学の学生指導もする。マイナースポーツではあるが世界第2位の競技人口を誇り、日本での普及活動として、ジュニアクリケットをスタートさせた。クリケット人口の増加と競技力向上をコンセプトに活動し、学生と共に組織運営を行っている。国際的にも異文化交流の機会が多く、協会には外人チームが3団体加盟し、学生の学びの輪が広がっている。<br>近畿クリケット協会から、2019年関西クリケット協会に改名。理由は外国人が近畿をKINKY（変態）と聞き間違えることがあるため。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の<br>名　　称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 健康スポーツとヘルスマネジメント | 単 | 2019年 | 晃洋書房 | 吉中　康子 | pp.1-254 |
| 地域資源を活用した介護予防総合マニュアル（運動編） | 共 | 2015年3月 | （株）フーミー | 吉中康子、木村みさか、<br>横山慶一、渡邊裕也 | 音楽体操<br>全体編集 |
| 論文 | | | | | |
| 特集<br>多職種連携による高齢者の自立支援<br>「NPO法人を活用した自立支援」 | 単 | 2018年 | 介護予防・健康づくり<br>Vol.5　No.1 | 吉中　康子 | pp.26-31 |
| 写真撮影を用いたナビゲーションスポーツのスポーツ・レクリエーションのアクテビティとしての実施可能性の検証 | 共 | 2018年 | Leisure & recreation =<br>自由時間研究（43） | 中井　聖、三宅基子、田中真紀、<br>吉中康子 | pp.35-43 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Comprehensive geriatric intervention program with and without weekly class-style exercise: research protocol of a cluster randomized controlled trial in Kyoto-Kameoka Study | 共 | 2018年4月 | Clinical Interventions in Aging Vol13 | Yuya Watanabe,Yosuke Yamada,Keiichi Yokoyama,Tsukasa Yoshida,Yasuko Yoshinaka, Mie Yoshimoto, Yoko Tanaka, Aya Itoi,Emi Yamagata, Naoyuki Ebine, Kazuko Ishikawa-Takata, Misaka Kimura | pp1019-1033 |
| The Perception of Exertion and Cardiorespiratory Responses of Rhythmic Exercise Performed to Music Compared with Treadmill Walking under Three Different Tempos in Postmenopausal Women. | 共 | 2018年12月 | Journal of Exercise Physiology online Vol21-6 | Takashi Nakagata, Yasuko Yoshinaka, Tsukasa YoshidaYosuke, Yamada, Keiichi Yokoyama, Misaka Kimura | pp.114-124 |
| Sociodemographic and physical predictors of non-participation in community based physical checkup among older neighbors: a case-control study from the Kyoto-Kameoka Longitudinal Study, Japan | 共 | 2018年 | BMC Public Health 18(568) | Miwa Yamaguchi, Tsukasa Yoshida, Yuya Watanabe, Hinako Nanri, Keiichi Yokoyama, Heiwa Date, Motoko Miyake, Aya Itoi, Emi Yamagata, Taeko Masumoto, Yasuko Okayama, Yasuko Yoshinaka, Misaka Kimura | pp.1-15 |
| Light gymnastic exercise with dietary milk fat globule membrane improves physical fitness in healthy Japanese: A randomized double blind, placebo-controlled trial | 共 | 2018年4月 | Geriatrics & Gerontology International 2018 Apr;82(4) | ◎吉中 康子、曽我 聡子、太田 宜康、木村みさか | pp.677-682 |
| Sociodemographic and physical predictors of non-participation in community based physical checkup among older neighbors: a case-control study from the Kyoto-Kameoka Longitudinal Study | 共 | 2017年7月 | Open Journal of Epidemiology | Yamaguchi M, Yoshida T, Yamada Y, Watanabe Y, Nanri H, Yokoyama K, Date H, Miyake M, Itoi A, Yamagata E, Masumoto T, Okayama Y, Yoshinaka Y, Kimura M | pp.190-200 |
| Prevalence of Frailty Assessed by Fried and Kihon Checklist Indexes in a Prospective Cohort Study: Design and Demographics of the Kyoto-Kameoka Longitudinal Study | 共 | 2017年2月 | JAMDA Vol18 | Yamada Y, Nanri H, Watanabe Y, Yoshida T, Yokoyama K, Itoi A, Date H, Yamaguchi M, Miyake M, Yamagata E, Tamiya H, Nishimura M, Fujibayashi M, Ebine N, Yoshida M, Kikutani T, Yoshimura E, Ishikawa-Takata K, Yamada M, Nakaya T, Yoshinaka Y, Fujiwara Y, Arai H, Kimura M | pp.7-15 |
| Fitness Age Score and the risk of long-term care insurance certification —KYOTO-Kameoka Study | 共 | 2017年5月 | Open Journal of Epidemiology | ◎吉田 司、木村みさか、山田陽介、横山慶一、吉中康子、糸井亜弥、渡邉裕也、来田 宣幸、野村 照夫 | pp.190-200 |
| 地域自立高齢者1,379人におけるフレイル判定の方法による該当率の差異 —亀岡スタディ— | 共 | 2017年2月 | 日本健康支援学会機関誌「健康支援」Vol 19(1) | ◎吉田 司、木村 みさか、渡邊 裕也、三宅 基子、横山 慶一、吉中 康子、海老根 直之、菊谷 武、吉田 光由、高田 和子、山田 実、山田 陽介、来田 宣幸、野村 照夫 | pp.9-18 |
| 高齢者における身体活動量と体力ー身体活動量目標設定に関する基礎的研究ー | 共 | 2016年12月 | ウォーキング研究 Vol 19 | ◎吉中康子、糸井亜弥、山田陽介、寄本明、木村みさか | pp.21-29 |
| 中高齢者の歩行ゆらぎと体力の関連 | 共 | 2016年7月 | 総合文化研究所紀要 33 | ◎續田 尚美、渡邊 裕也、横山 慶一、吉中 康子、木村 みさか、岡山 寧子 | pp.21-29 |
| 地域在住自立高齢者における転倒リスクの関連要因とその性差 亀岡スタディ | 共 | 2015年10月 | 日本公衆衛生雑誌 62(8) | ◎桝本妙子、山田陽介、渡邊裕也、山縣恵美、吉田司、横山慶一、三宅基子、吉中康子、高田和子、石原達朗、海老根直之、木村みさか | pp.390-401 |
| 地域に在住する自立高齢者における閉じこもりリスクの実態と体力との関連 | 共 | 2015年9月 | 日本公衆衛生雑誌 Vol 61-11 | ◎山縣 恵美、木村 みさか、三宅 基子、山田 陽介、桝本 妙子、渡邊 裕也 、吉田 司、横山 慶一、吉中 康子、杉原 百合子、小松 光代、岡山 寧子、井上 恒男 | pp. 671-678 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表　続き） | | | | | |
| 亀岡市スポーツ少年団に所属する子どもの外傷調査（全クラブ9種目25団体を対象にした調査結果） | 共 | 2015年8月 | 日本セーフティプロモーション学会誌（第8巻第1号） | ◎木村みさか、吉中康子、松本崇寛、松本麻友子、伊豆田晃正、湯浅弘樹、田中秀門、白石陽子 | pp.25-37 |
| 地域に在住する自立高齢者における閉じこもりリスクの実態と体力との関連 | 共 | 2014年12月 | 日本公衆衛生雑誌<br>Vol 61-11 | ◎山縣恵美，木村みさか，三宅基子，山田陽介，渡邊裕也，吉田司，横山慶一，吉中康子，杉原百合子，小松光代，岡山寧子，井上恒男 | pp.671-678 |
| 京都スタジアム（仮称）の経済効果創出について－スポーツの観点から－ | 共 | 2014年12月 | 京都学園大学経営学部論集<br>Vol24,No2 | ◎西　政治、山下　哲、吉中　康子 | pp.59-94 |
| 高齢女性における超音波画像から算出した筋輝度と運動機能との関連性 | 共 | 2014年12月 | 京都学園大学経営学部論集<br>Vol24,No2 | ◎渡邊裕也、山田陽介、吉中康子、木村みさか | pp.95-106 |
| 大学アメリカンフットボール選手における筋力・パワーと外傷の関連性について | 共 | 2014年3月 | 京都学園大学経済学部論集<br>第23巻 第2号 | ◎井口順太　藤澤義彦、吉中康子、木村みさか | pp.49-55 |
| 京都亀岡スタディの成果とそこから生まれた住民主体の健康づくり | 単 | 2019年3月 | 日本体操学会高齢者部会 | ◎吉中康子 | 女子栄養大学 |
| 写真撮影を用いたナビゲーションスポーツに関する質的評価－テキストマイニング手法を用いた自由記述の検討－ | 共 | 2018年9月 | 第69回日本体育学会大会 | ◎三宅基子、中井　聖、田中真紀、吉中康子 | ・日本体育学会大会予稿集 69　300 |
| 体操による亀岡市の介護予防活動―35年間の取組みの経過と実績－ | 共 | 2018年9月 | 日本体操学会第18回学会大会 | ◎吉中　康子、木村みさか | |
| 伝わり体操のテンポの違いによる生理応答 | 共 | 2017年9月 | 日本体操学会第17回大会 | ◎吉中康子，中潟崇，吉田司，横山慶一，山田陽介，木村みさか | |
| 神経筋の伝達機能を意識した体操と栄養の介入が身体機能に及ぼす影響 | 共 | 2017年11月 | 第76回日本公衆衛生学会 | ◎吉中康子、曽我聡子、太田宣康、横山慶一、山田陽介、木村みさか | |
| フレイル判定と体力および転倒との関連について（体力測定参加者における検討） | 共 | 2016年12月 | 日本<br>セーフティプロモーション学会<br>第10回学術大会 | ◎吉中康子、横山慶一、岡山寧子、桝本妙子、木村みさか | |
| 1分間・伝わり体操制作と普及の試み | 共 | 2016年9月 | 第16回日本体操学会 | ◎吉中　康子、木村みさか | |
| シンポジウム：高齢者の運動のあり方<br>高齢者の運動習慣獲得のために、マルチ体操プログラムの考案とその効果 | 単 | 2016年9月 | 日本体育学会第67回大会 | ◎吉中　康子 | |
| 地域資源を活用した高齢期の運動習慣継続システム―NPO法人の2年間の取組みとその成果― | 共 | 2016年9月 | 日本体育学会第67回大会 | ◎吉中康子、横山慶一、木村みさか | |
| 地域在住自立高齢者の転倒リスクと体力との関連 | 共 | 2015年11月 | 第74回日本公衆衛生学会 | ◎桝本妙子、山田陽介、渡邊裕也、山縣恵美、吉田司、横山慶一、三宅基子、吉中康子、木村みさか　他 | |
| リズム体操を含む多要素複合プログラムが高齢者の体力に及ぼす効果 | 共 | 2015年9月 | 第15回日本体操学会 | ◎渡邊裕也、横山慶一、吉中康子、木村みさか | |
| NPO法人による継続的な地域介護予防システムの構築 | 共 | 2015年8月 | 第15回日本体操学会 | ◎横山慶一、渡邊裕也、吉中康子、木村みさか | |
| 早朝元気アップマルチ体操による高齢者の体力と認知機能向上効果について―デジタルミラーによる効果測定と評価のフィードバック効果― | 共 | 2015年8月 | 日本体育学会<br>第66回学会大会 | ◎吉中康子、木村みさか、横山慶一 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 中高齢者が安全に継続できるマルチ音楽体操の心拍応答 | 共 | 2015年7月 | 第15回日本体操学会 | ◎吉中康子、木村みさか、横山慶一 | |
| 日常生活の歩数が地域在住高齢者の骨格筋量および質に及ぼす影響 | 共 | 2015年6月 | 第57回日本老年医学会学術集会および第29回日本老年学会 | ◎渡邊裕也、山田陽介、横山慶一、吉田司、三宅基子、山縣恵美、岡山寧子、吉中康子、木村みさか | |
| サルコペニア予防を目指すマルチ体操プログラムの効果検証<br>(中高齢者に対する3か月の介入結果) | 共 | 2014年9月 | 第14回体操学会 | ◎吉中　康子、木村みさか | |
| 中高齢者を引き付ける体操プログラムと指導法 | 単 | 2014年9月 | 第14回日本体操学会 | ◎吉中　康子 | |
| Fitness Age Score(FAS)を用いた2年以内の要支援・要介護認定の予測(亀岡Study) | 共 | 2014年9月 | 第1回サルコペニア・フレイル学会 | ◎吉田　司、山田　陽介、横山　慶、山縣　恵美、三宅　基子、渡邊　裕也、吉中　康子、木村　みさか | |
| 自立した高齢女性における尿失禁の実態と体格・体力との関連<br>体力測定会参加者での調査 | 共 | 2014年8月 | 日本体育学会<br>第65回学会大会 | ◎木村みさか、吉中康子、青木好子、海老根直之 | |
| 地域資源を活用した介護予防システムの構築 NPO法人の設立と市民サポーター養成の課題 | 共 | 2014年8月 | 日本体育学会<br>第65回学会大会 | ◎吉中　康子、木村　みさか、横山　慶一 | |
| 地域在住高齢者の身体活動量(亀岡Study) | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎吉田司、山縣恵美、三宅基子、桝本妙子、横山慶一、岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子 | |
| 軽費老人ホーム利用者を対象とした5年間の身体機能の変化 | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎吉中康子、渡邊裕也、横山慶一、三宅基子、山田陽介、吉田司、山縣恵美、桝本妙子、岡山寧子、木村みさか | |
| 地域在住高齢者の痛みの実態と体力との関連(亀岡Study) | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎木村みさか、吉中康子、渡邊裕也、横山慶一、三宅基子、山田陽介、吉田司、山縣恵美、桝本妙子、岡山寧子、 | |
| サルコペニア判定のための骨格筋量を計測する新たな方法の開発(亀岡Study) | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎山田陽介、木村みさか、吉中康子、渡邊裕也、横山慶一、三宅基子、吉田司、山縣恵美、桝本妙子、岡山寧子、 | |
| 地域の介護・サルコペニア予防におけるフォローアップの効果と意義―21ヵ月の大規模介入研究の結果から―(亀岡Study) | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、横山慶一、三宅基子、吉田司、山縣恵美、桝本妙子、岡山寧子、 | |
| 熱中症により救急搬送された高齢者の生活状況 | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、横山慶一、三宅基子、吉田司、山縣恵美、桝本妙子 | |
| 地域在住高齢者の口腔保健行動と体力の関係(亀岡Study) | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎横山慶一、岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、三宅基子、吉田司、山縣恵美、桝本妙子 | |
| 地域在住自立高齢者の保健習慣と健康度との関連 | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎桝本妙子、横山慶一、岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、三宅基子、吉田司、山縣恵美 | |
| 亀岡スタディの研究デザインとベースラインの対象者特性－生活機能リスクと体力の実態とその関連－ | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎三宅基子、桝本妙子、横山慶一、岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、吉田司、山縣恵美 | |
| 地域在住自立高齢者の閉じこもり及び睡眠の実態と両者の関連 | 共 | 2014年6月 | 日本老年医学会 | ◎山縣恵美、三宅基子、桝本妙子、横山慶一、岡山寧子、渡邊裕也、山田陽介、木村みさか、吉中康子、吉田司 | |
| 亀岡市のゆるきゃら『かめまる体操∞アッハッハ』の<br>創作過程と普及に関する検証 | 共 | 2013年9月 | 第13回体操学会 | ◎吉中康子、木村みさか | |
| スポーツ少年団に所属する子どものスポーツ外傷 | 共 | 2013年8月 | 日本体育学会<br>第64回大会 | ◎吉中康子、木村みさか、吉田司 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（口頭発表　続き） | | | | | |
| 亀岡市での介護予防AGEサポーターの養成ー介護予防のための運動器・口腔器の機能向上と栄養改善の総合プログラム | 共 | 2012年9月 | 第12回体操学会 | ◎吉中康子、木村みさか | |
| ビデオシンポジウムpart　I<br>地域の体操　中高年編 | 共 | 2012年9月 | 第12回体操学会 | ◎吉中康子 | |
| AGEサポーターの養成と元気アップ体操教室<br>（介護予防を目的にした大規模コホート研究のために） | 単 | 2012年8月 | 日本体育学会<br>第63回大会 | ◎吉中康子、木村みさか、山田陽介 | |
| 高齢者における座位開閉ステッピング回数と最大10m歩行速度との関係性 | 共 | 2012年6月 | 第54回日本老年医学会<br>学術集会 | ◎田宮 創、横山 慶一、山田 陽介、<br>吉田 司、吉中 康子、木村 みさか | |
| 『地域の絆づくりから始まる子育て支援と高齢者の見守り』 | 単 | 2012年2月 | 平成23年度亀岡市民生委員<br>児童委員全員研修会<br>ガレリアかめおか | ◎吉中康子 | |
| 地域包括支援センターを中心としたウォーキングと体操<br>及びレクリエーションサポーターの養成に関する基礎調査報告書 | 単 | 2012年6月 | 亀岡市役所 | ◎吉中康子 | |
| 亀岡市での介護予防AGEサポーターの養成<br>介護予防のための運動器・口腔器の機能向上と栄養改善の総合プログラム | 共 | 2012年6月 | 日本老年社会科学会 | ◎吉中康子 | |
| 高めよう　健康力<br>『健康体操で生涯現役　−理論と実践−』 | 単 | 2012年7月 | 平成24年度<br>ゴールデン・エイジ・アカデミー | ◎吉中康子 | |
| スポーツ少年団に所属する子どものスポーツ外傷 | 共 | 2013年7月 | 日本体育学会<br>第64回大会 | ◎吉中康子 | |
| 高齢者の転倒予防の取り組み | 単 | 2014年2月 | 市民安全・安心フォーラム<br>inかめおか2014<br>第10回記念日本市民安全学会<br>亀岡大会 | ◎吉中康子 | |
| 京都式総合型介護予防プログラムについての報告会 | 単 | 2014年2月 | 介護予防プログラム構築事業<br>成果発表及び<br>パネルディスカッション | ◎吉中康子（コーディネーター） | |
| ウルトラ元気アップ法でゴールデンシニアをめざそう!<br>秘訣は運動と食生活・睡眠 | 単 | 2014年7月 | 南丹地区建設業協会<br>総会での講演 | ◎吉中康子 | |
| マルチ音楽体操とレクリエーション介護予防の背景 | 単 | 2016年11月 | 町家での連続講座 | ◎吉中康子 | |
| 「京都式総合型介護予防プログラム<br>元気アップ体操で楽しく健康づくり<br>〜筋力を高め、動ける体をつくろう〜」 | 単 | 2016年11月＆12月 | 聴覚障害の方々70人に対して講演と実技を行った。参加者の感想は体が軽くなり、とても気持ちがよかった。楽しかったと好評。 | ◎吉中康子 | |
| 健やかな高齢期を迎えるために一運動を常備薬に健幸（康）を目指そう！一 | 単 | 2016年10月 | 妙心寺派京都両丹教区寺庭婦人会研修会 | ◎吉中康子 | |
| その他（新聞記事・雑誌の執筆） | | | | | |
| おいしい運動 | 単 | 2004年4月〜<br>2019年 | （財）生きがい支援協会<br>「悠悠ライフ」<br>第20号〜第53号 | ◎吉中康子 | 全国20万人の退職教職員が会員。健康づくりの情報とオリジナルプログラムを紹介している。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（調査報告・計画書） | | | | | |
| 亀岡市のスポーツ・レクリエーションネットワークとコミュニティづくりの調査研究成果報告書 | 共 | 2011年12月 | （財）住友生命健康財団 | 亀岡市のスポーツを実施していない市民層をターゲットに新たなスポーツとレクリエーションの場を創出し、人を育てながら地域づくりを進める実践型研究の報告書を作成した。 | |
| 亀岡市セーフコミュニティ<br>スポーツに関する安全対策委員会<br>子どもの外傷調査とサーベイランス | 共 | 2011/6/1～<br>現在継続中 | 亀岡市 | スポーツ外傷調査のアンケートの作成、及びアンケート調査結果のデータ分析を実施、サーベイランスのシステム構築に関わっている。<br>日本初認証、再認証、再々認証。 | |
| 亀岡健康プラン20 | 共 | 2011年2月 | 亀岡市 | 亀岡健康プラン作成に参画した | |
| その他（講演・その他） | | | | | |
| 写真撮りながら街歩く<br>フォトロゲイニング体験会 | | 2019年 | 京都新聞 | | 地域21 |
| 健康長寿亀岡お宝ノート | 単 | 2018年 | 亀岡市<br>亀岡市社会福祉協議会<br>https://www.city.kameoka.kyoto.jp/seikatsusien/documents/kenkoutyoujyukameokaotakaranoto.pdf | 京都式の成果を活かし、運動習慣のない高齢者を対象にしたツールを完成、普及方法をレクチャーし、地域に広げている。 | |
| 認知症を防ぐ！治す！「伝わり体操」 | | 2017年6月 | 健康雑誌『壮快』 | 神経と筋肉の連携を高め、動きやすくなるということで、「伝わり体操」が紹介された。 | |
| 加齢の衰え華麗に復活 | | 2017年6月 | サンケイスポーツ | 伝わり体操が紹介された。 | |
| 亀岡市馬路音頭とストレッチ制作 | | 2017年5月 | 亀岡市馬路自治会 | 亀岡市馬路町から委託され、馬路音頭マニュアルを制作した。 | |
| 「伝わり体操」で筋力アップ | | 2017年5月 | 日経ヘルス6月号 | 動ける体のために、（株）花王に依頼され作成した伝わり体操が紹介された。 | |
| 福井県おおい町ご当地体操制作 | | 2016年～ | 福井県おおい町 | 福井県おおい町から委託され、健康体操を制作し、マニュアルとDVDを制作した。2017年3月に町民を対象に50名のサポーター養成講座を開催した。 | |
| 南丹元気アップサポーター講座 | | 2015年～ | 南丹市 | NPO法人元気アップAGEプロジェクトと協働し、介護予防プログラムを提供し南丹市から委託された講座。講座終了後に4か所で元気アップ体操教室を立ち上げて、市民サポーターが講座を展開している。 | |
| スカイセンター介護予防サポーター<br>講座 | | 2015年～ | 財団法人スカイセンター | スカイセンターから委託され、京都府下のスカイセンター会員を対象に50名のサポーター養成講座を開催した。 | |
| 地域資源を活用した総合型介護予防プログラム実施マニュアル（運動編） | 共 | 2015年3月 | 京都府地域包括ケア推進機構 | 京都式総合型介護予防プログラムの元気アップマルチ音楽体操と筋トレのDVDを企画・制作、マニュアルとしてまとめた。Ytubeで配信される。 | |
| 子どものケガ予防ガイド | 単 | 2015年3月 | 亀岡市 | スポーツ少年団の3年間の調査をもとに、子どものケガの実態と予防法をまとめたもの。 | |
| かめまる体操ガイドブック | 単 | 2015年3月 | 亀岡市 | かめまる体操を普及させるためのガイドブックとして、動きの解説とイラストをリニューアルして、市民誰もが愛着を持ってもらえるようにガイドブックを作製した。 | |
| 地域資源を活用した総合型介護予防プログラム実施マニュアル | 共 | 2014年3月 | 京都府地域包括ケア推進機構 | 京都府と亀岡市との共同で亀岡スタディグループを組織し、京都式総合型介護予防プログラムの構築評価を行い、マニュアルとしてまとめたもの | |
| その他（講演・その他） | | | | | |
| 亀岡大規模スタジアム研究会報告書 | 共 | 2014年1月 | 京都学園大学<br>研究連携支援センター | 亀岡市の研究助成により、研究会を組織、ステークホルダーのヒヤリングなどと文献研究からスタジアムの経済効果について研究しまとめたもの | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 亀岡市バリアフリー基本構想 | 共 | 2013年3月 | 亀岡市 | 平成18年のバリアフリー新法及び平成23年の第4次亀岡市総合計画により、JR千代川駅周辺のバリアフリーを図るため行政と市民が字際に街を歩き、アンケートをする中で基本構想をまとめた | |
| 21世紀の健康法「創造力とコミュニケーション力を高めるとは、筋と大脳のネットワーク構築である」 | 単 | 2012年5月 | 京都府立医科大学客員教授として講義担当 | 体操の介護予防効果について講義と実技で紹介した。 | |
| 地域包括支援センターを中心としたウォーキングと体操<br>及びレクリエーションサポーターの養成に関する基礎調査報告書 | 共 | 2012年4月 | 亀岡市 | 歩いていける距離に活動の場を創出するための基礎研究として、どのようなサポーターを養成すればよいかを調査し、報告した。 | |
| 元気アップ体操 | | 2012年3月 | ケーブルテレビ<br>K-CAT | 電通調査で視聴率が高く「元気アップ体操」を独立番組化した。毎回4分30秒で簡単な楽しい健康体操をアレンジし、ストレッチ体操とともに企画・指導・出演した。 | |
| その他（講演・その他　続き） | | | | | |
| 平成23年度亀岡市民生委員・<br>児童委員全員研修会<br>『地域の絆づくりから始まる子育て支援と高齢者の見守り』 | | 2012年2月 | ガレリアかめおか | これからの民生委員の役割と自身の健康保持の必要性を講演した。 | |
| SKY大学講演と実技<br>「健幸体操で生涯現役！」 | | 2012年2月 | 京都テルサ | 健康理論を講演、運動実践も指導した。 | |
| きさらぎ会<br>（亀岡市退職課長級職員会）<br>30周年記念講演会<br>「若返りの健康法」 | | 2012年2月 | 京都・烟河 | 定年退職後にどのような生活を送れば介護予防費を利用しないで、健康維持ができるかを講演した。 | |
| なっとく☆医学 | | 2012年2月～<br>2013年7月 | ケーブルテレビ<br>K-CAT | テレビ番組「なっとく☆健康体操」の企画と指導・出演 | |
| SKY大学講演と実技<br>「健幸体操で生涯現役！」 | | 2011年7月～2018年 | 京都テルサ | 健康理論を講演、運動実践も指導した。 | |
| 亀岡市<br>介護予防サポーター養成講座 | | 2011年～<br>年2回14期まで開催 | 亀岡市 | NPO法人元気アップAGEプロジェクトを設立し、大学が市から委託を受けて介護予防サポーターを養成している。オリジナルプログラムを提供し、これまで231名を養成した。亀岡10町で元気アップ体操教室を運営3年目となり、500人の会員がこれまで受講した。 | |
| 大阪府医師会主催シルバー健康大学 | | 1998年～2019年 | 大阪府医師会 | 年1回200人から300人の高齢者に対する健康実践講座を受け持っている。 | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 1998年～2017年 | 大阪府医師会主催シルバー健康大学講師 |
| 1998年～2011年 | 亀岡市社会教育委員 |
| 2001年4月～2019年 | 日本体操学会理事長（平成13年4月～平成18年3月）常任理事（平成18年4月～平成22年3月）　H19.9月　学術研究協力団体、2010年4月から副会長 |
| 2002年6月～2011年 | 日本スポーツとジェンダー学会理事（～2005年7月）　現在会員 |
| 2002年～2011年 | 亀岡市生涯スポーツ振興会議座長、亀岡市スポーツ振興審議会会長 |
| 2005年5月～2019年 | かめおか遊友ネットワーク発起人、2005年～理事長、2010年4月から副会長 |
| 2005年～2019年 | 亀岡市健康づくり推進会議委員 |
| 2005年～2018年 | 亀岡市健康福祉の街づくり懇談会会長・地域包括支援センター運営協議会会長 |
| 2006年～2019年 | かめおか元気にし隊発足、早朝健康体操教室の継続及び高齢者の楽しい体操プログラムの創作・実践 |
| 2007年～2019年 | 亀岡市セーフコミュニティ推進協議会委員（余暇・スポーツの安全対策委員会委員長） |
| 2008年～2015年 | 亀岡市いきいき長寿プラン推進協議会委員 |
| 2009年8月～2019年 | 亀岡市教育委員会点検・評価外部評価委員 |
| 2011年6月～2015年 | 京都府地域包括ケア推進機構スーパーバイザー |
| 2011年9月～2015年2月 | 介護予防プログラム構築プロジェクトメンバー（高齢者の介護予防研究の研究協力メンバー及び介護予防推進者として「亀岡スタディ」に参加） |
| 2011年9月～2019年（8月＆2月の年2回） | 元気アップ体操AGEサポーター養成（亀岡市委託事業） |

| | |
|---|---|
| 2012年3月～2015年2月 | 亀岡市元気アップキャラバン隊体力測定会の実施 |
| 2012年10月～2019年 | 亀岡市のゆるきゃら“明智かめまる”を題材に生活習慣病と脳トレを目的に『かめまる体操∞アッハッハ』完成・普及指導者養成・普及 |
| 2013年5月～2019年 | 『かめまる体操∞アッハッハ』普及指導者養成・普及活動、1万人に広げる（2014年亀岡市商工観光課再委託事業） |
| 2012年5月～2019年 | 国際ソロプチミスト亀岡会員 |
| 2015年～ | 京都府民健康長寿向上推進協議会委員 |
| 2019年～ | 京都府医療審議会委員 |

| |
|---|
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
| 高齢者の生活機能・体力測定と分析 |
| 職場での健康づくりプログラムの提供 |
| レクリエーションの普及によるソーシャルキャピタルの構築 |
| 体力測定・評価 |
| 社員の生活活動調査と健康づくりのアドバイス |
| ご当地体操の制作 |
| 介護予防の地域ネットワーク構築アドバイス |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　特別教授 | 氏名　山下　哲 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「スポーツ指導者論」のパワーポイント教材、及びプリント教材の作成による学生の理解力向上と、レポートによる理解力のチェック | 2005年4月～ | 学校や社会において、また行政においても、スポーツの振興は重要な課題であり、それに伴いスポーツ指導者の資質の向上、活動環境の整備が行われている。このような現実のスポーツの支援部分についての理解を深めるために、サッカーを中心にプロフェッショナルからアマチュアスポーツまで授業では、スポーツの指導について、その目的、方法、計画、安全対策等を効率よく学習させるための教材開発に努め、学習させている。学生の理解力のチェックとしてレポートを書かせ、チェックし授業に反映している。 |
| 生涯スポーツプログラムにおける体力測定評価システムの考案と運営 | 2004年4月～ | 健康増進法の施行の背景から、大学生に対してフィットネステスト（体力測定）を実施し、その後のフォローとして、その評価法を検討し、本学独自のシステムとして、体力測定値を入力することで、その年齢集団の平均値とSDから体力プロフィールが描かれ、アドバイスができるようにプログラムした。学生には自分の体力を把握させて、自分自身の体力・健康増進が自発的に行えるよう、実践的能力の形成に努めている。 |
| 基礎ゼミナールにおける大学での学びを気付かせる工夫 | 2009年4月～ | 学生には社会人となるための学びの理解とコミュニケーション能力の向上を目標に、自分との対話形式での振り返りを実施。1冊の大学ノートに長期目標、中期目標、短期目標など段階的な目標を書かせ、日々の意識的な行動を文章に書き、クリアーできたこと、努力していること、自分にかけているアクションなどを具体的に10項目以上書かせる。常に無意識を意識化することと自分の感じたことを言葉にすることで、文章の書けない学生には本を読むように勧め、行動をより具体的にイメージできるよう工夫し、成果をあげている。1回生、2回生でこのように自分の行動を意識化することが将来のキャリアに繋がり、特にスポーツ入試で入学するサッカー部員の就職率は100％である。 |
| 健康運動実践指導者養成過程の設置と運営、ジュニアサッカー教室の運営 | 2010年4月～ | 健康増進法施行の背景から、経営学部に健康運動実践指導者養成過程を置くため、計画し、教員を集め、カリキュラムの作成から、連絡・調整・学生指導までを担当教員と協力して行っている。また、養成過程の運営と実際の健康づくりの実践活動を担える学生の教育に努めている。サッカーの指導と健康教育ができるように、指導力向上のために、亀岡市にサッカー教室を立ち上げて、実際に指導できる場の確保に努めている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 日本サッカー協会認定校人サッカーグラウンドの新設と管理・運営 | 2008年～ | 大学のグラウンドの人工芝への改修を機に日本サッカー協会認定校人サッカーグラウンドとして認証されるよう、学内の予算を獲得し、管理・運営をしている。その後は全国の高校サッカーチームを招聘し、サッカーの競技力の向上とサッカーを目指す若者の教育に効果をあげている。 |
| 京都サンガとの連携指導 | 2009年～ | 「スポーツの素晴らしさを体感し、夢と希望を持ってほしい」という思いから、京都サンガとの協力体制を構築、京都サンガF.C. アカデミーセンタースタッフとトップ選手を招聘し、経営学部スポーツマネジメントコースの学びの質保証を行っている。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 京都スタジアム（仮称）の経済効果創出について | 共 | 2014年12月 | 京都学園大学経営学部論集 Vol21,No1 | 西 政治、山下 哲、吉中 康子 | pp.60-70 |
| 亀岡大規模スタジアム研究会報告書 | 共 | 2014年1月 | 京都学園大学 研究・連携支援センター | 亀岡市の研究助成により、研究会を組織、ステークホルダーのヒヤリングなどと文献研究からスタジアムの経済効果について研究し、まとめたもの | |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2011年～ | 亀岡市サッカー協会副会長 |
| 2007年4月～ | サッカーの実務面でのキャリアについて<br>現在京都学園大学サッカー部においては、着任依頼競技力の向上を目指し、サッカーのネットワークを構築し、日々学生指導を精力的に行ってきた。西コーチ着任以前から、2部の上位の成績を残したことがあったが、本学スポーツリーダー入試の要として、日本のサッカー界の人材教育を目標に、コーチ制度を導入し、経営学部にスポーツマネジメントコースを設置するスタッフの一員として、運営に参加するとともに、60人のクラブ員の生活、学習、キャリアアップに努め、春学期終了前時点で2部の2位と着実にスキルを向上させている。またU15選手育成にもかかわっている。 |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　契約教授 | 氏名　西村　俊範 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 笠森お仙と隠元薬罐 | 単著 | 2014年3月 | 「人間文化研究」第32号 | | 83頁～105頁 |
| 紀年鏡の二・三の問題について | 単著 | 2014年12月 | 「人間文化研究」第33号 | | 77頁～96頁 |
| 三角縁神獣鏡の二・三の問題について | 単著 | 2015年12月 | 「人間文化研究」第35号 | | 61頁～96頁 |
| 江戸後期庶民のお茶 | 単著 | 2016年12月 | 「人間文化研究」第37号 | | 91頁～118頁 |
| 桃山～江戸中期、庶民のお茶 | 単著 | 2017年12月 | 「人間文化研究」第39号 | | 139頁～159頁 |
| 江戸時代の喫茶道具 | 単著 | 2018年11月 | 「人間文化研究」第41号 | | 103頁～132頁 |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| 公開講座における講演 | 「近世庶民のお茶」京都学園大学京町家キャンパス新柳居市民講座　2015年9月11日 |
|---|---|

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　契約教授 | 氏名　吉川　節子 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 科目「西洋美術史」「日欧比較芸術論」「現代アート論」では、見学を企画し，作品を実見して比較・鑑賞するという美術史の基本を実践 | 2018年4月～ | 美術史の授業で「作品」を実見・鑑賞することは必須です。第一回授業で行ったアンケートで，学生が美術展に行く機会が少ないことが判明しました。授業では展覧会を紹介し，学生が多くの作品と向きあうように努めていますが，2018年度春学期は京都国立近代美術館(明治150年展＆平成30年度第1回コレクション展)，京都文化博物館(総合展示&オットー・ネーベル展)，並河靖之七宝記念館(開館15周年記念―春季特別展)を見学し，多方面の作品と実際に接する機会を設定しました。見学後に提出されたレポートでは，知見が広がったと全員が指摘し，教室の授業では経験できない見学の有意義さを学生は強く実感していました。依頼した学芸員の方の懇切な解説も，美術館システムへの学生の理解を深めました。父母の会から入館料の助成をいただいて実現した見学でしたが，これからも毎学期見学を企画して，授業の充実を図りたいと考えています。 |
| 科目「西洋美術史」「日欧比較芸術論」「現代アート論」での視聴覚教材の活用，クイズ(リアクション・ペーパー)の実施 | 2018年4月～ | 講義科目では，ともすれば講義を聴く(だけ)という受動的な受講に学生は陥りやすい。積極的な授業参加を促すためにパワーポイント・DVD等，視聴覚教材を活用して学生が興味を持って授業テーマに取り組めるよう努めています。さらに授業への集中度を高めるために，授業の終わりに授業内容の理解を確かめるクイズ(リアクション・ペーパー)を実施しています。このクイズは，直後に解答することによって，学生は理解していなかった箇所を認識し，その日の授業の重要ポイントを改めて学ぶことに役立っています。リアクション・ペーパーも学生が関心をもつ対象、疑問などが明らかになり、充実した授業を行うことに役立っています。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 『森鷗外事典』 | 共著 | 2019年近刊 | 新曜社 | 平川祐弘監修 | 「黒田清輝」「原田直次郎」「東京美術学校」「美術行政」「美術批評」など「美術」関連項目を執筆 |
| 論文 | | | | | |
| 「黒田と鷗外―若き日の交流―」 | 単著 | 2016年春 | 『森鷗外記念会通信』194号 | | pp.1-3 |
| 「“ワシントン・ナショナル・ギャラリー展～アメリカ合衆国が誇る印象派コレクションから”展評」 | 単著 | 2017年8月 | 『三菱一号館美術館 研究紀要』第3号 | | pp.76-77 |
| 「日本美術史への問い：書評，宮下規久朗著『そのとき，西洋では―時代で比べる日本美術と西洋美術』2018年小学館刊」 | 単著 | 2019年6月 | 『図書新聞』3404号 | | 6面 |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 西東京市市民講座(谷戸公民館) | 2015年5月～6月「印象派探訪」 |
| 西東京市市民講座(谷戸公民館) | 2016年7月「ルノワールの世界」 |
| web中公新書:『知の現場から』 | 2017(平成29)年11月20日公開「吉川洋　吉川節子の仕事場」www.chuko.co.jp/shinsho/portal/cat-03/-web中公新書 |
| NHK文化センター京都教室 | 2019年7月12日「印象派」　ヨーロッパ・アメリカ美術～アーティストの秘密を探る |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　准教授 | 氏名　プレヴォ・ニコラ | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| Expression of a structurally constrained von Willebrand factor variant triggers acute thrombotic thrombocytopenic purpura in mice | 共 | 2014年4月14日 | Blood.Vol.123 NO.21 | Morioka Y, Casari C, Wohner N, Cho S, Kurata S, Kitano A, Christophe OD, Lenting PJ, Li R, Denis CV, Prévost N | 3344-3353 |
| Apoptotic Platelet Events Are Not Observed in Severe von Willebrand Disease-Type 2B Mutation p.V1316M | 共 | 2015年12月8日 | PLoS One.Vol.10 NO.12 | Berrou E, Kauskot A, Adam F, Harel A, Legendre P, Lavenu Bombled C, Rothschild C, Prévost N, Christophe OD, Lenting PJ, Denis CV, Rosa JP, Bryckaert M | e0143896 |
| A genetically-engineered von Willebrand disease type 2B mouse model displays defects in hemostasis and inflammation | 共 | 2016年5月23日 | Scientific Reports.Vol.6 | Adam F, Casari C, Prévost N, Kauskot A, Loubière C, Legendre P, Repérant C, Baruch D, Rosa JP, Bryckaert M, de Groot PG, Christophe OD, Lenting PJ, Denis CV | 26306 |
| Full activation of mouse platelets requires an ADP secretion pathway regulated by SERCA3 ATPase-dependent calcium stores | 共 | 2016年6月14日 | Blood. Vol.128 NO.8 | Elaïb Z, Adam F, Berrou E, Bordet JC, Prévost N, Bobe R, Bryckaert M, Rosa JP | 1129-1138 |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2013年7月<br>International Society on Thrombosis and Haemostasis( ISTH ) | Morioka Y, Casari C, Kurata S, Christophe OD, Denis CV, Prévost N. A novel cleavage-resistant and highly prothrombotic von Willebrand factor mutant. 口頭発表 |
| 2013年7月<br>International Society on Thrombosis and Haemostasis( ISTH ) | Wolke S, kurata S, Morioka Y, Heesemann J, Cornelis G, Prévost N. Expression of exogenous proteins in plateiets:All you need is Yop.口頭発表 |
| 2017年7月<br>International Society on Thrombosis and Haemostasis( ISTH ) | Fortna R, Prévost N. Von Willebrand Factor-platelet Microthrombi Phagocytosis by Macrophages as a New Homing Mechanism for Tissue Entry and Fibrosis.口頭発表 |
| 2019年7月<br>International Society on Thrombosis and Haemostasis( ISTH ) | Beuchat Z., Prévost N. Expression of von Willebrand factor by tumor cells - Relevance to cancer-associated thrombosis and animal studies.ポスター |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　講師 | 氏名　西　政治 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「トレーニング実習」の教材の作成による学生の理解力向上と、レポートによる理解力のチェック | 2009年4月～ | 補強運動の必要性とプログラムへの取り入れ方を理解させるため、目的に応じたトレーニングの重要性とその方法、実施上の注意点を実習を通して説明し、指導方法を学ばせている。特に筋力系と柔軟性、調整力などのトレーニングの実施法を習得させる。アイソメトリックやウエイト、サーキットなどのさまざまなトレーニングの原則・効果・組み立て方などを教材を工夫して学ばせている。プロで競技した時代の研さんを活かし、初歩からプロでも通用するレベルのトレーニングの重要性とその方法、実施上の注意点など学生の理解力のチェックとしてレポートを書かせ、授業に反映している。 |
| 生涯スポーツプログラムにおける体力測定評価システムの運営 | 2004年4月～ | 健康増進法の施行の背景から、大学生に対してフィットネステスト（体力測定）を実施し、文責評価させ振り返った後に、実践力がつくように指導を工夫している。学生には自分の体力を把握させて、自分自身の体力・健康増進が自発的に行えるよう、実践的能力の形成に努めている。 |
| 「フットサル」の教材の作成による学生の理解力向上と、レポートによる理解力のチェック | 2009年4月～ | 楽しくフットサルをおこなうために必要な個人技術を身につけ、個人技術の応用であるグループ戦術を目指競るよう、教材の開発に努めている。また、授業を通して仲間と積極的にコミュニケーションを取り、継続して授業をおこなうことで体力の維持増進につながり、心身の健康を目指せるように、常に学生の行動を分析し、指導に反映している。授業後半では、ルールを理解し審判ができるように目指し、授業を離れて、自分たちの仲間と楽しくゲーム運営ができるようになることを目指している。 |
| 「サッカー」の教材の作成による学生の理解力向上と、レポートによる理解力のチェック | 2009年5月～ | サッカーをサッカーらしくしている技術的特質を「コンビネーションを含むシュート」ととらえ、基礎技術を「2～4人のコンビネーションによるパスーシュート」（トラッピングやドリブルを含む）を中心に考え教材を工夫している。初心者、経験者を問わず、技術の向上を図るとともに、多くの仲間をつくり、交流を大切に、安全で楽しさを求め日々実践している。受講生にはレポートを書かせ、チェックし、授業に反映している。 |
| 健康運動実践指導者養成過程の設置と運営、ジュニアサッカー教室の運営 | 2010年4月～ | 健康増進法施行の背景から、経営学部に健康運動実践指導者養成過程を置くため、計画し、教員を集め、カリキュラムの作成から、連絡・調整・学生指導までを担当教員と協力して行っている。また、養成過程の運営と実際の健康づくりの実践活動を担える学生の教育に努めている。<br>サッカーの指導と健康教育ができるように、指導力向上のために、亀岡市にサッカー教室を立ち上げて、実際に指導できる場の確保に努めている。 |
| 日本サッカー協会公認B級ライセンスの取得と指導者育成への貢献 | 2009年12月 | 日本サッカー協会公認B級ライセンスを取得し、指導者としての研さんに励み、プロとして通じるサッカーの指導を目指して日々工夫している。人工芝完成後は、高校生チームを招いての練習試合、京都学園幼稚園を招いてのサッカー教室、地域のジュニアの指導を行い、広くサッカー普及と本学の知名度の向上に貢献している。 |
| 47都道府県指導者養成インストラクターに任命され、若手指導者の養成 | 2016年2月～ | 日本サッカー協会より任命され、47FAインストラクターの資格を保有し、日本サッカー協会が認定するD・C・B・A・Sの5段階あるD・C級の指導者養成を行う事で、地域の指導者との関係を深め、日本サッカー界に貢献すると共に、本学の知名度の向上に努める。 |
| 京都府下の大学サッカーをレベルアップするために、京都府サッカー協会主催で行う大会運営 | 2016年2月～ | 京都府サッカー協会が主催する「京都府学生サッカー選手権大会」にて、大会運営に関わり、京都府の大学サッカーのレベルアップに努める。 |
| 小学6年生で実施されているキャリア教育に、元プロサッカー選手として、「スポーツを職業にする」について講演 | 2016年3月2日 | 子どもたちは自分の将来を考えるのに、役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて夢を描くことも容易ではなくなっているなか、文部科学省が推進する「キャリア教育」にて、亀岡市立城西小学校から「スポーツを職業にする」のテーマで講師として招かれ講演する。 |
| 関西学生サッカー連盟のレベルアップのため、選考会や大会優秀選手表彰など関西学生サッカー界に努める | 2016年4月～ | 関西学生サッカー連盟より、技術委員に任命され、関西学生サッカー連盟に登録するチーム・選手を対象に、各大会にて優秀選手を選出し、競技力向上を図り、年間を通じて関西の優秀な選手を選抜し、Jリーグチーム（ガンバ大阪、セレッソ大阪、ヴィッセル神戸、京都パープルサンガ）とリーグ戦を行い、関西のレベルアップに努めている。 |
| 関西学生サッカー連盟のレベルアップのため、理事、競技委員を兼任することで、関西学生サッカーに努める | 2016年4月～ | 関西学生サッカー連盟より、理事、競技委員に任命され、連盟が主催する大会運営や連盟自体に関わり、連盟の円滑な運営、競技力向上など関西のレベルアップに努めている。 |

| | | |
|---|---|---|
| 47都道府県指導者養成インストラクター研修会 | 2018年2月10日11日 | 各都道府県インストラクターが行う研修会に、本学学生を補助員として参加させ、京都府サッカー協会に協力する事で、指導者とのつながりや、本学学生の知識向上に努める。 |
| 日本サッカー協会公認A級ライセンスの取得 | 2018年5月～ | 2017年度日本サッカー協会公認A級ライセンス講習を受講し、2018年度5月日本サッカー協会理事会にて承認。指導者としての研鑽に励み、本学の選手に質の高い指導を行なえるよう努めている。 |
| サッカーフェスティバル | 2018年12月15日 | 地域のサッカー文化を活性するため、亀岡市のサッカー少年・少女84名向けに、地元南丹高校サッカー部と亀岡FCの協力得て、本学サッカー部員がメニューを考え,サッカーフェスティバルを開催した。本学の教員志望やスポーツ指導者を目指す学生への経験の場を作り、指導のレベルアップに努めている。 |
| 大学コア科目スポーツライフスキル科目担当 | 2019年4月～ | 大学の改革科目の一つとして、体育の必修化スポーツライフスキル(SLS)が始まり、昨年から会議を繰り返し準備を進めてきた。2019年度入学生より、二回生までの春・秋学期の計4学期を全学生が必修科目となり、基礎体力向上、コミュニケーション力・協調性・リーダーシップ育成を目的としたプログラムで、授業・振り返り・改善を繰り返し授業内容の質向上に努めている。 |
| 日本サッカー協会公認指導者養成会B級ライセンス講習会補助員 | 2018年6月24日～7月29日 | 日本サッカー協会が認定するD・C・B・A・Sの5段階あるB級ライセンスの指導者養成会場を本学で行う事で、地域の指導者との関係を深め、日本サッカー界に貢献すると共に、本学の学生が在学中にB級ライセンス取得出来る環境整備を行う。 |
| 本学の学生を対象とした、日本サッカー協会公認指導者養成会C級ライセンス講習会検討中 | 2018年度中 | 日本サッカー協会が認定するC級ライセンス指導者養成を本学の学生対象に行う事で、在学中に指導者の資格を取得し、サッカーの知識向上と卒業後の進路に繋がる。また、在学中に指導資格が取得できる大学は多くないため、学生募集に貢献するものと考える。協会担当者の承諾を受け、現在日程を調整中。将来的には、在学中にB級ライセンス取得可能な環境を整備し、他大学にない特徴的なシステムを計画中。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 日本サッカー協会認定校人サッカーグラウンドの新設と管理・運営 | 2009年3月～ | 大学のグラウンドの人工芝への改修を機に日本サッカー協会認定校人サッカーグラウンドとして認証されるよう、学内の予算を獲得し、管理・運営をしている。その後は全国の高校サッカーチームを招聘し、サッカーの競技力の向上とサッカーを目指す若者の教育に効果をあげている。 |
| 京都サンガとの連携指導 | 2009年～ | 「スポーツの素晴らしさを体感し、夢と希望を持ってほしい」という思いから、京都サンガとの協力体制を構築、京都サンガF.C. アカデミーセンタースタッフとトップ選手を招聘し、経営学部スポーツマネジメントコースの学びの質保証を行なっている。 |
| 亀岡FCとの連帯指導 | 2017年3月～ | 地域の中学生年代チーム亀岡FCに関わり、選手育成と指導者の養成を目的とした活動を行う。また、南端高校と亀岡高校の指導者とも連携を図り、亀岡のサッカーを活性化する活動を行なっている。 |
| 亀岡FCの選手指導 | 2019年4月～ | 地域の中学生年代チーム亀岡FCを本学の学生が指導する事で、教員志望やスポーツ指導者の現場経験の確保と、育成年代での大切な基礎技術習得時期を本学で指導する。大学と地域のクラブが協同する事で、地域の青少年・少女の育成に貢献する。 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文 | | | | | |
| 亀岡大規模スタジアム研究会報告書 | 共 | 2014年1月 | 京都学園大学研究連携センター | 亀岡市の研究助成により、研究会を組織、ステークホルダーのヒヤリングなどと文献研究からスタジアムの経済効果について研究し、まとめたもの | |
| 日本プロサッカーりーぐにおける結果の不確実性と入場者数の関係 | 共著 | 2013年10月 | 京都学園大学経営学部論集 23(1) | 涌田　龍治 ・ 西　政治 | P129-140 |
| 「スポーツ基本法」と地域スポーツの課題 | 共著 | 2012年1月 | 京都外国語大学研究論叢 LXXⅧ | 中嶋　大輔 ・ 西　政治 | P87-103 |
| スポーツ・マネジメント研究の仮定の再検討:日本のプロサッカー市場の分析 | 共著 | 2011年10月 | 京都学園大学経営学部論集 21(1) | 涌田　龍治 ・ 西　政治<br>山下　哲 ・ 吉中　康子 | P239-258 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 2007年4月～ | サッカーの実務面でのキャリアについて<br>平成8年にJ-1リーグのアビスパ福岡に入団。U-19及び20の日本代表チームに入り、アジアユース大会では準優勝に導いた。翌年ワールドユースでベスト8の成績を残し、平成10年にはオリンピック代表候補となる。平成11年中京大学に入学、翌年は全日本大学サッカー選手権で全国優勝に導き、最優秀DF受賞。<br>中京大学では主将を務め、卒業後はJ-2ヴァンフォーレ甲府に入団。その後、社会人チームのオファーを受け、退団。関西社会人クラブASラランジャ京都選手兼コーチとなり、リーグ優勝に導いた。<br>現在京都学園大学サッカー部においては、着任時には2部の5位であったが、春学期終了前時点で2部の2位と着実にスキルを向上させている。また、亀岡市のサッカーU15の指導も精力的に行い、生涯スポーツ及び競技スポーツにおけるサッカーの指導者として日々実践活動においての工夫・研鑽について努力を重ねている。 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　講師 | 氏名　三浦 重則 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | 平成13年～ | この19年間にパワーリフティング競技の世界選手権日本代表延べ110名を育成。うち3名の世界チャンピオンと3名の世界新記録樹立者を育成。 |
| | 平成25年～ | 体育実技授業における運動量機会均等ローテーションシステムの研究と充実した技術習得内容の研究 |
| | 平成27年4月1日 | 平成26年度年度京都学園大学ベストティーチャー賞（経済学部） |
| | 平成30年4月～ | 「SLS（スポーツライフスキル）プログラム」スタッフリーダー |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 講演　日本代表として陸上競技（砲丸投）、指導者としてパワーリフティング競技を通じて、延べ40数カ国の渡航経験によるスポーツ・文化・人権の融合について | 2011年12月11日 | 「世界を経験して」（京都府立朱雀高等学校） |
| | 2012年12月8日 | 「世界を見てきて」～スポーツを通じて見たこと知ったこと～<br>（亀岡市立育親中学校） |
| | 2013年10月18日 | 「世界を見てきて感じたこと、そして伝えたいこと」<br>（京都府立久美浜高等学校） |
| | 2013年11月29日 | 「世界を見て」～指導者として感じたこと、そして、伝えたいこと～<br>平成25年度運動部活動指導者研修会（京都府） |
| | 2015年1月21日 | 「教職員人権学習研修会」講師　（京都府立南陽高等学校） |
| | 平成27年～ | アスレチックトレーナー資格取得講座講師<br>（明治東洋医学院専門学校） |
| | 2015年12月5日 | 平成27年度京都府立学校PTA指導者研修会（口丹ブロック）記念講演<br>「スポーツを通しての人間形成」 |
| | 2016年8月20日 | 平成28年度スポーツ指導者講習会<br>「指導者として伝えたいこと」 |
| | 2017年3月4日 | 平成28年度亀岡・南丹地区スポーツフォーラム<br>「強い選手・チームを育成するために必要なことは何か。」 |
| | 2017年6月2日 | セーフコミュニティかめおかスポーツ研修会<br>「経験0から世界へ」 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 健康運動教室の講師 | 随時 | 各市町村等の依頼により「健康運動教室」、「ノルディックウォーキング」の講師 |
| ノルディックウォーキング指導 | | |
| 競技別ウェイトトレーニング指導 | 随時 | 陸上競技、野球、柔道、スキー等種目を問わず、競技力向上のためのウェイトトレーニング指導を実施。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 「活動筋の自覚的疲労スケールを用いた膝伸展運動における筋活動量の　変化」 | 共著 | 平成26年3月発行 | 平成25年度奈良体育学会研究年報　第18号 | 天理大学体育学部　中谷敏昭<br>京都学園大学　三浦重則 | |
| 「バドミントン選手におけるオンコートでの専門的フィジカルテストの信頼性と妥当性」 | 共著 | 平成26年10月発行 | 「トレーニング科学」第25巻第4号 | 天理大学体育学部　中谷敏昭<br>京都学園大学　三浦重則 | |
| 「活動筋の自覚的疲労感を用いたジャンプトレーニングが高齢者のNeuromotor fitnessに及ぼす影響」 | 共著 | 平成27年2月発行 | 第14回日本体育測定評価学会 | 天理大学体育学部　中谷敏昭<br>京都学園大学　三浦重則 | |
| バドミントン競技選手を対象としたランジジャンプテストの信頼性と妥当性 | 共著 | 平成29年3月発行 | 天理大学学報245号 | 天理大学体育学部　中谷敏昭<br>京都学園大学　三浦重則 | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 京都府パワーリフティング協会理事長 | 平成13年4月～平成29年5月 |
| 全日本学生パワーリフティング連盟　会　長 | 副会長（平成30年4月～平成31年3月）・　会長（平成31年4月～） |
| （公社）日本パワーリフティング協会　常務理事 | 理事（平成23年4月～平成28年3月）・　常務理事（平成30年6月～） |
| パワーリフティング世界選手権日本選手団団長 | 平成21年度～平成27年度 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| ・レジスタンストレーニングの研究および指導 | |
| ・健康運動の研究および指導（フィットネス・ノルディックウォーキング） | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　嘱託講師 | 氏名　岩橋　一樹 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 1 グループワークを取り入れた英語指導 | 平成27年4月1日～<br>平成31年3月31日 | 英語の授業において、文の構造や文章の内容を学生自らで把握できるようにするために、グループワークを取り入れて文章を要約させ、机間巡視しながら学生に助言することでわからないことがあれば学生が教員に積極的に質問できるようになり、わからないことは学生がお互いに教えられるようになった。 |
| 2 学生による授業評価(摂南大学) | 平成27年4月1日～<br>平成28年9月10日 | 自由記述のアンケートで、学生にしっかり英語を声に出させて読ませたのがよかったというコメントを頂いた。さらに、自然科学や医学、薬学に関する英文の読解において、文章の構造を正確に捉えられるように指導したのがわかりやすかったというコメントを頂いた。 |
| 3 大学設置・学校法人審議会の教員審査 | 平成28年8月26日 | 大和大学教育学部教育学科　適格職位:講師<br>英語学概論Ⅰ、英語学概論Ⅱ、英語教育学概論、英文法概説Ⅰ、英文法概説Ⅱ、英語学演習Ⅰ、英語学演習Ⅱ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、Intensive ListeningⅠ、Intensive ListeningⅡの各科目で「可」と判定 |
| 4 大学設置・学校法人審議会の教員審査 | 平成29年2月25日 | 大和大学教育学部教育学科　適格職位:講師<br>卒業研究Ⅰ、卒業研究Ⅱ、卒業論文の各科目で「可」と判定 |
| 5 学生による授業評価(大和大学) | 平成29年8月10日 | 自由記述のアンケートで、ペアワークやグループワークを取り入れ、学生に英語を使わせる機会をできるだけ設けたことにより授業の雰囲気を楽しいものにすることができてよかったというコメントや、高校の英文法の再復習ができた点が良いというコメントを頂いた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| なし | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| なし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 1 大和大学教育学部教務委員 | 平成29年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 主に留学帰国学生の単位認定を行った。 |
| 2 大和大学教育学部教育学科英語教育専攻クラス担任 | 平成29年4月1日～<br>平成30年3月31日 | 学生の勉学や生活面、進路、留学に関する相談に乗り、新入生が大学になじめるように指導した。 |
| 3 大和大学教育学部入試出題・採点・点検委員 | 平成29年6月13日～<br>平成30年3月31日 | 入試問題の採点と作成。 |
| 4 大和大学教育学部教育学科英語教育専攻専攻紹介ブース担当 | 平成29年8月10日、11日 | オープンキャンパスの専攻紹介ブースで、入試の概要や留学制度の概要について学生に発表を行わせ、その発表の仕方について指導を行った。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| なし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 1.「英語における形容詞の意味変化の双方向性をめぐって」 | 単著 | 平成28年3月 | *JELS* 33 | | 38-44 |
| 2 “On Core Function of English Sensory Adjectives”(英語の感覚形容詞の中核的機能をめぐって) | 単著 | 平成29年12月 | *Osaka University Papers in English Linguistics* 18 | | 127-146 |
| その他 | | | | | |
| 1.「英語における形容詞の意味変化の双方向性をめぐって」 | 単著 | 平成27年11月 | 日本英語学会第33回全国大会研究発表　於関西外国語大学 | | |
| 2.「英語における液体のメタファーと語彙的・語用論的意味の関わりをめぐって」 | 単著 | 平成27年12月 | 日本英文学会関西支部第10回大会研究発表　於武庫川女子大学 | | |
| 3.「英語の感覚形容詞の意味素性と意味拡張との関わりをめぐ | 単著 | 平成28年12月 | 日本英文学会関西支部第11回大会研究発表　於神戸市外国語大学 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 関西言語学会会員 | |
| 大学英語教育学会会員 | |
| 日本英語学会会員 | |
| 日本英文学会会員 | |
| 日本語用論学会会員 | |
| 日本認知言語学会会員 | |
| | |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| なし |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　嘱託講師 | 氏名　金子　賢治 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 九州産業大学・語学教育研究センター・英語Listening & Speaking クラス担当 | 2017年4月～<br>2019年3月 | 1)ペア・グループワーク中心の授業<br>2)授業での日本語と英語の適度な使い分け<br>3)リスニングの指導(TOEIC Bridgeなど)<br>4)Classroom Englishの指導<br>授業アンケートの結果では学生から平均3.45／4.00と高評価を得た。特に「とても意欲的に参加した」、「先生が話しやすくって、コミュニケーション能力が高まった」、「授業で積極的に英語を使うようになった」、「単語や英語の聞き取りが成長した」など良いコメントが多かった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | なし |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 九州産業大学・語学教育研究センター・英語Listening & Speaking クラス担当 | 2018年3月 | 外国語(英語)に対しての不安や緊張(Foreign Language Classroom Anxiety or　FLCA)についての論文を書く。2018年3月に九州産業大学・語学教育研究センターから出版される。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 早稲田大学人間科学部人間情報学科<br>通信教育・教育コーチとしてIntercultural Communication (異文化間コミュニケーション)(英語)を担当する。 | 2018年4月～<br>2018年8月 (前期のみ) | 動画、電子掲示板を使っての通信教育。中間試験の評価、毎週のディスカッションの課題やテーマを作成。英語での授業動画の内容を100%理解していない学生がいるので、重要なポイントを再確認させる。授業内容はアメリカと日本の文化の比較に焦点を置く:individualist – collectivist culture, high-context or low-context communication。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| The atomic bomb experience and the Japanese family in Keiji Nakazawa's anime Hadashi no gen (barefoot gen) (英語) | 単著 | 2015年7月 | McFarland & Company, Inc.<br>The atomic bomb in Japanese cinema: Critical essays本・章を書く。 | | p. 111-123 |
| 論文 | | | | | |
| 1　Foreign language classroom anxiety in Japanese university students of English (英語) | 単著<br>(査読付き) | 2018年3月 | Language Education and Research Center (LERC)<br>Vol. 13 | | p. 22-47 |
| 2　The inflow of Southeast Asian healthcare worker candidates in Japan: Japanese reactions to the possibility of cultural and ethnic diversity(英語) | 単著<br>(査読付き) | 2015年12月 | The Copenhagen Journal of Asian Studies(Scopus)<br>Vol.33.　No.2. | | p.　78-96 |
| 3　An Analysis of Japan's Popular Cultural Tourism: Constructing Japan's Self-Image as a Provider of "Unique" Culture(英語) | 単著<br>(査読付き) | 2013年8月 | Global Journal of Human Social Science Research<br>Vol.13. No. 4. | | p.　1-7 |
| 4. Constructing Japanese nationalism on television: the Japanese image of multicultural society(英語) | 単著<br>(査読付き) | 2010年10月 | New Cultural Frontiers: Online Sociological Review<br>Vol. 1. No. 1. | | p.101-116 |
| 5. Foreign migrants in Taiwan and Japan: A comparative analysis(英語) | 単著<br>(査読付き) | 2009年11月 | Asia Journal of Global Studies<br>Vol.3. No. 1. | | p.　22-36 |
| 6. 日本社会が構成する外国人像と日本のイデオロギーとアイデンティティー(和文) | 単著<br>(査読付き) | 2008年11月 | Studies in Comparative Culture<br>比較文化研究. No. 84. | | p. 57-70 |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| （口頭発表）（単独のみ） | |
| 2019年5月 | タイトルLearner beliefs about English learning among Japanese university students （英語）, 学会（日本英語学会） ELSJ 12th International Spring Forum 2019、東京 |
| 2015年5月 | タイトルJapanese Transnational Entrepreneurs in Bangkok, Thailand（英語）、The 4th International Search Conference 2015, Taylor's University, マレーシア |
| 2014年10月 | タイトル　Bilingualism among Japanese children in Malaysia（英語）、R&D Colloquium 2014、Universit Tunku Abdul Rahman,マレーシア |
| 2009年3月 | タイトル　Studying the situation of foreign migrants between Taiwan and Japan: A comparative analysis （英語）、Asia Association for Global Studies（AAGS）、 カナダ |
| 2008年12月 | タイトル　Japanese construction of outsiders: Making the image of foreigners（英語）、2008 Ritsumeikan Asia Pacific Conference、The Asia Pacific and the Emerging world system、大分 |
| 2008年6月 | タイトル、日本人の外国人に対する固定観念と先入観の研究（日本語）日本比較文化学会　第30回全国大会、京都 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　嘱託講師 | 氏名　甲田　太郎 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 木津川市中学生対象ゼミナール | 2017/9/15 | 双方向的アクティブラーニング形式による英国社会思想史のゼミナールを一般社団法人地域教育デザインラボのもと木津川市の中学生に対してとり行った。 |
| 京都大学ティーチングアシスタント | 2012年4月～2018年3月 | 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程在籍時の全期間においてティーチングアシスタントに従事した。 |
| 京都市立山階小学校総合育成支援員 | 2018年9月～2019年3月 | 普通学級及び特別支援学級の児童に対する支援を行なった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 風紀改良協会とマンデヴィルの論争関係<br>―ウッドワードの分析を中心に― | 単著 | 2017 | 経済論叢191(4)<br>京都大学経済学会 | | 81-94 |
| マンデヴィルの社会秩序―政治家の役割― | 単著 | 2017 | 経済論叢191(3)<br>京都大学経済学会 | | 17-34 |
| シャフツベリの社会秩序―徳の相対的側面とその育み方― | 単著 | 2015 | 経済論叢189(2)<br>京都大学経済学会 | | 61-74 |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 経済学史研究会<br>第242回例会<br>(2017年10月7日) | 「マンデヴィルとキリスト教知識普及協会、風紀改良協会、シャフツベリの応答関係」 |
| 日本イギリス哲学会関西部会<br>第56回研究例会<br>(2017年7月22日) | 「キリスト教知識普及協会と風紀改良協会の関係性から見たマンデヴィル」 |
| 日本イギリス哲学会関西部会<br>第54回研究例会<br>(2016年7月23日) | 「社会秩序の維持という目的から見たマンデヴィルの思想―『蜂の寓話』以外の著作や道徳改良協会との関係性を手がかりに―」 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

マンデヴィルやシャフツベリの思想、道徳教育、イギリス哲学の知識

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　嘱託講師 | 氏名　佐藤　亜紀子 | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・(無)） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 「学ぶ力の育成」 | 2004年7月～ | 情報機器の発展によりコミュニケーション能力が著しく低下した現代の若者たちに対して、座学では学ぶことのできない体育実技において、コミュニケーションを多く図る授業の実践形態をとった。<br>体育実技授業において、教授型ではなく、グループ活動を行う中で仲間との協調性や積極性を身に付けさせる活動を促すよう努めた。その結果、リーダーの発掘・育成、仲間との信頼等、多くの成果を得られている。 |
| 体育実技における学生の自治運営能力の促進 | 2015年4月～ | 授業において、与えられた内容を消化するのではなく、自分達の集団能力を見極め、集団の能力に応じた、ルールをカスタマイズし、学生自ら授業に参画し取り組む方法を実践指導している。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 女子バスケットボールにおけるパフォーマンステストと外傷調査について | 共著 | 平成30年2月 | 総合研究所所報　第19号 | 井口順太 | 1項-6項 |
| 大学女子ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ競技におけるゲーム分析<br>―関西女子学生ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ2014 年度1・2 部のリーグ戦を用いて― | 単著 | 平成28年3月 | 京都学園大学健康医療学部紀要第1巻2015年 | | 29貢-37貢 |
| ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙのルール改正におけるﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽへの影響と今後の課題 | 単著 | 平成25年3月 | 日本ｺｰﾁﾝｸﾞ学会第24回大会大会論文集 | | 43貢-44貢 |
| その他 | | | | | |
| （ポスター発表）<br>ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙのルール改正におけるﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽへの影響と今後の課題 | 単独 | 平成25年3月 | 日本ｺｰﾁﾝｸﾞ学会第24回大会 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

日本ｺｰﾁﾝｸﾞ学会・日本ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ学会

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　教育開発センター | 職名　嘱託講師 | 氏名　高頭 悠樹 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有　(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 英語Ⅰ・英会話補講 | 2019年4月～ | 太秦・亀岡各キャンパスにて、授業の補講をレベル別（Basic, Intermediate,Advance)に個別対応をして行った。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 小テスト | | 講義に欠席した者、小テストで所定の点数が取れず不合格になった者に対する再テストを作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| パワーポイント | | 個別（・少人数）指導の利点を生かし、講義内容をより噛み砕いた内容を伝えることを試みている。図や絵など視覚に訴える工夫や、二人以上の場合はペアワークを取り入れている。 |
| 板書 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |
| |

# ナガモリアクチュエーター研究所　教員組織

| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 教授 | Alberto　Castellachi | 502 |
| | Ian　PIUMARTA | 503 |
| | 今　井　欽　之 | 507 |
| | 沖　一　雄 | 511 |
| | 川　上　浩　司 | 512 |
| | 田　畑　修 | 513 |
| | 中　村　康　一 | 514 |
| | 福　島　宏　明 | 519 |
| | 堀　井　滋 | 521 |
| | 的　場　宏　次 | 524 |
| 准教授 | 岸　田　逸　平 | 525 |
| | 高　橋　亮 | 528 |
| | 西　正　之 | 531 |
| | 松　本　龍　介 | 535 |
| 講師 | KUCUK　FUAT | 544 |
| | Martin　Sera | 545 |
| | Sajid　Nisar | 546 |
| | Salem Ibrahim Salem | 547 |
| | 佐　藤　啓　宏 | 549 |
| | Zilu　Liang | 550 |
| 副学長 | 小　関　敏　彦 | 554 |

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 | ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名 | 教授 | 氏名 | Alberto CASTELLAZZI | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・無） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Performance and reliability of PowerMOSFETs in the 42V-PowerNet | 単著 | 2004 | Shaker Verlag, Aachen | | |
| Comprehensive Compact Models for the Circuit Simulation of Multichip Power Modules | 単著 | May. 2010 | IEEE | | |
| Single-Phase T-Type Inverter Performance Benchmark Using Si IGBTs, SiC MOSFETs, and GaN HEMTs | 共著 | Dec. 2015 | IEEE | | |
| SiC power MOSFETs performance, robustness and technology maturity | 共著 | Mar. 2016 | Elsevier Ltd. | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | Power Electronic Conversion Technology Annex (PECTA) of the International Energy Agency (IEA) |
| | |
| | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績 educational / research achievement on 2019

| 所属 ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名 教授 | 氏名 PIUMARTA Ian | 大学院における研究指導担当資格の有無 （有・無） |
|---|---|---|---|

I Education activities

| 教育実践上の主な業績<br>main achievemen of the education | 年月日 Date | 概 要 overview |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| Motivating students to study and improve their understanding through informal quizzes | 2015/04~ | Where weekly tests are appropriate, a two-week cycle consisting of `informal quiz' (odd weeks) and `formal test' (even weeks) is introduced instead. The quizzes have the same format and level of difficulty as the tests, but are scored in-class by the students themselves while the answers are explained in sufficient detail for students to understand why they might have made a mistake. This gives students practice in taking tests, a way for the to judge their own understanding of the material, and an opportunity to ask for assistance with anything they are failing to understand. |
| Live coding as a motivational and instructional tool | 2015/04~ | During classes with a significant software development component performed as homework, the final 15 minutes are devoted to a live coding demonstration showing how to perform the required programming work. This helps weak students to understand the process of solving a programming problem, and motivates them to try harder to complete the assignment in particular by demonstrating how to begin. |
| Open-ended experimental classes | 2015/04~ | Students studying embedded systems are given `kits' containing the parts needed to prototype many kinds of digital and analogue circuit. Classes are organised as short theoretical presentations followed by guided experimentation using the kits to prototype and investigate various embedded system components. Students are encouraged to use the kits outside of class to continue their investigations. After a final three-week project and presentations, students are invited to keep the kits if they wish. This approach has motivated many of the students to create surprisingly sophisticated and impressive projects. |
| Extended lecture notes provide deeper theoretical and practical reference information | 2017/04~ | At the start of the course students are provided with extended lecture notes (effectively a `mini text book'). Topics are presented in the same order as in the classes, using many of the same diagrams and tables, with concise but thorough explanations to aid understanding. In addition, interesting theoretical material that goes beyond the scope of the class, as well as practical reference information related to the class topics, is included at the end of each section or as appendices. This material helps students not only to revise what they should have learned in class, but also to understand the concepts more deeply (by seeing some of the more complex ideas that lie beyond), or to apply what they have learned in practical situations. (It also avoids asking them to purchase several expensive textbooks.) |
| Learning programming paradigms by implementing them | 2017/04~ | Students studying programming languages, who have already learned imperative programming in Python, are introduced to other programming paradigms by understanding how their essential features can be implemented and then used in Python. Students spend a few weeks implementing, solving problems with, and reflecting on the paradigm they implement themselves in Python. Pure functional, pure object-oriented, and declarative paradigms have been taught this way. Students are kept interested and motivated by being given a chance to briefly try solving some of the same problems in class using languages that strongly implement those paradigms (e.g., Lisp, Smalltalk, and Prolog). By understanding the underlying mechanisms of these paradigms, students more more quickly achieve a deep understanding of the paradigms themselves and how then can be most effectively used. |
| Active, inclusive learning through `cookbook prototyping' | 2017/04~ | Freshman students discover microcontroller programming and interfacing by `guided prototyping'. They are provided with a `cookbook' containing tens of ready-to-use, cut-and-paste examples demonstrating how to (build, if necessary, and then) interact with tens of different kinds of sensor, display, and actuator. A set of challenges is provided (without solutions) to guide their progression from completing a very simple task to creating a relatively sophisticated system by `mashing up' parts of many examples taken from the cookbook. This active and inclusive approach has proven immensely motivational for and popular with students, and very effectively permits students who have no prior experience to work effectively alongside those who do. |

| | | |
|---|---|---|
| Active, inlusive learning in multi-day workshops | 2017/08~ | Students (with no prior experience) participate in three-day workshops to understand the potential applications and practicalities of microcontrollers. Workshops begin with a whole-group, inclusive session in which each student describes their (academic or hobby) interests and then the group discusses possible relationships they might have with microcontroller applications. Various kinds of sensors, displays and actuators are introduced during this session, and their capabilities described, in the context of the students' interests. Students teams are formed, guided by the commonalities in their interests or the application they might develop. Teams are provided with a large selection of sensors, displays, and actuators and a `cookbook' containing many examples of how the devices are used with a microcontroller, that can be mashed together to form complex final applications even with no prior programming experience. The inclusive approach to the class content greatly motivates the students and strongly contextualises their learning experience. |
| Evaluating practical ability instead of rote memory | 2017/04~ | Unless there is a good reason not to, my written examinations always contain the reference information (formulae, statements of theoretical principles, etc.) required to answer the questions. To obtain credit the student must know how to apply that information to solve the given problems. |
| Using practical experience to reinforce theoretical understanding of computer architecture | 2018/04~ | Students studying computer architecture are offered (and can keep) a tiny, very cheap MIPS-based Linux machine (Omega2+) along with the materials and tools they need to learn machine code programming, OS interaction at the system call level, and how to organise and address simple data structures in memory. Students practice both in their own time, and during extra-curricular guided support sessions. Those students who choose to receive one of the machines and learn some machine code programming performed exceptionally well in classes dealing with computer architecture and low-level, imperative programming (using the C language). |
| Incrementally contextualising practical classes | 2018/04~ | A practical course introducing the entire chain of Information Technology from data acquisition to information visualisation used practical programming exercises at the end of every class to demonstrate the application of the concepts discussed and to provide context for the following class. Students programmed each step of the process: calibrating and receiving data from a sensor, serial and Internet communication, data storage and retrieval mechanisms, data analysis and repair mechanisms, interpolation algorithms for missing data points, and graphical visualisation of the final results. Students taking the course provided unanimously positive feedback about the breadth and depth of practical techniques they had learned. |
| Motivating extra-curricular projects | 2017/04~ | Students were given the opportunity to pursue extra-curricular projects, with as much or as little guidance as they needed, leading to featured demonstrations at Open Campus events. Students who participated finished projects that included a professional-quality reactive Web site, a graphical cellular automata simulation, a complete 8-bit microcomputer system programmable in assembly language and BASIC, an AI-driven 2D video game, and 3D-printed souvenirs that were given away to Open Campus visitors. Students participating had the chance to learn about and practice technologies that they would otherwise not have encountered in the regular curriculum, with the additional motivation of a public demonstration at the end. |
| Responding to students' expressed interests for technology learning | 2019/02 | Many students expressed an interest in (and lack of knowledge of) designing and constructing their own PC. As extra-curricular activities the students were offered seminars on CPU, memory, and peripheral technologies in the context of different kinds of application domain. Students were then able to make informed design decisions about their own PC with specific goals in mind. By recycling many salvaged parts, four working PC systems were designed and built by the students, at very little cost. Participating students had the chance to learn about many aspects of computer system technology and organisation that they do not encounter in the regular curriculum, and to gain practical experience of assembling the systems from individual parts. |

| | | |
|---|---|---|
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| Microcontrollers and Interfacing | 2015/04~ | 46-page laboratory manual containing reference material for the theoretical parts of the course and practical details of the experiments to be performed. |
| Computer Mathematics | 2017/04~ | 87-page reference book containing extended lecture notes, additional theoretical material, and practical information in appendices. |
| Project-based learning for embedded systems | 2017/04~ | 21-page `cookbook' manual containing hardware and software details of a microcontroller and many sensors, displays, and actuators, each with example code that can be combined as desired to create a complete system. |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| High-school workshops | 2016~ | Three-day workshop for visiting overseas high-school students using inclusive and active learning to motivate participants to want to explore technology in a personally significant way. |

Ⅱ　研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 Title of your book and paper | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| Books | | | | | |
| | | | | | |
| Journal papers | | | | | |
| Network traffic reduction mechanism for collaborative web activities | co | 2017 | International Journal of Web Information Systems | Tsuyoshi Donen, Shingo Otsubo, Ryo Nishide, Ian Piumarta and Hideyuki Takada | 106-103 |
| Classifying passenger and non-passenger signals in public transportation by analysing mobile device Wi-Fi activity | co | 2017/01 | Journal of Information Processing | Thongtat Oransirikul, Ian Piumarta and Hideyuki Takada | 25-32 |
| A Supplementary feature set for sentiment analysis in Japanese dialogues | co | 2019/05 | ACM Transactions on Asian and Low-Resource Language Information Processing | Peter Lajos Ihasz, Mate Kovacs, Ian Piumarta and Victor V. Kryssanov | 1-39 |
| Influence Maximization in Signed Social Networks with Opinion Formation | co | 2019/05 | IEEE Access | Wenxin Liang, Chengguang Shen, Xiao Li, Ryo Nishide, Ian Piumarta and Hideyuki Takada | 68837-68852 |
| Others | | | | | |
| Ranking friends' posts on Facebook using hypernyms and tf-idf based on cosine similarity | co | 2015 | IPSJ National Convention | Siwan Chen, Chengguang Shen, Ryo Nishide, Ian Piumarta and Hideyuki Takada | |
| Influence Maximization in Signed Social Networks | co | 2015 | Web Information System Engineering | Chengguang Shen, Ryo Nishide, Ian Piumarta, Hideyuki Takada and Wenxin Liang | |
| Feasibility of Analyzing Wi-Fi Activity to Estimate Transit Passenger Population | co | 2016 | Advanced Information Networking and Applications | Thongtat Oransirikul, Ryo Nishide, Ian Piumarta and Hideyuki Takada | |
| Effectiveness of Tabletop Interaction Using Tablet Terminals in a Shared Virtual Workspace | co | 2016 | Collaboration and Technology (CRIWG) | Naoto Ito, Hideyuki Takada, and Ian Piumarta | 98-114 |
| Collaborative Web Search Using Tablet Terminals on a Virtual Tabletop Environment | co | 2016 | Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech) | Tadashi Inoue, Ian Piumarta, and Hideyuki Takada | 159-173 |
| A Scratch-Based Collaborative Learning System with a Shared Stage Screen | co | 2017/06 | Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech) | Yusuke Fukuma, Kumpei Tsutsui, Hideyuki Takada, Ian Piumarta | 84-98 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Study of Multi-Mouse Puzzle Peer Version: Answering with a Peer | co | 2018/11 | Computers in Education (ICCE) workshop on Computer-Supported Personalized and Collaborative Learning | Juan Zhou, Hajime Kita, Hideyuki Takada, Ian Piumarta | |
| Communication Beyond Languages Realized by International Game Jams | co | 2019/03 | Game Jams (ICGJ) | Jeremy White, Ian Piumarta, Ryosuke Yamanashi, Stephen Jacobs, David Simkins | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動 Main social activities or activities in academic societies

| | |
|---|---|
| PX/19 (Programming Experience) | Programme committee member |
| 25/02-03/03/2019 | NII Shonan Meeting: Self-supporting, extensible programming languages and environments for exploratory, live software development |
| | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ
Know-how about management consulting, technical consulting, joint research, funded research, etc.

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名 教授 | 氏名 今井 欽之 | 大学院における研究指導担当資格の有無 （有・無） |
|---|---|---|---|

## I 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| ・毎回の講義での小テストを用いた学生とのコミュニケーション | 2015年10月～2017年1月 | 横浜国立大学理工学部にて担当した非常勤講師「電気工学概論」の授業で行った。機械系や建築系、化学・生命系の電気を専門としない学生が対象であった(40人～50人)。このような背景で、<br>・電気工学につながる基礎学力が学生ごとに違う<br>・電磁気を理解しているつもりでできていない学生もかなりいる<br>・質問は随時受け付けたが、実際にはほとんどない<br>という事情から、学生個別の事情を把握し、学生にフィードバックするツールとして小テストを用いた。目的は、<br>・出席管理<br>・演習で理解を深める<br>・基礎学力を含めた理解度のチェックと講義へのフィードバック<br>・個別指導<br>とし、学生とのコミュニケーションに用いた。採点は行ったが、得点の成績への反映は小さくした。なお、小テストの解説資料は、学生の自習のため、教材の一部として、下記2項と同様に授業支援システムを用いて学生に公開した。<br>学生アンケートにて、授業の総合的な満足度で、4ポイント中3.55ポイントと、同規模クラス平均の3.30を上回る良好な評価を得た。 |
| 2 作成した教科書、教材、参考書<br>・「電気工学概論」 | 2015年10月～2017年1月 | 横浜国立大学理工学部にて担当した非常勤講師「電気工学概論」の授業で行った。<br>半期の15回分の講義それぞれにつき、予習・復習のための資料として作成。内容は電磁気学と電気回路学の基礎で、優れた教科書が存在するが、教科書では紙面の都合で不足する説明を、カラーの図を中心としたスライドとして仕上げた。また、専門外の学生にも興味を持たせるよう、応用分野の説明に力を入れた。例えば、どの研究開発分野でも電気を用いた測定は想定され、これに際して知っていて当然とされるが教科書ではあまり触れられない注意事項なども盛り込んだ。<br>資料は、講義の数日前までに、学生全員がネットでアクセス可能な授業支援システムにアプロードし、期末試験の終了まで継続して公開した。 |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>該当なし | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項<br>・企業での若手教育 | 2016年4月～2017年6月 | 博士取得後に入社した社員の直接指導者に任命され、研究の企画から実際の研究推進、報告までの一通りの研究開発活動を全般的に指導し、一人前の企業研究員に育てた。 |

## II 研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| 該当なし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| 2.5-fold increase in lens power of KTN varifocal lens by employing an octagonal structure | 共著 | 2015年4月 | Appl. Opt. Vol. 54, No. 13 | S. Kawamura, J. Miyazu, T. Sakamoto, and J. Kobayashi | 4197頁～4201頁 |
| Effect of Li-doping on polar nanoregions in $K(Ta_{1-x}Nb_x)O_3$ single crystals | 共著 | 2015年8月 | Jpn. J. Appl. Phys. Vol. 54 | M. M. Rahaman, J. Kobayashi, and S. Kojima | 10NB01 |
| 光偏向器高速化に向けたKTN平面光偏向器の提案及び動作実証 | 共著 | 2015年8月 | 信学技報 | 辰己, 佐々木, 豊田, 小林, 阪本 | 59頁～62頁 |
| Anomalous index modulations in electrooptic $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals in relation to electrostrictive effect | 共著 | 2015年10月 | Opt. Express Vol. 23, No. 22 | S. Kawamura, and T. Sakamoto | 28784頁～28791頁 |
| Micro-Brillouin scattering study on composition gradient Li doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ wafer | 共著 | 2015年12月 | Ferroelectrics Vol. 487 | M. Rahaman, J. Miyazu, J. Kobayashi, and S. Kojima | 47頁～54頁 |
| Fano resonance of Li-doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals studied by Raman scattering | 共著 | 2016年4月 | Scientific Report Vol. 6 | M. M. Rahaman, T. Sakamoto, S. Tsukada, and S. Kojima | 23898 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(続き) | | | | | |
| 700-kHz beam scanning using electro-optic KTN planar optical deflector | 共著 | 2016年4月 | Proc. of SPIE | S. Tatsumi, Y. Sasaki, S. Toyoda, T. Imai, J. Kobayashi, and T. Sakamoto | 97440L |
| KTN光偏向器を使った波長掃引光源の安定化 | 共著 | 2016年8月 | 信学技報 | 上野, 坂本, 佐々木, 豊田,山口, 阪本, 牛山, 山田, 藤本 | 49頁～54頁 |
| KTN単結晶を用いた光デバイスとその応用 | 共著 | 2016年10月 | 日本結晶成長学会誌 Vol. 43, No. 3 | 川村, 阪本 | 30頁～35頁 |
| The role of polar-nanoregions in $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals studied by Raman scattering | 共著 | 2016年11月 | Ferroelectrics Vol. 503 | M. M. Rahaman, T. Sakamoto, S. Tsukada, and S. Kojima | 85頁～93頁 |
| KTN光偏向器を用いた高速En face方式TD-OCTの開発 | 共著 | 2017年3月 | レーザー研究 Vol. 45, No. 3 | 新屋, 豊田, 小林, 阪本, 近江 | 175頁～180頁 |
| High frame rate en face optical coherence tomography system using KTN optical beam deflector | 共著 | 2017年3月 | Proc. of SPIE | M. Ohmi, Y. Shinya, T. Imai, S. Toyoda, J. Kobayashi, and T. Sakamoto | 100532L |
| Stable wavelength-swept light source designed for industrial applications using KTN beam scanning technology | 共著 | 2017年4月 | Proc. of SPIE | M. Fujimoto, M. Yamada, K. Yamamoto, Y. Sasaki, S. Toyoda, T. Sakamoto, J. Yamaguchi, T. Sakamoto, M. Ueno, T. Imai, E. Sugai, and S. Yagi | 101100Q |
| Electro-optic KTN deflector stabiliezed with 405-nm light irradiation for wavelength-swept light source | 共著 | 2017年4月 | Proc. of SPIE | Y. Sasaki, S. Toyoda, T. Sakamoto, J. Yamaguchi, M. Ueno, T. Imai, T. Sakamoto, M. Fujimoto, M. Yamada, K. Yamamoto, E. Sugai, and S. Yagi | 101100H |
| Electric field induced critical points and field gradient by trapped electrons in Li-doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals | 共著 | 2017年7月 | Appl. Phys. Lett. Vol. 111 | M. M. Rahaman, T. Sakamoto, and S. Kojima | 32904 |
| Analyses of optical rays in KTN optical beam deflectors for device design | 共著 | 2017年8月 | Appl. Opt. Vol. 54, No. 25 | M. Ueno, Y. Sasaki, and T. Sakamoto | 7277頁～7285頁 |
| Planar electro-optical deflector using $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ for low power consumption operation | 共著 | 2017年9月 | Appl. Phys. Express Vol. 10 | S. Tatsumi, Y. Sasaki, S. Toyoda, J. Kobayashi, and T.Sakamoto | 102201 |
| Temperature independent electrostrictive coefficients of $K_{0.95}Li_{0.05}Ta_{0.73}Nb_{0.27}O_3$ single crystals | 共著 | 2017年9月 | J. Appl. Phys. Vol. 122 | S. Kawamura, and T. Sakamoto | 114101 |
| Ferroelectric phase transition of Li-doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals with weak random fields: Inelastic light scattering study | 共著 | 2017年9月 | J. Alloys and Compounds Vol. 735 | M. M. Rahaman, T. Sakamoto, M. A. Helal, S. Tsukada, and S. Kojima | 1063頁～1070頁 |
| Electric field effects on polar-nanoregions in Li-doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals probed by micro-Brillouin scattering | 共著 | 2017年12月 | Integrated Ferroelectrics Vol. 185 | M. M. Rahaman, T. Sakamoto, and S. Kojima | 22頁～30頁 |
| その他 | | | | | |
| (口頭講演)(国際)<br>Relaxor like behavior of ferroelectric phase transitions in $K(Ta_{1-x}Nb_x)O_3$ crystals （**招待講演**） | 共同 | 2016年2月 | Fundamental Physics of Ferroelectrics and Related Materials 2016 | S. Kojima, M. M. Rahaman, T. Sakamoto, S. Tsukada | |
| (口頭講演)(国際)<br>Ultrahigh speed time-domain en face optical coherence tomography using KTN optical beam deflector | 共同 | 2016年5月 | 5th Advanced Lasers and Photon Sources (ALPS'16) | Y. Shinya, S. Toyoda, J. Kobayashi, T. Sakamoto, M. Ohmi | ALPSp14 - 40 |
| (口頭講演)(国際)<br>Relaxor ferroelectric phase transitions of $K(Ta_{1-x}Nb_x)O_3$ crystals :Inelastic light scattering study （**招待講演**） | 共同 | 2016年6月 | RCBJSF-IWRF | S. Kojima, M. M. Rahaman, T. Sakamoto, S. Tsukada | Invite25 |
| (口頭講演)(国際)<br>Ultrahigh speed en face optical coherence tomography using two axis KTN optical beam deflectors | 共同 | 2017年4月 | 6th Advanced Lasers and Photon Sources (ALPS'17) | M. Ohmi, Y. Shinya, R. Tagashira, S. Tatsumi, S. Toyoda, T. Sakamoto | ALPS9-5 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| (口頭講演)(国際)<br>High-speed en face optical coherence tomography system using two axis KTN optical beam deflectors | 共同 | 2017年8月 | 24th Congress of the International Commission for Optics (ICO-24) | M. Ohmi, Y. Shinya, S. Tatsumi, S. Toyoda, T. Sakamoto | W1D-02 |
| (口頭講演)<br>KTN結晶の電界誘起相転移を用いた光制御 | 共同 | 2015年4月 | 国際光年記念シンポジウム | 稲垣、武居、小林 | |
| (口頭講演)<br>Effect of Li-doping on Polar Nanoregions in $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ Single Crystals | 共同 | 2015年5月 | 強誘電体応用会議 | M. Rahaman、小島、宮津、小林 | 22-F-15 |
| (口頭講演)<br>KTN光スキャナーを用いた高速En face OCTの開発 | 共同 | 2015年8月 | レーザ学会研究会 | 新屋、渡邊、近江、上野、豊田、阪本 | LAV-15-016 |
| (口頭講演)<br>KTNの巨大電気光学効果とその応用 （**招待講演**） | 単独 | 2015年9月 | 日本物理学会秋季大会 シンポジウム | | 17aAD-3 |
| (口頭講演)<br>新構造KTN 平面光偏向器の高周波特性評価 | 共同 | 2015年9月 | 応用物理学会 | 辰己、佐々木、豊田、小林、阪本 | 14p-2G-11 |
| (口頭講演)<br>Electric field effect on ferroelectric phase transition of Li-doped $KTa_{1-x}Nb_xO_3$ single crystals studied by Brillouin scattering | 共同 | 2015年9月 | 応用物理学会 | Md Mijanur Rahaman、今井、小林、小島 | 13p-2L-10 |
| (口頭講演)<br>KTN光偏向器を用いた高速 En face OCTシステムの開発 | 共同 | 2015年9月 | 生体医工学シンポジウム | 新屋、渡邊、上野、豊田、阪本、近江 | 1A-05 |
| (口頭講演)<br>KTN光偏向器を用いた高速En face方式TD-OCTの開発 | 共同 | 2016年1月 | レーザー学会年次大会 | 新屋、田中、上野、豊田、阪本、近江 | 09pVIII-5 |
| (口頭講演)<br>低キャパシタンスKTN平面光偏向器による700kHz光偏向動作 | 共同 | 2016年3月 | エレクトロニクス実装学会春季講演大会 | 辰己、佐々木、豊田、小林、阪本 | 24C2-6 |
| (口頭講演)<br>小型化に向けたKTN光偏向器実装 | 共同 | 2016年3月 | エレクトロニクス実装学会春季講演大会 | 坂本、豊田、上野、阪本、小林 | 24C2-5 |
| (口頭講演)<br>空間電荷を利用した$KTa_{1-x}Nb_xO_3$の光弾性係数$p_{11}$, $p_{12}$の測定 | 共同 | 2016年3月 | 応用物理学会 | 川村、阪本 | 20p-P5-3 |
| (口頭講演)<br>KTN SS-OCT光源の安定化 | 共同 | 2016年3月 | 電子情報通信学会 | 上野、坂本、牛山、山田 | C-3-8 |
| (口頭講演)<br>KTN平面光偏向器による700kHz光偏向動作実証 | 共同 | 2016年4月 | 電子情報通信学会 光エレクトロニクス研究会 | 辰己、佐々木、豊田、小林、阪本 | P2-7 |
| (口頭講演)<br>KTN光偏向器を用いた高速 En face方式 TD-OCTシステムの開発 | 共同 | 2016年11月 | Optics & Photonics Japan 2016 | 新屋、豊田、小林、阪本、近江 | 2pP31 |
| (口頭講演)<br>2軸 KTN 光偏向器を用いた高速 En face OCTシステムの開発 | 共同 | 2017年1月 | レーザー学会学術講演会第37回年次大会 | 新屋、田頭、辰己、豊田、阪本、近江 | 09aⅦ-3 |
| (口頭講演)<br>光偏向器の解像点数最適化のためのKTN結晶中の光線の解析 | 共同 | 2017年3月 | 応用物理学会 | 上野、佐々木、阪本 | 16p-316-3 |
| (口頭講演)<br>光照射によるKTN光偏向器の光学特性制御 | 共同 | 2017年3月 | 応用物理学会 | 豊田、佐々木、坂本、藤本、山田、八木 | 16p-316-1 |
| (口頭講演)<br>$K_{0.95}Li_{0.5}(T_{a0.73}Nb_{0.27})O_3$の電歪係数の温度 特性計測 | 共同 | 2017年3月 | 応用物理学会 | 川村、阪本 | 14p-421-7 |
| (口頭講演)<br>en face OCT用高速2次元KTN光偏向器 | 共同 | 2017年3月 | 第31回エレクトロニクス実装学会春季講演大会 | 辰己、阪本、近江、新屋 | 8B4-3 |
| (口頭講演)<br>KTN光偏向器焦点距離の偏向角依存性評価 | 共同 | 2017年9月 | 応用物理学会 | 辰己、山口、坂本、豊田、阪本 | 7p-C14-1 |
| (口頭講演)<br>KTN結晶の光弾性係数と電気光学係数の温度依存性 | 共同 | 2017年9月 | 応用物理学会 | 川村、阪本 | 6a-A502-8 |
| (口頭講演)<br>KTN結晶によるレーザー高速走査と応用計測 （**招待講演**） | 単独 | 2019年1月 | レーザー学会学術講演会第39回年次大会 | | E213aⅣ09 |

| Ⅲ 学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social | |
|---|---|
| 電子情報通信学会庶務・財務幹事 | 2017年6月～2019年5月 電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ 研究技術会議 庶務・財務幹事 |
| 電子情報通信学会 研究専門委員会 専門委員 | (2011年6月)～現在に至る 電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ 電子部品・材料研究専門委員会 専門委員 |
| 論文誌JJAP編集委員 | 2017年3月～現在に至る Japanese Journal of Applied Physics 特集号編集委員 |
| Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　教授 | 氏名　沖　一雄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Chapter 10 Geometric Correction, Remote Sensing -An Introductory Textbook- | 単 | 2013年 | MARUZEN PLANET | | |
| Development of an Environmentally Advanced Basin Model in Asia「Crop production」(Aakash Goyal, ed.) | 共 | 2013年 | INTECH. | K. Oki,, Noda, K., Yoshida, K., Azechi, I., Maki M., Honma, K., Hongo C. and Shirakawa, H., | 17-48 |
| Mapping the potential annual pollutant loads in river basins using remotely sensed imagery | 共 | 2012年 | 「Environmental Remote Sensing and Systems Analysis」(Ni-Bin Chang, ed.)CRC Press. | K. Oki, B. He, and T. Oki | 35-55 |
| Precision agriculture. Remote sensing from satellite and aircrft. | 共 | 2006年 | 「CIGR Handbook of Agricultural Engineering. Vol VI. Information Technology」(A. Munack, ed.)ASABE. | Omasa K., K. Oki and T. Suhama. | 231-244 |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 計測自動制御学会 | |
| 日本リモートセンシング学会 | |
| 日本農業気象学会 | |
| 生態工学会会員 | |
| 農業農村工学会 | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　教授 | 氏名　川上 浩司 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 不便から生まれるデザイン: 工学に活かす常識を超えた発想 | 単著 | 2011年 | 化学同人 | | |
| 不便益という発想～ごめんなさい、もしあなたがちょっとでも行き詰まりを感じているなら、不便をとり入れてみてはどうですか? | 単著 | 2017 | インプレス | | |
| 不便益:手間をかけるシステムのデザイン | 共著 | 2017年 | 近代科学社 | 編者 川上浩司<br>共著 平岡敏洋・小北麻記子・半田久志・谷口忠大・塩瀬隆之・岡田美智男・泉 朋子・仲谷善雄・西本一志・須藤秀紹・白川智弘 | |
| 不便益のススメ: 新しいデザインを求めて, | 単著 | 2019年 | 岩波ジュニア新書 | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 計測自動制御学会 | |
| 人工知能学会 | |
| 日本機械学会 | |
| ヒューマンインタフェース学会 | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名　教授 | 氏名　田畑 修 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Fast Response Silicon Flow Sensor with an On-Chip Fluid Temperature Sensing Element | 単 | 1986年 | IEEE Transaction on Electron Devices, Vol.ED-33, No.3 | | pp.361-365 |
| Validation of X-Ray Lithography and Development Simulation System for Moving Mask Deep X-Ray Lithography | 共 | 2006年 | Journal of Microelectromechanical Systems, Vol.15, No.1 | Yoshikazu Hirai, Sadik Hafizovic, Naoki Matsuzuka, Jan G. Korvink, and Osamu Tabata | pp.159-16 |
| ”Integrated Heart/Cancer on a Chip to Reproduce the Side Effects of Anti-Cancer Drugs in vitro” | 共 | 2017年 | RSC Advances, Vol. 7 | Ken-ichiro Kamei, Yoshiki Kato, Yoshikazu Hirai, Shinji Ito, Junko Satoh, Atsuko Oka, Toshiyuki Tsuchiya, Yong Chen, Osamu Tabata | pp.36777-36786 |
| “Rhombic-Shaped Nanostructures and Mechanical Properties of 2D DNA Origami Constructed with Different Crossover/Nick Designs” | 共 | 2017年 | Small. 2017 Nov 13. | Zhipeng Ma, Yunfei Huang, Seongsu Park, Kentaro Kawai, Do-Nyun Kim, Yoshikazu Hirai, Toshiyuki Tsuchiya, Hirofumi Yamada, and Osamu Tabata | doi: 10.1002/smll.201702028. |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 電気学会 | |
| 機械学会 | |
| 化学とマイクロシステム学会 | |
| IEEE | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　教授 | 氏名　中村　康一 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 京都大学における英語での授業 | 2012年9月～<br>2018年9月 | 京都大学工学研究科にて毎年9月に開講される英語によるリレー科目「マイクロ・ナノ材料力学」において、担当する分野(ナノスケール材料のピエゾ抵抗効果)の授業を英語で行った。 |
| エジプト日本科学技術大学における英語での授業 | 2011年9月～<br>2019年1月 | エジプト日本科学技術大学材料工学専攻の修士または博士学生配当科目「Crystallography and Diffraction」(結晶学および回折)、「Microstructural Analysis of Solids」(固体の微細構造解析)、「Electronic and Photonic Properties of Materials」(材料の電子・光学物性)、「Modeling and Simulation」(モデリングおよびシミュレーション)、「Semiconductor Technology」(半導体技術)、「Advanced Semiconductors」(先端半導体)、および「Advanced Mathematics and Statistics I」(先端数学および統計学I)において英語による授業をすべて一人で担当した。 |
| エジプト日本科学技術大学学生に対する中等および高等数学補習 | 2011年9月～<br>2019年1月 | エジプトの国立大学は工学部での数学教育が不十分であり、エジプト日本科学技術大学材料工学専攻の修士または博士学生配当専門科目の講義内容に関する理解を確実に深めるために、それぞれの科目の補習として三角関数、対数関数、平面・空間幾何学等の中等数学の復習や、大学学部レベルの微分積分、線形代数、常微分方程式、ベクトル解析等の高等数学に関する計算演習を行った。 |
| 授業時間外の時間の活用 | 2011年9月～<br>2019年1月 | エジプト日本科学技術大学材料工学専攻の修士または博士学生配当専門科目について、同専攻の大学院生が学部で機械工学を学修した後に進学したことを鑑み、学生の理解度の把握に最大限勤めた。大学生が居住する大学寮と同じ敷地に居住して、業務時間や夜間時間を活用し、授業時間外に希望する学生と自由な雰囲気のもとディスカッションを行った。それによって学生の理解度や問題意識、説明の不十分な点を把握し、講義に反映させた。 |
| エジプト日本科学技術大学学生による授業評価アンケート結果における評価 | 2012年2月～<br>2015年6月 | エジプト日本科学技術大学において実施されている学生による授業評価アンケートによると、材料工学専攻で担当した「Semiconductor Technology」、「Crystallography and Diffraction」、「Modeling and Simulation」、および「Electronic and Photonic Properties of Materials」は、それぞれ講義内容や講義での英語等を含めた総合でA評価と高い評価を得ており、学生の満足度が高い結果となっている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義用補助教材 | 2015年7月～<br>2016年6月 | エジプト日本科学技術大学の全専攻の修士学生配当科目「Advanced Mathematics and Statistics I」において、日本の学部学生が工学系の大学院に進学するにあたり高等数学に関する入試科目が課せられることを鑑みて、通常の講義の他に、市販の問題集やネット調査から抽出した日本の大学における大学院入試問題を取りまとめ、演習用の講義用補助教材として活用するとともに、日本でこれらが解答できないと大学院に進学できないことを伝えて数学の重要性を意識付けた。 |
| 実習指導用マニュアルおよびプログラムコード | 2014年2月～<br>2018年6月 | エジプト日本科学技術大学材料工学専攻の修士学生配当科目「Modeling and Simulation」において、マーデルング定数の計算、結晶構造の最適化、分子反応の分子動力学シミュレーション、磁気モーメントのモンテカルロシミュレーション等、それぞれのテーマごとに実習指導用のマニュアルとプログラムコードを作成し、これらを教員や学生に配布して通常の授業やプログラミング実習の時間において活用した。 |
| 結晶構造模型 | 2012年2月～<br>2019年1月 | エジプト日本科学技術大学材料工学専攻の修士学生配当科目「Crystallography and Diffraction」(2013年6月まで)および「Microstructural Analysis of Solids」(2013年9月以降)において、結晶構造を空間的に理解するために紙工作でできる結晶構造模型を作成し、学生も授業において紙工作により自分自身で模型を作成して、講義内容の理解を助ける教材として活用した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 関西工学教育協会機械分科会にて講演。講演題目「エジプト日本科学技術大学(E-JUST)での工学教育」 | 2018年11月 | 2011年よりエジプトに長期滞在した実績をもとに、エジプト日本科学技術大学の材料工学専攻において大学院生への講義提供や研究指導、専攻運営支援などの活動を行ってきた経験を紹介するとともに、エジプトにおける工学と「エンジニア」の位置付けを整理し、それらが背景にあるエジプト日本科学技術大学での工学教育の内容と環境について、とりわけ機械工学教育や機械工学出身学生への関連分野の教育における実情と課題を中心に解説した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 博士学位論文指導実績 | 2011年9月～ | エジプト日本科学技術大学において、博士学生の副指導教員として、グラフェン薄膜によるひずみセンサ作製および第一原理計算に基づくピエゾ抵抗シミュレーション、ビスマス系熱電変換材料の作製および熱電特性シミュレーション、チタン合金の作製および第一原理計算に基づく機械特性シミュレーション、フィッシャートロプシュ反応の触媒開発および炭化水素の合成、ハイエントロピー合金モデルの分子動力学法に基づく機械特性シミュレーション等について、計10名の博士学位論文を指導した。 |
| 博士学位論文審査実績 | 2014年7月～<br>2016年9月 | エジプト日本科学技術大学において、グラフェン薄膜によるひずみセンサ作製および第一原理計算に基づくピエゾ抵抗シミュレーション、チタン合金の作製および第一原理計算に基づく機械特性シミュレーションに関する博士学位論文について、計2名の論文審査委員を務めた。 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Electronic State and Piezoresistivity Analysis of Zinc Oxide Nanowires for Force Sensing Devices | 単著 | 2015年5月 | Key Engineering Materials<br>Vol. 644 | | 16～21頁 |
| First-Principles Simulation on Wire Diameter Dependence of Piezoresistivity in Zinc Oxide Nanowires | 単著 | 2015年6月 | Japanese Journal of Applied Physics<br>Vol. 54 No. 6S1 | | 06FJ11-1～<br>06FJ11-7頁 |
| First-Principles Study on the Effect of Alloying Elements on the Elastic Deformation Response in $\beta$-Titanium Alloys | 共著 | 2015年7月 | Journal of Applied Physics<br>Vol. 117 No. 21 | Mohammed K. Gouda、<br>中村康一、Mohamed Abdel-Hady Gepreel | 214905-1～<br>214905-7頁 |
| The Piezoresistive Effect of SiC for MEMS Sensors at High Temperatures: A Review | 共著 | 2015年12月 | Journal of Microelectromechanical Systems<br>Vol. 24 No. 6 | Hoang-Phuong Phan、<br>Dzung Viet Dao、中村康一、<br>Sima Dimitrijev、Nam-Trung Nguyen | 1663～1677頁 |
| First-Principles Analysis on Seebeck Coefficient in Zinc Oxide Nanowires for Thermoelectric Devices | 単著 | 2016年3月 | IOP Conference Series: Materials Science and Engineering<br>Vol. 108 | | 012040-1～<br>012040-9頁 |
| Graphene Film Development on Flexible Substrate Using a New Technique: Temperature Dependency of Gauge Factor for Graphene-Based Strain Sensors | 共著 | 2016年4月 | Sesnsor Review<br>Vol. 36 No. 2 | Sahour Sayed、Mohammed Gamil、Ahmed M. R. Fath El-Bab、中村康一、土屋智由、田畑修、Ahmed Abd El-Moneim | 140～147頁 |
| Thermoelectric Power Factor Performance of $Bi_{85}Sb_{15}$/Graphene Composite | 共著 | 2016年4月 | Japanese Journal of Applied Physics<br>Vol. 55 No. 4 | Mohamed S. El-Asfoury、<br>Mohamed N. A. Nasr、<br>中村康一、Ahmed Abd El-Moneim | 045802-1～<br>045802-5頁 |
| First-Principles Simulation on Seebeck Coefficient in Silicon and Silicon Carbide Nanosheets | 単著 | 2016年6月 | Japanese Journal of Applied Physics<br>Vol. 55 No. 6S1 | | 06GJ07-1～<br>06GJ07-8頁 |
| Effect of Mn-Content on the Deformation Behavior of Binary Ti-Mn Alloys | 共著 | 2016年8月 | Key Engineering Materials<br>Vol. 705 | Mohammed K. Gouda、<br>中村康一、Mohamed Abdel-Hady Gepreel | 214～218頁 |
| 3C-SiCナノシートにおける量子閉じ込め効果とピエゾ抵抗シミュレーション | 単著 | 2016年11月 | 電気学会論文誌E<br>第136巻第11号 | | 465～472頁 |
| First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties in Low-Dimensional Materials | 単著 | 2016年12月 | Solid State Phenomena<br>Vol. 258 | | 77～80頁 |
| Effect of Zr-Addition to Ti-14Mn Alloy | 共著 | 2017年3月 | Materials Science Forum<br>Vol. 890 | Mohammed K. Gouda、<br>Mohamed Abdel-Hady Gepreel、中村康一、<br>千葉晶彦 | 352～355頁 |
| A Study of Promoters Effect on Fe on Reduced Graphene Oxide Catalyst Performance in Fischer-Tropsch Synthesis System | 共著 | 2017年5月 | Key Engineering Materials<br>Vol. 735 | Al-Hassan Mohammed Nasser、Haitham M. Elbery、Hasan N. Anwar、Islam K. Basha、Hamada A. Elnaggar、中村康一、Ahmed Abd El-Moneim | 143～147頁 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Effect of Copper Addition on Mechanical Properties of Nanostructured $Pb_{1-x}Cu_xTe$ Thermoelectric Alloy Systems by Nanoindentation | 共著 | 2017年5月 | Key Engineering Materials Vol. 735 | Mohamed Abdel-Naser Mansour、Ahmed Abd El-Moneim、中村康一 | 205～209頁 |
| First-Principles Simulation on Seebeck Coefficient in Silicon Nanowires | 単著 | 2017年6月 | Japanese Journal of Applied Physics Vol. 56 No. 6S1 | | 06GH04-1～06GH04-7頁 |
| First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties in Bi-Sb system | 共著 | 2017年12月 | Journal of Physics: Conference Series Vol. 939 | Mohamed S. El-Asfoury、中村康一、Ahmed Abd El-Moneim | 012019-1～012019-10頁 |
| Structural and Thermoelectric Properties of $Bi_{85}Sb_{15}$ Prepared by Non-Equal Channel Angular Extrusion | 共著 | 2018年1月 | The Journal of Electronic Materials Vol. 47 No. 1 | Mohamed S. El-Asfoury、Mohamed N. A. Nasr、中村康一、Ahmed Abd El-Moneim | 242～250頁 |
| Enhanced Thermoelectric Performance of $Bi_{85}Sb_{15}$-Graphene Composite by Modulation Carrier Transport and Density of State Effective Mass | 共著 | 2018年5月 | Journal of Alloys and Compounds Vol. 745 | Mohamed S. El-Asfoury、Mohamed N. A. Nasr、中村康一、Ahmed Abd El-Moneim | 331～340頁 |
| First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties of Transition Metal Dichalcogenide Monolayers | 単著 | 2018年6月 | Japanese Journal of Applied Physics Vol. 57 No. 6S1 | | 06HE04-1～06HE04-8頁 |
| Isotropic Piezoresistance of p-type 4H-SiC in (0001) Plane | 共著 | 2018年7月 | Applied Physics Letters Vol. 113 No. 1 | Tuan-Khoa Nguyen、Hoang-Phuong Phan、Toan Dinh、鳥山寿之、中村康一、Abu Riduan Md Foisal、Nam-Trung Nguyen、Dzung Viet Dao | 012104-1～012104-5頁 |
| First-Principles Simulation on Piezoresistivity of Transition Metal Dichalcogenide Monolayers | 単著 | 2018年9月 | Sensors and Materials Vol. 30 No. 9 | | 2073～2083頁 |
| Ultrahigh-Sensitivity Graphene-based Strain Gauge Sensor: Fabrication on $Si/SiO_2$ and First-principles Simulation | 共著 | 2018年9月 | Sensors and Materials Vol. 30 No. 9 | Mohemmed Gamil、Ahmed M. R. Fath El-Bab、Ahmed Abd El-Moneim、中村康一 | 2085～2100頁 |
| Microstructure and Mechanical Properties Change with Cold Deformation of the Biomedical Ti-17Nb-6Ta-3Zr Alloy | 共著 | 2018年9月 | Key Engineering Materials Vol. 780 | Kudakwashe Nyamuchiwa、Mohamed Abdel-Hady Gepreel、Atef S. Hamada、中村康一 | 15～19頁 |
| その他 (others) | | | | | |
| (口頭発表)<br>Partnership with Kyoto University for MSE Education and Research: Graphene-Based Nanosensors | 単独 | 2015年5月 | 2nd International Conference on Innovative Engineering (エジプト日本科学技術大学) | | |
| (ポスター発表)<br>半導体ナノ材料のゼーベック係数における緩和時間の影響 | 単独 | 2015年9月 | 第9回分子科学討論会 (東京工業大学) | | |
| (講演)<br>First-Principles Approach to Thermoelectric Properties in Low-Dimensional Materials | | 2015年9月 | MicRO Alliance Meeting 2015 (フライブルク大学) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Analysis on Seebeck Coefficient in Zinc Oxide Nanowires for Thermoelectric Devices | 単独 | 2015年9月 | 5th International Conference on Materials and Applications for Sensors and Transducers (ミコノス市) | | |
| (ポスター発表)<br>First-Principles Simulation on Seebeck Coefficient in Semiconducting Nanomaterials | 単独 | 2015年11月 | 28th International Microprocesses and Nanotechnology Conference (富山国際会議場) | | |
| (講演)<br>First-Principles Simulation on Piezoresistivity in Semiconducting Nanomaterials | | 2015年12月 | 2015 EMN meeting Hong Kong (香港) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Simulation on Sensing Properties of Silicon Carbide and Zinc Oxide Nanowires | 単独 | 2015年12月 | 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (ホノルル市) | | |
| (口頭発表)<br>極薄半導体ナノシートにおけるゼーベック係数膜厚依存性の第一原理解析 | 単独 | 2016年3月 | 平成28年電気学会全国大会 (東北大学) | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ポスター発表)<br>半導体材料の熱電変換特性予測におけるキャリア速度の考察 | 単独 | 2016年5月 | 第19回理論化学討論会<br>(早稲田大学) | | |
| (口頭発表)<br>半導体熱電特性への*ab initio*アプローチ | 単独 | 2016年5月 | 第1回マルチスケール材料力学シンポジウム<br>(富山大学) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties in Low-Dimensional Materials | 単独 | 2016年6月 | 8th International Conference on Material Structure and Micromechanics of Fracture (3rd International Symposium on Atomistic Modeling for Mechanics and Multiphysics of Materials)<br>(ブルノ工科大学) | | |
| (ポスター発表)<br>熱電変換特性の向上に寄与するナノワイヤ材料設計 | 単独 | 2016年9月 | 第10回分子科学討論会<br>(神戸ファッションマート) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties in Bi-Sb system | 単独 | 2016年9月 | 6th International Conference on Materials and Applications for Sensors and Transducers<br>(アテネ市) | | |
| (ポスター発表)<br>Design of Highly Efficient Thermoelectric Nanowires Based on First-Principles Electronic Structure | 単独 | 2016年11月 | 29th International Microprocesses and Nanotechnology Conference<br>(ANAクラウンプラザホテル京都) | | |
| (口頭発表)<br>シリコンナノワイヤ熱電変換の第一原理解析とデバイス設計 | 単独 | 2017年3月 | 平成29年電気学会全国大会<br>(富山大学) | | |
| (ポスター発表)<br>電子状態計算による低次元キャリア半導体のフォノン伝搬解析 | 単独 | 2017年5月 | 第20回理論化学討論会<br>(京都大学) | | |
| (ポスター発表)<br>単層グラフェンにおける「有効質量近似」の考察 | 単独 | 2017年5月 | 第2回マルチスケール材料力学シンポジウム<br>(名城大学) | | |
| (受賞)<br>2017 Sensor Review Literati Awards | | 2017年5月 | Emerald Publishing | | |
| (ポスター発表)<br>遷移金属ダイカルコゲナイドのピエゾ抵抗・熱電変換に関する第一原理シミュレーション | 単独 | 2017年9月 | 第11回分子科学討論会<br>(東北大学) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Simulation on Thermoelectric Properties in Transition Metal Dichalcogenide Monolayers | 単独 | 2017年11月 | 29th International Microprocesses and Nanotechnology Conference<br>(済州市) | | |
| (口頭発表)<br>First-Principles Approach to Phonon Diffusion for Thermoelectric Nanomaterials | 単独 | 2018年3月 | 1st International Conference on Materials Science and Engineering: Recent Advances and Challenges<br>(エジプト日本科学技術大学) | | |
| (口頭発表)<br>第一原理計算による遷移金属ダイカルコゲナイドのゲージファクタ解析 | 単独 | 2018年3月 | 2018年 第65回応用物理学会春季学術講演会<br>(早稲田大学) | | |
| (口頭発表)<br>第一原理計算によるポストグラフェン材料の非調和フォノン物性解析 | 単独 | 2018年5月 | 第3回マルチスケール材料力学シンポジウム<br>(高知工科大学) | | |
| (ポスター発表)<br>AlCrFeMnNi系ハイエントロピー合金モデルの分子動力学シミュレーション | 共同 | 2018年5月 | 第3回マルチスケール材料力学シンポジウム<br>(高知工科大学) | Sally Elkatatny、Mohamed Abdel-Hady Gepreel、中村康一 | |
| (ポスター発表)<br>シミュレーションによるハイエントロピー合金熱電材料の物性評価 | 単独 | 2018年9月 | 第12回分子科学討論会<br>(福岡国際会議場) | | |
| (講演)<br>First-Principles Approach to Thermoelectric Properties in Low-Dimensional Materials | | 2018年10月 | MicRO Alliance Meeting 2018<br>(フライブルク大学) | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (口頭発表)<br>Two-component Dirac-Kohn-Sham Calculation for Multiscale Modeling of Materials | 単独 | 2018年10月 | 9th International Conference on Multiscale Materials Modeling<br>(大阪国際会議場) | | |
| (ポスター発表)<br>Atomistic Simulation of Thermoelectric Properties of High-Entropy Alloy Nanostructures | 単独 | 2018年11月 | 30th International Microprocesses and Nanotechnology Conference<br>(札幌パークホテル) | | |
| (ポスター発表)<br>BiSbTeSeCu系ハイエントロピー熱電材料モデルにおける銅の影響 | 単独 | 2019年5月 | 第4回マルチスケール材料力学シンポジウム<br>(室蘭工業大学) | | |
| (ポスター発表)<br>電子状態計算による置換Bi-Te系熱電変換材料のフォノンと熱物性解析 | 単独 | 2019年5月 | 第22回理論化学討論会<br>(北海道大学) | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social

| | |
|---|---|
| 1997年2月～ | 日本化学会会員 |
| 2000年6月～ | 応用物理学会会員 |
| 2002年2月～ | 日本物理学会会員 |
| 2005年1月～ | 理論化学研究会会員 |
| 2008年9月～ | 分子科学会会員 |
| 2009年4月～ | 日本材料学会会員 |
| 2009年4月～2017年4月 | 日本材料学会分子動力学部門委員 |
| 2014年1月～ | 電気学会会員 |
| 2017年4月～ | 日本材料学会マルチスケール材料力学部門委員 |
| 2018年3月 | 1st International Conference on Materials Science and Engineering: Recent Advances and Challenges 実行委員 |
| 2018年10月 | Recent Advances in Materials Science and Engineering(Key Engineering Materials 第786巻)編集委員 |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

分子系・材料系の電子状態計算(分子軌道法、密度汎関数法、第一原理計算)指導

電子状態計算に基づく材料の電子物性(電気伝導率、圧電・焦電物性、圧抵抗特性、熱電変換特性等)に関するシミュレーション

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　教授 | 氏名　福島　宏明 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有)・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績<br>main achievemen of the education | 年月日 Date | 概　要 overview |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 実験装置、計算機を用いた演習 | 2014年4月～<br>2019年1月 | 前任校で担当した「機械設計演習1」(専門科目、3年次配当、半期)ではCADを用いた設計演習を行い、「機械システム学セミナー」(専門科目、3年次配当、半期)では数値計算ソフトMATLABを用いた計算機シミュレーションによる演習や実機実験による演習を行った。これらにより、講義内容の理解が深まるように努めた。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| Powerpointによるスライド作成 | | 前任校で担当した「メカトロニクス入門」(専門科目、3年次配当、半期)、「機械システム学セミナー」(専門科目、3年次配当、半期)では、スライドを作成し、印刷したものを資料として配布した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| ヘビ型ロボットの接地部反力を考慮した跳躍制御 | 共著 | 2014年5月 | 日本ロボット学会誌<br>(第32巻第4号) | 田中基康、星野恵一、<br>福島宏明、松野文俊 | 386頁～<br>394頁 |
| Control of a Group of Mobile Robots Based on Formation Abstraction and Decentralized Locational Optimization | 共著 | 2014年6月 | IEEE Transactions on Robotics<br>(第30巻第3号) | 吉田一哉、福島宏明、<br>松野文俊 | 550頁～<br>565頁 |
| Sliding-Mode Control for Transformation to an Inverted Pendulum Mode of a Mobile Robot With Wheel-Arms | 共著 | 2015年7月 | IEEE Transactions on Industrial Electronics<br>(第62巻第7号) | 福島宏明、室恵二、<br>松野文俊 | 4257頁～<br>4266頁 |
| 複数の移動ロボット群のすれ違いを考慮した編隊制御 | 共著 | 2017年1月 | 日本ロボット学会誌<br>(第35巻第1号) | 小林裕介、吉本昌弘、<br>根和幸、福島宏明、松野文俊、守井友之、北河満、<br>辻滋、吉川浩一 | 78頁～<br>84頁 |
| Flocking for Multirobots Without Distinguishing Robots and Obstacles | 共著 | 2017年5月 | IEEE Transactions on Control Systems Technology<br>(第25巻第3号) | 坂井大斗、福島宏明、<br>松野文俊 | 1019頁～<br>1027頁 |
| Leader-Follower Navigation in Obstacle Environments While Preserving Connectivity Without Data Transmission | 共著 | 2018年7月 | IEEE Transactions on Control Systems Technology<br>(第26巻第4号) | 坂井大斗、福島宏明、<br>松野文俊 | 1233頁～<br>1248頁 |
| その他 (others) | | | | | |
| 横滑りを考慮したヘビ型ロボットのモデル予測制御 | 共同 | 2014年5月 | 第58回システム制御情報学会<br>研究発表講演会 | | |
| Formation Control Considering Well-organized Crossing of Robot Swarms | 共同 | 2015年12月 | The First International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics | | |
| Cooperative Transportation of a Disk Object by Multiple Robots without Communication | 共同 | 2015年12月 | The First International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics | | |
| 不確かさを考慮した形態可変車輪型移動ロボットの倒立制御 | 共同 | 2016年12月 | 第17回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 | | |
| 平均化手法とモデル予測制御を用いた水中ヘビ型ロボットの経路追従制御 | 共同 | 2018年5月 | 第62回システム制御情報学会<br>研究発表講演会 | | |
| 障害物環境における連結性の維持とデッドロック回避のためのロボット群の移動制御 | 共同 | 2018年5月 | 第62回システム制御情報学会<br>研究発表講演会 | | |
| 3次元障害物環境における連結グラフ構造を維持したロボット群の制御 | 共同 | 2018年5月 | 第62回システム制御情報学会<br>研究発表講演会 | | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social | |
|---|---|
| 2014年5月 | 第58回システム制御情報学会研究発表講演会において実行委員を務める |
| 2016年6月 | システム制御情報学会編集委員(2017年5月まで) |
| 2017年1月 | 計測自動制御学会関西支部会計幹事(2018年12月まで) |
| 2018年5月 | 第62回システム制御情報学会研究発表講演会において実行委員を務める |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ<br>Know-how about the management consulutat, techenical consulutat, joint research, funded research and so on |
|---|
| |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　教授 | 氏名　堀井 滋 | 大学院における研究指導担当資格の有無　有 |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 学生の授業へ理解を促進するための工夫<br>国立大学法人　京都大学<br>教養・全学共通科目ILASセミナー「暮らしを支える電子材料」 | 2016年4月より<br>2018年9月まで | 京都大学1年次(全学向け)に開講される少人数教育科目(セミナー)であり、携帯電話やテレビなど身近に存在する電子機器に含まれている電子部品の動作原理や物理現象について習得する。主に、半導体、LED、圧電素子、抵抗材料、超伝導を取り上げ、キーワードを提示して、これをもとに調査・発表を行う形式とした。解説時には、実験キットや現物を利用するなど体験を通じて理解度を高める工夫を行った。 |
| 学生の授業へ理解を促進するための工夫<br>国立大学法人　京都大学<br>工学部物理工学科「統計熱力学」 | 2013年10月より<br>2019年3月まで | 京都大学3年次(物理工学科向け)に開講される選択科目であり、当方担当分(1/2)では、ミクロカノニカルアンサンブル・カノニカルアンサンブル・グランドカノニカルアンサンブルについて習得する。各分配関数の導出についてもステップ・バイ・ステップで進めながら説明し、これらの3つのモデルの違いを比較しながら理解するとともに、適用できる微視的モデルの違いについても理解できるよう配慮した。また、各回に小問題を設定するとともに、授業内容についての自由記入欄も設けた。これらの状況を踏まえ、補足説明を行い理解を高める工夫をおこなった。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 公立大学法人　高知工科大学<br>「物理学実験」<br>「熱学」実験の実験設備構築およびテキスト作成 | 2010年4月 | 高知工科大学環境理工学群2年次に開講される実験系科目のうち、温度計測の方法としてのゼーベック効果を利用した熱電対について、校正および実際の高温測定を行う実験テーマ「熱学」について、実験設備の構築にくわえて、一連の実験の流れ・実験上の注意などをまとめた実験テキストを作成した。 |
| 公立大学法人　高知工科大学<br>「情報科学3」テキスト作成 | 2011年10月 | 高知工科大学環境理工学群1年次に開講される科目であり、計測機器を制御するプログラム言語LabViewの習得に関する授業について、アプリケーションの操作方法やプログラム作成方法などステップ・バイ・ステップで進められるように配慮した100ページ以上にわたるテキスト(配布資料)を作成した。 |
| 国立大学法人　新潟大学<br>大学院集中講義科目「Advances in Physics and Chemistry」<br>配布資料作成 | 2018年12月 | 新潟大学大学院自然科学研究科の開講科目「Advances in Physics and Chemistry」(非常勤講師による集中講義)において、高温超伝導材料学および強磁場科学に関する講義を行うにあたって、上記に関する学術的知見について理解を促進させるため100ページ以上にわたる配布資料を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| High-Temperature Superconductors -Occurrence, Synthesis and Applications | | 2018 | Nova Science Publishers, Inc., ISBN: 978-1-53613-341 | Editors: M. Miryala and M.R. Koblischka | 153-178 |
| | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| Effect of artificial MgO pinning centers introduced by residual moisture in a deposition chamber on Jc-B-T characteristics and film structure of 10-$\mu$m-thick MgB2 films deposited on Cu substrates | 共著 | 2019 | Supercond. Sci. Technol. 32 (2019) 045004. | T. Iwanaka, H. Kotaki, M. Kodama, H. Tanaka, A. Matsumoto, S. Horii, T. Doi, and T. Kusunoki | 045004 |
| High critical current density YBa 2 Cu 3 O 7 coating on conductive Nb-doped SrTiO 3 and Ni double-buffered {100}〈001〉 textured pure Cu tape for low-cost coated conductors without generation of any insulative oxides at interfaces | 共著 | 2019 | Appl. Phys. Express 12 (2019) 023010. | T. Doi, T. Morimura, S. Horii, and A. Ichinose | 023010 |
| Thermoelectric Properties of Nb-Doped SrTiO3/TiO2 Eutectic Solids Fabricated by Unidirectional Solidification | 共著 | 2019 | J. Electro. Mater. 48 (2019) 1827-1832 | Y. Yokota, S. Horii, H. Ogino, M. Yoshino, A. Yamaji, Y. Ohashi, S. Kurosawa, K. Kamata, and A. Yoshikawa | 1827-1832 |
| Linear drive type of modulated rotating magnetic field for a continuous process of three-dimensional crystal orientation | 共著 | 2018 | J. Cer. Soc. Jpn. 126 (2018) 885-888. | S. Horii, I. Arimoto, and T. Doi | 885-888 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文（つづき） | | | | | |
| Relationship between biaxial orientation degrees and grain in magnetically aligned (Y1−xErx)Ba2Cu3Oy powders with twin microstructures | 共著 | 2018 | Jpn. J. Appl. Phys. 57 (2018) 093101. | S. Horii, S. Fujioka, and T. Doi | 093101 |
| Magnetocrystalline anisotropy of cementite pseudo single crystal fabricated under a rotating magnetic field | 共著 | 2018 | J. Mag. Mag. Mater. 451 (2018) 1-4. | S. Yamamoto, T. Terai, T. Fukuda, K. Sato, T. Kakeshita, S. Horii, M. Ito, and M. Yonemura | 1-4 |
| Determination of the Anisotropic Rotational Diffusion Constant of Microcrystals Dispersed in Liquid Medium | 共著 | 2018 | J. Phys. Chem. A 122 (2018) 9123−9127 | F. Kimura, S. Horii, I. Arimoto, T. Doi, M. Yoshimura, M. Wada, and T. Kimura | 9123−9127 |
| High infield performance and critical temperatures in post-annealed MgB 2 films | 共著 | 2018 | Appl. Phys. Express 11 (2018) 093102. (4 pages) | S. Horii, A. Ichinose, T. Iwanaka, T. Kusunoki, and T. Doi | 093102 |
| リニア駆動型回転変調磁場発生装置の開発と3次元結晶配向 | 単著 | 2018 | 粉体および粉末冶金 65 (2018) 634-639.（招待） | 堀井滋 | 634-639 |
| Possibility of the material cost reduction forward developing low-cost 2nd generation superconducting wires | 共著 | 2017 | Jpn. J. Appl. Phys. 56 (2017) 010310. (5 pages) | A. Ichinose, S. Horii, T. Doi | 010310 |
| Superior Jc-B-T characteristics of 10 micrometer-thick MgB2 film for tape application | 共著 | 2017 | IEEE Trans. Appl. Supercond. 27 (2017) 6200204. | T. Kusunoki, H. Yamamoto, M. Kodama, H. Kotaki, H. Tanaka, G. Nishijima, S. Horii, and T. Doi | 6200204 |
| Biaxial magnetic alignment in twinned REBa2Cu3Oy superconductors | 共著 | 2016 | Supercond. Sci. Technol. 29 (2016) 124007. (6 pages) | S. Horii, T. Nishioka, I. Arimoto, S. Fujioka, and T. Doi | 124007 |
| 導電性バッファ層を介した{100}<001>集合組織テープ上へのYBa2Cu3O7超伝導薄膜の作製 | 共著 | 2016 | 日本金属学会誌 80 (2016) 428-433. | 土井、橋本、堀井、一瀬 | 428-433 |
| Microstructures of YBa2Cu3Oy Layers Deposited on Conductive Layer-Buffered Metal Tapes | 共著 | 2016 | Physics Procedia 81 (2016) 113. (4 pages) | A. Ichinose, M. Hashimoto, S. Horii, and T. Doi | 113-116 |
| Microstructures and improved Jc-H characteristics of Cl-containing YBCO thin films prepared by fluorine-free MOD method | 共著 | 2016 | Supercond. Sci. Technol. 29 (2016) 015006. (7 pages) | T. Motoki, J. Shimoyama, H. Ogino, K. Kishio, J. Roh, T. Tohei, Y. Ikuhara, S. Horii, T. Doi, G. Honda, and T. Nagaishi | 015006 |
| 回転変調磁場を用いた希土類系高温超伝導体の3次元結晶配向 | 共著 | 2016 | 粉体および粉末冶金 63 (2016) 947-954.（招待） | 堀井滋、土井俊哉 | 947-954 |
| 磁場中コロイドプロセスによる層状機能性物質の配向制御～熱電変換材料と高温超伝導材料を事例に～ | 共著 | 2016 | 日本結晶成長学会誌 43 (2016) 27-34.（招待） | 堀井滋、土井俊哉 | 27-34 |
| 金属系および高温超伝導線材の高性能化 | 共著 | 2015 | 応用物理 84 (2015) 419-422.（招待） | 土井俊哉、堀井滋 | 419-422 |
| Evidence for enhancement of vortex matching field above 5 T and oxygen-deficient annuli around Barium-niobate nanorods | 共著 | 2015 | J. Appl. Phys. 118 (2015) 133907 (7 pages). | S. Horii, M. Haruta, A. Ichinose, and T. Doi | 133907 |
| Mechanism of crystal alignment of CaO-stabilized ZrO2 through a mismatched interface of {110} <001> textured iron tape | 共著 | 2015 | Jpn. J. Appl. Phys. 54 (2015) 080302. | A. Ichinose, K. Watanabe, J. Naka, T. Uchima, S. Horii, and T. Doi | 080302 |
| Growth of (Y1-xCax)Ba2Cu4O8 in ambient pressure and its tri-axial magnetic alignment | 共著 | 2015 | Supercond. Sci. Technol. 28 (2015) 105003. (9 pages) | S Horii, M Yamaki, J Shimoyama, K Kishio, and T Doi | 105003 |
| その他（一般の口頭講演は省略） | | | | | |
| 研究助成：科学研究費助成事業　基盤研究（B） | | 2019 | 日本学術振興会 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ASTEP | | 2019 | 科学技術振興機構 | 代表 | |
| 研究助成：科学研究費助成事業　基盤研究（B） | | 2018 | 日本学術振興会 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ASTEP | | 2018 | 科学技術振興機構 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ALCA | | 2018 | 科学技術振興機構 | 分担 | |
| 特許：配向体装置及び配向体製造方法 | | 2018 | 特願2018-79768<br>出願人：京都大学 | 発明人：堀井滋、土井俊哉 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（つづき） | | | | | |
| 招待講演：磁場配向のためのリニア駆動型磁場発生装置の開発と課題 | | 2018 | 超伝導バルク夏の学校 | 堀井滋 | |
| 招待講演： 磁場配向法を利用した単結晶性セラミックスの創出 | | 2018 | 高機能セラミックス展専門セミナー | 堀井滋 | |
| 招待講演：磁場配向法による3軸配向セラミックスの創製 | | 2018 | 粉体粉末冶金協会2018春季講演会 | 堀井滋 | |
| 招待講演：磁場配向法による3軸配向セラミックスの創製 | | 2018 | 新潟大学理学部物理学科コロキウム | 堀井滋 | |
| 研究助成：科学研究費助成事業　基盤研究（B） | | 2017 | 日本学術振興会 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ASTEP | | 2017 | 科学技術振興機構 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ALCA | | 2017 | 科学技術振興機構 | 分担 | |
| 招待講演：強磁場を利用した希土類系高温超伝導物質の配向制御 | | 2017 | 低温工学・超電導学会　バルクの磁気的挙動調査研究会 | 堀井滋 | |
| 招待講演：高酸素圧を利用した高温超伝導物質開発 | | 2017 | 新規超伝導物質の探索と高圧力物性研究の展開 | 堀井滋 | |
| 研究助成：NEDO「熱電変換材料・デバイス高性能高信頼化技術開発」小規模開発 | | 2016 | NEDO | 分担 | |
| 研究助成：JST-ASTEP | | 2016 | 科学技術振興機構 | 代表 | |
| 研究助成：JST-ALCA | | 2016 | 科学技術振興機構 | 分担 | |
| 招待講演：回転変調磁場を用いた希土類系高温超伝導体の三次元結晶配向 | | 2016 | 粉体粉末冶金協会2016春季講演会 | 堀井滋 | |
| 招待講演：希土類系高温超伝導体の磁気異方性と二軸磁場配向 | | 2016 | 日本磁気科学会　無機・金属分科会研究会 | 堀井滋 | |
| 特許：熱電材料および熱電モジュール | | 2016 | 特願2016-245888、出願人：東北大学、京都大学 | 発明人：吉川彰、横田有為、堀井滋 | |
| 研究助成：村田学術振興財団　研究助成 | | 2015 | 村田学術振興財団 | 代表 | |
| 研究助成：NEDO「熱電変換材料・デバイス高性能高信頼化技術開発」小規模開発 | | 2015 | NEDO | 分担 | |
| 研究助成：JST-ALCA | | 2015 | 科学技術振興機構 | 分担 | |
| 招待講演：高温超伝導セラミックス線材の低コスト化・高性能化 | | 2015 | 日本セラミックス協会　第28回秋季シンポジウム | 堀井、土井 | |
| 招待講演：高次配向セラミックス作製技術としての磁気配向 | | 2015 | レーザー学会　第1回マイクロ固体フォトニクス専門委員会 | 堀井滋 | |
| 招待講演：電子ビーム蒸着法で作製したMgB2薄膜の高Jc化 | | 2015 | 低温工学・超電導学会　第1回材料研究会 | 堀井、土井 | |
| 受賞：3軸配向磁場勾配の材料科学への応用と回折法による検証 | | 2015 | 日本磁気科学会・優秀学術賞 | 堀井、木村 | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2014～2018 | 日本磁気科学会・理事 |
| 2016～2017 | 文部科学省・科学技術・学術政策研究所 科学技術予測センター　科学技術専門調査員 |
| 2014～2019 | 応用物理学会・代議員 |
| 2014～現在 | 応用物理学会超伝導分科会　幹事 |
| 2014～現在 | 低温工学・超電導学会　調査研究会　幹事 |
| 2015～2019 | 応用物理学会　講演会プログラム委員 |
| 2017 | 日本磁気科学会　第12回年会　実行委員長 |
| 2017 | IUMRS-ICAM, Organizing Committee |
| 2015～現在 | 応用物理学会　磁気科学研究会　副委員長 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

磁場配向法を利用した材料（粉末）配列制御、樹脂中フィラーの磁場配向

磁場配向組織を連続的に形成可能な回転変調磁場の発生技術

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名　教授 | 氏名　的場 宏次 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　准教授 | 氏名　岸田　逸平 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績<br>main achievemen of the education | 年月日 Date | 概　要 overview |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| ●授業内容の入替<br>●卒業研究中間発表の反映 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>本科目はいわゆる材料設計を題材にして，4年生の卒業研究も見据えたデザイン能力の涵養を目的とした授業である．最新の内容を取り込み，授業時間配分の最適化を常に模索している．毎年1コマ程度の内容を入れ替えてマンネリ化・内容の陳腐化を防ぎ，よりよい授業構築を目指している．また学期開始直前に開かれる4年生の卒業研究中間発表の内容を積極的に取り込み，1年後に従事する卒業研究との関連を実感させている．個人的には効果があると考えているが，受講生からは単年度しか見えないため，学生アンケートには表れにくいと考えられる. |
| ●ワードプロセッサ（ワープロ）を用いたレポートの添削<br>●教育におけるインターネットの利用<br>●課題・レポートの活用 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>学期中に課されるレポート提出を電子ファイルのサーバーへのアップロードによって行わせ，このファイルをワープロソフトの編集履歴の記録とコメント機能を活用して精細に添削した．この添削内容を含めて学生に返却した．学生はそれまで学術的・技術的な作文に厳密な添削を受けた経験がほとんどなく，4年生での卒業研究と卒業論文への取り組みを前に学生自身の作文能力を自覚させることができる．学生からの意見では成績に反映させる配点をもっと増やすべきと指摘されており，やりがいを反映したものと捉えることができる. |
| ●プレゼンテーション（プレゼン）を利用した授業<br>●実物の回覧 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>学生に意欲をもたせつつ授業内容をつたえるには，写真を含めたカラフルな画像が効果的であるが，授業テキストでは紙面や印刷の制約から載せられないものも多い．そこでプレゼンソフトを活用し，多数の写真を紹介することで材料の応用や大型構造材の破壊などを効果的に伝えることに成功している．模式図についても板書する時間を節約し，授業時間を効果的に使うのにも役立っている．また授業で扱う材料や製品を学生に回覧させて，材料設計と現実の材料との関連を実感させている．これらの試みについて，好意的な感想を返す学生が多い. |
| ●毎回授業終了時の小レポート<br>●学生の授業評価の活用とそのフィードバック | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>毎回の授業の最後の5～10分程度を使い，その回の授業の理解度を図る課題を課して提出させる．次回授業の冒頭でその採点レポートを返却し，頻出した問題点の講評を行った．これによって学生は授業に目的意識を持ち，教員は学生の理解度等に配慮した授業設計を行うことができる．用紙には授業の感想や要望を書かせる欄を設けており，学生の意見を細大漏らさず吸い上げ，意見に対して次回授業から対応する．授業時間を無駄なく使い切ることにより，効果的な学習に寄与している. |
| オフィスアワーの活用 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>学生の理解不十分な点を補足するために，学生が自由に訪問できる時間を確保している．実際に訪問する学生は半期に数名というところだが，学生アンケートで「十分に理解できた」と答える学生が多いことから，これは授業での理解が十分であるためと考えられる. |
| 双方向授業の実践 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>自作の授業テキストを穴埋め形式で作成しており，既知の知識であるはずのものは学生に問い掛ける．これは授業内での復習の効果も期待している．また材料デザインの観点から，「なぜそのようになっているのか？」を授業内で問い掛け，意見を述べさせている．教員としては学生の意見をできるだけ肯定的に受け止めることを心がけており，学生が授業に入り込みやすい雰囲気作りに役立っていることが学生アンケートからも分かった. |
| KPTの試験的実施 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.<br>KPTとはプログラミングの市民勉強会で用いられる手法で，良かった点(Keep)，悪かった点(Problem)，改善のため次回行う試み(Try) を終了前の数分間ディスカッションするものである．この試みは1年目には非常によく機能し，学生の評価も高かったが，2年目はあまりよく機能しなかった．市民勉強会と授業では知識の方向性がことなること，成功するかどうかは学生のキャラクターに強く依存することが原因である．結果的に中止したが，様々な教育改善手法を模索し，試みた事例としてここに挙げる. |

| | | |
|---|---|---|
| 漫画等から得られた知見の活用 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した.「学生自身に試験問題を考案させる」という教育手法が『ドラゴン桜』(三田紀房)によって紹介されており,これを取り込んだ. その内容を正確に理解していなければ出題できないことから, 理解度を測ることができ, また学生が興味を持った内容を大まかに俯瞰することができる. 漫画やアニメの絵による高い訴求力を活用し, 学習研究社の教育漫画などを著作権法に抵触しない範囲で教材として活用している. |
| 試験におけるA4 用紙1枚の持ち込みを許可 | 平成27年10月～現在 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において実践した. 期末試験において, 手書きの紙1枚の持ち込みを認め, 解答と併せて提出させた. 全ての情報を脳内に記憶しておく必要はなく, 必要なときにどこにあるかがわかれば良い. 半期の講義全体をA4用紙1枚にまとめるには要点を的確に把握する必要がある. また内容を簡潔にまとめる訓練になる. 試験における不正行為を防止する効果も実務上としてはあるだろう. |
| レポート試問におけるタイマー制 | 平成31年10月～現在 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「機械工学実験」(3年生 60人クラス)において実践した. 1コマあたり15人ほどを相手に試問することになるが, レポートの内容をチェックするのは1人ずつしかできず, 残りの人間は待機することになる. 図を駆使してわかり易い文章を書くインセンティブを学生に持たせるために, 1回の試問に1分という時間制限を設けた. |
| 学科教育支援ウェブサーバの設置 | 平成22年4月～現在 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「コンピュータプログラミング法」(2年生 60人クラス)の教育支援のために設置した. Linux サーバにApache とPHP を稼働させ, HTML と CSS を用いて資料配布と課題提出に供した. 担当している専門科目に限らず, 学科全体で広く活用されている. |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| Ruby教育文書 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「コンピュータプログラミング法」(2年生 60人クラス)において使用するテキストを自作し, PDFで配布した. 1年目の学生からは難しいという意見が多かったが, 毎年改訂を重ね, 次第に分りやすいという意見が増えていった. 担当終了後も改訂増補し, インターネット上で現在も公開している. シミュレータとしてビデオゲームの戦闘シーンを取り上げて学生の興味を引き, そこから砲弾の弾道シミュレータへと発展させて科学への接続を意図した. この試みについて学生から好意的な反響が多くあった. |
| Ruby教育文書<br>材料デザイン学テキスト | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において使用するテキストを自作した.「教育方法の実践例」でも述べたように, 本科目はいわゆる材料設計を題材にして, 4年生の卒業研究も見据えたデザイン能力の涵養を目的とした授業である. この内容に沿った教科書が見つからなかったため, 自身でテキストを作成した. 毎年改訂を重ね, PDFで作成, 配布した. 重要な用語の穴埋め形式にしており,「適度な緊張感とともに重要箇所を把握しながら学習できた」, と学生アンケートでも高評価であった. このテキストもインターネット上で現在も公開している. |
| UNIX今日の技 | 平成17年4月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目 卒業研究に向けて, UNIX利用のTipsをまとめたものをインターネット上にて公開している. |
| ●市販教材の活用の工夫<br>●教材作成<br>●回覧材料の収集 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において使用する教材を収集, 作成した.「教育方法の実践例」で挙げた,「実物の回覧」に対応する教材である. 具体的には結晶模型, 手に持って重量比較できる金属バルク, 釣り竿, 破壊された自転車ハンドルなど. 授業はともすれば紙媒体の知識伝達に終始してしまいがちだが, 実物を手に取って観察することで感動は大きく広がり心に残って学習効果が増す. 学生アンケートでも高く評価されている. |
| 機械工学実験 金属精錬 装置 | 平成23年10月<br>～<br>平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門必修科目「機械工学実験」(3年生 60人クラス)において使用する実験装置を作成した. 酸化還元反応およびテルミット反応の実験装置である. 熱機関の理解のために発展した熱力学という学問が材料の挙動を理解するためにも役立つことを理解させることを目的とした. |
| 最短経路問題 ダイクストラ法教材 | 平成31年3月 | 大阪市立大学工学部機械工学科の専門科目「材料デザイン学」(3年生 30人クラス)において使用する教材の一つである。数学の一分野であるグラフ理論の基礎的問題である最短経路問題について、代表的なアルゴリズムであるダイクストラ法を直感的に理解できる教材を作成した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 特になし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 特になし | | |

Ⅱ 研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| なし | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| First-Principles Calculations of Ionic Conduction in Olivine-Type LixFePO4 (査読付) | 共著 | 平成30年7月 | Materials Transactions, Vol. 59, No. 7 | Kishida Ippei, Koyama Shota, Yokogawa Yoshiyuki | pp. 1062 to 1067 |
| First-Principles Study of Silicon-Embedded Ni(110) (査読付) | 共著 | 平成29年10月 | E-Journal of Surface Science and Nanotechnology, 15 | Fukuda T., Kishida I. | 96-101 |
| Initial surface silicidation on Ni(110) (査読付) | 共著 | 平成29年5月 | Surface Science, 659 | T. Fukuda, I. Kishida, K. Umezawa | pp. 1-4 |
| Error Control of Single-Point Energy from First-principles Band Calculations | 単著 | 平成28年12月 | Memoirs of the Faculty of Engineering, Osaka City University, 57 | | pp. 1-9 |
| The graph-theoretic minimum energy path problem for ionic conduction (査読付) | 単著 | 平成27年10月 | AIP Advances, 5 ( 10 | | pp. 107107 |
| その他 (others) | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 特になし | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

材料の理論計算

Linux計算機クラスタ運用

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　准教授 | 氏名　高橋　亮 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| IoT講義用マニュアル、資料および実習教材 | 平成29年4月～<br>平成31年3月 | 愛知工科大学工学部IoTモノづくりコース担当者として「IoTプラットフォーム」の講義に使用。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| なし | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| なし | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| Three-Phase Power Router and its Operation with Matrix Converter toward Smart-Grid Applications | 共著 | 平成27年4月 | Energies, vol.8, no.4 | Alexandros Kordonis, Ryo Takahashi, Daichi Nishihara and Takashi Hikihara | pp.3034-3049 |
| Active and Reactive Power in Stochastic Resonance for Energy Harvesting | 共著 | 平成27年7月 | IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, vol. | Madoka Kubota, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp. 1537-1539 |
| A Study on Trajectory Control of Manipulator Using Power Packet Dispatching | 共著 | 平成27年10月 | Proc. 37th IEEE International Telecommunications Energy Conference (INTELEC 2015) | Shiu Mochiyama, Naoaki Fujii, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp. 555-559 |
| Power Packet Dispatching with Second-Order Clock Synchronization | 共著 | 平成28年3月 | International Journal of Circuit Theory and Applications, vol.44 | Yanzi Zhou, Ryo Takahashi, Naoaki Fujii and Takashi Hikihara | pp.729-743 |
| Power Packet Dispatching with Features on Safety | 共著 | 平成28年4月 | Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, vol. 7, no.2 | Yanzi Zhou, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp.250-265 |
| Possibility of Energy Extraction from Noise under Stochastic Resonance | 共著 | 平成28年8月 | Proc. 24th International Congress of Theoretical and Applied Mechanics (ICTAM2016) | Madoka Kubota, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | |
| Consensus Dynamics in Switching Networks for Distributing Power Packets | 共著 | 平成28年11月 | IFAC-PaperOnLine, vol. 49, issue 22 | Hiroyasu Ando, Shun-ichi Azuma and Ryo Takahashi | pp. 351-354 |
| A Simulation Study of an Algorithm for Distributing Power Packets in a Network | 共著 | 平成28年11月 | Proc. 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2016) | Hiroyasu Ando, Shun-ichi Azuma and Ryo Takahashi | p. 86 |
| A Study of Pulse Shape Suitable for Power Packet Dispatching on Power Transmission Lines | 共著 | 平成28年11月 | Proc. 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2016) | Ryo Takahashi, Takuya Kajiyama, Takafumi Okuda and Takashi Hikihara | pp. 87-88 |
| Power Regulation with Predictive Dynamic Quantizer in Power Packet Dispatching System | 共著 | 平成28年12月 | IEEE Transactions on Industrial Electronics, vol.63,no.12 | Ryo Takahashi, Shun-ichi Azuma and Takashi Hikihara | pp. 7653-7661 |
| Up-stream Dispatching of Power by Density of Power Packet | 共著 | 平成28年12月 | IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, vol. E99-A,no.12 | Shinya Nawata, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp.2581-2584 |
| Trajectory Control of Manipulator Fed by Power Packets | 共著 | 平成29年6月 | International Journal of Circuit Theory and Applications, vol.45 | Shiu Mochiyama, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp. 832 - 842 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Power Processing for Advanced Power Distribution and Control | 共著 | 平成29年6月 | IEICE Transactions on Communications, vol. E100-B, no.6 | Ryo Takahashi, Shun-ichi Azuma, Mikio Hasegawa, Hiroyasu Ando and Takashi Hikihara | pp.941-947 |
| Close-loop Angle Control of Stepper Motor Fed by Power Packets | 共著 | 平成29年7月 | IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, vol. 100-A,no.7 | Shiu Mochiyama, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp. 1571-1574 |
| A Study on close-loop control of manipulator by power packet density modulation | 共著 | 平成29年10月 | Proc. IEEE International Telecommunications Energy Conference (INTELEC 2017) | Ryo Takahashi, Takuya Kajiyama, Takafumi Okuda and Takashi Hikihara | pp. 512-525 |
| A Resource Sharing Model in a Power Packet Distribution Network | 共著 | 平成30年5月 | Proc. 2018 International Power Electronics Conference (IPEC) - ECCE Asia - | Hiroyasu Ando, Ryo Takahashi, Shun-ichi Azuma, Mikio Hasegawa, Tomoki Yokoyama and Takashi Hikihara | pp. 3665 - 3669 |
| Design Possibility for Covert Power Packet Transfer Using Asynchronous Sampling | 共著 | 平成30年7月 | Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE,vol.E9-N, no. 3 | Shinya Nawata, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | pp. 374 - 381 |
| A Study on Physical Behavior of Power Packet Congestion in Power Packet Router | 共著 | 平成30年9月 | Proc. 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2018) | Ryo Takahashi, Yanzi Zhou, Naomitsu Yoshida, Shinya Nawata, Naoaki Fujii, and Takashi Hikihara | p. 79 |
| その他 (others) | | | | | |
| (学会、研究会発表) | | | | | |
| 三相交流電力ルータの構成とその回線切換え方法について | | 平成27年11月 | 平成27年電気関係学会 関西支部連合大会 | 西原 大智, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケットの伝送におけるルータ駆動のためのエネルギーハーベスティングに関する一検討 | | 平成28年3月 | 2016年電子情報通信学会 総合大会 | 吉田 直充, 縄田 信哉, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケットの供給密度変調を用いたステッピングモータ駆動に関する実験的検討 | | 平成28年3月 | 2016年電子情報通信学会 総合大会 | 持山 志宇, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケットによる電源側への電力の割り当てに関する一考察 | | 平成28年3月 | 2016年電子情報通信学会 総合大会 | 縄田 信哉, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 共通配線を通じた電力パケット給電によるマニピュレータ軌道制御の実験的検討 | | 平成28年7月 | 電気学会 半導体電力変換研究会/電子情報通信学会 電子通信エネルギ | 持山 志宇, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| による角度情報を考慮したステッピングモータのフィードバック制御の一検討 | | 平成28年11月 | 平成28年電気関係学会 関西支部連合大会 | 持山 志宇, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 交流電力ルータによるチョッピング動作に関する実験的検討 | | 平成29年3月 | 平成29年 電気学会全国大会 | 奥津 泰志, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 無線フィードバックによる電力パケットミキサの出力電力調整に関する実験的一検討 | | 平成29年3月 | 2017年電子情報通信学会 総合大会 | 片山 慎治, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケットルータの双方向化に向けたモジュール回路に関する一検討 | | 平成29年3月 | 2017年電子情報通信学会 総合大会 | 吉田 直充, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 高周波電力パケットによるモータ駆動のための回路構成 | | 平成29年3月 | 2017年電子情報通信学会 総合大会 | 持山 志宇, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケット伝送系への無線フィードバックの導入に関する実験的検討 | | 平成29年5月 | 第61回 システム制御情報学会 | 片山 慎治, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケット給電によるモータ駆動へのフィードバック制御の適用 | | 平成29年5月 | 第61回 システム制御情報学会 | 持山 志宇, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 電力パケットの双方向伝送のためのルータに関する検討 | | 平成29年7月 | 電気学会 半導体電力変換研究会/電子情報通信学会 電子通信エネルギー技術研究会 無線電力伝送研究会 | 吉田 直充, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 交流電力ルータにおける2入力間の繰返し回線交換による電力変換に関する実験的一検討 | | 平成29年8月 | 平成29年電気学会 産業応用部門大会 | 奥津 泰志, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 無線フィードバックを適用した電力パケット伝送系の分散制御シミュレーションモデル | | 平成29年10月 | 電子情報通信学会 電子通信エネルギー技術研究会 無線電力伝送研究会 | 片山 慎治、高橋 亮、引原 隆士 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (国際会議発表) | | | | | |
| A Study on Trajectory Control of Manipulator Using Power Packet Dispatching | | 平成27年10月 | The 37th IEEE International Telecommunications Energy Conference | Shiu Mochiyama, Naoaki Fujii, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | |
| Possibility of Energy Extraction from Noise under Stochastic Resonance | | 平成28年8月 | The 24th International Congress of Theoretical and Applied Mechanics | Madoka Kubota, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | |
| Consensus Dynamics in Switching Networks for Distributing Power Packets | | 平成28年9月 | The 6th IFAC Workshop on Distributed Estimation and Control in Networked Systems | Hiroyasu Ando, Shun-ichi Azuma and Ryo Takahashi | |
| A Simulation Study of an Algorithm for Distributing Power Packets in a Network | | 平成28年11月 | 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications | Hiroyasu Ando, Shun-ichi Azuma and Ryo Takahashi | |
| A Study of Pulse Shape Suitable for Power Packet Dispatching on Power Transmission Lines | | 平成28年11月 | 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications | Ryo Takahashi, Takuya Kajiyama, Takafumi Okuda and Takashi Hikihara | |
| A Study on close-loop control of manipulator by power packet density modulation | | 平成29年10月 | 2017 IEEE International Telecommunications Energy Conference | Shiu Mochiyama, Ryo Takahashi and Takashi Hikihara | |
| A Resource Sharing Model in a Power Packet Distribution Network | | 平成30年5月 | 2018 International Power Electronics Conference | Hiroyasu Ando, Ryo Takahashi, Shun-ichi Azuma, Mikio Hasegawa, Tomoki Yokoyama and Takashi Hikihara | |
| A Study on Physical Behavior of Power Packet Congestion in Power Packet Router | | 平成30年9月 | 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications | Ryo Takahashi, Yanzi Zhou, Naomitsu Yoshida, Shinya Nawata, Naoaki Fujii, and Takashi Hikihara | |
| (講演) | | | | | |
| 電力パケット化装置開発 | | 平成30年3月 | 京都大学 スマートエネルギーマネージメントシンポジウム | | |
| 電力パケット伝送システムとその応用 | | 平成31年1月 | 日本学術振興会 シリコン超集積化システム第165委員会研究会 | | |
| (受賞) | | | | | |
| 平成26年度論文賞 | | 平成27年6月 | 電子情報通信学会 | 縄田 信哉, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| 平成26年度喜安善市賞(年度最優秀論文賞) | | 平成27年6月 | 電子情報通信学会 | 縄田 信哉, 高橋 亮, 引原 隆士 | |
| (研究助成) | | | | | |
| 日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究(B) | 代表 | 平成26年度～平成28年度 | | | |
| 科学技術振興機構 委託事業 研究成果展開事業(スーパークラスタープログラム)<br>京都地域コアクラスター | 分担 | 平成28年度～平成29年度 | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 平成27年4月～平成29年5月 | 電子情報通信学会 NOLTAソサイエティ 複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会 幹事補佐 |
| 平成29年6月～現在に至る | 電子情報通信学会 NOLTAソサイエティ 複雑コミュニケーションサイエンス研究専門委員会 専門委員 |
| 平成28年 | Member of Review Committee, 2016 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2016), Yugawara, Japan, Nov. 2016. |
| 平成30年 | Member of Review Committee, 2018 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2018), Tarragona, Spain, Sept. 2018. |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

エネルギーマネージメント技術等

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　准教授 | 氏名　西　正之 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績<br>main achievemen of the education | 年月日 Date | 概　要 overview |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 前任校において分担した技術英語系の科目における課題の | 2015年前期 | 学生による最終プレゼンテーションにおいて、発表プログラムを作成し、同プログラムに発表に関する3文アブストラクトを掲載した。それにより、学生にとっては他の発表に関する事前理解の向上により質問がしやすくなり、教員にとっては学生のライティングスキル、発表の要約力を確認するための新たな視点を得ることができた。 |
| 前任校において分担したリスクマネジメント系科目、先端材料系科目、無機化学系科目における質問・クイズの活用 | 2015年前期～2018年後期 | 科目で取り扱うトピックと学生の知識がかなり離れていると感じる場合に、具体的な事例を用いた質問やクイズを利用して、学生がそのトピックに興味をもてるように工夫した。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 前任校において分担した技術英語系の科目におけるプレゼンテーション用補助教材 | 2015年前期 | 学生による最終プレゼンテーションにおいて、学生は発表者、聴衆、座長の3役をつとめる。わたしは、学生間の質疑応答を活発化させるため、補助教材として（発表プログラムがある一般的な研究発表会において頻繁に用いられる）フレーズ集「Useful Phrases in a Meeting」（全2頁）を作成・配布した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 前任校での英語を手段とする教育FD講習参加合同報告会での発表 | 2016年12月 | 同報告会では、英語力向上および英語を手段とする講義方法の習得を目的とした工学研究科内での2種類のFDプログラムについて、各プログラムへの参加者が”各自の経験と今後の「英語を手段とする教育」に対する個人的提言”というお題の下で発表し、それに基づき今後の英語による教育のあり方についてパネルディスカッションが行われた。わたしはスーパーグローバルコース化学系ユニットによるFDプログラムにより、2016年10月に2週間、米国UC Davisに派遣していただいたことで発表を行った。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 特になし | | |

Ⅱ　研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| 該当なし | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| Heterogeneous-surface-mediated crystallization control | 共著 | 2016年3月 | NPG Asia Materials<br>Vol. 8 | Shifeng Zhou, Binbin Zheng, Yasuhiko Shimotsuma, Yunhao Lu, Qiangbing Guo, Masayuki Nishi, Masahiro Shimizu, Kiyotaka Miura, Kazuyuki Hirao, and Jianrong Qiu | e245 1-7 |
| Silver Growth on AFM Tip Apexes from Silver Nitrate Solutions Triggered by Focused-Ion-Beam Irradiation | 共著 | 2016年6月 | MRS Advances<br>Vol.1 | Masayuki Nishi*, Daisuke Teranishi, Hiroki Itasaka, Masahiro Shimizu, and Kazuyuki Hirao | 1865-1869 |
| Soret coefficients of alkali oxides in alkali borate glass melts | 共著 | 2016年7月 | Journal of the Ceramic Society of Japan<br>Vol. 124 | Masahiro Shimizu, Daisuke Hanakawa, Masayuki Nishi, Kohji Nagashima, Visbal Heidy, Masaaki Sakakura, Yasuhiko Shimotsuma, Kiyotaka Miura, and Kazuyuki Hirao | 774-776 |
| Growth of nanogold at interfaces between locally induced naked silicon surfaces and pure HAuCl4 solutions | 共著 | 2016年10月 | Journal of The Electrochemical Society<br>Vol. 163 | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi*, Masahiro Shimizu, and Kazuyuki Hirao | D743-D746 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Molecular dynamics simulation of the Soret effect in a $CaSiO_3$ glass melt | 共著 | 2017年3月 | Journal of the Ceramic Society of Japan<br>Vol. 125 | Masahiro Shimizu, Hiroshi Kato, Masayuki Nishi, Daisuke Hanakawa, Kohji Nagashima, Heidy Visbal, Hiroki Itasaka, Masaaki Sakakura, Yasuhiko Shimotsuma, Kiyotaka Miura, and Kazuyuki Hirao | 180–184 |
| Characterization of $BaTiO_3$ nanocubes assembled into high | 共著 | 2018年5月 | Applied Physics Letters<br>Vol. 112 | Hiroki Itasaka, Ken-ichi Mimura, Masayuki Nishi, and Kazumi Kato | 212901<br>(5 pages) |
| Focused-ion-beam-enabled electroless growth of gold nanoparticles on silicon | 単著 | 2018年8月 | Journal of the Ceramic Society of Japan,<br>Vol. 126 | | 614–624 |
| Role of partial molar enthalpy of oxides on Soret effect in high-temperature $CaO$-$SiO_2$ melts | 共著 | 2018年10月 | Scientific Reports,<br>Vol. 8 | Masahiro Shimizu, Jun Matsuoka, Hiroshi Kato, Takeyuki Kato, Masayuki Nishi, Heidy Visbal, Kohji Nagashima, Masaaki Sakakura, Yasuhiko Shimotsuma, Hiroki Itasaka, Kazuyuki Hirao, and Kiyotaka Miura | 15489<br>(9 pages) |
| Nanoscale Raman imaging with nanogold-topped AFM probes fabricated by area-selective electroless deposition | 共著 | 2018年10月 | Journal of The Electrochemical Society,<br>Vol. 165 | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi*, Masahiro Shimizu, Yoshito Okuno, Shinsuke Kashiwagi, Nobuyuki Naka, and Kazuyuki Hirao | D711–<br>D715 |
| Soret coefficient of a sodium borate melt: Experiment with a | 共著 | 2018年12月 | Journal of the Ceramic Society of Japan,<br>Vol. 126 | Masahiro Shimizu, Shohei Hosoya, Takeyuki Kato, Jun Matsuoka, Hiroshi Kato, Masayuki Nishi, Kazuyuki Hirao, Yasuhiko Shimotsuma, and Kiyotaka Miura | 997–1004 |
| Substitutional reaction in Si-O network of molecular dynamicsmodeled<br>liquid $Na_2SiO_3$: Microscopic and statistical study | 共著 | 2019年4月 | Journal of the American Ceramic Society<br>Vol. 102 | Masahiro Shimizu, Alastair N. Cormack, Liaoyuan Wang, Masayuki Nishi, Kazuyuki Hirao, Yasuhiko Shimotsuma, and Kiyotaka Miura | 4431–4439 |
| その他 (others) | | | | | |
| (招待講演)<br>シリコン–溶液界面での電子移動を利用した局所選択的金属ナノ構造成長 | 共同 | 2015年9月 | 日本セラミックス協会<br>第28回秋季シンポジウム<br>(富山大学) | 西正之、平尾一之 | |
| (依頼講演)<br>シリコン-溶液直接界面形成が誘起する金属ナノ構造成長とその応用 | 単独 | 2016年5月 | 次世代レーザープロセッシング技術研究組合公開セミナー<br>(京大桂ベンチャープラザ南館) | | |
| (招待講演, 国際会議)<br>Focused-Ion-Beam-Enabled Electroless Metal Deposition on Silicon and Fabrication of Probes for Tip-Enhanced Raman Spectroscopy | 単独 | 2018年6月 | CIMTEC2018<br>14th International Ceramics Congress<br>(Perugia, Italy) | | |
| (依頼講演)<br>私がFIBを使用した理由：シリコン表面での局所選択的な金ナノ構造成長とその体積評価 | 単独 | 2019年1月 | 京都産学公共同研究拠点<br>「知恵の輪」先端光加工プロジェクト京都レーザーテックオープンデイ<br>「集束イオンビーム・走査電子顕微鏡加工観察装置セクション」<br>(京都大学大学院工学研究科イノベーションプラザ棟) | | |
| (学会誌記事：会員頼り)<br>研究テーマとの出会い | 単独 | 2017年8月 | 材料, Vol.66(8) | | 627 |
| (ポスター発表)<br>新規無電解法によるSi基板局所表面へのAuナノ構造成長 | 共同 | 2015年7月 | 第10回日本セラミックス協会関西支部学術講演会<br>(京都大学) | 板坂浩樹、西正之、<br>清水雅弘、平尾一之 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ポスター発表, 国際会議)<br>Area-selective electroless deposition of gold on AFM tip apexes for tip-enhanced Raman spectroscopy | 共同 | 2015年9月 | Single-Molecule Microscopy and Spectroscopy: Faraday Discussion<br>(London, UK) | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi, Masahiro Shimizu, and Kazuyuki Hirao | |
| (ポスター発表, 優秀ポスター発表賞受賞)<br>集束イオンビーム照射Si表面における無電解Auナノ構造成長 | 共同 | 2015年10月 | 日本化学会<br>第5回CSJ化学フェスタ<br>(タワーホール舟堀) | 板坂浩樹、西正之、<br>清水雅弘、平尾一之 | |
| (口頭発表, 国際会議)<br>Silver Growth on AFM Tip Apexes from Silver Nitrate Solutions Triggered by Focused-Ion-Beam Irradiation | 共同 | 2015年11月 | 2015 MRS Fall Meeting & Exhibits<br>(Boston, USA) | Masayuki Nishi, Daisuke Teranishi, Hiroki Itasaka, Masahiro Shimizu, and Kazuyuki Hirao | |
| (口頭発表)<br>Cuドープ$ZnS$ナノ粒子の高濃度分散溶液における残光特性 | 共同 | 2015年11月 | 平成27年度日本材料学会<br>半導体エレクトロニクス部門委員会<br>第 2 回研究会ナノ材料部門委員会<br>第 1 回研究会 合同研究会<br>(京都大学) | 松本涼、清水雅弘、<br>西正之、Visbal Heidy、<br>永嶋浩二、平尾一之 | |
| (ポスター発表, 国際会議)<br>Development of hydrogen generating agent based on Al foil-$Ca(OH)_2$ system | 共同 | 2015年11月 | International Symposium on Eco Topia Science'15<br>(Nagoya, Japan) | Koji Nagashima, Heidy Visbal, Ryosuke Chinzaka, Masahiro Shimizu, Masayuki Nishi, and Kazuyuki Hirao | |
| (口頭発表)<br>アルカリホウ酸塩ガラス融液におけるアルカリ金属イオンのソレー係数 | 共同 | 2016年3月 | 日本セラミックス協会2016年年会<br>(早稲田大学) | 清水雅弘、花川大輔、<br>加藤寛、西正之、<br>永嶋浩二、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>SiC基板表面での局所選択的無電解Auナノ構造成長 | 共同 | 2016年3月 | 日本セラミックス協会2016年年会<br>(早稲田大学) | 板坂浩樹、西正之、<br>清水雅弘、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>ZnS:Cuナノ粒子の残光発現とCuドープ量依存性 | 共同 | 2016年3月 | 日本セラミックス協会2016年年会<br>(早稲田大学) | 松本涼、清水雅弘、谷口修太、西正之、Visbal Heidy、永嶋浩二、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>シリコンナノ探針先端への局所選択的無電解金ナノ構造成長 | 共同 | 2016年6月 | 粉体粉末冶金協会<br>平成28年度春季大会<br>(京都工芸繊維大学) | 板坂浩樹、西正之、清水雅弘、平尾一之 | |
| (口頭発表, 国際会議)<br>Area-Selective Electroless Deposition of Gold Nanostructures with Various Morphologies on Silicon Assisted by Focused Ion Beam Irradiation | 共同 | 2016年6月 | 229the ECS Meeting<br>(San Diego, USA) | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi, Masahiro Shimizu, and Kazuyuki Hirao | |
| (口頭発表, 国際会議)<br>Electroless Deposition of Nanogold at the Silicon AFM Tip Apex for Tip-enhanced Raman Spectroscopy | 共同 | 2016年9月 | NFO-14, The 14th International Conference on Near-field Optics, Nanophotonics, and Related Techniques<br>(Hamamatsu, Japan) | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi, Masahiro Shimizu, Yoshito Okuno, Nobuyuki Naka, and K. Hirao | |
| (ポスター発表, 国際会議, Best Poster Award受賞)<br>AFM-probe apex-selective electroless deposition of gold and nano-Raman imaging | 共同 | 2016年9月 | The Royal Society of Chemistry-Tokyo International Conference 2016<br>(Makuhari, Japan) | Hiroki Itasaka, Masayuki Nishi, Masahiro Shimizu, Yoshito Okuno, Shinsuke Kashiwagi, Nobuyuki Naka, and K. Hirao | |
| (口頭発表)<br>金ナノ構造成長から考察するシリコン－塩化金酸水溶液直接界面での電子移動 | 共同 | 2016年9月 | 日本セラミックス協会<br>第29回秋季シンポジウム<br>(広島大学) | 西正之、奥田晃士、<br>板坂浩樹、清水雅弘、<br>平尾一之 | |
| (ポスター発表)<br>アルカリゲルマン酸塩ガラス融液におけるアルカリ金属酸化物のソレー係数 | 共同 | 2016年9月 | 日本セラミックス協会<br>第29回秋季シンポジウム<br>(広島大学) | 加藤寛、清水雅弘、西正之、永嶋浩二、Visbal Heidy、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>アルカリゲルマン酸塩ガラス融液におけるアルカリ金属酸化物のソレー係数 | 共同 | 2017年3月 | 日本セラミックス協会<br>2017年年会<br>(日本大学) | 清水雅弘、加藤寛、<br>加藤毅之、西正之、<br>永嶋浩二、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>金ナノ構造の局所選択的無電解成長によるナノラマン分光探針の作製 | 共同 | 2017年3月 | 日本セラミックス協会<br>2017年年会<br>(日本大学) | 板坂浩樹、西正之、清水雅弘、奥野 義人、柏木 伸介、中 庸行、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>$CaO-SiO_2$融液におけるソレー効果の分子動力学計算 | 共同 | 2017年7月 | 第12回日本セラミックス協会<br>関西支部 学術講演会<br>(京都大学) | 清水雅弘、加藤寛、<br>加藤毅之、松岡純、<br>西正之、平尾一之 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (ポスター発表)<br>ナトリウムホウ酸塩ガラス融液における酸化ナトリウムのソレー効果 | 共同 | 2017年7月 | 第12回日本セラミックス協会<br>関西支部 学術講演会<br>(京都大学) | 加藤毅之、清水雅弘、<br>松岡純、加藤寛、<br>西正之、平尾一之 | |
| (ポスター発表)<br>アルカリゲルマン酸塩ガラス融液におけるアルカリ金属酸化物のソレー効果 | 共同 | 2017年7月 | 第12回日本セラミックス協会<br>関西支部 学術講演会<br>(京都大学) | 加藤寛、清水雅弘、<br>松岡純、加藤毅之、<br>西正之、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>シリコン-塩化金酸水溶液界面での金成長機構: ToF-SIMSによるシリコン表面分析 | 共同 | 2017年9月 | 日本セラミックス協会<br>第30回秋季シンポジウム<br>(神戸大学) | 則松和良、西正之、<br>板坂浩樹、<br>ビスバル ヘイディ、<br>清水雅弘、平尾一之 | |
| (口頭発表)<br>ナノラマン分光によるBaTiO3ナノキューブの精密構造解析 | 共同 | 2018年3月 | 第65回応用物理学会<br>春季学術講演会<br>(早稲田大学) | 板坂浩樹、三村憲一、<br>西正之、加藤一実 | |
| (口頭発表)<br>Nano-Scale Raman Investigation of Monolayered $BaTiO_3$ Nanocubes | 共同 | 2018年5月 | 2018 ISAF-FMA-AMF-AMEC-PFM Joint Conference<br>(IFAAP2018)<br>(Hiroshima, Japan) | Hiroki Itasaka, Ken-ichi Mimura, Masayuki Nishi, Kazumi Kato | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social

| | |
|---|---|
| 特定セッションオーガナイザー(連絡担当) | 第29回日本セラミックス協会秋季シンポジウム「次世代を切り拓くハイブリッドマテリアル」2016年9月7～9日, 広島大学, 東広島キャンパス |
| Co-organizer | Alfred-Kyoto Satellite Event of CerSJ-GOMD Joint Symposium on Glass Science and Technologies, 2016年11月16日, Kyoto University, Kyoto, Japan |
| Local Organizing Committee | CerSJ-GOMD Joint Symposium on Glass Science and Technologies co-located with The 57th Meeting on Glass and Photonic Materials & The 12th Symposium of Glass Industry Conferences of Japan, 2016年11月13～15日, Kyoto University, Kyoto, Japan |
| 特定セッションオーガナイザー<br>(代表) | 第30回日本セラミックス協会秋季シンポジウム「表面・界面に着目したハイブリッド材料開発」および(合同セッションオーガナイザー)<br>「マテリアルズサイエンスフロンティア」2017年9月19～21日, 神戸大学, 六甲台地区 |
| サテライトプログラム<br>オーガナイザー<br>(代表) | 日本セラミックス協会2018年年会サテライトプログラム07「若手研究者が切り拓くハイブリッド材料」2018年3月15日,<br>東北大学, 川内北キャンパス |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

無機材料化学

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名　准教授 | 氏名　松本 龍介 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 検討会を通した研究進歩状況の自己把握と目標設定 | 2006年4月～<br>現在に至る | 研究指導の一環として週1回の検討会と年2回の総括検討会を実施している．前者は学生が各週の研究実施内容を報告議論するためのものであり，後者は半年の大きな進捗と方向性を再確認するものである．この両者の実施によって，細かな研究指導を行いつつ，学生は自主的に自己の状況を把握し，目標設定が行えている． |
| 英語による専門書の読解と反転授業による理解促進 | 2006年4月～<br>2016年3月 | 研究室において英語の専門書（主に一般力学，材料力学，固体力学関係）の輪講を毎週開催した．この輪講では，担当部分を決めて予め予習をさせ，反転授業形式で解説を行わせるようにした．これによって，内容の理解が進んだのと同時に，発表や説明の技術が向上した． |
| 機械材料に関する実験科目におけるティーチング・アシスタントの活用 | 2007年4月～<br>2016年3月 | 実験テーマ「金属材料の微視組織と機械的特性」（京都大学工学部物理工学科機械システム学コース　機械システム実験）を担当した．このテーマでは試験片の準備において研磨などを行う必要があるが，学生によって出来のバラツキが大きく，コツをなかなか掴めない学生がいた．そこで，研究において同じ装置を使っている学生をティーチング・アシスタントとして使うことで，技術的なことやノウハウをしっかりと教えられるようになった．これによって，学生は本来の学習項目により多くの時間を費やせるようになり，理解が進んだ． |
| 学生実験における原子シミュレーション結果の積極利用による理解促進 | 2007年4月～<br>2016年3月 | 鉄鋼材料の組織と力学特性の関連性を理解させるため実験テーマ「金属材料の微視組織と機械的特性」（京都大学工学部物理工学科機械システム学コース　機械システム実験）を担当した．金属材料の力学特性に関する説明をする際，ナノスケールの格子欠陥の運動挙動や相互作用について話す必要があるが，格子欠陥の運動を受講生に見せることは困難である．そこで，専門分野である原子シミュレーションによって格子欠陥が動く様子をアニメーションで見せることで，具体的なイメージを持たせることに成功し，理解促進につながった． |
| セミナー科目におけるディスカッションの導入 | 2010年4月～<br>2017年9月 | 原子系の動力学セミナー（京都大学大学院工学研究科，発展科目，博士前期／後期課程配当，前期，Major科目）を分担した．本セミナーにおいては，原子シミュレーションによって解決できる問題を考えさせ，レポートとして提出させていたが，学生が発案した面白い着眼点を紹介する時間が不十分であった．そこで，小グループに分かれてレポート内容を説明してディスカッションを行う時間を設けることで，新たな利用方法や課題の発見を促した．これによって，原子系のシミュレーションの応用について広く学ばせることができた． |
| 課題解決演習におけるチームワークとプレゼンテーションの活用 | 2015年9月～<br>2019年8月 | GLセミナーⅠ（企業調査研究）（京都大学工学部共通科目，2回生以上配当，通年集中，選択1単位）およびGLセミナーⅡ（課題解決演習）（工学部共通科目，2回生以上配当，後期集中，選択1単位）において，少人数によるチームワークとプレゼンテーションを果した．学部生の早い段階から，グループとしての仕事の理解や説明能力の向上を行うことができた． |
| リレー講義における初回ガイダンスの導入による学習動機付け | 2016年4月，<br>2016年10月 | 先端マテリアルサイエンス通論（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，春季1.5単位または前期2単位），および，現代科学技術特論（英語科目）（京都大学工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，秋季1.5単位または後期2単位）の取りまとめを担当したが，リレー講義であるため講義間の関連性に乏しく授業アンケートにおいても，「目的を持って学習に取り組んだか」「系統だった講義が行われたか」といった項目の評価点が非常に低かった．そこで，講義の初回にガイダンスの時間を設け，講義全体の目的を説明した上で，各講義回の概要を説明し，関連について説明するようにした．これによって，目的意識を持って各回の講義を受講する学生が増えた． |
| 担当者間での講義資料の共有によるリレー講義の関連性強化 | 2016年4月～<br>2018年9月 | 「工学倫理」（京都大学工学部共通科目，4年次配当，前期，選択2単位）において，各週の講義の関連性強化を行なった．本講義は講義担当者が毎週変わるリレータイプの講義であるが，このような講義タイプでは講義担当者間の調整が不十分であると前後の講義との関係性が曖昧になったり，他の講義回との内容重複が発生しがちである．そこで，学内で提供されているWebベースの教育支援ツールPandAを利用することで各回の講義資料を共有する環境を整え，担当者が他の担当者との内容調整を積極的に行えるようにした． |

| | | |
|---|---|---|
| 講義における教授内容の拡充 | 2016年12月～<br>2017年3月 | エンジニリングプロジェクトマネジメントⅠ（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士後期課程配当，前期，選択1単位）の単位数を増やし，エンジニリングプロジェクトマネジメント（英語科目）（工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，前期，選択2単位）とした．これによって，近年重要性が増しているリスクマネジメントや環境負荷分析に関しての教授内容を拡充することができ，受講学生はプロジェクトマネジメントについてより広く学ぶことができるようになった．これに伴って受講生も飛躍的に増加した． |
| ブレーンストーミングを通した課題発見と協調作業の意義発見 | 2017年4月～<br>2019年8月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，半期，選択2単位）において，プロジェクトのリスクに関する講義を行ってきた．プロジェクトにおいて隠れたリスクを発見するためには，一人の視点では不十分である．発案のプロジェクトに関するリスクをまずは各自で考えさせ，その後に専門の異なるメンバーによる少人数グループに分かれてのリスク洗い出しのブレーンストーミングとディスカッションを実施させた．これによって，学生は隠れたリスクを発見するとともに，グループワークの方法，他者との協調とその有効性を理解した．授業アンケートにおいてもリスクについて深く学べたとの意見が見られた． |
| 日本人学生と留学生の混成チームによるプロジェクト立案とコミュニケーション力の強化 | 2017年10月～<br>2019年3月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント演習（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／博士後期課程配当，後期，選択2単位）において，積極的に日本人学生と留学生の混成チームを作成して，プロジェクトの立案をさせた．これによって授業外でのグループ課題においても英語でコミュニケーションを行う必要が生じ，科目の開始時に比べて英語によるコミュニケーション力が大きく伸びた． |
| 演習科目における内容の拡充 | 2017年12月～<br>2018年3月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント演習（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／博士後期課程配当，後期，選択1単位）の内容拡充を提案し認められた．エンジニリングプロジェクトマネジメントは前年度に2単位としたが，それに伴う演習科目である本科目は1単位のままであったため，時間が不十分であった．そこで，内容を再編成，拡充して2単位とした．これによって，十分な演習を行えるようになり，理解促進につながっている． |
| リレー講義のテーマ細分化による理解深化 | 2017年12月～<br>2018年4月 | 先端マテリアルサイエンス通論（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，春季1.5単位または前期2単位），および，現代科学技術特論（英語科目）（工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，秋季1.5単位または後期2単位）の取りまとめを担当した．これらは，様々な専攻から推薦された担当者によって専門分野の話題提供がされるリレー講義であったが，内容があまりにも多岐にわたり，英語講義ということもあり，学生の理解は不十分であった．そこで，4コマで構成される小テーマに分割し，それぞれを0.5単位として独立して受講できる形にした．これによって，専門分野の周辺テーマや興味のあるテーマを選択的に履修できるようになり，無理なく視野を広げることが可能となった． |
| アクティブラーニングの積極導入 | 2018年1月～<br>2018年12月 | 先端マテリアルサイエンス通論（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，春季1.5単位または前期2単位），および，現代科学技術特論（英語科目）（工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，選択，秋季1.5単位または後期2単位）のとりまとめ担当となった際に，クリッカーを用いた双方向授業の導入や簡易的な実験の実施を呼びかけ，さらに受講生が適正人数になるように履修制限を行うようにした．従来の一方向の授業に比べて能動的な学生が増え，また，ファカルティ・デベロップメントとしても役立っている． |
| 学外講師を積極利用した実問題の理解と学習動機付け | 2018年4月～<br>2019年8月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，半期，選択2単位）の主担当を担当した際，学外講師を増やすことで，プロジェクトにおける実問題の理解と学習動機付けを図った．エンジニアリングプロジェクトでは，スケジューリング方法やコスト計算に関する座学を通した学習だけでは不十分であり，立場の異なる様々な関係者との調整や交渉，海外での生活についても知る必要がある．そこで，プロジェクトマネジャーとして海外における大型ダムの建設に関わった経験のあるエンジニアや，交渉を専門に行うネゴシエーターを学外講師として招き講義を分担するように変更した．これによって学習のモチベーションが飛躍的に上がった． |

| | | |
|---|---|---|
| レポートのメールによる回収とフィードバックの高速化による理解促進 | 2018年4月～<br>2019年8月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント演習（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，後期，選択2単位）を担当した際，メールによる課題回収を行うことでフィードバックを高速化した．講義においてレポートを出題した場合，次の講義を締切などとすると，フィードバックはそのさらに1週間後となってしまう．そこで，講義日の朝を締切としてメールでレポートを回収し，早急に内容をチェックして講義時間にフィードバックをするようにした．これによって，学生は考えた内容が新鮮な間にフィードバックを受けられるようになり，理解の定着が促進された． |
| 演習を通したチームワーキング力の醸成 | 2018年4月～<br>2019年8月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント演習（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／博士後期課程配当，後期，選択2単位）において，グループワークを通したプロジェクトプランの策定を果している．本演習によってチームワーキング力を醸成するとともに，将来大型プロジェクトを先導するリーダーに不可欠な構想力，問題設定と課題解決能力身につけさせている．受講生は，興味を持って積極的に演習に取り組んでいる． |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| リスクマネジメントに関する教材用スライドの作成 | 2017年4月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，半期，選択2単位）においてリスクマネジメントに関する講義を行う際，体系化された適切な教科書がなかったため，複数の書籍を取りまとめて教材用スライドを作成した．アンケートにおいて，スライドが分かりやすかったとの感想が得られた． |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 工学部教育シンポジウムへの出席 | 2006年11月～<br>2018年11月 | 京都大学に採用されて以降，年に1回工学部主催で開催される工学部教育シンポジウムにほぼ欠かすことなく出席している．本シンポジウムは，ファカルティ・デベロップメントのためのシンポジウムであり，英語教育やアクティブラーニング，教授方法といった重要なトピックについて継続的に学んでいる． |
| 学位（修士）論文審査実績（大阪大学の外部副査） | 2016年2月 | 大阪大学大学院工学研究科知能・機能創成工学専攻マイクロダイナミクス研究室に所属する博士前期課程学生の執筆した修士論文に対して学外の専門家として依頼を受け，副査を行なった． |
| 学位（学士）論文指導実績 | 2016年4月～<br>2019年3月 | 京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻（材料強度物理学研究室）において，指導教員として6名の学部生の研究指導を行い，卒業論文作成指導を行なった． |
| 新入生ガイダンスを通した導入教育の分担 | 2016年4月～<br>2019年4月 | 学部1回生の入学時に実施する工学部新入生ガイダンスの世話役を分担した．本ガイダンスにおいては，工学序論の講義に加えて，生活上の注意やメンタルヘルスに関する講義等も行なっており，大学での導入教育に貢献した． |
| オープンハウスの実施 | 2017年3月～<br>2019年3月 | 大学院新入生を対象とした工学基盤教育研究センターのオープンハウスを分担した．実施日は入学手続きの日とし，手続きを終えた学生をセンター内に設置したブースに誘導して，センターの取り組みと開講科目の説明を行なった．本取り組みを始めてから，センターの開講科目が周知され，受講者数が大幅に増えた． |
| 学位（修士）論文指導実績 | 2017年4月～<br>現在に至る | 京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻（材料強度物理学研究室）において，4名の博士前期課程学生の研究指導を行い，修士論文作成指導（主査）を行った．また，現在も非常勤講師として3名の研究指導を行っている． |
| 英語課外実習QUESTの世話分担 | 2017年4月～<br>2019年8月 | 京都大学大学院工学研究科において，英語課外実習QUESTの世話分担を行なった．QUESTは工学研究科が主催し，民間の英会話学校を学内に呼んでスクールを開講しているものであり，受講した学生からは研究の合間に英語の勉強ができ非常に良いとの評価を得ている． |
| 京都大学学生による授業評価アンケートにおける評価 | 2018年10月 | エンジニリングプロジェクトマネジメント（英語科目）（京都大学大学院工学研究科共通科目，博士前期／後期課程配当，半期，選択2単位）における授業評価アンケートにおいて，「総合的にみて、自分にとって意味のある授業であった」かの質問に対し手，無回答を除く全ての学生が，「あてはまる」「ややあてはまる」を選択している． |
| 英語による教授法講習会の受講 | 2019年3月 | ブリティッシュ・カウンシルが提供するAcademic Teaching Excellence (ATE): English as Medium of Instruction (EMI)を受講し，英語を母国語としない大学教員が，いかに英語を媒体として専門分野を教えるのかを学んだ． |

Ⅱ 研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| LPSO型マグネシウム合金はなぜ強いのか？ | 共著 | 2018年2月 | LPSO型マグネシウム合金の材料科学 実用段階に入った日本発の新合金, 河村能人 編著, 日経BPコンサルティング, 第4章. | 東田賢二・萩原幸司・藤原雅美・大橋鉄也・志澤一之・松本龍介・中谷彰宏・中島英治 | pp. 133-188 |
| Atomistic simulations of hydrogen effects on lattice defects in alpha iron | 共著 | 2019年4月 | Handbook of Mechanics of Materials, Edited by Chun-Hway Hsueh, Siegfried Schmauder, Chuin-Shan Chen, Krishan K. Chawla, Nikhilesh Chawla, Weiqiu Chen, Yutaka Kagawa, Published from Springer, 1st ed., Chapter 10. | S. Taketomi and R. Matsumoto | pp. 283-300 |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| Deformation analyses of the long-period stacking ordered phase using molecular dynamics simulation: Kink deformation under compression and kink-boundary migration under tensile strain | 共著 | 2015年7月 | Materials Transactions, Vol. 56, No. 7 | R. Matsumoto and M. Uranagase | pp. 957-962 |
| In-situ observation of the formation behavior of the deformation kink bands in Zn single crystal and LPSO phase | 共著 | 2015年7月 | Materials Transactions, Vol. 56, No. 7 | K. Hagihara, M. Honnnami, R. Matsumoto, Y. Fukusumi, H. Izuno, M. Yamasaki, T. Okamoto, T. Nakano | pp. 943-951 |
| Effects of normal stresses on the homogeneous nucleation of a basal dislocation in magnesium | 共著 | 2015年11月 | Computational Materials Science, Vol. 113 | M. Uranagase and R. Matsumoto | pp. 143-147 |
| Development of deformation measurement system consisting of high-speed camera and digital image correlation, and its application to the measurement of large inhomogeneous deformations around the crack tip | 共著 | 2016年1月 | Experimental Techniques, Vol. 40, No. 1 | R. Matsumoto, M. Kubota and N. Miyazaki | pp. 91-100 |
| 楕円柱形Mg単結晶の自由表面からの底面転位生成 | 共著 | 2016年2月 | 材料, 65巻, 2号 | 浦長瀬正幸・松本龍介 | pp. 135-140 |
| Tension-compression asymmetry in uniaxial deformation of a magnesium bicrystal with [1-100] symmetric tilt grain boundary | 共著 | 2016年3月 | Computational Materials Science, Vol. 118 | M. Uranagase and R. Matsumoto | pp. 124-132 |
| 熱力学積分法を用いた活性化自由エネルギーの評価: マグネシウム単結晶における転位生成の温度・応力依存性 | 共著 | 2017年3月 | 分子シミュレーション研究会会誌 “アンサンブル”, 19巻, 3号 | 松本龍介・浦長瀬正幸 | pp. 147-150 |
| Molecular statics simulation of the effect of hydrogen concentration on {112}<111> edge dislocation mobility in alpha iron | 共著 | 2017年11月 | ISIJ International, Vol. 57, No. 11 | S. Taketomi and R. Matsumoto | pp. 2058-2064 |
| Temperature dependence of vacancy concentration and void growth mechanism in Al with constant hydrogen concentration: A first-principles study | 共著 | 2019年7月 | Engineering Fracture Mechanics, Vol. 216 | P. Liu and R. Matsumoto | No. 106508 |
| Molecular dynamics simulation of surface-adsorbed-hydrogen-induced dislocation motion in a thin film | 共著 | 2020年1月 | Computational Materials Science, Vol. 171 | R. Matsumoto and S. Taketomi | No. 109240 |
| マルテンサイト鋼における水素固溶度と拡散係数の計算力学的評価 | 共著 | 2020年2月 | 材料, 69巻, 2号 | 福田一仁・東條明裕・松本龍介 | 未定 |
| その他 | | | | | |
| (書評) 密度汎関数理論入門 理論とその応用 ー佐々木泰造・末原 茂 共訳ー | 単著 | 2015年8月 | 材料, 64巻, 8号 | | p. 684 |
| (受賞) 論文奨励賞 | 筆頭 | 2015年5月 | 公益社団法人日本材料学会 | | |
| (受賞) Best Poster Award | 筆頭 | 2019年6月 | 15th International Conference on Diffusion in Solids and Liquids (DSL2019) | | |
| (指導学生の受賞) 優秀学生講演賞 | 連名 | 2017年5月 | 日本材料学会(第2回マルチスケール材料力学シンポジウム) | Pengyu Liu・松本 龍介 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| （科研費）<br>新学術領域研究（研究領域提案型，計画研究）「マルチスケール計算力学によるLPSO構造の変形と力学特性の解明」 | 分担 | 2011年度～<br>2015年度 | | | |
| （科研費）<br>基盤研究（C）「水素環境における単純組成鋼中の格子欠陥挙動の統計熱力学的状態規定に基づく解析」 | 代表 | 2016年度～<br>2018年度 | | | |
| （科研費）<br>基盤研究（B）「トランススケール解析による低合金鋼の水素−空孔−塑性ひずみ関連破壊現象の解明」 | 代表 | 2019年度～<br>2022年度 | | | |
| （科研費）<br>挑戦的研究（萌芽）「大域的反応経路探索法の格子欠陥の運動挙動解析への適用と実時間問題への展開」 | 代表 | 2019年度～<br>2021年度 | | | |
| （科研費）<br>基盤研究（C）「計算科学手法を用いた空孔型欠陥の定量的評価に基づく水素脆化モデルの検証」 | 分担 | 2019年度～<br>2021年度 | | | |
| （研究助成）<br>日本鉄鋼協会「水素脆化の基本要因と特性評価研究会」 研究費補助金 | 代表 | 2016年度 | | | |
| （研究助成）<br>熊本大学先進マグネシウム国際研究センター<br>MRC共同利用研究助成 | 代表 | 2018年度 | | | |
| （共同研究）<br>本田技術研究所「計算科学による遅れ破壊の研究」 | 代表 | 2018年度～<br>2019年度 | | | |
| （共同研究）<br>本田技術研究所「第一原理計算による遅れ破壊の研究」 | 代表 | 2019年度 | | | |
| （共同研究）<br>日本鉄鋼協会（鉄鋼協会研究プロジェクト）「高強度鋼の水素脆化における潜伏期から破壊までの機構解明」 | 分担<br>（グループリーダー） | 2019年度～<br>2021年度 | | | |
| （招待講演）<br>Atomistic study of kink deformation mechanisms of the long−period stacking−ordered phase | 共同 | 2015年6月 | The International Conference <<Advanced Materials Week−2015>> (AMW2015) (Russian−Japanese Workshop on the structure and mechanisms of plasticity of advanced magnesium alloys and related materials), Togliatti−St.Petersburg, Russia. | R. Matsumoto and M. Uranagase | |
| （招待講演）<br>水素存在下における変形・脆化機構（原子論） | 単独 | 2015年10月 | 日本物理学会　格子欠陥フォーラム「材料の強化と劣化のサイエンス」（併設：新学術領域研究「シンクロ型LPSO構造の材料科学」第6回若手交流会・特別講演会）（大阪） | | |
| （招待講演）<br>第一原理計算を用いたアルミニウム中の水素存在状態評価 | 単独 | 2016年3月 | 軽金属学会<br>「水素と力学特性研究部会27年度第2回研究会」（東京） | | |
| （招待講演）<br>Atomistic study of hydrogen effect on various lattice defects in alpha iron | 共同 | 2016年12月 | Russia−Japan Workshop on Advanced Materials MRC International Symposium, Kyoto, Japan. | R. Matsumoto and S. Taketomi | |
| （招待講演）<br>原子モデル解析によるLPSO構造の変形と力学特性の研究 | 共同 | 2017年8月 | 金属塑性の理解とモデリング<br>～大橋鉄也先生記念シンポジウム～（盛岡市） | 松本龍介・浦長瀬正幸 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| （招待講演）<br>LPSO構造のキンク変形とその前駆機構に関する原子モデル解析 | 単独 | 2017年12月 | 第68回高性能Mg合金創成加工研究会講演会「マグネシウムの塑性挙動を対象とする実験力学と計算力学」（熊本） | | |
| （招待講演）<br>Atomistic study of hydrogen effects on stability and mobility of vacancy and vacancy-clusters | 単独 | 2018年2月 | HYDROGENIUS Fatigue and Fracture, I2CNER & HYDROMATE Joint Research Symposium, Fukuoka, Japan. | | |
| （招待講演）<br>格子欠陥エネルギーに水素の影響を考慮した原子間ポテンシャルの作成とそれを用いた変形解析 | 単独 | 2018年11月 | 産業技術総合研究所ー九州大学水素材料強度ラボラトリ Hydromate　第3回ラボ講演会（福岡） | | |
| （研究報告会）<br>純鉄中の格子欠陥と水素の相互作用挙動と，添加元素によるその変化 | 単独 | 2015年8月 | 2015年水素研究会第2回会合（東京） | | |
| （研究報告会）<br>金属薄膜に吸着した水素原子が誘起する転位運動の分子動力学法による検討 | 共同 | 2015年9月 | 日本鉄鋼協会（第170回秋季講演大会，「水素脆化の基本要因と特性評価研究会」・「水素脆化の解析と評価」フォーラム共催シンポジウム「水素脆化の基本要因，解析と評価」（福岡） | 松本龍介・岸本直樹・浦長瀬正幸 | |
| （研究報告会）<br>原子モデルを用いたキンク変形素過程の活性化自由エネルギー評価 | 共同 | 2016年3月 | 科研費新学術領域研究「シンクロ型LPSO構造の材料科学」，平成27年度成果報告合宿研究会（軽井沢） | 松本龍介・浦長瀬正幸 | |
| （研究報告会）<br>水素環境での転位のモビリティー：水素濃度・温度・変形速度の寄与 | 共同 | 2016年6月 | 2016年度「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会第1回会合（東京） | 松本龍介・武富紳也 | |
| （研究報告会）<br>水素環境における単空孔／複空孔の安定性と拡散挙動 | 単独 | 2016年9月 | 2016年度「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会第2回会合（東京） | | |
| （研究報告会）<br>水素環境における鉄中の単空孔／複空孔の安定性と拡散挙動に関する基礎検討 | 単独 | 2016年9月 | 日本鉄鋼協会（第172回秋季講演大会，「水素脆性の基本要因と特性評価研究会　中間報告会」シンポジウム）（大阪） | | |
| （研究報告会）<br>原子シミュレーションによるすべり面破壊の検討 | 共同 | 2017年8月 | 2017年度「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会第2回会合（東京） | 武富紳也・松本龍介 | |
| （研究報告会）<br>純鉄における空孔性欠陥からの水素脱離曲線の原子モデル評価と脆化因子欠陥の同定 | 共同 | 2017年9月 | 日本鉄鋼協会水素（第174回秋季講演大会），「水素脆性の基本要因と特性評価研究会　中間報告会」シンポジウム（札幌） | 松本龍介・久保田峻也・千葉真紀 | |
| （研究報告会）<br>平衡水素濃度を想定したα鉄中の転位速度に関する原子シミュレーション | 共同 | 2017年9月 | 日本鉄鋼協会水素（第174回秋季講演大会），「水素脆性の基本要因と特性評価研究会　中間報告会」シンポジウム（札幌） | 武富紳也・松本龍介・萩原世也 | |
| （研究報告会）<br>純鉄における空孔クラスターの形成と解離条件 | 共同 | 2018年3月 | 2017年度「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会第4回会合（東京） | 松本龍介・佐野千畝・久保田峻也・武富紳也 | |
| （研究報告会）<br>純鉄における非等方応力下での水素拡散挙動 | 共同 | 2018年3月 | 2017年度「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会第4回会合（東京） | 松本龍介・長瀬周輝・武富紳也 | |
| （研究報告会）<br>純鉄における空孔クラスターの形成・解離と脆化との関係 | 共同 | 2018年9月 | 日本鉄鋼協会「水素脆化の基本要因と特性評価」研究会最終報告会（東京） | 松本龍介・佐野千畝・武富紳也 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| その他（続き） | | | | | |
| （研究成果報告書）<br>原子モデルを用いたキンク変形素過程の活性化自由エネルギー評価 | 共同 | 2016年3月 | 文部科学省科科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」「シンクロ型LPSO構造の材料科学」，平成27年度　研究成果報告書 | 松本龍介・浦長瀬正幸 | |
| （研究成果報告書）<br>マグネシウム双結晶の圧縮変形の分子動力学解析 | 共同 | 2016年3月 | 文部科学省科科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」「シンクロ型LPSO構造の材料科学」，平成27年度　研究成果報告書 | 浦長瀬正幸・松本龍介 | |
| （パネルディスカッション）<br>Hydrogen embrittlement research in Japan: Current perspective and future trend | | 2017年6月 | 22nd European Conference on Fracture (ICF22) | | |
| （国際会議発表）<br>Atomistic analyses of nucleation and propagation behavior of ridge shaped kink band in long-period-stacking-ordered phase | 共同 | 2015年5月 | ICM12, Karlsruhe, Germany. | R. Matsumoto and M. Uranagase | pp. 368 |
| （国際会議発表）<br>Quantitative evaluation of dislocation nucleation as thermal activation process via atomistic simulations | 共同 | 2015年5月 | ICM12, Karlsruhe, Germany. | M. Uranagase and R. Matsumoto | pp. 371 |
| （国際会議発表）<br>Quantitative study on dislocation nucleation as an elementary process of kink band formation | 共同 | 2015年10月 | 10th International Conference on Magnesium Alloys and Their Applications (Mg2015), Jeju, Korea. | M. Uranagase and R. Matsumoto | pp. 341-344 |
| （国際会議発表）<br>Molecular dynamics study of the influence of chemical order on the deformation behavior of synchronized-LPSO phase | 共同 | 2015年10月 | 10th International Conference on Magnesium Alloys and Their Applications (Mg2015), Jeju, Korea. | R. Matsumoto, Y. Nishioka and M. Uranagase | EO-5-1314 |
| （国際会議発表）<br>Deformation behavior of synchronized-LPSO phase: Molecular dynamics analyses of the chemical order effect | 共同 | 2016年12月 | LPSO2016, Kyoto, Japan. | R. Matsumoto, Y. Nishioka and M. Uranagase | POS22 |
| （国際会議発表）<br>Dislocation motion induced by hydrogen adsorption on thin film: A molecular dynamics study | 共同 | 2017年6月 | 14th International Conference on Fracture (ICF14), Rhodes, Greece. | R. Matsumoto, N. Kishimoto and S.Taketomi | USB Memory (2 pages) |
| （国際会議発表）<br>Application of dislocation dynamics to hydrogen embrittlement in alpha iron based on atomistic calculations | 共同 | 2017年6月 | 14th International Conference on Fracture (ICF14), Rhodes, Greece. | S.Taketomi, K. Katayama, R. Matsumoto and S.Hagihara | USB Memory (2 pages) |
| （国際会議発表）<br>Numerical simulation of hydrogen embrittlement in iron | 共同 | 2018年8月 | 22nd European Conference on Fracture (ECF22), Beograd, Republic of Serbia. | S.Taketomi and R. Matsumoto | USB Memory (2 pages) |
| （国際会議発表）<br>Molecular dynamics study on the influence of nonhydrostatic stress on the diffusion behavior of hydrogen in bcc-Fe | 共同 | 2018年8月 | 22nd European Conference on Fracture (ECF22), Beograd, Republic of Serbia. | R. Matsumoto, S. Nagase and S. Taketomi | USB Memory (2 pages) |
| （国際会議発表）<br>Atomistic study of nonhydrostatic stress effects on the hydrogen diffusion in Fe | 共同 | 2019年6月 | International Conference on Diffusion in Solids and Liquids (DSL2019), Athens, Greece. | R. Matsumoto, S. Nagase, S. Taketomi | USB Memory (1 pages) |
| （国際会議発表）<br>Void growth conditions in aluminum with hydrogen | 共同 | 2019年8月 | The fourth International Symposium on Atomistic and Multiscale Modeling of Mechanics and Multiphysics (ISAM4-2019), Erlangen, Germany. | R. Matsumoto and P. Liu | Web download (4 pages) |
| （国際会議発表）<br>Influence of hydrogen on edge dislocation motion in alpha iron and the comparison with nanoindentation tests | 共同 | 2019年8月 | The fourth International Symposium on Atomistic and Multiscale Modeling of Mechanics and Multiphysics (ISAM4-2019), Erlangen, Germany. | S. Taketomi1, T. Taniguchi, H. Yamamoto, R. Matsumoto and S. Hagihara | Web download (3 pages) |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (国内学会発表)<br>薄膜表面に吸着した水素原子が誘起する転位運動 | 共同 | 2015年5月 | 日本材料学会(第20回分子動力学シンポジウム) | 松本龍介・岸本直樹・浦長瀬正幸 | P01(4 pages) |
| (国内学会発表)<br>粒界・自由表面を有するマグネシウム結晶の一軸変形挙動 | 共同 | 2015年5月 | 日本材料学会(第20回分子動力学シンポジウム) | 浦長瀬正幸・松本龍介 | P02(2 pages) |
| (国内学会発表)<br>マグネシウム中での粒界からの転位射出についての原子シミュレーションによる検討 | 共同 | 2015年9月 | 日本金属学会(2015年秋期大会(第157回)日本金属学会講演大会) | 浦長瀬正幸・松本龍介 | S5-11<br>(1 page) |
| (国内学会発表)<br>対称傾角粒界を有するマグネシウム双結晶の一軸変形の分子動力学解析 | 共同 | 2015年5月 | 日本機械学会(M&M2015力学カンファレンス) | 浦長瀬正幸・松本龍介 | OS0123-334<br>(2 pages) |
| (国内学会発表)<br>水素濃度が規定されたAl中のブリスター成長機構に関する第一原理的評価 | 共同 | 2017年5月 | 日本材料学会(第2回マルチスケール材料力学シンポジウム) | Liu Pengyu・松本龍介 | O4(4 pages) |
| (国内学会発表)<br>α鉄中の空孔クラスターの水素トラップ量と凝集構造 | 共同 | 2018年5月 | 日本材料学会(第2回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 久保田崚也・松本龍介 | P4(2 pages) |
| (国内学会発表)<br>bcc鉄における非等方応力下での水素拡散係数の評価とモデル化 | 共同 | 2018年5月 | 日本材料学会(第3回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 長瀬周輝・松本龍介 | USB Memory |
| (国内学会発表)<br>bcc鉄における空孔−水素複合体の凝集・解離条件の第一原理計算に基づく評価 | 共同 | 2018年5月 | 日本材料学会(第3回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 佐野千畝・松本龍介 | USB Memory |
| (国内学会発表)<br>HCP-LPSO(10H)界面における柱面刃状転位の運動抵抗とその起源 | 共同 | 2019年3月 | 日本金属学会(2019年春期大会(第164回)日本金属学会講演大会) | 松本龍介・中冨陽介 | S1-6 |
| (国内学会発表)<br>大域的反応経路探索法を用いた空孔性欠陥の拡散挙動解析<br>日本材料学会 | 共同 | 2019年5月 | 日本材料学会(第4回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 松本龍介・白谷暢浩 | USB Memory |
| (国内学会発表)<br>マルテンサイト鋼におけるモバイル水素効果の解明に向けた水素固溶量と拡散係数の評価 | 共同 | 2019年5月 | 日本材料学会(第4回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 福田一仁・東條明裕・松本龍介 | USB Memory |
| (国内学会発表)<br>bcc鉄における水素拡散挙動の応力依存性評価 | 共同 | 2019年5月 | 日本材料学会(第4回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 長瀬周輝・松本龍介 | USB Memory |
| (国内学会発表)<br>水素がbcc鉄中の空孔の凝集・解離に及ぼす影響の第一原理的評価 | 共同 | 2019年5月 | 日本材料学会(第4回マルチスケール材料力学シンポジウム) | 佐野千畝・松本龍介 | USB Memory |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2012年度～2016年度 | 日本材料学会「編集委員会」幹事 |
| 2012年度～現在に至る | 日本機械学会 査読委員 |
| 2013年度～現在に至る | 日本材料学会「企画・広報委員会」幹事 |
| 2013年5月～2015年4月 | 日本機械学会関西支部 代議員(計算力学部門) |
| 2013年5月～2016年3月 | 日本機械学会計算力学部門 拡大運営委員会委員 |
| 2012年度～現在に至る | 日本材料学会「初心者のための有限要素法講習会」 実施主担当 |
| 2007年度～2015年度 | 日本材料学会「分子動力学部門委員会」 幹事 |
| 2015年度～現在に至る | 日本材料学会「マルチスケール材料力学部門委員会」 委員 |
| 2015年度～2017年度 | 日本鉄鋼協会「水素脆化の基本要因と特性評価研究会」 大学委員 |
| 2018年度～現在に至る | 日本鉄鋼協会「水素脆化の基本要因と実用課題」 グループリーダー(メカニズム解明) |
| 2018年11月 | Multiscale Materials Modeling(MMM) 2019, Local organizing committee |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
| --- |
| 密度汎関数法／分子動力学法等の電子・原子レベルのシミュレーション手法に基づく材料評価 |
| 水素環境での金属材料の変形・破壊特性の評価／メカニズム研究 |
| 有限要素法を用いた各種構造解析 |
| デジタル画像相関法を用いた変形の可視化 |

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績

| 所属 ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名 講師 | 氏名 KUCUK FUAT | 大学院における研究指導担当資格の有無 （有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概 要 |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Full bridge converter based independent phase control of a permanent magnet reluctance generator for wind power conversion systems | 共 | 2018 | Turkish Journal of Electrical Engineering & Computer Sciences, vol. 26 | E. Sunan, F. Kucuk | pp. 2701-2713, DOI: 10.3906/elk-1712-285 |
| Performance Analysis of an Alnico-Based Permanent Magnet Reluctance Generator for Wind Energy Conversion System | 共 | 2018 | ,IEEJ Transactions on Electrical and Electronic Engineering, vo.13, no. 9 | F. Kucuk, E. Sunan | pp. 1296-1302, DOI:10.1002/tee.22695. |
| Alnico magnet based cost-efficient design of a permanent magnet reluctance generator for wind energy conversion systems | 単 | June. 2016 | IEEJ Transactions on Electrical and Electronic Engineering, vol.11, No. S1 | | pp. 177-179, DOI: 10.1002/tee.22251. |
| Three - phase Full Bridge Converter controlled Permanent Magnet Reluctance Generator for Small - scale Wind Energy Conversion Systems | 共 | Sept. 2014 | IEEE Trans. on Energy Conversion, vol. 29, no. 3 | E. Sunan, F. Kucuk, H. Goto, H. J. Guo, and O. Ichinokura | pp. 585-593, DOI: 10.1109/TEC.2014.2316471. |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| IEEE | |
| | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　講師 | 氏名　Martin Sera | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Chern classes of singular metrics on vector bundles | 共 | 2018年 | Advances in Mathematics 326 | R. Lärkäng, H. Raufi & J. Ruppenthal and Martin Sera | 465-489 |
| A smoothness criterion for complex spaces in terms of differential forms | 共 | | the Math. Scand | Håkan Samuelsson Kalm and Martin Sera | 8 p |
| Modifications of torsion-free coherent analytic sheaves | 共 | 2017年 | Annales de l'institut Fourier 67 no. 1 | J. Ruppenthal and Martin Sera | 237-265 |
| A generalization of Takegoshi's relative vanishing theorem | 単 | 2016年 | Journal of Geometric Analysis 26 no. 3 | | 1891-1912 |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本数学会 | |
| European Mathematical Society (ヨーロッパ数学会) | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績 educational / research achievement on 2019

| 所属 ﾅｶﾞﾓﾘｱｸﾁｭｴｰﾀ研究所 | 職名 講師 | 氏名 Sajid Nisar | 大学院における研究指導担当資格の有無 | （有・無） |
|---|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 main achievemen of the education | 年月日 Date | 概 要 overview |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| 4 その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ 研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 Title of your book and paper | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| Effects of Dierent Hand-Grounding Locations on User Performance with a Wearable Kinesthetic Haptic Device | co-author | 11-Jan-19 | IEEE Robotics and Automation Letters (RA-L), vol. 4, no. 2, | M. O. Martinez,T. Endo, F. Matsuno and A. M. Okamura | 351-358 |
| その他 (others) | | | | | |
| Fingertip Force Learning with Enhanced Haptic Sensation using Stochastic Resonance | Co-authored | 12-Jul-19 | EEE International World Haptics Conference | K. Chamnongthai, T. Endo, F. Matsuno, K. Fujimoto, and M. Kosaka | 6 pages |
| Neuro-Hapband: A Portable Haptic Solution for Neurofeedback Therapy | Co-authored | 12-Jul-19 | EEE International World Haptics Conference | F. Shabani, H. Philamore, and F. Matsuno | 2 pages |
| Effects of Dierent Hand-Grounding Locations on User Performance with a Wearable Kinesthetic Haptic Device | Co-authored | 21-May-19 | IEEE International Conference on Robotics & Automation 2019 | M. O. Martinez, T. Endo, A. M. Okamura and F. Matsuno | 8 pages |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social

| | |
|---|---|
| | |
| | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ
Know-how about the management consulutat, techenical consulutat, joint research, funded research and so on

| |
|---|
| |
| |

# 2019年度 専任教員の教育・研究業績 educational / research achievement on 2019

| 所属 ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名 講師 | 氏名 Salem Ibrahim Salem Mohamed Salem | 大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無) |
|---|---|---|---|

I 教育活動

| 教育実践上の主な業績<br>main achievemen of the education | 年月日 Date | 概 要 overview |
|---|---|---|
| 1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | May 2006 ~<br>September 2014 | • Incorporating various learning techniques and instructional methods, which provided an engaging learning environment and promoted creativity among students. These skills were acquired during my work as a teaching assistant and assistant lecturer at the Faculty of Engineering, Alexandria University, Egypt. |
| | November 2016 ~<br>March 2019 | • Efforts to encourage learning outside the classroom; as I'm training junior students for measuring water quality parameters in Lake Kasumigaura with collaboration with the National Institute for Environmental Studies (NIES), Japan. |
| | May 2017 ~<br>March 2019 | • Online publication of the seminar content; as I have held a seminar every semester for junior students to boost their research by introducing the models and programming tools that are common in our research group. |
| 2 作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | May 2006 ~<br>September 2014 | The educational materials for the following courses were prepared, taught and developed over years at Alexandria University-Egypt:<br><br>• Environmental science: to calculate the amount of air and noise pollutions due to transportation system.<br><br>• Water treatment: covered subjects were: Water resources and quality; Water collection works; Water purification works; Water distribution works.<br><br>• Wastewater treatment: covered subjects were: Sewer systems; Wastewater characteristics; Wastewater treatment works; Wastewater disposal works; Treated wastewater reuse.<br><br>• Computer science: covered subjects were: Fortran and Python programing languages; Inputs and outputs; Arrays; conditions; Looping; Application on engineering science.<br><br>• Civil drawing: covered subjects were: Drawings for retaining walls, masonry, plain concrete, and reinforced concrete; Layout drawings for earthwork projects; Canals, and highways; Steel drawings.<br><br>• Sanitary engineering project: Support student to design the infrastructure of water and wastewater treatment constructions for a new city.<br><br>• Mechanics: This course deals with understanding of basic structural behavior. The covered subjects were: Stress and strain; Axial loaded members; Torsion; Bending moment in beams; Transverse shear in beams; Combined loading; Stress transformations; Deflection of beams. |
| | May 2017 ~<br>March 2019 | Prepared and presented educational materials of modeling and programming tools (e.g., Python) for junior students at the University of Tokyo to boost their research. |
| 3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| JpGU Meeting 2019, Chiba, Japan.<br>TITLe:"Toward a Global Retrieval of in-water Optical Properties using Deep Neural Network." | May 26-30, 2019 | • I presented the latest results from our developed Deep neural network model to monitor water quality in a global scale. |
| Joint PI Meeting of Global Environment Observation Mission FY2018 | January 21-25, 2019 | • I presented my progress and result to validate GCOM-C satellite. I also illustrated the water quality characteristics at various Japanese lakes and coastal areas |
| The 15th Korea-Japan Workshop on Ocean Color "KJWOC"<br>TITLE:" Retrieval of Inherent ana Apparent Optical Propertiesof Water Bodies in a Global Scale using Deep Neural Network." | December 3-5, 2018 | • During my presentation, I showed the performance of our developed deep neural network model to retrieve inherent and apparent optical properties. |

| | | |
|---|---|---|
| 14th Pan Ocean Remote Sensing Conference (PORSEC). Jeju, The Republic of Korea.<br>TITLE: "Deep Neural Network Approach to Retrieve the Inherent and Apparent Optical Properties of Various Water Bodies in a Global Scale" | November 4-7, 2018 | ・The presentation displayed the performance of using deep neural network to retrieve the optical properties of water bodies in a global scale. Two datasets comprising 100,000 reflectance spectra each were used to train and test the developed model. |
| Joint PI Meeting of Global Environment Observation Mission FY2017. Tokyo, Japan.<br>TITLE: "In situ observation for development of ocean-color algorithm coupled atmosphere-ocean system based on classification by optical properties in coastal waters and lakes." | January 22-25, 2018 | ・The presentation showed our progress to developed algorithms to retrieve water quality parameters from satellite data. We also presented the collected water samples from our validation sites that includes Tokyo Bay, Lake Kasumigaura and Seto-sea island. |
| The 63rd Autumn Conference of the Remote Sensing Society of Japan. Hokkaido, Japan.<br>TITLE:" A Novel Chlorophyll-a Retrieval Technique in Highly Turbid Water Using Multi-Algorithm Indices with Look-Up Table" | November 21-22, 2017 | ・Presentation illustrates the performance of our novel technique (MAIN-LUT) to retrieve chlorophyll-a concentration from MERIS satellite over highly turbid water bodies (e.g., Tokyo Bay and Lake Kasumigaura). |
| International Symposium on Remote Sensing. Nagoya, Japan.<br>TITLE:"Evaluation of Chlorophyll Retrieval in a Complex Turbid Inland Lake Using MERIS 10-Year Mission." | May 17-19, 2017 | ・The performance of seven chlorophyll-a algorithms developed for MERIS senor were evaluated over Lake Kasumigaura throughout MERIS lifetime between 2002 and 2012. |
| Joint PI Meeting of Global Environment Observation Mission FY2016. Tokyo, japan.<br>TITLE:"Multi-Algorithms INdices with a Look-Up Table (MAIN-LUT)<br>Technique for Chlorophyll-a Retrieval." | January 23-27, 2017 | ・The presentation displayed the details and validation results of our novel technique (MAIN-LUT) that retrieves chlorophyll-a concentration from multispectral ocean color satellites. |
| AGU Fall Meeting. San Francisco, California, USA.<br>TITLE:"Retrieval Accuracy Assessment with Gap Detection for Case 2 Waters Chla Algorithms." | December 12-16, 2016 | ・The presentation showed the performance of 43 chlorophyll-a algorithms' combinations that covers all possible optimal bands and three regression models. The evaluation process performed using both simulated and in-situ datasets. |
| 9th International Conference on the Role of Engineering Towards a Better Environment (RETBE'12). Alexandria, Egypt.<br>TITLE:"Influence of different chlorine injection methods on the filamentous bulking problem." | December 22-24, 2012 | ・The presentation summarized the experiments conducted on a wastewater treatment plant with activated sludge system to control filamentous bulking problem. The influence of using different chlorine injection doses and methods was evaluated in the light of organisms' abundance and plant performance. |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 Title of your book and paper | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 (books) | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 (Journal papers) | | | | | |
| Multi-Algorithm Indices and Look-Up Table for Chlorophyll-a Retrieval in Highly Turbid Water Bodies Using Multispectral Data | 共著 | 2017 | Remote Sensing. Vol. 9, Issue 6 | H. Higa, H. Kim, K. Kazuhiro, H. Kobayashi, K. Oki, and T. Oki | 556 |
| Assessment of Chlorophyll-a Algorithms Considering Different Trophic Statuses and Optimal Bands | 共著 | 2017 | Sensors. Vol. 17, Issue 8 | H. Higa, H. Kim, H. Kobayashi, K. Oki, and T. Oki | 1746 |
| Evaluation of MERIS chlorophyll-a retrieval processors in a complex turbid Lake Kasumigaura through 10-year mission | 共著 | 2017 | Remote Sensing. Vol. 9, Issue 10 | M. Strand, H. Higa, H. Kim, K. Kazuhiro, K. Oki, and T. Oki | 1022 |
| Influence of Different Chlorine Injection Methods on the Filamentous Bulking Problem | 共著 | 2014 | International Journal of Chemical, Environmental and Biological Sciences. Volume 2, Issue 1 | M. Mostafa, and W. Ibrahim | 7 |
| その他 (others) | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動 your main activities in academic society and social

| | |
|---|---|
| | Member of the Egyptian Engineers Syndicate |
| | Member of Japan Socity of Civil Engineering |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ
Know-how about the management consulutat, techenical consulutat, joint research, funded research and so on

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　講師 | 氏名　佐藤 啓宏 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| 論文（Journal papers） | | | | | |
| 移動型MRにおけるサウンドシステムの開発 | 共著 | 平成26年6月 | 日本バーチャルリアリティ学会論文誌第19巻第2号 | 佐藤啓宏、楢崎雄太、大石岳史、池内克史 | P.185-P.193 |
| VR/MRガイドツアーシステムの開発と運用 | 共著 | 平成26年6月 | 日本バーチャルリアリティ学会論文誌第19巻第2号 | 佐藤啓宏、大石岳史、池内克史 | P.247-P.254 |
| Improving GPS Position Accuracy By Identification of Reflected GPS Signals using Range DATA for Modeling of Urban Structures<br>(都市構造モデルのレンジデータを用いた反射GPS信号の特定によるGPS位置精度の向上) | 共著 | 平成26年3月 | 生産研究 第66巻第2号 | Kumar Ashuwani, Sato Yoshihiro, Oishi Takeshi, Ono Shintaro, Ikeuchi Katsushi | P.101-P.107 |
| タングルトポロジーを用いたロボットハンドによる人間の持ち替え動作の模倣 | 共著 | 平成27年12月 | 日本ロボット学会論文誌第33巻第7号 | 工藤俊亮、ビナヤウェキンポンタリン、佐藤啓宏、池内克史 | P.514-P.523 |
| Task Modelling for Reconstruction and Analysis of Folk Dances<br>(民族舞踊の再現と分析のためのタスクモデリング) | 共著 | 平成27年12月 | Springer Tracts in Advanced Robotics 111 | Katsushi Ikeuchi, YoshihiroSato, Shin'ichro Nakaoka, Shunsuke Kudoh, Takahiro Okamoto, Hauchin Hu | P.187-P.207 |
| VR/MR技術を用いた歴史観光のIT活用に関する研究（博士論文） | 単著 | 平成28年6月 | 電気通信大学 | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 日本ロボット学会会員 | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　ナガモリアクチュエータ研究所 | 職名　講師 | 氏名　LIANG ZILU | 大学院における研究指導担当資格の有無　有 |
|---|---|---|---|

I　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 英語による授業の遂行 | 2015年9月～ | オーストラリアのメルボン大学工学部でプログラミング演習を担当した。東京大学でこれまで担当している授業科目「創造性工学プロジェクトII」、「創造的ものづくりプロジェクトII」はすべて英語で行った。学生が英語で専門知識を学ぶことができた。 |
| プロジェクトベストラーニング(PBL)の実施 | 2017年9月～ | 授業で学生がチームを作って、キャップストーンプロジェクトを実施した。オンラインツールMicrosoft DevOpsを使って、バージョン管理、プロジェックトマネジメントなど学ぶことによって、チームでのアイデアの実装力を強化した。 |
| ハンズオン演習におけるクラウドコンピューティング技術の活用 | 2017年9月～ | 授業でマイクロソフトのクラウドサービスを使って、実際の開発環境を体験させた。 |
| 演習科目における最新のウェアラブル技術の活用 | 2017年9月～ | 世界範囲で一番有名なウェアラブルリストバンドの一つのFitbitを授業で活用して、生体計測の基本とインターフェースデザインの基本を学べた。また、最先端のウェブ技術の一つであるAPI (Application Programming Interface)を学ぶ、実装することができた。 |
| 英語で実施するウェブ開発講義におけるTED TALKの活用 | 2018年9月～ | 世界最も影響であるスピーチにて最新の技術を学ぶだけでなく、その技術は社会に長期的な影響について批判的な思考引き起こす。また、技術英語スキールの強化。 |
| 大学で実施された授業評価アンケート | 2017年10月～ | 東京大学工学部で実施された学生による授業評価アンケートで高く評価を得た。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| 講義のウェブサイト（英語で） | 2017年9月～ | 担当科目の専用ウェブサイト(https://snowballsutokyo.wordpress.com/)を作った。講義の概要、スケジュール、資料などすべてウェブサイトで公開された。学生がいつでもどこでも講義のスケジュール、PPTスライド、お知らせなどにアクセスできるにようになった。学習の効率を上げた。 |
| ハンズオン演習のソースコードをGitHubにて公開 | 2018年9月～ | 講義で使うソースコードはGitHubプラットフォームで公開した。学生が簡単にソースコードをダウンロードできるようになった。また、学生が開発したコードをGitHubで公開し、開発者コミュニティに貢献する意識を高めた。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ウェブ開発教育に関する国内学会の発表 | 2017年8月～ | (1) Liang Z, et al. (2017) Empowering globalization of engineering education with open-source e-learning platform and cloud computing technology. The 65th Annual Conference of Japanese Society for Engineering Education, Tokyo, Japan.<br>(2) Liang Z, et al. (2018) Beyond writing code: a new pedagogical model for teaching app development. The 66th Annual Conference of the Japanese Society for Engineering Education, Nagoya, Japan.<br>(3) Liang Z, et al. (2019) Mitigating resource constraints of web development lecture using commercial cloud. The 18th Forum of Information Technology, Okayama, Japan. |
| ウェブ開発教育に関する国際学会の発表 | 2018年8月～ | (1) Liang Z, et al. (2018) A top down approach for teaching web development on cloud. IEEE TALE, Wollongong, Australia. |
| 教育とデータサイエンスの先端融合分野であるラーニングアナリティクスに関する国際学会の発表 | 2017年7月～ | (1) Liang Z, et al. (2018) Investigating classroom activities in English conversation lessons based on activity coding and data visualization. Lecture Notes in Artificial Intelligence. Berlin: Springer.<br>(2) Liang Z, et al. (2018) LessonSpectrum: visualizing teaching and learning activities in English conversation lessons. International Workshop on Orchestrating Learning Analytics, Sydney, Australia.<br>(3) Liang Z, et al. (2017) Gaining insights from English conversation classes using thematic analysis: a pilot study. The 7th International Conference on Language, Innovation, Culture and Education, Singapore. |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| 学生による授業の成果発表と公開 | 2018年3月～ | (1) 学生より学会発表が一本あった：Egholm-Andersen L, Liang Z, et al. (2018) A web application for analyzing stress association factors among students. IEICE General Conference, Tokyo.<br>(2) 下記の二つの学生が開発したウェブアプリケーションのソースコードをGitHubで公開し、開発者コミュニティに貢献した。<br>https://github.com/UTokyoSnowballs/NokoriMe<br>https://github.com/UTokyoSnowballs/RunningBit |
| 工学教育の国内外学会における活動 | 2017年4月～ | 工学教育に関するトップ会議である国際学会IEEE TALE 2018のプログラム委員、論文査読者。日本工学教育協会会員。 |
| コンピューターサイエンス教育の国際学会における活動 | 2018年8月～ | コンピューターサイエンス教育に関するトップ会議である国際学会ACM SIGCSE 2019とACM CompEd 2019のプログラム委員、論文査読者 |

Ⅱ 研究活動 Research activities

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| Investigating classroom activities in English conversation lessons based on activity coding and data visualization | 共著 | 2018 | Lecture Notes in Artificial Intelligence. Berlin: Springer. | Liang Z, Nishimura S, Nishimura T, Chapa-Martell MA | |
| Designing intelligent sleep analysis systems for automated contextual exploration on personal sleep-tracking data | 共著 | 2017 | New Frontiers in Artificial Intelligence. Berlin: Springer. | Liang Z, Liu W, Ploderer B, Bailey J, Kulik L, Li Y | 367-379 |
| Axis Visualizer: enjoy core torsion and be healthy for health promotion community support | 共著 | 2017 | New Frontiers in Artificial Intelligence. Berlin: Springer. | Nishimura T, Liang Z, Nishimura S,et al. | |
| Health promotion community support for vitality and empathy: visualize quality of motion (QoM) | 共著 | 2016 | Lecture Notes in Computer Science, vol 9745. Springer, Cham | Nishimura T, Liang Z | |
| Speed-volume relationship model for speed estimation on urban roads in intelligent transportation systems | 共著 | 2015 | Advances in Intelligent Systems and Computing, vol. 1089 | Liang Z, Wakahara Y | 685-690 |
| 論文 | | | | | |
| Accuracy of Fitbit wristbands in measuring sleep stage transitions and the effect of user-specific factors | 共著 | 2019 | JMIR mHealth and uHealth, vol. 7, no. 6 | Liang Z, Chapa-Martell MA | e13384 |
| Achieving accurate ubiquitous sleep sensing with consumer wearable activity wristbands using multiclass imbalanced classification | 共著 | 2019 | Proceedings of IEEE Int Conf on Pervasive Intelligence and Computing 2019 | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Predicting medical-grade sleep/wake classification from Fitbit data using tree-based machine learning | 共著 | 2019 | IPSJ SIG Technical Report | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Validity of consumer activity wristbands and wearable EEG for measuring overall sleep parameters and sleep structure in free-living conditions | 共著 | 2018 | Journal of Healthcare Informatics Research, vol. 2, no.1-2 | Liang Z, Chapa-Martell MA | 152-178 |
| Quality evaluation for sports coaching service: evaluate trunk torsion by mobile terminal | 共著 | 2018 | Transaction of Information Processing Society of Japan, vol. 59, no. 2 | Yoshida Y, Liang Z, Nishimura S, Konosu H, Nagao T, Nishimura T | 591-601 |
| A top down approach for teaching web development on cloud | 共著 | 2018 | Proceedings of IEEE TALE 2018 | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Novel use of Nintendo Wii balance board for automatic evaluation on motion quality: feasibility and preliminary results | 共著 | 2017 | Proceedings of IEEE Global Conference on Consumer Electronics 2017 | Liang Z, Iino N, Nishimura T, et al | |
| Are wearable EEG devices more accurate than fitness wristbands for home sleep tracking? Comparison of consumer sleep trackers with clinical devices | 共著 | 2017 | Proceedings of IEEE Global Conference on Consumer Electronics 2017 | Liang Z, Chapa-Martell, MA | |
| Utilizing mobile devices for evaluating body trunk coordination: feasibility and preliminary results | 共著 | 2017 | Proceedings of The 10th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking | Liang Z, Iino N, Nishimura T, Nishimura S, Yoshida Y | |
| Considering interpersonal differences in validating wearable sleep-tracking technologies | 共著 | 2017 | Proceedings of The 10th International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Is Fitbit fit for sleep-tracking? Sources of measurement errors and proposed countermeasures | 共著 | 2017 | Proceedings of the 11th EAI International Conference on Pervasive Computing Technologies for Healthcare | Liang Z, Ploderer B, Chapa-Martell MA | |
| Explicit exercise coaching for health promotion based on bio-mechanics and ontology engineering | 共著 | 2017 | Proceedings of Health-i-Coach 2014 | Liang Z, Nishimura T, Nishimura S | |
| Inter-individual differences in sleep quality: insights from mining wearable sleep-tracking data | 共著 | 2017 | IPSJ SIG Technical Report | Liang Z, Chapa-Martell MA, Ploderer B | |
| SleepExplorer: A visualization tool to make sense of correlations between personal sleep data and contextual factors | 共著 | 2016 | Personal and Ubiquitous Computing, vol.20, no.6 | Liang Z, Ploderer B, Liu W, Nagata Y, Bailey J, Kulik L, Li Y | 985-1000 |
| Sleep tracking in the real world: a qualitative study into barriers for improving sleep. | 共著 | 2016 | Proceedings of OzCHI 2016 | Liang Z, Ploderer B | |
| A personalized approach for detecting unusual sleep from time series sleep-tracking data | 共著 | 2016 | Proceedings of IEEE Int Conf on Healthcare Informatics (ICHI '16) | Liang Z, Chapa-Martell MA, Nishimura, et al | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 論文(つづき) | | | | | |
| Nurtuing wearable and mHealth technologies for self-care: mindset, tool set and skill set | 共著 | 2016 | Proceedings of the 18th Int Conf on Networking, Applications & Services | Liang Z, Nagata Y, Chapa-Martell MA, Nishimura T | |
| Mining hidden dependencies between sleep and lifestyle factors from quantified-self data | 共著 | 2016 | Proceedings of the New Frontiers of Quantified Self 2 Workshop | Liang Z, Chapa-Martell MA, Nishimura T | |
| Development of Knowledge of Texts and On-site Evaluation Technologies for Exercise Coaching | 共著 | 2016 | IPSJ SIG Technical Report. | Nishimura, T., Nishimura, S., Yoshida, Y., Liang, Z., et al. | |
| Framing Self-Quantification for Individual-Level Preventive Healthcare. | 共著 | 2015 | Proceedings of HEALTHINF | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| その他 | | | | | |
| Combining numerical and visual approaches in validating sleep data quality of consumer wearable wristbands | 共著 | 2019 | IEEE IQ2S Workshop, Kyoto, Japan | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Mitigating resource constraints in web development education using commercial cloud services | 共著 | 2019 | 第18回情報科学技術フォーラム | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| A web application for analyzing stress association factors among students | 共著 | 2018 | 電子情報通信学会総合大会 | Egholm-Andersen L, Liang Z | |
| LessonSpectrum: visualizing teaching and learning activities in English conversation lessons | 共著 | 2018 | International Workshop on Orchestrating Learning Analytics (OrLA), Sydney, Australia | Liang Z, Nishimura S, Nishimura T, Chapa-Martell MA | |
| Beyond writing code: a new pedagogical model for teaching app development | 共著 | 2018 | 第66回日本工学教育協会年次大会・工学教育研究講演会 | Liang Z, et al | |
| Gaining insights from English conversation classes using thematic analysis: a pilot study | 共著 | 2017 | The 7th International Conference on Language, Innovation, Culture and Education, Singapore | Liang Z, Nishimura S, Nishimura T, Iino N | |
| Comparison of commercial wearable sleep trackers to subjective sleep quality | 単著 | 2017 | 日本睡眠学会第42回定期学術集会 | Liang Z | |
| SleepBeta: engaging adolescents and their parents with sleep data | 共著 | 2017 | ACM CHI workshop, Denver, USA | Ploderer B, Vyas D, Nolan S, Happer C, Cunningham T, Liang Z | |
| Paradox in validating consumer wearable activity trackers on measuring sleep quality | 共著 | 2017 | 第16回情報科学技術フォーラム | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Automatic evaluation on trunk coordination ability using portable devices: feasibility and preliminary results | 共著 | 2017 | 第16回情報科学技術フォーラム | Liang Z, Liang H, Nishimura T, Nishimura S, Yoshida Y | |
| Understanding effective teaching in advanced English conversation classes through thematic analysis | 共著 | 2017 | 第16回情報科学技術フォーラム | Liang Z, Nishimura S, Nishimura T, Iino N | |
| Empowering globalization of engineering education with open-source e-learning platform and cloud computing technology | 共著 | 2017 | 第65回日本工学教育協会年次大会・工学教育研究講演会 | Liang Z, et al | |
| Mining wearable sleep data for detecting unusual sleep | 共著 | 2017 | 電子情報通信学会総合大会 | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| Quantitative analysis of difference between good and bad motion during coordinated movements and potential application to healthy aging | 共著 | 2016 | IPSJ HAT-MASH International Workshop 2016, Yokohama | Liang Z, Liang H, Nishimura T, Chapa-Martell MA | |
| Evaluate the quality of posture and motion: for motion which makes body happy without fatigue and damage | 共著 | 2016 | Symposium of Sports Engineering and Human Dynamics, Yamagata | Nishimura T, Yosihda Y, Liang Z, et al | |
| Development of a web-based automatic data analysis tool for users without statistics background | 共著 | 2015 | The 10th AEARU Workshop on Computer Science and Web Technology, Tsukubas | Liang Z, Chapa-Martell MA | |
| A web application for automatic analysis on life-style factors affecting personal health from self-tracking data | 共著 | 2015 | HEALTHINF 2015, Lisbon, Portugal | Liang Z | |
| Making sense of personal sleep-tracking aata through automated correlation analysis and visualization of sleep data and contextual information | 共著 | 2015 | IPSJ HAT-MASH International Workshop 2015, Yokohama | Liang Z, Liu W, Ploderer B, Bailey J, Kulik L, Li, Y | |
| Reducing average travel time through individualized route guidance in urban traffic network | 共著 | 2014 | APNOMS 2014, Hsinchu, Taiwan | Liang Z, Wakahara Y | |

| Ⅲ　学会等および社会における主な活動 | |
|---|---|
| 学術論文誌の査読役 | Journal of Healthcare Informatics, Journal of Internet Medical Research, IEEE Transactions on Human-Machine Systesm,  Knowledge and Information Systems |
| 国際学会の査読役 | GCCE 2019、ACM CompEd 2019、ACM SIGCSE 2019、IEEE TALE 2018、IEEE ITSC 2018、HEALTHINF 2017、ICLICE 2017、ACM CHI 2017、ACM CHI 2016、IEEE ITSC 2015、IEEE ISADS 2011 |
| プログラム委員 | ACM CompEd 2019、ACM SIGCSE 2019、IEEE  TALE 2018、IEEE ITSC 2015 |
| 所属の学会 | ACM、IEEE、World Sleep Society、New York  Academy of Sciences、人工知能学会、情報処理学会、電気情報通信学会、日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本体力医学会、日本工学教育協会各会員 |
| | |

| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ |
|---|
| (1)科研費若手研究(FY2019－2020、代表者) |
| (2)日本医療研究開発機構Interstellar Initiative(FY2018、分担者 )、大阪大学、ドイツMunich University of Technologyとの共同研究 |
| (3)産業総合技術研究所領域公募(FY2016－2017、代表者)、産業総合技術研究との共同研究 |
| (4)科研費研究活動スタート支援(FY2016－2017年度、代表者)、オーストラリアUniversity of Melbourne、Queensland University of Technologyとの共同研究 |
| (5)オーストラリア政府Endeavor Research Fellowship(FY2015、代表者)、 オーストラリアUniversity of Melbourneとの共同研究 |
| (6)マイクロソフトBizSpark支援(FY2015－2017、代表者) |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　副学長 | 氏名　小関 敏彦 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |

# 学長及び総合研究所


| 職　名 | 氏　名 | ページ |
|---|---|---|
| 学長 | 前　田　　正　史 | 556 |
| 客員教授 | 餌　取　　章　男 | 558 |
| | 吉　松　　加　雄 | 561 |
| 講師 | 上　島　　誠　司 | 562 |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　　学長 | 氏名　　前田　正史 | 大学院における研究指導担当資格の有無　　（有・(無)） |
|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| | | |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| （著書） | | | | | |
| 世界の中の日本<br>これからを生き抜くエネルギー戦略 | 共著 | 2015年 | 株式会社DNP<br>アートコミュニケーションズ | 金子 祥三 | |
| 国別 鉱物・エネルギー資源データブック | 共著 | 2014年 | オーム社 | 西山 孝 、別所 昌彦 | |
| 岐路に立つ 日本のエネルギー戦略 | 共著 | 2014年 | 株式会社DNP<br>アートコミュニケーションズ | 金子 祥三 | |
| 東京大学第二工学部の光芒: 現代高等教育への示唆 | 共著 | 2014年 | 東京大学出版会 | 大山 達雄 | |
| エネルギー資源データブック | 共著 | 2013年 | オーム社 | 西山 孝 | |
| 日本のエネルギーの今後と持続する発展 | 共著 | 2013年 | 株式会社DNP<br>アートコミュニケーションズ | 金子 祥三 | |
| ベースメタル枯渇 | 共著 | 2011年 | 日本経済新聞出版社 | 西山 孝 | |
| Beyond Innovation | 単著 | 2009年 | 丸善プラネット | | |
| （論文） | | | | | |
| Solution Growth of Silicon Carbide Using Unary Chromium Solvent | 共著 | 2017年 | Journal of Crystal Growth, 460 | Miyasaka, Ryo; Kawanishi, Sakiko; Narumi, Taka; Sasaki, Hideaki; Yoshikawa, Takeshi; Maeda, Masafumi | pp.23-26 |
| Evaluation of Drying Rates of Lignite Particles in Superheated Steam Using Single-Particle Model | 共著 | 2016年 | Metallurgical and Materials Transactions E, 3(4) | Kiriyama, Tsuyoshi; Sasaki, Hideaki; Hashimoto, Akira; Kaneko, Shozo; Maeda, Masafumi | pp.308-316 |
| Characterization of Evaporating Species from B2O3, B6O, and Their Mixtures by Knudsen Cell Mass Spectrometry | 共著 | 2016年 | Metallurgical and Materials Transactions B, 47(1), | Sasaki, Hideaki; Kobashi, Yoshifumi; Maeda, Masafumi | pp.390-396 |
| Zn-vapor Pretreatment for Acid Leaching of Platinum Group Metals from Automotive Catalytic Converters | 共著 | 2014年 | Hydrometallurgy, 147-148C | Sasaki, Hideaki; Maeda, Masafumi | pp.59-67 |
| Enhanced Dissolution of Pt from Pt–Zn Intermetallic Compounds and Underpotential Dissolution from Zn-Rich Alloys | 共著 | 2013年 | The Journal of Physical Chemistry C, 117 (36), pp.18457-18463 | Hideaki Sasaki ; Masafumi Maeda | pp.18457-18463 |
| Thermodynamic Measurement of Nd-Fe System by Double Knudsen Cell Mass Spectrometry | 共著 | 2011年 | Thermochimica Acta, 516 | Hideaki Sasaki, Yoshifumi Kobashi, Takashi Nagai, Masafumi Maeda | pp.8-12 |
| Dissolution Rates of Au from Au-Zn Compounds Measured by Channel Flow Double Electrode Method | 共著 | 2010年 | Journal of The Electrochemical Society, 157 | Hideaki Sasaki, Masafumi Maeda | pp.C414-C418 |

| 著書・論文等の名　　称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| （論文）続き | | | | | |
| Measurements of Vapor Pressure of Y and Activity of Y in Y-O Alloy by Multi Knudsen Cell Mass Spectrometry | 共著 | 2009年 | Journal of Alloys and Compounds, Vol.481 | Hideaki Sasaki, Yoshifumi Kobashi, Takashi Nagai, Masafumi Maeda | pp.241-245 |
| Determination of Gibbs Free Energy of Formation of Cr3P by Double Knudsen Cell Mass Spectrometry | 共著 | 2008年 | Journal of Chemical Thermodynamics, Vol.40, No.3 | Nagai T, Miyake M, Kimura H, Maeda M | pp.471-475 |
| Mass Spectrometric Study on Phosphorus in Molten Carbon-saturated Iron | 共著 | 2007年 | ISIJ International, vol.47 | Takashi NAGAI, Masao MIYAKE, Yoshitaka MITSUDA, Hisao KIMURA , Masafumi MAEDA | pp.207-210 |
| Mathematical Modeling of Residual Stress Formation in Electron Beam Remelting and Refining of Scrap Silicon for the Production of Solar-grade Silicon | 共著 | 2005年 | Materials Science and Engineering: A, 390(1-2), | D.M. Maijer, T.Ikeda, S.L. Cockcroft, M. Maeda, R.B. Rogg | pp.188-201 |
| ＜解説論文＞ | | | | | |
| Application of Electron Beam Melting to the Removal of Phosphorus from Silicon: Toward Production of Solar-Grade Silicon by Metallurgical Processes | 共著 | 2013年 | Advances in Materials Science and Engineering, Article ID 857196 | Hideaki Sasaki, Yoshifumi Kobashi, Takashi Nagai, Masafumi Maeda | |
| 金属材料のリサイクルプロセスについて | 単著 | 1996年 | まてりあ：日本金属学会会報, 35 巻 12 号 | | pp.1281-1282 |
| ＜国際会議論文＞ | | | | | |
| Removal of Phosphorus from Molten Silicon by Electron Beam Melting Technique | | 2011年 | European Metallurgical Conference EMC 2011(6th European Metallurgical Conference), Dusseldorf, Germany, June 2011 (Proceedings：Vol. 1) | Takashi Nagai, Masafumi Maeda | pp.307-314 |
| 他74編 | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 所属学会 | 日本鉄鋼協会 |
| | 日本金属学会 |
| | 資源素材学会 |
| | 日本学術会議 |
| | 日本学術振興会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　総合研究所 | 職名　客員教授 | 氏名　餌取　章男 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・無） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ・「コンピュータ講座」 上・下 | 1967年 | 日本教育出版（共著） |
| ・コンピュータ用語辞典 | 1968年 | 日本理工出版（共著） |
| ・最新科学ミニ辞典 | 1986年 | 光文社 |
| ・超電導は物理学を変えるか | 1989年 | 三田出版（共著） |
| ・技術社会の“かたちを演出する” | 1989年 | 三田出版（共著） |
| ・なぜ完全結晶を追求するのか | 1996年 | 三田出版（共著） |
| ・ナノテクノロジーの世紀 | 2002年 | 筑摩書房（共著） |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ・講演　台湾国立科学博物館設立記念 | 1996年 | 「日本における科学理解増進活動」 |
| ・基調講演およびパネル討論<br>金属材料技術研究所　社会基盤材料技術懇談会 | 2000/1/31 | 「科学・技術の研究は国民の生活にどう貢献するか」 |
| ・文部科学教育通信（インタビュー） | 2005/5/23 | 「組織に縛られない科学ジャーナリストを育て、科学・技術の大切さを一般の人たちに伝えたい」 |
| ・科学技術庁報告会　基調講演 | 2009/11/3 | 「これまでの日本の取組とその成果」<br>～今後の科学技術政策への期待～ |
| ・電気新聞　myテーマ欄　掲載 | 2014年 | 「教育改革　院生の多様化期待」 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| ・Scientific American誌　掲載 | 1980、1981、1982年<br>各10月号 | “Japanese Technology Today”　①②③（英文）<br>日本の先端技術開発の現状を紹介 |
| ・朝日中学生ウィークリー　掲載 | 2000/1/1 | “科学と技術の時代だった20世紀”～豊かさと悲惨さ・・・未来はどっち |
| ・月刊民放　放送時評 | 2002年12月号 | 「分かりやすさ」に終始せず科学を掘り下げた番組を |
| ・「望星」（東海教育研究所）　掲載 | 2003年5月号 | 「アトム」とぼくらの21世紀　特集　“20世紀の科学・21世紀の科学”～負の遺産に学んで未来の科学を～ |
| ・技術同友会研究会報告書（主査として全体執筆） | 2015年8月 | 「技術広報の重要性とそのあり方に関する研究会」 |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・共著の別 | 発行または発表の年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 月を歩いた二時間十五分 | 共 | 1969年 | ポプラ社 | 相島敏夫　餌取章男 | |
| 21世紀へのかけ橋　人間の記録シリーズ2 | 共 | 1970年 | ポプラ社 | 相島敏夫　餌取章男 | |
| 人間とは何か | 共 | 1975年 | グロビュー社 | 本明寛，太田次郎，餌取章男 | |
| 日曜日のサイエンス読本 | 共 | 1984年 | 日経出版局 | | |
| 生命に情報をよむ―バイオホロニクスがえがく新しい情報像 | 共 | 1986年 | 三田出版会 | 清水博、餌取章男 | |
| ちょっとトクする“にんげん”の話 | 単 | 1994年 | 三田出版 | | |
| ちょっとトクする“たべもの”の話 | 単 | 1994年 | 三田出版 | | |
| メイキング　オブ　ハイテクニッポン | 単 | 1995年 | 三田出版 | | |
| 地球がなくなる100の理由 | 単 | 1999年 | 角川春樹事務所 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書(訳書) | | | | | |
| 海と太陽とサメ　(原題:The Lady and the Sharks ) | 単 | 1972年 | 河出書房新社 | 原著:ユージニ・クラーク | |
| 悪食のサル －食性からみた人間像－<br>(原題:"THE OMNIVOROUS APE") | 単 | 1974年 | 河出書房新社 | 原著:ライアル・ワトスン | |
| ホワイトホール | 単 | 1977年 | 光文社 | 原著:A.ベリー | |
| 生物時計―自然界の神秘なはたらき<br>(DBS cosmos library―おはなし生物学) | 単 | 1981年 | 同文書院 | 原著:J.L.クラウズリー | |
| 「生命は宇宙から来た」ダーウィン進化論は、ここが誤りだ | 単 | 1983年 | 光文社<br>カッパ・サイエンス | 原著:F.ホイル、<br>C.ウィックラマシンジ | |
| 論文 | | | | | |
| 先端テクノロジーへの誘い　①～⑫ | | 2002年12月号～ | 「道経塾」<br>モラロジー研究所 | | |
| 「超」技術立国ニッポン　①～⑫ | | 2002年12月号～ | 「道経塾」<br>モラロジー研究所 | | |
| 「ロボットはどこまで人間に近づくか」 | | 2003年9月号 | 「Best Partner」<br>浜銀総合研究所 | | |
| 視点・論点「しなやかな産業革命」 | | 2006年4月発行 | 「経営センサー」<br>(東レ経営研究所) | | |
| 「ナノテクノロジーに挑む」 | | 2006年8月号 | Best Partner誌 | | |
| コラムーオピニオン 「技術のあり方にしっかりとした目を」 | | 2009/7/29 | JST Science Portal | | |
| その他 | | | | | |
| 餌取章男のニュータイプ・サイエンス | | 1986～1988年<br>(毎月掲載) | 月刊誌　New type | | |
| Fuji Xerox "Aim" (Active Information Media)<br>Scientific Eye ①書く<br>Scientific Eye ②伝える | | 1987年<br>1988年 | Fuji Xerox "Aim" | | |
| 「テクノトレンド」連載 "マイクロマシン""高温超電導""マルチメディア""バイオテクノロジー""宇宙植民地""科学技術基本法"etc. | | 1995年6月号<br>～<br>1997年12月号 | メイクアクシス誌 | | |
| e-front runners 掲載 "人類七万年の旅" | | 1992年2月 | 芳林社 | | |
| Look JAPAN(英文)掲載 Article : THOUGHTS ON THE SCI-TECH CENTURY | | 2000年12月号 | Look JAPAN(英文) | | |
| "科学と人間"<br>(1)科学技術は人類社会に貢献できるか<br>(2)科学技術は人類とどう関わってきたか<br>(3)科学技術の成果と将来<br>(4)年表で見る20世紀の科学と技術<br>海外取材を含めたインタビュー構成<br>インタビュアー例:ジェラルド・オニール、ナイジェル・コールダー、コンラート・ローレンツ、フレッド・ホイル、　レナード、ダルベッコ、フランシス・クリック、グレン・シーボーグ、ワシリー・レオンチェフ　etc. | | 1982年10月号<br>～1985年4月号<br>(計19回) | IBM Science Reports | | |
| 朝日新聞 学芸欄「"技術は文化になり得るか" | | 1992年 | 朝日新聞 | | |
| 日本経済新聞　"技術が開く新世紀の社会" テクノロジー21 | | 2001/1/1 | 日本経済新聞 | | |
| 寺田寅彦全集第16巻 掲載 「わたしの寺田寅彦賞」 | | 2010/12/1 | 岩波書店 | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 講演 | 1988年12月1日「先端技術開発と人間」～21世紀を展望する～ ヤマハ・オープンセミナー |
| | 1999年9月22日 「ハイテクニッポンの課題」 IRI産業技術懇談会 No.239 |
| | 2001年1月31日 「21世紀の技術」～文化・生命技術・ナノテク・環境対応の4つの視点から～ テクノバ 科学技術展望懇談会 |
| | 2003年3月7日 「21世紀の先端技術と日本」 群馬県中小企業団体中央会 |
| | 2004年　「次代担うナノテクノロジー」「石垣」機関紙 2004年5月号、6月号に①、②として収録 |
| | 2004年11月19日 「International Exposition of 2005 Aichi and a Frozen Mammoth」(愛知万博とマンモス) 第31回日本低温医学会総会 |
| | 2005年7月27日 「愛・地球博の光と影」 IRI産業技術懇談会 No.304 |
| | 2007年9月21日 「科学技術の進展とエネルギー利用」～人類は生きのびられるか～」　茨城県テクノ交流館 |
| | 2016年12月 「地球外生命は存在するか」 技術同友会卓話 (2018年1月に経済同友会で再演) |
| | 2005年 愛・地球博マンモス発掘・展示プロジェクトを企画、サハ共和国の協力などにより実現 |

| | |
|---|---|
| 各種団体委員など | ・第二次文化人切手 選考委員（1992（平成4年）から2003年（平成15年）までに発行された文化人切手）（委員長：三浦朱門氏） |
| | ・文部省学術審議会　委員 |
| | ・科学技術庁　参与 |
| | ・科学技術庁、通産省、郵政省、農水省、その他各省庁委員会　委員 |
| | ・文部科学省南極観測本部　委員 |
| | ・井上科学振興財団　評議員 |
| | ・藤原ナチュラルヒストリー振興財団　評議員会議長 |
| | ・公益財団法人日本科学協会　評議員 |
| | ・科学技術映像祭（公益財団法人日本科学技術振興財団）　審査副委員長 |
| | ・公益財団法人 全日本地域研究交流協会　理事 |
| | ・サイエンスチャンネル番組委員会　委員 |
| | ・独立行政法人 物質・材料研究機構　広報アドバイザー |
| | ・コスモス国際賞（公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会）　選考委員　　～現在 |
| | ・高柳記念電子科学技術振興財団　評議員　～現在 |
| | ・ドコモモバイルサイエンス賞　審査委員　　～現在 |
| | ・科学放送賞　審査委員長　　～現在 |
| | ・つくばサイエンス・アカデミー　理事　　～現在 |
| | ・NPO法人「科学宅配塾」 副理事長　　～現在 |
| | ・一般社団法人技術同友会　特別会員　技術経営士 |
| | ・東京大学理学部、東京工業大学、大阪大学基礎工学部、東海大学、慶応大学、日本大学　その他各大学非常勤講師 |
| | ・東京工科大学客員教授 |
| Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ | |
| | |

# 2019年度 客員教員の教育・研究業績

| 所属　総合研究所 | 職名　客員教授 | 氏名　吉松 加雄 | 大学院における研究指導担当資格の有無　(有・無) |
|---|---|---|---|

Ⅰ 教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等<br>日本CFO協会主催セミナー講演 | 2019年6月7日 | テーマ「企業変革と企業価値最大化を担うCFOの役割」 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |
| | | |
| | | |
| | | |

Ⅱ 研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月(西暦でも可) | 発行所・発表雑誌<br>(及び巻・号数)等の名称 | 編者・著者名<br>(共著の場合のみ記入) | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| MITブートキャンプ特集記事 | 取材記事 | 2019年4月23日 | 日本経済新聞 | | |
| 「任せて任せず『CFOの役割』」 | 対談記事 | 2019年6月 | 中央経済社<br>企業会計6月号 | | |
| 【独白】日本電産のカリスマ創業者を「ファイナンス」で支えた男 | インタビュー<br>記事 | 2019年6月5日 | 株式会社<br>ニューズピックス | | |

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 2019年9月28日 | 日本リスクマネジメント学会全国大会発表(予定) |
| 2019年11月10日 | 国際ビジネス研究学会全国大会発表(予定) |
| | |

Ⅳ 経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |
| |

# 2019年度　専任教員の教育・研究業績

| 所属　総合研究所 | 職名　講師 | 氏名　上島　誠司 | 大学院における研究指導担当資格の有無　（有・(無)） |
|---|---|---|---|

Ⅰ　教育活動

| 教育実践上の主な業績 | 年月日 | 概　要 |
|---|---|---|
| 1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） | 平成25年10月～<br>現在に至る | ●アルバイト程度の「働く」経験しかない学生の就労意識を高めるため、私自身が経済部記者出身ということもあり、毎回の授業で関連する記事を取り上げ、解説してミニレポート課した。 |
| ●キャリア形成における「働く」現実を学生に考えさせる工夫 | | |
| ●学生の相談にのる「オフィス・アワー」の常設化 | | ●学生の細かなニーズにこたえるには、やはり一人ひとりの学生と個別にかつ密に話す必要がある。通常は週1回1コマをオフィス・アワーとすることになっているが、私は授業や教授会などの公務以外は研究室を開放し、常時、学生の相談にのることにしている。 |
| 2　作成した教科書、教材、参考書 | | |
| ●初年次・リメディアル教育用eラーニングソフトを開発 | 平成19年4月～<br>平成25年9月まで | ●朝日新聞社時代に教育プロジェクトの実務責任者となり、パソコンがあればいつでもどこでも自由に学ぶことのできるeラーニングソフトを開発した。 |
| 3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 | | |
| ●キャリア教育の体系化 | 平成25年10月～<br>現在に至る | ●追手門学院大学では、学内のキャリア教育の位置づけや、具体的に学年ごとに何を教えるか、さらにキャリアセンターとの連携をどうしていくか、などの体系化を行い、全体的プランをまとめた。東大阪大学に移った後も、その実績を買われ、キャリア教育担当の教員とキャリアサポートセンター長を兼任し、キャリア科目の新設・体系化や初年次教育関連の科目の新設を実施し、学生に分かりやすく、学生主体の学びの理解を深め、キャリア形成の指導を進めた。 |
| ●日本語表現科目の新設 | | ●レポート作成など大学教育の基礎となる日本語表現、特に文章力の向上を図るために「日本語表現」という新科目を追手門学院大学で立ち上げた。東大阪大学でも初年次教育の一環として1年生から実施し、指導に当たっている。摂南大学でも2015年度から同様の科目を担当し指導している。 |
| ●リメディアル教育への取り組み | 平成27年10月～<br>現在に至る | ●東大阪大学時代に基礎学力に不安のある学生への対策を講じるため、基盤教育研究センターを平成27年10月に新設し、実務責任者の副センター長に就任（センター長は副学長）。平成28年4月から1、2年生を中心に毎日、国語と数学の小テストを実施するカリキュラムに組み替えた。 |
| 4　その他教育活動上特記すべき事項 | | |

Ⅱ　研究活動

| 著書・論文等の名称 | 単著・<br>共著の別 | 発行または発表の<br>年月（西暦でも可） | 発行所・発表雑誌<br>（及び巻・号数）等の名称 | 編者・著者名<br>（共著の場合のみ記入） | 該当頁数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 著書 | | | | | |
| 市場経済の風景 | 共著 | 平成3年10月 | 朝日新聞社 | | |
| 論文 | | | | | |
| | | | | | |
| その他 | | | | | |
| | | | | | |

Ⅲ　学会等および社会における主な活動

| | |
|---|---|
| 所属学会 | 初年次教育学会 |
| | リメディアル教育学会 |
| | キャリア教育学会 |

Ⅳ　経営相談・技術相談・共同研究・受託研究等に対応できる保有ノウハウ

| |
|---|
| |

2019 年 11 月発行

編集　京都先端科学大学 研究・連携支援センター
発行　京都先端科学大学
〒615-8577　京都市右京区山ノ内五反田町18
電話　(0771)29-2392
FAX　(0771)29-2388
E-mail　liaison@kuas.ac.jp